米 山 遺 跡

ー本文編ー

社会資本総合整備（活力・重点・補正）（一）下里見安中線
（西毛広域幹線道路安中工区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 分冊

2021

群 馬 県 安 中 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

1　遺跡地（１区調査区）から秋間丘陵

2　遺跡地（２区～５区調査区）から秋間台地

口絵 2

3　77号竪穴建物　出土土器集合

4　165号竪穴建物　出土土器集合

米 山 遺 跡

ー本文編ー

社会資本総合整備（活力・重点・補正）（一）下里見安中線
（西毛広域幹線道路安中工区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 1 分冊

2021

群 馬 県 安 中 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

西毛広域幹線道路整備事業は、群馬県が策定した「群馬県がはばたくための７つの交通軸構想」の「西毛軸」を構成する基軸です。この道路は、前橋市、高崎市、安中市及び富岡市を結ぶ延長27.8㎞に及び、周囲の渋滞緩和や、物流の効率化、生活圏の拡大など西毛地域の産業や観光の発展、生活の活性化を担う道路です。

平成30年度に発掘調査が実施された米山遺跡は、限られた時間のなか、古代の竪穴建物224棟をはじめとする遺構を調査することができ、多くの成果を上げることができました。また、平成31年度からは、資料整理を実施し、今回その成果をここに報告することができました。

米山遺跡の発掘調査では224棟の竪穴建物をはじめ多くの遺構が調査され、整理では3000点を超す遺物を掲載しています。これらの成果は、古代碓氷郡の一集落の様相を解明しただけでなく、米山遺跡が周辺に存在する官衙や寺院の成立と展開において大きな役割を担っていたことが解明されております。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、群馬県県土整備部、群馬県安中土木事務所、群馬県地域創生部文化財保護課、群馬県教育委員会、安中市教育委員会、地元関係者の皆様方に多大なご指導・ご支援とご協力を賜りました。ここに篤く御礼を申し上げるとともに、本報告書が地域における歴史解明や文化財保護・活用に広く役立てられることを願いまして、序といたします。

令和３年３月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　向　田　忠　正

例　　言

1　本書は、平成30年度西毛広域幹線道路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び平成30年度西毛広域幹線道路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査その２で発掘調査された米山遺跡（発掘調査時の遺跡名称は安中市0334遺跡）の発掘調査報告書である。

2　米山遺跡は安中市安中字米山1794-4、1795-3、1796、1798、1799-1、1800-1、1801-1、1801-9、1801-10、1801-11、1801-12、1801-13、1802-4、1803-3、1804-3、1863、1864-2、1878-6、1879-5、1879-6、1880-3、1880-6、1880-7、1880-8、1880-9、1881-2、1882-3、1902-2、1903-2、1904-1、1905-2、1905-5、1906-2、1906-3、1908-4、1909-3、1921-5、1925-2、1926-3、1926-4、1932-5、1932-6、1932-7、1932-8、1933-2、1934、1935-2、字前原2313-4、2314-5に所在する。

3　事業主体は群馬県安中土木事務所である。

4　調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

5　発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

その１

履行期間　平成30年４月１日～平成31年１月31日

調査期間　平成30年４月１日～平成30年11月30日

調査担当　岩上千鶴（主任調査研究員）、飯田陽一（専門調査役）

遺跡掘削工事請負　スナガ環境測設株式会社

その２

履行期間　平成30年10月26日～平成31年３月31日

調査期間　平成30年12月１日～平成31年３月31日

調査担当　岩上千鶴（主任調査研究員）、飯田陽一（専門調査役）

遺跡掘削工事請負　技研コンサル株式会社

空中写真撮影　（その１・その２）技研コンサル株式会社

地上測量　（その１・その２）アコン測量設計株式会社

遺物洗浄・注記　（その１）有限会社毛野考古学研究所、スナガ環境測設株式会社、（その２）山下工業株式会社

6　整理事業の期間と体制は次のとおりである。

履行期間　平成31年４月１日～令和３年３月31日

整理期間　平成31年４月１日～令和３年３月31日

整理担当　神谷佳明（専門調査役、平成31年４月～令和３年３月）、洞口正史（専門調査役、令和２年４月～９月）

保存処理　板垣泰之（専門員）、関　邦一（専門調査役）

7　本書の作成担当は次のとおりである。

編集　神谷佳明

執筆　第４章　澤田純明・佐伯史子（新潟医療福祉大学）、第１章第２節　飯田陽一、その他　神谷佳明、（第１章・第２章は「大島田Ⅱ遺跡・沼田遺跡」2019を加筆及び転載した。）

遺物観察　石器・石製品　津島秀章（資料２課長）・松村和男（上席調査研究員）、縄文土器・弥生土器　橋本　淳（資料統括・主任調査研究員）、土師器・須恵器・土製品、金属器等　神谷佳明、陶磁器　矢口裕之（資料１課長）、墨書・刻書判読　高島英之（専門員（総括））

遺構写真撮影　発掘調査担当者、遺物写真撮影　神谷佳明・津島秀章・松村和男・橋本　淳・矢口裕之・洞口正史
デジタル編集　齊田智彦(資料統括・主任調査研究員)

8　出土石器・石製品の石材鑑定は飯島静男氏(群馬県地質学会会員)に依頼した。

9　出土した獣骨(歯)の一部については新潟医療福祉大学医療技術学部理学療法学科奈良貴史教授に鑑定・分析を依頼した。

10　発掘調査の記録及び出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

11　発掘調査及び報告書作成に際しては下記の機関、方々にご協力、ご指導をいただいた。
群馬県安中土木事務所、群馬県、群馬県教育委員会、安中市、安中市教育委員会

凡　　例

1　本報告書に用いた座標・方位は、すべて世界測地系(日本測地系2,000平面直角座標第Ⅸ系)による。主軸方位の計測にもこれを用いた。

2　遺構の種類・番号は原則発掘調査時に付与されたものを踏襲したが、一部変更した遺構がある。変更した遺構についてはp.7、第１表に一覧を提示してある。

3　遺構図に表示した高さは、全て標高である。

4　遺構図のスケールは、それぞれの図に明記してある。

5　遺物図については、第２分冊に凡例を提示した。

6　遺物写真は、図と同縮率に近づけてある。

7　遺構図に使用したトーン・記号は下記のとおりである。
平面図　灰　炭・炭化物　焼土　硬化面　礫範囲
断面図　カクラン
●　土器・土製品　▲　石器・石製品　■　鉄・金属製品　○　炭化物　△　骨・獣骨・歯　◇　種子

8　遺物への注記は、下記のように略してある。
注記の記載順は、遺跡略称、区名、区No.、遺構略称、遺構No.、遺物取り上げNo.または出土位置である。
遺跡名　安中市教育委員会の遺跡名称である安中市0334を略し「334」を使用した。
区　名　発掘調査時の遺跡略称が数値のため「区」を遺跡略称の後に記載し、次に区No.を記した。
遺構種　原則、独立行政法人奈良文化財研究所で使用している略号を使用している。
SJ：竪穴建物、SI：竪穴状遺構、SD：溝、SE：井戸、SK：土坑、Ｐ：ピット、復旧：復旧坑など
遺構No.　遺構種略号の後に表記
出土位置　比較的大きい遺物はNo.を付与し、カマドは「カ」、貯蔵穴は「貯穴」、床下土坑「床下土」等と表記した。なお、柱穴は整理段階で主軸方向の右上から時計回りに付与してあるため、発掘調査時とは異なるものも存在する。竪穴建物から出土し、取り上げNo.を付与していない遺物は竪穴建物内を４分割したカマドから時計回りにＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄに区分して表記してある。
遺構外出土のグリッド取り上げ遺物については、遺跡名・区名の次にＸ軸、Ｙ軸の下３桁を記載してある。

9　本書で使用した地図は、下記のとおりである。
第１図　国土地理院１/200,000地勢図「長野」、「宇都宮」
第２図　安中市都市計画図No. 6(昭和49年測図)
第４図　国土地理院５万分の１都道府県土地分類図基本調査(榛名山・富岡)
第５図　国土地理院１/25,000「三ノ倉」、「下室田」、「松井田」、「富岡」

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次

第１分冊
第１章　発掘調査の経過等 ・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第１節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第１項　米山遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第２節　発掘調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
　第１項　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第３節　発掘調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　第１項　座標の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　第２項　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　第３項　遺構測量・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　第４項　遺構写真撮影 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第４節　整理の経過と方法 ・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第２章　遺跡地の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　第１項　安中地域の地理的環境 ・・・・・・・・・・・ 8
　第２項　米山遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　第１項　旧石器時代・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　第２項　縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　第３項　弥生時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　第４項　古墳時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　第５項　古代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
　第６項　中世 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　第７項　近世 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第３節　基本土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

第３章　検出した遺構と出土した遺物 ・・・・・・・ 22
第１節　遺構・遺物の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第２節　　旧石器時代の調査・・・・・・・・・・・・・ 23
第３節　縄文時代の遺構・遺物 ・・・・・・・・・・・・ 23
　第１項　土坑・ピット・埋甕 ・・・・・・・・・・・・ 23
　第２項　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第４節　弥生時代の遺構・遺物 ・・・・・・・・・・・・ 28
　第１項　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
　第２項　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第５節　古墳時代～飛鳥・奈良・平安時代の遺構・遺物
　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
　第１項　竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
　第２項　掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・330
　第３項　竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・330
　第４項　溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・337
　第５項　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・346
　第６項　ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・358
　第７項　遺物集中・・・・・・・・・・・・・・・・・・376
　第８項　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・376
第６節　中世以降の遺構・遺物 ・・・・・・・・・・・・377
　第１項　溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・377
　第２項　井戸 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・389
　第３項　復旧坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・393
　第４項　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・401
　第５項　ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・415
　第６項　畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・424
　第７項　集石 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・425
　第８項　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・425

第４章　科学的分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・426
第１節　米山遺跡から出土したウマの歯について ・426

第５章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・427
第１節　遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・427
　第１項　施釉陶器・・・・・・・・・・・・・・・・・・427
　第２項　凸帯付四耳壺・有鍔台付鉢(火舎)・・・・437
第２節　古墳時代～飛鳥・奈良・平安時代の集落変遷
　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・446
第３節　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・456
遺跡抄録

第２分冊
　遺物図版
第３分冊
　遺物観察表・未掲載遺物一覧表
第４分冊
　写真図版
付図

挿図目次

第１図　遺跡位置図(国土地理院１/200,000地勢図「長野」、「宇都宮」図幅を編集・加工) ･････････････････････････････ 1
第２図　調査範囲 ････････････････････････････････ 4
第３図　調査区設定図 ･･･････････････････････････････ 6
第４図　周辺地形分類図(国土交通省国土政策局国土情報課５万分の１都道府県土地分類基本調査(榛名山・富岡)を一部改変 ･････ 9
第５図　周辺遺跡(国土地理院１/25,000「三ノ倉」、「下室田」、「松井田」、「富岡」 図幅を編集・加工) ････････････････････ 11
第６図　基本土層図 ･････････････････････････････････ 21
第７図　旧石器時代調査　調査坑配置図 ････････････････････ 24
第８図　旧石器時代調査　調査坑土層断面図 ･･････････････････ 25
第９図　４・５区調査区　土坑・ピット・埋甕配置図 ･･････････ 26
第10図　134・154号土坑、296号ピット、１号埋甕遺構図 ････････ 27
第11図　１区調査区　土坑配置図 ････････････････････････ 29
第12図　30・70・75号土坑遺構図 ････････････････････････ 30
第13図　１区調査区　竪穴建物・掘立柱建物・竪穴状遺構配置図 ･･･ 31
第14図　２区調査区　竪穴建物配置図 ････････････････････ 32
第15図　３区調査区　竪穴建物・竪穴状遺構配置図 ････････････ 33
第16図　４・５区調査区　竪穴建物・竪穴状遺構配置図 ･････････ 34
第17図　１号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 35
第18図　２号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 36
第19図　３号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 37
第20図　４号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 38
第21図　５号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 39
第22図　６号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 41
第23図　７号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 42
第24図　８号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 43
第25図　９号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 44
第26図　10号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 45
第27図　11号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 46
第28図　12号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 48
第29図　13号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 49
第30図　14号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 51
第31図　15号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 52
第32図　16号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 54
第33図　16号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 55
第34図　17号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 57
第35図　18・19号竪穴建物遺構図 ････････････････････････ 58
第36図　18号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 59
第37図　20号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 61
第38図　21号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 62
第39図　22号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 63
第40図　22号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 64
第41図　23号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 65
第42図　24号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 66
第43図　25号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 67
第44図　26号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 68
第45図　27号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 70
第46図　27号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 71
第47図　28号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 72
第48図　28号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 73
第49図　29号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 74
第50図　30号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 76
第51図　31・139号竪穴建物遺構図(１) ････････････････････ 77
第52図　31・139号竪穴建物遺構図(２) ････････････････････ 78
第53図　32号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 79
第54図　33号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 80
第55図　34号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 82
第56図　35号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 83
第57図　36号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 84
第58図　36号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 85
第59図　38号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 86
第60図　39号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 87
第61図　40号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 88
第62図　40号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 89
第63図　41号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 90
第64図　42号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 92
第65図　43号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 93
第66図　43号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 94
第67図　44号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 95
第68図　45号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 97
第69図　46号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 98
第70図　46号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 99
第71図　47号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 100
第72図　48号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 101
第73図　49号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 102
第74図　50号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 104
第75図　51号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 105
第76図　52号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 106
第77図　53号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 107
第78図　54号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 108
第79図　54号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 109
第80図　55号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 111
第81図　55号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 112
第82図　56号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 113
第83図　57号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 114
第84図　58号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 115
第85図　59号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 116
第86図　60号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 117
第87図　60号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 118
第88図　61号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 119
第89図　62号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 120
第90図　63号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 122
第91図　63号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 123
第92図　64号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 124
第93図　65号竪穴建物遺構図(１) ･･･････････････････････ 125
第94図　65号竪穴建物遺構図(２) ･･･････････････････････ 126
第95図　66号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 127
第96図　67号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 129
第97図　68号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 130
第98図　69号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 131
第99図　70号竪穴建物遺構図 ･･････････････････････････ 132
第100図　71号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 133
第101図　72号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 134
第102図　73号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 135
第103図　74号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 137
第104図　75号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 138
第105図　76号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 139
第106図　77号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 141
第107図　78号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 142
第108図　79号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 143
第109図　80号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 144
第110図　81号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 145
第111図　82号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 146
第112図　83号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 147
第113図　84号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 148
第114図　85号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 150
第115図　86号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 151
第116図　87号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 152
第117図　88号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 153
第118図　89号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 153
第119図　90号竪穴建物遺構図 ･････････････････････････ 154
第120図　91号竪穴建物遺構図(１) ･･････････････････････ 156
第121図　91号竪穴建物遺構図(２) ･･････････････････････ 157
第122図　92号竪穴建物遺構図(１) ･･････････････････････ 158
第123図　92号竪穴建物遺構図(２) ･･････････････････････ 159

第124図　93号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160
第125図　94号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 161
第126図　95号竪穴建物遺構図（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 162
第127図　95号竪穴建物遺構図（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 163
第128図　96・97号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165
第129図　98号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第130図　99号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第131図　100号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168
第132図　101号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
第133図　102号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170
第134図　103号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171
第135図　104号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 172
第136図　105号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 174
第137図　106号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175
第138図　107号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176
第139図　108号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177
第140図　108号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178
第141図　109号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 179
第142図　110号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 180
第143図　111号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181
第144図　112号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
第145図　113号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 184
第146図　113号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第147図　114号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 186
第148図　114号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 187
第149図　115号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 188
第150図　116号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 189
第151図　117号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第152図　118号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 191
第153図　119号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 191
第154図　120・127号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193
第155図　121号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194
第156図　122号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 196
第157図　123号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197
第158図　124号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197
第159図　125号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 198
第160図　126号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
第161図　128号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 200
第162図　129号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 202
第163図　130号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 203
第164図　131号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 203
第165図　132号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 204
第166図　133号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 205
第167図　133号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 206
第168図　134号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 208
第169図　134号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 209
第170図　135号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 209
第171図　136号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 210
第172図　137号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 211
第173図　138号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 212
第174図　140号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 214
第175図　141号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 215
第176図　142号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 216
第177図　143号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 217
第178図　143号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 218
第179図　144号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 220
第180図　146号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221
第181図　147号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 222
第182図　148号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 223
第183図　149号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 224
第184図　150号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 225
第185図　151号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 226
第186図　152号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 227
第187図　153号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 228
第188図　154号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 230
第189図　155号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 232
第190図　156号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 233
第191図　157号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 234
第192図　157号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 235
第193図　158号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 236
第194図　159号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 237
第195図　160号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 238
第196図　161号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 240
第197図　162号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 241
第198図　163号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 242
第199図　164号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 243
第200図　165号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 244
第201図　166号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 246
第202図　167号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 247
第203図　168号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 248
第204図　169号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 250
第205図　170号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 251
第206図　171号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 252
第207図　171号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 253
第208図　172・176号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 255
第209図　173号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 256
第210図　174号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 258
第211図　174号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 259
第212図　175号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 260
第213図　177号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 261
第214図　178号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 263
第215図　178号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 264
第216図　179・180号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 265
第217図　179号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 266
第218図　181号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 267
第219図　182号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 268
第220図　183号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 270
第221図　183号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 271
第222図　184号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 272
第223図　185号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 273
第224図　186号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 274
第225図　186号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 275
第226図　187号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 276
第227図　188号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 276
第228図　189号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 277
第229図　189号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 278
第230図　190号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 279
第231図　190号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 280
第232図　191号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 282
第233図　192号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 283
第234図　193号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 285
第235図　194号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 286
第236図　195・226号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 288
第237図　195号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 289
第238図　196号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 290
第239図　197・224号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 291
第240図　197号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 292
第241図　198号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 292
第242図　199号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 293
第243図　200号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 294
第244図　201号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 295
第245図　202号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 296
第246図　203号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 298
第247図　204号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 299
第248図　204号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 300
第249図　205号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 301
第250図　205号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 302
第251図　206号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 303
第252図　207号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 304
第253図　208号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 305
第254図　209・210号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 308
第255図　209号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 309

第256図　211号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 310
第257図　212号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 312
第258図　212号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 313
第259図　213号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 314
第260図　214号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 315
第261図　215号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 316
第262図　216号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 317
第263図　216号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 318
第264図　217号竪穴建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 320
第265図　217号竪穴建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 321
第266図　218号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 322
第267図　219・225号竪穴建物遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 324
第268図　220号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 326
第269図　221号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 327
第270図　222号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 328
第271図　223号竪穴建物遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 329
第272図　１号掘立柱建物遺構図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 331
第273図　１号掘立柱建物遺構図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 332
第274図　１号竪穴状遺構遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 333
第275図　２号竪穴状遺構遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 333
第276図　３号竪穴状遺構遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 333
第277図　４号竪穴状遺構遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 334
第278図　５号竪穴状遺構遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 335
第279図　６号竪穴状遺構遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 335
第280図　７号竪穴状遺構遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 336
第281図　９号竪穴状遺構遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 337
第282図　１区　溝・土坑・ピット・遺物集中配置図 ・・・・・・・・・・・ 338
第283図　３区　溝・土坑・ピット配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 339
第284図　４・５区　土坑・ピット配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 340
第285図　２号溝遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 341
第286図　３・５・９号溝遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 343
第287図　６～８号溝遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 345
第288図　１・11・15・16・18・20～22号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・ 350
第289図　23・25～27・29・32・35号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・・ 351
第290図　36・38～42号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 352
第291図　43～46・50～52号土坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 353
第292図　55～57・59～62号土坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 354
第293図　63～67・69・72・73号土坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・ 355
第294図　74・76～80・82号土坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 356
第295図　83・85・87・133・140・143・169・175号土坑遺構図・・・・ 357
第296図　４・５・７・９～11・18・23～25・27・28号ピット遺構図　359
第297図　29～38・40～46号ピット遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 360
第298図　47～59・62～66号ピット遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 361
第299図　67・69～76・78～95号ピット遺構図 ・・・・・・・・・・・・・ 362
第300図　96～100号ピット遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 363
第301図　101・103～114・117号ピット遺構図 ・・・・・・・・・・・・・ 364
第302図　115・116・118～130号ピット遺構図 ・・・・・・・・・・・・・ 365
第303図　131～141号ピット遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 366
第304図　142～157・164・167・168・171・173～179・183号ピット遺構図
・・ 367
第305図　184・186号ピット遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 368
第306図　187・188・196・197・200～202・204～206・211・216・219・
220・228・233～236号ピット遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 369
第307図　237・239・242・243・247・248・253～260・271・275・277号ピッ
ト遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 370
第308図　278・282・285～288・290～293・297～299号ピット遺構図　371
第309図　301～305・311～314・317・320号ピット遺構図 ・・・・・・・ 372
第310図　１号遺物集中遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 376
第311図　１区　溝・土坑・ピット配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 380
第312図　２区　溝・井戸・土坑・ピット配置図・・・・・・・・・・・・・ 381
第313図　３区１面　復旧坑配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 382
第314図　３区２面　溝・井戸・復旧坑・土坑・ピット配置図 ・・・・ 383
第315図　４・５区　溝・井戸・復旧坑・土坑・ピット・集石配置図　384
第316図　１号溝遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 385
第317図　10～12・17号溝遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 386
第318図　13・14・16号溝遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 387
第319図　15号溝遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 388
第320図　１～４号井戸遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 390
第321図　５・６号井戸遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 391
第322図　７・８号井戸遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 392
第323図　１号復旧坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 393
第324図　２～５・38号復旧坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 394
第325図　６～12号復旧坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 395
第326図　13～19・22・23号復旧坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 396
第327図　21・25号復旧坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 397
第328図　24・27～29・32号復旧坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 398
第329図　30・34～37号復旧坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 399
第330図　２～10・12・13号土坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 403
第331図　14・17・19・24・31・33・34・37・47号土坑遺構図 ・・・・ 404
第332図　48・49・53・54・88・89・91～93号土坑遺構図 ・・・・・・・ 405
第333図　94～100号土坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 406
第334図　101～108・114号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 407
第335図　109～113・115～117・122号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・ 408
第336図　118～121・123～126・128号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・ 409
第337図　127・129～132・135～137号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・ 410
第338図　138・139・141・142・144号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・ 411
第339図　146～153号土坑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 412
第340図　155～161・165号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 413
第341図　162～164・168・170～172・174号土坑遺構図・・・・・・・・・ 414
第342図　166・167・173号土坑遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 415
第343図　１～３・６・８・12～17・19～22・26・39号ピット遺構図　418
第344図　68・77・102・158～163・165・166・169・170・172・180・181号ピッ
ト遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 419
第345図　182・185・189～194・198・199・203・207～210・212・213号ピッ
ト遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 420
第346図　214・215・217・218・221～227・229～232・238・240・241号ピッ
ト遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 421
第347図　244～246・249～252・261～270・272号ピット遺構図・・・・ 422
第348図　273・274・276・279～281・283・284・289・294・295・300・
306号ピット遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 423
第349図　307～310・315・318・319・321～323号ピット遺構図・・・・ 424
第350図　１号畑遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 425
第351図　１号集石遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 425
第352図　県内出土の凸帯付四耳壺集成（１）・・・・・・・・・・・・・・・ 441
第353図　県内出土の凸帯付四耳壺集成（２）・・・・・・・・・・・・・・・ 442
第354図　県内出土の凸帯付四耳壺集成（３）・・・・・・・・・・・・・・・ 443
第355図　県内出土の有鍔台付鉢（火舎）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 447
第356図　県内出土の有鍔台付鉢（火舎）と火舎 ・・・・・・・・・・・・・ 448
第357図　集落（竪穴建物）変遷図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 450
第358図　集落（竪穴建物）変遷図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 451
第359図　集落（竪穴建物）変遷図（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 452
第360図　集落（竪穴建物）変遷図（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 453
第361図　集落（竪穴建物）変遷図（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 454
第362図　集落（竪穴建物）変遷図（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 455

表　目　次

第１表　遺構名称変更一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第２表　周辺遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第３表　１号掘立柱建物柱穴計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 331
第４表　土坑一覧（古墳時代～飛鳥・奈良・平安時代） ・・・・・・・・・ 349
第５表　ピット一覧（古墳時代～飛鳥・奈良・平安時代）・・・・・・・・ 373
第６表　井戸一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 400
第７表　復旧坑一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 400
第８表　土坑一覧（中世以降）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 401
第９表　ピット一覧（中世以降）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 416
第10表　米山遺跡出土施釉陶器集計表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 430
第11表　遺跡ごとの施釉陶器比較 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 437
第12表　県内出土の凸帯付四耳壺・凸帯付壺 ・・・・・・・・・・・・・・・ 440
第13表　竪穴建物時期別一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 449

第１章　発掘調査の経過等

第１節　調査に至る経緯

群馬県が策定した「群馬がはばたくための７つの交通軸構想」とは、県内の高速交通網を補完する、県央軸、東毛軸、西毛軸、吾妻軸、三国軸、尾瀬軸、渡良瀬軸の７つの交通軸を整備することにより、地域連携・時間短縮を強化するとともに、それぞれの軸に求められる工業・農業、観光、救命・救急、防災、日常生活などの機能を向上させることを目指したものである。

７つの交通軸のうち、「西毛軸」は、西毛広域幹線道路、国道254号バイパスやＪＲ信越本線、上信電鉄で構成される。その中でも主要な構成要素である西毛広域幹線道路は、国道17号線との前橋市千代田町三丁目交差点を起点とし、前橋市西部、高崎市北西部、安中市中央部を経て、国道254号富岡バイパスとの富岡市富岡しののめ跨線橋北交差点に至る、総延長27.8kmの主要幹線道路である。この道路整備によって、周囲地域における交通渋滞の緩和や物流の効率化、生活圏の拡大など西毛地域の産業、経済、観光の発展を担うことが期待されている。

現在、起点の国道17号との前橋市千代田町三丁目交差点から高崎市棟高の主要地方道高崎渋川線(旧道)との交差点に至る前橋工区・元総社蒼海工区・国分寺工区・中央第二工区計6.24kmと、高崎市箕郷町上芝から高崎市下

第１図　遺跡位置図(国土地理院１/200,000地勢図「長野」、「宇都宮」 図幅を編集・加工)

里見に至る高崎西工区4.70㎞、安中市下秋間から安中市安中の国道18号との安中市役所入口交差点に至る安中工区1.90㎞が現在整備中であり、前橋市千代田町三丁目交差点から前橋市問屋町までの前橋工区2.73㎞と、前橋市元総社町の関越自動車道と交差する箇所から高崎市引間町の主要地方道高崎渋川線バイパスとの辻久保交差点までの国分寺工区1.64㎞、それに主要地方道高崎渋川線バイパスとの辻久保交差点から高崎市棟高の主要地方道高崎渋川線との交差点までの中央第二工区西側0.40㎞に至る間はすでに供用が開始されている。

本報告書で報告する安中市安中地内所在の米山遺跡発掘調査の原因となった西毛広域幹線道路安中工区は、安中市街地北西の下秋間地区の丘陵地帯から碓氷川支流の秋間川、九十九川を越えて国道18号安中市役所交差点に至る区間であり、丘陵部とそれを秋間川と九十九川が開析した樹枝状の谷とが交差する地域から安中市街地が展開する碓氷川左岸の上位段丘面に至っている。

平成26(2014)年７月群馬県県土整備部道路整備課・都市計画課発行の『西毛広域幹線道路』パンフレットでは、安中工区について、「あるきやすくて、安全・安心な道路が実現」とのキャッチフレーズで、「幅員が狭く、歩道がないことから歩行の際に不安感を抱くような道路から、広幅員で車と人が分離された歩きやすい安全・安心な道路に生まれ変わります。」としている。

第１項　米山遺跡

平成27(2015)年５月７日に群馬県県土整備部建設企画課から群馬県教育委員会文化財保護課に対して、安中市安中地区における西毛広域幹線道路整備事業対象範囲内の埋蔵文化財の状況について照会があったことが、西毛広域幹線道路整備事業対象範囲における埋蔵文化財の状況に関する照会の嚆矢であった。

これを承けて県文化財保護課は、県建設企画課に対して、安中市安中字米山地区における事業地の一部が、安中市の遺跡台帳に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地(安中市遺跡番号0334)の範囲に当たるため、埋蔵文化財試掘調査の必要があること及び文化財保護法第94条による届出が必要である旨を回答した。

その後、平成29年６月22・23日に県文化財保護課が安中市安中字米山地内の事業対象地内における埋蔵文化財試掘調査を実施したところ竪穴建物や土坑と見られる遺構が検出され、埋蔵文化財の包蔵を確認したので、県文化財保護課は県安中土木事務所に宛てて工事に先立って埋蔵文化財発掘調査が必要な旨を回答した。

この後、県文化財保護課、県安中土木事務所、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の３者によって、現地における発掘調査着手にむけての具体的協議に入った。

県安中土木事務所は翌年に安中市教育委員会文化財保護課宛文化財保護法94条による周知の埋蔵文化財包蔵地における工事の届出を提出、それを承けて安中市文化財保護課に県文化財保護課宛進達した。

県文化財保護課の調整のもと、県安中土木事務所を委託者、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を受託者として、平成30(2018)年４月１日付け当該地における発掘調査の委託契約が締結され、同年４月初めから現地での調査を着手することになった。なお、この調査区では想定以上に竪穴建物の棟数が多かったことから、調査期間を２カ月間延長するための変更契約を平成30年９月11日に締結している。

２～５区調査区の発掘調査は平成30年10月26日に委託契約が締結され、12月１日より調査に着手している。

第２節　発掘調査の経過

第１項　調査の経過

米山遺跡(事業名称は安中市0334遺跡)の発掘調査は、平成30年度当初の事業計画では、１区調査区とした北側調査区(以後、１区調査区と呼称)を４月～９月の６カ月間調査し、中断を挟んで12月～３月の４カ月間で南側調査対象範囲である２区調査区～５区調査区を調査する計画であった。

１区調査区

１区調査区は全調査範囲の北半にあたる。ここは計画路線の盛土部分が大半で道幅が広く、東西幅50m前後の地点であった。この調査区は試掘データから70～200㎝の深度が予想され、排土の処理が懸案であった。

幸い調査対象区域外の事業地内２箇所に排土搬出先が確保できたことから、10トンダンプで掘削土を搬出する

ことにした。ダンプが通行可能であった調査区南側の道路を使って排土を搬出するため、掘削重機により調査区北西側から表土を掘下げ始め、北側・東側の順で南側中央へ向かって掘削を進めた。排土置場容量の問題で掘削土全量は搬出し切れず、南側の一部が残り、この部分のみ打手返しとなった。

重機による掘削は、遺構確認できる黄色味を帯びた泥流上面(高崎泥流と想定される面)としたが、その上側約20㎝前後の層厚で、主に平安時代の遺物が多量に出土し、石組状(後に石組カマドと判明)の施設が確認できる地点が多数あり、これらの地点は機械による掘削は行わず、人力掘削で柱状に遺物等を残しながら遺構確認した。また天仁元(1108)年の浅間山噴火による降下火砕物(As-B)が部分的に堆積し、畑の痕跡が確認できた部分ではこれらの畑の調査後、再度遺構確認面まで掘り下げた。

主な遺構は北隅から掘り下げを開始し、遺構名称は掘削順に１号竪穴建物・２号竪穴建物、・・・、１号竪穴状遺構、１号溝、１号土坑等と呼称した。個別遺構番号は北側から付けたものが多い。なお、２区調査区以降も１区調査区からの継続した遺構番号を付けている。

調査区北隅では遺構掘下げ開始後すぐに、南東側からの湧水に悩まされた。そのため、東側に排水溝を設け、北隅から調査区外に排水する計画で、東側の遺構掘下げを進めたが、遺構が密集するうえ深度50㎝を超えるような竪穴建物が連続し、排水溝開削ははかどらず、湧水には調査終盤まで悩まされ続けた。

７月末には総数180棟近い竪穴建物の存在が予想されるようになり、調査期限の９月末では調査終了が難しくなってきた。このため調査期日を11月末までの期間延長を図った。ただし、調査区東側の幅約10mの市道部分の工事は10月開始が動かせなかったため、この部分の調査は先行して完了させた。９月にラジコンヘリを使った全景撮影を行ったが、この段階で調査区中央から南側にかけての遺構は掘り上がっていない。11月には１区調査区の調査を終了し、奈良・平安時代を中心に、古墳時代初頭からの188棟(整理を進める中で２棟とした竪穴建物のなかで接合状態から同一とした判断した竪穴建物が存在するため、数は減っている)に及ぶ竪穴建物等の調査を完了した。

２区調査区～５区調査区

２区調査区以降は12月より調査を開始した。ここで１区調査区の遺構掘削を請け負ってきた掘削請負業者から他の業者への変更が行われた。この調査区は１区調査区に比べ路線幅は狭く、16～26m前後であった。区の名称はそれぞれ調査区を東西に横切る現道で区切り、北隅の２区調査区から国道18号線脇の南隅５区調査区まで名付けた。市道は狭く曲がりくねっていたため車両のすれ違いが難しく、２区調査区・３区調査区間の市道を搬入路、３区調査区・４区調査区境の市道を搬出路とし、４トンダンプを使って、埋戻しの終わった１区調査区へ掘削した土砂を搬出することとした。

２区調査区は全土量を搬出することができた。北隅は九十九川の中位河岸段丘と下位河岸段丘の境の崖線にあたる部分で、主にトレンチで遺構確認した面である。中央部は、緩やかな斜面を段々に開削しており、近世陶磁器が多く出土したことから近世の屋敷地の存在を想定して調査を進めた。ここでは天明３(1783)年の浅間山噴火による降下火砕物(以下As-Aと呼ぶ)を除去するように埋め戻し整地したとみられる跡のほかAs-Aを廃除去するために掘られた大型土坑など、近世以降の遺構を多く検出したが、調査区北隅で平安時代の竪穴建物１棟(188号竪穴建物)を調査し、12月中に調査をほぼ終了した。

３区調査区は区内の排土と４区への進入路とするため、車両用通路を残しての打手返しを行った。東側を通路として西側から掘削し、西側調査終了後東側掘削土を打手返しした。古墳時代後期以降の竪穴建物９棟の他、中世の所産と思われる堀を確認した。３区調査区南側は比較的遺構の途切れる一画で竪穴建物はすべて北側での確認である。

４区調査区も西側半分から掘削を始めた。西側の表土を半分近く残して排土置場が満杯になったたため、それ以降の土砂を現場内で打手返ししての調査となった。西側調査終了後、３区調査区同様東側掘削土を打手返しして全体を調査した。４区はAs-A除去のための土坑が多く、階段のある地下式坑をAs-Aで埋め戻したものや、江戸時代以降最近まで民家立地であったようで、撹乱が多い。また奈良時代を主体とした竪穴建物を25棟調査した。５区調査区は150㎝以上の深度があるが、きわめて狭い調査区で、４区調査区西半と一緒に掘削し、竪穴建物１棟、

大島田
安中
一九十九川
米山橋
欠下
紅ヶ谷戸
小峰
植松
植松団地
井戸谷戸
兎谷戸
前原
田尻
覚泉
覚泉橋
田尻団地
地尻団地
甘楽郡信用金庫安中支店
安中保健所
安中市役所
碓氷安中医師会
碓氷准看護婦養成所
安中一丁目
安中二
安中高等学校
安中消防署
0
1：5,000
200m

第２図　調査範囲

溝１条等を調査した。

各調査区の全景写真撮影は２区調査区と、３・４区調査区の西半の調査がほぼ終了した１月末に高所作業車により行った。その後、２月以降は３・４区調査区の通路部分を打手返し残る部分の調査を完了した。

ローム層の残存する３・４区調査区で旧石器時代の遺構・遺物確認のためのトレンチによる調査を行ったが、遺構・遺物の確認はできなかった。３月中旬から埋戻し作業に入り、全工程を終了した。

なお、地元米山地区老人クラブ向けの遺跡説明会を１区調査区で平成30年10月22日に、３・４区調査区では平成31年２月26日に日実施し、クラブ員以外の地元住民も含め、それぞれ20名を超える方に参加していただいた。

第３節　発掘調査の方法

第１項　座標の設定

発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第Ⅸ系)を用いて、10m×10m四方を基本として設定した。遺構図中の座標については、座標値の下３桁を「Ｘ軸−Ｙ軸」の順で記し、「Ｘ＝37100、Ｙ＝−85050」の場合、「100−050」のように略記した。

なお、調査対象範囲の南端はＸ＝36815、北端はＸ＝37127、東端はＹ＝−84938、西端はＹ＝−85091である。このため、調査対象範囲全域では下３桁にすると座標が重複する地点が生じるが、各調査区では南北方向に100mを超す調査区が存在しないことから調査区を併記することで座標の重複を避けられた。

第２項　調査の方法

調査対象地は、南北に細長い道路の路線幅内の調査であった。

米山遺跡では、表土及び中世〜近世に堆積した土層0.5〜1.0mほどをバックフォーによって掘削・除去した。掘削土の下からは発掘作業員の人力による掘削を行った。なお、２〜５区調査区では人力で盛土を取り除いた下からは天明３(1783)年に起こった浅間山大噴火によって降下した火山灰As-Aの二次堆積層や同噴火によって堆積した火山灰を取り除くための復旧坑が検出されている。

確認された遺構は、順次、埋没土層確認用ベルトを任意に設定するか、あるいは半裁し、発掘作業員が移植鏝等で掘削した後、遺構断面及び平面測量及び写真撮影等を行い、実測図及び写真によって記録した。

遺構確認、遺構掘り下げの指示、土層観察、遺構及び土層断面の写真撮影は調査担当者が行った。また、高所からの調査区全景写真の撮影はラジコンヘリコプターによる空撮を委託した他、有資格業者が運転・操作する高所作業車に調査担当者が搭乗して実施した。

各遺構の土層断面図、遺構平面図、遺物出土位置の記録・図化は、調査担当者の指示と立ち合いの下、測量業者に委託して行った。

写真記録の内、デジタルカメラで撮影したものはデジタルデータとしてＨＤ及びＣＤロムに記録、保管した。なお、バックアップデータも併せて作成、保管した。また、iso400ブローニー版モノクロフィルムを用いて６×７㎝版カメラで撮影した写真は、ネガフィルムの状態で保管し、焼き付け写真を貼付したフィルムの検索台帳を作成した上で保管した。

遺構番号は、今次調査における通し番号とした。また、調査過程において出土した遺物については、出土した遺構ごとに出土地点を記録し、整理・集約した上で、洗浄および出土遺跡・遺構・出土地点等に関するデータを注記する作業を業者委託し、業者から提出を受けた成果品については、発掘調査担当者が逐次、点検・照合し、受領した。

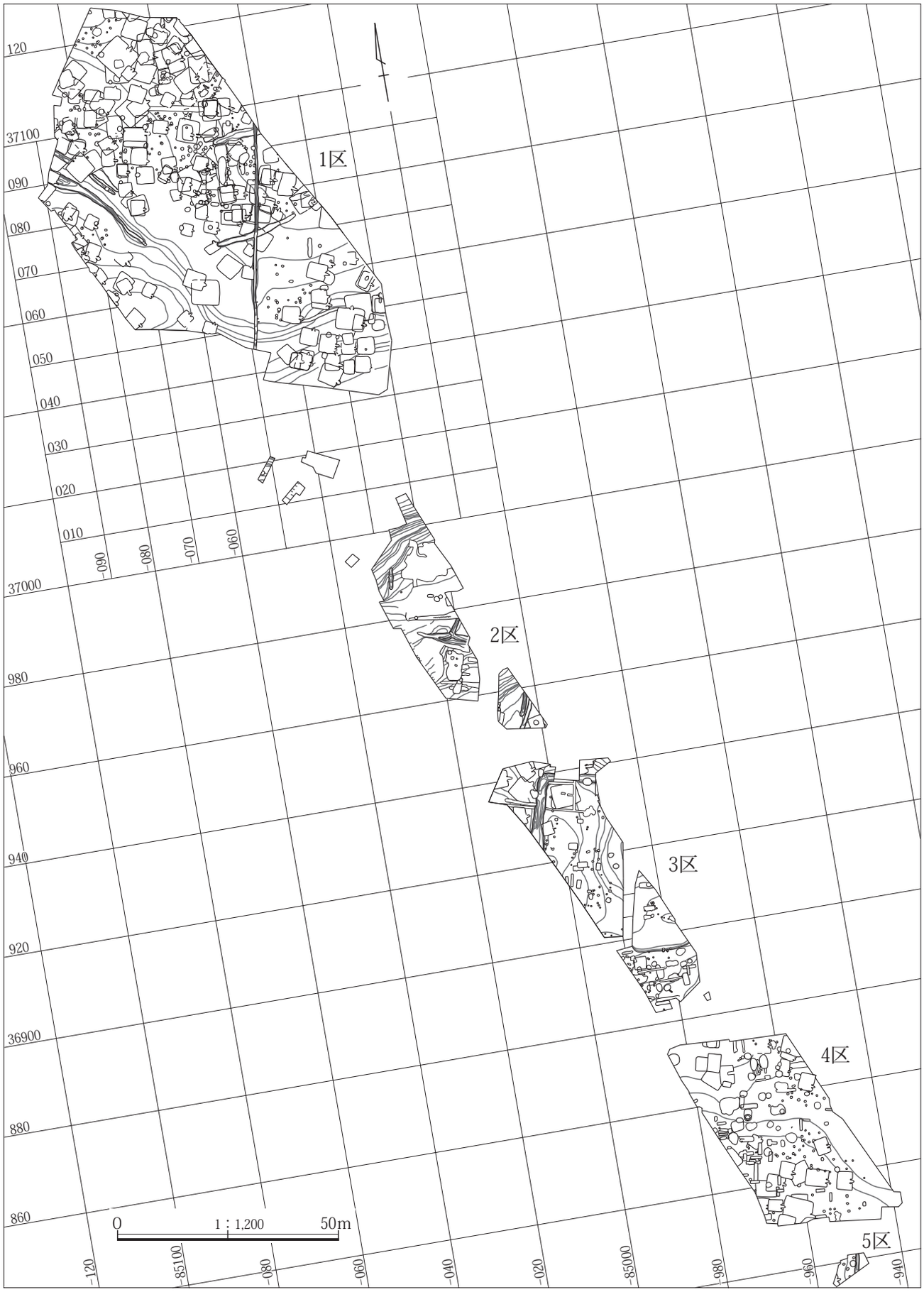
調査終了後の埋め戻しの作業は、基本的にバックフォーを主体とする重機によって行った。

第３項　遺構測量

遺構平面実測図の作成に当たっては、指名競争入札によって落札した測量会社にデジタル測量を委託し、データ及び打ち出し図面の提出を受けた。

遺構断面実測図は、原則として発掘現場における発掘作業員によって実測されたものを元に、測量会社にデジタルデータ化を委託し、遺構平面実測図と同様、データ及び打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品および実測原図等は、調査記録として保存され



第３図　調査区設定図

ている。

遺構図の縮尺は、断面実測図、平面実測図とも1/20を基本とし、竪穴建物カマドなど詳細な図を求める遺構については1/10で測量した。

第４項　遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構写真は発掘調査担当者が撮影した。発掘調査の過程で検出されたすべての遺構及び発掘調査に係る各種作業の進捗状況をデジタルカメラで撮影し、ＨＤにデータを保存、検索用データを作成した。

また、調査記録として、遺構ごとに土層断面、遺物出土状態、遺構全景等の写真撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について微細な接写を行った。

さらに、主要な遺構についてはiso400ブローニー版モノクロフィルムを用いて６×7㎝版カメラで撮影した。

第４節　整理作業の経過と方法

整理作業は、平成31年４月１日から令和３年３月31日までの30カ月間、群馬県安中土木事務所の委託を受けて公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。対象となった発掘調査時に作成された遺構図面及び遺構写真は、遺構量が多いため膨大な枚数になっている。

まず、調査現場から搬入された出土遺物コンテナ計245箱分の基本的な分類・仕訳と登録、集計作業を実施した後、石製品の実測、分類、観察作業を実施した。発掘調査記録については、台帳整理、写真記録のチェックを行い、遺構図と写真記録の照合や誤認・誤記の修正作業を行なった。また、数度に亘って発掘調査担当者からの調査所見や土層注記について聞き取りを行い、遺構及び遺物についての理解の深化に努めた。

発掘調査時に作成された遺構平面図・断面図の点検、修正・整合・編集を行い、発掘調査報告書に掲載する遺構図版のデジタルデータ化を図った。

出土遺物については、１区調査区については発掘調査時に洗浄・注記をすべて終えていたが、２区～５区調査区については平成31年度当初に洗浄、注記を実施した。その後、遺物を選別、接合・復元し、必要に応じて順次、写真撮影、実測及びトレース、採拓等の作業と観察表の作成を実施した。なお、金属器については発掘時に別途取り上げを行い、保存処理へ搬入し、随時錆落としと保存処理作業を実施した。その後、Ｘ線撮影した写真を参考に実測し、観察表の作成を実施した。また、人骨や獣骨・歯についてはほとんどが微細片であったため必要なデータを取ることができなかったが、比較的良好な残存状態であった馬歯を新潟医療福祉大学医療技術学部理学療法学科奈良貴史教授に鑑定・分析を依頼した。

発掘調査時に撮影された各種遺構写真は、発掘調査報告書に掲載するものを選別し､写真図版の編集を行った。

また、これらの作業と並行して、本文原稿・遺物観察表等の執筆を順次進めていった。

遺構図・遺物図・遺構写真・遺物写真・本文原稿・遺物観察表等のレイアウトを作成した後にデジタル編集を行い、本報告書の原稿及び図版を作成した。

作成された原稿及び図版は、指名競争入札によって落札した業者に委託され、印刷・製本の業務を実施した。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受け、納品された発掘調査報告書は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係各機関へ発送する作業を行った。

第１表　遺構名称変更一覧

旧名称	新名称
37号竪穴建物	22号竪穴建物
145号竪穴建物	143号竪穴建物
８号竪穴状遺構	226号竪穴建物
28号土坑	54号竪穴建物貯蔵穴
30号竪穴建物貯蔵穴	50号竪穴建物貯蔵穴
58号土坑	１号掘立柱建物Ｐ６
68号土坑	１号掘立柱建物Ｐ４
71号土坑	１号掘立柱建物Ｐ５
81号土坑	１号掘立柱建物Ｐ３
84号土坑	１号掘立柱建物Ｐ７
86号土坑	１号掘立柱建物Ｐ１
186号竪穴建物１号床下土坑	１号掘立柱建物Ｐ８
１号屋敷溝	17号溝
145号土坑	８号井戸
４号復旧坑Ｂ	４号復旧坑
４号復旧坑Ａ	38号復旧坑
60・61号ピット	39号土坑
４号溝	169号土坑
１号屋敷内土坑１	170号土坑
１号屋敷内土坑２	171号土坑
１号屋敷内土坑３	172号土坑
１号屋敷内土坑４	173号土坑
20号復旧坑	174号土坑
148号竪穴建物１号床下土坑	175号土坑
195号ピット	194号ピット
316号ピット	315号ピット
包含層	遺物集中

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構の各種図面・写真等の記録類と遺物を収納する作業を実施した。

発掘調査で記録した遺構図や遺構写真等の調査記録資料及び出土した遺物は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

なお、整理作業の中でいくつかの遺構については名称の変更を行っている。変更した遺構の新旧名称については第１表に提示した。

第１章参考文献
群馬県2007『はばたけ群馬・県土整備プラン2008－2017』
群馬県2013『はばたけ群馬・県土整備プラン2013－2022』
群馬県2014『はばたけ群馬プラン・第14次群馬県総合計画・重点プロジェクト（平成26年４月１日改訂）』
群馬県2018『はばたけ群馬・県土整備プラン2018―2027』
群馬県県土整備部道路整備課（道路企画室）2013『群馬がはばたくための７つの交通軸構想』
（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団2018『年報』37
群馬県統合型地裡情報システム「マッピングぐんま」
http://mapping-gunma.pref-gunma.jp/pref-gunma/top

第２章　遺跡地の環境

第１節　地理的環境

第１項　安中地域の地理的環境

米山遺跡は、安中市安中に所在する。安中市は、群馬県の南西部に位置する人口約６万人の市である。近世には中山道の宿場町として市内の板鼻・安中・松井田・坂本が栄え、安中藩の城下町でもあった。

昭和30(1955)年に原市町・磯部町・東横野村・岩谷野村・板鼻町・秋間村・後閑村の３町４村が安中町と合併し、さらに昭和33(1958)年に市制が施行され安中市となった。平成18(2006)年３月18日に、西に隣接する松井田町と合併し、現在の安中市が成立した。

現在の安中市の市域は、北側及び東側を高崎市と、南側大部分を富岡市と、南西側を下仁田町と、西側を長野県軽井沢町と接する。

地形は、西部に県境となる碓氷峠、北部に榛名山、南部に妙義山と三方を山に囲まれ、市域の西端部は上信国境の山岳地帯であり、市と長野県との県境には標高1,000m級の山々が連なっている。

市域の中央部には東西方向に碓氷川とその支流である九十九川、柳瀬川などが並行して流れており、市域東端のやや手前付近で、いずれも碓氷川に合流している。碓氷川とその支流の流域の殆どが安中市域内に収まっている。

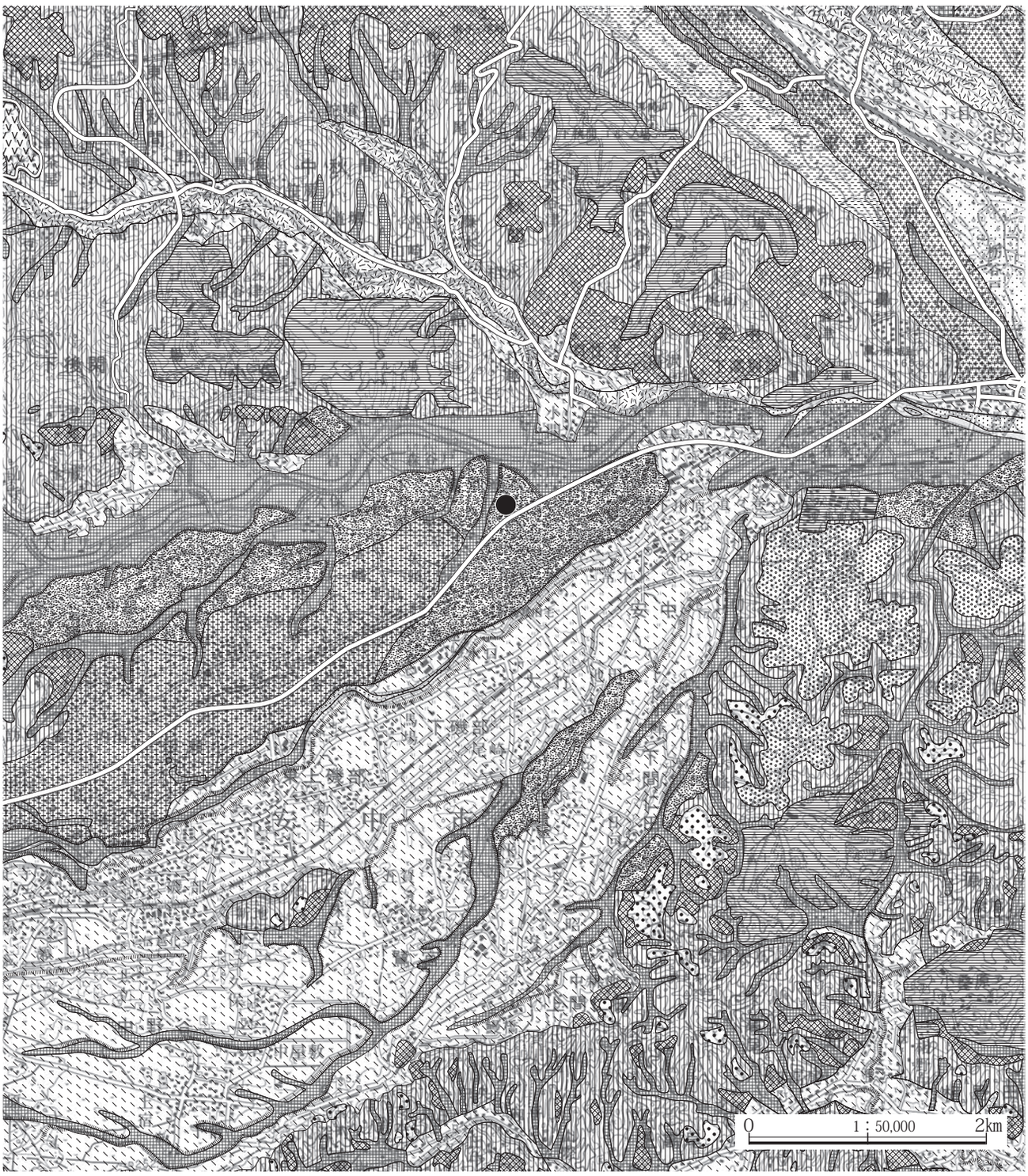
碓氷川は、利根川水系烏川の支川で、群馬県安中市と長野県軽井沢町の境界に位置する一ノ字山に源を発し、途中で霧積川、中木川、九十九川、柳瀬川等39河川を合流しながら安中市を貫流し、高崎市高松町付近で烏川に合流する流域面積約291㎢、本川流路延長約36㎞の本県西部地域を代表する一級河川である。

九十九川には、北西側から増田川、後閑川、秋間川など北西-南東方向に流れる支流が次々と合流しており、各河川流域には河岸段丘や河川低地が発達している。これらの河川の下流沿岸は丘陵地や平坦地となっており、中上流部では、支流の河川が山地、丘陵地の間に多くの谷地を形成している。 また、台地の多くは畑作地、低地は水田として活用され、居住地は台地及び低地に営まれている。市街地は東部の碓氷川、九十九川、柳瀬川に挟まれた東西に長い平坦地に形成され、その周囲の河川沿岸に農地・農村集落地が展開する。 安中市街地の標高は約180m前後、市域最高点は、市域の北西隅付近、長野県との県境に位置する留夫山で1,591mである。

市域の約2/3以上を占めている丘陵の多くは山林で覆われているが、近年では高速交通網の発達に伴ってゴルフ場に開発された場所も少なくない。市域の丘陵は、秋間丘陵とその分岐丘陵である後閑丘陵・岩野谷丘陵・松井田丘陵の一部からなっている。秋間・後閑丘陵では秋間川・後閑川によって開析された谷地形が発達している。

いずれの丘陵も基盤が約1,600～400万年前に堆積した新第三紀層で構成され、その上を主にローム層からなる第四紀の堆積物が覆っている。

市域内に所在する台地の多くは河岸段丘台地で、火砕



山　地
- 急斜面（30°<）
- 一般斜面（15°～30°）
- 山麓緩斜面（15°>）

丘陵地
- 一般斜面（15°～30°）
- 山麓緩斜面（15°>）
- 山頂緩斜面・山腹緩斜面（15°>）

火山地
- 一般斜面（15°～30°）
- 山麓緩斜面（15°>）

低　地
- 谷底平野
- 河　原
- 氾濫原

台　地
- 上位段丘群
- 中位段丘
- 下位段丘
- 最下位段丘群（完新世段丘群）
- 火砕流台地（室田火砕流群）

その他
- 人工改変地
- 火山堆積物で形成された山頂緩斜面
- 山麓緩斜面
- 山頂・山腹緩斜面
- 段丘崖

第４図　周辺地形分類図（国土交通省国土政策局国土情報課５万分の１都道府県土地分類基本調査（榛名山・富岡）を一部改変

流台地は市域東部の板鼻地区北部で見られる。河岸段丘の内の上位段丘面と中位段丘面が台地を形成している。台地の内部は小河川によって樹枝状に低地が形成され、谷津田となっている。遺跡の多くは台地上に形成されており、長く居住地として、あるいは生業活動の場として利用されてきたことが判明する。

市域内に所在する低地は、河岸段丘の下位段丘面と河川低地面からなり、その多くは現在水田となっている。弥生時代から古墳時代にかけてどの程度水田化が進行していたかは明らかではないが、市内低地部における平安時代以降の水田遺跡の検出事例は多く、かなり広範囲に水田化が進んでいたものと推測できる。

下位段丘面は河床から概ね５～20mの高さを有しており、約15,000年前ごろに形成されたと考えられている。市域では碓氷川と九十九川流域においてよく発達している。碓氷川流域では磯部面が最も広く、九十九川流域では国衙、小日向、下後閑地区などで、基盤の新第三紀層を不整合に覆って砂礫層が堆積している。

一方、河床から約５m以下の高さにある河川低地面では、基盤の新第三紀層を覆って砂礫層が堆積しており、約10,000年前前後に形成されたものと考えられている。九十九川、碓氷川、高田川流域において発達しており、特に九十九川流域の下後閑付近、九十九川と碓氷川との合流点よりも東側に広く分布している。九十九川流域の河川低地面では、平安時代の水田遺跡が広範囲にわたって分布している。

第２項　米山遺跡

米山遺跡は、安中市松井田町細野の仙ヶ滝を源とし、北北西から流れる増田川と合流して後閑、中後閑、下後閑を西から東へ流れる九十九川が碓氷川と合流する九十九川の上流、秋間川との合流点の西約1.2km、碓氷川との合流点の約2.5km西の右岸に位置し、標高約155m前後の下位段丘と170m前後の中位段丘に立地している。安中市中心市街地から北に位置する。

九十九川も碓氷川も近年までかなり氾濫の激しい河川であったが、現在、流域では安定した水田が形成されている。河川氾濫は１区調査区では遺構確認面が氾濫層の上面であったことからもわかる。

調査対象地は、安中市役所の北西約0.5kmに位置する道路敷の南北に長い長方形状を呈する範囲で、１区調査区と２区調査区の間には九十九川右岸の段丘崖線が存在する。調査区の北側は碓氷川支流の九十九川右岸堤防に接している。１区調査区は南側に接する中位段丘部分に取り付けるための盛土工法となるため、撥状に大きく広がった形状となっている。

今回の調査地点の南東側には、安中市教育委員会等が平成13(2001)年に商業施設建設に先立って発掘調査をした植松・地尻遺跡がある。発掘調査では７世紀後半代の区画施設とそれに伴う掘立柱建物群、古墳時代後期の竪穴建物等が確認され、出土遺物に「評」と刻書された須恵器杯蓋が出土しており、古代評家の存在が想定されている（安中市埋蔵文化財発掘調査団編2005『植松・地尻遺跡―店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』）。

第２節　歴史的環境

第１項　旧石器時代

群馬県安中市の碓氷川流域においては、現在７箇所の旧石器時代の遺跡が確認されている。この中でも板鼻の古城遺跡(15)及び中野谷の中野谷遺跡群からは群馬編年第１期に相当する旧石器が出土しているが、碓氷川流域で旧石器が出土したいずれの遺跡も、米山遺跡からはそれぞれ５km以上離れている。

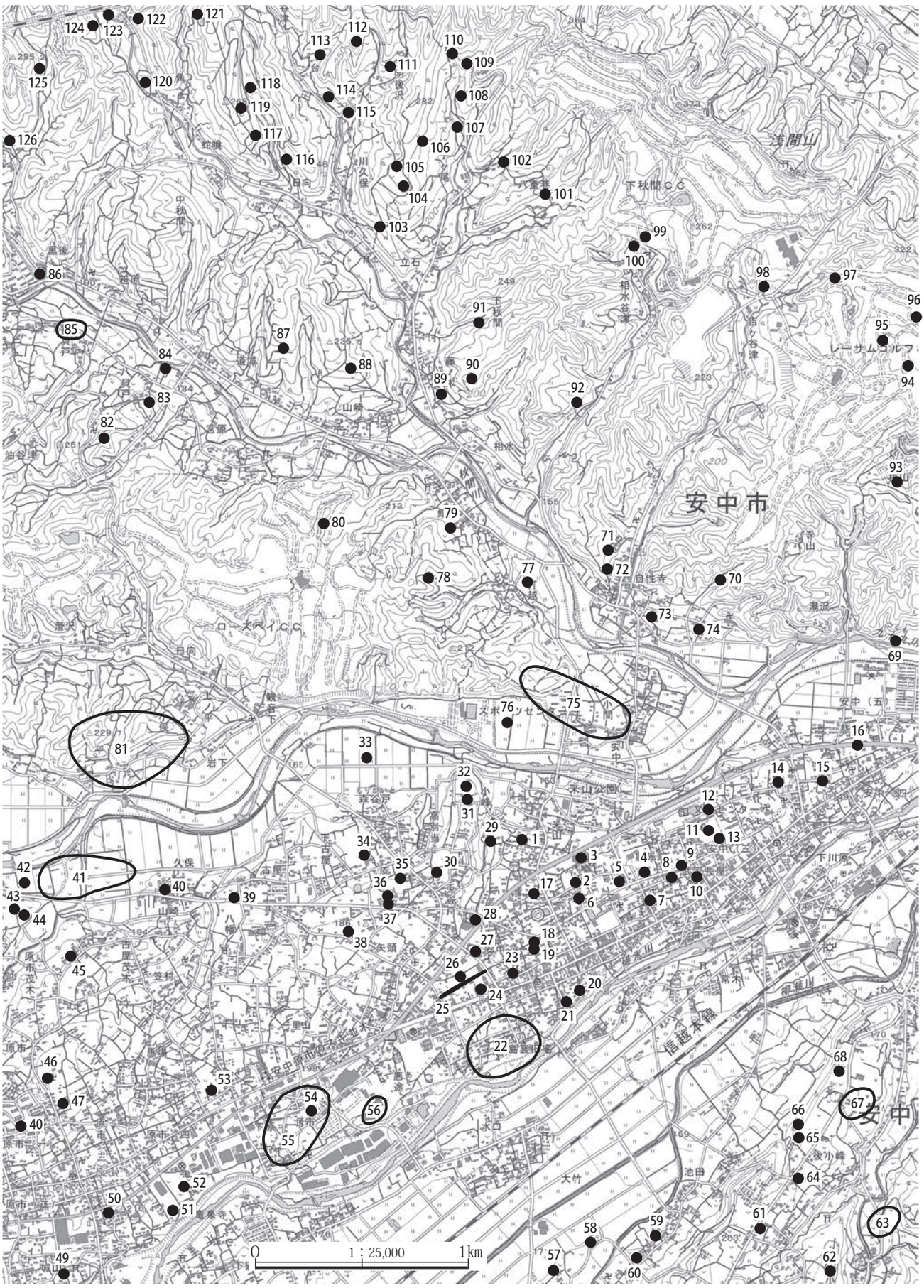
米山遺跡の周辺からは、今のところ旧石器時代の確実な遺跡は存在していないのが現状である。

第２項　縄文時代

米山遺跡の周辺地域においては、旧石器時代の遺跡と同様、縄文時代の遺跡もあまり多くない。

碓氷川左岸の古城遺跡、米山遺跡の西約0.6kmに位置する小峰遺跡(31)、南東に隣接して位置する植松遺跡（３）、南東約2.5kmの柳瀬川右岸の横野台地に位置する野殿北屋敷遺跡・西殿遺跡・堀谷戸遺跡、南東約2.0kmに位置する三本松遺跡(61)も縄文時代の遺物散布地として安中市遺跡台帳や群馬県統合型地理情報システム「マッピングぐんま」遺跡地図に掲載されている。

南東約0.5kmに位置する池尻（４）からは中期の土坑が検出され、遺物が出土している。また、南東に隣接して



第５図　周辺遺跡(国土地理院１/25,000「三ノ倉」、「下室田」、「松井田」、「富岡」 図幅を編集・加工)

第２表　周辺遺跡

	遺跡名	時代								種別	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世		
1	米山遺跡		○	○	○	○	○	○	○	集落	本報告書
2	地尻古墳				○					古墳	27・29・31
3	植松・地尻遺跡		○	○	○	○	○			集落・官衙	11・28・29
4	地尻遺跡		○				○	○	○	集落・城館	３・27・29
5	地尻Ⅱ遺跡							○		城館	３・29
6	地尻Ⅲ遺跡					○	○			集落	13・29
7	稲荷神社古墳(安中４古墳)				○					古墳	27・29・31
8	西町・谷津遺跡							○	○	城館	２・29
9	西町遺跡							○	○	城館	27・29
10	西町Ⅱ遺跡							○	○	城館	27・29
11	安中城(扇城)							○	○	城館	27・29・30
12	安中城Ⅰ・Ⅱ遺跡					○	○	○	○	集落・城館	17・29
13	安中Ⅲ遺跡							○	○	城館	21・29
14	安中諏訪神社古墳				○					古墳	27・29・31
15	城下古墳				○					古墳	27・29・31
16	安中内出							○		城館	27・29・30
17	安中７古墳				○					古墳	27・29・31
18	茶屋町古墳				○					古墳	27・29・31
19	町北古墳				○					古墳	27・29・31
20	七曲古墳				○					古墳	27・29・31
21	七曲東古墳				○					古墳	27・29・31
22	給人畑古墳群(安中６号墳他８基)・並木西古墳２基・無名古墳１基				○					古墳	27・29・31
23	愛宕神社古墳(安中５古墳)				○					古墳	27・29・31
24	並木遺跡					○	○		○	集落	16・29
25	上野尻遺跡							○		東山道駅路	27・29
26	土井遺跡		○		○	○	○			集落	14・29
27	矢頭古墳									古墳	27・29・31
28	覚泉塚				○					古墳	27・29・31
29	無名古墳				○					古墳	27・29・31
30	高別当瓦塔出土地						○			祭祀・寺院	27・29
31	小峰遺跡					○	○	○	○	集落・城館	18・29
32	小峰古墳				○					古墳	27・29・31
33	荒浜遺跡						○			生産(水田)	５・29
34	森八戸北古墳				○					古墳	27・29・31
35	森八戸南古墳				○					古墳	27・29・31
36	伊勢森東古墳				○					古墳	27・29・31
37	伊勢森西古墳				○					古墳	27・29・31
38	南伊勢原古墳				○					古墳	27・29・31
39	新屋敷古墳				○					古墳	27・29・31
40	久保古墳				○					古墳	27・29・31
41	高橋遺跡(高橋古墳他８基)			○	○	○				集落・古墳	10・15・27・28・29・31
42	広田遺跡						○			生産(水田)	６
43	無名古墳				○					古墳	27・29・31
44	無名古墳				○					古墳	27・29・31
45	茂木東							○		城館	27・29・30
46	榎下城(鶴巻城)							○		城館	27・29・30
47	無名古墳				○					古墳	27・29
48	清水遺跡		○		○	○	○	○		集落・生産(中世陶器窯)	12・23・24・27・29
49	原市城(簗瀬城・稲荷城)							○		城館	27・29・30
50	大砂山古墳(原市14号墳)				○					古墳	27・29・31
51	南地尻古墳				○					古墳	27・29・31
52	荒屋敷古墳				○					古墳	27・29・31
53	原市東館							○		城館	27・29・30
54	下原遺跡		○			○				集落	29
55	悪途東古墳群(原市15他４基)・無名古墳３基				○					古墳	１・19・27・29・31
56	原市19号墳他２基				○					古墳	27・29・31
57	磯部町10号墳				○					古墳	27・29・31
58	狐塚(磯部11号墳)				○					古墳	27・29・31
59	経塚古墳(磯部12号墳)				○					古墳	27・29・31
60	木下遺跡		○		○	○				集落	29
61	三本松遺跡		○	○						集落	27・29
62	山峰遺跡		○	○						集落	７・29

	遺跡名	時代								種別	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世		
63	無名古墳４基				○					古墳	27・29・31
64	三本松古墳(東横野18号墳)				○					古墳	27・29・31
65	三本松西古墳				○					古墳	27・29・31
66	三本松東古墳				○					古墳	27・29・31
67	名原西古墳他２基				○					古墳	27・29・31
68	下原古墳				○					古墳	27・29・31
69	安中市0342					○	○			生産(須恵器窯)	29
70	安中市0269					○	○			生産(須恵器窯)	29
71	吉ヶ谷津北古墳				○					古墳	27・29・31
72	吉ヶ谷津南古墳				○					古墳	27・29・31
73	東平西古墳				○					古墳	27・29・31
74	秋間13号墳				○					古墳	27・29・31
75	小間古墳群(安中８号墳他４基)・めおと塚(安中14号墳)他２基				○					古墳	18・27・29・31
76	大島田遺跡								○	生産(水田)	４・26・29
77	沼田遺跡								○	生産(水田)	９・26・29
78	無名古墳				○					古墳	27・29・31
79	秋間館							○		城館	27・29・30
80	蔵人城							○		城館	20・27・29・30
81	諏訪山古墳群(安中15号墳他４基)・後閑２号墳他７基				○					古墳	27・29・31
82	八貝戸城							○		城館	27・29・30
83	竹下遺跡		○	○	○	○	○	○	○	集落	29
84	秋間11号墳				○					古墳	27・29・31
85	宮貝戸古墳群(宮貝戸北古墳他３基)				○					古墳	27・29・31
86	秋間16号墳				○					古墳	27・29・31
87	礼応寺城(二城)							○		城館	27・29・30
88	山崎東古墳				○					古墳	27・29・31
89	刈又古墳				○					古墳	27・29・31
90	辻城(雁又城)							○		城館	27・29・30
91	安中市0258					○				生産(須恵器窯)	29
92	相水谷津横穴墓				○					古墳	27・29・31
93	桃山瓦塔出土地						○			祭祀・寺院	27
94	安中市0347				○	○				生産(須恵器窯)	29
95	安中市0348				○	○				生産(須恵器窯)	29
96	安中市0349					○	○			生産(須恵器窯)	29
97	二反田遺跡						○			生産(瓦・須恵器窯)	８・27・29
98	無名古墳				○					古墳	27・29・31
99	無名古墳				○					古墳	27・29・31
100	安中市0264									生産(瓦・須恵器窯)	29
101	八重巻遺跡				○	○	○			生産(瓦・須恵器窯)	27・29
102	雉子ヶ尾遺跡							○		生産(須恵器窯)	27
103	安中市0220					○				生産(須恵器窯)	29
104	万福原古墳(秋間12号墳)				○					古墳	27・29・31
105	無名古墳				○					古墳	27・29・31
106	無名古墳				○					古墳	27・29・31
107	戸谷南古墳				○					古墳	27・29・31
108	無名古墳				○					古墳	27・29・31
109	戸谷遺跡						○			生産(製鉄)	22・27・29
110	無名古墳				○					古墳	27・29・31
111	安中市0240					○	○			生産(瓦・須恵器窯)	29
112	茗荷沢の砦							○		城館	27・29・30
113	安中市0241		○			○	○			生産(須恵器窯)	29
114	安中市0235					○	○			生産(須恵器窯)	29
115	覚院坊古墳				○					古墳	27・29・31
116	安中市0232					○	○			生産(須恵器窯)	29
117	安中市0234		○		○	○	○			生産(須恵器窯)	29
118	安中市0231					○	○			生産(須恵器窯)	29
119	原の塚穴(秋間14号墳)				○					古墳	27・29・31
120	戸上古墳				○					古墳	27・29・31
121	安中市0186				○	○	○			生産(須恵器窯)	29
122	安中市0183					○				生産(須恵器窯)	29
123	中島遺跡						○			生産(水田)	25・29
124	中秋間中島古墳				○					古墳	27・29・31
125	崇徳山古墳(秋間７号墳)				○					古墳	27・29・31
126	刈稲遺跡					○				生産(瓦・須恵器窯)	27・29

引用・参考文献
1　安中市教育委員会1988『悪途東遺跡―市道原584号線道路新設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
2　安中市教育委員会1990『西町・谷津遺跡―都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―』
3　安中市教育委員会1991『地尻遺跡・地尻Ⅱ遺跡―都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
4　安中市教育委員会1993『九十九川下流遺跡群１　平成３年度団体営圃場整備事業九十九川下流地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
5　安中市教育委員会1994『九十九川下流遺跡群２　平成４年度団体営圃場整備事業九十九川下流地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
6　安中市教育委員会1994『九十九川沿岸遺跡群３　平成３・４年度県営圃場整備事業九十九川沿岸地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
7　安中市教育委員会1998『日向後原遺跡・野毛良遺跡・山峰遺跡　東京電力送電用鉄塔建設工事に伴う発掘調査報告書』
8　安中市教育委員会1998『二反田遺跡　株式会社群馬プレスカントリークラブゴルフ場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
9　安中市教育委員会2000『秋間川下流遺跡群　担い手育成基盤整備事業秋間川下流地区ほ場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
10　安中市教育委員会2004『古谷地区遺跡群発掘調査報告書　団体営担い手育成基盤事業古谷地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
11　安中市教育委員会2005『植松・地尻遺跡―店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
12　安中市教育委員会2007『清水Ⅱ遺跡・清水Ⅴ遺跡・清水Ⅵ遺跡　市営原市住宅団地建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
13　安中市教育委員会2009『地尻Ⅲ遺跡―安中住宅団地分譲に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』
14　安中市教育委員会2009『土井遺跡―土地分譲に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
15　安中市教育委員会2009『高橋Ⅳ遺跡(古谷地区遺跡群)発掘調査報告書　老人スポーツ広場用地取得事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
16　安中市教育委員会2010『並木遺跡―安中市消防署庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
17　安中市教育委員会2011『安中城Ⅰ・Ⅱ～安中市文化センター駐車場建設事業・安中市立小学校校舎建て替え事業に伴う埋蔵文化財調査報告書～』
18　安中市教育委員会2012『市内遺跡１―八幡平遺跡・向山遺跡・小峰遺跡・安中17号墳―』
19　安中市教育委員会2012『悪途東Ⅱ遺跡―分譲住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
20　安中市教育委員会2018『蔵人城跡　大規模太陽光発電所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
21　安中市教育委員会2020『安中城Ⅲ―安中地区学童クラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
22　群馬県教育委員会1982『戸谷遺跡―平安時代製鉄遺構の調査―』
23　群馬県教育委員会1996『清水Ⅰ遺跡　原市第一県営住宅建設に伴う発掘調査報告書』
24　群馬県教育委員会1997『清水Ⅲ遺跡・清水Ⅳ遺跡　原市第一県営住宅建設に伴う発掘調査報告書』
25　財団法人群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団1997『東上秋間遺跡群　北陸新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報書』
26　公益財団法人群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団2019『大島田Ⅱ遺跡・沼田遺跡　西毛広域幹線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
27　安中市2001『安中市史　第四巻　原始古代中世資料編』
28　安中市2003『安中市史　第二巻　通史編』
29　安中市教育委員会2011『安中市遺跡分布地図―市内遺跡詳細分布調査報告書』
30　群馬県教育委員会1989『群馬県の中世城館跡』
31　群馬県教育委員会2017『群馬県古墳総覧』
32　川原嘉久治1992「西上野における古瓦散布地の様相」『研究紀要』10号財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

位置する植松・池尻遺跡(３)からは草創期の有舌尖頭器と中期加曾利Ｅ３式の土器片が出土し、縄文時代中期の土坑１基が検出されている。東南東約0.8㎞に位置する西町・谷津遺跡(８)からは、遺構は検出されてはいないものの、前期から後期の土器が出土している。東約0.9㎞に位置する安中城Ⅰ・Ⅱ遺跡(12)からも縄文時代前期中葉有尾式、前期後葉諸磯ｂ式、中期後葉加曾利Ｅ式を含む前期中葉～中期後葉の土器・石器片が出土したが、遺構の検出には至っていない。

縄文時代の竪穴建物は米山遺跡周辺地域ではまだ１棟も発見されていない。周辺地域において確認できた縄文時代の遺構や遺物は今のところまだあまり多くはないが、前期から後期にかけての小規模な集落が営まれていた可能性は考えられる。

第３項　弥生時代

米山遺跡周辺では、前出の小峰遺跡、植松遺跡や古城遺跡、池尻遺跡(４)・池尻Ⅱ遺跡(５)などが弥生時代の遺物散布地として安中市遺跡台帳や群馬県統合型地理情報システム「マッピングぐんま」遺跡地図に掲載されている。

前出の植松・池尻遺跡からは中期後半の竪穴建物１棟が検出され、栗林式の甕・壺・高坏などが出土した。また、遺構外からも栗林式の土器片十数点と磨製石鏃が出土している。また、前出の三本松遺跡では、発掘調査は行われていないものの中期前半の壺が１点出土しており、同時期の土器片の散布が見られる。

東約2.7㎞の中宿在家遺跡からは遺物包含層中から後期の壺１点と甕片４点、石器片１点が出土しているが、弥生時代の遺構自体は検出されていない。

遺跡周辺における弥生時代の遺構・遺物は、現在のところ非常に僅少であると言える。

第４項　古墳時代

古墳時代の集落や古墳は、現在のところ碓氷川左岸の安中台地からはあまり多くは発見されていない。

前出の古城遺跡や三本松遺跡は古墳時代の遺物散布地として安中市遺跡台帳や群馬県統合型地理情報システム

「マッピング群馬」遺跡地図に掲載されているが、発掘調査によって遺構が検出されているわけではない。

米山遺跡の南東約0.2㎞に位置する前出の植松・池尻遺跡からは古墳時代前期～後期の竪穴建物が７棟と終末期～奈良時代初頭頃の竪穴建物１棟が検出されている。また、南東約2.8～3.0㎞に位置する前出の野殿北屋敷遺跡や西殿遺跡、堀谷戸遺跡からも古墳時代後期集落が検出されている。とくに碓氷川南岸の東部に展開する岩野谷丘陵に立地する堀谷戸遺跡からは後期中葉から後半にかけての竪穴建物37棟と竪穴状遺構、井戸などの遺構が検出された。野殿地域における開発の様相を考える上で重要な遺跡である。

米山遺跡周辺地域における代表的な古墳としては、北東約0.7㎞に位置する、めおと塚古墳(安中14号墳)(75)がある。秋間川と九十九川との合流地点付近に位置する小間集落には集落の分布と重なるように古墳時代後～終末期の古墳が７基ほど点在している。めおと塚古墳は、この小間集落の背後西側に当たる段丘上に立地する径約20m・高さ約２mの終末期の円墳である。この、めおと塚古墳が立地する段丘は、秋間川と九十九川とに挟まれた段丘である。

なお、1963(昭和38)年に『安中市誌』の編纂事業に伴って、群馬大学教育学部尾崎研究室によって横穴式石室部分のみが発掘調査されたが、墳丘部の測量や発掘調査は行われていない。

石室は羨道・前室・玄室からなり、ほぼ南に向かって開口している。石室の全長は8.74m、羨道の長さは3.44m、羨道の前幅は1.03m、前室の長さは2.14m、前室の前幅は1.02m、玄室の長さは2.26m、玄室の前幅は1.96m、玄室の奥幅は2.20m、玄室の高さは2.00～2.10mの規模を呈する。羨道の入口には、側壁最前列の左右両脇に高さ約1.4mの門柱状の石が据えられ、羨門部を形成している。截石切組積石室で副室構成であり、前橋市総社町に所在する総社古墳群の宝塔山古墳の構造との類似・関連が想定される。

この地域最大級の古墳は米山遺跡の西南西3.0㎞に位置する前方後円墳の簗瀬二子塚古墳である。この古墳は６世紀初頭の築造で関東地方でも最も古い段階の横穴石室をもっている。規模は墳丘長約80m、高さ８mとこの時期の碓氷川流域では最大級である。

第５項　古代

律令制下において、群馬県域はほぼ上野国の領域に当たっており、国内には「碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初13郡、和銅４(711)年に多胡郡設置で14郡)。

米山遺跡が所在する安中市は、律令制下には碓氷郡の郡域内に入る。1878(明治11)年に行政区画として発足した近代碓氷郡の領域は、近世の碓氷郡をほぼ踏襲したものと考えられる。近代碓氷郡では、現在の高崎市域の碓氷川以北と烏川以西及び鼻高町が含まれる一方、現在の安中市松井田町北野牧及び西野牧は郡域には入っていなかった。古代碓氷郡が、近世・近代の碓氷郡と全く同一の範囲であるとは考えにくいものの、詳細なところは不明である。

『和名類聚抄』によれば、碓氷郡には「飽馬、石馬、坂本、磯部、石井、野後」の６郷が置かれていた。「長元３(1030)年上野国不与解由状案」(いわゆる「上野国交替実録帳」)の諸郡官舎項には、郡名を欠くが郡家の館に関する記述が遺るものの、郡家所在地についての記述は欠いている。

碓氷郡内の６郷については、いずれも現在の安中市内にそれらの郷名と通じる地名が遺っている。飽馬(あきま)郷は、現地名から現在の安中市下秋間・中秋間・上秋間など秋間地区一帯と見て間違いないだろう。石馬(こくま)郷は、現地名から米山遺跡からも程近い九十九川と秋間川の合流点付近の安中市小間地区一帯である可能性が指摘されているが、不明な点も少なくない。坂本(さかもと)郷は、碓氷峠に近い東山道駅路の要衝である坂本駅家とも関連する地名であり、現地名や地勢から見ても現在の安中市松井田町坂本周辺と考えてほぼ間違いない。磯部(いそべ)郷も、現地名から見て安中市磯部地区を中心とする周辺一帯と見てまず間違いない。石井(いわい)郷は、現地名から安中市東部の岩井地区から板鼻地区にかけての地域と考えられている。野後(のじり)郷は、東山道駅路の野後駅家とも共通する地名であり、東山道駅路に面した位置と考えられる。すなわち現在の安中市中心市街地である安中地区の九十九川右岸地域から野尻の地名がある上野尻・下野尻地区一帯にかけての地域と考えられる。

上記の古代碓氷郡内各郷の所在地の比定が正しいとすれば、米山遺跡は碓氷郡野後郷の範囲内であった可能性が高いものと考えられる。

安中市域における律令制下の歴史的環境として特筆すべきは、都と陸奥国府との間の東日本内陸部を結ぶ古代国家の一級幹線道路である東山道駅路が、現在の安中市中心市街地である、碓氷川によって形成された中位段丘面の西側縁辺付近を東西に通っており、郡内には２箇所の交通支援官衙である駅家と、平安時代の昌泰２(898)年に碓氷峠に設けられた碓氷関が存在していたことである。駅家は固有の経済基盤と共に法定業務に伴う地域住民の徴発権も有しており、米山遺跡の所在する碓氷郡域における奈良・平安時代の動向を考える上で、東山道駅路とそれに伴う2箇所の駅家、碓氷関の存在が地域に与えた影響は大きかったものと考えられる。

碓氷郡野後郷の故地の一部と考えられ、野後駅家の存在も想定される地名を有する上野尻と高別当の大字境界に沿って旧中山道と斜めに交差する直線的な地条帯痕跡を古代東山道駅路の痕跡と考える説があり、安中地内においてこの地条帯に対して直角に３箇所のトレンチを入れ、駅路の具体的な遺構の検出を試みたが、古代の駅路に関わる遺構を検出することは出来なかった。

米山遺跡周辺において、安中市遺跡台帳や群馬県統合型地理情報システム「マッピングぐんま」の遺跡地図に掲載されている奈良・平安時代の遺跡や遺物散布地は、それ以前の時代のものと比べると急増する。しかしながら具体的に遺構・遺物の様相がはっきりしている遺跡は必ずしも多くはない。

米山遺跡の北から北西にかけて所在する秋間丘陵には東西約７㎞・南北約３㎞の範囲に約50の支群が分布する秋間古窯跡群がある。群馬県内屈指の古代大窯跡群で、７世紀初頭から９世紀末葉までの約300年に亘って須恵器や瓦窯が操業され、量産されるようになったとされている。なお、最近の発掘調査の成果では規模は縮小するものの操業が継続していたとみられる。

発掘調査は八重巻遺跡(101)、二反田遺跡(97)、雉子ケ尾遺跡(102)、戸谷遺跡(109)、刈稲遺跡(126)、東上秋間神水遺跡等限られている。

八重巻遺跡は７世紀後半に創建された放光寺と呼称されていた山王廃寺に瓦を供給していた瓦窯でもある。八重巻古窯跡群周辺では戦前より須恵器や瓦の散布が知られており、1957年には群馬大学によって窯１基が発掘調査され、須恵器や瓦などが多数出土している。1983年の市道建設では窯１基が壊され、大量の瓦が採取されている。そして周囲からは７世紀代の須恵器が採取されていることから操業当時の瓦陶兼業窯とみられる。さらに西側の谷では10基近い窯跡が発見され、八重巻遺跡の支群とみられる。そこでも須恵器や瓦が採取されている。採取された瓦には山王廃寺に葺かれた初期の軒丸瓦などが含まれていた。須恵器では底部が回転ヘラ起こしによる杯やカエリをもつ杯蓋から回転糸切りによる杯・椀などがみられる他、上野型短頸壺蓋、高杯、甕などをみることができる。こうしたことからこの支群でも７世紀後半に始まり、９世紀後半まで操業が行われていたことがわかっている。

八重巻遺跡後の本格的な発掘調査は少なく二反田遺跡が唯一である。二反田遺跡は秋間古窯跡群の中でも東側に位置する支群で、発掘調査では６基の窯が調査されている。操業期間は出土した須恵器から８世紀前半代から９世紀中葉と長期に及んでいることがわかっている。

雉子ケ尾遺跡では市道建設時に窯跡が露出し、記録調査が行われている。それによると複数の窯跡の存在を窺うことが可能で、操業時期は７世紀後半から８世紀初頭とみられる。戸部遺跡では２基の製鉄炉と炭窯が検出されており、羽口や鉄滓の他に８世紀後半から９世紀初頭の土師器や須恵器も出土していることから須恵器生産との関連も考えられている。

北陸新幹線に伴う発掘調査でも中秋間甲木ノ巣谷津遺跡や東上秋間笹田遺跡で炭窯、東上秋間神水遺跡では窯跡が検出されている。東上秋間神水遺跡の窯跡では直接共伴する須恵器の出土はみられていない。しかし、上位にAs-Bの堆積が確認され、周囲からは高台杯やこの杯に伴うとみられるカエリをもつ杯蓋、底部が回転ヘラ起こしによる杯などと底部回転糸切りによる杯などの須恵器が散乱した状態で出土していることから８世紀から９世紀代に操業された窯跡とみられる。

秋間古窯跡群の操業には、東海地方の生産地の影響を強く受けており、特に岐阜県岐阜市から各務原市にわたって広がる美濃須衛古窯跡群の影響を強く受けているとみられる。その代表的なものに高台が貼付された杯の

底部が高台より突出する形態をあげることができる。しかし、東海地方の影響を受けている中でも杯蓋の摘を環状に作成、高台を貼付した杯では高台を底部の内側に貼付するのではなく、底部周縁に貼付するなど地域独特の技法や形態が用いられている。

生産された須恵器の供給先は地元碓氷郡だけでなく片岡郡、群馬郡をはじめ吾妻郡など広域に行われていた。また、その技術は古代上野国内では、８世紀初頭に操業を始める月夜野古窯跡群に影響を与えている。そして秋間古窯跡群は古代上野国内の窯業生産だけでなく、下野国域など広域の窯業生産に影響を与えたことが知られている。

奈良・平安時代の集落は、米山遺跡の南東約0.6㎞に位置する池尻遺跡、池尻Ⅱ遺跡、南東約0.2㎞に位置する植松・池尻遺跡、南東約2.8～3.0㎞に位置する野殿北屋敷遺跡や西殿遺跡、堀谷戸遺跡などから検出されている。

植松・池尻遺跡からは規則的に配置された奈良時代の掘立柱建物７棟とそれを閉遮する２条の柵が検出された。掘立柱建物は廂付きのもの２棟、総柱２棟、側柱３棟で、総柱建物は桁行２間×梁間３間のものと３間四方のものとやや大型である。また、桁行５間以上×梁間３間の廂付き大型側柱建物が検出されている。また、「評」と刻書された７世紀末～８世紀初頭の須恵器や帯金具、畿内系模倣土師器などが出土しており、これらの建物群が官衙的性格の施設の一画を構成していた可能性が考えられている。また、平安時代９～10世紀ごろとみられる竪穴建物が４棟検出されている。

植松・池尻遺跡の東約0.3㎞の位置に近接する池尻遺跡、池尻Ⅱ遺跡からも７世紀末～８世紀初頭の竪穴建物を含む遺構が検出されており、米山遺跡の南東約0.8㎞に位置する安中城Ⅰ・Ⅱ遺跡からも奈良時代を中心とする竪穴建物13棟が検出された。南西約0.7㎞に近接する植松・池尻遺跡から検出された官衙的建物群と関連する集落と考えられる。

米山遺跡の南西約0.4㎞に位置する高別当瓦塔出土地(30)は、九十九川右岸の北向きの緩斜面から昭和21(1946)年頃から同45(1970)年頃にかけて断続的に瓦塔片が採集された場所である。採集された瓦塔片は、屋蓋部片が計12点、層塔軸部片が計５点で、８世紀後半～９世紀前半頃のものと考えられている。出土地は瓦塔生産地もしくはそれに極めて近い場所と考えられている。

米山遺跡の北東約2.4㎞に位置する桃山瓦塔出土地(93)からも瓦塔片が出土している。安中市街地の北東部に連なる湯沢山と呼ばれる丘陵地帯の北向きの斜面から、昭和29(1954)年に同地の開墾作業中に瓦塔の屋蓋部片が１点採集された。高別当出土の瓦塔片よりもかなり新しい時期のものと考えられている。

米山遺跡の東約2.7㎞に位置する中宿在家遺跡とその北東側に隣接する中宿在家Ⅱ遺跡からは、天仁元(1108)年に降下した浅間山火山灰As-B軽石層の下から古代の水田の遺構が検出された。上野国内では浅間山に近い地域に当たる碓氷郡内では、天仁元年の浅間山噴火に伴う降灰被害は殊更に甚大であり、郡内の耕作地は壊滅的な打撃を受けたものと考えられている。

なお、今回の周辺遺跡図からは外れるが、富岡市に接する位置に存在する中野谷地区遺跡群では東西に長い碓氷川の上位河岸段丘を利用して牧が経営されていたことがわかっている。牧は段丘の縁に大溝を設けて区画し、その面積は300㌶以上と想定されている。区画内部では下塚田遺跡から大規模な鍛冶工房が発見されている。この他、性格は明確ではないが、天神原遺跡や三本木Ⅱ遺跡からも工房と見られる遺構が見つかっている。この牧については７世紀後半から９世紀代にかけて存続したと想定されている。

第６項　中世

鎌倉初期のものと見られる「中院家領目録案」(久我家文書)に見える「上野国石井庄」の故地を安中市岩井地区に求める説があり、また永禄４(1561)年頃のものとみられる「上杉氏所領目録」(彦部文書)にみえる「宇須井庄之内飽馬郷岩戸村・高別当村・池尻村」という記述から、「石井庄」は「宇須井(碓氷)庄」の誤記と見る説もある。

少なくとも鎌倉時代初期には、東毛地区の新田荘のように、郡名を冠する一郡規模の巨大な荘園が、すでにこの地には形成されていたことになる。「宇須井(碓氷)庄」がいつ頃にどのような経緯で成立したかを示すような史料は皆無であるので、来歴は不明であるが、碓氷郡の郡名と共通する荘園名であり、名高い新田荘と同様、平安時代後期頃に郡の一部ないし大部分が荘園化されていた

可能性も考えられる。なお、中院家は、鎌倉時代から南北朝時代にかけて上野国の知行国主であった。

また、安中市域には現高崎市八幡・豊岡・里見から現安中市板鼻にかけての地域に八幡荘が所在していた。鎌倉期には有力御家人の安達氏が、南北朝期には新田氏が、さらに室町期には関東管領上杉氏が支配しており、守護所が置かれている。中世、現在の安中市域は、荘園が卓越した場所であった。

鎌倉時代初期の元久２(1205)年正月三十日付の関東御教書写(榊葉集所収文書)には、有力御家人安達景盛の肩書として「上野国板鼻別宮預所」と見え、板鼻八幡宮の管理に当たっていたことがわかる。

『吾妻鏡』によれば、上野国碓氷郡に関わる御家人として八幡荘里見の地名を名字とする新田氏支族の里見氏があり、また、碓氷郡磯部郷に入部した佐々木盛綱(『吾妻鑑』建仁元年４月３日・５日、５月14日条)、飽馬郷の飽馬齋藤氏らの名が見えている。

佐々木盛綱は鎌倉幕府の草創に貢献した有力御家人であり、磯部郷は所領の一つであったと考えられている。伝説上、磯部城の築城者に擬せられているものの、直接的な関連は考えにくい。一方、飽馬齋藤氏は、武蔵国太田荘を基盤とした齋藤実盛の一族と見られ、鎌倉時代初期に飽馬郷に入部し、元久２(1205)年６月に起こった畠山重忠の乱では上野守護安達景盛に従っている。その後も安達氏の被管であったが、弘安８(1285)年に起こった霜月騒動で、安達氏本宗家と共に滅亡し、以後の動向は不明である。

鎌倉幕府滅亡後の建武の新政では後醍醐天皇方についた新田義貞が上野国司・守護に任じられるが、まもなく足利尊氏が持明院統の天皇を擁して幕府を樹立すると母方の外戚に当たる上杉氏の当主を関東管領・上野守護職に任じ、以後、上杉氏が代々世襲した。当時の文書には、現安中市周辺地域に、安中氏、飽間氏(飽馬齋藤氏との関係は不明)、依田氏などの在地武士たちの名が見える。

室町将軍と鎌倉公方との本格的な覇権争いに発展した享徳の乱は、享徳３(1455)年12月から文明14(1483)年11月まで30年近く続いた。関東管領・上野守護職上杉顕定は、関東での戦乱が激化する中、鎌倉から上野国守護所(板鼻)、さらには平井城へと遷るが、天文20(1551)年、北条氏との合戦に敗れ、永禄元(1558)年、越後の長尾景虎を頼って越後国に逃亡、西上野は北条氏の支配下に入り、北条氏は関東八箇国を制覇した(『小田原旧記』)。

越後の長尾景虎は、永禄３(1560)年、上野国に侵攻、国内の諸城を次々と落として小田原城下まで迫ったが、本拠地越後に戻ってしまうと、甲斐の武田晴信が西上野最大の在地勢力である長野氏を屈服させ、永禄９(1566)年９月に箕輪城を、翌10(1567)年４月には、旧上野国衙蒼海城を落して利根川以西の上野国を武田領とした。

武田晴信亡き後の天正10(1582)年、織田信長は武田氏を滅ぼし、信濃・甲斐、西上野などの武田旧領は信長の支配下に入った。信長は重臣の滝川一益を関東管領に任じて厩橋城に配置、関東の武田旧領の支配を任せると共に北条氏への備えとし、松井田城には一益の臣である津田小平次が入城したが、同年、信長が本能寺の変で横死すると、滝川一益は侵攻してきた北条氏との合戦に敗れ、関東一円は再び北条氏の領するところとなった。北条氏の西上野支配の拠点は箕輪城であったが、信濃進出のために松井田城が重要視され、北条氏家臣である大道寺政繁が入城した。松井田城はこの時期に大規模な改修を受け大城郭に変貌している。天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原攻めに際して、松井田城は豊臣方の前田利家・上杉景勝軍によって攻められ、落城した。

安中市内には中～近世城郭・城館が44箇所確認されている。市域の地形は北部に山地、南側に碓氷川の河岸段丘、中央部は碓氷川と九十九川に挟まれた東西に細長い台地が続き、南北が両河川によって分断されるという特徴がある。また、歴史的背景として、中部山岳地帯から関東平野への出入り口である碓氷峠を間近に控え、東西に古代東山道駅路、中世鎌倉街道、近世には中山道といった幹線交通路が通る交通の要衝として果たす役割も大きかった。このような点は中世城館の分布にも反映されている。碓氷川と九十九川とに挟まれた台地の南北両側に築かれた城郭・城館は、西の碓氷峠側からのルートを押さえることを目的として築造されたものと考えられる。

これらの城郭・城館は、築城時期や築城者・在城者が具体的に明確ではないものがほとんどで、そのほとんどが16世紀後半、戦国時代における甲斐武田氏、越後上杉氏、相模北条氏らによる西上野における覇権闘争が激しく行われた時期に集中すると考えられ、存続時期も短かったようで、武田氏滅亡後には急速に衰退し、ほとん

どが廃城になっている。

米山遺跡の近隣の城郭・城館遺跡としては、安中城Ⅰ・Ⅱ遺跡を含む安中城があげられる。碓氷川と九十九川とに挟まれた中位段丘上に立地する広大な城館であるが、安中市街地中心部とほぼ重なった位置にあって後世に甚だしく撹乱されていることと、近世安中城築城時に大規模な造成を受けているので、中世の遺構の残存状態は極めて良くない。安中城は、戦国時代の永禄２(1559)年に安中忠政が築城したと言われている。安中氏は武田晴信の西上野支配により武田氏に臣従したが、武田氏と共に滅亡し、中世安中城は廃城となった。

安中内出砦(10)は、中世安中城の出城の一つと考えられている。

中宿在家遺跡からは、東西45m以上・南北40m以上の範囲内に中世の掘立柱建物８棟、溝２条、納屋と見られる方形竪穴状遺構・井戸各１基、多数の土坑・ピット等の遺構が検出された。建物群はいずれも軸を同じくして整然と配置されており、廂が付いた大型の建物も検出された。遺構・遺物の状況から12世紀後半～14世紀前半頃の中世居館の一部と考えられる。なお、調査範囲内では居館内を区画する溝や防御のための堀、土塁等はまったく検出されていない。

中宿在家遺跡の北東側に隣接する中宿在家Ⅱ遺跡からも、隣接する中宿在家遺跡と同時期の中世居館が検出されている。掘立柱建物８棟、納屋と見られる方形竪穴状遺構・井戸各１基、柵１条、土坑・ピット多数が検出された。こちらでも廂が付いた大型建物や仏堂と見られる小型建物などが検出され、隣接する中宿在家遺跡よりはやや新しい13～15世紀の中世居館の一部と見られている。隣接する中宿在家遺跡と同様、調査範囲内では居館内を区画する溝や防御のための堀、土塁等はまったく検出されていない。

中宿在家遺跡及び中宿在家Ⅱ遺跡から検出された遺構・遺物の様相からは、軍事的な性格よりも交通の要衝における政治・経済的な拠点としての性格が看取出来るとの評価がなされている。

板鼻城は、碓氷川と九十九川との合流点の約１㎞下流の左岸、標高約168mの台地上に立地する東西約400m・南北約350mの広大な範囲に及ぶ「蝶郭式」あるいは「蝶旋壕式」と称される城郭で、築城時期や築城主体について示すような確実な史料はないが、武田晴信が永禄９(1565)年に西上野に侵攻した際に築城を命じた武田方の城郭とみる説が有力である。天正18(1590)年、上杉景勝に攻略され廃城となった。板鼻城が所在する板鼻地区は、古代東山道駅路、中世あづま道・鎌倉街道、近世中山道が通る交通の要衝であり、戦略的に重要な地点でもあった。この地に城郭・城館が築かれるのは当然の帰結である。

市道建設や宅地造成に先立ってごく一部が発掘調査され、上幅約８m・下幅約4.5m・深さ約３mの本丸を囲む内堀や、上幅約９m・下幅約１～２m、深さ約３～3.5mの外堀、堀に架かる橋の橋脚、戸口などの遺構が検出され、13～16世紀代の土器・陶器類が出土している。

古城遺跡(板鼻古城)は、板鼻城と同様、碓氷川と九十九川の合流点から約１㎞下流の左岸、標高160～175mの台地上に立地しており、東西約150m・南北約120mの平行四辺形状の範囲が板鼻城の前身城館との伝承があるが、築造主体などについては伝承の域を出ず、不明である。住宅団地造成に伴って一部が発掘調査され、掘立柱建物17棟、柵12条、井戸及び地下式坑各２基、館北堀などが検出され、14～15世紀のものを主体とする土器・陶器類が出土した。発掘調査によって検出された館北堀は、上幅約4.0～4.5m・下幅約0.5～1.0m・深さ約3.0mの規模であった。発掘調査の所見からは板鼻城よりも古い時期の城館である可能性が高いことが判明したが、板鼻城の前身城館であるか否かという点や築造主体などについては明らかではない。

第７項　近世

豊臣秀吉による小田原北条氏攻略後の徳川家康関東入封に伴い、関東一円は家康の支配するところとなった。江戸に本拠地を構えた家康は、徳川四天王の一人である井伊直政を関東防衛のための西北守護の要として上野国群馬郡の箕輪城に配置した。その後、慶長３(1598)年、井伊直政は、家康の命によって、箕輪から和田に移り、和田の地を「高崎」と改めて高崎城を築城、群馬・碓氷両郡のほぼ全域を所領とした。慶長５(1600)年12月、初代高崎藩主井伊直政は、関ヶ原の戦いにおける戦功によって加増され、かつて石田三成の居城であった近江国坂田郡の佐和山城を与えられ、近江に拠点を遷したが、上野

国内の領地も引き続き領有した。

慶長７(1602)年、井伊直政が没すると、嫡子直継が跡を継いで、慶長11(1606)年、新たに彦根城を築城し、井伊家の本城としたが、井伊直継の主君である徳川家康は、直継は病弱かつ将器に欠けるとして、弟の直孝に彦根藩井伊家の家督を継承させると共に、兄・直継には別家を建てさせ、上野領３万石を分知し、碓氷郡安中に封じた。直継は名を直勝と改め、元和元(1615)年、中世安中城の縄張りの一部を利用して近世安中城を築城し入封したが、井伊氏が築城した近世安中城は城郭というより陣屋程度のものであった。現在の安中市街地中心部に当たっており、大きく撹乱されているため、遺構の残存状態は極めて良くない。

安中藩には、関東への出入り口である碓氷・牧の両関警固という重大な使命が課せられ、安中藩にとって最重要の任務とされた。

跡を継いだ直勝の子の直好は、正保２(1645)年、三河西尾に転封され、代わって水野元綱が入部、水野氏が２代に亘って藩主の座にあった。その後、寛文７(1667)年から堀田氏１代、天和元(1681)年から板倉氏２代、元禄15(1702)年から内藤氏３代、寛延２(1749)年から板倉氏６代が藩主の座にあり、廃藩置県に至っている。安中藩は小藩ではあるものの、歴代藩主とも有力譜代大名家出身者であり、幕閣が、碓氷関警固の任に当たる安中藩を重要視していたことが伺える。

米山遺跡とは碓氷川を挟んだ対岸に位置する大島田Ⅱ遺跡(76)・沼田遺跡(77)では、天明３(1783)年に起こった浅間山噴火時に降下した火山灰As-Aによって埋もれた水田の復旧坑とAs-A軽石層下から検出された近世の水田面が検出されているが、大島田Ⅱ遺跡の東側に隣接する大島田遺跡(76)を安中市教育委員会が平成３(1991)～５(1993)年にかけて発掘調査したところ、水田畦畔や溝などの遺構は検出されなかったものの、プラントオパール分析の結果、浅間山火山灰As-A下の水田の存在が示唆されていた。

沼田遺跡の南西から南側に位置する地点では平成７(1995)～10(1998)年度に安中市教育委員会が圃場整備に伴って発掘調査を実施しており、この地点からも、天明３(1783)年降下の浅間山火山灰As-Aの上下で水田面と復旧坑・掘削工具痕が検出されている。

これらの遺跡のように安中市域の遺跡では天明３年の浅間山噴火の被害や復旧に関する遺構が数多く検出され、被害の甚大さが窺える。

天明３年の浅間山噴火での被害は吾妻川流域での土石流被害とともに、上野国内では浅間山に近い地域に当たる碓氷郡内では、降灰被害は殊更に甚大であり、郡内の耕作地は壊滅的な打撃を受けたものと考えられている。

第３節　基本土層

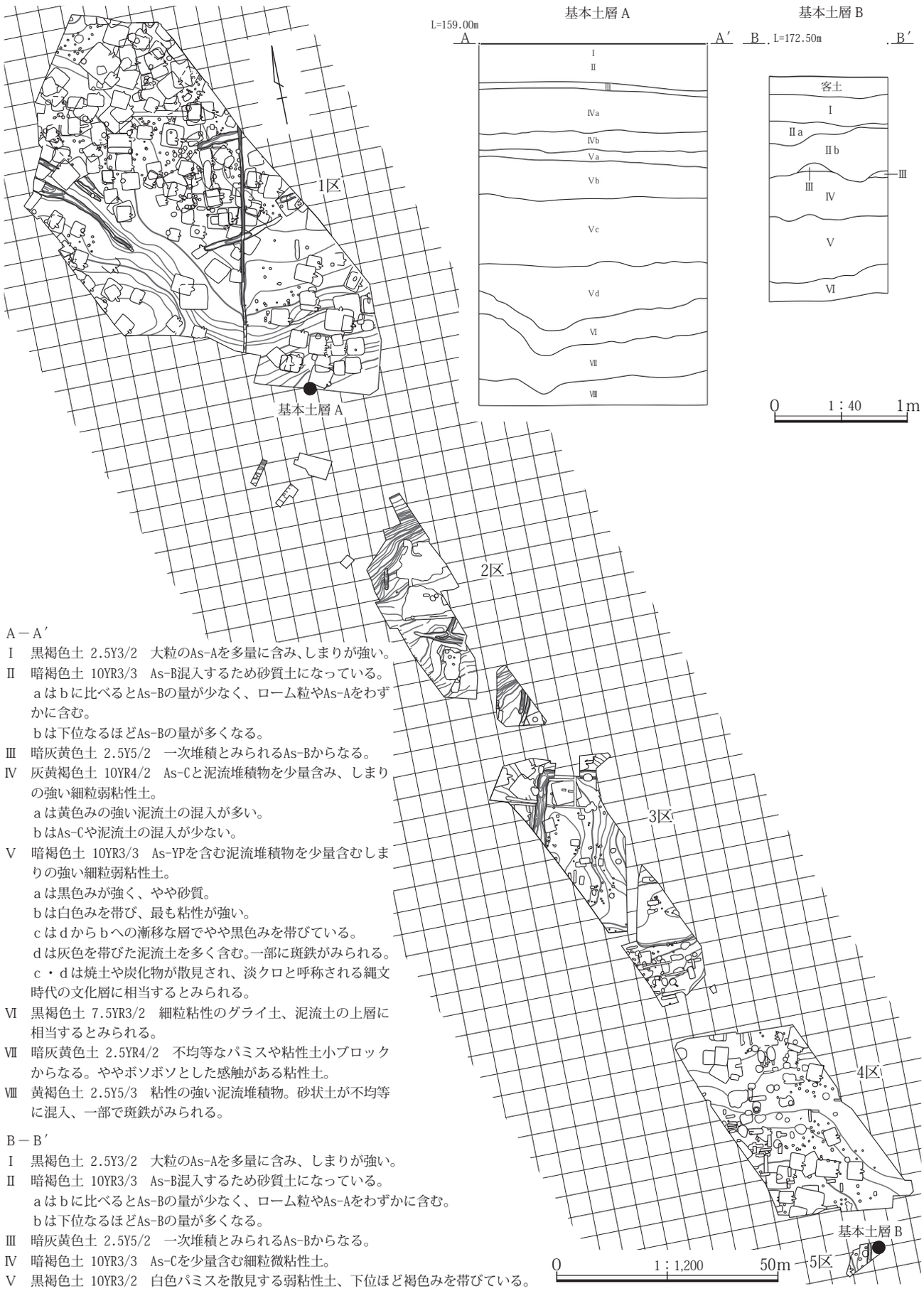
米山遺跡は「第１節　地理的環境」で記述したように１区調査区は九十九川右岸の下位河岸段丘、２区調査区～５区調査区の中位河岸段丘と立地が異なるため基本層序も縄文時代以前では大きく異なる。

１区調査区では九十九川の氾濫による高崎泥流堆積物がⅤ層以下に厚く堆積しているのに対して２区調査区～５区調査区では安定したローム土となっている。

Ⅴ層より上位は浅間山噴出の軽石であるAs-C、As-B、As-Aが一部でそのまま堆積しているが、大部分は撹拌され、軽石が混じり込んだ層位になっている。

米山遺跡周辺では、浅間山噴出の軽石の堆積は３世紀後半の噴火で噴出されたAs-Cの堆積が10～15cm、1108(天仁元)年の噴火で噴出されたAs-Bの堆積が50cm、1783(天明３)年の噴火で噴出されたAs-Aが20cmほどであったことがわかっている。

第２章参考文献
安中市史編纂委員会編2001 『安中市史４　原始古代中世資料編』
尾崎喜佐雄監修1987 『日本歴史地名大系10　群馬県の地名』 平凡社
角川日本地名大辞典編纂委員会編1988『角川日本地名大辞典10 群馬県』角川書店
群馬県編1938 『上毛古墳綜覧』
群馬県編2017 『群馬県古墳総覧』
群馬県教育委員会編1988 『群馬県の中世城館跡』
群馬県史編纂委員会編1977～88 『群馬県史』資料編１～10
群馬県埋蔵文化財調査事業団編1999 『群馬県遺跡大事典』 上毛新聞社
山崎一1971～1978 『群馬県古城累址の研究』上・下・補遺編上・下
群馬県統合型地裡情報システム「マッピングぐんま」
http://mapping-gunma.pref-gunma.jp/pref-gunma/top



Ａ－Ａ′

Ⅰ　黒褐色土 2.5Y3/2　大粒のAs-Aを多量に含み、しまりが強い。

Ⅱ　暗褐色土 10YR3/3　As-B混入するため砂質土になっている。
　ａはｂに比べるとAs-Bの量が少なく、ローム粒やAs-Aをわずかに含む。
　ｂは下位なるほどAs-Bの量が多くなる。

Ⅲ　暗灰黄色土 2.5Y5/2　一次堆積とみられるAs-Bからなる。

Ⅳ　灰黄褐色土 10YR4/2　As-Cと泥流堆積物を少量含み、しまりの強い細粒弱粘性土。
　ａは黄色みの強い泥流土の混入が多い。
　ｂはAs-Cや泥流土の混入が少ない。

Ⅴ　暗褐色土 10YR3/3　As-YPを含む泥流堆積物を少量含むしまりの強い細粒弱粘性土。
　ａは黒色みが強く、やや砂質。
　ｂは白色みを帯び、最も粘性が強い。
　ｃはｄからｂへの漸移な層でやや黒色みを帯びている。
　ｄは灰色を帯びた泥流土を多く含む。一部に斑鉄がみられる。
　ｃ・ｄは焼土や炭化物が散見され、淡クロと呼称される縄文時代の文化層に相当するとみられる。

Ⅵ　黒褐色土 7.5YR3/2　細粒粘性のグライ土、泥流土の上層に相当するとみられる。

Ⅶ　暗灰黄色土 2.5YR4/2　不均等なパミスや粘性土小ブロックからなる。ややボソボソとした感触がある粘性土。

Ⅷ　黄褐色土 2.5Y5/3　粘性の強い泥流堆積物。砂状土が不均等に混入、一部で斑鉄がみられる。

Ｂ－Ｂ′

Ⅰ　黒褐色土 2.5Y3/2　大粒のAs-Aを多量に含み、しまりが強い。

Ⅱ　暗褐色土 10YR3/3　As-B混入するため砂質土になっている。
　ａはｂに比べるとAs-Bの量が少なく、ローム粒やAs-Aをわずかに含む。
　ｂは下位なるほどAs-Bの量が多くなる。

Ⅲ　暗灰黄色土 2.5Y5/2　一次堆積とみられるAs-Bからなる。

Ⅳ　暗褐色土 10YR3/3　As-Cを少量含む細粒微粘性土。

Ⅴ　黒褐色土 10YR3/2　白色パミスを散見する弱粘性土、下位ほど褐色みを帯びている。

Ⅵ　にぶい黄褐色土 10YR4/3　ローム漸移層。

第６図　基本土層図

第３章　検出した遺構・遺物

第１節　遺構・遺物の概要

１区調査区は対象面積4,877㎡、南北100m、東西70mと南北に長い範囲の調査区である。標高は156.00mから157.60mで九十九川右岸の下位河岸段丘面に立地しているため南端がもっとも高く、北端がもっとも低い。傾斜は南部では南から北へ、中程では西から東へ緩い傾斜を示しているが、一部のやや傾斜の急な箇所がある。

２区調査区から５区調査区は対象面積4,700㎡、南北230m、東西16m前後とより細長く、生活道路によって複数区に区分されている。標高は２区調査区北端が１区調査区と同様に下位河岸段丘面から中位河岸段丘への崖線に立地しているため163m～169m、３区調査区～５区調査区は170m～171mである。

上記のように１区調査区と２区調査区～５区調査区の間には６mほどの崖線によって隔たれているため古代以前の遺構は100m以上の間隔が存在する。発掘調査は道路建設予定を対象としているため遺跡の全貌は不明であるが、別個の集落として想定することもできる。

検出した遺構は縄文時代の土坑２基と埋甕１基、ピット１基、弥生時代の土坑３基、古墳時代前期～平安時代にかけての竪穴建物224棟、掘立柱建物１棟、竪穴状遺構８基、溝９条、土坑58基、ピット210基、中世～近世にかけての溝８条、井戸８基、復旧坑35基、土坑104基、ピット108基、畑１箇所などを検出している。このうち、２区調査区北端で検出された礎石建物や一部の土坑などについは、後日近代まで存在または近代に構築されていた遺構であることが判明したため詳細については省略した。また、２区調査区で検出されている17号溝は溝底面に一定の礫が規則的に配置されており、その北側ではAs-A堆積の前後にローム土や泥流土による整地土が部分的に確認され、礎石とみられる礫も散乱した状態であり、近世後半代～近世末にかけての陶磁器も多く出土していることから近世屋敷の存在も窺えたが、建物などの遺構は検出されなかった。

出土した遺物は縄文土器、同時代の石器・石製品、弥生時代後期の土器と石器、古墳時代～平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、銙帯や紡錘車などの石製品、刀子や釘などの鉄器、鉄製品、中世～近世にかけての軟質陶器、陶磁器、鉄器・鉄製品などがみられた。

米山遺跡から出土した遺物の中では須恵器と施釉陶器が特出される。須恵器は７世紀代後半から11世紀初頭にかけて食膳具である杯蓋、杯、椀を中心に大量に出土している。特に７世紀後半から８世紀にかけては一般の集落遺跡ではまだ土師器が主体であるのに対して、米山遺跡からは土師器食膳具より須恵器食膳具の比率が高い傾向が見られ、同じ古代碓氷郡で操業している秋間古窯跡群との関係が窺える。

また、出土須恵器には一般的な食膳具や貯蔵具だけでなく大型の台付鉢、鉄鉢状鉢、凸帯付四耳壺などの個体も出土している。この他も若干出土している瓦や灰釉陶器浄瓶などを併せて考えると近隣に寺院の存在も窺える。

そして10世紀後半から11世紀初頭にかけては２号溝や３号溝、５号溝、９号溝、169号土坑などからは酸化焔焼成による須恵器杯・椀が多量に出土している。これらの中には群馬県南部ではほとんど例を見なかった左回転によるロクロで成整形された個体が一定量含まれており、これら個体の供給地が課題になる。

さらに多くの紡錘車をはじめとする鉄器・鉄製品、大量に出土した施釉陶器などからは近隣に想定されている碓氷郡家による影響を強く受けていたことも窺えた。

なお、個々の遺構・遺物については各時代の記載を参照していただきたい。遺構外出土遺物としたものは、表土掘削中に出土したものや遺構に伴わないもの他、遺物の年代観と一致しない時代の遺構から出土したものなどを取り上げた。なお、縄文時代とみられる石皿や凹石などは竪穴建物から出土しているものがあるが、これについてはカマドの構築材など二次利用と判断できるものは出土した遺構の遺物として掲載した。未掲載遺物については点数と重量を一覧表に集計した。

第２節　旧石器時代の調査

縄文時代から中近世の遺構を調査した後に台地上の３区と４区について旧石器の調査を実施した。旧石器の調査は７図のように南北4.0m、東西2.0mの調査坑を３区調査区に６箇所、４区調査区に10箇所設定し、白色パミス層まで掘り下げ、石器等の出土の有無についての調査を実施した。その結果、石器等の出土を確認することはできなかった。

第３節　縄文時代の遺構・遺物

縄文時代の遺構には土坑２基、ピット１基、埋甕１基が検出されている。土坑は４区調査区、５区調査区、ピットと埋甕は４区からである。出土した遺物は土器、石器等がある。土器は土坑、埋甕から出土したものについて図示可能な個体を掲載してある。なお、１号埋甕は中期の土器がまとまって出土していたことから判断されていたが、深鉢の一部片しか確認できなかったため、包含層出土遺物として遺構外として扱った。

その他、遺構外からは遺物収納箱で５箱出土している。石器・石製品は石鏃、打製石斧、磨石、多孔石が出土している。これらの石鏃、石製品は古墳時代～平安時代の竪穴建物から出土している。石鏃と打製石斧については本節で遺構外出土遺物として取り扱うが、磨石と多孔石については二次的な使用が認められることから、それぞれの出土遺構の項目で掲載した。

第１項　土坑・ピット・埋甕

134号土坑

位置　４区調査区中央部のやや南西寄り、Ｘ＝36846～36848、Ｙ＝−84965～−84966に位置する。

重複関係　103号土坑と重複関係にある。新旧関係は本土坑のほうが古い。

形状　平面は南北方向にやや長いがほぼ円形を呈する。断面は箱形を呈する。

規模　長径1.90m、短径1.80m、深さは確認面から最大0.51mを測る。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できる。

出土遺物　中央の埋没土上位から13の縄文土器両耳壺、１～12・14の深鉢、北寄りの底面から偏平な礫が出土している。13の両耳壺は加曽利Ｅ３式、他の深鉢は加曽利Ｅ４式に比定できる。

所見　本土坑の時期は、出土した縄文土器から縄文時代中期後半に比定できる。

154号土坑

位置　５区調査区中央、Ｘ＝36818～36819、Ｙ＝−84950～−84951に位置する。

重複関係　16号溝と重複関係にある。新旧関係は本土坑のほうが古い。

形状　平面はほぼ円形を呈する。断面は底面に最大径をもつ袋状形を呈する。

規模　確認面での径1.38m、底面での径1.50m、深さは確認面から最大0.43mを測る。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだレンズ状の堆積が確認できる。

出土遺物　埋没土中位から縄文土器深鉢片が出土している。出土した深鉢は勝坂式に比定できる。

所見　本土坑の時期は、出土した縄文土器から縄文時代中期前半に比定できる。

296号ピット

位置　４区調査区中央部の南東寄り、Ｘ＝36857、Ｙ＝−84951に位置する。

重複関係　単独で存在する。

形状　平面はほぼ円形を呈する。断面は逆台形状を呈する。

規模　確認面での径0.46m、底面での径0.32m、深さは確認面から最大0.39mを測る。

埋没状態　土層断面の観察では黒褐色土と暗褐色土の堆積が確認でき、暗褐色土にはわずかに焼土粒が混じる。

出土遺物　確認面から縄文土器深鉢片が出土している。出土した深鉢は加曽利Ｅ４式に比定できる。

所見　出土した縄文土器から縄文時代中期後半に比定できる。

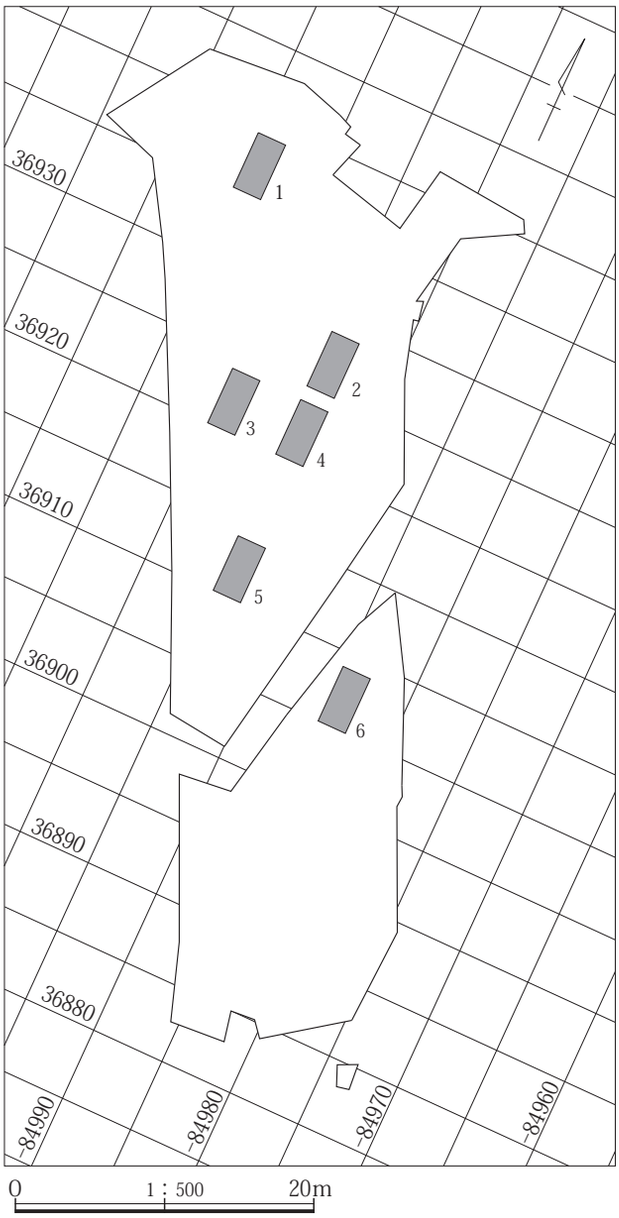
１号埋甕

位置　４区調査区中央、Ｘ＝36851、Ｙ＝−84959に位置する。

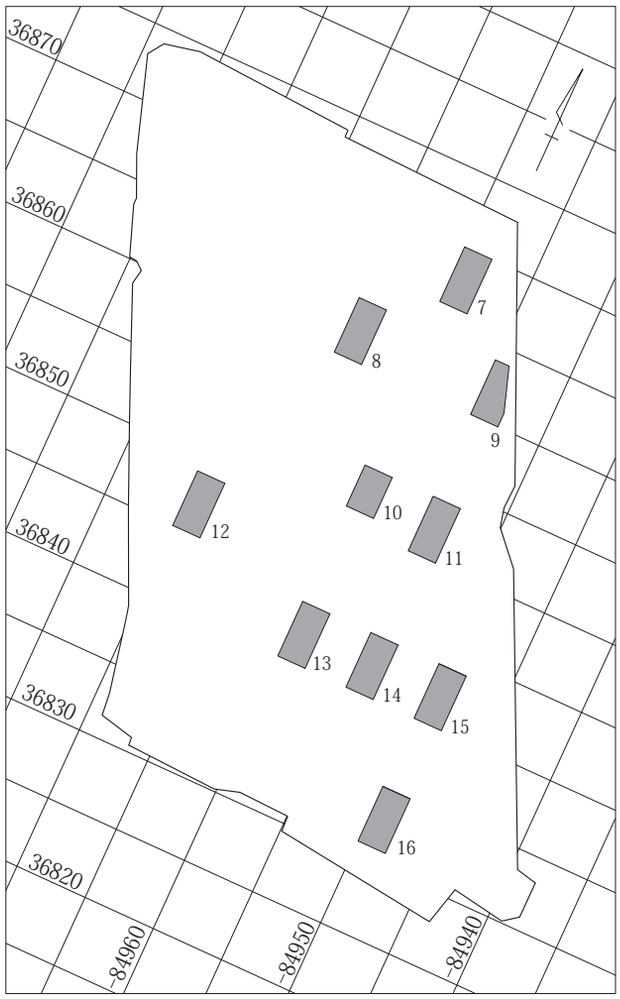
重複関係　単独で存在する。

旧石器トレンチ全体図

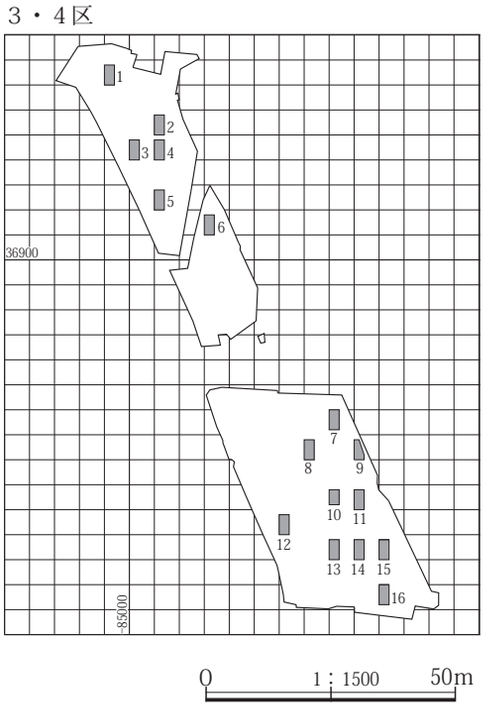
３区



４区



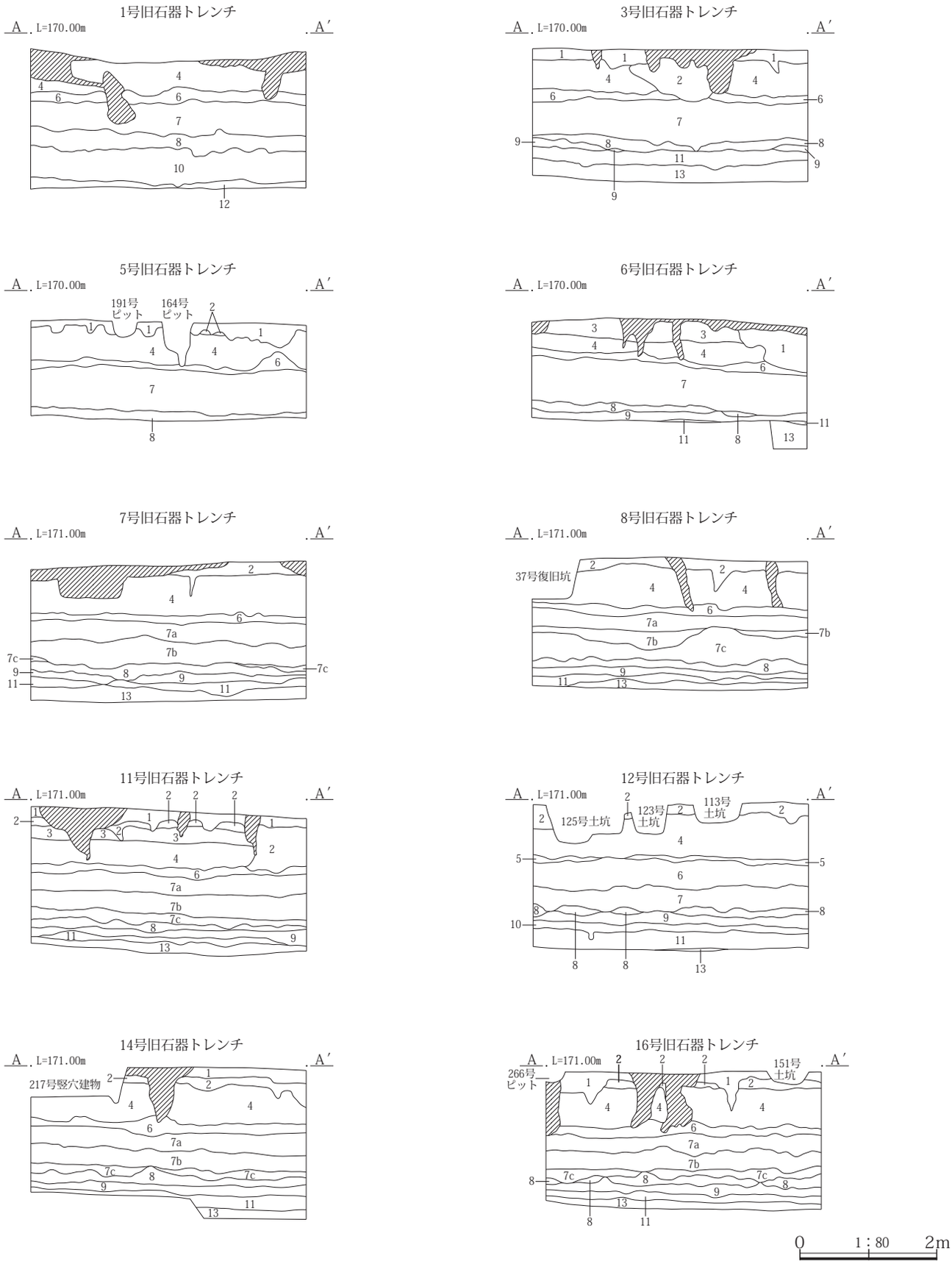
３・４区



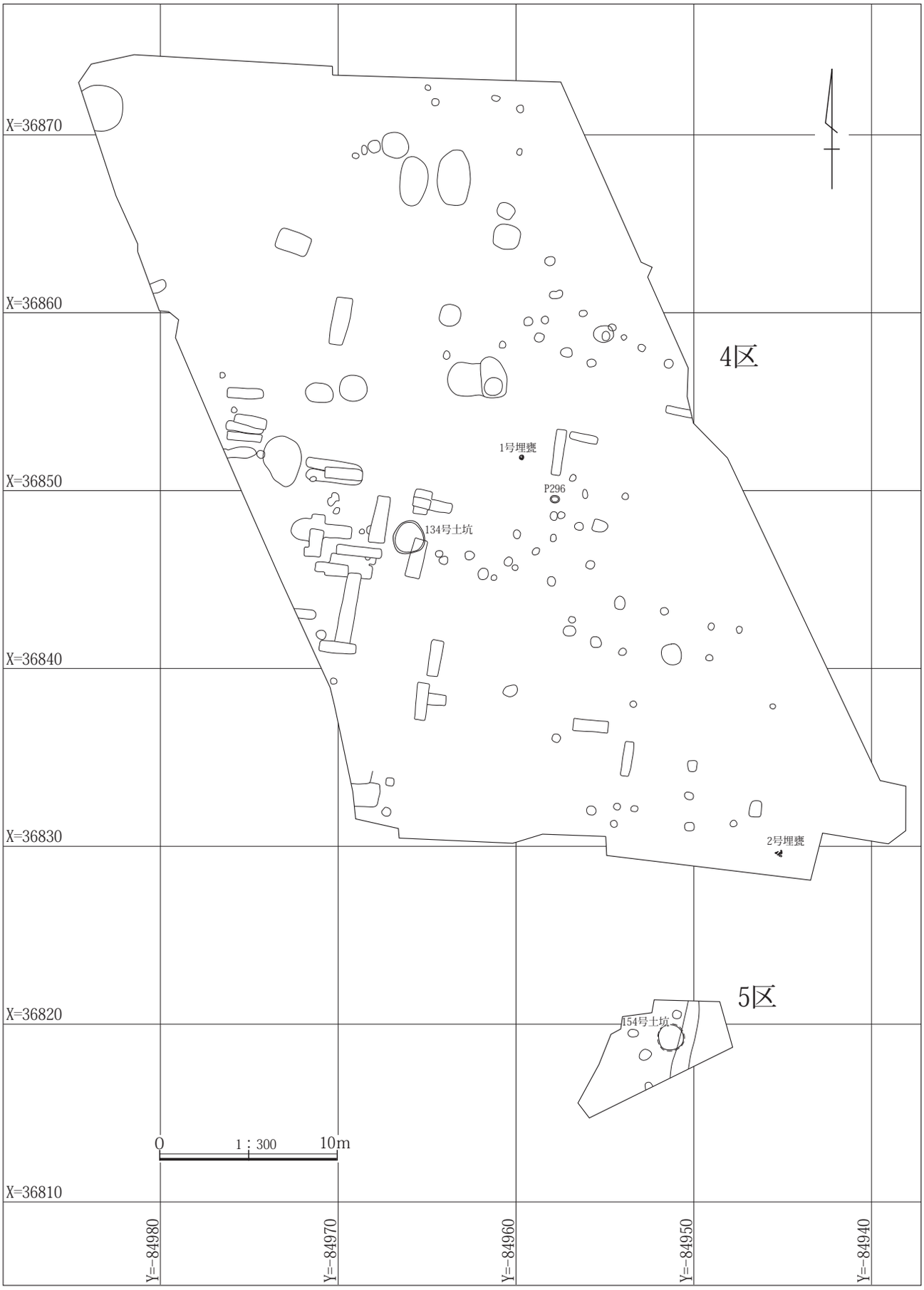
旧石器調査坑

1　黒褐 10YR3/2　にぶい黄褐 10YR4/3　上位に白色パミス混じる、黒色味強い土から下位へ黄色味増す。ローム堆積層。
2　褐 10YR4/4　やや粗粒のローム、小粒のAs-YPを不均等に含む。
3　黄色味強く、As-YPが多い。
4　灰黄 2.5Y6/2　As-YP、大粒パミスと褐 7.5YR4/4の小粒パミスを含む。
5　４層への漸移的な層。
6　褐 10YR4/4　細粒の粘性強いローム。不揃いのパミスを少量含む。
7　にぶい黄褐 10YR5/4　上下に風化進んだパミスの層があり、中央はやや暗色となるローム土。３層に細分が可能。
　a　白色パミスを不均等に多く含む。
　b　混入物が少ない。
　c　白色パミスを多く含む。
8　黄褐 2.5Y5/4　φ３㎜前後の風化したパミス主体、基質土は７層土。
9　灰黄褐 10YR5/2　７層土に類似。やや粗粒でザラザラした感触。
10　灰黄褐 10YR5/2　９層に類似、鉄分凝集がみられる。
11　にぶい黄褐 10YR5/2　１㎜前後の黄色味強い細かなパミスと９層土の混土。湧水層。
12　にぶい黄褐 10YR5/2　11に類似、鉄分凝集がみられる。
13　灰黄 2.5Y6/2　白色味が強い風化が進んだパミス層。

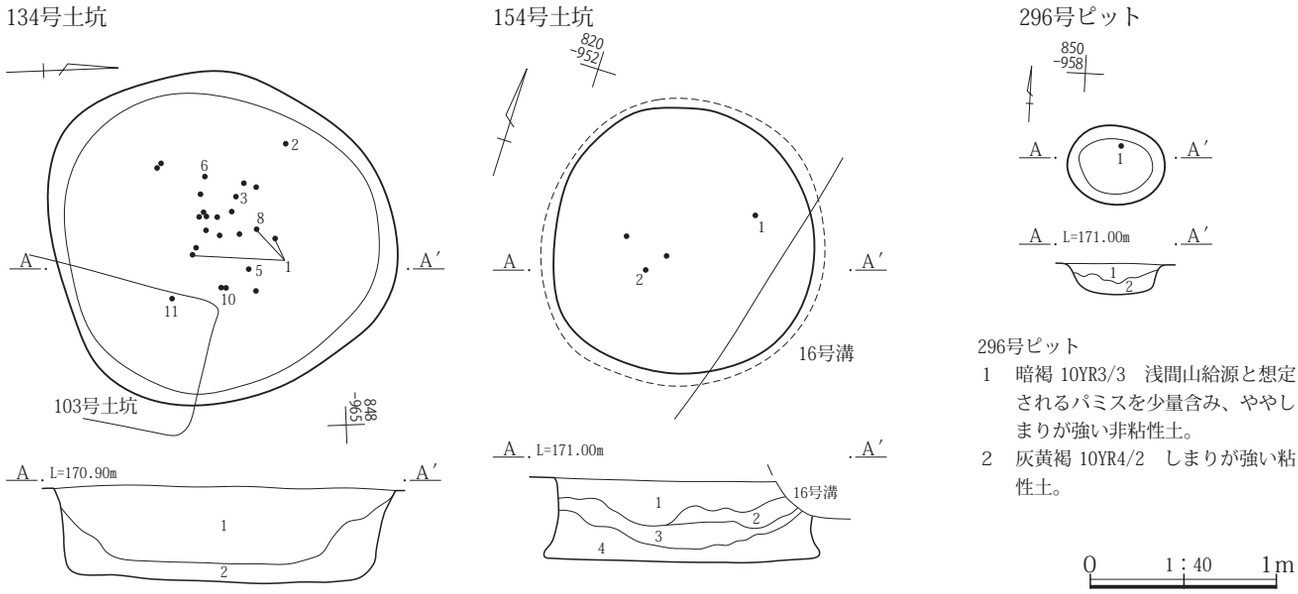
第７図　旧石器時代調査　調査坑配置図



第８図　旧石器時代調査　調査坑土層断面図



第９図　４・５区調査区　土坑・ピット・埋甕配置図

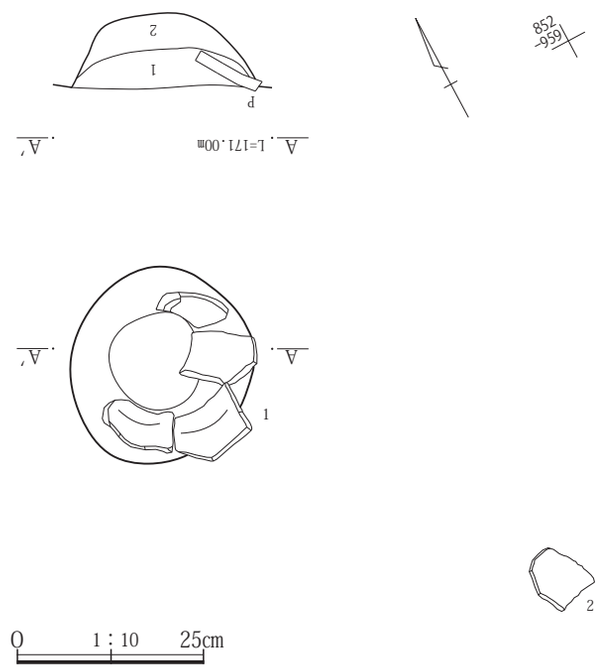


296号ピット
1　暗褐 10YR3/3　浅間山給源と想定されるパミスを少量含み、ややしまりが強い非粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　しまりが強い粘性土。

134号土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-YPを不均等に白色の微細で硬いパミス(As-Dか)炭化物粒を若干含み、しまりが強い非粘性土。
2　黒褐 10YR2/2　混入物少ない、しまりある微粘性土。

154号土坑
1　黒褐 10YR3/2　ローム粒・As-Cを霜降状に含み、ややしまりある微粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム小ブロックをやや多く含み、しまりが強い弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　１に近似。パミスは少なく、ローム粗粒を多く含み、しまりが強い。
4　暗褐 10YR3/4　不明瞭なローム小ブロック黒褐色土の混土、しまりが強い。

１号埋甕



１号埋甕
1　黒褐 10YR3/2　ややしまり強い、やや細粒粘性土。上半にパミス、下半に焼土粒を散見する。
2　暗褐 10YR3/3　ややボソボソした感触の、しまり強い弱粘性土。ローム粒やパミスを不均等に含む。

形状　楕円形状の掘り込みが確認され、この掘り込みに深鉢の上半が埋め込まれていた。

規模　掘り込みは長径0.66m、短径0.47m、深さ0.26mを測る。

埋没状態　５㎝ほど暗褐色土を充填した後に深鉢を据え付けていた。内部は黒褐色土によって埋没している。

出土遺物　５点ほどに割れた状態と１点の破片が南南西0.5mほど離れた地点から出土している。出土した深鉢は加曽利Ｅ３式に比定できる。

所見　本埋甕の時期は、出土した縄文土器から縄文時代中期後半に比定できる。

第２項　遺構外出土遺物

土器28点、石器13点を各調査区順に図示した。図示した土器は中期の阿玉台式、勝坂、加曽利Ｅ式とすべて中期に比定できるもので、本遺跡で検出された遺構と同一時期のものである。

第10図　134・154号土坑、296号ピット、１号埋甕遺構図

第４節　弥生時代の遺構・遺物

弥生時代に比定できる遺構は１区調査区中央から30号土坑、70号土坑、75号土坑が検出されているが、竪穴建物や他の遺構は皆無であった。また、２～５区調査区からは遺構が検出されていない。30号土坑は弥生時代中期の土器、70号土坑、75号土坑は弥生時代後期に比定できる。吉ヶ谷式の甕、鉢が出土している。この他は遺構外を含め土器の出土はみられなかったが、弥生時代に比定できる。石鏃が出土している。

第１項　土坑

30号土坑

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37085～37086、Ｙ＝−85089～−85090に位置する。

重複関係　69号土坑と重複関係にある。新旧関係は本土坑のほうが古い。

形状　平面は南北方向にやや長いがほぼ円形を呈する。断面は箱形を呈する。

規模　長径1.04m、短径0.88m、深さは確認面から最大0.21mを測る。

埋没状態　土層断面の観察では黒褐色土と暗褐色土によって埋没しているが、堆積の状態からみると人為的な埋め戻しが行われたと想定される。

出土遺物　１～５は弥生時代中期の甕片、５は下位からの出土、他は埋没土中からの出土である。

所見　本土坑の時期は、出土した土器から弥生時代中期に比定できる。

70号土坑

位置　１区調査区中央、Ｘ＝37079～37080、Ｙ＝−85054～−85055に位置する。一部を重複関係にある遺構によって欠く。

重複関係　168号竪穴建物、62号土坑、75号土坑と重複関係にある。新旧関係は168号竪穴建物、62号土坑より本土坑のほうが古いが、75号土坑より新しい。

形状　平面は東西方向にやや長い楕円形を呈する。断面は箱形を呈する。

規模　長径0.88m、短径0.68m、深さは確認面から0.61mを測る。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できる。

出土遺物　北西側の埋没土中位から１の弥生土器鉢が出土している。出土した土器は吉ヶ谷式に比定できる。

所見　本土坑の時期は、出土した弥生土器から弥生時代後期に比定できる。

75号土坑

位置　１区調査区中央、Ｘ＝37080～37081、Ｙ＝−85053～−85054に位置する。一部を重複関係にある遺構によって欠く。

重複関係　168号竪穴建物、70号土坑と重複関係にある。新旧関係は168号竪穴建物、70号土坑より本土坑のほうが古い。

形状　平面は東西方向にやや長い楕円形を呈する。断面は箱形を呈する。

規模　長径1.34m、短径0.78m、深さは確認面から0.21mを測る。

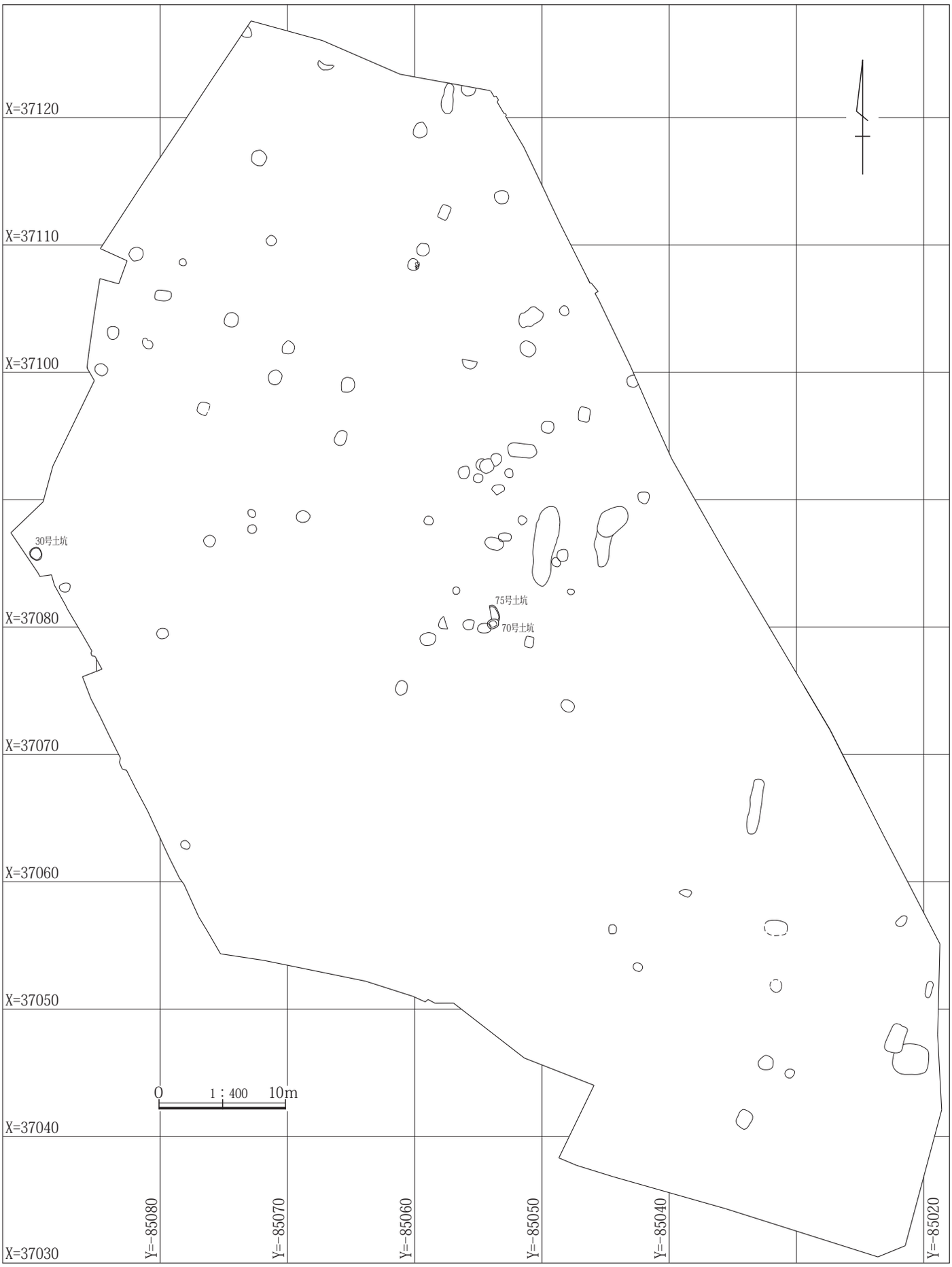
埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できる。

出土遺物　西側の埋没土中から１の弥生土器甕が横に倒置した状態で出土している。なお、この土器の胴部下半から底部は欠損していた。出土した土器は吉ヶ谷式に比定できる。

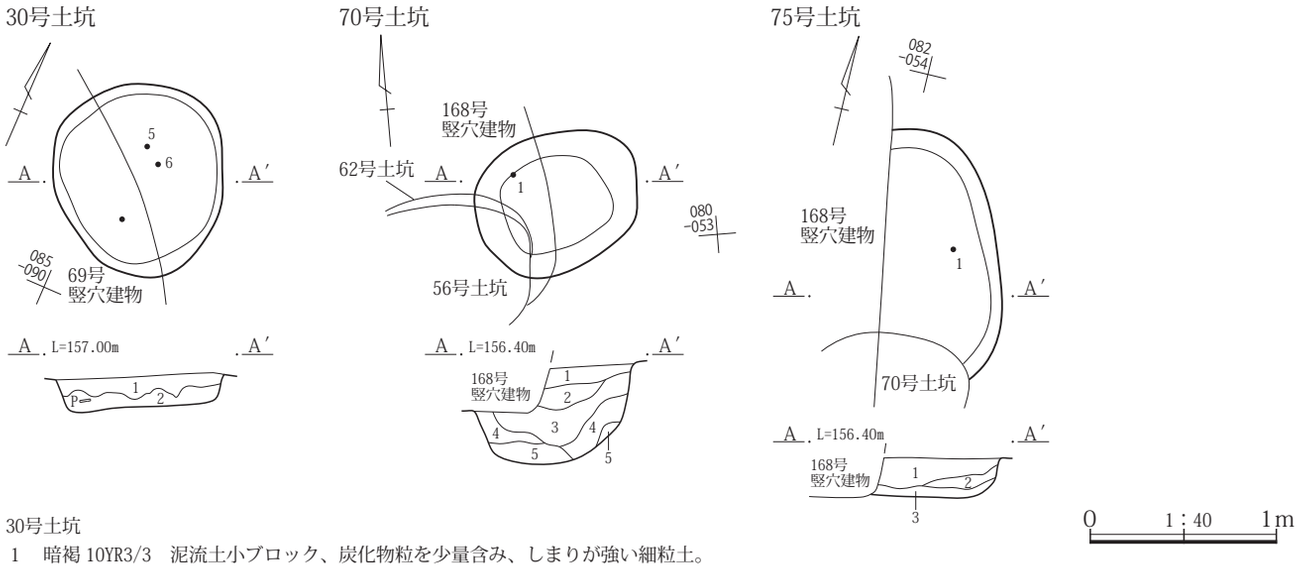
所見　本土坑の時期は、出土した弥生土器からは弥生時代後期に比定できる。

第２項　遺構外出土遺物

図示可能な遺構外出土の弥生土器は少なく７点だけであった。その出土は１が１区調査区、他はすべて４区調査区からである。４区調査区から出土した６点はすべて中期初頭に比定できる。１区から出土した７の甕は後期後半樽式に比定できる。



第11図　１区調査区　土坑配置図



30号土坑
1　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロック、炭化物粒を少量含み、しまりが強い細粒土。
2　黒褐 10YR3/2　混入物少ない細粒土。人為的埋め戻し土。
70号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を２％・φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土を斑紋状に５％含み、やや脆い。
4　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土を10％含み、やや粘性がある。やや柔らかい。
5　にぶい黄褐色土 10YR4/3　暗褐色土を20％含み、やや粘性がある。
75号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色土・褐色土ブロックを各３％含む。固くしまっている。
2　暗褐 10YR3/3　１に類似。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを３％、炭化物片を３％含み、固くしまり粘性がある。

第12図　30・70・75号土坑遺構図

第５節　古墳時代～飛鳥・奈良・平安時代の遺構・遺物

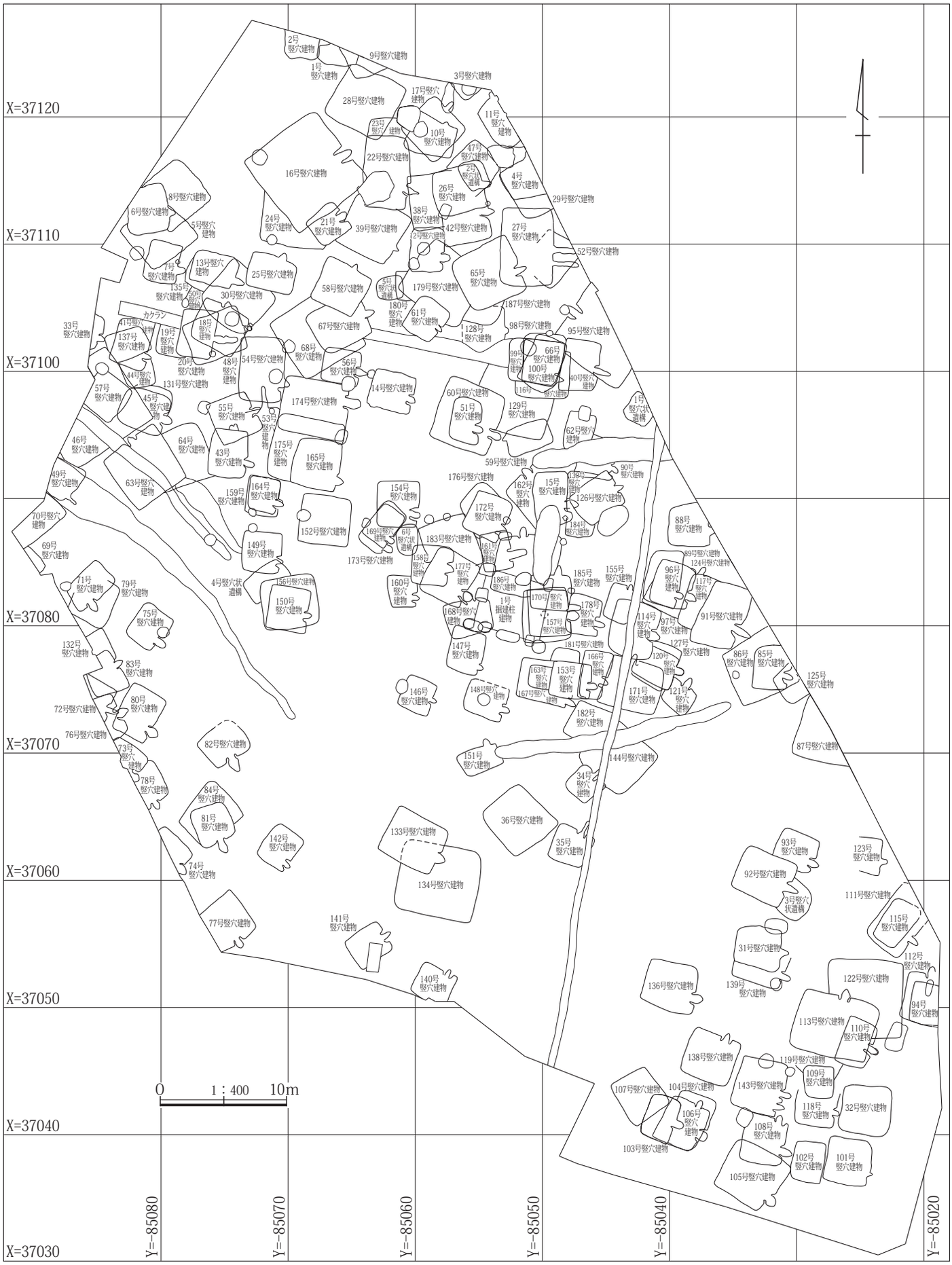
本節では古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代までの検出された遺構と出土遺物について扱う。本来なら古墳時代と飛鳥・奈良・平安時代とは区別して掲載するところであるが、竪穴建物の一部は埋没土の状況から古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代には比定できたが、遺物が出土しておらず、明確に区分ができないものが存在した。そのため古墳時代と飛鳥時代での区分はしていない。なお、古墳時代と飛鳥時代の区分を政治史的には７世紀初頭としているが、古代上毛野の集落遺跡においては土器区分上、金属器模倣の土師器や須恵器が出現する段階としている。そのため、実年代的には７世紀前半までを古墳時代、７世紀後半以降を飛鳥時代に当てるのが妥当と考えられる。

検出された遺構は竪穴建物、掘立柱建物、竪穴状遺構、溝、土坑、ピットなどがある。遺構の主体は竪穴建物で、調査区全域に展開している。分布をみると１区調査区では西側にやや傾斜する斜面があり、その付近では希薄である。それに対して調査区中央から北東部にかけての平坦な箇所では密集がみられ、10棟以上の重複が確認できるものも存在した。竪穴建物は185棟が検出されている。１区調査区と２区調査区の間には比高差10mの斜面が存在する。そのため、２区調査区では南端から１棟検出されているだけである。３区調査区から５区調査区はほぼ平坦で西側に谷地が存在する。３区調査区11棟、４区調査区26棟、５区調査区１棟の計36棟である。

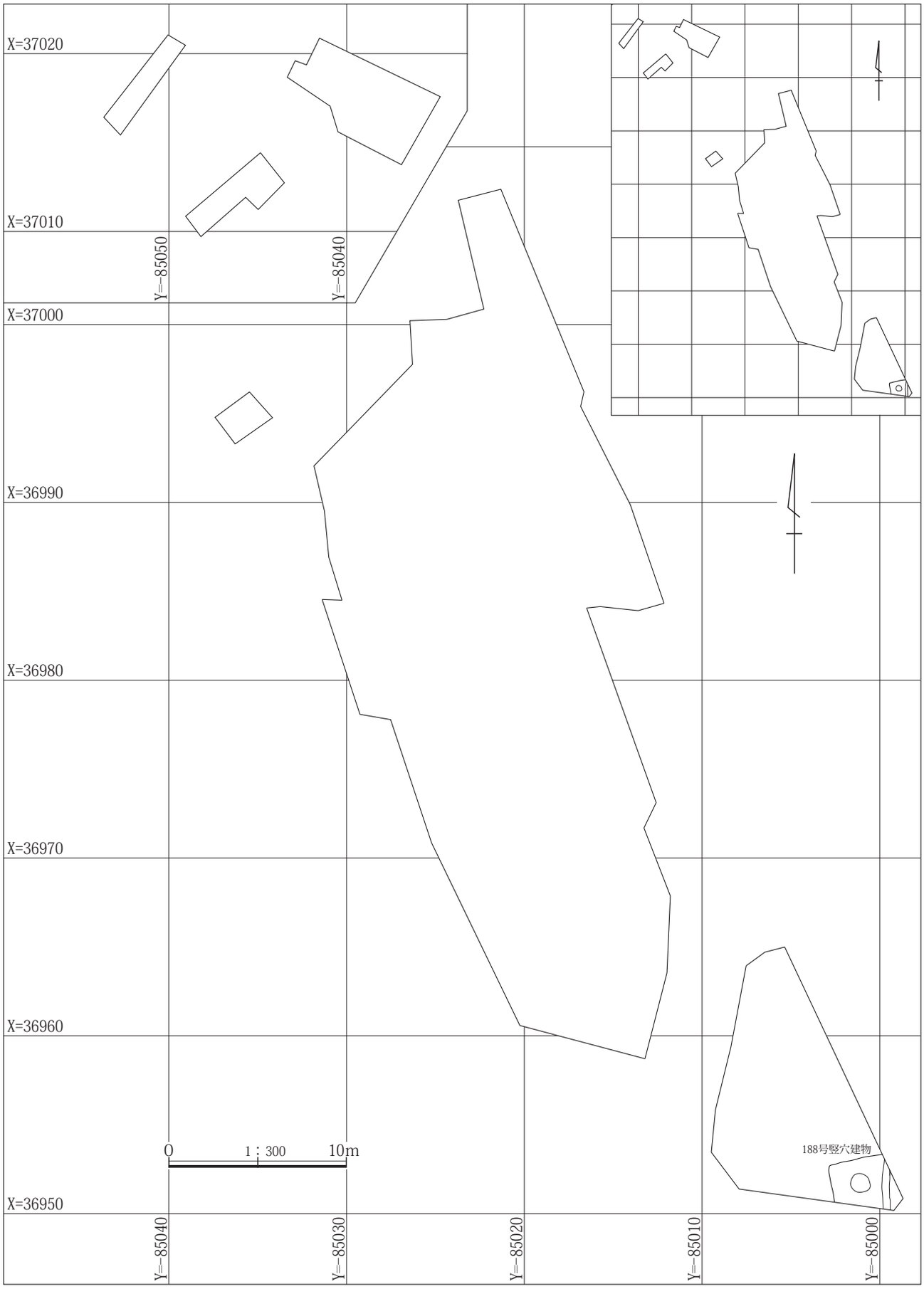
掘立柱建物は１区調査区の中程で２間×２間のものが１棟検出されている。竪穴状遺構は８基、溝９条、土坑58基、ピット210基と遺物集中地点１箇所である。

各遺構の存続期間は、３世紀後半から10世紀末までに比定され、３世紀後半から６世紀代は竪穴建物の棟数も限られ、寒村的な様相が窺え、集落内での竪穴建物が急激に増大するのは８世紀以降である。なお、竪穴建物の変遷については５章で検討する。

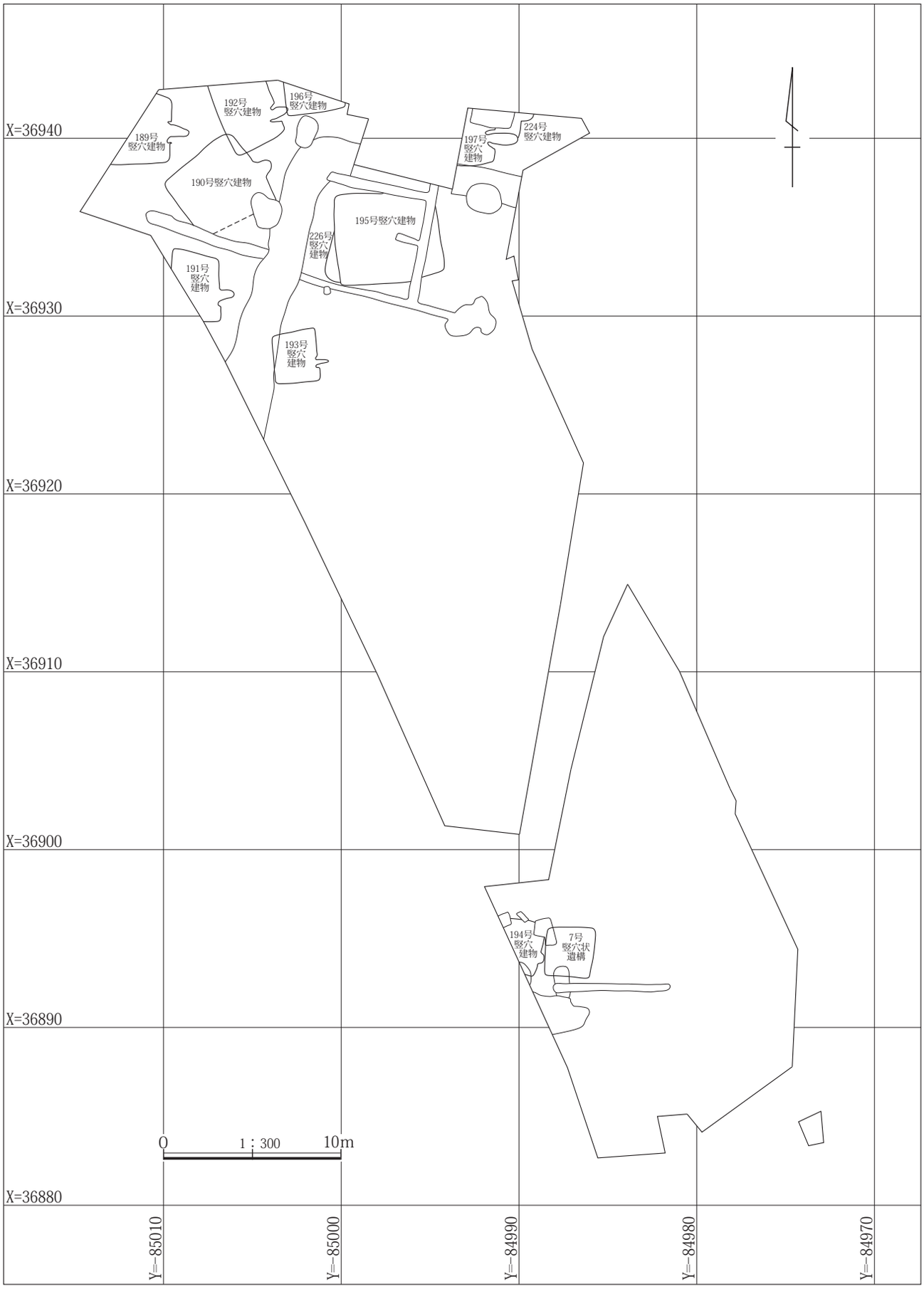
遺物は竪穴建物に伴う古墳時代前期から古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代にかけての土器が主体で、



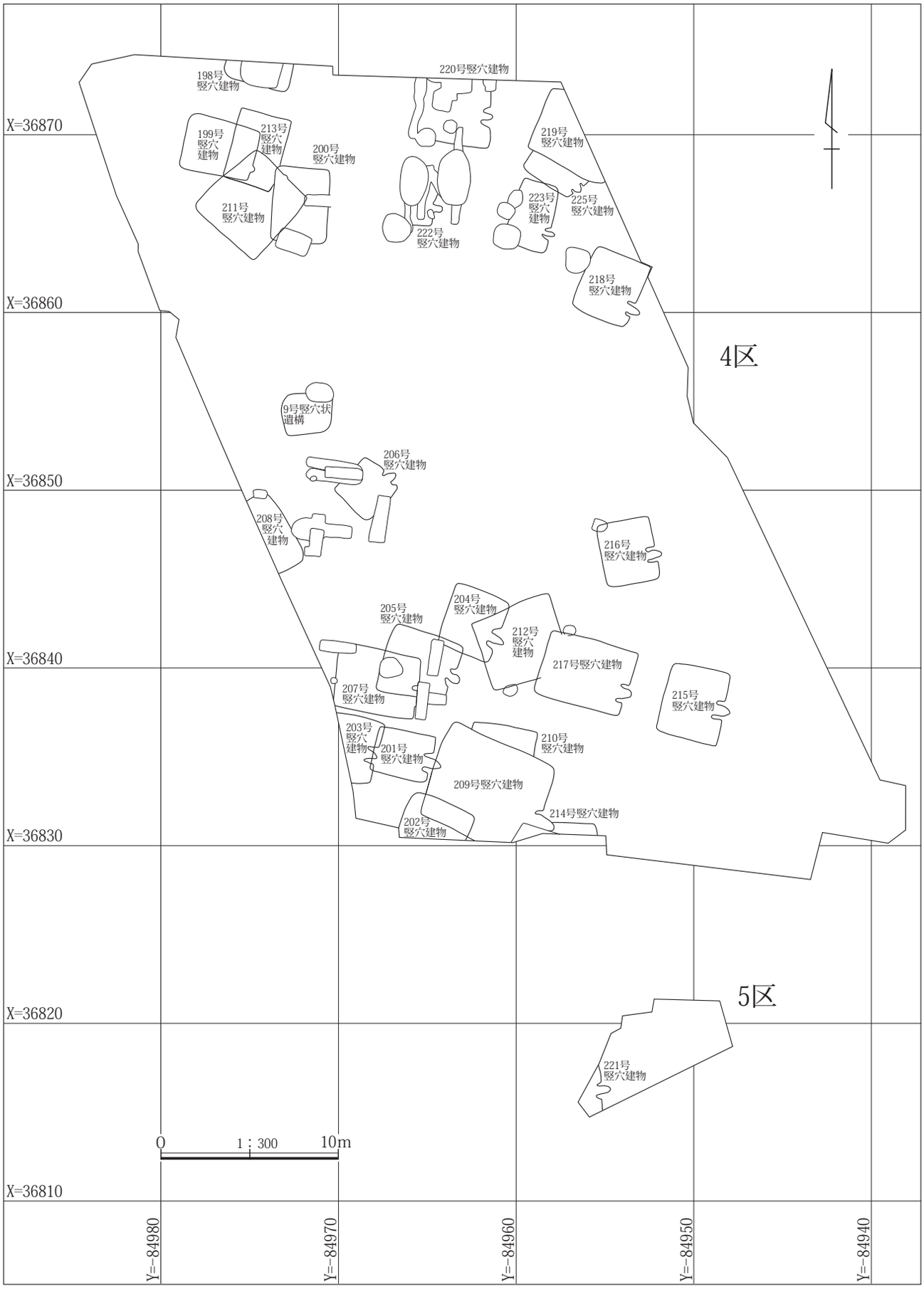
第13図　１区調査区　竪穴建物・掘立柱建物・竪穴状遺構配置図



第14図　２区調査区　竪穴建物配置図



第15図　３区調査区　竪穴建物・竪穴状遺構配置図



第16図　４・５区調査区　竪穴建物・竪穴状遺構配置図

石製品や金属器を若干出土している。その遺物量は遺物収納箱で245箱であった。その中でも土器は220箱と大部分を占めている。出土した土器の特徴としては、須恵器の出土量が圧倒的に多いことである。特に７世紀以降の須恵器出土量は県内の他遺跡と比較すると圧倒的な多さであった。７世紀から８世紀の竪穴建物では県内の集落遺跡を概観すると土師器が高い比率を示すのが一般的であるが、本遺跡では５割から７割ほどを占めている。特に食膳具では盤や高盤など一般的な集落ではほとんど出土しないか、出土してもわずかな点数しかみられない器種を多くみることができた。しかし、点数は多いがこれらの器種は残存状態が悪いことも特徴としてあげることができる。こうした須恵器の出土量が多いことは北側に存在する秋間古窯跡群が一因としてあげられ、本遺跡はその流通拠点的な役割を担っていた可能性も窺えた。

なお、土器の年代観については、出土した土器を基に編年をおこない、実年代を比定するのが、本来の作業である。しかし、整理期間の制約があるため、今回は筆者が今までに行った土器編年の成果を援用した。

第１項　竪穴建物

１号竪穴建物

位置　１区調査区北端、Ｘ＝37123～37127、Ｙ＝-85064～-85067に位置する。遺構の北半は調査対象区外に存在する。

重複関係　２号竪穴建物、９号竪穴建物、20号土坑と重複関係にある。新旧関係は２号竪穴建物より古く、９号竪穴建物よりは新しい。20号土坑との新旧関係は明確ではないが、本竪穴建物のほうが新しいとみられる。

形状　北半が調査対象区外に存在するため明確ではないが、隅丸方形または長方形を呈すると想定される。

規模　東西3.25m、南北は調査範囲で1.85mを測る。確認面から床面までの壁高は39～51㎝を測る。

床面積　調査範囲内で3.52㎡を測る。

主軸方位　東壁にカマドが構築されていると想定するとＮ－97°－Ｅを指す。

埋没状態　南西側から土砂が流入し、南壁、西壁側に三角堆積が進んだ後As-Cやローム粒を含んだ泥流土と見られる暗褐色土で短期間に埋没したとみられる。堆積状況の観察から自然埋没と判断される。

床面　ほとんどが地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　東西断面の東側で６㎝ほどの貼床が観察できたが、床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　西壁下で検出され、幅は25㎝前後、深さ４～５㎝を測る。

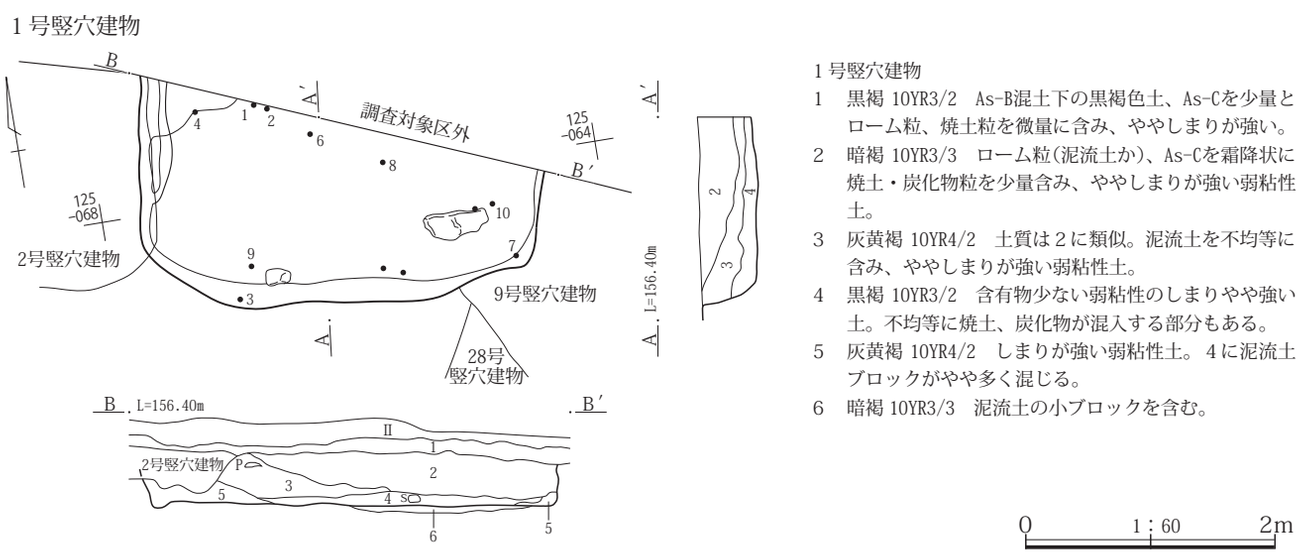
柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器皿・杯蓋・杯・椀、瓶、甕、羽釜及び灰釉陶器椀の小片が出土している。



第17図　１号竪穴建物遺構図

このうち、２の須恵器杯蓋、３の須恵器杯、７の須恵器椀、10の土師器甕が床面から出土している。なお、９の須恵器瓶は口縁部だけの出土であるため詳細は不明であるが、形態からは横瓶と想定される。

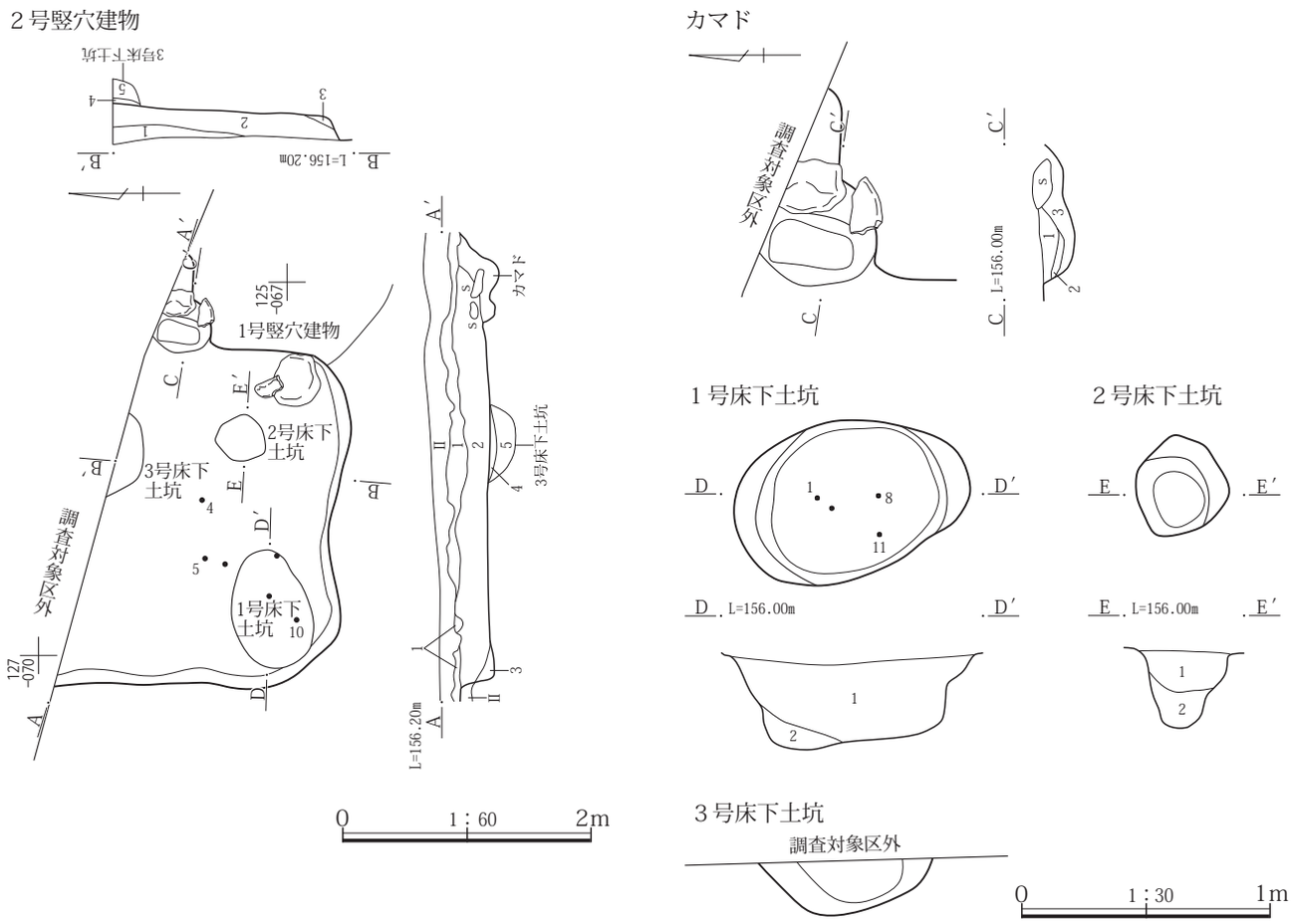
所見　本竪穴建物の存続時期は、床面から出土した遺物が少なく、それぞれの遺物に時間的な差が窺えるが、10の土師器甕や７の須恵器椀から９世紀第４四半期に比定できる。

２号竪穴建物

位置　１区調査区北端、Ｘ＝37125～37127、Ｙ＝-85066～-85069に位置する。遺構の北半は調査対象区外に存在する。

重複関係　１号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は１号竪穴建物よりは新しい。

形状　北半が調査対象区外に存在するため明確ではないが、隅丸方形または長方形を呈すると想定される。



２号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-B混土下の黒褐色土。As-Cを少量とローム粒、焼土粒を微量に含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　As-B混土下の黒褐色土。ローム状土の混入やや多く、粘性・黄色味が増す。炭化物粒の混入あり、ややしまりが強い。
3　灰黄褐 10YR4/2　ローム状土と２の混土、ややしまりがある。壁崩落土。
３号床下土坑
4　褐 7.5YR4/3　３号床下土坑埋め戻し土。漸移的に下へ向かって焼土を多く含むため赤変が強くなる。
5　暗褐 10YR3/3　３号床下土坑埋め戻し土。わずかに焼土を含む。
２号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/4　竪穴建物埋没土に比べ若干、焼土、炭化物粒、泥流土を多く含み、ややしまりが強い、直下にやや硬化した赤変部あり。
2　暗赤褐 5YR3/3　しまりが強い粘性土。火床面と想定され若干赤変部分あるが不明瞭。
3　暗灰黄 2.5YR4/2　焼土、ローム状土を含む弱粘性土。掘り方埋め戻し土とみられる。
２号竪穴建物１号床下土坑
1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物２に同様、ややしまりがある弱粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　１に多くの泥流土小ブロックが混じり、しまりは１と同じで柱の根固め部分とは判断できない。
２号竪穴建物２号床下土坑
1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物２に同じ、ややしまりがある弱粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/4　泥流土と１の混土、ややしまりが弱い。

第18図　２号竪穴建物遺構図

規模　東西2.71m、南北は調査範囲で2.25mを測る。確認面から床面までの壁高は11～22㎝を測る。

床面積　調査範囲内で4.52㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－95°－Ｅを指す。

埋没状態　周囲や壁崩落土が若干堆積した後、泥流土を含んだ暗褐色土で短期間に埋没したとみられる。堆積状況の観察から自然埋没と判断される。

床面　ほとんどが地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　南東部、南西角隅、中央で土坑状の落ち込みを３基検出している。それぞれの規模は、１号床下土坑が径0.96×0.54m、深さ0.39m、２号床下土坑が径0.35×0.35m、深さ0.31m、３号床下土坑は北半が調査対象区外のため明確ではないが、残存部分で径0.68m、深さ0.22mを測る。なお、１号床下土坑からは１の須恵器杯と８の灰釉陶器椀、11の土師器甕が出土している。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。位置的には２号床下土坑が該当する可能性があるが調査時の所見では柱穴ではないと判断されている。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　南東角隅には径40㎝、厚さ10㎝の円礫が据え置かれており、柱を据えた可能性がある。

火処　西壁にカマドが構築されている。左袖と煙道の一部は調査対象区外に延びるため全貌は不明である。残存状態は右袖及び燃焼部の天井は失われていたが、煙道部の燃焼部寄りには天井の補強に使用された礫が落下した状態で残存していた。規模は長さ0.85m（焚口～煙道の残存部分）×幅0.90m（右袖～焚口）を測る。袖・天井部の構築状態は不明である。土層断面観察ベルトで１と３の間に焼土層が確認できたが、この焼土層が燃焼部火床面なのか天井部面なのか判断できなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器椀等が出土している。土師器甕には９・10のようなロクロ整形によるものもみられる。このうち、４の須恵器椀、11の土師器甕が床面、１の須恵器杯、７・８の灰釉陶器椀、11の土師器甕が床下土坑から出土している。

所見　本竪穴建物の存続時期は、床面から出土した４の須恵器椀、10の土師器甕や床下土坑から出土した11の土師器甕等から10世紀第１四半期に比定できる。なお、床下土坑から出土した７・８の灰釉陶器椀はともに光ヶ丘１号窯式期に比定できる。このことから本竪穴建物の存続時期とは若干かけ離れているが、伝世されたものが竪穴建物構築時に床下土坑に埋納されたと判断される。

３号竪穴建物

位置　１区調査区北端、Ｘ＝37121～37122、Ｙ＝-85054～-85056に位置する。遺構の大部分は調査対象区外に存在する。

重複関係　近世の復旧坑である３号土坑、４号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

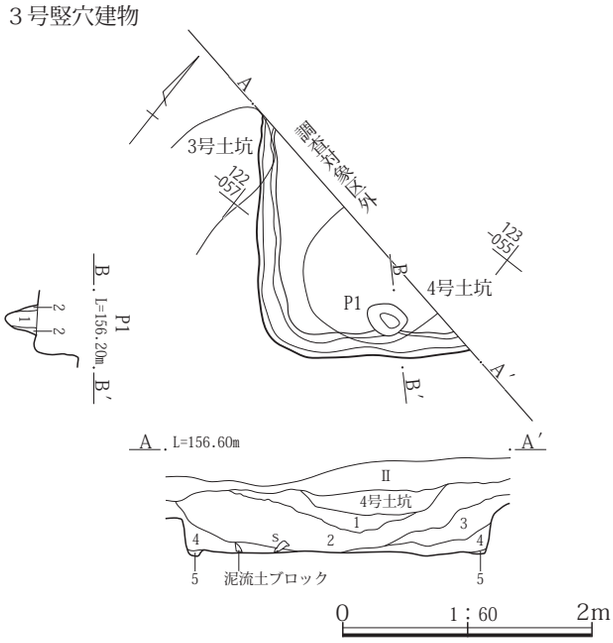
形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　調査可能範囲では南北1.97m、東西1.75mを測る。確認面から床面までの壁高は28～32㎝を測る。

床面積　残存範囲内で1.08㎡を測る。

主軸方位　主軸方向は不明であるが、南辺はＮ－40°－Ｗを指す。

３号竪穴建物



３号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　焼土を含む、弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　不揃いのローム粒土小ブロック不均等にやや多く含む、弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　含有物少ない、弱粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム状土と１の混土、ややしまりがない。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　壁溝内でやや黒色味強くなるが、炭化物等の含有は少ない。
３号竪穴建物Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　含有物少ない、しまりがある弱粘性土。柱痕と想定される。
2　灰黄褐 10YR4/2　１に灰褐色土小ブロックを含む。１よりしまりがやや強く、柱穴根固め部分とみられる。

第19図　３号竪穴建物遺構図

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などは検出されなかった。

壁溝　調査範囲では南壁及び東壁下で検出されている。規模は15㎝前後、深さ２～５㎝を測る。

柱穴　東壁の南東角から0.7ｍほど北、壁溝の際からＰ１が検出されている。このピットは土層断面の観察から柱穴と想定される。形状は楕円形を呈し、規模は径32×25㎝、深さ26㎝を測る。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器皿・杯蓋・杯・椀・甕などが出土しているが、取り上げ位置は全て埋没土であるため、出土位置から確実に本竪穴建物に伴うと判断できるものは出土していない。しかし、出土土器の全体的な形態の傾向からは９世紀第３四半期の年代観が与えられるものが大部分を占めている。なお、６の土師器杯は古墳時代後期に比定できるものであることから埋没時に混入したものと判断される。この他に埋没土より７の石製品磨石が出土している。

所見　本竪穴建物の存続時期は、床面など確実に共伴すると判断できる位置からの出土は存在していないが、前記のように４の土師器甕や１の須恵器皿、３の灰釉陶器椀等椀から９世紀第３四半期に比定できる。

４号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37113～37117、Ｙ＝-85049～-85053に位置する。遺構の北半は遺構外に存在し、北西角は攪乱によって壊されており、全貌は明確ではない。

重複関係　11号竪穴建物、29号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は11号竪穴建物、29号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　やや歪みがある方形または長方形を呈する。

規模　南北は4.28ｍ、東西は調査範囲で2.32ｍを測る。確認面から床面までの壁高は15～28㎝を測る。

床面積　残存範囲内で9.28㎡を測る。

主軸方位　東壁にカマドが構築されていると想定すると Ｎ－77°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁下に黄褐色土や暗褐色土など地山からの流入や崩落土が三角堆積した後に灰褐色土の流れ込みによって短期間に埋没したとみられ、自然埋没と判断される。

床面　ほとんどが地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などは検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

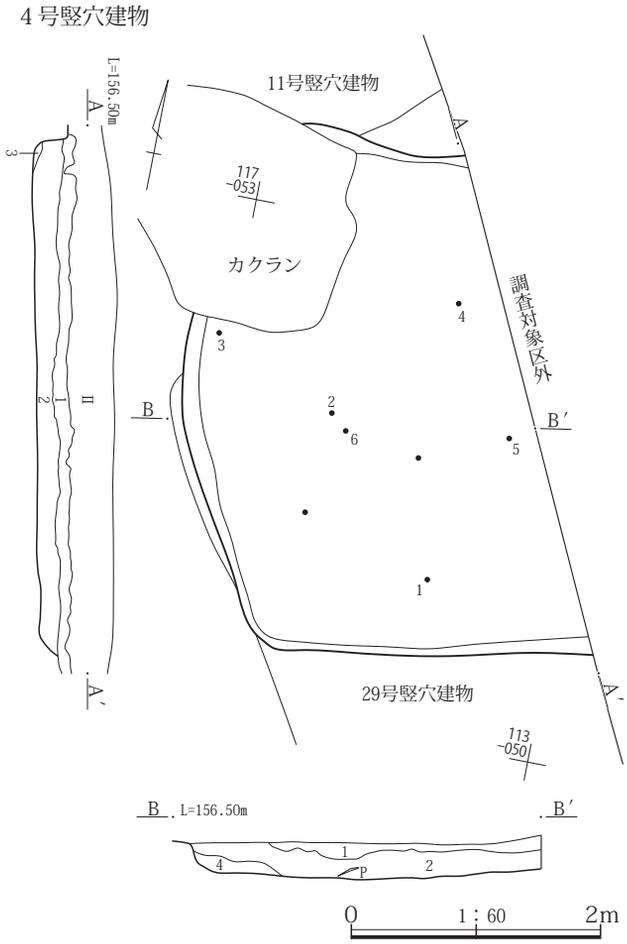
貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、石製品磨石、石皿などが出土している。

４号竪穴建物



４号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-B混土下の黒色土。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土の混土、焼土、泥流土粒を霜降状にやや多く含み、ややしまりが強い弱粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　２に多量の泥流土を含む、壁崩落土。
4　暗褐 10YR3/3　西側からの流入土。含有物少なく、ややしまりが強い弱粘性土。

第20図　４号竪穴建物遺構図

出土量は500点近くの土器があったが、図示できたものは６点だけであった。このうち、１の須恵器耳皿、２の須恵器杯蓋、６の須恵器大甕が床面から、４の須恵器長頸壺が床面より６㎝上、５の須恵器壺が７㎝上からの出土である。６の須恵器甕は胴部片であるが降灰の付着状態から須恵器窯で焼台として使用されていたとみられる。また、１の須恵器耳皿は床面からの出土であるが、焼成が酸化焔によることから10世紀代、４の須恵器長頸壺も胴部の形態が算盤玉状を呈することから７世紀後半から８世紀前半の年代観が与えられ、本竪穴建物の時期とは異なる。

所見　本竪穴建物の存続時期は、床面や床面近くから出土した土器のなかでも２・５の須恵器杯蓋・壺やこれらと同時期と判断できる３の須恵器杯から９世紀第２四半期に比定できる。

５号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37108～37113、Ｙ＝-85077～-85083に位置する。西側1/3ほどを重複する６号竪穴建物によって欠く。

重複関係　６号竪穴建物、７号竪穴建物、８号竪穴建物、16号土坑と重複関係にある。新旧関係は６号竪穴建物、７号竪穴建物、16号土坑より古く、８号竪穴建物より新しい。

形状　若干南北方向が長い長方形を呈す。

規模　南北方向4.50m、東西方向4.27mを測る。確認面から床面までの壁高は14～25㎝を測る。

床面積　推定で15.52㎡を測る。

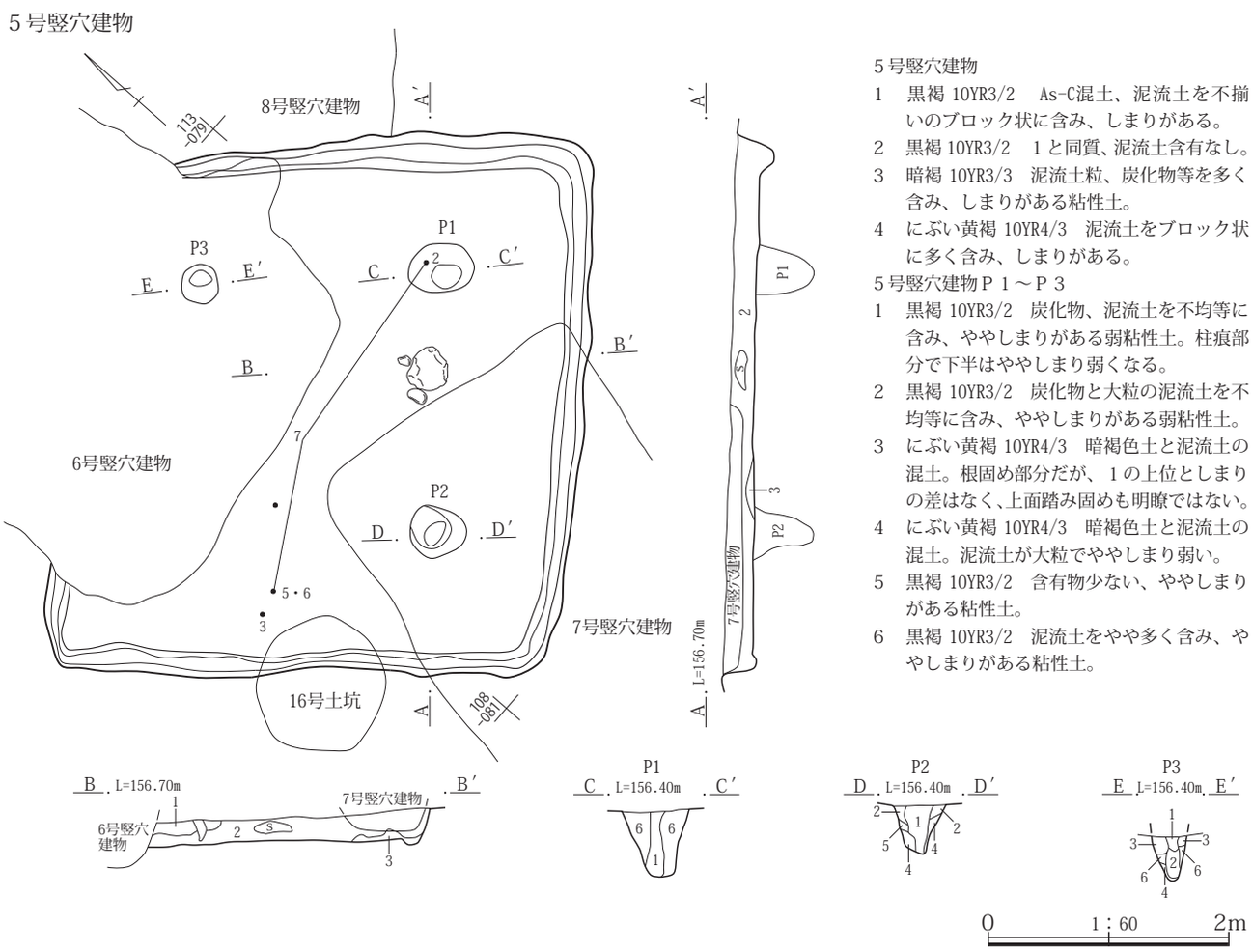
主軸方位　Ｎ－53°－Ｅを指す。

埋没状態　埋没土はほぼ黒褐色土の単一土であることから短期間に埋没したとみられる。埋没状態については判断できなかった。

床面　ほとんどが地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などは検出されなかった。

壁溝　６号竪穴建物によって欠損する部分を除いて全周



５号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土を不揃いのブロック状に含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR3/2　１と同質、泥流土含有なし。
3　暗褐 10YR3/3　泥流土粒、炭化物等を多く含み、しまりがある粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土をブロック状に多く含み、しまりがある。

５号竪穴建物Ｐ１～Ｐ３
1　黒褐 10YR3/2　炭化物、泥流土を不均等に含み、ややしまりがある弱粘性土。柱痕部分で下半はややしまり弱くなる。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物と大粒の泥流土を不均等に含み、ややしまりがある弱粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土と泥流土の混土。根固め部分だが、１の上位としまりの差はなく、上面踏み固めも明瞭ではない。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土と泥流土の混土。泥流土が大粒でややしまり弱い。
5　黒褐 10YR3/2　含有物少ない、ややしまりがある粘性土。
6　黒褐 10YR3/2　泥流土をやや多く含み、ややしまりがある粘性土。

第21図　５号竪穴建物遺構図

する。規模は幅が13～15㎝、深さは１～11㎝を測る。

柱穴　北西に位置するとみられる柱穴は検出できなかったが、Ｐ１～３の３本が検出されている。配置は各角を結んだ対角線上に位置するとみられる。各柱穴の形状と規模、柱穴間距離は次のとおりである。Ｐ１は楕円形を呈し、径33×30㎝、深さは６号竪穴建物の床面から65㎝、Ｐ２は楕円形を呈し、径47×45㎝、深さ53㎝、Ｐ３は楕円形を呈し、径62×40㎝、深さ70㎝を測る。各柱穴間距離はＰ１～Ｐ２が2.25ｍ、Ｐ３～Ｐ１が2.00ｍを測る。なお、本来は４本の柱穴が存在したと想定される。欠落する柱穴は６号竪穴建物の南西角に位置するため検出されていないが、６号竪穴建物の南西角ではピット状に落ち込みを検出しているが、形状や規模から６号竪穴建物に伴うものと判断されているが、底面の標高は５号竪穴建物柱穴Ｐ２と同様である。こうした点からこの位置に柱穴が存在した可能性が窺える。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　検出されなかったが、６号竪穴建物によって欠損した箇所にカマドが構築されていた可能性が高い。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器などが出土している。須恵器羽釜や灰釉陶器など重複関係にある竪穴建物から混入したとみられる土器も多く出土しているが、２の土師器杯、７の土師器甕が床面から、３の土師器鉢は床面より13㎝上、５の土師器甕は13㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土器に良好な残存状態のものが存在しないため判然としないが、６世紀末から７世紀前半代に比定できる。

６号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37110～37114、Ｙ＝-85078～-85082に位置する。北西部角が調査対象区外に存在する。

重複関係　５号竪穴建物・８号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が新しい。

形状　南北方向が長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が3.17ｍ、南北方向が3.78ｍを測る。確認面から床面までの壁高は20～50㎝を測る。

床面積　推定で9.76㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－85°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際に灰黄褐色土の三角堆積が確認できる他は黒褐色土が床面から確認面まで堆積しており、短期間に埋没したとみられる。埋没状態については、自然埋没と判断されるが断定には至らなかった。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などは検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

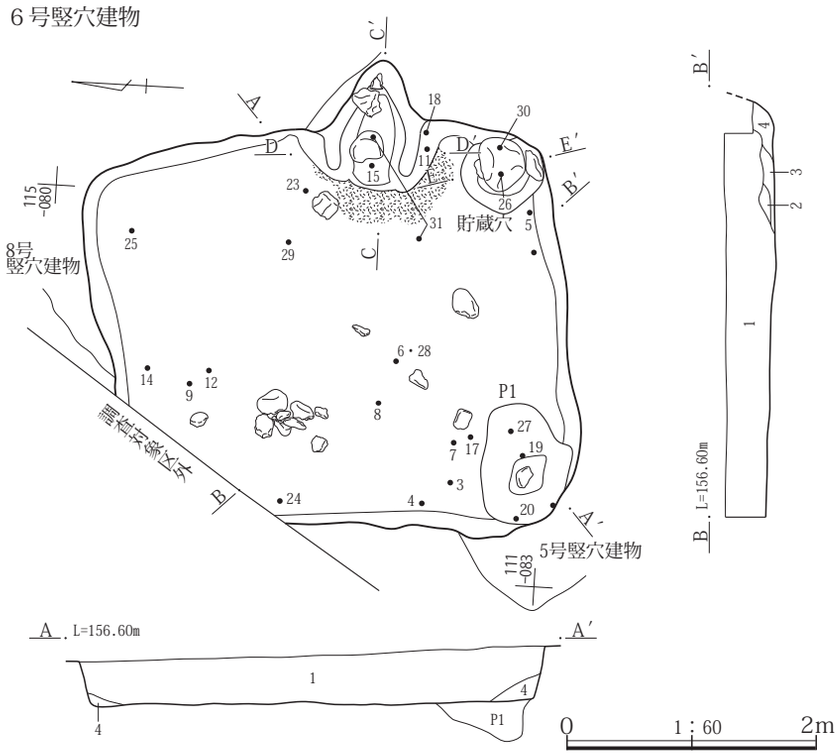
貯蔵穴　南東角隅で検出している。平面形態は楕円形を呈し、規模は径70×53㎝、深さ10㎝を測る。内部には40×40×25㎝、25×25×10㎝、10㎝大の亜角礫が充填された状態であった。

その他施設　南西角隅からも不定形状を呈した土坑状の落ち込みＰ１を検出している。このＰ１は一見重複する遺構とも見られたがこの位置に設定した土層断面の観察から本竪穴建物に伴うものと判断した。また、床下土坑の可能性も窺えたが床面位置では貼床や硬化した状態が確認されなかったことから使用面に伴うものと判断した。規模は径96×75㎝、深さ36㎝を測る。内部底面化には15㎝ほどの礫が出土している。

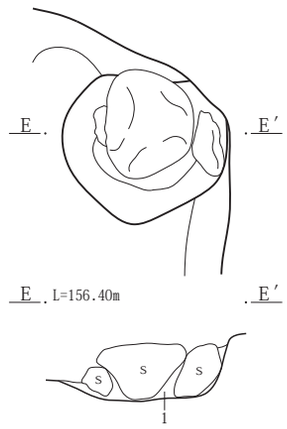
火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井部は壊されたのか、痕跡も残っていない状態であったが、両袖は比較的良好な状態であった。規模は全長が1.14ｍ、幅1.40ｍ、燃焼部幅0.38ｍを測る。天井部には径20～30㎝ほどの扁平な礫が使用されていたとみられる。また、袖にも芯材として礫が使用されていた。そしてカマド前の床面には掻き出された灰が拡散した状態であった。掘り方は0.6×0.5ｍほどの土坑状に掘り込まれていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器耳皿・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器、鉄製品釘などが出土している。このうち、３・４・７・８の須恵器杯、９の須恵器無台椀、12・14・19の須恵器有台椀、24・25の須恵器高足高台椀が床面から、27の須恵器椀がＰ１から、２の須恵器杯、11の須恵器無台椀、16の須恵器有台椀、22の足高高台椀、33の須恵器羽釜がカマドからの出土である。なお、本竪穴建物から出土している須恵器杯椀は全て酸化焔焼成によるものである。29の灰釉陶器皿は床面より９㎝上からの出土であるが、生産時期は大原２号窯式期に比定でき、

６号竪穴建物

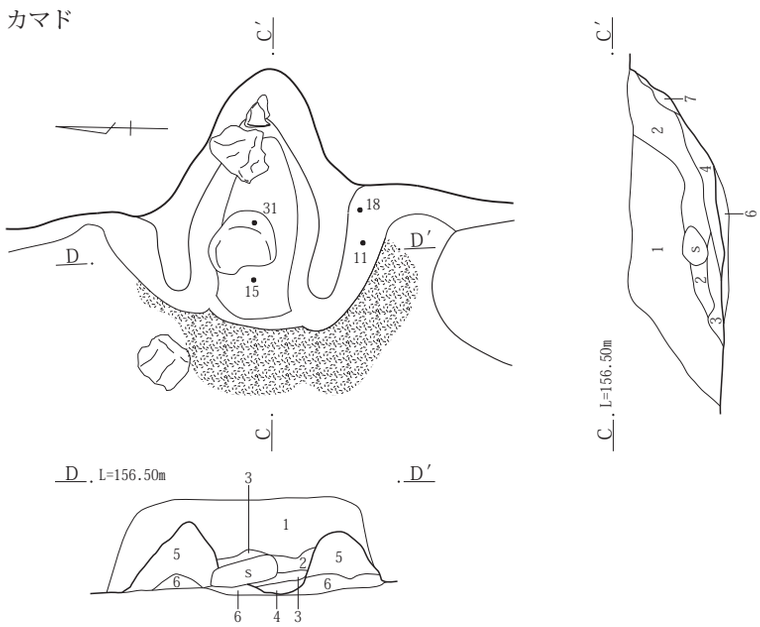


貯蔵穴

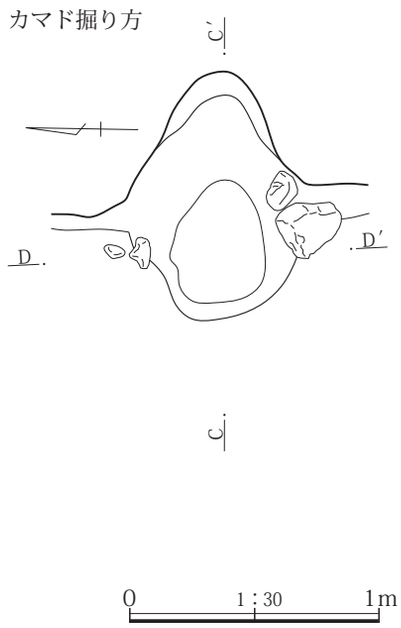


６号竪穴建物貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　ローム粒、As-Cを霜降状に含み、ややしまりがある弱粘性土。

カマド



カマド掘り方



６号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　ローム粒、As-Cを霜降状に炭化物、焼土を若干含み、ややしまりがある弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　ローム粒、As-Cを霜降状に泥流土をブロック状にやや多く炭化物、焼土を若干含み、ややしまりがある弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　しまりがある粘性土。黒色灰を含む、サラサラした感触。
4　灰黄褐 10YR4/2　含有物少ない暗褐色土と泥流土を不揃いのブロック状に含む。壁崩落土の混入土。
６号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/4　As-C混土、竪穴建物埋没土に類似するが、炭化物粒を多く含み、しまりがある弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/4　As-C混土、焼土の含有が多くなり、しまりがある弱粘性土。
3　褐 7.5YR4/3　灰と不均等に焼土をやや多く含み、ややサラサラした感触。
4　黒褐 10YR2/2　黒色灰主体、ややしまりを欠く、下半に火床面とみられる面があり、火床面に堆積した灰とみられる。
5　灰褐 7.5YR4/2　炭化物、焼土を含み、しまりがある弱粘性土。
6　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土と４の混土、しまりがある粘性土。
7　灰褐 5YR4/2　被熱して赤変している。

第22図　６号竪穴建物遺構図

本竪穴建物に共伴すると判断できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯・椀から10世紀第２四半期に構築され、10世紀第３四半期まで存続したと想定できる。

７号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37106～37110、Ｙ＝-85078～-85081に位置する。

重複関係　５号竪穴建物、77号ピットと重複関係にある。新旧関係は77号ピットより本竪穴建物の方が古く、５号竪穴建物より新しい。なお、５号竪穴建物との間では埋没土の層位にほとんど違いがなかったため発掘調査時の新旧関係の判定が不明瞭であった。そのため、発掘調査は５号竪穴建物と同時に掘削を行った。このため、本竪穴建物北半の検出ができていない。

形状　南北に長い長方形を呈する。

規模　主軸方位である東西方向は2.62m、南北方向は3.26mを測る。確認面から床面までの壁高は16～28㎝を測る。

床面積　推定で7.36㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－75°－Ｅを指す。

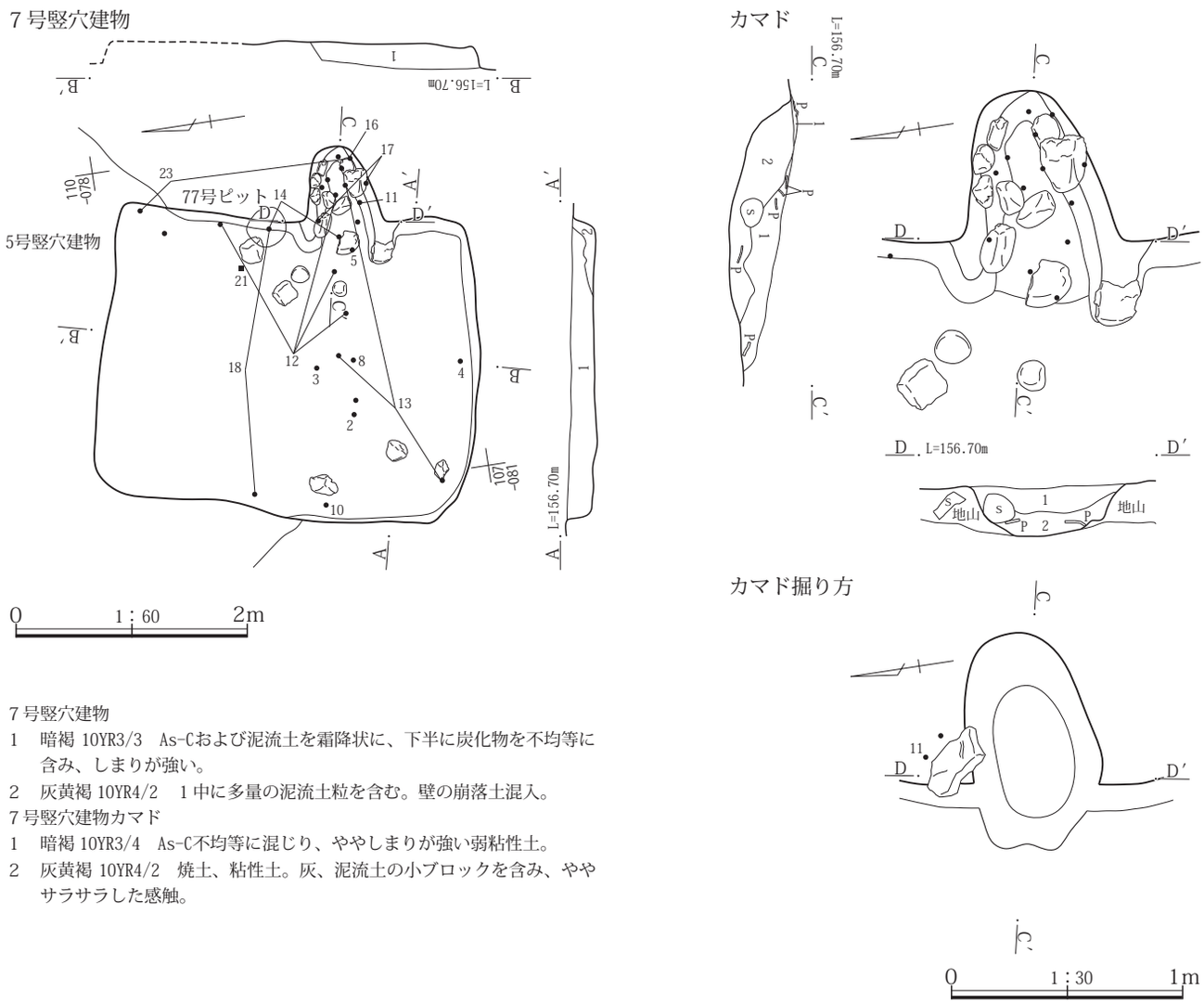
埋没状態　土層断面の観察ではほぼ暗褐色土の単一土砂で埋没しており、判断が難しいとことがあるが、自然埋没と想定される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や５号竪穴建物埋没土を踏み固めて平坦面を構築している。なお、５号竪穴建物との重複箇所では明確な硬化面は検出されなかった。

掘り方　貼床や床下土坑などは検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。



７号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-Cおよび泥流土を霜降状に、下半に炭化物を不均等に含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　１中に多量の泥流土粒を含む。壁の崩落土混入。
７号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/4　As-C不均等に混じり、ややしまりが強い弱粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　焼土、粘性土。灰、泥流土の小ブロックを含み、ややサラサラした感触。

第23図　７号竪穴建物遺構図

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は両袖が残存していたが、焚口や燃焼部から煙道にかけての天井は壊され、補強に使用されたと見られる礫が散乱した状態であった。規模は全長1.00m、幅0.92m、燃焼部幅0.40mを測る、燃焼部から煙道には径15～25㎝の礫を構築材としてならべて補強にしていた。掘り方は浅い楕円形の土坑状を呈している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、緑釉陶器、灰釉陶器、土製品瓦、鉄製品鎌などが出土している。このうち、３・４の須恵器無台椀、５・６・８の須恵器有台椀、17の須恵器羽釜は床面から、11のロクロ土師器甕、12～16の須恵器羽釜はカマドからの出土である。カマドから出土した土師器甕や須恵器羽釜は床面や埋没土内から出土した破片とも接合関係にあった。なお、緑釉陶器椀は埋没土、灰釉陶器椀は床面より17㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器椀や羽釜から10世紀第２四半期に比定できる。なお、６号竪穴建物とは直接の重複関係にはないが、近接しており、同時に存在していたとは想定しにくい。こうしたことから、本竪穴建物の廃棄後に６号竪穴建物を構築したと想定する。

８号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37110～37116、Ｙ＝-85076～-85081に位置する。

重複関係　５号竪穴建物、６号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が古い。そのため南壁側を６号竪穴建物によって欠く。

形状　南北方向が10㎝ほど長いがほぼ方形を呈する。

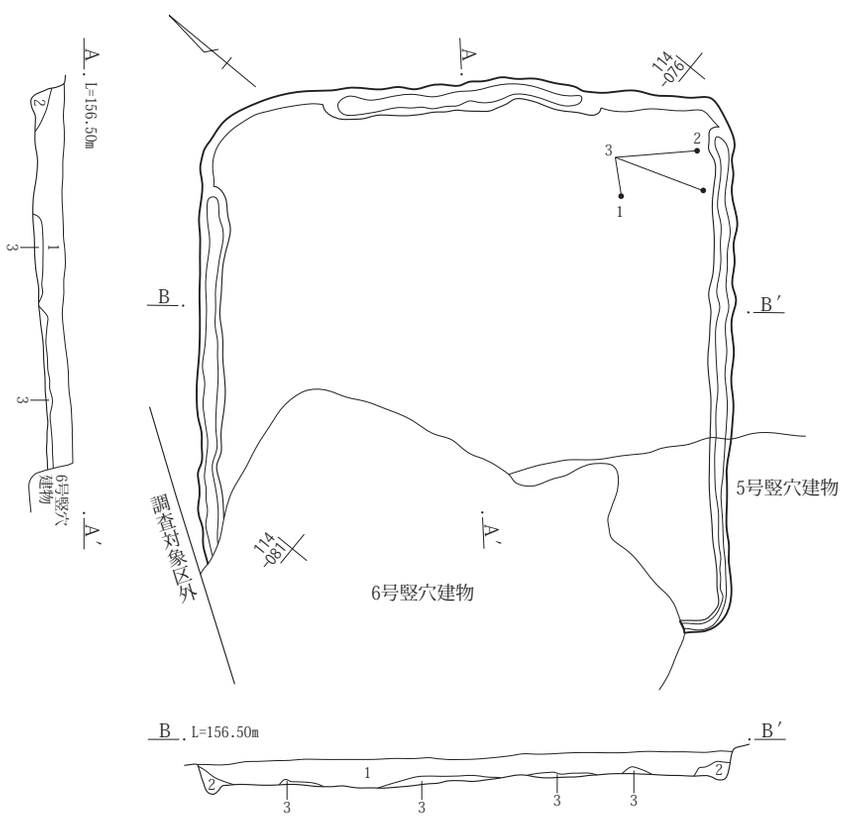
規模　南北方向4.38m、東西方向4.28mを測る。確認面から床面までの壁高は11～27㎝を測る。

床面積　推定で16.26㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－50°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できるが、その後はほぼ暗褐色土によって短期間に埋没したとみられる。堆積状況の観察から自然埋没と判断される。

８号竪穴建物



８号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の白色粒を１％、φ１～３㎜の褐色土ブロックを１％、炭化物片を少量含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　黄褐色土ブロックを10％含み、しまりがある。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土を30％含む。

0　1：60　2m

第24図　８号竪穴建物遺構図

床面　南東角隅と北西角隅では15㎝ほどの高低差が見られる。床面は地山を踏み固めている。

掘り方　貼床や床下土坑などは検出されなかった。

壁溝　北壁下の両角側から1.0ｍを除く壁下で検出している。幅は15㎝前後、深さは２～６㎝を測る。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。調査区内で検出された竪穴建物のカマドは東壁または北壁、ごくわずかであるが西壁に構築され、南壁に構築されているものは確認されていないことから、６号竪穴建物内に炉が設けられていたと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕などが出土しているが、出土量は図示７点、未掲載遺物198点と少ない。このうち、２・３の土師器壺が床面からの出土である。なお、７の須恵器短頸壺を除く他の土器も本竪穴建物に共伴するものであるが、７は後の混入である。

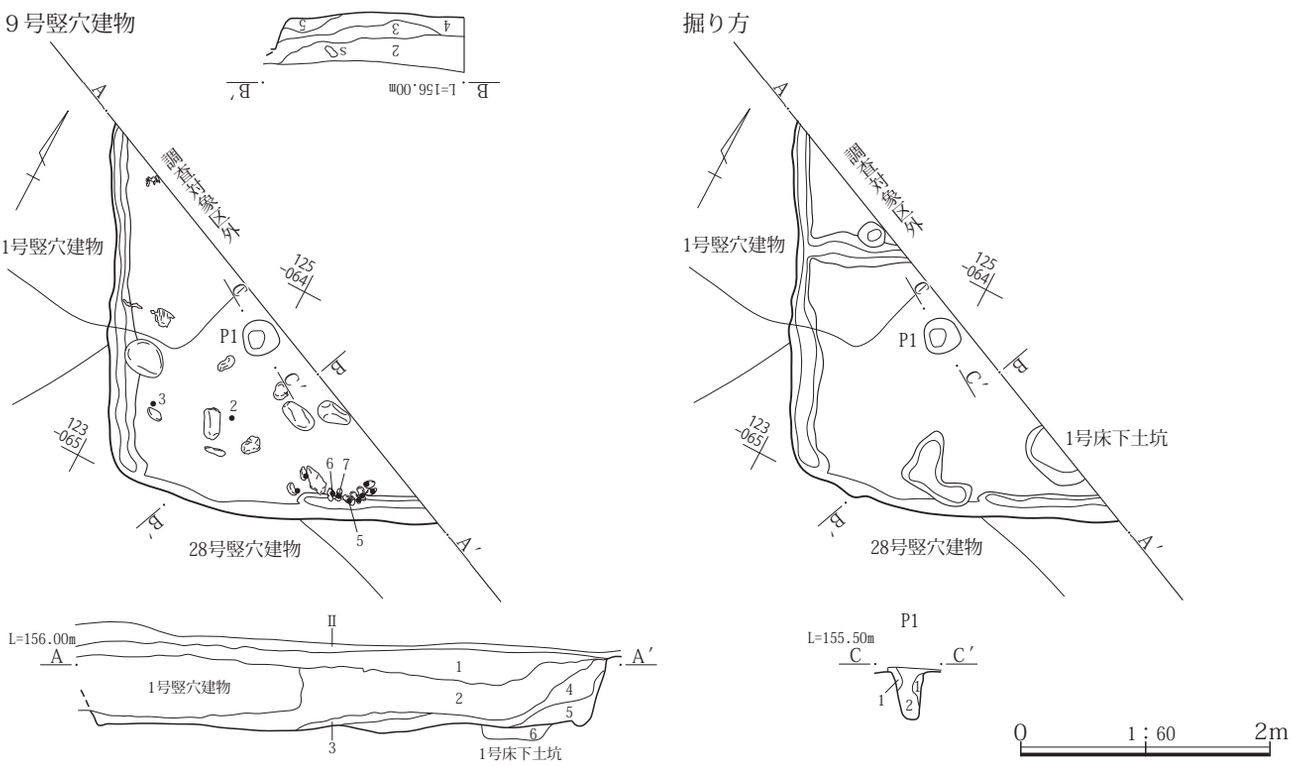
所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器から４世紀代に比定できるが、詳細な時期の断定までは至らない。

９号竪穴建物

位置　１区調査区の北端、Ｘ＝37123～37125、Ｙ＝−85062～−85065に位置する。遺構の北側の3/4は調査対象区外に存在すると見られる。

重複関係　１号竪穴建物、28号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は１号竪穴建物より古く、28号竪穴建物よりは新しい。

形状　南西角の一角部分しか調査が行えなかったため明確ではないが、方形または長方形を呈すると想定される。



９号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量とローム粒、焼土粒を微量に含み、ややしまりが強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いの泥流土ブロックをやや多く焼土、炭化物等をわずかに含み、しまりが強い弱粘性土。
3　灰褐 5YR4/2　多量の焼土、炭化物を含み、ややしまりが弱い。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土粒を主体、ややしまりが弱い。
5　黒褐 10YR3/2　炭化物粒や灰と泥流土ブロックを不均等に含み、しまりが弱くややサラサラした感触。
6　灰黄褐 10YR5/2　含有物少なく、ややしまりがある粘性土。
９号竪穴建物Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　泥流土が混じり、上位はしまりが強い粘性土、下半はかなりしまり弱くなる。柱痕とみられる。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土ブロック主体、しまりがある。根固め部分とみられる。

第25図　９号竪穴建物遺構図

規模　調査部分では南北3.17m、東西は調査範囲で2.69mを測る。確認面から床面までの壁高は32～52㎝を測る。

床面積　残存範囲内で3.19㎡を測る。

主軸方位　東壁にカマドが構築されていると想定するとＮ－65°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から黒褐色土、暗褐色土、灰褐色土などが流れ込んだ後、泥流ブロックを含む黄褐色土で短期間に埋没したとみられる。堆積状況の観察から自然埋没と判断される。

床面　掘り方では間仕切り溝や床下土坑、部分的な掘り込みなどが検出されているが、貼床は検出されなかった。大部分は地山を踏み固めている。

掘り方　西辺から直角に間仕切り溝とみられる小溝が１条と床下土坑が１基検出されている。床下土坑は北半が調査対象区外であるが楕円形を呈し、規模は径0.67m、深さ0.15mを測る。この他にも小ピットと不定形の落ち込みを検出している。

壁溝　西壁下と南壁下中程で検出している。規模は幅10～20㎝、深さ３～６㎝を測る。

柱穴　東壁から1.3m、西壁1.1mの位置に柱穴を検出している。検出した柱穴の位置から見ると４本柱を設置していたとみられる。柱穴１は径28×30㎝、深さ43㎝を測る。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。

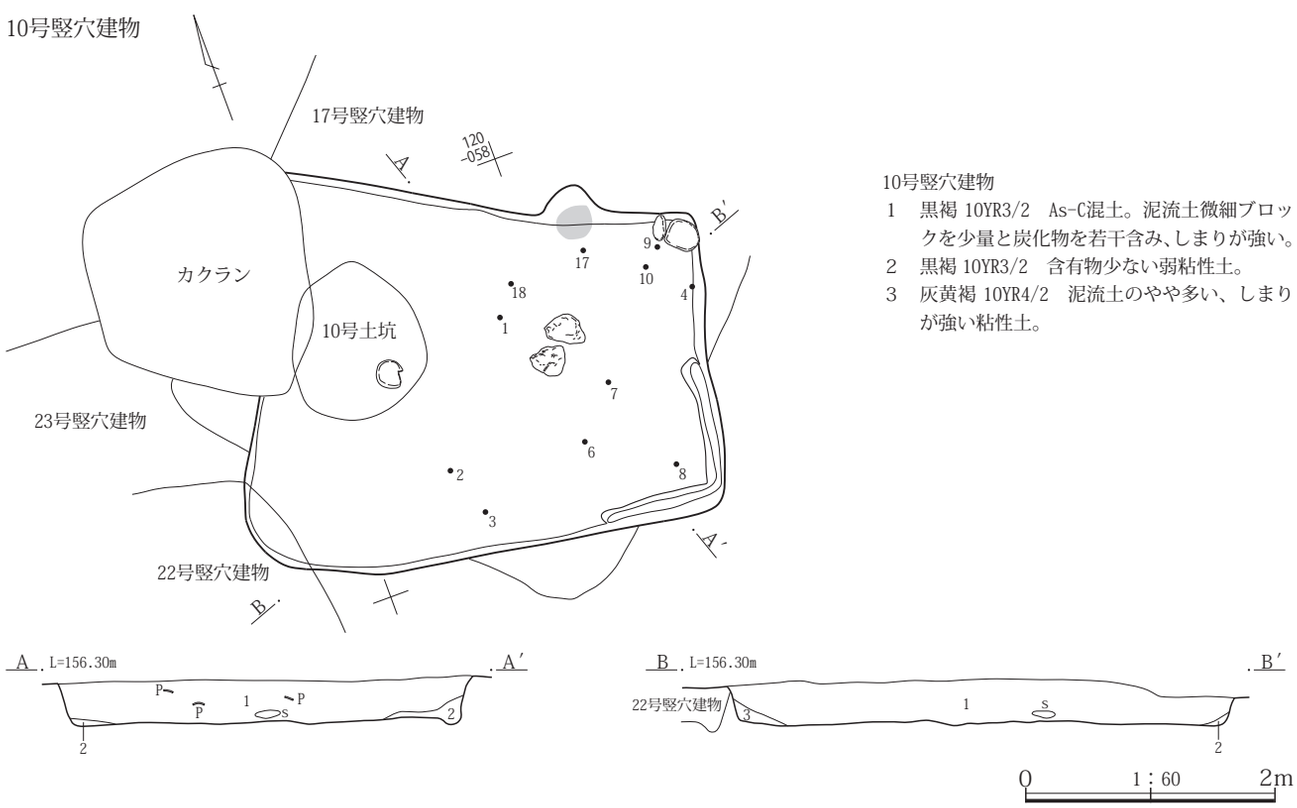
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕と石製品棒状礫が出土している。出土した土器は図示４点、未掲載53点とわずかである。このうち、２の土師器甑が床面からの出土である。なお、図示した他の土器も本竪穴建物に共伴するものである。この他に、棒状礫が南壁下壁溝西端から７点がまとまって出土している。この棒状礫は菰編み石とみられる。

所見　竪穴内部からは炭化材が散乱した状態で出土しているが、柱材や梁材など径のある材は確認できないことから、竪穴建物廃絶の際に不要な材を焼却したものと想定される。本竪穴建物の存続期間は、６世紀後半代に比定できる。

10号竪穴建物

位置　１区調査区の北部、Ｘ＝37116～37120、Ｙ＝-85056～-85060に位置する。この調査箇所は遺構の重複が激しいのと撹乱によって不鮮明な点がある。

重複関係　17号竪穴建物、22号竪穴建物、23号竪穴建物、



第26図　10号竪穴建物遺構図

10号土坑と重複関係にある。本竪穴建物は10号土坑より古いが、17号竪穴建物、22号竪穴建物より新しい。なお、22号竪穴建物との関係は判然としなかったが、出土遺物からみると本竪穴建物のほうが古いと判断できる。

形状　東辺が西辺に比べて1.0mほど短い台形状を呈する。

規模　主軸方向の南北は3.23m、東西方向は3.87m、各辺は北辺3.25m、東辺2.35m、南辺3.80m、西辺3.20mを測る。壁の残存は不良であるが、比較的残りの良い南東角付近で35～38㎝ほどである。

床面積　推定で9.15㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－13°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際に黒褐色土による三角堆積が観察できる他は黒褐色土によって短期間に埋没したとみられる。堆積状況の観察から自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などは検出されなかった。

壁溝　　東壁下、南壁下で南東角から1.05mと0.95mの2.0mの長さを検出している。幅は15㎝前後、深さは２～５㎝を測る。

柱穴　検出されなかったが、床面の中程で径20～30㎝の礫が東西方向に1.3mの間隔で配置されており、礎石の可能性が窺えた。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の東寄りでカマドが構築されている。残存状態は悪く、燃焼部の火床面が確認できただけであった。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、黒色土器杯、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。出土した土器の多くは埋没土からで比較的上位からであるが、このうち、８・９の須恵器椀が床面からの出土である。また、床面に近い位置からは３の須恵器杯、10の須恵器椀が出土している。なお、緑釉陶器は２点同一個体とみられ、底部の形態から京都洛北産、９世紀前半代に比定できる。

　なお、５の須恵器杯底部には刻書がみられ、「為」と判読された。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器椀から９世紀第３四半期に比定できる。本竪穴建物から出土した遺物は埋没土からが多いが、５の須恵器杯、６・７の須恵器椀を除いて共伴すると判断できる。

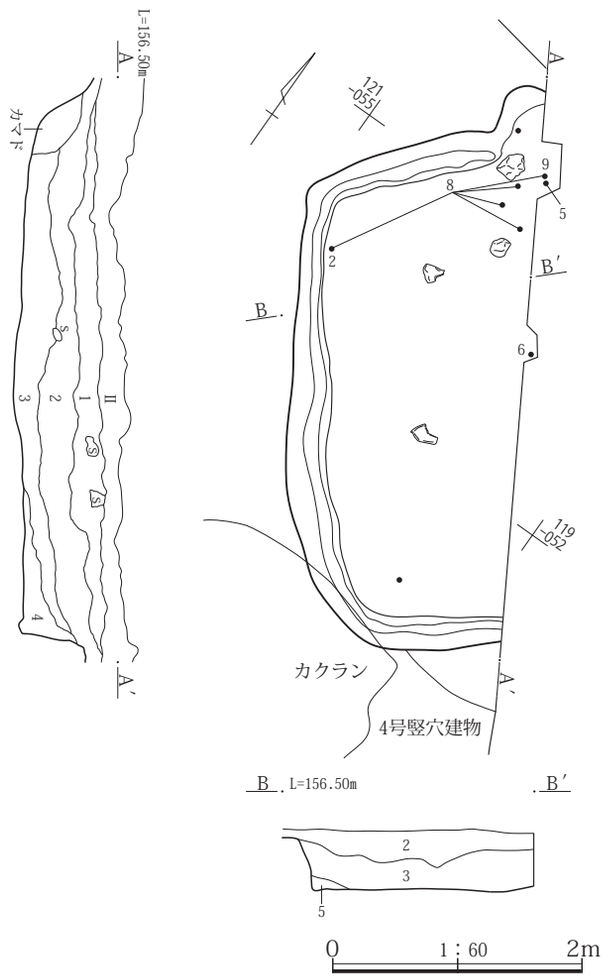
11号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37112～37118、Ｙ＝-85051～-85055に位置する。遺構の東半は調査対象区外に存在し、南西角は撹乱で失われていた。

重複関係　４号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が古い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

11号竪穴建物



11号竪穴建物
Ⅱ　As-B混土。
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを霜降状に含み、ややしまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　ローム状土、多くのAs-C、炭化物粒を不均等に含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　多くの泥流土を不均等に含み、しまりがある弱粘性土でねっとりした感触。
4　黒褐 10YR3/2　泥流土を霜降状に含み、ややしまりがある粘性土、壁崩落土。
5　にぶい黄褐 10YR4/4　壁崩落土、泥流土が基質、黒色土がブロック状に含む。

第27図　11号竪穴建物遺構図

規模　主軸方位である南北方向は4.07m、東西方向は調査範囲内で1.83mを測る。確認面から床面までの壁高は39～48㎝を測る。

床面積　残存範囲内で5.51㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－32°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際ににぶい黄褐色土が三角堆積をした後に周囲から流れ込んだ暗褐色土によって埋没している。土層断面の観察では壁際の三角堆積、中程にレンズ状の堆積がみられることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などは検出されなかった。

壁溝　調査範囲では、カマド部分を除いて壁下に設けられている。規模は幅10～14㎝、深さ１～６㎝を測る。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　北壁にカマドが構築されている。東半は調査対象区外のため全貌は不明である。左袖と焚口、燃焼部の天井は痕跡がわからなくなるほど壊されている。また、燃焼部の火床面では焼土層を観察できないことからほとんど使用されていない可能性が窺える。規模は長さ0.70m、幅は調査区内で0.30mを測る。掘り方は確認されていない。燃焼部及び焚口前からは７・８の土師器甕が出土している。

出土遺物　遺物は土師器杯、甕、須恵器杯・壺・甕、灰釉陶器、流動滓が出土している。このうち、７・８の土師器甕がカマド焚口前の床面から、２の大型の土師器杯が床面より８㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続時期、は床面から出土した土師器杯や甕から６世紀末から７世紀前半に比定できる。

12号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37108～37111、Ｙ＝-85057～-85060に位置する。

重複関係　38号竪穴建物、42号竪穴建物、179号竪穴建物、12号土坑、74号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が38・42・179号竪穴建物より新しく、12号土坑、74号土坑より古い。

形状　南北方向が長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が2.67m、南北方向が3.56mを測る。確認面から床面までの壁高は18～24㎝を測る。

床面積　7.73㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－91°－Ｅ

埋没状態　土層断面の観察では壁際で灰黄褐色によるわずかな三角堆積が確認される他は黒褐色土で短期間に埋没しており、埋没状態については判断が難しい。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　床面の北半中央で床下土坑を１基検出している。１号床下土坑は長方形に近い形状で、規模は1.07×0.63m、深さ0.28mを測る。内部からは１の須恵器杯と９の須恵器甕が出土している。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南寄りにカマドが構築されている。残存状態は両袖が残っていたが、燃焼部から煙道部にかけての天井は壊され痕跡も残存していなかった。そして燃焼部から焚口前の床面に多くの礫が散乱していた。これらの礫は大きさから煙道の補強に使用されていた可能性がある。規模は全長0.90m、幅0.90m、燃焼部幅0.50mを測る。焚口と燃焼部手前側には焼土、焚口手前の床面では灰層が確認されている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器、銅製品、鉄製品、流動滓などが出土している。このうち、６の灰釉陶器椀が床面から、３の須恵器椀、７・８の須恵器羽釜がカマドから、１の須恵器杯と９の須恵器甕が床下土坑からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドや床下土坑から出土した須恵器杯・椀・羽釜から10世紀第３四半期に比定できる。

13号竪穴建物

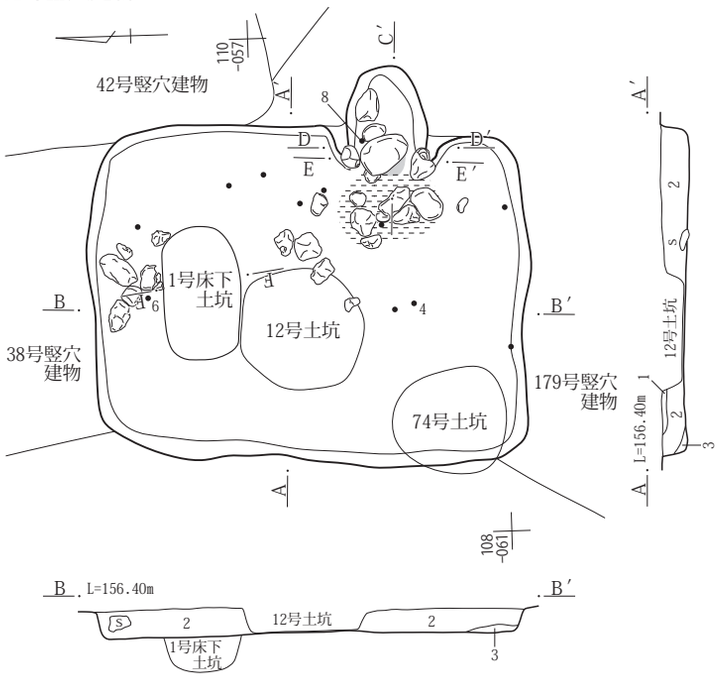
位置　１区調査区東部、Ｘ＝37106～37109、Ｙ＝-85073～-85077に位置する。

重複関係　30号竪穴建物、50号竪穴建物、135号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物が新しい。

形状　東西方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が3.54m、南北方向が2.54m

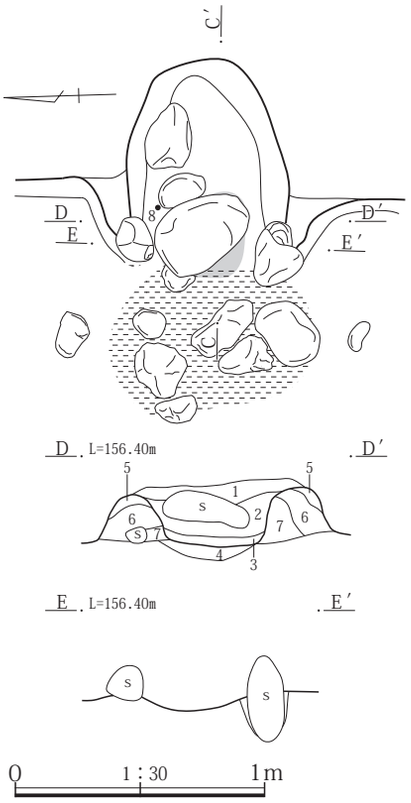
12号竪穴建物



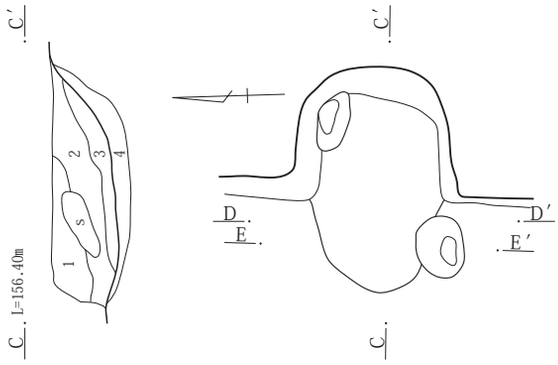
12号竪穴建物
1　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒をやや多く含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物粒、泥流土小ブロック、As-Cを少量含む、弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　１に泥流土を少量と壁崩落土を含む。

0　1：60　2m

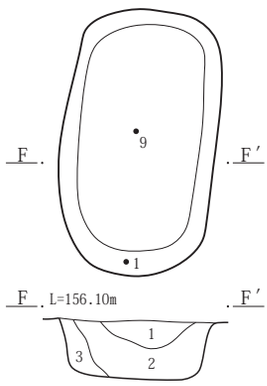
カマド



カマド掘り方



１号床下土坑



12号竪穴建物カマド
1　暗褐10YR3/3　焼土を含み、しまりがある弱粘性土。竪穴建物埋土と変わらない土。
2　黒褐 10YR3/2　灰を含み、ややしまりを欠くサラサラした感触。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土混じり、明瞭な焼土を不均等に含み、ややしまりを欠く弱粘性土。天井材等の崩落土とみられる。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰、炭化物粒を不均等に含み、ややしまりを欠く。カマド堀方整形土。
5　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒が混じり、しまりが強い。
6　暗褐 7.5YR3/3　含有物少ない細粒土。右袖の袖材で被熱顕著。
7　暗褐 10YR3/3　含有物少ない細粒粘性土。

12号竪穴建物 床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１～３㎜の褐色土ブロックを２％、φ１～10㎜の炭化物片を２％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％、φ１～３㎜の赤褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
3　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを５％、φ１～３㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。

0　1：30　1m

第28図　12号竪穴建物遺構図

を測る。確認面から床面までの壁高は36～46㎝を測る。

床面積　6.27㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－102°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際に三角堆積、竪穴内部にレンズ状の堆積が確認されることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などは検出されなかった。

壁溝　北壁の西半から西壁、南壁の南西角から2.35mの壁下で検出している。規模は幅が15～35㎝、深さ３～４㎝を測る。

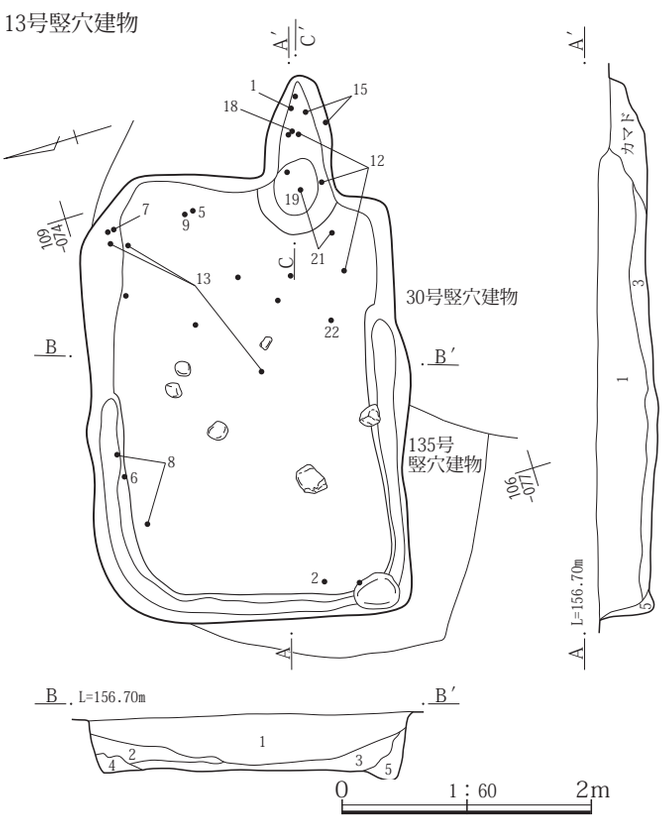
柱穴　検出されなかった。

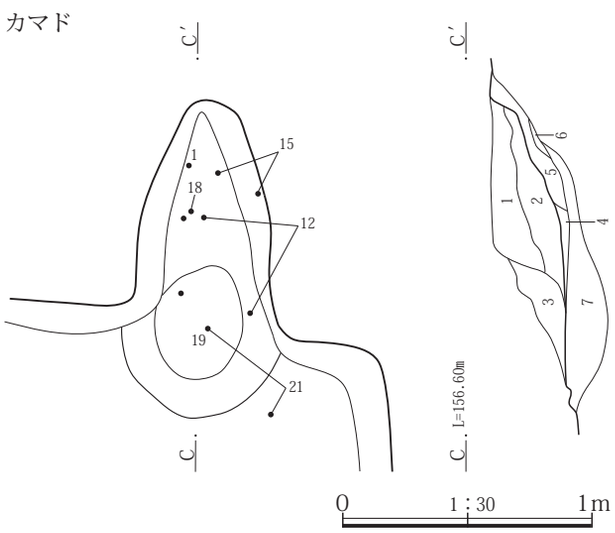
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道部の天井部、袖とも痕跡が残らないほど失われていた。規模は全長、1.57m、幅0.82mを測る。なお、煙道は壁外に0.8mほど掘り込まれている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・皿・杯・椀・壺・甕、灰釉陶器、土製品土錘・鞴羽口、鉄製品鎌・馬具杏葉・釘などが出土している。このうち、８の須恵器椀が床面から、１の黒色土器椀、12の須恵器壺、15・16のロクロ土師器小型甕、17～21の土師器甕がカマドからの出土である。２の須恵器脚杯皿は床面より７㎝上からの出土である。この皿は脚部もロクロの上に粘土板を置き、その上に整形しており、皿部との接合面にも回転





13号竪穴建物カマド

1　暗褐 10YR3/3　炭化物粒、焼土を少量含み、しまりが強い弱粘性土でややサラサラした感触。

2　灰褐 7.5YR4/2　As-C混土、ぼんやりと赤色味をおびるような不明瞭な焼土とともに灰を含み、ようでサラサラした感触。

3　暗褐 10YR3/3　しまりが強い弱粘性土、細粒土でややサラサラした感触。

4　褐 7.5YR4/3　焼土が増すためか３より赤色味をおびるとともに、炭化物等入も少量含む、さらにサラサラした感触。

5　褐 7.5YR4/3　多くの焼土、少量の炭化物を含み、サラサラした感触。

6　黒褐 10YR3/2　黒色弱粘性土、最下部に黒色灰の極めて多く含み、しまりが強い。火床面とみられる。

7　灰黄褐 10YR4/2　泥流土、焼土、炭化物粒を多く含み、しまりごく強い弱粘性土。掘方埋め戻し土。

13号竪穴建物

1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～３㎜の褐色粒を１％、φ５～10㎜の褐色土ブロックを３％、炭化物片を２％、φ１～３㎜の赤色粒を１％含み、固くしまりがある。

2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、固くしまりがある。

3　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロック20％、炭化物片を２％含み、若干柔らかい。東側では褐色土ブロックはわずかである。

4　にぶい黄褐 10YR3/4　褐色土ブロックを10％含む。

5　暗褐 10YR3/3褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。

第29図　13号竪穴建物遺構図

糸切り痕が残っていた。土師器甕は胴部上位が横方向のヘラ削りとロクロ整形で上部がナデと胴部に縦方向のヘラ削りが施された３通りの成整形がみられた。なお、26の鉄製品鎌は北壁際の床面より９㎝上、27の馬具杏葉はカマド手前の床面より６㎝上からの出土で、本竪穴建物の壁高が40㎝前後であることから、本竪穴建物に共伴すると考えられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器椀や土師器甕から９世紀第４四半期に比定できる。

14号竪穴建物

位置　１区調査区中央部北寄り、Ｘ＝37096～37100、Ｙ＝−85059～−85063に位置する。

重複関係　118号ピットと重複関係にある。新旧関係は118号ピットより本竪穴建物のほうが新しい。

形状　東西方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が3.43m、南北方向が3.08mを測る。確認面から床面までの壁高は36～46㎝を測る。

床面積　8.34㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－106°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際に三角堆積、竪穴内部にレンズ状の堆積が確認されることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。土層断面では２面の床面を確認している。

掘り方　床下土坑などは確認されていない。床面は全面ではないが埋没土の上下で２面を確認している。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道の天井部は失われていたが、側壁である両袖は残存していた。また、燃焼部には煮炊き用に掛けられていたとみられる７の土師器甕が出土している。規模は全長、0.75m、幅1.00m、燃焼部幅0.45mを測る。なお、煙道は壁外に掘り込まれている。掘り方は南北に細長い土坑状に掘り込まれ、壁際に沿って径25～40㎝、深さ15～31㎝のピット状落ち込みが３箇所検出されている。

出土遺物　遺物は土師器杯、甕、須恵器杯蓋・杯・長頸壺・甕、灰釉陶器、鉄製品釘・刀子小片などが出土している。このうち、７・８の土師器甕がカマドから、２・３の土師器杯が床面より９～12㎝ほど上から、４の須恵器杯が床面より17㎝ほど上から，５の須恵器杯と９の土師器甕が床面より27㎝、26㎝ほど上から出土している。

所見　本竪穴建物の存続時期は、床面よりやや上位からの出土であるが、３の土師器杯、４の須恵器杯から７世紀第４四半期に比定できるが、カマドから出土している７・８の土師器甕は頸部下の整形が縦方向だけであることから７世紀第３四半期の年代観が与えられる。こうした出土土器の形態から本竪穴建物の存続年代は、７世紀第３四半期後半から第４四半期に比定できる。

15号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37106～37109、Ｙ＝−85073～−85077に位置する。

重複関係　126竪穴建物、130号竪穴建物、162号竪穴建物、184号竪穴建物、169号土坑、141号ピットと重複関係にある。新旧関係は126竪穴建物、130号竪穴建物、162号竪穴建物、184号竪穴建物、141号ピットより本竪穴建物が新しく、169号土坑より古い。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が2.97m、南北方向が4.16mを測る。確認面から床面までの壁高は23～28㎝を測る。

床面積　9.46㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－89°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面Ａ－Ａ′の観察では壁際の三角堆積や流れ込みの状態から自然埋没の可能性が窺えたが、土層断面Ｂ－Ｂ′の観察で壁際に三角堆積した土砂が住居中程で凸帯状に堆積した可能性が窺えるため、自然埋没と人為的な埋め戻しの可能性が窺えた。

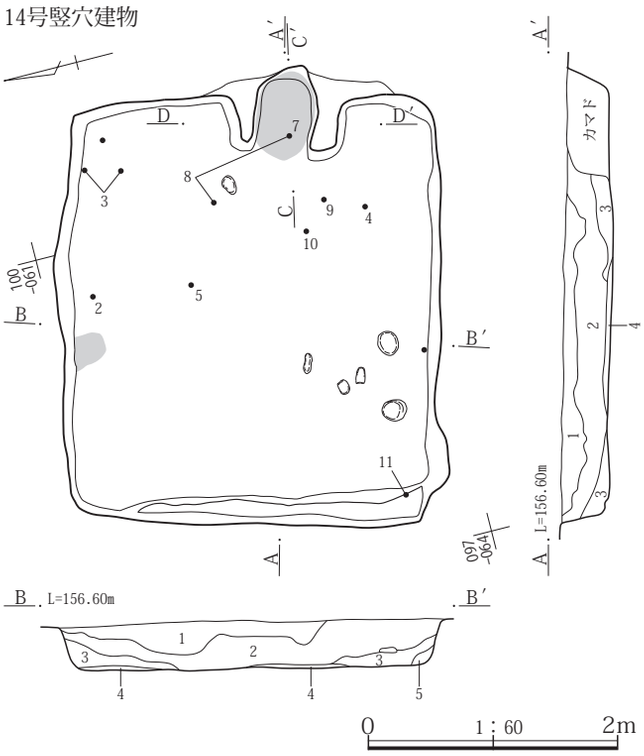
床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　カマドの前に小規模な床下土坑が検出されている。形状はやや歪みある楕円形を呈し、規模は径0.62×0.57m、深さ0.18mを測る。内部から土器などの出土はみられなかった。

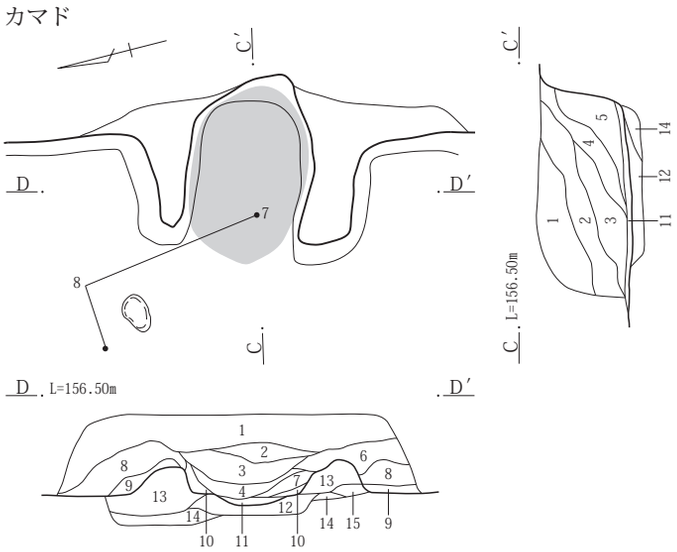
壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

14号竪穴建物



カマド



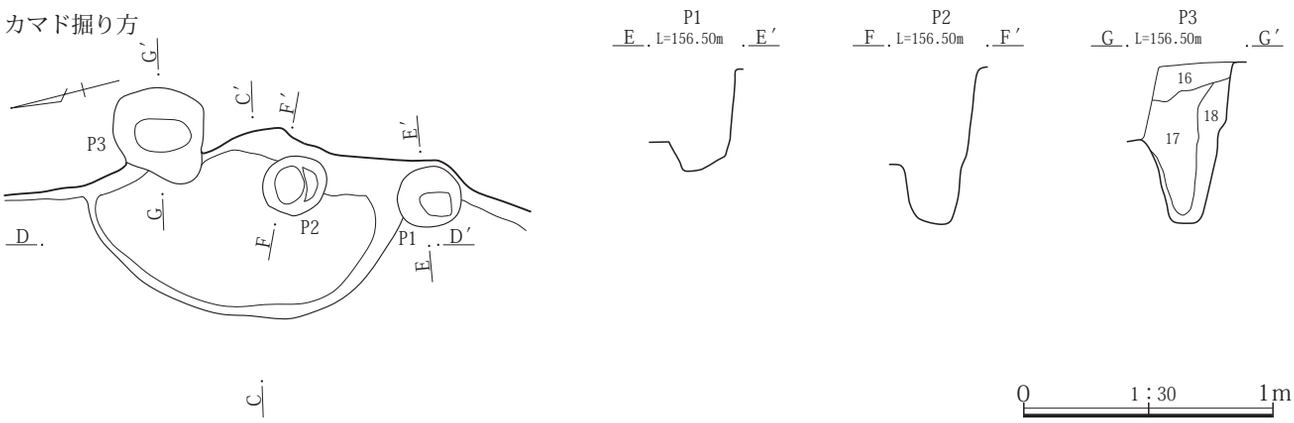
14号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C混土。焼土・炭化物を少量含み、しまりが強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色弱粘性土中に不揃いの泥流土ブロックを多量に含む。人為的埋め戻し土とみられる。
3　黒褐 10YR3/2　As-C混土、炭化物、焼土を少量含み、粒子の細かな粘性土。壁崩落土。
4　黒褐 10YR2/2　炭化物粒と灰を含み、しまりが強い粘性土。床の踏み固め。
5　にぶい黄褐 10YR4/4　泥流土主体、粘性土。

14号竪穴建物カマド

1　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土をブロック状に不均等に炭化物粒少量含み、しまりが強い弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物をやや多く含み、ややしまりが強くサラサラした感触。
3　暗褐 7.5YR3/3　ローム粒、泥流土粒をやや多く含む、弱粘性土でサラサラした感触。
4　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土小ブロックを多く含み、ややザラザラした感触。天井崩落土か。
5　黒褐 10YR3/2　黒色灰を多く含み、しまりがやや弱い弱粘性土。
6　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土小ブロックを多く含み、ややしまりが強い。
7　灰黄褐 10YR5/2　上半は粘土のような粘性土、下半は焼土化しており、天井崩落土か。
8　暗褐 10YR3/3　竪穴建物埋没土の弱粘性土。
9　灰黄褐 10YR4/2　焼土を少量含む泥流土と７の混土。袖部崩壊土。
10　褐 7.5YR4/3　焼土小ブロックを少量含み、ややしまりが弱くボソボソした感触。
11　褐 7.5YR4/3　しまりは強くない。
12　暗褐 10YR3/4　焼土、灰、泥流土小ブロックを不均等に含み、ややしまりを欠く弱粘性土。火床面下埋め戻し土。
13　褐 7.5YR4/3　焼土、泥流土を含み、しまりが強い。袖構築材。
14　灰黄褐 10YR4/2　黒色土ブロックからなる。
15　暗褐 10YR3/3　泥流土混土のしまりが強い黒色粘性土。袖構築材。
16　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土粒を少量含み、しまりが強い。
17　黒褐 10YR3/2　As-C混土、炭化物をわずかに含み、しまりがほとんどない弱粘性土。
18　灰黄褐 10YR4/2　泥流土のやや多い弱粘性土。

カマド掘り方



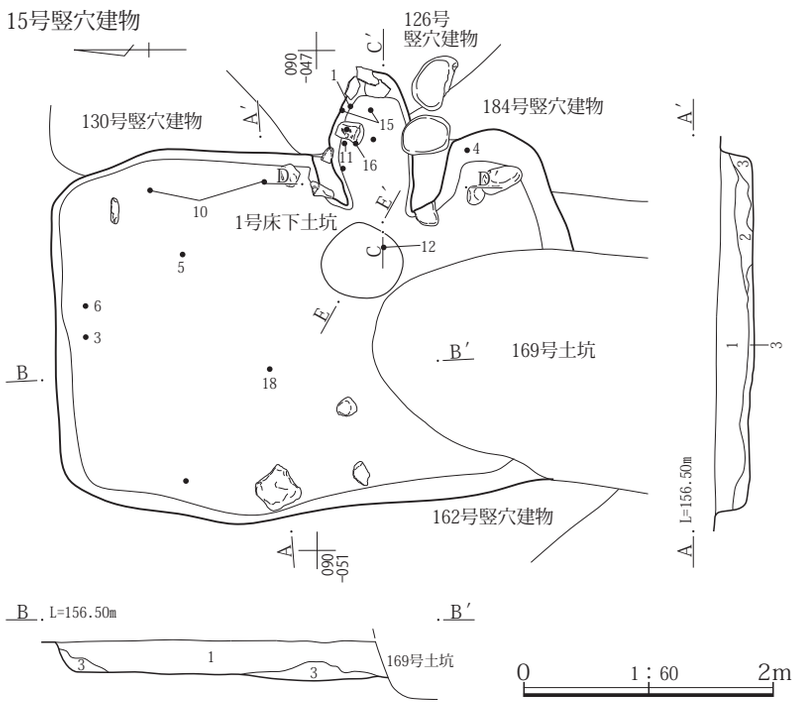
第30図　14号竪穴建物遺構図

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　西壁際の床面はわずかに高い状態であった。

火処　東壁の南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は痕跡が残らないほど失われていたが、両袖は比較的良好な状態であった。また、天井部の補強に使用されたとみられる径30～40㎝の扁平な円礫が右袖奥に散乱した状態で出土している。規模は全長1.17m、幅1.21m燃焼部幅0.55mを測る。なお、燃焼部の奥側半分は壁外に存在している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、黒色土器椀、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器椀、石製品砥石などが出土している。このうち、18の土師器甑が床面から、１の黒色土器椀、７・８の須恵器椀、11の灰釉陶器椀、14・15の須恵器羽釜、16・17の須恵器甕などがカマドからの出土である。18の土師器甑は本竪穴建物の時期とはかけ離れた古墳時代のものであるが、床面から出土しており、本竪穴建物で再使用された可能性も窺える。17の須恵器甕は小片ではあるが胴部に刻書がみられ、「今其」と判読された。なお、「今其」は「今伎」に通ずるとのことである。



15号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、焼土、炭化物粒、泥流土を少量含み、しまりがある弱粘性土。

2　暗褐 10YR3/4　黒褐色土が基質、焼土や泥流土をやや多く含ため赤色味をおびる。

3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土と黒褐色土の混土、しまりが強い。不整な堆積から人為的な埋め戻し土とみられる。

15号竪穴建物カマド

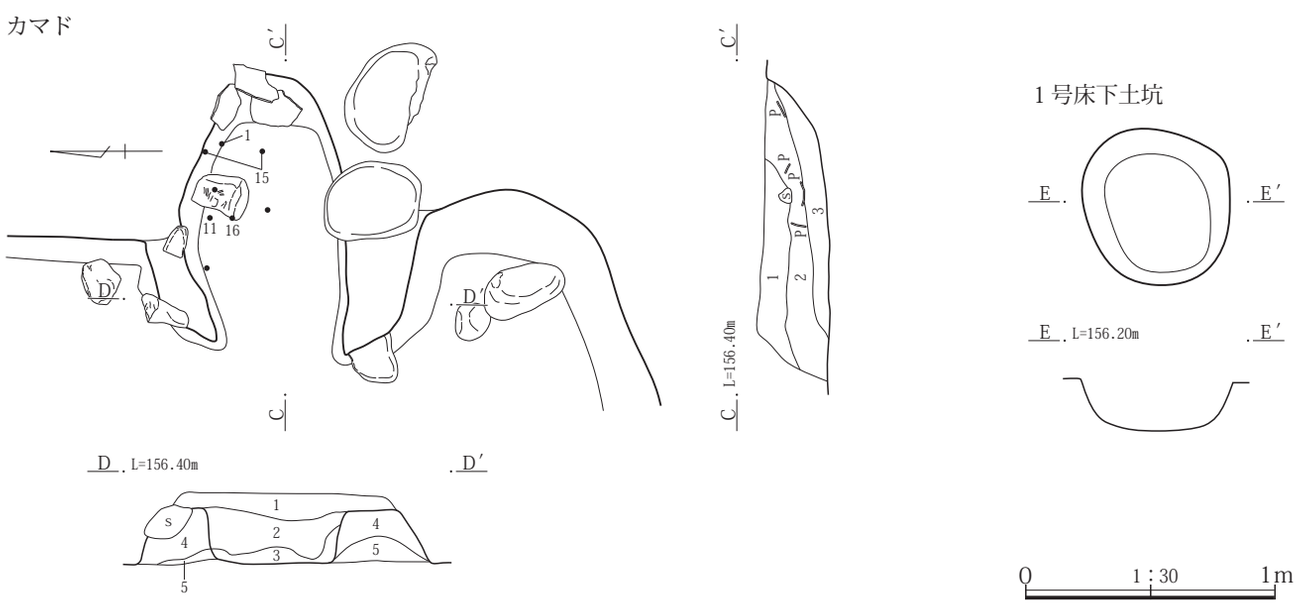
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量含み、しまりやや強い。竪穴建物上位埋没土と同様。

2　暗褐 7.5YR3/3　白色灰がブロック状に不明瞭な焼土が混じり、やや赤色味をおび、締まりがないサラサラした感触。

3　暗褐 10YR3/3　燃焼部直上の埋没土で炭化物をやや多く含む。煙道側で焼土をやや多く含む。

4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックをやや多く焼土、炭化物を不均等に含み、しまりが強い。袖構築材とみられる。

5　黒褐 10YR2/2　含有物少ない、しまりがある粘性土。



第31図　15号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した須恵器椀や羽釜から10世紀第１四半期に比定できる。

16号竪穴建物

位置　１区調査区北部、Ｘ＝37110～37120、Ｙ＝−85063～−85078に位置する。

重複関係　21号竪穴建物、22号竪穴建物、24号竪穴建物、９号土坑と重複関係にある。新旧関係は21号竪穴建物、22号竪穴建物、９号土坑より本竪穴建物の方が古いが、24号竪穴建物より新しい。

形状　東西方向が40㎝ほど長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が6.96m、東西方向が7.34mを測る。確認面から床面までの壁高は34～48㎝を測る。

床面積　42.34㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－51°－Ｅを指す。

埋没状態　周囲から土砂が流れ込んだ様子が土層断面から観察できるが、竪穴建物北側の低位からの流入が多い。土層断面の観察では一見自然埋没とみられるが、土砂の流入に不自然な点があることから人為的な埋め戻しが行われた可能性が想定される。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。ただし、柱穴Ｐ４から北西角付近は他の箇所より15～25㎝ほど低くなっている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　東壁の南半とカマドの構築箇所を除いて全周する。幅は10～28㎝、深さは５～10㎝を測る。

柱穴　竪穴の各角を結んだ対角線上で４本検出している。各柱穴は壁下から1.25～1.60mの位置である。

柱穴Ｐ１は楕円形を呈し、径は68×60㎝、深さ77㎝、柱穴Ｐ２は楕円形を呈し、径は64×56㎝、深さ51㎝、柱穴Ｐ３は楕円形を呈し、径は55×52㎝、深さ51㎝、柱穴Ｐ４は楕円形を呈し、径は56×44㎝、深さ61㎝を測る。柱穴間距離はＰ１～Ｐ２が4.05m、Ｐ２～Ｐ３が4.32m、Ｐ３～Ｐ４が4.12m、Ｐ４～Ｐ１が4.08mと柱穴間を結んだ形状はやや歪んだ四角形を呈する。

貯蔵穴　北東角の壁下で検出している。形状は楕円形を呈するが、床面より４～６㎝ほど掘り込んだ所で幅の狭いテラスを設けている。規模が外側で110×108㎝、テラス部分で83×82㎝、深さは床面から92㎝を測る。なお、埋没土は暗褐色土の単一土であることから発掘調査の所見では、廃棄前に人為的な埋め戻しが行われ、床面として使用されていた可能性が想定される。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中央やや東寄りにカマドが構築されている。残存状態は両袖とも残存していたが、燃焼部から煙道部の天井は壊され残存していない。なお、焚き口の補強に両袖間に渡された65×20×18㎝の角柱状の礫は燃焼部に落とされた状態で残存していた。また、カマドに掛けられていた甕の一部も燃焼部内に残存していた。規模は全長1.33m、幅1.54m、燃焼部幅0.60mを測る。

なお、燃焼部火床面には灰層が残存していた。掘り方は両袖先端に円柱状の礫を据える落ち込みを設け、それを取り込むように長方形の土坑状の落ち込みが検出されている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、緑釉陶器などが出土している。このうち、１の土師器杯、12・13の土師器壺が床面から、３の土師器椀、４の土師器高杯、15・16・20土師器甕がカマドから、10・11の須恵器高杯が柱穴Ｐ１から、７の須恵器杯蓋、14の土師器甑が柱穴Ｐ２から出土している。なお、５～９は須恵器杯蓋であるが、身に相当する個体は破片も出土していない。なお、この杯蓋は５～７・９が焼成の段階で燻され、８は酸化焔焼成での焼き上がりである。安中市内ではこの時期の燻し焼成としては初期横穴式石室をもつ簗瀬二子塚から杯蓋や杯身が出土している。

なお、24の須恵器甕は混入ではあるが、刻書がみられ、「凡」と判読された。なお、「凡」は「大」と同意語とのことである。

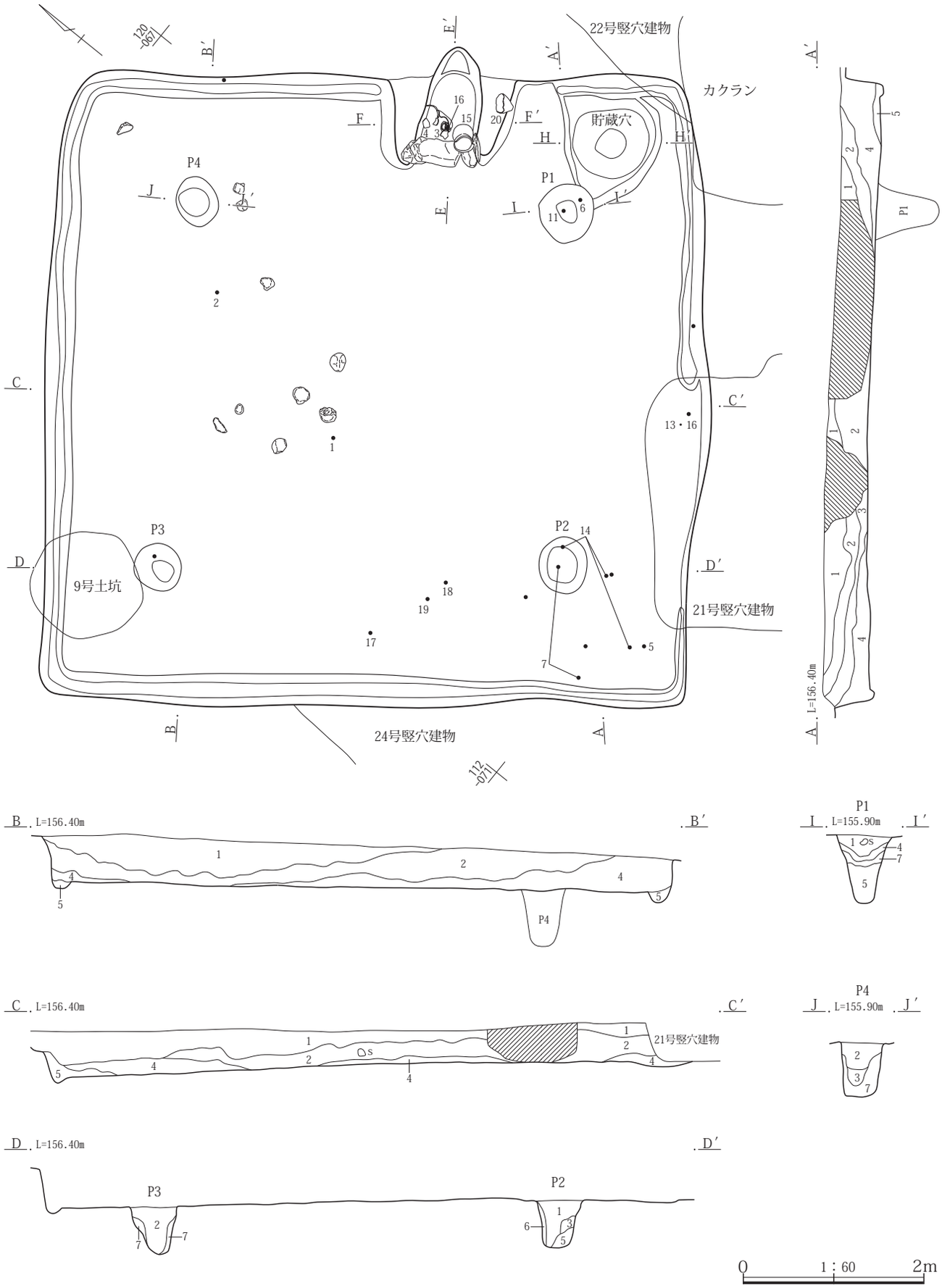
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器杯や甕などから６世紀前半に比定できる。

本竪穴建物からは須恵器杯蓋が５点出土しているが、７が柱穴Ｐ２からの出土の他は床面より７～24㎝ほど上からの出土である。これらの杯蓋は口唇端部を平坦につくるなど丁寧なつくりがみられ、形態も柱穴Ｐ２のものと同様であることから本竪穴建物に共伴するものと判断できる。なお、身を伴わないことから蓋を容器として使用したとみられる。

17号竪穴建物

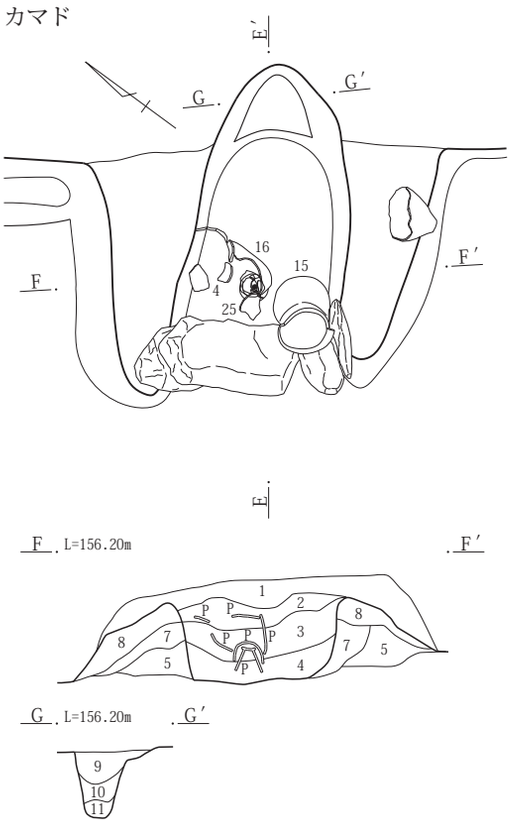
位置　１区調査区北部、Ｘ＝37116～37121、Ｙ＝−85056～−85061に位置する。重複関係にある10号竪穴建物や撹乱によって欠く部分が多く不明確な点が多い。

16号竪穴建物

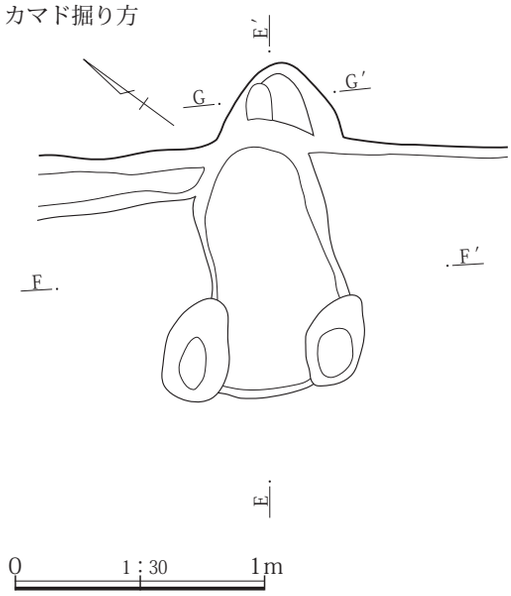


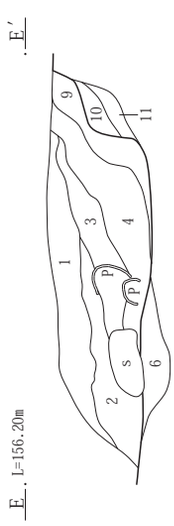
第32図　16号竪穴建物遺構図（１）

カマド

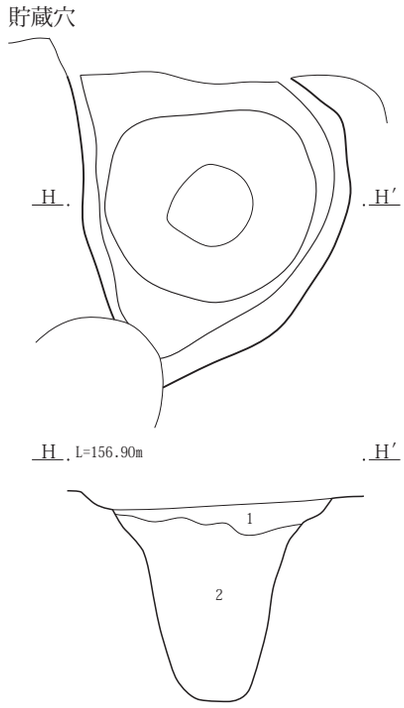


カマド掘り方





貯蔵穴



16号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土。泥流土を不均等に含み、しまりがある。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　1に類似、不揃いの泥流土ブロックをやや多く含む、泥流土は東側ほど多い、しまりがある粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　炭化物粒を少量含み、ややしまりを欠く粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　細かな泥流土ブロックを含む壁崩落土。炭化物粒、焼土を少量含み、ややしまりを欠く弱粘性土。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体のしまりがある粘性土、踏み固められた床面か。

16号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、焼土等の含有物少ない、しまりの強い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　不揃いな泥流土ブロック(灰色味をおびる)を含み、しまりが強い弱粘性土。焼土を含むことから天井等の構築材が混入したとみられる。
3　暗赤褐 5YR3/2　泥流土、焼土を含み、細粒土でややしまりが強い。
4　暗赤褐 2.5YR3/3　小ブロック状の粘土、泥流土主体、炭化物と灰等を多く含み、ぼそぼそした感触。
5　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックを少量含み、しまりが強い土。
6　黒褐 10YR2/2　黒色灰主体。
7　暗赤褐 2.5Y3/3　粒子細かな粘性土、不揃いの泥流土が散見する程度で含有物少ない、ややしまりを欠く。袖構築材とみられる。
8　灰黄褐 10YR4/2　炭化物粒、焼土を少量と細かな泥流土ブロックを含み、ややしまりを欠く弱粘性土。壁崩落土。
9　暗赤褐 2.5YR3/3　焼土粒を若干含む。
10　褐色 7.5YR4/4　しまりが強い。煙道下の整形土。
11　褐色7.5YR4/4　10に類似、焼土粒を含む。

16号竪穴建物貯蔵穴
1　灰黄褐 10YR4/2　上半に泥流土を少量含むが、下半は黒色粘性土主体、しまりが強い。床面直下と思われ、廃絶時には開口していなかった可能性がある。
2　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土ブロックを含み、しまりやや弱い弱粘性土。埋め戻し土か。

16号竪穴建物Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４
1　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流を含み、下半でややしまりを欠く弱粘性土。柱痕部分。
2　黒褐 10YR3/2　柱痕部分。含有物少ない、しまりが強い弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　灰色味の強い泥流土を少量含み、ややしまりが弱い。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色粘性土のブロック状混土。
5　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色粘性土のブロック状混土、泥流土の割合が多い。
6　地山壁のゆるみ。黒色土ブロックを含み、しまりやや弱い。
7　灰黄褐 10YR4/2　地山泥流土と黒褐色土の混土、しまりが強い根固め部分。

第33図　16号竪穴建物遺構図（２）

重複関係　10号竪穴建物、17号竪穴建物、３号土坑、10号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が古い。

形状　東西方向が15㎝ほど長いがほぼ方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が3.72m、東西方向が3.87mを測る。確認面から床面までの壁高は24～37㎝を測る。

床面積　推定で12.30㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－45°－Ｅを指す。

埋没状態　重複関係にある10号竪穴建物によって埋没土の多くを欠くため不明確ではあるが、土層断面の観察ではレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　カマドの東側、北壁下で検出されている。貯蔵穴は周囲を低い土手状に掘り残された中に、幅５～10㎝の平坦面を設け、その内側に掘り込まれている。土手状に掘り残された外側の規模は東西1.40m、南北0.95mで、長方形を呈している。土手状の部分は幅30～40㎝、高さ３～４㎝を測る。貯蔵穴本体は長方形に近い形状で、規模は長軸57㎝、短軸37㎝、深さ57㎝を測る。なお、土手が壁に取り付く箇所に長さ50㎝、径25㎝の円礫が置かれた状態で出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中央より若干西側にカマドが構築されている。残存状態は両袖とも比較的良好であったが、燃焼部から煙道部にかけての天井は壊されて痕跡も残っていなかった。規模は全長1.37m、幅0.92mを測る。煙道は壁外に70㎝ほど延びている。袖の先端には長さ25㎝前後、径12～15㎝の円柱状の棒状礫が立てるよう据えられていた。なお、掘り方は確認されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀などが出土しているが、出土量は図示５点、未掲載78点とわずかである。このうち、１の土師器杯、４の土師器甕が床面からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器杯や甕から６世紀後半に比定できる。

18号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37100～37104、Ｙ＝-85074～-85078に位置する。

重複関係　19号竪穴建物、20号竪穴建物、30号竪穴建物、48号竪穴建物、50号竪穴建物と重複関係ある。新旧関係は本竪穴建物が新しい。

形状　主軸方向の東西方向が短い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が2.73m、南北方向が3.76mを測る。確認面から床面までの壁高は34～57㎝を測る。

床面積　8.29㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－102°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では一部の壁際で三角堆積、竪穴内部にレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　北壁の西半から南壁下で検出された。規模は幅が15㎝前後、深さ３～５㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

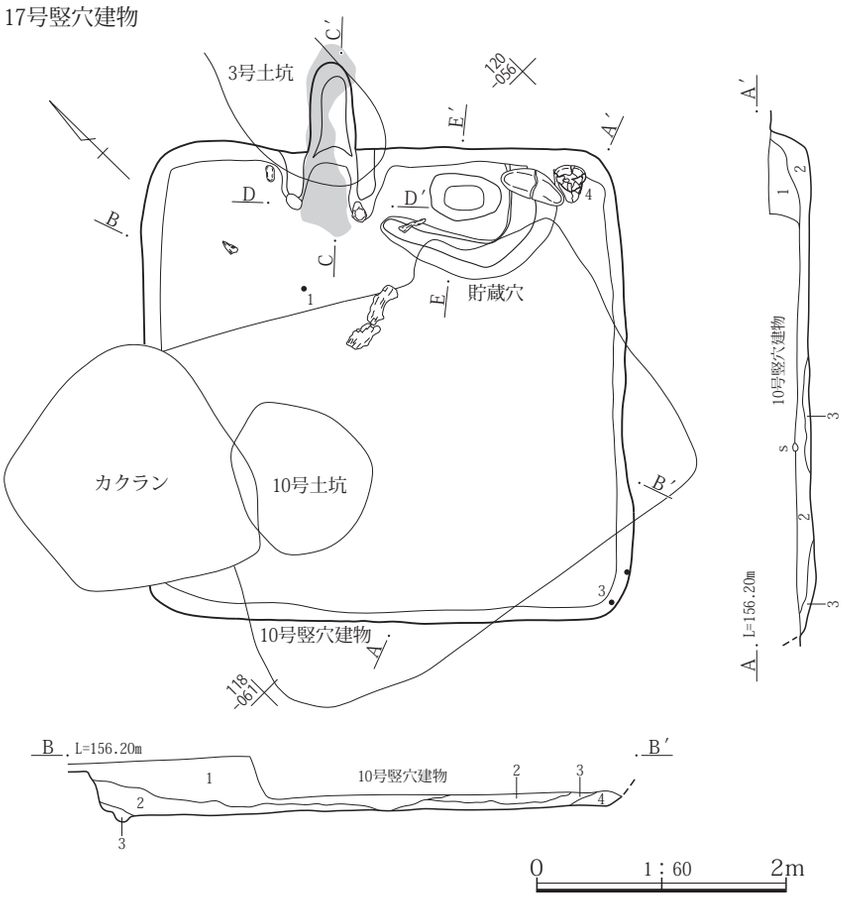
その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は燃焼部の天井は壊されたのか残存していない。煙道については壁外に長く延びるため不明である。なお、燃焼部も壁外に設けられていたためかみられない。規模は全長1.95m、幅0.61mを測る。燃焼部、煙道とも径20～30㎝の円礫を多く使用して構築している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器、鉄製品鉗子、炉底滓・流動滓などが出土している。このうち、５・６の須恵器椀、16の土師器甕の一部片が床面から、４・８の須恵器椀、14～16の土師器甕、18の須恵器甕がカマドからの出土である。なお、鉄製品鉗子は床面より47㎝上からの出土あることから、埋没過程の中で混入したとみられる。14の土師器甕は頸部横ナデと胴部上位のヘラ削りの間にナデ部分が残る形態である。また、灰釉陶器は小片が含まれているが、光ヶ丘１号窯式期から大原２号窯式期に比定できるもので、本竪穴建物に共伴する。

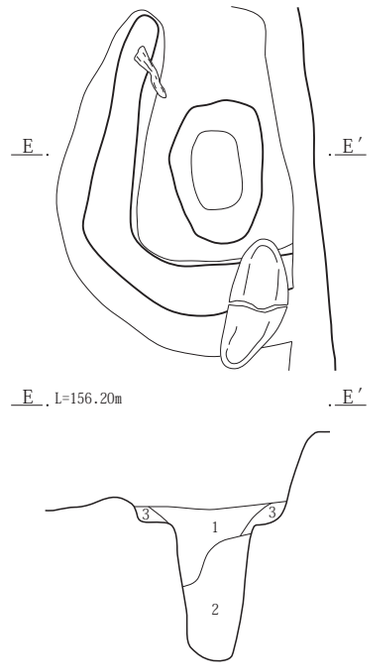
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土

17号竪穴建物



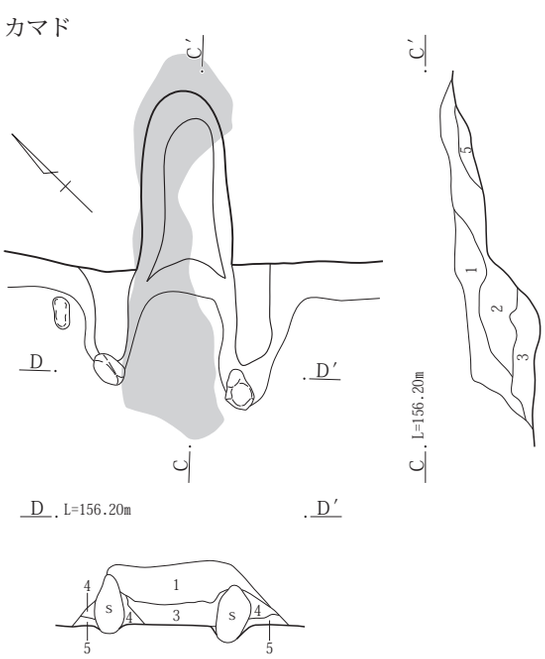
17号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/4　泥流土小ブロックをやや多く不揃いな泥流土ブロック、炭化物、焼土を含み、しまりが強い。人為的埋め戻し土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色粘性土の混土。
4　暗褐 10YR3/3　炭化物粒を少量含み、ややしまりがある壁崩落土主体の弱粘性土。

貯蔵穴



17号竪穴建物貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　炭化物をやや多く含み、しまりが強い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/4　しまりがややない弱粘性土。泥流土が混じるため、若干黄色味を帯びる。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と１の混土、強く踏み固められている。

カマド



17号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-C混土、泥流土粒、焼土等を含み、しまりがやや強い弱粘性土。
2　暗褐 7.5YR3/3　As-Cの混入、やや大粒の焼土粒を不均等に含み、ややしまりが強い弱粘性土。
3　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土を多く含み、ややしまりが弱い。燃焼部埋没土とみられる。
4　灰褐 7.5YR4/2　焼土を少量含み、しまりがある粘性土。袖構築材。
5　灰褐 7.5YR4/2　しまりが強い粘性土。煙道掘り方埋め戻し土で、焼土ブロック入るほか被熱による赤変も見られる。

0　1：30　1m

第34図　17号竪穴建物遺構図

した須恵器椀や土師器甕から10世紀第１四半期から第２四半期に比定できる。

19号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37101～37103、Ｙ＝-85077～-85080に位置する。重複関係にある18号竪穴建物と撹乱によって４分の１程度しか残存していない。

重複関係　18号竪穴建物と重複関係にある。この他に20号竪穴建物、48号竪穴建物とも重複関係にある。新旧関係は18号竪穴建物より古い、20号竪穴建物、48号竪穴建物との関係は不明であるが、48号竪穴建物とは出土遺物から本竪穴建物のほうが新しい。

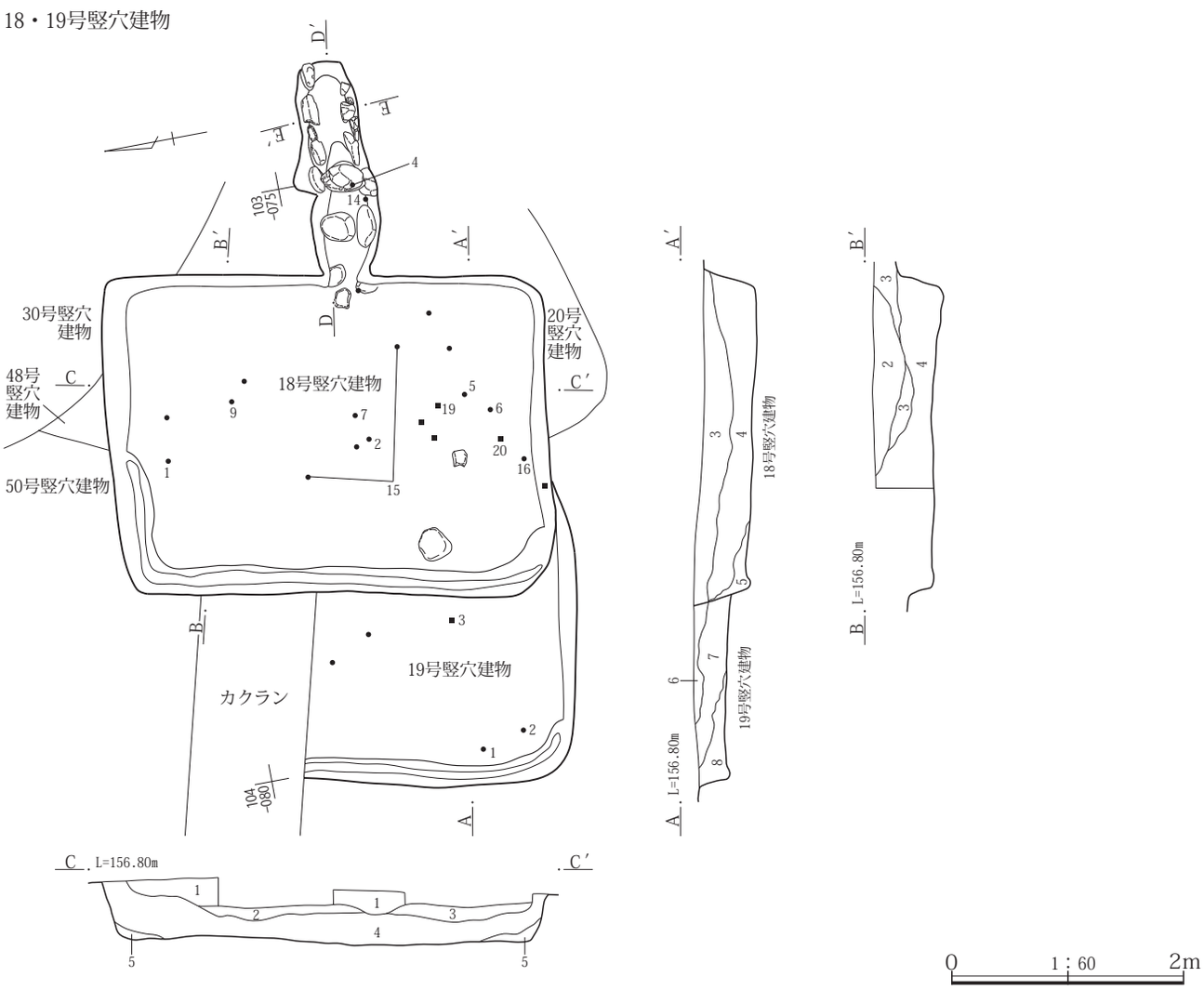
形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　竪穴建物の残存範囲で南北方向が2.28m、東西方向が2.70mを測る。確認面から床面までの壁高は14～37㎝を測る。

床面積　残存範囲内で4.04㎡を測る。

主軸方位　北方向が主軸方向と仮定するとＮ－14°－Ｅを指す。

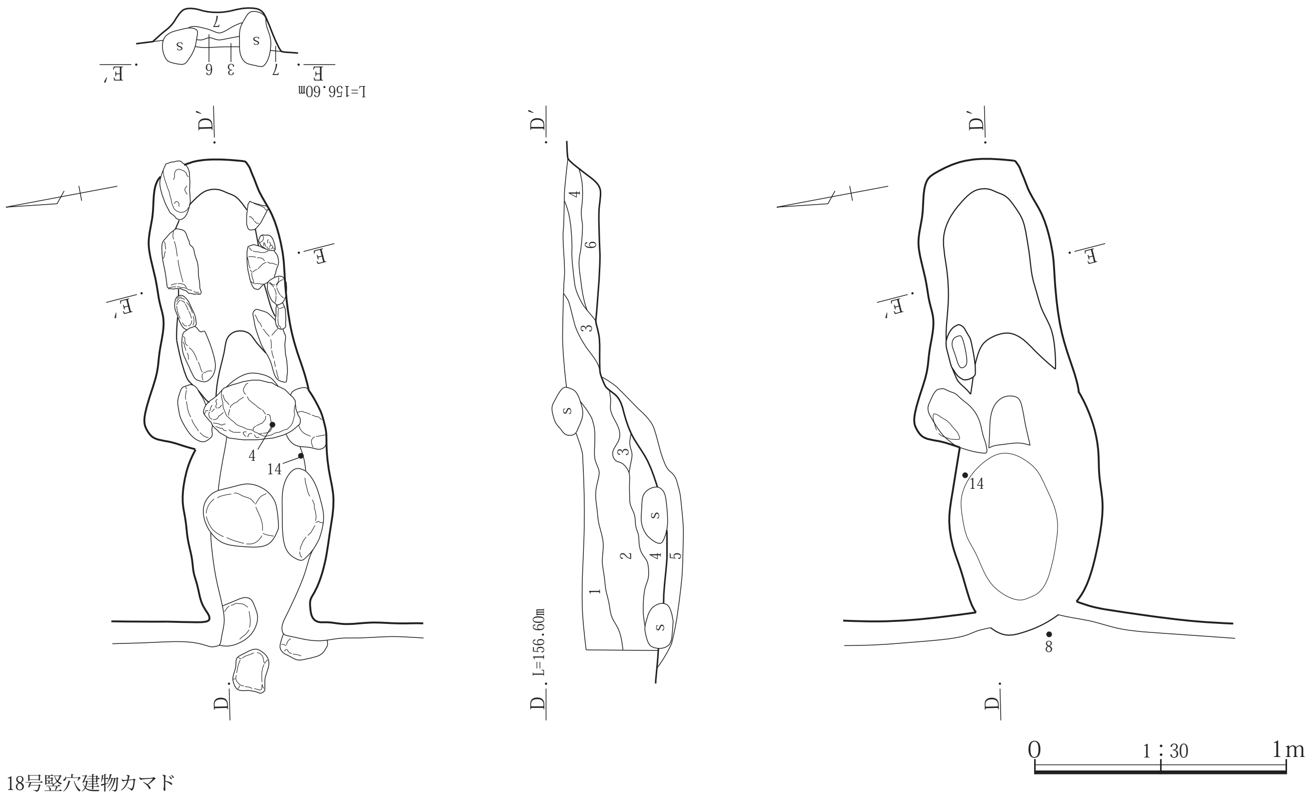
18・19号竪穴建物



18号竪穴建物
1　黒褐 10YR2/2　炭化物粒を少し含み、ややしまりが弱くサラサラした感触。
2　黒褐 10YR2/2　１と３の漸移的な土で、３に大ブロック状に１の黒褐色土を含む。
3　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土を小ブロック少量含み、しまりが強い弱粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　やや大粒の泥流土粒を不均等にやや多く炭化物を少量含む、弱粘性土。
5　黒褐 10YR3/2　含有物少ない、粘性土。
19号竪穴建物
6　黒褐 10YR3/2　As-C混土、炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い弱粘性土。
7　灰黄褐 10YR4/2　大粒泥流土ブロックをやや多く不均等に炭化物粒を含む、粘性土。
8　黒褐 10YR3/2　含有物の少ない、弱粘性土。

第35図　18・19号竪穴建物遺構図

18号竪穴建物カマド　　カマド掘り方



18号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混じりでしまりが強い。竪穴建物埋没土と同じ。
2　黒褐 10YR3/2　As-Cを不均等に少量、泥流土粒、炭化物粒をやや多く含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土と黒褐色土の混土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を多く含み、ややしまりが弱い粘性土。燃焼部埋没土。
5　黒褐 10YR3/2　黒褐細粒土主体、ややしまりが強い。
6　黒褐 10YR3/2　黒色灰を多く含み、ややしまりが弱い粘性土。
7　黒褐 10YR3/2　黒褐細粒土主体、ややしまりが強い。

第36図　18号竪穴建物遺構図

埋没状態　土層断面の観察では周囲から流れ込み、竪穴内にレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　西壁下で検出された。規模は幅が15㎝前後、深さは５～９㎝を測る。

柱穴　残存する範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存する範囲では検出されなかった。

その他施設　残存する範囲では検出されなかった。

火処　残存する範囲では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、流動滓などが出土している。出土量は図示２点、未掲載177点と少なく、土師器や須恵器には図示できる個体がみられなかった。図示した灰釉陶器段皿・椀は床面より16㎝・15㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、土師器や須恵器に図示できる遺物がみられないため、灰釉陶器から判断した。灰釉陶器は１の段皿が光ヶ丘１号窯式期、２の椀が大原２号窯式期に比定できる。こうした点から１の段皿は伝世したものと判断し、２の椀から10世紀前半代に比定したい。

20号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、X＝37100～37105、Y＝−85072～−85078に位置する。重複関係にある18号竪穴建物によって西半の上位を欠く、本竪穴建物の床面は18号竪穴建物の床面より10㎝ほど低いだけだった。

重複関係　18号竪穴建物、19号竪穴建物、30号竪穴建物、48号竪穴建物、50号竪穴建物、20号ピットと重複関係にある。新旧関係は18号竪穴建物、30号竪穴建物と20号ピットより古いが、他の竪穴建物より新しい。なお、19号竪穴建物との関係は不明である。

形状　主軸方向が長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が4.47m、南北方向が3.51mを測る。確認面から床面までの壁高は34～52㎝を測る。

床面積　13.28㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－82°－Ｅを指す。

埋没状態　竪穴の西半を欠くため不明な点もあるが、土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は検出できなかったが、南壁際の西よりで床下土坑を検出している。1号床下土坑は楕円形を呈し、規模は径1.24×0.82m、深さ0.12mを測る。内部からは土器などの出土はみられなかった。

壁溝　東壁のカマド南側から南壁、西壁の一部壁下で検出している。規模は幅が15㎝前後、深さ３～11㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は悪く、袖や燃焼部の天井は痕跡が残っておらず、掘り方のような状態であった。規模は全長1.00m、幅0.65mを測る。燃焼部の一部は壁外に広がっていた。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・甕・羽釜、鉄製品刀子などが出土している。出土量は図示５点､未掲載147点と少ない。このうち､２の須恵器杯、５の土師器甕、６の鉄製品刀子が床面から、１の土師器杯がカマドからの出土である。図示した遺物のうち、土師器甕と須恵器杯は８世紀第３四半期の年代観が与えられるが、５の土師器甕はロクロ成整形により口縁部形態がコの字状に近いことから９世紀後半から10世紀初頭の年代観が与えられ、両者は共伴することは無いと考えられる。こうした点から、５の土師器甕は床面からの出土であるが、確認面から床面までが浅いことから混入と考えられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯と土師器甕から８世紀第３四半期に比定できる。

21号竪穴建物

位置　１区調査区北部、Ｘ＝37109～37113、Ｙ＝-85065～-85068に位置する。重複関係にある16号竪穴建物によって西辺側の床上から確認面までを４分の１ほど欠く。

重複関係　16号竪穴建物、24号竪穴建物、39号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　ほぼ方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は2.77m、東西方向は2.70mを測る。確認面から床面までの壁高は29～42㎝を測る。

床面積　推定で5.34㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－55°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

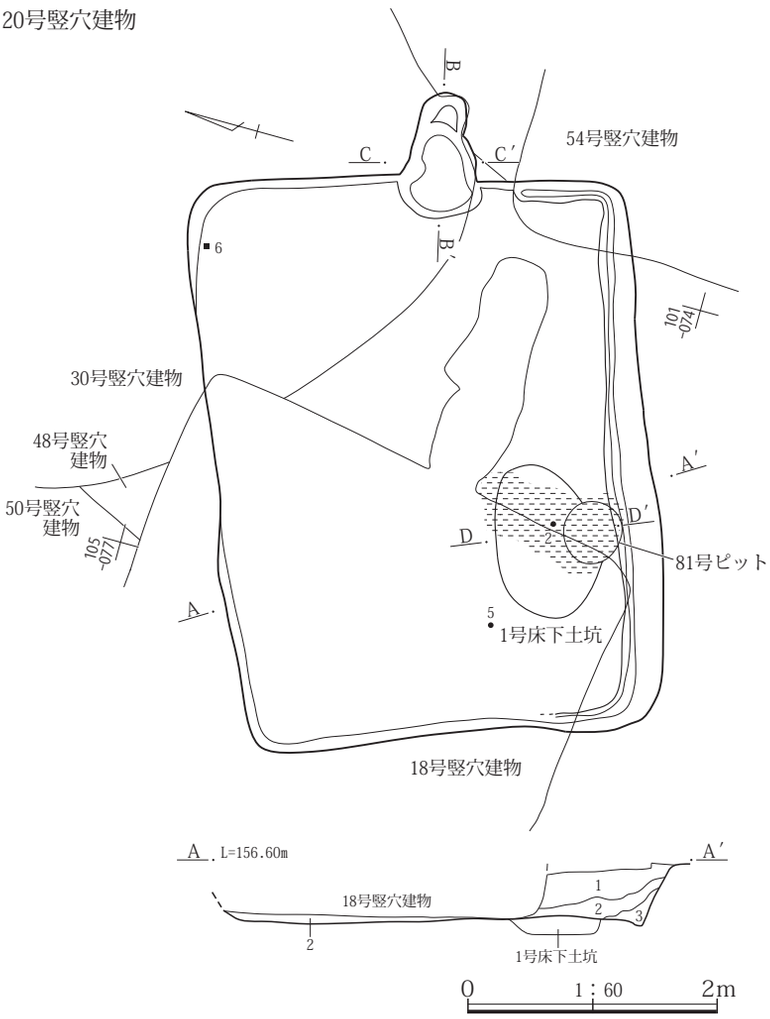
火処　北壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は両袖とも比較的良好な状態であったが、燃焼部から煙道部の天井部は壊され、カマド内では痕跡も残っていない状態であった。規模は全長0.89m、幅1.05m、燃焼部幅0.50mを測る。

左袖手前には３の土師器杯、内部からは29の須恵器甕の破片が構築の際の補強に使用されたとみられる。

燃焼部内には24と25の土師器甕、９の須恵器杯が口縁部を下にした伏せた状態で出土していた。これらの土器が使用時のものなのか、カマド破壊後に置かれたものかは判断できなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・甕、石製品紡輪などが出土しているが、出土量は図示29点、未掲載1,603点と多量である。このうち、５～７の須恵器杯蓋、10の須恵器杯、19の須恵器広口壺、20～23・27・28の土師器小型甕や甕が床面から、３の土師器杯、９の須恵器杯、12の須恵器高盤片、17の須恵器壺、24・25の土師器甕、29の須恵器甕胴部片がカマドから出土している。この他、１・２の土師器杯、11の須恵器有台杯

20号竪穴建物

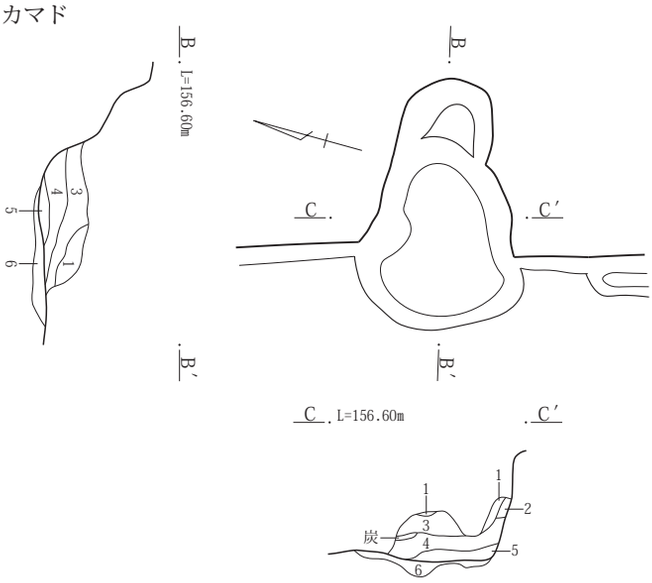


20号竪穴建物
1　灰黄褐 10YR4/2　やや大粒のAs-C泥流土ブロックと炭化物、焼土を若干を含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　壁際に泥流土を少量含む、粒子細かな弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　炭化物を多く含み、一部には炭化物堆積となっている、粒子が細かな弱粘性土。

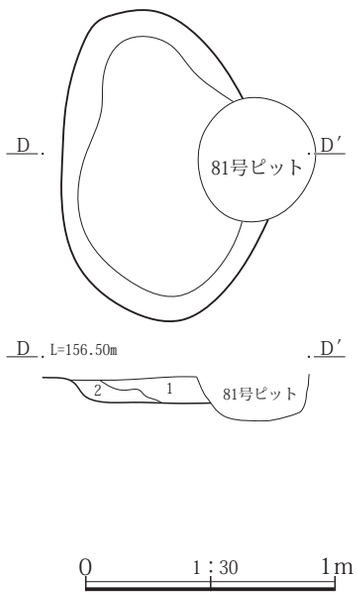
20号竪穴建物カマド
1　暗褐 7.5YR3/3　As-C混土、焼土を少量含み、ややしまりが強い。
2　にぶい赤褐 5YR5/3　赤色味あまり強くない焼土。壁の崩落土。
3　灰褐 5YR4/2　大粒焼土ブロックをやや多く含む、ザラザラした感触。天井部崩落土を含むカマド内埋没土。
4　黒褐 10YR3/2　炭化物、焼土粒、黒色灰等を多く含み、ややしまりが弱い。燃焼部埋没土。
5　暗褐 10YR3/3　黒色灰を多含む、しまりが弱い粘性土。
6　暗褐 10YR3/4　泥流土や炭化物を少量含み、ややしまりが強い。

20号竪穴建物１号床下土坑
1　灰黄褐 10YR4/2　やや大粒のAs-C泥流土ブロックと焼土を含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　壁際に泥流土を少量含む、粒子細かな弱粘性土。

カマド



１号床下土坑



第37図　20号竪穴建物遺構図

が床面より６～７㎝上からの出土である。なお、28の須恵器甕の一部は13号～15号竪穴建物の埋没土中からも出土していた。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドなどから出土した土師器杯、須恵器杯、土師器甕などの土器から本竪穴建物は８世紀第１四半期に比定できる。

22号竪穴建物

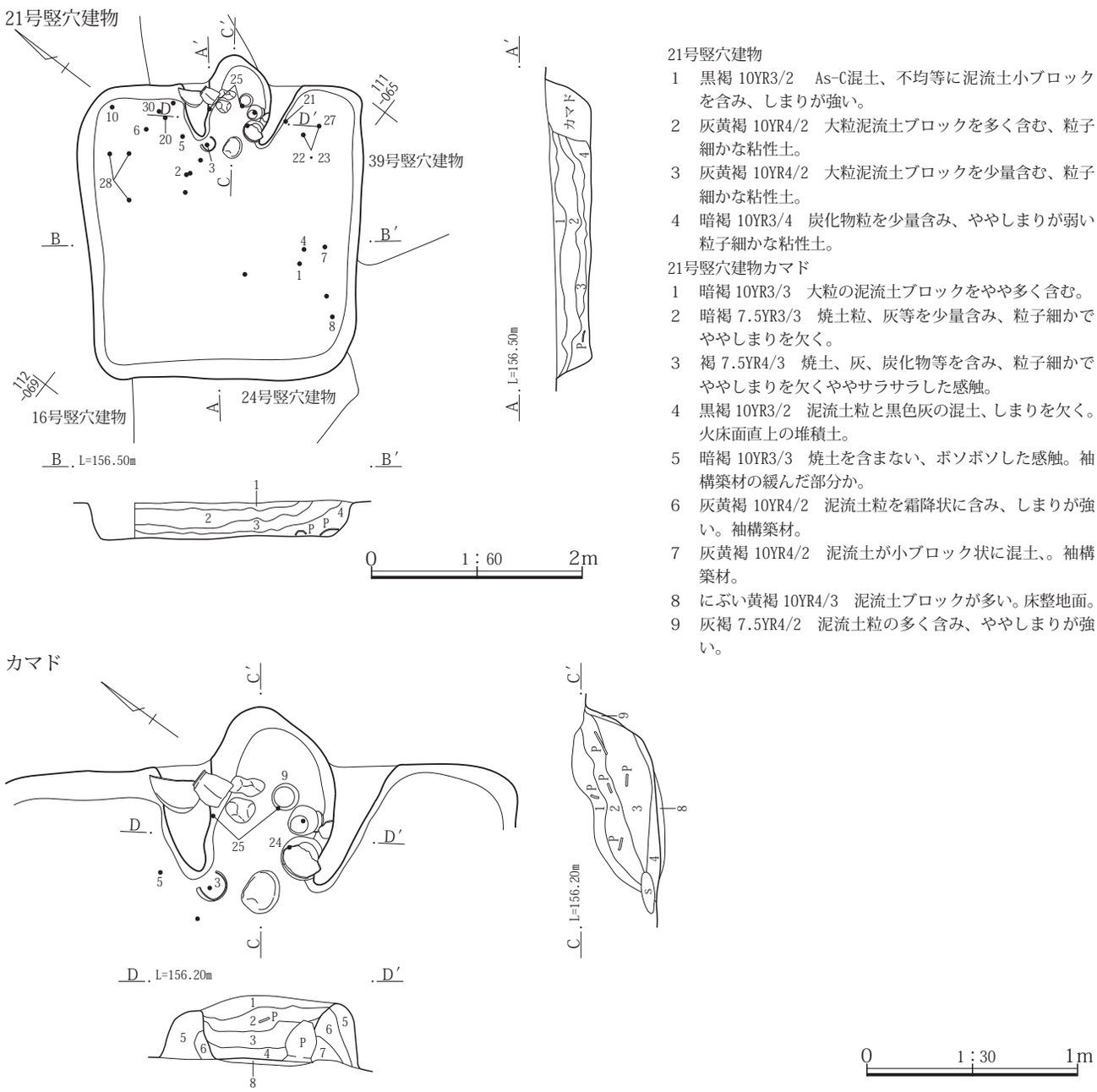
本竪穴建物は、発掘調査時にカマド南側で37号竪穴建物と重複関係にあると判断したが、出土遺物を接合していく中で両竪穴建物間での接合が確認され、床面の標高が同一であることから同一の竪穴建物と判断した。

位置　１区調査区北部、Ｘ＝37112～37118、Ｙ＝-85059～-85063に位置する。撹乱によって南西部の多くを欠く。

重複関係　10号竪穴建物、16号竪穴建物、23号竪穴建物、28号竪穴建物、29号竪穴建物、38号竪穴建物、39号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが重複関係にある竪穴建物より新しい。10号竪穴建物との関係は出土遺物から判断した。

形状　東辺の中程が膨らむがほぼ長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は3.75m、南北方向は5.79m



21号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、不均等に泥流土小ブロックを含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　大粒泥流土ブロックを多く含む、粒子細かな粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　大粒泥流土ブロックを少量含む、粒子細かな粘性土。
4　暗褐 10YR3/4　炭化物粒を少量含み、ややしまりが弱い粒子細かな粘性土。

21号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/3　大粒の泥流土ブロックをやや多く含む。
2　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒、灰等を少量含み、粒子細かでややしまりを欠く。
3　褐 7.5YR4/3　焼土、灰、炭化物等を含み、粒子細かでややしまりを欠くややサラサラした感触。
4　黒褐 10YR3/2　泥流土粒と黒色灰の混土、しまりを欠く。火床面直上の堆積土。
5　暗褐 10YR3/3　焼土を含まない、ボソボソした感触。袖構築材の緩んだ部分か。
6　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を霜降状に含み、しまりが強い。袖構築材。
7　灰黄褐 10YR4/2　泥流土が小ブロック状に混土、。袖構築材。
8　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土ブロックが多い。床整地面。
9　灰褐 7.5YR4/2　泥流土粒の多く含み、ややしまりが強い。

第38図　21号竪穴建物遺構図

を測る。確認面から床面までの壁高は17～30㎝である。

床面積　13.59㎡を測る。

主軸方位　竪穴建物自体の方位はＮ－92°－を指す。カマドはＮ－102°－Ｅとやや南に傾く。

埋没状態　撹乱によって不明確な点があるが、土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は確認されなかったが、南西角から床下土坑を検出した。床下土坑は不整形を呈し、規模は長径が1.15m、短径0.95m、深さ0.15mを測る。位置関係から貯蔵穴の可能性が窺えたが、形状や深さなどから断定できなかったため床下土坑と判断した。また、上面は焼土を含んだ土で踏み固めて床面としていた。

壁溝　東壁のカマドから北0.6mから北壁、西壁の壁際から検出した。規模は幅が10～15㎝、深さが５～10㎝を測る。

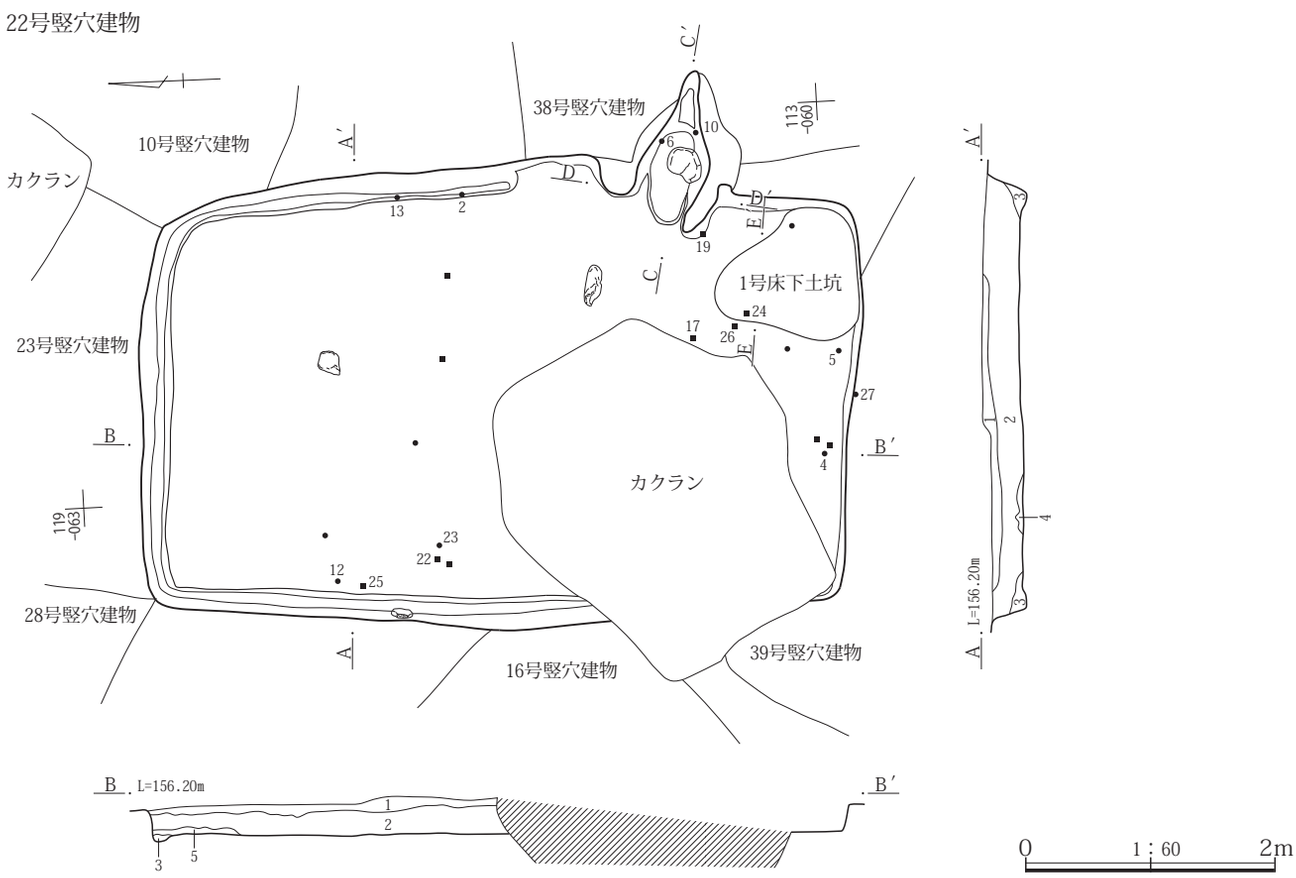
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

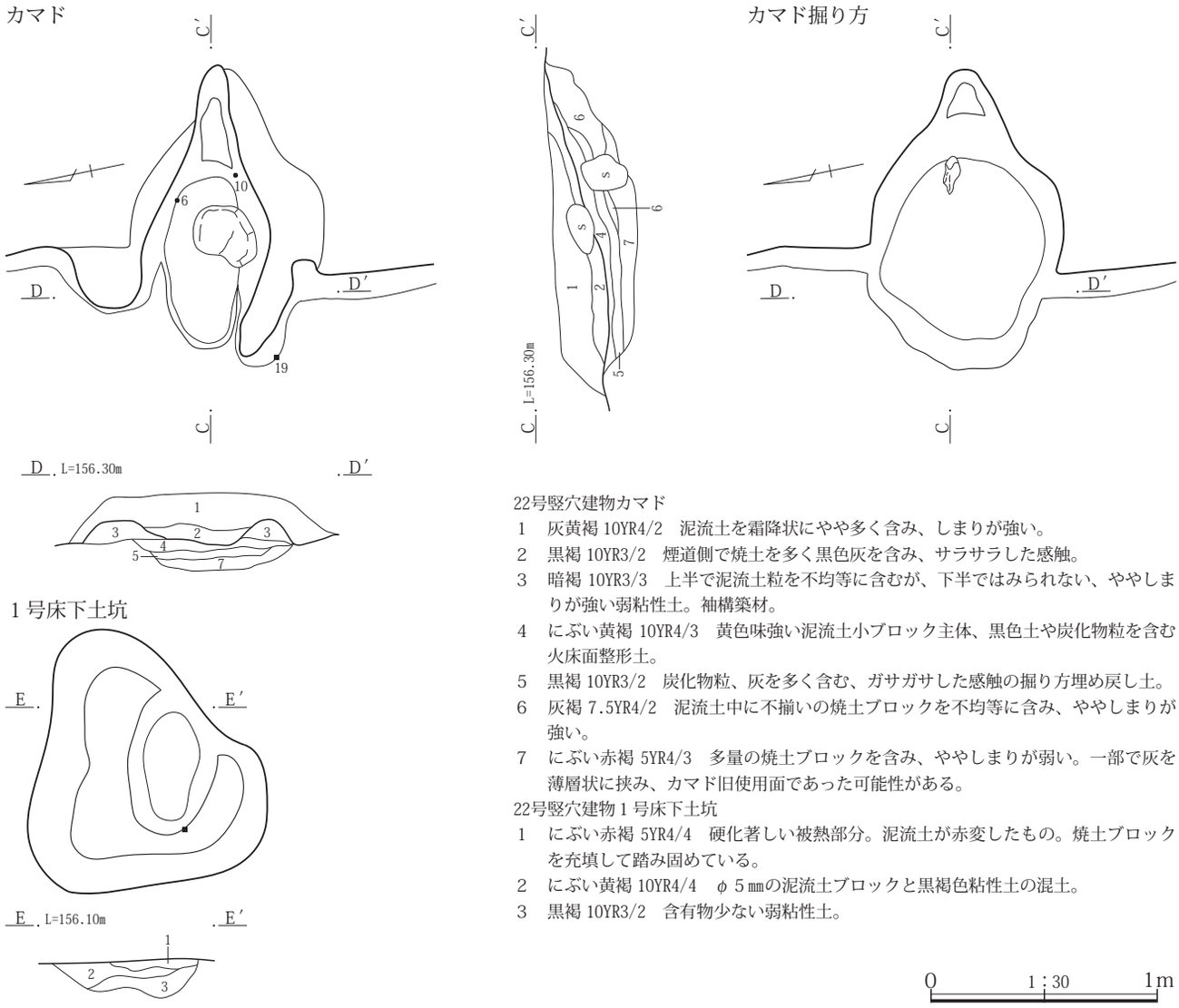
火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていた。袖は両袖とも上部を欠くが下半部は残存していた。規模は全長が1.30m、幅が1.05m、燃焼部幅0.40mを測る。燃焼部の奥側半分と煙道部は壁外に存在する。燃焼部火床面と煙道部の間には７㎝ほどの段が設けられている。燃焼部の中程には天井の構築材と使用されたとみられる偏平な礫が出土している。掘り方は焚口から燃焼部・袖を土坑状に掘り込んでいる。

22号竪穴建物



22号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土ブロックを不均等に含み、しまりが弱い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土ブロックをやや多く炭化物、焼土を多含む、弱粘性土。
3　黒褐 10YR2/2　粒子細かな粘性土。壁側からの崩落土。
4　黒褐 10YR2/2　炭化物主体。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　北壁下にのみ見られる粒状の泥流土主体。とくにしまりが強いわけではなく、貼床とは想定できない。

第39図　22号竪穴建物遺構図（１）



22号竪穴建物カマド
1　灰黄褐 10YR4/2　泥流土を霜降状にやや多く含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　煙道側で焼土を多く黒色灰を含み、サラサラした感触。
3　暗褐 10YR3/3　上半で泥流土粒を不均等に含むが、下半ではみられない、ややしまりが強い弱粘性土。袖構築材。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　黄色味強い泥流土小ブロック主体、黒色土や炭化物粒を含む火床面整形土。
5　黒褐 10YR3/2　炭化物粒、灰を多く含む、ガサガサした感触の掘り方埋め戻し土。
6　灰褐 7.5YR4/2　泥流土中に不揃いの焼土ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い。
7　にぶい赤褐 5YR4/3　多量の焼土ブロックを含み、ややしまりが弱い。一部で灰を薄層状に挟み、カマド旧使用面であった可能性がある。
22号竪穴建物１号床下土坑
1　にぶい赤褐 5YR4/4　硬化著しい被熱部分。泥流土が赤変したもの。焼土ブロックを充填して踏み固めている。
2　にぶい黄褐 10YR4/4　φ５㎜の泥流土ブロックと黒褐色粘性土の混土。
3　黒褐 10YR3/2　含有物少ない弱粘性土。

0　1：30　1m

第40図　22号竪穴建物遺構図（２）

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器、土製品鞴羽口、鉄製品釘・棒状製品、刀子、流動滓などが出土している。このうち、５の須恵器椀が床面から、13の須恵器壺が壁溝から、６の須恵器椀、10の須恵器鉢、14の土師器甕がカマドから、８の須恵器椀が床下土坑からの出土である。この他、鉄製品では18の釘、19・20の棒状製品、17の刀子が床面からの出土である。11の灰釉陶器皿は大原２号窯式期に比定できることから混入と判断した。また、16の刻書が描かれている須恵器杯は小片のため不明確な点もあるが、底部にヘラ削りが施されていることから、周囲に存在する８世紀代の竪穴建物からの混入と判断できる。なお、刻書は「物」の旁と判読された。

所見　本竪穴建物の存続期間は床面やカマド、床下土坑から出土した須恵器椀や土師器甕から９世紀第４四半期に比定できる。

23号竪穴建物

位置　１区調査区北部、Ｘ＝37109～37113、Ｙ＝−85065～−85068に位置する。重複関係にある10号竪穴建物、22号竪穴建物、撹乱によって大半を欠く。

重複関係　10号竪穴建物、17号竪穴建物、22号竪穴建物、28号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は10号竪穴建物、22号竪穴建物より本竪穴建物の方が古く、17号竪穴建物、28号竪穴建物より新しい。

形状　大半を欠くため不明であるが、方形ないし、長方形を呈すると想定される。

規模　残存範囲で南北1.50m、東西3.20mを測る。確認面から床面までの壁高は12㎝前後である。

床面積　残存範囲内で3.63㎡を測る。

主軸方位　不明。

埋没状態　土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯、須恵器杯・甕などが出土しているが、出土量は図示３点、未掲載43点とわずかである。このうち、確実に本竪穴建物と共伴する遺物は床面から出土している２の須恵器椀である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土遺物が少ないため不明確な点もあるが、床面から出土した須恵器椀から８世紀後半に比定できる。

24号竪穴建物

位置　１区調査区北部、Ｘ＝37109～37113、Ｙ＝-85065～-85068に位置する。重複関係にある16号竪穴建物、21号竪穴建物、撹乱によって大半を欠く。

重複関係　16号竪穴建物、21号竪穴建物、21号土坑と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物や土坑より本竪穴建物のほうが古い。

形状　残存部分から方形または長方形を呈すると想定される。

規模　東西方向5.22m、南北方向は残存範囲で4.0m、南辺長は5.05mを測る。確認面から床面までの壁高は７～15㎝を測る。

床面積　推定で10.98㎡を測る。

主軸方位　本遺跡で検出された竪穴建物のうち、炉をもつものは少ないが、設定値は西側柱穴間か北側柱穴間であることからＮ－84°－ＷまたはＮ－６°－Ｅを指すとみられる。

埋没状態　確認面から床面まで浅いため埋没状態の判断はできなかった。

床面　地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　南辺側の２本を検出している。柱穴Ｐ１は楕円形を呈し、径71×68㎝、深さ84㎝を測る。柱穴Ｐ２は楕円形を呈し、径54×42㎝、深さ91㎝を測る。柱穴間距離は2.45mを測る。

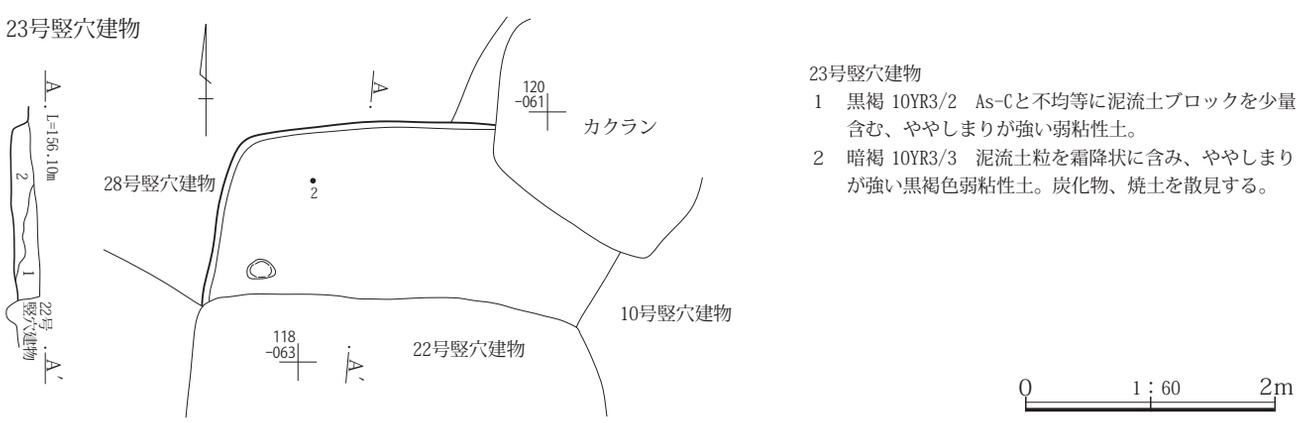
貯蔵穴　南東角隅寄りで検出している。形状は楕円形を呈し、規模は径0.76×0.70m、深さ0.56mを測る。内部からは中位の壁際から土師器のＳ字状口縁部を呈するとみられる台付甕が出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕などが出土しているが、出土量は図示６点、未掲載46点とわずかである。このうち、確実に本竪穴建物と共伴する遺物は貯蔵穴から出土している２の土師器壺であるが、この土器は胴部片のため詳細はわからない。しかし、図示した土器の年代観は同一であることから、これらの土器も共伴すると判断できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器から４世紀後半に比定できる。



第41図　23号竪穴建物遺構図

25号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37106～37109、Ｙ＝-85069～-85073に位置する。

重複関係　30号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが新しい。

形状　主軸方向が短い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は2.82m、東西方向は3.77mを測る。確認面から床面までの壁高は47～58㎝を測る。

床面積　6.78㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－13°－Ｅを指す。

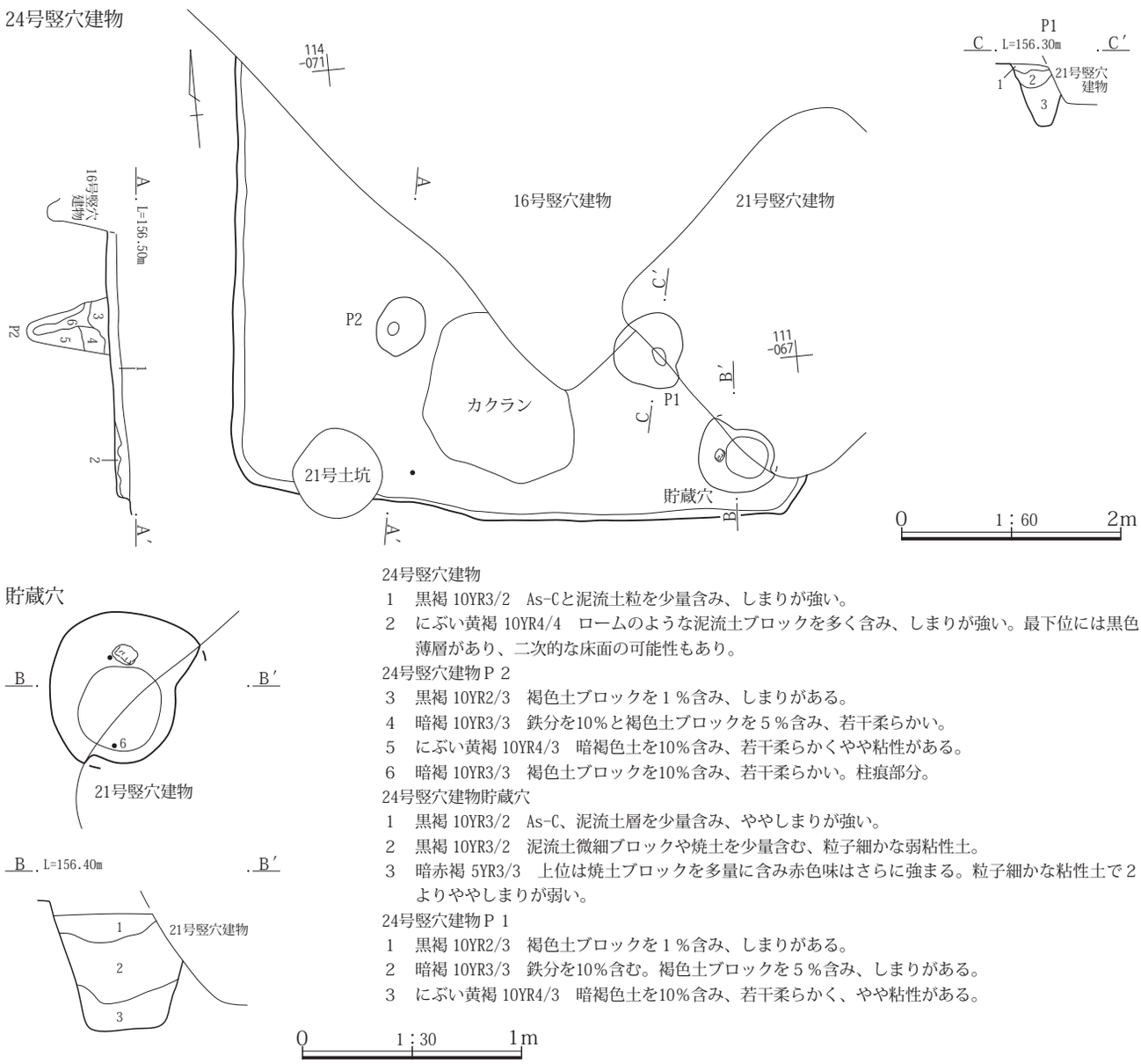
埋没状態　土層断面の観察では各辺から土砂の流れ込みを確認できたが、その中でも東辺から多くの土砂が流れ込んでいた。相対的にはレンズ状に近い堆積であることから自然埋没と判断できる。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　北壁のカマド西側から西壁、南壁、東壁の北東角寄りまでの壁下で検出している。規模は幅が15㎝前後、深さが４～７㎝を測る。

柱穴　西辺の中程、壁寄りでＰ１を検出しているが、これに対応する位置で他のピットを確認することができなかったことから、Ｐ１が柱穴であったか否かの判断はで



24号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cと泥流土粒を少量含み、しまりが強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/4　ロームのような泥流土ブロックを多く含み、しまりが強い。最下位には黒色薄層があり、二次的な床面の可能性もあり。

24号竪穴建物Ｐ２
3　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　鉄分を10％と褐色土ブロックを５％含み、若干柔らかい。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を10％含み、若干柔らかくやや粘性がある。
6　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを10％含み、若干柔らかい。柱痕部分。

24号竪穴建物貯蔵穴
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土層を少量含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　泥流土微細ブロックや焼土を少量含む、粒子細かな弱粘性土。
3　暗赤褐 5YR3/3　上位は焼土ブロックを多量に含み赤色味はさらに強まる。粒子細かな粘性土で２よりややしまりが弱い。

24号竪穴建物Ｐ１
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　鉄分を10％含む。褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を10％含み、若干柔らかく、やや粘性がある。

第42図　24号竪穴建物遺構図

きていない。なお、Ｐ１の形状は円形に近く、規模は径32×28㎝、深さ16㎝を測る。

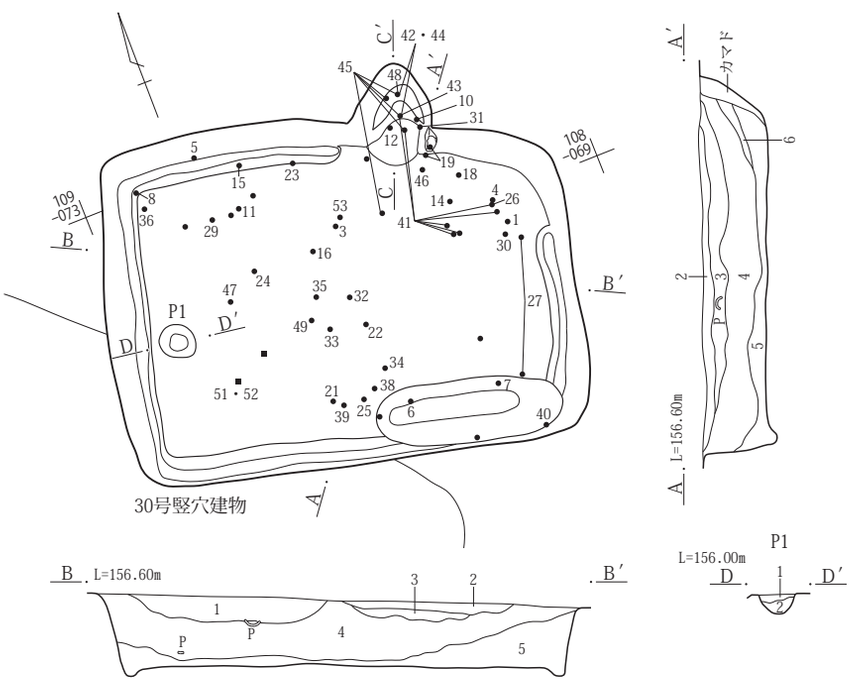
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　南壁の東南角寄りから細長い楕円形をした土坑が検出されているが、本竪穴建物に伴うものかは確定されなかった。なお、この土坑の規模は長軸15.1㎝、短軸53㎝、深さは床面より15㎝を測る。

火処　北壁の中程よりやや東寄りにカマドが構築されている。残存状態は悪く、両袖や燃焼部の天井は痕跡が残っておらず掘り方のような状態であったが、右袖には補強に使用されたとみられる亜角礫が残存していた。規模は全長0.80m、幅0.67mを測る。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、流動滓、石製品紡輪等が出土している。出土量は多く図示したものだけでも51点を数える。このうち、１・４・７・10・14の須恵器杯、26・27・30の須恵器椀、47の土師器甕が床面から、12の須恵器杯、19・26・31の須恵器椀、42～45・49の土師器甕がカマドからの出土である。須恵器杯や椀は床面など本竪穴建物に共伴すると判断できる位置からの出土の他、床面より18㎝～40㎝ほどの位置からも多く出土している。この床面よりやや高い位置から出土した土器も床面より出土した土器の形態とほぼ同一で後の混入とは考えられず、出土の経緯が課題である。なお、本竪穴建物から出土した土師器甕は40～42の口縁部から頸部がコの字状を呈し、胴部上位が横方向、中位が斜め、下位が縦方向のヘラ削りによる整形が施されているものと、44～46の土師器甕で口縁部から頸部はコの状に近い形態ではあるが、胴部は

25号竪穴建物

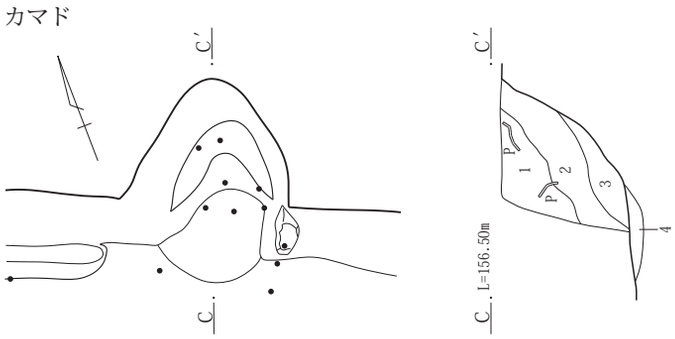


25号竪穴建物
1　にぶい黄褐 10YR4/3　φ５～10㎜大の泥流土をやや多く含む、弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　As-Cと泥流土粒を少量含み、しまりが強い。
3　黒褐 10YR2/2　黒色味強い粒子細かな土が基質、焼土、泥流土を含む。
4　暗褐 10YR3/3　不明瞭な泥流土ブロックを不均等にやや多く含む、粒子細かな弱粘性土。
5　暗褐 10YR3/3　やや黒色味おびる弱粘性土が基質、泥流土粒と焼土を多く含む。
6　暗褐 10YR3/3　やや黒色味おびる弱粘性土が基質、含有物はみられない。

25号竪穴建物Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを10％含む。

0　1：60　2m

カマド



25号竪穴建物カマド
1　灰黄褐 10YR4/2　泥流土を多くAs-C、焼土等不均等に含み、しまりが強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　炭化物をやや多く泥流土を多く含む。カマド構築材崩落土。
3　暗褐 7.5YR3/3　不明瞭な焼土主体、黒色灰を多く含み、ややしまりが弱い。
4　黒褐 10YR3/2　泥流土と炭化物を含む、細粒土。火床面下整地土。

0　1：30　1m

第43図　25号竪穴建物遺構図

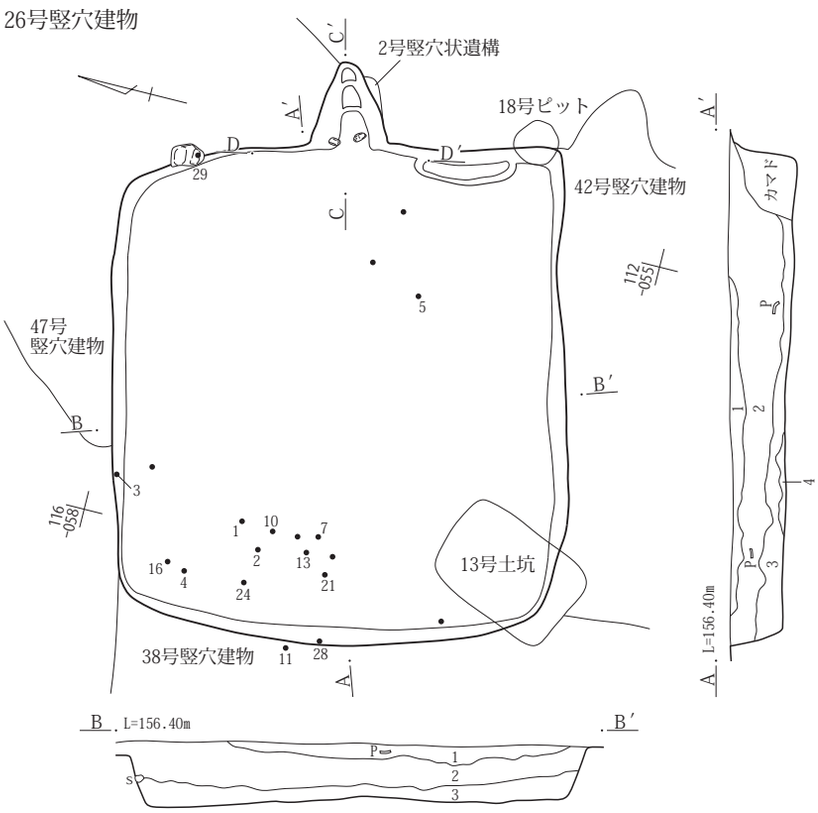
上位から下位まで縦方向のヘラ削りによるものが存在する。両者とも出土位置から共伴するものと判断でき、後者は地域色の強い土師器甕とみられる。53の紡輪は床面からの出土で側面に刻書がみられ、「有」と判読された。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯・椀、土師器甕から９世紀第４四半期に比定できる。

26号竪穴建物

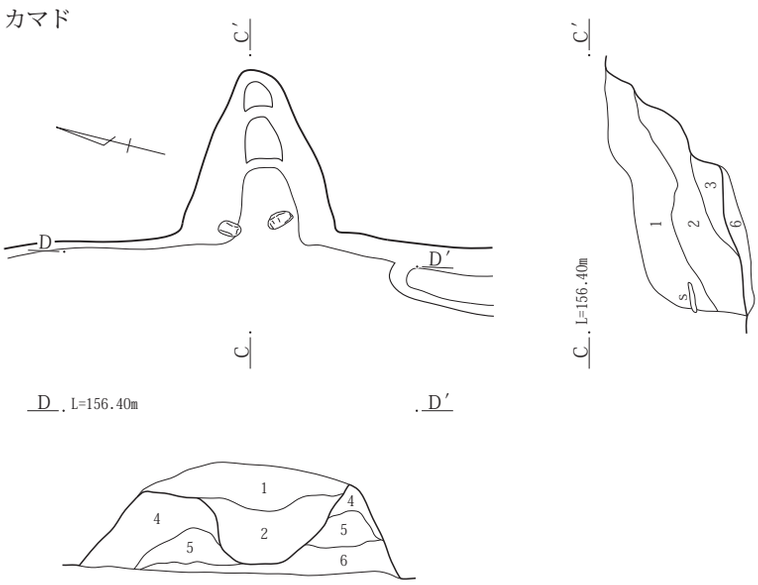
位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37112～37115、Ｙ＝-85054～-85058に位置する。

重複関係　38号竪穴建物、42号竪穴建物、47号竪穴建物、２号竪穴状遺構、13号土坑、18号ピットと重複関係にある。新旧関係は13号土坑、18号ピットより本竪穴建物のほうが古く、38号竪穴建物、42号竪穴建物、47号竪穴建



26号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、ややしまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土ブロックをやや多く炭化物粒少量を含み、しまりが強い。
3　黒褐 10YR3/2　泥流土をわずかに一部で多くの炭化物を含む、粒子の細かな粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　黄色味強い泥流土ブロック主体、ややしまりが強い。

0　1：60　2m



26号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/3　泥流土やAs-YP粒を多く上半に焼土を含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物を多く下半に焼土を含む。燃焼部内に流入した土。
3　黒褐 10YR2/2　黒色灰と少量の焼土を含み、ややしまりを欠く微粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　炭化物を不均等に不揃いの泥流土粒多く含み、ややしまりが強い。袖構築材。
5　暗褐 10YR3/4　含有物の少ない粒子細かな土。袖芯材。
6　灰黄褐 10YR4/2　上位中心に泥流土を含むが、焼土はわずかしか含まない、しまりがある。

0　1：30　1m

第44図　26号竪穴建物遺構図

物、２号竪穴状遺構より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　主軸方向の東西方向がやや長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は4.00m、南北方向は3.64mを測る。確認面から床面までの壁高は30～42㎝を測る。

床面積　12.29㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－13°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や２号竪穴建状遺構をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　東壁際カマドの南側だけで検出されている。規模は幅が18㎝前後、深さ３～５㎝を測る。

なお、26号竪穴建物では壁溝がごく一部でしか検出されなかった。重複関係にある42号竪穴建物はカマド北側の東壁がほぼ同一の位置に想定される。そして42号竪穴建物では検出された範囲の壁下では壁溝が検出されており、26号竪穴建物で検出されている壁溝は42号竪穴建物のものであった可能性も想定される。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程に構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていた。燃焼部は竪穴内部から壁外にかけて構築されていたが、竪穴内の燃焼部袖は埋没土に近い土で構築されていたため断面では確認できたが、平面での検出は困難であった。規模は全長1.00m、幅1.30m、燃焼部幅0.35mを測る。燃焼部奥側から煙道部にかけては壁外に存在し、煙道部は17～19㎝の段を２段設けている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕、鉄製品釘、石製品凹石・石皿・多孔石・磨石などが出土している。図示できた遺物はすべて床面より30㎝前後上または埋没土からの出土のため、本竪穴建物に伴うか確証は得られていない。杯、椀は底部回転ヘラ削りと回転糸切りが混在しているが、形態的に大きな差はみられない。25の緑釉陶器、26の灰釉陶器、27の須恵器椀は後世に混入したものとみられる。また、出土した石製品は凹石・磨石・石皿は埋没土中位からである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に共伴する土器がみられないが、杯や椀の底部切り離し技法に回転ヘラ起こしと回転糸切り無調整がみられることから８世紀第４四半期から９世紀第１四半期に比定できる。

27号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37106～370112、Ｙ＝-85048～-85052に位置する。本竪穴建物はカマド煙道先端が調査対象区外に存在するが、その他の部分は完掘できている。

重複関係　29号竪穴建物、52号竪穴建物、65号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物がもっとも新しい。

形状　主軸方向が短い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が4.18m、南北方向が6.10mを測る。確認面から床面までの壁高は17～28㎝を測る。

床面積　23.08㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－95°－Ｅを指す。

埋没状態　壁際は暗褐色土の三角堆積が観察できるが、中央付近で不自然な堆積が観察される。こうした点から自然埋没か人為的に埋め戻されたかの判断はできなかった。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　２本の柱穴を検出しているが、その配置は不均等な状態であった。柱穴Ｐ１は径48×36㎝、深さ32㎝、柱穴Ｐ２は径33×32㎝、深さ39㎝を測る。柱穴Ｐ２の中位からは１の土師器杯が出土している。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

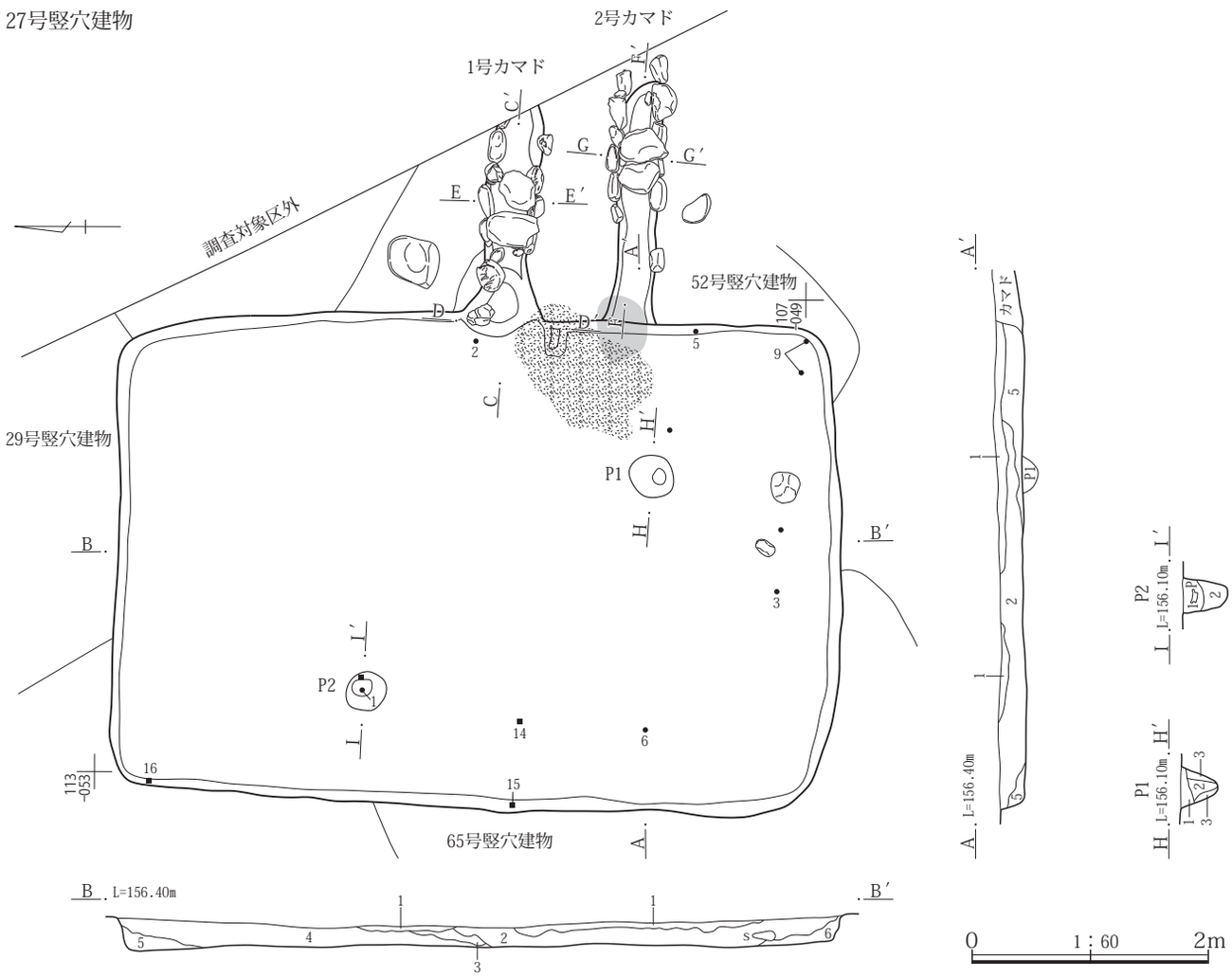
火処　東壁の中程からカマド１、その南側からカマド２が構築されている。検出時の状況から当初カマド２を使用していたが、その後カマド１を構築してカマド２の使用を停止したとみられる。なお、両カマドとも煙道部の先端は調査対象区外に延びる。

カマド１は焚口、燃焼部は壊されほとんど残存していなかったが、煙道部は側面に使用された礫及び天井部の礫とも比較的良好な状態で残存していた。規模は全長が調査区内で2.00m、幅は0.85mを測る。燃焼部は建物壁

外に構築されたとみられ、一部壁内に焚口の痕跡が残っていた。煙道には20～30㎝の円礫を側壁に使用し、その上に30×50㎝ほどの円礫を渡して天井の補強にしている。

カマド２もカマド１と同様の構築方法であったとみられるが、燃焼部は焼土範囲からカマド１より壁内に構築された可能性がある。規模は全長が調査区内で2.23m、幅0.50mを測る。焚口と燃焼部の痕跡は確認できなかったが、煙道部は比較的良好な状態であった。しかし、燃焼部側の補強に使用された礫はカマド１に転用するために抜き取られたのか残存していなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕・羽釜、灰釉陶器、鉄製品刀子・板状製品・鎌、流動滓などが出土している。このうち、２の



27号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土粒を少量霜降状に含み、しまりが強い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土を不均等に、床面近くでは炭化物も含む、粒子細かな粘性土。
3　にぶい赤褐 5YR4/3　不揃いの焼土ブロックを不均等にやや多く含む、弱粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土粒や焼土、炭化物を不均等に少量含み、ややしまりが強い。
5　暗褐 10YR3/3 粒子細かな黒色弱粘性土を基質とする。泥流土粒を含み、ややしまりが弱い。
6　暗褐 10YR3/3 粒子細かな黒色弱粘性土を基質とする。泥流土粒、焼土を含み、ややしまりが弱い。
27号竪穴建物Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを20％含む。
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3　暗褐色土ブロックを10％含み、若干柔らかい。
27号竪穴建物Ｐ２
1　暗褐 10YR3/3　φ10㎜の炭化材を２％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを20％含む。

第45図　27号竪穴建物遺構図（１）

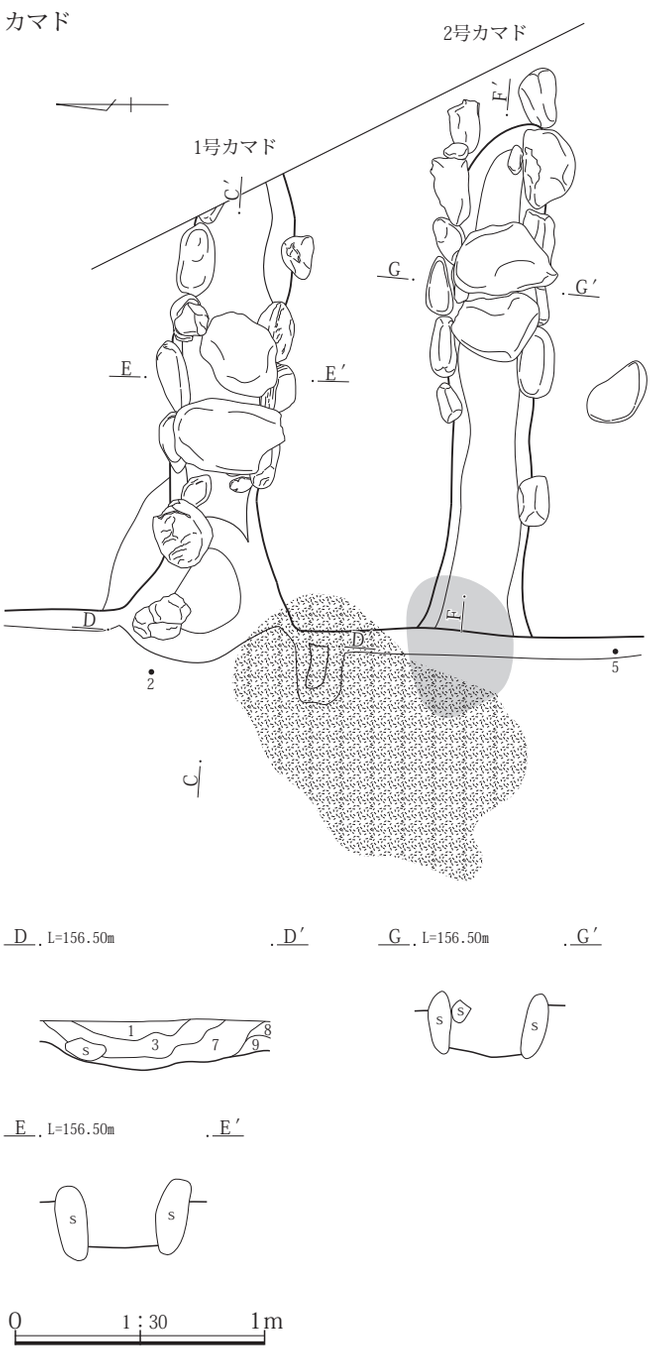
須恵器杯、５の須恵器無台椀、９の灰釉陶器椀が床面から、１の須恵器脚付皿が柱穴Ｐ２内から、12の土師器甕がカマドからの出土である。なお、鉄製品は14の刀子が床面から、15の鎌は床面より10㎝上からの出土である。本竪穴建物で図示した遺物では床面など本竪穴建物に共伴すると判断できる位置のものでもその年代観は９世紀第４四半期から10世紀第２四半期と幅広い年代が与えられる。

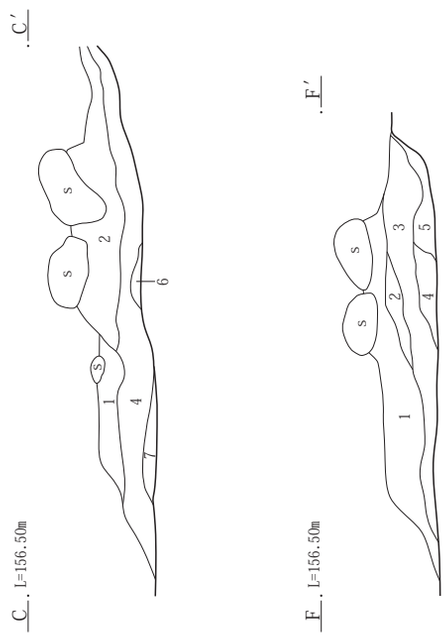
所見　本竪穴建物の存続期間は、共伴する位置から出土した土器の中では２の須恵器杯が９世紀第４四半期、６の須恵器椀は高台だけであるが、その形態から10世紀第２四半期であることから、この間に構築、廃棄が行われたと判断できる。

28号竪穴建物

位置　１区調査区北部、Ｘ＝37118～370124、Ｙ＝-85060～-85067に位置する。北西部の一部を重複関係にある９号竪穴建物によって欠く。

重複関係　９号竪穴建物、22号竪穴建物、23号竪穴建物





27号竪穴建物１号カマド

1　黒褐 10YR3/2　黒色灰と泥流土ブロックを含み、ややしまりが強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土、黒色土の混土の弱粘性土。煙道天井部崩落土とみられる。下半に被熱赤変部分が見られる。
4　暗褐 7.5YR3/3　黒色灰と不均等に焼土を多く含み、ややしまりを欠く細粒土。
5　？
6　オリーブ褐 2.5Y4/3　ボソボソした灰多めの泥流土が基質、焼土を含む。天井部崩落土。
7　灰褐 5YR4/2　焼土ブロックを含み、ややしまりが強い。
8　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と炭化物粒を不均等に含み、しまりが強い弱粘性土。
9　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土粒をやや多く炭化物粒を不均等に含む、弱粘性土。

27号竪穴建物２号カマド

1　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を霜降状に、やや多くAs-C、焼土等を不均等に少量含む。
2　暗褐 10YR3/2　泥流土不均等に、黒色灰を含み、ややしまりが弱く、ややサラサラした感触。
3　暗褐 10YR3/2　黒色灰を多く含む。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土と黒褐色土の混土。
5　暗褐 10YR3/3　地山の流れ込み。

第46図　27号竪穴建物遺構図（２）

と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物が古い。

形状　若干の歪みがみられるがほぼ方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が5.00m、南北方向が4.82mを測る。確認面から床面までの壁高は45～53㎝を測る。

床面積　21.68㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－61°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から流れ込みにより中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　竪穴の各角を結んだ対角線上、各壁から1.10～1.20mほど内側に検出された。各柱穴の形状と規模は以下のとおりである。

柱穴Ｐ１形状：楕円形、規模：径50×32㎝、深さ53㎝

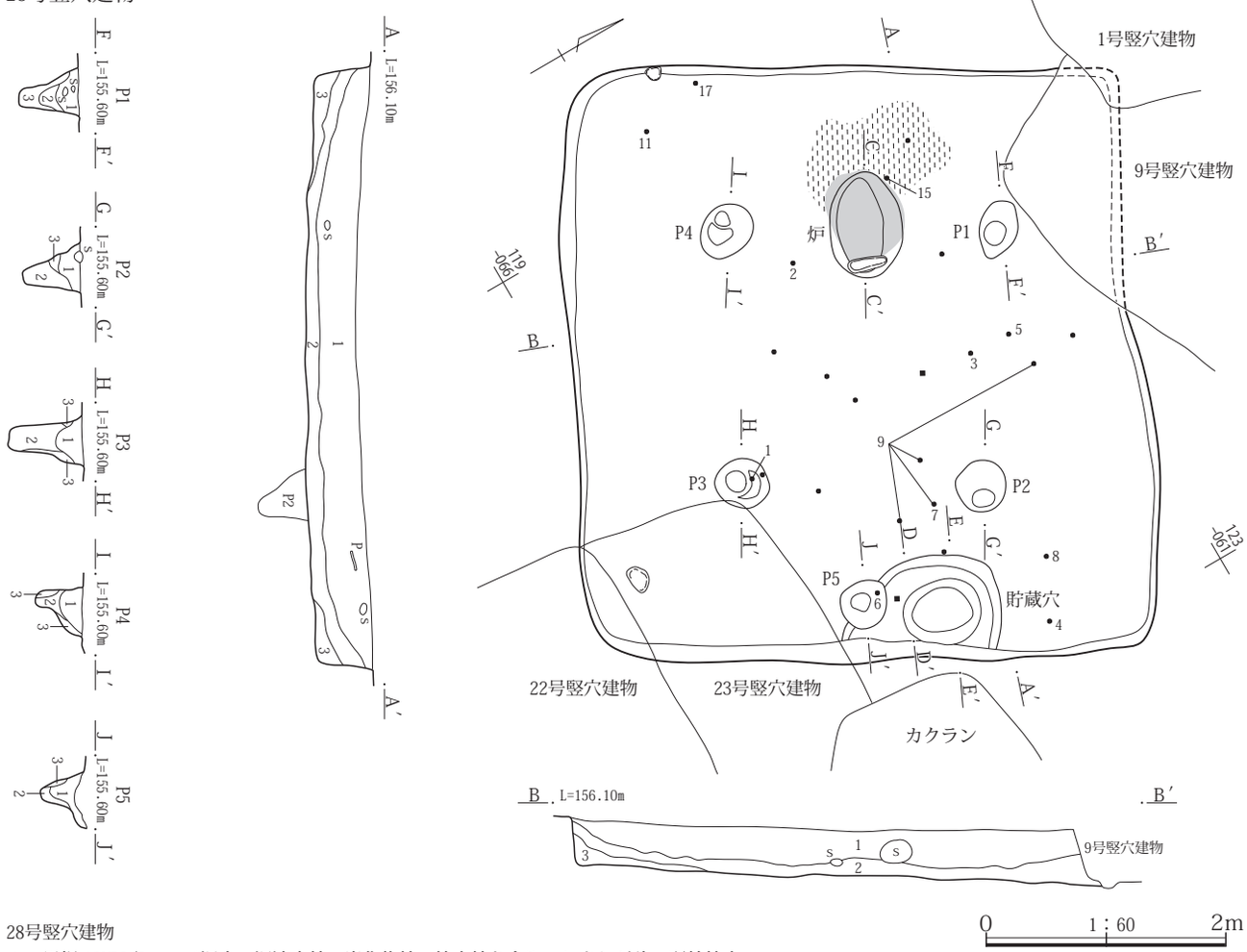
柱穴Ｐ２形状：円形、規模：径42×42㎝、深さ55㎝

柱穴Ｐ３形状：円形、規模：径45×42㎝、深さ65㎝

柱穴Ｐ４形状：楕円形、規模：径49×40㎝、深さ50㎝、

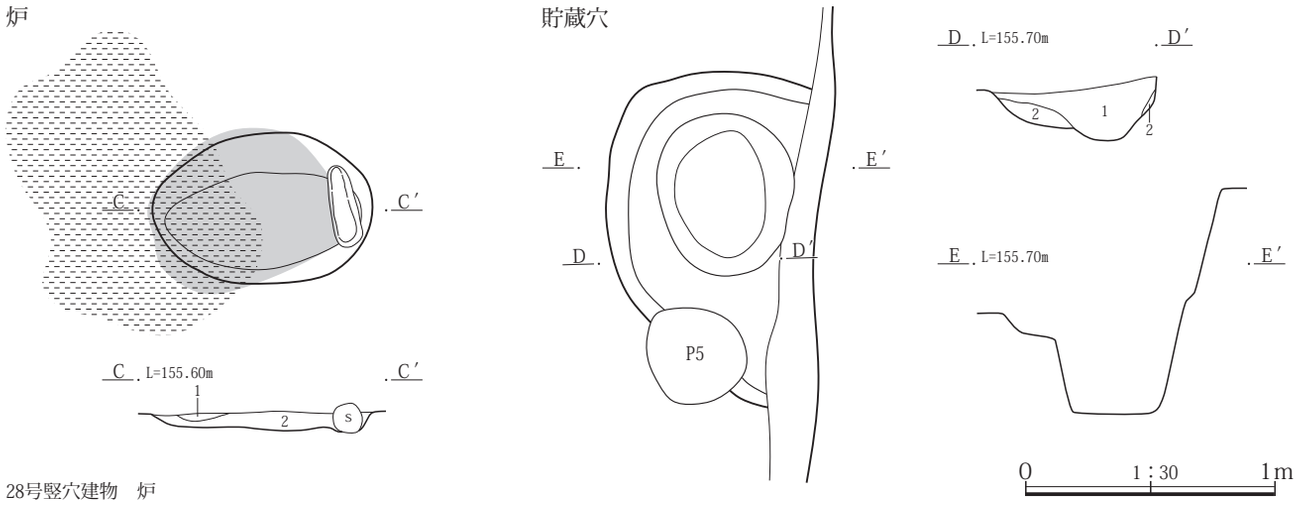
柱穴間距離はＰ１～Ｐ２が2.20m、Ｐ２～Ｐ３が2.08m、Ｐ３～Ｐ４が2.20m、Ｐ４～Ｐ１が2.25mを測る。なお、柱自体は抜き取りが行われたとみられるが、土層断面では明確な痕跡は確認できなかった。

28号竪穴建物



28号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土粒、炭化物粒、焼土粒を含み、しまりが強い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　中央付近は炭化物を含むが、全体的には含有物の少ない粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土と２の混土、不均等に炭化物を含む。壁崩落土。
28号竪穴建物Ｐ１～５
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、ややしまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを10％含む。
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3　褐色土ブロックを20％含み、柔らかい。

第47図　28号竪穴建物遺構図（１）



28号竪穴建物　炉
１　黒褐 7.5YR3/2　炭化物粒と黒色灰を多く含む、細粒土。底面付近は被熱し赤変している。
２　暗褐 10YR3/3　泥流土粒をやや多いと炭化物、焼土を少量含む、細粒土。
28号竪穴建物 １号床下土坑
１　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
２　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを10％含む。

第48図　28号竪穴建物遺構図（２）

貯蔵穴　東壁際の中央よりやや東寄りから検出された。貯蔵穴本体は1.30×0.75mの範囲を床面より10cmほど掘り下げ、幅10～20cmほどの平坦面を設けた内側に掘り込まれていた。本体の形状は楕円形で、規模は径0.65×0.55m、深さ床面より0.43mを測る。

その他施設　東壁中央の壁際で梯子穴とみられる柱穴Ｐ５を検出している。形状は楕円形で規模は径41×38cm、深さ38cmを測る。

火処　Ｐ４とＰ１の柱穴間に炉が設けられていた。形状は楕円形を呈し、規模は径0.85×0.60mで５～６cmほど窪んでいた。また、炉東寄りには長さ40cm、径12cmの棒状礫が枕石として置かれていた。炉正面は赤褐色土で焼土化し、西側に灰層が広がっていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器、流動滓、石製品凹石、多孔石などが出土している。このうち、４の土師器器台と８の土師器壺が床面からの出土である。図示した土器はほぼ同時期のものとみられ、床面より上位から出土している土器も本竪穴建物に共伴すると判断できる。なお、８の土師器壺や15の土師器甕は縄文が施文されており、吉ケ谷式に比定できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器から３世紀後半代に比定できる。

29号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37112～37117、Ｙ＝-85048～-85053に位置する。遺構の東半は調査対象区外に存在する。

重複関係　４号竪穴建物、27号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が古い。

形状　方形または長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が4.50m、南北方向は調査範囲内で2.80mを測る。確認面から床面までの壁高は60～66cmを測る。

床面積　残存範囲内で10.01㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－24°－Ｗを指す。

埋没状態　周囲から灰褐色土が流れ込んだ後、黒褐色土によって短期間に埋没した様子が観察でき、中程でレンズ状の堆積状態から自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　確認されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

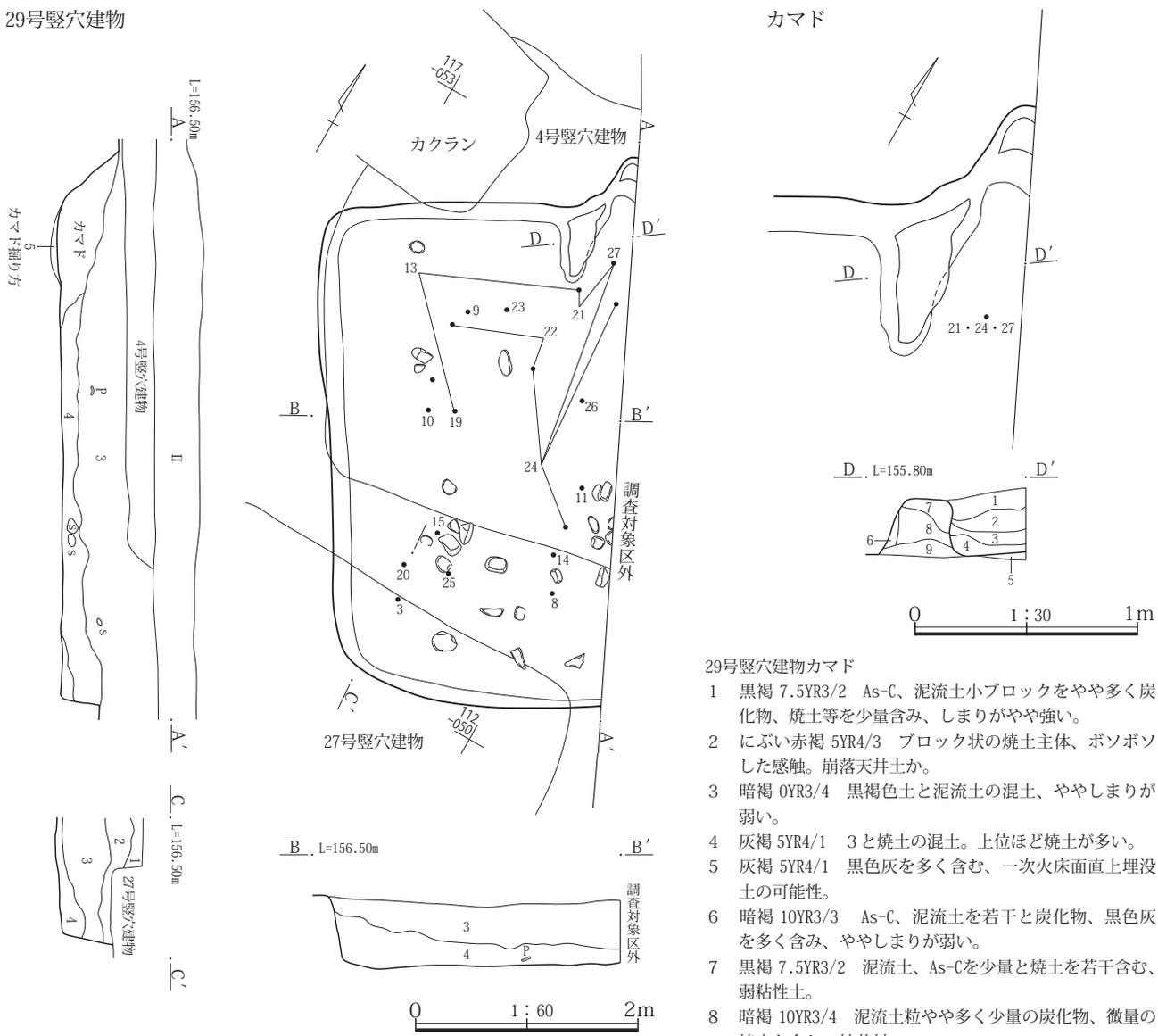
その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　北壁にカマドが構築されている。燃焼部の半分と

右袖は調査対象区外に延びるため全貌は不明である。残存状態は左袖が比較的良好な状態であったが、燃焼部から煙道部にかけての天井は土層断面でも痕跡が不明瞭な状態であった。規模は全長1.15m、幅は調査区内で0.70mを測る。なお、燃焼部手前からは21・24の土師器甕が出土している。この甕はカマドに掛けられていたものが、カマドが壊される時に一緒にカマド手前側に落とされたものと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高盤・長頸壺・甕、灰釉陶器などが出土している。

このうち、９の須恵器杯、13の須恵器高盤、20の土師器小型甕が床面から、21～24、27の土師器甕がカマドからの出土である。なお、31の灰釉陶器椀は埋没土からの出土で、後に混入したものである。この他、埋没土や床面より６～28㎝上の位置から土師器杯・甕や須恵器杯・高盤が出土しているが、これらは形態的に本竪穴建物に共伴する位置から出土している須恵器杯や土師器甕と同じ年代観が与えられる。



29号竪穴建物カマド
1　黒褐 7.5YR3/2　As-C、泥流土小ブロックをやや多く炭化物、焼土等を少量含み、しまりがやや強い。
2　にぶい赤褐 5YR4/3　ブロック状の焼土主体、ボソボソした感触。崩落天井土か。
3　暗褐 0YR3/4　黒褐色土と泥流土の混土、ややしまりが弱い。
4　灰褐 5YR4/1　３と焼土の混土。上位ほど焼土が多い。
5　灰褐 5YR4/1　黒色灰を多く含む、一次火床面直上埋没土の可能性。
6　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土を若干と炭化物、黒色灰を多く含み、ややしまりが弱い。
7　黒褐 7.5YR3/2　泥流土、As-Cを少量と焼土を若干含む、弱粘性土。
8　暗褐 10YR3/4　泥流土粒やや多く少量の炭化物、微量の焼土を含む。袖芯材。
9　灰黄褐 10YR4/6　泥流土を多く含み、しまりが強い。

29号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C混土、不揃いの泥流土小ブロックを不均等に含む。
2　黒褐 10YR2/2　As-C、焼土粒を少量含み、しまりが強い粘性土でねっとりした感触
3　黒褐 10YR3/2　As-Cを少しと炭化物を多く含む、弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土ブロックをやや多く炭化物を含み、ややしまりが弱い弱粘性土。壁崩落土。

第49図　29号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している須恵器杯や土師器甕から７世紀第３四半期に比定できる。

30号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37103～37108、Ｙ＝-85071～-85076に位置する。

重複関係　13号竪穴建物、18号竪穴建物、20号竪穴建物、25号竪穴建物、48号竪穴建物、50号竪穴建物、135号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は20号竪穴建物、48号竪穴建物、50号竪穴建物、135号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しいが、13号竪穴建物、18号竪穴建物、25号竪穴建物より古い。

形状　南壁と西壁側が他竪穴建物との重複によって欠き、残存状態が不良なため明確ではないが主軸方向が長い長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向が4.83m、南北方向が4.32mを測る。確認面から床面までの壁高は21～28㎝を測る。

床面積　17.64㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－135°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面は重複する20号竪穴建物によって欠く部分が多く、不明な部分が多い。なお、下層の堆積にやや不自然な点が観察できるが、前期のように不明な点が多いことから断定には至っていない。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存する南東角から、東壁、北壁の一部で検出している。なお、カマド下にも掘り込まれていたが、カマド構築のためか埋め戻されている。規模は幅10～15㎝、深さ５～10㎝を測る。

柱穴　中央よりやや北東に寄った位置でＰ１を検出している。このピットに対応するピットは検出されなかったため、Ｐ１を柱穴と断定するには至らないが、規模から可能性は窺える。規模は径18×17㎝、深さ55㎝を測る。なお、Ｐ１の周囲には径５～15㎝大の礫が散乱した状態で出土していた。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁でも東南角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口や燃焼部の天井部は失われていたが、両袖は比較的良好な状態であった。なお、煙道は壁外に構築されたか垂直に立ち上がる形態のためか痕跡も確認できなかった。規模は全長0.69m、幅0.95mを測る。燃焼部は右袖側に焼土層が残るが、火床面では明確ではなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器、鉄製品釘・蛇行状製品が出土している。出土量は653点と多かったが、図示できた土器は６点と少ない。このうち、２の須恵器椀と６の土師器甕が床面から、５の灰釉陶器小瓶が床面より６㎝上、１の須恵器杯が11㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面より出土した須恵器椀から９世紀第４四半期に比定できる。

31号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37052～37056、Ｙ＝-85030～-85034に位置する。

重複関係　139号竪穴建物、46号土坑と重複関係にある。新旧関係は139号竪穴建物より本竪穴建物の方が新しいが、46号土坑との関係は明確ではないが、本竪穴建物のほうが古いと判断される。

形状　東辺が西辺より0.6mほど長い台形状を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が3.67m、南北方向は3.35mを測る。確認面から床面までの壁高は21～33㎝を測る。

床面積　9.80㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－88°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では北側から土砂が流れ込んだ後に比較的短期間に埋没したことが確認された。埋没状態については流れ込んだ土砂にブロック状のものが含まれていないことから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

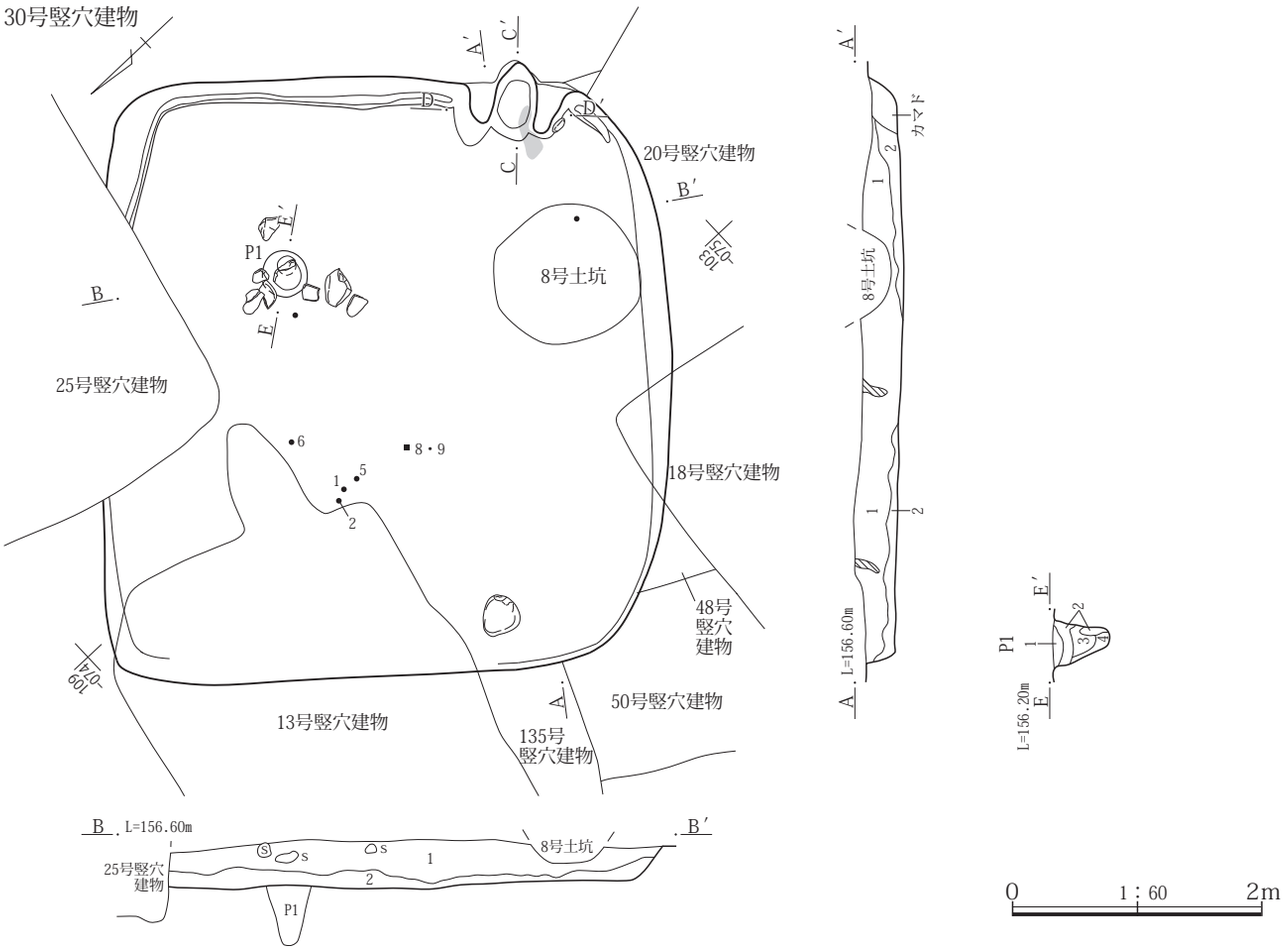
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

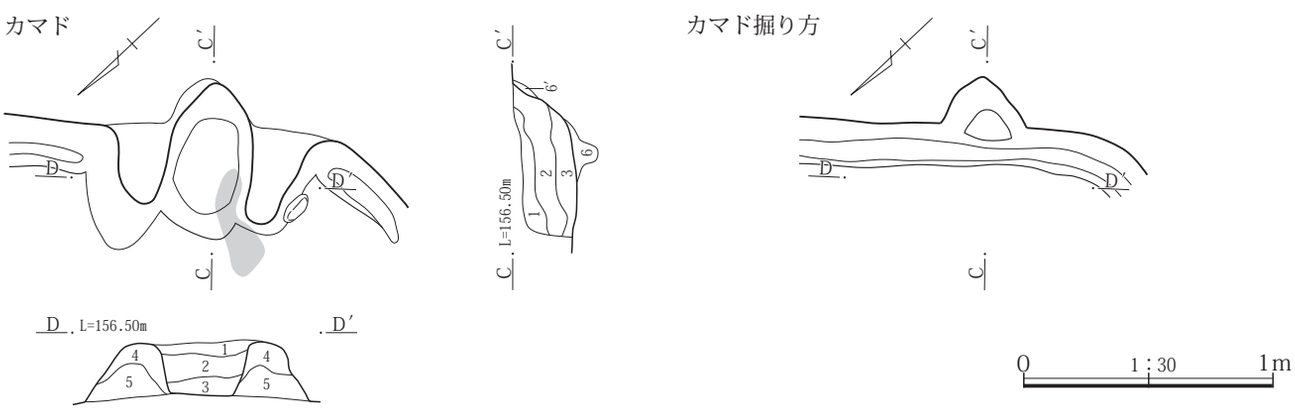
その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は燃焼部から煙道部にかけての天井は失われていた状態であった。規模は全長0.72m、幅は調査区内で0.95mを測る。燃焼部幅は0.50mである。なお、焚口は壁面の延

30号竪穴建物



カマド



30号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を多く焼土、炭化物わずかに含みしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　泥流土粒を不均等にやや多く炭化物やや多く含む、粒子細かな弱粘性土。
30号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-Cの混土、焼土粒を不均等に含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　焼土を不均等に含む、粘性土。ねっとりした感触の細粒土。
3　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土と黒色灰を多く含み、ややしまりが弱い。
4　灰黄褐 10YR4/2　粘性土中に泥流土を霜降状に、炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い。
5　黒褐 10YR3/2　炭化物粒、焼土粒含み、しまりが強い粘性土。カマド袖芯材。
6　黒褐 10YR3/2　焼土や炭化物粒をわずかに含む、やや粗粒土。壁溝をカマド構築前に埋め戻されている。
30号竪穴建物　Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を少量含む、弱粘性土。
2　暗灰黄 2.5Y4/2　１㎝大の泥流土ブロックを多く含む粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　炭化物を少量含み、ややしまりを欠く。柱痕とみられるがあまり明瞭ではない。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を含み、ややしまりある粘性土。

第50図　30号竪穴建物遺構図

長線上に造られ、燃焼部から煙道部は壁外に掘り込まれている。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器皿・杯・椀・壺・甕、灰釉陶器、鉄製品釘・刀子、流動滓などが出土している。このうち、19の須恵器椀、27の須恵器長頸が床面から、11の須恵器杯、37・38・40の土師器甕、43の須恵器甕がカマドからの出土である。この他、多くの須恵器杯・椀、土師器甕が床面より10～20㎝上からの出土である。また、29の凸帯付四耳壺は床面より23㎝上、23の灰釉陶器椀は埋没土からの出土である。灰釉陶器椀は高台の形態や施釉方法から黒笹14号窯式期に比定できる。凸帯付四耳壺はやや大型の壺で、器壁が厚く、胴部上位には降灰が厚く付着している。なお、同様な凸帯付四耳壺は159号竪穴建物と遺構外から出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した土師器甕の口縁部から頸部がコの字状口縁を呈しており、その頸部もほぼ直立する形態であることから、９世紀第３四半期に比定できる。

139号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37051～37054、Ｙ＝-85030～-85035に位置する。なお、重複関係にある31号竪穴建物によって北側４分の３を欠く。

重複関係　31号竪穴建物、51号土坑と重複関係にある。新旧関係は31号竪穴建物、51号土坑より本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向が3.67m、南北方向は3.35mを測る。確認面から床面までの壁高は21～33㎝を測る。

床面積　残存範囲内で6.37㎡を測る。

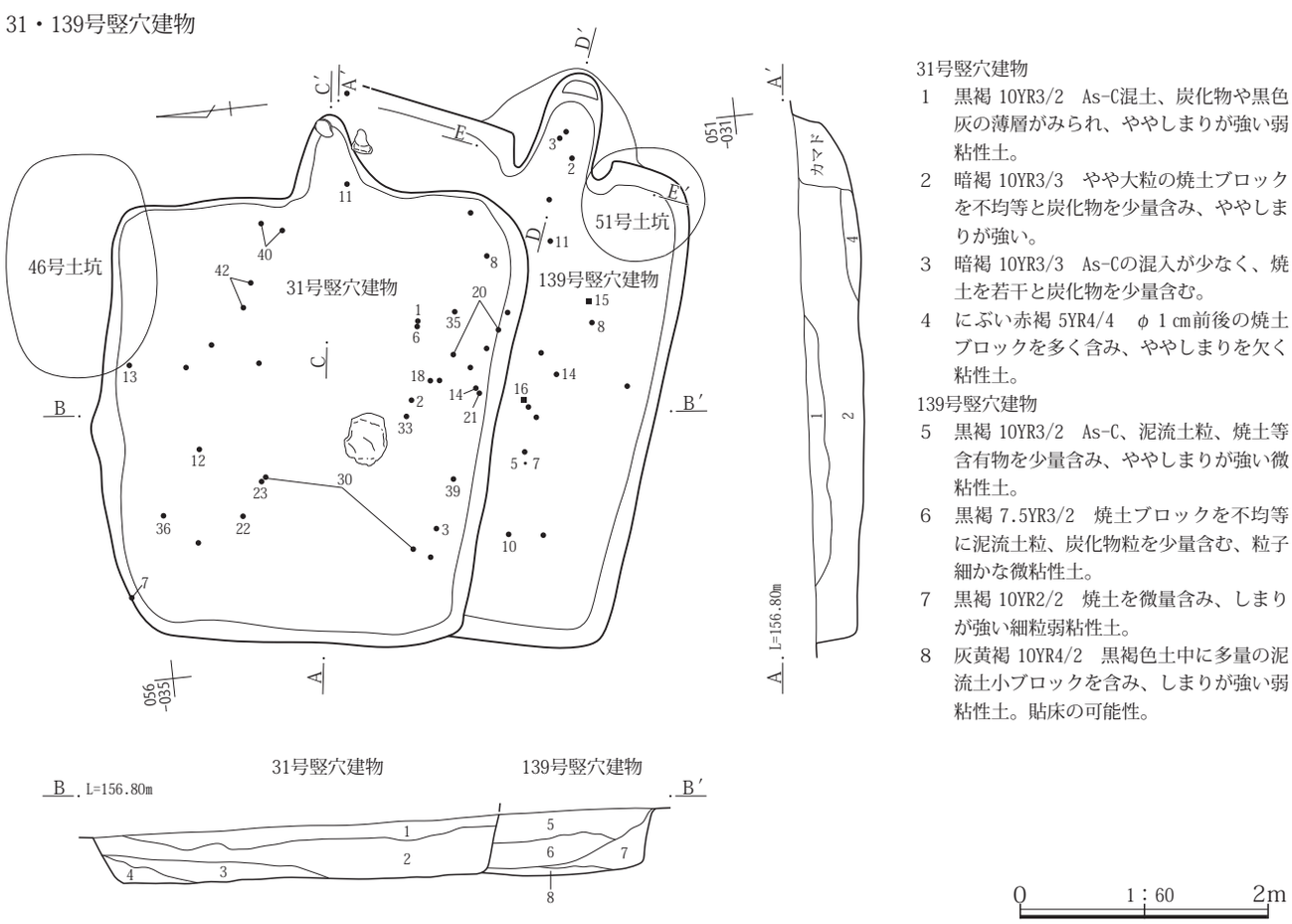
主軸方位　Ｎ－107°－Ｅを指す。

埋没状態　大部分を31号竪穴建物によって欠くが、土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程でレンズ状の堆積が確認されたことから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られる。一部では灰黄褐色土を充填して踏み固めて床面を造っている。

掘り方　床下土坑などの施設は検出されなかった。

31・139号竪穴建物

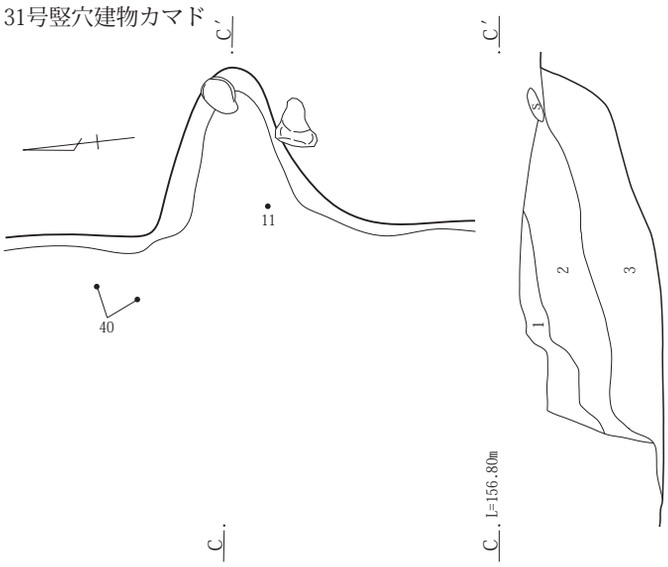


31号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、炭化物や黒色灰の薄層がみられ、ややしまりが強い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　やや大粒の焼土ブロックを不均等と炭化物を少量含み、ややしまりが強い。
3　暗褐 10YR3/3　As-Cの混入が少なく、焼土を若干と炭化物を少量含む。
4　にぶい赤褐 5YR4/4　φ１cm前後の焼土ブロックを多く含み、ややしまりを欠く粘性土。

139号竪穴建物
5　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒、焼土等含有物を少量含み、ややしまりが強い微粘性土。
6　黒褐 7.5YR3/2　焼土ブロックを不均等に泥流土粒、炭化物粒を少量含む、粒子細かな微粘性土。
7　黒褐 10YR2/2　焼土を微量含み、しまりが強い細粒弱粘性土。
8　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土中に多量の泥流土小ブロックを含み、しまりが強い弱粘性土。貼床の可能性。

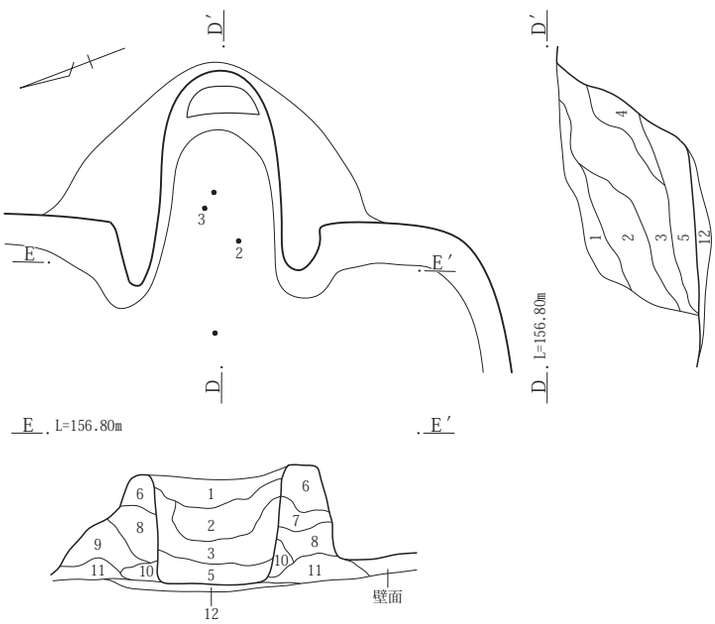
第51図　31・139号竪穴建物遺構図（１）

31号竪穴建物カマド

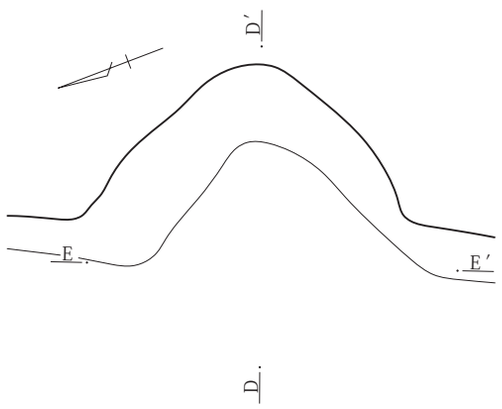


31号竪穴建物カマド
1　暗褐 7.5YR3/3　焼土を少量含み、ややしまりがある細粒土。
2　暗褐 7.5YR3/3　焼土を少量含み、しまりが強い。
3　黒褐 10YR3/2　灰を含むためややサラサラした感触のしまりがある弱粘性土。

139号竪穴建物カマド



139号竪穴建物カマド掘り方



0　1：30　1m

139号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物５に近似する微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　不明瞭な泥流土や焼土を不均等に含み、しまりが強い微粘性土。
3　暗褐 10YR3/3～灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土ブロック。焼土小ブロックを不均等に含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
4　灰褐 7.5YR4/2　焼土を含み、ややしまりが弱い細粒土。ややサラサラした感触。
5　暗赤褐 5YR3/2　焼土小ブロックと大粒泥流土ブロックを多く炭化物粒を含み、ややしまりが強い細粒土。
6　黒褐 10YR3/2　竪穴建物５と同様であるが、含有物は少ない。
7　灰黄褐 10YR4/2　泥流土を多く焼土・炭化物を含み、ややしまりの強い微粘性土。
8　暗褐 10YR3/3　不揃いの焼土小ブロック、泥流土を含み、しまりが強い細粒弱粘性土。袖構築材。
9　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土と泥流土の混土。袖としてはややしまりが弱い、左袖のみみられる。
10　暗褐 7.5YR3/3　焼土小ブロック、泥流土ブロックをやや多く含み、しまりやや弱い弱粘性土でサラサラした感触。
11　暗赤褐 2.5Y3/3　褐色味をおびた泥流土主体に黒褐色土を含む、強い粘性土。袖芯構築材。
12　暗褐色土　焼土ブロックを含む。カマド堀り方

第52図　31・139号竪穴建物遺構図（２）

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の東南角寄りにカマドが構築されている。残存状態は燃焼部から煙道にかけての天井は失われていた状態であった。両袖では残存していた。規模は全長1.00m、幅は1.05mを測る。燃焼部幅は0.43mである。燃焼部から煙道部は壁外に存在し、燃焼部と煙道部の間には27㎝の段が設けられている。

カマド前から南東角にかけての床面には焼土粒の散布が確認されている。

出土遺物　遺物には土師器杯・鉢・甕、須恵器皿・杯・椀・甕、鉄製品鎌・棒状製品などが出土している。このうち、３の土師器甕と２の土師器鉢がカマドからの出土である。この他、位置を記録して取り上げた土器は床面より10～30㎝上の間からの出土である。また、15の鎌と16の棒状製品はほぼ同じ位置からの出土でともに床面より32㎝、33㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物から出土した土器のうち14点を図示したが、確実に本竪穴建物に共伴する位置から出土した３の土師器甕は頸部がくの字状を呈している。このことから本竪穴建物に共伴する土器は１の土師器杯、２の土師器鉢と３及び４の須恵器甕と判断できる。この他の土器はその形態から重複関係にある31号竪穴建物から混入したと想定できる。本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した３の土師器甕から８世紀第３四半期に比定できる。

32号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37039～37043、Ｙ＝-85022～-85026に位置する。

重複関係　竪穴内部に19号ピットが検出されているが、ピット底面は床面まで達していない。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　東辺が西辺に比較して0.4mほど短い台形状を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が3.98m、東西方向は4.07mを測る。確認面から床面までの壁高は13～45㎝を測る。

床面積　11.93㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－５°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では南東から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、竪穴周囲は地山をそのまま踏み固め、中央部は黒色土を充填して平坦面を造っている。

掘り方　床下土坑などの施設は検出されなかったが、中央部は掘り込み、黒色土を充填していた。

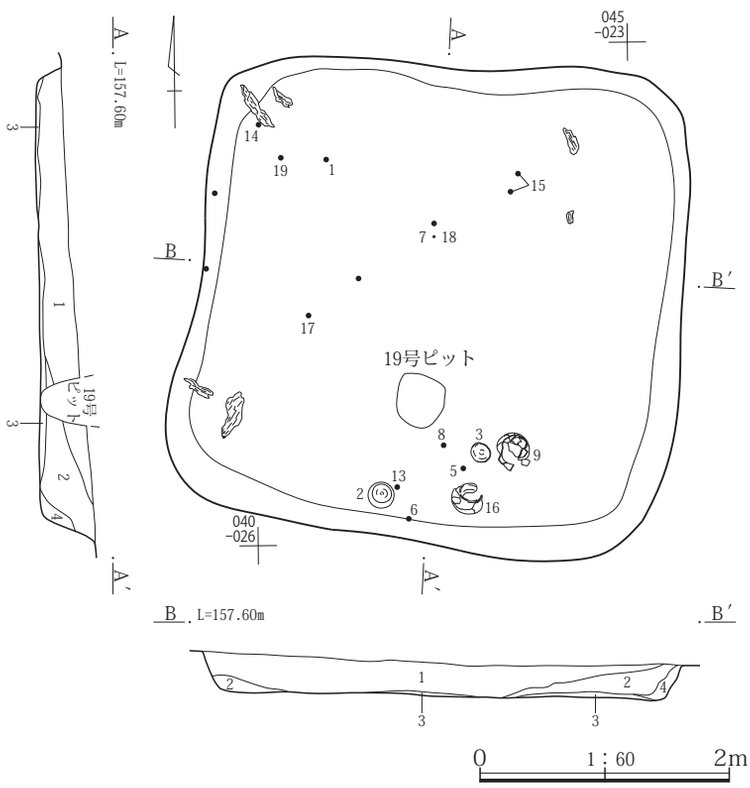
壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

32号竪穴建物



32号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混の微粘性土、As-Cの量はやや少ない。泥流土ブロックを不均等に含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-C・泥流土の混入がやや多く、やや黄色味を帯びる。下半に炭化物を多く含む。
3　黒褐 10YR3/3　As-Cの混入が多く、黒色粘質土(地山)を小ブロック状に含む、粘性土。貼床の可能性有り。
4　暗褐 7.5YR3/3　地山壁の崩落土とみられる粘性土。

第53図　32号竪穴建物遺構図

火処　出土遺物から炉が設けられている時期の竪穴建物と想定されるが、床面を精査しても検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器高杯・器台・壺・甕・Ｓ字状口縁台付甕等と須恵器杯、鉄製品刀子などが出土している。出土した遺物の多くは床面よりやや高い位置からの出土であるが、２の土師器高杯、９の土師器壺、13・14の土師器小型甕、15の土師器Ｓ字状口縁台付甕が床面からの出土である。20・21の須恵器杯は118号竪穴建物に近い確認面からの出土である。本竪穴建物の存続時期とはかけ離れた年代観が与えられ、118号竪穴建物出土遺物に近い年代観である。こうしたことから、この２点は118号竪穴建物構築時に周堤帯下に埋納されたものと想定される。また、埋没土内からは22・23の原始灰釉陶器瓶とみられる胴部片が出土している。この他に24の鉄製品刀子が埋没土内より出土しているが、これも後の混入とみられる。

所見　本竪穴建物の存続時期は、床面から出土した遺物から４世紀前半に比定できる。また、火処が設けられていないことから、居住施設以外の用途が想定される。

33号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37101～37104、Ｙ＝-85084～-85085に位置する。本竪穴建物の西側は大部分が調査対象区外に存在する。

重複関係　調査範囲内では他の遺構との重複関係は確認されていない。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　調査範囲内では主軸方向の東西方向が0.86m、南北方向は最大で2.85mを測る。確認面から床面までの壁高は15～22㎝を測る。

床面積　残存範囲内で1.41㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－83°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では短期間に黒褐色土によって埋没したとみられることから、自然埋没である可能性が高い。

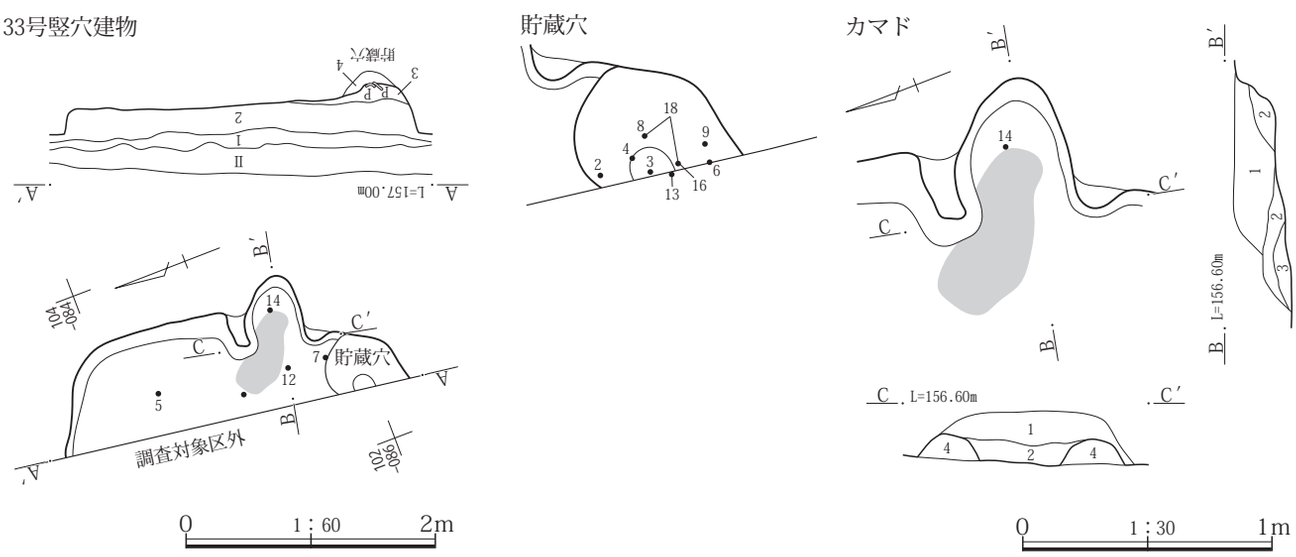
床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角隅で検出されている。西半分は調査対象区外に存在する。形状は円形を呈すると想定される。規模は南北0.75m、東西は調査範囲内で0.45m、深さ0.23mを



33号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-B下の弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土を不均等に炭化物、床面直上に焼土を含み、ややしまりがある弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　含有物少ない弱粘性土。上面に貼床や踏み固めは見られない。
4　黒褐 10YR2/2　炭化物粒を多く含み、ややしまりを欠く。

33号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　不均等に焼土を含み、ややしまりが強い粒子細かな弱粘性土。
2　暗赤褐 5YR3/3　焼土、泥流土粒、炭化物粒を不均等にやや多く含み、ややしまりを欠く。
3　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多量に含み、しまりが弱い微粘性土。焚口から灰等を掻きだした土。
4　黒褐 10YR3/2　含有物の少ない、しまりが強い粘性土。

第54図　33号竪穴建物遺構図

測る。貯蔵穴内部からは１～６、８・９・12・13・16・18の須恵器杯、椀、羽釜、土師器甕などが出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は燃焼部から煙道にかけての天井は失われていた状態であった。両袖では左側は比較的良好な状態であるが、右側は一部だけが残存していた。規模は全長0.66m、幅は0.90mを測る。燃焼部幅は0.37mである。燃焼部の一部から煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部の火床面には焼土が確認されている。

出土遺物　遺物は土師器甕、黒色土器椀、須恵器杯・椀・羽釜、灰釉陶器、緑釉陶器などが出土している。このうち、１～６、８・９・12・13・16・18の須恵器杯・椀・羽釜、黒色土器椀が貯蔵穴、10・14の須恵器椀がカマド、７・12の須恵器椀が床面からの出土である。なお、15の緑釉陶器椀は埋没土内からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、貯蔵穴や床面から出土した６～８の須恵器椀には10世紀後半代の特徴である高台が足高にある形態が存在するが、杯には器高の浅い皿状の形態が存在しないことから10世紀第３四半期に比定できる。

34号竪穴建物

位置　１区調査区中央部南寄り、Ｘ＝37066～37069、Ｙ＝-85045～-85048に位置する。重複関係にある１号溝によって北東部とカマド煙道部の一部を欠く。

重複関係　144号竪穴建物、１号溝と重複関係にある。新旧関係は１号溝より本竪穴建物のほうが古く、144号竪穴建物より新しい。

形状　若干各辺長が異なるがほぼ方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は2.45m、東西方向は2.51mを測る。確認面から床面までの壁高は22～32㎝を測る。

床面積　4.04㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－45°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、大部分は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、煙道部の天井は崩落した状態であったが残存していた。なお、両袖は残存していた。規模は全長が1.15m、幅が1.00m、燃焼部幅0.31mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。煙道部天井は焼土化が顕著であった。

出土遺物　遺物は土師器杯・椀・甑・甕、須恵器杯・椀、石製品砥石などが出土している。しかし、遺構の残存状態が良好な状態にもかかわらず、出土した遺物は全体的に少なく、図示可能な土器は土師器杯、椀、甑に限られた。２の土師器椀は類例をみない形態である。また、３・４の土師器甑も底部が口縁部と同様に外反する特異な形態であるが、成整形は古墳時代の甑に近い状態である。この他に６の石製品砥石が床面より８㎝上から出土している。

所見　本竪穴建物の存続年代は、カマドや床面など確実に共伴する遺物が存在していないが、１の土師器杯や３・４の甑から６世紀後半代に比定できる。

35号竪穴建物

位置　１区調査区中央部南寄り、Ｘ＝37061～37064、Ｙ＝-85045～-85049に位置する。

重複関係　１号溝と重複関係にある。新旧関係は１号溝より本竪穴建物の方が古い。

形状　ほぼ方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が2.95m、東西方向は3.09mを測る。確認面から床面までの壁高は30～38㎝を測る。

床面積　推定で6.83㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－24°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、大部分は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っているが、西半では黒色土を充填して踏み固めている。

掘り方　床下土坑などの施設は検出されなかった。大部分は地山をそのまま床面としているが、竪穴の西半では

やや深く掘り込でいる。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

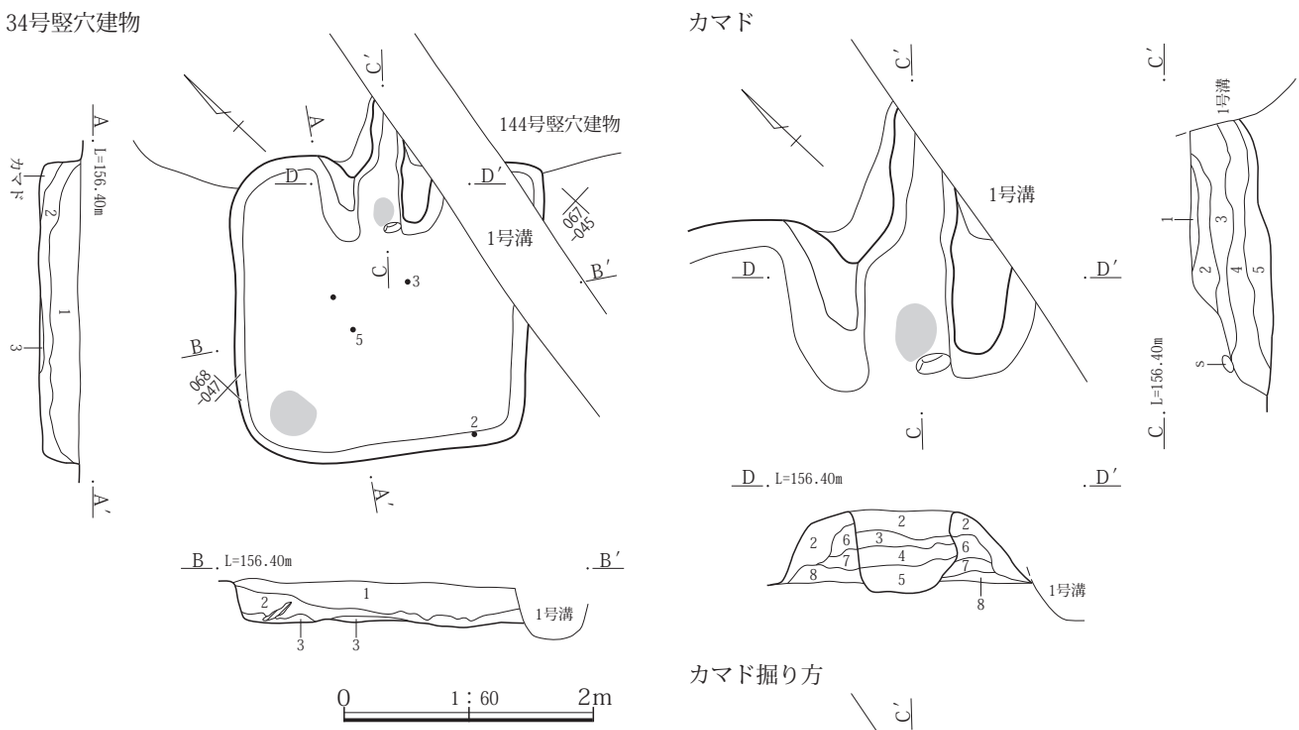
火処　北壁のほぼ中央にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていた状態であった。煙道部は地山を掘り抜いていたが、土砂が流れ込んだ後に崩落している。両袖では焚口側は失われていたが、燃焼部は残存していた。規模は全長1.57m、幅は1.05mを測る。燃焼部幅は0.37m、煙道部長1.02mである。煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部には顕著な焼土が確認され、使用頻度が多かったことが窺える。

出土遺物　遺物は土師器杯・鉢、須恵器甕などが出土しているが、出土量は図示７点、未掲載77点と少ない。４の土師器杯が床面、３の土師器杯が床面より13㎝上、６の土師器鉢が床面より８㎝上、７の須恵器甕の胴部小片がカマド堀方からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や床面近くから出土している土師器杯から６世紀末から７世紀前半代に比定できる。

36号竪穴建物

位置　１区調査区中央部南寄り、Ｘ＝37061～37067、Ｙ＝−85048～−85054に位置する。

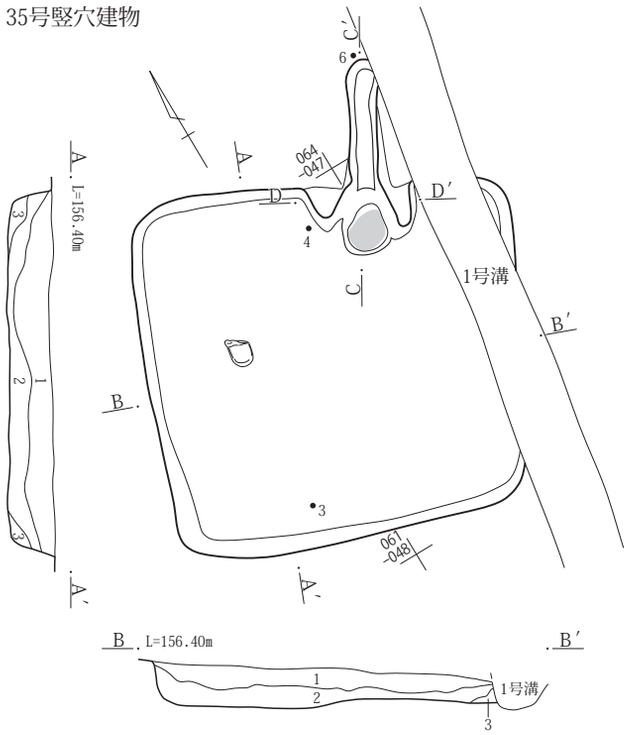


34号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状に炭化物・焼土を不均等に含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/4　不均等に泥流土を含むがAs-Cはごく少ない、ややしまりが弱い弱粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土小ブロックと２の混土、焼土をわずかに含み、ややしまりがある。

34号竪穴建物カマド
1　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土の混入やや多く、しまりが強い。
3　褐 7.5YR4/3　４に多量の焼土粒を含む。焚口側で焼土少なく、灰色味の強い泥流土がみられる。
4　黒褐 10YR2/2　含有物少ない細粒土。灰を含む、サラサラした感触。
5　黒褐 10YR3/2 ややしまりが弱い細粒土。燃焼部側で焼土粒、煙道側で泥流土を多く含む。
6　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土と泥流土小ブロックの不均等な混土。しまりが強い。
7　暗褐 10YR3/3　黒褐色土粒と泥流土をブロック状・帯状に含み、しまりが強い。
8　暗褐 10YR3/3　黒褐色土中に不揃いの泥流土ブロックを含み、しまりが強い。

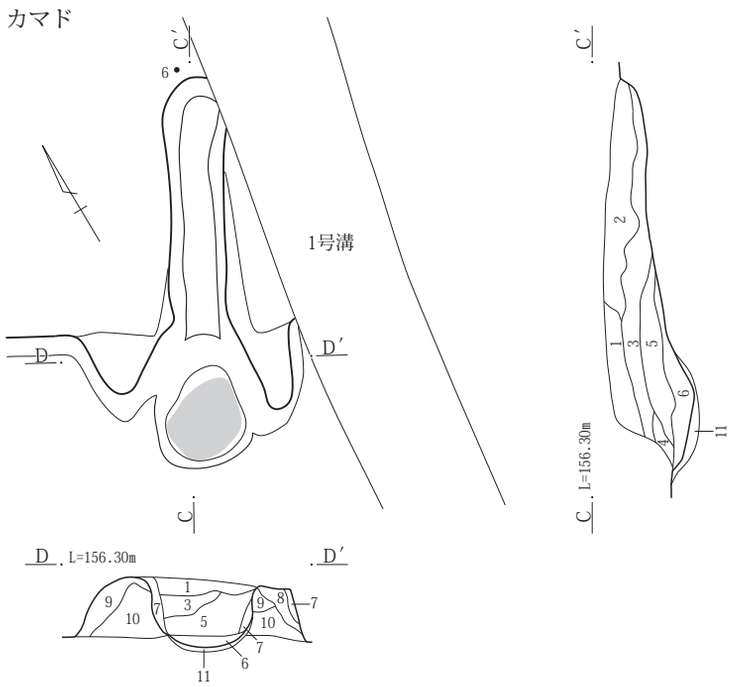
第55図　34号竪穴建物遺構図

35号竪穴建物

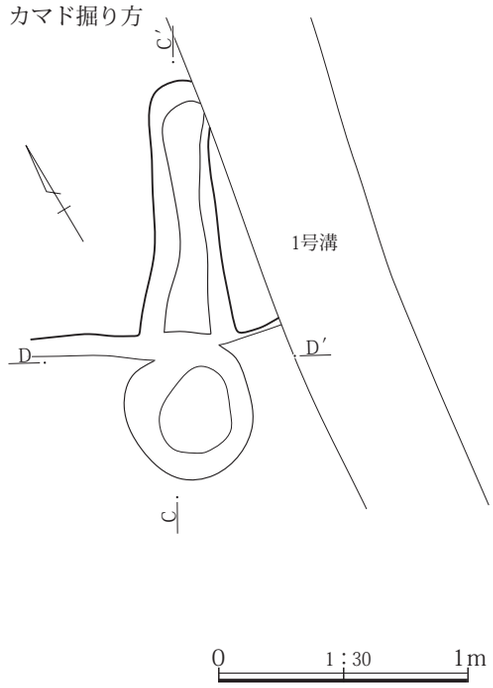


35号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　多量のAs-Cと下半に灰黄色の大粒パミス、泥流土粒を多く含む、弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　As-Cの混入ごく少ない、泥流土小ブロック、焼土等を不均等に少量含む、粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と２の混土。壁崩落土。

カマド



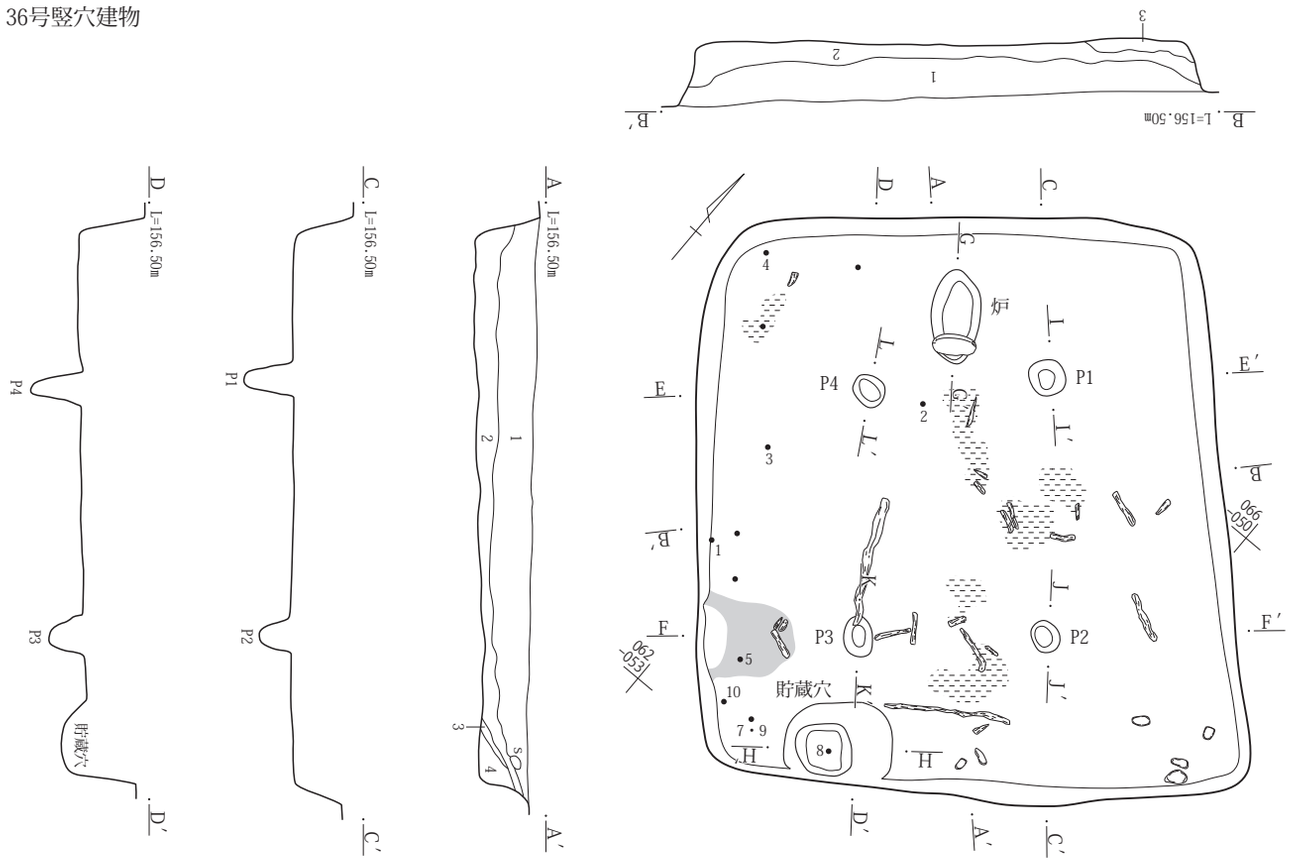
カマド掘り方



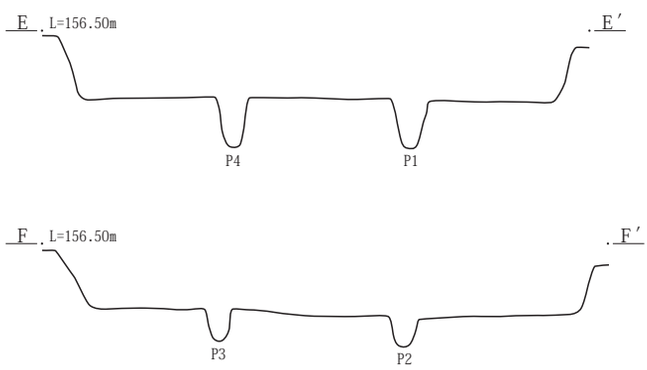
35号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少し含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 7.5YR3/2　As-Cを少量と大粒の焼土ブロック含み、やや粒子細かな土。
3　暗褐 10YR3/3　泥流土粒や焼土粒を不均等に灰を含み、ややしまりが弱いサラサラした感触。
4　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土と３の混土、泥流土は一部被熱し赤変している。
5　黒褐 10YR3/2　黒色灰、焼土ブロックを含み、ややしまりを欠くサラサラした感触。燃焼部埋没土。
6　黒褐 10YR3/2　泥流土ブロックを含み、ややしまりが強い。
7　暗褐 7.5YR3/3～灰褐 5YR4/2　燃焼部内の被熱部分。東側で顕著。西側で不明瞭。
8　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を多く含み、しまりの強い微粘性土。
9　黒褐 10YR3/2　泥流土粒やAs-Cを多く含む、細粒微粘性土。東側は袖の原位置を残しているが西側は崩落している。
10　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土。炭化物、焼土を若干含む、袖材としてはしまりやや弱い。
11　黒褐 10YR3/2　　燃焼部堀方埋め戻し土。

第56図　35号竪穴建物遺構図

36号竪穴建物

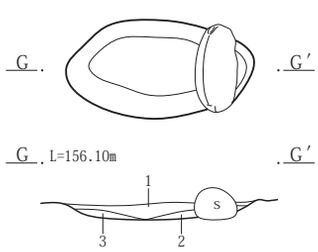


36号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　上半にAs-C、泥流土をやや多く含み、ややしまりが強い弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土をほとんど含まない、ややしまりが強い弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　As-Cをわずかに含む。
4　黒褐 10YR3/2　含有物はみられない。



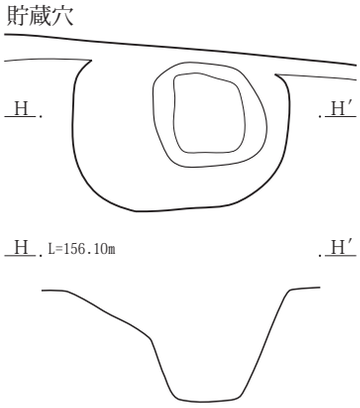
0　1：60　2m

炉



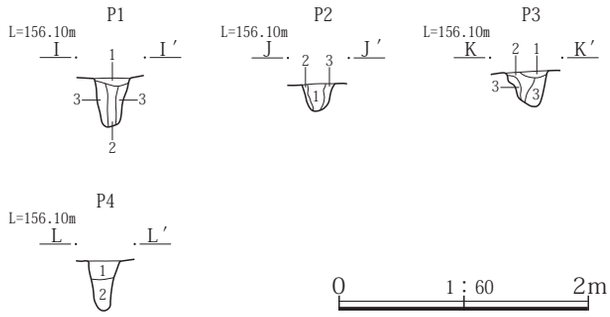
36号竪穴建物　炉
1　黒褐 10YR3/2　黒色灰主体、不揃いの焼土ブロックや泥流土粒を不均等に含み、しまりが弱い。
2　にぶい黄褐 10YR5/3　泥流土主体、黒褐色土を小ブロック状に少量含み、わずかに被熱赤変。
3　暗褐 10YR3/4　褐色味の強い泥流土と黒褐色土のブロック状混土。

貯蔵穴



0　1：30　1m

第57図　36号竪穴建物遺構図（１）



36号竪穴建物Ｐ１
１　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
２　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを20％含む。
３　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含む。
36号竪穴建物Ｐ２
１　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
２　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを30％含む。
36号竪穴建物Ｐ３
１　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
２　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを20％含み、若干柔らかい。
３　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを10％含む。
36号竪穴建物　Ｐ４
１　暗褐 10YR3/3　φ２～30㎜のにぶい黄褐色土ブロックを２％含み、若干柔らかい。
２　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを10％含む。

第58図　36号竪穴建物遺構図（２）

重複関係　他の遺構との重複関係は確認されていない。

形状　北辺が南辺に比べ0.6mほど短い台形状を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が4.64m、南北方向は4.35mを測る。確認面から床面までの壁高は34～45㎝である。

床面積　16.99㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－40°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中央部の水平堆積などが確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

床面上からは竪穴建物の構築材とみられる炭化材や炭が散在していた。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　竪穴の対角の角を結ぶ線上で４本を検出しているが、柱穴Ｐ２はやや外れた位置である。各柱穴は壁から1.2～1.5mほどの距離にある。各柱穴の形状と規模、柱穴間距離は下記のとおりである。柱穴Ｐ１は円形で径28㎝、深さ40㎝、柱穴Ｐ２は楕円形で径26×22㎝、深さ36㎝、柱穴Ｐ３は楕円形、径33×23㎝、深さ25㎝、柱穴Ｐ４は楕円形、径26×22㎝、深さ41㎝である。柱穴間距離はＰ１～Ｐ２が2.10m、Ｐ２～Ｐ３が1.50m、Ｐ３～Ｐ４が2.00m、Ｐ４～Ｐ１が1.45mである。なお、各柱穴では柱痕は確認されていない。

貯蔵穴　東壁際の南西角から0.5mの位置で検出された。形状は隅丸長方形を呈し、規模は床面で長軸0.87m、短軸0.58m、深さ0.48mを測る。貯蔵穴内部からは８の土師器壺が出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　柱穴Ｐ１とＰ４を結んだ線上の外側に炉が設けられている。形状は東西に長い楕円形を呈し、規模は長径0.77m、短径0.38mで中程が窪む。東側には長さ33㎝、径17㎝の棒状礫が枕石として置かれていた。

出土遺物　遺物は土師器椀・高杯・器台・壺・Ｓ字状口縁台付甕・甕、手捏ね土器などが出土している。３・４の土師器器台と７の壺、９のＳ字状口縁台付甕が床面から、８の土師器甕が貯蔵穴から、１の土師器椀、５の土師器器台、６の土師器甕が床面より10㎝前後上、２の土師器高杯と10の土師器甕が床面より30㎝前後上からの出土である。14の手捏ね土器椀形は埋没土からの出土である。

所見　炭化材や炭などの出土から焼失家屋の可能性が窺えるが、出土した炭化材は少なく、柱穴では柱痕がみられないことから再利用できる材を抜き取った後に不要な構築材を焼却した可能性も想定される。

本竪穴建物の存続年代は、床面から出土した土師器器台や壺・Ｓ字状口縁台付甕などから４世紀代に比定できる。

38号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37111～37115、Ｙ＝-85057～-85060に位置する。東側を重複関係ある26号竪穴建物、42号竪穴建物によって欠く。

重複関係　12号竪穴建物、22号竪穴建物、26号竪穴建物、42号竪穴建物、13号土坑と重複関係にある。新旧関係は重複関係ある遺構より本竪穴建物のほうが古い。

形状　東側を欠くため明確ではないが方形または長方形を呈すると想定される。

規模　南北方向は4.28m、東西方向は検出された範囲で3.50mを測る。確認面から床面までの壁高は39～44㎝を測る。

床面積　残存範囲内で10.40㎡を測る。

主軸方位　主軸方向を南北と仮定するとＮ－８°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察が竪穴建物全体について行えないが、残存部分では壁際の三角堆積や周囲から流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　竪穴建物が残存する範囲の壁下で検出されている。規模は幅が20㎝前後、深さ６～14㎝を測る。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。出土時から見ると炉が設けられていた可能性が高い。

出土遺物　遺物は土師器杯・壺・台付甕・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。このうち、２の土師器壺が床面より７㎝上、６の土師器甕が８㎝上、７の土師器甕が９㎝上と比較的床面に近い位置からの出土である。なお、須恵器は後に混入したものである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面に近い位置から出土した土師器壺や甕と共伴するとみられる５の土師器Ｓ字状口縁台付甕の胴部がヘラ削りによる整形であることから４世紀末から５世紀初頭に比定できる。

39号竪穴建物

位置　１区調査区北部、Ｘ＝37108～37114、Ｙ＝-85060～-85066に位置する。重複関係にある37号竪穴建物と撹乱によって北辺側の西側、21号竪穴建物によって西辺側の南側を欠く。

重複関係　21号竪穴建物、37号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物が古い。

形状　主軸方向が20㎝ほど長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が4.67ｍ、南北方向が4.47ｍを測る。確認面から床面までの壁高は29～44㎝を測る。

床面積　推定で15.85㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－121°－Ｅを指す。

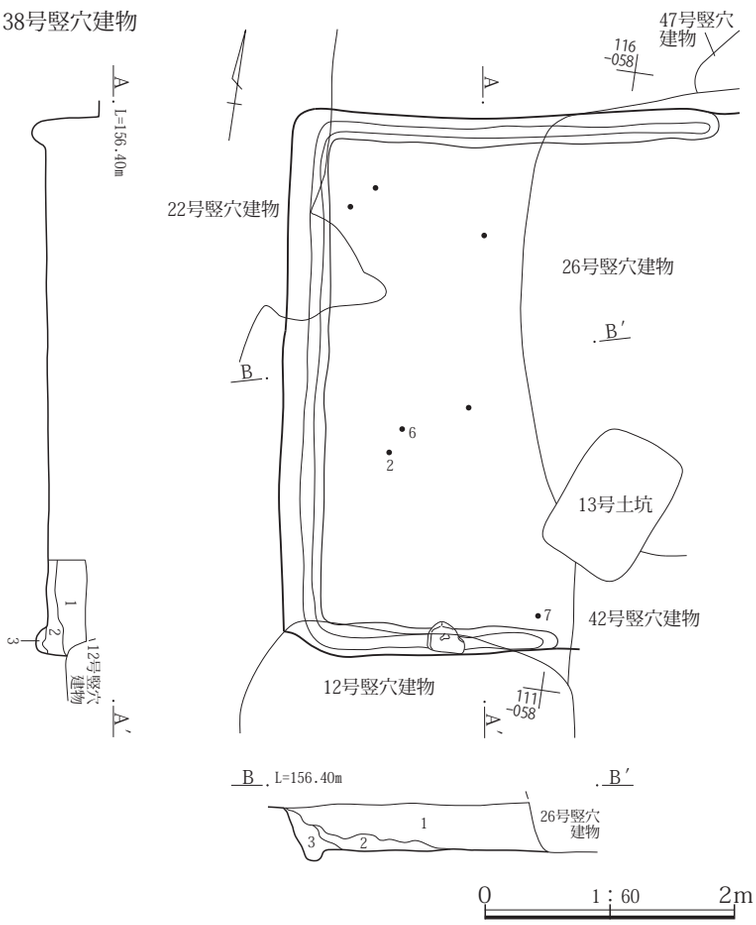
埋没状態　土層断面の観察では南側と東西側から流れ込んだ様子が確認できたことから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　北壁の北東角寄りで検出されなかったが、21号・37号竪穴建物との重複する部分を除く、他の壁下では全周していた。規模は幅が16～20㎝、深さ３～７㎝を測る。

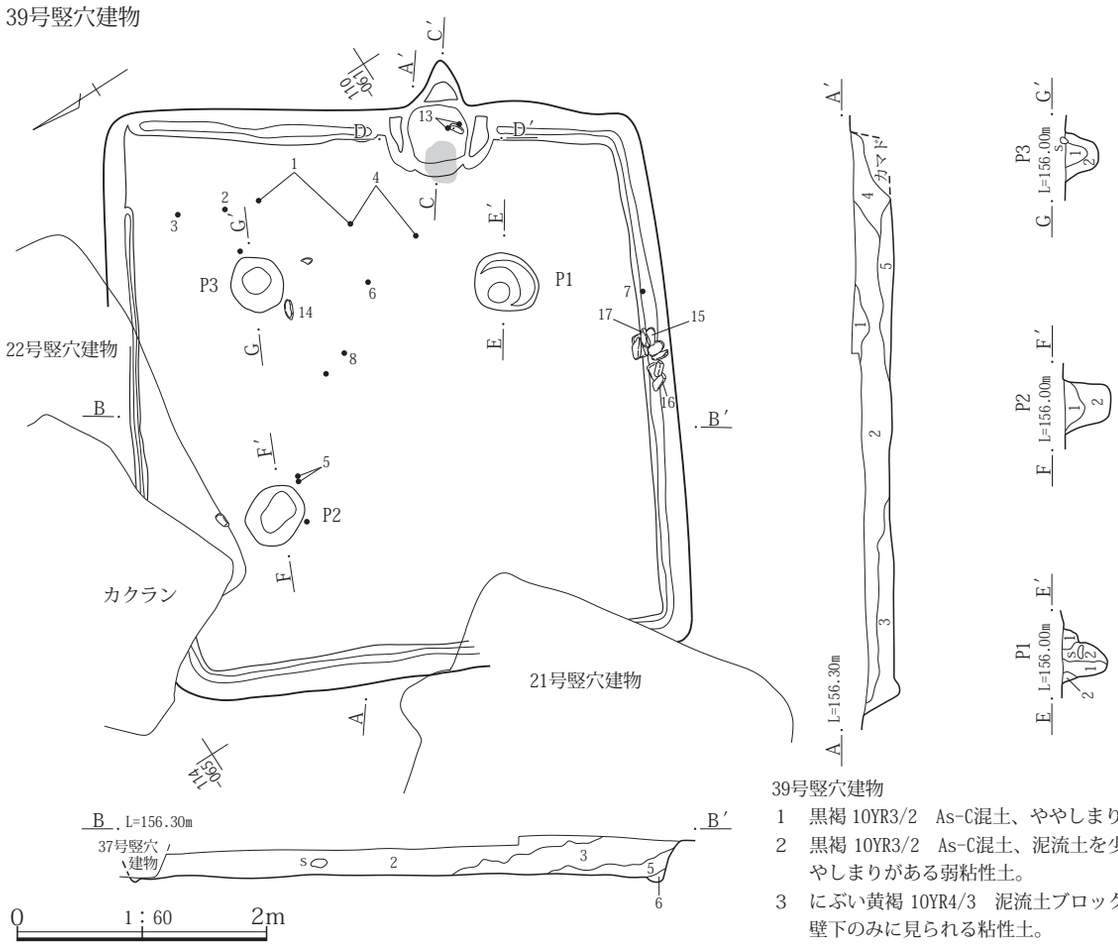
柱穴　柱穴Ｐ１とＰ２は竪穴の各角を結んだ対角線上に位置し、各壁から1.00～1.40ｍほど内側に検出された。各柱穴の形状と規模は以下のとおりである。



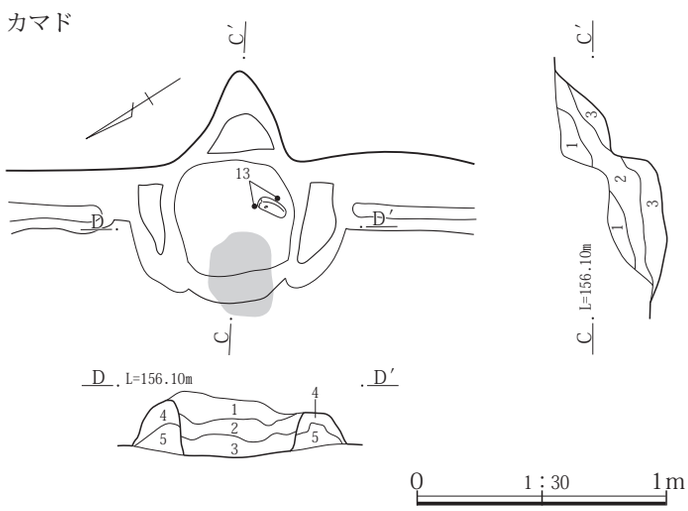
38号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒やや多く含み、しまりが強い弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　含有物の少ない粒子細かな弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　あまり明瞭ではない泥流土ブロックを多く含む、壁溝内はやや泥流土多い。

第59図　38号竪穴建物遺構図

39号竪穴建物



カマド



39号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、ややしまりがある。
2　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土を少量不均等に含み、ややしまりがある弱粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土ブロックと２の混土。南西側壁下のみに見られる粘性土。
4　暗褐 7.5YR3/3　不明瞭な泥流土、焼土、黒色灰を不均等に少量含み、ややしまりが弱い。
5　黒褐 10YR2/2　含有物の少ないが炭化物粒や黒色灰をわずかに含む、ややしまりが強い弱粘性土。
6　灰黄褐 10YR3/4　泥流土主体、ややしまりが弱い。

39号竪穴建物　カマド

1　暗褐 7.5YR3/3　大粒のAs-Cの混入目立つ、不均等に焼土ブロックを含み、しまりが強い弱粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を多く含み、ややしまりが弱い粘性土。
3　褐 7.5YR4/3　焼土、炭化物粒、灰等が不均等に含み、ややしまりが弱い。
4　灰黄褐 10YR4/2　黄色味を帯びる泥流土粒を多量に含み、しまりが強い。
5　暗褐 10YR3/3　灰色味を帯びた泥流土粒を含み、しまりが強い粘性土。

39号竪穴建物Ｐ１

1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを10％含み、しまりがある。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　若干柔らかい。

39号竪穴建物Ｐ２

1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを20％含む。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを20％含み、若干柔らかい。

39号竪穴建物Ｐ３

1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを10％含み、しまりがある。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　若干柔らかい。

第60図　39号竪穴建物遺構図

柱穴Ｐ１形状：楕円形、規模：径53×47㎝、深さ35㎝
柱穴Ｐ２形状：楕円形、規模：径70×42㎝、深さ41㎝
柱穴Ｐ３形状：円形、規模：径44×42㎝、深さ28㎝、柱穴間距離はＰ１～Ｐ３が1.90m、Ｐ２～Ｐ３が1.90mを測る。なお、柱自体は抜き取りが行われたとみられるが、柱穴Ｐ１以外は土層断面では明確な痕跡は確認できなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁中央よりやや南にカマドが構築されている。残存状態は両袖が比較的良好な状態であったが、燃焼部煙道の天井は壊され、痕跡も残っていなかった。規模は全長0.95m、幅0.85m、燃焼部幅0.45mを測る。燃焼部手前には径25㎝ほどの範囲が焼土化して赤褐色を呈していた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、石製品磨石・棒状礫などが出土している。このうち、１～５・７の土師器杯が床面から、13の土師器甕がカマドからの出土である。なお、13の土師器甕は貯蔵用とみられることからカマド構築材として使用されたと判断できる。この他、14の磨石はカマドから、15の磨石と棒状礫21点が南壁際の壁溝から床面にかけてまとまって出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器杯には模倣杯だけでなく口縁部が内湾する形態の杯が出土していることから７世紀第２四半期から第３四半期に比定できる。

40号竪穴建物

位置　１区調査区東北部、Ｘ＝37098～37102、Ｙ＝-85044～-85048に位置する。

重複関係　66号竪穴建物、95号竪穴建物、98号竪穴建物、100号竪穴建物、116号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　やや歪みがみられるが、ほぼ長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は2.92m、南北方向は4.01mを測る。確認面から床面までの壁高は14～29㎝を測る。

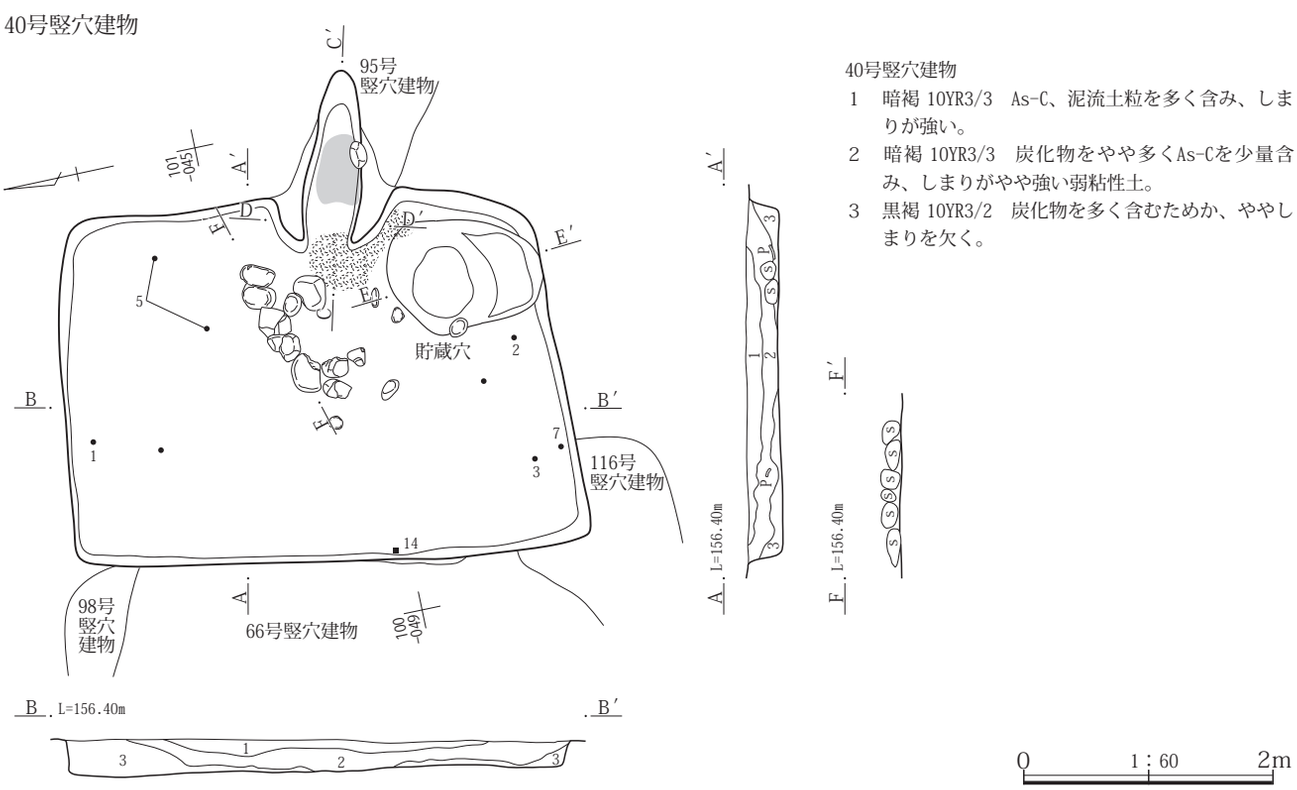
床面積　10.05㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－100°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

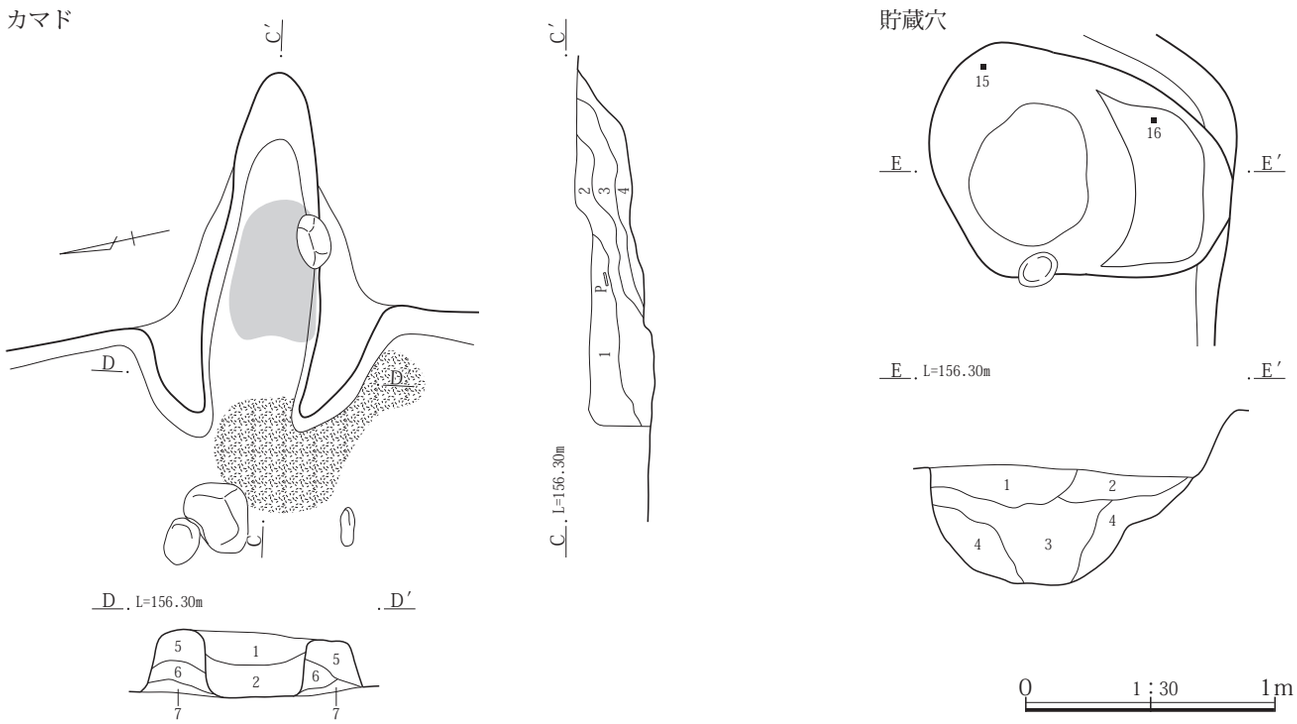
床面　地山や重複関係にある竪穴建物の埋没土をそのま

40号竪穴建物



40号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を多く含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物をやや多くAs-Cを少量含み、しまりがやや強い弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　炭化物を多く含むためか、ややしまりを欠く。

第61図　40号竪穴建物遺構図（１）



40号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-C混じりのしまりやや強い土。焚口側で焼土多くなる。
2　黒褐 10YR3/2　黒褐色土が基質、泥流土、焼土を少量含み、ややしまりが強い。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土が基質、不均等に焼土粒を含む。
4　暗赤褐 5YR3/4　不揃いの焼土ブロックをやや多く黒色灰を多く含む、ややサラサラした感触。煙道部内埋没土。
5　暗褐 10YR3/4　大粒パミスと不揃いの泥流土ブロックを含み、ややしまりが強い。
6　暗褐 10YR3/3　炭化物粒・焼土粒を不均等に含み、ややしまりが強い微粘性土。
7　暗褐 10YR3/3　炭化物や泥流土小ブロックを少量含み、ややしまりが強い微粘性土。袖構築前の整形土か。
40号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを40％、焼土ブロックを５％、炭化物片を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物片を帯状に２％、褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。
4　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを30％含み、やや粘性がある。

第62図　40号竪穴建物遺構図（２）

ま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角から検出され、形状は楕円形を呈する。規模は長径1.15m、短径0.93m、深さ0.55mを測る。内部の南側には段を設けており、床面から0.23㎝の深さを測る。内部からは土器などの出土はみられなかったが、釘と流動滓が各１点ずつ出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.49m、幅が0.97m、燃焼部幅0.38mを測る。燃焼部の奥側半分と煙道部は壁外に掘り込まれている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、緑釉陶器、灰釉陶器、鉄製品鉗子、釘、流動滓などが出土している。このうち、２の須恵器耳皿、３の須恵器杯が床面から、11・12の須恵器甕がカマドから出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している土器が少なく、床面から出土している３の須恵器杯は底径/口径比が５：３であることから９世紀後半代の年代観が求められる。これは出土している他の須恵器杯・椀とは年代観が異なる。このため、重複関係にある66号竪穴建物が９世紀第４四半期から10世紀初頭に比定できることから、本竪穴建物は10世紀第１四半期に比定したい。

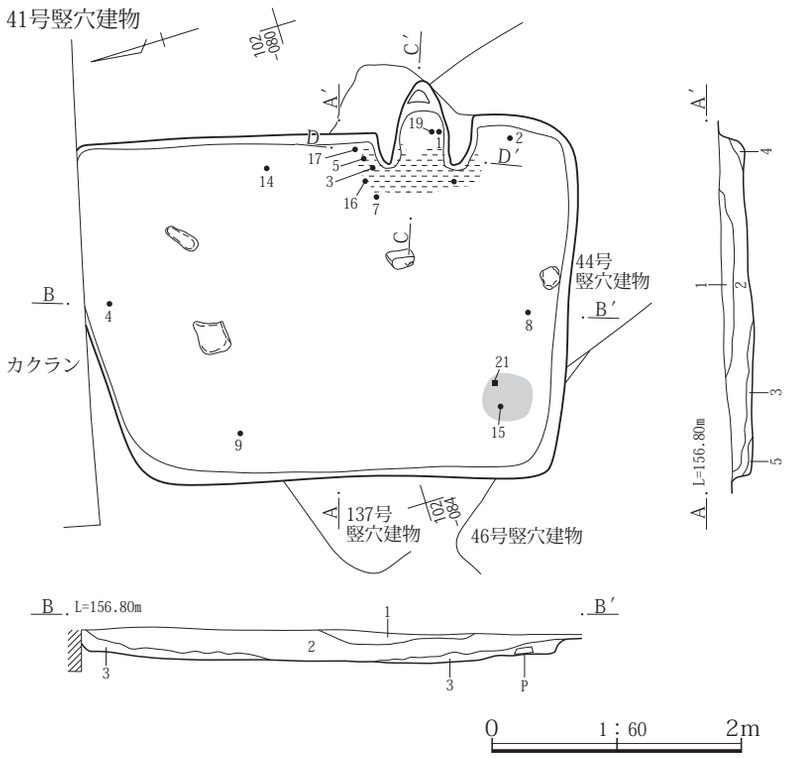
41号竪穴建物

位置　１区調査区西部の北寄り、Ｘ＝37100～37104、Ｙ＝-85080～-85084に位置する。北東角を撹乱によって欠く。

重複関係　44号竪穴建物、46号竪穴建物、137号竪穴建物、44号土坑、45号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが45号土坑より古く、44号竪穴建物、46号竪穴建物、137号竪穴建物、44号土坑より新しい。

形状　東辺が西辺に比べて70㎝ほど長い台形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が3.98m、南北方向が撹乱によって各部分があるが4.0m＋αを測る。確認面から床面までの壁高は15～22㎝を測る。

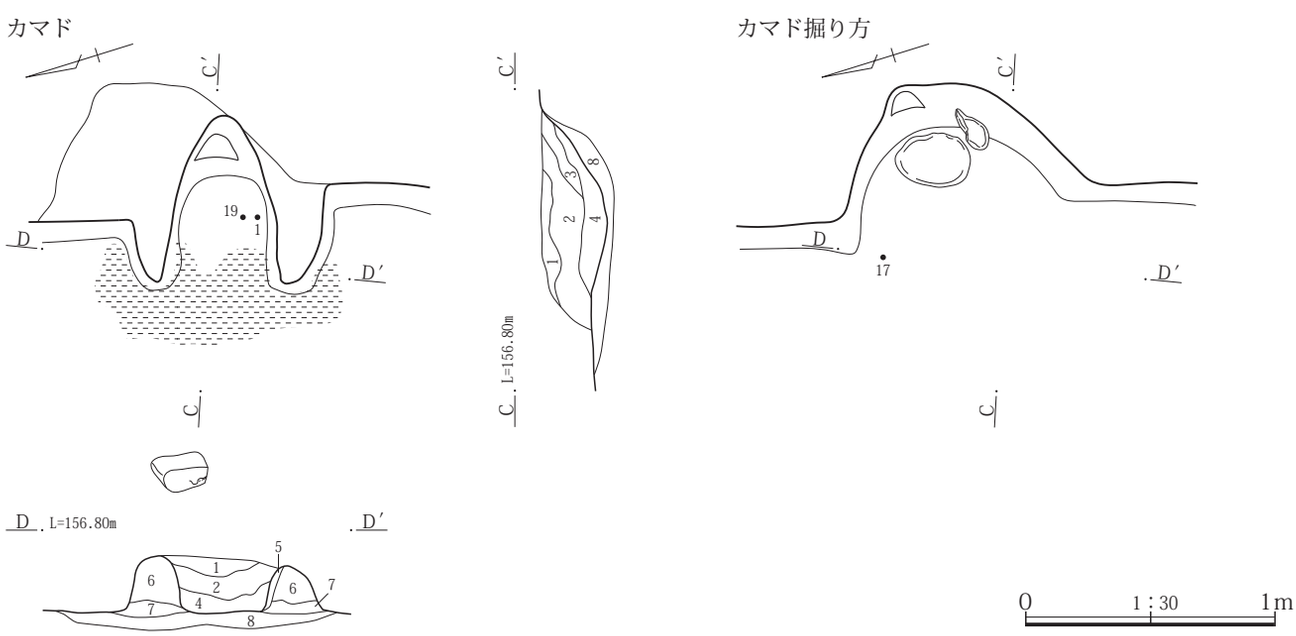


41号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒とAs-Cを少量含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土小ブロックを多く焼土粒を微量含み、ややしまりが強い弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　泥流土の混入が少なく、焼土、炭化物を不均等にやや多く含む、粘性土。
4　暗褐 7.5YR3/3　泥流土の混入多く、焼土ブロックや炭化物、下半に黒色灰を含み、ややしまりが弱い。
5　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土主体の壁崩落土。西壁下、北西隅付近に顕著。

41号竪穴建物カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量含み、しまりが強い弱粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　大粒のAs-C、泥流土、As-YPとみられるパミスを多量に焼土を小ブロック状に含む、弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　不均等に焼土を含む、細粒土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰をやや多く焼土を少量含み、しまりやや弱い弱粘性土。
5　にぶい黄褐 10YR4/4　泥流土が基質、黒褐色土を多く含む。
6　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土ブロックを多く含み、しまりが強い。
7　黒褐 10YR2/2　黒色土を多量に含み、ややしまりを欠く。
8　暗褐 10YR3/2　泥流土小ブロックを不均等に含む、弱粘性土。



第63図　41号竪穴建物遺構図

床面積　9.37㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　南西角では床面に径40㎝ほどの範囲が焼土化していた。そして焼土の周囲には土手状に粘質土がもられているのが検出されている。

火処　東壁の中央よりやや南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、袖は残存していた。規模は全長0.70m、幅0.85m、燃焼部幅0.35mを測る。燃焼部奥側から煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部と煙道部の間には10㎝ほどの段が設けられていた。なお、焚口と燃焼部手前側は焼土化している。掘り方は左側に大きく広がり、そこからは径30×20㎝、厚さ８㎝の偏平な礫が出土している。燃焼部の火床面は顕著な焼土化がみられた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・羽釜・甕、緑釉陶器椀、灰釉陶器皿・椀、土製品瓦、鉄製品板状製品などが出土している。このうち、２の須恵器無台椀、３～５・８・９の須恵器椀、15の灰釉陶器椀が床面から、１の須恵器杯、７の須恵器椀、16の土師器小型甕、18・19の須恵器羽釜がカマドからの出土である。なお、21の鉄製品板状製品も床面から出土している。

また、カマド前から中央部にかけて床面に径20～35㎝の円礫が散在していた。この礫群は被熱を受けていないことからカマドの構築材に使用されたものではないと想定されるが、用途などについては明らかではない。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯・椀・羽釜や土師器小型甕から10世紀第３四半に比定できる。

42号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37109～37113、Ｙ＝-85053～-85057に位置する。北側を重複関係のある26号竪穴建物によって欠く。

重複関係　12号竪穴建物、17号竪穴建物、26号竪穴建物、36号竪穴建物、179号竪穴建物、18号ピットと重複関係にある。47号竪穴建物とは直接の重複関係は認められなかったが、平面形状などからみると重複関係にあったとみられる。

新旧関係は12号竪穴建物、26号竪穴建物、18号ピットより本竪穴建物のほうが古く、36号竪穴建物より新しい。17号竪穴建物、179号竪穴建物との関係は明確ではないが、出土土器から見ると本竪穴建物のほうが古いと判断できる。なお、47号竪穴建物との新旧関係は出土土器から本竪穴建物のほうが古い。

形状　北側を欠くため明確ではないが方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向が3.68m、南北方向が残存範囲で2.70mを測る。なお、南北方向は26号竪穴建物の判断した壁溝が42号竪穴建物に伴うものとすると3.85mになる。確認面から床面までの壁高は24～32㎝を測る。

床面積　推定で12.19㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－79°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　東壁下のカマドから南側から南壁下で検出されている。規模は幅15㎝前後、深さ７～９㎝を測る。なお、カマド北側は26号竪穴建物に伴うと判断した壁溝が、本竪穴建物に伴う可能性があると想定される。

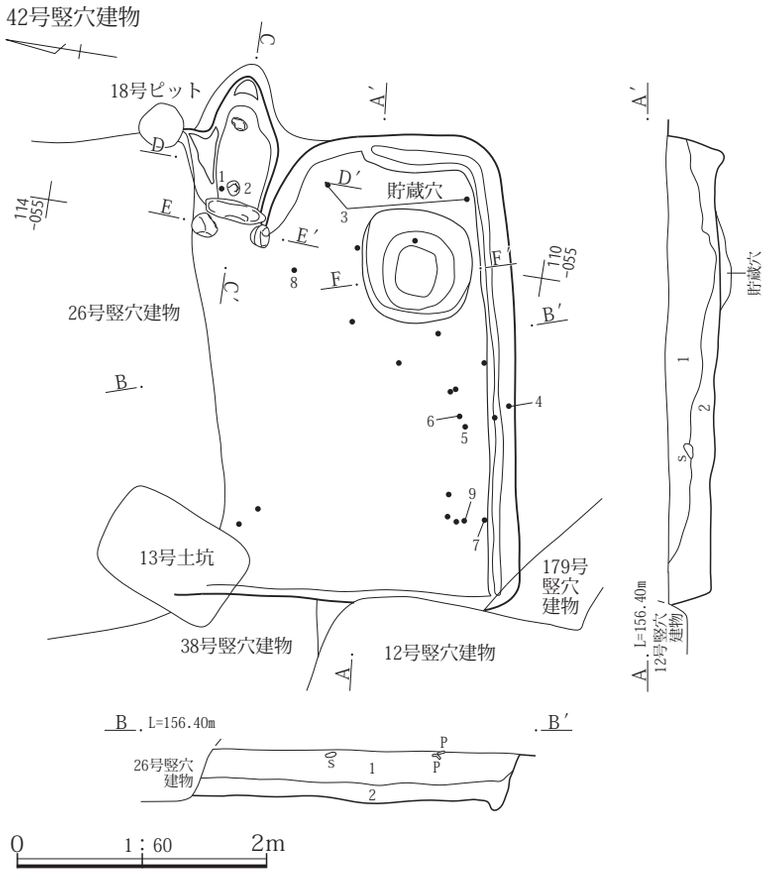
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角で検出されているが、東壁際からは0.5mほど間隔をもっている。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は床面から14㎝ほど掘り下げたところに段を有する二段掘りが行われている。全体の規模は長軸0.92m、短軸0.88m、内側の掘り込みは長軸0.62m、短軸0.57m、深さは床面から0.63mを測る。なお、土層断面の観察で貯蔵穴だけが竪穴建物廃棄時に埋め戻された可能性が窺えた。

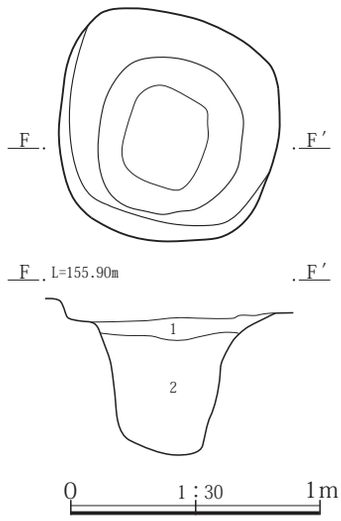
その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態

42号竪穴建物



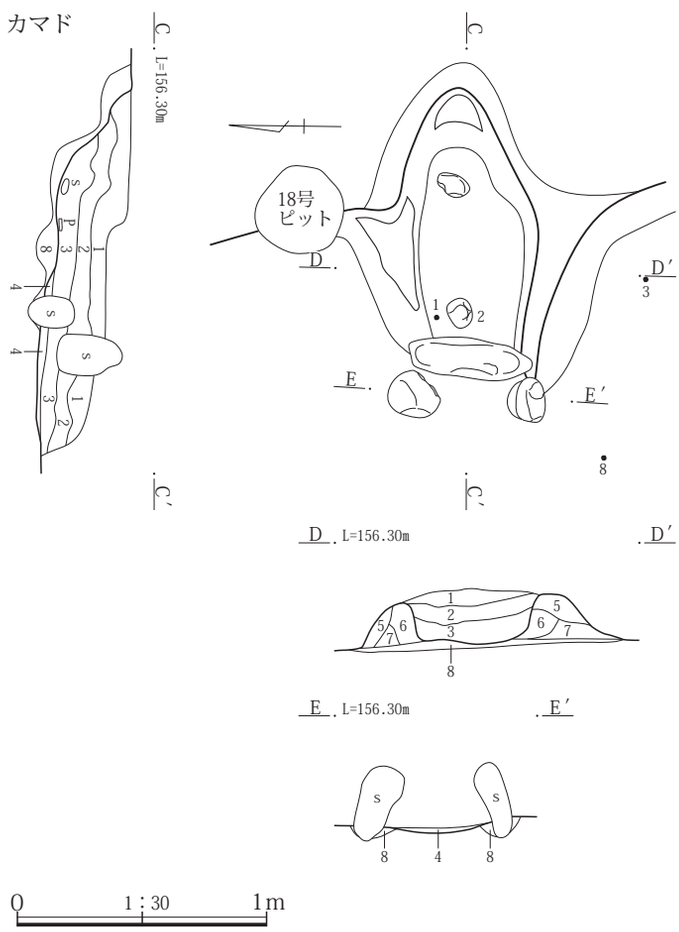
貯蔵穴



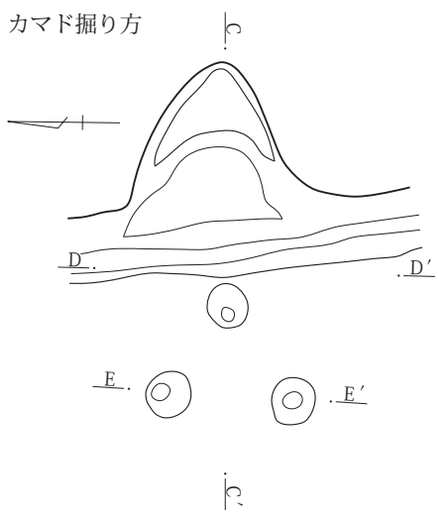
42号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量含む、弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　基質となる土は１より黒色味が強く粘性の強く、不均等に泥流土と炭化物粒を含み、ややしまりが強い。

42号竪穴建物　貯蔵穴
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒、As-Cを少量含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　含有物がごく少なく、しまりを欠く。

カマド



カマド掘り方



42号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/2　As-C・泥流土を多量に焼土を微量含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土をやや多く含み、灰や焼土ブロックを少量含み、ややしまりが弱くややボソボソした感触。
3　褐 7.5YR4/3　不均等に焼土を含む、ボソボソした感触。
4　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土主体、粒子が細かでしまりが強い。
5　黒褐 7.5YR3/2　As-C・泥流土を含み、しまりやや強い。
6　灰褐 7.5YR4/2　焼土粒を多く含む、微粘性土。
7　黒褐 10YR3/2　泥流土粒、焼土粒を若干含む、弱粘性の細粒土。
8　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土ブロックをやや多く炭化物粒や灰を含み、しまりが強い。

第64図　42号竪穴建物遺構図

は焚口と燃焼部、煙道部の天井は失われていたが、両袖と焚口の両側に据えられた礫と支脚はそのままの状態で出土している。また、焚口上部にかけられていたとみられる棒状礫はカマド内側に落とされた状態で出土している。規模は全長1.44m、幅1.05m、燃焼部幅0.42mを測る。なお、支脚として据えられていた礫は径12㎝、長さ20㎝であった。燃焼部奥から煙道部は壁外に存在し、燃焼部と煙道部との間には27㎝ほどの段が設けられていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕、灰釉陶器などが出土している。このうち、１の土師器杯と２の高杯はカマドから、３の土師器壺は貯蔵穴脇の床面の出土で、本竪穴建物に伴う遺物と判断できる。この他、南辺付近の床面より30㎝前後の位置から５～８の須恵器杯・椀、９の灰釉陶器椀が出土している。南辺付近のこの高さからはこの他にも多くの土器が出土しているが、これらは後の混入である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドや床面から出土した土師器杯・壺から６世紀前半代に比定できる。床面から30㎝前後の位置から出土している土器・灰釉陶器は９世紀から10世紀と年代観に幅がみられることから別の遺構の存在も想定されたが、周囲からの混入の可能性が高いと判断した。

43号竪穴建物

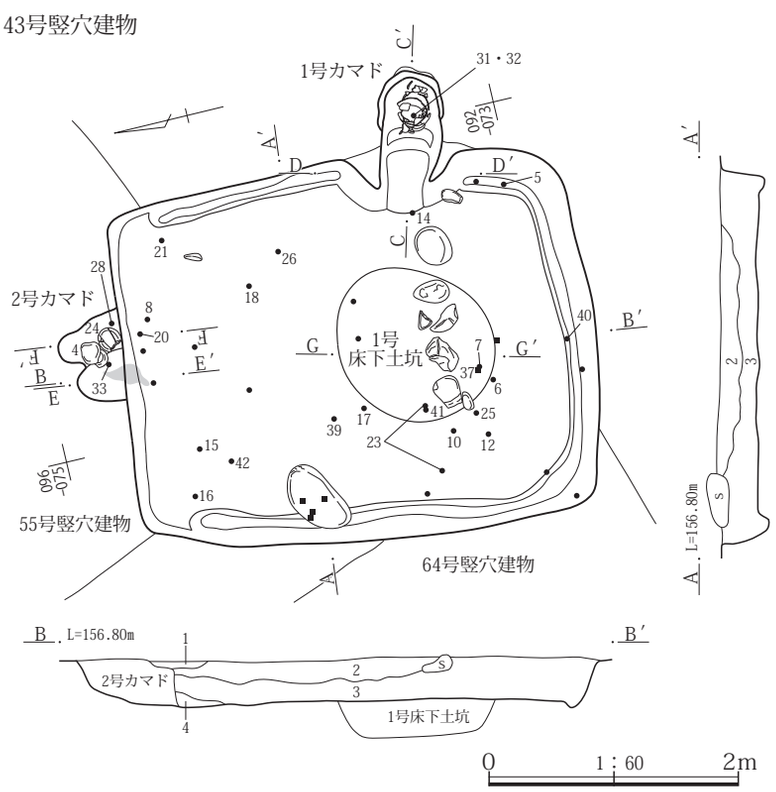
位置　１区調査区中央部の北西寄り、Ｘ＝37091～37095、Ｙ＝-85072～-85076に位置する。

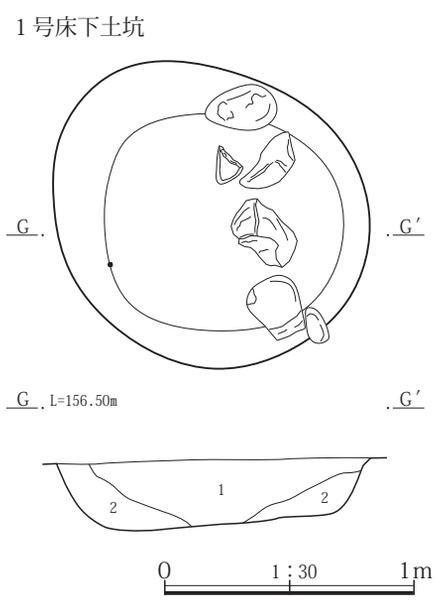
重複関係　55号竪穴建物、64号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが新しい。

形状　北辺が南辺に比べて30㎝ほど短いがほぼ長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が3.05m、南北方向が3.77mを測る。確認面から床面までの壁高は25～41㎝を測る。

床面積　8.12㎡を測る。



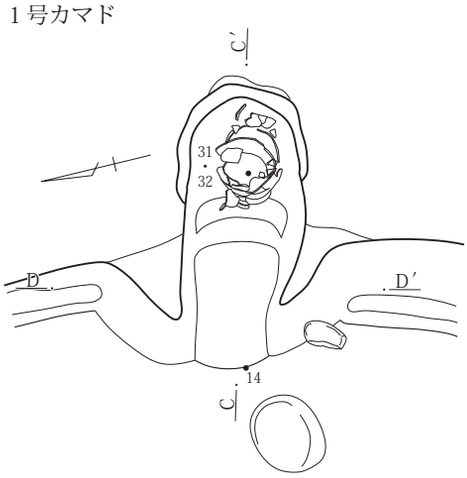


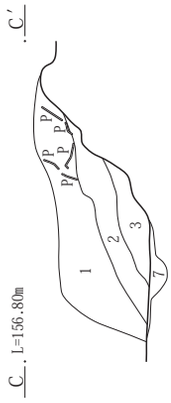
43号竪穴建物　１号床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ３～30㎜のにぶい黄褐色土ブロックを20%、炭化物片を１%含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５%、炭化物片を１%含む。

43号竪穴建物
1　暗赤褐 5YR3/3　焼土や炭化物をやや多くAs-C、泥流土小ブロックを含み、しまりが強い弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C混土、不均等に焼土、炭化物、泥流土を含み、しまりが強い弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　泥流土を不均等に微量のAs-C、北東隅付近でやや多くの焼土含む、弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰をやや多く含み、しまりやや弱い粘性土。

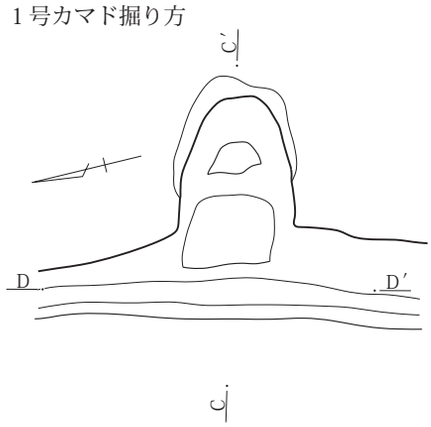
第65図　43号竪穴建物遺構図（１）

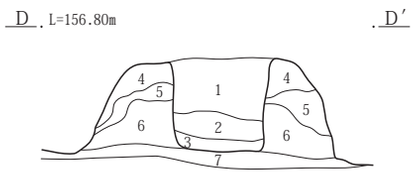
１号カマド





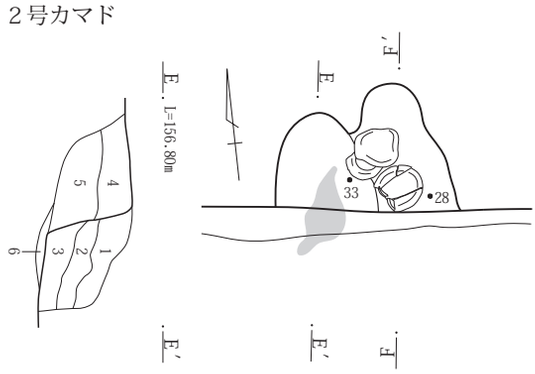
１号カマド掘り方

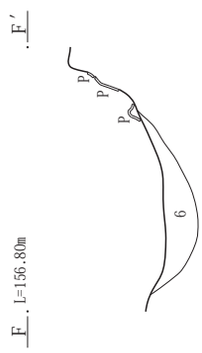




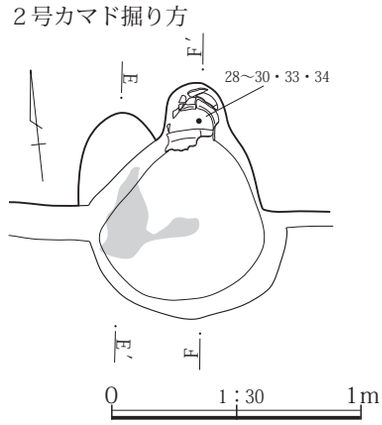
43号竪穴建物　１号カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、しまりが強い弱粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　１と泥流土の混土。灰を含む、サラサラした感触。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体、焼土、炭化物、灰を不均等に少量含む。
4　暗褐 10YR3/3　１に近似、As-C、泥流土を不均等に含み、しまりが強い。
5　暗褐 10YR3/3　黒褐色土が基質、不揃いの泥流土をやや多く含み、しまりが強い。
6　灰黄褐 10YR4/2　焼土、炭化物を微量含む、弱粘性土。
7　黒褐 10YR3/2　泥流土を不均等に下半に黒色灰を多く含む、微粘性土。

２号カマド





２号カマド掘り方



43号竪穴建物　２号カマド
1　暗赤褐 5YR3/3　As-C、泥流土小ブロックと焼土、炭化材をやや多く含み、しまりが強い弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C混土、不均等に焼土、炭化物、泥流土を含み、しまりが強い弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　黒色灰をやや多く含み、しまりがやや弱い粘性土。
4　暗褐 7.5YR3/3　As-C、焼土、泥流土等を含み、しまりが強い。
5　黒褐 10YR3/2　含有物少ないが底面付近では焼土を含む、しまりが強い粒子細かな弱粘性土。
6　暗褐 10YR3/3　上位に焼土や灰と泥流土を含み、ややしまりが弱い細粒土でサラサラした感触。

第66図　43号竪穴建物遺構図（２）

主軸方位　Ｎ－98°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状に堆積した様子が確認できたことから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や55号竪穴建物埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は確認されされなかったが、カマドの西側0.5mの位置で１号床下土坑が検出された。１号床下土坑は南北がやや長い楕円形を呈し、規模は径1.35×1.17m、深さ0.27mを測る。埋め戻された土は炭化物片を含む暗褐色土である。内部から土器などの出土は見られなかった。

壁溝　北壁下を除く各壁下で検出されている。規模は幅が10～20㎝、深さ５～13㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りに１号カマド、北壁の中央に２号カマドが構築されている。２号カマドは竪穴建物使用

時の途中で廃棄され、燃焼部や袖が取り除かれている。それに対して１号カマドは竪穴建物廃棄時まで使用されていたとみられる。

１号カマドの残存状態は焚口と燃焼部、煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長1.13m、幅1.00m、燃焼部幅0.34mを測る。煙道部は壁外に延び、31・32の土師器甕を使用して煙突の役割をもたせていた。

２号カマドは竪穴建物使用面での残存状態が前述のように煙道部の一部だけであったが、床面下で燃焼部と見られる楕円状の浅い落ち込みが検出されている。残存部全長は0.53mを測るが、埋め戻された燃焼部を含めると全長0.95m、幅0.80mを測る。なお、煙道部は壁外に存在し、ここでも33の土師器甕を使用して煙突の役割をもたせていた。なお､この甕の上部には３と４の須恵器皿、20と24の須恵器椀を各２点と礫が置かれており、カマドを移す際の祭祀が執りおこなわれた可能性が窺えた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・盤・壺・甕、灰釉陶器、鉄製品鏃、流動滓、石製品臼玉などが出土している。このうち、１の須恵器皿、８・18の須恵器杯が床面から、27の須恵器椀、31・32の土師器甕が１号カマド、28～30・33・34の土師器甕と３・４の須恵器皿、20・24の須恵器椀が２号カマドからの出土である。なお、本竪穴建物から出土している煮沸用の土師器甕は28・32のような県内で一般的に見ることができる「武蔵型」と呼称されている口縁部から頸部がコの字状を呈するものと29～31・33・34のようなロクロ成形によると見られるものが存在する。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している須恵器皿・杯・椀や土師器甕から９世紀第３四半期に比定できる。

44号竪穴建物

位置　１区調査区西部の北寄り、Ｘ＝37098～37101、Ｙ＝-85080～-85083に位置する。北側を重複関係にある41号竪穴建物によって欠く。

重複関係　41号竪穴建物、46号竪穴建物、131号竪穴建物、137号竪穴建物、79号ピット、80号ピット、82号ピット、83号ピットと重複関係にある。なお、45号竪穴建物とは直接の重複関係にはないが、確認面で接する位置にあった。新旧関係は46号竪穴建物、131号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しく、41号竪穴建物、45号竪穴建物、137号竪穴建物や重複関係にあるピットより古い。

形状　南北方向に長い隅丸長方形と想定される。

規模　南北方向は残存範囲で2.26m、東西方向は2.48mを測る。確認面から床面までの壁高は15～26㎝を測る。

床面積　推定で4.11㎡を測る。

主軸方位　長軸方向を主軸方向とするとＮ－14°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　残存範囲では地山を踏み固めて平坦面を造っている。

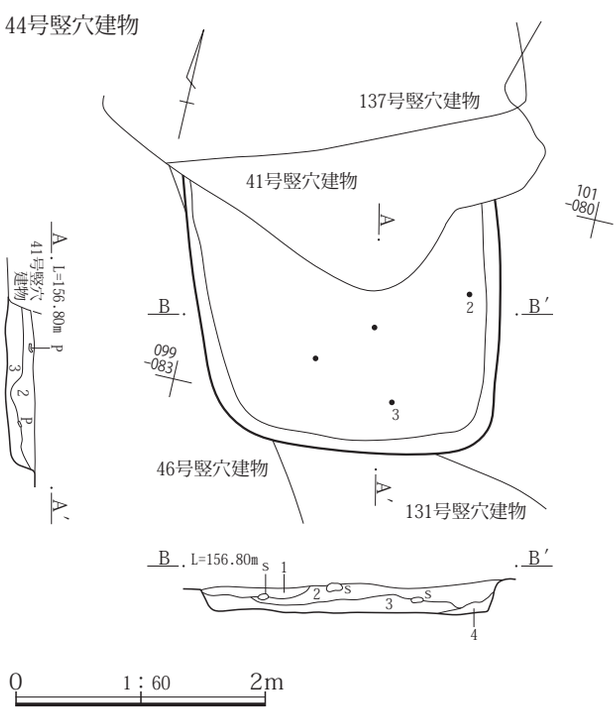
掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。



44号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量含む、微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量と不均等に焼土、炭化物を微量含む、やや砂質土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土ブロックを不均等にやや多く焼土を微量含み、ややしまりが弱い。人為的埋め戻し土か。
4　暗褐 10YR3/3　焼土を少量含む、粘性土。

第67図　44号竪穴建物遺構図

火処　残存範囲では検出されなかった。出土遺物からみるとカマドが構築されている時期であるが、形状などから本竪穴建物の場合元々構築されていない可能性も想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀などが出土している。出土量は図示３点、未掲載190点とわずかである。図示した遺物は１・２の土師器高杯、３の土師器壺で、１・３が床面より７㎝上から、２が埋没土からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に共伴する位置から土器の出土はみられなかったが、図示した土器はともに４世紀代の年代観が与えられることから、存続時期も同様と考える。

45号竪穴建物

位置　１区調査区西部の北寄り、Ｘ＝37094～37098、Ｙ＝−85079～−85083に位置する。

重複関係　46号竪穴建物、57号竪穴建物、63号竪穴建物、131号竪穴建物と重複関係にある。なお、44号竪穴建物とは44号竪穴建物で記述したように近接する位置関係である。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　主軸方向の東西方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が3.70m、南北方向が3.27mを測る。確認面から床面までの壁高は12～20㎝を測る。

床面積　9.93㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－112°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状に堆積した様子が確認できたことから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や重複する竪穴建物埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　カマドの右脇、南東角際で検出されている。形状は円形を呈し、規模は径0.87×0.87m、深さ20㎝を測る。内部からは３の須恵器無台椀、６・８・９の須恵器椀、15の須恵器羽釜胴部片などが出土している。

その他施設　南西角寄りからピット状の落ち込み１基が検出されている。形状・規模は楕円形、径0.55×0.43m、深さ0.30mを測る。

火処　東壁の中央よりやや南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井部は失われていたが、両袖は残存していた。また、焚口に渡されていた角柱状の礫は燃焼部側に落とされ、その際に支脚も奥側に倒れたとみられる。規模は全長0.97m、幅1.35m、燃焼部幅0.45mを測る。燃焼部の奥側半分は壁外に存在し、その側面には偏平な礫が立てるように据えられていた。なお、焚口に渡されていた角柱礫は長さ65㎝、幅20㎝、厚さ15㎝ほどであった。支脚に使用されていた礫は長さ25㎝、幅・厚さ８㎝ほどの三角柱状のものであった。また、左袖内からは１の須恵器杯が出土している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器、鉄製品釘などが出土している。このうち、５の須恵器椀、12の灰釉陶器輪花椀、13・15の須恵器羽釜が床面から、１・２の須恵器杯、７の須恵器椀、16・17の須恵器羽釜がカマドから、３の須恵器無台椀、６・８・９の須恵器椀、15の須恵器羽釜が貯蔵穴からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマド、貯蔵穴からの出土した須恵器杯・椀・羽釜などから10世紀第２四半期から第３四半期に比定できる。

46号竪穴建物

位置　１区調査区西部の北寄り、Ｘ＝37092～37097、Ｙ＝−85080～−85087に位置する。西側の大部分は調査対象外に存在している。また、重複関係にある竪穴建物によって東壁を欠く。

重複関係　41号竪穴建物、44号竪穴建物、45号竪穴建物、49号竪穴建物、57号竪穴建物、131号竪穴建物、137号竪穴建物、５号溝、43号土坑と重複関係にある。新旧関係は137号竪穴建物との関係は不明であるが、他の重複関係のある竪穴建物や５号溝、43号土坑より本竪穴建物のほうが古い。

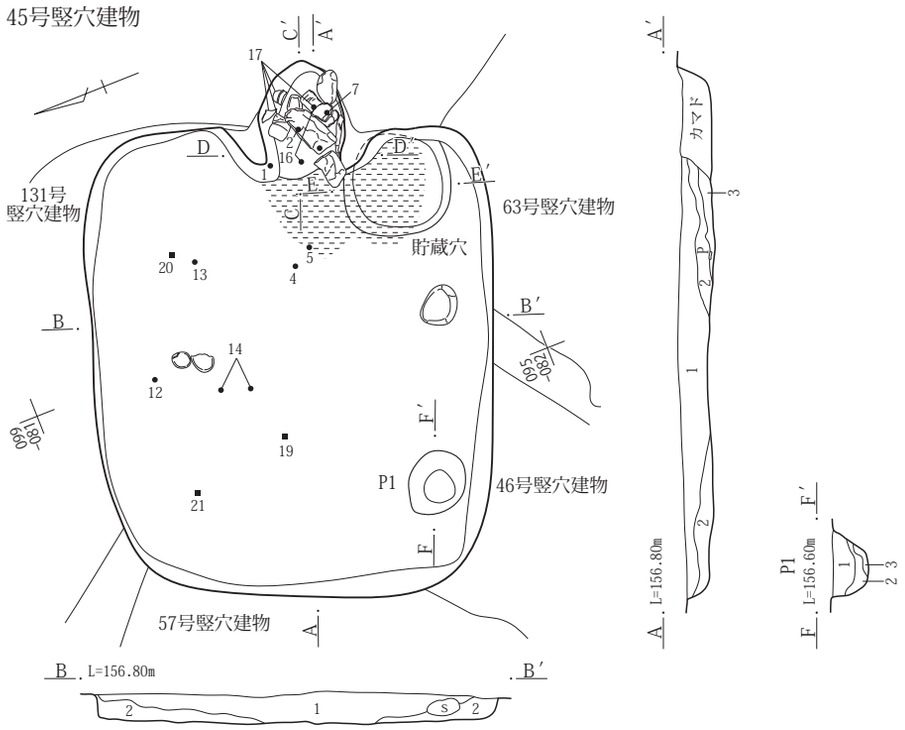
形状　主軸方向の東西方向が南北方向より0.9mほど長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が7.88m、南北方向が6.90mを測る。確認面から床面までの壁高は10～17㎝を測る。

床面積　残存範囲内で31.01㎡を測る。

主軸方位　カマドが北壁に構築されていると想定するとＮ－34°－Ｅを指す。

45号竪穴建物

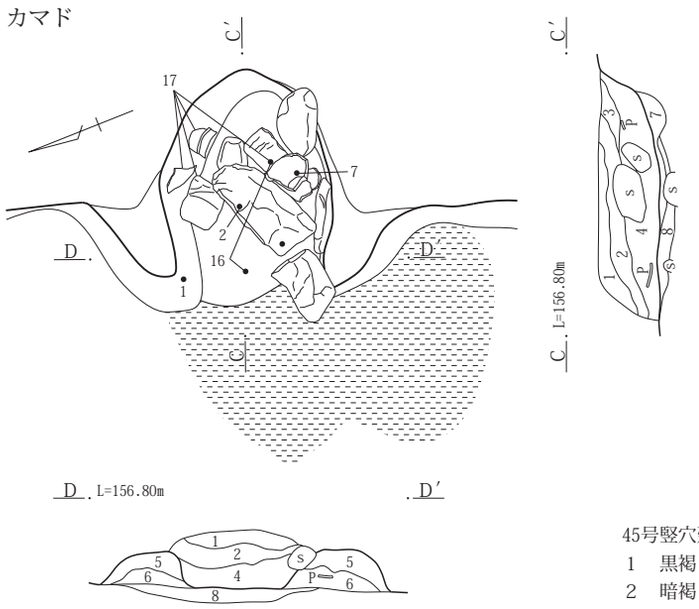


45号竪穴建物
1　黒褐 2.5Y3/2　As-C、泥流土を多く含み、しまりが強い弱粘性土。黄色味を帯びる。
2　暗褐 10YR3/3　As-Cを少量と下半中心に多くの泥流土、不均等に炭化物をに含む、弱粘性土。
3　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多く炭化物、焼土も不均等にやや多く含み、ややしまりを欠く。カマドからの流入土。

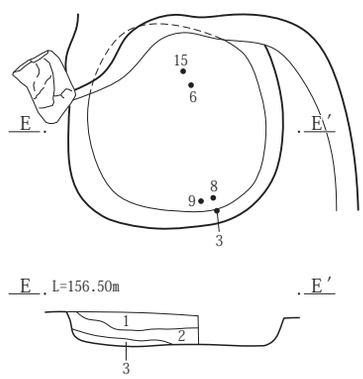
45号竪穴建物 P 1
1　黒褐 10YR3/2　泥流土、焼土、炭化物粒を少量含み、ややしまりが弱い粒子細かな弱粘性土。上面に踏み固めの痕跡か。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　黄色味を帯びる泥流土と１の混土。人為的埋め戻し土。
3　暗褐 10YR3/3　黒褐色弱粘性土が基質、泥流土を不均等に含み、ややしまりが弱い。

0　1：60　2m

カマド



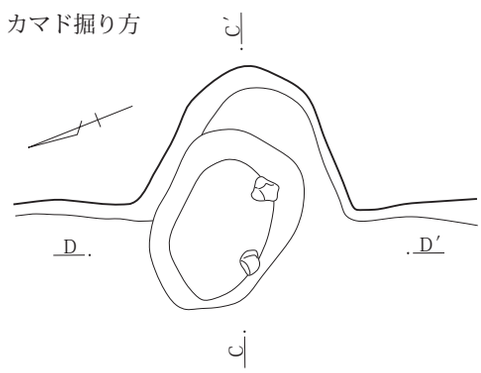
貯蔵穴



45号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量と焼土を微量含み、しまりが強い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土以外に含有物が少ない、粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土のやや多い、弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を多く下半中心に焼土をやや多く含み、ややしまりを欠く粘性土。
5　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒、As-Cを多く含み、しまりが強い。
6　暗褐 2.5Y3/3　炭化物を不均等にやや多く焼土を微量含み、しまりが強く粒子細かな土。
7　暗褐 2.5Y3/3　焼土粒を若干含む。
8　暗褐 2.5Y3/3　焼土ブロックを大量に含む。

45号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　炭化物や灰を多量に含み、しまりある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを40％含む。

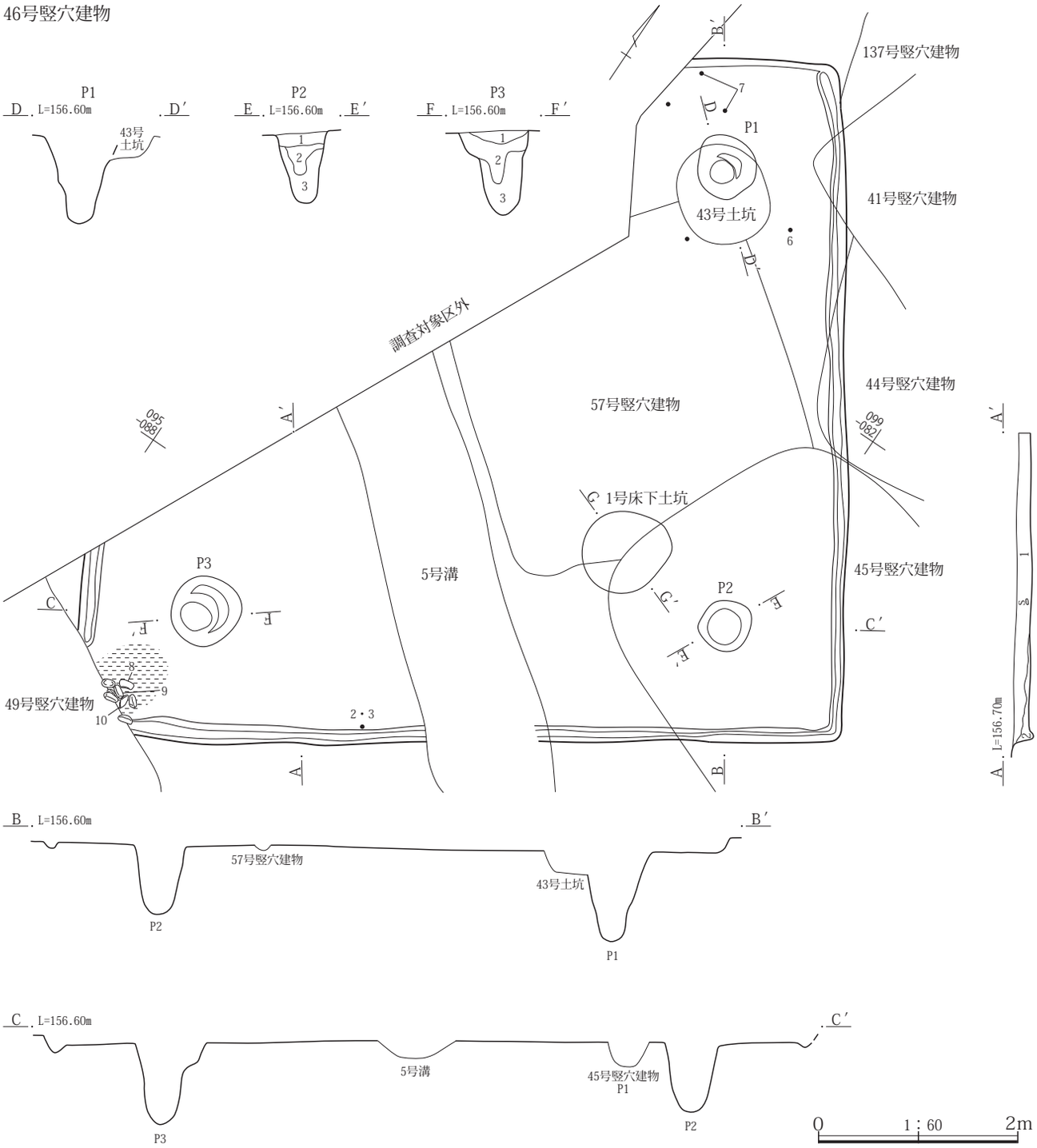
カマド掘り方



0　1：30　1m

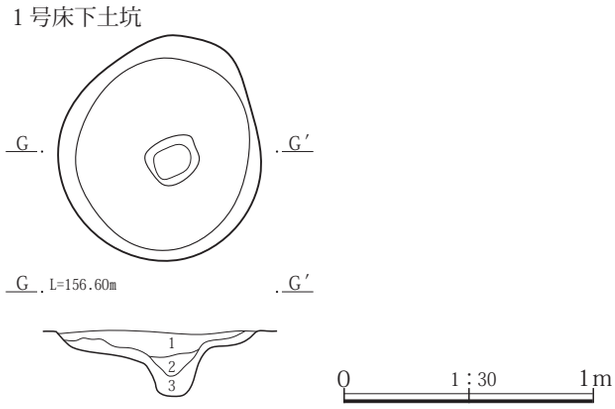
第68図　45号竪穴建物遺構図

46号竪穴建物



46号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を多量に炭化物、泥流土小ブロックを不均等に含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　含有物が少なく、しまりが強い弱粘性土でねっとりした感触。
46号竪穴建物　Ｐ２
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜白色粒を１％、φ１㎜褐色土ブロックを２％、焼土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含み、若干柔らかい。
46号竪穴建物　Ｐ３
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜白色粒を１％、φ１㎜褐色土ブロックを２％、焼土ブロックを１％、炭化物を２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含み、若干柔らかい。

第69図　46号竪穴建物遺構図（１）



46号竪穴建物　１号床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土を10％含む。

第70図　46号竪穴建物遺構図（２）

埋没状態　確認面から床面までが浅いため明確ではないが、土層断面の観察では壁際に三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や重複する竪穴建物埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、柱穴Ｐ２の西側で床下土坑１基が検出されている。１号床下土坑は楕円形を呈し、中央に小ピットが掘り込まれている。規模は径0.90×0.82m、深さ0.08mで中央の小ピットは径10㎝、深さは確認面から21㎝を測る。

壁溝　調査できた範囲では北壁下を除く各壁下で検出されている。規模は幅15㎝前後、深さ４～11㎝を測る。

柱穴　調査した範囲では竪穴の対角線上で３本が検出されている。柱痕は確認されておらず、Ｐ１とＰ３では柱穴内部の途中に段が確認されていることから、柱は抜き取られたとみられる。各柱穴の形状、規模、柱穴間距離は次のとおりである。

柱穴Ｐ１：楕円形、径0.65×0.60m、深さ0.83m、
柱穴Ｐ２：円形、径0.55×0.52m、深さ0.60m、
柱穴Ｐ３：楕円形、径0.72×0.68m、深さ0.83m、
柱穴間距離は柱穴Ｐ１～Ｐ２が4.60m、柱穴Ｐ２～Ｐ３が5.25mを測る。

貯蔵穴　調査範囲では検出されなかった。

その他施設　調査範囲では検出されなかった。

火処　調査範囲では検出されなかったが、調査したうち同時期の竪穴建物では北壁に構築されているものが多く、本竪穴建物でも北壁の大部分が調査対象外に存在することから北壁の中程に構築されていたと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、石製品棒状状礫などが出土している。このうち、２の須恵器杯蓋、３の須恵器杯身、７の土師器甕が床面から、５の須恵器壺が柱穴Ｐ３からの出土である。棒状礫は、南西角壁下の床面からまとまって８点が出土しているが、49号竪穴建物の構築によって一部が失われたとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土している須恵器杯蓋・杯身、土師器甕から６世紀後半に比定できる。

47号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37113～37118、Ｙ＝-85053～-85057に位置する。西側を重複関係ある26号竪穴建物、東壁の一部を撹乱によって欠く。

重複関係　26号竪穴建物、２号竪穴状遺構と重複関係にある。なお、42号竪穴建物とは直接の重複関係は認められなかったが、平面形状などからみると重複関係にあったとみられる。新旧関係は26号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、２号竪穴状遺構より新しい。42号竪穴建物との新旧関係は出土土器から本竪穴建物のほうが新しい。

形状　若干の歪みは見られるがほぼ方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が3.37m、南北方向が3.44mを測る。確認面から床面までの壁高は24～34㎝を測る。

床面積　推定で9.77㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－46°－Ｅ

埋没状態　土層断面の観察では堆積土が波打つような状態であることから自然埋没ではなく人為的な埋め戻しが行われた可能性が窺える。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や２号竪穴状遺構の埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は煙道部が撹乱によって壊され、焚口と燃焼部焚口側の

袖と焚口と燃焼部の天井部は大きく失われていた。規模は全長0.67m、幅0.65m、燃焼部幅0.20mを測る。焚口はカマド掘り方から見ると袖手前の礫が焚口両側に立てられていたものと判断できる。なお、燃焼部火床面では顕著な焼土が確認されている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・壺・甕などが出土している。このうち、８の土師器甕が床面から、５の土師器鉢が床面より９㎝上からの出土である。６の台付鉢は成形時の台部を取り除かないで焼成して供給されたものとみられる。

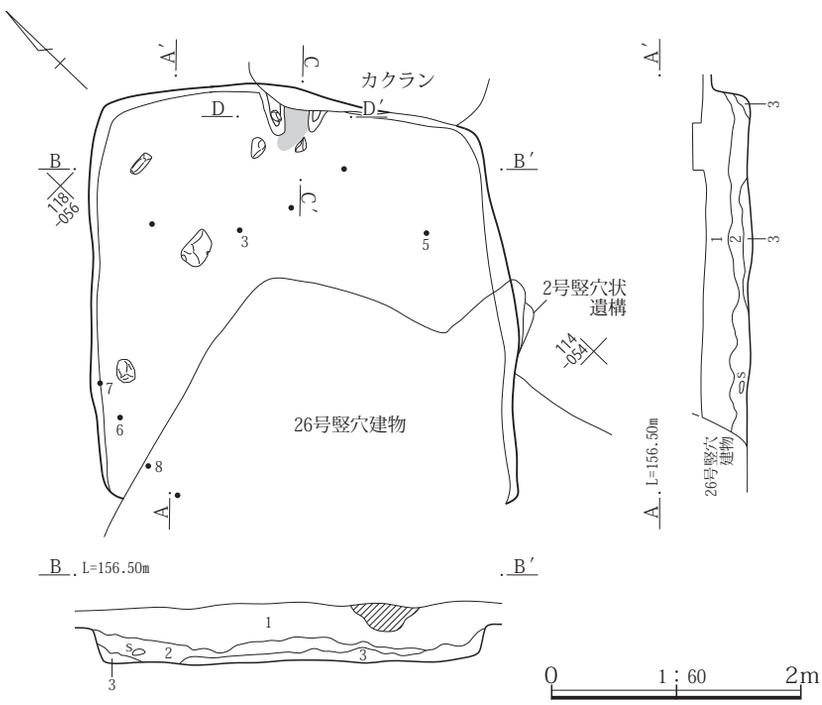
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器甕から７世紀前半に比定できる。１～３の土師器杯は埋没土からの出土であるが、本竪穴建物に共伴するものと判断できる。

48号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37101～37105、Ｙ＝-85073～-85077に位置する。

重複関係　18号竪穴建物、19号竪穴建物、20号竪穴建物、30号竪穴建物、50号竪穴建物、135号竪穴建物、８号土坑と重複関係にある。新旧関係は50号竪穴建物、135号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しいが、18号竪穴建物、20号竪穴建物、30号竪穴建物、８号土坑より古い。

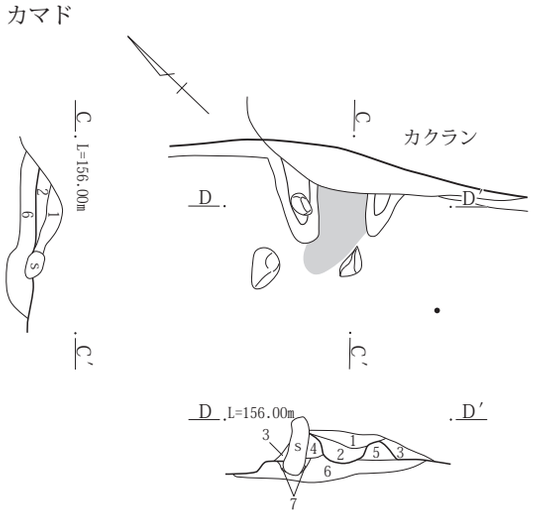
47号竪穴建物



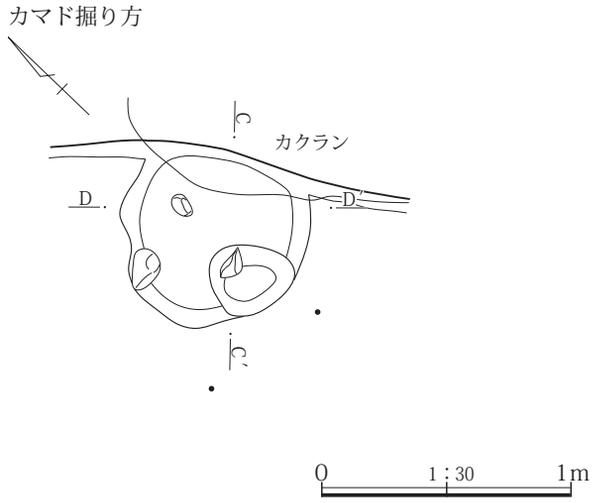
47号竪穴建物
1　暗赤褐 2.5Y3/3　As-C混土、不揃いの泥流土ブロックをやや多く含む、弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　黒褐色土が基質、、炭化物も少量含み、ややしまりが弱い。
3　黒褐 10YR2/2　黒褐色土を基質。不明瞭な泥流土粒をやや多く不均等だが炭化物やや多く、焼土を微量含む。

47号竪穴建物　カマド
1　灰褐 7.5YR4/2　不揃いの焼土ブロックを不均等に含み、しまりやや弱い。
2　黒褐 7.5YR3/2　灰を含み、ややしまりが弱くややサラサラした感触。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土と黒色土の混土。焼土のやや多く含み、ややしまりが強い。
4　黒褐 10YR3/2　細粒土。含有物少ない。
5　灰黄褐 10YR4/2　焼土粒を微量含み、黄色味が強い弱粘性土。
6　にぶい黄褐 10YR4/3　地山泥流土が基質、黄褐色土を小ブロック状に含む。
7　にぶい黄褐 10YR4/3　ややしまりが弱い。

カマド



カマド掘り方



第71図　47号竪穴建物遺構図

なお、19号竪穴建物との関係は不明であるが、出土遺物から本竪穴建物のほうが古い。

形状　南壁と西壁南半分側他竪穴建物との重複によって欠き、残存状態が不良であるが、主軸方向が短い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が3.47m、東西方向が4.10mを測る。確認面から床面までの壁高は14～46cmを測る。

床面積　12.01㎡を測る。

主軸方位　N－30°－E

埋没状態　土層断面は重複する20号竪穴建物によって欠く部分が多く、不明な部分が多いが、壁際の観察では三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　大部分は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っているが、中央部の一部ではにぶい褐色土を充填して貼床としている。

掘り方　一部で貼床が確認されている。床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

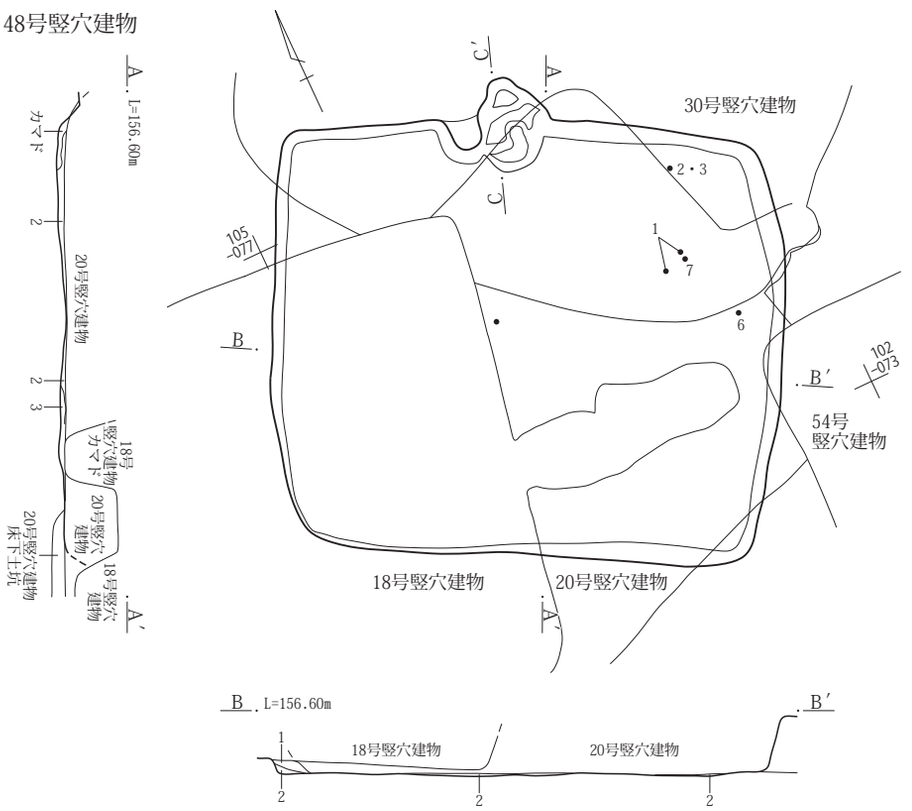
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口や燃焼部の天井部、右袖は失われていたが、左袖は比較的良好な状態であった。なお、煙道と燃焼部の間

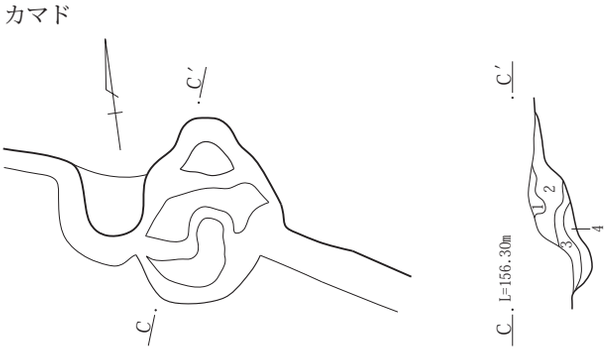
48号竪穴建物



48号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を霜降状に多量に含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　含有物が少ない、弱粘性土。
3　にぶい褐 10YR4/3　泥流土による不明瞭な互層状がみられる。上面は踏み固めたような貼床土。

0　1：60　2m

カマド



48号竪穴建物カマド
1　灰褐 7.5YR4/2　不明瞭な焼土を多量に含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を不均等に炭化物・焼土を含み、ややしまりが強い弱粘性土。
3　灰褐 5YR4/2　赤色味のあまり強くない焼土、ややしまりが弱い。
4　黒褐 10YR2/2　黒色灰を含み、ややしまりが弱い。

0　1：30　1m

第72図　48号竪穴建物遺構図

に段を有している。規模は全長0.74m、幅0.90m、左袖幅0.45mを測る。燃焼部埋没土では焼土混在の土砂を観察できたが、天井部の崩落土か燃焼部の火床面は明確ではなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器椀などが出土している。出土量は他の遺構との重複関係が激しいためか図示８点、未掲載154点と少ない。このうち、１～３の土師器杯と７の灰釉陶器椀が床面からの出土である。なお、４・５の須恵器杯は埋没土からの出土であるが、１～３の土師器杯と同じ年代観が与えられることから共伴する土器と判断できる。７の灰釉陶器椀と８のロクロ成整形土師器甕は後に重複関係にある竪穴建物から混入したものである。

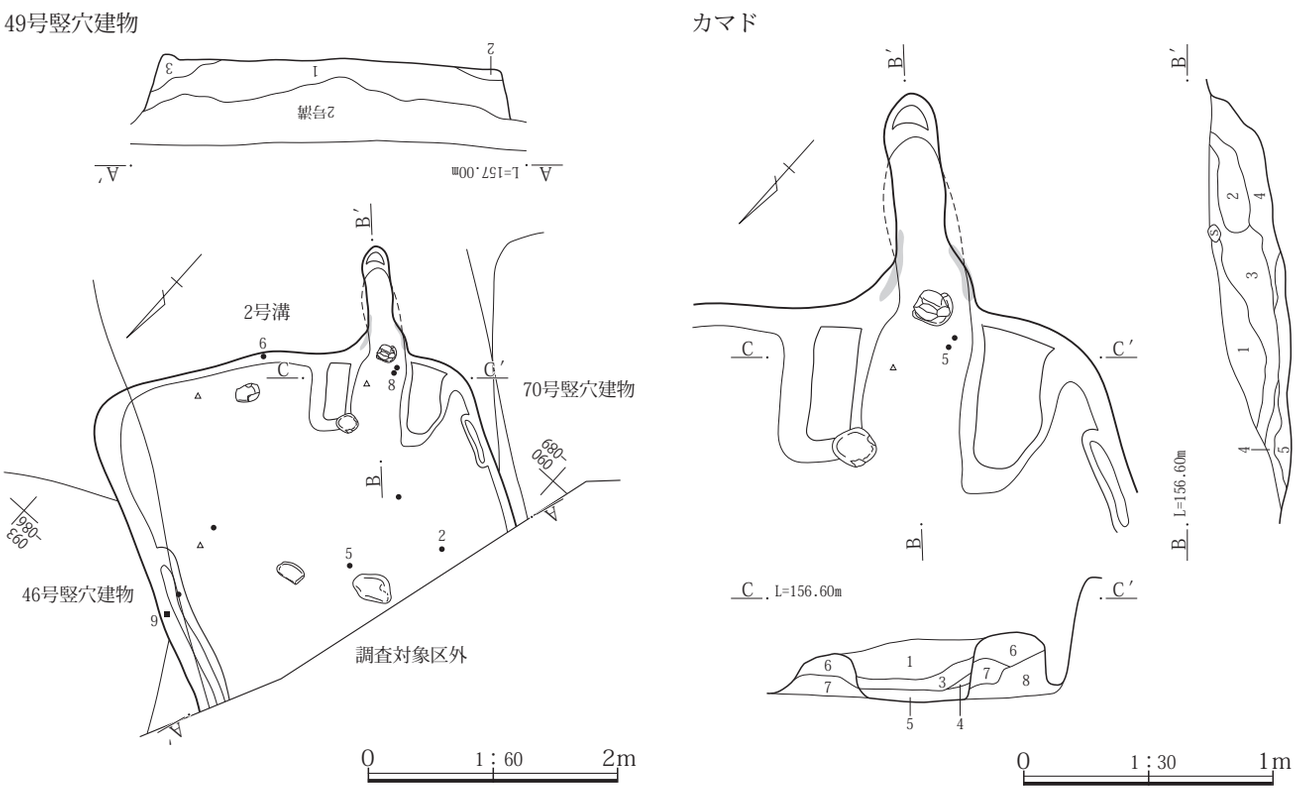
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器杯や須恵器杯などから７世紀第４四半期に比定できる。

49号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37089～37093、Ｙ＝-85085～-85089に位置する。西側は調査範囲外に存在するため欠く。

重複関係　46号竪穴建物、70号竪穴建物、２号溝と重複関係にある。新旧関係は46号竪穴建物、70号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。２号溝との新旧関係は判然としなかった。２号溝の埋没土をみると本竪穴建物のほうが古い。

形状　北東角がやや鋭角であることから台形状を呈すると想定される。



49号竪穴建物
２号溝埋没土　黒褐 10YR3/2　As-B直下。泥流土粒、As-Cを霜降状に焼土粒・炭化物粒を少量含み、ややしまりが強い。
1　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土ブロックをやや多く焼土、炭化物粒を微量含み、ややしまりがある細粒微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　ややしまりがある細粒弱粘性土。
49号竪穴建物　カマド
1　暗赤褐 2.5Y3/3　As-Cを多く含み、しまりが強い。
2　にぶい赤褐 5YR4/3　泥流土と黒褐色土の混土。下半は被熱赤変が見られ、天井部分とみられる。
3　暗褐 10YTR3/3　泥流土が不均等に含み、ややしまりが強い。
4　灰黄褐 10YR4/2　焼土、炭化物、灰を含み、ややしまりが弱い。
5　黒褐 10YR2/3　黒色灰主体に４と泥流土を不均等に含み、しまりが弱くややザラザラした感触。
6　灰黄褐 10YR4/2　やや大粒の泥流土を多く含み、しまりが強い弱粘性土。
7　黒褐 10YR3/2　泥流土を若干含む、細粒弱粘性土。
8　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土ブロックと炭化物を多く含み、しまりが強い。煙道直上は炭化物多い。

第73図　49号竪穴建物遺構図

規模　主軸方向の東西方向は調査範囲内で2.66m、南北方向は2.92mを測る。確認面から床面までの壁高は30～42㎝を測る。

床面積　4.95㎡を測る。

主軸方位　北辺を基準にするとＮ－117°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や重複する竪穴建物埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　北壁の北東角から1.2m西から北西角方向へと南壁の南東角寄りで0.5mの範囲で検出している。北壁下は幅15～20㎝、深さ５～７㎝を測る。南壁下は幅10㎝前後、深さ２～３㎝である。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井部は失われていたが、両袖は残存していた。なお、地表下を掘り込んだ煙道部は天井が崩落した状態であった。規模は全長が1.60mで、そのうち煙道部長が0.77m、幅が1.15m、燃焼部幅0.38mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部奥の火床面からは須恵器羽釜片が出土している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、緑釉陶器、灰釉陶器、鉄製品刀子などが出土している。このうち、８の須恵器羽釜がカマドからの出土である。その他では、２の須恵器無台椀が床面より６㎝上、６の緑釉陶器椀が15㎝上、９の鉄製品刀子は床面より11㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、共伴する土器が８の須恵器羽釜１点だけのため確実性に乏しいが、10世紀前半に比定できる。

50号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37103～37108、Ｙ＝-85071～-85078に位置する。

重複関係　13号竪穴建物、18号竪穴建物、20号竪穴建物、25号竪穴建物、30号竪穴建物、135号竪穴建物、63号ピットと重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物がもっとも古い。

形状　重複関係にある竪穴建物によって大部分を欠き、西辺の一部、東壁際の貯蔵穴、炉が本竪穴建物を構成する施設であることが確認できるに止まるため全貌は不明であるが、方形または長方形を呈すると想定される。

規模　壁が不明確なため、想定の域をでないが、東西6.0m、南北5.0m+αとみられる。

床面積　推定で25.11㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－60°－Ｗを指す。

埋没状態　埋没土のほとんどを重複関係にある竪穴建物によって失われているため不明であるが、わずかに残存している箇所の土層断面ではやや不自然な堆積状態が観察できる。貯蔵穴の堆積土では人為的な埋め戻しが行われたことが確認されている。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　東壁際とみられる箇所で検出されている。形状は楕円形を呈するが、内部に３㎝ほど掘り込んで段を設け、さらにその内部に長軸を90°ほど変えて長方形の落ち込みを設けている。規模は床面で1.00×0.92m、内部の落ち込みは0.63×0.45m、深さは床面から36㎝、中段から33㎝を測る。

その他施設　検出されなかった。

火処　床面の中央よりやや西寄りに炉が設けられている。炉東側に枕石と見られる径７～８㎝、長さ20～25㎝の棒状礫が並べられた状態で置かれていた。

出土遺物　遺物は土師器高杯・Ｓ字状口縁台付甕などが出土している。出土量は少なく、かつほとんどが小片である。そのため図示可能なものは存在していなかった。そうしたことから、重複関係にある竪穴建物から本竪穴建物の存続時期である４世紀代の遺物を選択して図示した。

所見　本竪穴建物の存続期間は、竪穴建物の形状と図示した遺物から４世紀代に比定される。

51号竪穴建物

位置　１区調査区東北部、Ｘ＝37094～37097、Ｙ＝-85054～-85057に位置する。

重複関係　60号竪穴建物、125号ピットと重複関係にある。この他、129号竪穴建物とも重複関係にあると想定される。新旧関係は60号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しく、125号ピットより古い。

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は2.26m、南北方向は3.48mを測る。確認面から床面までの壁高は30～37㎝を測る。

床面積　5.93㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－100°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では１層を除いて水平からレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。なお、１層は本竪穴建物埋没後に掘削された痕跡と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

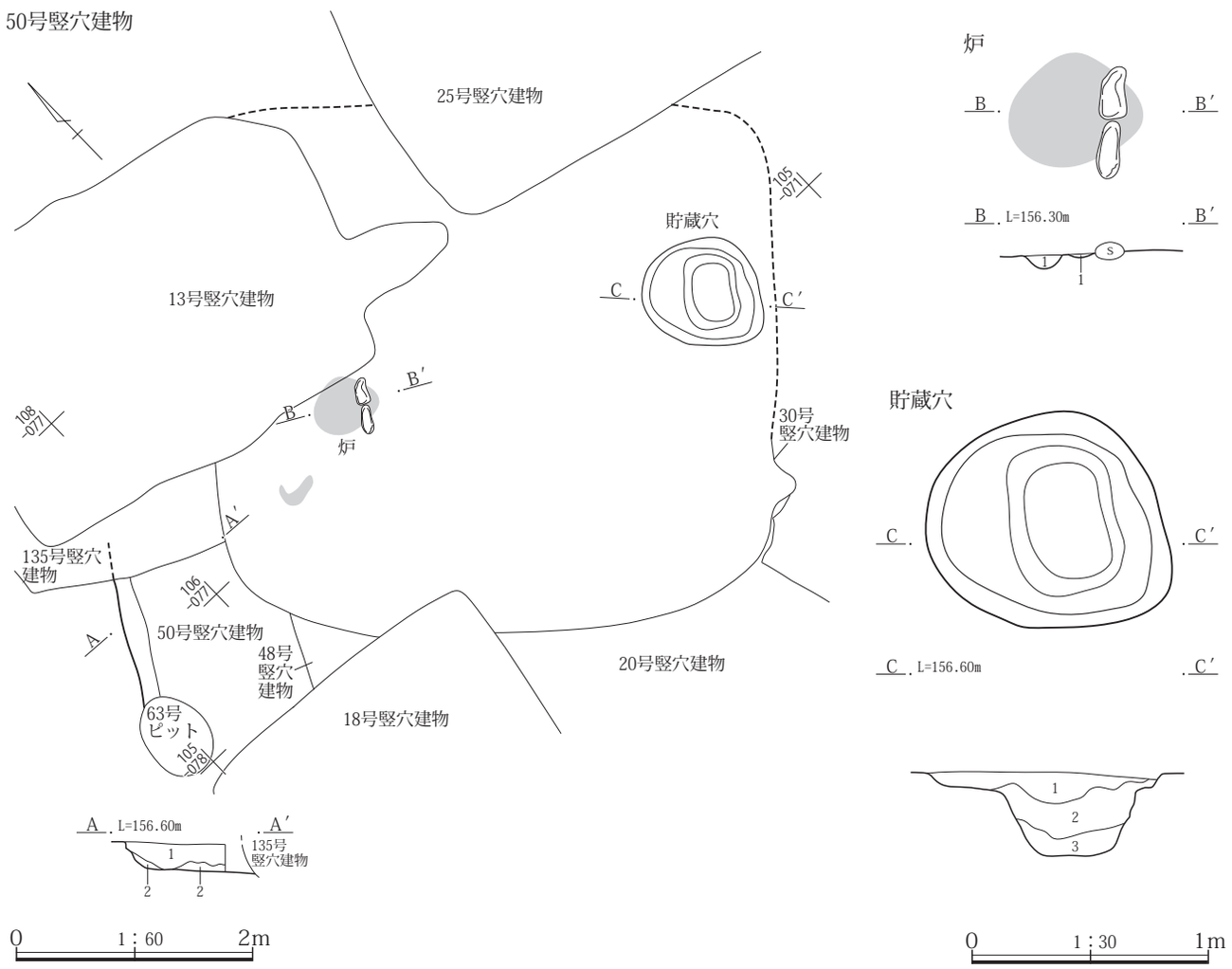
掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。



50号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cの混土、泥流土をやや多く含み、しまりが強い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土をやや多く含み、しまりが強い弱粘性土。不揃いな堆積から人為的埋め戻し土か。
50号竪穴建物　炉
1　黒褐 7.5YR3/2 焼土・炭化物粒混じりの細粒土。不均等に泥流土小ブロックを含み、ややしまりが弱い。炉上の埋没土としては、灰の含有量が少ない。
50号竪穴建物貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を少量含む、弱粘性土。
2　暗灰黄 2.5Y4/2　１㎝大の泥流土ブロックを多く含み、ややしまりを欠く粘性土。人為的埋め戻し土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を多く含み、ややしまりがある粘性土。

第74図　50号竪穴建物遺構図

火処　東壁の中程よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.04m、幅1.05m、燃焼部幅0.35mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。焚口部分には小礫が５点出土しているが、用途等については不明である。また、多くの須恵器羽釜や椀などの破片と23の鉄製品釘も出土している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・耳皿・杯・椀・長頸壺・羽釜・甕、緑釉陶器椀、灰釉陶器皿・椀、土製品土錘、鉄製品刀子・鏃・釘などが出土している。このうち、５・８の須恵器椀、16・18の須恵器羽釜、23の鉄製品釘がカマドから、19・17の須恵器羽釜が床面より７㎝上と13㎝上からの出土である。

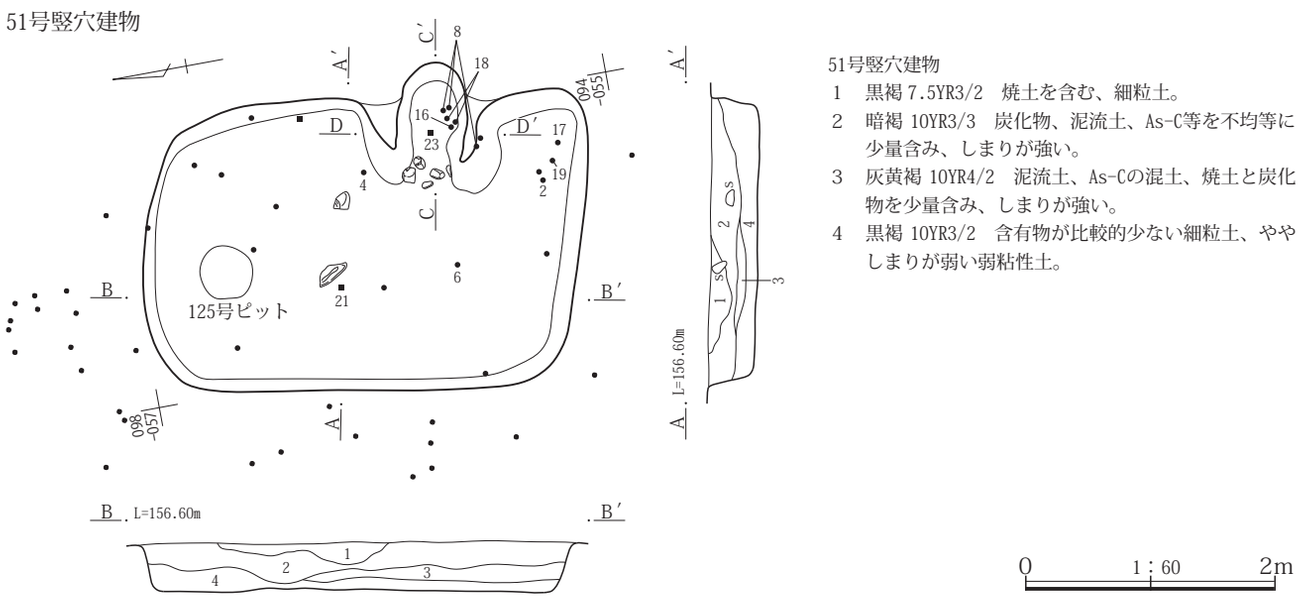
所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土している須恵器椀や須恵器羽釜から10世紀第３四半期に比定できる。

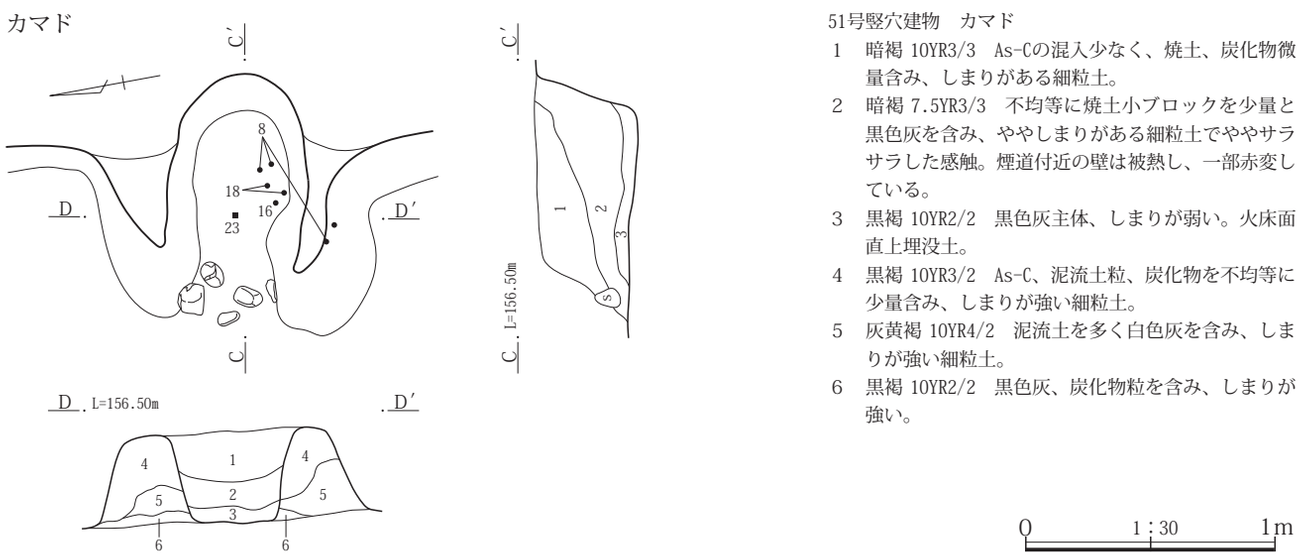
52号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37106～37111、Ｙ＝−85046～−85051に位置する。遺構の北東部は調査対象区外に存在する。

重複関係　27号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が古い。

形状　南辺が北辺より若干長いとみられるが、ほぼ長方形を呈する。





第75図　51号竪穴建物遺構図

規模　南北方向が4.03m、南北方向は3.22mを測る。確認面から床面までの壁高は28～36㎝を測る。

床面積　推定で12.06㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－40°－Ｅを指す。

埋没状態　竪穴の大半を27号竪穴建物で欠くため詳細は不明であるが、残存部の土層断面では中程でレンズ状の堆積状態が観察できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

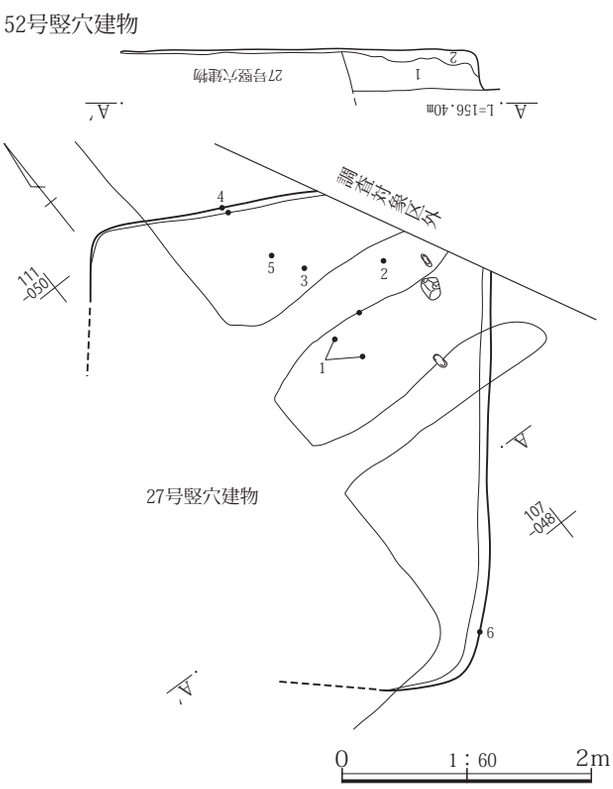
その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。なお、調査対象区外でもカマドなり炉が存在した可能性は低い。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、土製品風字硯などが出土している。このうち、１・２の土師器杯が床面からの出土である。この他、図示した３～６須恵器皿・杯・椀、土製品風字硯は床面より21～44㎝上からの出土である。こうしたことから３～６については後に混入したものである。

所見　本竪穴建物は火処が構築されていないことから居住以外の目的にした竪穴建物と想定される。存続時期は、床面から出土した１・２の土師器杯から７世紀前半に比定できる。なお、３～５の須恵器皿・杯・椀は10世紀後半代、６の土製品風字硯は９世紀以降の年代観が与えられる。

52号竪穴建物



52号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土の土が基質、、不揃いの泥流土ブロックを不均等にやや多く含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物を少量の他は含有物少ない、弱粘性土。

第76図　52号竪穴建物遺構図

53号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37094～37098、Ｙ＝-85070～-85073に位置する。なお、この範囲は53号竪穴建物のカマドと床面として把握できた範囲である。全貌は確認面から床面までの高さが最大でも４㎝とほとんど無いため確認できていない。

重複関係　174号竪穴建物、175号竪穴建物、126号ピットと重複関係にある。新旧関係は54号竪穴建物、174号竪穴建物、175号竪穴建物、126号ピットより本竪穴建物のほうが古く、54号竪穴建物、55号竪穴建物より新しいとみられるが、本竪穴建物の残存状態が不良のため確実性に乏しい。

形状　確認できなかった。

規模　床面として確認できた範囲は南北2.30m、東西2.80mを測る。

床面積　残存部分がわずかなため計測不能。

主軸方位　カマドの方向からＮ－３°－Ｗを指す。

埋没状態　前記のように確認面から床面までが浅く、埋没土の観察ができなかったため、埋没状態については判断できない。

床面　カマド前の床面はAs-Cを含む黒褐色土を３㎝前後敷くように埋め戻し、踏み固めて硬化面としている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の北西角寄りに構築されている。残存状態は上部が失われており、燃焼部火床面から煙道部底面だけ

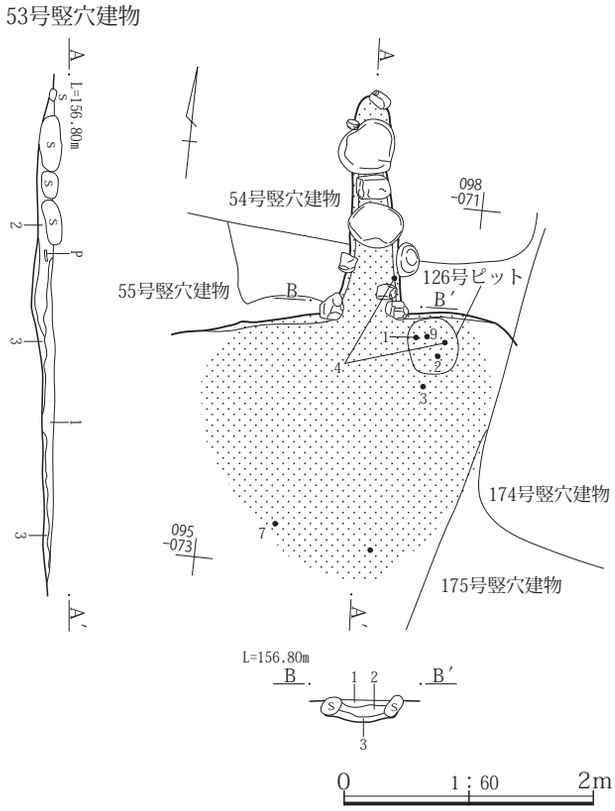
が残存している。規模は全長1.80m、幅0.72m、燃焼部長さ0.5m、幅0.7mを測る。

燃焼部火床面は一部焼土化が確認され、甕を掛ける前後には棒状の礫が立てるように据えられていた。煙道部底面には径20㎝～50㎝のやや扁平な円礫が敷き列べられており、礫を使用して煙道を構築していたと窺える。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土している。このうち、１の須恵器無台椀、３・４の須恵器有台椀、７の灰釉陶器椀、９の須恵器羽釜が床面から、８の土師器甕がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器椀や羽釜から10世紀第３四半期に比定できるが、重複関係にある54号竪穴建物、174号竪穴建物や175号竪穴建物と同時期に存在していたことになりやや齟齬が生じる。また、カマドの形状は礫を使用し、煙道を長く造る

53号竪穴建物



53号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土焼土、炭化物粒を微量含み、しまりが強い。竪穴建物埋没土。
2　にぶい赤褐 5YR4/3　上位ほど被熱による赤色味が強くなっており、煙道側は灰を含み、ややしまりが弱い。カマド内埋没土。
3　黒褐 10YR3/2　As-C混土、しまりが強い、１よりやや黒色味強い。掘り方埋め戻し土。

第77図　53号竪穴建物遺構図

形状であることからこの時期に該当するとは想定することは難しい。こうした点からカマドから出土した土師器甕の小片から７世紀～８世紀に想定したいが、発掘調査時の54号竪穴建物との新旧関係に齟齬が生じることになる。そのため、ここでは７世紀～８世紀と10世紀第３四半期の両時期の可能性があることを提示するに留める。

54号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37096～37102、Ｙ＝-85069～-85073に位置する。

重複関係　20号竪穴建物、48号竪穴建物、53号竪穴建物、55号竪穴建物、68号竪穴建物、174号竪穴建物、６号土坑、７号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが53号竪穴建物、174号竪穴建物、６号土坑、７号土坑より古く、20号竪穴建物、48号竪穴建物、55号竪穴建物、68号竪穴建物より新しい。

形状　南北に長い長方形を呈す。

規模　主軸方位の東西方向が3.52m、南北方向が5.08mを測る。確認面から床面までの壁高は12～30㎝を測る。

床面積　15.08㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－97°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　床下土坑が存残する部分は地山を踏み固めた所より低くなっている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、８基の床下土坑が検出された。形状・規模は下記のとおりである。埋没状態は土層断面を観察すると比較的丁寧に埋め戻されていることが確認されている。床下土坑内部からは緑釉陶器やロクロ土師器甕、須恵器椀・甕が出土している。

１号床下土坑：　円形、径0.95×0.93m、深さ0.30m
２号床下土坑：　円形、径0.60×0.58m、深さ0.40m
３号床下土坑：楕円形、径0.95×0.85m、深さ0.38m
４号床下土坑：不整形、径1.33×0.93m、深さ0.27m
５号床下土坑：楕円形、径0.98×0.70m、深さ0.22m
６号床下土坑：楕円形、径1.01×0.82m、深さ0.26m
７号床下土坑：楕円形、径0.93×0.63m、深さ0.42m
８号床下土坑：鍵穴状、径1.24×0.96m、深さ0.51m

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角隅で検出されている。形状は矩形に近く、規模は南北、東西とも0.95m、深さ0.19mを測る。内部からは４・６・７の須恵器杯、19の須恵器椀などが底面から出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道部の天井は壊されており、左袖も６号土坑によって消滅しているが、右袖は残存していた。

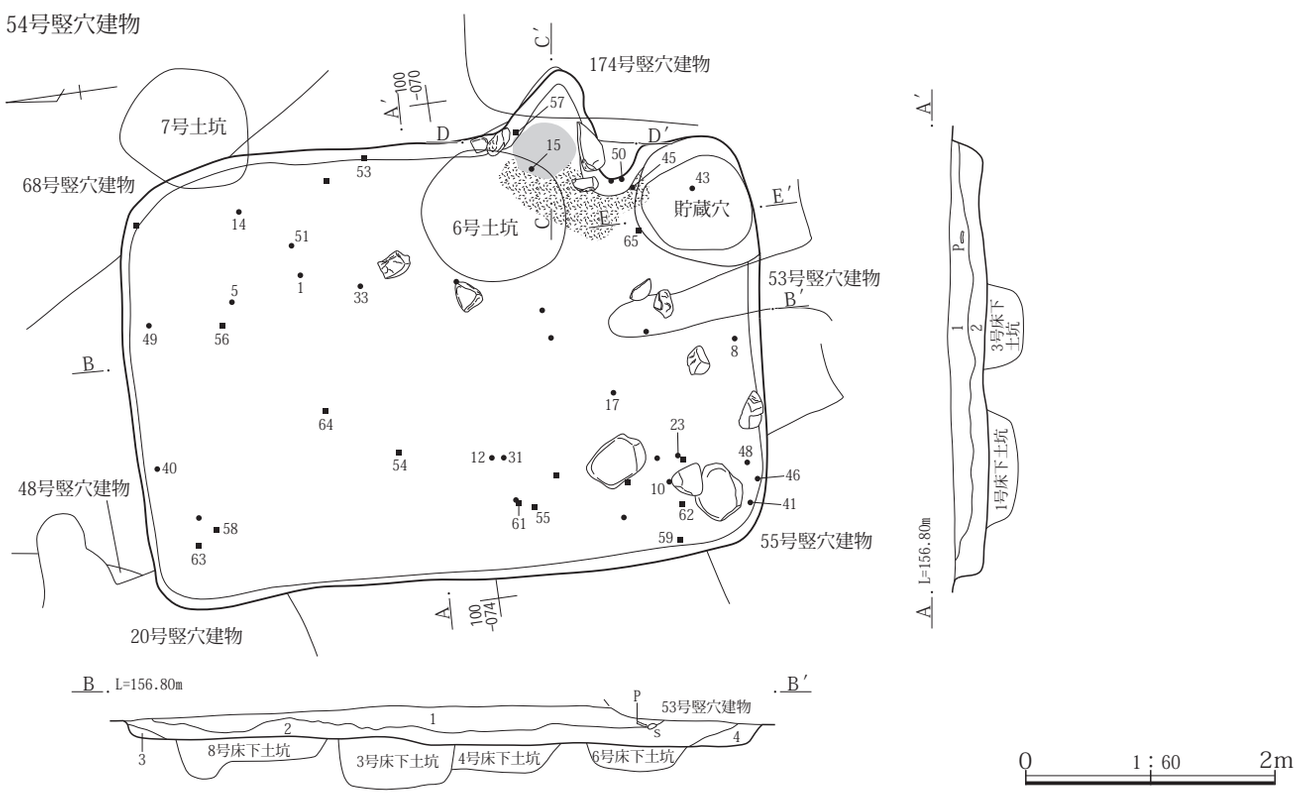
規模は全長1.00m、幅1.40m、燃焼部幅0.50mを測る。燃焼部の奥と煙道部は壁外に延びる。袖には比較的角のある棒状礫、箱形の礫を使用している。なお、右袖には44の須恵器羽釜､50の須恵器甕も構築材と使用していた。燃焼部は比較的良く焼土化していた。また、カマド前方には灰が広く散布した状態であった。

掘り方は楕円状に掘り込まれるとともに焚口下に径0.45m、深さ0.20mの灰掻き穴とみられる落ち込みが検出されている。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕・羽釜、緑釉陶器、灰釉陶器、鉄製品紡錘車、鞘尻金具、刀子２点、釘３点、流動滓などが出土している。このうち、５の須恵器杯、10・13・17の須恵器椀、45・48の須恵器羽釜が床面から、４・６・７の須恵器杯、19の須恵器椀、24の緑釉陶器椀、32の灰釉陶器輪花皿が貯蔵穴から、49の須恵器甕が２号床下土坑から、25・26の緑釉陶器椀が６号床下土坑から、９の須恵器無台椀、20の須恵器椀、40のロクロ土師器小型甕が７号床下土坑から、15の須恵器椀、44の須恵器羽釜、50の須恵器甕がカマドから出土している。なお、出土した灰釉陶器は図示した他に53点が出土しており、図示・未掲載含め窯式期が判断できるものは大原２号窯式期に該当するもので、本竪穴建物の存続期間と一致する。

なお、鉄製品紡錘車や鞘尻金具、刀子などは遺構確認面より上位からの出土である。

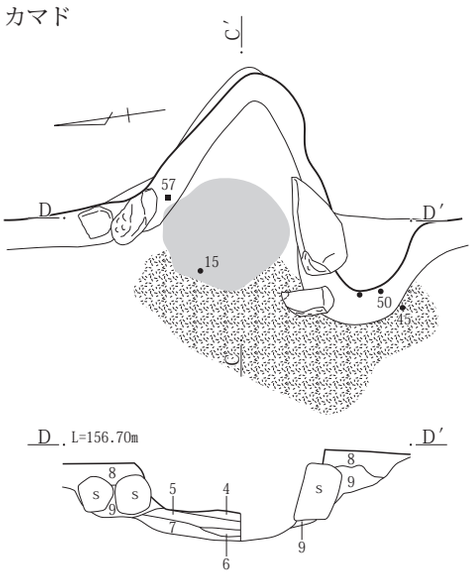
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や貯蔵穴、床下土坑から出土した須恵器杯・椀・羽釜などから10世紀第２四半期に比定できる。

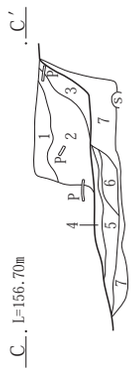


54号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・炭化物を少量含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　φ１～３㎝大の炭化物を多量に炭化物、焼土を若干含み、ややしまりを欠く。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土混土、弱粘性土。壁崩落土。
4　暗褐 10YR3/3　含有物少ない、細粒弱粘性土。

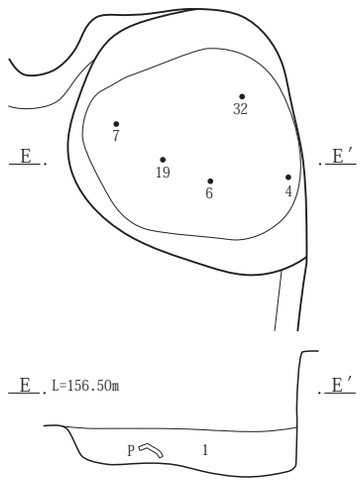
第78図　54号竪穴建物遺構図（１）

カマド

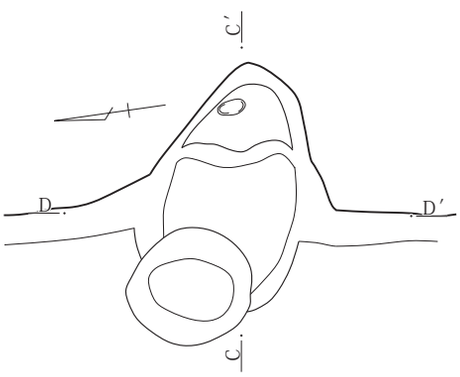




貯蔵穴



カマド掘り方



54号竪穴建物　カマド

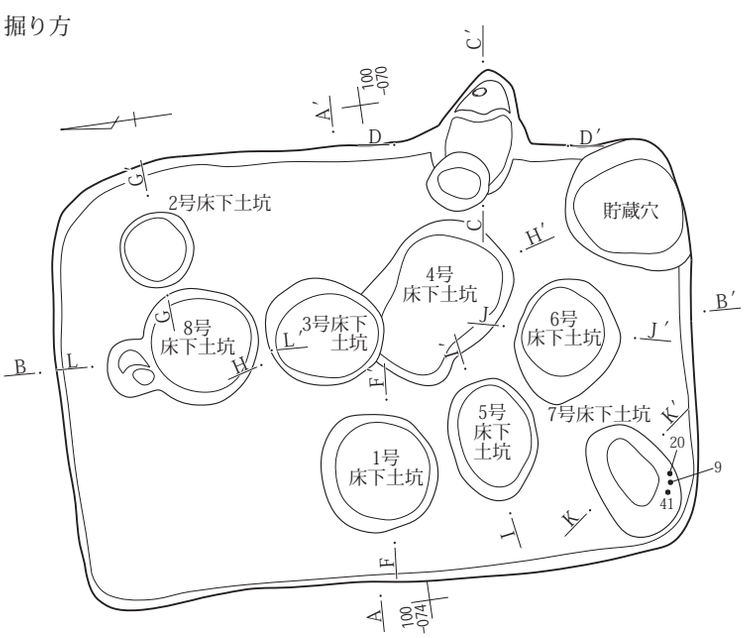
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土を含む、細粒土。
2　黒褐 10YR3/2　黒色灰とφ１㎝大の炭化物多く含み、ややしまりが強くサラサラした感触。
3　暗褐 10YR3/3　黒色灰を含む、細粒土。火床面整形土で燃焼部付近は赤変硬化顕著。
4　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土、泥流土を主体とし、しまりが強い。
5　暗褐 7.5YR3/3　一部で黒色灰、淡い焼土を互層状に含み、ややしまりが強い。
6　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土ブロック主体に黒色灰の多い黒色土ブロックを含み、ややしまりが強い。
7　黒褐 10YR3/2　泥流土の多い微粘性土。黒褐色土と泥流土を混ぜて煙道下を整形したものとみられる。
8　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量含み、しまりが強い。
9　暗褐 10YR3/3　褐色味を帯び、やや砂質の泥流土を含み、しまりがあまり強くない。

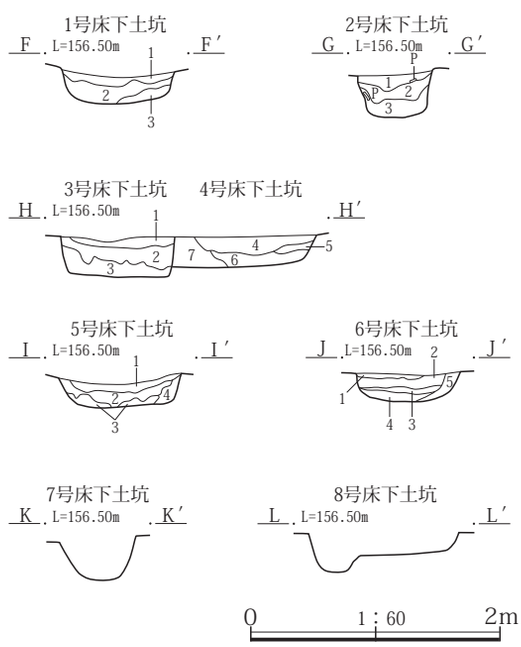
54号竪穴建物　貯蔵穴

1　黒褐色土 10YR3/2　黄褐色土粒を含み、しまりが強い。

0　1：30　1m

掘り方





第79図　54号竪穴建物遺構図（２）

54号竪穴建物　１号床下土坑
１　黒褐 10YR3/2　竪穴建物２と同じ、炭化物を含む。上面は踏み固めか。
２　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックの混入多く炭化物が少量、不均等に含む、ややしまりが弱い弱粘性土。
３　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体の踏み固めか。
54号竪穴建物　２号床下土坑
１　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックを多く含み、ややしまりが弱い弱粘性土。上面踏み固め不明瞭。
２　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色細粒土と不均等な泥流土の混土、炭化物を少し含み、しまりがやや弱い。
３　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色細粒土と不均等な泥流土の混土。泥流土を多く含む。
54号竪穴建物　３号・４号床下土坑
１　黒褐 10YR3/2　竪穴建物２と同じ、炭化物を含む。上面を踏み固めか。
２　灰黄褐 10YR4/2　大粒As-Cと炭化物粒を不均等に含み、しまりが強い。
３　にぶい黄褐 10YR4/3　黄色味強い泥流土ブロックと黒褐色土の混土。ややしまりが弱い。
４　灰褐 7.5YR4/2　黒色灰を一部に含み、ややしまりを欠く弱粘性土。
５　にぶい黄褐 10YR4/4　黄色味強い泥流土と焼土や黒褐色土を少量含む。
６　灰褐 7.5YR4/2　褐色味の強い泥流土と黒褐色土の混土、炭化物・焼土を不均等に含む。人為的埋め戻し土。
７　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土粒、黒褐色土、焼土等の混土。床面付近に炭化物多く含み、しまりが強い。
54号竪穴建物　５号床下土坑
１　暗褐 7.5YR3/3　焼土、泥流土粒を不均等にやや多く含み、ややしまりがある。
２　黒褐 7.5YR3/2　黒褐色弱粘性土中に泥流土小ブロックを少量含み、ややしまりが弱い。
３　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土ブロックと黒褐色弱粘性土の混土。掘削残土が底さらいせず残ってしまったような土。
４　黒褐 10YR3/2　黒色灰と下半中心に泥流土粒を少量含み、ややしまりがある細粒弱粘性土。
54号竪穴建物　６号床下土坑
１　暗褐 10YR3/3　炭化物粒や焼土を少量含み、しまりが強い弱粘性土。貼床の可能性がみられる。
２　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土ブロックと暗褐色粘性土の混土、しまりが強い。
３　黒褐 10YR2/2　黒色灰、炭化物粒を含み、しまりが強い粘性土。
４　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色味の強い泥流土が基質、、３を不均等に含む、しまりが強い。
５　灰褐 7.5YR4/2　暗褐色弱粘性土に不揃いの泥流土を不均等にやや多く含み、しまりが強い。

55号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37094～37098、Ｙ＝−85072～−85076に位置する。

重複関係　43号竪穴建物、53号竪穴建物、54号竪穴建物、43号土坑と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物や土坑より本竪穴建物のほうが古い。

形状　東辺3.2m、南辺3.4m、西辺3.5m、北辺3.2mと各辺の長さが若干異なるがほぼ方形を呈す。

規模　主軸方位の東西方向が3.33m、南北方向が3.45mを測る。確認面から床面までの壁高は34～67㎝を測る。

床面積　8.54㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－67°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　床下土坑が存残する部分は地山を踏み固めた所よりわずかに低くなっている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、南半部から３基の床下土坑が検出されている。形状と規模は次のとおりである。１号床下土坑が矩形を呈し、径0.87×0.80m、深さ0.20m、２号床下土坑が円形を呈し、径0.95×0.87m、深さ0.33m、３号床下土坑が楕円形を呈し、径1.36×1.25m、深さ0.16mを測る。１号床下土坑内部からは土師器杯が出土している。

壁溝　カマドが構築されている東壁下を除く、南壁下、西壁下、北壁下では検出された。規模は幅が15㎝前後、深さが３～６㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

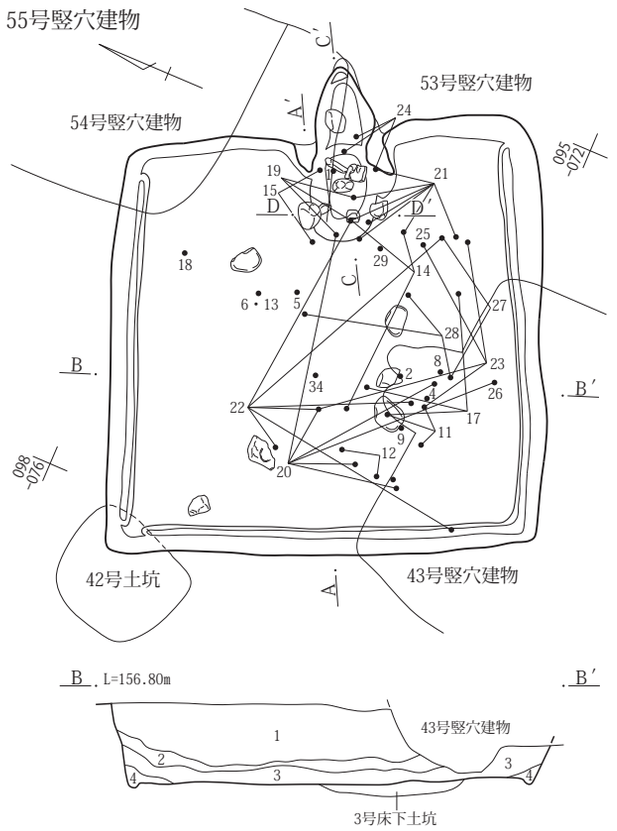
その他施設　検出されなかった。

火処　東壁のほぼ中央にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道部の天井と燃焼部手前側の袖は失われていたが、燃焼部奥側の袖は残存していた。なお、燃焼部手前側の袖は失われていたが、焚口の補強に使用されていた棒状礫は据えられたまま残存していた。

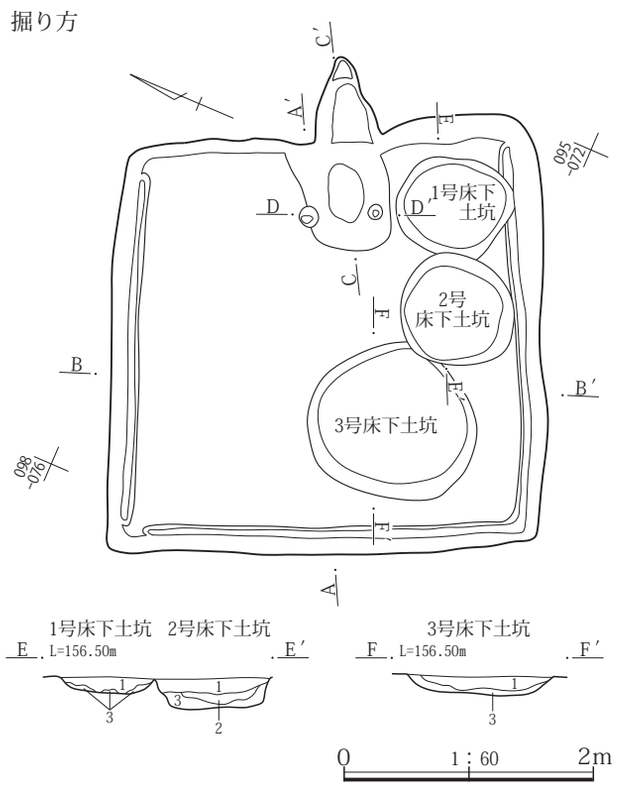
規模は全長1.50m、幅0.87m、燃焼部幅0.52mを測る。煙道部は燃焼部から20㎝ほどの段を設けて壁外に延びる。また、燃焼部の中央には支脚に使用されたとみられる径10×20㎝の棒状礫が据えられたまま残存していた。

掘り方は燃焼部が楕円状に掘り込まれ、煙道部は壁外に段をつくるように掘り込まれていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・鉢・壺・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・壺・甕、灰釉陶器などが出土している。このうち、４～６の土師器杯、８の土師器高杯、９の土師器有孔鉢、11・12の須恵器鉢、13の土師器小型壺、14



55号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状にやや多く含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　しまりやや強い細粒土。
3　黒褐 10YR3/2　やや大粒の泥流土粒を少量と炭化物、焼土を微量含み、しまりがある弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　褐色味の強い泥流土主体、ややしまりを欠く粘性土。



55号竪穴建物　１号～３号床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを10％含む。

第80図　55号竪穴建物遺構図（１）

の土師器壺、17の須恵器横瓶、25～29の土師器甕が床面から、１の土師器杯、15の須恵器壺、19～22・30の土師器甕がカマドから出土している。なお、34の土師器高杯と35の灰釉陶器皿は埋没過程や後の混入である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器杯や甕から７世紀第３四半期に比定できる。

56号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37098～37101、Ｙ＝−85063～−85067に位置する。

重複関係　67号竪穴建物、68号竪穴建物、174号竪穴建物、５号土坑、118号ピットと重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが５号土坑より古く、67号竪穴建物、68号竪穴建物、174号竪穴建物、118号ピットより新しい。

形状　主軸方向の東西方向が0.2mほど長い長方形を呈す。

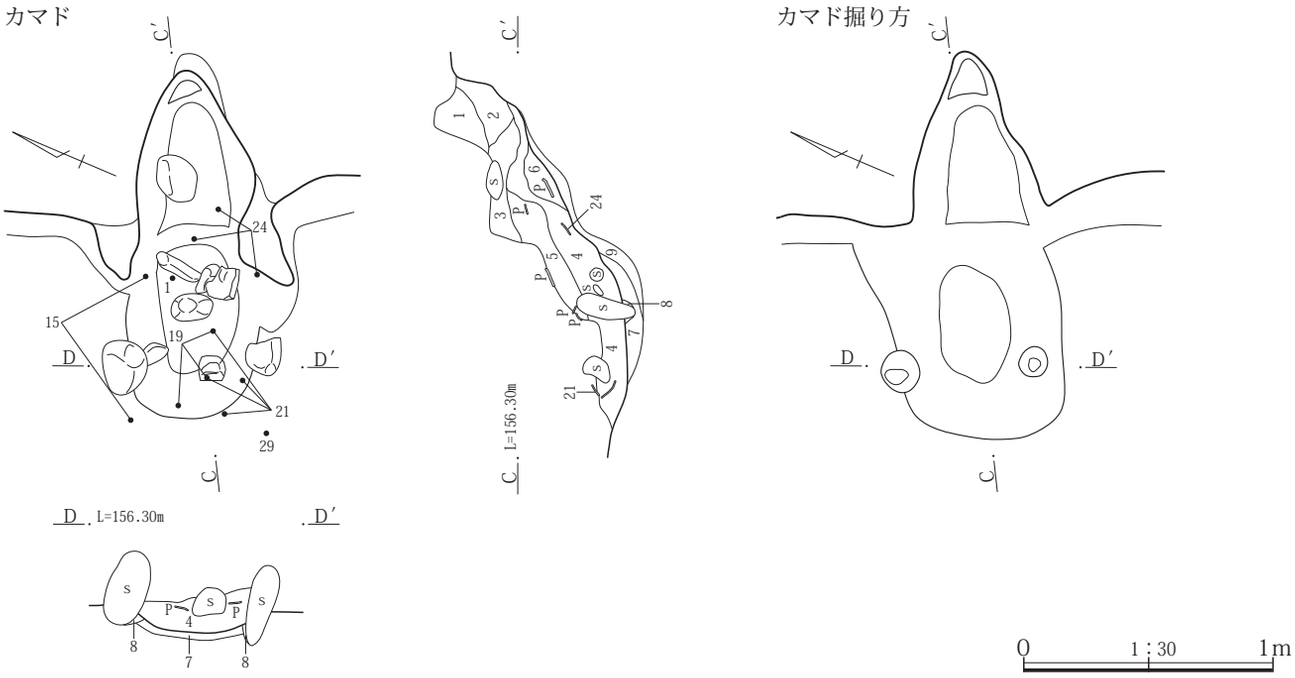
規模　主軸方位の東西方向が2.99m、南北方向が2.76mを測る。確認面から床面までの壁高は５～11cmを測る。

床面積　7.03㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－96°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面まで浅いため明確ではないが、土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山及び重複する竪穴建物の埋没土をそのまま踏み固めて硬化面としている。



55号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、しまりが弱い細粒土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土をブロック状に焼土を含み、しまりが強い。
4　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多く含み、しまりが弱い細粒土。
5　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土粒を霜降状に下半中心に焼土を少量含み、ややしまりが弱い細粒土。
6　灰黄褐 10YR4/2 ブロック状の泥流土と黒褐色土の混土、焼土・灰を少量含む。
7　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土。不均等に焼土を含む。
8　灰黄褐 10YR4/2　袖石等の掘り方部分。
9　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土を主体、黒褐色土や少量の灰を含み、ややしまりが強い。

第81図　55号竪穴建物遺構図（２）

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道部の天井は壊れているが、両袖は残存していた。規模は全長1.10m、幅0.95m、燃焼部幅0.48mを測る。燃焼部の奥側半分と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部火床面から煙道部の間には６㎝ほどの段が設けられている。また、燃焼部火床面下には楕円形を呈し、径37×23㎝、深さ10㎝の小規模なピット状の落ち込みが検出されている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・壺・甕、灰釉陶器などが出土している。出土量は少なくないが、図示できた遺物は３点だけであった。このうち、２の須恵器椀は床面より13㎝上、３の灰釉陶器皿は６㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に共伴する土器が出土していないが、図示した須恵器椀は10世紀第１四半期、灰釉陶器皿は大原２号窯式期の年代観が与えられることから10世紀第１四半期に比定できる。

57号竪穴建物

位置　１区調査区北部の北より、Ｘ＝37095～37100、Ｙ＝−85087～−85086に位置する。本竪穴建物は46号竪穴建物の中に構築されていたため、46号竪穴建物調査中に壁溝が検出されたことによって存在が確認された。そのため、壁の検出を行なうことができなかった。また、北壁側の大部分が調査対象外に存在するため全貌は不明である。

重複関係　45号竪穴建物、46号竪穴建物、43号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが45号竪穴建物、43号土坑より古く、46号竪穴建物より新しい。

形状　主軸方向の南北方向が0.15mほど長い長方形を呈す。

規模　主軸方位の南北方向が3.32m、南北方向が3.17mを測る。

床面積　残存範囲内で8.79㎡を測る。

主軸方位　北壁側中程の床面に礫が散乱した状態で出土していることから、この礫群の北側にカマドが構築されている可能性がある。これによって主軸方位はＮ－52°－Ｅを指すと想定される。

埋没状態　不明である。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　南壁下と西壁下の一部に設けられている。幅は12～20㎝、深さは３～11㎝を測る。

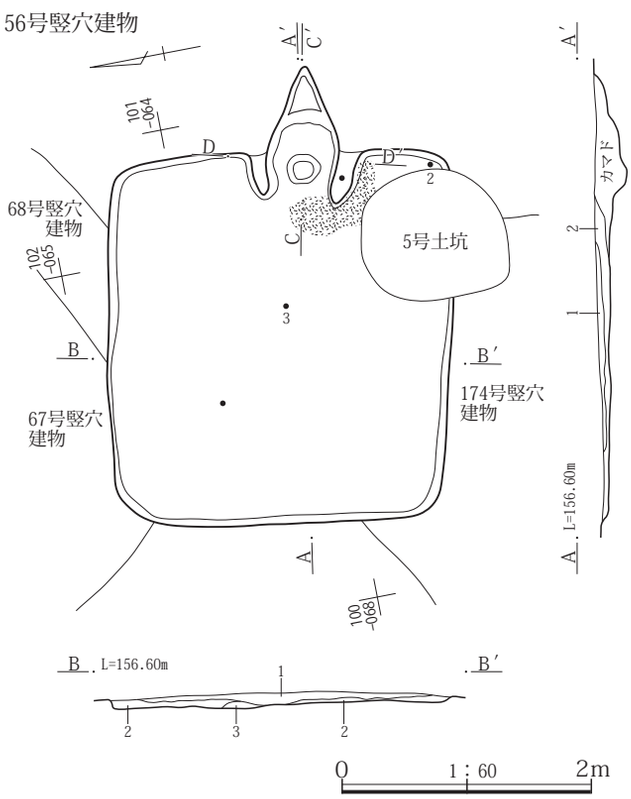
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

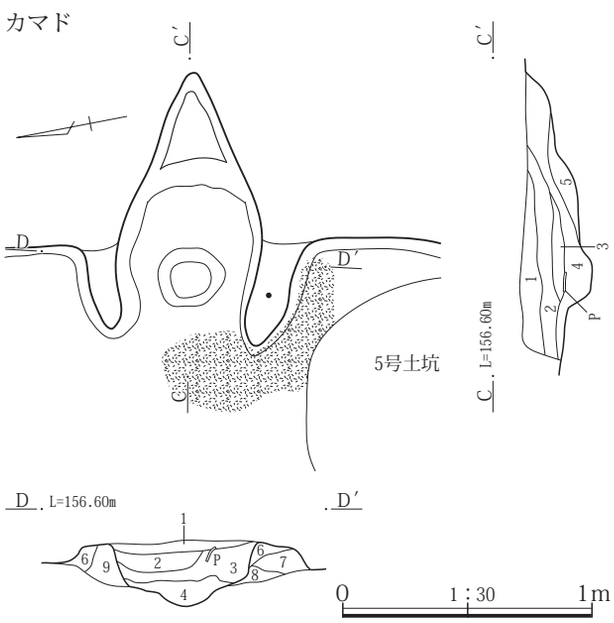
その他施設　検出されなかった。

火処　主軸方向の項で記したように礫の散乱状態から北壁の中央付近に構築されていたと想定される。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯・椀・甕などが出土しているが、出土量はごくわずかで図示した６点の他に未掲載２点が出土しているだけであった。図示した土器のうち、１の須恵器杯、２・４の須恵器椀が床面から、３の須恵器椀は床面より11㎝上、５の土師器甕と６の須恵器甕は床面より15㎝上からの出土である。なお、図示した須恵器杯・椀は底部切り離し技法が回転糸切りによるものである。これらはすべてロクロの回転方向が左回りであった。本遺跡出土の須恵器杯・椀の中にはロクロの回転方向が左回りのものが若干みられるが、ほとんどが酸化焔焼成によるもので、還元焔焼成によるものは希少である。



56号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土を霜降状にやや多く炭化物を微量含み、しまりが強い土。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物を少量含む、細粒弱粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR5/3　泥流土が基質、２を小ブロック状に少量含み、しまりがある。



56号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　焼土を少量と灰を含み、ややしまりが弱い細粒土でサラサラした感触。
3　灰褐 7.5YR4/2　焼土、泥流土、炭化物等を多く含み、ややしまりが弱い。
4　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多く含み、しまりが弱い。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体、ボソボソした感触。火床面整地土か。わずかに被熱。
6　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土と黒褐色土の混土。焼土粒や炭化物粒を少量含み、やや粘性の強い。
7　灰黄褐 10YR4/2　６に類似。
8　黒褐 10YR3/2　黒色灰と小ブロック状の泥流土を含む、微粘性土。
9　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体、袖基部構築材。

第82図　56号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面より出土した須恵器杯・椀から９世紀第４四半期に比定できる。

58号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37104～37108、Ｙ＝−85063～−85068に位置する。

重複関係　67号竪穴建物、68号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが67号竪穴建物、68号竪穴建物より新しい。なお、出土遺物からは67号竪穴建物のほうが本竪穴建物より新しい。

形状　北辺が他の辺に比べてやや長いが、東西方向が長い長方形を呈す。

規模　主軸方位の南北方向が3.60m、東西方向が3.97mを測る。確認面から床面までの壁高は19～57㎝を測る。

床面積　10.70㎡を測る。

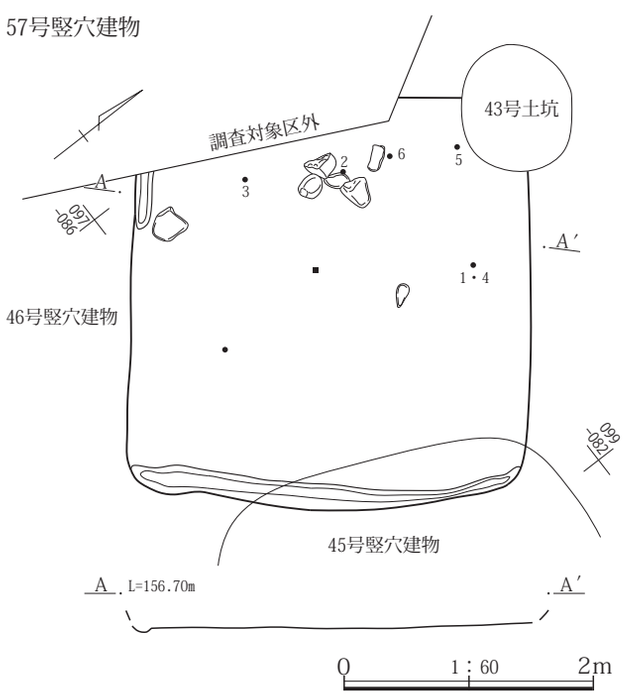
主軸方位　Ｎ－26°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際で三角堆積が確認できるが、内部はほぼ水平及びやや盛り上がった堆積である。このため自然埋没か人為的な埋め戻しかの判断は難しい。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　各壁下に部分的に設けられている。幅は12～15㎝、深さは３～５㎝を測る。



第83図　57号竪穴建物遺構図

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　北東角で検出されている。貯蔵穴は壁溝が設けられている南西側の南北0.70m、東西0.85mの範囲を床面より10～15㎝ほど掘り込み、その段の中央南寄りには土坑状の掘り込みが行われている。形状は楕円形、規模は径0.42×0.35m、深さ0.23mを測る。そしてこの内部には15の土師器甕が口縁部から胴部上半の状態で据えられるように置かれていた。なお、貯蔵穴内部からは13の土師器甑や21の土師器甕などをはじめとする土器片や礫が出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁のほぼ中央に構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道部の天井は失われていたが、両袖の一部は残存していた。規模は全長1.08m、幅1.12m、燃焼部幅0.42mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部火床面から煙道部の間には20㎝ほどの段が設けられている。また、燃焼部奥の火床面には支脚に使用されてとみられる径10㎝、長さ25㎝の棒状礫が立てるように据えられたものがほぼそのまま残存していた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甑・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・壺・甕、灰釉陶器、石製品臼玉、棒状礫などが出土している。このうち、８の須恵器杯、10の須恵器長頸壺、12・13の土師器甑、16・18・19・23の土師器甕が床面から、２の土師器杯、13の土師器甑の一部片、17の土師器甕がカマドから、13の土師器甑の一部、15・21の土師器甕が貯蔵穴からの出土である。また、床面から偏平な円礫や棒状礫が多く出土している。そのうち、棒状礫は径５～10㎝、長さ10～15㎝のものがまとまって20点ほど南東角壁下床面から出土、これらは菰編み石として利用されたとみられる。なお、24の須恵器杯、25の灰釉陶器椀は後の混入である。

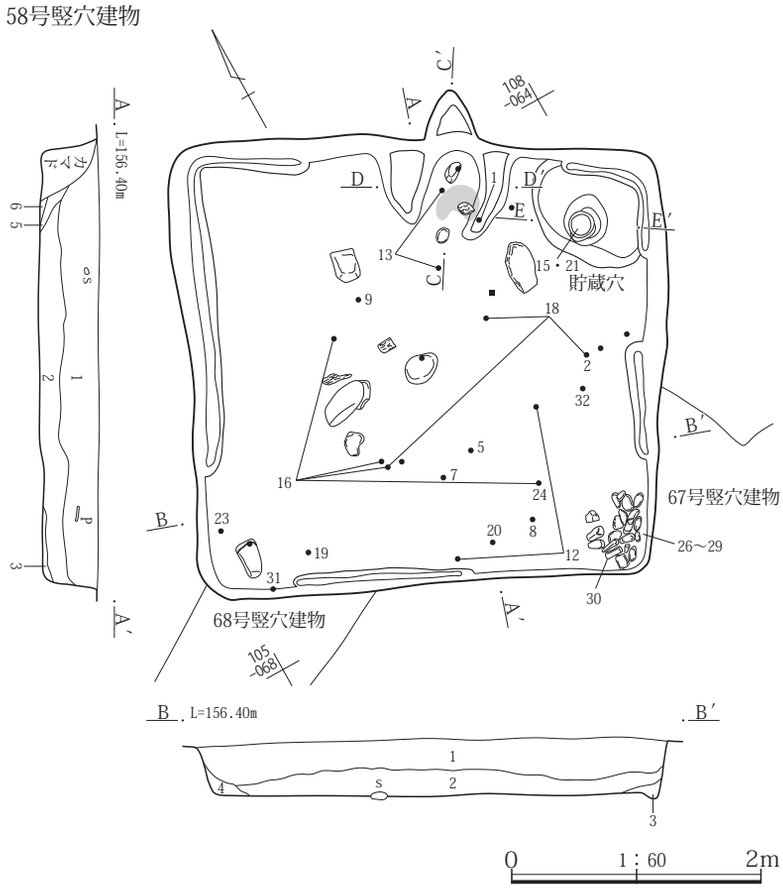
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマド、貯蔵穴から出土した土師器杯・甕、須恵器杯などから７世紀第４四半期に比定できる。

59号竪穴建物

位置　１区調査区東北部、Ｘ＝37093～37096、Ｙ＝−85049～−85053に位置する。

重複関係　129号竪穴建物、26号土坑、38号土坑と重複関係にある。新旧関係は26号土坑、38号土坑より本竪穴

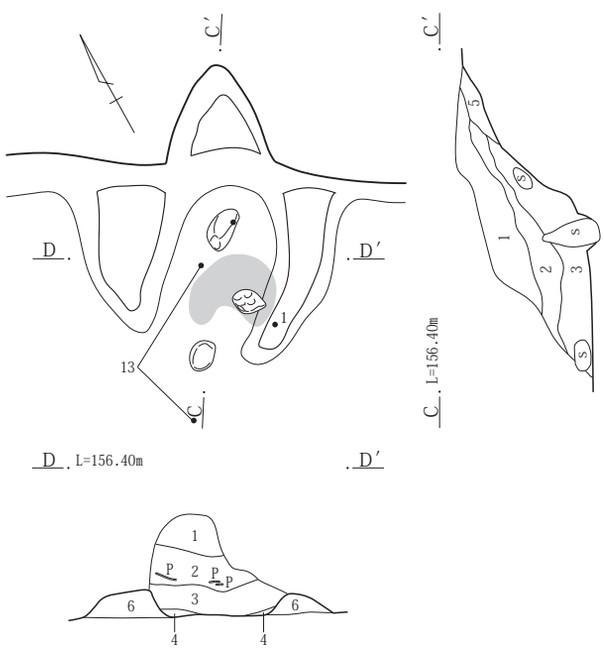
58号竪穴建物



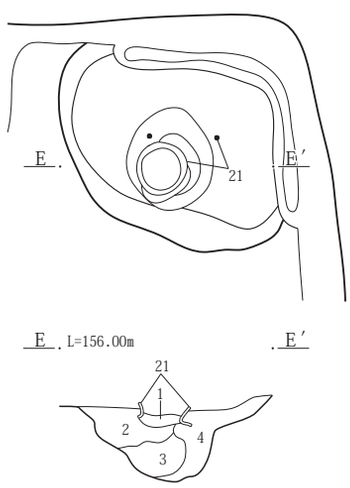
58号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状にやや多く含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロック、炭化物粒を不均等に少量含む、細粒弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土中に、泥流土小ブロックをやや多く含む、弱粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　含有物が少ない細粒土。
5　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土中に不揃いな泥流土の混土、炭化物と焼土を含む、弱粘性土。
6　黒褐 7.5YR3/2　黒色灰と不均等に焼土を含み、サラサラした感触の弱粘性土。

58号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を不均等に含み、ややしまりが強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土を基質に、黒褐色土が不均等に下半に少量の焼土を含み、しまりが強い。構築材が主体となる。
3　暗褐 10YR3/3　黒褐色細粒土を基質に、黒色灰を含み、ややサラサラした感触。
4　にぶい黄褐 10YR4/4　泥流土ブロック。
5　黒褐 10YR3/2　As-C混土、しまりが強い。煙道部の整形土。
6　暗褐 10YR3/3　黒褐色土と不明瞭な泥流土の混土。袖材だが、焼土等の含有量は少ない。

カマド



貯蔵穴



58号竪穴建物 貯蔵穴
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを５％含む。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを30％含み、粘性がある。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを10％含み、粘性がある。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを10％含み、若干柔らかくやや粘性がある。

0　1：30　1m

第84図　58号竪穴建物遺構図

建物のほうが古く、129号竪穴建物よりは新しい。

形状　東西方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は3.63m、南北方向は2.23mを測る。確認面から床面までの壁高は10～30㎝を測る。

床面積　5.74㎡を測る。

主軸方位　N－108°－Wを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　西壁のカマド南側から南壁、東壁南半分で検出された。規模は幅が15～20㎝、深さ２～13㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　西壁の北西角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口、両袖、燃焼部の天井などほとんどが失われ、掘り方に近い状態であった。規模は全長が0.73m、幅が0.50mを測る。燃焼部と煙道部の間には10㎝ほどの段が設けられていた。

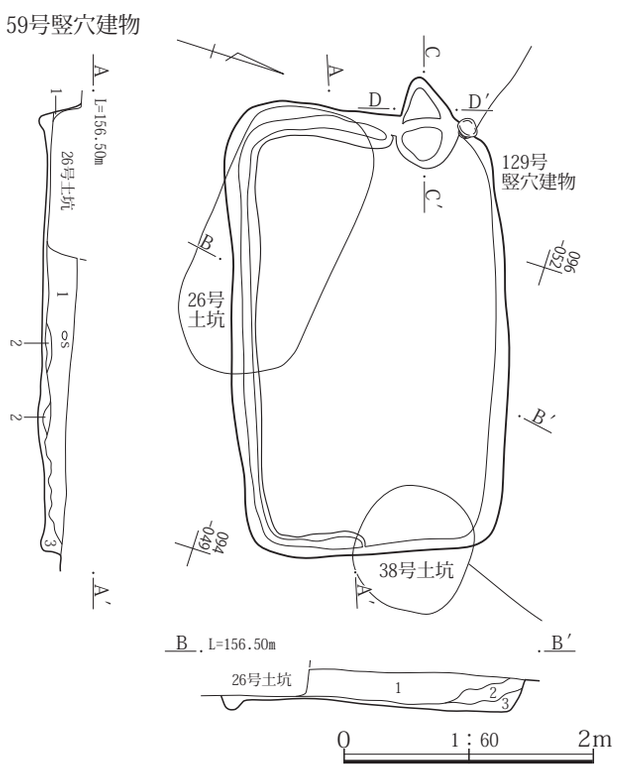
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜などが出土している。出土量は509点ほどと少なくなかったが、図示できた土器は６点と少なく、出土位置はすべて埋没土の上位からであった。なお、５のロクロ整形による土師器甕はロクロの回転方向が左回りであった。

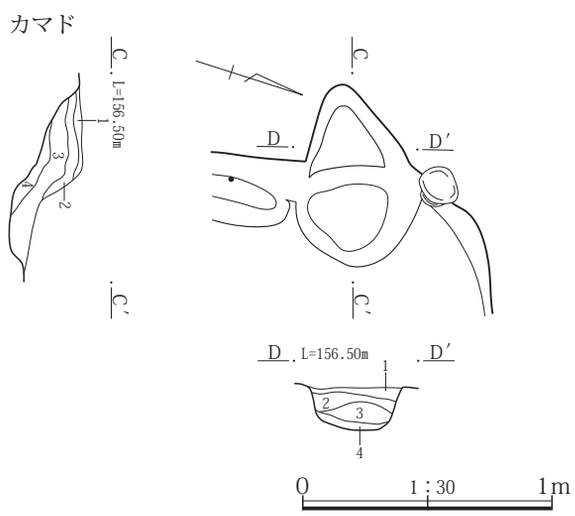
所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に共伴する土器がみられないため判然としないが、重複関係にある26号土坑が９世紀第４四半期に比定できることから、これ以前と考えられる。

60号竪穴建物

位置　１区調査区の東北部、Ｘ＝37093～37099、Ｙ＝-85053～-85058に位置する。中央部を重複関係にある51号竪穴建物によって欠く。

重複関係　51号竪穴建物、129号竪穴建物、152号ピットと重複関係にある。新旧関係は51号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、129号竪穴建物、152号ピットより新





59号竪穴建物　カマド

1　灰褐 7.5YR4/2　As-C、不均等にやや大粒の焼土、泥流土小ブロックを少量含み、しまりが強い。

2　暗赤褐 2.5Y3/3　泥流土をやや多くAs-YPとみられる大粒パミスを含み、しまりが強い微粘性土。

3　暗褐 10YR3/3　黒色灰を含み、細粒の微粘性土でややしまりが強いサラサラした感触。

4　灰褐 7.5YR4/2　黒色灰、焼土等雑多な含有物主体、ややしまりがある。

59号竪穴建物

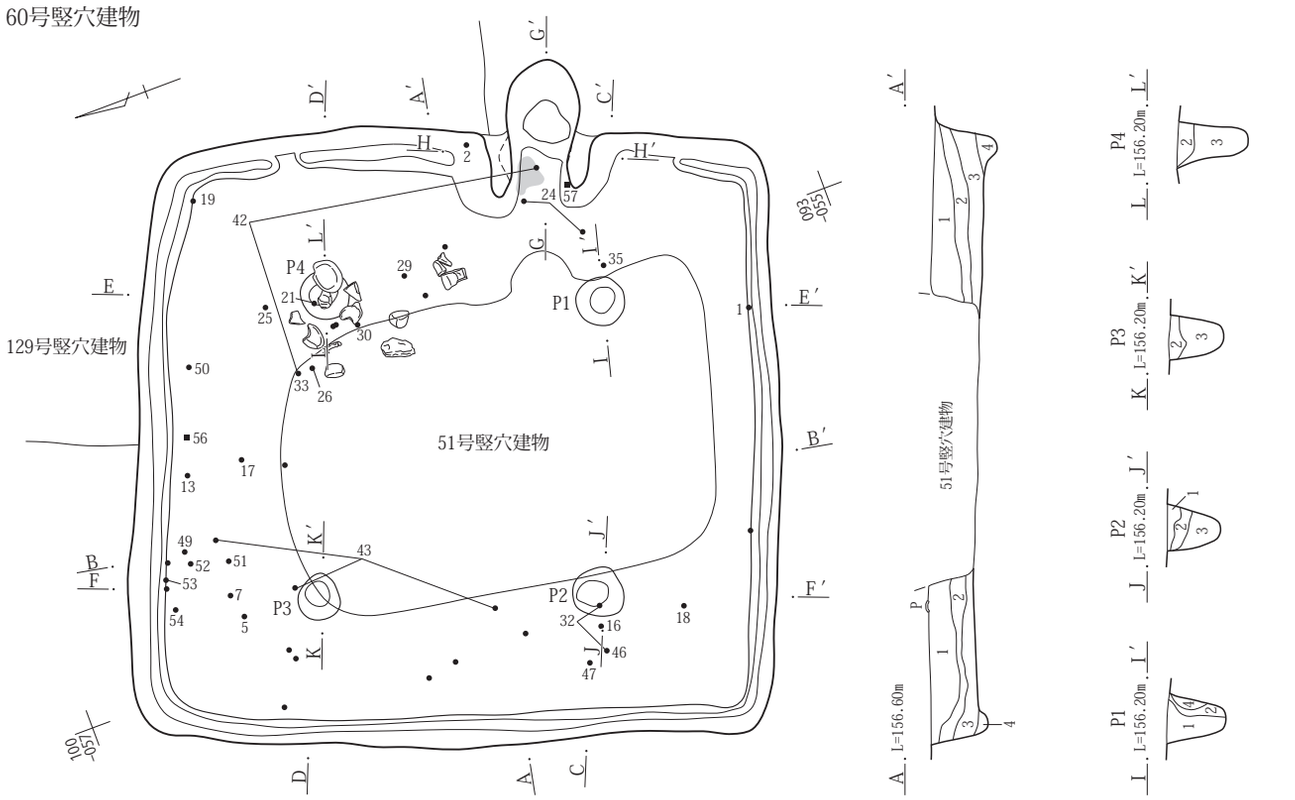
1　黒褐 10YR3/2　As-Cの混入多い、泥流土粒や炭化物粒をやや多く含み、しまりがやや強い。

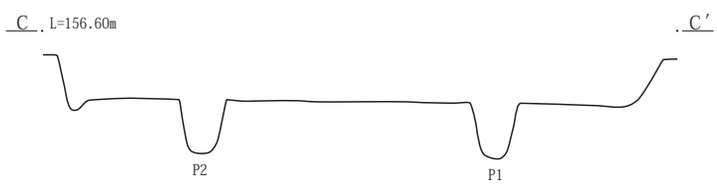
2　灰黄褐 10YR4/2　大粒の泥流土粒を多く含む微粘性土。泥流土は灰色味の強いものと、黄色味の強いものが混土。

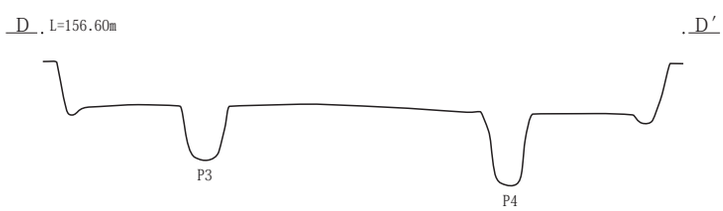
3　黒褐 10YR2/2　泥流土粒、炭化物粒を不均等に少量含み、しまりが強い細粒弱粘性土。

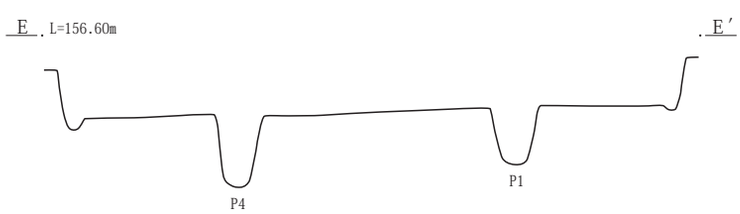
第85図　59号竪穴建物遺構図

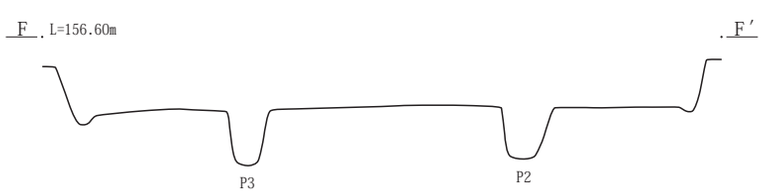
60号竪穴建物











60号竪穴建物

1　暗褐 10YR3/3　炭化物、泥流土、As-C等含有物を不均等に少量含み、しまりが強い。

2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土、As-Cが多い混土、焼土粒、炭化物粒を少量含み、しまりが強い。

3　黒褐 10YR3/2　含有物比較的少なく、ややしまりが弱い弱粘性土。

4　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土と黒褐色土が不均等に混土、壁崩落土を主体とするが、下半では黒褐色土が多い。

60号竪穴建物　Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４

1　暗褐 10YR3/2　炭化物片を２％、赤褐色土ブロックを１％含む。

2　にぶい黄褐 10YR4/3　若干柔らかい。

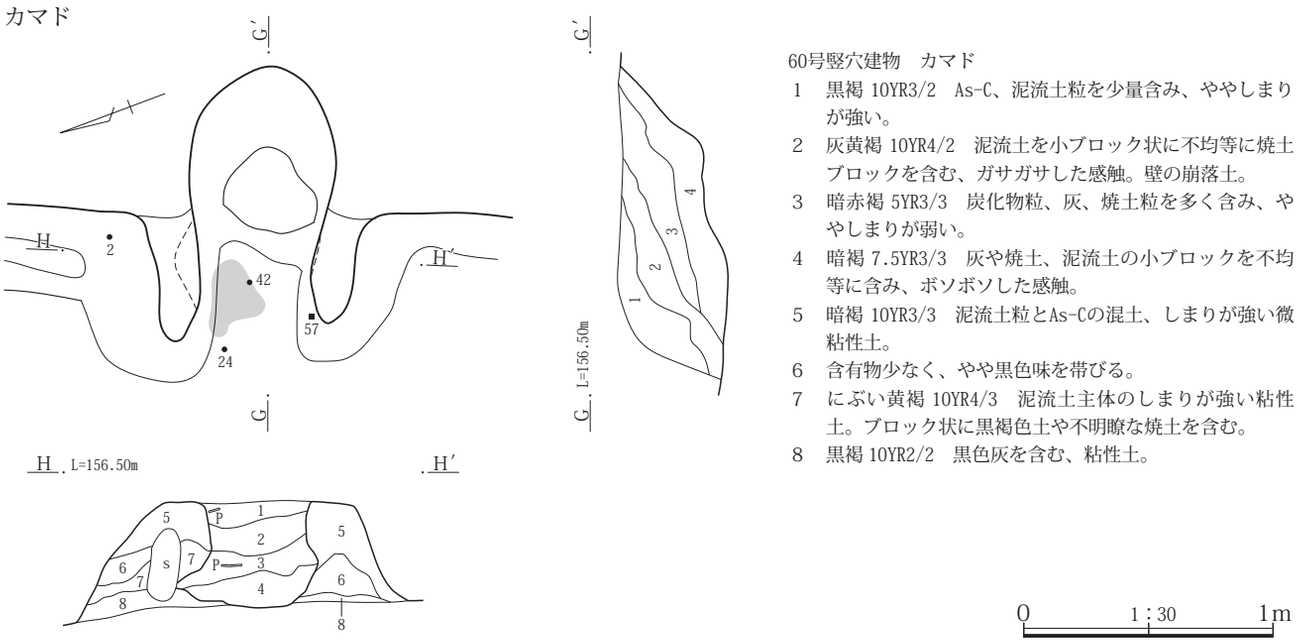
3　暗褐 10YR3/2　にぶい黄褐色土ブロックを５％含む。人為的な埋め戻し土か。

4　暗褐 10YR3/2　しまりがある。

0　1：60　2m

第86図　60号竪穴建物遺構図（１）

カマド



60号竪穴建物　カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を少量含み、ややしまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土を小ブロック状に不均等に焼土ブロックを含む、ガサガサした感触。壁の崩落土。
3　暗赤褐 5YR3/3　炭化物粒、灰、焼土粒を多く含み、ややしまりが弱い。
4　暗褐 7.5YR3/3　灰や焼土、泥流土の小ブロックを不均等に含み、ボソボソした感触。
5　暗褐 10YR3/3　泥流土粒とAs-Cの混土、しまりが強い微粘性土。
6　含有物少なく、やや黒色味を帯びる。
7　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体のしまりが強い粘性土。ブロック状に黒褐色土や不明瞭な焼土を含む。
8　黒褐 10YR2/2　黒色灰を含む、粘性土。

第87図　60号竪穴建物遺構図（２）

しい。

形状　南北にやや長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は4.96m、南北方向は5.14mを測る。確認面から床面までの壁高は35～41㎝を測る。

床面積　19.84㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－111°－Ｅを指す。

埋没状態　中央部を欠くため明確ではないが、残存する範囲の土層断面観察では壁際の三角堆積やレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　カマドを除き、ほぼ全周の壁際下で検出されている。規模は幅が15～20㎝、深さ３～10㎝を測る。

柱穴　Ｐ１～Ｐ４の４本が検出されている。位置は各角を結ぶ対角線上で、壁から0.8m～1.0mでやや西辺寄りである。各柱穴の形状と規模、柱穴間距離は以下のとおりである。柱穴Ｐ１：円形、径38×37㎝、深さ45㎝、柱穴Ｐ２：楕円形、径42×39㎝、深さ40㎝、柱穴Ｐ３：楕円形、径36×33㎝、深さ44㎝、柱穴Ｐ４：円形、径41×38㎝、深さ53㎝、柱穴Ｐ１～Ｐ２間が2.37m、柱穴Ｐ２～Ｐ３間が2.19m、柱穴Ｐ３～Ｐ４間が2.40m、柱穴Ｐ４～Ｐ１間が2.25mを測る。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

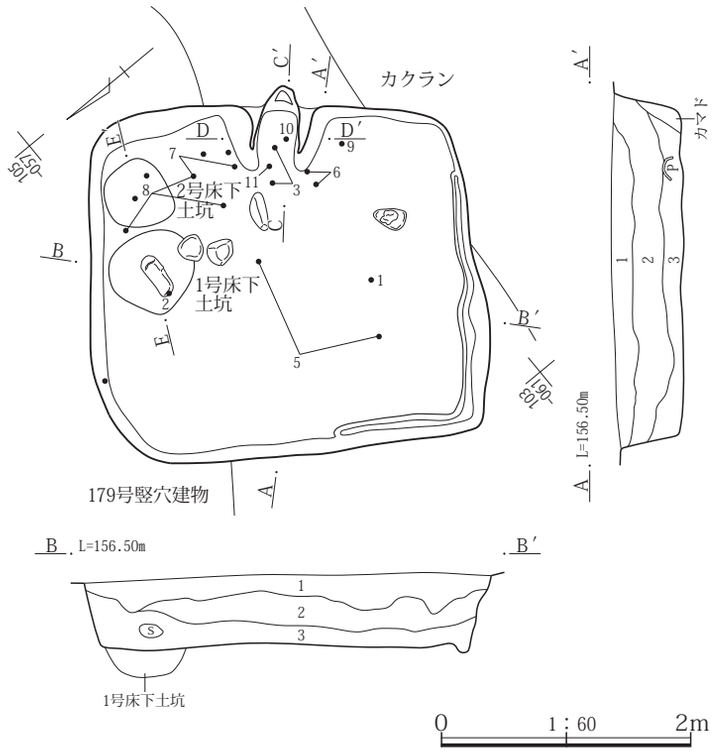
火処　東壁の中程よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.30m、幅が1.25m、燃焼部幅0.35mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部との間に10㎝ほどの段が設けられていた。燃焼部火床面は左寄りが焼土化していた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・盤・平瓶・短頸壺・長頸壺・壺・甕、灰釉陶器、鉄製品刀子、流動滓などが出土している。このうち、１の土師器杯、18・21の須恵器杯、25・26の須恵器高盤、29の須恵器高杯、30の須恵器平瓶、32～34の須恵器短頸壺蓋と身、43～45の土師器甕が床面から、24の須恵器有台付盤がカマド燃焼部から、２の土師器杯がカマド左袖からの出土である。

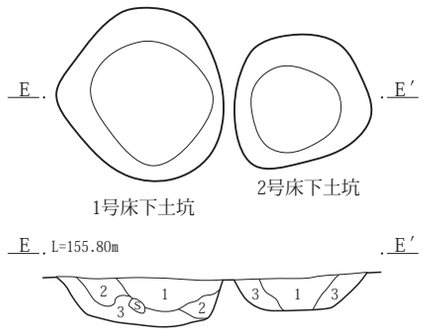
なお、51～54の須恵器杯は北西部の確認面付近からまとまって出土している。この４点は９世紀前半の年代観が与えられることから、出土地点に土坑などの別な遺構が存在した可能性がある。この他、北東部の柱穴Ｐ４周辺に礫や土器がまとまって出土しているが、床面よりやや高い位置であることから埋没過程のなかで廃棄されたものとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床から出土した土師器甕は頸部下まで縦方向のヘラ削りが施されていることか

61号竪穴建物



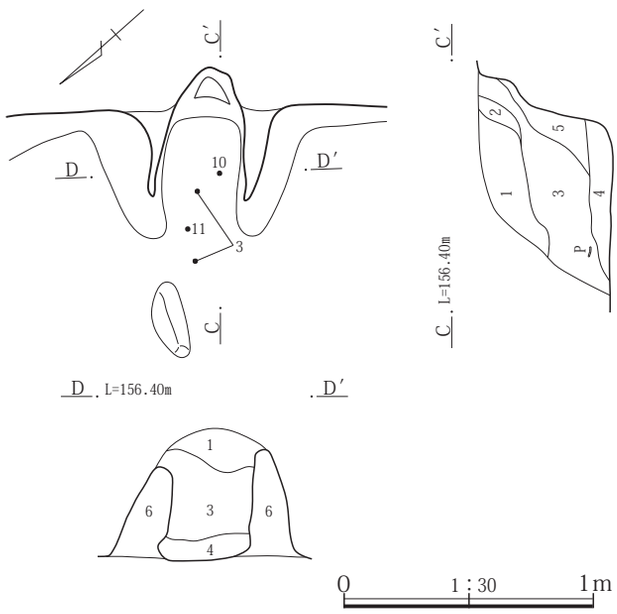
１・２号床下土坑



61号竪穴建物
1　黒褐 2.5Y3/2　As-C、泥流土粒を多く含み、しまりが強い。
2　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土をブロック状に不均等に多量に含み、しまりが強い。人為的埋め戻し土。
3　暗褐 10YR3/2　黒色味強い細粒弱粘性土が基質、、泥流土や炭化物粒、焼土粒を不均等に含む。

61号竪穴建物　１号・２号床下土坑
1　暗褐 10YR2/3　φ２～20㎜のにぶい黄褐色土ブロックを10％含む。
2　暗褐 10YR2/3　にぶい黄褐色土ブロックを７％含む。
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3　暗褐色土を10％含む。

カマド



61号竪穴建物　カマド
1　暗赤褐 2.5Y3/3　泥流土小ブロックの混入やや多く、As-Cは散見する程度、しまりやや強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/4　泥流土主体に黒色土が小ブロック状に混じり、しまりが強い。
3　黒褐 10YR3/2　泥流土を少量、不均等に含む以外に含有物の少ない、細粒土。
4　黒褐 10YR2/2　細粒土。灰を若干含み、ややしまりが弱い。
5　にぶい黄褐 10YR4/5　ほぼ泥流土主体。
6　暗褐 10YR3/4　黒褐色土が基質、不揃いの泥流土ブロックが不均等に含む。

第88図　61号竪穴建物遺構図

ら７世紀第３四半期の年代観が与えられるが、同じく床面から出土した須恵器有台杯は口径が大きく７世紀第４四半期の年代観が与えられる。こうした本竪穴建物と確実に共伴する土師器杯・甕や須恵器杯・盤などから７世紀第３四半期に構築され、７世紀代４四半期まで存続していたと判断できる。

61号竪穴建物

位置　１区調査区の北東部、Ｘ＝37102～37105、Ｙ＝-85057～-85061に位置する。南東角の壁上半を撹乱によって欠く。

重複関係　179号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が新しい。

形状　北辺が南辺に対して15㎝ほど長い台形状を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が2.76m、南北方向が3.18mを測る。確認面から床面までの壁高は46～53㎝を測る。

床面積　6.66㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－137°－Ｅ

埋没状態　土層断面の観察では土砂が主に東西、北側から流れ込んだとみられる。流れ込みの状態はレンズ状に近いが、地形は北への傾斜であり、不自然な流入であることから人為的に埋め戻しが行われたと想定される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は検出できなかったが、北東部で床下土坑２基を検出している。１号床下土坑は楕円形を呈し、規模は径0.70×0.65m、深さ0.20m、２号床下土坑は隅丸台形状を呈し、規模は径0.54×0.51m、深さ0.13mであった。

壁溝　西辺の南半から南辺の東南角手前までの壁下で検出している。規模は幅が15㎝前後、深さ３～６㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁のほぼ中央に構築されている。残存状態は両袖が比較的良好な状態であったが、燃焼部から煙道の天井は壊され痕跡もみられなかった。規模は全長0.70m、幅0.87m、燃焼部幅0.30mを測る。袖の構築には他の竪穴建物のように礫を使用せず粘土だけで構築されていた。なお、焚口に使用されたとみられる長さ30㎝ほどの棒状礫が左袖前の床面に放置された状態で出土していた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・長頸壺・甕、灰釉陶器などが出土している。このうち、２の須恵器杯または盤蓋、６の土師器小型甕、７～９の土師器甕が床面から、３の須恵器椀、10の土師器甕、11の須恵器甕がカマドからの出土である。なお、１の土師器杯は床面より８㎝上からの出土、12・13の緑釉陶器椀は後に混入したものである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器甕などから７世紀第３四半期から第４四半期に比定できる。

62号竪穴建物

位置　１区調査区東部、Ｘ＝37093～37097、Ｙ＝-85045～-85048に位置する。重複関係にある３号溝によって東南部側の上位を欠く。

重複関係　90号竪穴建物、27号土坑、３号溝と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが90号竪穴建物より新しく、27号土坑、３号溝より古い。

形状　３号溝によって南東部を欠くため不明な点があるが、長方形を呈すると想定される。

規模　長軸方向の南北方向がが3.17m、短軸方向の東西方向が2.27mを測る。確認面から床面までの壁高は８～25㎝を測る。

床面積　推定で5.83㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－９°－Ｅ

埋没状態　確認面から床面までが浅いため明確ではないが、土層断面の観察では人為的埋め戻しが行われた可能性が想定される。

床面　地山をそのまま踏み固めている。南部に凹凸が見られるため竪穴建物ではない可能性も窺える 。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

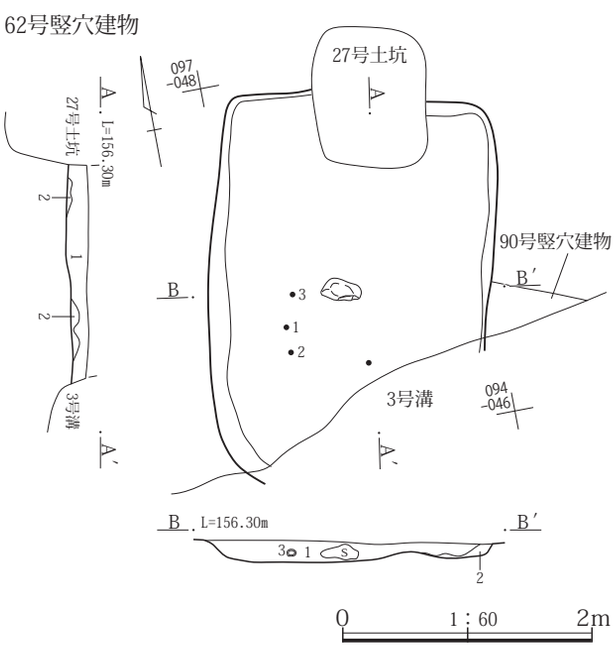
貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　欠損部があるため断定はできないが、構築されていないとみられる。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕などが出土している。出土量は図示３点、未掲載187点と少ない。図示した３点は１・２の土師器杯が床面より６㎝と８㎝上から、３の高杯が床面からの出土である。

62号竪穴建物



62号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を不均等に少量含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　１と不揃いの泥流土小ブロックの混土、しまりがある。不整な堆積で人為的埋め戻し土の可能性。

第89図　62号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土師器杯から６世紀後半に比定できる。

63号竪穴建物

位置　１区調査区西部、Ｘ＝37088～37095、Ｙ＝-85078～-85084に位置する。

重複関係　45号竪穴建物、64号竪穴建物、５号溝と重複関係にある。新旧関係は45号竪穴建物、５号溝より本竪穴建物のほうが古く、64号竪穴建物より新しい。

形状　各辺の長さが異なるが、ほぼ方形を呈す。

規模　主軸方向の南北方向が4.98m、東西方向が4.96mを測る。確認面から床面までの壁高は38～51㎝を測る。

床面積　20.44㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－33°－Ｗ

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込み、壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積であるが、埋没土中には泥流土ブロックが含まれることから人為的埋め戻しが行われた可能性が想定される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　北壁下のカマド西側から西壁下、南壁下、東壁下の貯蔵穴の南側まで連続した状態で検出されている。規模は幅が15㎝前後、深さが６～13㎝を測る。

柱穴　主柱穴４本と南壁直下中程で出入り用の梯子を据え付けた柱穴１本を検出している。主柱穴４本は柱穴Ｐ２とＰ４が対角線上に配置されているのに対して、柱穴Ｐ１とＰ３は北東角から南へ1.0m、南西角から北へ0.5mの位置を結んだ線上に位置する。なお、各柱穴の形状、規模、柱穴間距離は以下のとおりである。

柱穴Ｐ１は形状が円形、規模が径42×21㎝、深さ21㎝、柱穴Ｐ２は形状が楕円形、径25×18㎝、深さ20㎝、柱穴Ｐ３は形状が楕円形、径36×25㎝、深さ58㎝、柱穴Ｐ４は形状が楕円形、径25×20㎝、深さ54㎝、柱穴Ｐ５は形状が隅丸方形、径42×39㎝、深さ26㎝、柱穴間距離はＰ１～Ｐ２が1.60m、Ｐ２～Ｐ３が2.30m、柱穴Ｐ３～Ｐ４が2.25m、Ｐ４～Ｐ１が2.55mを測る。

貯蔵穴　北西角から検出されている。貯蔵穴の床側の周囲には17号竪穴建物と同様に幅30～55㎝、高さ４～15㎝ほどの土塁状の高まりが設けられていた。貯蔵穴自体は楕円形を呈し、規模は径0.85×0.70m、深さ0.48mを測る。内部からは６の土師器杯が出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中央よりやや東寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は不良な状態ではあるが壁寄りの一部が残存していた。規模は全長0.85m、幅1.30m、燃焼部幅0.45mを測る。燃焼部と煙道部の間には20㎝ほどの段が設けられていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・甕・羽釜、灰釉陶器、鉄製品鉸具、流動滓、石製品紡輪などが出土している。このうち、３の土師器杯が床面から、13の土師器甕がカマドから、６の土師器杯が貯蔵穴から出土している。なお、この他１・４・５の土師器杯、12・14の土師器甕が床面より10㎝前後上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマド、貯蔵穴から出土した土師器杯や甕から７世紀前半に比定できる。

64号竪穴建物

位置　１区調査区西部、Ｘ＝37088～37095、Ｙ＝-85078～-85084に位置する。

重複関係　43号竪穴建物、63号竪穴建物、５号溝、９号溝、84号ピットと重複関係にある。新旧関係は45号竪穴建物、63号竪穴建物、５号溝、９号溝、84号ピットより本竪穴建物のほうが古い。

形状　隅丸方形を呈す。

規模　南北方向は4.57m、東西方向は4.63mを測る。確認面から床面までの壁高は24～35㎝を測る。

床面積　推定で18.09㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－19°－Ｅ

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込み、壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と判断される。

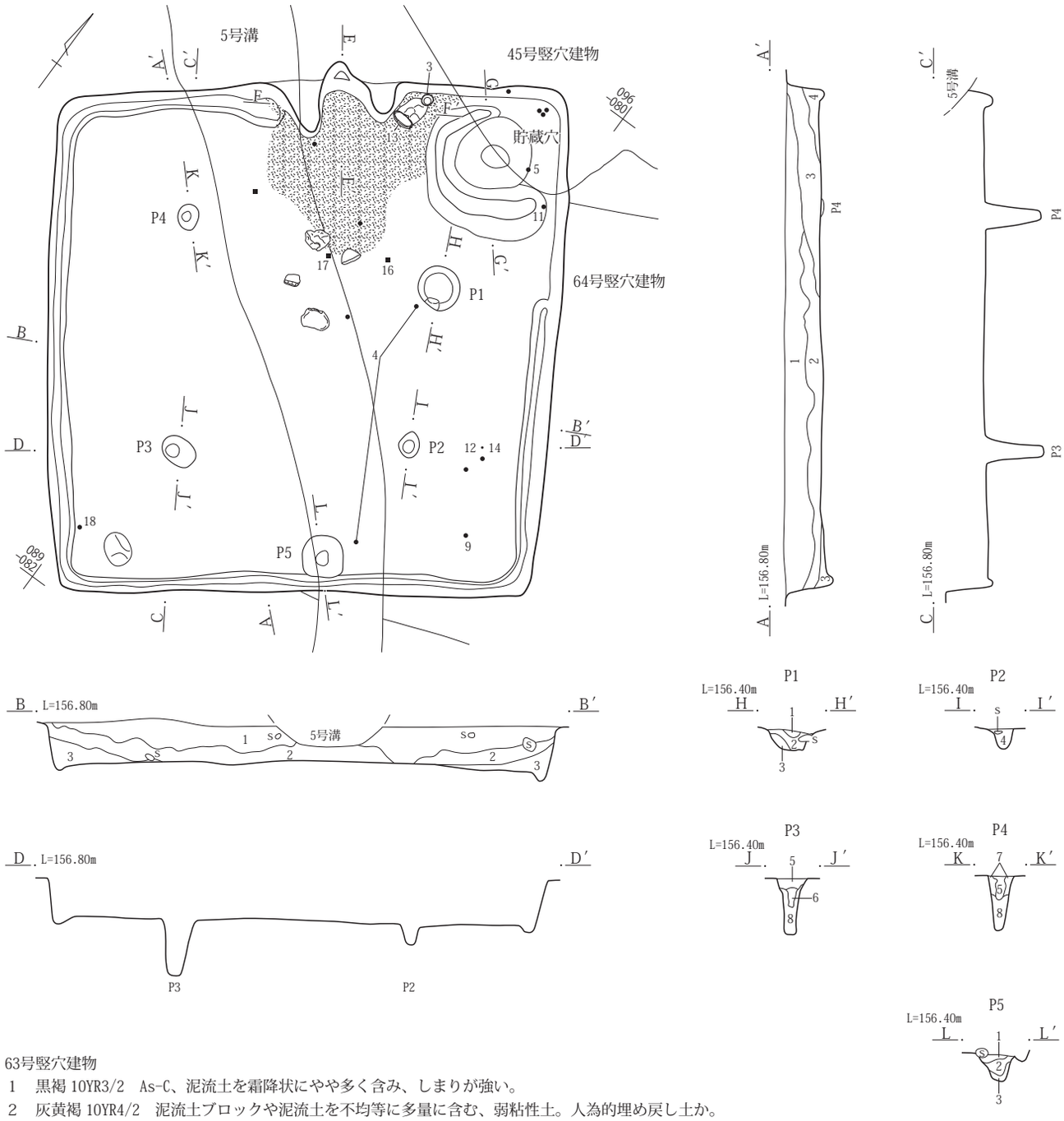
床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　東壁下の中程から北壁にかけて検出されている。規模は幅10㎝前後、深さ２～４㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

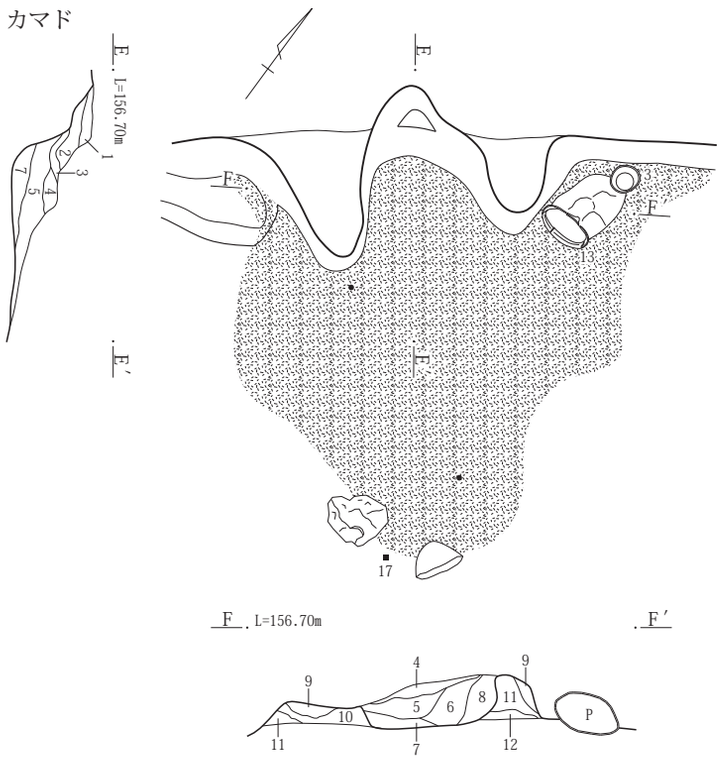
63号竪穴建物

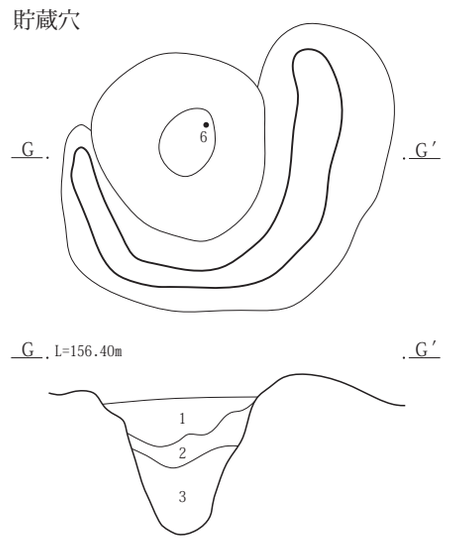


63号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土を霜降状にやや多く含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土ブロックや泥流土を不均等に多量に含む、弱粘性土。人為的埋め戻し土か。
3　黒褐10YR3/2　細粒土中に不明瞭な泥流土小ブロックの混土、ややしまりが強い。
4　黒褐 10YR2/2　含有物少ない細粒粘性土。
63号竪穴建物　柱穴Ｐ１～４
1　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを40％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物片を１％、褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを20％含む。
4　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを30％、炭化物片を２％含み、固くしまりがある。
5　黒褐 10YR2/3　炭化物片を１％、褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
6　暗褐 10YR3/4　黄褐色ブロックを10％含み、若干柔らかい。
7　にぶい黄褐 10YR4/3　２をブロック状に10％含み、柔らかい。
8　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを含み、柔らかい。
63号竪穴建物　柱穴Ｐ５
1　黒褐 10YR2/2　固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを10％含み、固くしまりがある。
3　黒褐 10YR2/2　にぶい黄褐色土ブロックを20％含み、若干柔らかい。

0　1：60　2m

第90図　63号竪穴建物遺構図（１）





63号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを２％、炭化物片を２％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを40％含み、柔らかい。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを10％含み、柔らかくやや粘性がある。

0　1：30　1m

63号竪穴建物　カマド
1　暗赤褐 5YR3/3　不明瞭な焼土を不均等に含み、しまりが強い。
2　灰褐 7.5YR4/2　炭化物粒を含む、ややボソボソした感触の細粒土。
3　灰褐 5YR4/2　焼土化、被熱した泥流土であまり明瞭な赤色ではない、微粘性土。
4　暗褐 2.5Y3/3　泥流土粒を不均等に含み、ややしまりが強い。
5　暗赤褐 5YR3/3　泥流土粒、焼土、炭化物粒等を多く含み、しまりが強い弱粘性土。
6　暗褐 7.5YR3/3　泥流土が混入、しまりさらに強い。
7　黒褐 10YR3/2　細粒粘性土。焼土粒、灰を少量含み、しまりが有りややサラサラした感触。
8　黒褐 10YR3/2　細粒粘性土、下半に灰の薄層が存在、上位では泥流土を多く含む。
9　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロックやAs-Cを不均等に含み、ややしまりが強い。西袖上には灰や炭化物粒を多く含む。
10　黒褐 10YR3/2　不明瞭な泥流土小ブロックの混土、しまりが強い細粒土。
11　灰黄褐 10YR4/2　９と泥流土のブロック状混土。不明瞭な焼土ブロックを含む。
12　暗赤褐 5YR3/3　黒褐色土中に焼土ブロックの混土、灰や炭化物も少量含み、ややしまりが弱い。

第91図　63号竪穴建物遺構図（２）

貯蔵穴　南東角で検出されている。貯蔵穴周囲は北側0.50m、西側0.30mの幅で径１～５㎝大の円礫が敷き詰められていた。貯蔵穴自体の形状は楕円形で、規模は径0.95×0.64m、深さ0.29mを測る。内部からは１の土師器有孔鉢が出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　検出されなかった。出土遺物から見ると炉が設置されていたと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。このうち、１の土師器有孔鉢が貯蔵穴から、３の土師器壺、４の壺を再利用した器、６の土師器甕、７・８の土師器台付甕が床面からの出土である。４の台付壺は胴部下位の輪積み痕より上部が破損したのか、粘土紐の接合部を口縁部状に平滑にして再利用したとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や貯蔵穴から出土した土師器有孔鉢や台付甕から４世紀後半から５世紀初頭に比定できる。

65号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37104～37110、Ｙ＝-85051～-85057に位置する。重複関係にある27号竪穴建物によって東辺側の上位を欠く。

重複関係　27号竪穴建物、128号竪穴建物、179号竪穴建物、187号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は27号竪穴建物より古く、128号竪穴建物、179号竪穴建物・187号竪穴建物より新しい。

形状　南辺は北片に比べてやや短く、南辺側の両角はやや丸みをもつが、ほぼ長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は5.00m、南北方向は4.72mを測る。確認面から床面までの壁高は42～64㎝を測る。

床面積　17.07㎡を測る。

主軸方位　N－64°－Eを指す。

埋没状態　土層断面の観察では、各断面によって埋没状態がやや異なるが、それぞれレンズ状の堆積であることから自然埋没と判断される。

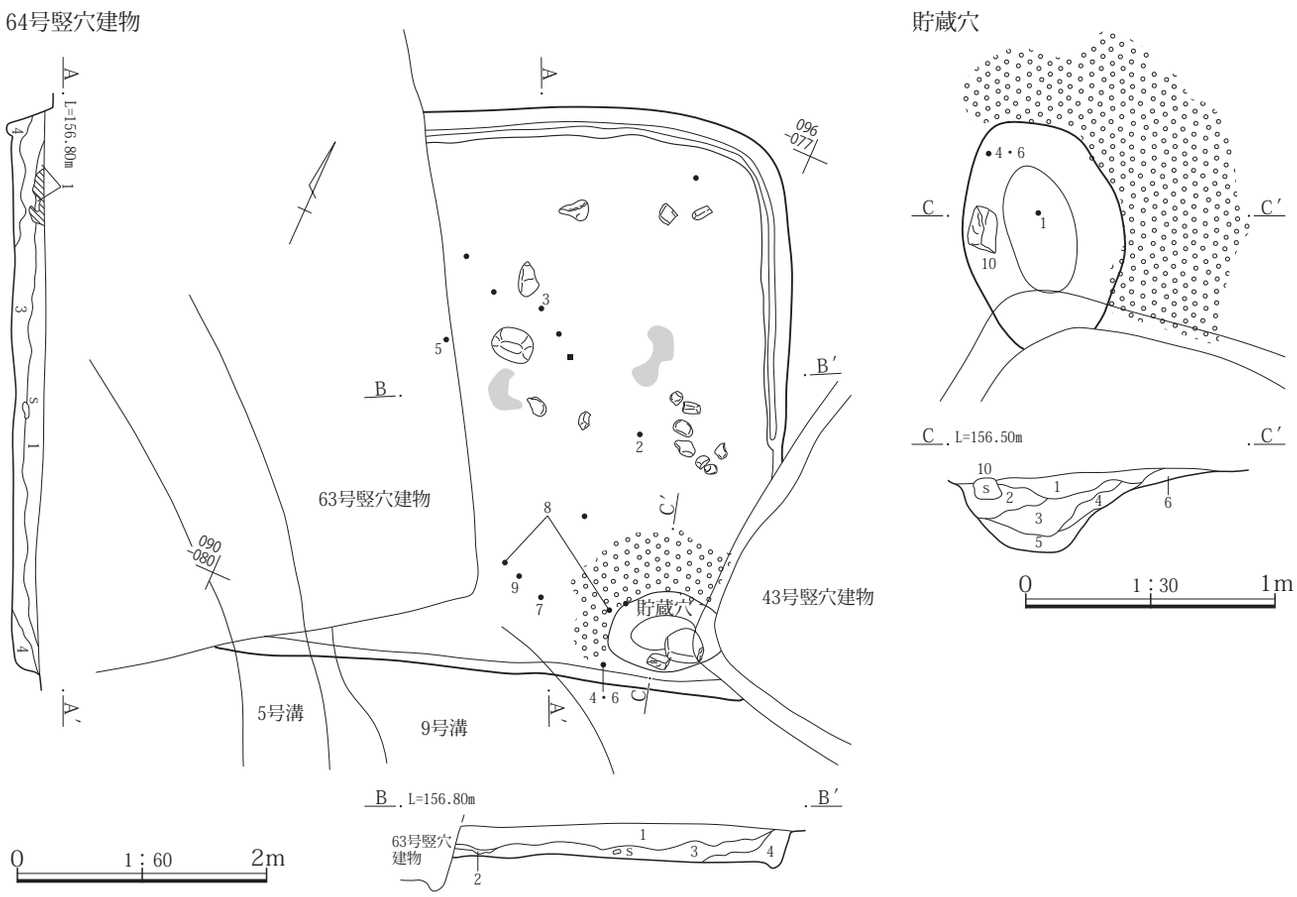
床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　東壁のカマド部分と南東角の両側約1.0m部分では検出されなかったが、その他の壁下では検出された。規模は幅12～28㎝、深さ４～10㎝を測る。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　南東角で検出された。形状は楕円形を呈し、規模は径0.75m×0.64m、深さ0.59mを測る。貯蔵穴中央から20の土師器甕が出土している。この甕は正位の状態であったが、底面より15㎝ほど上位であることから埋没過程の中で周囲に置かれていたものが落ちたとみられる。20の土師器甕と東壁の間からは19の土師器甕が破損した状態で出土している。この甕も床面とほぼ同じ高さからの出土である。



64号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土と泥流土の混土、しまりが強い。
2　黒 10YR2/1　３に類似、炭化物を多く含む。
3　黒褐 10YR2/2　細粒微粘性土、As-C、泥流土粒を少量、不均等に含み、しまりが強い。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックを多く含む、弱粘性土。

64号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗灰黄2.5Y 4/2　泥流土小ブロックや大粒パミスをやや多く含み、しまりが強い弱粘性土。上面に踏み固めがあるとみられる。
2　黒褐10YR3/2　泥流土粒・As-Cを少量含む、微粘性土。
3　灰黄褐10YR4/2　不揃いの泥流土ブロックをやや多く含む、弱粘性土。上位ほど泥流土が多い。
4　灰黄褐10YR4/2　３に類似、泥流土の混入がさらに多い。
5　にぶい黄褐10YR4/3　泥流土ブロックと黒褐色土の混土。崩落した礫を含んでいる。
6　黒褐 10YR2/3　貯蔵穴の緩傾斜面に２に近い黒色土を貼り付け、その上に小礫を敷いている。

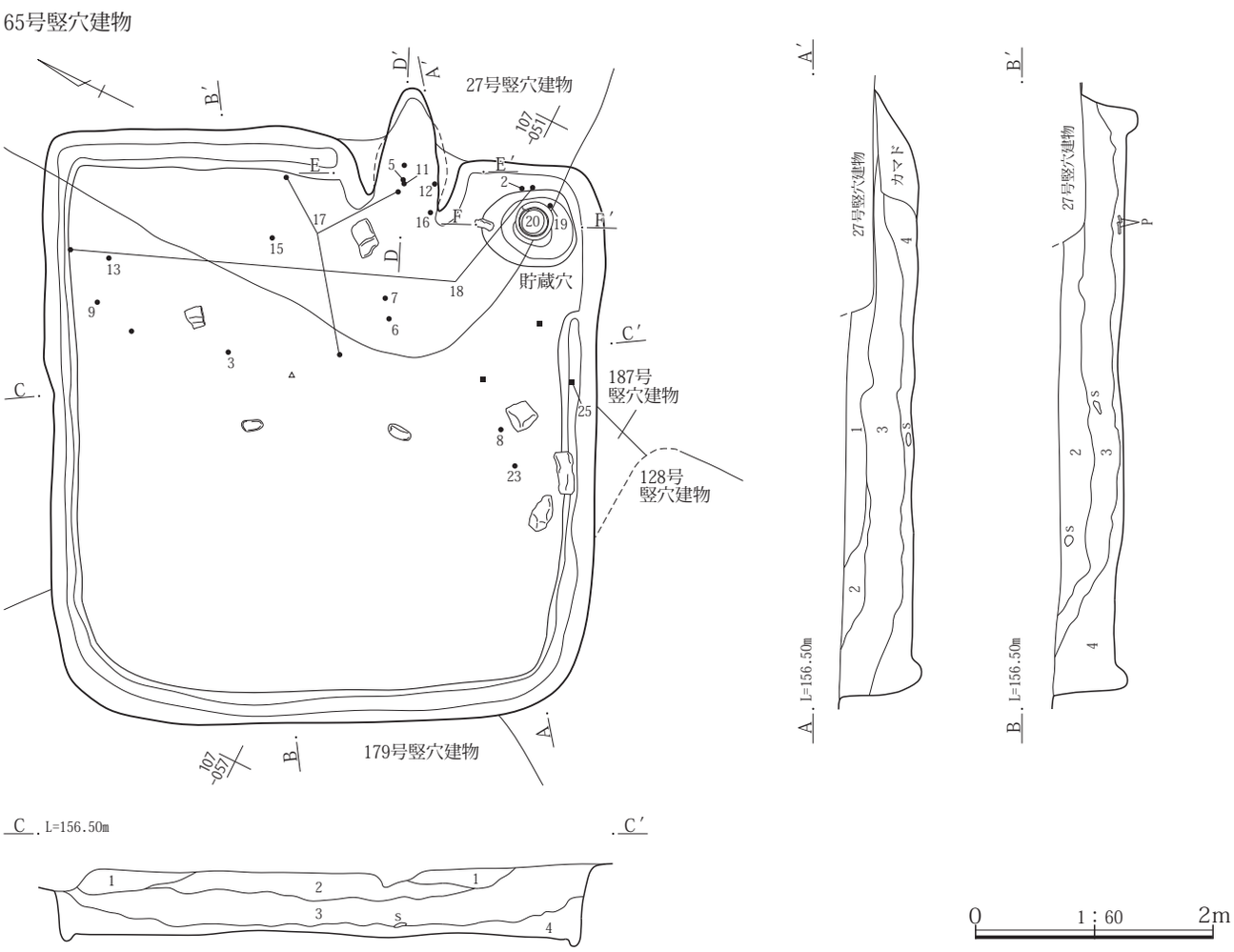
第92図　64号竪穴建物遺構図

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁中央よりやや南寄りに構築されている。残存状態は両袖が良好な状態であったが、燃焼部から煙道の天井は壊されて痕跡も残存していない状態であった。規模は全長1.15m、幅1.10m、燃焼部幅0.59m、煙道は壁外に0.5mほど延びる。燃焼部から煙道にかけては多くの竪穴建物が燃焼部と煙道の境に明確な段を構築されているのに対して本竪穴建物では緩い傾斜のまま移行し、壁外で垂直に立ち上がっている。

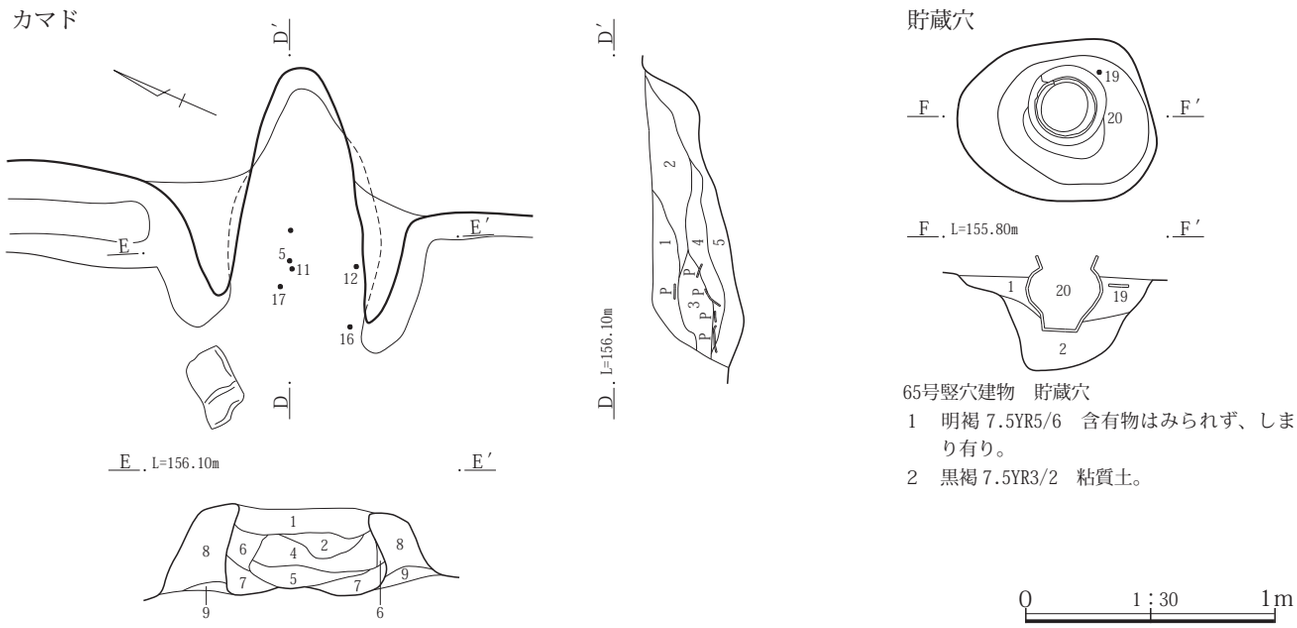
出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、流動滓などが出土している。このうち、２・３の土師器杯、18の土師器甕、６・７・９の須恵器杯が床面から、５の須恵器杯蓋、11・12の有台杯、15～17の土師器甕がカマドから、19・20の土師器甕が貯蔵穴からの出土である。なお､21～24の黒色土器皿、須恵器皿・椀、土師器甕は確認面に近い位置からの出土で、形態的には９世紀後半の年代観が与えられることから後の混入と判断できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器杯・甕や須恵器杯・有台杯をみると３の土師器杯や６の須恵器杯、17の土師器甕のような７世紀第４四半期の年代観を与えられるものと、16の土師器甕のような８世紀第１四半期の年代観を与えられるものが存在する。こうしたことから、７世紀第４四半期に構築され、８世紀第１四半期まで存続していたと判断できる。



65号竪穴建物
1　黒褐 7.5YR3/2　土質は２に近いが、泥流土粒が大粒で焼土粒を含み、しまりが強くボソボソした感触。
2　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状に含み、しまりが強い。
3　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土小ブロック、泥流土粒を不均等に含み、ややしまりが強い。
4　黒褐 10YR3/2　細粒弱粘性土。泥流土粒を不均等に含む。

第93図　65号竪穴建物遺構図（１）



65号竪穴建物　貯蔵穴
1　明褐 7.5YR5/6　含有物はみられず、しまり有り。
2　黒褐 7.5YR3/2　粘質土。

65号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土小ブロックを不均等に下半で灰を含み、しまりやや強くややサラサラした感触。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土粒が基質、黒褐色土を小ブロック状に含む、ややしまりが弱い。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　２に類似、２より焼土を多く含む。
4　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多く含み、しまりが弱い。
5　黒褐 7.5YR3/2　３に焼土を不均等にやや多く含む。
6　5YR3/2　泥流土主体、被熱赤変土を不均等に含み、ややしまりが強い。
7　黒褐 7.5YR3/2　被熱部分の少ない泥流土。炭化物を少量含む。
8　暗褐 10YR3/4　不揃いな泥流土ブロックを含み、ややしまりが強い。
9　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土と黒褐色土の混土、しまりが強い。

第94図　65号竪穴建物遺構図（２）

66号竪穴建物

位置　１区調査区東北部、Ｘ＝37098～37102、Ｙ＝-85048～-85051に位置する。

重複関係　40号竪穴建物、95号竪穴建物、98号竪穴建物、99号竪穴建物、100号竪穴建物、116号竪穴建物、129号竪穴建物、14号土坑と重複関係にある。新旧関係は40号竪穴建物、14号土坑より古く、他の重複関係にある遺構よりは新しい。

形状　東辺はカマドの両側が直線とはならず、角度を有している五角形状を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は2.97m、南北方向は4.24mを測る。確認面から床面までの壁高は31～50㎝を測る。

床面積　9.77㎡を測る。

主軸方位　東辺、カマドの方向からＮ－118°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　重複関係にある100号竪穴建物、116号竪穴建物などの埋没土と地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

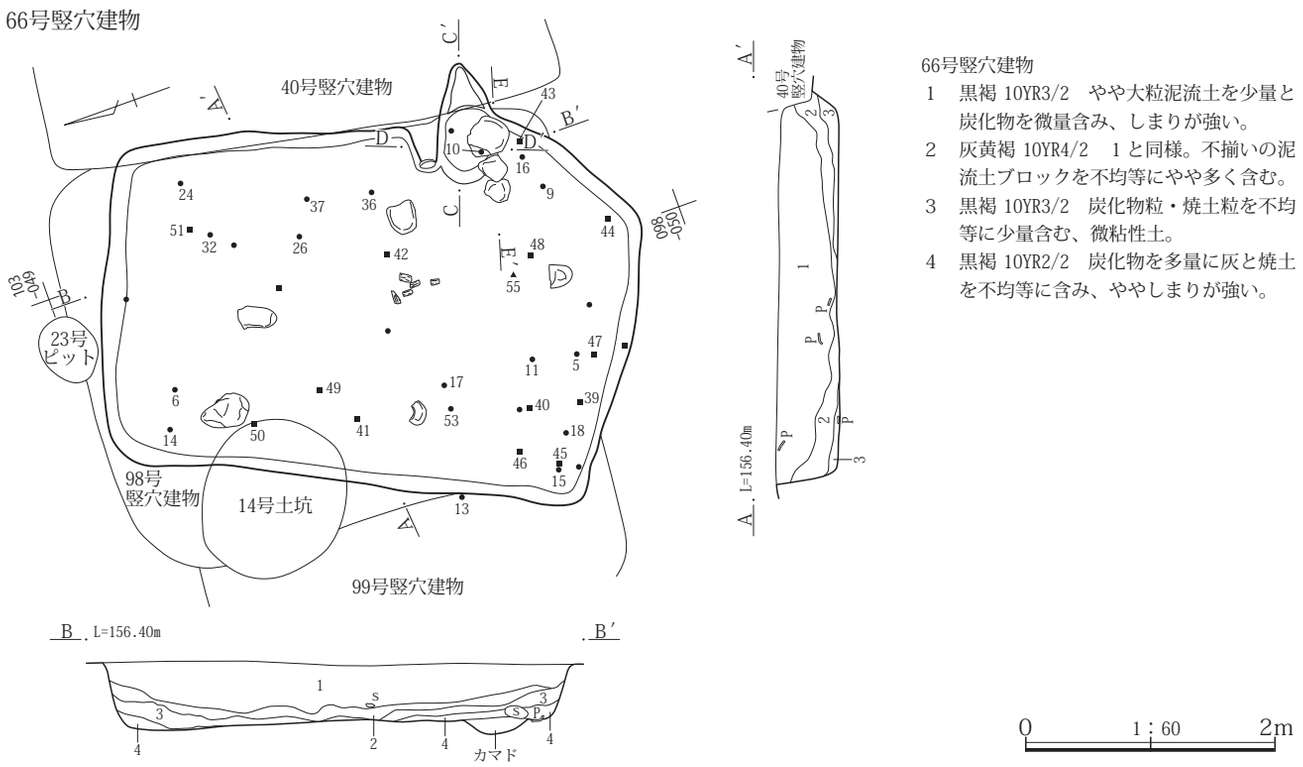
火処　東壁の中程より南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.96m、幅が0.82m、燃焼部幅0.40mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。右袖上部からは径20～30㎝、厚さ15㎝前後の礫が３点残存していたが、これらの礫は構築材として使用されていた可能性が高いが、使用方法については明確ではない。

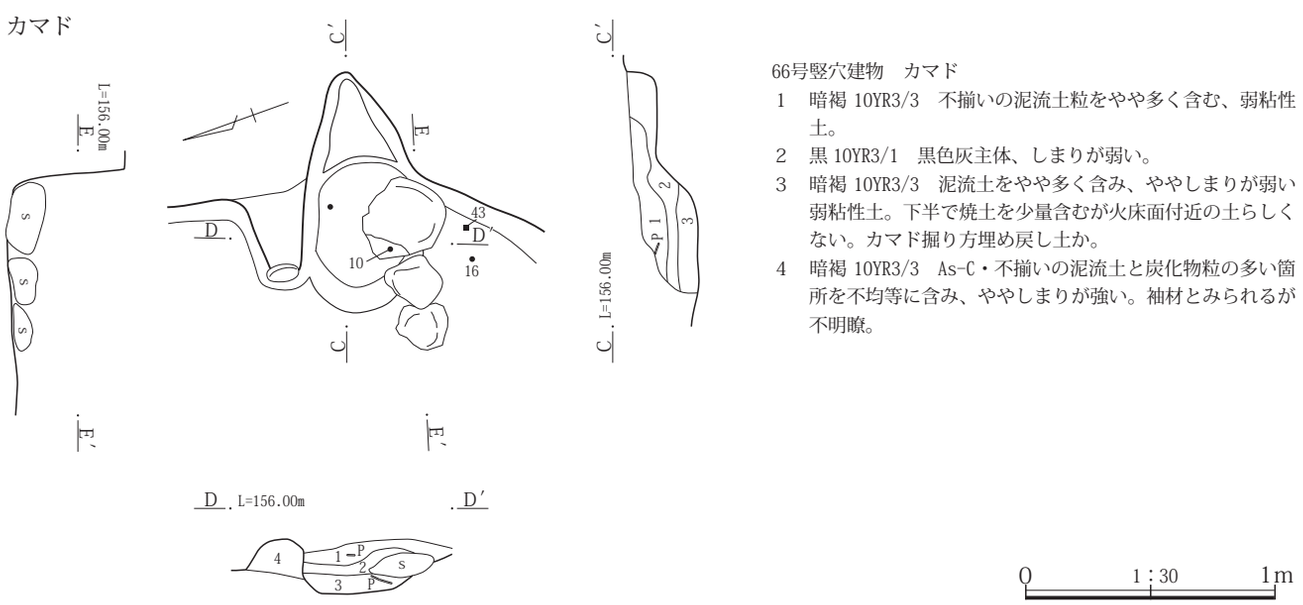
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、鉄製品鏃・刀子・釘・紡錘車・釘、流動滓、

石製品砥石などが出土している。このうち、５の須恵器皿、10・13の須恵器杯、16・17の須恵器椀が床面から、この他12の須恵器杯、14の須恵器椀、26の灰釉陶器小瓶、36の土師器甕(ロクロ土師器)が床面より６～10㎝上からの出土である。なお、鉄製品及び石製品は40・43の鉄製品刀子・44の紡錘車、53の砥石が床面から、42・41の鉄製品刀子、45の紡錘車は床面より９㎝と12㎝、15㎝上からの出土である。

また、２・５の須恵器皿、19～21の須恵器椀の底部には「×」の刻書、30の灰釉陶器長頸瓶の頸部にも「×」の刻書が施されている。なお、灰釉陶器の刻書は焼成前に行われており、窯印とみられ、須恵器皿・椀との関係は想定できない。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器杯・椀及び埋没土ではあるが34・35の土師器甕から９世紀第４四半期～10世紀初頭に比定できる。





第95図　66号竪穴建物遺構図

67号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37101～37105、Ｙ＝-85063～-85068に位置する。重複関係にある58号竪穴建物によって北西部を欠く。

重複関係　56号竪穴建物、58号竪穴建物、68号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが56号竪穴建物、58号竪穴建物より古く、68号竪穴建物より新しい。なお、58号竪穴建物との重複関係は出土遺物からみると本竪穴建物ほうが新しい。

形状　主軸方向の東西方向に長い長方形を呈す。

規模　東西方向が4.53m、南北方向が3.63mを測る。確認面から床面までの壁高は22～39㎝を測る。

床面積　推定で14.00㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－62°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。床下土坑上面も埋め戻した土をそのまま踏み固めた状態である。

掘り方　貼床は検出されなかったが、竪穴中央から床下土坑を１基検出された。この床下土坑は楕円形を呈し、規模は径1.34×1.17m、深さ0.15mと浅いものであった。内部から土器などの出土は確認されていない。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　西壁中程の壁際から20㎝ほど内側で小規模なピット状の掘り込みが検出されている。このピットは楕円形を呈し、規模は径0.48×0.37m、深さ0.17mを測る。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は悪く、焚口と燃焼部の天井や両袖の大部分が壊れている。その中にあって左袖の一部がわずかに残存していた。規模は全長1.24m、幅0.64m、燃焼部幅0.47mを測る。燃焼部の奥側半分は壁外に掘り込まれている。焚口付近の火床面は焼土化していた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。出土量は図示４点、未掲載320点とやや少ない。図示した遺物は床面より20㎝・36㎝上や埋没土からの出土のため本竪穴建物に確実に共伴するか判然としない。しかし、未掲載遺物を含め主体を占める遺物は１～３の須恵器皿や椀と同様な形態である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、主体を占める土器から９世紀第４四半期に比定できる。

68号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37099～37106、Ｙ＝-85063～-85071に位置する。重複関係にある58号竪穴建物、67号竪穴建物によって東側２分の１ほどを欠く。

重複関係　54号竪穴建物、56号竪穴建物、58号竪穴建物、174号竪穴建物、７号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが56号竪穴建物、58号竪穴建物より古く、67号竪穴建物、７号土坑より古い。なお、174号竪穴建物との新旧関係は明確ではないが、出土遺物から本竪穴建物のほうが古い。

形状　主軸方向の東西方向に長い長方形を呈すと見られる。

規模　東西方向が5.58m、南北方向が5.43mを測る。確認面から床面までの壁高は11～42㎝を測る。

床面積　推定で27.06㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－55°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

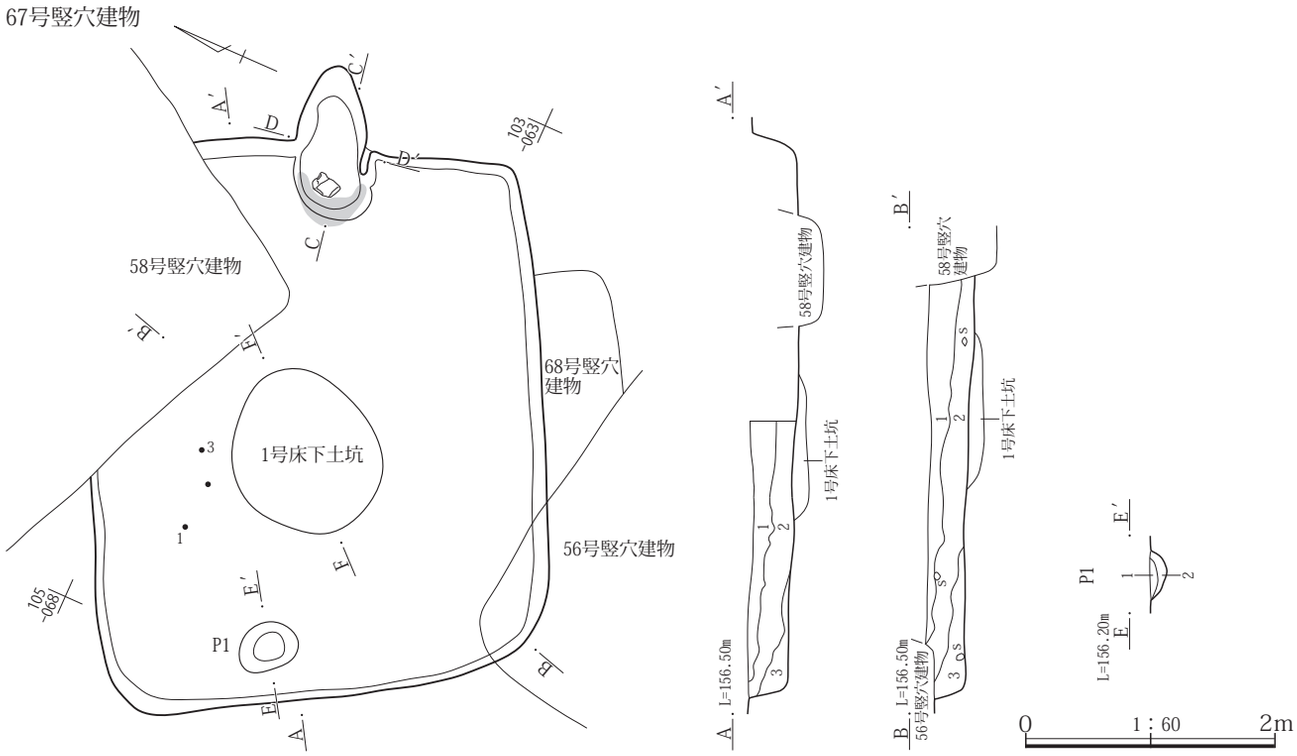
壁溝　残存部分では北壁下を除く、各壁下で検出された。規模は幅20㎝前後、深さ５～15㎝を測る。

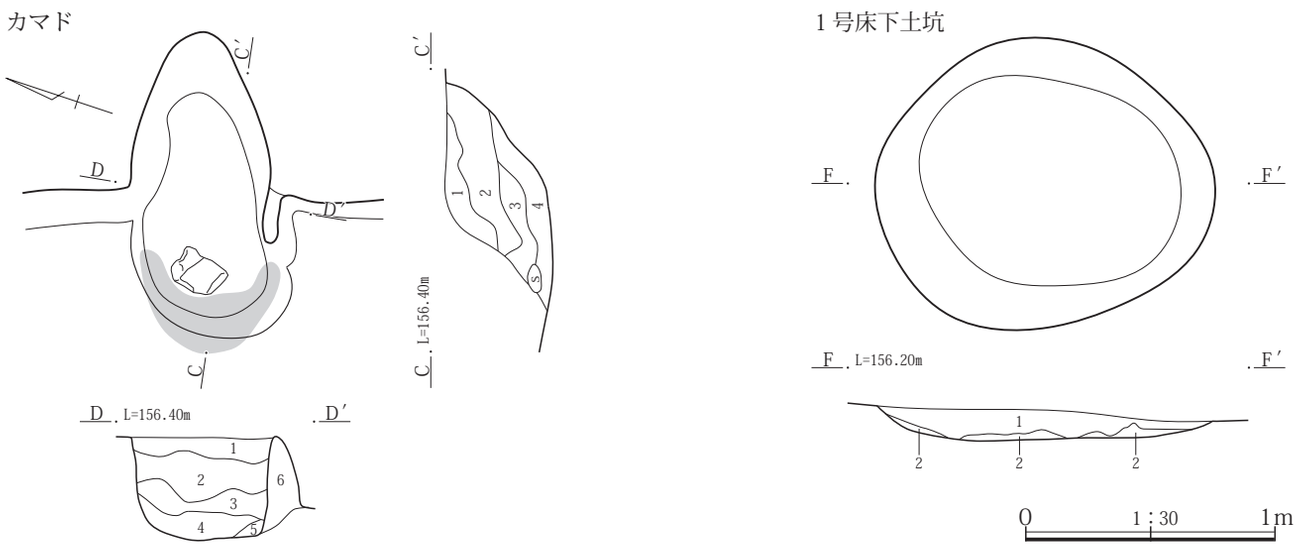
柱穴　残存部分から３本の柱穴が検出された。柱穴Ｐ１とＰ３は竪穴角の対角線上に配置されており、北東部分にももう１本が存在した可能性が窺える。各柱穴の形状と規模、柱穴間距離は次のとおりである。

柱穴Ｐ１は円形で径31×28㎝、深さは68号竪穴建物の床面から24㎝、柱穴Ｐ２は楕円形で径38×32㎝、深さ66㎝、柱穴Ｐ３は楕円形で径48×37㎝、深さ59㎝、柱穴Ｐ１～Ｐ２の距離距離は3.55m、Ｐ２～Ｐ３は3.00mを測る。

貯蔵穴　残存部分では検出されなかった。

その他施設　残存部分では検出されなかった。





67号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cの混入やや多い、しまりが強い土。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロックの混入多い弱粘性土。炭化物粒少量含み、ややしまりが強い。
3　黒褐 10YR2/2　細粒粘性土、泥流土を少量と床面直上に黒色灰、炭化物がやや多く含み、ややしまりが強い。
67号竪穴建物カマド
1　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土粒をやや多く若干の焼土を含み、ややしまりが強い。
2　暗灰黄 2.5Y 4/2　泥流土の多い、ややしまりがある弱粘性土主体。
3　暗褐 10YR3/3　不均等に泥流土を含み、ややしまりが弱い細粒土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰と若干の焼土を含み、ややサラサラした感触の細粒土。
5　灰褐 5YR4/2　泥流土主体、袖崩落土。
6　暗褐10YR3/4　泥流土混じりのややしまりが強い微粘性土。下半ほど泥流土多い。
67号竪穴建物　Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを20％、φ１㎜白色粒を１％、焼土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含む。
67号竪穴建物　１号床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、焼土ブロックを１％含む。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を10％含む。

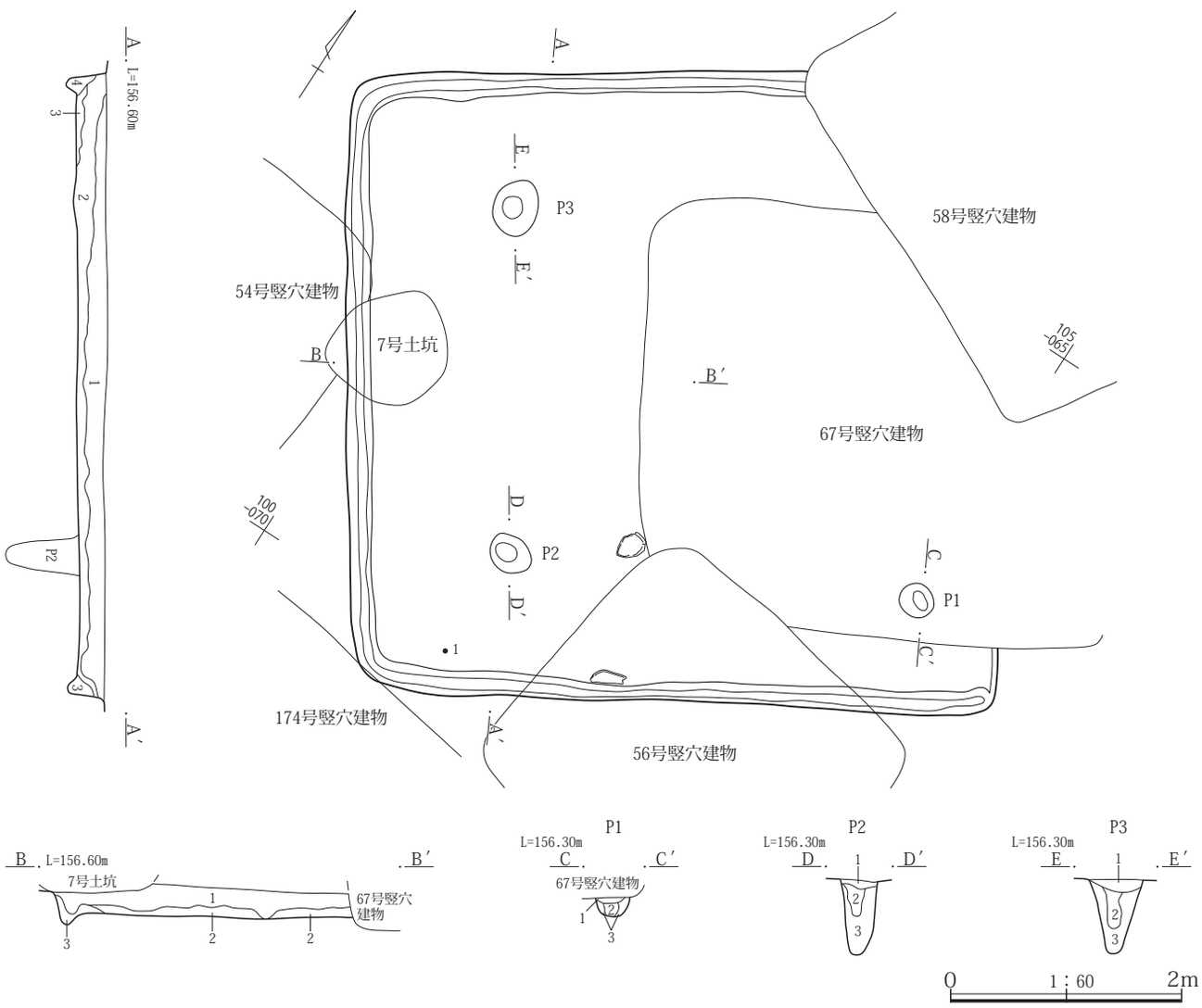
第96図　67号竪穴建物遺構図

火処　残存部分では検出されなかったが、出土土器からカマドが構築される段階の竪穴建物であることから北壁に構築されていたと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕・羽釜などが出土している。出土量は図示１点、未掲載336点とやや少ない。１の土師器杯は床面より14㎝上からの出土である。未掲載遺物を含め主体を占める遺物は１の土師器杯と同様な形態や時期のものである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、本竪穴建物に共伴する土器に年代を示すものが存在しないが、１の土師器杯から６世紀後半代に比定できる。

68号竪穴建物



68号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を不均等にやや多く含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロックを不均等に炭化物、焼土を若干含み、やや細粒の微粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　床面上に泥流土ブロックが少量含み、細粒弱粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　細粒弱粘性土中に泥流土を不均等に含む、壁崩落混入土。
68号竪穴建物　Ｐ１
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを10％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを40％含み、柔らかくやや粘性がある。
68号竪穴建物　Ｐ２・３
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを５％含む。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを10％含み、やや粘性がある。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを40％含み、柔らかくやや粘性がある。

第97図　68号竪穴建物遺構図

69号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37084～37086、Ｙ＝−85089～−85091に位置する。西側は調査範囲外に存在するため欠く。

重複関係　70号竪穴建物、30号土坑と重複関係にある。新旧関係は70号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、30号土坑より新しい。

形状　やや変形した方形または長方形を呈すると想定される。

規模　調査範囲内で南北方向が2.32m、東西方向は0.77mを測る。確認面から床面までの壁高は１～３㎝を測る。

床面積　残存範囲内で1.43㎡を測る。

主軸方位　主軸方向を南北方向と想定するとおおよそＮ－30°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面では暗褐色土によって短期間に埋没したとみられるが、南側の壁際で壁外から流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

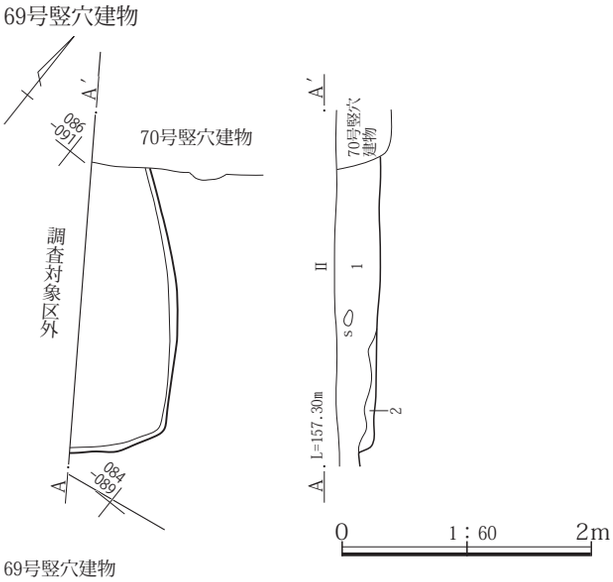
掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

69号竪穴建物



69号竪穴建物
1　暗褐10YR3/3　泥流土粒・焼土粒等を少量含み、ややしまりがある細粒土。
2　暗褐10YR3/4　不明瞭な泥流土小ブロックをやや多く含み、ややしまりがある細粒弱粘性土。

第98図　69号竪穴建物遺構図

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内ではカマドも炉も検出されなかったが、出土遺物からカマドが構築されていると想定される。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯が出土しているが、出土量は６点と微量で、さらに細片のため図示できるものは存在しなかった。また、須恵器杯は体部片、土師器甕は胴部片のため年代を求めることは難しかった。

所見　本竪穴建物の存続期間は、重複関係にある70号竪穴建物の時期が７世紀前半代であることから、これ以前に想定される。

70号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37085～37090、Ｙ＝−85087～−85091に位置する。西側は調査範囲外に存在するため欠く。

重複関係　49号竪穴建物、69号竪穴建物、２号溝と重複関係にある。新旧関係は49号竪穴建物、２号溝より本竪穴建物のほうが古く、69号竪穴建物より新しい。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　調査範囲内で南北方向が4.44m、東西方向は2.43mを測る。確認面から床面までの壁高は８～14㎝を測る。

床面積　残存範囲内で7.71㎡を測る。

主軸方位　主軸方向を南北方向と想定するとおおよそＮ－54°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では床面近くは泥流土ブロックと黒褐色土の混合した灰黄褐色土で埋没しているのが確認されていることから人為的な埋戻しが行われたと判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、床下土坑部分は黒褐色土を、その他は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　東壁寄りで床下土坑３基を検出している。１号床下土坑は形態が楕円形を呈し、規模は径1.43×0.77m、深さ0.06mを測る。２号床下土坑は円形を呈し、規模は径0.83×0.83m、深さ0.30mを測る。３号床下土坑は不整形を呈し、規模は長径0.98m、短径0.88m、深さ0.57mを測る。各床下土坑とも黒褐色土で埋め戻されていた。内部からは土器などの出土はみられなかった。

壁溝　調査範囲内では東壁の北東角から2.0mの範囲で検出されている。規模は幅10～15㎝、深さ２～４㎝を測る。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

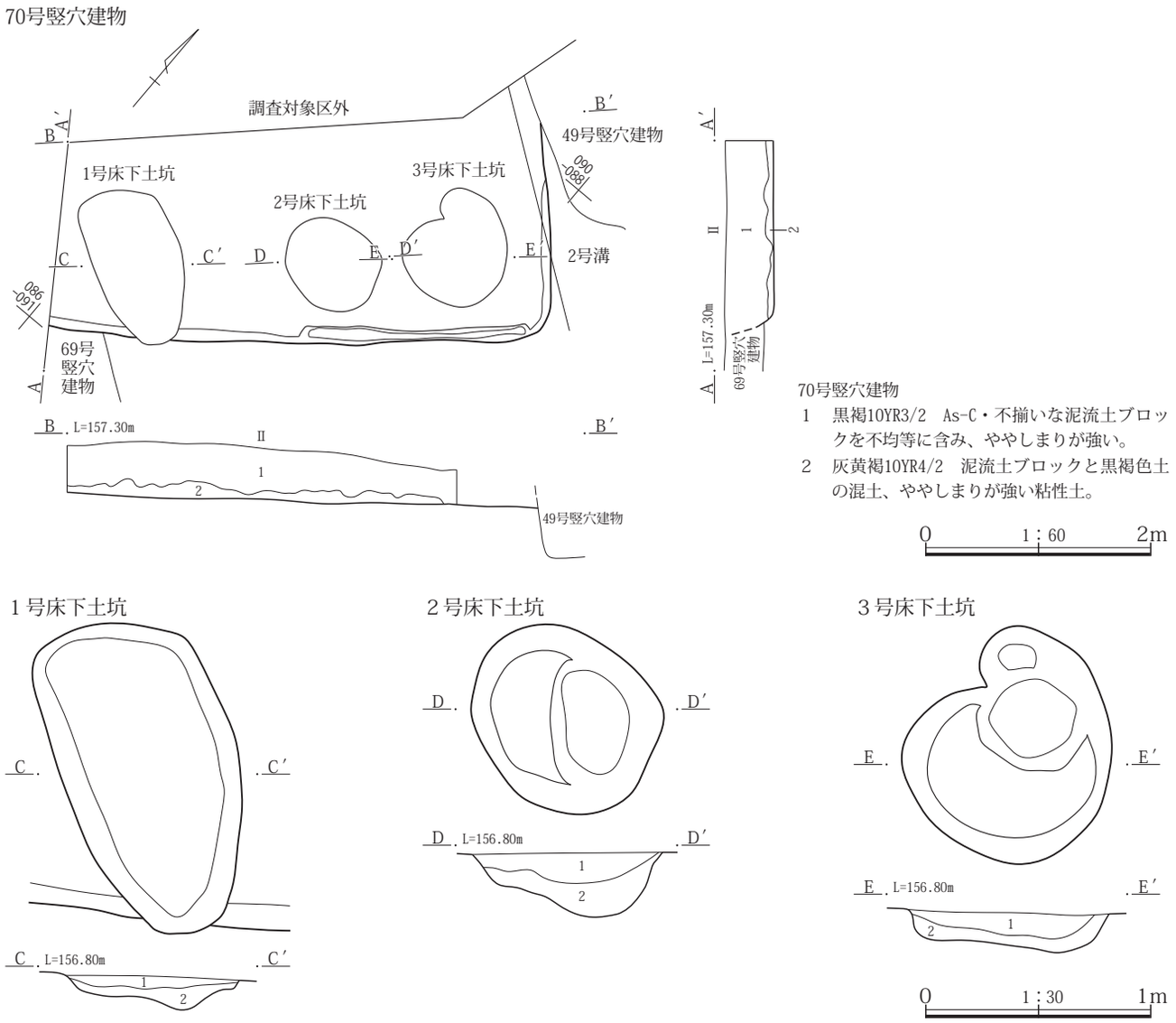
貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかったが、出土遺物からカマドが構築されていると想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺、炉底滓などが出土しているが、出土量は82点とわずかで、さらに細片のため図示できたのは１の須恵器壺胴部片だけであった。未掲載とした土器のうち、土師器杯は口縁部に段を有するいわゆる有段口縁杯がみられた。なお、この土師器杯は床下土坑からの出土であることから、本竪穴建物に共伴するものである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土師器杯から７世紀前半代に比定できる。



70号竪穴建物　１号床下土坑
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。床の落ち込みとみられる。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％含む。
70号竪穴建物 ２号床下土坑
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを３％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　にぶい黄褐色土ブロックを10％、暗褐色土ブロックを５％含む。
70号竪穴建物 ３号床下土坑
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを３％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　にぶい黄褐色土ブロックを20％、暗褐色土ブロックを５％含む。

第99図　70号竪穴建物遺構図

71号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37081～37085、Ｙ＝-85083～-85097に位置する。

重複関係　79号竪穴建物、１号土坑と重複関係にある。新旧関係は１号土坑より本竪穴建物のほうが古く、79号竪穴建物より新しい。

形状　東辺が西辺より0.6mほど長い台形状を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が2.46m、南北方向は3.72mを測る。確認面から床面までの高さ11～16㎝を測る。

床面積　7.07㎡を測る。

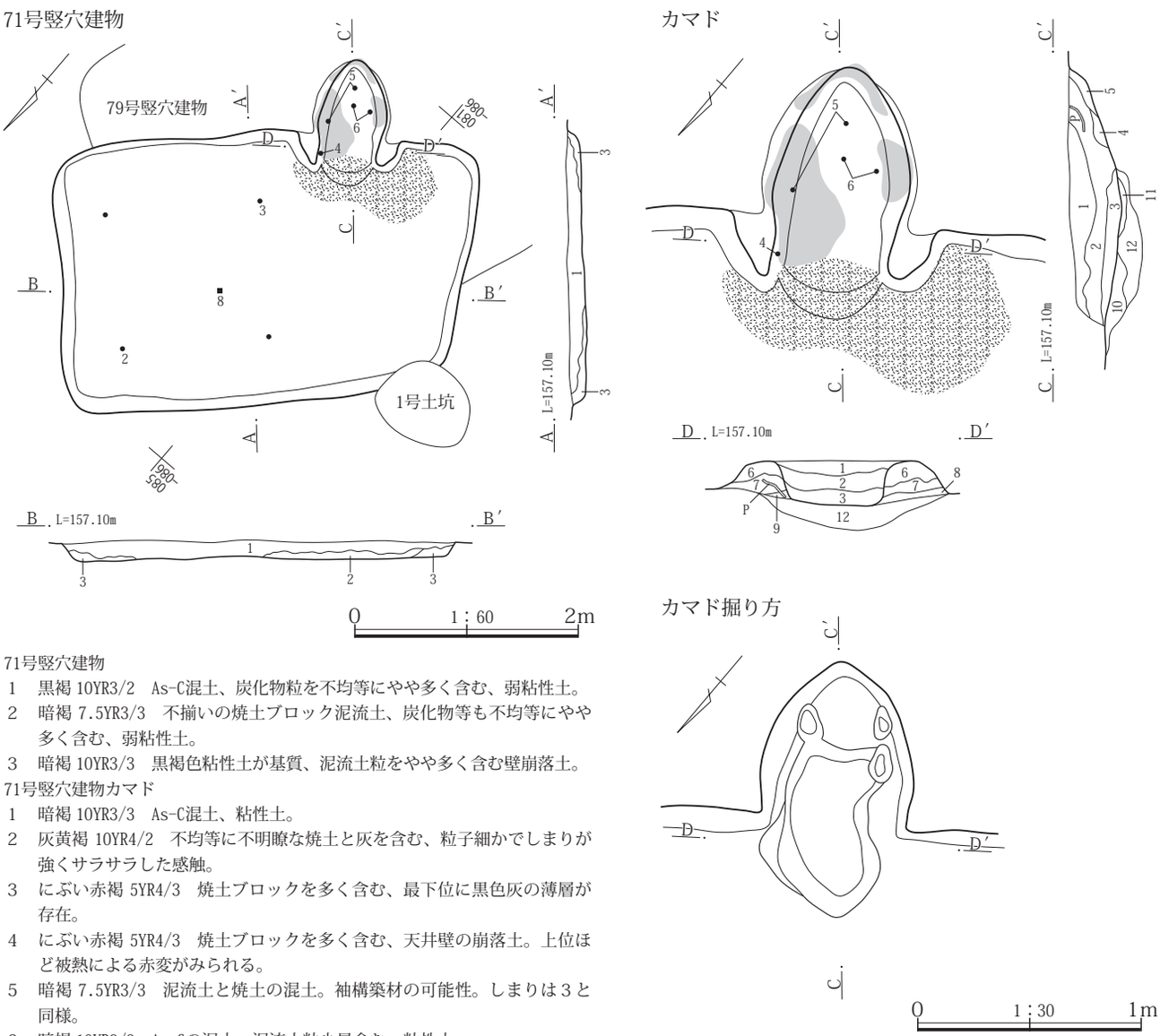
主軸方位　Ｎ－140°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や周囲からの流れ込みが確認されていることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。



71号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、炭化物粒を不均等にやや多く含む、弱粘性土。
2　暗褐 7.5YR3/3　不揃いの焼土ブロック泥流土、炭化物等も不均等にやや多く含む、弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　黒褐色粘性土が基質、泥流土粒をやや多く含む壁崩落土。

71号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-C混土、粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　不均等に不明瞭な焼土と灰を含む、粒子細かでしまりが強くサラサラした感触。
3　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土ブロックを多く含む、最下位に黒色灰の薄層が存在。
4　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土ブロックを多く含む、天井壁の崩落土。上位ほど被熱による赤変がみられる。
5　暗褐 7.5YR3/3　泥流土と焼土の混土。袖構築材の可能性。しまりは３と同様。
6　暗褐 10YR3/3　As-Cの混土、泥流土粒少量含む、粘性土。
7　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土の混土、粘性土。
8　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多く焼土粒を含み、しまりが弱い
9　黒褐 10YR2/2　黒色灰と焼土を多く含み、しまりが弱い。
10　黒褐 10YR2/2　黒色灰主体、ややしまりが弱くふかふかした感触。
11　灰褐 5YR4/2　赤色味はやや弱くなるが、広範が硬化する。火床面部分か。
12　灰黄褐 10YR4/2　灰色味近い泥流土と黒色灰まじりの黒褐色土の混土。ややしまりが弱い。

第100図　71号竪穴建物遺構図

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。燃焼部の天井は火床面に崩落した状態で、火床面との間に間層が認められないことから竪穴建物を廃棄した時点で壊されたとみられる。規模は全長が1.12m、幅が1.03m、燃焼部幅0.42mを測る。燃焼部の大部分は壁外に存在している。燃焼部の火床面や側壁、煙道部には顕著な焼土が確認され、カマド前の床面には灰が拡散していた。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器などが出土している。このうち、３の土師器甕が床面から、１の須恵器椀、４・５の土師器甕、６の須恵器羽釜がカマドからの出土である。なお、７の須恵器杯蓋は周囲の竪穴建物からの混入である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した土師器甕や須恵器羽釜から10世紀第２四半期に比定できる。

72号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37072～37076、Ｙ＝−85083～−85086に位置する。西側４分の３は調査範囲外に存在するため欠く。

重複関係　76号竪穴建物、83号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は76号竪穴建物、83号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　北東角は98°とやや広角ではあるが、方形または長方形を呈すると想定される。

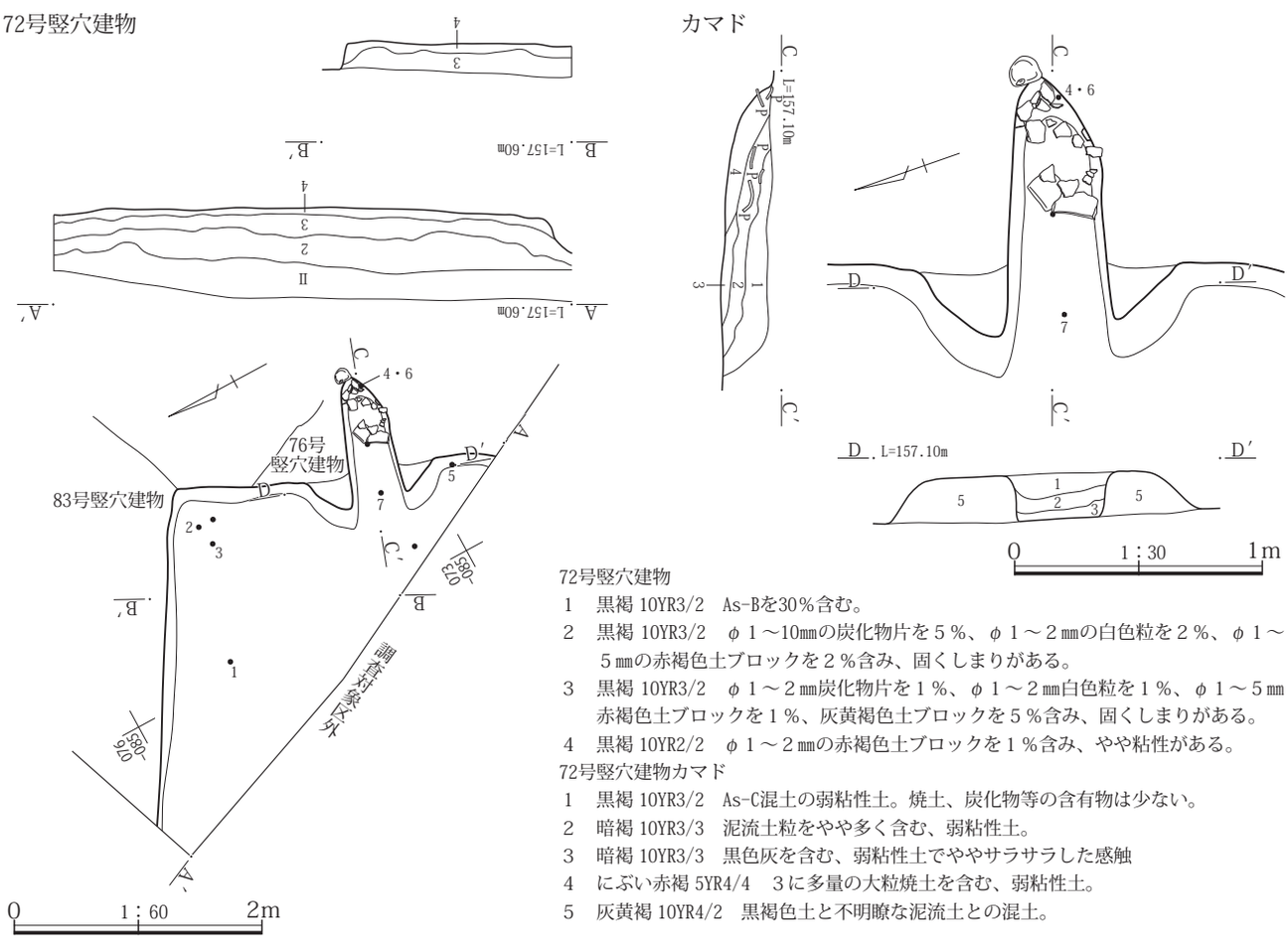
規模　調査範囲内で北辺が2.70m、東辺が2.60mを測る。確認面から床面までの壁高は12～22㎝を測る。

床面積　残存範囲内で3.67㎡を測る。

主軸方位　Ｎ−113°−Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固



72号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Bを30％含む。
2　黒褐 10YR3/2　φ１～10㎜の炭化物片を５％、φ１～２㎜の白色粒を２％、φ１～５㎜の赤褐色土ブロックを２％含み、固くしまりがある。
3　黒褐 10YR3/2　φ１～２㎜炭化物片を１％、φ１～２㎜白色粒を１％、φ１～５㎜赤褐色土ブロックを１％、灰黄褐色土ブロックを５％含み、固くしまりがある。
4　黒褐 10YR2/2　φ１～２㎜の赤褐色土ブロックを１％含み、やや粘性がある。

72号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土の弱粘性土。焼土、炭化物等の含有物は少ない。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土粒をやや多く含む、弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　黒色灰を含む、弱粘性土でややサラサラした感触
4　にぶい赤褐 5YR4/4　３に多量の大粒焼土を含む、弱粘性土。
5　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土と不明瞭な泥流土との混土。

第101図　72号竪穴建物遺構図

めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は壊されカマド内に痕跡もみられなかったが、両袖は残存していた。規模は全長が1.20m、幅が1.20m、燃焼部幅0.32mを測る。燃焼部の大半と煙道部は壁外に存在し、ほぼ平坦で移行する。煙道部には６の土師器甕が使用されていた。

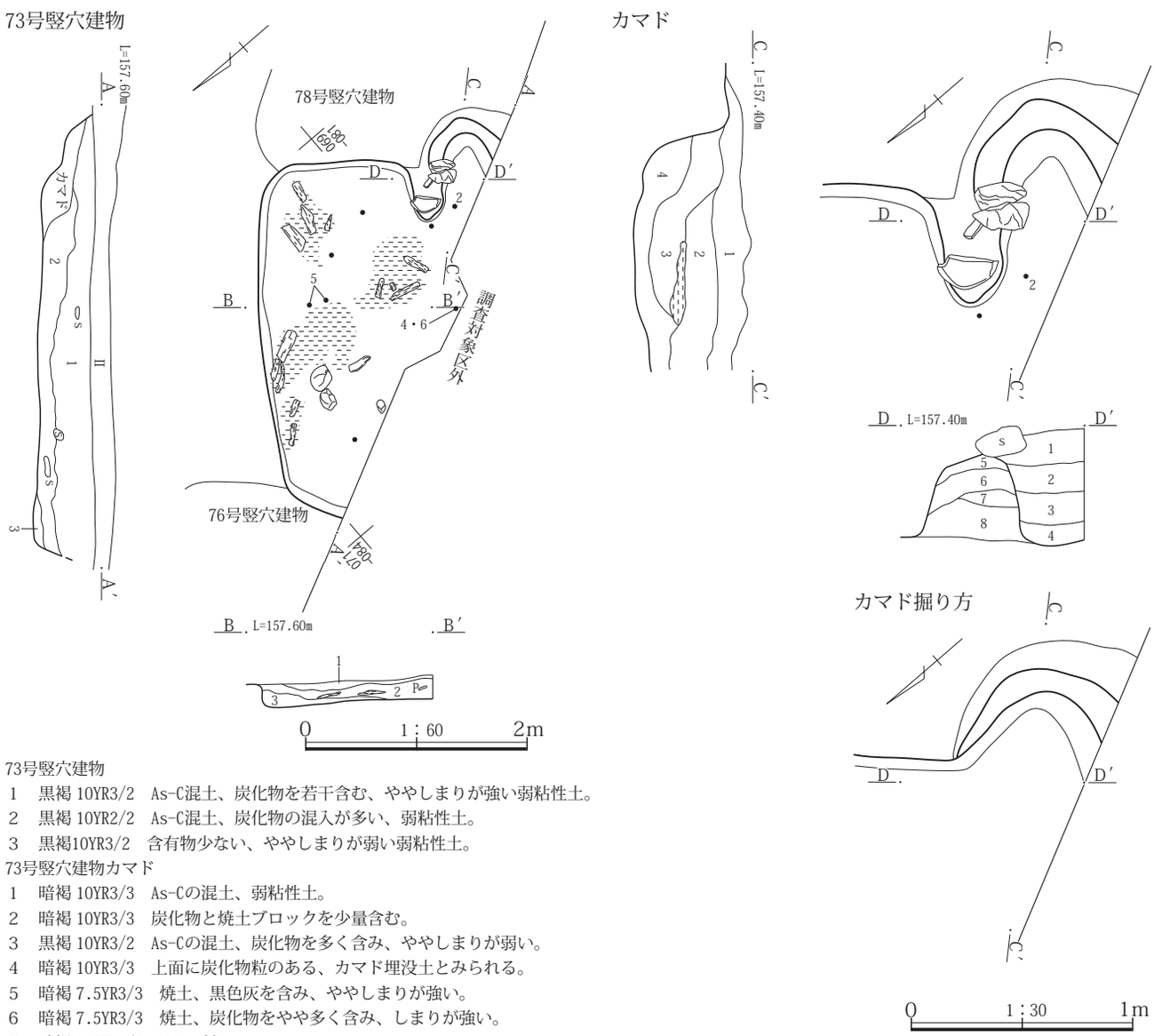
出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。このうち、２の須恵器椀が床面から、４～６の土師器甕、７の土製品土錘がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器椀や土師器甕から９世紀第３四半期に比定できる。

73号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37067～37071、Ｙ＝−85081～−85083に位置する。西側３分の２は調査範囲外に存在するため欠く。

重複関係　76号竪穴建物、78号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は76号竪穴建物、83号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。



73号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、炭化物を若干含む、ややしまりが強い弱粘性土。
2　黒褐 10YR2/2　As-C混土、炭化物の混入が多い、弱粘性土。
3　黒褐10YR3/2　含有物少ない、ややしまりが弱い弱粘性土。
73号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-Cの混土、弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物と焼土ブロックを少量含む。
3　黒褐 10YR3/2　As-Cの混土、炭化物を多く含み、ややしまりが弱い。
4　暗褐 10YR3/3　上面に炭化物粒のある、カマド埋没土とみられる。
5　暗褐 7.5YR3/3　焼土、黒色灰を含み、ややしまりが強い。
6　暗褐 7.5YR3/3　焼土、炭化物をやや多く含み、しまりが強い。
7　暗褐 7.5YR3/3　６に近似。
8　黒褐 10YR2/2　含有物少ない、しまりが強い。

第102図　73号竪穴建物遺構図

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の南北方向は3.22m、東西方向は調査範囲内で2.22mを測る。確認面から床面までの壁高は18～34㎝を測る。

床面積　残存範囲内で3.89㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－129°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積とレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　南壁にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、左袖上には天井に使用されたとみられる偏平に加工された礫が出土していた。右袖は調査対象外であったが左袖は残存していた。規模は全長が0.96m、幅が0.72m、燃焼部幅は調査範囲内で0.30mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。掘り方は土坑状に掘り込み、袖等を構築している。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕・羽釜、灰釉陶器が出土している。このうち、２の須恵器高杯がカマドからの出土である。この須恵器高杯は１の須恵器杯と同様に７世紀後半の年代観が与えられ、重複関係に齟齬が生じる。また、高杯の出土位置もカマドの燃焼部中央であることから周囲に散乱していたものを支脚に転用された可能性も窺える。なお、床面より15～21㎝上から出土した４の土師器甕は９世紀第３四半期、５・６の須恵器羽釜は10世紀前半の年代観が与えられ、どちらかの年代観であれば重複関係との齟齬は生じないことになる。

所見　床面よりやや上位から炭化材や炭が広範囲から検出され、焼失家屋であった可能性が窺えるが、柱や梁桁材とみられるものは確認できなかった。こうしたことから再利用可能な建築材を抜き取った後に不要材を焼却した可能性も想定される。

本竪穴建物の存続期間は、出土している４の土師器甕、５・６の須恵器羽釜のどちらかの年代観である９世紀第３四半期か10世紀前半に比定するのが妥当と考える。

74号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37060～37064、Ｙ＝-85077～-85080に位置する。西側３分の２は調査範囲外に存在するため全貌は不明である。

重複関係　29号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが新しい。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の南北方向は3.32m、東西方向は調査範囲内で最大1.67mを測る。確認面から床面までの壁高は３～15㎝を測る。

床面積　残存範囲内で3.65㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－138°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　南壁にカマドが構築されている。カマドは右袖が調査範囲外に存在するため全貌は不明である。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井部は失われていたが、左袖は残存している。規模は全長0.97m、幅は調査範囲内で0.90m、燃焼部幅は0.45mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。なお、燃焼部と煙道部の間には17㎝ほどの段が設けられている。カマド前の床面には焼土が散布していた。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器椀・壺・甕・羽釜、灰釉陶器椀、土製品瓦小片、鉄製品鎌・鋲などが出土している。このうち、１の須恵器椀が床面、６の土師器甕と７の須恵器羽釜、３・４の灰釉陶器椀、須恵器壺の胴部片がカマドから出土している。この他に12の鉄製品鎌が床面、13の鋲が床面より８㎝上から出土している。なお、８～10の須恵器杯は９世紀前後の年代観が与えられ

る形態であることから混入と判断される。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器羽釜や椀から10世紀第２四半期に比定できる。

75号竪穴建物

位置　１区調査区西部、Ｘ＝37078～37081、Ｙ＝-85079～-85083に位置する。

重複関係　２号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　長方形を呈するが、東辺はカマドを間にして0.3mほどの段違いになっている。

規模　主軸方向の東西方向が2.85m、南北方向が3.13mを測る。確認面から床面までの壁高は０～５㎝を測る。

床面積　7.42㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－122°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため埋没状態については判断できない。

床面　南西部は床下土坑が検出されており、焼土ブロックを混ぜた黒褐色土、北半は泥流土ブロックが混ぜられた暗灰褐色土を薄く充填して床面を造っている。

掘り方　南西部で床下土坑を２基検出している。１号床下土坑は双円形を呈し、規模は長径0.98m、短径0.82m、深さ0.19m、２号床下土坑はやや歪んだ楕円形を呈し、長径0.75m、短径0.54m、深さ0.15mを測る。１号、２号床下土坑とも埋め戻された黒褐色土に焼土ブロックと炭化物が含まれている。

壁溝　検出されなかった。

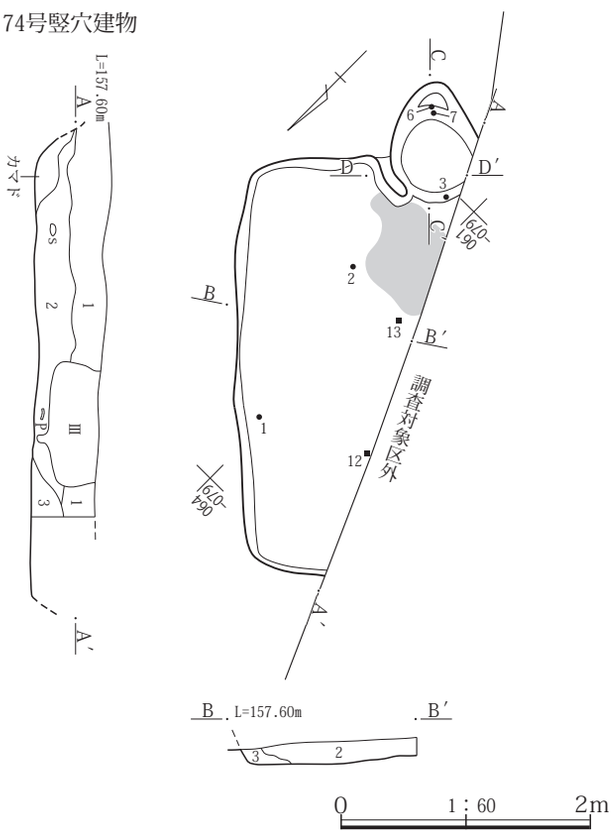
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

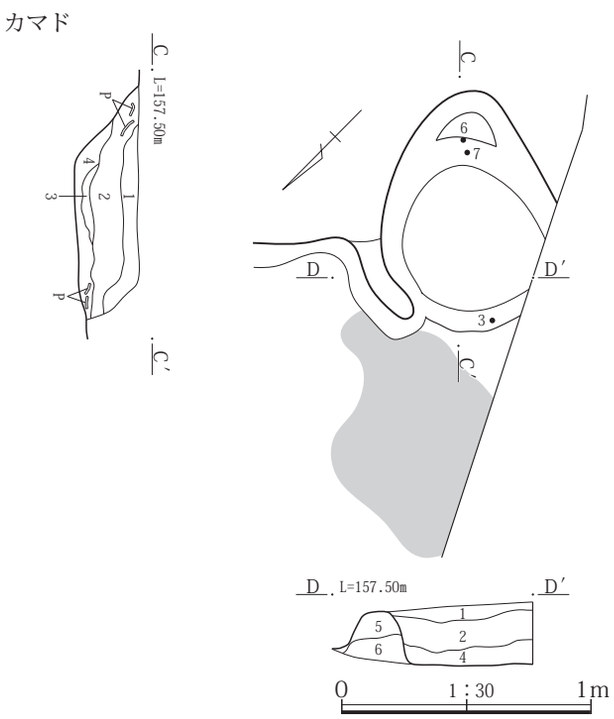
火処　東壁の中程よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部にかけての天井部は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全

74号竪穴建物



74号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C混土、As-C少ない、焼土、炭化物がカマド側ほど多く床面直上に炭化物粒やや多く含む、弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　含有物少ない粘性土。

カマド



74号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、炭化物、焼土を若干含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　As-C混土、弱粘性土。
3　にぶい赤褐 2.5YR4/4　焼土、ボソボソした感触。崩落天井とみられる。
4　暗褐 7.5YR3/3　焼土、炭化物、灰等、下半には黒色灰が多く含まれ、ややしまりを欠く。
5　黒褐 10YR3/2　As-C混土、しまりやや強い弱粘性土。
6　黒褐 10YR3/2　含有物のごく少ない粘性土。

第103図　74号竪穴建物遺構図

長が1.00m、幅は0.87m、燃焼部幅0.45mを測る。燃焼部奥には径７～８㎝、長さ15㎝と18㎝の棒状礫が15㎝の間隔で据え付けられ、この周囲は焼土化が顕著であったことから通常のカマドとは燃焼部の位置が異なる形態である可能性が想定される。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・杯・椀甕・羽釜、灰釉陶器などが出土している。このうち、１の須恵器杯が床面、２と４の須恵器杯が１号床下土坑、７の土師器甕、８・９の須恵器羽釜がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した土師器甕や須恵器羽釜から10世紀第１四半期に比定できる。

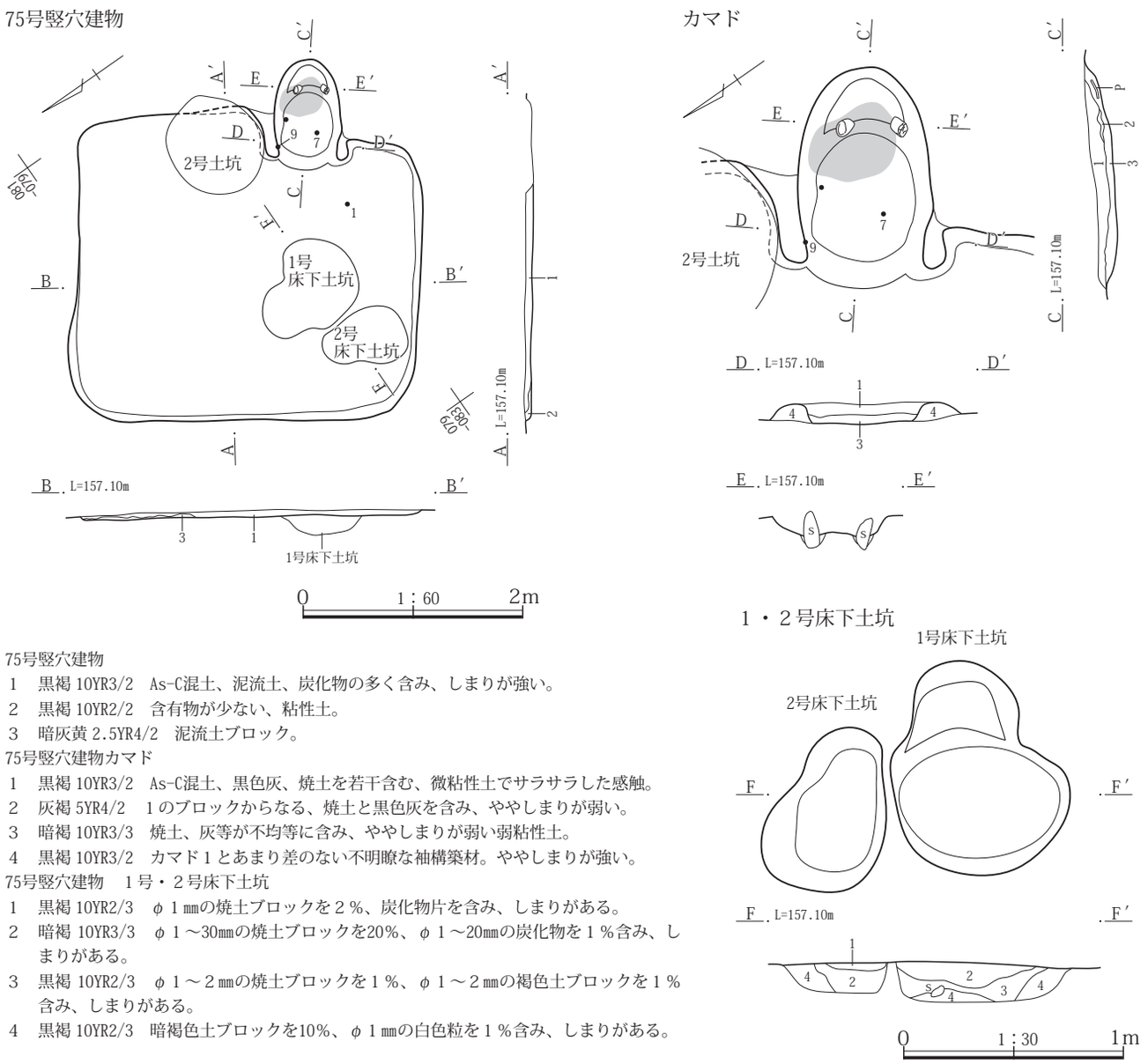
76号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37071～37074、Ｙ＝−85082～−85085に位置する。西側３分の２は調査範囲外に存在するため欠く。

重複関係　72号竪穴建物、73号竪穴建物、80号竪穴建物、83号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は72号竪穴建物、73号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、80号竪穴建物、83号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は調査範囲内で1.50m、南北方向は3.57mを測る。確認面から床面までの壁高は20～30㎝を測る。



75号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土、炭化物の多く含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　含有物が少ない、粘性土。
3　暗灰黄 2.5YR4/2　泥流土ブロック。

75号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、黒色灰、焼土を若干含む、微粘性土でサラサラした感触。
2　灰褐 5YR4/2　１のブロックからなる、焼土と黒色灰を含み、ややしまりが弱い。
3　暗褐 10YR3/3　焼土、灰等が不均等に含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　カマド１とあまり差のない不明瞭な袖構築材。ややしまりが強い。

75号竪穴建物　１号・２号床下土坑
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の焼土ブロックを２％、炭化物片を含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～30㎜の焼土ブロックを20％、φ１～20㎜の炭化物を１％含み、しまりがある。
3　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の焼土ブロックを１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
4　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを10％、φ１㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。

第104図　75号竪穴建物遺構図

床面積　残存範囲内で4.11㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－67°－Ｅを指す。

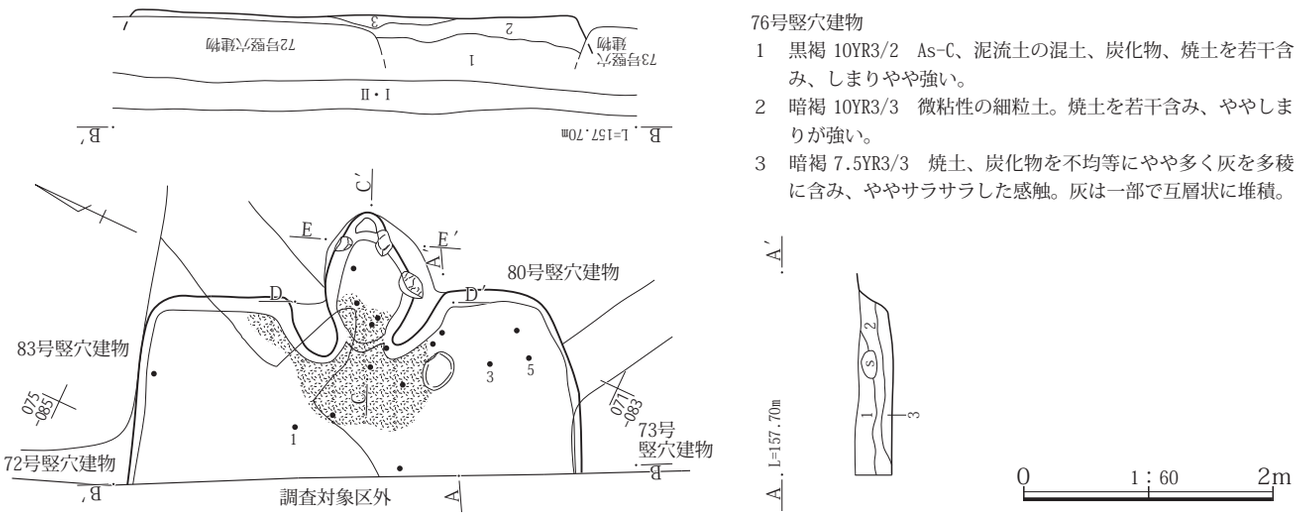
埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山と南東角付近は80号竪穴建物埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

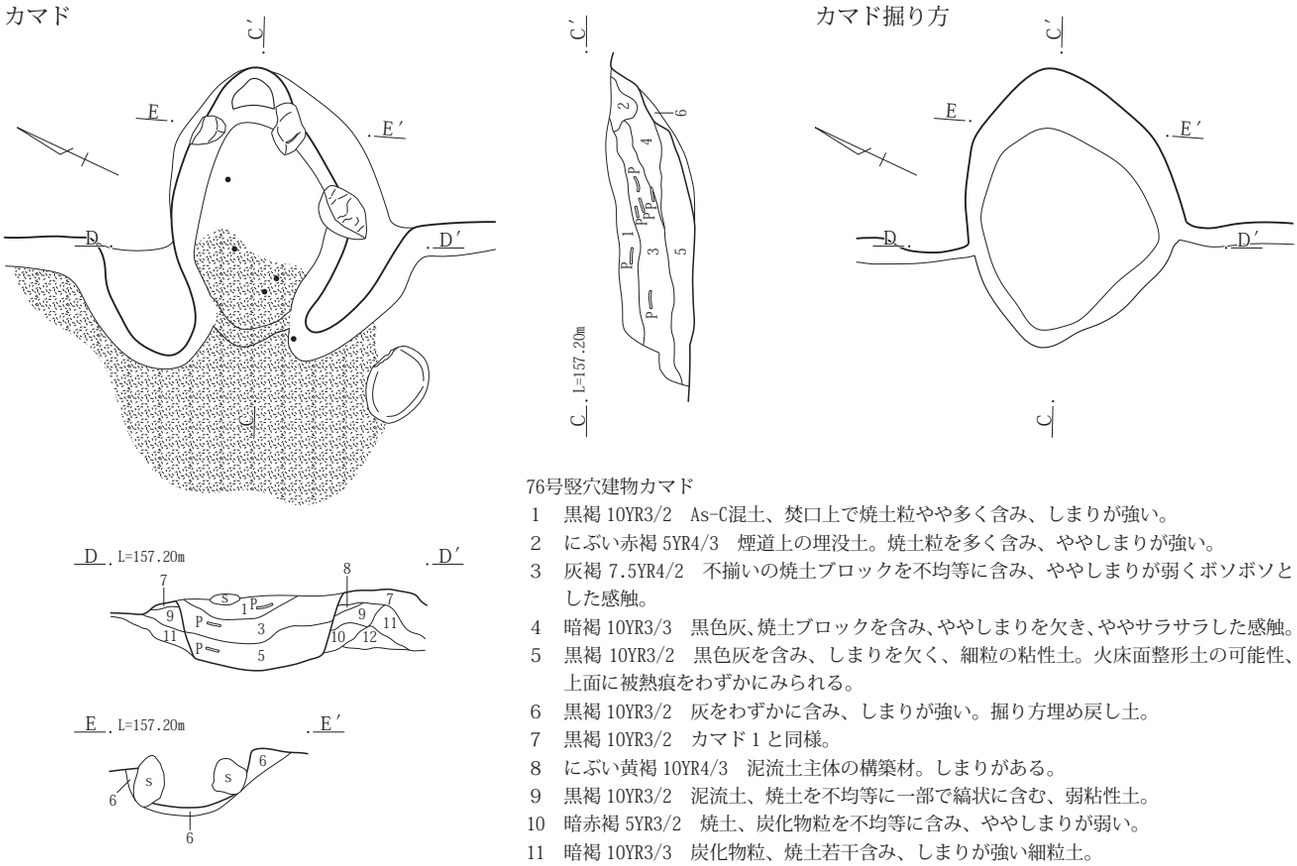
壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

76号竪穴建物



76号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土の混土、炭化物、焼土を若干含み、しまりやや強い。
2　暗褐 10YR3/3　微粘性の細粒土。焼土を若干含み、ややしまりが強い。
3　暗褐 7.5YR3/3　焼土、炭化物を不均等にやや多く灰を多稜に含み、ややサラサラした感触。灰は一部で互層状に堆積。

カマド



76号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、焚口上で焼土粒やや多く含み、しまりが強い。
2　にぶい赤褐 5YR4/3　煙道上の埋没土。焼土粒を多く含み、ややしまりが強い。
3　灰褐 7.5YR4/2　不揃いの焼土ブロックを不均等に含み、ややしまりが弱くボソボソとした感触。
4　暗褐 10YR3/3　黒色灰、焼土ブロックを含み、ややしまりを欠き、ややサラサラした感触。
5　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、しまりを欠く、細粒の粘性土。火床面整形土の可能性、上面に被熱痕をわずかにみられる。
6　黒褐 10YR3/2　灰をわずかに含み、しまりが強い。掘り方埋め戻し土。
7　黒褐 10YR3/2　カマド１と同様。
8　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体の構築材。しまりがある。
9　黒褐 10YR3/2　泥流土、焼土を不均等に一部で縞状に含む、弱粘性土。
10　暗赤褐 5YR3/2　焼土、炭化物粒を不均等に含み、ややしまりが弱い。
11　暗褐 10YR3/3　炭化物粒、焼土若干含み、しまりが強い細粒土。
12　灰黄褐 10YR4/2　泥流土の混土、しまりが強い弱粘性土。

第105図　76号竪穴建物遺構図

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.21m、幅が1.36m、燃焼部幅は調査範囲内で0.52mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部と煙道部間には12㎝の段が造られている。掘り方は土坑状に掘り込み、袖、煙道部の段差等を構築している。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。このうち、３の須恵器椀が床面から、２の須恵器杯と４の土師器小型甕がカマドから、１の須恵器杯蓋が床面より10㎝上から、５の須恵器甕が床面より14㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器椀や土師器小型甕から９世紀前半に比定できる。

77号竪穴建物

位置　１区調査区西南端、Ｘ＝37054～37059、Ｙ＝-85072～-85077に位置する。西壁側は調査範囲外に存在するため全貌は不明である。

重複関係　他の遺構との重複関係は確認されなかった。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の南北方向は3.76m、東西方向は調査範囲内で3.50mを測る。確認面から床面までの壁高は18～35㎝を測る。

床面積　残存範囲内で10.39㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－143°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では全体的にレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角寄りで検出されている。なお、南壁下からは0.5mほどの間隔がある。形状は円形を呈し、規模は径0.52×0.50m、深さ0.24mを測る。内部からは27の土師器無頸壺が出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　南壁のほぼ中央にカマドが構築されている。カマドは断面Ｅ－Ｅ′から一度天井部が崩落した後に再構築されたことが窺える。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は壊され崩落していたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.92m、幅は1.03m、燃焼部幅0.35mを測る。なお、燃焼部火床面はほぼ平坦である。

出土遺物　遺物は須恵器杯・椀を多く、須恵器甕、土師器杯・壺・甕、灰釉陶器を若干出土している。このうち、１の土師器杯、18の須恵器杯、３・５の須恵器杯蓋は床面、13の須恵器杯、27の土師器無頸壺は貯蔵穴、７・10・12・15の須恵器杯はカマド、24の須恵器椀は床面と貯蔵穴からの出土である。なお、19の須恵器椀も床面からの出土であるが、口縁部が外反しており、他の杯椀とは異なり、後に混入した可能性が窺える。なお、27の土師器無頸壺は甕を制作していく過程で胴部上位まで作り上げたところで上端部を横ナデして口縁部として完成させたとみられるが、同時期の甕に比べ、底部が大きく整形が縦方向のヘラ削りであるなど異なる点がある。また、形態や整形を他の時期でも同様なものをみることができない。そうした点から貯蔵用容器として特別に制作された可能性が窺える。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や貯蔵穴から出土した須恵器杯・椀等から８世紀第４四半期に比定できる。

78号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37065～37069、Ｙ＝-85079～-85082に位置する。西側３分の１は調査範囲外に存在し、北側は重複関係にある73号竪穴建物によって欠く。

重複関係　73号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は73号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

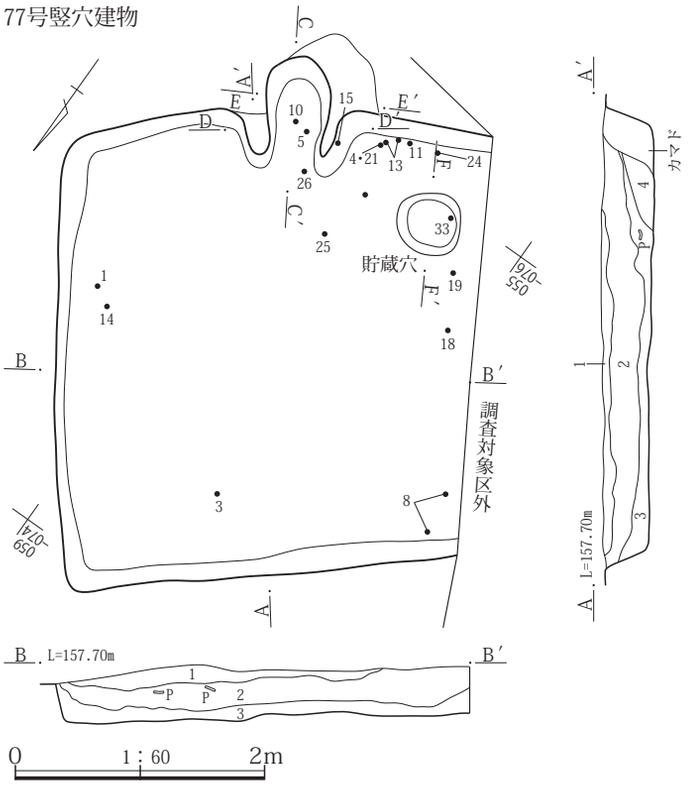
規模　主軸方向の南北方向は3.10m、東西方向は調査範囲内で2.14mを測る。確認面から床面までの壁高は11～29㎝を測る。

床面積　残存範囲内で5.90㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－152°－Ｅを指す。

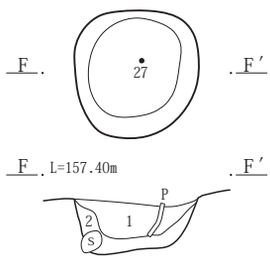
埋没状態　土層断面の観察では床面中央に暗褐色土が山状に堆積した後、周囲からの流れ込みによって土砂がレ

77号竪穴建物



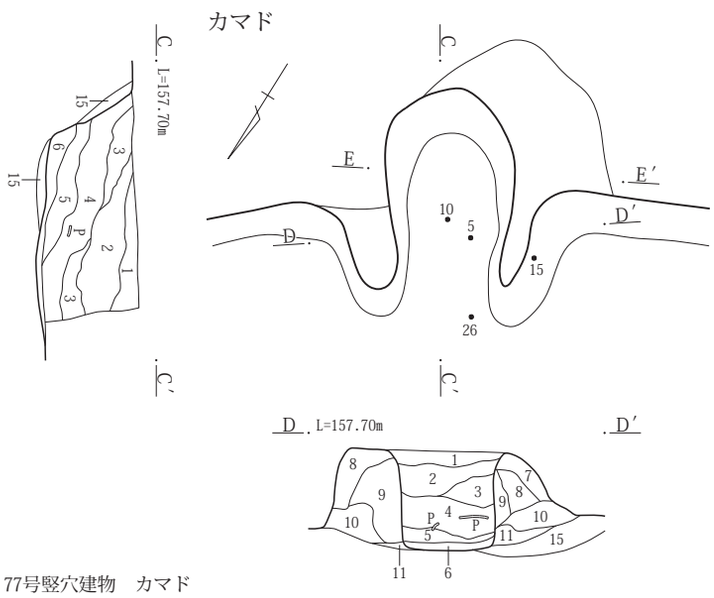
77号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒の混土、焼土、炭化物粒を少量含み、しまりが強い粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　灰、炭化物粒を含み、しまりやや強い細粒の粘性土。
4　暗赤褐 2.5Y3/3　泥流土ブロックの混土、焼土、灰をやや多く含む、粘性土。

貯蔵穴

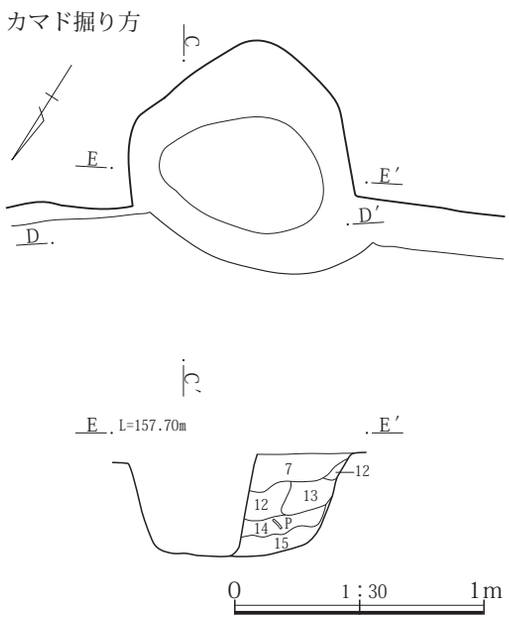


77号竪穴建物　貯蔵穴
1　黒褐 10YR2/2　φ１～５㎜の白色粒を２％、φ１～５㎜の焼土ブロックを２％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/2　やや粘性がある。固くしまりがある。

カマド



カマド掘り方



77号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、ややしまりが強い土。
2　黒褐 10YR3/2　灰を含み、ややしまりが強い細粒土でややサラサラした感触。
3　にぶい赤褐 2.5YR4/3　天井部とみられる焼土。下半は被熱面、上半はブロック状の焼土主体、しまりがある。
4　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多量に含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
5　暗褐 7.5YR3/3　灰主体のややしまりを欠く、焼土小ブロックを不均等に含む。
6　黒褐 10YR2/2　黒色土が基質、焼土、泥流土粒を不均等に含む。
7　黒褐 10YR3/2　As-C、大粒のパミス、焼土粒、泥流土粒等を不均等に含み、しまりが強い。
8　黒褐 10YR3/2　As-Cは少ないが、炭化物、泥流土粒がやや多く含み、しまりが強い。
9　黒褐 10YR3/2　含有物が少ない細粒土。
10　暗褐 10YR3/3　灰、やや大粒の焼土粒を含み、しかりが強い細粒土でサラサラした感触。
11　にぶい赤褐 5YR4/3　上半に焼土粒、下半に炭化物・灰の多く含み、ややしまりが強い。
12　にぶい赤褐 5YR4/4　細粒弱粘性土中に多量の焼土粒小ブロックと、泥流土粒を多量に含み、ややしまりが強い。
13　暗褐 10YR3/3　焼土粒、炭化物粒を少量含み、灰を含み、しまりがあり弱粘性の細粒土でややサラサラした感触。
14　にぶい赤褐 5YR4/4　多量の焼土粒、泥流土粒を含み、ややしまりが強い。中央底部付近は火床面の可能性。
15　暗褐 10YR3/3　As-C、焼土、炭化物を少量含み、ややしまりがある細粒土。壁面被熱赤変している。

第106図　77号竪穴建物遺構図

ンズ状に堆積している状態を確認できるが、中央部はやや不自然な堆積ではある。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

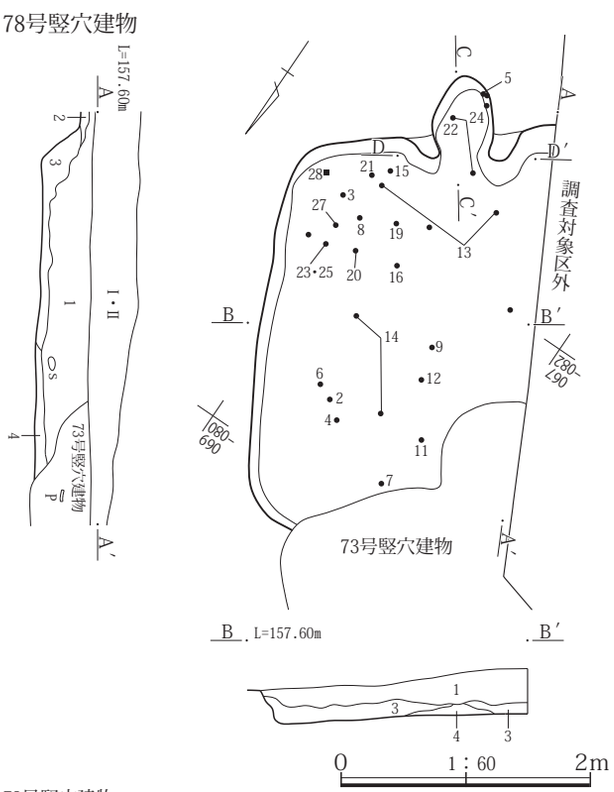
貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

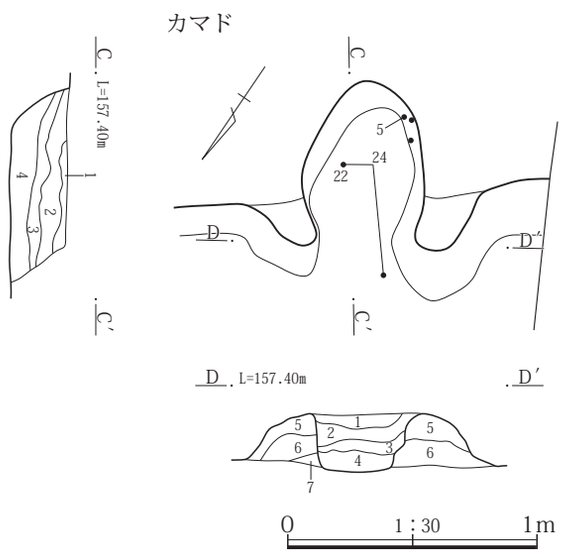
火処　南壁にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.87m、幅が0.96m、燃焼部幅は調査範囲内で0.41mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部奥から煙道部の火床面からは22・24の土師器甕が出土している。この土師器甕は燃焼部に煮沸用として掛けられていたものか煙道部にカマド材として使用されていたものかは判然としない。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、鉄製品棒状製品などが出土している。本竪穴建物からは多くの土器片が出土しているが、床面よりやや上位からのものが多く、本竪穴建物廃棄後に投棄された可能性が想定された。このうち、２・３の須恵器杯蓋、７～９・14・15の須恵器杯、16の須恵器椀、19の土師器鉢、20の須恵器鉢、25の土師器甕、28の鉄製品棒状製品が床面から、１の土師器杯、５の須恵器片口杯、６の須恵器杯、22・24の土師器甕がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯や土師器甕から９世紀第３四半期から第４四半期に比定できる。



78号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を不均等に少量と炭化物を少量含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　1に近似、焼土を多く含む。
3　暗褐 10YR3/3　細粒弱粘性土、焼土、炭化物を極少量含む。
4　暗褐 7.5YR3/3　細粒弱粘性土、焼土、炭化物を不均等に含み、ややしまりが弱い。



78号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒混土、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土の混土、焼土粒を不均等に少量含む、弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　黒色灰を含む、ややサラサラした感触の細粒土。
4　黒褐 10YR2/2　泥流土をブロック状に黒色灰を多く含み、ややしまりが弱い細粒土。火床面直上埋没土で多量の土器はこの土砂内から出土。
5　暗褐 7.5YR3/3　焼土、As-C、泥流土粒を少量含み、ややしまりが強い。
6　黒褐 10YR3/2　含有物少ない細粒土。カマド袖材。
7　焼土小ブロックが不均等に混入し、ややしまりが強い。

第107図　78号竪穴建物遺構図

79号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37079～37083、Ｙ＝-85083～-85087に位置する。北西部は重複関係にある71号竪穴建物によって欠く。

重複関係　71号竪穴建物、132号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は71号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、132号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南北方向が長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が3.68m、東西方向は3.31mを測る。確認面から床面までの高さ１～10㎝を測る。

床面積　推定で10.89㎡を測る。

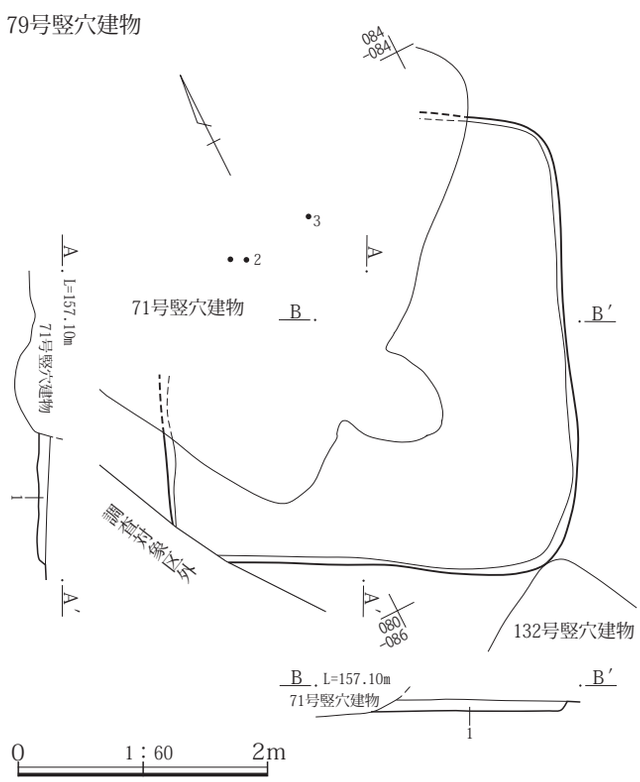
主軸方位　Ｎ－29°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため埋没状態については判断が困難であるが、土層断面の観察では人為的な埋め戻しが行われたことが想定される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。



79号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/2　As-Cを少量含む、炭化物粒を若干含む細粒粘性土。他の竪穴建物埋没土に比べ地山灰褐色泥流土の混入多い。

第108図　79号竪穴建物遺構図

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。出土遺物からはカマドが構築される時期の竪穴建物であるが、痕跡などが確認されないことから設置されていない可能性が想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、棒状礫などが出土している。出土量は図示３点、未掲載72点とわずかであった。このうち、２・３の須恵器椀が床面からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、明確な形態の解る土器が出土していないが、２・３の須恵器椀から９世紀第４四半期に比定できる。

80号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37070～37075、Ｙ＝-85079～-85083に位置する。南西部の上位は重複関係にある76号竪穴建物によって欠く。

重複関係　76号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は76号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古い。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は3.08m、南北方向は3.92mを測る。確認面から床面までの壁高は20～39㎝を測る。

床面積　10.26㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－150°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

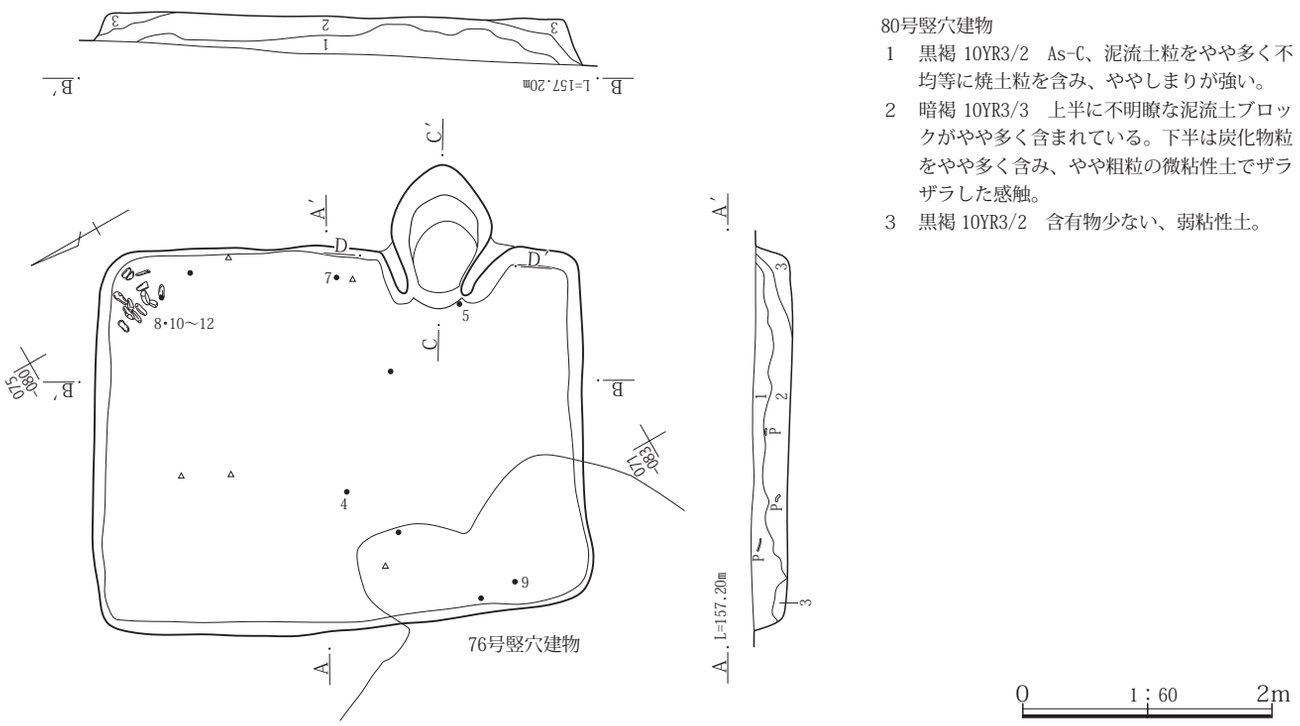
火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は壊されカマド内に痕跡がみられなかったが、煙道部の天井は崩落した状態であった。両袖は残存していた。規模は全長が1.16m、幅が1.10m、燃焼部幅は調査範囲内で0.45mを測る。煙道部

は壁外に掘り込まれている。なお、煙道部の天井には泥流土の灰褐色土が使用されていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、棒状礫などが出土している。このうち、５の須恵器杯が床面から、４の須恵器杯が床面より７㎝上からの出土である。なお、出土した土師器杯は床面から出土した須恵器杯と同じ年代観が与えられることから本竪穴建物に共伴する。棒状礫は北東角の床面から径５㎝、長さ10㎝前後のものが13点まとまって出土している。

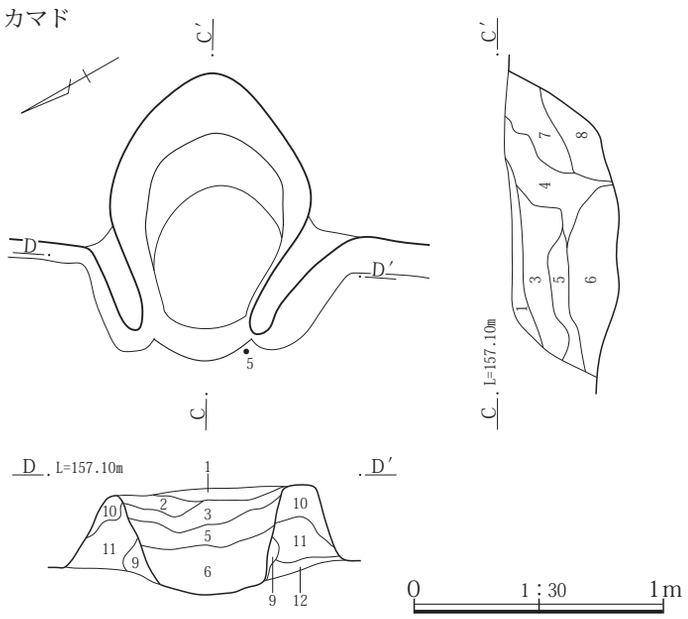
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器杯や共伴すると判断できる土師器杯から８世紀前半に比定できる。

80号竪穴建物



80号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒をやや多く不均等に焼土粒を含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　上半に不明瞭な泥流土ブロックがやや多く含まれている。下半は炭化物粒をやや多く含み、やや粗粒の微粘性土でザラザラした感触。
3　黒褐 10YR3/2　含有物少ない、弱粘性土。

カマド



80号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、しまりが強い。煙道側で焼土粒をやや多く含む。
2　灰黄褐 10YR4/2　灰色味の強い泥流土主体。
3　暗褐 10YR3/3　黒褐色土と２の混土。不均等に多量のAs-Cが混入、しまりがある弱粘性土。
4　灰褐 7.5YR4/2　やや黄色味を帯びる泥流土が主体、黒褐色土との混土。下半に焼土を多く含む。
5　黒褐 10YR3/2　灰、炭化物を多く含む、弱粘性土。
6　暗赤褐5YR3/2　赤色味の多い焼土ブロックを不均等に含む、弱粘性土。
7　暗褐 10YR3/3　焼土粒を含み、しまりやや弱い細粒弱粘性土。
8　暗褐 10YR3/3　７に類似、７より焼土が少ない。
9　暗褐 10YR3/3　焼土粒・ブロックを含み、しまりやや弱い細粒弱粘性土。
10　黒褐 10YR3/2　焼土ブロック、炭化物を若干含む、弱粘性土。
11　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを若干含む、粘性土。
12　暗褐 10YR3/3　ロームブロック主体。

第109図　80号竪穴建物遺構図

81号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37062～37066、Ｙ＝−85074～−85077に位置する。

重複関係　84号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は84号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南北方向が長い隅丸長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が3.17m、東西方向は3.00mを測る。確認面から床面まで高さ31～44cmを測る。

床面積　7.24㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－158°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

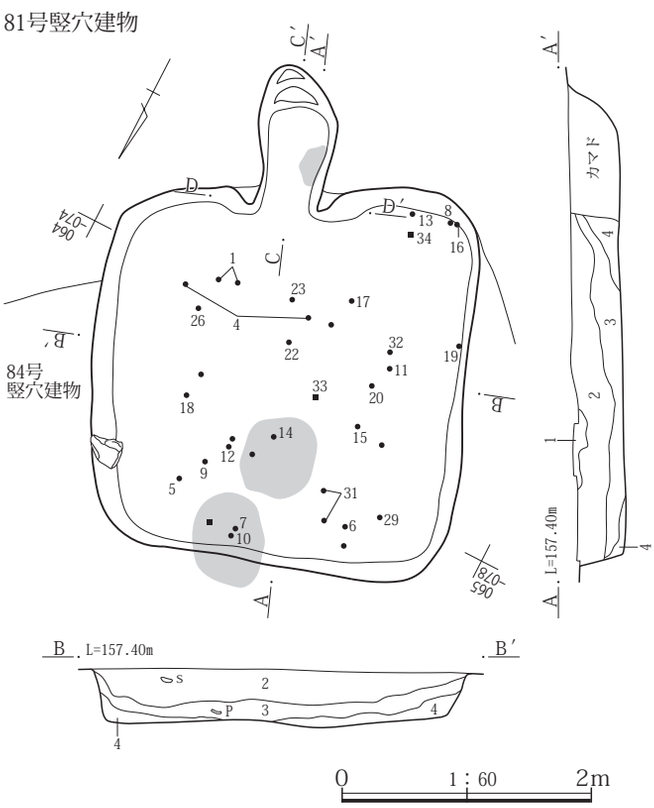
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

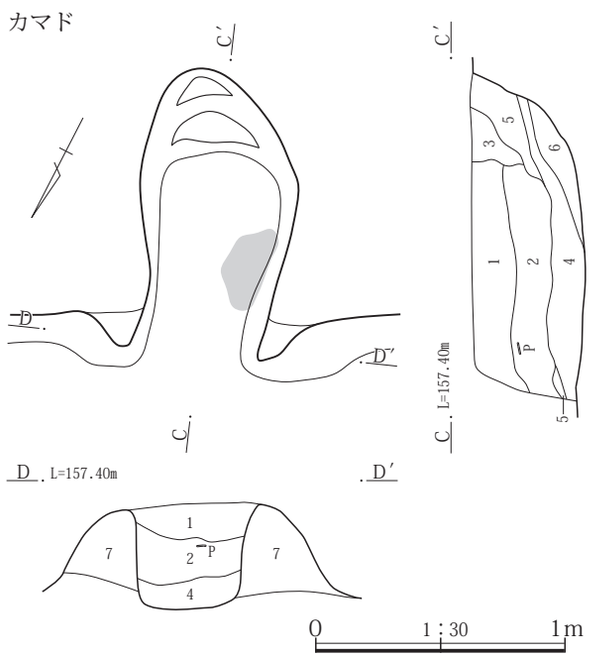
その他施設　検出されなかった。

火処　南壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部にかけての天井は壊され、竪穴建物やカマド内に痕跡が残っていなかった。袖とみられる部分は燃焼部が壁外に掘り込まれているため、燃焼部の側壁ではなく焚口の一部とみられる部分と想定される。規模は全長が1.22m、幅が1.15m、燃焼部幅0.43mを測る。燃焼部・煙道部ともわずかな範囲しか焼土が認められなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・短頸壺・甕、流動滓などが出土している。このう



81号竪穴建物
1　にぶい赤褐 5YR4/3　泥流土と焼土の混土。カマド袖材のような被熱・劣化した石を含み、カマドを崩した土。
2　暗赤褐 2.5Y3/3　As-Cを少量と泥流土、焼土等を少量含む。１付近では炭化物粒の含有量がやや多い。
3　黒褐 10YR3/2　含有物がほとんどない弱粘性土。
4　黒褐 10YR2/2　含有物がほとんどない細粒土。



81号竪穴建物 カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒混じりの、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　黒色灰と焼土粒、炭化物粒を若干含み、ややしまりが弱い弱粘性土でややサラサラした感触
3　灰褐 7.5Y4/2　焼土ブロックを不明瞭にやや多く含み、ややしまりが強い。煙道埋没土。
4　灰褐 5YR4/2　焼土ブロックを不均等に多量に灰、炭化物粒不均等に含み、ややしまりが強い。
5　灰褐 5YR4/2　特に大粒焼土が多く、にぶい赤褐色(2.5YR4/3)に近い色調。
6　黒褐 10YR2/2　含有物少ない、ややしまりが弱い細粒土。煙道下整形土。
7　暗褐 10YR3/3　泥流土粒やAs-Cを不均等に焼土・炭化物粒を若干含み、ややしまりが強い。袖構築材。

第110図　81号竪穴建物遺構図

ち、６の須恵器杯蓋、８・10・11・13・16・18の須恵器杯、20の須恵器無台椀、31の須恵器甕が床面から、２の須恵器杯蓋、30の土師器甕がカマドからの出土である。なお、２の須恵器杯蓋はカマドから出土しており、本竪穴建物に共伴するものであるが、内面にカエリが設けられており、８世紀第１四半期の年代観が与えられ、カマドの構築材として使用されたと判断される。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯や土師器甕から８世紀第３四半期に比定できる。

82号竪穴建物

位置　１区調査区西部、Ｘ＝37068～37072、Ｙ＝−85073～−85077に位置する。北東角は傾斜地に位置するため、床面より確認面が低くなり全貌は不明である。

重複関係　他の遺構との重複関係は確認されなかった。

形状　東西方向に長い長方形を呈す。なお、南東角は隅丸である。

規模　主軸方向の南北方向は2.98m、東西方向は3.45mを測る。確認面から床面までの壁高は15.5㎝を測る。

床面積　推定で8.85㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－141°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため判断が難しいが、土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

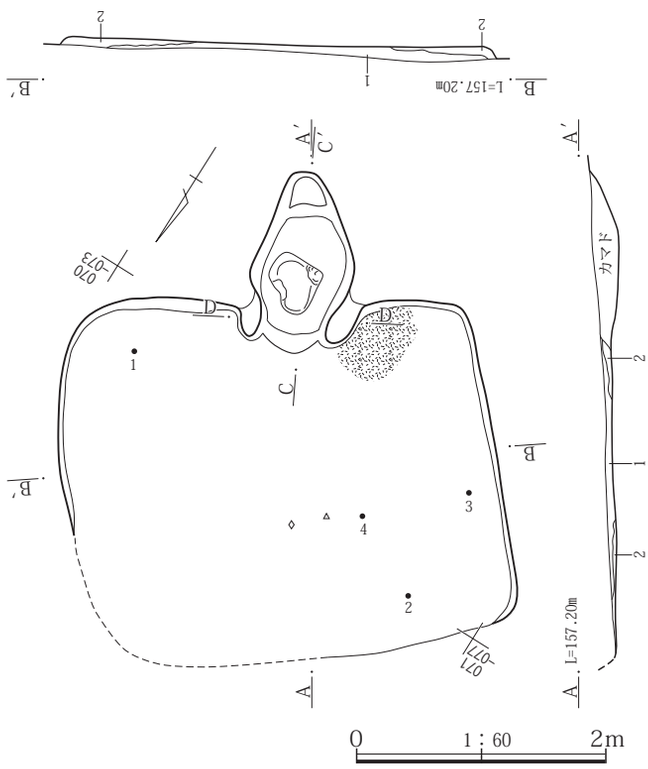
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

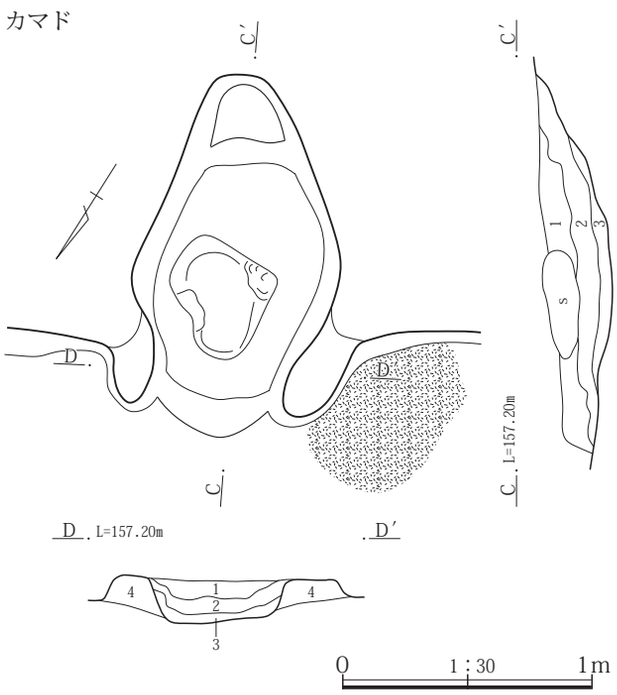
火処　南壁の中央よりやや西寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部にかけての天井は失われていたが、両袖は残存していた。なお、燃焼部中央から出土した礫は径50×4.5㎝、厚さが25㎝と大きいこと

82号竪穴建物



82号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状に、やや多く焼土粒、炭化物粒を不均等に少量含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　焼土粒、炭化物粒を少量含む、細粒弱粘性土、

カマド



82号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを不均等な霜降状に泥流土粒、焼土粒を少量含み、しまりが強い。
2　灰褐 7.5YR4/2　上位・下半主体で大粒焼土ブロックを多く含む、細粒弱粘性土。
3　黒褐 10YR2/2　炭化物粒、黒色灰と焼土を含む、細粒粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土粒や大粒パミスを不均等に含み、しまりが強い。

第111図　82号竪穴建物遺構図

からカマド構築材でなく竪穴建物廃棄時に投棄された可能性が高い。規模は全長1.45m、幅1.08m、燃焼部幅0.65mを測る。燃焼部奥側半分から煙道部は壁外に存在し、燃焼部と煙道部の間には10㎝ほどの段が設けられている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器椀が出土している。図示した土器は全て床面からの出土である。４の灰釉陶器椀は光ヶ丘１号窯式期に比定できるものである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器椀や灰釉陶器椀から９世紀第４四半期に比定できる。

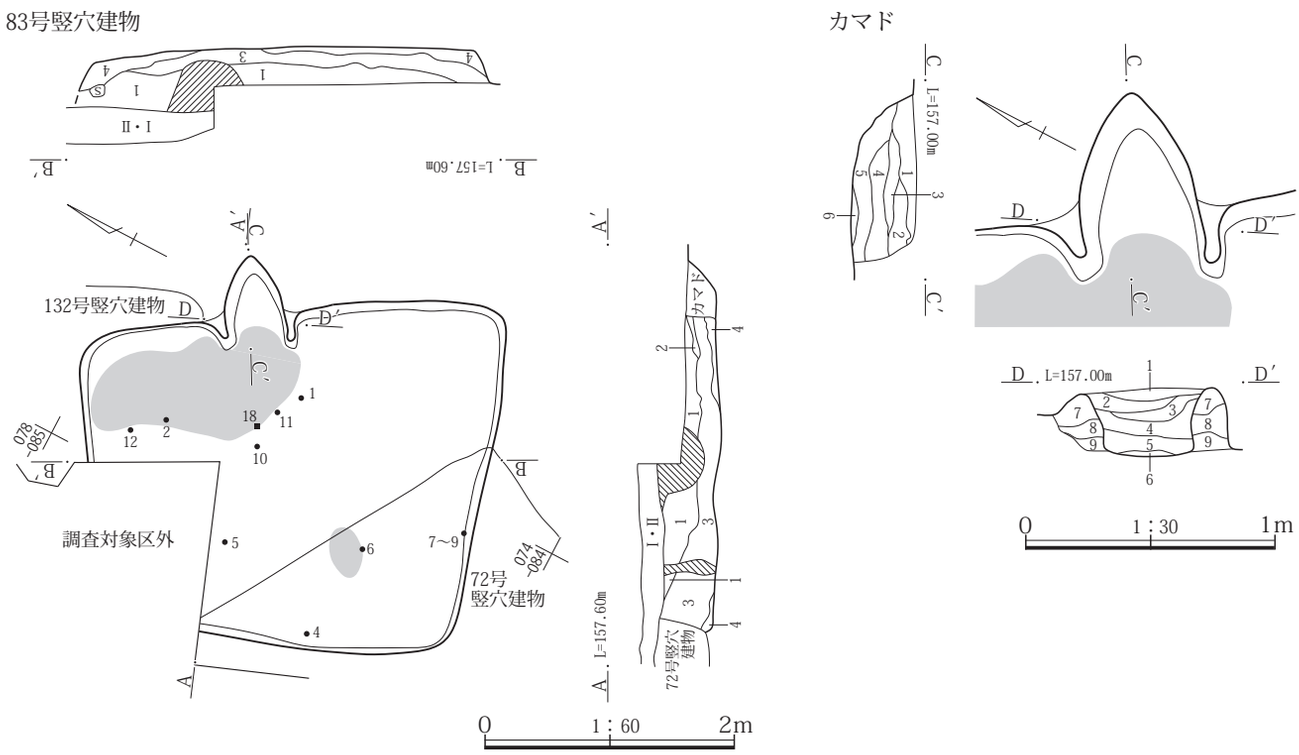
83号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37074～37078、Ｙ＝-85082～-85086に位置する。北西部は調査対象外に存在する。

重複関係　72号竪穴建物、76号竪穴建物、132号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は72号竪穴建物、76号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、132号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。なお、132号竪穴建物は出土遺物が少なく確実性にやや乏しいが、出土遺物からみると新旧関係に齟齬が生じる。

形状　南北方向に長い長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は3.08m、南北方向は3.92mを測る。確認面から床面までの壁高は20～39㎝を測る。



83号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを霜降状に多量に含み、しまりが強い。
2　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土粒を多く含む。
3　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロックを不均等にやや多く含み、しまりが強い。
4　黒褐 10YR2/2　細粒粘性土、炭化物、泥流土小ブロック等含有物を不均等に含む。
　竪穴建物中央付近は泥流土を薄い互層状に確認する。踏み固め面が２～３面あった可能性。

83号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　ややしまりが強い、微粘性土。
2　灰褐 7.5YR4/2　不揃いの焼土ブロックを不均等に含み、やや細粒土。
3　灰黄褐 10YR5/2　シルト質土、ややしまりがある弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　含有物が少ない、細粒土。
5　黒褐 10YR3/2　土質は４に近い。黒色灰を含むためか、サラサラした感触。
6　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロックを不揃いにやや多く含み、しまりが強い。
7　暗褐 10YR3/4　泥流土・As-Cを不均等に焼土を含み、ややしまりが強い。
8　黒褐 10YR3/2　泥流土が少ない、やや細粒土。
9　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土ブロックを含み、しまりが強い弱粘性土。

第112図　83号竪穴建物遺構図

床面積　推定で7.45㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－64°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　周縁部は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っているが、中央部は黒褐色土や泥流土を互層状に踏み固めている。

掘り方　調査範囲内では床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の中程よりやや北寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.76m、幅が0.73m、燃焼部幅は調査範囲内で0.48mを測る。燃焼部奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。カマド前から北東部角の床面には焼土が散在していた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、鉄製品鉸具など出土している。このうち、２の須恵器杯、４の須恵器無台椀、５の須恵器椀、６～９の土師器甕が床面からの出土である。なお、11～17の須恵器椀、灰釉陶器皿・椀、須恵器羽釜、18の鉄製品鉸具は竪穴中央からまとまって出土しており、床面より11～23㎝上からである。こうした状況から土坑など別遺構の存在が想定され、ここから出土した須恵器や灰釉陶器、鉄製品鉸具は土坑などに埋納されたものであった可能性がある。

所見　床面から出土した須恵器杯・無台椀と９の土師器甕は９世紀前半代、６～８の土師器甕は８世紀前半代の年代観が与えられる。共伴すると判断できる位置から年代観に開きがある土器が出土しているため存続時期の比定には苦慮するが、重複関係にある72号竪穴建物、76号竪穴建物の存続時期を考慮して８世紀前半に比定したい。

84号竪穴建物

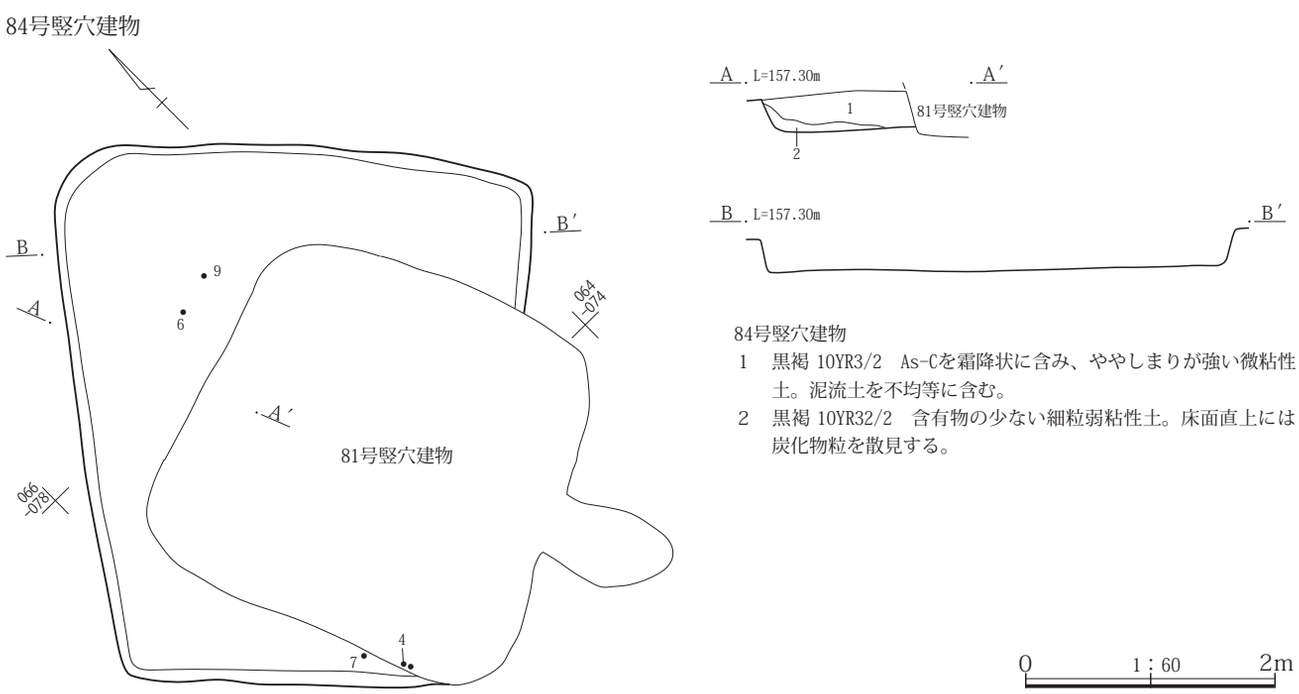
位置　１区調査区西端、Ｘ＝37062～37067、Ｙ＝-85073～-85078に位置する。中央部から東壁にかけて重複関係にある81号竪穴建物によって欠く。

重複関係　81号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は81号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古い。

形状　東西方向が長い台形状を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が3.83m、東西方向は4.34mを測る。確認面から床面までの高さ23～42㎝を測る。

床面積　推定で13.52㎡を測る。



第113図　84号竪穴建物遺構図

主軸方位　Ｎ－46°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁外から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。出土遺物からみるとカマドが構築されている時期の竪穴建物であることから81号竪穴建物と重複する南壁に構築されていた可能性が想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・短頸壺・甕などが出土しているが、重複関係にある81号竪穴建物によって多くを欠くため、図示10点、未掲載177点と少量である。このうち、４・７の須恵器杯が床面から、９の須恵器甕が床面より８㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器杯から８世紀第３四半期～４四半期に比定できる。

85号竪穴建物

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37074～37078、Ｙ＝-85030～-85033に位置する。北東角は調査対象外に存在する。

重複関係　86号竪穴建物、125号竪穴建物、６号溝と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南北に長い四角形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は2.97ｍ、南北方向は3.51ｍを測る。確認面から床面までの壁高は10～18㎝を測る。

床面積　残存範囲内で7.72㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－96°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中央部が盛り上がるような不自然な堆積が確認できることから人為的な埋め戻しが行われたと判断される。

床面　床下土坑部分は暗褐色土を充填して床面を造っていたが、その他は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　中央やや西寄りで床下土坑１基を検出している。床下土坑は形状が楕円形を呈し、規模は径1.05ｍ×0.93ｍ、深さ0.17ｍを測る。内部から土器などの出土はみられなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.04ｍ、幅が1.18ｍ、燃焼部幅0.31ｍを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部中程の両袖には径８～10㎝、長さ22～25㎝の棒状礫が残存する袖の中位に立つように据え付けられていた。その位置から甕を据え付けた際の支え伴うものに使用されたものと想定される。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器椀・羽釜・甕、緑釉陶器皿・灰釉陶器椀、瓦片、鉄製品刀子、環状製品が出土している。このうち、17・21の須恵器椀が床面から、６・20の須恵器杯・椀がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯、椀から10世紀第１四半期に比定できる。なお、出土遺物から比定すると86号竪穴建物との重複関係に齟齬が生じるが、これについては86号竪穴建物の所見に記した。

86号竪穴建物

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37073～37079、Ｙ＝-85029～-85035に位置する。中央部から南東部は重複関係にある85号竪穴建物によって欠く、また、東辺は試掘坑によって不明である。

重複関係　85号竪穴建物、125号竪穴建物、６号溝、137号ピットと重複関係にある。新旧関係は125号竪穴建物、137号ピットより本竪穴建物のほうが古く、125号竪穴建物、６号溝より新しい。

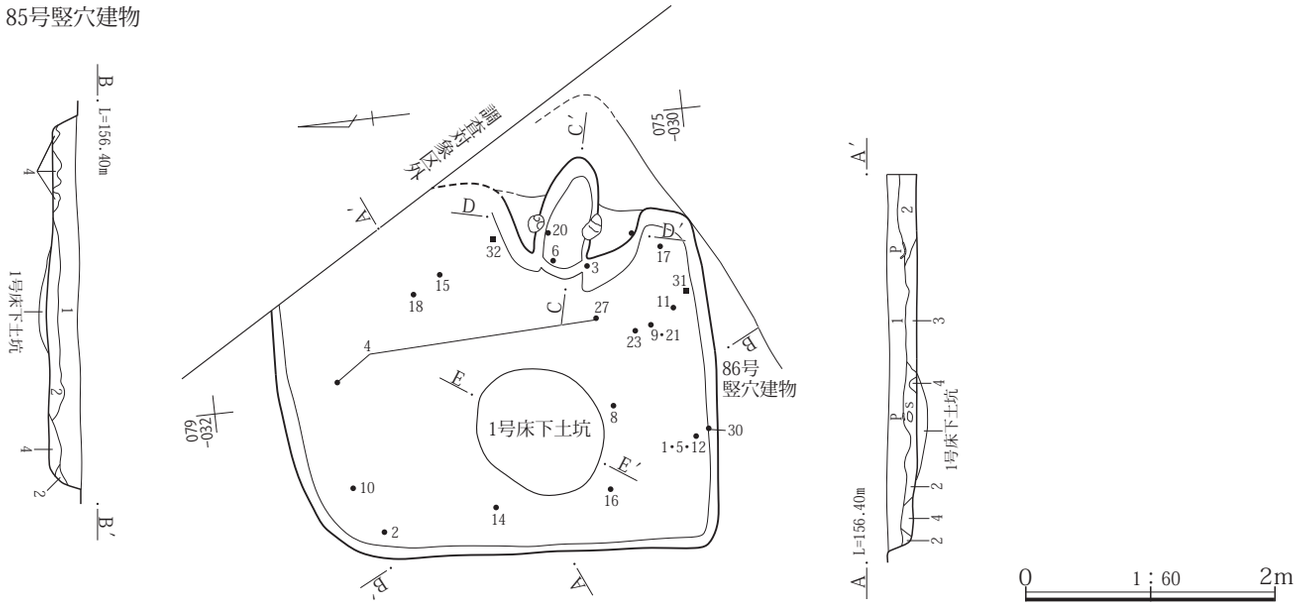
形状　北西角が115°と広角であることから台形状を呈すると想定される。

規模　東西方向は4.8ｍと想定され、南北方向は4.97ｍを測る。確認面から床面までの壁高は２～11㎝を測る。

床面積　残存範囲内で21.22㎡を測る。

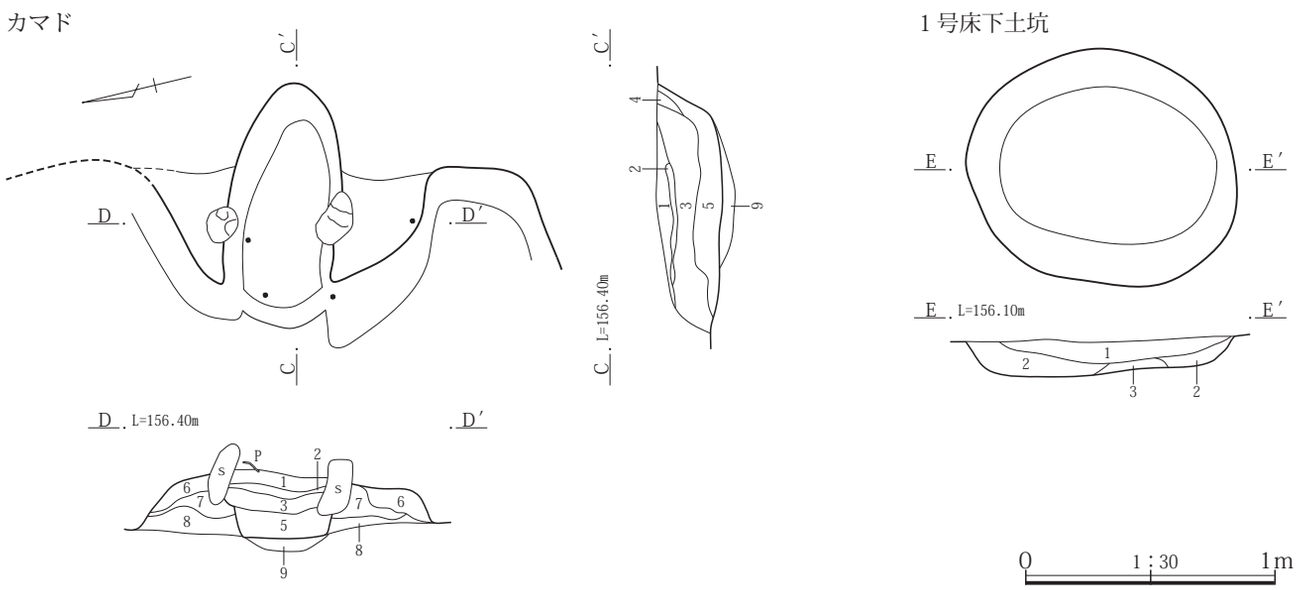
主軸方位　Ｎ－63°－Ｅを指す。

85号竪穴建物



85号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を不均等に昇竜音焼土を少し含む、弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/2　含有物少なく、ややしまりが弱い細粒弱粘性土。
3　灰褐 5YR4/2　泥流土を基質に黒褐色土もブロック状に混土、小ブロック状の焼土や炭化物が不均等に含む、粘性土。人為的埋め戻し土。
4　暗灰黄 2.5Y 4/2　泥流土ブロック。

カマド



85号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　焼土、炭化物粒を若干含み、ややしまりが弱い細粒弱粘性土。
2　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土小ブロック主体、ややしまりがある。焼土がブロック状で不自然なことから崩落した天井部の被熱部分か。
3　暗褐 2.5Y 3/3　焼土、泥流土粒、炭化物粒を含み、ややしまりが弱い細粒弱粘性土。
4　灰褐 7.5YR4/2　不明瞭な泥流土が主体、焼土小ブロックを少量含む、
5　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多く微量の焼土を含み、ややしまりが弱い弱粘性土。火床面直上の埋没土とみられる。
6　暗褐10YR3/3　泥流土粒を若干含む、粒子細かな弱粘性土。
7　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土を少量含み、ややしまりが弱い粒子細かな弱粘性土。
8　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックと焼土を若干含み、しまりが強い粘性土。
9　暗褐色 10YR3/3　泥流土ブロックを若干含む。
85号竪穴建物 1号床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒１％、φ１㎜の赤褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
3　にぶい黄褐 10YR4/3

第114図　85号竪穴建物遺構図

埋没状態　確認面から床面までが浅いため明確ではないが、土層断面の観察では床面中央に盛り上がるように灰黄褐色土の堆積が確認できることから人為的な埋め戻しが行われた可能性が想定される。

床面　大部分は地山をそのまま踏み固めているが、南東部は125号竪穴建物埋没土を踏み固めて床面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　調査範囲では検出されなかったが、出土遺物からみるとカマドが構築されていた可能性が想定される。

出土遺物　遺物には須恵器杯、椀、壺、土師器甕などが出土している。なお、９の土師器甕はロクロ整形による小型甕である。このうち、３～５、６～10の須恵器杯、椀、壺、土師器甕は床面からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器甕から10世紀第２四半期に比定できるが、重複関係と齟齬が生じる結果になる。しかし、85号竪穴建物は86号竪穴建物内でカマドが検出されていることから新旧関係は動かしがたい。また、本竪穴建物は確認面から床面までが浅いため、床面から出土した遺物についても混入の可能性が窺える。こうしたことから、床面から出土した遺物の中でも７の須恵器椀を共伴する遺物と判断し、その年代観から８世紀前半に比定したい。

87号竪穴建物

位置　１区調査区東南部の東端、Ｘ＝37068～37074、Ｙ＝−85025～−85030に位置する。竪穴建物の北東部側は調査範囲外のため全体の２分の１を欠く。

重複関係　調査範囲内では他の遺構との重複関係は確認されていないが、125号竪穴建物とはその位置関係から調査範囲外において重複関係にあった可能性が高い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　南北方向は4.75m、東西方向は調査範囲内で4.58mを測る。確認面から床面までの壁高は20～47㎝を測る。

床面積　残存範囲内で10.96㎡を測る。

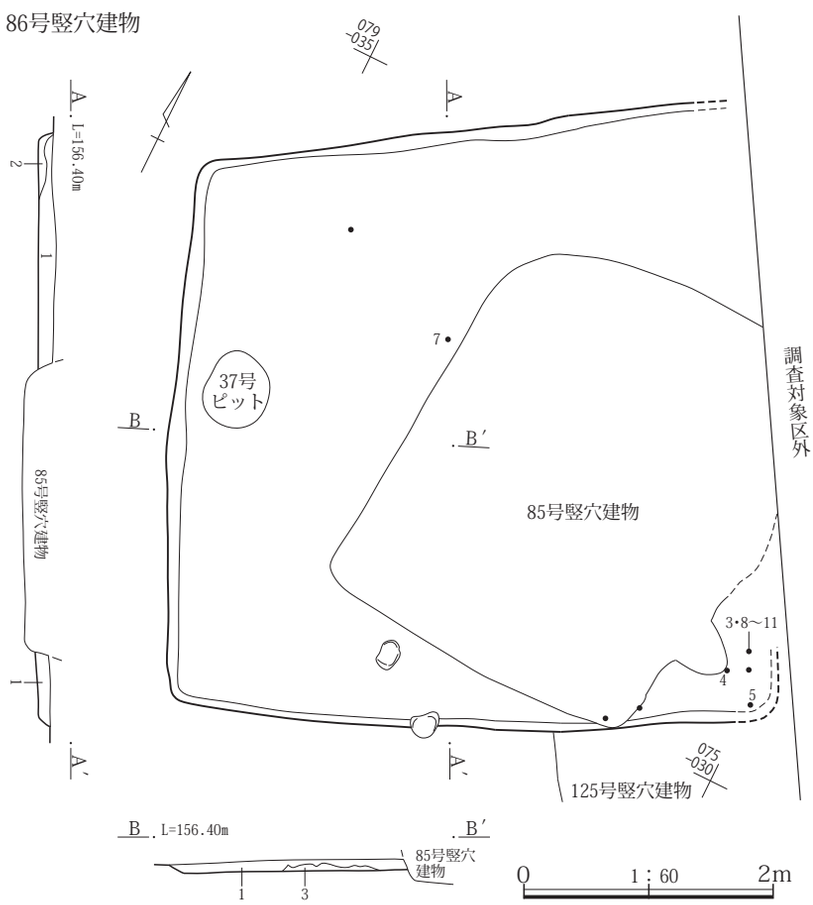
主軸方位　主軸方向を北方向と想定するとＮ－11°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では、レンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　南西部の一部では浅い掘り方が確認され、そこには黄褐色土が充填され床面を造っているが、その他は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では西壁下と南壁下で検出されているが、北西角、南西角



86号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒、As-Cを不均等にやや多く含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　１中に灰色味強い泥流土ブロックをやや多く含む。
3　暗灰黄 2.5Y4/2　灰色味が強い泥流土主体、若干と黒褐色粘性土を含む。

第115図　86号竪穴建物遺構図

と南壁下の西側2.0ｍでは検出されなかった。規模は幅が15㎝前後、深さ３～６㎝を測る。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　出土遺物からカマドが構築されていると想定されるが、調査範囲内では痕跡を含め検出されなかった。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・盤・高盤・甕などが出土している。このうち、２の土師器杯が床面、５の須恵器杯が床面上６㎝上からの出土である。なお、６～８の須恵器盤、高盤は床面より43～49㎝上からの出土であることから、後に混入した可能性が窺えるが、土器の年代観は２の土師器杯と同時期と判断できることから、竪穴建物廃棄時に投棄されたものとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や床面近くから出土した土師器杯や須恵器杯から７世紀第４四半期に比定できる。

88号竪穴建物

位置　１区調査区東端の中程、Ｘ＝37086～37089、Ｙ＝-85036～-85040に位置する。北東部とカマドの大部分は調査範囲外に存在する。

重複関係　他の遺構との重複関係は確認されていない。

形状　東辺に対して西辺が短い台形状を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は3.28ｍ、南北方向は3.47ｍを測る。確認面から床面までの壁高は５～14㎝を測る。

床面積　推定で9.71㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－92°－Ｅを指す。

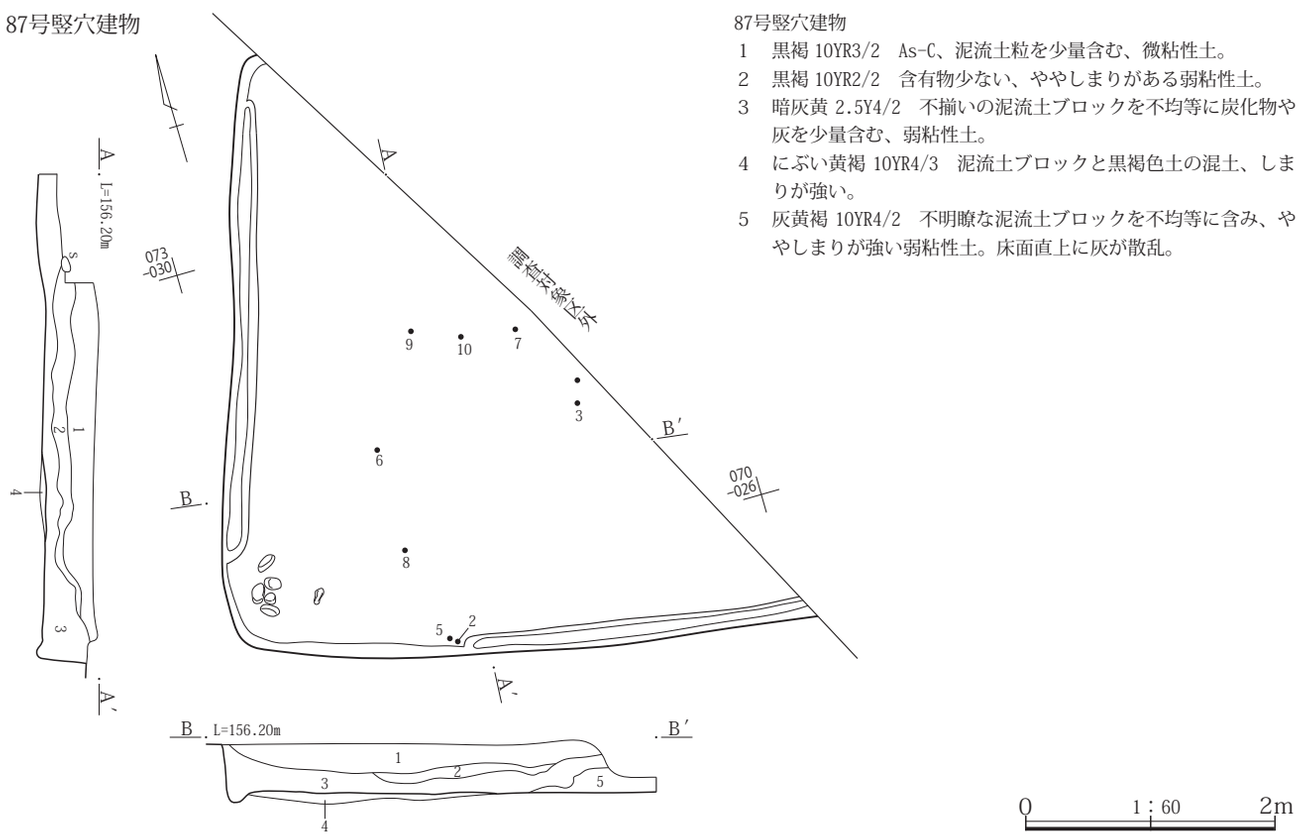
埋没状態　確認面から床面までが浅いため土層断面観察の畦では判断ができないが、調査範囲域での断面を観察すると周囲から土砂が流れ込んだ様相が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　大部分は地山ををそのまま踏み固めて平坦面を造っているが、一部では泥流土を互層状に踏み固めて床面としている。

掘り方　床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

87号竪穴建物



87号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を少量含む、微粘性土。
2　黒褐 10YR2/2　含有物少ない、ややしまりがある弱粘性土。
3　暗灰黄 2.5Y4/2　不揃いの泥流土ブロックを不均等に炭化物や灰を少量含む、弱粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土ブロックと黒褐色土の混土、しまりが強い。
5　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い弱粘性土。床面直上に灰が散乱。

0　1：60　2m

第116図　87号竪穴建物遺構図

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁と調査対象範囲ラインとが交差する地点で焼土が確認できたことから、ここにカマドが存在すると想定されているが、大部分は調査対象外のため全貌は不明である。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器椀、緑釉陶器輪花皿などが出土している。このうち、１・３～６須恵器椀、８の灰釉陶器椀、９の緑釉陶器輪花皿が床面からの出土である。なお、本竪穴建物では、後の混入とみられる須恵器杯、高盤脚、土師器甕なども出土している。

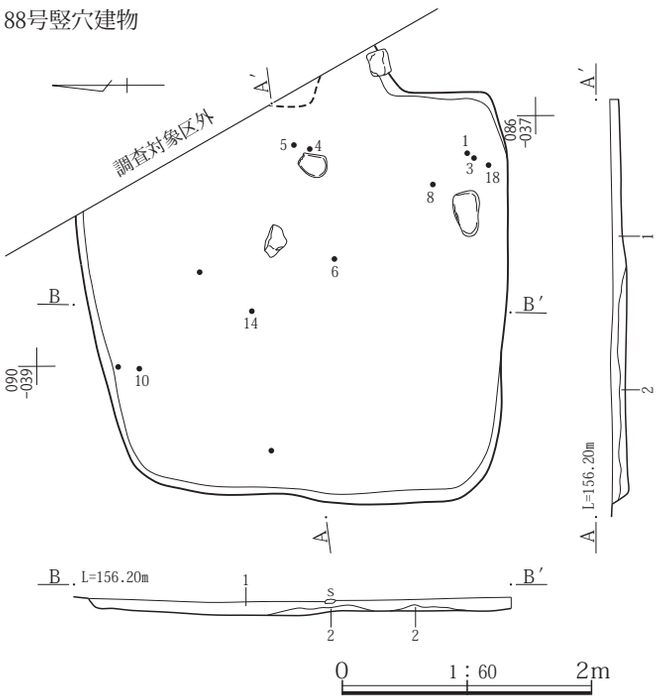
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土している須恵器椀などから10世紀第１四半期に比定できる。

89号竪穴建物

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37081～37086、Ｙ＝−85038～−85042に位置する。

重複関係　96号竪穴建物、97号竪穴建物、117号竪穴建物、

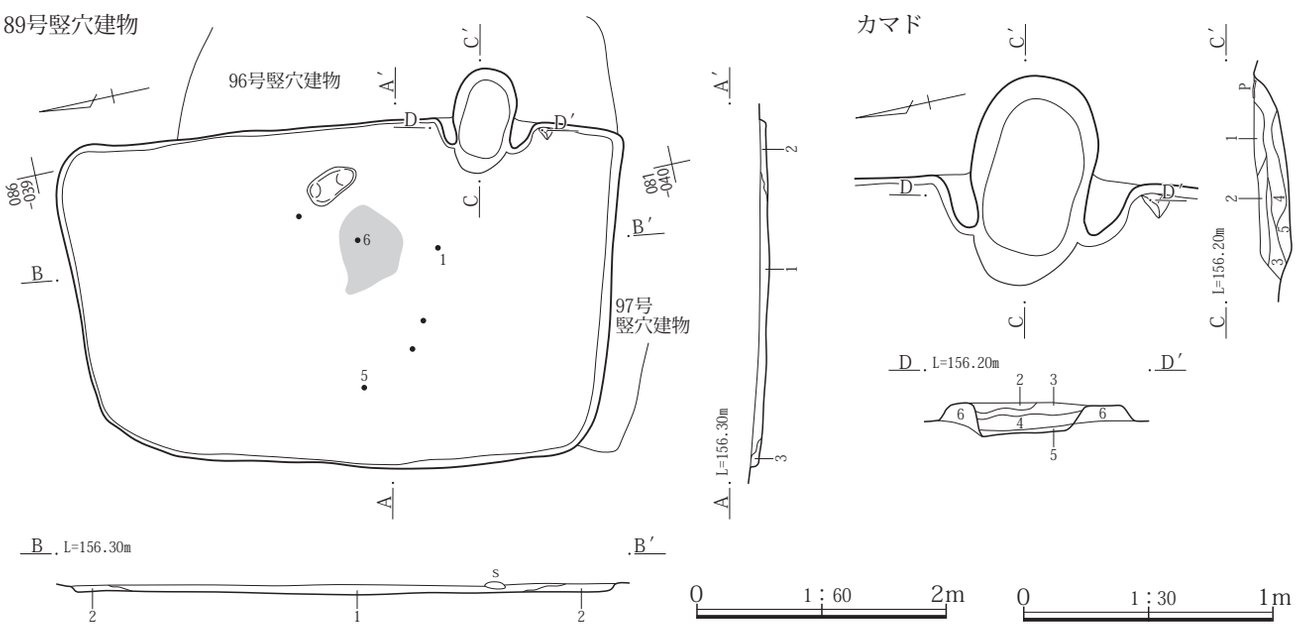
88号竪穴建物



88号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を少量と炭化物を多く含む、微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　含有物少ない細粒弱粘性土だが、一部で黄色味強い泥流土が薄層状に見られる。

第117図　88号竪穴建物遺構図

89号竪穴建物



89号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量と炭化物、焼土を不均等に少量含む、微粘性土。
2　黒褐 10YR2/2　炭化物粒を少量含む、細粒弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　As-Cの混土、しまりが弱い。

89号竪穴建物　カマド
1　灰褐 7.5YR4/2　焼土粒、泥流土粒をやや多く含む、弱粘性土。崩落した天井部構築材とみられる。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土を少量と焼土、炭化物を若干含み、しまりが強い弱粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体、焼土を若干含み、ややしまりが強い。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を不均等にやや多く含み、ややしまりを欠く微粘性土。
5　黒褐 10YR3/3　黒色灰を少量含み、しまりやや強い。
6　暗褐 2.5Y3/3　泥流土と黒褐色土の混土、不均等に焼土と炭化物粒を含み、しまりが強い。

第118図　89号竪穴建物遺構図

124号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南北方向に長く、西辺が東辺に比べ0.7mほど短い台形状を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は2.30m、南北方向は4.46mを測る。確認面から床面までの壁高は５㎝前後を測る。

床面積　10.37㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－109°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅く埋没状態が不明のため判断できない。

床面　96号竪穴建物と重複する部分は96号竪穴建物の埋没土を踏み固めているが、重複していない。南辺、西辺側は床面をそのまま踏み固めて床面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　南壁の南東角から0.7mほどの位置にカマドが構築されている。残存状態は焚口が失われていたが、燃焼部から煙道部の天井は崩落した状態で残存していた。両袖は残存していた。規模は全長が0.84m、幅が0.79m、燃焼部幅0.35mを測る。燃焼部奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。

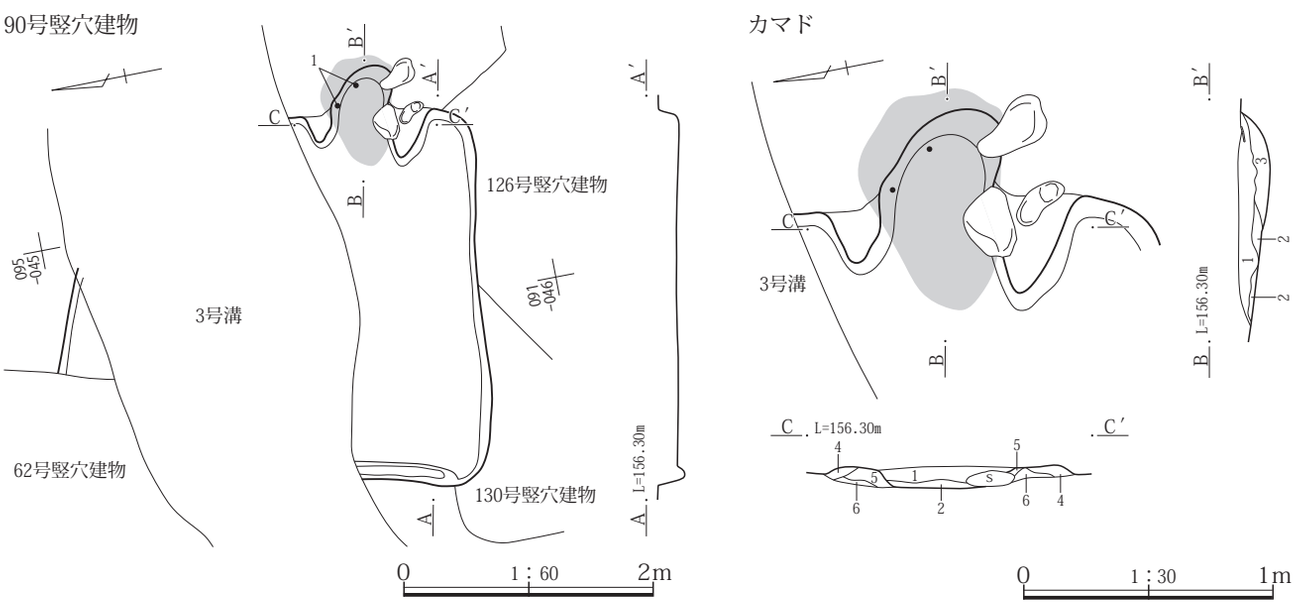
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器皿、鉄製品釘、刀子などが出土している。このうち、１の土師器杯と５の鉄製品刀子、６の釘は床面から、３の須恵器椀はカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器杯や須恵器椀から９世紀第３四半期に比定できる。

90号竪穴建物

位置　１区調査区東部、Ｘ＝37091～37096、Ｙ＝-85044～-85047に位置する。重複関係にある62号竪穴建物、３号溝によって北側３分の２を欠く。

重複関係　62号竪穴建物、126号竪穴建物、130号竪穴建物、３号溝と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが62号竪穴建物、３号溝より古く、126号竪穴建物、



90号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　単一土。As-Cを少量含む、ややしまり強い微粘性土。炭化物を少量、焼土を微量含む。
90号竪穴建物　カマド
1　灰黄褐 10YR4/2　As-Cを少量含み、しまりが強い。焼土粒、炭化物粒を不均等に含む。
2　灰褐 10YR4/2　焼土粒をやや多く含み、ややしまりが弱い。
3　黒褐 10YR2/2　黒色灰主体。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　黄色味の強い泥流土ブロック主体、As-Cを含む。
5　暗褐 7.5YR3/3　泥流土粒を多く焼土粒を不均等にやや多く含む、弱粘性土。
6　黒褐 10TR3/2　黒色灰を含み、しまり強い弱粘性土。

第119図　90号竪穴建物遺構図

130号竪穴建物より新しい。

形状　残存箇所の状態から西辺が東辺比べて長い台形を呈すと想定される。

規模　主軸方向の東西方向は3.00m、南北方向は3.50mを測る。確認面から床面までの壁高は２～10㎝を測る。

床面積　推定で7.99㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－105°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが非常に浅いため土層断面の観察では、暗褐色土単層によって埋没しており埋没状態について判断ができない

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や126号竪穴建物などの埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存する西壁の壁際で検出されたが他の壁際には掘り込まれていなかった。規模は幅12㎝前後、深さ３㎝前後である。

柱穴　残存範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲内では検出されなかった。

その他施設　残存範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の東南角寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部天井は壊されて痕跡も残存していない状態であったが、両袖は下位の部分が残存していた。なお、焚口や燃焼部天井に補強材として使用されたと見られる礫や須恵器甕片が、燃焼部奥や壁外に散乱した状態で出土していた。規模は全長0.80m、幅1.03m、燃焼部幅0.40m、燃焼部は壁外に0.3mほど広がる。燃焼部火床面は激しく焼土化しており使用頻度の多さが窺えた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。竪穴建物の大部分を重複する３号溝によって欠くため、出土量は図示１点、未掲載34点とわずかである。図示した１の須恵器椀はカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した須恵器椀より９世紀第４四半期に比定できる。

91号竪穴建物

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37078～37083、Ｙ＝-85032～-85037に位置する。北東角は調査対象外に存在するため欠く。

重複関係　117号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが117号竪穴建物より新しい。

形状　多少各辺長が異なるが、南北に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は3.44m、南北方向は5.17mを測る。確認面から床面までの壁高は15～40㎝を測る。

床面積　14.46㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－112°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積とレンズ状の堆積が確認できたことから自然埋没と判断される。

床面　117号竪穴建物と重複する部分は117号竪穴建物の埋没土、南辺側は地山をそのまま踏み固めて床面としている。

掘り方　カマド前のほぼ中央で１号床下土坑が検出されている。形状は楕円形を呈し、規模は径1.14×1.00m、深さ0.26mを測る。内部からは７と10の須恵器杯、25の鉄製品刀子と東寄りで礫がまとまって出土している。

壁溝　東壁のカマドより西側で検出されている。規模は幅20㎝前後、深さ５～10㎝を測る。

柱穴　竪穴西側、対角線上でＰ１とＰ２の柱穴２本が検出されている。Ｐ１は円形を呈し、規模は径43×40㎝、深さ25㎝を測る。Ｐ２は円形を呈し、規模は径40㎝、深さ25㎝を測る。柱穴間距離は2.50mを測る。

貯蔵穴　南東角、カマドの南側で検出されている。形状は楕円形を呈し、規模は径0.92×0.80m、深さ0.28mを測る。西側に底面との差17㎝の段が設けられている。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.71m、幅が1.25m、燃焼部幅0.37mを測る。燃焼部は奥に設けられ、煙道部は壁外に掘り込まれている。煙道部は掘り方に灰褐色土を貼り付け約30度の傾斜で立ち上げている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・長頸壺・広口壺・壺・甕、鉄製品刀子、流動滓などが出土している。このうち、１の須恵器杯蓋、４～６・９の須恵器杯、14の須恵器長頸壺、16の須恵器広口壺、17～19の土師器甕、21の須恵器甕がカマドから、７・10の須恵器杯、25の鉄製品刀子は１号床下土坑からの出土である。13・14の須恵器小型壺は床面より８㎝と22㎝上からの出土である。また、22の土師器大型杯と23の有台杯は床面より23㎝・18㎝上からの出土で、後に周囲から混入

したとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯、土師器甕から９世紀第３四半期に比定できる。

92号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37057～37062、Ｙ＝-85029～-85035に位置する。

重複関係　93号竪穴建物、３号竪穴状遺構と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが93号竪穴建物、３号竪穴状遺構より新しい。

形状　東西方向に長い長方形を呈す。

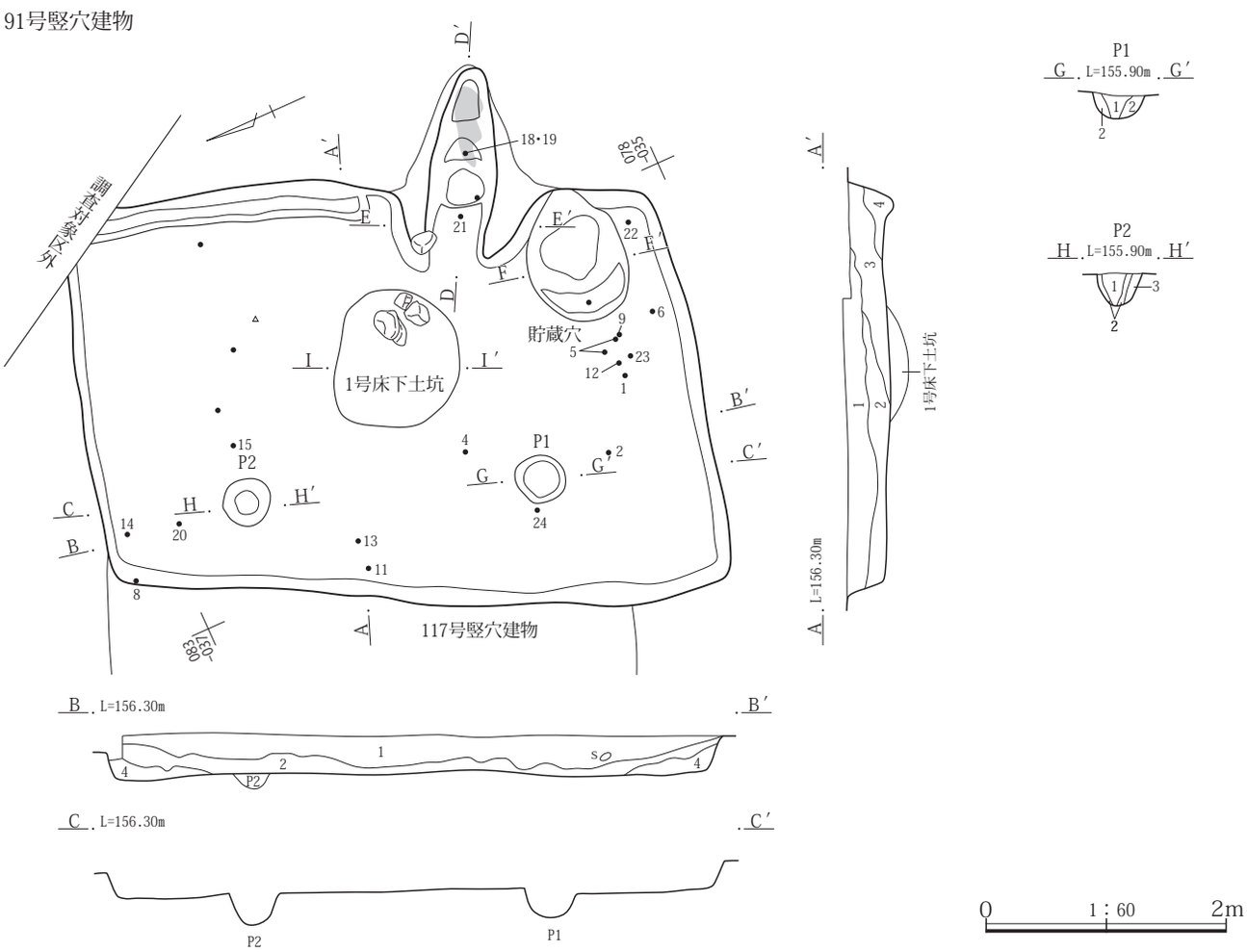
規模　主軸方向の東西方向は4.42m、南北方向は3.74mを測る。確認面から床面までの壁高は５～28㎝を測る。

床面積　14.25㎡を測る。

主軸方位Ｎ－113°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では、周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

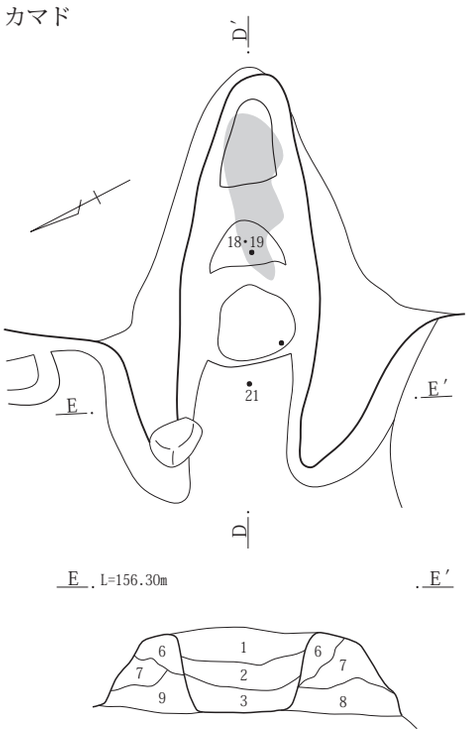
床面　カマド周囲や南東部は地山をそのまま踏み固めて

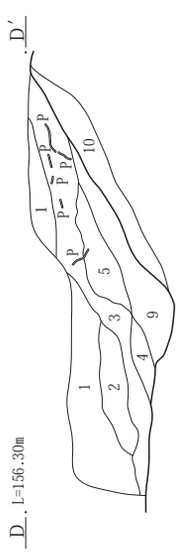


91号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒、As-Cを霜降状に炭化物を少量と焼土を若干含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/2　床面直上で炭化物粒を多く含むが、全体には含有物少ない、微粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　土質は２に近いが、泥流土をやや多く含む。
4　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土と褐色味の強い泥流土ブロックの混土、ややしまりが弱い。
91号竪穴建物　Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。
91号竪穴建物 Ｐ２
1　暗褐 10YR3/3　しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％、焼土ブロックを２％含み、やや粘性がある。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを30％含み、やや脆く粘性がある。

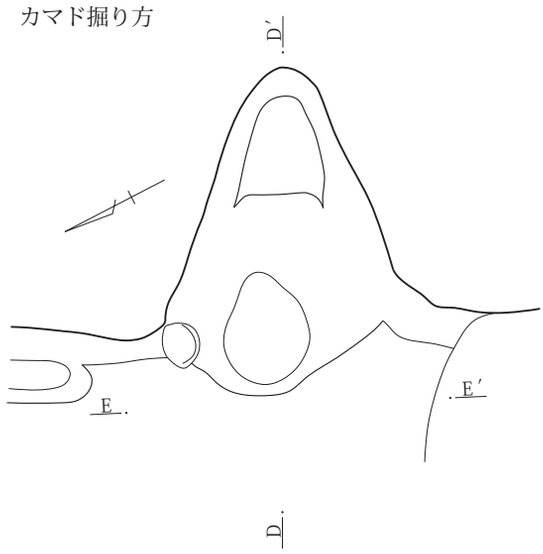
第120図　91号竪穴建物遺構図（１）

カマド



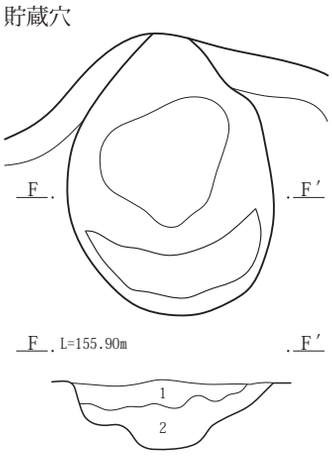


カマド掘り方

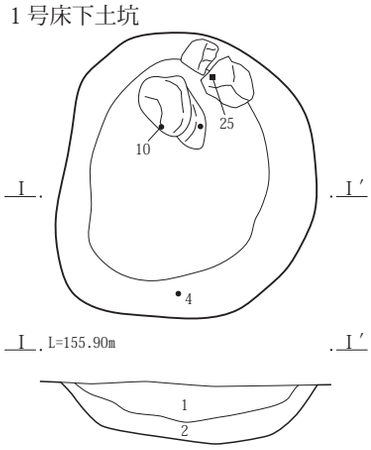


91号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C、As-SPとみられるパミス焼土粒と炭化物粒を若干含む、微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含む、弱粘性土でややサラサラした感触。
3　灰褐 5YR4/2　煙道側では焼土を小ブロック状、焚き口側では黒色灰を多く含む、弱粘性土。
4　灰褐 5YR4/2　大粒の焼土ブロックの混入やや多い。
5　暗褐 10YR3/4　炭化物粒、泥流土粒をやや多く含み、ややしまりが弱い弱粘性土でややボソボソした感触。
6　暗褐 10YR3/3　As-Cの混入やや多い、焼土粒、炭化物粒を少量含み、しまりが強い微粘性土。
7　黒褐 10YR3/2　泥流土粒を不均等に少量含み、しまりやや強い細粒土。
8　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土小ブロックの混入、しまりが強くきわめて強い粘性土。
9　暗褐 10YR3/3　黒色弱粘性土が基質、焼土ブロックを多く含み、ややしまりが強い。
10　灰褐 7.5YR4/2　黒褐色細粒土が基質、上半では焼土、下半では泥流土ブロックを含み、ややしまりが弱い。

貯蔵穴



１号床下土坑



91号竪穴建物 貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを10%含み、やや粘性がある。

91号竪穴建物 1号床下土坑
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒を不揃いに含む、弱粘性土。上面が明瞭な貼床が見られる。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックの混入多い、弱粘性土。

0　1：30　1m

第121図　91号竪穴建物遺構図（２）

平坦面を造っているが、北側は床面より掘り込み黒褐色土を充填して床面を造っている。なかでもカマド前から南東角にかけては特に硬化した状態の床面が確認でされている。

掘り方　床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角寄りで検出されている。形状は円形に近く、規模は径0.63×0.60m、深さ0.43mを測る。内部から土器などの出土はみられなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は壊され残存していなかったが、煙道部の天井は崩落した状態で残存していた。焚口に取り付く燃焼部の両袖は壁からわずかに延びた状態で残存していた。規模は全長が1.22m、幅が1.30m、燃焼部幅0.40mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に存在し、煙道部に近い火床面と壁面は激しく焼土化していた。なお、カマド前から床面中央にかけては灰を散在していた。

出土遺物　遺物には土師器杯・甑・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・鉢・高杯・甕などが出土している。このうち、４・５・７・17の須恵器杯蓋、杯身、土師器小型甕などが床面から、21の土師器甕が貯蔵穴、９・18～20・23の須恵器椀、土師器甕などがカマドからの出土である。なお、23の土師器甕は口縁部外面に墨書がみられたが、小片のため判読できなかった。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯蓋・杯身・椀、土師器甕から８世紀第３四半期～第４四半期に比定できる。

93号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37060～37063、Ｙ＝-85028～-85031に位置する。南辺側を重複関係にある92号竪穴建物によって欠く。

重複関係　92号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが92号竪穴建物より古い。

形状　東西方向に長い長方形を呈す。

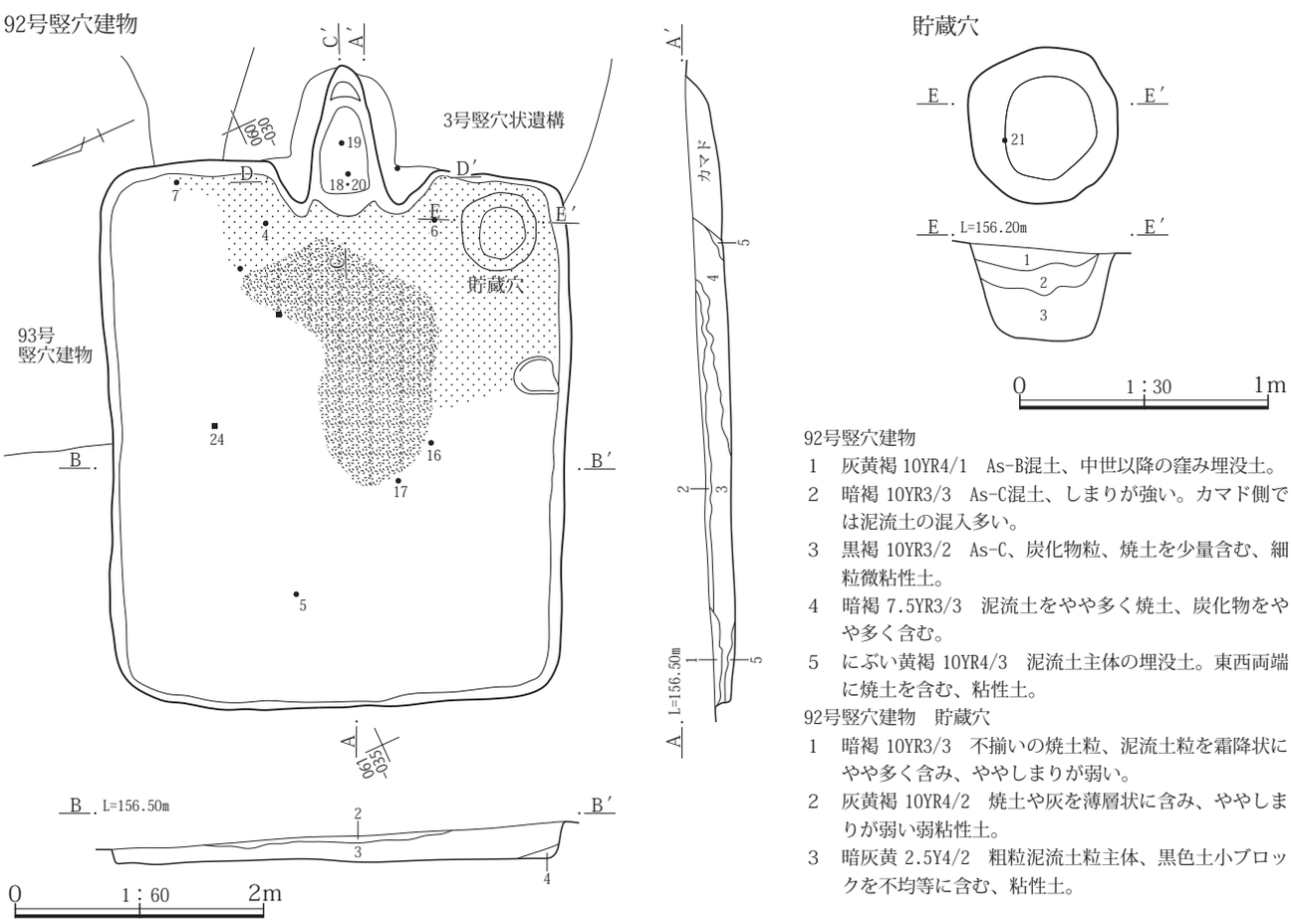
規模　主軸方向の東西方向は3.34m、南北方向は2.86mを測る。確認面から床面までの壁高は４～13㎝を測る。

床面積　推定で7.80㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅く、埋没土は土層断面の観察でも黒褐色土の堆積が確認できただけであるため、埋没状態については判断できなかった。

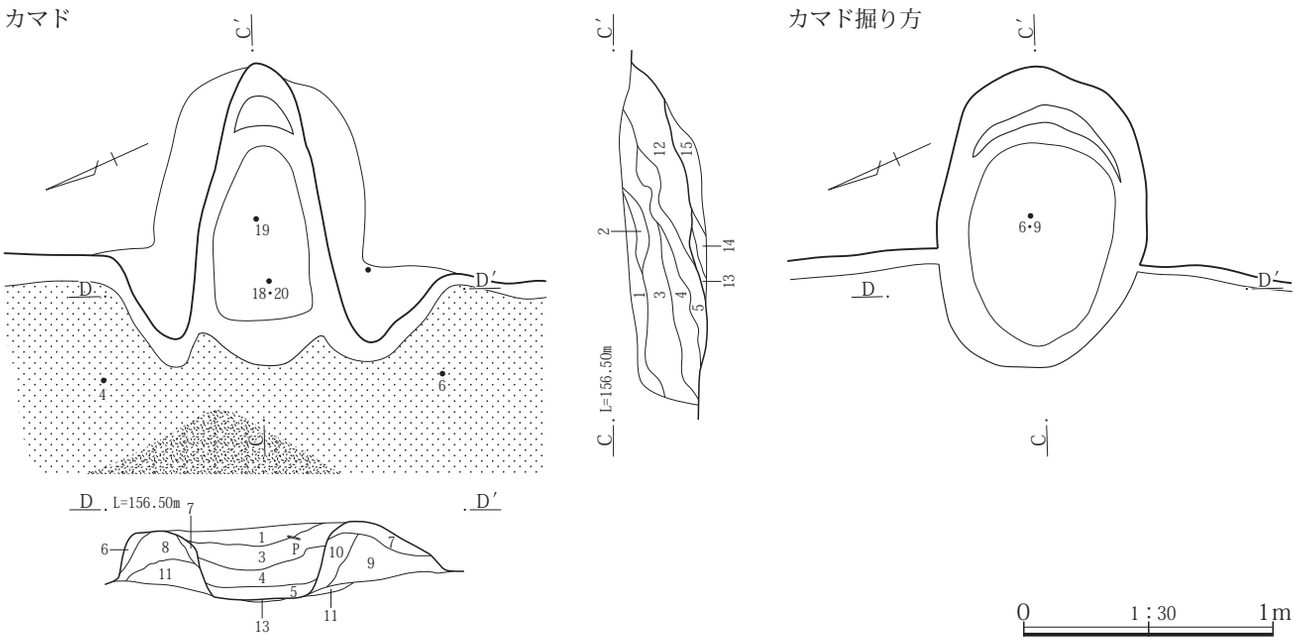
床面　１号床下土坑は黒褐色土を充填して床面としているほかは、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。



92号竪穴建物
1　灰黄褐 10YR4/1　As-B混土、中世以降の窪み埋没土。
2　暗褐 10YR3/3　As-C混土、しまりが強い。カマド側では泥流土の混入多い。
3　黒褐 10YR3/2　As-C、炭化物粒、焼土を少量含む、細粒微粘性土。
4　暗褐 7.5YR3/3　泥流土をやや多く焼土、炭化物をやや多く含む。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体の埋没土。東西両端に焼土を含む、粘性土。

92号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　不揃いの焼土粒、泥流土粒を霜降状にやや多く含み、ややしまりが弱い。
2　灰黄褐 10YR4/2　焼土や灰を薄層状に含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
3　暗灰黄 2.5Y4/2　粗粒泥流土粒主体、黒色土小ブロックを不均等に含む、粘性土。

第122図　92号竪穴建物遺構図（１）



92号竪穴建物 カマド
1　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒、泥流土内の大粒パミスをやや多く含み、ややしまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土、しまりが強い。
3　黒褐 10YR3/2　焼土、泥流土細粒を不均等にやや多く含み、しまりが強い微粘性。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土、焼土、炭化物を少量含み、しまりが強い。
5　暗褐 7.5YR3/3　黒色灰の混土、焼土小ブロックを不均等にやや多く含み、ややボソボソした感触。
6　灰黄褐 10YR4/1　As-C混土。しまりが強い。
7　灰黄褐 10YR4/2　SPとみられるパミスを多く含み、しまりが弱い弱粘性土。
8　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土の混入多い。
9　暗褐 7.5YR3/3　黒色粘性土が大ブロック状に混土、褐色味の強い泥流土と焼土をやや多く含み、しまりが強い弱粘性土。
10　暗褐 7.5YR3/3　黒色粘性土主体で焼土をほとんど含まない。
11　にぶい赤褐 5YR4/3～暗褐 10YR3/3　黒色灰主体で、一部薄層状に焼土を含む。
12　にぶい黄褐 10YR4/3～5YR4/2　不揃いの泥流土ブロック主体、しまりが強い。煙道側では赤変しているものが多く、ピットの状凹み内は褐色土の混入が多い。旧カマドの崩落天井材を多量に含む。
13　黒 10YR3/1　黒色灰。
14　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土。旧カマド火床面部でしまりが強い。
15　暗褐 10YR3/3　褐色味強い粗粒土中に焼土、炭化物粒を含む、旧カマド掘り方埋め戻し土。

第123図　92号竪穴建物遺構図（２）

掘り方　西壁際から床下土坑１基を検出している。形状は東側が角張った角をもつが、西側は弧状を描く。規模は長径・短径とも1.23m、深さ0.25mを測る。内部からは土器などの遺物は出土していない。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

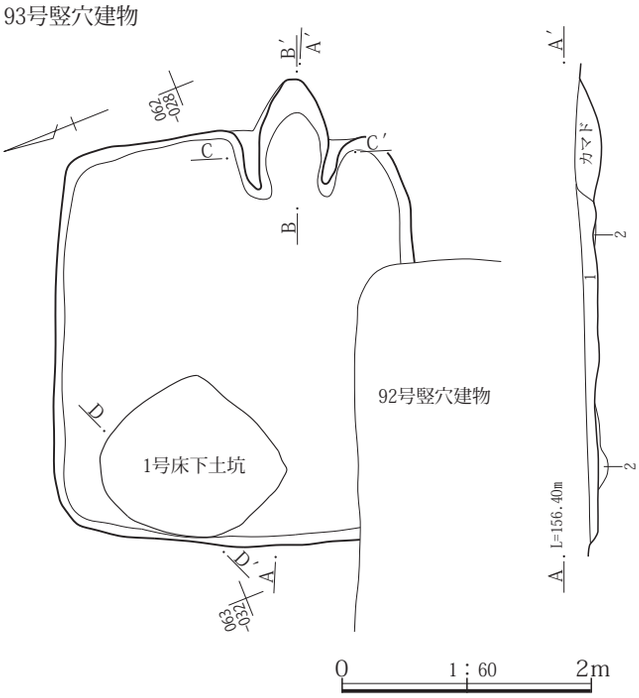
その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は壊され残存していなかったが、両袖は残存している。規模は全長が0.95m、幅が0.90m、燃焼部幅0.43mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。掘り方は土坑状に掘り込み、さらに燃焼部にあたる箇所に浅い窪みを設けていた。

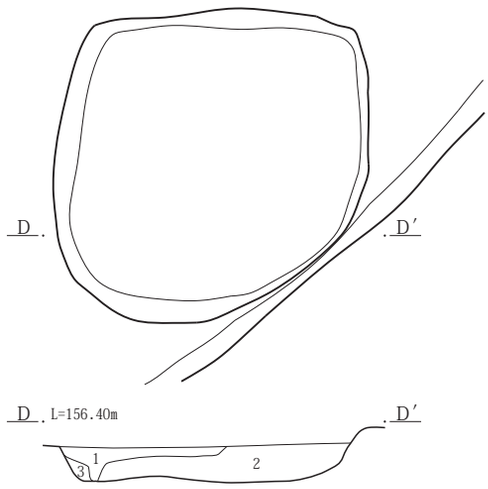
出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯・高杯・甕などが出土しているが、出土量は図示１点、未掲載58点とわずかであった。図示できたものは１の台付甕の脚部だけであった。この破片も脚端部が直線的であることから混入の可能性が窺えた。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した遺物が少なく明確ではないが、重複関係にある竪穴建物の年代や図示できなかった遺物等から判断し、８世紀前半代に比定したい。

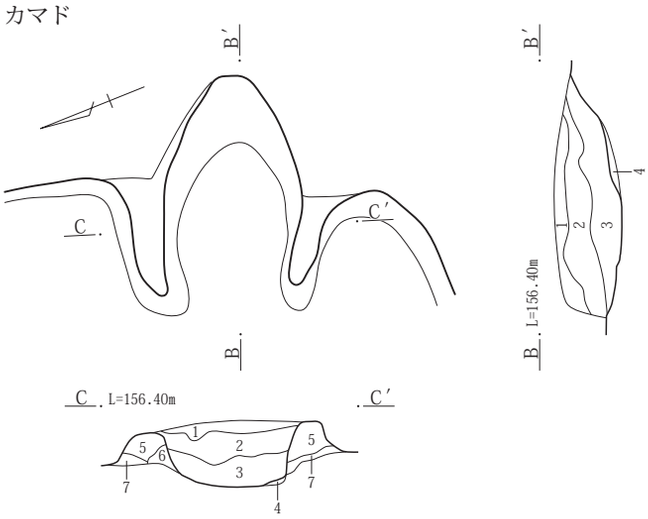
93号竪穴建物



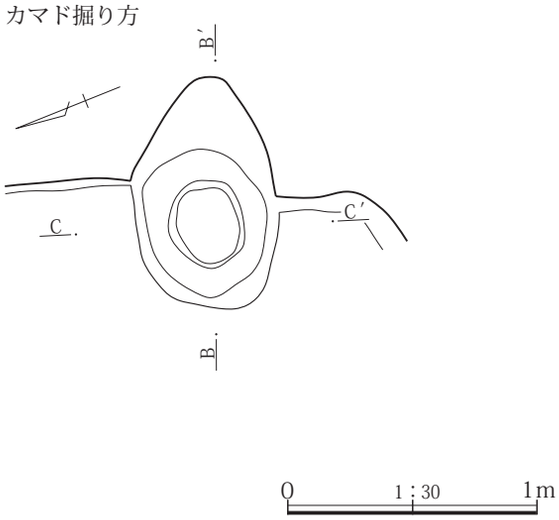
1号床下土坑



カマド



カマド掘り方



93号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-Cや泥流内の大型パミスを不均等に含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　黒色粘性土砂質土が部分的に混入、掘り方埋め戻し土。
93号竪穴建物 カマド
1　黒褐 10YR2/2　泥流土粒、白色パミスを不均等に焼土を少量含み、ややしまりが強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　大粒泥流土ブロックと黒褐色土ブロックの混土。煙道側や燃焼部壁際で焼土をやや多く含む。
3　黒褐 7.5YR3/2　細粒土が基質、黒色灰、焼土を不均等にやや多く含み、ややしまりがある。
4　暗褐 10YR3/4　焼土小ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い弱粘性土。
5　灰黄褐 10YR4/2　左袖にはSPとみられるパミス多く、右袖には不揃いの焼土ブロックを含み、しまりが強い細粒土。
6　褐 7.5YR4/3　焼土粒を多く含む、弱粘性土。
7　暗褐 10YR3/3　含有物少ない、ややしまりが強い弱粘性土。袖基部構築材。
93号竪穴建物　１号床下土坑
1　黒褐10YR2/3　褐色土ブロックを２％、焼土ブロックを１％含み、しまりがある粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　粘土ブロックを５％、褐色土ブロックを５％、焼土ブロックを３％含み、やや粘性がある。
3　暗褐 10YR3/4　φ１～２㎜の白色粒を２％含み、やや粘性があり、柔らかい。

第124図　93号竪穴建物遺構図

94号竪穴建物

位置　１区調査区南東端、Ｘ＝37048～37052、Ｙ＝−85018～−85021に位置する。東側２分の１程度が調査対象外に延びるため欠く。

重複関係　112号竪穴建物、34号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが34号土坑より古く、112号竪穴建物より新しい。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向と想定される東西方向は調査範囲内で2.50m、南北方向は3.24mを測る。確認面から床面までの壁高は24～33㎝を測る。

床面積　残存範囲内で6.78㎡を測る。

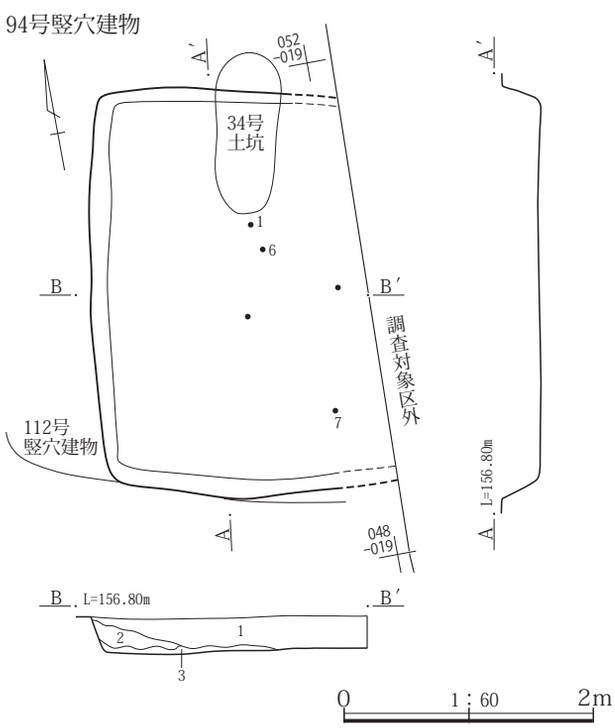
方位　主軸方向を東西方向と想定するとＮ－102°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　重複関係にある112号竪穴建物の埋没土を踏み固めて床面を造っている。

掘り方　床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。



94号竪穴建物
1　褐 10YR4/4　As-YPをわずかに含む。
2　暗褐 10YR3/3　含有物ほとんどみられない。
3　暗褐 10YR3/3　２に類似。

第125図　94号竪穴建物遺構図

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかったが、出土遺物からカマドが構築されていたと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。このうち、床面からの出土遺物はみられなかったが、１の須恵器皿が床面より12㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に共伴する土器が出土していないが、出土した土器の主体は１の須恵器皿や８の土師器甕と同形態であることから９世紀第３四半期に比定できる。

95号竪穴建物

位置　１区調査区東北部、Ｘ＝37098～37106、Ｙ＝−85042～−85048に位置する。東半分は調査対象外が存在する。

重複関係　40号竪穴建物、66号竪穴建物、98号竪穴建物、99号竪穴建物、100号竪穴建物、116号竪穴建物、35号土坑と重複関係にある。新旧関係は40号竪穴建物、66号竪穴建物、35号土坑より本竪穴建物のほうが古い。他の重複関係にある遺構と新旧は明確ではないが、出土遺物等からみると本竪穴建物のほうが古い。

形状　長方形または方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は6.54m、南北方向は調査範囲内で5.90mを測る。確認面から床面までの壁高は15～31㎝を測る。

床面積　残存範囲内で22.19㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－55°－Ｗを指す。

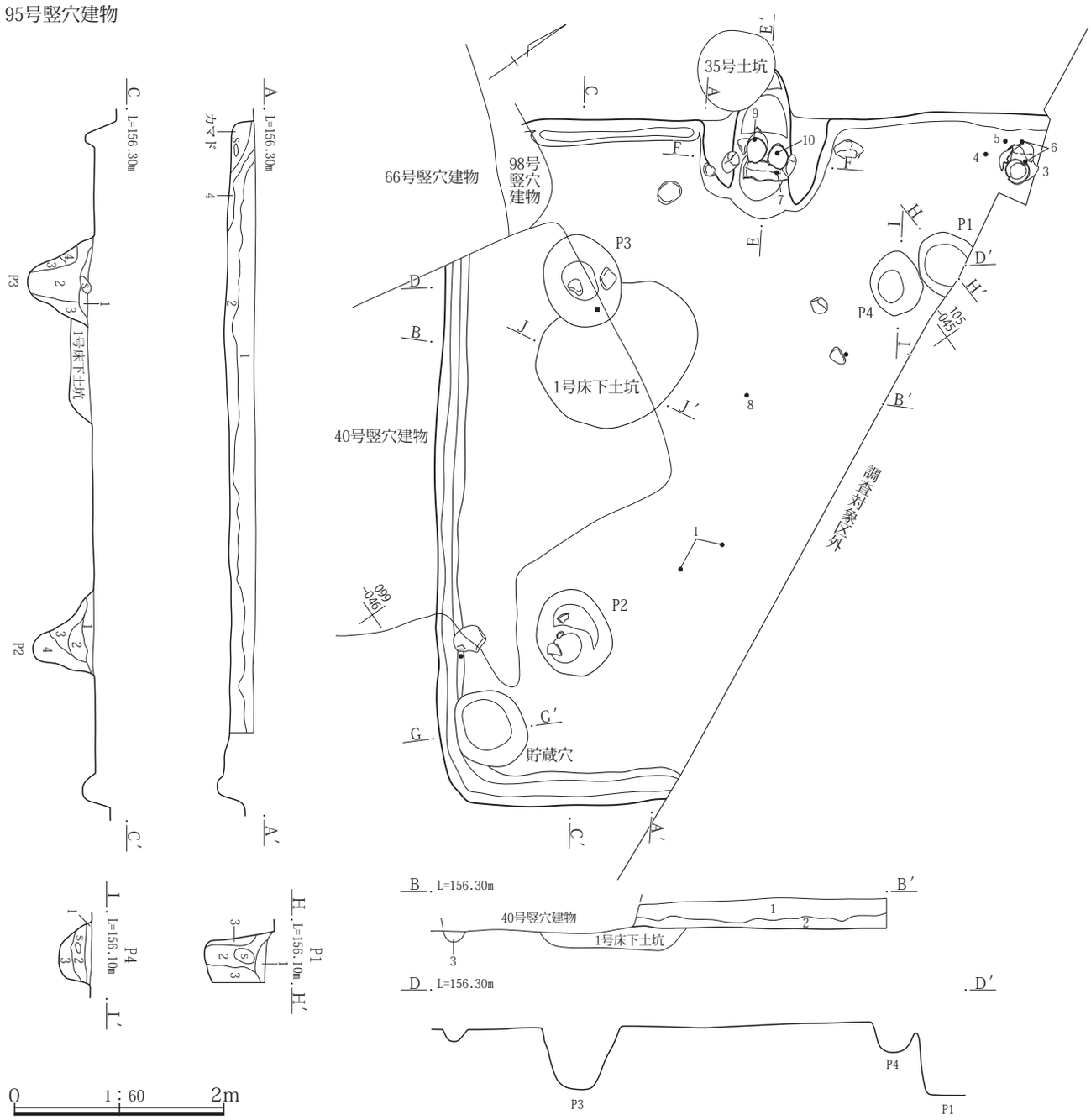
埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、床下土坑部分を除き、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、竪穴南東部で床下土坑１基を検出している。床下土坑は形状が南北に長い楕円形を呈し、規模は径1.58m×1.22m、深さ0.20mを測る。内部からは土器などの出土はみられなかった。

壁溝　西壁のカマド南側から南壁、東壁の壁際で検出している。規模は幅が15～20㎝、深さ５～10㎝を測る。

95号竪穴建物



95号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを霜降状にやや多く泥流土粒、焼土等を不均等に含み、しまりやや強い。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物を多く含む、やや細粒の微粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　壁溝部分。泥流土の流入多い。
4　暗赤褐 5YR3/3　やや細粒の微粘性土が基質、不均等に不明瞭な焼土ブロックを不均等に含む。カマド構築土の崩落土が混入。

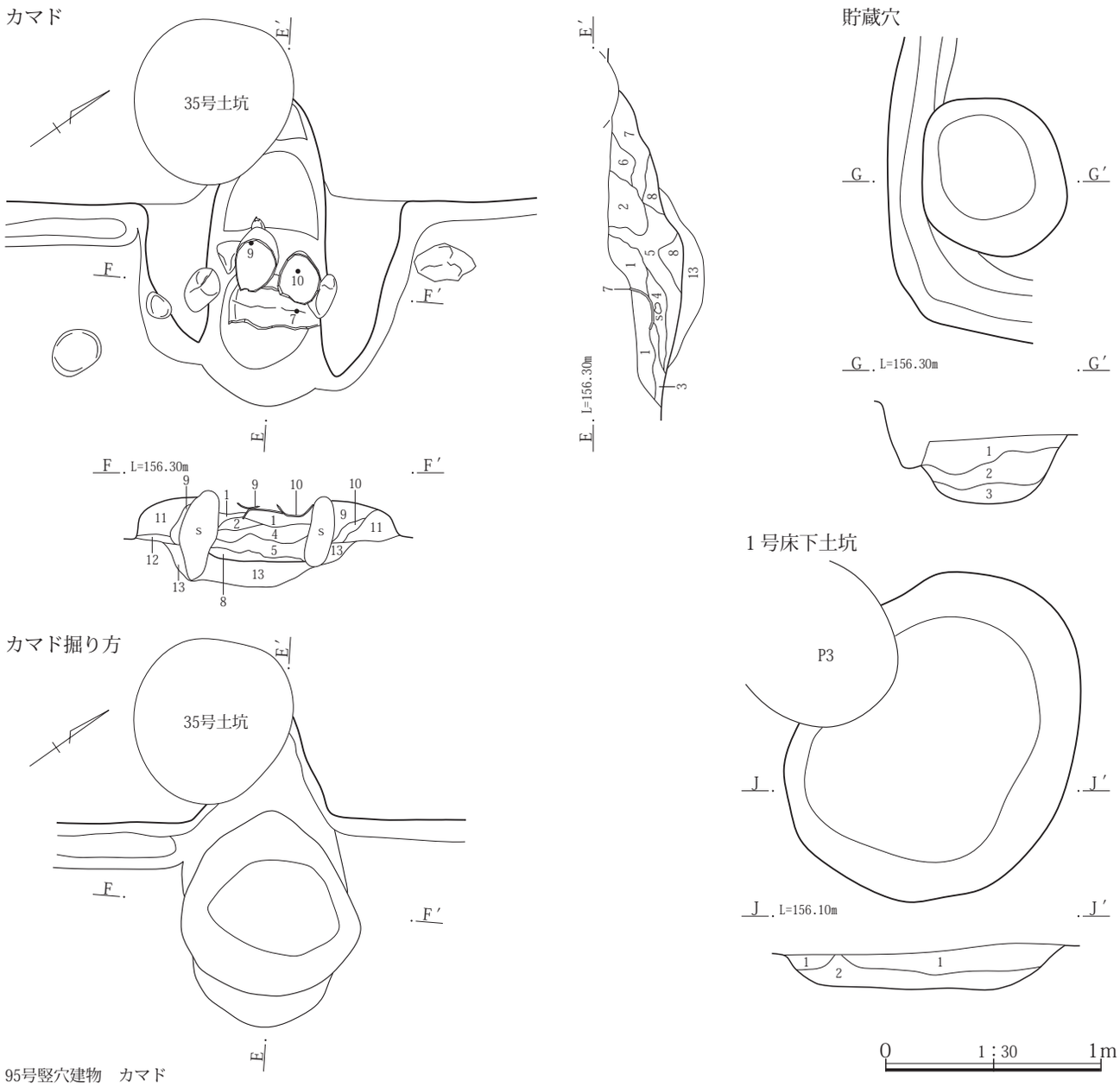
95号竪穴建物 Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを１％、焼土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを20％、焼土ブロックを１％含み、ややもろい。

95号竪穴建物　Ｐ２
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを５％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を30％含み、やや粘性がある。
4　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを10％含み、やや粘性がある。

95号竪穴建物　Ｐ３
1　暗褐 10YR3/3　炭化物片を１％、褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを10％含み、やや粘性がある。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを15％、赤褐色土ブロックを１％含み、やや粘性がある。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を10％含む。

95号竪穴建物　Ｐ４
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％、炭化物片を１％、焼土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを20％、φ１～５㎜の赤褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを２％、にぶい黄褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。

第126図　95号竪穴建物遺構図（１）



95号竪穴建物　カマド

1　暗褐 10YR3/3　やや粗粒土、泥流土粒や焼土粒を少量含む、非粘性土でボソボソした感触の非粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　焼土少なく、泥流土を多く含む。
3　黒褐 10YR3/2　やや焼土化したような粗粒土主体、ややしまりが弱い。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を多く含む、火床面直上の埋没土。
5　灰褐 5YR4/2　焼土化した不明瞭な泥流土。および下半は崩落したブロック状の焼土と黒褐色土の混土。
6　灰褐 5YR4/2　やや粗粒土。被熱痕があまり明瞭ではない赤変部分。
7　灰褐 7.5YR4/2　５と６の漸移土。
8　黒褐 7.5YR3/2　黒褐色粘性土小ブロック主体、黒色灰を不均等にやや多く含む。
9　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒、焼土粒等を含み、しまりやや強い微粘性土。
10　黒褐 7.5YR3/2　褐色のやや細粒土が基質、不均等に焼土、炭化物を多く含む。
11　灰褐 7.5YR4/2　やや大粒の泥流土、不明瞭な焼土の混入やや多いしまりが強い。
12　黒褐 10YR3/2　しまりがある細粒土。含有物少ない。
13　暗褐 10YR3/3　焼土粒や灰等を少量含み、しまりやや強い弱粘性土。

95号竪穴建物　貯蔵穴

1　暗褐 10YR3/3　炭化物片を２％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを20％、φ１～５㎜の赤褐色土ブロックを２％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　赤褐色土を帯状に含む。暗褐色土ブロックを20％含む。

95号竪穴建物　１号床下土坑

1　暗褐 10YR3/4　φ１～50㎜の褐色土ブロックを30％、φ１～５㎜の焼土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　φ１～10㎜の褐色土ブロックを10％含み、しまりがある。

第127図　95号竪穴建物遺構図（２）

柱穴　調査範囲内では主柱穴と想定されるＰ１～Ｐ３の３本とＰ１の南側で補助柱穴と想定されるＰ４を検出している。主柱穴の位置はほぼ竪穴の対角線上とみられる。形状と規模、柱穴間規模は次のとおりである。

Ｐ１：円形、径55×55＋α㎝、深さ87㎝、Ｐ２：楕円形、径83×68㎝、深さ60㎝、Ｐ３：楕円形、径88×73㎝、深さ64㎝を測る。Ｐ２～Ｐ３：3.50m、Ｐ３～Ｐ１：3.50mを測る。補助柱穴とみられるＰ４は楕円形を呈し、径61×48㎝、深さ33㎝を測る。なお、Ｐ２、Ｐ３から出土している礫は柱穴上位からの出土で柱を抜き取ったときか埋没過程で混入したとものとみられる。

貯蔵穴　南東角の壁際で検出している。形状は楕円形を呈し、規模は径0.84×0.68m、深さ0.30mを測る。内部からは土器などの出土はみられなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　西壁の中程にカマドが構築されている。煙道部は35号土坑と重複関係にあるため不明確な点がある。残存状態は焚口が失われていたが、燃焼部の天井は崩落した状態であった。両袖は比較的良好な状態で残存していた。なお、燃焼部には煮沸用に掛けられていた土師器甕２個体の胴部下半と天井の構築材として使用されていたとみられる土師器甕の半分が残存していた。規模は全長が1.41m、幅が1.34m燃焼部幅0.42mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部には前記のように煮沸用の土師器甕の胴部下半が残存し、その下部には支脚に使用されたとみられる棒状礫が残存していた。両袖の内側には長さ33㎝、径10㎝と長さ42㎝、径10㎝の棒状礫が立てられるように据え付けられていた。また、燃焼部火床面は焼土化が顕著であった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕などが出土している。このうち、１の土師器椀、３～６の土師器甕、９の土師器甕が床面から、７の土師器甕がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器甕から６世紀後半から７世紀初頭に比定できる。

96号竪穴建物

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37081～37085、Ｙ＝−85037～−85041に位置する。

重複関係　89号竪穴建物、97号竪穴建物、117号竪穴建物、124号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが89号竪穴建物より古いが、他の重複関係にある竪穴建物より新しい。

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は3.05m、南北方向は3.52mを測る。確認面から床面までの壁高は20～31㎝を測る。

床面積　9.00㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－109°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中央部に不自然な堆積が確認できる。概ね壁際の三角堆積、レンズ状の堆積が確認できるが、泥流土ブロックが不均等に混入していることから人為的な埋め戻しが行われたと判断される。

床面　大部分は地山や126号竪穴建物などの埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っているが、一部では黄褐色土を充填して踏み固めて床面としている。

掘り方　床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

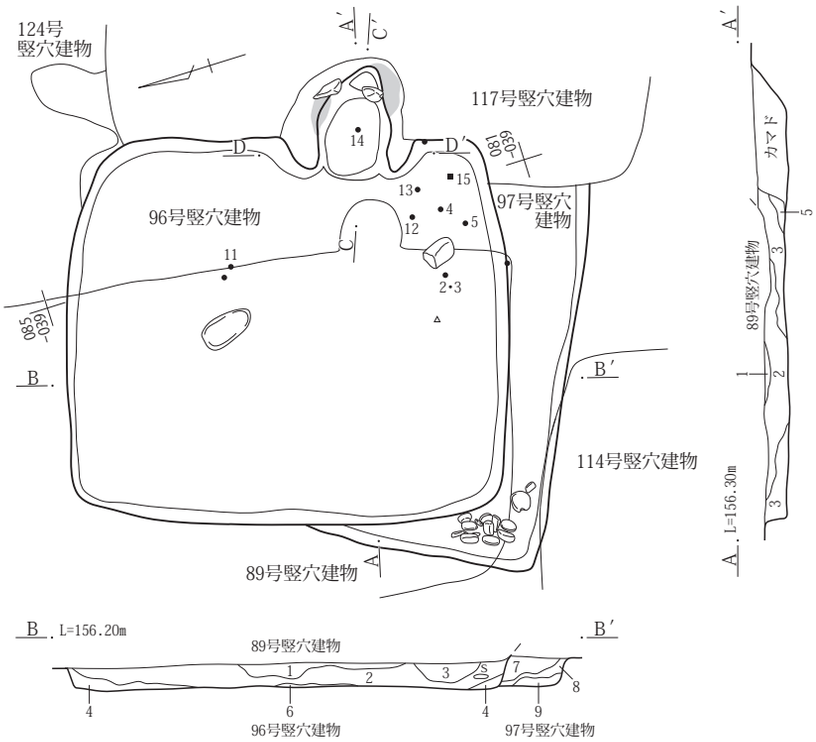
その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。焚口と燃焼部の天井は失われていたが、焚口に取り付く両袖は残存していた。規模は全長が1.00m、幅が1.30m、燃焼部幅0.43mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部の奥には棒状礫が20㎝の間隔で２本立てるように据えられていた。燃焼部と煙道部の間には15㎝ほどの段が設けられていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕、灰釉陶器皿・椀・瓶、鉄製品棒状製品などが出土している。このうち、２・３の須恵器杯、４の須恵器椀が床面から、14の須恵器甕がカマドと床面から、11・12の土師器甕、13の須恵器羽釜が床面より８～11㎝上からの出土である。10の灰釉陶器瓶は胴部片のため詳細は不明であるが、大型の手付瓶とみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土している須恵器杯・椀から10世紀第１四半期に比定できる。なお、須恵器杯・椀には還元焔焼成によるものが存在することから構築時期は９世紀第４四半期であった可能性が窺える。

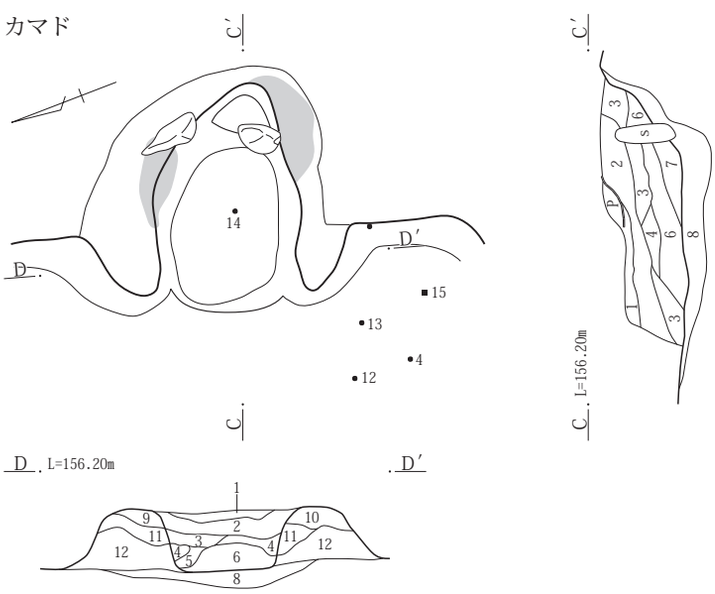
96・97号竪穴建物



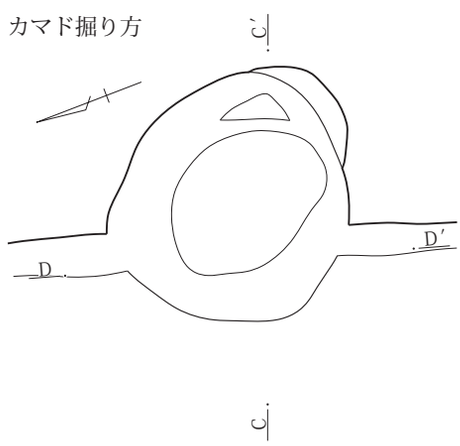
96号竪穴建物
1　灰褐 7.5YR4/2　不揃いの焼土ブロックが不均等に含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　泥流土粒、焼土粒を不均等に少量含む、細粒土。
3　黒褐 10YR3/2　含有物少ない。
4　暗褐 10YR3/3　黒色味強い細粒土が基質、泥流土小ブロックを不均等に含み、明るい色調になる人為的埋め戻し土のような不規則な土。
5　暗褐 10YR3/3　４に類似、焼土粒を多く含む。
6　にぶい黄褐10YR4/3　不揃いの泥流土ブロックを多く含み、しまりが強い。貼床の可能性。
97号竪穴建物
7　暗褐 10YR3/3　大粒の泥流土粒を多く含み、しまりが強い。
8　黒褐 10YR3/2　ややしまりが弱い、細粒微粘性土。含有物少ない。
9　黒褐 10YR3/2　土質は２と同様、泥流土を少量含み、しまりやや強い。

0　1：60　2m

カマド



カマド掘り方



0　1：30　1m

96号竪穴建物 カマド
1　暗褐 10YR3/3　焼土粒を少量含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　細かな泥流土粒をやや多く含む、弱粘性土。
3　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土を多量に含む。
4　灰褐 7.5YR4/2　焼土を10％程度含む。
5　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土を20％程度含む。
6　黒褐 10YR3/2　細粒の黒褐色土と泥流土の混土。灰を含み、ややしまりが弱くサラサラした感触。
7　黒褐 10YR2/2　土質は４に近い。黒色灰を含み、しまりが弱い。
8　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックと黒褐色土の混土、ややしまりが強い。
9　暗褐 10YR3/3　泥流土粒や焼土を少量含み、しまりが弱い微粘性土。
10　暗褐 10YR3/3　含有物多く、炭化物が目立つ。
11　暗褐 7.5YR3/3　不揃いの焼土ブロックをやや多く含む、微粘性土。
12　暗褐 10YR3/3　袖芯材としてはしまりが弱い弱粘性土。焼土粒、泥流土粒を少量と最下位に灰をやや多く含む。

第128図　96・97号竪穴建物遺構図

97号竪穴建物

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37081～37085、Ｙ＝-85037～-85041に位置する。重複関係にある竪穴建物に大部分を欠き、南辺から西辺の壁際の一部が残存するだけであった。

重複関係　89号竪穴建物、96号竪穴建物、117号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　調査範囲で南辺長が3.12m、西辺長が1.80mを測る。確認面から床面までの壁高は13～35㎝を測る。

床面積　推定で5.64㎡を測る。

主軸方位　南辺の方向でＮ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　残存している部分がわずかなため確実性に乏しいが、土層断面の観察では自然埋没と判断される。

床面　残存範囲では地山を踏み固めて床面を造っていた。

掘り方　残存範囲では床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕、鉄製品刀子、棒状礫などが出土しているが、出土土器は図示２点、未掲載82点と少ない。このうち、図示した土器は須恵器杯と壺で、ともに埋没土からの出土である。棒状礫は南東角壁下の床面からまとまって出土している。棒状礫は代表的なものを図示したが、その他のものも長さ12～14㎝、径６㎝前後、重さ400～700ｇほどと図示したものと同様である。これらの棒状礫は菰編み石として使用されたとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に共伴する土器が存在しないため明確にすることはできないが、１の須恵器杯の年代観から９世紀前半代に比定できる。

98号竪穴建物

位置　１区調査区東北部、Ｘ＝37098～37102、Ｙ＝-85048～-85051に位置する。大部分を重複関係にある66号竪穴建物によって欠く。

重複関係　40号竪穴建物、66号竪穴建物、95号竪穴建物、99号竪穴建物、100号竪穴建物、116号竪穴建物、129号竪穴建物、14号土坑、23号ピットと重複関係にある。新旧関係は40号竪穴建物、66号竪穴建物、14号土坑、23号ピットより本竪穴建物のほうが古いが、他の重複関係にある竪穴建物よりは新しい。

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　長軸方向の南北方向は推定で4.05m、東西方向は3.36mを測る。確認面から床面までの壁高は18～48㎝を測る。

床面積　11.32㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－１°－Ｅを指す。

埋没状態　残存範囲が少ないため不明である。

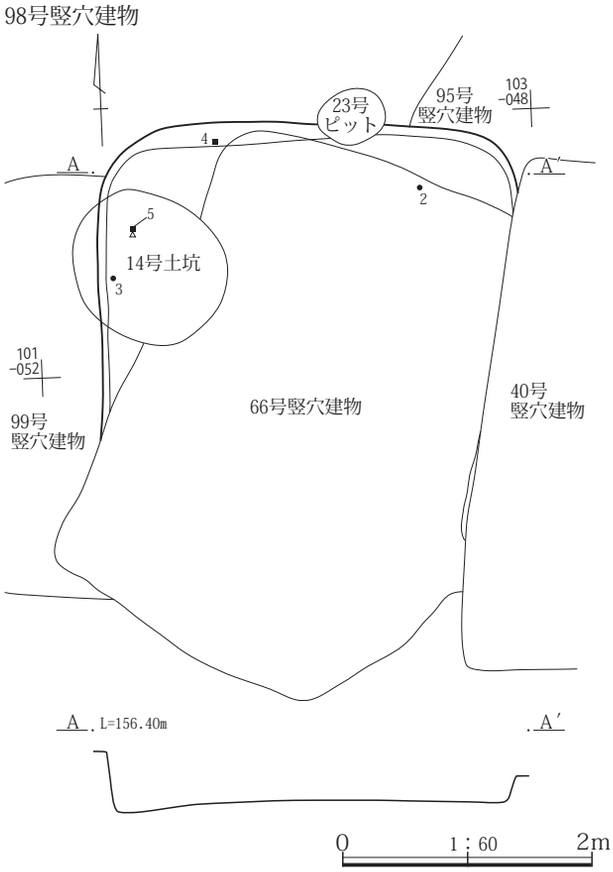
床面　100号竪穴建物と重複関係にある部分では100号竪穴建物の埋没土、それ以外は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っていると想定される。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

98号竪穴建物



第129図　98号竪穴建物遺構図

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。また、出土遺物からはカマドが構築されている時期の竪穴建物であるが、残存状態からは元々構築されていなかったと想定される。

出土遺物　土師器杯・甕、須恵器皿・杯・椀・甕、灰釉陶器、鉄製品刀子・紡錘車などが出土している。このうち、２の須恵器椀と３の有鍔台付椀、４の鉄製品刀子が床面から、５の鉄製品紡錘車が床面より15㎝上からの出土である。なお、３の有鍔台付椀は165号竪穴建物から出土している33の有鍔台付鉢(火舎)を小型化した形態に近いと想定できる。

所見　本竪穴建物の存続時期は、床面から出土している須恵器椀から９世紀後半に比定できる。なお、重複関係にある99号竪穴建物や100号竪穴建物も同じ時期に比定できることから、相互に遺物が混在した可能性が窺えるが検証には至らなかった。

99号竪穴建物

位置　１区調査区東北部、Ｘ＝37098～37103、Ｙ＝-85048～-85021に位置する。大部分を重複関係にある66号竪穴建物、98号竪穴建物によって欠く。

重複関係　40号竪穴建物、66号竪穴建物、95号竪穴建物、98号竪穴建物、100号竪穴建物、116号竪穴建物、129号竪穴建物、14号土坑と重複関係にある。新旧関係は40号竪穴建物、66号竪穴建物、98号竪穴建物、14号土坑より本竪穴建物のほうが古いが、他の重複関係にある竪穴建物よりは新しい。

形状　長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は残存範囲で3.90m、南北方向は2.37mを測る。確認面から床面までの壁高は32～53㎝を測る。

床面積　推定で10.27㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－97°－Ｅを指す。

埋没状態　残存範囲の土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　100号竪穴建物と重複関係にある部分では100号竪穴建物の埋没土、それ以外は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　壁の残存する範囲では壁下から検出している。規模は幅が20㎝前後、深さ７～10㎝を測る。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

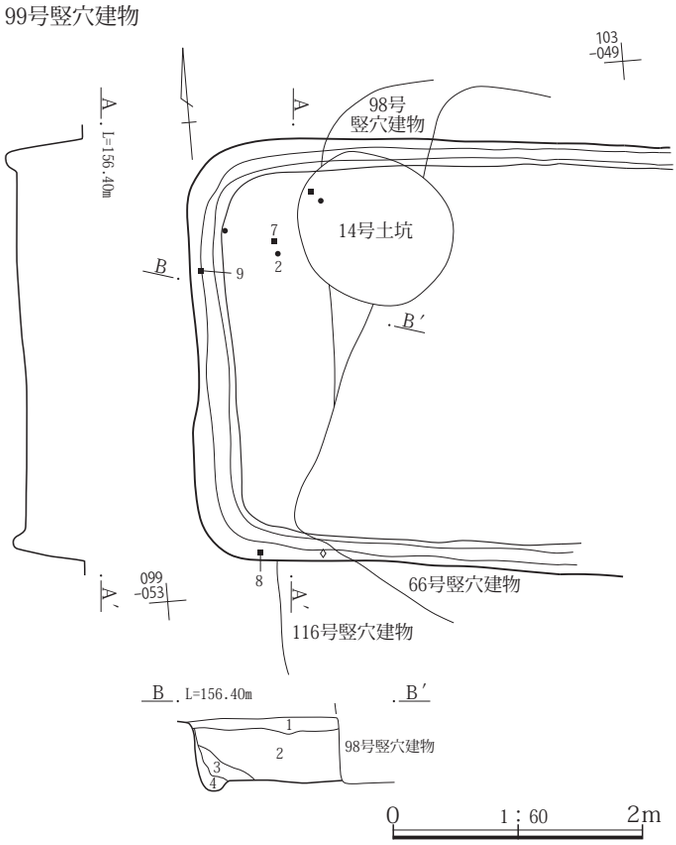
貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。出土遺物からはカマドが構築されている時期の竪穴建物であることから東壁に構築されていた可能性が想定される。

出土遺物　土師器杯・甕、須恵器皿・杯・椀・甕、灰釉陶器、鉄製品刀子・釘などが出土している。このうち、２の須恵器杯が床面より７㎝上、１の須恵器杯が床面より24㎝上からの出土である。１と２の須恵器杯は出土位

99号竪穴建物



99号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量含む、微粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土を少量と微粘性土。炭化物、SPとみられるパミスを不均等に含む。
3　黒褐 10YR3/2　含有物少ない細粒土。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土。

第130図　99号竪穴建物遺構図

置に違いがあるが、底径／口径比は54と59と比較的近い値であることから１も本竪穴建物に共伴すると想定できる。

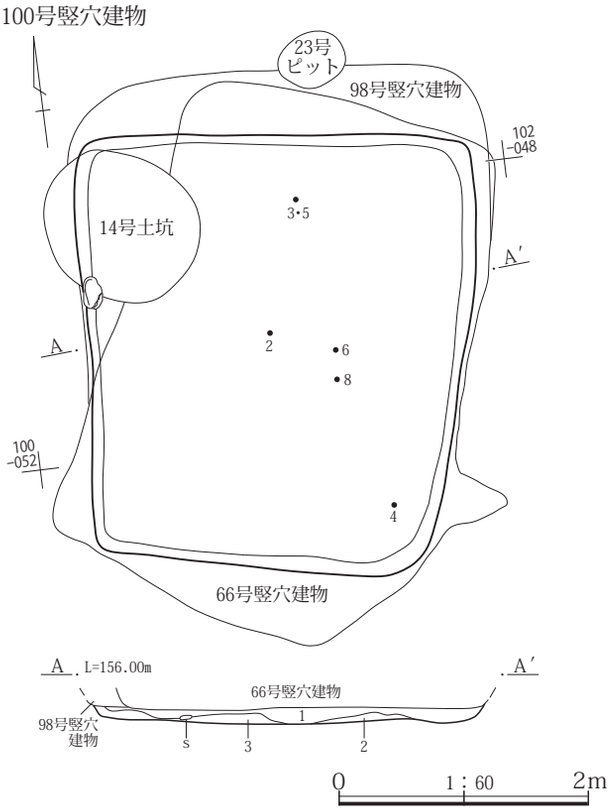
所見　本竪穴建物の存続時期は、比較的床面に近い位置から出土した須恵器杯や小片であるが図示した５の土師器甕から９世紀後半に比定できる。

100号竪穴建物

位置　１区調査区東北部、Ｘ＝37098～37103、Ｙ＝-85048～-85021に位置する。大部分を重複関係にある66号竪穴建物、98号竪穴建物、99号竪穴建物によって欠く。

重複関係　40号竪穴建物、66号竪穴建物、95号竪穴建物、98号竪穴建物、99号竪穴建物、116号竪穴建物、129号竪穴建物、14号土坑と重複関係にある。新旧関係は40号竪穴建物、66号竪穴建物、98号竪穴建物、99号竪穴建物、14号土坑より本竪穴建物のほうが古いが、他の重複関係にある竪穴建物よりは新しい。

100号竪穴建物



100号竪穴建物
1　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土ブロックをやや多く焼土や炭化物を含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物粒、黒色灰を含み、しまりが強い細粒弱粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　黄色味強い泥流土主体、黒褐色土をブロック状に含み、しまりが強い。

第131図　100号竪穴建物遺構図

形状　長方形を呈すると想定される。

規模　南北方向は3.50m、東西方向は3.19mを測る。確認面から床面までの壁高は６～20㎝を測る。

床面積　9.18㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－７°－Ｅを指す。

埋没状態　上部を重複関係にある竪穴建物によって欠くため判断できない。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山ををそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。また、出土遺物からはカマドが構築されている時期の竪穴建物であるが、残存状態からは元々構築されていなかったと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・皿・杯・椀・甑・甕、土製品土錘、流動滓などが出土している。このうち、２・３の須恵器皿、４・５の須恵器椀、６の須恵器甑、８の土師器甕が床面より出土している。

所見　本竪穴建物の存続時期は床面から出土している須恵器皿・椀や土師器甕から９世紀第４四半期に比定できる。

101号竪穴建物

位置　１区調査区南東部隅、Ｘ＝37035～37039、Ｙ＝-85024～-85027に位置する。

重複関係　102号竪穴建物と接する位置関係にある。この位置関係から周堤帯は重複関係にあったが、両竪穴建物の時間差は大きいことから直接の重複関係は無かったと考えられる。

形状　やや南北方向が長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は3.47m、南北方向は3.67mを測る。確認面から床面までの壁高は11～28㎝を測る。

床面積　10.75㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－97°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではやや不自然な点もみられるが、周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できること

から自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。床面には２～５㎝の礫が多量に含まれているが、この礫群は河岸段丘の崖面が崩落して流れ込み、本竪穴建物はその崩落土の末端に構築されていると考えられる。なお、PL.98-３では南西部が礫の無い状態であるが、これは礫群を掘り下げた状態であるためである。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

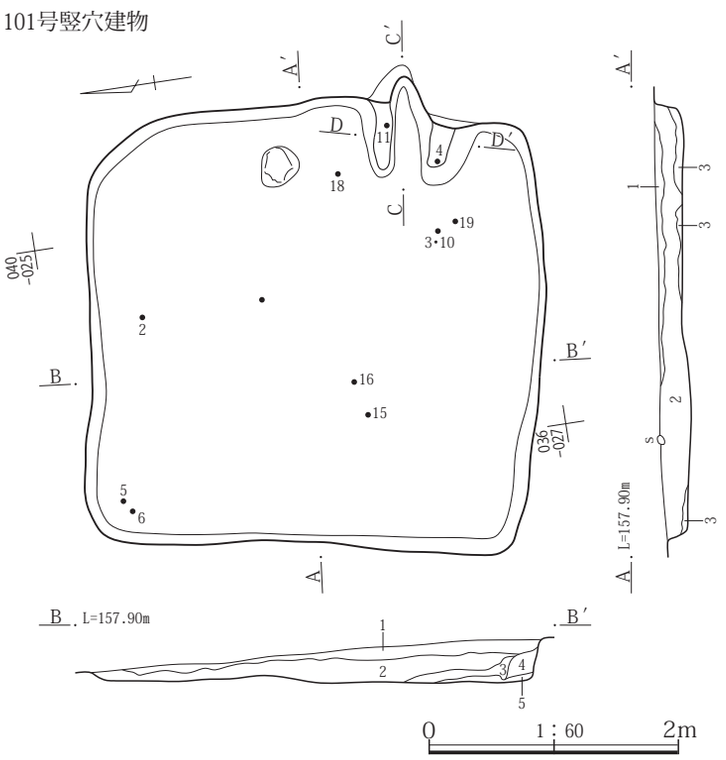
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部にかけての天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.91m、幅が0.97m、燃焼部幅は0.20mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。掘り方は壁際を楕円形状に0.5mほど掘り込んでいる。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・高盤・

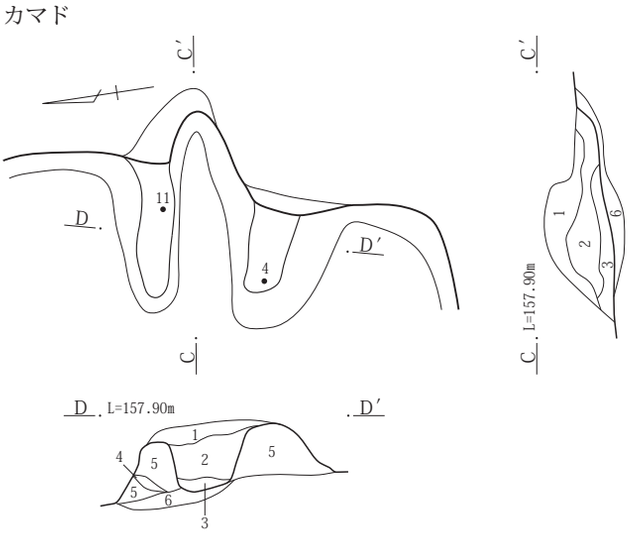
101号竪穴建物



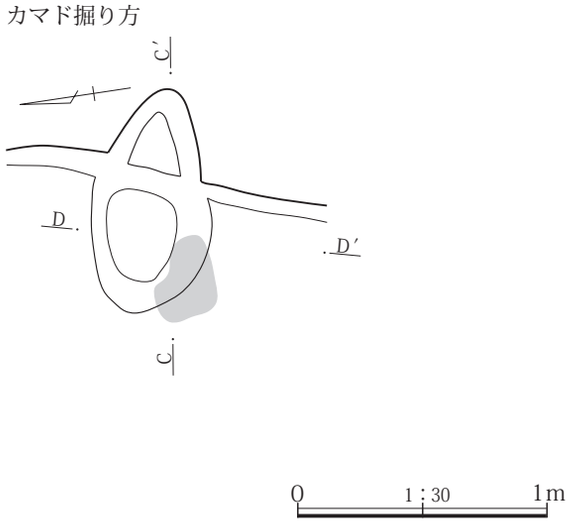
101号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cをやや多く含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　やや細粒の微粘性土が基質、As-Cを少量と拳大の礫を南側に少量含む。
3　灰黄褐 10YR4/2　地山の褐色土(泥流か)の混入多く、竪穴建物中央ではしまりが強い細粒弱粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/2　地山、泥流土主体、しまりが強い粘性土。
5　黒褐 10YR3/2　黒色土をブロック状に含む。

101号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　不明瞭な焼土粒、泥流土粒を不均等に含む、微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　含有物少ない、細粒弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　下半に泥流土粒少量混土、灰を含む、細粒粘性土でややサラサラした感触。
4　黒褐 10YR2/2　含有物等を含まない、細粒粘性土。袖芯材の可能性。
5　黒褐 10YR3/2　焼土、泥流土粒を少量含み、ややしまりがある粒子の細かな弱粘性土。
6　暗褐 10YR3/3　泥流土粒を不均等に焼土を若干含み、ややしまりが強い弱粘性土。

カマド



カマド掘り方



第132図　101号竪穴建物遺構図

長頸壺・短頸壺、土製品瓦小片などが出土している。このうち、２・15の須恵器杯蓋・長頸壺が床面、４・11・14の須恵器杯・短頸壺蓋がカマドからの出土である。出土した須恵器杯の底部切り離し技法には図示したように回転ヘラ削りと回転糸切りの両技法がみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土器などから８世紀後半代から９世紀前半代の年代観が比定できるが、９世紀前半代に比定しておきたい。

102号竪穴建物

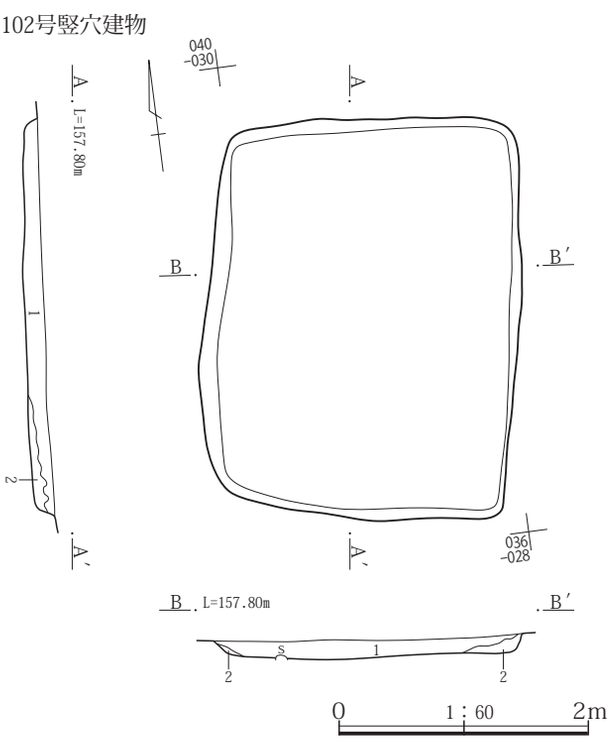
位置　１区調査区南東部隅、Ｘ＝37036～37039、Ｙ＝−85027～−85030に位置する。

重複関係　101号竪穴建物と接する位置関係にある。この位置関係から周堤帯は重複関係にあったが、両竪穴建物の時間差は大きいことから101号竪穴建物が構築される段階には本竪穴建物の周堤帯は残存していなかったと判断される。

形状　南北方向が長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の南北方向は3217m、東西方向は2.55mを測る。確認面から床面までの壁高は７～21㎝を測る。

102号竪穴建物



102号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を少量含み、ややしまりが弱い。炭化物粒散見。
2　暗褐 7.5YR3/3　地山の暗褐色泥流土の混入多い微粘性土。東側で焼土粒、炭化物粒を少量含む。１よりしまりが強い。

第133図　102号竪穴建物遺構図

床面積　残存範囲内で6.71㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－11°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため明確ではないが、土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　出土遺物から炉が設けられている時期であるが、検出されなかった。

出土遺物　遺物は埋没土内から土師器甕が１点出土している。この土師器甕は小片のため図示できず、本竪穴建物に共伴するものか否かも判然としなかった。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土遺物が皆無のため判然としないが、重複関係にある竪穴建物や遺構の形態から４世紀代に想定される。

103号竪穴建物

位置　１区調査区南部、Ｘ＝37039～37043、Ｙ＝−85038～−85042に位置する。

重複関係　104号竪穴建物、106号竪穴建物、107号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物が他の竪穴建物より新しい。

形状　西辺が東辺に比べてやや短いがほぼ長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は2.44m、南北方向は3.52mを測る。確認面から床面までの壁高は12～31㎝を測る。

床面積　7.18㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では黒褐土が短期間に埋没されていることが見られ、自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や106号竪穴建物107号竪穴建物の埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁のほぼ中央に構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道部の天井は壊され、痕跡も見られない。両袖は状態が悪いが残存していた。なお、補強に使用されていたと見られる礫がカマド内に散見される。規模は全長1.04m、幅0.96m、燃焼部長さ0.75m、幅0.45mを測る。燃焼部奥側は壁外に存在し、煙道部は燃焼部火床面より15cmほどの段をもって立ち上がっている。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・瓶・甕などが出土している。このうち、２の須恵器杯蓋、３の須恵器杯、11の須恵器椀が床面から、１の須恵器杯蓋、13の須恵器椀、15の土師器甕がカマドからの出土である。本竪穴建物から出土した土器の多くは埋没土からの出土で、杯・椀には底部の切り離し技法や整形が回転ヘラ起こしや回転ヘラ削りによるものなど後の混入とみられるものが多くみられる。

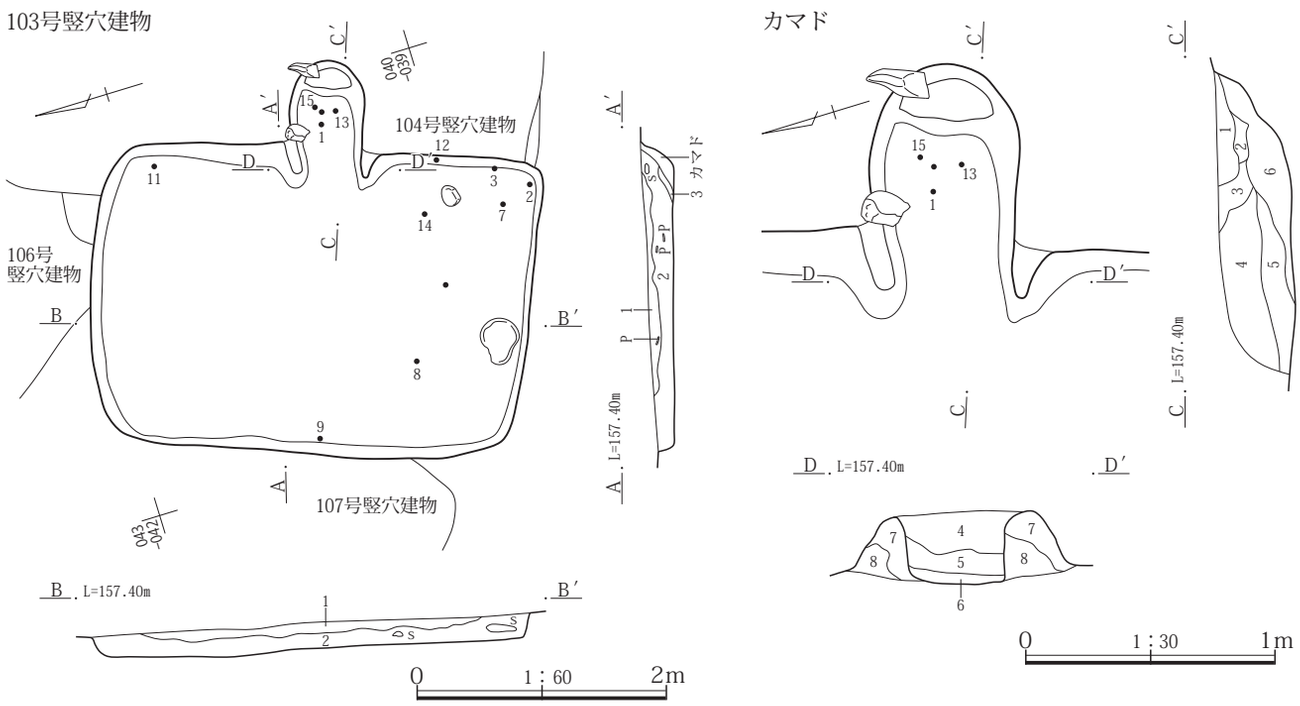
所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した９の須恵器椀や15の土師器甕から９世紀第４四半期に比定できる。

104号竪穴建物

位置　１区調査区南部、Ｘ＝37038～37043、Ｙ＝-85036～-85041に位置する。重複関係にある103号竪穴建物によって西辺側の一部を欠く。

重複関係　103号竪穴建物、106号竪穴建物、107号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物が106号竪穴建物、107号竪穴建物より新しく、103号竪穴建物より古い。

形状　欠損部のため不明な点もあるが、長方形を呈すると見られる。



103号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量含み、ややしまりがある細粒土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C、焼土粒をわずかに含む細粒土。下半ほど炭化物が多い、弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　灰色味おびた泥流土の混土、炭化物を含む、粘性土。カマド崩落土。
103号竪穴建物　カマド
1　暗赤褐 2.5Y3/3　上位中心に焼土を不均等に含み、しまりが強い細粒弱粘性土。
2　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土小ブロックを多量に含み、下半に白色灰が薄層状に堆積する、しまりが強い。
3　暗赤褐 5YR3/2　焼土小ブロックを少量含み、しまりが強い弱粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　As-Cを少量と炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い。
5　黒褐 10YR3/2　灰を含み、ややしまりが弱いややサラサラした感触。
6　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多く含み、しまりが弱い。
7　暗褐 7.5YR3/3　泥流土粒を霜降状に炭化物、焼土を若干含み、ややしまりがある。
8　黒褐 10YR3/2　やや大粒の泥流土粒や焼土を少量含む、細粒粘性土。袖構築材土。

第134図　103号竪穴建物遺構図

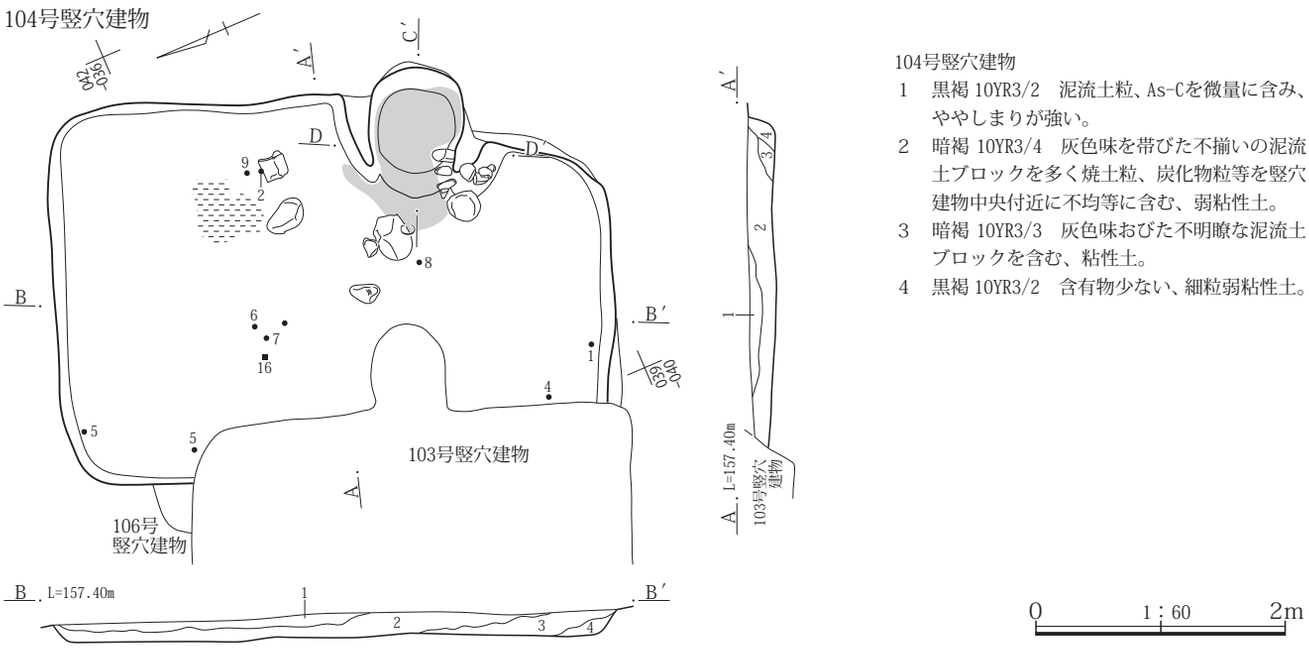
規模　主軸方向の東西方向は3.04m、南北方向は3.97mを測る。確認面から床面までの壁高は８～30㎝を測る。

床面積　推定で11.11㎡を測る。

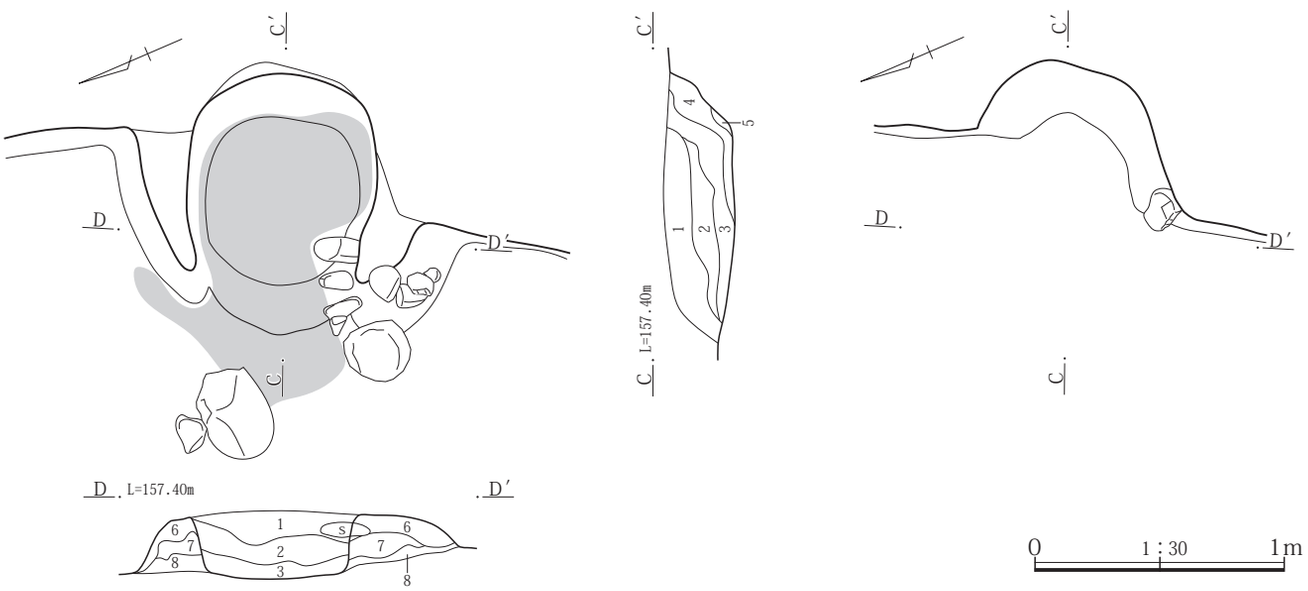
主軸方位　Ｎ－109°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では北側から多くの土砂が流れ込んだ様子がみられることから、自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山や106号竪穴建物



104号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒、As-Cを微量に含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/4　灰色味を帯びた不揃いの泥流土ブロックを多く焼土粒、炭化物粒等を竪穴建物中央付近に不均等に含む、弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　灰色味おびた不明瞭な泥流土ブロックを含む、粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　含有物少ない、細粒弱粘性土。



104号竪穴建物　カマド
1　暗褐 7.5YR3/3　不揃いのブロック状泥流土の混土、焚口側で炭化物粒、煙道側で焼土の混入やや多く含む、微粘性土。
2　暗赤褐 2.5Y3/3　泥流土、焼土の小ブロックを不均等に少量含み、ややしまりがある褐色帯びた細粒微粘性土。カマド構築材の可能性。
3　灰褐 7.5YR4/2　焼土ブロックを多く含む、しまりが弱くボソボソした感触。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、しまりが弱い。
5　灰褐 7.5Y4/2　４と焼土の混土、しまりが弱い。煙道崩落土。
6　灰黄褐 10YR4/2　粗い泥流土を多くAs-C、焼土若干含み、ややしまりが強い。
7　暗褐 10YR3/3　細粒微粘性土、泥流土や焼土粒を少量含む。
8　褐 7.5YR4/3　不明瞭な泥流土を多く含み、しまりが強い弱粘性土。

第135図　104号竪穴建物遺構図

の埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は比較的良好な状態であった。規模は全長1.03m、幅1.15m、燃焼部幅0.60mを測る。燃焼部の奥側は壁外に掘り込まれている。そして右袖には径10～35㎝大の礫が補強材として使用されたものがそのまま残存していた。カマド周辺には天井部や左袖に使用されたとみられる礫が散乱した状態で出土していた。なお、燃焼部火床面は全面が赤く焼土化しており、使用頻度の多さが窺えた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、器種不明の鉄製品などが出土している。このうち、１の須恵器杯蓋、２の須恵器皿、４・６・７の須恵器杯、９の須恵器椀、13の土師器甕が床面から、11の黒色土器椀がカマドからの出土である。なお、12のロクロ土師器小型甕は埋没土からの出土であるが、一部破片は103号竪穴建物北東部分からも出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器杯・椀から比定することになるが、杯の中には４のように体部があまり開かず口縁部も外反しないで立ち上がる個体と６・７のように体部が開き、口縁部が外反する個体が存在する。前者は９世紀第１四半期の年代観が与えられ、後者は９世紀第３四半期の年代観が与えられる。なお、重複関係にある106号竪穴建物は前者と同様な形態であることから106号竪穴建物から混入したと想定できる。こうした点から、９世紀第３四半期に比定するのが妥当と考える。12のロクロ土師器は胴部にカキメが施されるなど比較的丁寧な整形が施されていることから、初期のものと想定できる。

105号竪穴建物

位置　１区調査区南部、Ｘ＝37034～37039、Ｙ＝−85030～−85035に位置する。重複関係にある108号竪穴建物によって北側の一部を欠く。

重複関係　108号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物が108号竪穴建物より古い。

形状　東辺が西辺より50㎝ほど長い台形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は4.80m、南北方向は4.02mを測る。確認面から床面までの壁高は０～20㎝を測る。

床面積　19.26㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－125°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため土層断面の観察からは判断できない。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道部の天井は失われていたが、燃焼部袖は一部が残存していた。規模は全長1.03m、幅1.20m、燃焼部幅0.50mを測る。燃焼部の奥側から煙道部は壁外に存在する。燃焼部と煙道部の間には14㎝ほどの段が設けられていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。出土量は図示13点、未掲載346点と少量であった。このうち、１の須恵器杯蓋、３の須恵器杯、７・８の須恵器椀が床面から、９の須恵器椀、10の土師器甕がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯・椀や、未掲載出土遺物ではあるがコの字状口縁に近似する形態の土師器甕から９世紀前半代に比定できる。

106号竪穴建物

位置　１区調査区南部、Ｘ＝37038～37043、Ｙ＝−85036～−85041に位置する。重複関係にある103号竪穴建物、104号竪穴建物によって上部を欠く。

重複関係　103号竪穴建物、104号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが103号竪穴建物、104号竪穴建物より古い。

形状　長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は3.78m、南北方向は3.38mを測る。確認面から床面までの壁高は29～35㎝を測る。

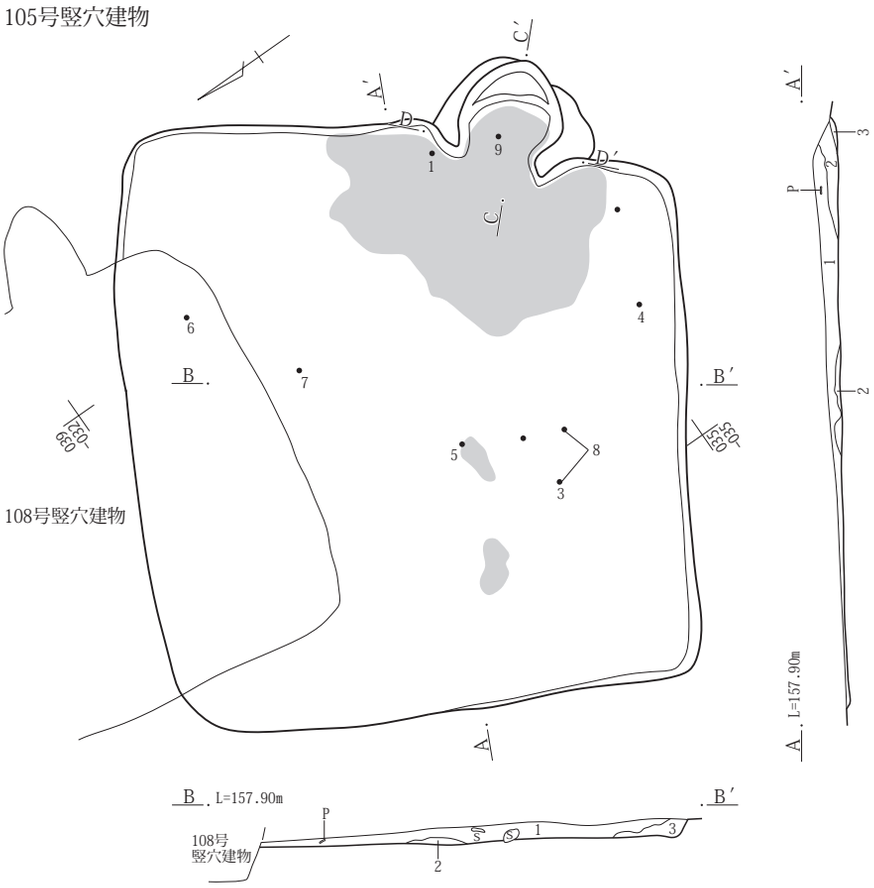
床面積　11.21㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　重複関係にある他の竪穴建物によって上部を欠くため判断が難しいが、土層断面の観察では床面に周囲から土砂が流れ込んだ様子がみられることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。壁際より一回り内側は硬く踏

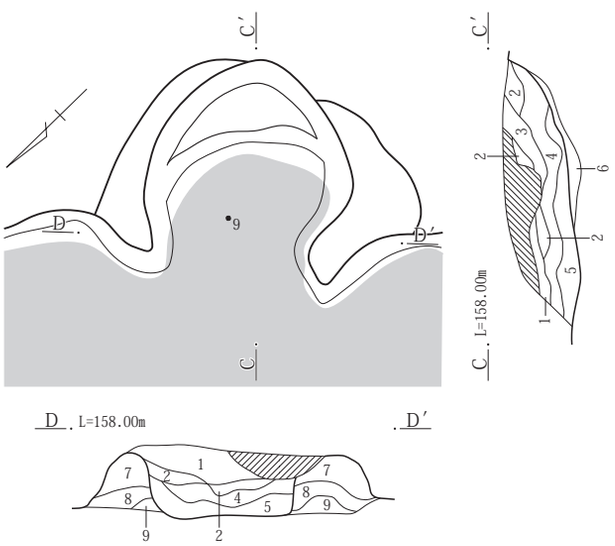
105号竪穴建物



105号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2 泥流土粒、As-Cを不均等に少量含む、微粘性土。
2　灰褐 7.5YR4/2　焼土粒、泥流土粒を不均等に少量含み、しまりが強い。
3　黒褐 10YR2/2　焼土、炭化物粒を若干含み、ややしまりが弱い細粒弱粘性土。

0　1：60　2m

カマド



105号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを少量含み、非粘性土でややボソボソした感触。
2　にぶい赤褐5YR4/3　やや不明瞭な焼土主体の土、ややしまり強い。
3　２と４の混土。
4　黒褐 10YR3/2　煙道側ほど焼土を多く含む、細粒弱粘性土。
5　にぶい赤褐 5YR4/4　小ブロック状の焼土主体の土。燃焼部西側では褐色泥流と土の混土だが、東側は固くしまり火床面になっている。
6　暗褐 10YR3/3　褐色泥流土主体、焼土を少量含む。煙道下整形土。
7　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒、焼土小ブロックを少量含む、微粘性土。
8　暗褐 7.5YR3/3　泥流土、焼土粒を少量含み、しまりが強い。袖構築材。
9　黒褐 10YR3/2　黒色細粒土が基質、炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い弱粘性土。

0　1：30　1m

第136図　105号竪穴建物遺構図

みしめられていた。また、床面の広い範囲で焼土化していたが、炭化材などの出土は確認されていない。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中央よりやや東側寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長0.77m、幅0.75m、燃焼部幅0.35mを測る。燃焼部は奥側半分が壁外に存在し、中程の袖際に径10㎝、長さ30㎝と径15㎝、長さ28㎝の棒状礫が立てるように据え付けられていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・瓶・甕などが出土している。出土量は図示６点、未掲載165点と少ない。このうち、１～４の須恵器杯、５の須恵器椀が床面から、６の須恵器椀がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器杯から９世紀前半代に比定できる。

107号竪穴建物

位置　１区調査区南部、Ｘ＝37040～37045、Ｙ＝-85040～-85044に位置する。

重複関係　103号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　北辺が南辺よりやや短いがほぼ長方形を呈する。

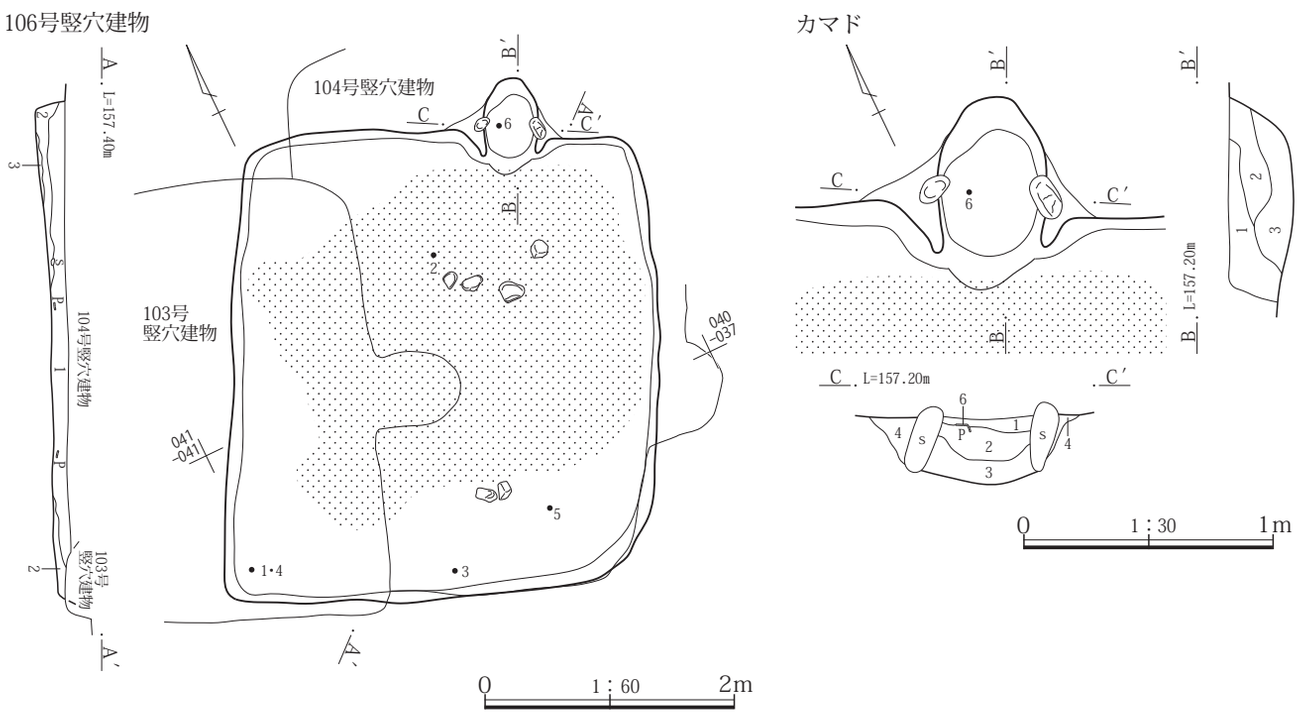
規模　主軸方向の南北方向は3.74m、南北方向は3.48mを測る。確認面から床面までの壁高は21～38㎝を測る。

床面積　10.91㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－35°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状に近い堆積が見られることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。



106号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、焼土粒、泥流土粒を霜降状に上半ほど多く含み、ややしまりの強い。
2　暗褐 10YR3/3　黒色味の強い細粒が基質、黒色灰多く炭化物粒や焼土を不均等に含む、粘性土。
3　にぶい赤褐 5YR4/4　黒色土からなり、表面に焼土、下半に灰を含む。
106号竪穴建物カマド
1　黒褐 7.5YR3/2　焼土小ブロックを不均等にAs-Cを少量含み、ややしまりが強い微粘性土。
2　にぶい赤褐 5YR4/4～灰褐 7.5YR4/2　多量の焼土ブロックを不均等に黒色灰を含み、ややしまりが強いボソボソした感触。
3　黒褐 10YR3/2　炭化物粒・灰を多く含み、ややしまりが強い。火床面上の堆積土とみられる。黒褐 10YR3/2　焼土の混入わずかである。
4　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土を不均等に含み、ややしまりが強い。掘り方埋め戻し土。

第137図　106号竪穴建物遺構図

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

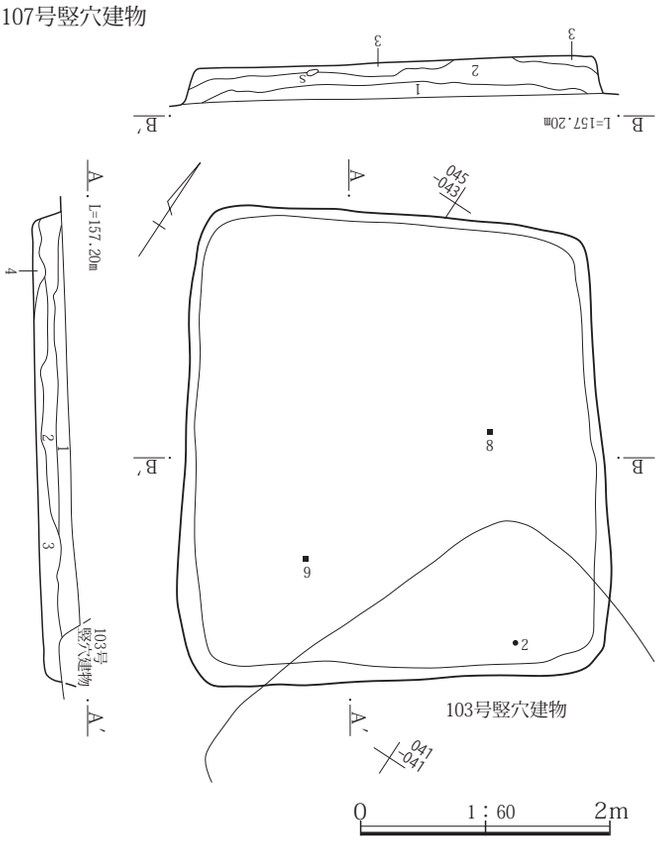
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　カマド及び炉とも検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、鉄製品釘、流動滓などが出土している。出土量は図示７点、未掲載180点と少ない。本竪穴建物は確認面から床面までの高さが比較的あるが、床面など確実に共伴する位置からの出土はなかった。出土遺物の主体は１～６の古墳時代前期の土師器であることから、７の土師器甕は後の混入とみられる。なお、７の土師器甕は10世紀第１四半期の年代観が与えられるが、重複関係にある竪穴建物にはこの時期のものが存在しない。

107号竪穴建物



107号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを霜降状にやや多くSPとみられるパミスを若干含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土粒、SPとみられるパミスを少量含み、ややしまりが弱い。
3　暗赤褐 2.5Y3/3　土質は２に近い。泥流土を多く含むため黄色味をおびる。床面直上に炭化物を若干含む。
4　黒褐 10YR3/2　ややしまりが強い粘性土。

第138図　107号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、主体を占める土器から４世紀前半代に比定するのが妥当と考える。

108号竪穴建物

位置　１区調査区南部、Ｘ＝37037～37041、Ｙ＝-85030～-85034に位置する。

重複関係　105号竪穴建物、33号土坑と重複関係にある。なお、143号竪穴建物は直接の重複関係はないが、接する位置関係である。新旧関係は本竪穴建物のほうが33号土坑より古く、105号竪穴建物より新しい。

形状　東辺が西辺に比べて50㎝ほど短い台形状を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は3.87m、南北方向は3.42mを測る。確認面から床面までの壁高は15～33㎝を測る。

床面積　10.53㎡を測る。

主軸方位　使用頻度が高かったとみられる２号カマドが構築されている北壁を主軸方向とするとＮ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、床下土坑が南西部から検出されている。形状は楕円形で、規模は長径1.52m、短径1.00m、深さ0.19mを測る。内部からは６の須恵器杯や礫などが出土している。

壁溝　検出されなかった。

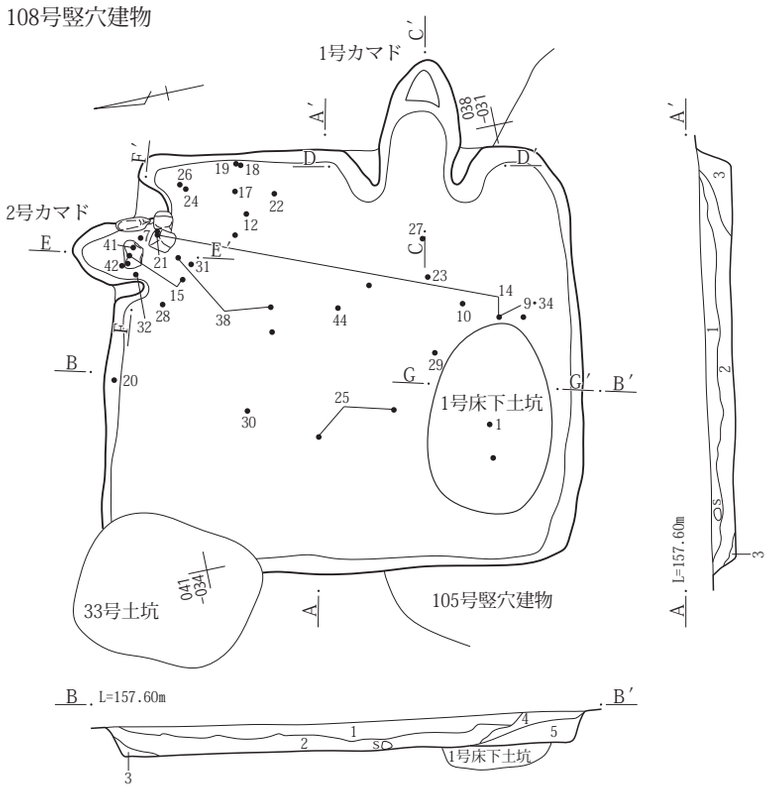
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りに１号カマド、北壁の北東角寄りに２号カマドが構築されている。使用頻度は内部に顕著な焼土化がみられる２号カマドが多かったとみられる。残存状態は両カマドとも焚口と燃焼部の天井が失われていたが、燃焼部側面の袖は両側とも残存していた。規模は１号カマドが全長1.17m、幅1.27m、燃焼部幅0.45m、２号カマドが全長0.85m、幅0.95m、燃焼部幅0.42mを測る。両カマドとも燃焼部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。１号カマドでは燃焼部と煙道部の間に高さ14㎝の段が設けられていた。２号カマ

108号竪穴建物

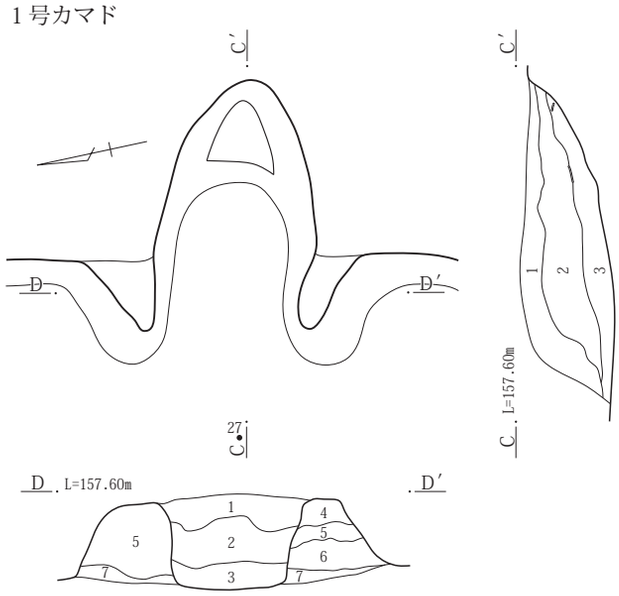


108号竪穴建物

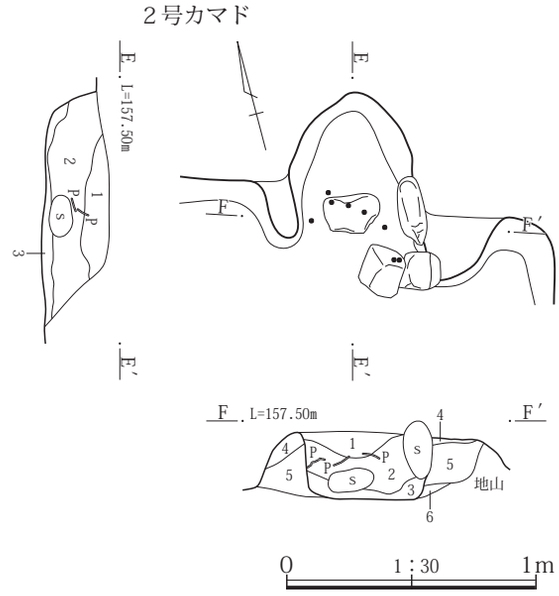
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状に炭化物、焼土を若干含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　泥流土粒を多く含み、しまりが強く１より黄色味をおびる弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　含有物少ない細粒弱粘性土。２よりしまりやや弱い。
4　灰褐 7.5YR4/2　土質は３に近いが、焼土や灰をブロック状に不均等に含む。
5　暗褐 10YR3/4　やや灰色味をおびた泥流土と黒褐色土の混土。細粒でややしまりが弱い。

0　1：60　2m

１号カマド



２号カマド



0　1：30　1m

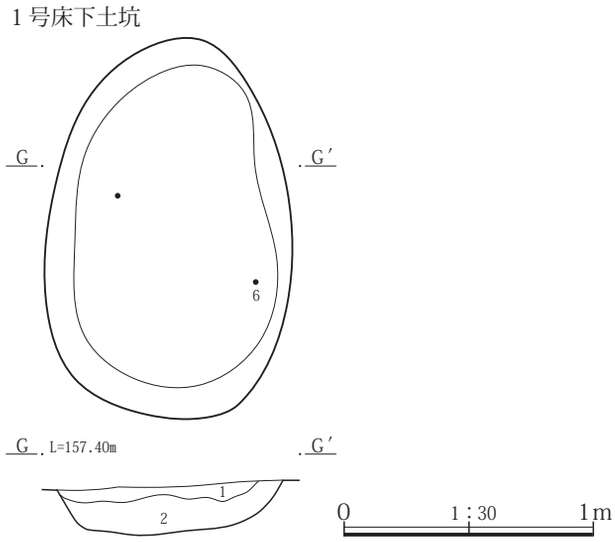
108号竪穴建物　１号カマド

1　暗褐 7.5YR3/3　上面中心に焼土粒、泥流土を多く含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　焼土粒、炭化物粒を少量含む、微粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　褐色細粒土が基質、黒色灰を多く含み、しまりが弱い弱粘性土。
4　褐　7.5YR4/3　下半中心に不揃いの焼土ブロックを含み、ややしまりが強い。
5　暗褐 10YR3/3　泥流土粒やSPとみられるパミスを含み、しまりが強い細粒弱粘性土。
6　暗褐 10YR3/3　５と同様。焼土を含む。
7　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、しまりが強い細粒土。

108号竪穴建物　２号カマド

1　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土小ブロックを多く含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物粒・焼土粒が不均等に含み、ややしまりが弱い微粘性土。
3　灰褐 7.5YR4/2　炭化物粒･灰を多く含み、ザラザラした感触。
4　暗褐 7.5YR3/3　上面中心に焼土粒、泥流土を多く含み、ややしまりが強い。
5　黒褐 10YR3/2　泥流土粒・As-C・焼土粒等含有物を含み、ややしまりが強い。
6　黒褐 10YR3/2　５と同様、含有物少ない。

第139図　108号竪穴建物遺構図（１）



108号竪穴建物　１号床下土坑
1　暗褐 7.5YR3/3　黒褐色土中に焼土粒、炭化物粒、泥流土粒の混土、しまりが強い。
2　暗オリーブ褐 2.5Y3/3　褐色味の強い泥流土が基質、焼土粒、炭化物粒を含む、弱粘性土。

第140図　108号竪穴建物遺構図（２）

ドの燃焼部では側面や天井に使用された礫の一部が残存し、側面左側には礫がそのまま据えられた状態で検出されている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。出土量は図示45点、未掲載1041点と多量である。このうち、１の須恵器杯蓋、17・18の須恵器杯、19～23・25～27・29・31の須恵器椀が床面から、２・３の須恵器杯蓋、16の須恵器杯が１号カマドから、７・10・11・14・15の須恵器杯、21・32の須恵器椀､38・39・41・42の土師器甕が２号カマドから、６の須恵器杯は床下土坑からの出土である。なお、28の須恵器椀は１号カマド、２号カマド、床面から出土した破片が接合している。33の灰釉陶器皿は光ヶ丘１号窯式期に比定できるもので埋没土からの出土であるが、本竪穴建物に共伴するものである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や２号カマドから出土している須恵器杯・椀、土師器甕などから９世紀第第３四半期に比定できる。なお、２号カマドから出土した土師器甕には頸部の形態がやや外傾するものがみられるが、これらは前代のものがそのまま使用されるか、カマドの構築材として使用されたとみられる。

109号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37042～37045、Ｙ＝-85027～-85029に位置する。

重複関係　118号竪穴建物、119号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は119号竪穴建物より本竪穴建物ほうが新しいが、118号竪穴建物との関係は不明瞭であった。出土遺物からは、両竪穴建物とも同様な様相を呈しているが、118号竪穴建物のほうがやや新しいと想定される。

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の南北方向が2.52m、東西方向は2.38mを測る。確認面から床面までの壁高は13～46㎝を測る。

床面積　4.75㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－２°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

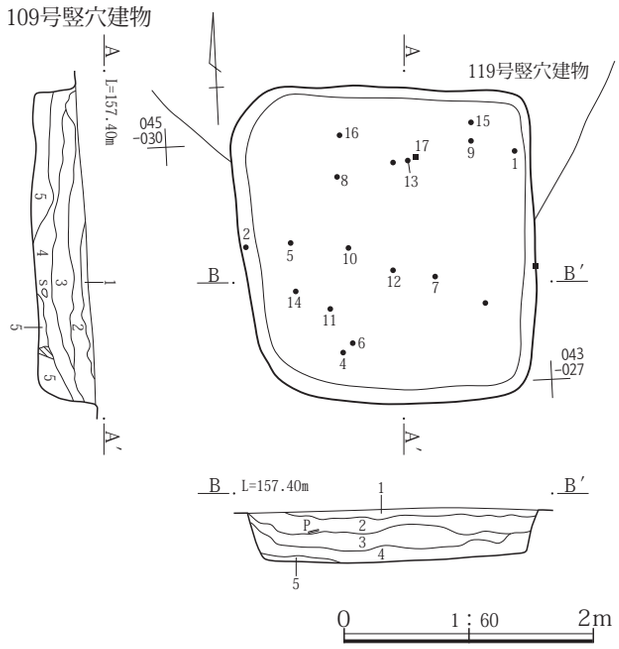
その他施設　検出されなかった。

火処　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・小型短頸壺・甕、瓦、流動滓などが出土している。土器のほとんどは床面より10～35㎝ほど上からの出土である。その中で図示できなかったが、床面から出土した須恵器椀には９の須恵器杯と同様な底部切り離し技法に回転起こしや回転ヘラ削りが施されてものが存在する。しかし、須恵器杯の多くは底部切り離し技法が回転糸切りによるものである。また、２の須恵器杯は静止糸切りによるものであった。

所見　本竪穴建物は規模が小規模で火処が構築されていないことから竪穴建物と判断しかねる点があったが、底面を平坦に床面状に構築している状態から竪穴建物と判断した。なお、本竪穴建物の性格としては納屋などの収納施設が想定される。

本竪穴建物の存続期間は、床面など確実に共伴する土



109号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒、炭化物粒を少量含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2～暗褐 10YR3/3　黒色味の強い細粒土が基質、褐色土や焼土を不均等に含み、ややしまりが強い。
3　にぶい赤褐 5YR4/4～灰褐 5YR4/2　焼土主体。黒色土や泥流土をブロック状に含み、ややしまりがある。
4　黒褐 10YR2/2　黒色味強い細粒土が基質、大粒泥流土を不均等に含む、微粘性土。
5　暗灰黄 2.5Y4/2　南側で不揃いな泥流土多いが、北側は含有物少ない。漸移的で下半に向かって黒色味増す、弱粘性土。

第141図　109号竪穴建物遺構図

器がほとんど出土していない。出土した須恵器杯・椀には底部切り離し技法に回転ヘラ起こしと回転糸切りの二通りが存在するが、須恵器杯のほとんどに回転糸切りが用いられていることから８世紀後半代に構築され、９世紀第１四半期まで存続したとみられる。

110号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37045～37049、Ｙ＝−85023～−85027に位置する。

重複関係　113号竪穴建物、119号竪穴建物、122号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は2.76m、南北方向は3.76mを測る。確認面から床面までの壁高は22～54㎝を測る。

床面積　7.45㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－105°－Ｅ

埋没状態　土層断面の観察では最初に東と北側から多くの土砂が流入した様子が確認できる。南北方向の断面では標高の高い南側からの流入が少なく、３層の灰黄褐色土が竪穴中央で盛り上がった堆積を示すなど不自然な様子がみられることから人為的な埋め戻しが行われたと判断される。

床面　重複関係にある113号竪穴建物の埋没土を踏み固めて平坦面を造り、ほぼ全面が硬化した状態であった。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

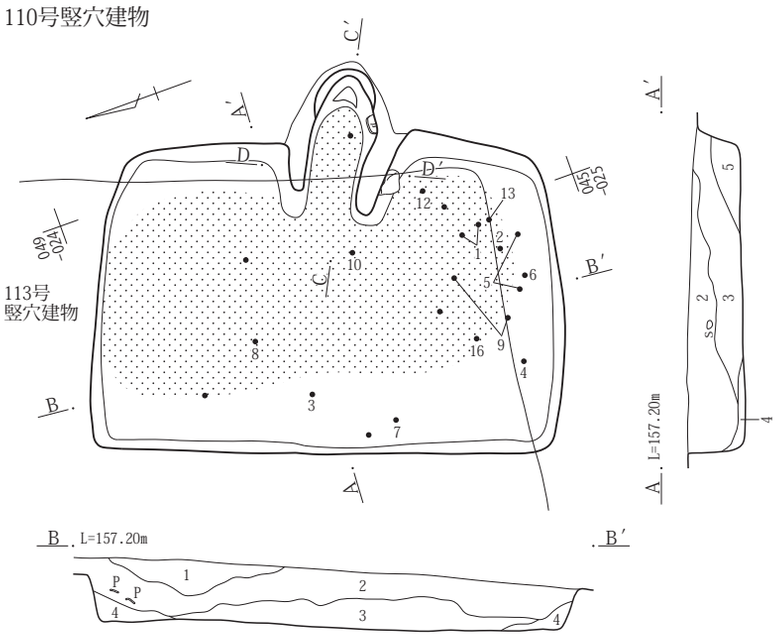
その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は壊されたのか崩落した状態であった。両袖比較的良好な状態で残存していた。規模は全長が1.30m、幅が1.05m、燃焼部幅0.37mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部火床面との間に20㎝ほどの段が設けられていた。なお、左袖には四角錐状の礫が使用されていた。掘り方は焚口から燃焼部にかけて土坑状に浅く掘り込まれ、煙道部の段は掘り方に暗褐色土を充填して形成していた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・長頸壺・短頸壺・甕などが出土している。このうち、１・２の須恵器杯蓋、10の須恵器高杯、14の土師器甕が床面から、14・15の土師器甕がカマドから、16の土師器甕が床面より７㎝上からの出土である。この他の多くは床面より13㎝から40㎝ほどの高さからの出土である。なお、出土した須恵器杯には４～６の底部切り離し技法が回転ヘラ起こしであるのに対して７・８は回転糸切り無調整である。なお、底径/口径比も前者が0.50前後、後者が0.40と異なる。こうしたことから両者の間には時間差が想定できるが、この時間差が構築時期と廃棄時期を表すか否かは不明である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器甕から９世紀第１四半期に比定できる。なお、出土遺物の項で記したように須恵器杯の時間差を存続期間ととらえるなら、８世紀第３四半期に構築されたと想定できる。

110号竪穴建物

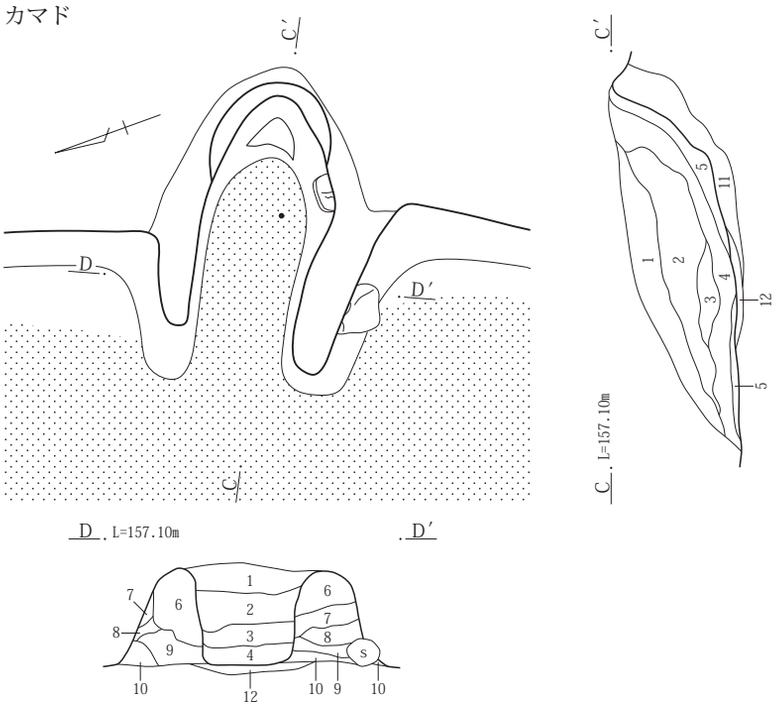


110号竪穴建物

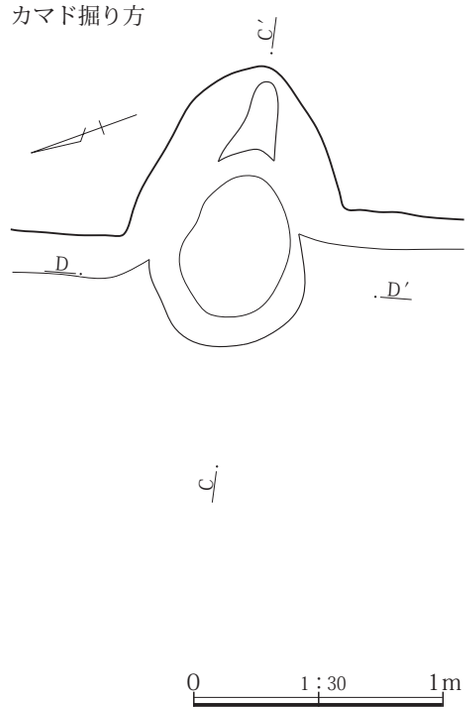
1　暗褐 10YR3/3　泥流土粒を若干とこぶし大の黒色粘性土ブロックを不均等に含む。
2　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土粒をやや多く含み、しまりがある微粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2～暗褐 7.5YR3/3　大粒黒色粘性土ブロックを不均等に多量に含み、しまりが強い。東側からの人為的埋め戻し土。下半では焼土を多く上位はSPとみられるパミス混じりの泥流土小ブロック多く含む。
4　黒褐 10YR3/2　含有物少ない、細粒粘性土。壁の崩落土。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いの泥流土ブロックを含む、しまりが強い弱粘性土。

0　1：60　2m

カマド



カマド掘り方



0　1：30　1m

110号竪穴建物　カマド

1　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土、黒褐色土の混土、焼土、炭化物、SPとみられるパミスなど多く、しまりが強い。
2　暗赤褐 5YR3/3　黒褐色土、泥流土の混土、やや大粒の焼土ブロックを煙道側、黄色味おびる泥流土を燃焼部側に含み、しまりが強い。
3　灰黄褐 10YR4/1　灰と不均等に焼土ブロックを含み、しまりが強いボソボソした感触。
4　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土小ブロック主体、泥流土小ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い。
5　暗褐 10YR3/3　黒色灰を多く含む、微粘性土。
6　暗赤褐 2.5Y3/3　泥流土と黒褐色土の混土、As-C、SPとみられるパミスを多く含む。
7　にぶい赤褐 5YR4/4　基質は６、泥流土ブロックと焼土の大ブロックを多く含み、しまりが強い。
8　暗褐 7.5YR3/3　不均等に焼土を少量含み、やや粗粒の微粘性土。
9　褐 7.5YR4/3　焼土の小ブロックを多く含み、しまりやや強い弱粘性土。
10　暗褐 10YR2/3　黒褐粘性土を小ブロック状に焼土を若干含み、しまりが強い。
11　暗褐 10YR3/4～灰褐 5YR4/2　泥流土ブロックを不均等に含む、細粒土。火床面下整形土。
12　暗褐 10YR3/4　泥流土を多く含み、燃焼部直下では赤変硬化が顕著である。

第142図　110号竪穴建物遺構図

111号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37054～37059、Ｙ＝−85019～−85024に位置する。北東部が調査対象外に存在する。

重複関係　115号竪穴建物、37号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが37号土坑より古く、115号竪穴建物より新しい。

形状　南辺が北辺に比べて短い台形状を呈す。

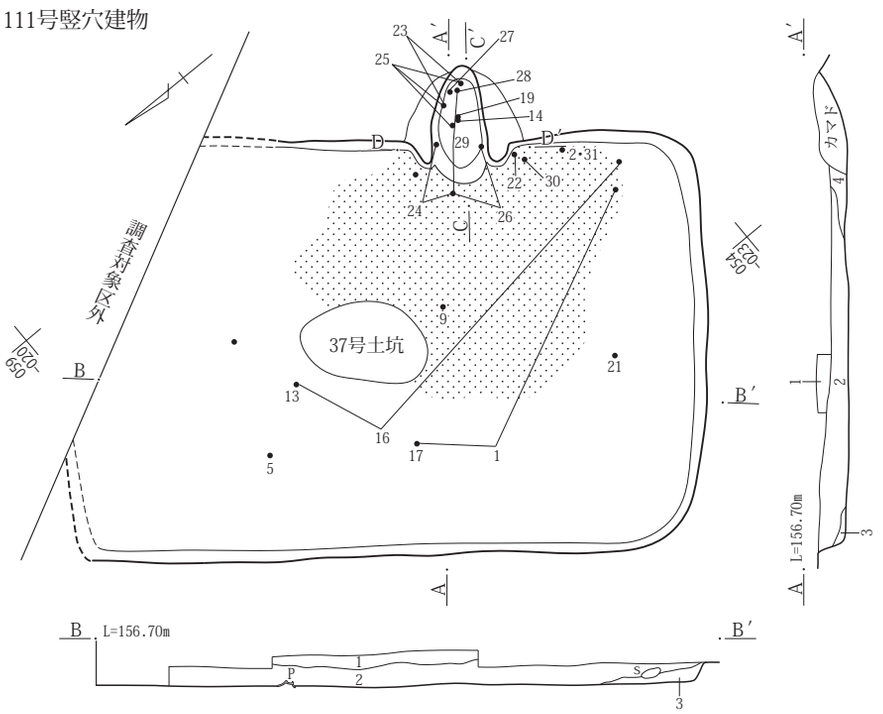
規模　主軸方向の東西方向は3.44m、南北方向は5.10mを測る。確認面から床面までの壁高は６～34㎝を測る。

床面積　残存範囲内で14.39㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－128°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

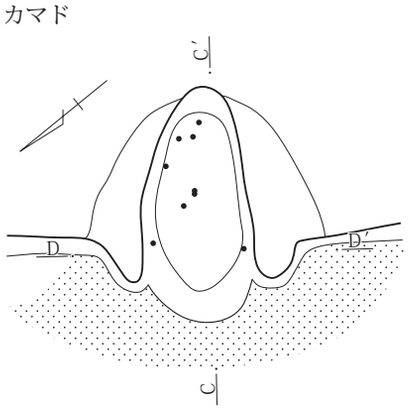
111号竪穴建物

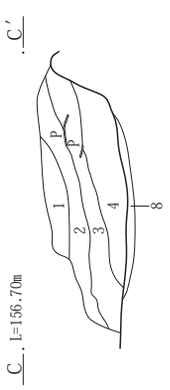


111号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒をやや多く含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　細粒の黒色微粘性土が基質、泥流土粒、焼土、炭化物粒を不均等に少量含む。
3　暗赤褐 2.5Y3/3　やや粗粒の泥流土粒を多く含み、ややしまりが弱い。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰、炭化物粒を多く含み、ややしまりが弱い。

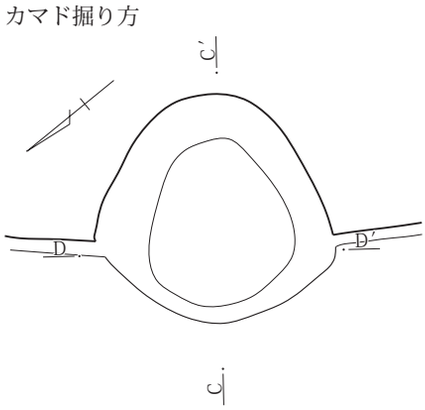
0　1：60　2m

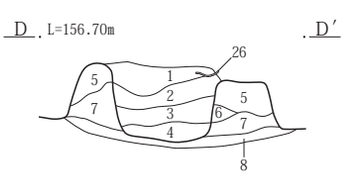
カマド





カマド掘り方





111号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　焼土粒、炭化物粒をわずかに含み、やや粗粒の微粘性土。
2　暗褐 7.5YR3/3　不均等に焼土を含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
3　暗赤褐 5YR3/3　黒色灰と不揃いの焼土ブロックを含む、微粘性土でサラサラした感触。
4　灰黄褐 10YR4/2　白色灰を含み、しまりが弱くボソボソした感触。火床面直上埋没土。
5　暗褐 7.5YR3/3　やや大粒の焼土粒や泥流土粒を少量とAs-Cを若干含む、ややしまりがある細粒微粘性土。
6　黒褐 10YR3/2　黒色灰を多く含む、ややしまりが弱い細粒土。
7　灰褐 7.5YR4/2　不揃いの焼土ブロックを多く含む、弱粘性土。
8　灰黄褐 10YR4/2　黄色味の強い大粒泥流土ブロックをやや多く含む。カマド掘り方埋め戻し土。

0　1：30　1m

第143図　111号竪穴建物遺構図

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。その中でもカマド前の２m四方は硬く踏みしめられていた。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程より南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井が失われていたが、壁内の燃焼部袖は残存していた。規模は全長0.93m、幅0.85m、燃焼部幅0.34mを測る。燃焼部の大部分は壁外に掘り込まれている。壁外の燃焼部は一度、径0.9mほどの土坑状に掘り込み、底に袖と同じ土を貼り付け側壁を構築している。煙道部の奥壁は60°ほどの傾斜で立ち上がっている。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕・羽釜、灰釉陶器、土製品円面硯などが出土している。このうち、５の須恵器無台椀、９・13の須恵器椀、16の須恵器壺、26・29の土師器甕が床面から、11・12・14の須恵器椀、18のロクロ整形土師器小型甕、20・22～25・28の土師器甕がカマドからの出土である。出土した土師器甕には、19～21のような８世紀から形態を変化させながら継続的に作られているものと９世紀中葉から出現するロクロ成形による土師器甕が共伴している。ロクロ成形による土師器甕には頸部までヘラ削りを施すものと胴部上位はナデ程度でロクロ痕を残すものの２形態がみられる。なお、土製品円面硯は埋没土からの出土であるが、圏足部や上部凸帯が打ち欠かれて廃棄されたとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯・椀、土師器甕から９世紀第３四半期に比定できる。なお、重複関係にある115号竪穴建物からは本竪穴建物に共伴するとみられる土器が数点出土している。これらについては115号竪穴建物の項で混入した遺物として掲載してある。

112号竪穴建物

位置　１区調査区南東端、Ｘ＝37048～37052、Ｙ＝-85018～-85021に位置する。東側３分の１程度が調査対象外に延びるため欠く。また、中央部の埋没土を重複関係にある94号竪穴建物によって欠く。

重複関係　94号竪穴建物、122号竪穴建物、34号土坑と重複関係にある。新旧関係は94号竪穴建物や34号土坑より本竪穴建物のほうが古く、122号竪穴建物より新しい。

形状　南西角がやや広角であるが、方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の南北方向は4.00m、東西方向は調査範囲内で3.05mを測る。確認面から床面までの壁高は20～32㎝を測る。

床面積　残存範囲内で9.48㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－11°－Ｅを指す。

埋没状態　埋没土の大部分を重複関係にある94号竪穴建物によって欠くため判然としないが、残存部分の土層断面の観察ではほぼ水平に土砂が堆積していることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

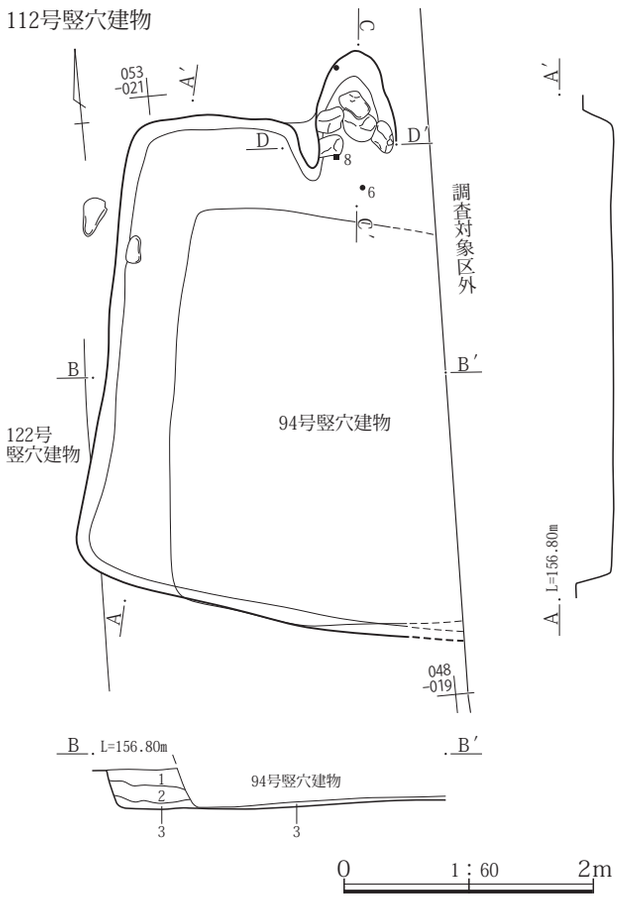
貯蔵穴　検出されなかった。

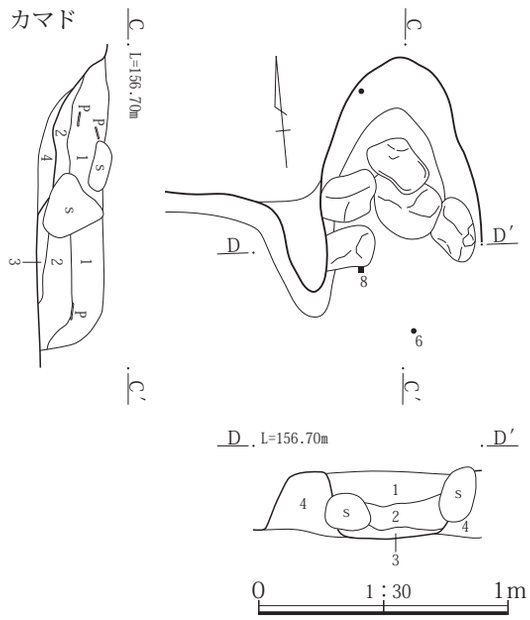
その他施設　検出されなかった。

火処　北壁にカマドが構築されている。なお、焚口から燃焼部側壁を構成していた右袖は試掘坑によって欠く。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、燃焼部の側壁や天井に使用されていた偏平な礫が残されていた。なお、左袖は比較的良好な状態で残存していた。

規模は全長が1.06m、幅は調査可能な範囲で0.88m、燃焼部幅0.43mを測る。煙道部は壁外に延びる。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、流動滓などが出土している。出土量は図示７点、未掲載306点と少量である。このうち、２の須恵器有台杯がカマドからの出土である。カマドからは土器の他に流動滓も出土している。なお、本竪穴建物は重複関係にある94号竪穴建物によって多くを欠くため、床面など本竪穴建物に確実に共伴すると判断できる遺物が少ない。その中でも１～５の土器は共伴すると判断できる。６の土師器甕は94号竪穴建物８と同形態であることから34号土坑の掘削、７は122号竪穴建物に共伴





112号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-C、微細な泥流土を少量含み、ややしまりがある粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　黒色味強い細粒度が基質、不揃いの焼土ブロックを少量含み、ややしまりが弱い。
3　灰褐 5YR4/2　焼土小ブロックをやや多く黒色灰を含み、しまりがやや弱い弱粘性土。
4　黒褐 10YR2/2　黒色灰多く含み、しまりが弱い微粘性土。

112号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状に少量と炭化物粒、焼土若干含む、微粘性の黒褐色細粒土。
2　暗褐 10YR3/3　黒褐色細粒土と細かな泥流土の混土、含有物少ない。
3　暗褐 10YR3/3　弱粘性の黒褐色土主体、細かな泥流土が少量と床面直上に炭化物粒を含む。

第144図　112号竪穴建物遺構図

するものであることから埋没過程で混入したと判断できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した須恵器有台杯や共伴するみられる３の須恵器長頸壺から８世紀末から９世紀初頭に比定できる。

113号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、X＝37045～37051、Y＝-85023～-85030に位置する。南東部の上部を重複関係にある110号竪穴建物によって欠く。

重複関係　110号竪穴建物、119号竪穴建物、122号竪穴建物、８号溝と重複関係にある。新旧関係は110号竪穴建物より本竪穴建物のほが古く、122号竪穴建物、８号溝より新しい。なお、119号竪穴建物との関係は明確ではないが、出土遺物からみると本竪穴建物のほうが古いと判断される。

形状　東西に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の南北方向は4.88m、東西方向は6.20mを測る。確認面から床面までの壁高は34～54㎝を測る。

床面積　26.21㎡を測る。

主軸方位　N－10°－Eを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積とレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。その中でもカマド前は特に硬化した状態であった。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

掘り方　検出されなかった。

壁溝　北壁のカマド西側で検出されている。規模は全長が1.38m、幅20㎝前後、深さ５～８㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

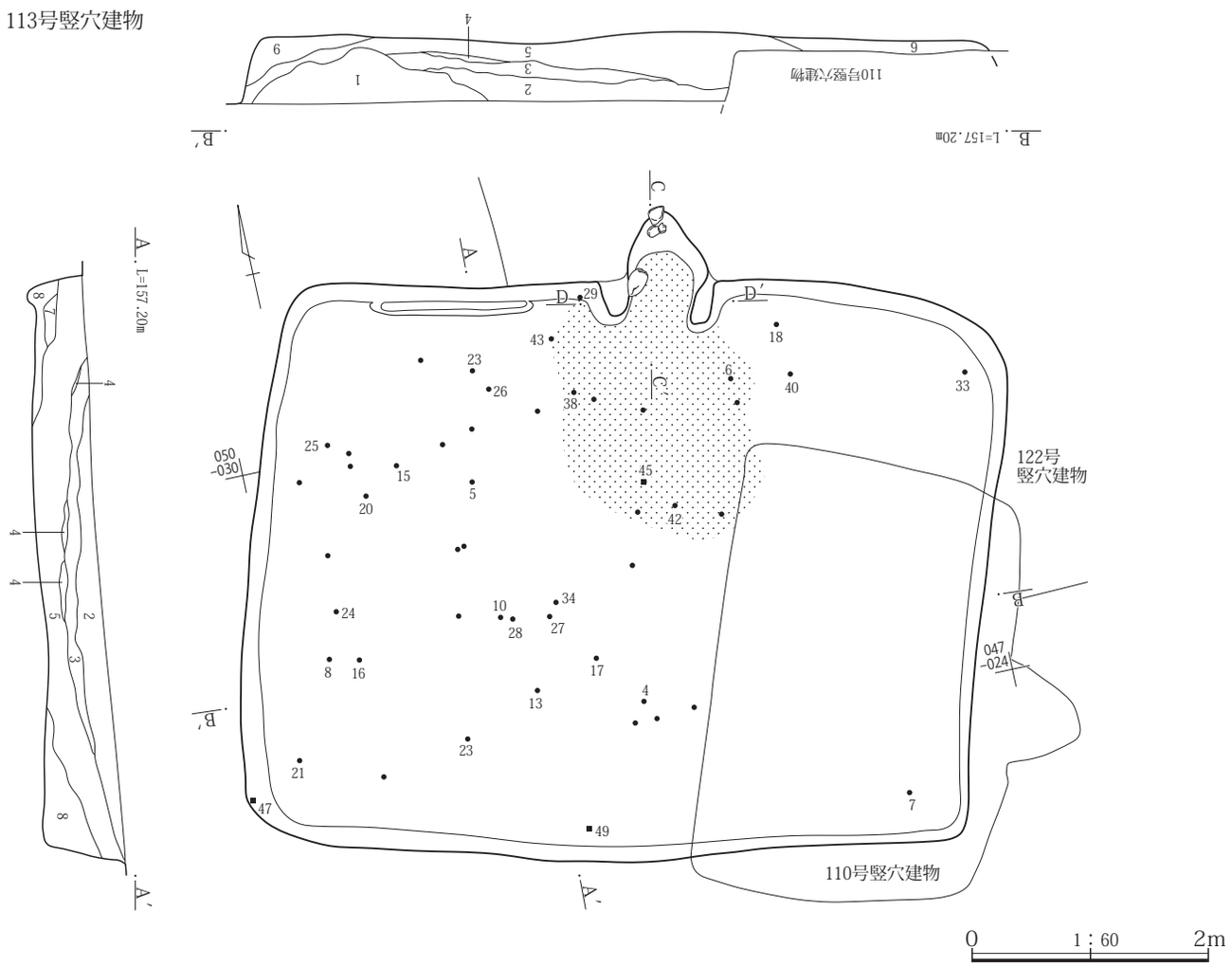
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井部は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.01m、幅が1.27m、燃焼部幅0.50mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部は屋外に存在する。燃焼部左袖際に長さ40cmほどの円礫、煙道部に３個体の小礫が出土したが用途などは判然としていない。

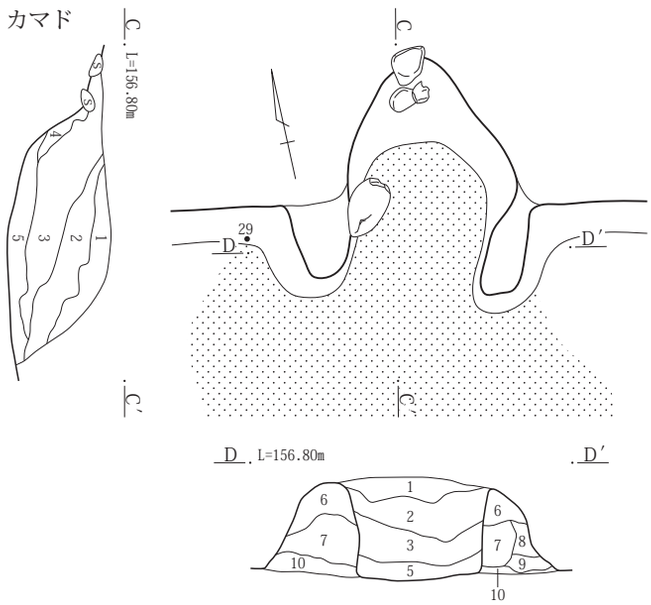
出土遺物　遺物は土師器杯・壺・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高盤・鉢・短頸壺・長頸壺・壺・甕、灰釉陶器、鉄製品鏃・釘、炉底滓などが出土している。このうち、25の須恵器椀、33の須恵器短頸壺、41の土師器壺が床面から、14の須恵器杯がカマドからの出土である。なお、床面やカマドなどからの出土遺物は少なく、他の土器は床面より15cm～40cmほどの間から多く出土している。45の鉄製品鏃も床面より33cm上の確認面に近い位置からの出土である。こうした点から重複関係にある110号竪穴建物が構築された段階では本竪穴建物は完全に埋没していない窪みが残る状態で、そこに土器など不要品が廃棄された可能性が窺える。

22・23の須恵器台付杯は埋没土と床面より18cm上から



113号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/2　泥流土小ブロックをやや多く炭化物少量含む、細粒弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/2　As-Cと泥流土粒をやや多く含む、やや粗粒土。
3　黒褐 10YR3/2　ややしまりが弱い細粒土。炭化物、泥流土小ブロックを少量含む。
4　灰黄褐 10YR4/2　灰色味をおびた灰のような微細粒土を含む、弱粘性土。
5　黒褐 10YR3/2　焼土、炭化物粒、泥流土粒と床面直上で炭化、黒色灰を多く含み、ややしまりが強い弱粘性土。
6　褐 10YR3/2　泥流土小ブロック、焼土等を含み、しまりが強い。
7　灰褐 7.5YR4/2　焼土粒、炭化物粒を多く含む、微粘性土。
8　黒褐 10YR3/2　黒色粘土と炭化物、泥流土を若干含み、ややしまりが強い粘性土。
9　暗褐 10YR3/3　泥流土を多く含み、ややしまりが強い。

第145図　113号竪穴建物遺構図（１）



113号竪穴建物　カマド
1　灰黄褐 10YR4/2　As-C混土、炭化物を若干含む。
2　暗褐 10YR3/3　焼土、炭化物、黒色灰を含む、微粘性土でややサラサラした感触。
3　黒褐 7.5YR3/2　焼土は煙道側でブロック状に焚口側で灰を含む。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、ややしまりが弱い細粒土。煙道側からの流入土とみられる。
5　黒褐 10YR2/2　灰を主体、一部で薄層状の堆積、焼土、炭化物粒を不均等に少量含み、しまりが弱い弱粘性土。
6　暗褐 10YR3/3　泥流土粒を不均等に少量含み、ややしまりが強い。
7　黒褐 10YR3/2　黒色味強い細粒土が基質、焼土粒・As-Cを少量含み、ややしまりが強い。
8　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土ブロックを不均等に含み、しまりが強い。
9　泥流土小ブロックや黒褐色土の混土。
10　灰黄褐 10YR4/2　上位ほど焼土粒・灰を多く含む、粘性土。

0　1：30　1m

第146図　113号竪穴建物遺構図（２）

の出土で、本竪穴建物に共伴するか否か不確実であるが、高台の貼付位置が周縁ではなく、やや内側に貼付されている形態で、県内では類例の少ない個体である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器壺や須恵器杯・短頸壺から８世紀第３四半期に比定できる。なお、カマドから出土している須恵器杯は底部切り離し技法が回転糸切り無調整であるが、110号竪穴建物出土の底部回転糸切りによる須恵器杯より底径/口径比が0.60と大きいことから新旧関係に齟齬はないと判断される。

114号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37077～37082、Ｙ＝-85040～-85044に位置する。

重複関係　97号竪穴建物、120号竪穴建物、127号竪穴建物、155号竪穴建物、171号竪穴建物、１号溝と重複関係にある。新旧関係は１号溝より本竪穴建物のほうが古く、他の重複関係にある竪穴建物よりは新しい。なお、97号竪穴建物との新旧関係は明確ではないが、出土した遺物からは本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南辺は弧を描いているが、ほぼ南北に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の南北方向は3.54m、南北方向は4.47mを測る。確認面から床面までの壁高は１～22㎝を測る。

床面積　13.34㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－105°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では水平からレンズ状の堆積が見られるが、一部で不自然な堆積状態も確認できることから、自然埋没なのか、人為的な埋め戻しかは判然としない。

床面　地山をそのまま踏み固めている範囲と掘り方に黒色土を埋め戻している範囲がみられる。

掘り方　北東部で床下土坑が１基検出されている。床下土坑は10～12㎝ほど掘り込んだ中にピット状の掘り込みを行っている。床面での形状は楕円形、規模は径0.85×0.73m、内部のピット状の掘り込みは楕円形を呈し、径0.37×0.26m、深さは床面から0.48mを測る。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　東南角、壁下から10～25㎝ほど離れた位置で検出されている。形状は隅丸方形、規模は径0.56m、深さ0.40mを測る。貯蔵穴内部からは多くの須恵器杯・椀と30の須恵器長頸壺が出土している。須恵器杯・椀の中には貯蔵穴が埋没していく過程で置かれたと見られるような床面とほぼ同じ高さから出土しているものも存在しており、単に貯蔵穴に収納されていた食膳具とだけではない可能性が窺えた。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている残存状態は焚口と燃焼部の天井部は壊され、天井に補強として使用されていた礫が燃焼部に崩落した状態であった。規模は

全長1.12m、幅1.07m、燃焼部幅0.60mを測る。燃焼部の奥側半分と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部は壁内に袖を設け、側壁には偏平な礫をほぼ全面に立てるように据えてあった。また、焚口の両側には棒状礫をこれも立てるように据えてあった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕・ロクロ甕、須恵器杯・椀・長頸壺・甕、灰釉陶器、鉄製品刀子釘、鏃などが出土している。このうち、９・10の須恵器杯、34の土師器小型甕が床面から、４の須恵器杯、23の須恵器椀、25の須恵器鉢、36・37の土師器甕がカマドから、５～８・11の須恵器杯、13～19・21・22の須恵器椀、30の須恵器壺が貯蔵穴からの出土である。31の須恵器大型壺は床面、カマド､貯蔵穴から出土した破片が出土している。なお、鉄器では39の鏃と43の釘が床面から、40～42の刀子は床面近くからの出土である。なお、カマド煙道部の南側、114号竪穴建物の範囲外、127号竪穴建物の埋没土上位から38の須恵器椀が出土している。127号竪穴建物は８世紀前半代に比定できることやこの個体は本竪穴建物から出土している須恵器椀と同様な形態を示していることなどから本竪穴建物に共伴すると判断できる。こうした点から、38の須恵器椀は本竪穴建物構築時にカマド脇に置かれた可能性が窺える。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマド、貯蔵穴から出土した土師器甕や須恵器杯・椀などから９世紀第４四半期に比定できる。なお、本竪穴建物から出土した土師器甕で図示できた個体は全てロクロ整形によるもので、頸部下にヘラ削りが施されていない状態であった。ロクロ土師器甕は９世紀後半代から県内でも出土例を見ることができるが、その存在は客体的なもので、本竪穴建物のような煮沸具の主体を占める例はみることがなかった。

なお、本竪穴建物の床面には炭化材が散乱した状態で出土しており、焼失した可能性が想定された。

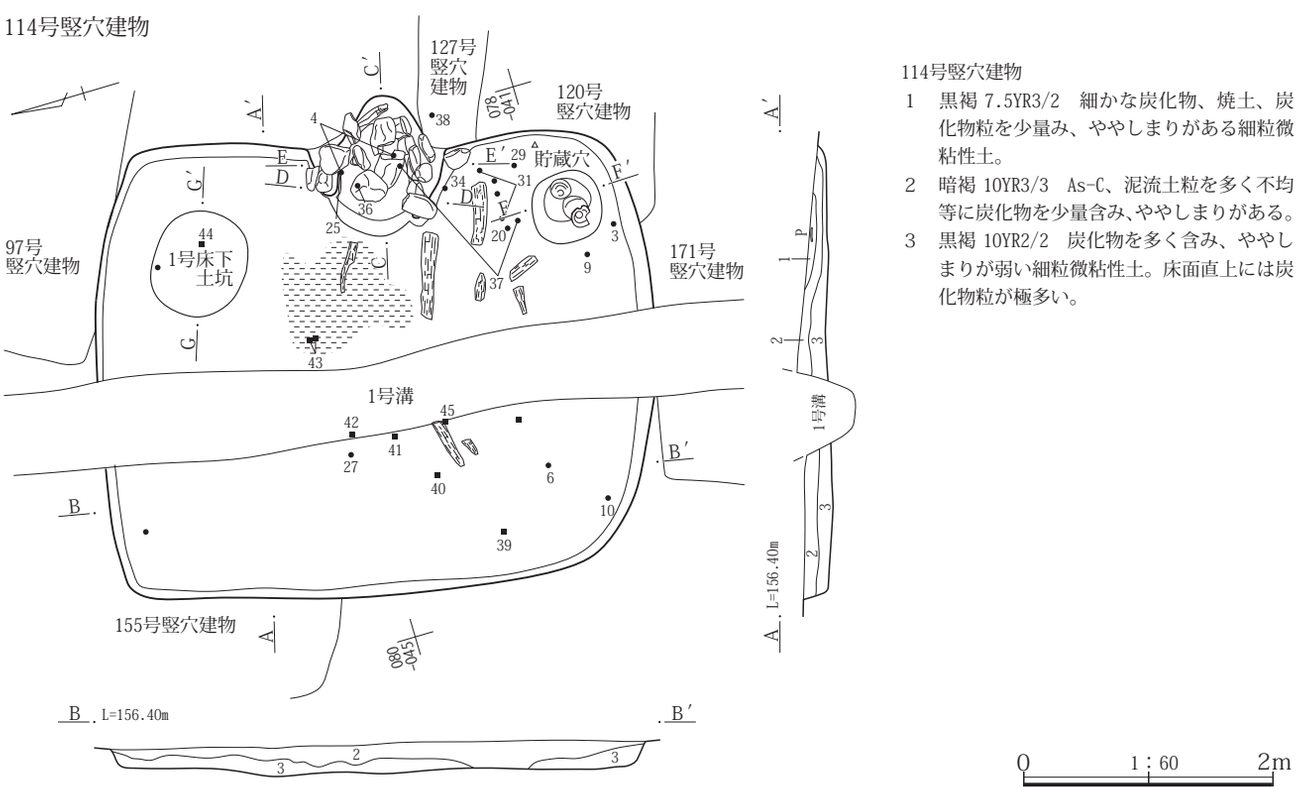
115号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37054～37058、Ｙ＝-85020～-85024に位置する。上部を重複関係にある111号竪穴建物によって欠く。

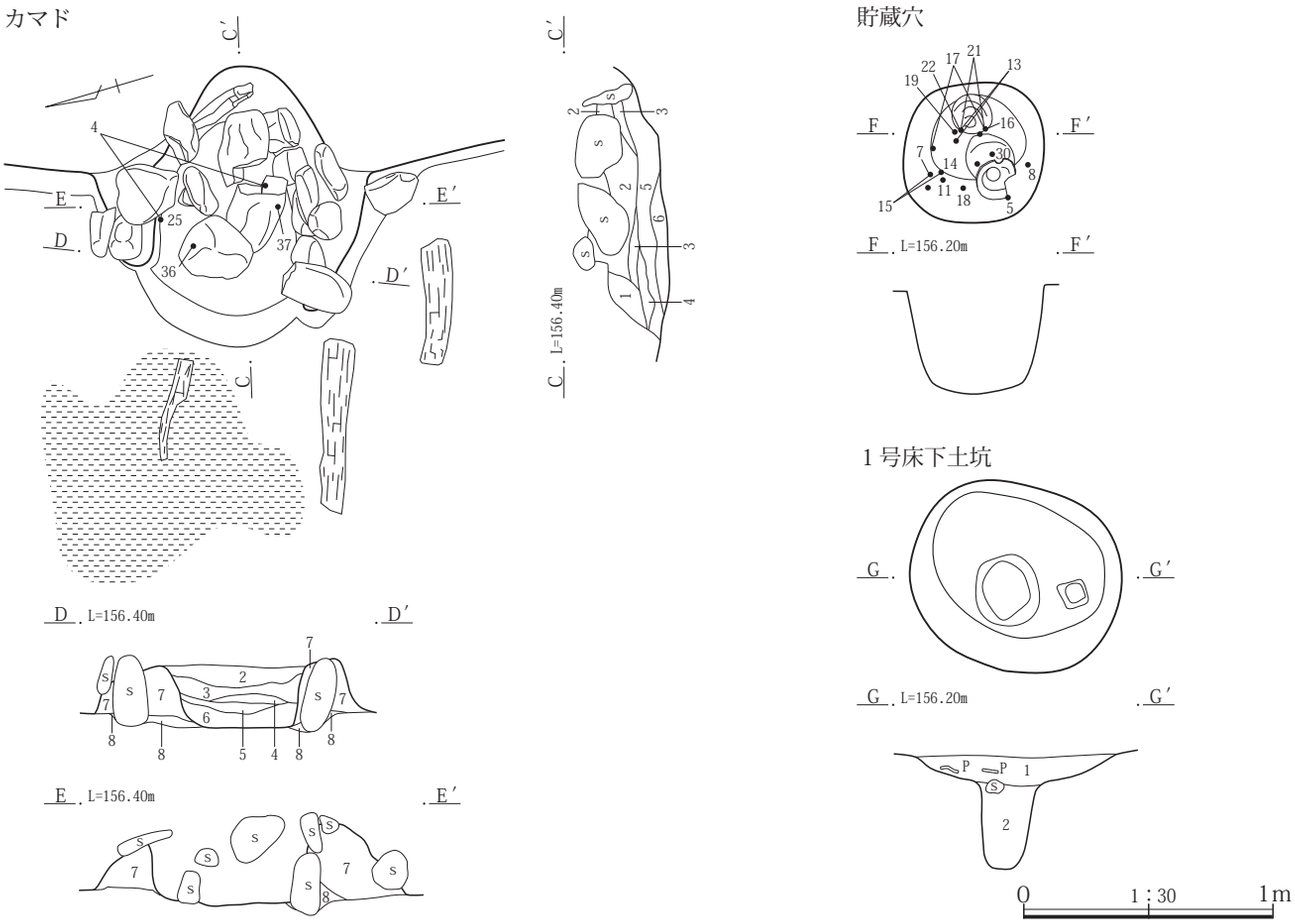
重複関係　111号竪穴建物、37号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが111号竪穴建物、37号土坑より古い。

形状　対面する各辺が異なる四角形を呈す。

規模　長軸方向の南北方向は3.86m、東西方向は2.46m



第147図　114号竪穴建物遺構図（１）



114号竪穴建物 カマド
1　黒褐 10YR3/2　炭化物を多く含む、粘性土。
2　暗褐 7.5YR3/3　焼土小ブロックを不均等に含む、微粘性土。上面の礫を包むように堆積する。
3　暗赤褐 5YR3/3　焼土粒を多く含む、微粘性土。
4　黒褐 10YR2/2　炭化物粒と灰を多く含む、弱粘性土でサラサラした感触。
5　灰褐 5YR4/2　焼土を多く含み、ややボソボソした感触。天井の崩落土を含むとみられる。
6　黒褐 10YR3/2　黒色灰、焼土粒、炭化物粒を含み、ややしまりを欠く微粘性土。
7　黒褐10YR3/2　含有物少なく、ややしまりが強い弱粘性土。不明瞭な袖構築材。
8　暗褐10YR3/3　基質は７と同じ。泥流土粒や焼土粒を不均等に含む。

114号竪穴建物　１号床下土坑
1　灰褐 5YR4/2　２～５㎜大の焼土粒を微量に含み、ややしまりが弱い。
2　黒褐 10YR2/2　細粒粘性土。泥流土小ブロック混土。

第148図　114号竪穴建物遺構図（２）

を測る。111号竪穴建物床面から本竪穴建物床面までの壁高は５～18㎝を測る。

床面積　7.37㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－40°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。なお、中央部の東西1.5m、南北1.0mの範囲に焼土が散布していた。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

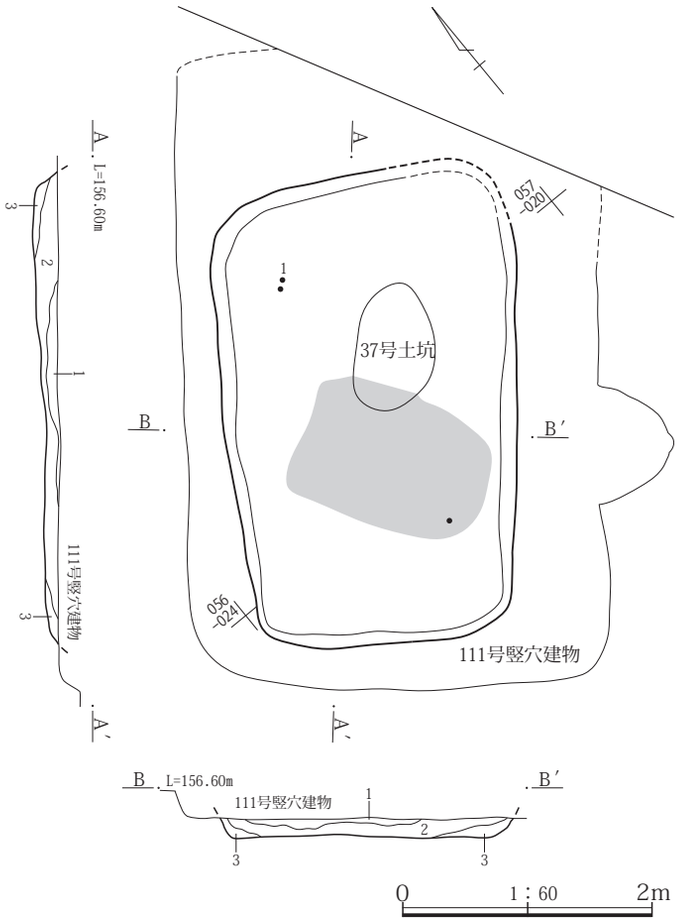
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　カマドは構築されていないが、床面の広い範囲に焼土が散布した状態がみられたが、出土遺物からはカマドが構築されている時期であることから火処は設けられていなかったと判断される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。出土量は図示９点、未掲載254点と少ない。このうち、１の須恵器杯が床面からの出土

115号竪穴建物



115号竪穴建物
1　灰褐 7.5YR4/2　焼土粒、焼土小ブロックを不均等にやや多く含み、しまりが強い。一部上面は111号竪穴建物の床下埋め戻し土を含むようだが、差は明確にできなかった。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土粒、SPとみられるパミス、焼土粒を少量含み、しまりがやや強い細粒微粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　黄色味おびる泥流土ブロックを不均等に含む、細粒粘性土。

第149図　115号竪穴建物遺構図

である。なお、出土した多くの土器が重複関係にある111号竪穴建物からの混入とみられ、図示した３～９の土器もその形態や整形技法から本来は111号竪穴建物に帰属するものと判断できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した４の須恵器杯から８世紀後半代に比定できるが、共伴遺物が少なく確証には至らなかった。

116号竪穴建物

位置**位置**　１区調査区東北部、Ｘ＝37098～37103、Ｙ＝−85048～−85021に位置する。大部分を重複関係にある66号竪穴建物、98～100号竪穴建物によって欠く。

重複関係　40号竪穴建物、66号竪穴建物、95号竪穴建物、98号竪穴建物、99号竪穴建物、100号竪穴建物、129号竪穴建物、14号土坑と重複関係にある。新旧関係は129号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しいが、他の重複関係にある竪穴建物や土坑よりは古い。

形状　東西方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は3.75m、東西方向は4.35mを測る。確認面から床面までの壁高は18～35㎝を測る。

床面積　残存範囲内で13.61㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－３°－Ｅを指す。

埋没状態　残存する範囲が狭いが、土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

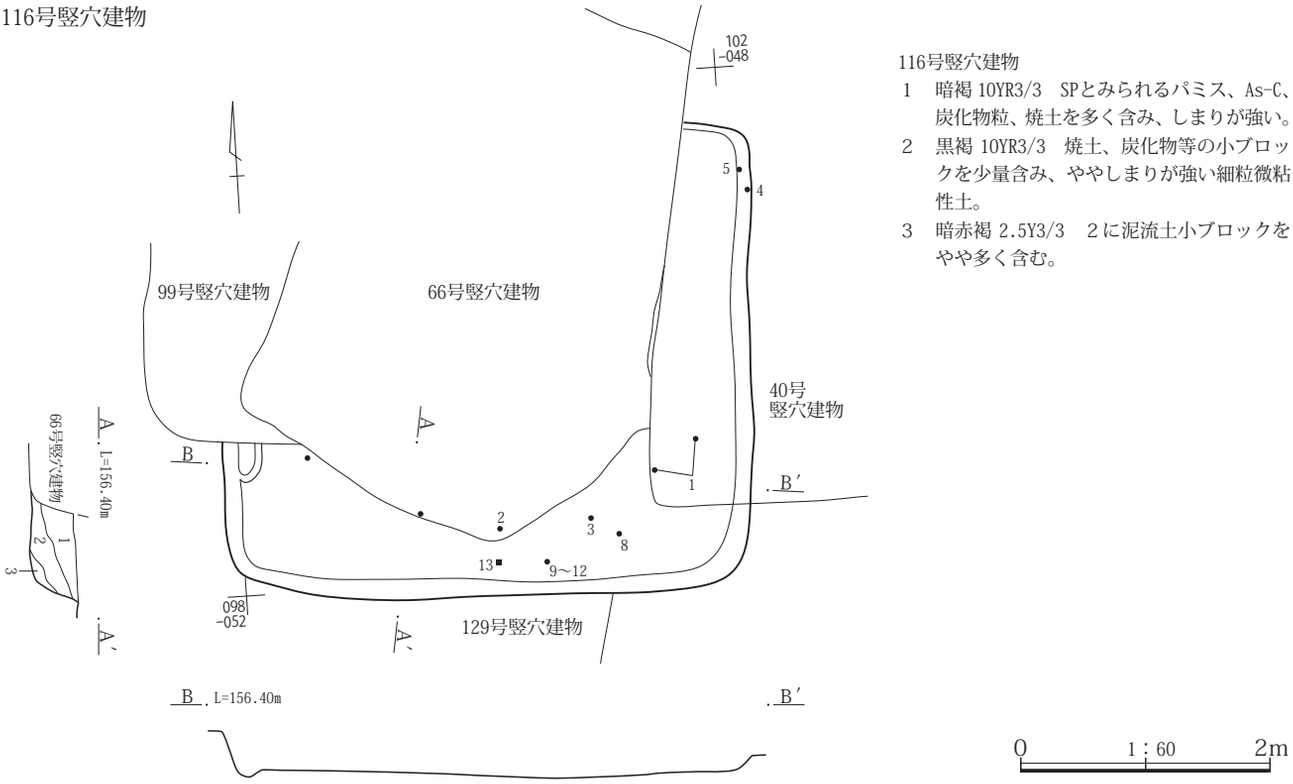
その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかったが、出土遺物からはカマドが構築されている時期の竪穴建物であり、北壁に構築されていた可能性が想定される。

出土遺物　遺物は須恵器杯蓋・杯・椀・甑・甕、緑釉陶器椀、流動滓などが出土している。なお、土師器の出土はみられなかった。このうち、１・２の須恵器皿、３～５の須恵器椀が床面からの出土である。なお、９～12の須恵器杯は床面より33㎝上の確認面に近い位置からまとまって出土している。これらは焼成が酸化焔によるもので、形態的には10世紀後半の年代観が与えられる。こうしたことから、浅い掘り込みが別に存在し、そこに埋納されたものと想定できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器皿や椀から９世紀第３四半期に比定できる。

116号竪穴建物



116号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　SPとみられるパミス、As-C、炭化物粒、焼土を多く含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/3　焼土、炭化物等の小ブロックを少量含み、ややしまりが強い細粒微粘性土。
3　暗赤褐 2.5Y3/3　２に泥流土小ブロックをやや多く含む。

第150図　116号竪穴建物遺構図

117号竪穴建物

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37079～37084、Ｙ＝−85036～−85049に位置する。重複関係にある竪穴建物に大部分を欠き、西側３分の１が残存するだけであった。

重複関係　91号竪穴建物、96号竪穴建物、97号竪穴建物、124号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが91号竪穴建物、96号竪穴建物より古く、97号竪穴建物、124号竪穴建物より新しい。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　南北方向は4.37m、東西方向は残存範囲で3.50mを測る。確認面から床面までの壁高は20～29㎝を測る。

床面積　残存範囲内で14.35㎡を測る。

主軸方位

主軸方向を東西方向とするとＮ－107°－Ｅを指すと想定される。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状堆積が確認できたことから自然埋没と判断される。

床面　残存範囲では若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では北壁際と東壁際の南西角から東へ0.8mほどで検出された。規模は幅が10～15㎝、深さ２～３㎝である。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

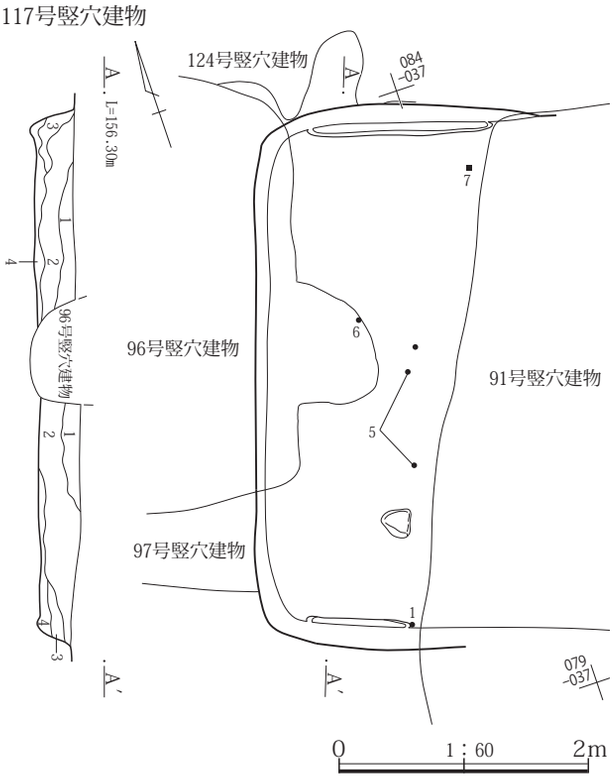
その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかったが、出土遺物からカマドが構築されていたと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、鉄製品刀子などが出土している。このうち、５の須恵器長頸壺が床面から、６の須恵器壺が床面より６㎝上、１の須恵器杯蓋が床面より10㎝上から、５の原始灰釉長頸壺が床面からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や床面近く、カマドから出土した須恵器杯・椀・長頸壺などから８世紀後半代に比定できる。

117号竪穴建物



117号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C混土、泥流土粒と炭化物粒を少量含む、細粒非粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　土質は１と同様。含有物少ない。
3　黒褐 10YR3/2　泥流土を不均等に少量含み、しまりが強い弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　基質の土は黒色粘性土、泥流土をやや多く含み、しまりが強い弱粘性土。

第151図　117号竪穴建物遺構図

118号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、X＝37040～37043、Y＝-85026～-85030に位置する。本竪穴建物は南から北に５ｍで40㎝の高低差をもつ傾斜地に立地するため北辺を確認することができなかった。また、北壁側を重複関係にある109号竪穴建物によって欠く。

重複関係　109号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は不明瞭であった。出土遺物もほぼ同様な様相を呈しているが、構築は本竪穴建物のほうが新しいと想定される。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は3.32m、南北方向は確認できた範囲で2.87mを測る。確認面から床面までの壁高は５～20㎝を測る。

床面積　推定で7.48㎡を測る。

主軸方位　N－100°－Eを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため、埋没状態の判断は難しいが、東壁際に三角堆積が確認できることから自然埋没の可能性が高い。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われているが、両袖は残存していた。規模は全長が0.60m、幅が0.90m、燃焼部幅0.33mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。このうち、４・５の須恵器杯、９の須恵器短頸壺蓋が床面から11の土師器甕がカマドからの出土である。11の土師器甕は口縁部小片のため不明確な点はあるが、口縁部形態はコの字状呈する前段階の状態であるとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器杯から９世紀第１四半期に比定できる。なお、重複関係にある109号竪穴建物とはほぼ同時期であるが、109号竪穴建物からは須恵器杯の底部切り離し技法に回転ヘラ起こしによるものがみられることから、構築は本竪穴建物のほうが新しいと想定した。

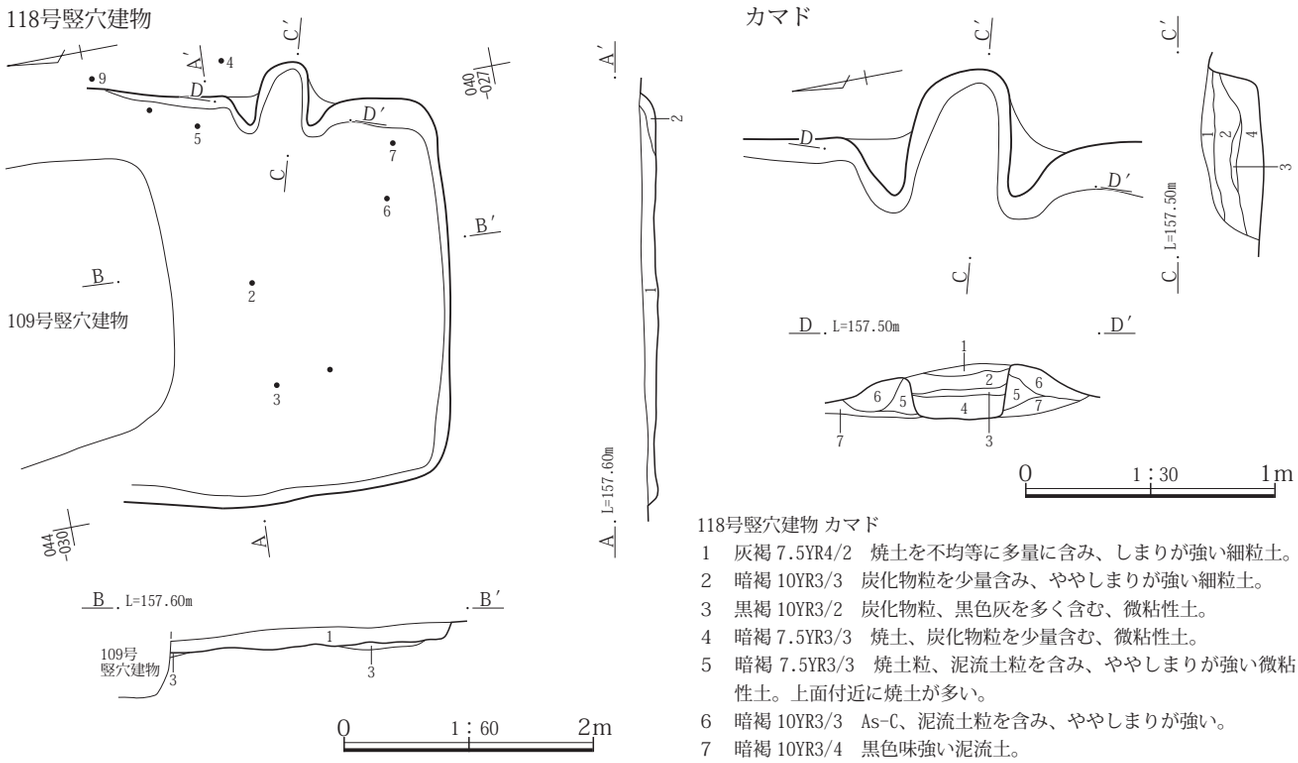
119号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、X＝37044～37046、Y＝-85026～-85030に位置する。本竪穴建物は確認面から床面までが浅いことや重複関係にある109号竪穴建物、110号竪穴建物、113号竪穴建物によって大部分を欠くため全貌は不明である。

重複関係　109号竪穴建物、110号竪穴建物、113号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は明確ではない。出土遺物からみると109竪穴建物・110号号竪穴建物とはほぼ同様な時期とみられるが、110号竪穴建物、113号竪穴建物とは出土遺物から本竪穴建物のほうが新しいとみられる。

形状　残存する南辺、東辺の状態から台形状を呈すると想定される。

規模　残存する南辺は0.8m、東辺は1.4mである。確認



118号竪穴建物 カマド
1　灰褐 7.5YR4/2　焼土を不均等に多量に含み、しまりが強い細粒土。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物粒を少量含み、ややしまりが強い細粒土。
3　黒褐 10YR3/2　炭化物粒、黒色灰を多く含む、微粘性土。
4　暗褐 7.5YR3/3　焼土、炭化物粒を少量含む、微粘性土。
5　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒、泥流土粒を含み、ややしまりが強い微粘性土。上面付近に焼土が多い。
6　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を含み、ややしまりが強い。
7　暗褐 10YR3/4　黒色味強い泥流土。

118号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを不均等に少量と炭化物、焼土を若干含み、ややしまりが強い。
2　灰褐 7.5YR4/2　焼土をやや多く炭化物を若干含む、細粒土。焼土は壁際ではブロック状、中央では粒状。
3　黒褐 10YR3/2　1に近似、含有物少ない。

第152図　118号竪穴建物遺構図

面から床面までの壁高は３㎝前後を測る。

床面積　残存範囲内で3.09㎡を測る。

主軸方位　不明。

埋没状態　土層断面の観察できた箇所が狭いため判断できない。

床面　計測できない。

掘り方　残存範囲では検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

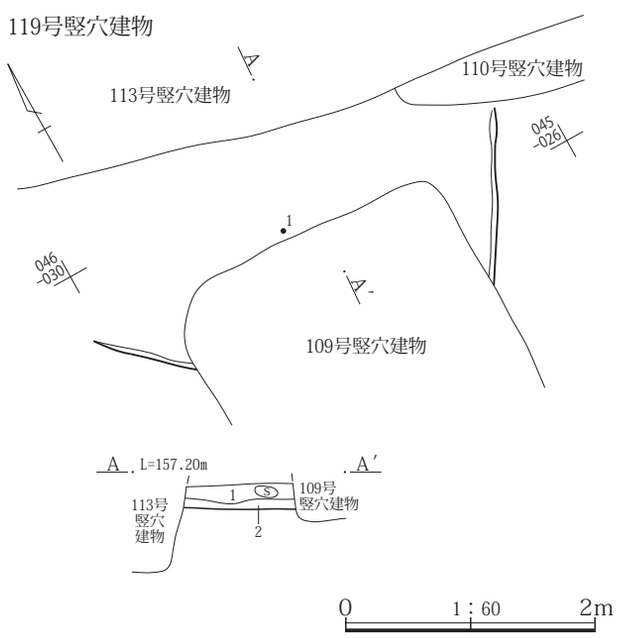
柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土しているが、出土量は図示１点、未掲載40点、776ｇとわずかであった。図示した遺物は１の須恵器杯蓋で床面より18㎝上からの出土であった。この他、未掲載遺物には土師器甕頸部片が出土している。この土師器甕は頸部が「コの字」を呈しているが、出土位置は埋没土からで本竪穴建物に共伴するか否かは確実ではない。



119号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を霜降状にやや多く炭化物、焼土を少量含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　1と同じだが、床面直上に炭化物粒、焼土粒を少量含む。

第153図　119号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、重複関係にある竪穴建物から９世紀前半代に比定したい。

120号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37074～37078、Ｙ＝-85039～-85043に位置する。南西部を171号竪穴建物、北西角付近を114号竪穴建物によって欠く。

重複関係　114号竪穴建物、121号竪穴建物、127号竪穴建物、171号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は114号竪穴建物、171号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古いが、121号竪穴建物、127号竪穴建物より新しい。

形状　東西方向に長いやや歪んだ長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は残存範囲で約3.0m、南北方向は2.64mを測る。確認面から床面までの壁高は15～35㎝を測る。

床面積　想定で6.70㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－118°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の北東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていた。規模は全長が1.00m、幅が0.90m、燃焼部幅0.45mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に掘り込まれている。焚口の両側には長さ32～40㎝、径10㎝ほどの棒状礫が立てられるように据え付けられており、その礫と礫の間に12～15の土師器甕を入れ子状に連結して渡してカマド構築材としていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。このうち、１～４の須恵器杯蓋、６の須恵器杯、７の須恵器椀、８の須恵器盤、９の土師器鉢、11の長頸壺が床面から、12～15の土師器甕がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯や土師器甕などから、８世紀第２四半期から第３四半期に比定できる。なお、この年代観は重複関係にある171号竪穴建物と同時期である。そうした中でカマドに構築材として使用されている土師器甕は頸部がくの字状を呈しており８世紀第３四半期の年代観が与えられる。こうしたことから本竪穴建物の構築は８世紀第３四半期に比定され、構築以前に使用されていた土器がそのまま継続して使用されたとみられる。

127号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37074～37079、Ｙ＝-85039～-85043に位置する。重複関係ある114号竪穴建物、120号竪穴建物によって大部分を欠く。

重複関係　114号竪穴建物、120号竪穴建物、121号竪穴建物、171号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は114号竪穴建物、120号竪穴建物、121号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古い。なお、171号竪穴建物との関係は発掘調査時では本竪穴建物のほうが新しいが、出土遺物からはほぼ同じか、本竪穴建物のほうが古い。

形状　長方形または方形を呈すと想定される。

規模　南北方向が3.70m、東西方向は残存範囲で2.90mを測る。確認面から床面までの壁高は10㎝ほどを測る。

床面積　推定で8.82㎡を測る。

主軸方位　東壁にカマドが構築されていたと想定するとＮ－120°－Ｅを指す。

埋没状態　残存範囲が狭いため判然としないが、土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　残存範囲では地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

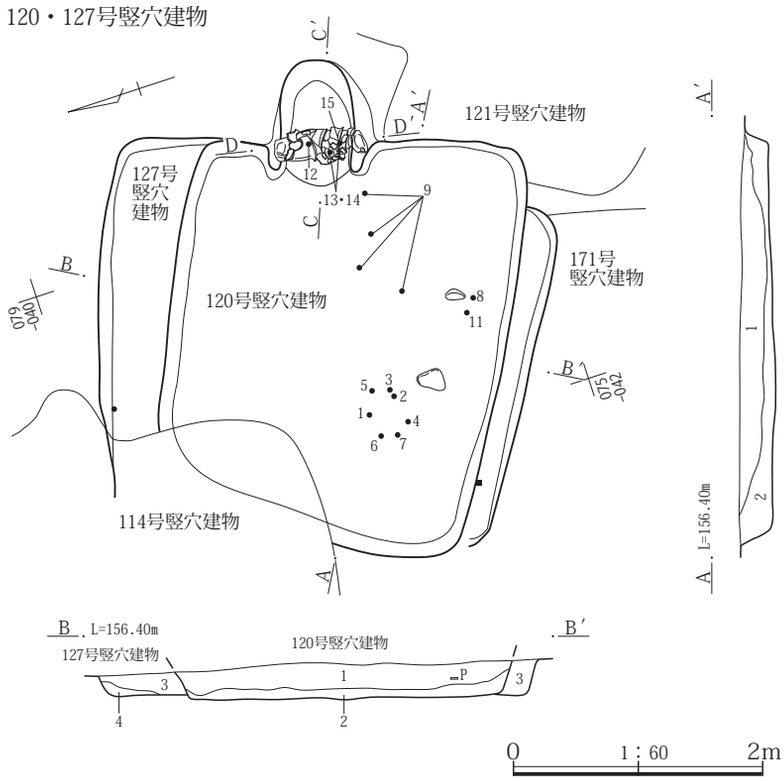
火処　残存範囲では検出されなかった。出土遺物の時期からはカマドが構築されていると想定でき、位置は残存状態から東壁に想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、流動滓などが出土しているが、重複関係にある他の

竪穴建物によって多くを欠くため出土量は図示５点、未掲載72点とわずかであった。図示した須恵器杯のうち３・５は床面から、１・２・５は埋没土からの出土である。３の出土位置からみると本竪穴建物に共伴すると判断できるが、形態や底部切り離し技法に回転糸切りが用いられており、120号竪穴建物、171号竪穴建物から出土している須恵器杯と同様である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土している須恵器杯が共伴するか、疑問な点があることから重複関係にある120号竪穴建物、171号竪穴建物の時期以前と判断され、出土遺物を考慮すると８世紀前半代に想定できる。

120・127号竪穴建物



120号竪穴建物・127号竪穴建物

1　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土ブロックに炭化物粒をやや多く含み、ややしまりがある。(120号竪穴建物埋没土)

2　黒褐 10YR3/2　炭化物粒を少量含む、弱粘性土。(120号竪穴建物埋没土)

3　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を多く含み、しまりが強い非粘性土。(127号竪穴建物埋没土)

4　黒褐 10YR2/2　含有物少なく、しまりやや強い細粒微粘性土。床面直上に炭化物粒が若干含まれる。(127号竪穴建物埋没土)

120号竪穴建物　カマド

1　暗褐 7.5YR3/3　As-C、泥流土粒を多く不均等に焼土小ブロックを含む微粘性土。

2　暗褐 10YR3/3　炭化物粒、黒色灰を少量含む、細粒弱粘性土でややサラサラした感触。

3　灰褐 5YR4/2　焼土ブロックをきわめて多く含む、弱粘性土。天井の崩落土か。

4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を多く含み、ややしまりを欠く粘性土。

5　暗褐 10YR3/4　炭化物粒、灰を混合したややしまりがある粘性土。火床面下埋め戻し土。

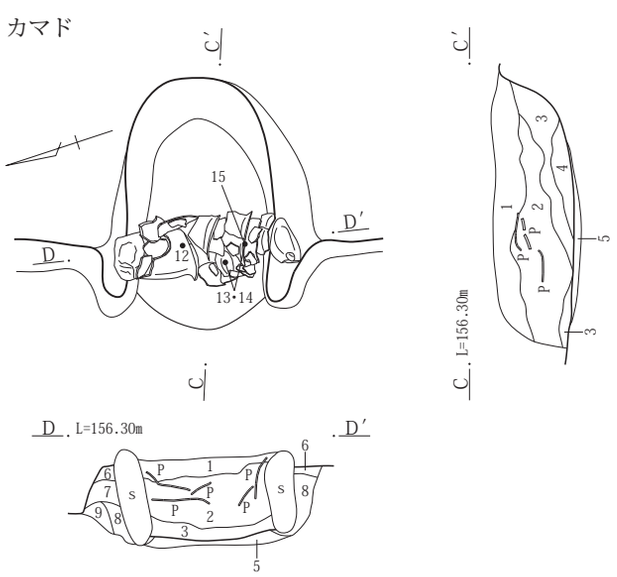
6　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い弱粘性土。

7　灰黄褐 10YR4/2　６に類似、含有物少ない。

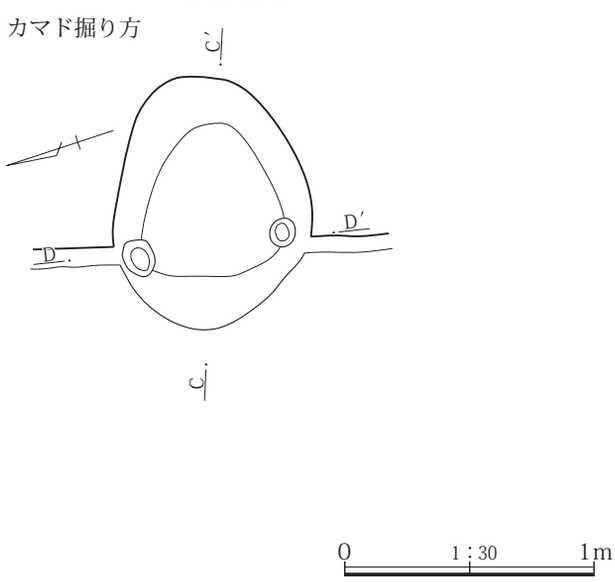
8　暗褐 10YR3/3　ややしまりが弱い弱粘性土。袖石の裏込め土か。

9　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土、ややしまりが強い。

カマド



カマド掘り方



第154図　120・127号竪穴建物遺構図

121号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37072～37076、Ｙ＝-85037～-85040に位置する。西壁の北側を重複関係にある120号竪穴建物によって欠く。

重複関係　120号竪穴建物、７号溝と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが古い。

形状　東西方向にやや長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は2.18m、東西方向は2.44mを測る。確認面から床面までの壁高は４～13㎝を測る。

床面積　4.23㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－105°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため、判断が難しいが、土層断面の観察では泥流土ブロックを不均等に含むことから人為的な埋め戻しが行われた可能性が想定される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

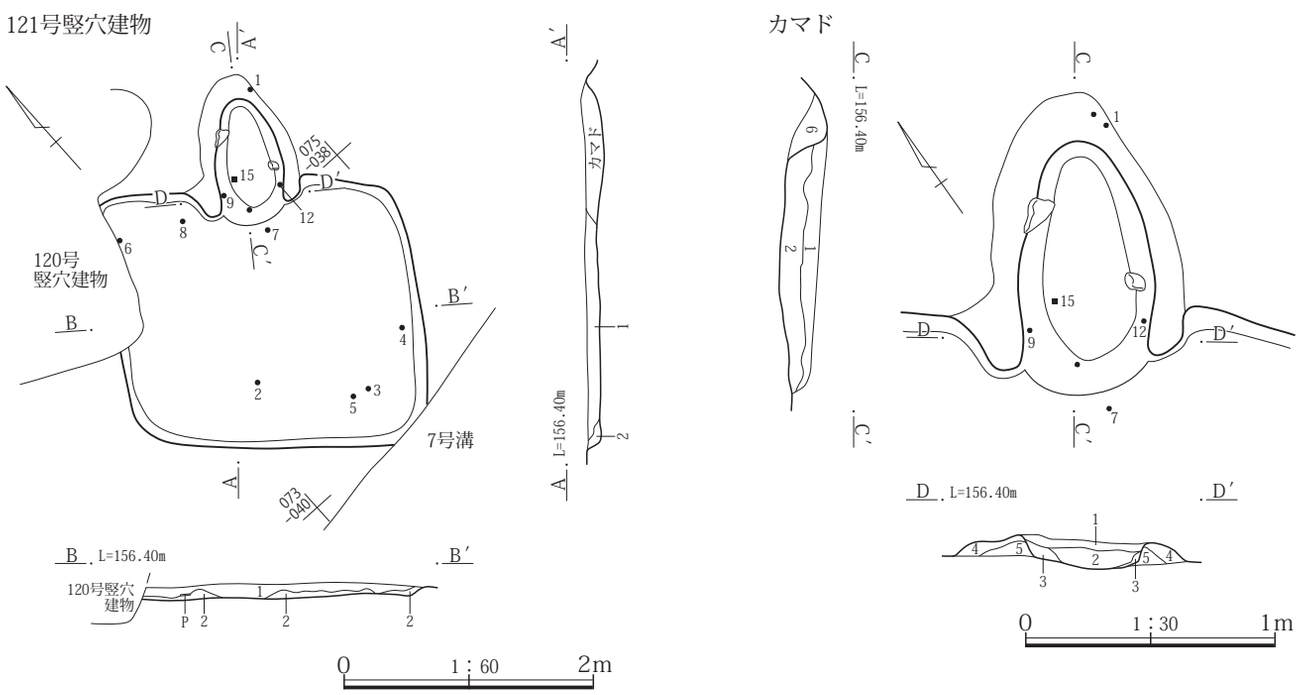
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道部に掛けての天井部は失われていた。燃焼部袖は両側とも残存していた。規模は全長1.22m、幅1.00m、燃焼部幅0.38mを測る。燃焼部の大半と煙道部は壁外に存在し、この部分は地山を直接側壁とせず、袖から連続させるように灰褐色土ブロックと黒褐色土を混合した土を貼り付けて側壁としている。なお、確認面から燃焼部火床面が浅いため上部の構造は明らかではない。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・鉢・甕、流動滓などが出土している。このうち、１の須



121号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、炭化物粒、焼土の小ブロックを不均等に多く含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土ブロックを不均等に含み、しまりが強い。人為的な埋め戻し土か。
121号竪穴建物　カマド
1　灰黄褐 10YR4/2　黄色味の強い泥流土ブロックを不均等に多く炭化物、焼土を少量含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　灰を含み、しまりもやや弱い細粒弱粘性土でややサラサラした感触。
3　黒褐 10YR3/2　２に近似、泥流土をやや多く含む。
4　暗褐 10YR3/3　不明瞭な泥流土ブロックを不均等に焼土を若干含み、ややしまりが強い弱粘性土。
5　黒褐 10YR2/3　含有物少ない、しまりが強い粘性土。
6　灰黄褐色土ブロックと黒褐色土ブロックの混合土。

第155図　121号竪穴建物遺構図

恵器杯蓋、９・10の須恵器鉢、11の土師器台付甕、12の土師器甕、流動滓がカマド内部から、13の土師器甕と14の須恵器甕がカマド確認面からの出土である。２～５の須恵器杯は床面より６～11㎝上の間からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した土師器甕からは８世紀第４四半期に比定できるが、この年代観だと重複関係にある竪穴建物と齟齬が生じることになる。また、本竪穴建物から出土している須恵器杯は底部の整形や切り離し技法に回転ヘラ起こし後回転ヘラ削りと回転糸切りの両技法がみられ、８世紀前半から８世紀後半までの幅広い年代観が与えられる。そのため、ここでは８世紀代とやや幅広い年代観に留める。

122号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37045～37051、Ｙ＝-85023～-85030に位置する。南西部を重複関係にある113号竪穴建物によって欠く。

重複関係　110号竪穴建物、112号竪穴建物、113号竪穴建物、17号土坑と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが古い。

形状　南北方向がやや長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は6.24m、東西方向は5.84mを測る。確認面から床面までの壁高は12～43㎝を測る。

床面積　推定で33.52㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－１°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では南東部分でＰ１を検出している。Ｐ１は対角を結んだ線上に近い位置に存在するが、同様な他の位置から柱穴が検出されなかったためＰ１についても柱穴と断定するには至らない。なお、形状は楕円形を呈し、規模は径62×56㎝、深さ18㎝を測る。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　南北方向の中軸線上の北壁寄りに炉が設けられていた。形状は楕円形で浅く窪む。規模は径0.82×0.80mを測る。南端に長さ32㎝、径８㎝の棒状礫が枕石として置かれていた。窪みの内部には顕著な焼土がみられた。

出土遺物　遺物は土師器高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、鉄製品鏃などが出土しているが、重複関係にある竪穴建物によって一部を欠くため出土量は図示７点、未掲載171点と少量である。このうち、４の土師器高杯、６の土師器壺、７の土師器甕、８の鉄製品鏃は床面からの出土である。しかし、本竪穴建物の存続時期からみると８の鉄製品鏃は共伴する可能性は低い。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器から４世紀前半代に比定できる。

123号竪穴建物

位置　１区調査区東南部、Ｘ＝37060～37063、Ｙ＝-85022～-85025に位置する。確認面から床面までが浅く、西半が検出できなかったため全貌は明かではない。

重複関係　他の遺構との重複関係は確認されていない。

形状　長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は確認できた範囲で1.70m、南北方向は2.87mを測る。確認面から床面までの壁高は２～３㎝を測る。

床面積　4.28㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－65°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面浅いため判断できない。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった

柱穴　検出されなかった。

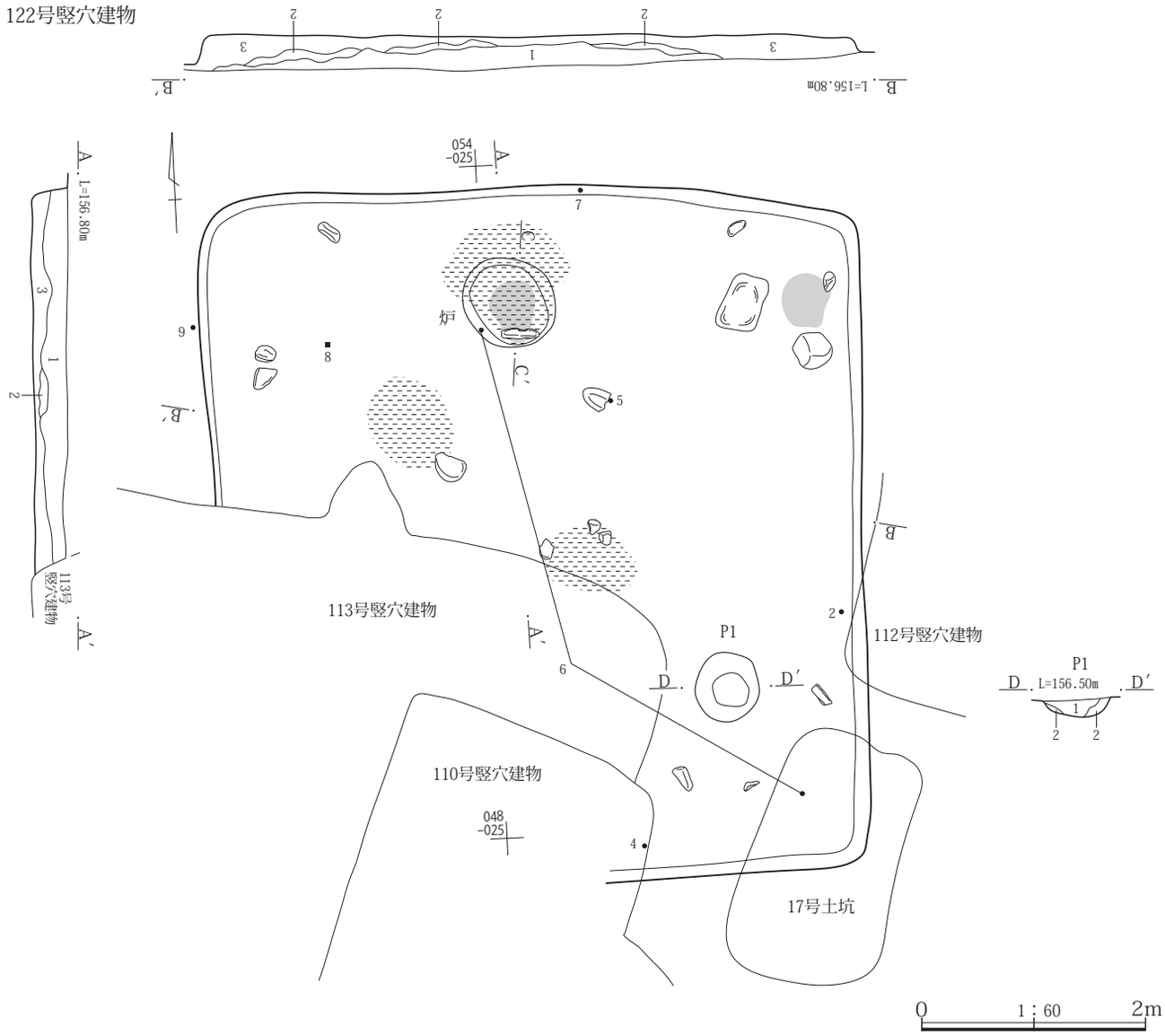
貯蔵穴　検出されなかった。

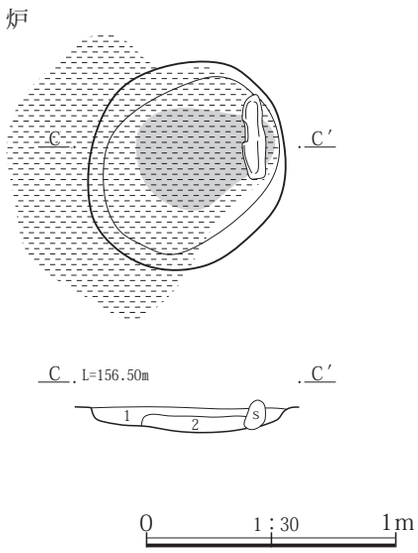
その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は上部を欠くため燃焼部の範囲がわかる程度である。規模は全長が0.91m、幅0.47mを測る。燃焼部と煙道部の一部に焼土が残存する。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯、椀、羽釜などが出土している。このうち、３・５・８の須恵器椀・羽釜が床面、１・２・４・９の須恵器杯蓋・杯身・羽釜がカマドから出土している。カマドから出土した杯蓋は本竪穴建物の存続年代より古い年代観が与えられることから周囲の竪穴建物に残存していたものをカマドの構築材として再利用したとみられる。

122号竪穴建物





122号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒をやや多く炭化物、焼土を少量含み、ややしまりが強い微粘性土。

2　灰黄褐 10YR4/2　褐色味を帯びた泥流土を多く含む、弱粘性土。

3　暗褐 10YR3/3　不明瞭な泥流土を含むため、基質が黒色土なのにやや黄色味をおびる、細粒弱粘性土。床面直上で部分的に炭化物のやや多く含む箇所がある。

122号竪穴建物　炉

1　黒褐 10YR2/2　下部に焼土を20％と灰や炭化物粒を５％含む。

2　暗褐 10YR3/3　被熱により赤変硬化し、下半になると薄くなる。

122号竪穴建物　Ｐ１

1　黒褐 10YR2/2　炭化物片を５％含み、やや粘性がある。

2　黒褐 10YR2/3　粘質土を５％、にぶい黄褐色土を10％含み、やや粘性がある。

第156図　122号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器椀や羽釜から10世紀第１四半期に比定できる。

124号竪穴建物

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37083～37084、Ｙ＝-85036～-85038に位置する。重複関係にある竪穴建物に大部分を欠きカマドが残存するだけであった。

重複関係　96号竪穴建物、91号竪穴建物、117号竪穴建物と重複関係にある。この他、89号竪穴建物、97号竪穴建物とも重複関係にあると想定されるが、この２棟については明確ではない。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴建物のほうが古い。

形状　不明。

規模　不明。

床面積　残存範囲がカマド部分だけのため計測不能。

主軸方位　カマドの方向からＮ－26°－Ｅを指す。

埋没状態　竪穴部分を欠くため不明。

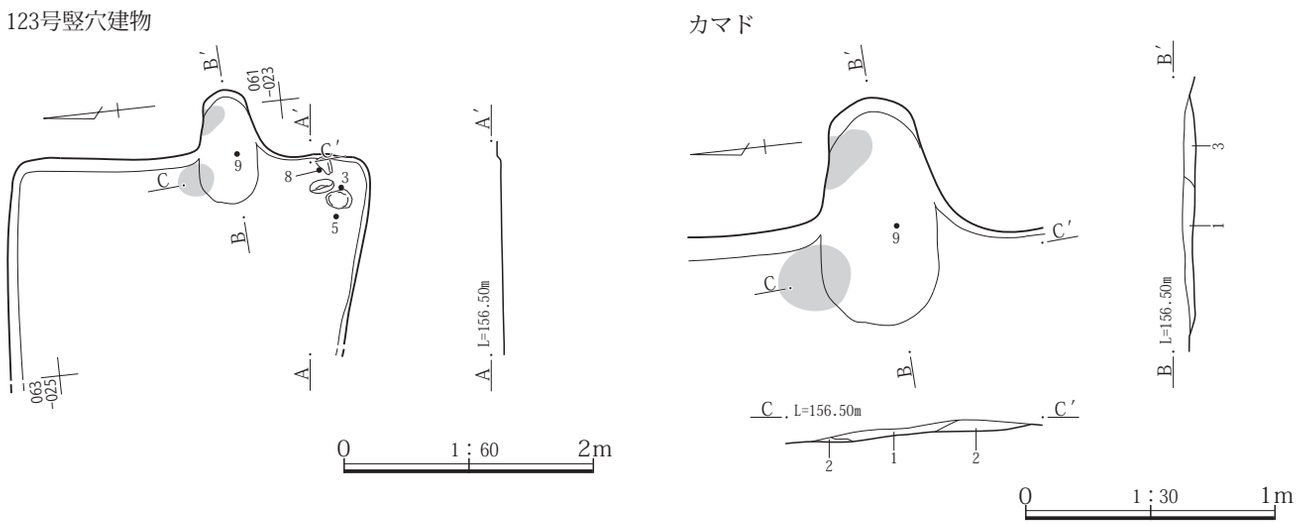
床面　竪穴部分を欠くため不明。

掘り方　竪穴部分を欠くため不明。

壁溝　竪穴部分を欠くため不明。

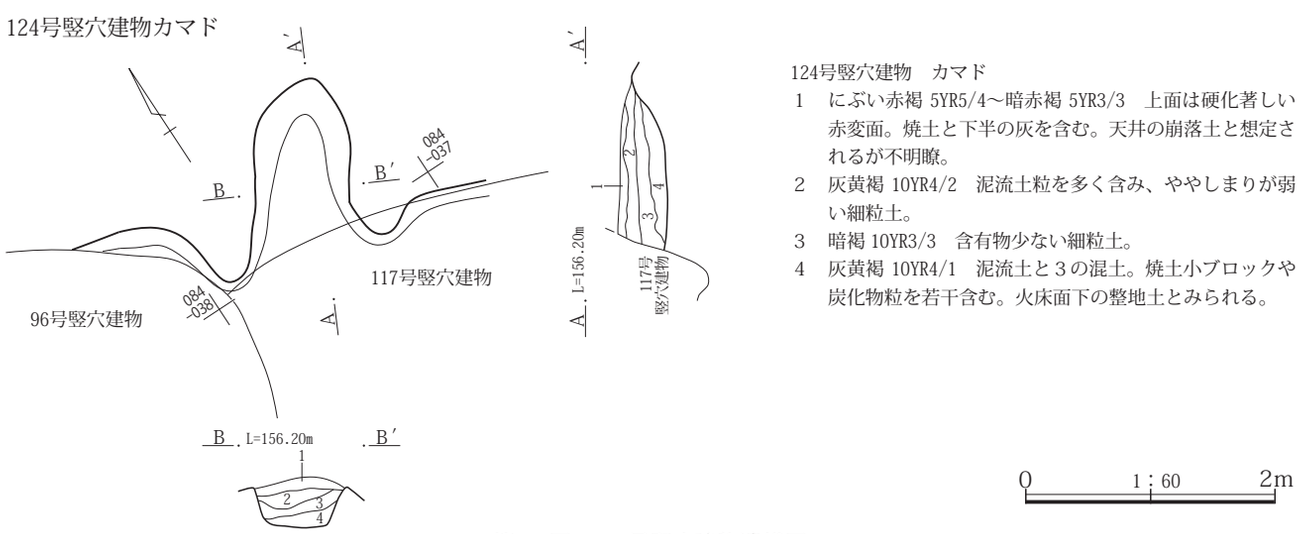
柱穴　竪穴部分を欠くため不明。

貯蔵穴　竪穴部分を欠くため不明。



123号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　焼土、泥流土小ブロックを少量含む弱粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックを多く含む、弱粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/2　焼土ブロックを多く含む。

第157図　123号竪穴建物遺構図



124号竪穴建物　カマド
1　にぶい赤褐 5YR5/4～暗赤褐 5YR3/3　上面は硬化著しい赤変面。焼土と下半の灰を含む。天井の崩落土と想定されるが不明瞭。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を多く含み、ややしまりが弱い細粒土。
3　暗褐 10YR3/3　含有物少ない細粒土。
4　灰黄褐 10YR4/1　泥流土と３の混土。焼土小ブロックや炭化物粒を若干含む。火床面下の整地土とみられる。

第158図　124号竪穴建物遺構図

その他施設　竪穴部分を欠くため不明。

火処　北壁にカマドが構築されているが、位置は不明である。残存状態は焚口を117号竪穴建物によって欠き、燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.85m、幅が1.04m、燃焼部幅0.34mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に掘り込まれている。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器椀・甕などが出土しているが、重複関係にある他の竪穴建物によってほとんどを欠くため、出土量は図示１点、未掲載12点とわずかであった。図示した１の須恵器杯はカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した須恵器杯が小片のため確実性に乏しいが、口縁部が開かず、底部が手持ちヘラ削りであることから８世紀前半代に比定できる。

125号竪穴建物

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37073～37077、Ｙ＝−85028～−85031に位置する。東側半分は調査対象外に存在する。

重複関係　85号竪穴建物、86号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴建物のほうが古い。

形状　長方形を呈すると想定される。

規模　南北方向は2.90m、東西方向は調査範囲内で1.93mを測る。確認面から床面までの壁高は20～30㎝を測る。

床面積　残存範囲内で4.67㎡を測る。

主軸方位　主軸方向を東西方向と想定するとＮ－60°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では土砂が水平に堆積している様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　中央部で貼床が確認されたが、貼床周囲では地山をそのまま踏み固めて床面を造っていた。

掘り方　床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかったが、出土遺物からみるとカマドが構築されていると想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器椀・壺、灰釉陶器椀などが出土しているが、調査対象範囲が西半分に限られていたため出土量は図示５点、未掲載157点と少量であった。このうち、２の須恵器椀が床面からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器椀などから９世紀第前半代に比定できる。

126号竪穴建物

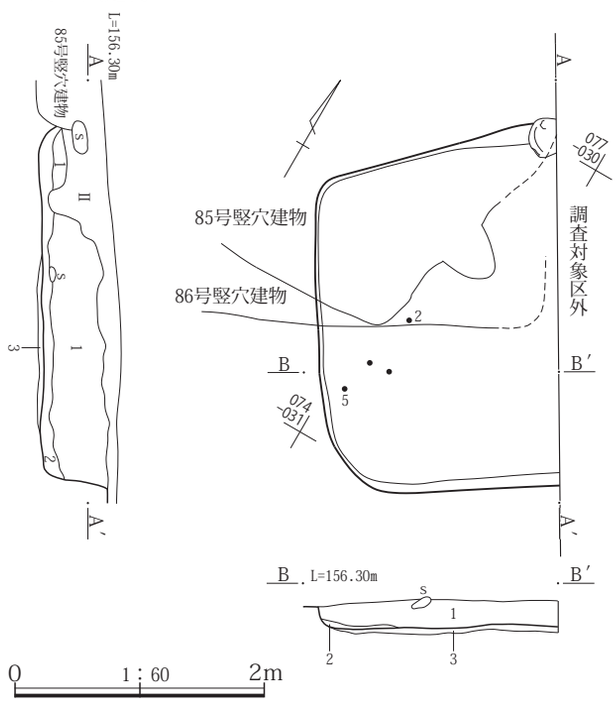
位置　１区調査区東部、Ｘ＝37087～37092、Ｙ＝−85043～−85047に位置する。

重複関係　15号竪穴建物、90号竪穴建物、130号竪穴建物、184号竪穴建物、36号土坑、62号ピットと重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが130号竪穴建物、184号竪穴建物より新しく、15号竪穴建物、90号竪穴建物、36号土坑、62号ピットより古い。

形状　長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は3.80m、南北方向は3.03mを測る。確認面から床面までの壁高は21～35㎝を測る。

125号竪穴建物



125号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、炭化物を多く不明瞭な泥流土ブロックを不均等に含む、微粘性土。

2　黒褐 10YR3/2　泥流土小ブロックを含み、ややしまりがある微粘性土。

3　灰黄褐 10YR4/2　基質は２と同様。泥流土小ブロックを多く含む。

第159図　125号竪穴建物遺構図

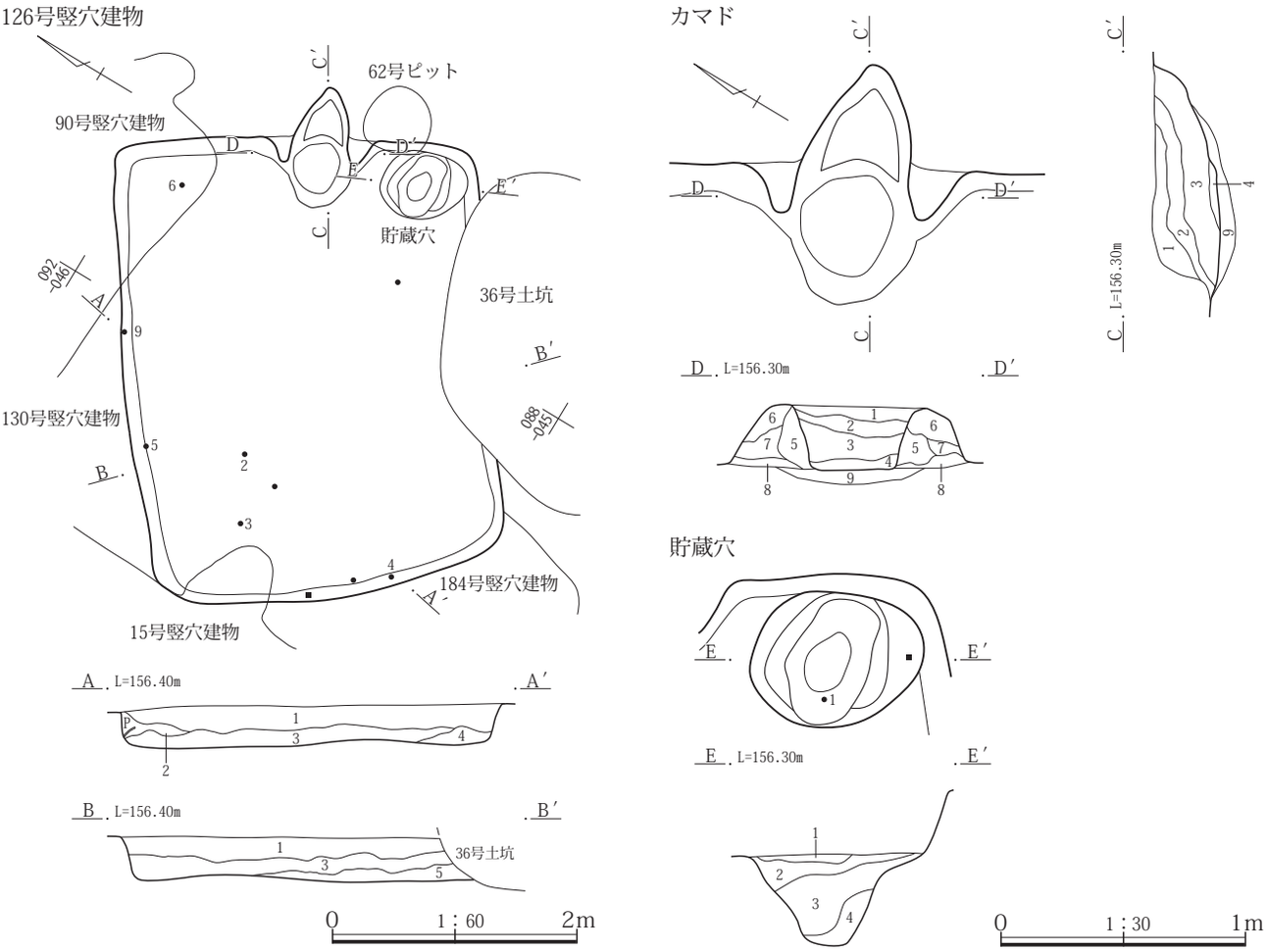
床面積　9.16㎡を測る。

主軸方位　N－58°－Eを指す。

埋没状態　土層断面の観察では南側から土砂が流れ込んだ状態が見られ、自然埋没と判断された。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。



126号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、炭化物と不明瞭な泥流土ブロック・粒を不均等に含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　焼土粒、炭化物粒を少量含み、しまりが強い微粘性の細粒土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒、不明瞭な泥流土ブロックを不均等にやや多く含み、ややしまりが強い微粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　泥流土粒を不均等に焼土を若干含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
5　暗灰黄 2.5Y4/2　不明瞭な泥流土ブロックを多く含み、しまりが強い弱粘性土。
126号竪穴建物　カマド
1　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒を少量含み、ややしまりが強い細粒土。
2　暗褐 10YR3/3　黒褐色土と不明瞭な泥流土の混土。
3　灰褐 5YR4/2　上半に焼土、下半に黒色灰を多く含む、弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
5　暗褐 10YR3/3　焼土粒を不均等に少量含み、ややしまりがある。
6　暗灰黄 10YR4/2　As-C、泥流土粒を多様に含み、しまりが強い。
7　暗赤褐 2.5Y3/3　黒褐色細粒度が基質、不明瞭な泥流土を不均等に含み、しまりが強い。
8　黒褐 10YR3/2　黒色粘性土が基質、やや大粒の泥流土粒を少量、焼土粒、炭化物粒を若干含み、しまりが強い。
9　黒褐 7.5YR3/2　不揃いの焼土ブロックを不均等に少量と炭化物、灰を少し含み、ややしまりが強い。
126号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗赤褐 2.5Y3/3　泥流土粒を不均等に含み、しまりをやや欠く。貼床か。
2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土の混入多い細粒弱粘性土。しまりやや弱い。
3　黒褐 10YR3/2　泥流土小ブロックを含み、しまりが弱い弱粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体に黒褐色土ブロックの混土、粘性土。

第160図　126号竪穴建物遺構図

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角壁際で検出された。形状は南北に長い楕円形を呈し、規模は径0.70×0.56m、深さ0.50mを測る。なお、貯蔵穴内から遺物の出土は見られなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部、煙道部の天井は壊されて痕跡も残存していない状態であったが、両袖は比較的良好な状態で残存していた。規模は全長0.96m、幅0.95m、燃焼部幅0.50m、煙道は壁外に0.45mほど延びる。燃焼部火床面は狭い範囲だけが焼土化しておりあまり使用されなかった可能性が窺えた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器、流動滓などが出土しているが、出土量は図示８点、未掲載246点と少量であった。また、出土した土器では土師器の比率がわずかで、器種別では杯１点、高杯１点、甕２点であった。このうち、１の土師器杯が貯蔵穴から、９の須恵器甕が床面から７の須恵器甕がカマドからの出土である。この他、６の土師器甕が床面より８㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、貯蔵穴から出土した１の土師器杯の年代観を採れば７世紀前半に比定できるが、重複関係にある竪穴建物との新旧関係に齟齬が生じる。そのため、床面より若干上からの出土ではあるが、６の土師器甕の年代観から９世紀第２四半期に比定する。

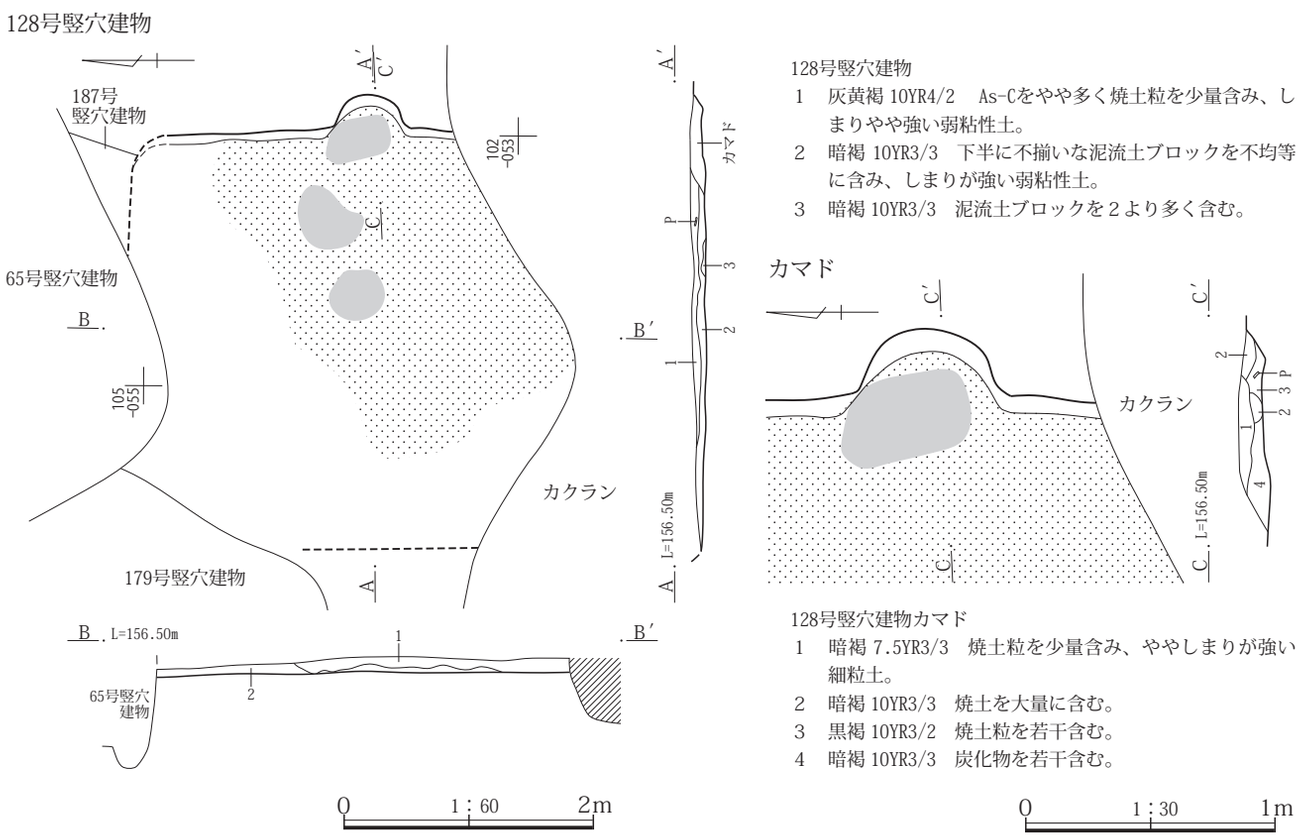
128号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37101～37105、Ｙ＝-85052～-85056に位置する。南辺側は撹乱によって、北側は重複関係にある竪穴建物によって欠くため、不明確な点がある。また、確認面から床面までが浅いため、隣接する竪穴建物との重複関係が明瞭ではなかった。

重複関係　65号竪穴建物、179号竪穴建物、187号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は65号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、179号竪穴建物。187号竪穴建物より新しい。

形状　長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は3.35m、南北方向は3.60+αmを測る。確認面から床面までの壁高は４～６㎝を測る。



第161図　128号竪穴建物遺構図

床面積　推定で11.91㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－88°－Ｅを指す。

埋没状態　埋没状態観察用の畦の高さが10㎝ほどしかないため自然埋没か人為的埋め戻しによるものか判断できなかった。

床面　カマド周囲は硬く踏み固められていた。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は観察できなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁中程にカマドが構築されている。残存状態は非常に悪く、燃焼部の火床面が残っているだけであった。規模は長さ0.50m、幅0.65mを測る。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀などが出土している。出土量は図示２点、未掲載296点がみられた。この中には多くの竪穴建物で出土している須恵器甕が存在しないなどやや出土遺物に偏りがみられる。このうち、図示した須恵器杯２点は取り上げが埋没土であるが、確認面から床面までが４～６㎝と浅いため、床面に近い位置からの出土である。なお、底部切り離し技法は１が回転ヘラ起こし、２が回転糸切りと異なっている。

所見　本竪穴建物の存続期間は、図示した須恵器杯から８世紀第４四半期に比定したい。

129号竪穴建物

位置　１区調査区東北部、Ｘ＝37094～37100、Ｙ＝-85049～-85056に位置する。大部分を重複関係にある60号竪穴建物、66号竪穴建物、98～100号竪穴建物、116号竪穴建物と撹乱によって欠く。

重複関係　59号竪穴建物、60号竪穴建物、66号竪穴建物、95号竪穴建物、98号竪穴建物、99号竪穴建物、100号竪穴建物、116号竪穴建物、14号土坑、38号土坑と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物や土坑より本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　南北方向は残存範囲で5.00m、東西方向は5.95mを測る。確認面から床面までの壁高は10～32㎝を測る。

床面積　推定で27.71㎡を測る。

主軸方位　北方向を主軸方向と想定するとＮ－15°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では床面の中程に灰褐色土が盛り上がるような堆積が確認でき、やや不自然な堆積であるが、これが屋根に堆積していた土砂と想定するとその上位は周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では東壁の南東角から1.5mほどの位置で2.0mほどの範囲で検出している。規模は幅20㎝前後、深さ10～14㎝を測る。

柱穴　残存範囲では対角線上の位置でＰ１とＰ２の２本を検出している。なお、重複関係にある竪穴建物の床面下からは柱穴となるような落ち込みが検出されなかったことから対角線上に位置する２本の柱穴によって構築されていた可能性が高い。形状と規模は次のとおりである。Ｐ１：円形、径61×60㎝、深さ62㎝、Ｐ２：円形、径47×42㎝、深さ57㎝を測る。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかったが、出土遺物から北壁にカマドが構築されていたと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、流動滓などが出土している。このうち、１・10の土師器杯、13の土師器鉢が床面から、18の土師器甕が柱穴Ｐ１からの出土である。なお、本竪穴建物から出土している３～５・７・８土師器杯は稜下に幅広くナデ部分がみられる。また、10の土師器杯は須恵器杯身を模倣した形態であり、この地域では数少ない個体である。

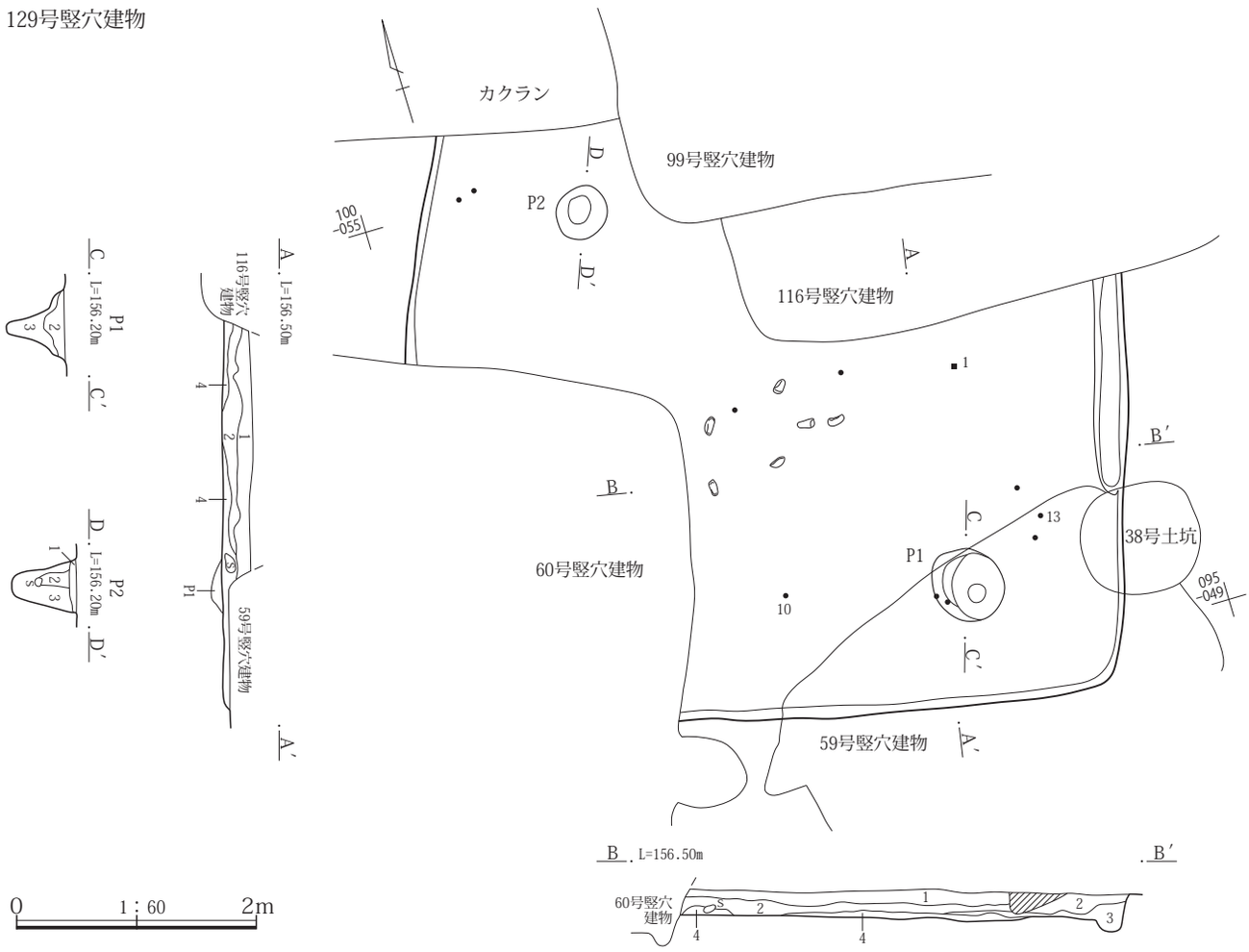
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や柱穴から出土した土師器杯・甕から６世紀後半に比定できる。

130号竪穴建物

位置　１区調査区東部、Ｘ＝37089～37092、Ｙ＝-85045～-85048に位置する。重複関係にある15号竪穴建物、126竪穴建物によって大部分を欠き、残存範囲は北西部の一部だけである。

重複関係　15号竪穴建物、90号竪穴建物、126号竪穴建物、184号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが184号竪穴建物より新しく、15号竪穴建

129号竪穴建物



129号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を少量と炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い粘土質土。
2　黒褐 10YR3/2　しまり・粘性ともに強い細粒土。炭化物、黒色灰を少量含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土の小ブロックが主体、炭化物と黒色灰を少量含む、粘土質土。
4　灰黄褐 10YR4/2　２が基質、泥流土粒を多く焼土粒・炭化物粒を多く含み、しまりが強い。
129号竪穴建物　Ｐ１・Ｐ２
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～20㎜の褐色土ブロックを５％、φ１㎜の赤褐色粒を１％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを20％含む。

第162図　129号竪穴建物遺構図

物、90号竪穴建物、126号竪穴建物より古い。

形状　残存範囲がわずかなため詳細は不明であるが、長方形または方形を呈すると想定される。

規模　残存範囲では東西方向は2.5m、南北方向は3.0mを測る。確認面から床面までの壁高は21㎝を測る。

床面積　残存範囲内で3.46㎡を測る。

主軸方位　主軸方位が不明ではあるが、北方向と想定するとＮ－90°－Ｅを指すと想定される。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込みレンズ状態が見られることから自然埋没と判断された。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

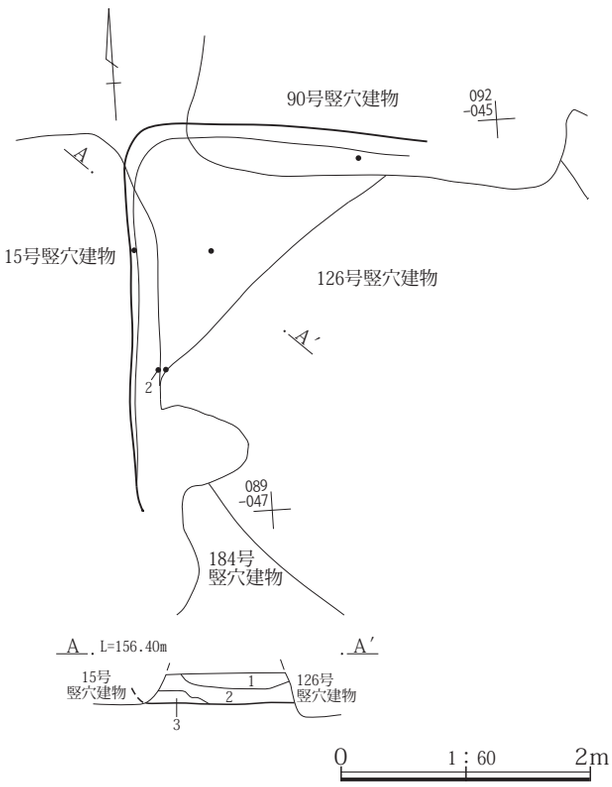
火処　残存範囲では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。本竪穴建物は残存部分がわずかなため、出土量は図示２点、未掲載39点と少量であった。図示した須恵器杯のうち、２は床面より13㎝上からの出

土である。

所見　本竪穴建物は、図示した須恵器杯から９世紀前半に比定できる。

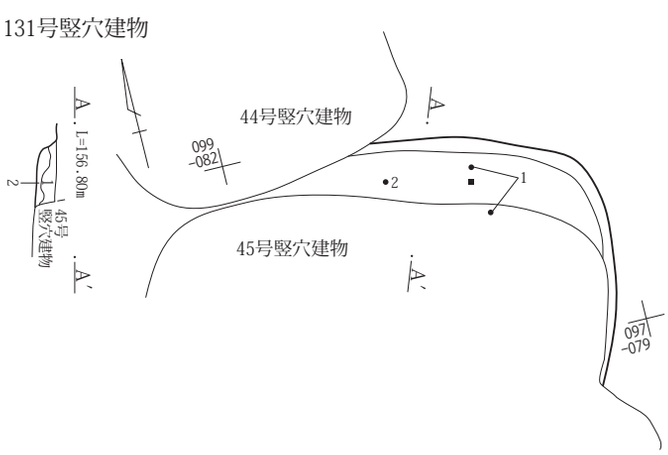
130号竪穴建物



130号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを霜降状に少量とローム土を不均等に含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　微細な焼土粒・炭化物粒を含み、ややしまりが強い弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　土質は２と同様。不明瞭なロームブロックと焼土、炭化物粒を少し含む。

第163図　130号竪穴建物遺構図

131号竪穴建物



131号竪穴建物

位置　１区調査区北部の北より、Ｘ＝37095～37100、Ｙ＝−85087～−85086に位置する。重複関係にある45号竪穴建物と大きく重複するため北壁側の一部しか残存していない。

重複関係　44号竪穴建物、45号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複する竪穴建物より本竪穴建物のほうが古いが、出土遺物からみると44号竪穴建物との関係には齟齬が生じる。

形状　やや角に丸みをもつが、ほぼ方形または長方形を呈すると想定される。

規模　東西方向で3.20m前後を測る。確認面から床面までの壁高は15㎝前後である。

床面積　残存範囲内で0.91㎡を測る。

主軸方位　残存部分からは判断できない。

埋没状態　残存部分が少ないため判断できなかった。

床面　残存範囲では地山を踏み固めて床面としている。

掘り方　残存範囲では検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

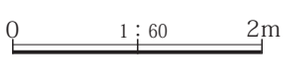
貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器皿などが出土しているが、残存部分がわずかなため出土量は図示２点、未掲載40点と少量であった。このうち、図示した１の灰釉陶器皿と２の須恵器羽釜はともに床面からの出土である。なお、灰釉陶器皿は虎渓山１号窯式期に比定できる。

131号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　やや細粒のしまりが強い土。微細な泥流土粒やAs-Cを少量含む。炭化物粒散見。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を不均等にやや多く床面直上に炭化物粒を含む、微粘性土。



第164図　131号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した灰釉陶器皿と須恵器羽釜から10世紀第３四半期に比定できる。

132号竪穴建物

位置　１区調査区西端、Ｘ＝37077～37079、Ｙ＝-85083～-85086に位置する。西側半分以上は調査範囲外に存在し、重複関係にある83号竪穴建物によって南側を欠くため全貌は不明である。

重複関係　79号竪穴建物、83号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが79号竪穴建物、83号竪穴建物より古い。(83号は調査時逆)

形状　残存範囲がわずかなため詳細は不明であるが、長方形または方形を呈すると想定される。

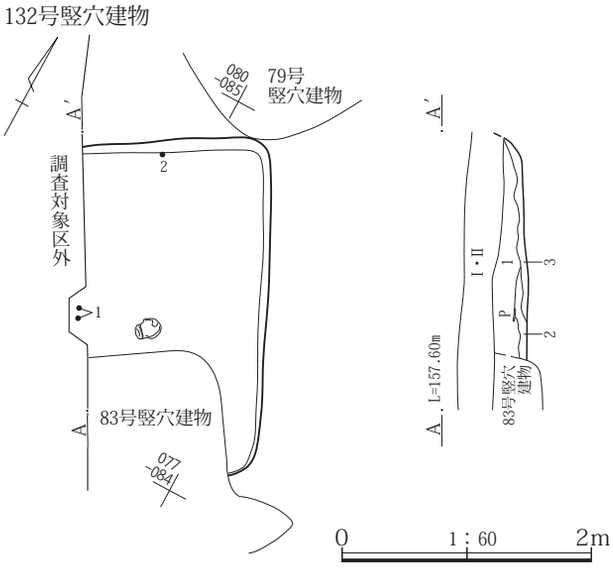
規模　南北方向は2.68m、東西方向は残存範囲で1.53mを測る。確認面から床面までの壁高は５～10㎝を測る。

床面積　残存範囲内で3.58㎡を測る。

主軸方位　主軸方位が不明ではあるが、北方向方向と想定するとＮ－26°－Ｗを指すと想定される。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込みレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断された。

132号竪穴建物



132号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量霜降状に、不明瞭なロームブロックを不均等に含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　１に類似、ロームブロックの含有量は少ない、しまりが強い。
3　灰黄褐 10YR4/2　ローム土と黒褐色土の混合土、しまりの強い弱粘土。下半、床面直上には焼土・炭化物・灰が散乱している。

第165図　132号竪穴建物遺構図

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかったが、出土遺物からカマドが東壁以外に構築されていると想定される。

出土遺物　遺遺物は土師器甕、須恵器杯・椀・甕などが出土しているが、出土量は図示２点、未掲載21点とわずかであった。このうち、図示した１の須恵器椀は床面より８㎝上から、２の土師器甕が床面より９㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、図示した須恵器椀・土師器甕から10世紀第３四半期に比定できる。

133号竪穴建物

位置　１区調査区南部西より、Ｘ＝37060～37065、Ｙ＝-85057～-85062に位置する。

重複関係　134号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが134号竪穴建物より新しい。

形状　主軸方向の東西方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が4.67m、南北方向が3.94mを測る。確認面から床面までの壁高は38～76㎝である。

床面積　15.19㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－120°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際で三角堆積、中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、カマド前(２号床下土坑)とその西側(１号床下土坑)で床下土坑を検出している。１号床下土坑は形状が円形に近く、規模は径0.92×0.87m、深さ0.15mを測る。２号床下土坑は形状が円形に近く、規模が径1.32×1.29m、深さ0.37mを測る。両床下土坑とも土師器や須恵器の小片が出土していたが、埋納されたものはみられなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

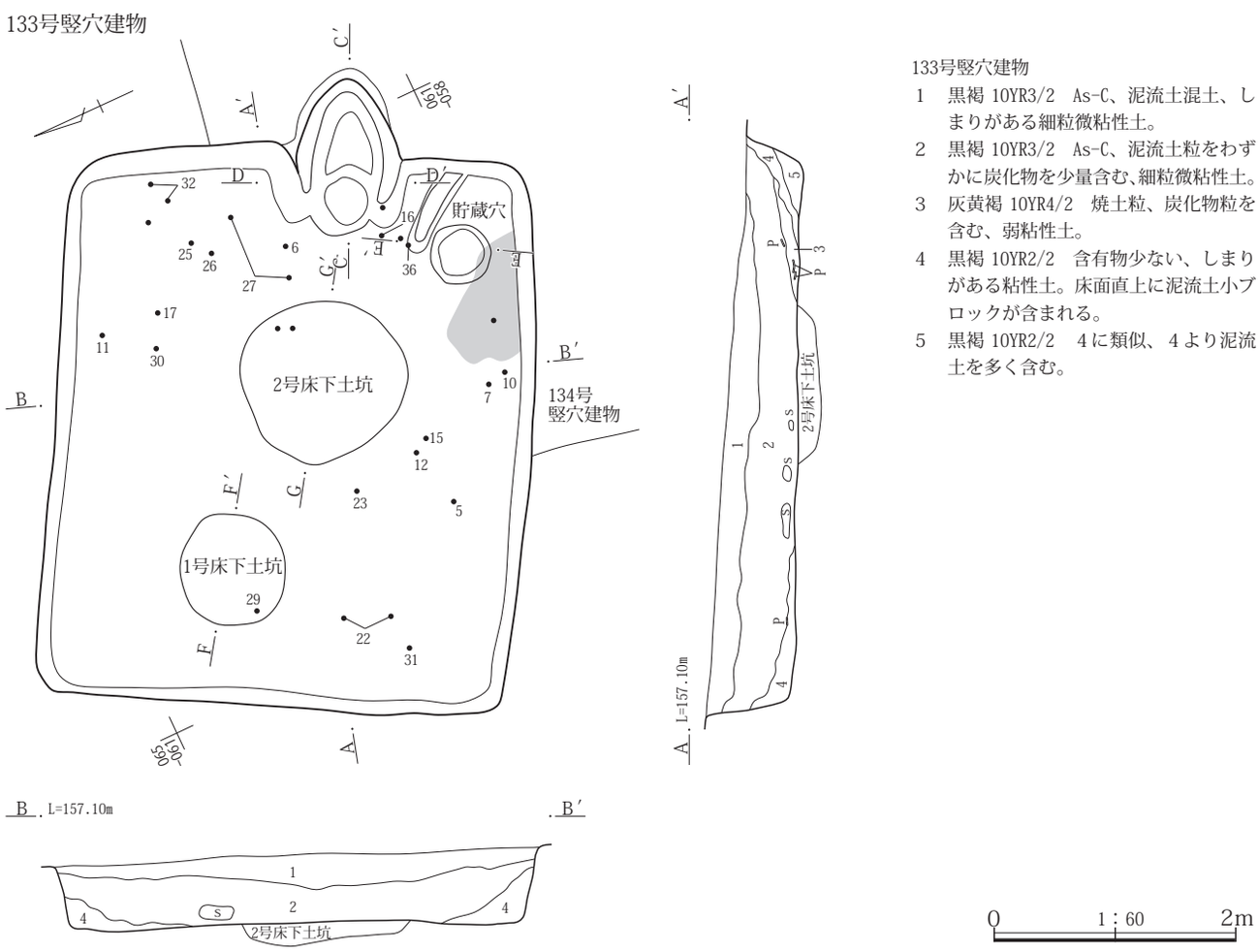
貯蔵穴　南東角、壁際から20～40㎝ほど間隔を開けた位置で検出されている。形状は円形を呈し、規模は径0.50m、深さ0.37mを測る。貯蔵穴とカマドの間には東壁から幅20㎝前後、高さ10㎝前後の土手状の高まりで区画している。また、貯蔵穴の南から西側の床面には焼土が広がっていた。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程より南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井部は失われていたが、燃焼部両袖は良好な状態で残存していた。規模は全長1.38m、幅1.16m、燃焼部幅0.55mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部との間には４㎝ほどの段が設けられ、50㎝ほど奥で60°の傾斜で立ち上がる。壁外の燃焼部から煙道部にかけては一周り大きく掘り込み、灰黄褐色土などを貼り付けている。

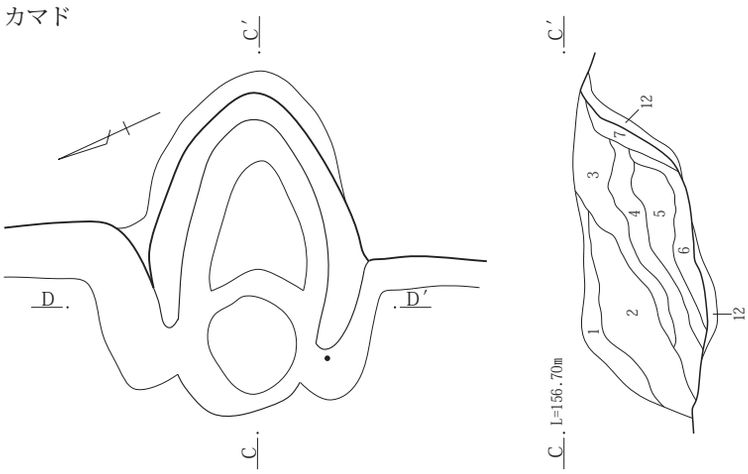
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・高盤・壺・甕などが出土している。このうち、５・７の須恵器杯蓋、10の須恵器杯、14・15の須恵器高杯、22の土師器小型甕、25・28・29・31・32の土師器甕が床面から、２の須恵器杯蓋、27・32の土師器甕がカマドから、24の土師器小型甕、32の土師器甕が貯蔵穴周辺から出土している。また、11や12の須恵器杯は床面より25㎝、12㎝上からの出土であるが形態的に本竪穴建物に共伴するものと判断できる。こうした点から、今回図示した土器は床面直上やカマド以外からの出土した土器も本竪穴建物に共伴すると判断した。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器をみると土師器甕は胴部が長胴を呈し、ヘラ削りも縦方向に施されていることや７の須恵器杯蓋の摘が乳頭状を呈することなどから７世紀第３四半期には構築されたと判断できる。また、廃絶は土師器杯の口縁部が内湾していないことや11・13の須恵器小型杯の底部が平底化していることなどから８世紀初頭と判断できる。

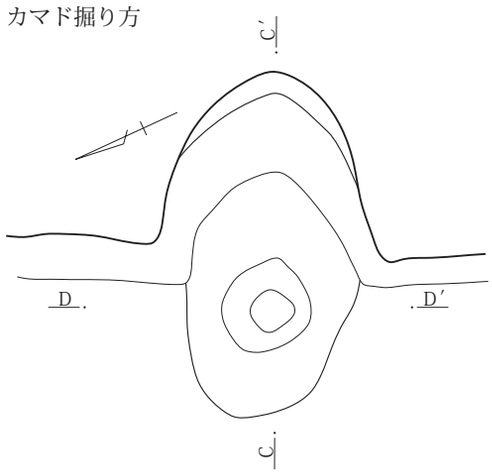


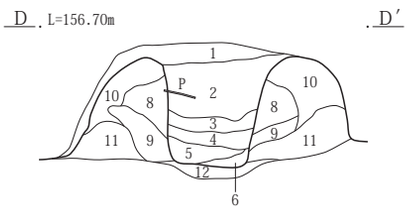
第166図　133号竪穴建物遺構図（１）

カマド



カマド掘り方

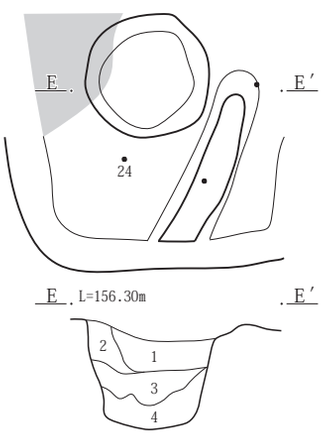




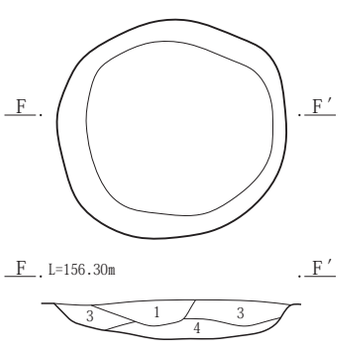
133号竪穴建物　カマド

1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物２と同様。基質土は黒色味強い粘性土、不揃いの泥流土ブロックをやや多く含む。
2　暗灰黄 2.5YR4/2　不揃いの泥流土小ブロックを煙道側ほど多く含み、ややしまりが強い。
3　灰褐 5YR4/2～暗赤褐 5YR3/3　不揃いの焼土ブロックを多くAs-YP、焼土粒を含み、ややしまりが強い。
4　暗褐 10YR3/3　焼土粒、泥流土粒を少量含み、ややしまりが強い微粘性土。
5　にぶい赤褐 5YR4/3～暗赤褐 5YR3/3　不揃いの焼土ブロックを多く含み、ボソボソした感触。
6　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、ややしまりが弱くサラサラした感触。
7　黒褐 10YR2/2　黒色粘性土。壁面が被熱により赤変硬化している。
8　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土主体、左袖は黒褐色土が多く、右袖は焼土粒がやや目立つ。
9　灰褐 5YR4/2　焼土小ブロックを極めて多く含む、ボソボソした感触。
10　暗褐 10YR3/2　不揃いの泥流土ブロックを不均等に含む、やや細粒の微粘性土。
11　オリーブ褐 2.5Y4/3　粗粒の泥流土主体、黒色土少量と焼土を若干含む。
12　灰黄褐 10YR4/2　含有物ほとんどない、しまり強の粘性土。

貯蔵穴



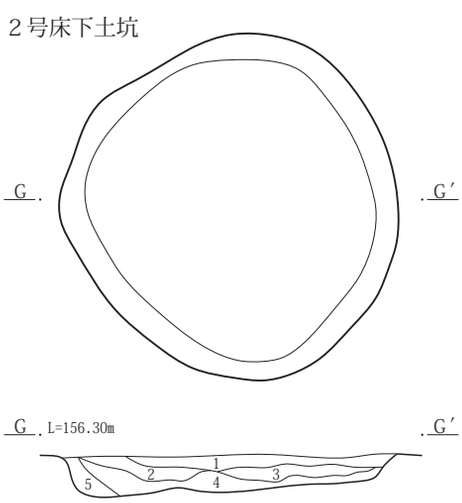
１号床下土坑



133号竪穴建物　貯蔵穴

1　黒褐 10YR3/2　不明瞭な泥流土小ブロックを少量含む、細粒粘性土。
2　暗赤褐 5YR3/2　上位中央に焼土ブロックやや多く含み、ややしまりが弱い。
3　黒褐 10YR2/2　含有物少ない、細粒粘性土。
4　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土ブロック30％と黒褐色土70％の混土、ややしまりがある粘性土。

２号床下土坑



133号竪穴建物　１号・２号床下土坑

1　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロックをやや多く含み、しまりが強い粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　基質土は黒色味強い粘性土、不揃いの泥流土ブロックをやや多く含む。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土。しまりが強い粘性土。
4　暗灰黄 2.5Y4/2　不明瞭な泥流土が基質、黒褐色土を小ブロック状に不均等に焼土を若干含み、しまりが強い。
5　オリーブ褐 2.5Y4/3　不明瞭な泥流土主体、黒褐色土が不均等に含み、しまり強い。

0　1：30　1m

第167図　133号竪穴建物遺構図（２）

134号竪穴建物

位置　１区調査区南部西より、Ｘ＝37054～37064、Ｙ＝−85054～−85061に位置する。重複関係にある133号竪穴建物によって北西部を欠く。

重複関係　133号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが133号竪穴建物より古い。

形状　主軸方向の南北方向が短い隅丸長方形を呈す。

規模　主軸方向の南北方向が5.64m、東西方向が6.42mを測る。確認面から床面までの壁高は11～50㎝である。

床面積　32.59㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－６°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できるが、中程の堆積状態は確認面から浅いため不明である。一応、壁際の堆積状態から自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は確認できなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　ほぼ竪穴の対角線上、壁際から1.2m～1.5mの位置から４本検出されている。各柱穴の形状、規模は以下のとおりである。

柱穴Ｐ１：楕円形、径0.44×0.42m、深さ0.77m

柱穴Ｐ２：楕円形、径0.41×0.31m、深さ0.66m

柱穴Ｐ３：楕円形、径0.61×0.56m、深さ0.74m

柱穴Ｐ４：円形、径0.40×0.39m、深さ0.72m

柱穴間距離はＰ１～Ｐ２が2.70m、Ｐ２～Ｐ３が3.00m、Ｐ３～Ｐ４が2.80m、Ｐ４～Ｐ１が3.00mを測る。各柱穴の土層断面の観察ではすでに抜き取られているため柱痕を確認できなかった。

貯蔵穴　南壁の中央より東寄りの壁際で検出されている。形状は楕円形を呈し、規模は0.92×0.72m、深さ0.29mを測る。内部からは多くの土師器片が出土しているが、器形が復元されたものはなかった。

その他施設　南壁下の南西角とほぼ中央に径が25～30㎝、厚さ20㎝ほどの円礫が置かれていた。

火処　柱穴Ｐ１とＰ４の中間、柱穴を結んだ線上のやや外側に炉が設けられていた。規模は径0.47×0.31mである。南側に棒状礫が枕石として置かれていたが、被熱によるためか３つに割れていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・器台・鉢・壺・台付甕・甕、手捏ね土器、須恵器、鉄製品鏃、流動滓などが出土している。なお、須恵器と鉄製品鏃、流動滓は後に混入したものである。このうち、１の土師器高杯、３・５の土師器器台、７の土師器有孔鉢、12の土師器小型壺、18・19の手捏ね土器が床面から、６の土師器鉢が柱穴Ｐ３からの出土である。この他、図示した土器はその形態から多少の前後関係はあるが、本竪穴建物に共伴するものである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や柱穴から出土している土器から４世紀前半代に比定できる。

135号竪穴建物

位置　１区調査区北西部、Ｘ＝37103～37108、Ｙ＝−85071～−85078に位置する。

重複関係　13号竪穴建物、30号竪穴建物、50号竪穴建物等と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが50号竪穴建物より新しいが、13号竪穴建物、30号竪穴建物より古い。

形状　竪穴の大部分を重複関係にある。竪穴建物によって欠くため明確ではないが、南西角が検出されていることから長方形または方形を呈すると想定される。

規模　残存部分で南北2.50m、東西2.00mを測る。確認面から床面までの壁高は25㎝前後である。

床面積　残存範囲内で1.32㎡を測る。

主軸方位　東壁にカマドが構築されていると想定されるとＮ－117°－Ｅを指す。

埋没状態　重複関係にある竪穴建物によって埋没土のほとんどが失われているが、残存している部分での土層断面を観察すると西側から土砂が流れ込んだと見られることから自然埋没と判断される。

床面　残存部分では地山を踏み固めて床面としていた。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は観察できなかった。

壁溝　西南角から南壁際で1.20mほど検出された。幅は15㎝前後、深さ５㎝前後である。

柱穴　検出されなかった。

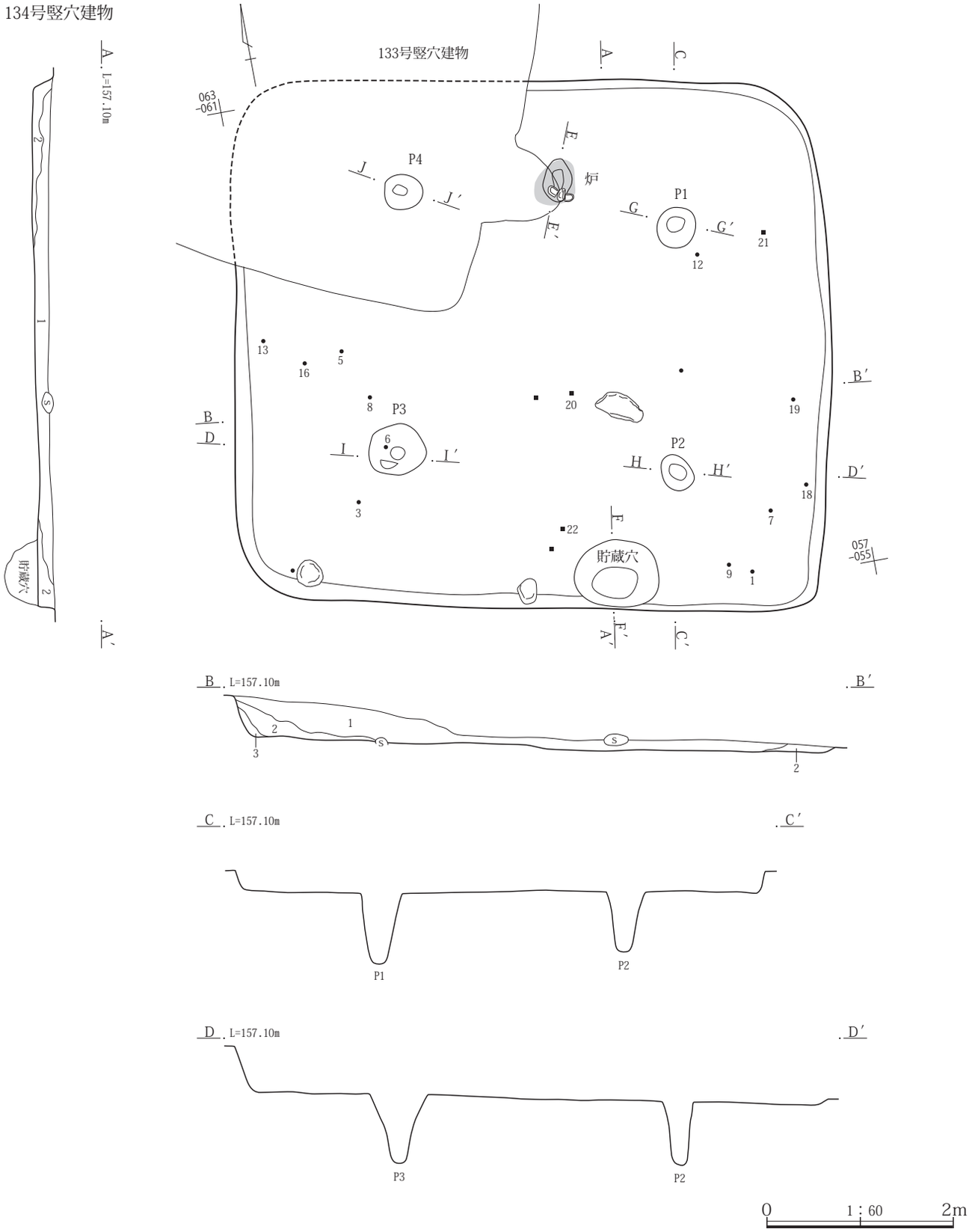
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯・椀・壺・甕などが出土しているが、残存部分がわずかなため出土量は図示２点、未掲載37点と少量であった。このうち、図示し

134号竪穴建物



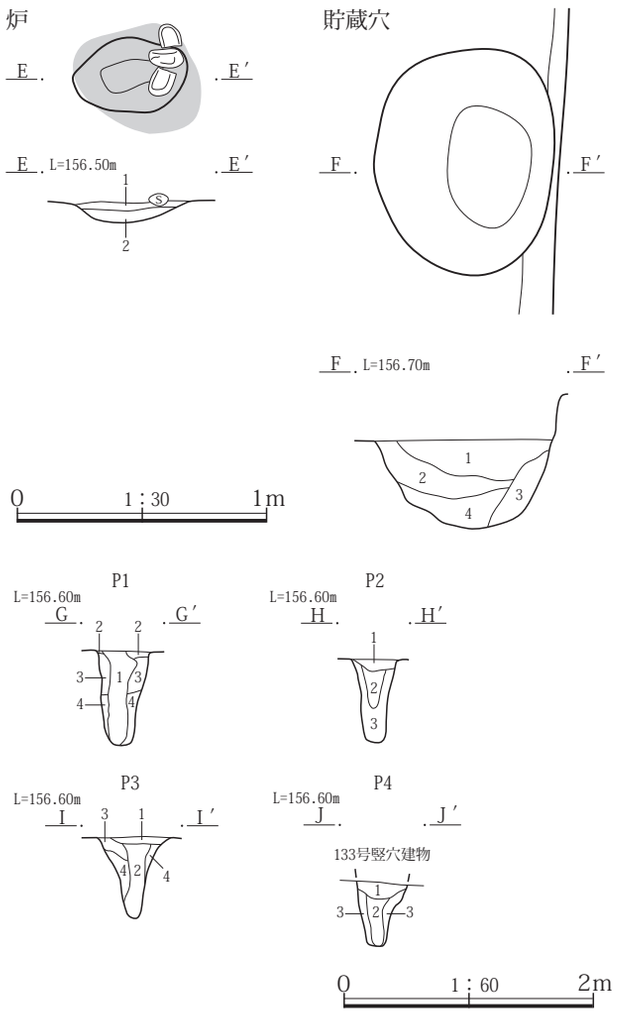
134号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を上半に多く下半に不明瞭な泥流土を多く含み、ややしまりがある微粘性土。

2　暗褐 10YR3/3　不明瞭な泥流土、炭化物粒、黒色灰を不均等に含む、弱粘性土。

3　黒褐 10YR3/2　含有物はみられない。

第168図　134号竪穴建物遺構図（１）



134号竪穴建物　炉
1　にぶい赤褐 2.5YR5/3　焼土。被熱による赤変が主体。黄橙色の泥流土ブロックを含む、泥流土整形部分が被熱赤変したものとみられる。

134号竪穴建物　貯蔵穴
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、褐色土を５％含む。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土を５％含む。
3　黒褐 10YR2/3　しまりがある弱粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土を５％、φ１～３㎜褐色土ブロックを２％含み、やや粘性がある。

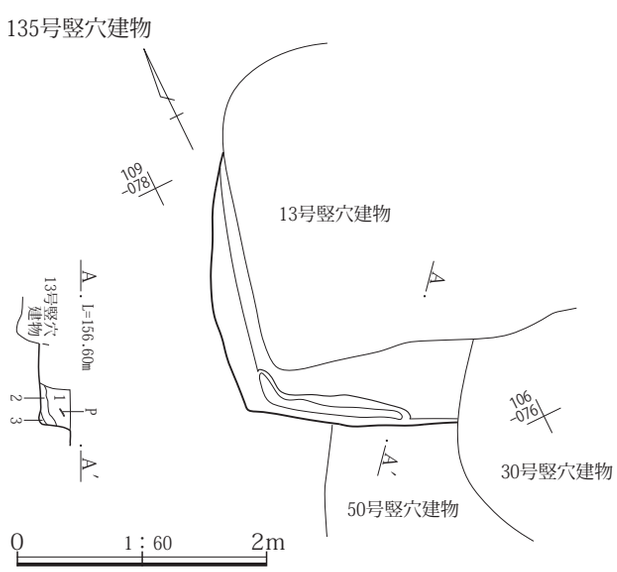
134号竪穴建物　Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土小ブロックを含む、表面以外はややしまりが弱い。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を多く含み、ややしまりが強い弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土ブロックを多く炭化物、焼土を若干含み、ややしまりがある弱粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　含有物の少ない弱粘性土。ややしまり強い。

134号竪穴建物　Ｐ２
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを３％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％含む。
3　黒褐 10YR2/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを２％含み、やや粘性がある。

134号竪穴建物　Ｐ３
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや軟らかい。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを５％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％含む。

134号竪穴建物　Ｐ４
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを20％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含み、若干柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。

第169図　134号竪穴建物遺構図（２）



135号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土粒を含み、しまりが強い土。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を多く含む、微粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　土質は１に近い。含有物少なく、しまりやや強い。

第170図　135号竪穴建物遺構図

た１の須恵器椀、２の須恵器壺とも埋没土からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土遺物がわずかなため明確にできないが、図示した土器や重複関係にある竪穴建物から概ね９世紀代に比定できると考える。

136号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37049～37053、Ｙ＝-85037～-85042に位置する。

重複関係　８号溝と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが新しい。

形状　西辺に比べ東辺がやや長い台形状を呈する。

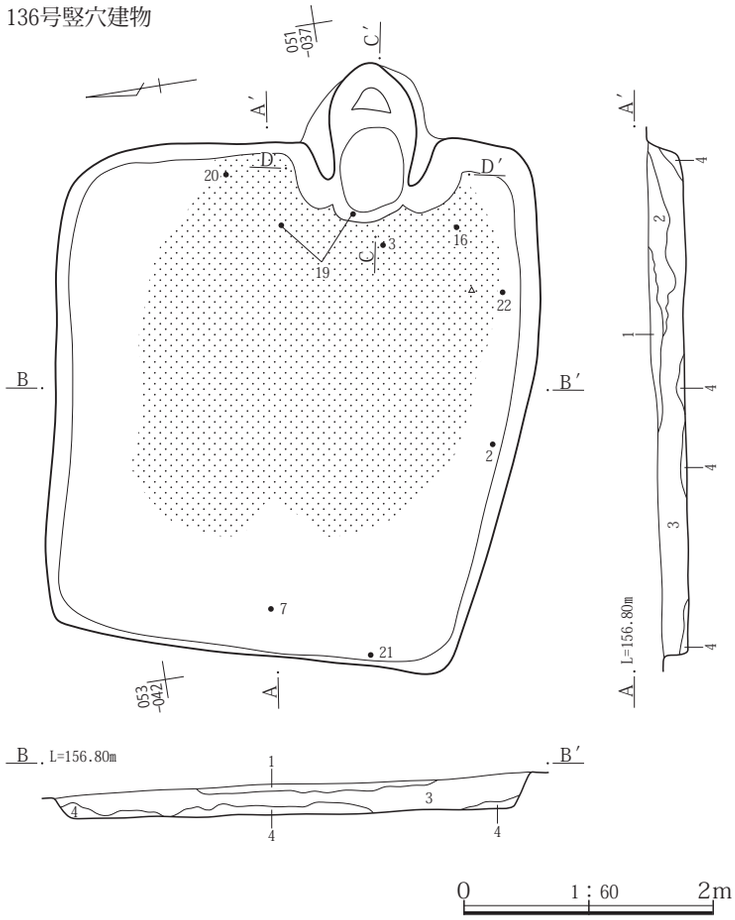
規模　主軸方向の東西方向が4.12m、東西方向が3.87mを測る。確認面から床面までの壁高は18～39㎝である。

床面積　12.68㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－97°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では床面中央に土砂が堆積し

136号竪穴建物



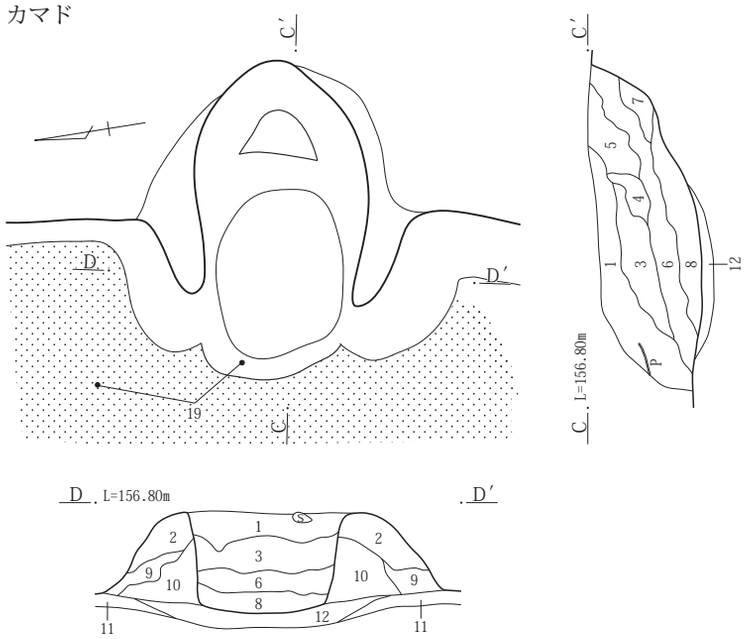
136号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-Cの混入やや多い、ややしまりが強い。
2　灰褐 7.5YR4/2　不明瞭な泥流土小ブロック、焼土、炭化物粒をやや多く含む、弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　泥流土粒をやや多く含む、微粘性土。
4　黒褐 10YR2/2　含有物少ない、ややしまりがある粘性土。

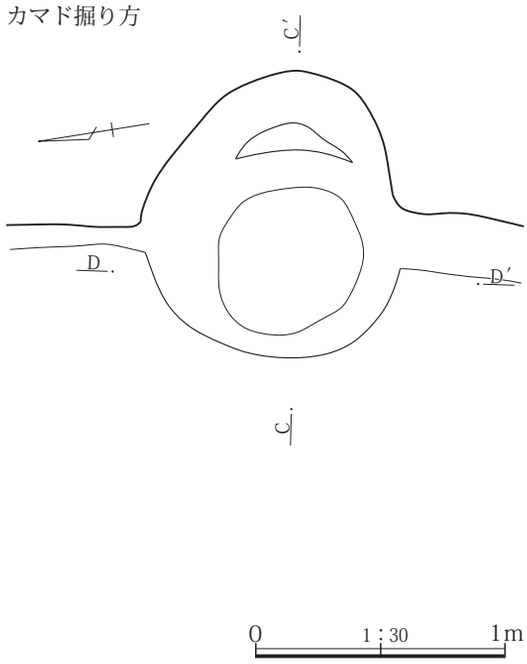
136号竪穴建物　カマド

1　灰黄褐 10YR4/2　焼土、As-C、泥流土小ブロック、AS-YPとみられるパミス等を多く含む、微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　黒褐色土ブロックと泥流土の混土。焼土、炭化物粒を不均等に少量含む、微粘性土でややボソボソした感触。
3　暗褐 10YR3/3～にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土ブロックと暗褐色土の混土、焼土ブロックを含む、弱粘性土。
4　にぶい赤褐 5YR4/4　泥流土ブロック、焼土ブロック、黒褐色土の混土、AS-YPとみられるパミスを多く含む、ボソボソした感触。
5　暗褐 10YR3/4～灰褐 7.5YR4/2　焼土と泥流土ブロックを多く灰を含み、ややしまりが弱い細粒土でサラサラした感触。
6　灰褐 7.5YR4/2　５土中に焼土ブロックを多量に含む。
7　灰褐 7.5YR4/2　灰を多く焼土ブロックを不均等に含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
8　暗褐 10YR3/3　黒褐色細粒土が基質、灰色味をおびた泥流土小ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い。
9　オリーブ褐 2.5Y4/3　灰色味をおびた泥流土が基質、不揃いの焼土ブロック、黒色土ブロックを含み、しまりが強い。
10　黒褐 2.5Y3/2　粗粒の泥流土粒を多く含む、弱粘性土。
11　黒褐 7.5YR3/2 焼土ブロック・炭化物を不均等に含む、弱粘性土。
12　黒褐 7.5YR3/2 11と同様、焼土粒を若干含む。

カマド



カマド掘り方



第171図　136号竪穴建物遺構図

た後に周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから判断は困難である。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。その中でも東壁下から中央部にかけて広範囲を硬く踏み固めていた。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は確認できなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.27m、幅が1.35m、燃焼部幅0.53mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部との間には13㎝の段が設けられている。燃焼部火床面から煙道部にかけては顕著な焼土がみられた。掘り方は燃焼部と袖の範囲を浅い土坑状に掘り込んでいる。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。このうち、３・４・16・19・21・22の土師器杯、小型甕、甕が床面から、５・６・８・17・19・20の須恵器杯蓋・杯身・小型甕・甕がカマドからの出土である。なお、埋没土から出土している12の須恵器杯は底部が回転糸切り無調整であることから後に混入した可能性も窺える。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している土師器杯・甕、須恵器杯蓋などから８世紀第２四半期に比定できる。

137号竪穴建物

位置　１区調査区西部の北より、Ｘ＝37100～37103、Ｙ＝-85080～-85084に位置する。

重複関係　41号竪穴建物、44号竪穴建物、46号竪穴建物、44号土坑、45号土坑と重複関係にある。新旧関係は46号竪穴建物との新旧は不明であるが、44号土坑より本竪穴建物のほうが新しいが、他の遺構より古い。

形状　南辺がやや長い台形状を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が2.20m、東西方向が3.22mを測る。確認面から床面までの壁高は15㎝前後である。

床面積　6.64㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－17°－Ｗを指す。

埋没状態　重複関係にある41号竪穴建物によって埋没土の大部分を欠くため不明確であるが、残存部分からの判断では床面から壁際にかけて不自然な堆積が確認されており、人為的な埋め戻しも行われた可能性が想定される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は確認できなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

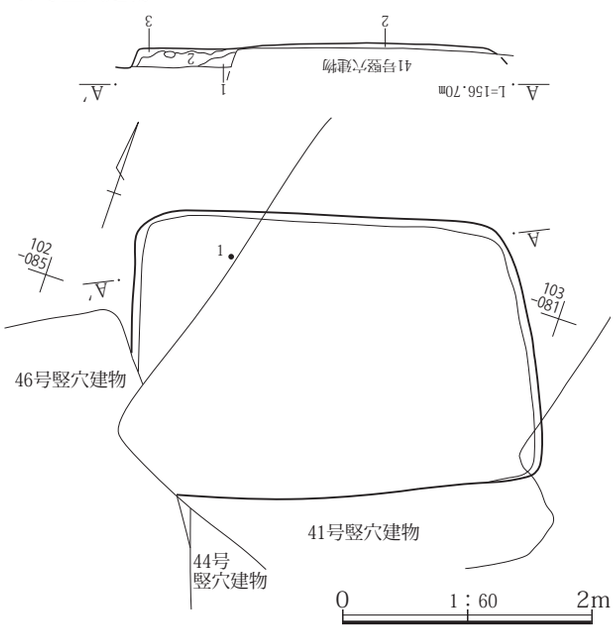
その他施設　検出されなかった。

火処　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯・羽釜、灰釉陶器などが出土しているが、出土量は図示１点、未掲載10点とわずかしかなかった。図示した土師器台付甕は床面より14㎝上からの出土である。なお、この他の土器や灰釉陶器は重複関係にある竪穴建物からの混入と判断した。

所見　本竪穴建物は床面の状態から竪穴建物としたが、火処が構築されていないことや規模が小規模であること

137号竪穴建物



137号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-Cをやや多く炭化物を若干含み、ややしまりが強い。

2　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土90％、泥流土10％の混合土。As-Cを少量含む、粘質土。

3　にぶい暗褐 10YR4/3　黒褐色土70％、褐色味をおびる泥流土小ブロック30％の混土、ややしまりがある。不整な堆積の人為的埋め戻し土か。

第172図　137号竪穴建物遺構図

から居住域以外の用途や竪穴状遺構や土坑の可能性も想定される。なお、存続時期は、１の土師器台付甕より４世紀代に比定できる。

138号竪穴建物

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37043～37048、Ｙ＝-85034～-85039に位置する。

重複関係　他の遺構との重複関係は確認されていない。

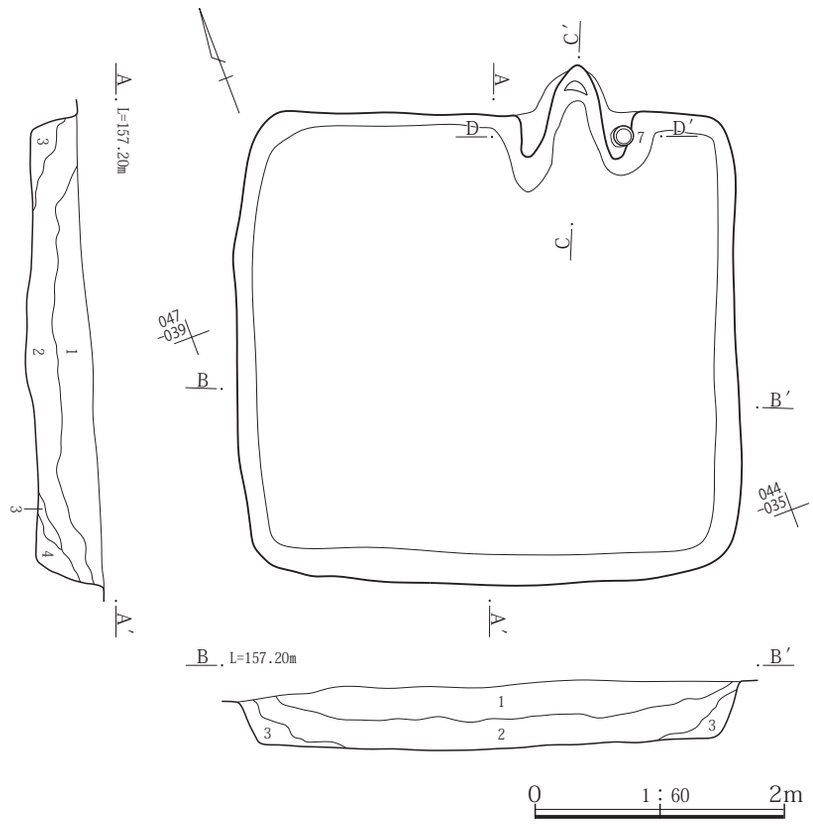
形状　東西方向が長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が3.77m、東西方向が4.00mを測る。確認面から床面までの壁高は29～51㎝である。

床面積　11.75㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－22°－Ｅを指す。

138号竪穴建物



138号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒の混土、焼土、炭化物流を少量含み、ややしまりが強い粗粒微粘性土。

2　暗褐 10YR3/3　不明瞭な泥流土の混土、床面直上に炭化物粒をやや多く含み、ややしまりが弱い。

3　黒褐 10YR3/2　ややしまりが強い弱粘性土。

4　にぶい黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土塊の崩落土、ややしまりが強い。

138号竪穴建物　カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を少量含み、しまりが強い。

2　暗褐 10YR3/3　煙道側で焼土粒、焚口側で炭化物を多く含み、ややしまりが強い微粘性土。

3　黒褐 10YR2/2　炭化物や黒色灰をやや多く焼土粒を不均等に含む、細粒弱粘性土でややサラサラした感触。

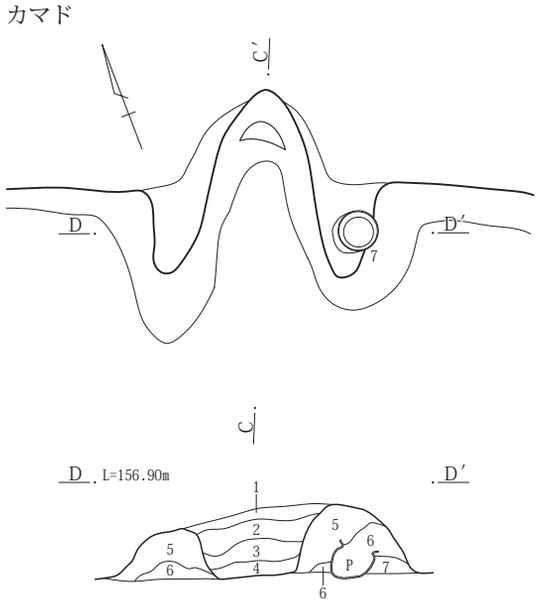
4　灰褐 7.5YR4/2　焼土小ブロックを多く灰や炭化物もやや多く含み、ややしまり強い。

5　黒褐 10YR3/2　As-Cと焼土、炭化物粒を若干含み、しまりが弱い。

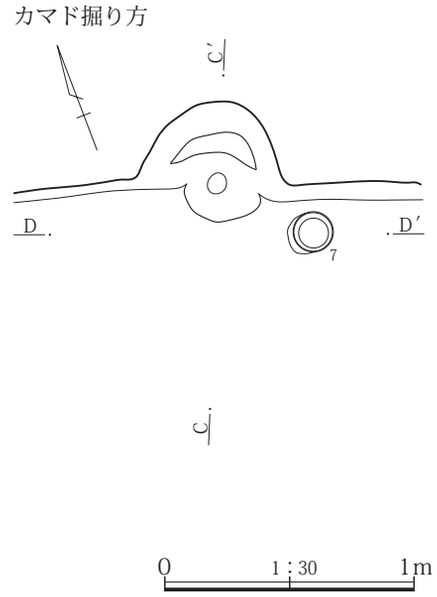
6　暗褐 10YR3/3　焼土粒、炭化物粒を不均等に含み、ややしまりが強い。

7　暗赤褐 5YR3/3　泥流土粒、焼土粒を不均等にやや多く含み、しまりが強い。

カマド



カマド掘り方



第173図　138号竪穴建物遺構図

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は確認できなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中央より東寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.03m、幅が1.25m、燃焼部幅0.25mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部との間に17㎝の段が設けられている。右袖内には７の土師器小型甕が埋め込まれており、カマド構築時に祭祀が執りおこなわれたことが窺える。掘り方は袖が床面と同じ高さで構築されているが、燃焼部の奥は小規模な土坑状の掘り込みがおこなわれていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・壺が出土している。このうち、カマドの項で記したように７の土師器小型甕がカマド右袖内からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した小型甕や床面上から出土した土師器甕だけでは比定するのは難しいが、３・４の須恵器杯は平城宮土器分類の杯Ｇに該当し、底部が丸底であることなどから７世紀第３四半期、１・２の土師器杯は丸底ではあるが口縁部の内湾が認められないことから７世紀第４四半期の年代観が与えられる。以上のことから、７世紀後半代に比定できる。

140号竪穴建物

位置　１区調査区南西端、Ｘ＝37050～37053、Ｙ＝-85056～-85060に位置する。

重複関係　他の遺構との重複関係は確認されていない。

形状　東西方向がやや長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向が2.76m、東西方向が2.96mを測る。確認面から床面までの壁高は29～51㎝である。

床面積　推定で6.53㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－27°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は確認できなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中央より東寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.87m、幅が1.30m、燃焼部幅0.22mを測る。煙道部は壁外に存在し、両袖は外側に段が造られている。袖先端には棒状礫が埋め込まれており、天井を構築する際の補強が行われたとみられる。掘り方は燃焼部下で径0.75×0.48mほどの規模で浅い土坑状に掘り込まれていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・壺・甕、須恵器短頸壺が出土している。ほぼ全域に近い範囲を調査したが、出土量が図示６点、未掲載36点とわずかであった。このうち、２の土師器杯と５の須恵器短頸壺が床面、１・３の土師器杯がカマドから、６の土師器甕が床面より６㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している土師器杯から６世紀後半代に比定できる。

141号竪穴建物

位置　１区調査区南西部、Ｘ＝37052～37056、Ｙ＝-85061～-85065に位置する。一部を遺構確認の試掘坑によって欠く。

重複関係　他の遺構との重複関係は確認されていない。

形状　東西方向が長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が3.16m、南北方向が2.68mを測る。確認面から床面までの壁高は20～41㎝である。

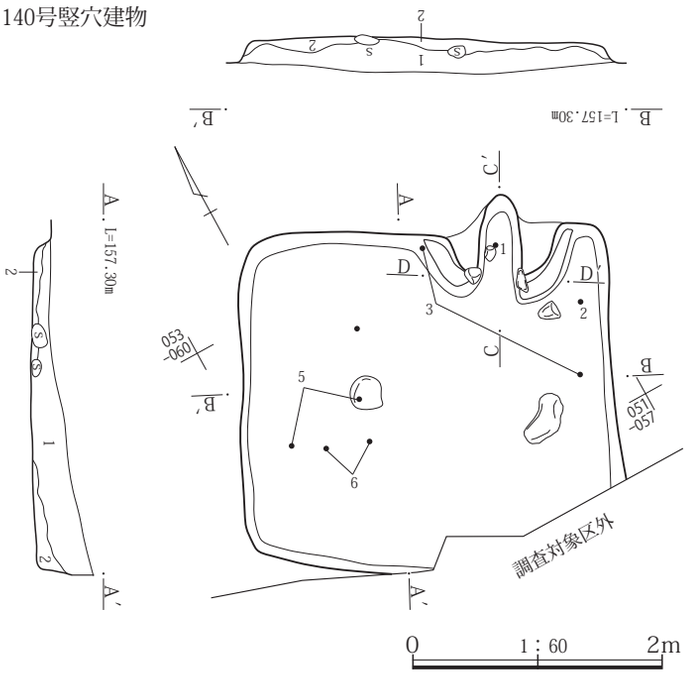
床面積　推定で6.17㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－56°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

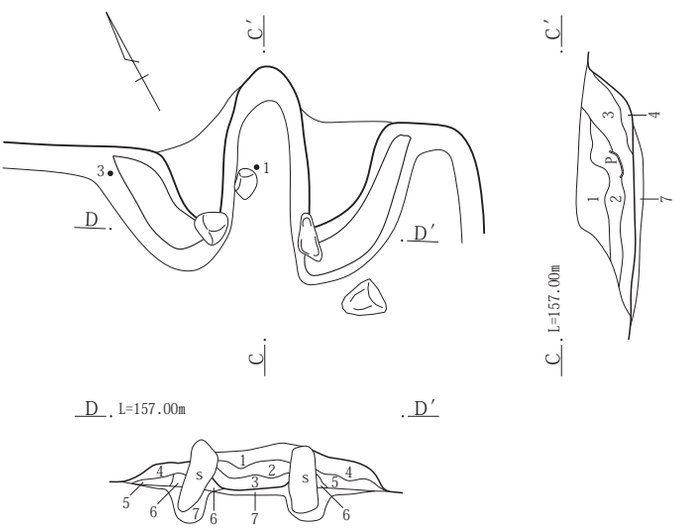
140号竪穴建物



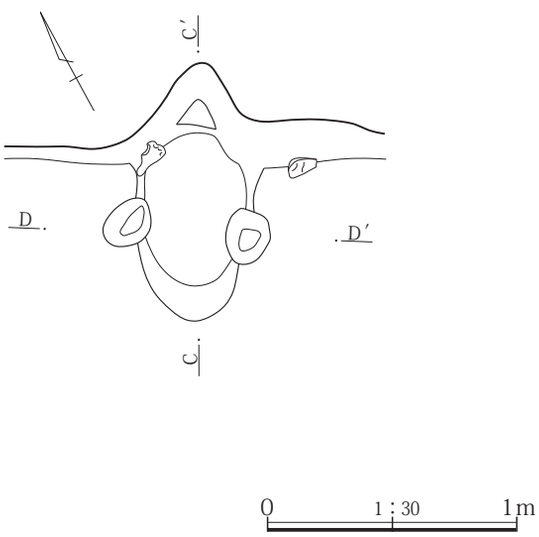
140号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を少量含み、ややしまりが弱い細粒弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　やや粘性強い、ややしまりが強い土。北側で泥流土を若干含み、ややしまりが強い粘性土。床面直上の一部で炭化物粒を多く含む。

140号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　焼土粒、炭化物粒を不均等に含み、ややしまりが強い細粒粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土をやや多く含み、しまりが強い。一部被熱して赤変する。
3　暗赤褐 5YR3/2　不揃いの焼土が混土、ややしまりが強い。
4　暗褐 10YR3/3　灰を含み、しまりやや強い。
5　暗褐 10YR3/3　泥流土ブロックを不均等に含み、ややしまりが弱い細粒微粘性土。
6　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒を多く含み、しまりが弱い弱粘性土。
7　黒褐 10YR3/2　細粒微粘性土。

カマド



カマド掘り方



第174図　140号竪穴建物遺構図

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は確認できなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　北東部で10～35㎝ほどの礫が楕円形に配置されていた。規模は径1.40×1.10mである。この礫については土層断面で別な遺構との判断ができなかったことから、竪穴建物廃棄時に礫を配置した可能性も想定される。

火処　北壁の中央より東寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.07m、幅が1.22m、燃焼部幅0.32mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部との間に16㎝の段が設けられている。掘り方は燃焼部が浅い土坑状に掘り込まれていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・短頸壺・甕などが出土している。試掘坑によって一部を欠くほぼ全域を調査したが、出土量が図示７点、未掲載43点とわずかであった。このうち、４の須恵器短頸壺、５の土師器小型甕が床面から、２の土師器杯、７の土師器甕

がカマドからの出土である。２の土師器杯は器壁が薄く、内面に全面的にヘラミガキが施されており、例をみないものである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器短頸壺や土師器甕から７世紀代に比定できるが、２の土師器杯は底部がやや平底化した形態であることから８世紀前半代に比定したい。

142号竪穴建物

位置　１区調査区南西部、Ｘ＝37060～37064、Ｙ＝-85068～-85072に位置する。

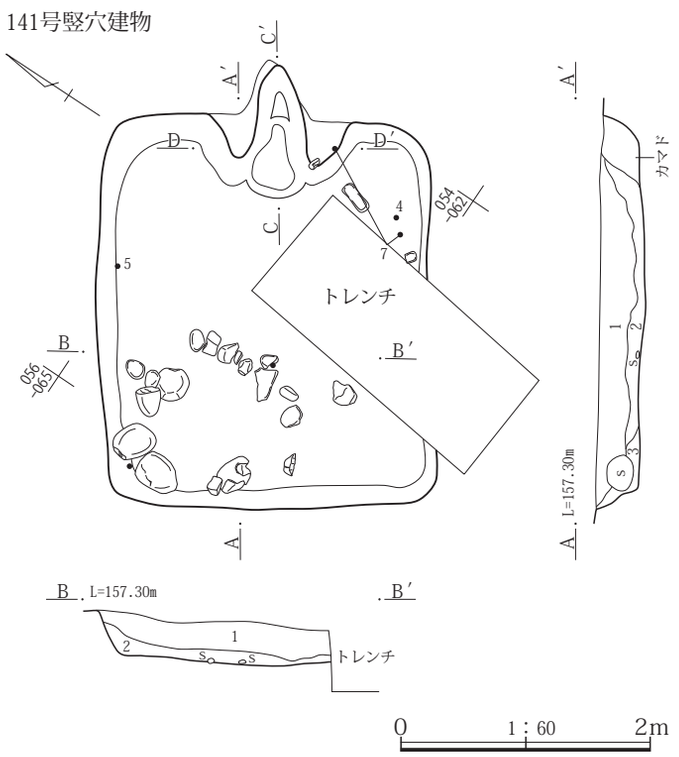
重複関係　他の遺構との重複関係は確認されていない。

形状　南北方向が長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が2.70m、南北方向が3.21mを測る。確認面から床面までの壁高は４～18㎝である。

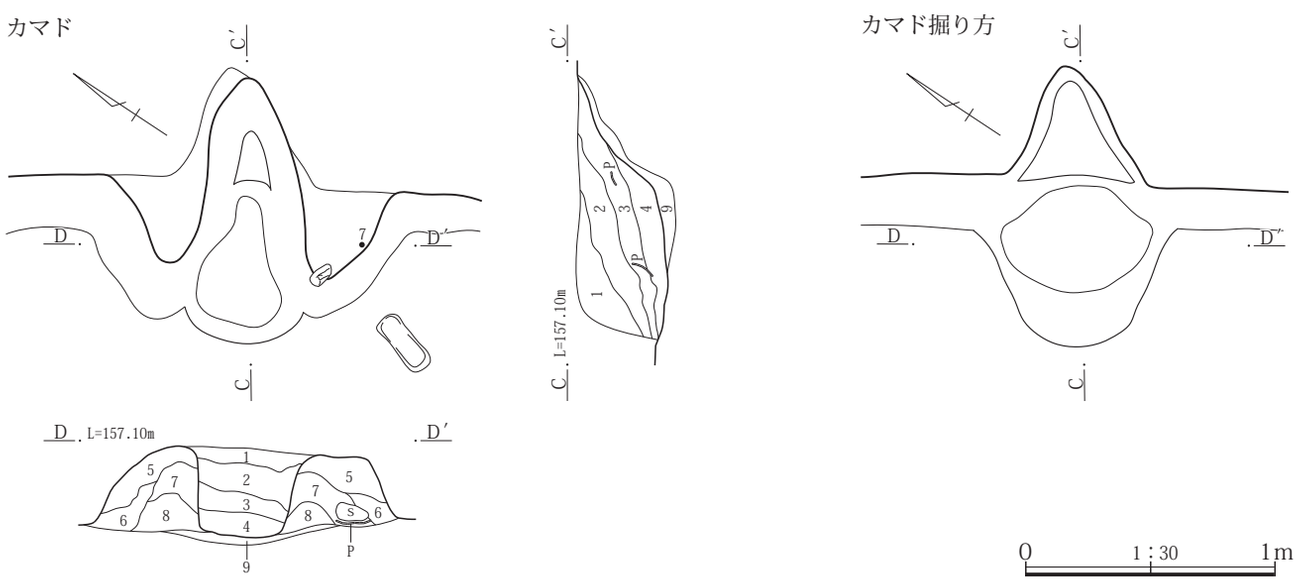
床面積　6.98㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－128°－Ｅを指す。



141号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒、焼土粒、炭化物粒等を少量含む、細粒微粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　床面直上に炭化物粒を若干含むが、他の含有物少ない、ややしまりがある細粒弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　土質は１と同様。不明瞭な泥流土粒を含み、しまりもやや強い。

141号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物１と同様。
2　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒や泥流土ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い弱粘性土。
3　にぶい赤褐 5YR4/3～灰褐7.5YR4/2　焼土を多く含み、しまりが強い細粒粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を多く含む、サラサラした感触。
5　黒褐 10YR3/2　竪穴建物１と同様。
6　灰黄褐 10YR4/2　５に類似、５より焼土、炭化物粒、泥流土等を多く含む。
7　黒褐 10YR3/2　ややしまりが強い微粘性土。
8　褐 7.5YR4/3～灰黄褐 10YR4/2　泥流土、焼土を多く含み、しまりが強い微粘性土。
9　黒褐 10YR4/2　焼土・炭化物粒を少量含み、ややしまりが強い細粒土。



第175図　141号竪穴建物遺構図

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られる。床下土坑部分を除き、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

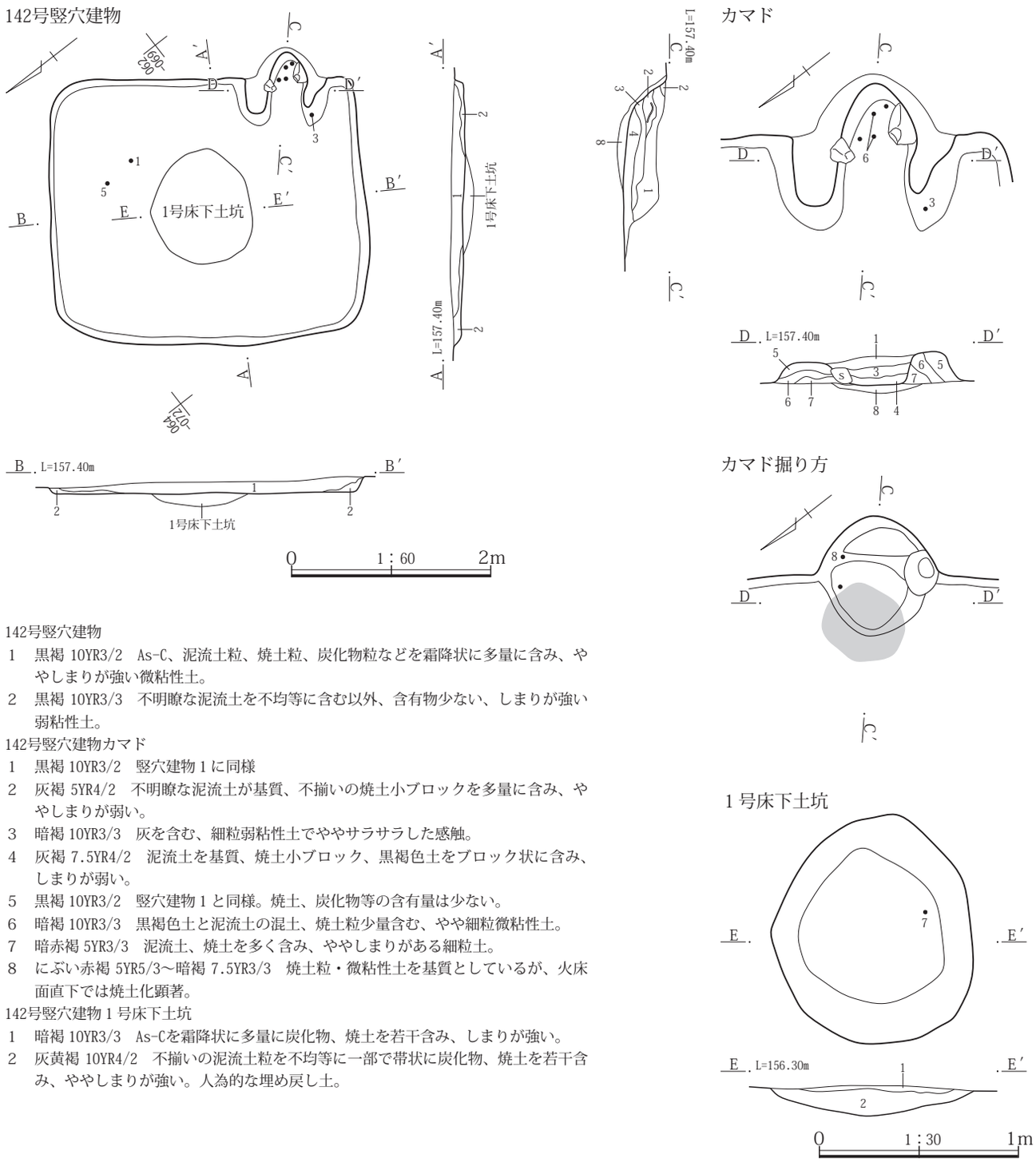
掘り方　貼床は確認できなかった。中央部から床下土坑１基を検出している。床下土坑は形状が楕円形を呈し、規模は径1.15×1.01m、深さ0.15mを測る。内部は泥流土を帯状に含む灰黄褐色土やAs-Cをブロック状に含め暗褐色土で埋め戻されていた。南寄りから７の須恵器羽釜片が出土している。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。



142号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒、焼土粒、炭化物粒などを霜降状に多量に含み、ややしまりが強い微粘性土。
2　黒褐 10YR3/3　不明瞭な泥流土を不均等に含む以外、含有物少ない、しまりが強い弱粘性土。

142号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物１に同様
2　灰褐 5YR4/2　不明瞭な泥流土が基質、不揃いの焼土小ブロックを多量に含み、ややしまりが弱い。
3　暗褐 10YR3/3　灰を含む、細粒弱粘性土でややサラサラした感触。
4　灰褐 7.5YR4/2　泥流土を基質、焼土小ブロック、黒褐色土をブロック状に含み、しまりが弱い。
5　黒褐 10YR3/2　竪穴建物１と同様。焼土、炭化物等の含有量は少ない。
6　暗褐 10YR3/3　黒褐色土と泥流土の混土、焼土粒少量含む、やや細粒微粘性土。
7　暗赤褐 5YR3/3　泥流土、焼土を多く含み、ややしまりがある細粒土。
8　にぶい赤褐 5YR5/3～暗褐 7.5YR3/3　焼土粒・微粘性土を基質としているが、火床面直下では焼土化顕著。

142号竪穴建物１号床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを霜降状に多量に炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土粒を不均等に一部で帯状に炭化物、焼土を若干含み、ややしまりが強い。人為的な埋め戻し土。

第176図　142号竪穴建物遺構図

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部にかけての天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.87m、幅が0.95m、燃焼部幅0.32mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部部側壁には礫が使用されているが、左右に１石ずつ残るだけであった。燃焼部火床面と煙道部は顕著な焼土が確認されている。燃焼部の奥から煙道部にかけて６の土師器甕や２の須恵器椀、右袖内部から３の須恵器椀が出土しているが、甕は口縁部から胴部片のため煮沸用に使用されていたか、構築材として使用されたものかは不明である。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀、片口鉢甕・羽釜、灰釉陶器、土製品瓦小片などが出土している。このうち、１の須恵器杯、５の須恵器片口鉢が床面、２・３の須恵器椀、６の土師器甕、８の須恵器羽釜がカマドから、７の須恵器羽釜が１号床下土坑から出土している。１の須恵器杯は床面からの出土であるが、形態は本竪穴建物の存続期間より古い９世紀前半代の年代観が与えられることから混入とみられるが、その経緯は不明である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している須恵器椀や羽釜などから10世紀第２四半期に比定できる。

143号竪穴建物

発掘調査時、本竪穴建物はカマドが２基検出されたことから143号竪穴建物と145号竪穴建物の２棟が存在する可能性が想定されたが、床面の状態や土層断面の確認、出土遺物の接合状態から２基のカマドが併存する１棟の竪穴建物と判断した。

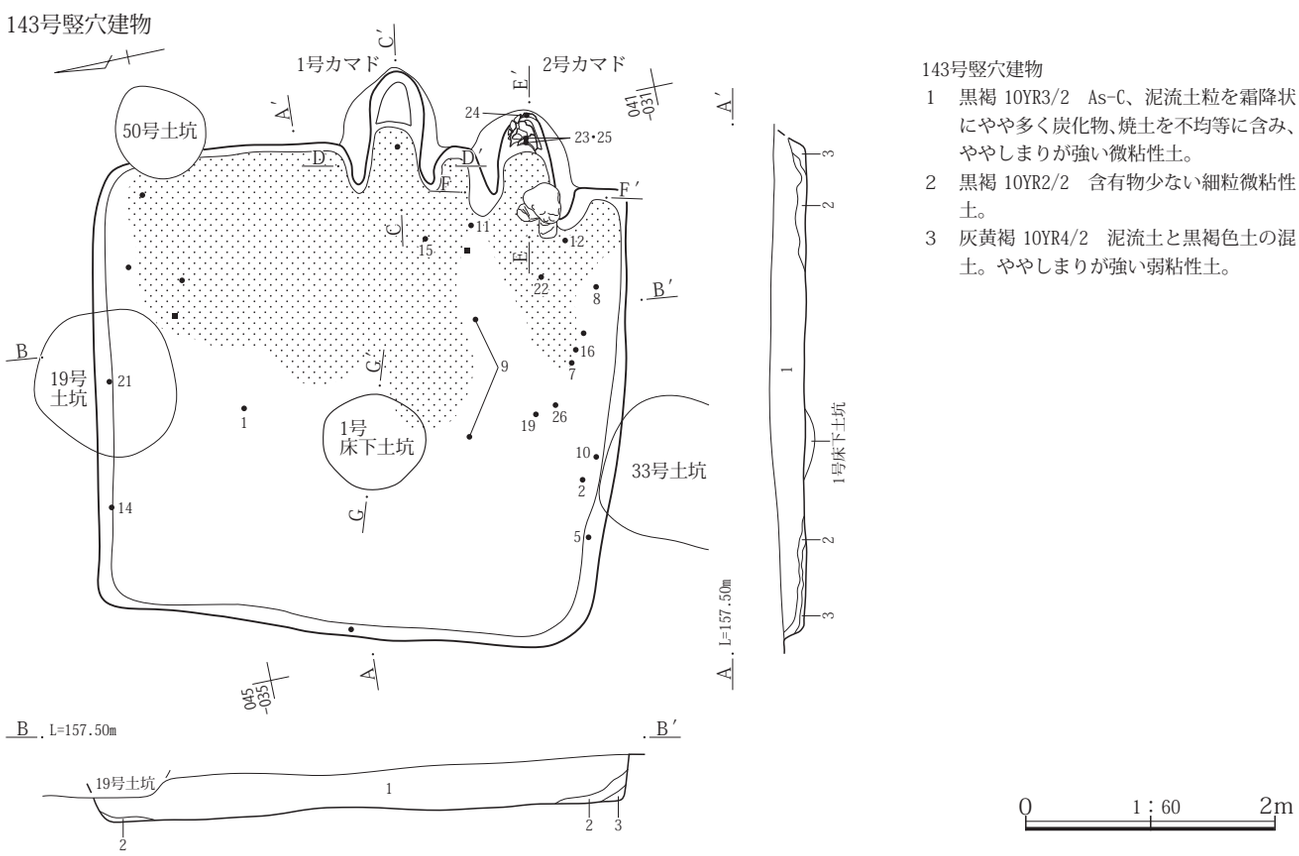
位置　１区調査区南部、Ｘ＝37041～37045、Ｙ＝-85030～-85035に位置する。

重複関係　19号土坑、33号土坑、50号土坑と重複関係にあり、108号竪穴建物と接している。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが古い。なお、108号竪穴建物との新旧関係は出土遺物から判断している。

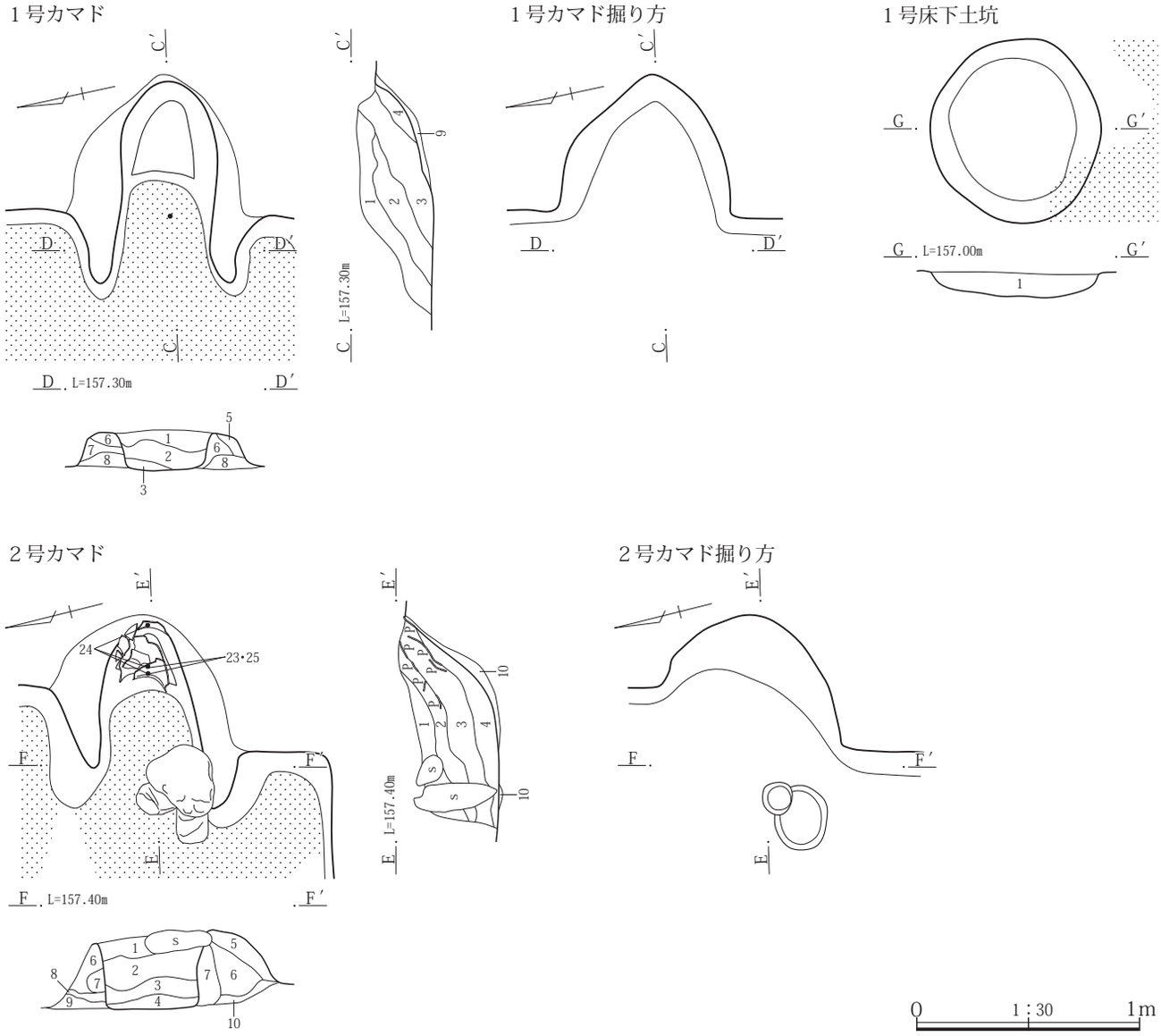
形状　南北に長い長方形を呈すが、対応する辺長が20～30cmほど異なるため各角に歪みがみられる。

規模　主軸方向の東西方向は3.95m、南北方向は4.27mを測る。確認面から床面までの壁高は８～37cmである。

床面積　13.95㎡を測る。



第177図　143号竪穴建物遺構図（１）



143号竪穴建物　１号カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土小ブロックと炭化物、焼土を若干を含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土粒混土、不揃いの焼土粒や炭化物粒を少量含み、ややしまりが強い。
3　灰褐 5YR4/2　焼土小ブロックや泥流土を霜降状に含む、弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒褐色細粒土が基質、黒色灰を含み、ややしまりが強くややサラサラした感触。
5　黒褐 10YR3/2　As-Cや泥流土粒を少量含み、しまりやや強い微粘性土。
6　灰黄褐 10YR4/2　不揃いな泥流土ブロックを多量に含み、しまりが強い。右袖には焼土粒を多く含む。
7　黒褐 10YR3/2　細粒黒色土が基質、不明瞭な泥流土粒をやや多く含み、ややしまりが強い微粘性土。
8　黒褐 7.5YR3/2　やや灰色味をおびる泥流土が基質。左袖に焼土、右袖に黒褐色土を多く含む。
9　暗褐 10YR3/3　弱粘性土が基質、焼土小ブロックを少量含み、ややしまりが強い。
143号竪穴建物　２号カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状に炭化物や不揃いの焼土もやや多く含み、ややしまりが強い微粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　ややしまりが強い細粒弱粘性土。
3　暗褐 7.5YR3/3　土質は２と同様。不揃いの焼土ブロックをやや多く含む。
4　黒褐 10YR3/2　ややしまりが強い細粒弱粘性土。
5　暗褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状に少量含み、ややしまりが弱い。
6　暗褐 10YR3/3　泥流土粒を少量含む、細粒弱粘性土。
7　暗褐 7.5YR3/3　土質は６と同様。不明瞭な焼土をやや多く含む
8　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体、ややしまりがある。
9　灰褐 5YR4/2　焼土小ブロックをやや多く含み、しまりが強い細粒弱粘性い。
10　黒褐 2.5Y3/2　含有物少ない、しまりが強い細粒弱粘性土。
143号竪穴建物 １号床下土坑
1　にぶい赤褐 5YR4/3　ブロック状の焼土を40％含み、しまりがある。

第178図　143号竪穴建物遺構図（２）

主軸方位　Ｎ－107°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できたが、竪穴内部は黒褐色土によって短期間に埋没していた。そのため埋没状態の判断は難しいが、自然埋没の可能性が高い。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。竪穴東側では顕著な硬化面が確認されている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、床面ほぼ中央で床下土坑１基が検出されている。床下土坑は形状が若干南北に長い楕円形を呈し、規模は径0.83×0.77m、深さ0.14mを測る。内部からは土器などの出土はみられなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りに隣接して２基のカマドが構築されている。北側を１号カマド、南側を２号カマドとした。残存状態は両カマドとも焚口と燃焼部の天井は失われていたが、燃焼部両袖は一部が残存していた。また、２号カマドでは右袖側に焚口天井に使用されたとみられる礫とそれを支えた礫が当初に近い状態で残存していたが、左袖側はすでに抜き取られ、天井に使用された礫が崩落した状態であった。規模は１号カマドが全長1.02m、幅0.97m、燃焼部幅0.36m、２号カマドが全長0.90m、幅1.02m、燃焼部幅0.38mを測る。両カマドとも燃焼部奥側半分から煙道部にかけては壁外に存在し、燃焼部火床面と煙道部の間には16㎝と10㎝の段が設けられている。なお、２号カマド煙道部には煙突に使用されたとみられる23～25の土師器甕が出土している。ここで使用されている土師器甕は口縁部形状が22の土師器甕に比べ、頸部が外傾、もしくは外反状に立ち上がることから９世紀前半代に比定でき、前代に使用していたものを煙道に転用したとみられる。

出土遺物　遺物は土師器杯・台付甕・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・長頸壺・甕、灰釉陶器、土製品丸瓦片、鉄製品紡錘車・釘・流動滓などが出土している。このうち、６・７・９～11・15・22の須恵器杯、椀、土師器甕が床面から、23～25の土師器甕がカマドからの出土である。30の鉄製品紡錘車は床面より28㎝上からの出土である。なお、27・28の須恵器蓋杯の蓋と身は古墳時代に比定されるものであることから、埋没段階に混入したとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している土師器甕や須恵器杯・椀と床面近くから出土した22の土師器甕などから９世紀第２四半期に構築され、９世紀第３四半期まで存続したと判断できる。

144号竪穴建物

位置　１区調査区中央部南寄り、Ｘ＝37066～37072、Ｙ＝-85040～-85042に位置する。一部を重複関係にある遺構によって欠く。

重複関係　34号竪穴建物、182号竪穴建物、１号溝、７号溝と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが古い。

形状　ほぼ方形を呈する。

規模　南北方向は残存範囲で4.62m、東西方向は4.72mを測る。確認面から床面までの壁高は５～19㎝を測る。

床面積　19.41㎡を測る。

主軸方位　南北方向を主軸方向とするとＮ－50°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため明確ではないが、土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角で検出されている。形状は楕円形を呈し、規模は径0.62×0.57m、深さ0.18mを測る。西側上面に長さ40㎝、幅26㎝、厚さ18㎝の亜角礫が出土している。なお、内部からは土器などの出土はみられなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　検出されなかった。なお、出土遺物からは炉が設けられていたと想定され、７号溝と重複する位置に存在したと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・器台・鉢・壺・甕、須恵器杯蓋・杯、灰釉陶器、土製品瓦、棒状礫などが出土している。このうち１の土師器器台が床面から、２の土師器鉢が床面より８㎝上から出土している。こうしたことか

ら本竪穴建物に共伴する遺物は前記の２点と３の土師器壺であると判断される。その他の土師器甕、須恵器杯、瓦は後の混入とみられるが、瓦は床面からの出土であることから、出土地点に他の遺構が存在した可能性が窺える。棒状礫は南辺中央の壁下の床面から10点がまとまって出土しており、その形状から菰編み石として使用されたとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や床面や床面近くから出土した土師器器台や鉢から４世紀前半代に比定できる。

146号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37072～37076、Ｙ＝-85058～-85061に位置する。

重複関係　52号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　南北方向がやや長いが、ほぼ方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が2.59m、南北方向が2.67mを測る。確認面から床面までの壁高は６～14㎝である。

床面積　5.62㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－113°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は確認できなかった。

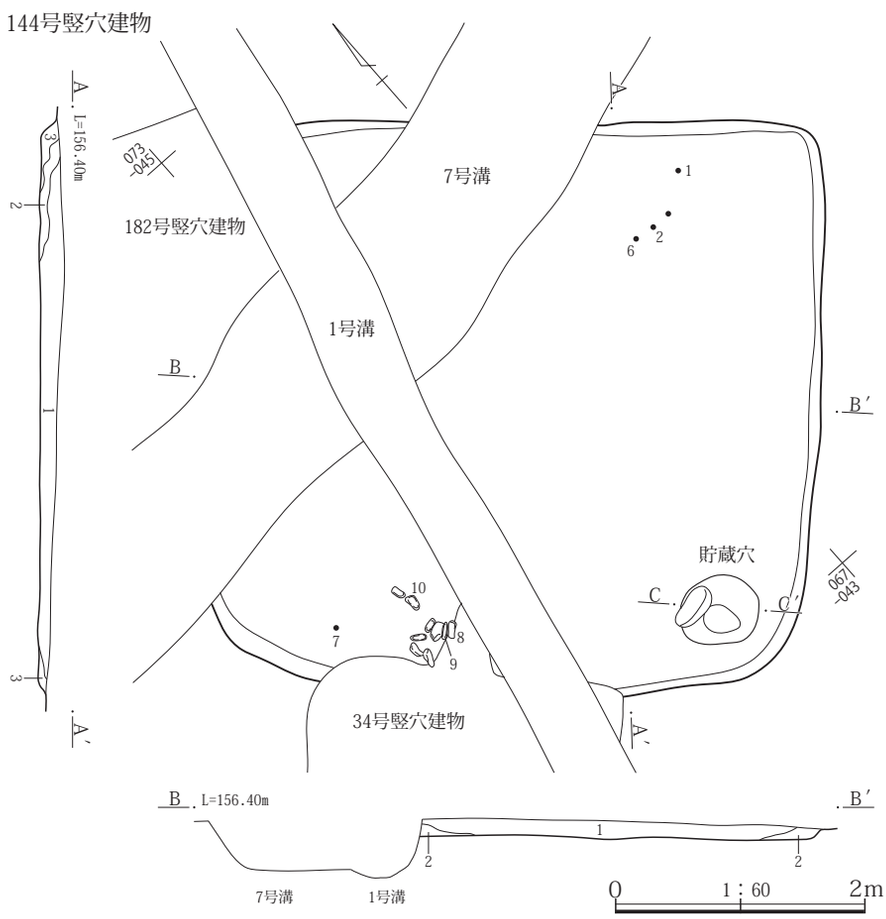
壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

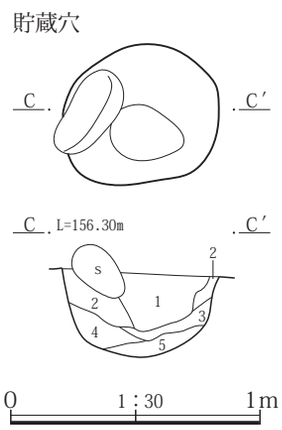
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁のほぼ中央にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部にかけての天井は失われていたが、両袖は残存していた。なお、調査したカマド



144号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒、炭化物粒、焼土を含み、ややしまりがある微粘性土。
2　黒褐 10YR2/2　ややしまりが強い細粒弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　不揃いの泥流土ブロックの混土、細粒微粘性土。



144号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　泥流土粒を少量含み、ややしまりが弱い。
2　黒褐 10YR3/2　しまりが弱い細粒弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　土質は２に同様。上半には泥流土粒、下半に灰、炭化物粒を多く含む。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックを不均等にやや多く含み、しまりが強い。
5　暗褐 10YR3/3　不明瞭な泥流土と黒褐色土の混土、ややしまりが強い。

第179図　144号竪穴建物遺構図

が構築されている竪穴建物では燃焼部の天井部はカマド内に痕跡が残っていない状態であったが、本竪穴建物ではカマド内に崩落状態で確認されている。規模は全長が0.61m、幅が0.76m、燃焼部幅0.30mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部にかけては壁外に掘り込まれている。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器皿・杯・椀・甕、灰釉陶器、鉄製品鏃・棒状製品が出土している。５と６の須恵器杯、８の鏃・７の棒状製品が床面、４の須恵器有台杯がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土遺物に８世紀前半代と10世紀前半代の杯が出土しているが、全体的な出土傾向からは10世紀前半代に比定できる。

147号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37076～37079、Ｙ＝-85054～-85057に位置する。

重複関係　186号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は168号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　各角が85°～110°の角度をもつ歪んだ四角形を呈す。

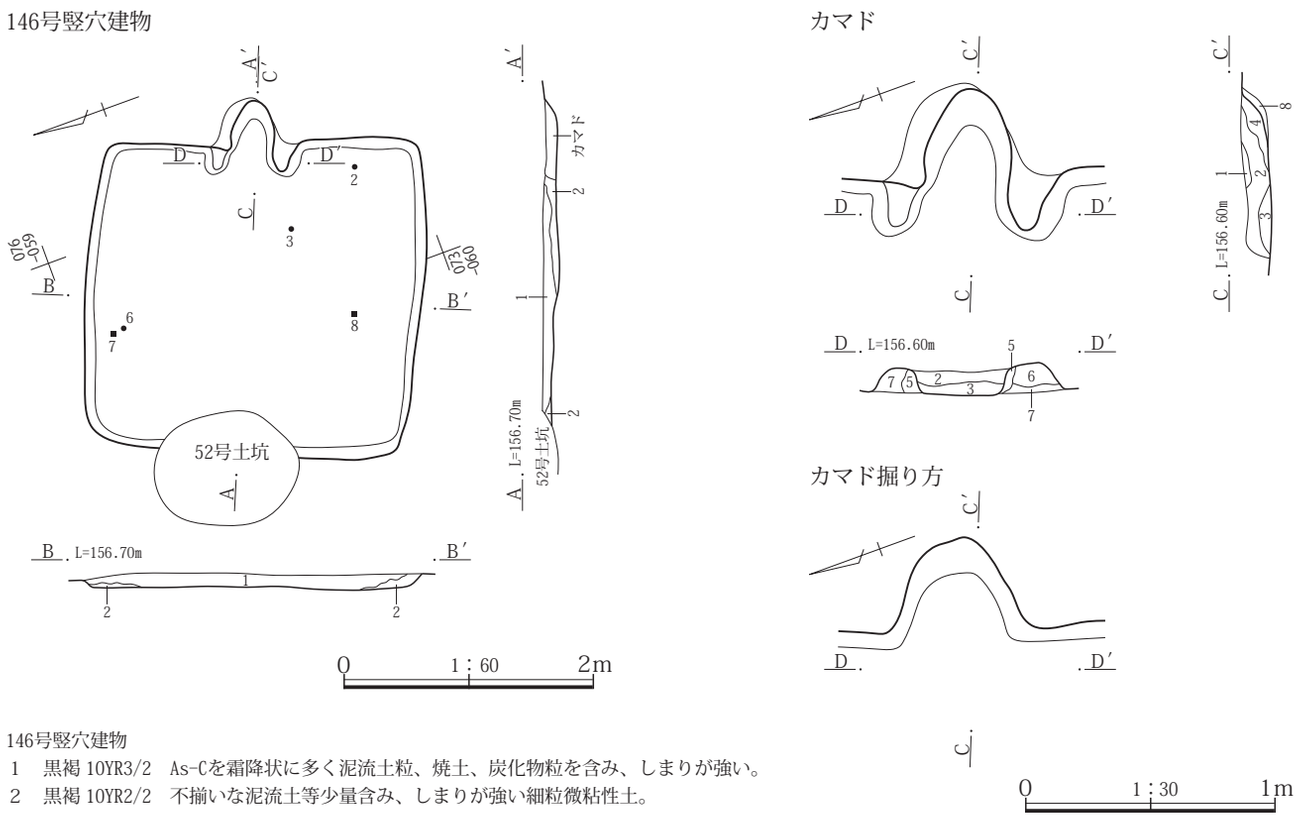
規模　主軸方向の東西方向は2.73m、南北方向は3.44mを測る。確認面から床面までの壁高は０～３㎝と浅い。

床面積　8.27㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－103°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面まで浅いため埋没状態の判断は不可能であった。

床面　若干の凹凸が見られるが地山や168号竪穴建物埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。



146号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを霜降状に多く泥流土粒、焼土、炭化物粒を含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　不揃いな泥流土等少量含み、しまりが強い細粒微粘性土。

146号竪穴建物　カマド
1　にぶい赤褐 5YR4/4　泥流土が被熱して赤変した部分。
2　暗褐 10YR3/3　As-Cが少量の混土、煙道側では被熱により若干赤色味がかった泥流土を多く含み、ややしまりが強い微粘性土。
3　暗灰黄 2.5Y4/2　しまりがある粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　灰を含み、しまりがある細粒粘性土でややサラサラした感触。
5　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒、炭化物粒を含み、ややしまりが強い微粘性土。
6　暗褐 10YR3/3　As-Cを上半など多めに含み、しまりが強い。
7　暗褐 7.5YR3/3　細粒弱粘性土。
8　暗褐 10YR3/3　小ブロック状の泥流土を含み、しまりが強い弱粘性土。

第180図　146号竪穴建物遺構図

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、燃焼部両袖は一部が残存していた。規模は全長0.82m、幅0.60m、燃焼部幅0.42mを測る。燃焼部の奥側半分と煙道部は壁外に掘り込まれている。カマド手前から北側にかけてカマドの補強材として使用されていたとみられる礫が散乱した状態で出土している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕などが出土している。出土量は図示３点、未掲載174点と少量であった。図示した遺物は１の須恵器椀口縁部片がカマドから、２の須恵器椀底部が床面から、３の土師器甕が床面より15㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面とカマドから出土した遺物から９世紀後半に比定できる。

148号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37072～37075、Ｙ＝-85053～-85056に位置する。

重複関係　175号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　東西方向が長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が3.26m、南北方向が2.74mを測る。確認面から床面までの壁高は０～５㎝である。

床面積　推定で7.81㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－108°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため、土層断面の観察が困難であったため判断できない。

床面　若干の凹凸が見られる。床下土坑部分を除き、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

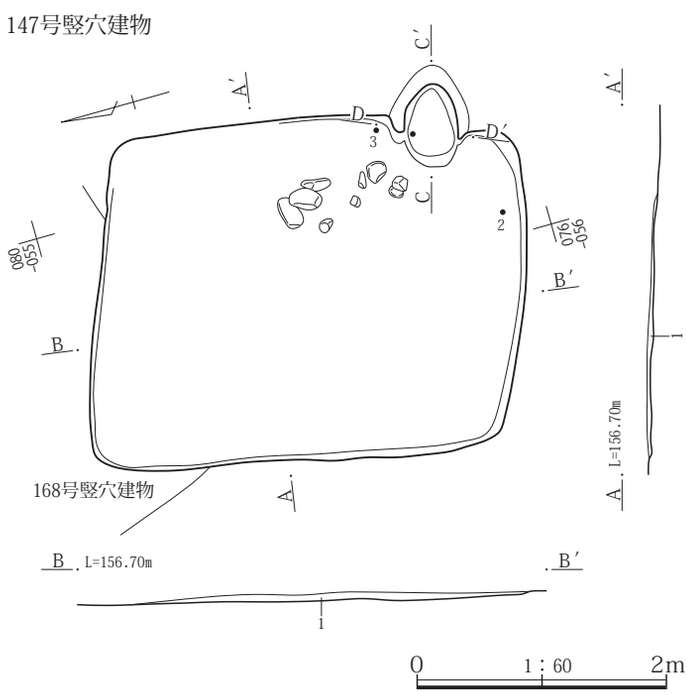
壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

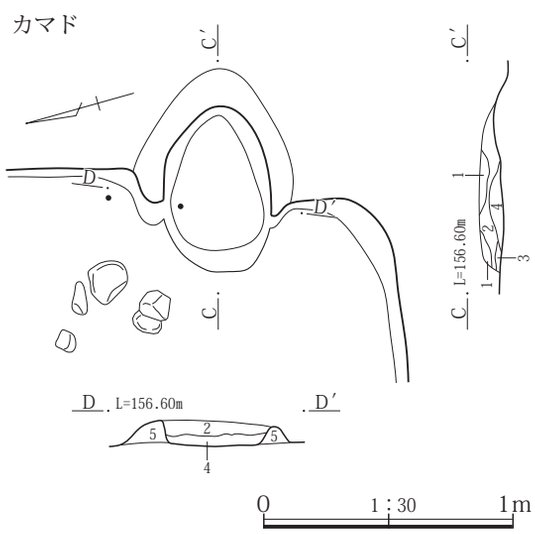
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部にかけての天



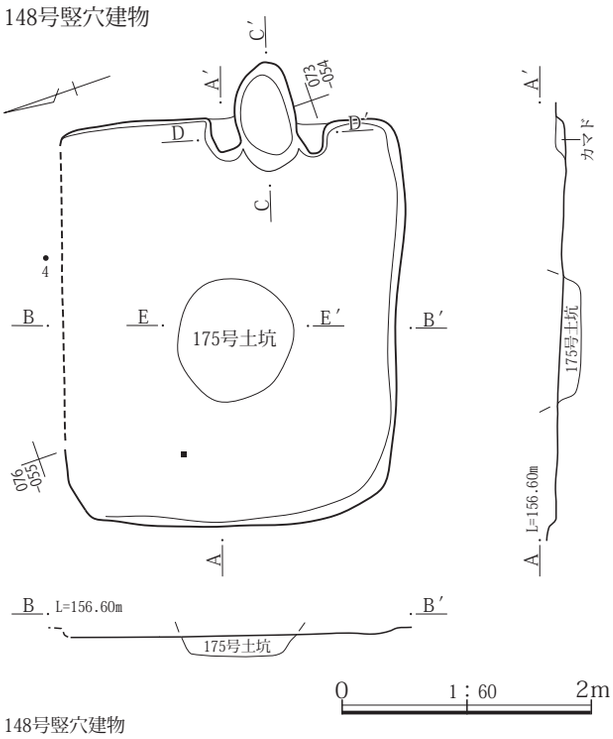
147号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を少量含み、しまりが強い。



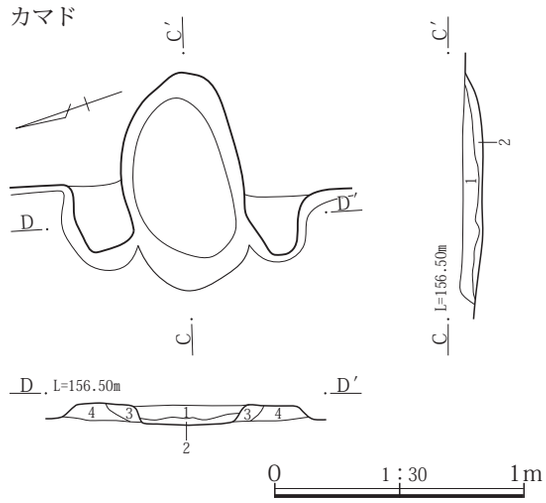
147号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　炭化物粒、焼土粒を少量含み、しまりが強い微粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　不均等に焼土粒、微粘性土。泥流土粒をやや多く含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/4　黄色味をおびる泥流土主体、黒褐色土を小ブロック状に含む、粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰が少量含む、ややサラサラした感触。
5　黒褐 10YR3/2　しまりやや弱い弱粘性土。

第181図　147号竪穴建物遺構図

148号竪穴建物



カマド



148号竪穴建物カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量と灰を含み、ややしまりの強い微粘性土でややサラサラした感触。
2　暗褐 7.5YR3/3　ややしまりが強い細粒弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土ブロックを多く含み、しまりが強い。
4　暗褐 10YR3/3　ローム粒・パミス等含有物を多量に含み、しまりが強い。

148号竪穴建物
竪穴部分埋没土　黒褐 10YR3/2　As-Cを不均等にやや多く炭化物、焼土を若干含む、微粘性土。

第182図　148号竪穴建物遺構図

井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.88m、幅が1.00m、燃焼部幅0.38mを測る。煙道部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器などが出土しているが、図示できた土器は７点である。このうち、６の須恵器長頸壺片を除いて床面よりやや上からの出土である。なお、本竪穴建物は確認面から床面までが５㎝前後と浅いため床面直上として扱っても問題はないとみられる。６は175号土坑内からの出土であるが、土坑掘削時に流れ込んだとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した遺物が少量ではあるが、１の土師器杯、３の須恵器杯、５の須恵器盤などから７世紀代４四半期に比定できる。

149号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の西寄り、Ｘ＝37084～37087、Ｙ＝-85070～-85073に位置する。

重複関係　４号竪穴状遺構、９号溝と重複関係にある。新旧関係は９号溝より本竪穴建物のほうが古く、４号竪穴状遺構よりは新しい。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は3.11m、東西方向は3.23mを測る。確認面から床面までの壁高は５～12㎝を測る。

床面積　8.42㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－95°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため埋没状態の判断が困難である。土層断面の観察では床面中央ににぶい黄褐色土が薄く堆積した後に黒褐色土で埋没していることが確認できている。人為的な埋め戻しが行われた可能性も想定される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、燃焼部袖は両側とも残存していた。右袖側にはカマドの構築材に使用したとみられる礫が散乱した状態で出土している。規模は全長0.75m、幅1.05m、燃焼部幅0.36mを測る。煙道部

は壁外に存在していた。掘り方は燃焼部を楕円形の浅い土坑状に掘り込み、燃焼部より５㎝ほど高い状態の三日月状に掘り込まれていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器、棒状礫などが出土している。このうち、１の須恵器杯、４の須恵器壺、５の土師器甕、８の須恵器羽釜、９の須恵器甕が床面から、２の須恵器椀、６・７の土師器甕がカマドからの出土である。本竪穴建物から出土した土器には２の須恵器椀、５の土師器甕と１の須恵器杯、６の土師器甕の間には年代観にやや時間差がみられる。

なお、棒状礫は埋没土から１点が出土しているだけであることから、他の遺構からの混入した可能性が窺える。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した１の須恵器杯や６の土師器甕から10世紀第３四半期に比定できる。

150号竪穴建物

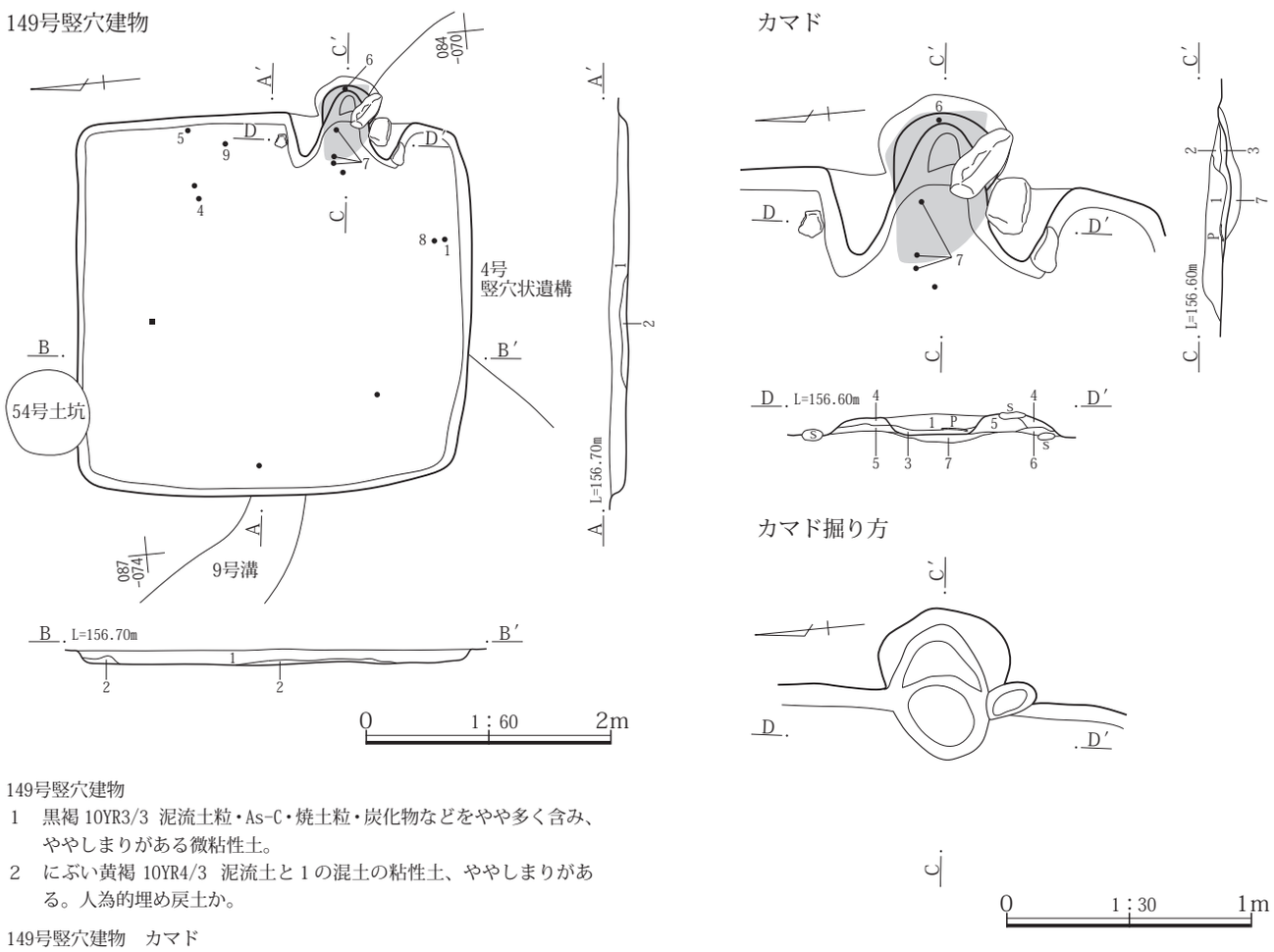
位置　１区調査区中央部の西寄り、Ｘ＝37079～37083、Ｙ＝−85068～−85071に位置する。

重複関係　156号竪穴建物、４号竪穴状遺構と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は3.48m、東西方向は3.17mを測る。確認面から床面までの壁高は７～21㎝を測る。

床面積　9.45㎡を測る。



149号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/3 泥流土粒・As-C・焼土粒・炭化物などをやや多く含み、ややしまりがある微粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3 泥流土と１の混土の粘性土、ややしまりがある。人為的埋め戻土か。

149号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2 As-Cと細かな泥流土粒を霜降状に炭化物、焼土を若干含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　細かな炭化物と灰を含み、ややしまりが弱い細粒粘性土でサラサラした感触。
3　灰褐 7.5YR4/2　やや不明瞭な焼土と白色灰主体、ややしまりが強い粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　As-C・泥流土粒を霜降状に少量と炭化物、焼土を若干含み、ややしまりがある細粒土。
5　暗褐 10YR3/3　泥流土をやや多く含み。微粘性土。
6　黒褐 10YR2/2　土質は２と同様。泥流土と炭化物を含み、ややしまりが弱い。
7　黒褐 7.5YR3/2　不均等な焼土を含み、しまりが強い粘性土。

第183図　149号竪穴建物遺構図

主軸方位　Ｎ－97°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから、自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、燃焼部袖は両側とも残存していた。規模は全長0.87m、幅0.97m、燃焼部幅0.32mを測る。煙道部は壁外に存在していた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕・羽釜などが出土している。出土量は竪穴建物全体を調査しているが、確認面から床面までが浅いためか、図示５点、未掲載206点と少量であった。このうち、３の須恵器椀が床面からの出土である。

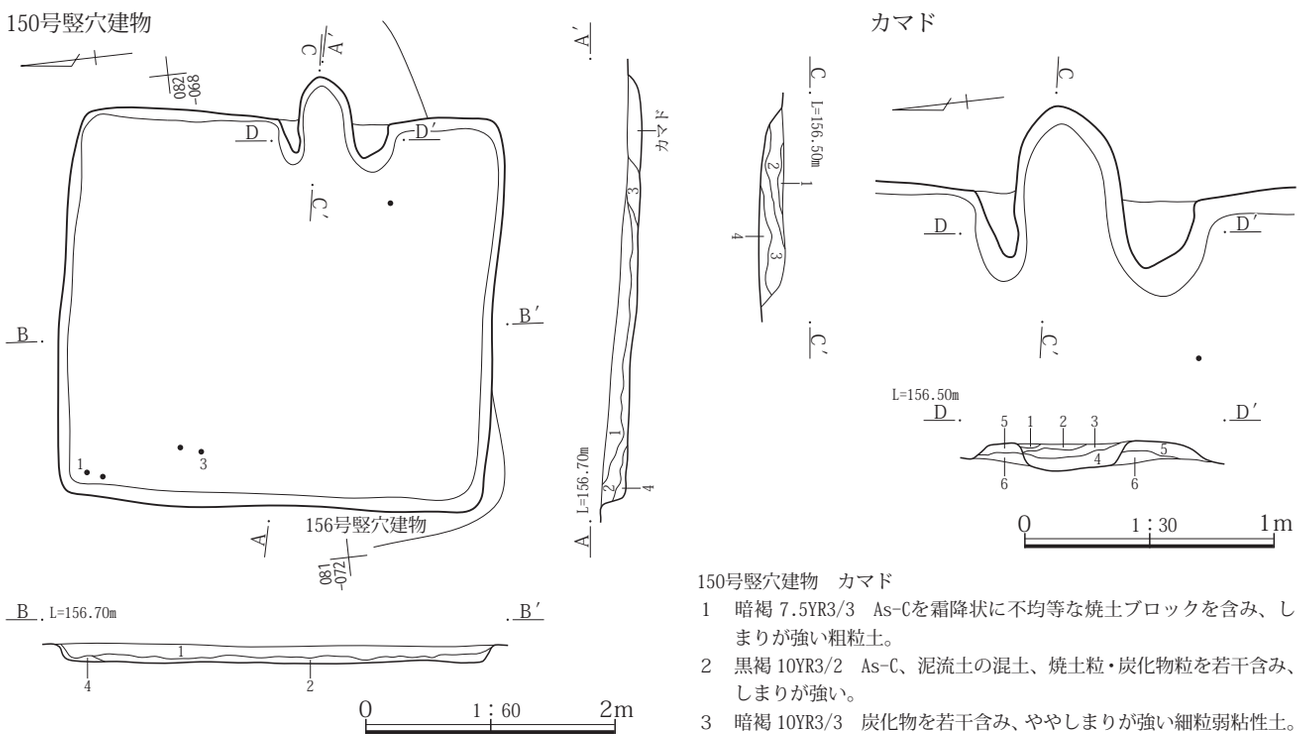
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器椀や床面よりやや上からではあるが共伴するとみられる１の須恵器無台椀などから10世紀第３四半期に比定できる。

151号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37068～37071、Ｙ＝-85053～-85056に位置する。竪穴中央部の上位を試掘坑で欠く。

重複関係　７号溝と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　東西方向に長い長方形を呈する。



150号竪穴建物　カマド

1　暗褐 7.5YR3/3　As-Cを霜降状に不均等な焼土ブロックを含み、しまりが強い粗粒土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土の混土、焼土粒・炭化物粒を若干含み、しまりが強い。
3　暗褐 10YR3/3　炭化物を若干含み、ややしまりが強い細粒弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、ややしまりが強い弱粘性土でややサラサラした感触。
5　暗褐 10YR3/3　As-Cを霜降状にやや多く不明瞭な焼土を不均等に含み、しまりが強い粘性土。
6　暗褐10YR3/3　５に類似、As-Cの量がかなり少なくなる。

150号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-Cを霜降状に多量と炭化物、焼土を少量含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR2/2　焼土粒・泥流土粒をわずかに含む、細粒粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　２と不明瞭な灰褐色泥流土ブロックの混土、炭化物粒が少量含む。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土粒と２の混土、ややしまりがある弱粘性土。

第184図　150号竪穴建物遺構図

規模　主軸方向の南北方向は1.97m、東西方向は3.27mを測る。確認面から床面までの壁高は23～33㎝を測る。

床面積　13.59㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－22°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから、自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　カマド東側から竪穴建物北東角から0.5mほど壁に沿って40～30㎝大の礫が検出されている。この礫群からは４の須恵器椀などが出土している。

火処　北壁の北東角寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部にかけての天井は失われていた。なお、燃焼部は壁外に掘り込まれているとみられ、袖は確認されていない。規模は全長が0.72m、幅が0.62m、燃焼部幅0.48mを測る。

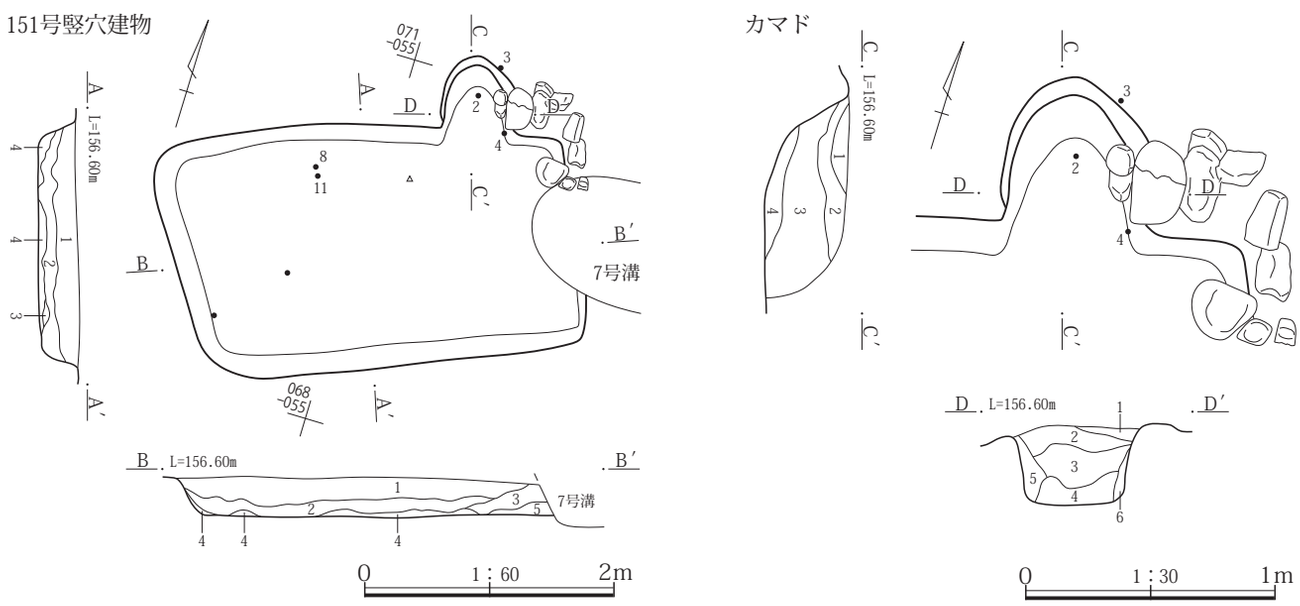
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、黒色土器椀、須恵器杯蓋・杯・椀・短頸壺・広口壺・羽釜・甕、灰釉陶器椀などが出土している。ほとんどが埋没土中からの出土で床面やカマドから出土した遺物はわずかであったが、14の須恵器甕がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に共伴すると判断できるものが少ないが、出土した土器全単体の傾向から10世紀前半代に比定できる。

152号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の西寄り、Ｘ＝37086～37090、Ｙ＝-85065～-85069に位置する。

重複関係　24号土坑、130号ピットと重複関係にある。新旧関係は24号土坑より本竪穴建物のほうが古く、130



151号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを霜降状にやや多く不明瞭で不揃いな泥流土ブロックを不均等に含み、しまりが強い微粘性土。
2　暗褐 2.5Y3/3　灰褐色泥流土大ブロックと黒褐細粒土の混土。含有物は少ない弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　１に近似。泥流土をごく少量含む。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粗粒主体、黒色土ブロックを含み、しまりがある粘性土。
5　暗褐 10YR3/3　黒褐色細粒土が基質、不揃いの泥流土ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い。
151号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C,泥流土粒を少量と焼土を若干含む、細粒非粘性土。
2　暗褐 7.5YR3/3　煙道側に焼土ブロックとAs-C泥流土粒を含み、しまりが強い細粒弱粘性土。
3　暗赤褐 5YR3/3　不明瞭な焼土ブロックと焚口付近で大粒泥流土ブロックを含み、しまりやや強い細粒弱粘性土。
4　暗灰黄 2.5Y4/2　大粒泥流土ブロックを主体とする粘性土。
5　灰褐 5YR4/2　黒褐色細粒土が主体、焼土ブロックを大量に含み、ややしまりが弱い。
6　黒褐 10YR3/2　５と同様、焼土は含まない。

第185図　151号竪穴建物遺構図

号ピットより新しい。なお、北側の165号竪穴建物とは接する位置関係である。

形状　ほぼ方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は3.83m、東西方向は3.97mを測る。確認面から床面までの壁高は15～34㎝を測る。

床面積　13.56㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－９°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから、自然埋没と判断される。

床面　全体的に黒褐色土と灰黄褐色土を混ぜて掘り方を埋め戻し床面とし、中央部は特に踏み固めている。

掘り方　貼床周囲を深く、中央部を浅めに掘り込んでいるが、その中でも南西部が深く掘り込まれている。掘り方面は凹凸が激しい。

壁溝　検出されなかった。

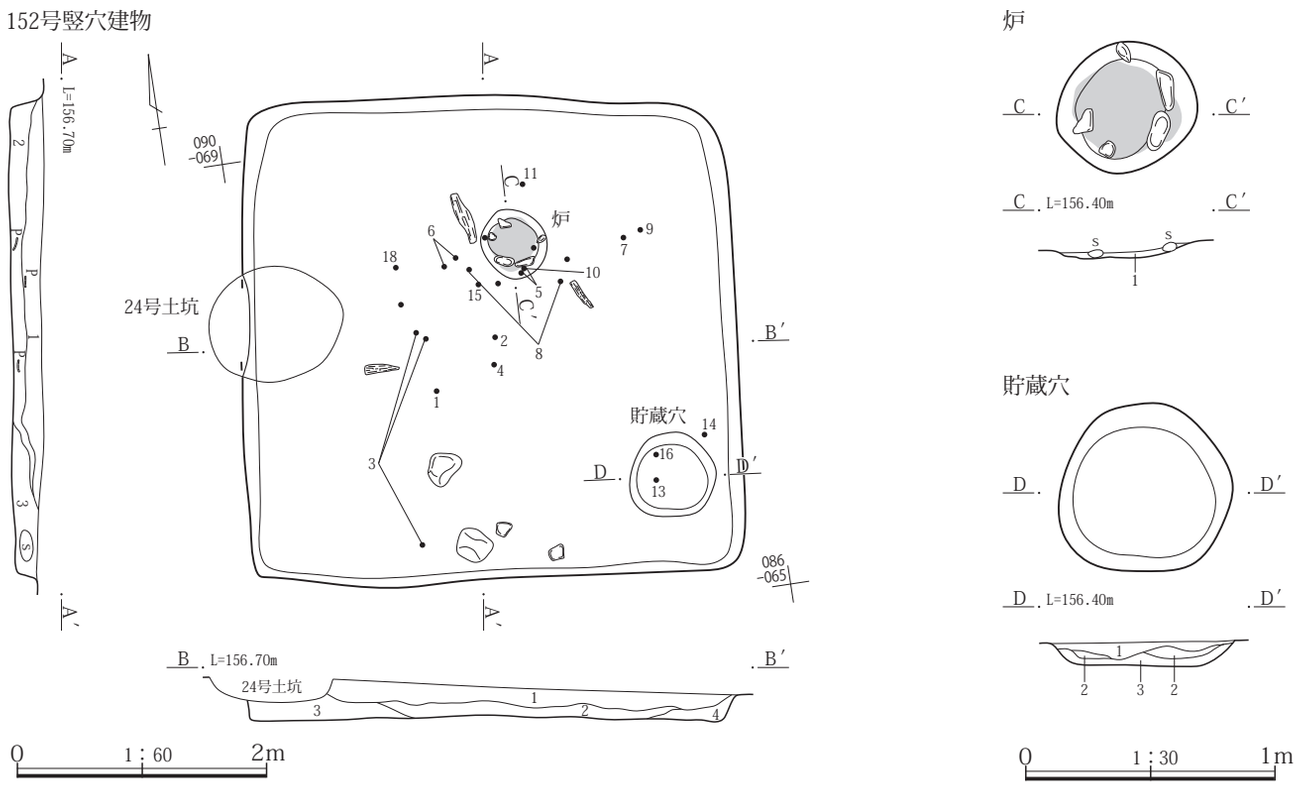
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角寄りで検出されている。形状は楕円形を呈し、規模は径0.70×0.67m、深さ0.10mを測る。内部からは13・14の土師器甕などが出土している。

その他施設　検出されなかった。

火処　中央より0.5mほど北に炉が設けられている。規模は径が0.55×0.52mでわずかに窪みがみられる。南側に径７㎝、長さ15㎝の棒状礫２点が枕石として置かれていた。

出土遺物　遺物は土師器高杯・壺・甕などが竪穴内部全域に散乱した状態で出土している。このうち、１・２の高杯、３・４・７～９の壺、14・17・18の甕が床面から



152号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを霜降状にやや多く炭化物粒・不揃いの泥流土ブロックを少量含み、しまりが強い。
2　暗褐 2.5Y3/3　灰褐色の泥流土ブロックの混入多い弱粘性土、中央付近に焼土を多く含む。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土。
4　黒褐 10YR3/2　泥流土、しまりが強い細粒粘性土。
152号竪穴建物　炉
1　灰褐 7.5YR4/2　黒褐色土中に不揃いの焼土ブロックと灰を多量に含み、しまりが強い。下面は被熱し、やや赤色味おびている。
152号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を10％含み、やや粘性がある。
3　にぶい黄褐 10YR5/4　２をブロック状に５％含む。

第186図　152号竪穴建物遺構図

出土している。また、13・16の甕と12の壺胴部片が貯蔵穴からの出土である。出土した土器には樽式や吉ヶ谷式などの弥生土器の系譜を受け継いだものがみられる。なお、図示した土器には埋没土から出土したものも存在するが、すべて本竪穴建物に共伴する。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器から３世紀後半代に比定できる。

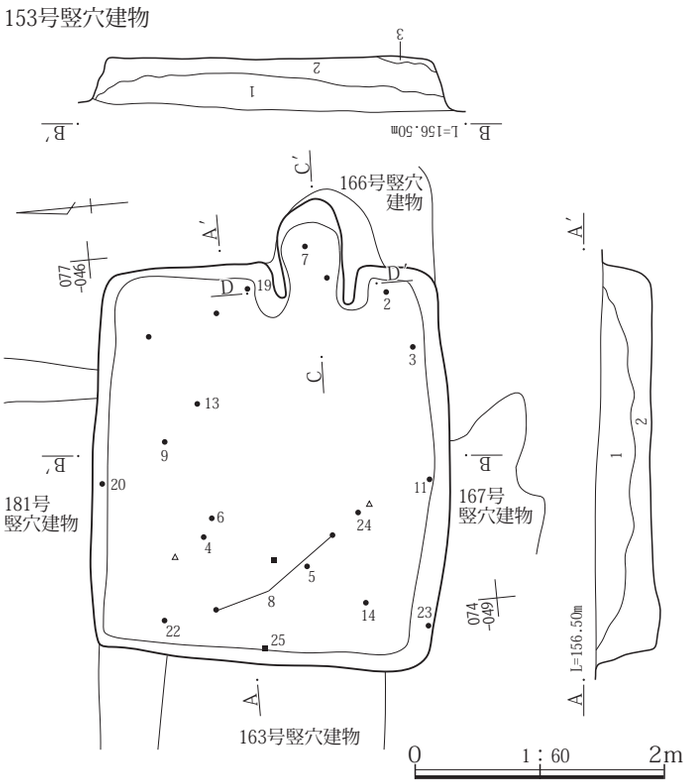
153号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37080～37084、Ｙ＝-85042～-85045に位置する。

重複関係　163号竪穴建物、166号竪穴建物、167号竪穴建物、181号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　東西に長い長方形を呈す。

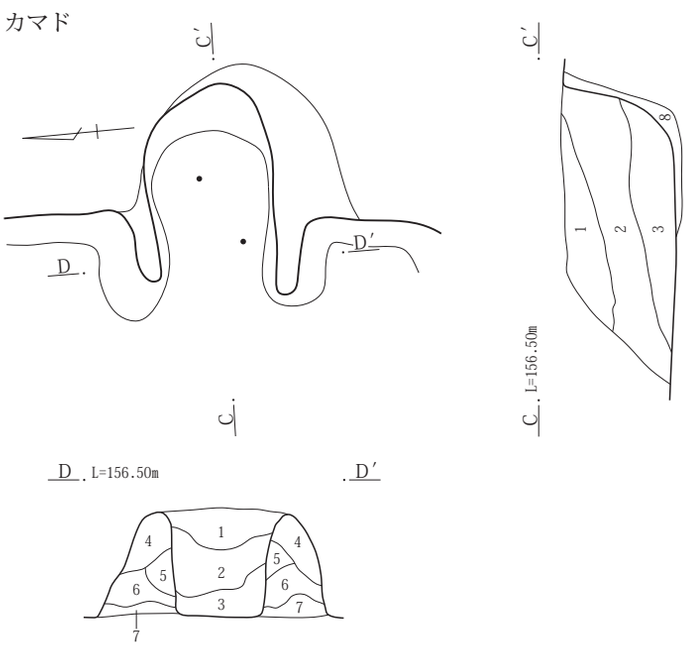
153号竪穴建物



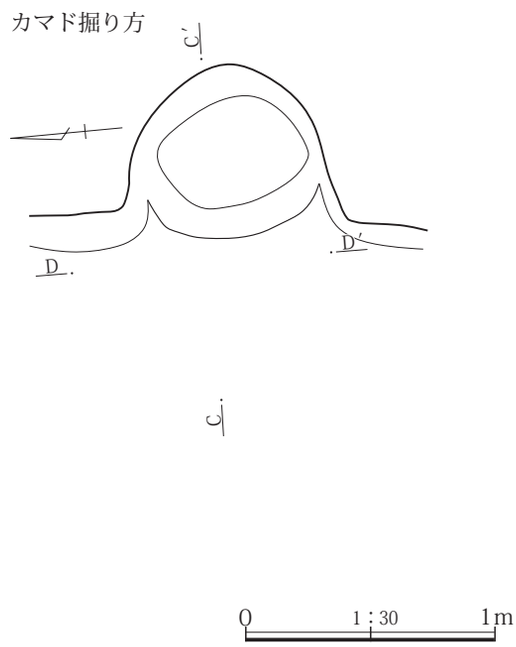
153号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒・炭化物粒・焼土粒等含有物が霜降状に多量に含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　黒色味やや強い細粒土が基質、泥流土ブロック・大粒の炭化物粒・焼土粒・As-Cを多量に含み、しまりが強い弱粘性土。
3　暗赤褐 5YR3/3　焼土粒・泥流土小ブロックを多く含み、ややしまりが弱い粘性土。

153号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-C・泥流土粒・焼土等含有物を少量含み、ややしまりがある微粘性土。
2　黒褐 7.5YR3/2　焚口付近で焼土、煙道側で泥流土粒を多く含む、細粒微粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2～黒褐 10YR2/2　焚口側に泥流土大ブロック、中央付近では黒色灰を多く含む、細粒弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒褐色細粒土が基質、泥流土粒やAs-Cが不均等に含み、ややしまりが強い。
5　暗褐 10YR3/3　黒褐色土と泥流土の混土、焼土粒・炭化物粒を少量含み、ややしまりが強い。
6　暗褐 10YR3/3　土質は５と同様、含有物少なめだが、炭化物粒が若干含む。
7　灰黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックも不均等に焼土もやや多く含む。
8　暗褐 7.5YR3/3　焼土を不均等に含み、ややしまりが弱い非粘性土。

カマド



カマド掘り方



第187図　153号竪穴建物遺構図

規模　主軸方向の東西方向が3.22m、南北方向が2.86mを測る。確認面から床面までの壁高は29～54㎝を測る。

床面積　7.17㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－96°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長0.96m、幅0.90m、燃焼部幅0.38mを測る。燃焼部奥側半分から煙道部にかけては壁外に掘り込まれている。掘り方は壁外を幅0.75m、奥行き0.70mほど掘り込み､左袖は壁から構築しているが、右袖側は掘り方に構築土である黒褐色土と褐色土を充填して袖を構築している。

出土遺物　出土した遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・皿・杯・椀・甕・羽釜、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、土製品土錘、鉄製品刀子、流動滓などが出土している。このうち、22の須恵器杯蓋、４の須恵器皿、６・13の須恵器杯は床面から、７・12・13の須恵器杯はカマドからの出土である。16の緑釉陶器椀は埋没土からの出土であるが、接合した破片は重複関係にある166号竪穴建物カマド左袖からも出土したものがある。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器皿・杯から９世紀第３四半期に比定できる。なお、21～24の土師器杯、須恵器杯蓋・椀の４点は８世紀代の年代観が与えられることから混入と判断できるが、22の須恵器杯蓋は床面から、24の須恵器椀は床面より６㎝上からの出土である。こうした出土状態は本竪穴建物に共伴する遺物と判断しても齟齬のない位置である。しかし、１世紀近くも須恵器が伝世するような事例はみることができない。これらの遺物が混入した経緯については判然としない。

154号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37087～37091、Ｙ＝-85059～-85062に位置する。

重複関係　169号竪穴建物、173号竪穴建物、６号竪穴状遺構と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物や竪穴状遺構より本竪穴建物ほうが新しいが、出土遺物からは６号竪穴状遺構より本竪穴建物のほうが古い。なお、173号竪穴建物との関係は不明瞭である。

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は3.32m、南北方向は3.61mを測る、確認面から床面までの壁高は８～11㎝を測る。

床面積　10.05㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－91°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため明確ではないが、土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

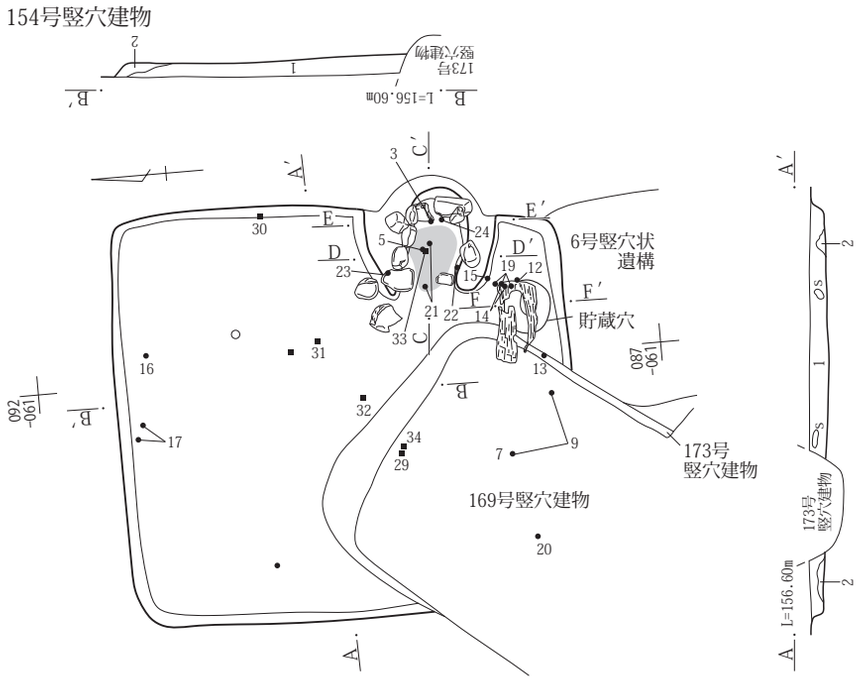
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角寄りで検出されている。形状は東西に長い楕円形を呈し、規模は径0.54×0.36m、深さ30.34mを測る。床面状では貯蔵穴上面を覆うように炭化した板が検出されている。板は長さ0.55㎝、幅0.34㎝、厚さ３㎝ほどであった。この板材は貯蔵穴のふたとして使用されていたと想定される。内部からは１の須恵器杯が底面から出土している。なお、貯蔵穴内部には竪穴建物の埋没過程で流入したとみられる土砂が堆積していた。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われているが、両袖は残存していた。規模は全長が0.95m、幅が1.13m、燃焼部幅0.43mを測る。燃焼部の内側、袖に沿うように角柱礫が構築材として据えられていた。また、燃焼部奥、袖上部には長さ45㎝、径17㎝の棒状礫が両袖に掛けるように使用されていたが､中程で割れた状態で出土している。そして右袖からは15の須恵器椀、左袖からは23の土師器甕が出土している。煙道部は壁外に延びる様子がみられないことから袖に掛けられている礫のところで煙突状に上に立ち上がる形態と想定される。

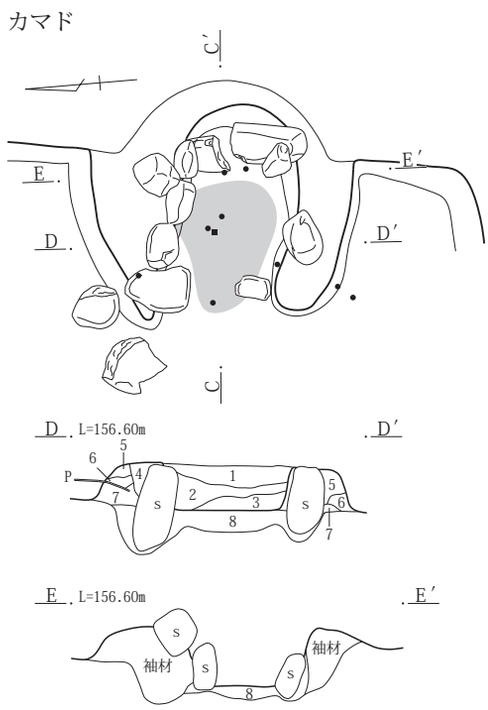
154号竪穴建物



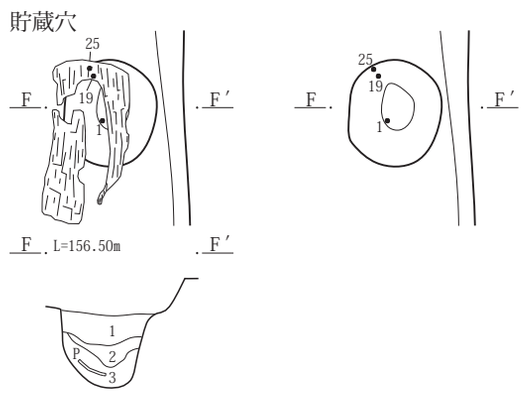
154号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒をやや多く焼土を若干含み、しまりが強い。
2　暗褐 2.5Y3/3　不明瞭な泥流土主体の粘性土、炭化物を若干含み、しまりが強い。
3　黒褐 10YR3/2　しまりが強い細粒弱粘性土。

0　1：60　2m

カマド



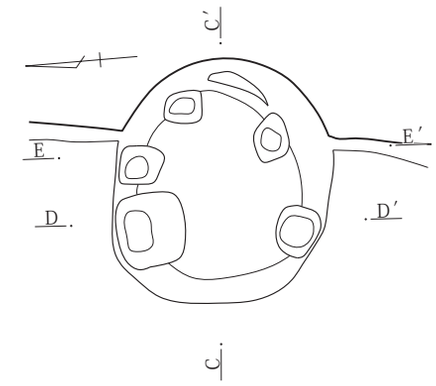
貯蔵穴



154号竪穴建物　カマド
1　暗褐 7.5YR3/3　焼土小ブロック・泥流土粒・炭化物粒をやや多く含み、ややしまりが強い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　焚口側で焼土ブロック、煙道付近に泥流土や炭化物をやや多く灰を含み、ややしまりが強い細粒土でサラサラした感触。
3　褐 7.5YR4/3　灰と不均等な焼土ブロックを含み。ややしまりが弱い弱粘性土。
4　暗褐 10YR3/4　焼土粒を少量含み、しまりが強い細粒微粘性土。
5　灰黄褐 10YR4/2　微細なAs-Cを霜降状に不明瞭な泥流土を含み、しまり極めて強い細粒土。
6　にぶい黄褐 10YR4/3　不明瞭な泥流土の混土、As-C・焼土粒を含み、きわめてしまりが強い。
7　灰黄褐 10YR4/2　土質は５と同様だが、含有物少ない。
8　暗褐 10YR3/2　炭化物粒を含み、しまりが強い弱粘性土。火床面上は被熱著しい。

154号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　不揃いの炭化物を多く含み、ややしまりが弱い微粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　土質は１に近い。黒色灰を含み、サラサラした感触。
3　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土ブロックの多く含み、ややしまりが強い弱粘性土。

カマド掘り方



0　1：30　1m

第188図　154号竪穴建物遺構図

出土遺物　遺物は土師器杯・甕・ロクロ土師器甕、須恵器杯蓋・杯・椀・盤・高杯・甕、灰釉陶器、鉄製品紡錘車・鏃・鎌・釘､流動滓などが出土している。このうち、７の須恵器杯、９の須恵器無台椀、12～14・16・17の須恵器椀、31の紡錘車、30の鉄製品鎌が床面から、１の須恵器杯、19の土師器小型甕、25の須恵器甕が貯蔵穴から、３～５の須恵器杯、11・15の須恵器椀、21～24の土師器甕。26の須恵器甕がカマドからの出土である。なお、31の紡錘車の紡輪際の軸には紡いだ糸が残存していた。この糸については分析を試みたが、紡錘車に付着した状態での分析は技術的に困難であるとのことから、今後の課題とする。

所見　貯蔵穴上面では蓋板とみられる板材が炭化した状態で出土していたが、竪穴建物内では他に炭化材の出土はみられなかった。このためこの板材だけが炭化した要因は不明である。

本竪穴建物の存続期間は、床面や貯蔵穴、カマドで出土している須恵器杯・椀や土師器甕などから９世紀第４四半期に比定できる。

155号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37080～37084、Ｙ＝-85042～-85045に位置する。東辺側を重複関係にある１号溝によって欠く。

重複関係　114号竪穴建物、１号溝と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが古い。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は2.93m、東西方向は2.10mを測る。確認面から床面までの壁高は18～30㎝を測る。

床面積　残存範囲内で4.61㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－19°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断された。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の北西角寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、燃焼部袖は両側とも残存していた。また、煙道部は天井部の崩落もなく残存していた。規模は全長1.30m、幅0.94m、燃焼部幅0.26m､煙道部長0.94mを測る。煙道部は壁外に存在し、地山を煙突状に掘削されていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。出土量は図示３点、未掲載156点と少量であった。図示した１～３の土師器杯は全て床面からの出土である。３は杯身模倣で、内外面とも燻し焼成されている。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器杯から６世紀後半代に比定できる。

156号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の西寄り、Ｘ＝37079～37084、Ｙ＝-85063～-85072に位置する。

重複関係　150号竪穴建物、４号竪穴状遺構と重複関係にある。新旧関係は150号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、４号竪穴状遺構より新しい。遺構確認や土層断面の観察では本竪穴建物より４号竪穴状遺構のほうが古いとの見解であるが、出土遺物をみると新旧が逆の可能性が窺える。ただし、４号竪穴状遺構の南北側には149号竪穴建物、150号竪穴建物と10世紀代の竪穴建物が存在していることから、これらの竪穴建物からの混入の可能性も想定されるため、ここでは調査時の見解を示しておく。

形状　東辺が西辺に比べ約0.2m長い台形状を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は4.05m、東西方向は4.32mを測る。確認面から床面までの壁高は15～41㎝を測る。

床面積　15.79㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－10°－Ｗを指す。

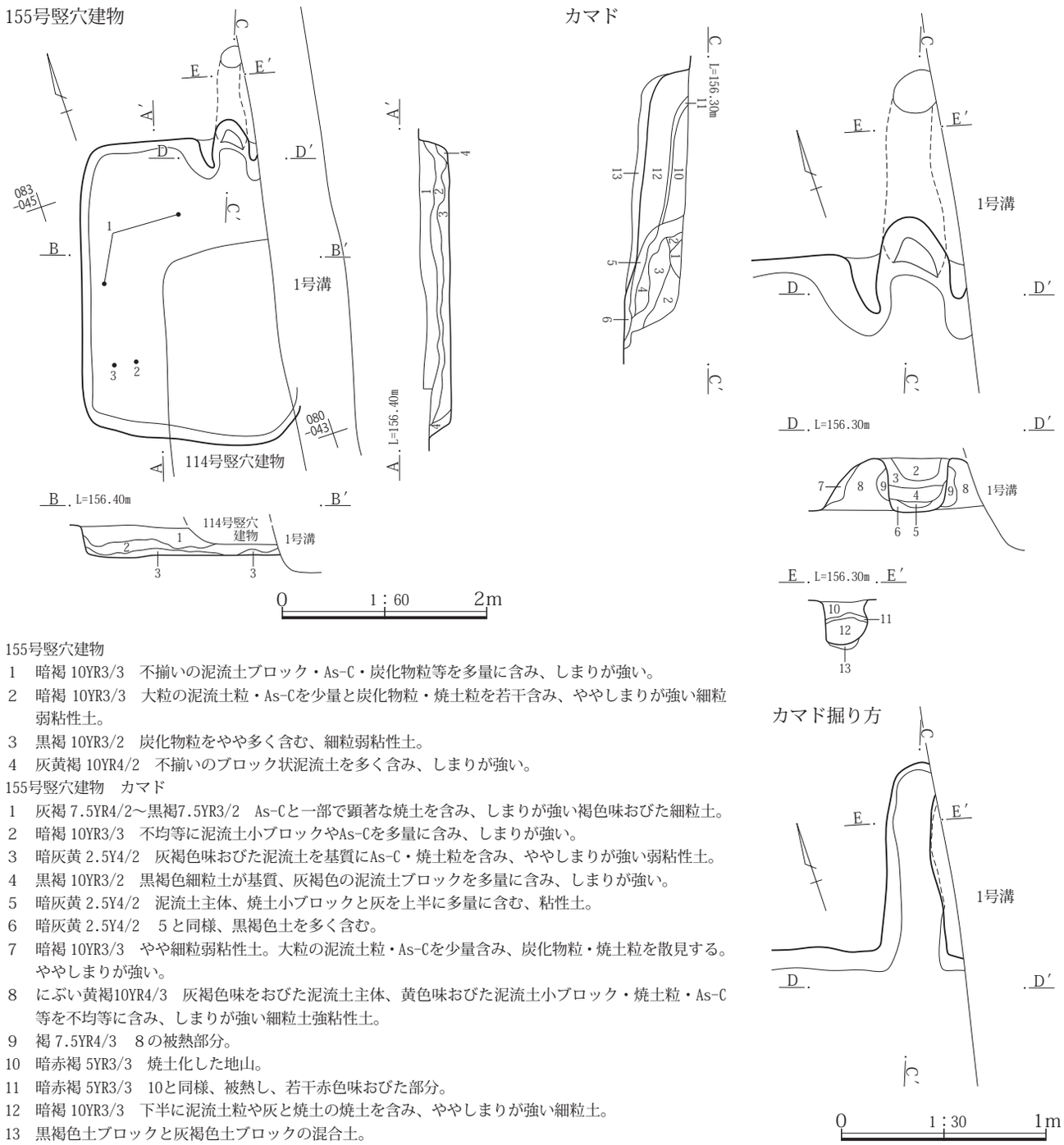
埋没状態　重複する150号竪穴建物によって埋没土の上半を欠くが、土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから、自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　ほぼ竪穴建物の四隅を対角線上結んだ線上、各



155号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土ブロック・As-C・炭化物粒等を多量に含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　大粒の泥流土粒・As-Cを少量と炭化物粒・焼土粒を若干含み、ややしまりが強い細粒弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　炭化物粒をやや多く含む、細粒弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　不揃いのブロック状泥流土を多く含み、しまりが強い。

155号竪穴建物　カマド
1　灰褐 7.5YR4/2～黒褐7.5YR3/2　As-Cと一部で顕著な焼土を含み、しまりが強い褐色味おびた細粒土。
2　暗褐 10YR3/3　不均等に泥流土小ブロックやAs-Cを多量に含み、しまりが強い。
3　暗灰黄 2.5Y4/2　灰褐色味おびた泥流土を基質にAs-C・焼土粒を含み、ややしまりが強い弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒褐色細粒土が基質、灰褐色の泥流土ブロックを多量に含み、しまりが強い。
5　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土主体、焼土小ブロックと灰を上半に多量に含む、粘性土。
6　暗灰黄 2.5Y4/2　５と同様、黒褐色土を多く含む。
7　暗褐 10YR3/3　やや細粒弱粘性土。大粒の泥流土粒・As-Cを少量含み、炭化物粒・焼土粒を散見する。ややしまりが強い。
8　にぶい黄褐10YR4/3　灰褐色味をおびた泥流土主体、黄色味おびた泥流土小ブロック・焼土粒・As-C等を不均等に含み、しまりが強い細粒土強粘性土。
9　褐 7.5YR4/3　８の被熱部分。
10　暗赤褐 5YR3/3　焼土化した地山。
11　暗赤褐 5YR3/3　10と同様、被熱し、若干赤色味おびた部分。
12　暗褐 10YR3/3　下半に泥流土粒や灰と焼土の焼土を含み、ややしまりが強い細粒土。
13　黒褐色土ブロックと灰褐色土ブロックの混合土。

第189図　155号竪穴建物遺構図

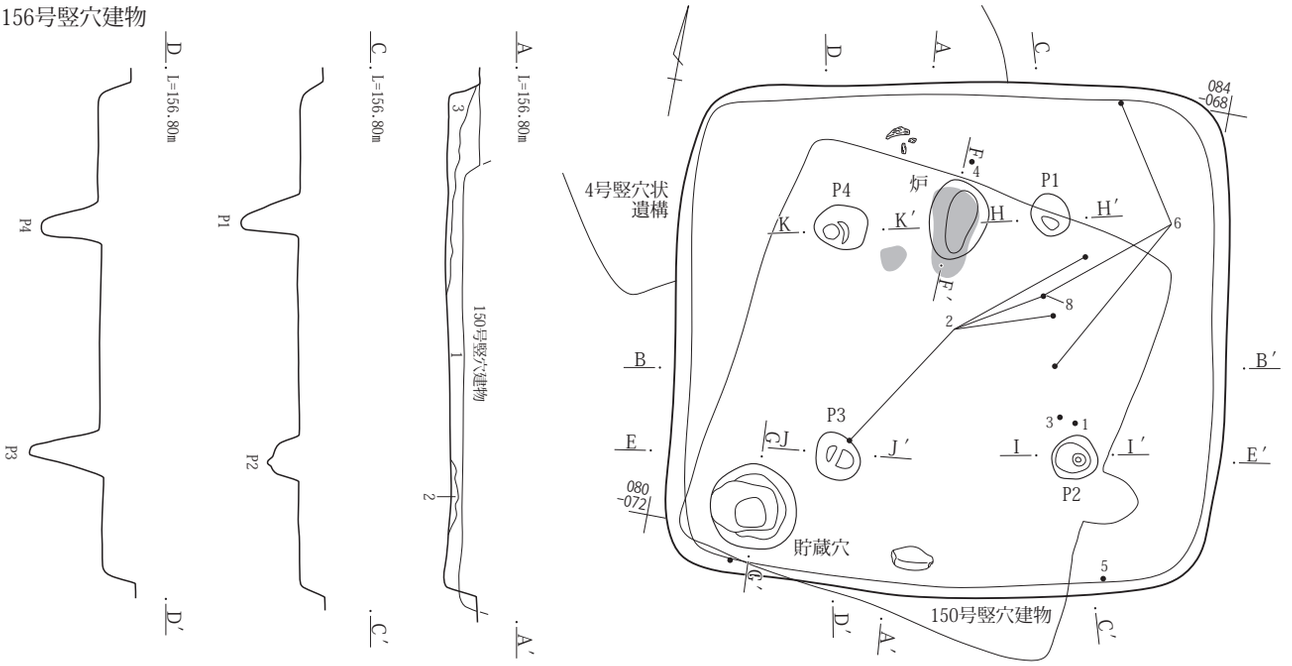
壁から1.10m～1.30mほど内側から４本を検出している。柱穴Ｐ１は楕円形を呈し、規模は径35×27㎝、深さ0.45㎝、柱穴２は円形を呈し、径37×37㎝、深さ28㎝、柱穴Ｐ３は楕円形、径41×34㎝、深さ58㎝、柱穴Ｐ４は楕円形、径42×35㎝、深さ50㎝、柱穴間距離はＰ１～Ｐ２間が1.92m、Ｐ２～Ｐ３間が1.95m、Ｐ３～Ｐ４間が1.77m、Ｐ４～Ｐ１間が1.75mを測る。各柱穴とも柱痕は確認されていない

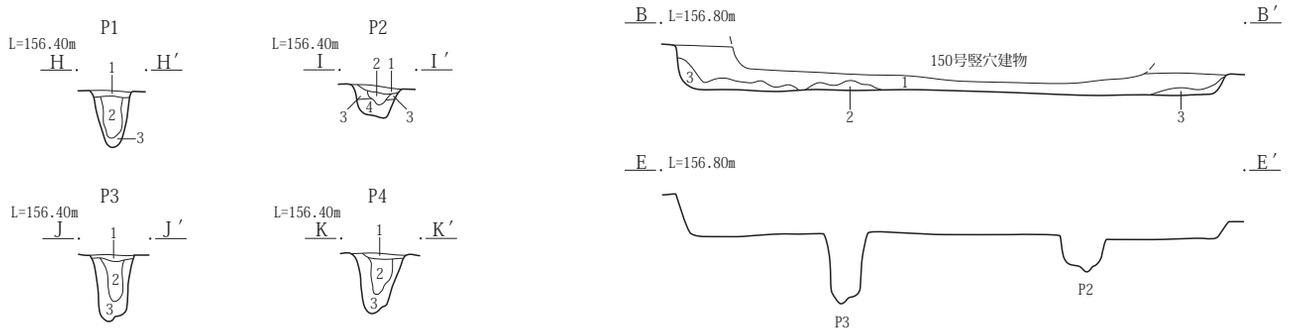
貯蔵穴　南東角から検出された。形状は円形を呈し、規模は径0.70×0.68m、深さ0.58mである。貯蔵穴内部には埋没土がＵの字状に堆積しているのが確認されている。内部から遺物の出土などは確認されていない。

その他施設　検出されなかった。

火処　柱穴Ｐ１とＰ２のほぼ中央に炉が設けられていた。形状は楕円形を呈し、規模は径0.54×0.48mで中央が５㎝ほど窪む。ほぼ全面が焼土化しており、常時使用

156号竪穴建物





0　1：60　2m

156号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/3　As-C・泥流土粒を多く含み、しまりが強いやや細粒土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土とAs-C黒色土の混土、しまりが強い弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　黒褐色土主体、不明瞭な泥流土をやや多く含む、弱粘性土。

156号竪穴建物　Ｐ１

1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含む。

156号竪穴建物　Ｐ２

1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、若干柔らかい。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土ブロックを５％含む。
4　にぶい黄褐 10YR5/4　暗褐色土を５％含む。

156号竪穴建物　Ｐ３

1　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含み、若干柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。

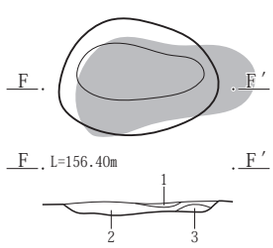
156号竪穴建物　Ｐ４

1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％、にぶい黄褐色土ブロックを10％含み、若干柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　黒褐色土を30％含む。

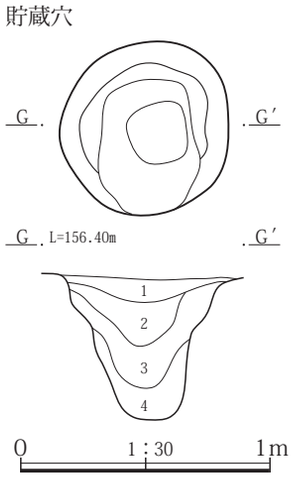
156号竪穴建物　炉

1　にぶい黄褐色 2.5YR4/4　被熱による硬化面。最下位に灰の薄層があり、二次的な火床面。
2　にぶい黄褐 5YR5/4　泥流土の多い整地土が被熱したもの、下半へ向かって漸移的に黒色味が強い。
3　黒褐 10YR3/2　灰の多く含み、ややしまりが弱い。

炉



貯蔵穴



0　1：30　1m

156号竪穴建物　貯蔵穴

1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを７％含み、やや粘性がある。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを10％含み、やや粘性がある。

第190図　156号竪穴建物遺構図

されていたことが想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・壺・甑・甕・台付甕、須恵器、灰釉陶器などが出土している。出土量は図示８点、未掲載110点と少なく、須恵器や灰釉陶器など後の混入した土器が30点ほどみられた。図示した土器はすべて床面からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土器から４世紀後半代に比定できる。

157号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37078～37082、Ｙ＝-85047～-85051に位置する。

重複関係　170号竪穴建物、178号竪穴建物、185号竪穴建物、186号竪穴建物、１号掘立柱建物、72号土坑と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物、土坑より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　北辺が南辺に比べて30㎝ほど短いが、南北に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が3.82m、南北方向が4.17mを測る。確認面から床面までの壁高は13～28㎝を測る。

床面積　12.95㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－88°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断された。

床面　若干の凹凸が見られるが、170号竪穴建物の埋没土や地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

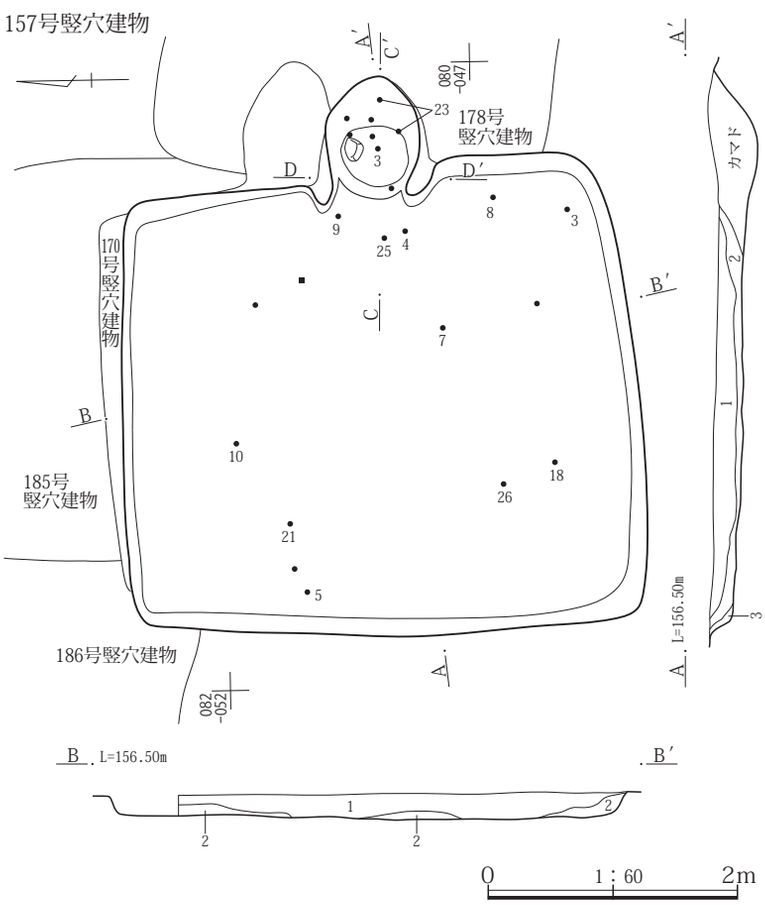
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁のほぼ中央に構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、袖は両側とも残存していた。規模は全長1.10m、幅1.07m、燃焼部幅0.55mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に存在し、煙道部は燃焼から45°ほどの角度で立ち上がる。この面は顕著な焼土化が見られ、確認部付近からは土師器甕の胴部が出土しており、この土器に煙突としての役割を持たせていたとみられる。

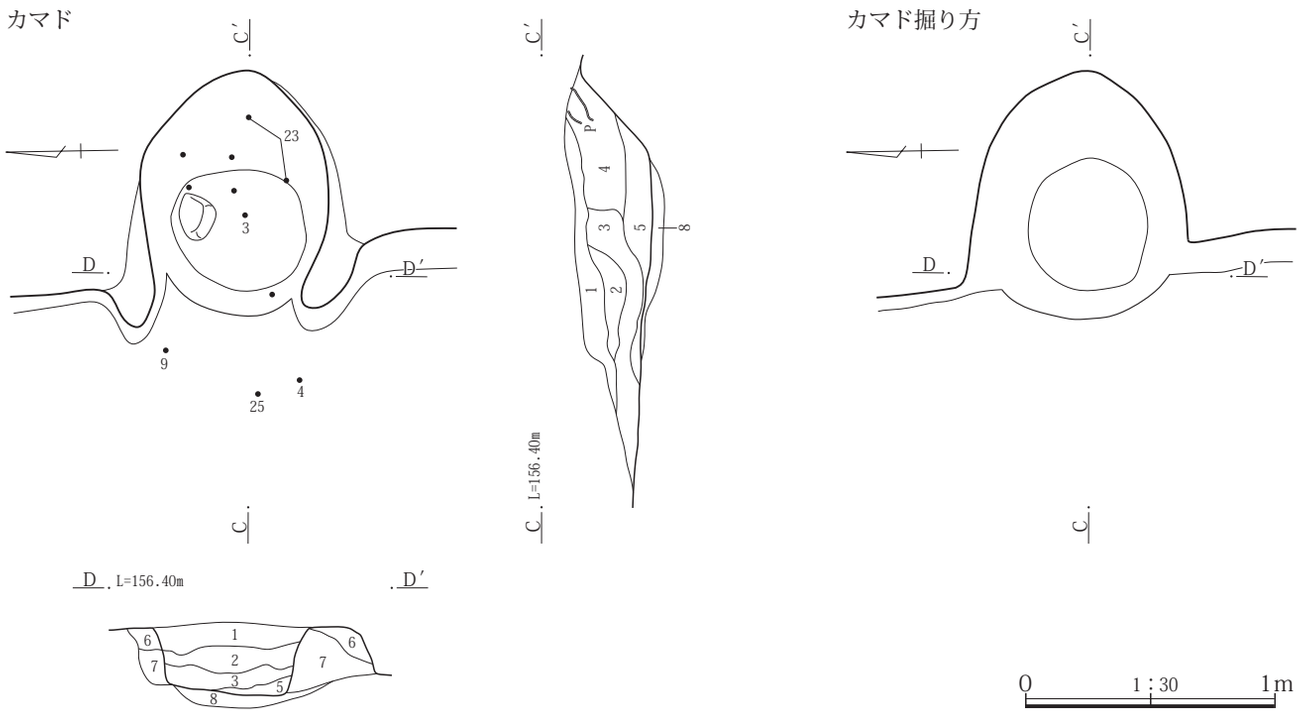
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・瓶・甕・羽釜、灰釉陶器、土製品土錘、流動滓などが出土している。このうち、２の須恵器皿、４の須恵器杯、８の須恵器椀、18の灰釉陶器椀、25の須恵器甕が床面から、３の須恵器皿、６の須恵器杯、11の須恵器椀、13の灰釉陶器皿、23の土師器甕がカマドからの出土である。なお、埋没土からの出土であるが、12の白磁は特筆できる遺物である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している須恵器皿・杯・椀、土師器甕から９世紀第４四半期に比



157号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・粒径不揃いの泥流土粒を霜降状に多量に炭化物、焼土を不均等に若干含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物・泥流土粒等を少量含む、やや細粒微粘性土。
3　暗褐10YR3/3　小ブロック状の泥流土を含み、しまりが強い弱粘性土。

第191図　157号竪穴建物遺構図（１）



157号竪穴建物　カマド
1　暗オリーブ褐 2.5Y3/3　As-C・泥流土粒・炭化物粒等含有物を多量に含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、しまりが強い細粒微粘性土でサラサラした感触。
3　灰褐 5YR4/2　焼土粗粒を多く炭化物粒、灰を含み、ややしまりが強い細粒土。
4　褐 5YR4/3　焼土粗粒を多量に含み、しまりが強い。
5　黒褐 10YR3/2～灰オリーブ 2.5Y4/2　黒褐色土や泥流土による二次的火床面整地土、焚口側は黒褐色土主体で灰、煙道側で泥流土を多く含み、ややしまりがある。
6　暗褐 10YR3/3　白色パミスを多く焼土を少量含み、しまり極めて強い粘性土。
7　暗褐 10YR3/3　６に類似、パミスはやや少なく、焼土の含有量は多い。
8　暗褐 7.5YR3/4　炭化物粒・焼土を含み、ややしまりが強い微粘性土。

第192図　157号竪穴建物遺構図（２）

定できる。なお、本竪穴建物と大部分で重複関係にある170号竪穴建物も９世紀第４四半期に比定できるが、両竪穴建物ともカマドが検出されていることから170号竪穴建物の廃絶、埋没後または埋没途中で本竪穴建物が構築されたと想定される。

158号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、X＝37083～37086、Y＝-85056～-85060に位置する。

重複関係　160号竪穴建物、177号竪穴建物、183号竪穴建物、６号竪穴状遺構と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが新しい。なお、出土遺物からみると６号竪穴状遺構との関係は本竪穴建物ほうが古い。

形状　やや歪みがみられるが、ほぼ方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は3.27m、南北方向は3.12mを測る。確認面から床面までの壁高は11～18㎝と浅い。

床面積　7.95㎡を測る

主軸方位　N－93°－Eを指す。

埋没状態　確認面から床面まで浅いが、土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山や177号竪穴建物や183号竪穴建物埋没土をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁のほぼ中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井部は失われていたが、燃焼部両袖は一部が残存していた。規模は全長0.75m、幅1.20m、

燃焼部幅0.55mを測る。煙道部は壁外に存在し、45°ほどの角度で立ち上がる。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜などが出土している。このうち、１～３の須恵器杯、７の須恵器椀が床面から、４～６の須恵器椀、８の須恵器壺、９の土師器甕がカマドからの出土である。なお、１の須恵器杯は床面からの出土であるが、その形態や底部の整形などから８世紀前半代の年代観が与えられ、本来なら本竪穴建物に共伴しないものである。こうした点から、本竪穴建物掘削時に重複関係にある177号竪穴建物に残存していた土器が混入したとみられる。

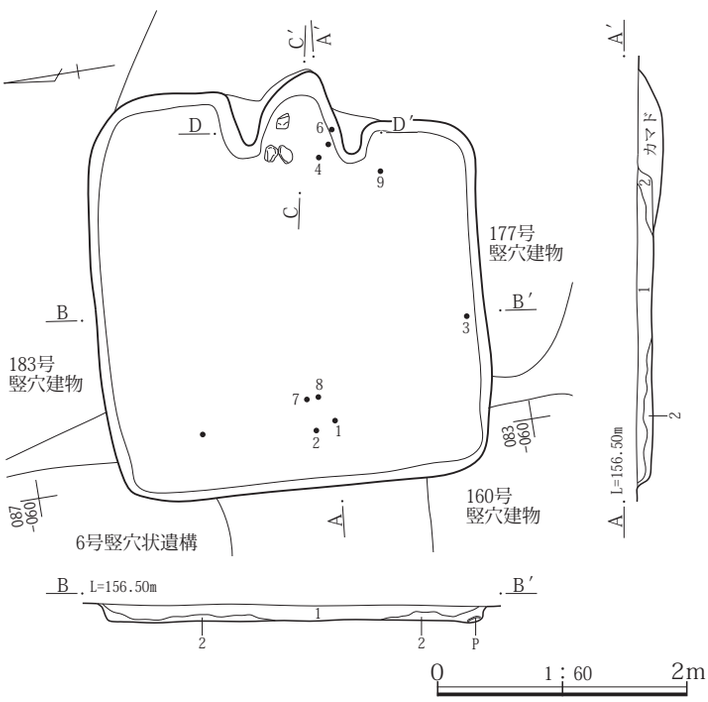
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯・椀から９世紀第３四半期に比定できる。なお、９の土師器甕は頸部から口縁部の形態から９世紀第２四半期の年代観が与えられるが、この土器がカマドでどのような役割をしていたかが不明のため、構築時期を遡らせるまでには至らなかった。

159号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の西より、Ｘ＝37088～37091、Ｙ＝−85070～−85073に位置する。

重複関係　164号竪穴建物、59号土坑と重複関係にある。新旧関係はより本竪穴建物のほうが164号竪穴建物、59号土坑より新しい。

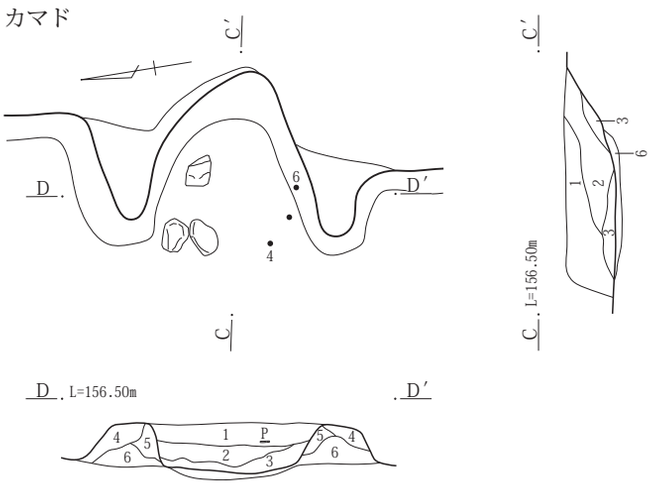
158号竪穴建物



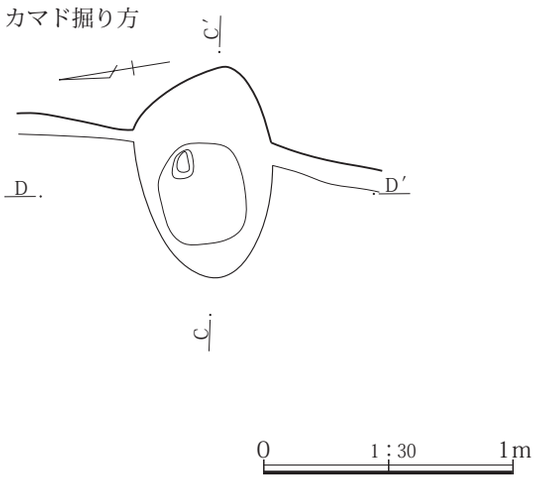
158号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状にやや多く炭化物を不均等に多く含み、しまりが強い微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　カマド前のみ焼土・炭化物粒を少量含む、細粒弱粘性土。

158号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C泥流土粒を含む、細粒弱粘性土。
2　暗褐 7.5YR3/3　不揃いの焼土・炭など含有物含み、ややしまりが強くややサラサラした感触。
3　黒褐 10YR3/2　灰を多く焼土等の含有が少ない、細粒弱粘性土でサラサラした感触。
4　黒褐 10YR3/2　細粒弱粘性土。
5　黒褐 10YR3/2　炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い細粒土微粘性土。
6　黒褐 10YR2/2　泥流土粒やAs-Cをわずかに含み、しまりが強い粘性強い細粒土。

カマド



カマド掘り方



第193図　158号竪穴建物遺構図

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は2.36m、南北方向は2.72mを測る。確認面から床面までの壁高は12～27㎝を測る。

床面積　5.52㎡を測る

主軸方位　Ｎ－98°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

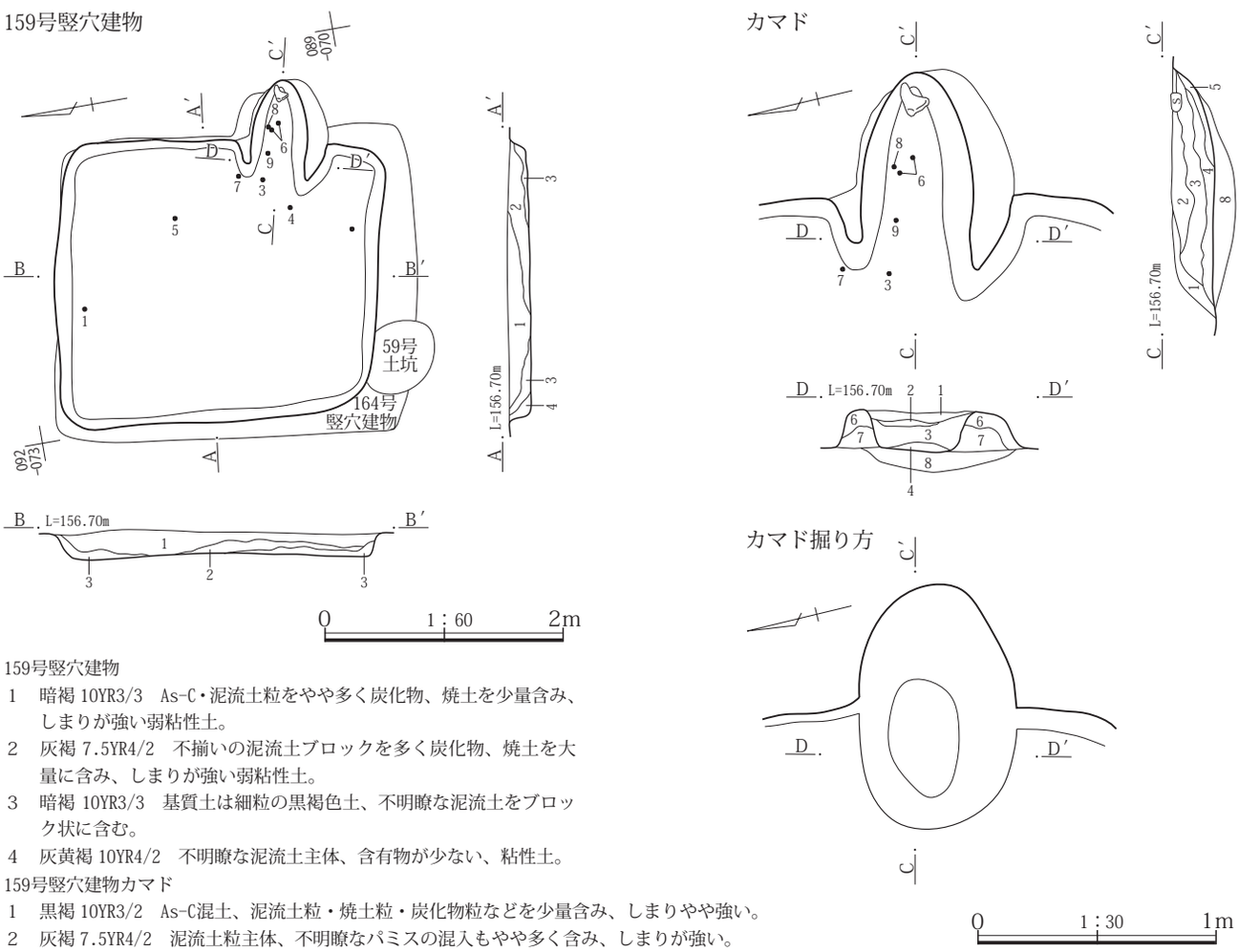
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われているが、両袖は残存していた。規模は全長が1.00m、幅が0.85m、燃焼部幅0.25mを測る。燃焼部の奥から煙道部は壁外に掘り込まれている。なお、燃焼部の天井は大部分が失われているが、一部は燃焼部内に崩落した状態で検出されている。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器皿・杯・椀・凸帯付四耳壺・甕、灰釉陶器などが出土している。このうち、１の須恵器皿、４の灰釉陶器椀、７の土師器甕が床面から、３の須恵器椀、６の凸帯付四耳壺、８・９の土師器甕、10の須恵器羽釜、11の須恵器甕胴部片がカマドから



159号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C・泥流土粒をやや多く炭化物、焼土を少量含み、しまりが強い弱粘性土。
2　灰褐 7.5YR4/2　不揃いの泥流土ブロックを多く炭化物、焼土を大量に含み、しまりが強い弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　基質土は細粒の黒褐色土、不明瞭な泥流土をブロック状に含む。
4　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土主体、含有物が少ない、粘性土。

159号竪穴建物カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、泥流土粒・焼土粒・炭化物粒などを少量含み、しまりやや強い。
2　灰褐 7.5YR4/2　泥流土粒主体、不明瞭なパミスの混入もやや多く含み、しまりが強い。
3　暗褐 7.5YR3/3　２に近いが焼土粒の顔料が少なく、しまりが強い弱粘性土。
4　にぶい赤褐 5YR4/3　不揃いの焼土粒を不均等にやや多く灰を多く含み、ボソボソした感触。
5　にぶい赤褐 5YR4/3　４に近似、含有物少なく、黒色味強い。
6　黒褐 10YR3/2　As-Cの混土。泥流土粒を少量と焼土を若干含み、ややしまりがある非粘性土。
7　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土粒ブロックや焼土粒をやや多く含み、しまりが強い細粒土。
8　暗褐 10YR3/3　ロームブロックや焼土を不均等に少量含み、ややしまりが強い。

第194図　159号竪穴建物遺構図

出土している。なお、５の灰釉陶器椀は床面より10㎝上からの出土である。図示した灰釉陶器椀はともに大原２号窯式期に比定できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している須恵器皿や土師器甕からは９世紀第４四半期に比定できるが、カマドから10の須恵器羽釜底部片や床面から大原２号窯式期の灰釉陶器椀が出土していることから廃棄時期は10世紀前半代に比定できる。

160号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37081～37083、Ｙ＝-85059～-85062に位置する。

重複関係　158号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は158号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古い。

形状　北辺に対して南辺がやや短い台形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は2.33m、南北方向は2.52mを測る。確認面から床面までの壁高は０～１㎝と浅い。

床面積　4.75㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－90°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面まで浅いため埋没状態の判断はできない。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

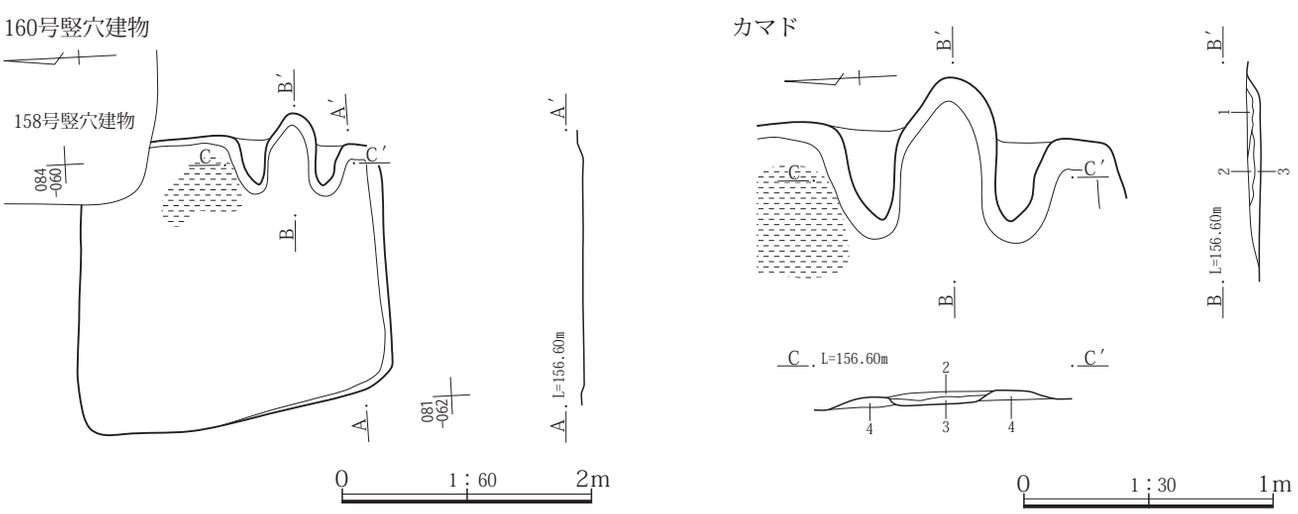
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、燃焼部両袖は残存していた。規模は全長0.67m、幅0.92m、燃焼部幅0.37mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。カマド北側には灰が0.6×0.5mほどの範囲に拡散していた。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯・椀などが出土しているが、出土量は９点とごくわずかであった。また、出土した土器は、みな小片のため図示できるものは存在していなかった。

所見　本竪穴建物の存続期間は、年代観のわかる土器が存在していないため、重複関係にある158号竪穴建物の時期である９世紀第３四半期以前としておきたい。



160号竪穴建物
埋没土　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を少量と炭化物、焼土を若干含む、細粒弱粘性土。
160号竪穴建物　カマド
１　にぶい赤褐 2.5YR5/3　２が被熱赤変した部分。上半は一部ブロック状で、下半は漸移的に赤色味が薄くなる。
２　黒褐 10YR3/2　しまりが強い細粒粘性土。
３　黒褐 10YR3/4　炭化物粒と灰を含み、しまりが強い細粒粘性土でサラサラした感触。
４　黒褐 10YR3/2　泥流土粒を少量と炭化物を若干含み、しまりが強い弱粘性土。

第195図　160号竪穴建物遺構図

161号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37084～37087、Ｙ＝-85051～-85054に位置する。

重複関係　172号竪穴建物、178号竪穴建物、183号竪穴建物、186号竪穴建物、１号掘立柱建物、73号土坑、83号土坑と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　北辺が南辺に比べてわずかに短いが、南北に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が2.34m、南北方向が3.05mを測る。確認面から床面までの壁高は12～26㎝を測る。

床面積　5.63㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－76°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断された。

床面　若干の凹凸が見られるが、186号竪穴建物の埋没土や地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、袖と煙道部は比較的良好な状態で残存していた。規模は全長1.58m、幅1.16m、燃焼部幅0.47m、煙道部長さ0.98mを測る。燃焼部の奥側から煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部では煙道部の手前中央に支脚として使用されたとみられる棒状礫が据えられたままの状態で検出されている。煙道部は側壁に径15㎝から20㎝の偏平な礫を立てるように据え付け、その上を同様な偏平な礫で塞いでいた。なお、天井部の礫は煙道部に土砂が流れ込んだ後にずれ落ちたとみられる。袖は粘性のある黒褐色土で造られているが、左袖内には５の須恵器椀、右袖内には３・４・９の須恵器無台椀・椀が埋め込まれていた。これらの土器は本竪穴建物の存続時期と同じ年代観が与えられることから補強とカマド祭祀の可能性が窺える。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。このうち、２の須恵器無台椀、７の須恵器椀、11の灰釉陶器椀が床面から、１・３の須恵器無台椀、４～６・９の須恵器椀がカマドからの出土である。なお、カマド煙道部上位から169号土坑９と接合した須恵器台付鉢片が出土しているが、出土位置を考慮して169号土坑の遺物として取り扱った。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器無台椀・椀から10世紀第１四半期に比定できる。

162号竪穴建物

位置　１区調査区東部、Ｘ＝37087～37092、Ｙ＝-85050～-85052に位置する。重複関係にある15号竪穴建物などによって多くを欠き、北西部だけが残存するだけである。

重複関係　15号竪穴建物、３号溝、169号土坑、87号土坑と重複関係にある。新旧関係は87号土坑より本竪穴建物のほうが新しく、重複する他の遺構より古い。

形状　残存範囲より長方形または方形を呈すると想定される。

規模　残存範囲では主軸方向の南北方向が3.95m、東西方向が3.10mを測る。確認面から床面までの壁高は24～42㎝を測る。

床面積　残存範囲内で4.73㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－44°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断された。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

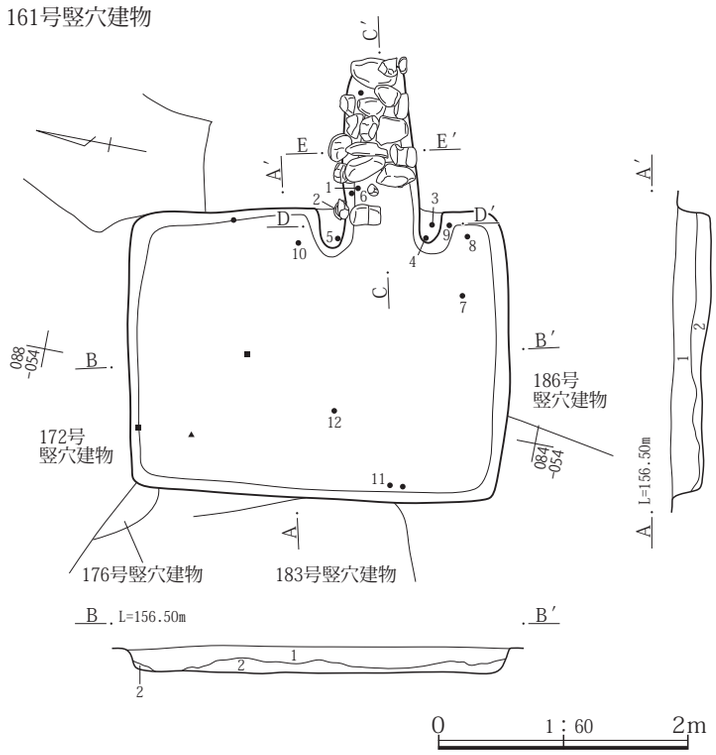
貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　北壁に構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は壊されてごくわずかな痕跡が残存する程度であったが、両袖は比較的良好な状態で残存していた。規模は全長0.87m、幅1.10m、燃焼部幅0.46m、煙道は壁外に延びると見られる。燃焼部火床は焼土化しておらず、あまり使用されなかった可能性が窺えた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・皿・杯・椀・甕などが出土しているが、大部分を重複関係にある竪穴建物によって欠くため出土量は図示３点、未掲載64

161号竪穴建物



161号竪穴建物

1　灰黄褐 10YR4/2　灰色味をおびた不揃いの泥流土ブロックを多量にAs-C・炭化物粒などを多く含み、しまりが強い細粒微粘性土。

2　暗褐 10YR3/3　細粒粘性土、不明瞭な泥流土を少量含み、ややしまりが強い。

161号竪穴建物居　カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒・微細な焼土粒や炭化物粒をやや多く含み、しまりが強い微粘性土。

2　黒褐 10YR3/2　灰を多く含み、ややしまりが弱い細粒土。

3　黒褐 10YR2/2　黒色灰を含み、しまりが強くサラサラした感触。

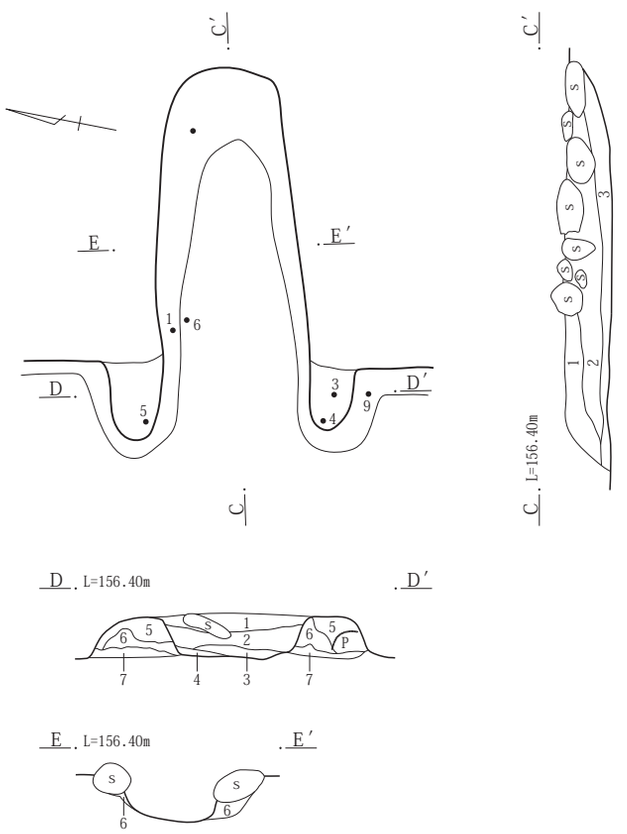
4　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土、上半は小ブロック状、下半は被熱による赤変火床面で、漸移的に赤色が薄くなっていく。

5　黒褐 10YR3/2　泥流土粒・As-Cを霜降状に含み、ややしまりが強い。

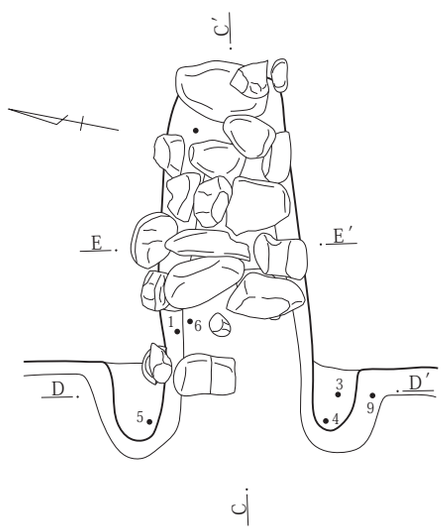
6　黒褐 10YR2/2　炭化物若干含む、細粒粘性土。

7　黒褐 2.5Y3/2　泥流土粗粒を若干含み、しまりが強い粘性土。

カマド（1）



カマド（2）



0　1：30　1m

第196図　161号竪穴建物遺構図

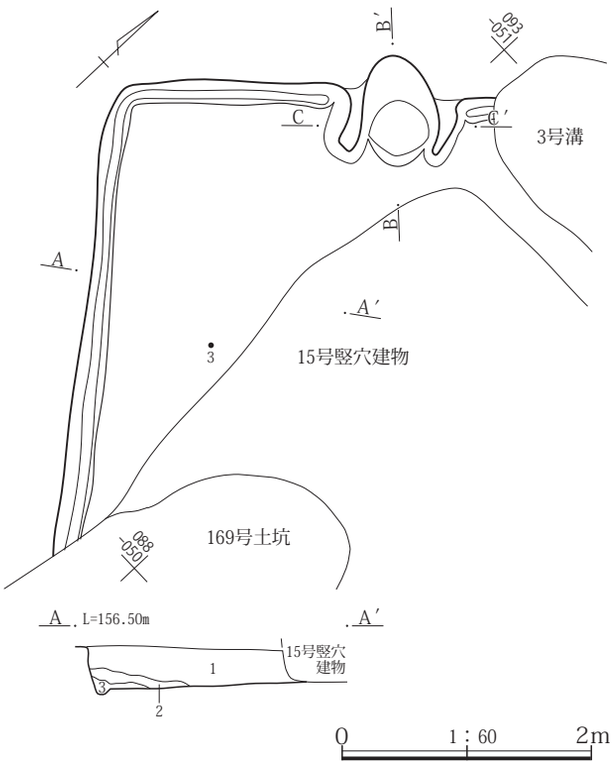
点と少ない。このうち、３の須恵器無台椀が床面から、１の須恵器杯蓋と２の須恵器盤がカマドからの出土である。なお、１・２は８世紀前半、３は10世紀後半の年代観が与えられる。ともに共伴すると判断できる位置からの出土であるが、カマドからの出土を重視し、１・２が共伴すると判断した。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した須恵器杯蓋・盤から８世紀前半に比定できる。

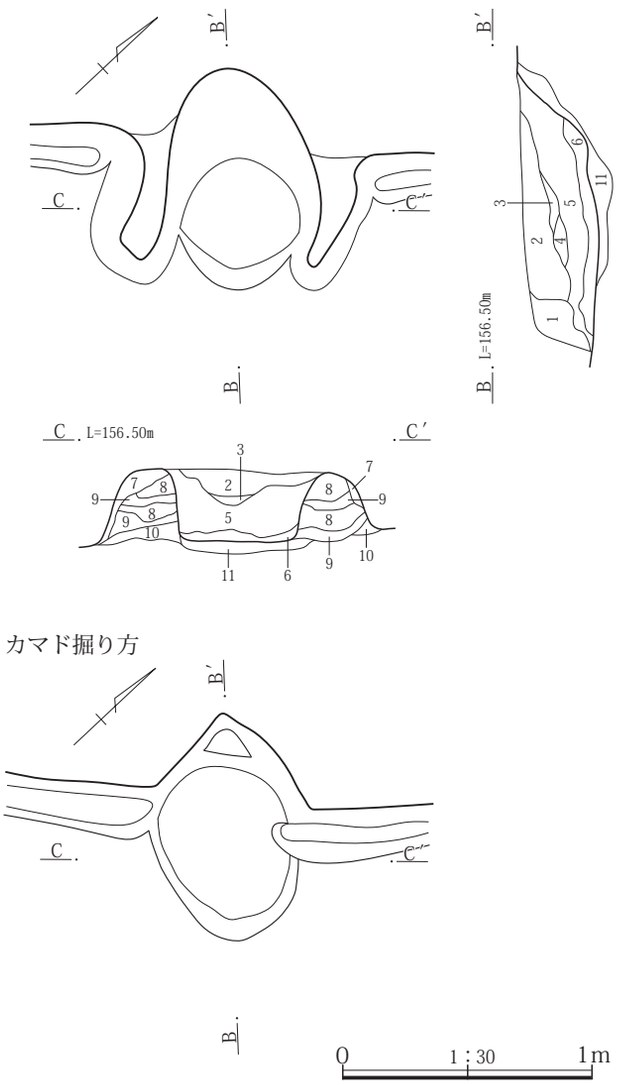
163号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37074～37076、Ｙ＝-85049～-85051に位置する。重複関係にある153号竪穴建物によって東側を欠く。

162号竪穴建物



カマド



162号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状に多量と炭化物若干含み、しまりが強い。泥流土小ブロックが不均等に固まって堆積しており、人為的な埋め戻しの可能性あり。

2　黒褐 10YR2/2　泥流土粒を少量含む以外、含有物少ない、細粒弱粘性土。

3　にぶい黄褐 10YR4/3　２と同じ。泥流土小ブロックを多量に含む、粘性土。

162号竪穴建物　カマド

1　暗褐 2.5YR3/3　As-C・泥流土粒を不均等にやや多く含み、ややしまりが強い。下半には凝灰岩片を含んでおり、後世のピット状の攪乱の可能性。

2　暗灰黄 2.5Y4/2　黒褐色土と泥流土粒の混土、焚口側上面に焼土やや多く含み、しまりやや強い弱粘性土。

3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体、しまりが強い。

4　黒褐 10YR3/2　焼土・灰を少量含む、やや細粒微粘性土。

5　灰黄褐 10YR4/2　粗い泥流土粒と黒褐色土の混土、炭化物、焼土を少量含み、ややザラザラした感触。

6　黒褐 10YR3/2　黒色味強い細粒土と粗粒土小ブロックの混土。灰を多く含み、ややしまりがある弱粘性土。

7　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状に炭化物を若干多量含み、しまりが強い。

8　灰黄褐 10YR5/2　泥流土と黒褐色土の混土、西側では焼土を不均等に含み、しまりごく強い弱粘性土。

9　暗褐 10YR3/3　黒褐色土と泥流土の混土、黒褐色土の比率が高い。しまりが強い弱粘性土。

10　灰黄褐 10YR4/1　灰色味おびた泥流土に黒褐色土の灰が不均等に含む、しまりが強い。

11　暗褐 10YR3/3　焼土、炭化物粒を含むが、煙道側では含有物少ない。ややしまりが強い弱粘性土。

第197図　162号竪穴建物遺構図

重複関係　153号竪穴建物、167号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は153号より本竪穴建物のほうが古いが、167号竪穴建物より新しい。

形状　東西方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は残存部分で1.80m、南北方向が1.77mを測る。確認面から床面までの壁高は37～42㎝を測る。

床面積　残存範囲内で2.64㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－98°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積とレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

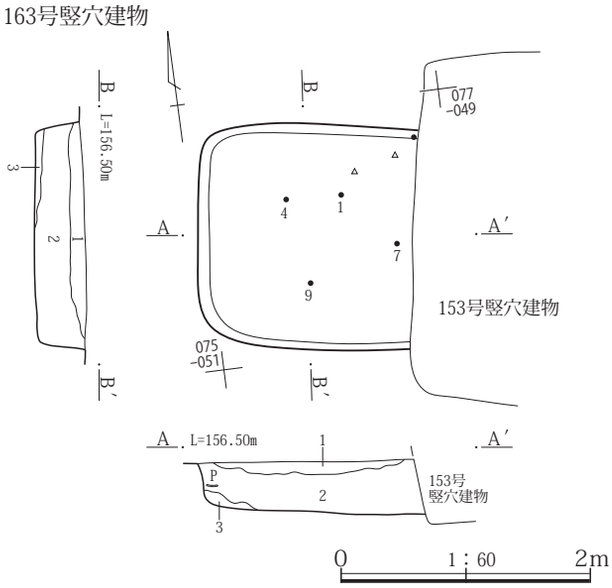
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　本竪穴建物の残存範囲では検出されなかった。なお、出土遺物から８世紀代に比定できる。この時期の竪穴建物の火処としてはカマドが構築されているのが一般的であるが、本竪穴建物は遺構の規模からみても火処が構築されなかった可能性が高い。

163号竪穴建物



163号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状にやや多く含み、しまりが強い微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状にやや多く炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い微粘性土。
3　灰黄 10YR4/2　泥流土小ブロックを多量に灰を多く含み、ややしまりが弱い粘性土。

第198図　163号竪穴建物遺構図

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・瓶・甕・羽釜、灰釉陶器などが出土している。このうち、１の須恵器杯蓋が床面から、４の須恵器杯が床面より13㎝上、９の須恵器無台椀が13㎝上、７の須恵器皿が17㎝上からの出土である。図示した土器では、１～５が８世紀後半代、６・７が９世紀後半代、８・９が10世紀後半代の年代観が与えられ、出土した土器に幅広い年代観がみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、前記のように幅広い年代観がみられるが、床面から出土した須恵器杯蓋と同時期に伴うと判断できる２～５の須恵器杯・椀から８世紀後半代に比定したい。

164号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の西より、Ｘ＝37088～37091、Ｙ＝-85070～-85073に位置する。大部分を重複関係にある159号竪穴建物によって欠き、南辺側と西辺側のごくわずかな範囲が残る。

重複関係　159号竪穴建物、59号土坑と重複関係にある。新旧関係は159号竪穴建物、59号土坑より本竪穴建物のほうが古い。

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は2.53m、南北方向は2.83mを測る。確認面から床面までの壁高は12～21㎝を測る。

床面積　5.91㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察はごく狭い範囲しか行うことができなかったが、壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　残存範囲では地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

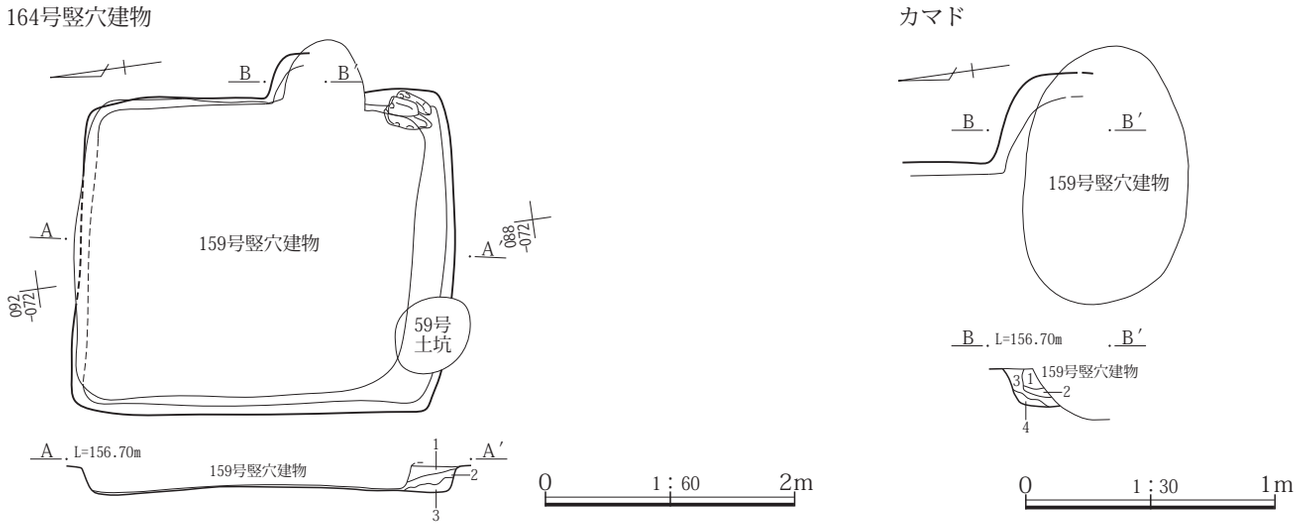
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　159号竪穴建物カマドの北側に燃焼部の左側がわずかに残存した。残存状態や規模は明確ではない。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕など



164号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを霜降状に泥流土細粒をやや多く含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/1　ややしまりが強い細粒弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　灰色味をおびた泥流土と黒褐色土の混土、ややしまりがある弱粘性土。
164号竪穴建物　カマド
1　灰褐 7.5YR5/2　焼土小ブロック・灰を不均等に多量含む、細粒土。
2　灰褐 7.5YR4/2　焼土粒・灰を少量含む、ややしまりがある細粒土。
3　にぶい黄褐 5YR5/3　被熱による赤変部分。外側へ向かって漸移的に赤色味は薄くなっている。４の赤変したものか。
4　暗褐 10YR3/4　焼土粒を少量含み、しまりの弱い細粒土。

第199図　164号竪穴建物遺構図

が出土しているが、重複関係にある竪穴建物によって大部分を欠くため図示できる土器は残存せず、未掲載も84点と少なかった。なお、南東角際に長さ25～40㎝、径15㎝ほどの棒状礫が３個体積まれた状態で出土している。図示できるものは存在していなかったが、須恵器杯・椀は底部が回転糸切り無調整で還元焔焼成によるものが主体を占めていた。

所見　本竪穴建物の存続期間は、図示できる遺物が出土していないが、前記のような須恵器杯・椀が主体を占めており、口縁部片も外反がみられない。こうした出土遺物の様相から本竪穴建物の存続時期は９世紀前半から中葉に比定できる。

165号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37090～37094、Ｙ＝-85065～-85069に位置する。

重複関係　175号竪穴建物、76号土坑、121号ピット、122号ピットと重複関係にある。また、174号竪穴建物とは北辺で接する位置関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが175号竪穴建物より新しく、76号土坑より古い。なお、174号竪穴建物、ピットとの新旧関係は明確ではない。

形状　主軸方向の東西方向がやや短い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が3.77m、南北方向が3.94mを測る。確認面から床面までの壁高は24～52㎝を測る。

床面積　11.78㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－103°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断された。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

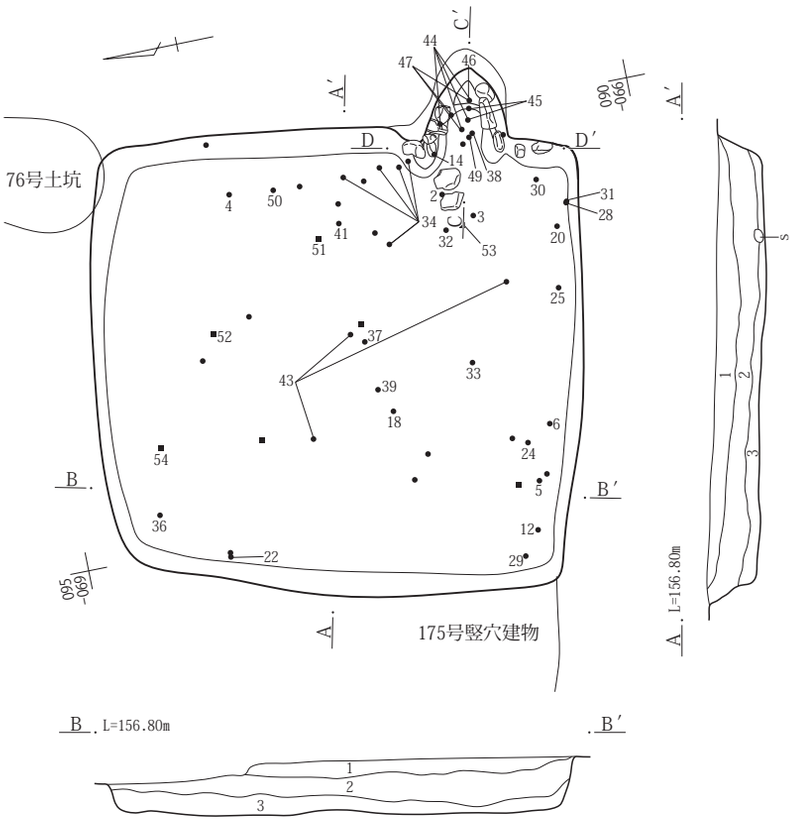
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

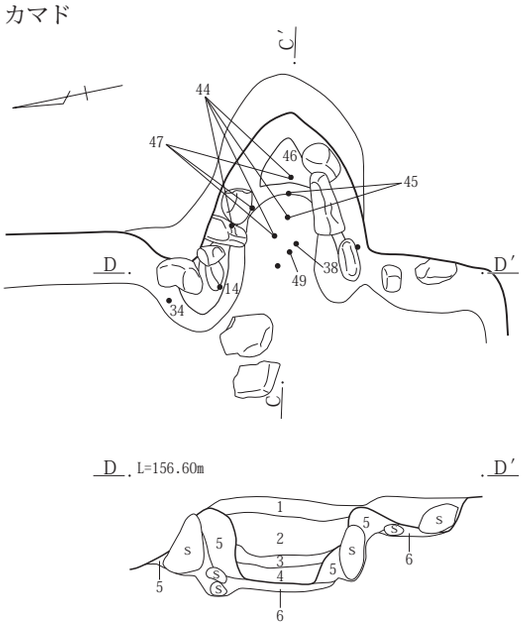
火処　東壁の南東角寄りに構築されている。残存状態は竪穴内ではカマドの痕跡は左袖がわずかに残る程度で、焚口と燃焼部の天井、右袖は確認できなかったが、壁外で燃焼部、煙道の一部が確認できた。なお、壁外に掘り込まれている燃焼部、煙道部の天井部も失われていた。規模は全長0.90m、幅0.90m、燃焼部幅0.60mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部の側壁には板状の礫を立てかけるように据え

165号竪穴建物

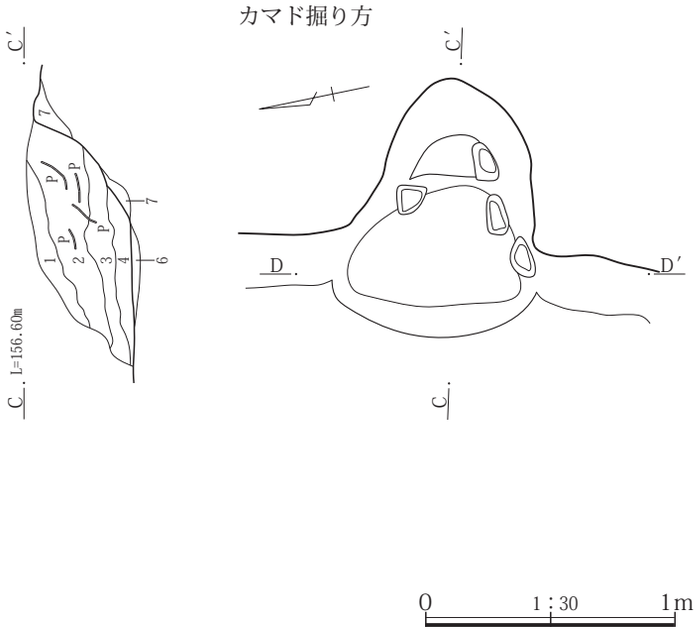


165号竪穴建物
1　暗オリーブ褐 2.5Y3/3　泥流土ブロック、As-Cを多量に炭化物、焼土を不均等に含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物粒・焼土粒をやや多く含み、やや砂粒の弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　２に近似。含有物が少なく、しまりが強い。

カマド



カマド掘り方



165号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　竪穴建物２に近い。
2　黒褐 10YR3/2　泥流土・焼土・灰を不均等に少量含み、ややしまりが強い細粒土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土粒と黒褐色土の混土、下半で炭化物をやや多く含み、ややしまりが強い被熱焼土。
4　にぶい赤褐 5YR4/3～黒褐10YR2/2　黒色灰多く含み、ややしまりが強い。
5　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土、しまりが強い。
6　黒褐 10YR3/2　炭化物粒・焼土粒を不均等に少量含み、ややしまりが弱い細粒土。
7　黒褐 10YR3/2　６に近似、含有物さらに少ない。

第200図　165号竪穴建物遺構図

てあった。また、燃焼部と煙道部の間には10㎝ほどの段が設けられていた。燃焼部から煙道部にかけては43～46の土師器甕が出土している。これらの甕は煮沸用だけでなく煙道部の煙突に使用されたとみられる。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器皿・耳皿・杯・椀・鉢・羽釜・甕、灰釉陶器皿・椀・長頸壺・大型短頸壺、鉄製品刀子、流動滓などが出土している。大部分は埋没土の中位から上位にかけてからの出土であったことから、竪穴建物廃絶後に周囲から投棄された可能性が窺える。なお､本竪穴建物に伴うものとしては２の須恵器杯、20・22・24・25・29・31・32の須恵器椀、41の灰釉陶器長頸壺、42の須恵器長頸壺、50の須恵器甕、52の刀子が床面から、34の須恵器有鍔台付鉢(火舎)、44～47の土師器甕がカマドから出土しており該当する。なお、カマドからは16・17の須恵器椀、38の灰釉陶器椀、49の須恵器甕も出土しているが、カマド上位からの出土のため確実性に乏しい。また、34の須恵器有鍔台付鉢(火舎)はカマドや床面上９㎝からの出土であるが、破片のうち一片は149号竪穴建物から出土している。39の灰釉陶器椀も竪穴建物中央の床面より16㎝ほど上から出土している。この椀は1/3ほどの破片であるが、接合した小片には174号竪穴建物南西部から出土した小片と接合している。43の灰釉陶器大型短頸壺も床面上10～19㎝上からの出土であるが、この他に161号竪穴建物や174号竪穴建物、３号溝からも破片が出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に本竪穴建物に共伴すると考えらるカマドより出土している土師器甕から、10世紀第２四半期に構築され、10世紀第３四半期にまで存続していたと判断できる。

166号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37074～37078、Ｙ＝-85044～-85047に位置する。重複関係にある153号竪穴建物によって西南部を欠く。

重複関係　153号竪穴建物、171号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は153号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古いが、171号竪穴建物より新しい。

形状　南北に長い台形状を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は残存部分で2.28m、南北方向が3.83mを測る。確認面から床面までの壁高は23～35㎝を測る。

床面積　6.24㎡を測る。

主軸方位　北辺の方向を主軸方向とみるとＮ－98°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積とレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが､両袖は残存していた。規模は全長が0.78m、幅が1.03m、燃焼部幅0.33mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などが出土している。このうち、７の須恵器無台椀が床面から、10の須恵器盤と13の須恵器壺の胴部片、14の土師器甕がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器無台椀やカマドから出土した土師器甕から９世紀第２四半期に比定できる。

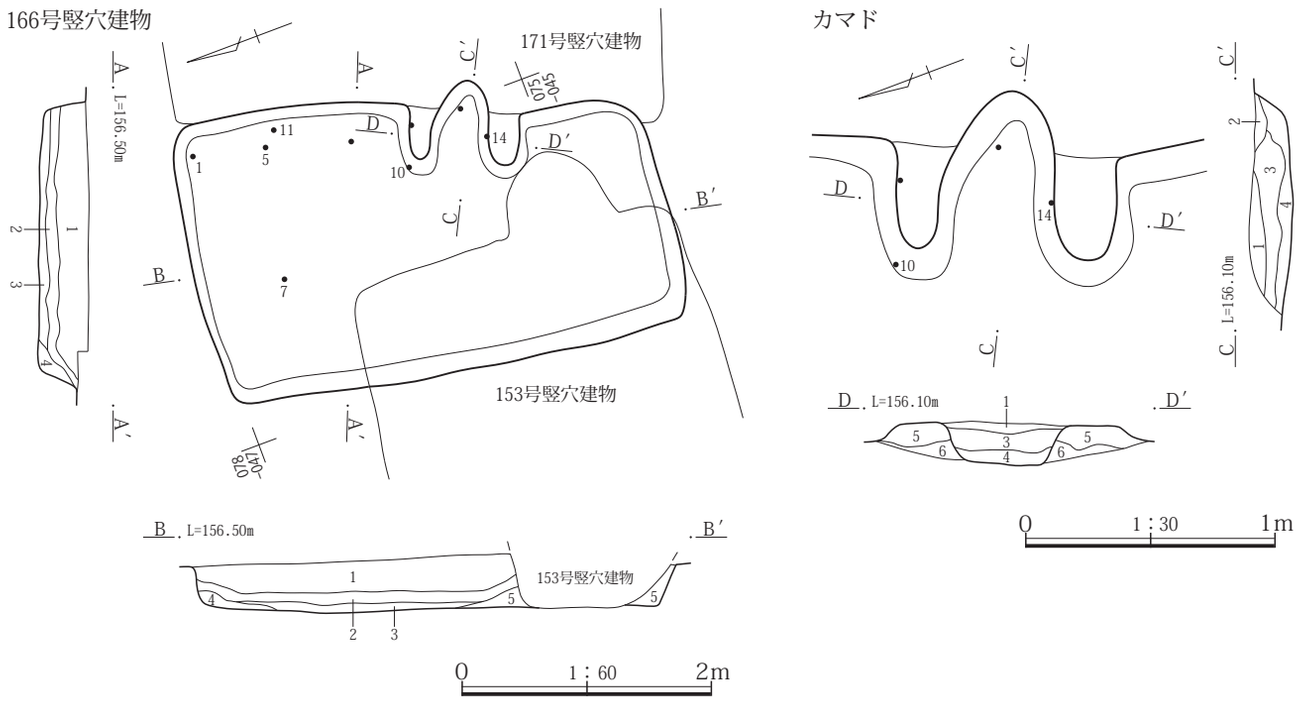
167号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37073～37077、Ｙ＝-85047～-85052に位置する。重複関係にある153号竪穴建物、163号竪穴建物によって東辺側から中央部を欠く。

重複関係　153号竪穴建物、163号竪穴建物、181号竪穴建物、80号土坑、151号ピットと重複関係にある。新旧関係は153号竪穴建物、163号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古いが、181号竪穴建物、80号土坑、151号ピットより新しい。

形状　東西方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は残存部分で2.28m、南北方向が3.83mを測る。確認面から床面までの壁高は23～35㎝を測る。



166号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を２％、φ１～３㎜の褐色土ブロックを２％、φ１～２㎜の焼土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを３％、炭化物片を１％含む。
3　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを３％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。
5　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を２％、φ１㎜の焼土ブロックを１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
166号竪穴建物　カマド
1　暗褐 7.5YR3/3　As-C・焼土・炭化物粒を含み、しまり強い。下側は焼土や灰の多い薄層が互相状に堆積していて、上面竪穴建物の床面の可能性。
2　暗褐 5YR4/4　焼土粗粒のかたまり、下半に灰が多く堆積。
3　暗褐 10YR3/3　炭化物粒を不均等に、煙道側で焼土粒、焚口側で泥流土を含み、ややしまりが強い細粒土。
4　暗褐 10YR3/3　土質は３に近い。煙道側で大粒焼土粒を多く灰を多く含む、しまりの強い弱粘性土でサラサラした感触。
5　黒褐 10YR3/2　泥流土粒・As-Cを不均等に含み、ややしまりがある微粘性土。
6　暗褐 10YR3/3　炭化物粒・泥流土ブロックを少量含み、ややしまりがある細粒微粘性土。

第201図　166号竪穴建物遺構図

床面積　推定で11.48㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－104°－Ｅを指す。

埋没状態　竪穴中央部を欠くため詳細は不明であるが、土層断面の観察では壁際の三角堆積とレンズ状の堆積の様相が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　南東角を除く各壁下から検出されている。規模は幅が15～20㎝、深さ５～10㎝である。

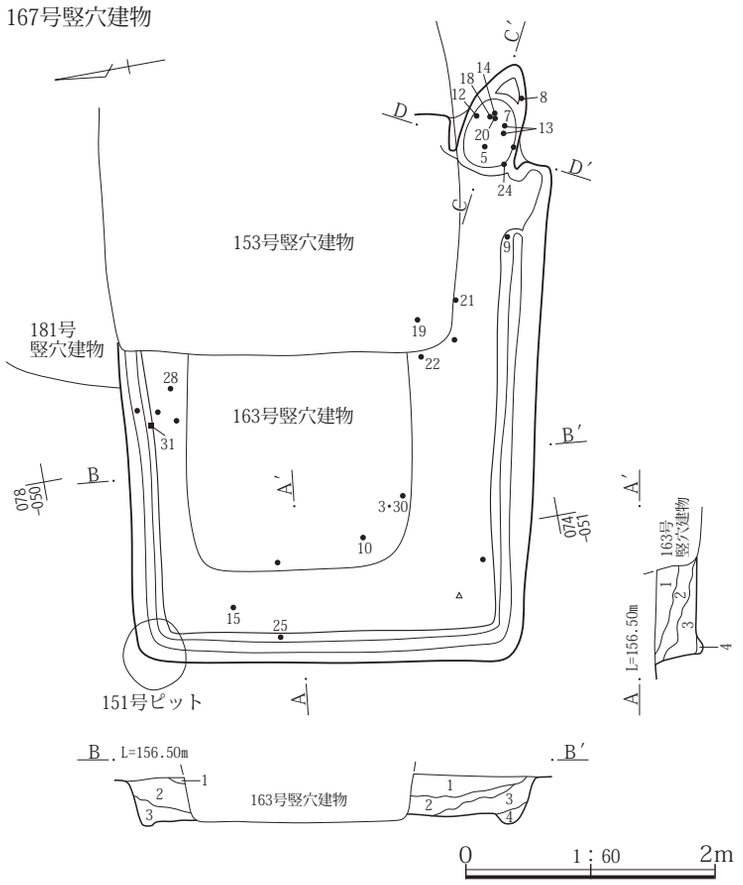
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

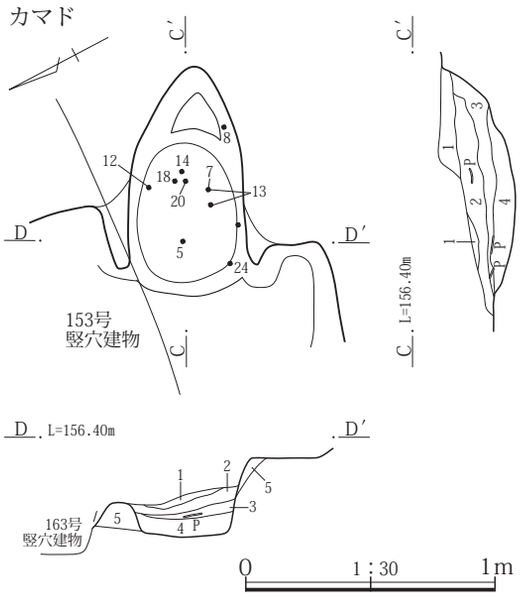
その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.93m、幅が0.80m、燃焼部幅0.47mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部と煙道部の間には７㎝の段が設けられている。カマド内部からは須恵器杯が９個体と須恵器など多くの土器が出土している。しかし、出土状態からは構築材としての使用や祭祀などの様相は窺うことができなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・瓶・甕、灰釉陶器、鉄製品刀子などが出土している。こ



167号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状に含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　南側で灰をやや多く焼土粒・炭化物粒を少量含み、粒子やや細かな微粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　泥流土ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い細粒弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　４と不揃いの泥流土粒の混土、ややしまりが強い。



167号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C・焼土粒・炭化物粒を霜降状に少量含み、細粒土。
2　黒褐 10YR3/2　上半および燃焼部で灰や炭化物粒を多く焼土を含み、ややしまりが弱い細粒土 。
3　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多く焚口付近で焼土含み、しまりが弱くサラサラした感触。
4　暗赤褐 5YR3/3　焼土ブロックを多く含み、ややしまりが強い。
5　暗褐 10YR3/4　焼土粒、炭化物を多く含み、ややしまりが強い弱粘性土。

第202図　167号竪穴建物遺構図

のうち、３の須恵器杯が床面から、25の須恵器高杯（高盤）が壁溝から、４・５・７・８・12～14・18・20の須恵器杯、24の須恵器盤がカマドからの出土である。28・30の灰釉陶器長頸壺、須恵器椀は混入したものである。なお、カマドから出土した須恵器杯は底部切り離し技法に回転ヘラ起こしと回転糸切りの両方をみることができるが、形態的には底径/口径比が両技法とも55～73を示しており同時期の年代観が与えられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドや床面から出土した須恵器杯から８世紀第３四半期に比定できる。

168号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37079～37082、Ｙ＝-85054～-85057に位置する。

重複関係　147号竪穴建物、177号竪穴建物、１号掘立柱建物、55号土坑、56号土坑、62号土坑、64号土坑、70号土坑、75号土坑と重複関係にある。新旧関係は177号竪穴建物や１号掘立柱建物、64号土坑、70号土坑、75号土坑より本竪穴建物のほうが新しいが、他の重複関係にある遺構よりは古い。

形状　東西方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の南北方向は2.88m、東西方向は3.61mを測る。確認面から床面までの壁高は16～40㎝である。

床面積　8.31㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－13°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

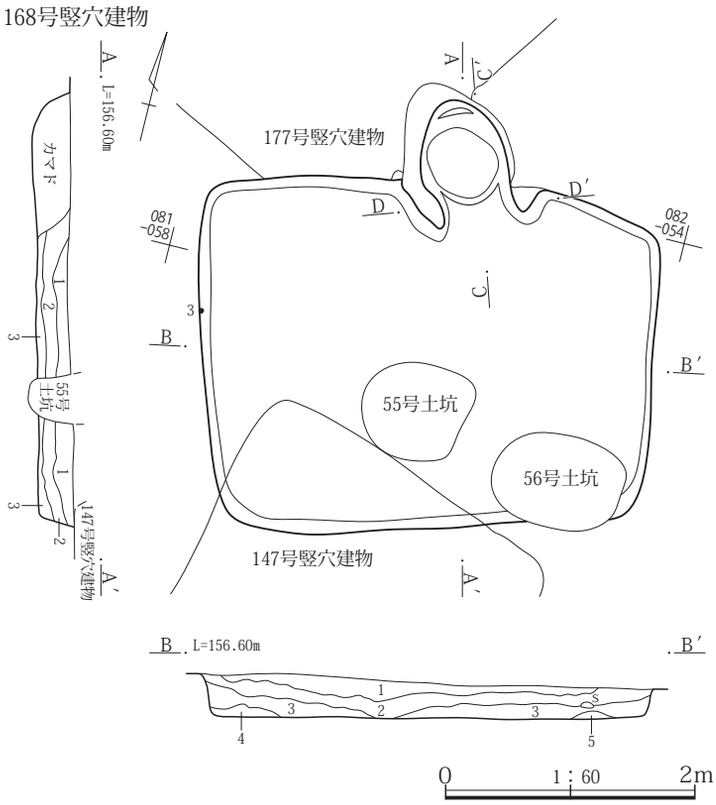
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁のほぼ中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、燃焼部両袖は一部が残存していた。規模は全長1.30m、幅1.27m、燃焼部幅0.52mを測る。燃焼部の大半と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部と煙道部の間には13㎝ほどの

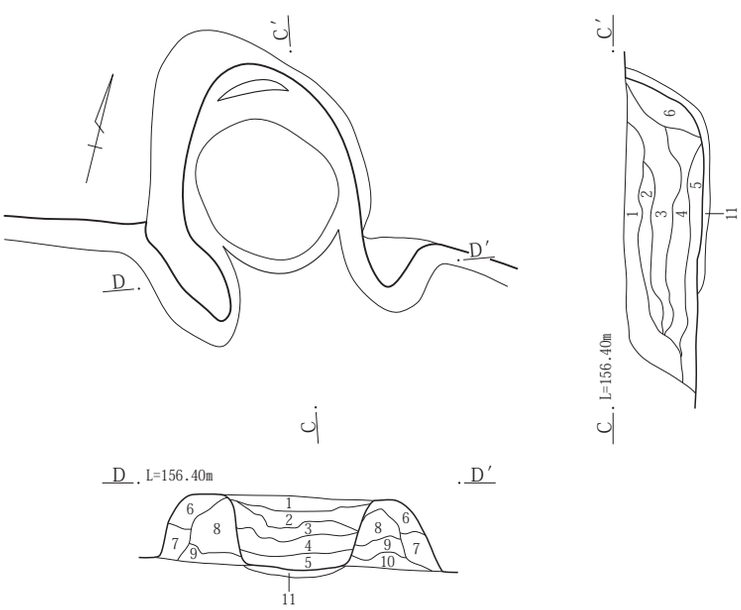
168号竪穴建物



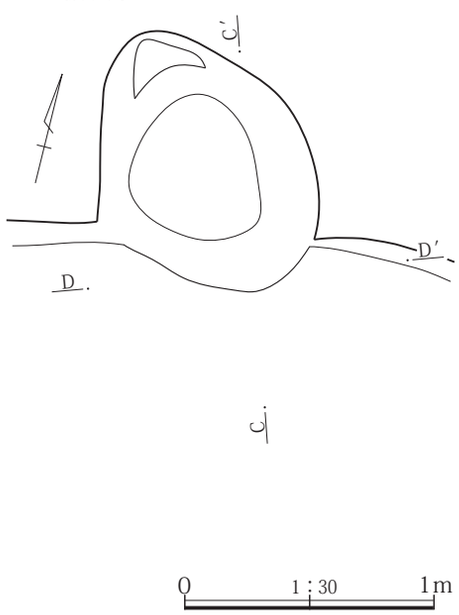
168号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒をやや多く含み、しまりが強いやや細粒土。
2　黒褐 10YR2/3　泥流土粒を含み、しまりが強い細粒弱粘性土。
3　暗褐 7.5YR3/3　泥流土粒を多く炭化物粒、焼土粒を少量含む、細粒粘性土。
4　黒褐 10YR2/2　含有物少量の粘性土。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土小ブロック主体、しまりが強い粘性土。

168号竪穴建物　カマド
1　暗褐 7.5YR3/3　As-C・不揃いの泥流土を多量に不揃いの焼土を焚口側と燃焼部中央付近にやや多く含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土ブロックと焼土ブロックを燃焼部付近に含み、ややしまりが強い細粒微粘性土。
3　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土ブロックと黒褐色土の混土、ややしまりが弱い弱粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　焼土や泥流土の小ブロックと灰を含み、ややしまりが弱い細粒土でややサラサラした感触。
5　暗褐 10YR3/3～2.5Y4/2　ややしまりが強い粘性土。
6　暗褐 10YR3/3　竪穴建物１と同様、炭化物を少量含み、しまりの強い土。
7　灰黄褐 10YR4/2　竪穴建物４に近い、大粒泥流土ブロックを多く含み、しまりが強い。
8　黒褐 10YR2/2　東袖は含有物ごく少なく、西袖でやや大粒泥流土粒を含み、しまりが強い砂粒粘性土。
9　暗褐 7.5YR3/3　土質は８に近いが、不揃いの焼土粒を含む。
10　にぶい黄褐　10YR4/3　泥流土小ブロックと黒褐色粒性土の混土、しまりが強い。
11　黒褐 10YR3/2　含有物はごくわずか、粘性土。

カマド



カマド掘り方



第203図　168号竪穴建物遺構図

段が設けられていた。燃焼部と煙道部は一度長軸1.10m、短軸0.85mほどの土坑状に掘り込み壁側の側面に暗褐色土などを貼付して側壁を構築している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。出土量は図示５点、未掲載151点と少ない。このうち、１の土師器杯と５の土師器甕ががカマドから出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した土師器杯から８世紀前半代に比定できる。

169号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37086～37089、Ｙ＝-85060～-85064に位置する。

重複関係　154号竪穴建物、173号竪穴建物、６号竪穴状遺構、109号ピットと重複関係にある。新旧関係は154号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古いが、他の重複関係にある竪穴建物や遺構より本竪穴建物のほうが新しい。しかし、出土遺物からは６号竪穴状遺構のほうが新しい様相がみられる。

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は2.20m、南北方向は3.00mを測る、確認面から床面までの壁高は22～28㎝を測る。

床面積　5.65㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－128°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込みレンズ状に堆積した様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口が壊されていたが、燃焼部は天井が残存していたとみられる。規模は全長0.85m、幅が0.97m、燃焼部幅0.37mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部は土層断面の観察から天井下面とみられるカマド２層が顕著な焼土であることから煙道部から土砂が流入し、ほぼ埋まる段階まで残存し、崩落したと想定される。なお、燃焼部火床面では焼土化が顕著ではなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・鉢・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜などが出土している。出土量は図示７点、未掲載238点と少量である。このうち、１・２の土師器鉢、５の須恵器椀が床面から、４の須恵器椀がカマドからの出土である。床面やカマドから出土した土器でも１・２の土師器椀・鉢と４・６の須恵器椀では年代観に１世紀以上の差が生じている。なお、４の須恵器椀はカマドからの出土であるが、その位置は煙道部で底面より21㎝上である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土器に１世紀以上の差が生じていることから共伴する土器を確定させる必要がある。４・６の須恵器椀は154号竪穴建物出土のものと同形態であることから154号竪穴建物から混入したと判断できる。よって消去法ではあるが本竪穴建物に共伴する土器としては１・２の土師器鉢が該当すると判断できる。この土器の詳細な年代観の想定は難しいが、本竪穴建物の存続期間は概ね８世紀代と想定できる。

170号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37079～37083、Ｙ＝-85047～-85051に位置する。重複関係にある157号竪穴建物によって埋没土のほとんどを欠く。

重複関係　157号竪穴建物、178号竪穴建物、185号竪穴建物、186号竪穴建物、１号掘立柱建物と重複関係にある。新旧関係は157号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、他の遺構よりは新しい。

形状　南北に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が3.30m、南北方向が3.83mを測る。確認面から床面までの壁高は20～25㎝を測る。

床面積　10.71㎡を測る。

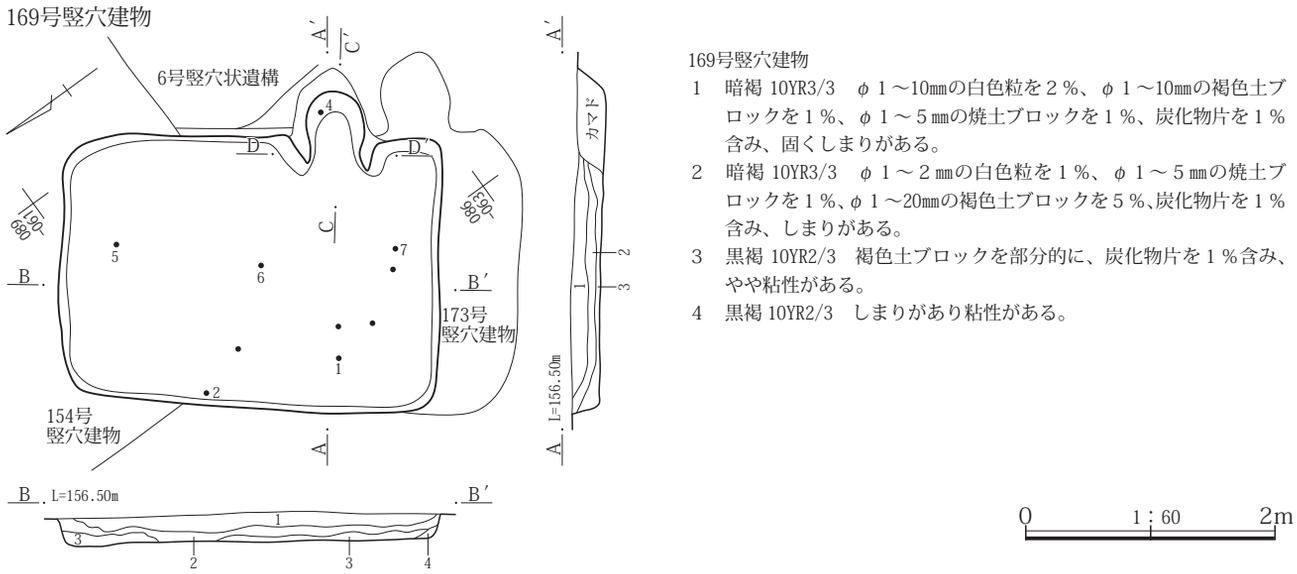
主軸方位　Ｎ－87°－Ｅを指す。

埋没状態　埋没土のほとんどを欠くため不明である。

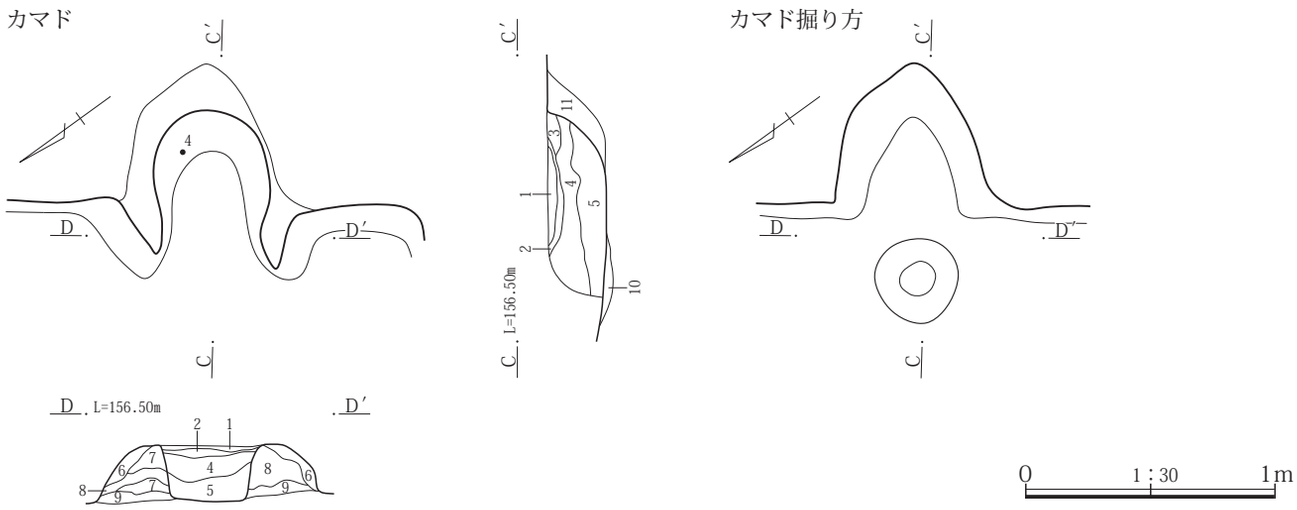
床面　地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　北壁の中程で検出されているが、他の壁下では検出されなかった。検出された壁溝は幅20㎝前後、深さ３㎝であった。



169号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜の白色粒を２％、φ１～10㎜の褐色土ブロックを１％、φ１～５㎜の焼土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～５㎜の焼土ブロックを１％、φ１～20㎜の褐色土ブロックを５％、炭化物片を１％含み、しまりがある。
3　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを部分的に、炭化物片を１％含み、やや粘性がある。
4　黒褐 10YR2/3　しまりがあり粘性がある。



169号竪穴建物　カマド
1　灰褐 5YR4/2　細粒土中に多量の焼土小ブロックや灰を含み、しまりがやや弱い非粘性土。
2　にぶい赤褐 2.5YR5/3　焼土主体の細粒土。上半ほど赤味が強い。
3　灰褐 7.5YR4/2　泥流土、焼土を不均等に含む。
4　黒褐 10YR3/2　焚口側にAs-C、燃焼部側に焼土をやや多く灰を多く含む、細粒土でサラサラした感触。
5　灰褐 7.5YR4/2　不明瞭な焼土、泥流土と灰を少量を含み、しまりが強い粘性土。
6　暗褐 10YR3/3　含有物少ない、ややしまりが強いやや細粒弱粘性土。
7　暗褐色 5YR3/3　やや不明瞭で粘性おびた焼土を帯状に不均等に炭化物や泥流土小ブロックを少量含み、しまりが強い粘性土。
8　暗褐 10YR3/4　泥流土粒を少量不均等に含み、しまりが強い粘性土。
9　灰黄褐 10YR4/2　灰色味をおびた泥流土に灰をやや多く含み、しまりが強い粘性土。
10　暗褐 10YR3/3　黒色土を多く焼土を若干含む、微粘性土。
11　灰黄褐 10YR4/2　含有物わずか。

第204図　169号竪穴建物遺構図

柱穴　検出されなかった。

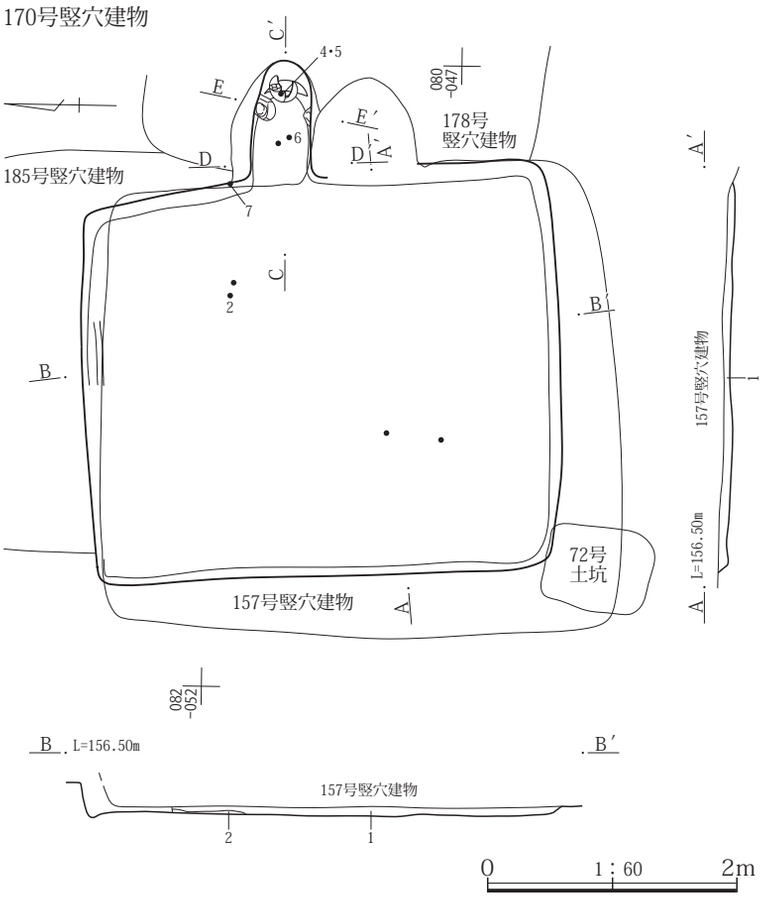
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁のほぼ中央に構築されている。残存状態は燃焼部の天井は失われていた。また、焚口と燃焼部手前の袖は重複関係にある157号竪穴建物によって失われている。規模は残存している範囲で全長1.10m、幅0.80m、燃焼部幅0.45mを測る。燃焼部の大半と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部と煙道部の間には15㎝ほどの高さの段が設けられ、その上位からは煙突として使用された５の土師器甕が出土している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・

170号竪穴建物



170号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土細粒を霜降状に焼土粒・炭化物粒をやや多く含み、しまりごく強い。

2　黒褐 10YR3/2　上面には灰の拡散が見られ、泥流土、焼土粒を少量不均等に含み、しまりごく強い。

170号竪穴建物カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状に不揃いの焼土粒を不均等に含み、ややしまりが強い。

2　褐 10YR4/4　黄色味粒、泥流土、粘性土の混土、ややしまりが弱い。

3　暗褐 7.5YR3/3　泥流土粒・焼土粒を多く含み、しまりが強い細粒土。

4　暗灰黄 2.5Y4/2　灰を多く含み、ややしまりが弱い細粒弱粘性土でサラサラした感触。

5　7.5YR4/3　土質は４に近い、焼土を多く含むため、赤色味強い。

6　褐 7.5YR4/3　灰のを多く焼土を少量含み、しまりが弱い細粒土でややサラサラした感触。

7　暗褐 410YR3/3　上位に黒色灰を多く含み、ややしまりが強い粘性土。

8　黒褐 10YR3/2　焼土粒を少量含み、やや細粒土。

9　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土主体、焼土を若干含み、ややしまりがある弱粘性土。

10　灰黄褐 10YR3/2　As-C・焼土・泥流土を不均等にやや多く含む、ごくしまりが強い。

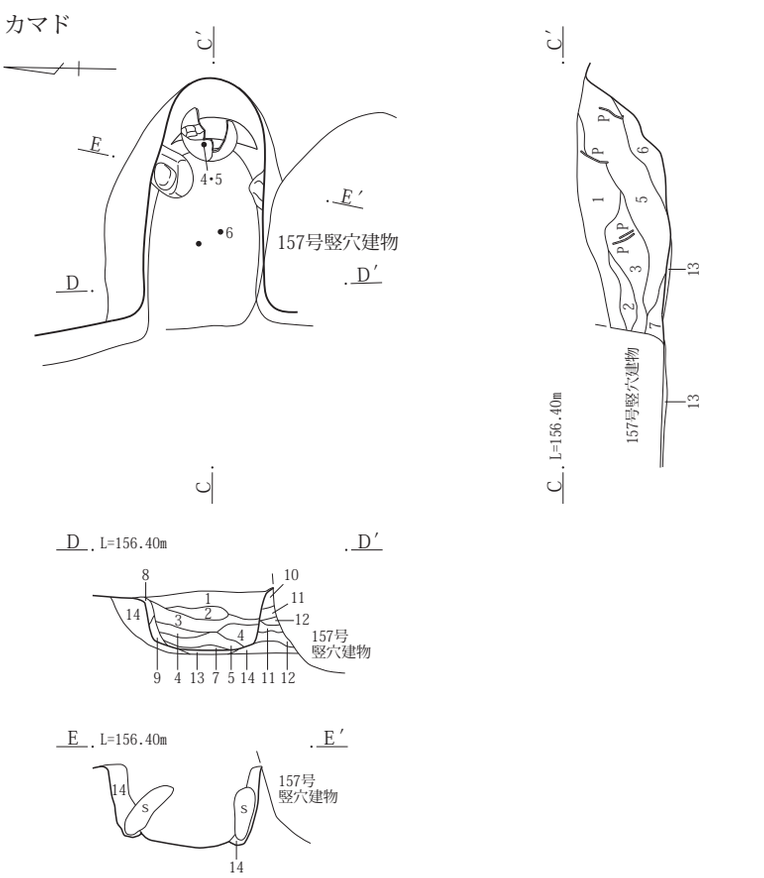
11　褐 7.5YR4/4　土質は11に近い、泥流土を多く焼土を含み、しまりが強い。

12　暗褐 10YR3/4　灰を含み、しまりが強い細粒土。

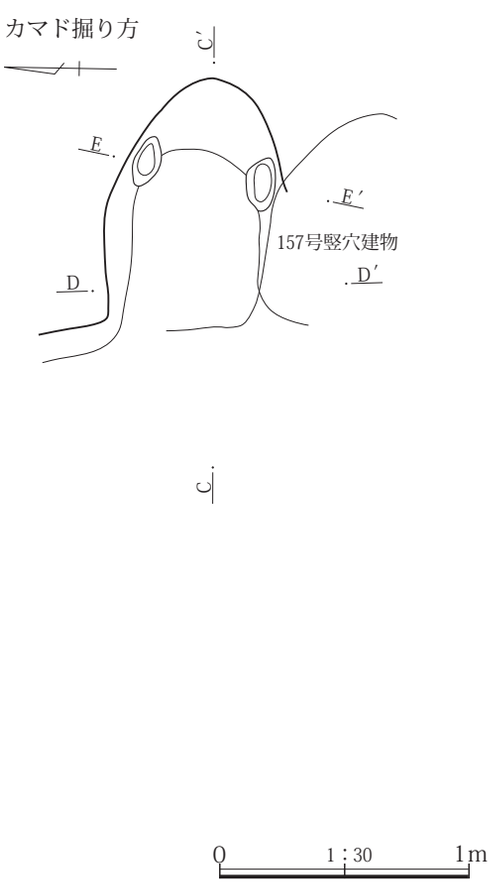
13　にぶい赤褐 5YR4/3　大粒の焼土粒を多く含み、しまりが強い。

14　にぶい黄褐 10YR4/3　しまりやや弱い粘性土。

カマド



カマド掘り方



第205図　170号竪穴建物遺構図

甕、灰釉陶器などが出土している。このうち、２の須恵器椀が床面から、４～６・８の土師器甕がカマドからの出土である。なお。本竪穴建物から出土している土師器甕は大きさから煮沸用とみられるが、古代上野国内に広く流通していたコの字口縁甕(武蔵甕)の４、口縁部から頸部の形状は４に近いが、胴部の整形が縦方向にヘラ削りが施されている５・６、ロクロ整形後胴部に５・６と同様に縦方向のヘラ削りが施される７・８の３形態が出土している。これらは７以外がカマドからの出土であることから共伴すると判断できる。他の地域でもコの字口縁をもつ土師器甕とロクロ土師器甕が共伴する例はみられたが、ロクロ土師器甕は客体的な存在で、さらに３形態が共伴することは無く、この地域の土師器甕の様相を検討する上で重要なことと考える。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器椀や土師器甕から９世紀第４四半期に比定できる。なお、本竪穴建物と大部分で重複関係にある157号竪穴建物も９世紀第４四半期に比定できるが、ともにカマドが存在していることから、本竪穴建物の埋没後早い段階で157号竪穴建物が構築されたと想定される。

171号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37073～37077、Ｙ＝-85040～-85045に位置する。

重複関係　114号竪穴建物、120号竪穴建物、127号竪穴建物、166号竪穴建物と重複関係にある。なお、121号竪穴建物とは接する位置関係である。新旧関係は114号竪穴建物、120号竪穴建物、166号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、127号竪穴建物との関係は発掘調査時では本竪穴建物のほうが古いが、出土遺物からはほぼ同じか、本竪穴建物のほうが新しい。

形状　東西方向に長いやや歪んだ長方形を呈す。

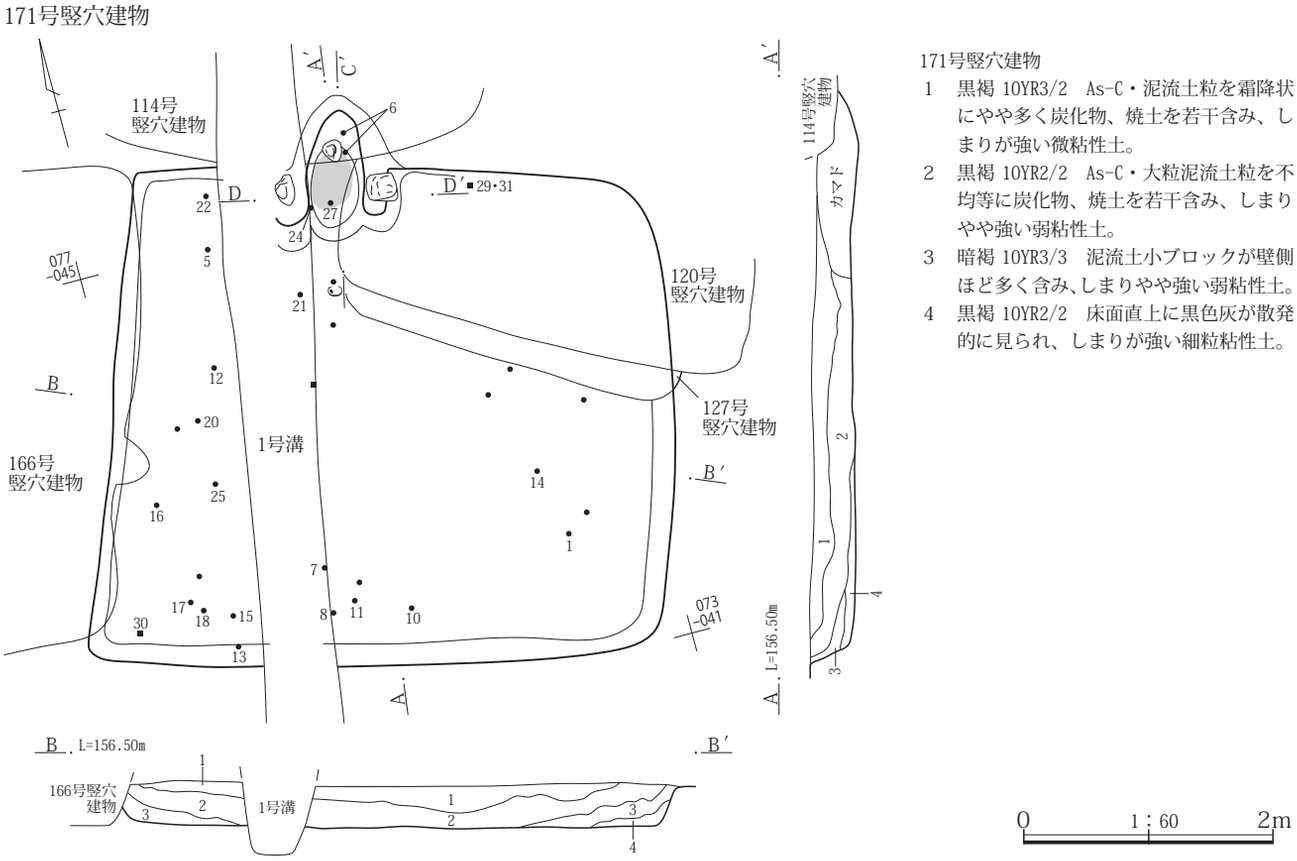
規模　主軸方向の南北方向は4.00m、東西方向は4.61mを測る。確認面から床面までの壁高は31～43cmを測る。

床面積　14.67㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－13°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積、中程のレンズ状の堆積が確認できたことから自然埋没と判断される。

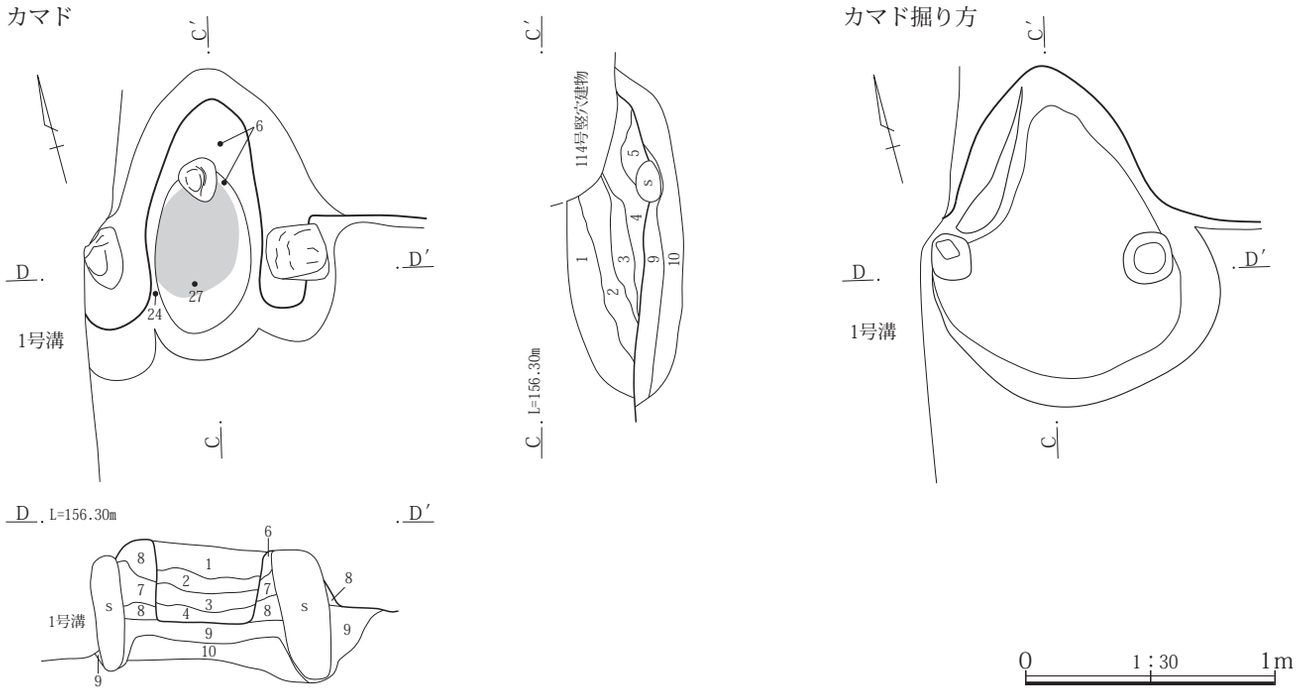
171号竪穴建物



171号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状にやや多く炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い微粘性土。
2　黒褐 10YR2/2　As-C・大粒泥流土粒を不均等に炭化物、焼土を若干含み、しまりやや強い弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロックが壁側ほど多く含み、しまりやや強い弱粘性土。
4　黒褐 10YR2/2　床面直上に黒色灰が散発的に見られ、しまりが強い細粒粘性土。

0　1：60　2m

第206図　171号竪穴建物遺構図（１）



171号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物１に近い。カマド上面でも焼土は多く含まれない。
2　黒褐 10YR2/2　黒色灰を多く焼土粒・炭化物粒を不均等に含み、ややしまりが弱い細粒土。
3　暗褐 10YR3/3　泥流土小ブロック・炭化物をやや多く焼土小ブロックが不均等に少量含み、しまりが強い。
4　灰褐 7.5YR4/2　灰と焼土小ブロックを多く含み、しまりが強くボソボソした感触。
5　黒褐 10YR3/2　黒色灰・炭化物を含み、ややしまりが強い弱粘性土。
6　黒褐 10YR3/2　泥流土細粒、As-Cを霜降状にやや多く炭化物、焼土を少量含み、しまりやや強い。
7　黒褐 10YR3/2　炭化物粒・不揃いの焼土ブロックを不均等に少量含み、ややしまりが強い粘性土。
8　暗赤褐　5YR3/3　下半に焼土や炭化物をやや多く含み、ややしまりが弱い粘性土。
9　灰黄褐　10YR4/2　泥流土主体、黒褐色土をブロック状に含む、弱粘性土。
10　灰黄褐　10YR4/2　９に類似、黒褐色土をブロック状を多く含む。

第207図　171号竪穴建物遺構図（２）

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中程よりやや西寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われているが、両袖は残存していた。規模は全長が1.17m、幅が1.05m、燃焼部幅0.40mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。袖内部、焚口に近い位置には左側長さ45㎝、径12㎝、右側長さ52㎝、径20㎝の棒状礫が立てられるように据え付けられていた。また、燃焼部奥には長さ34㎝、径15㎝の棒状礫が立てられるように据え付けられており、支脚に使用されたと想定される。

出土遺物　遺物はは土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・盤・高杯・鉢・壺・甕、灰釉陶器、鉄製品刀子・棒状製品などが出土している。このうち、12・13の須恵器杯が床面から、４・６の須恵器杯蓋、24の土師器甕がカマドから、18の須恵器椀が堀り方からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土している須恵器杯や須恵器杯蓋から８世紀第３四半期に比定できる。しかし、床面よりやや上位から出土している16の須恵器有台杯や９・10の須恵器杯は、底部に回転ヘラ削りが用いられていることやカマドから出土している土師器甕は小片ではあるが胴部が球状を呈することから、８世紀第２四半期に構築されたと想定できる。

172号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37086～37090、Ｙ＝−85052～−85056に位置する。

重複関係　161号竪穴建物、176号竪穴建物、183号竪穴建物、186号竪穴建物、38号土坑、73号土坑、83号土坑、105号ピットと重複関係にある。新旧関係は161号竪穴建物、105号ピットより本竪穴建物のほうが古く、他の重複関係にある遺構よりは新しい。

形状　西辺が東辺に比べて30㎝ほど短い台形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が3.05m、南北方向が3.44mを測る。確認面から床面までの壁高は37～60㎝を測る。

床面積　7.54㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－117°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では床面中央に堆積土５の黒褐色土が盛り上がるような堆積が確認されており、自然埋没と判断するのにはやや不自然な堆積であるため、人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　東壁下のカマドから北側から北壁下、西壁下、東壁の中程までで検出されている。規模は幅が15～24㎝、深さ２～８㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。煙道部の一部を重複関係にある161号竪穴建物によって欠く。残存状態は焚口と燃焼部の天井が失われていたが、燃焼部の袖は両側とも存在していた。規模は全長0.87m、幅1.30m、燃焼部幅0.54mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部との間は高さ33㎝の段が設けられていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕・羽釜、灰釉陶器などが出土している。出土状態はほとんどが埋没土からで、本竪穴建物に確実に共伴する遺物は少ない状態であった。このうち、10の土師器甕が床面とカマドから、８の須恵器盤が床面からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器甕や須恵器盤及び共伴すると判断した土師器杯、須恵器杯から７世紀後半に比定できる。

176号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37086～37091、Ｙ＝−85052～−85056に位置する。重複関係にある172号竪穴建物によって南側３分の２以上を欠く。

重複関係　172号竪穴建物、183号竪穴建物、82号土坑と重複関係にある。新旧関係は172号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、183号竪穴建物より新しい。82号土坑との新旧関係は明確ではないが、調査時では本竪穴建物のほうが新しいと判断されている。

形状　北辺が南辺に比べて短い台形を呈す。

規模　東西方向が3.37m、南北方向が3.73mと推定される。確認面から床面までの壁高は15～24㎝を測る。

床面積　9.22㎡を測る。

主軸方位　出土遺物からカマドが構築されている時期の竪穴建物であると想定され、カマドが東壁、南壁に構築されていたかは不明である。

埋没状態　土層断面を観察できる範囲が短いため判断できない。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲内では検出されなかった。

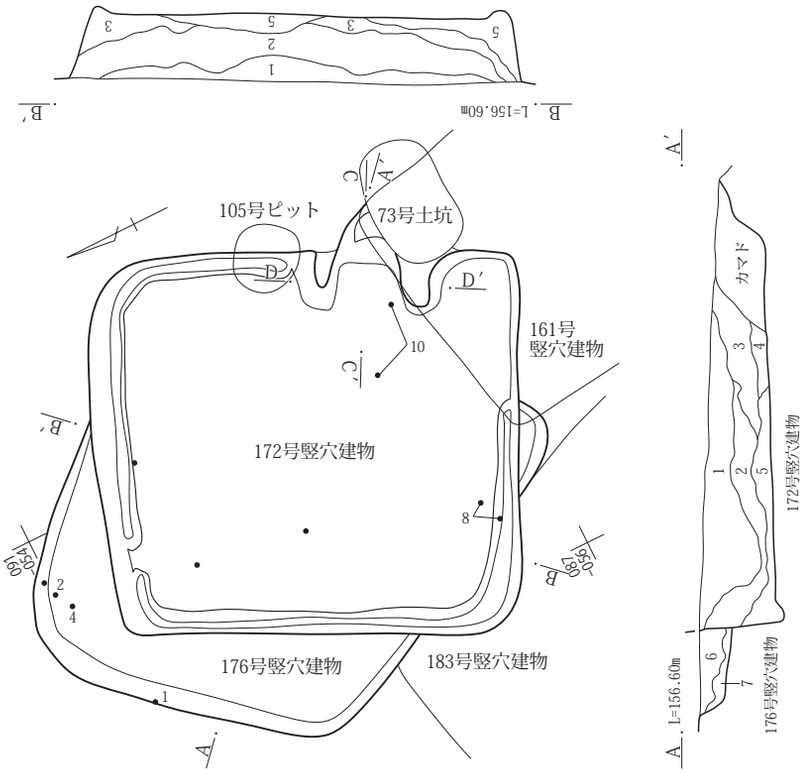
その他施設　残存範囲内では検出されなかった。

火処　主軸方位の項で記載したように不明である。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕などが出土しているが、重複関係にある竪穴建物によって大部分を欠くため出土量は図示４点、未掲載25点とわずかであった。このうち、１と２の須恵器椀が床面より26㎝・20㎝上、４の須恵器羽釜が床面より＋17㎝上からの出土である。本竪穴建物では床面など確実に共伴する位置から土器の出土はみられなかったが、図示した遺物は10世紀前半の年代観が与えられる。しかし、重複関係にある172号竪穴建物は７世紀後半に比定されることから、これらの土器は混入とみられる。

所見　本竪穴建物の存続時期は、重複関係にある172号竪穴建物から７世紀後半以前に比定したい。

172・176号竪穴建物



172号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C泥流土粒を多量に焼土粒・炭化物粒・土器粒を不均等に含み、しまりごく強い。

2　黒褐 10YR3/2　黒色味強い細粒弱粘性土が基質、不揃いの泥流土ブロックを不均等に含み、しまりが強い。

3　暗褐 10YR3/3　褐色味の強い弱粘性土が基質、泥流土中黒色土をブロック状に含み、しまりが強い。

4　灰褐 7.5YR4/2　不明瞭な焼土ブロックを多く含み、しまりが強い粘性土。

5　黒褐 10YR2/1　含有物少ない、しまりが強い粘性土。

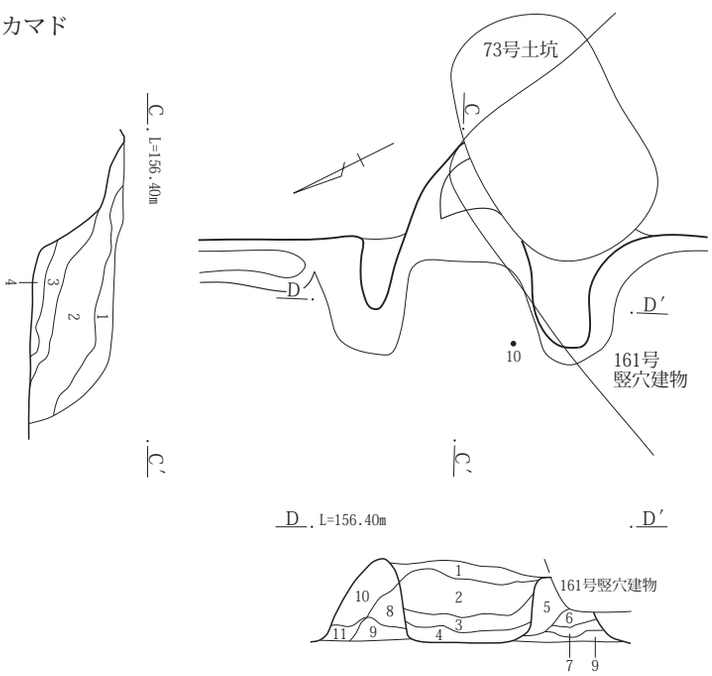
176号竪穴建物

6　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を不均等に焼土を少量含み、しまりが強い。

7　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒と黒褐色土をブロック状に不均等に炭化物、焼土を若干含み、ややしまりが強い弱粘性土。

0　1：60　2m

カマド



172号竪穴建物　カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状に多量に焼土を若干含み、やや強い。

2　灰褐 7.5YR4/2　不明瞭な泥流土と黒褐色土のブロック状混土、炭化物、焼土を少量含み、ややしまりがある微粘性土。

3　暗赤褐 5YR3/2　灰を含む細粒土が基質、不明瞭な焼土ブロックを多量に含み、ボソボソした感触。

4　にぶい赤褐 5YR4/3～黒褐 10YR3/2　焼土と黒色灰の混土。

5　灰褐 5YR4/2　３と同様。

6　灰黄褐 10YR4/2　黒色灰と泥流土が不均等に混じる、微粘性土でややボソボソした感触。

7　にぶい黄褐 10YR4/3　灰色味の泥流土が基質、黄色味強い泥流土粒や焼土粒、黒褐色土ブロックを不均等に含む、弱粘性土。

8　暗褐 10YR3/2　焼土小ブロックを少量含み、しまりが強い細粒土。

9　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色細粒土中に泥流土ブロックを不均等に炭化物を若干含み、しまりが強い。

10　暗褐 10YR3/3　褐色味の強い弱粘性土が基質、泥流土中黒色土をブロック状に含み、しまりが強い。

11　黒褐 10YR2/2　黒褐10YR2/1　含有物少なくしまりが強い粘性土。

0　1：30　1m

第208図　172・176号竪穴建物遺構図

173号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、X＝37085～37089、Y＝-85060～-85064に位置する。大部分を重複関係にある169号竪穴建物によって欠く。

重複関係　154号竪穴建物、169号竪穴建物、６号竪穴状遺構、109号ピットと重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが６号竪穴状遺構より新しく、154号竪穴建物、169号竪穴建物、109号ピットより本竪穴建物のほうが古い。しかし、出土遺物からは６号竪穴状遺構より古い様相がみられる。

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は2.27m、南北方向は3.97mを測る。確認面から床面までの壁高は６～13㎝を測る。

床面積　8.00㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－129°－Ｅを指す。

埋没状態　埋没土の残存範囲が狭いため判然としないが、土層断面の観察では土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　残存範囲では地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われているが両袖は残存していた。規模は全長が0.81m、幅が0.87m、燃焼部幅0.45mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に掘り込まれている。

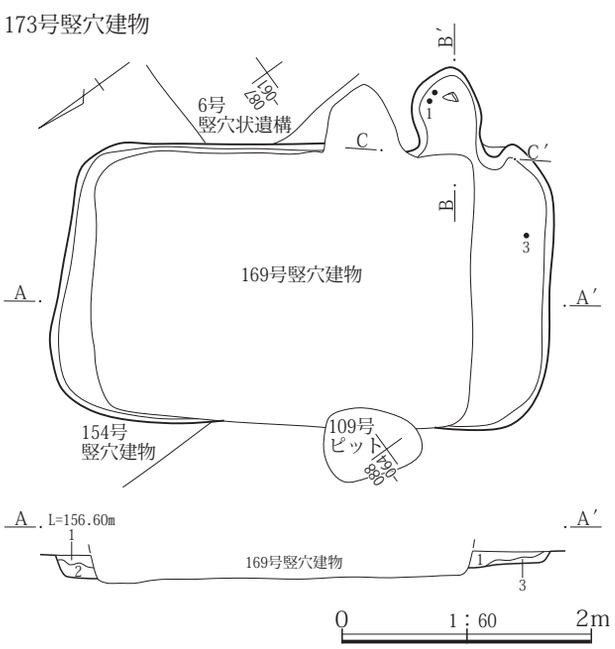
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。出土量は重複関係にある竪穴建物によって大部分を欠くため、図示４点、未掲載28点とわずかであった。このうち、３の須恵器椀が床面から、１の須恵器杯と４の須恵器甕がカマドから出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯や椀から９世紀後半に比定できる。

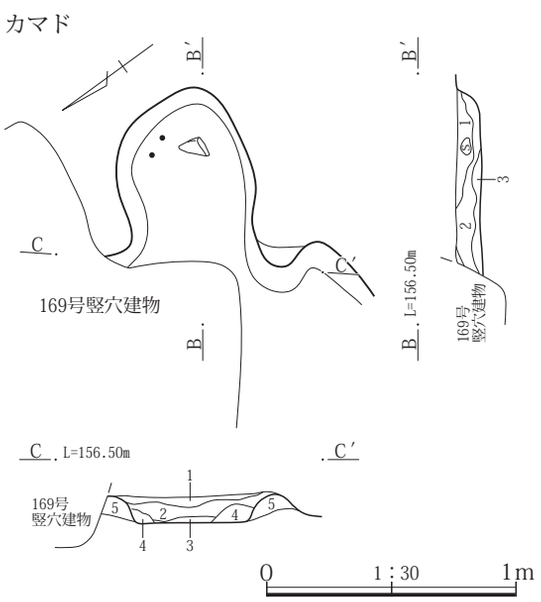
174号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37094～37099、Ｙ＝-85064～-85070に位置する。

重複関係　53号竪穴建物、54号竪穴建物、56号竪穴建物、68号竪穴建物、175号竪穴建物、５号土坑、76号土坑、82号土坑と重複関係にある。また、165号竪穴建物とは南辺が接する位置関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが、53号竪穴建物、54号竪穴建物、56号竪穴建物、175号竪穴建物、82号土坑より新しく５号土坑、76号土坑より古い。なお、68号竪穴建物との新旧関係は明確ではないが、出土遺物から見ると本竪穴建物のほうが



173号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土細粒を霜降状に北側には焼土、炭化物粒含み、しまりが強い。
2　暗褐 10YR3/4　黒色味強い細粒粘性土を基質、不明瞭な泥流土ブロックを多く炭化物、焼土を少量含み、しまりが強い。
3　暗褐 7.5YR3/3　含有物少ない粘性土。



173号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-C、不揃いの焼土粒、泥流土粒を不均等にやや多く含む、細粒土。
2　暗褐 7.5YR3/3　地山の粘性土と黒褐色細粒土のブロック状混土。灰を含み、しまりが強くややサラサラした感触。
3　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含む、微粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　焼土粒を若干含む。
5　黒褐 10YR3/2　灰褐色土ブロックを含む。

第209図　173号竪穴建物遺構図

新しい。

形状　主軸方向の東西方向が長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が5.33m、南北方向が4.43mを測る。確認面から床面までの壁高は15～32㎝を測る。

床面積　20.40㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－98°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではやや不自然な堆積も見られるが、壁際の三角堆積や中程でレンズ状の堆積が確認できることから廃棄当初は自然埋没と判断された。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、西側中央に溝状の床下土坑が検出されている。１号床下土坑は溝状の形状で、長径1.75m、短径0.37m、深さ0.08mを測る。なお、この床下土坑は溝状の形態を示していることから、古墳時代の竪穴建物にみられる間仕切りの可能性も想定されるが想定の域を超えない。

壁溝　北壁、西壁下と東壁のごく一部で検出された。規模は15㎝前後、深さ２～５㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　ピット状の落ち込み３基が検出されている。Ｐ１は深さだけなら柱穴の可能性があるが、他に同様のピットが検出されなかったため柱穴とは判断できなかった。それぞれの形状・規模は次のとおりである。

Ｐ１：円形、径0.30×0.30m、深さ0.66m、Ｐ２：楕円形、径0.40×0.37m、深さ0.14m、Ｐ３：円形、径0.50×0.50m、深さ0.11mを測る。

火処　東壁の北東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は壊されたのか燃焼部火床面に流れ込んだ土砂と混合した状態で堆積していた。なお、両袖は比較的良好な状態で残存していた。規模は全長1.90m、幅1.25m、燃焼部幅0.63mを測る。燃焼部の大部分は壁外に掘り込まれている。壁外の燃焼部壁面際には40㎝ほどの間隔で棒状礫が立てるように据え付けられていた。なお、カマド内や周囲には補強材などに使用されたとみられる礫が散乱した状態で出土していた。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・壺・羽釜・甕、緑釉陶器、灰釉陶器皿・耳皿・椀、鉄製品刀子・釘、流動滓などが出土している。これらの遺物は礫とともに竪穴建物全域に散乱した状態であった。このうち、３～５の須恵器杯、７・９・12・13・15～17の須恵器椀、22・24・31の灰釉陶器椀が床面から、25の灰釉陶器椀、32の須恵器壺、35・36の須恵器羽釜がカマドから、６の須恵器杯と23の灰釉陶器皿が１号床下土坑から出土している。なお、本竪穴建物からは灰釉陶器45点が出土している。器種は皿２点、耳皿１点、椀８点、小片のため皿か椀の判別が明確でないものが34点である。窯式期が光ケ丘１号窯式期から虎渓山１号窯式に及んでいる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマド、床下土坑から出土した須恵器杯・椀・羽釜などから10世紀第３四半期に比定できる。

175号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の北西、Ｘ＝37090～37096、Ｙ＝-85065～-85071に位置する。重複関係にある165号竪穴建物によって南東部を欠く。

重複関係　53号竪穴建物、165号竪穴建物、174号竪穴建物、76号土坑と重複関係にある。新旧関係は53号竪穴建物との関係は本竪穴建物のほうが新しいとみられるが明確ではない。他の重複関係にある竪穴建物や土坑より本竪穴建物のほうが古い。

形状　東西方向に30㎝ほど長い長方形を呈す。

規模　東西方向が5.51m、南北方向が5.22mを測る。確認面から床面までの壁高は０～10㎝を測る。

床面積　推定で26.54㎡を測る。

主軸方位　火処が不明なため、長軸方向を主軸と想定するとＮ－15°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いが土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

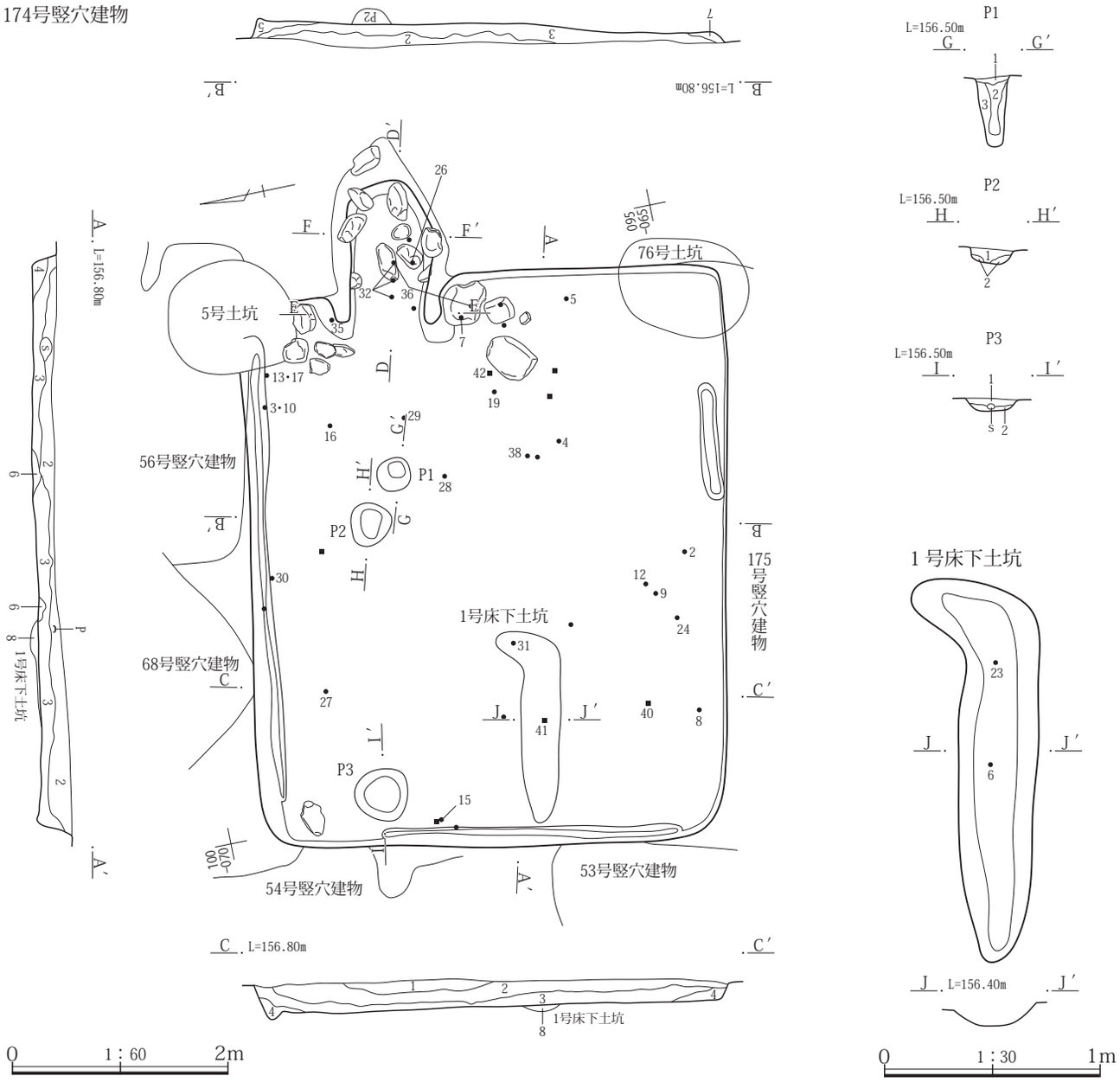
床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

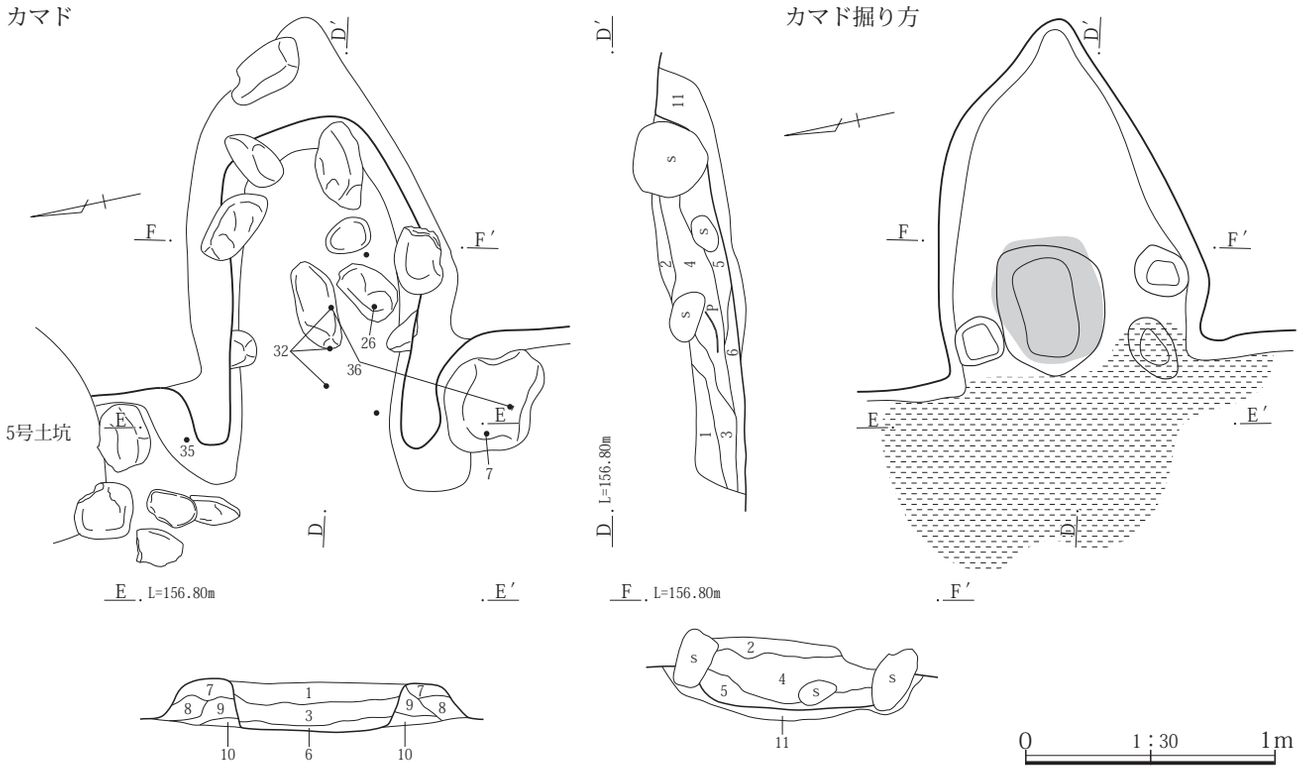
柱穴　北西部分で検出されているＰ２が柱穴の可能性が想定されたが、対比される位置に痕跡が見られないことから可能性にとどめる。なお、形状・規模は円形、径0.37×0.33m、深さ0.63mを測る。なお、Ｐ２からは11・13

174号竪穴建物



174号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　不揃いの泥流土、焼土、炭化物を不均等に少量含み、しまりが強い細粒土。
2　暗オリーブ褐 2.5Y3/3　土質は１と同様、泥流土をやや多くやや大粒の炭化物を不均等に含む。
3　暗褐 10YR3/3　不明瞭な泥流土ブロックと炭化物、焼土を不均等に含む、細粒弱粘性土。
4　黒褐 10YR2/2　泥流土を少量含む以外含有物少ない、細粒弱粘性土。
5　黒褐 10YR2/2　４に近似、北側でより黒色味強い。
6　灰黄褐 10YR4/2　に多量の泥流土ブロックを含み、しまりが強い。
7　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒と黒褐色土の混土部分。ややしまりが強い細粒土。
8　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを含む。
174号竪穴建物　Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％、炭化物片１％を含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを３％含み、若干柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。
174号竪穴建物　Ｐ２
1　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に７％含む。
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3　暗褐色土を20％含み、ややもろい。
174号竪穴建物　Ｐ３
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％、炭化物を２％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土をブロック状に20％含む。

第210図　174号竪穴建物遺構図（１）



174号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒・As-Cを少量不均等に炭化物、焼土を若干含む、ややしまりが強い微粘性土。
2　灰褐 5YR4/2　焼土粒を多く含み、ややしまりが強い。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土と黒褐色土の混土。ややしまりが弱い弱粘性土。
4　暗褐 7.5YT3/3　灰を含み、ややしまりがある細粒土でサラサラした感触。
5　にぶい赤褐 5YR4/3　多量に焼土を含む、弱粘性土でややボソボソした感触。
6　黒 10YR2/1　黒色灰の堆積。
7　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土を少量と炭化物粒・焼土を不均等に少量含み、ややしまりがある祖粒土。
8　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いの泥流土を多く炭化物を不揃いに含み、ややしまりが強い弱粘性土。
9　灰黄褐 10YR4/2　微細な焼土粒・炭化物と灰を含む。ややしまりが強い細粒土でサラサラした感触。
10　黒 10YR2/1～暗褐 10YR3/3　黒色灰主体のしまりが弱い。最下位に少量の焼土を含む。
11　暗褐 10YR3/3～灰黄褐 10YR4/2　黒色灰・泥流土を不均等に多く含む。

第211図　174号竪穴建物遺構図（２）

の須恵器椀が出土している。

貯蔵穴　南西角から検出されている。形状はほぼ円形を呈し、規模は0.70×0.68m、深さ0.20mを測る。内部からは２～５の須恵器杯・椀、15の灰釉陶器椀が出土している。

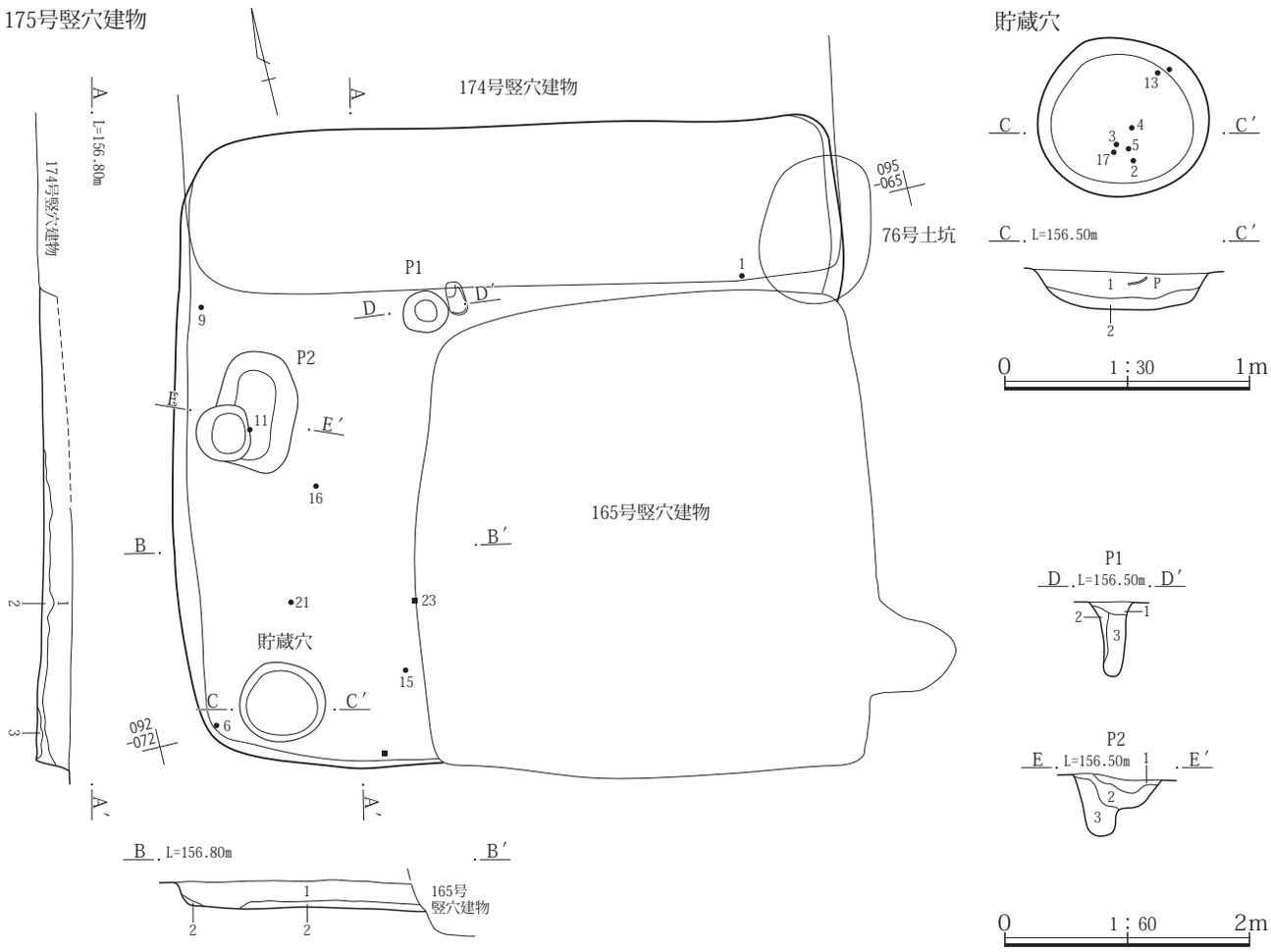
その他施設　西壁中程際でＰ３が検出されている。Ｐ３は長方形の浅い落ち込みと円形の深いピット状の落ち込みが組み合わされたものである。それぞれの規模は長方形ほうが長径0.95m、短径0.65m、深さ0.14m、円形のほうが径0.47×0.43m、深さ0.52mを測る。この落ち込みを一体としたのは土層断面の観察で西壁際から埋め戻されていることからである。

火処　残存範囲や重複関係にある165号竪穴建物下ではカマドなどの痕跡は検出されなかった。出土遺物からはカマドが構築されている時期の竪穴建物であるが、元々構築されなかった可能性も想定される。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・羽釜・甕、灰釉陶器皿・椀、炉底滓などが出土している。このうち、１の須恵器杯、９の須恵器椀、16の灰釉陶器皿、21の須恵器羽釜、23の炉底滓が床面から、２～４の須恵器杯、５・７・10の須恵器無台椀、13の須恵器椀、17の灰釉陶器椀が貯蔵穴から、12の須恵器椀がＰ２からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や貯蔵穴から出土した須恵器杯・椀・羽釜などから10世紀第３四半期に比定できる。

重複関係にある165号竪穴建物も出土した土器から同様な年代観が与えられる。こうした点から、175号竪穴



175号竪穴建物
１　暗褐 10YR3/3　As-C・泥流土粒を霜降状に少量と炭化物、焼土を若干含み、しまりやや強い。
２　灰黄褐 10YR4/2　不揃いの泥流土をやや多く含み、ややしまりが強い弱粘性土。
３　にぶい黄褐 10YR4/3　黒褐色の細粒土。
175号竪穴建物貯蔵穴
１　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックと褐色粒を５％、炭化物片を１％含む。
２　暗褐 10YR3/3　褐色粒を２～３％含む。
175号竪穴建物　Ｐ１
１　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％、炭化物片を１％含み、しまりがある。
２　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に２％含み、しまりがある。
３　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％、φ３～5mmの炭化物を１％含み、もろい。
175号竪穴建物　Ｐ２
１　暗褐 10YR3/3　炭化物片を２％、φ1mmの褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
２　にぶい黄褐色土 10YR4/3　暗褐色土を10％含み、ややもろい。
３　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％、φ３～5mmの炭化物を１％含み、もろい。

第212図　175号竪穴建物遺構図

建物から165号竪穴建物への建替が想定できるが、北側に隣接して検出されている174号竪穴建物も165号竪穴建物、174号竪穴建物と同様な時期に比定できることから、この３棟の竪穴建物がどのような変遷を辿ったかが課題である。

177号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37081～37086、Ｙ＝-85054～-85059に位置する。

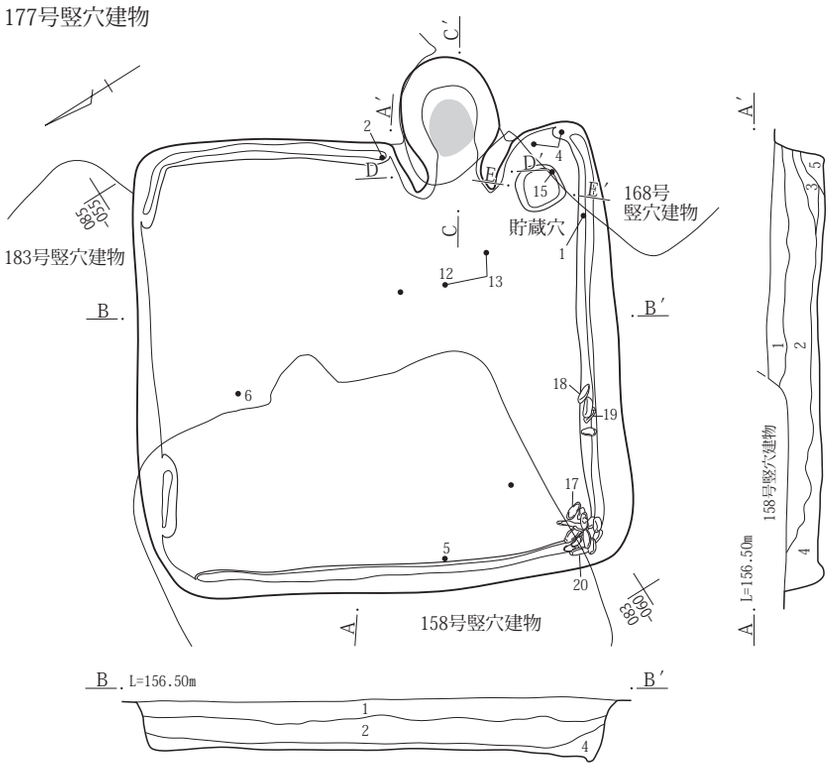
重複関係　158号竪穴建物、168号竪穴建物、183号竪穴建物、63号土坑と重複関係にある。新旧関係は183号竪穴建物や63号土坑より本竪穴建物のほうが新しいが、他の重複関係にある竪穴建物よりは古い。

形状　南北方向に長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は3.62m、南北方向は3.92mを測る。確認面から床面までの壁高は24～44cmである。

床面積　10.66㎡を測る。

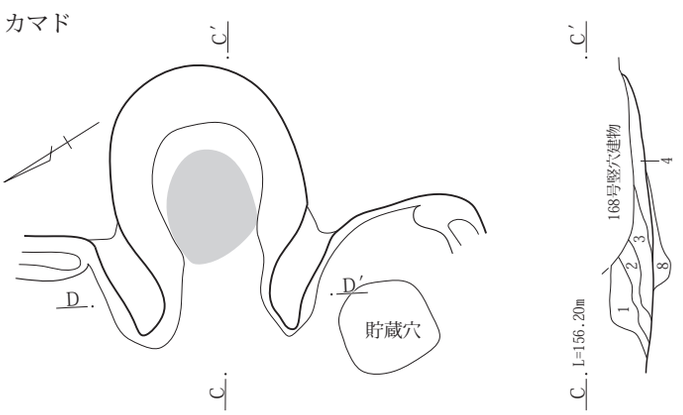
177号竪穴建物



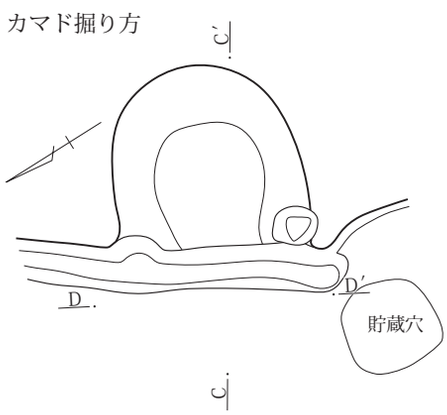
177号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状に多く炭化物、焼土を若干含み、しまりが強い細粒土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土を含み、しまりが強い細粒土。
3　暗褐 10YR3/3　灰や炭化物含む、細粒弱粘性土でややサラサラした感触。
4　黒褐 10YR2/2　不均等に泥流土を含む、細粒粘性土。
5　暗灰黄 2.5Y4/2　泥流土ブロックをごく多く含み、しまりが強い粘性土。

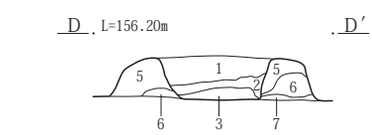
0　1：60　2m

カマド



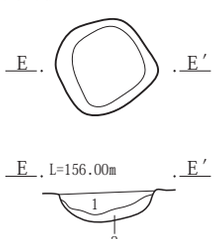
カマド掘り方





177号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、不揃いの泥流土と不均等に焼土粒を含む、微粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/4～暗褐 10YR3/3　下半に焼土を多く含み、ややしまりを欠く粘性土。北側は黒褐色土、黒色灰が多く含まれ、しまりもやや強い。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　２と黒褐色土の混土、あまり明瞭でない焼土やや多く含み、ややしまりが強い。
4　にぶい赤褐 5YR5/4　地山・泥流土が赤変した部分、表面は硬化している。
5　暗褐 10YAR3/3　黒褐色土と不明瞭な泥流土の混土、しまりが強い微粘性土。
6　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土を基質土。やや不明瞭な焼土ブロックを含み、しまりが強い粘性土。
7　黒褐 10YR3/2　黒色灰と炭化物を含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
8　灰黄 10YR4/2　黒褐色土と泥流土の混土。しまりが強い。

貯蔵穴



177号竪穴建物　貯蔵穴
1　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％、炭化物片を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。

0　1：30　1m

第213図　177号竪穴建物遺構図

主軸方位　Ｎ－118°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積や中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　東壁のカマドより北側、北壁の北西角付近、西壁、南壁の壁下から検出されている。規模は幅が15～20㎝、深さ４～10㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角、壁下から10～20㎝ほどの位置で検出されている。形状は隅丸四角形を呈し、規模は長軸0.37m、短軸0.36m、深さ0.17mを測る。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は燃焼部の奥側半分と煙道部の上部を重複関係にある168号竪穴建物カマドによって欠く。また、焚口と燃焼部の天井は土層断面でも確認できないことから壊されたとみられる。燃焼部両袖は焚口近くまで残存していた。規模は全長1.16m、幅0.93m、燃焼部幅0.40mを測る。燃焼部の大半と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部火床面は顕著な焼土が確認できたことから使用頻度が高かったとみられる。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕・羽釜、棒状礫などが出土している。このうち、１・２の土師器杯、４の須恵器杯、12・13の土師器甕、15の須恵器甕が床面からの出土である。15の須恵器甕片はカマドからも出土している。

また、南西角壁際と南壁際から径５㎝、長さ20㎝前後の棒状礫17点がまとまった状態で出土している。この棒状礫は出土状態から菰編み石として使用されたものとみられる。

所見　本竪穴建物の出土遺物では、床面から出土した土師器杯が７世紀第３四半期、土師器甕が８世紀第１四半期の年代観が与えられる。また、埋没土からではあるが７・８の須恵器有台杯も土師器甕に近い年代観が与えられる。こうした点から本竪穴建物の存続時期は、８世紀第１四半期に比定できる。

178号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37079～37082、Ｙ＝-85045～-85048に位置する。

重複関係　157号竪穴建物、170号竪穴建物、185号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は157号竪穴建物、170号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、185号竪穴建物よりは新しい。

形状　南北方向が長い台形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向が2.56m、南北方向が3.15mを測る。確認面から床面までの壁高は13～30㎝を測る。

床面積　5.95㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－103°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中程でレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　南東角で検出されている。形状は楕円形で、規模は長径0.68m、短径0.44m、深さ0.19mを測る。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角よりに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井はカマド手前側に落とされるように失われていた。燃焼部側面の袖は両側とも焚口まで残存していた。規模は全長1.02m、幅1.18m、燃焼部幅0.32mを測る。燃焼部奥から煙道部にかけては壁外に掘り込まれている。両袖からは焚口の天井に使用された甕をかけるための棒状礫を左袖１点、右袖２点が据えられたままの状態で検出されている。この礫には床面に横倒しの状態で出土した12・16の土師器甕が欠けられていたとみられる。なお、燃焼部から出土した11・14の土師器甕は煮炊き用に掛けられていたものである。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・短頸壺・甕などが出土している。このうち、８の須恵器小型短頸壺、20須恵器甕、15・18・19の土師器甕が床面から、10～12・14・16の土師器甕がカマドから、17の土師器甕が貯蔵穴内の床面近くからの出土である。なお、

４～７の須恵器盤・高盤は埋没土からの出土であるが、本竪穴建物に共伴すると判断され、これだけの大型供膳具が竪穴建物からまとまって出土することは希である。21～24の須恵器杯蓋・有台杯・椀、土師器甕は確認面近くからの出土で、形態的にも本竪穴建物に共伴しないものであることから、後の混入と判断できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した土師器甕からは７世紀第３四半期に比定できるが、土師器杯や須恵器盤・高盤などの年代観を考慮すると廃棄は７世紀第４四半期と判断できる。

179号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37103～37110、Ｙ＝-85055～-85061に位置する。重複関係にある61・65号竪穴建物によって南辺側、北東部分を欠くため全貌は不明である。

重複関係　12号竪穴建物、42号竪穴建物、61号竪穴建物、65号竪穴建物、128号竪穴建物、180号竪穴建物、187号竪穴建物、５号竪穴状遺構、74号土坑と重複関係にある。新旧関係は180号竪穴建物と187号竪穴建物の関係は明確ではないが本竪穴建物のほうが新しいとみられる。他の遺構より本竪穴建物の方が古い。なお、42号竪穴建物との関係は明確ではない。

形状　主軸方向の東西方向が0.60mほど長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が5.62m、南北方向が5.03mを測る。確認面から床面までの壁高は27～35㎝を測る。

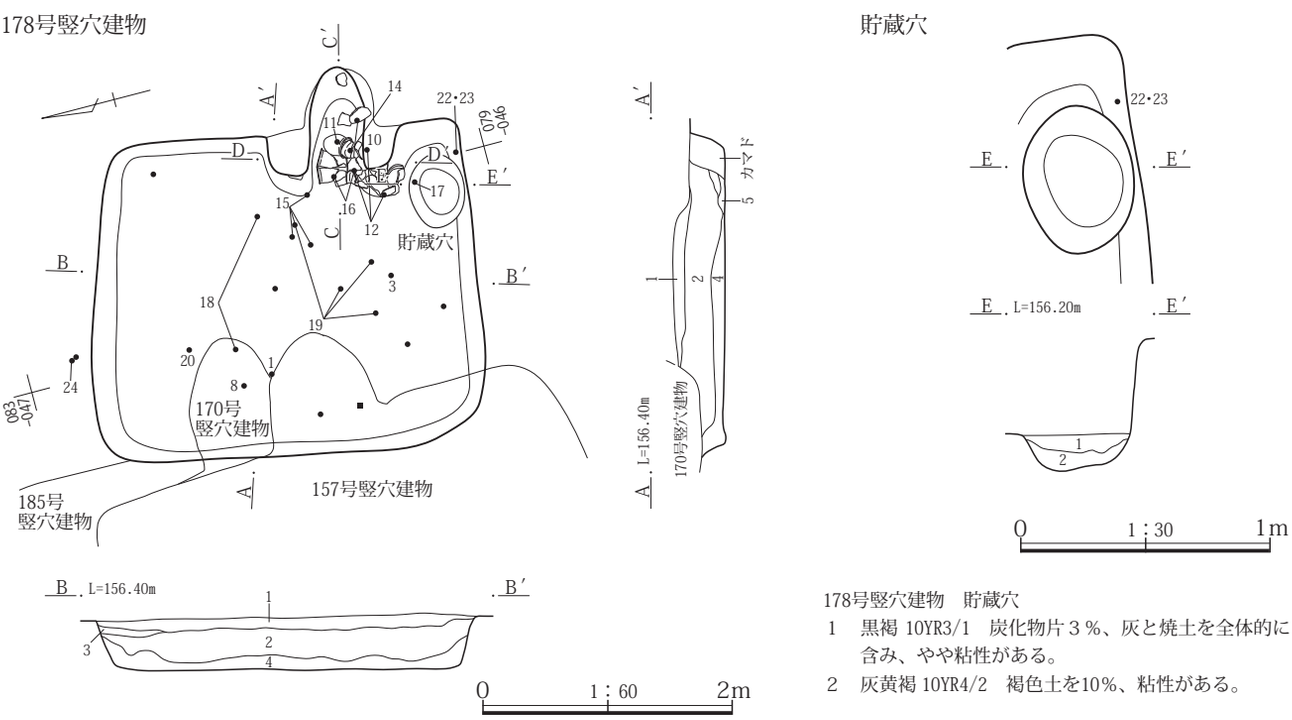
床面積　推定で24.01㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－58°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際に三角堆積が確認され、その内側は黒褐色土によって短期間に埋没しており、自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

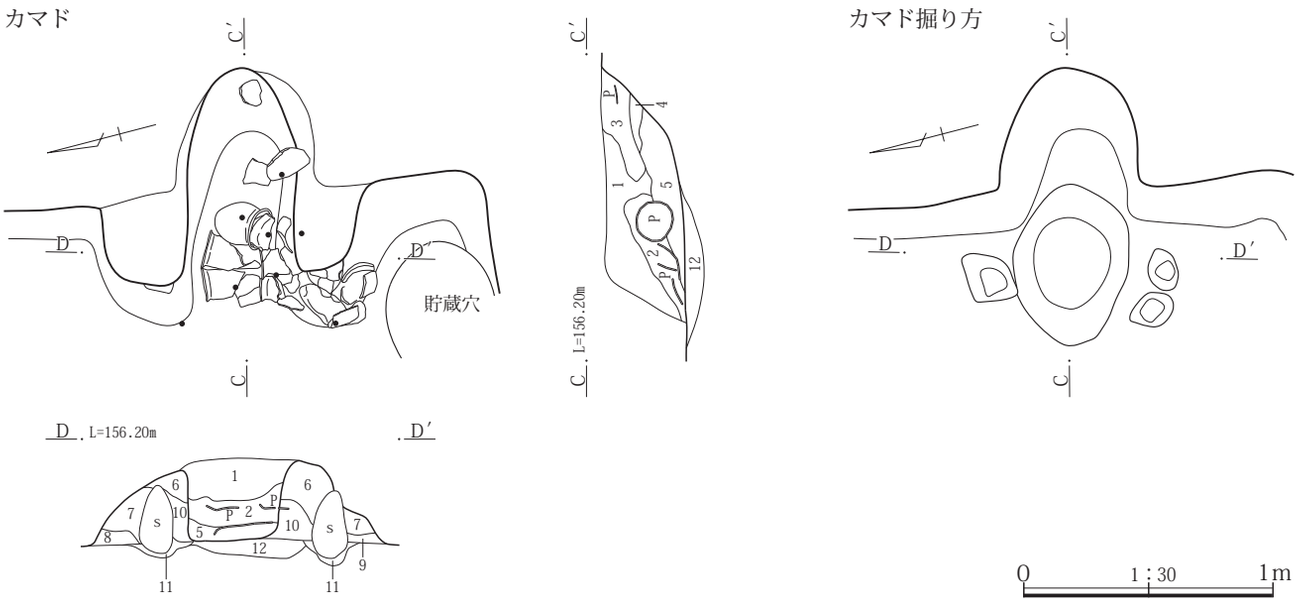
掘り方　貼床は確認されなかったが、床下土坑３基を検出している。１号床下土坑は楕円形を呈し、規模は径0.63×0.60m、深さ17㎝を測る。２号床下土坑は楕円形を呈し、規模は径0.94×0.77㎝、深さ26㎝、３号床下土坑は楕円形を呈し、径1.38×1.17m、深さ40㎝を測る。



178号竪穴建物　貯蔵穴
1　黒褐 10YR3/1　炭化物片３％、灰と焼土を全体的に含み、やや粘性がある。
2　灰黄褐 10YR4/2　褐色土を10％、粘性がある。

178号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/4　基質土に泥流土を含むため、やや黄色味おびる。As-C・泥流土粒の混入多く、炭化物粒・焼土粒などを多く含み、しまりごく強い細粒土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土をやや多く炭化物、焼土を若干含み、
3　黒褐 10YR2/2　しまりが強い細粒弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　泥流土粒主体、粗粒でややザラザラした感触。

第214図　178号竪穴建物遺構図（１）



178号竪穴建物　カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒・焼土粒を不均等に含み、ややしまりが強い微粘性土。上半一部に灰の縞状堆積あり。中央凹み部分はややしまり弱く、掛口部分だった可能性。
2　暗褐 10YR3/4　泥流土・不明瞭な焼土ブロックを不均等に多量に含み、しまりが強い微粘性土。
3　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土ブロックを多量に含み、ややしまりが強い土。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、ややしまりが弱い粘性土。
5　灰褐 7.5YR4/2　灰混じりの細粒土が基質、不明瞭な焼土小ブロックを多量に含み、ややしまりが弱い。
6　暗褐 10YR3/3　泥流土中の大粒パミスを多量に焼土を若干含み、しまりが強い。
7　灰黄褐 10YR4/2　細粒の泥流土ブロックを多量に焼土を含む、粘性土。
8　にぶい黄褐 10YR4/3　細粒泥流土主体、黒色灰も不均等に含み、しまりが強い粘性土。
9　灰黄褐 10YR4/2　黒褐土と不明瞭な泥流土の混土、灰を多く含む。
10　灰褐 7.5YR4/2　不揃いの焼土粒をやや多く灰を含み、しまりが強い細粒土。
11　暗褐 10YR3/4　袖石を止めたとみられる細粒微粘性土。しまりが強い。
12　暗褐 10YR3/4　焼土粒を若干含む。

第215図　178号竪穴建物遺構図（２）

壁溝　西壁の南半、南壁、東壁下で検出している。規模は幅18～30㎝、深さ６～16㎝を測る。

柱穴　残存する北西部と南西部から各１本、南東部から２本を検出している。各柱穴とも断面で柱痕か抜き取り痕が確認されている。形状と規模は以下のとおりである。

Ｐ１、形状：楕円形、規模：径47×40㎝、深さ70㎝
Ｐ２、形状：楕円形、規模：径53×27㎝、深さ62㎝
Ｐ３、形状：楕円形、規模：径47×40㎝、深さ68㎝
Ｐ４、形状：楕円形、規模：径47×42㎝、深さ86㎝

柱穴間距離は柱穴Ｐ１～Ｐ３が2.33m、Ｐ３～Ｐ２が2.38m、Ｐ３～Ｐ４が2.80mを測る。

貯蔵穴　検出されなかった。

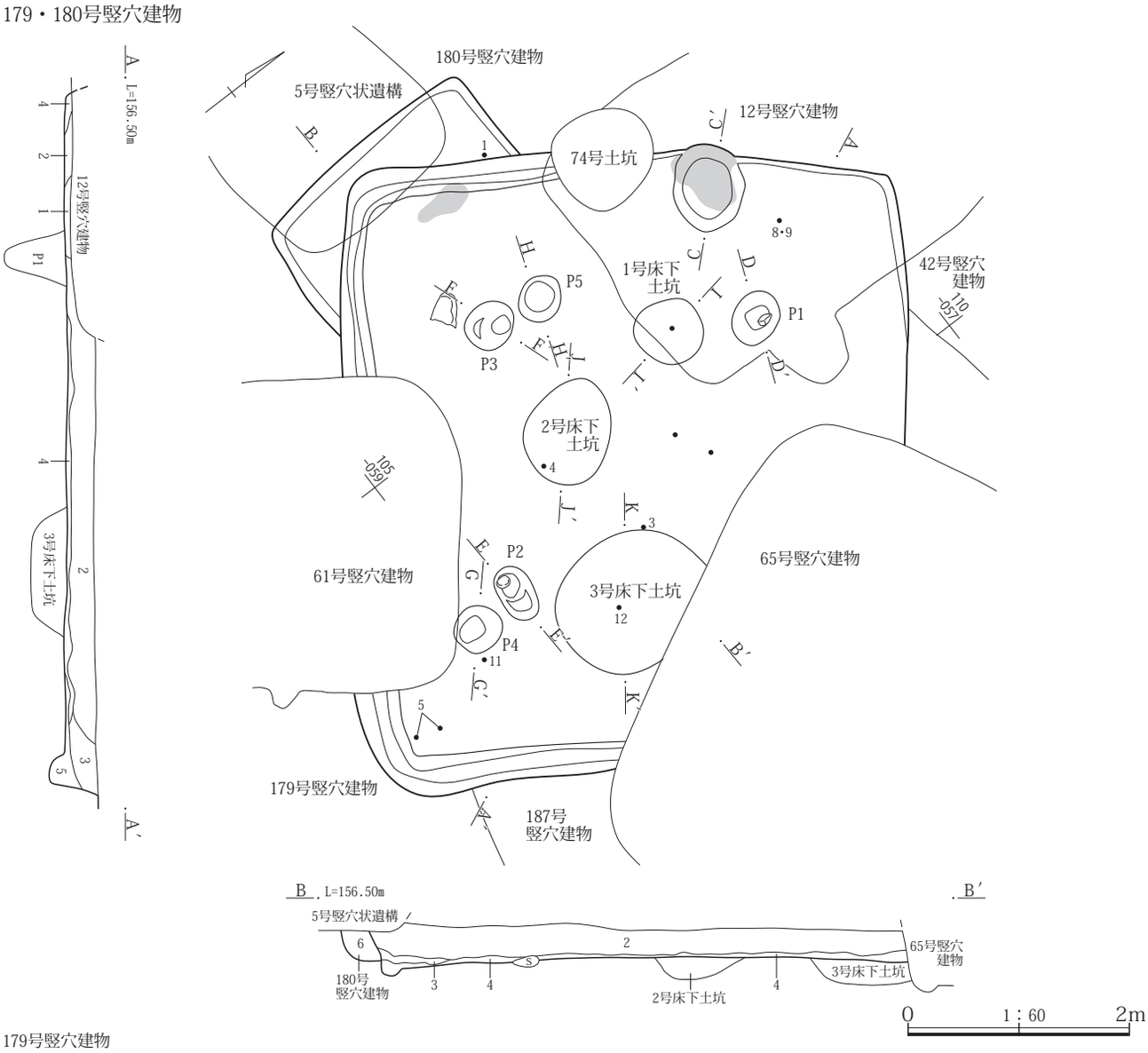
その他施設　柱穴Ｐ３の西側で径45×37㎝、深さ19㎝のピットＰ５を検出している。当初は柱穴Ｐ２に対応する柱穴の可能性も窺えたが、柱穴に比べて浅いことから他の用途と想定された。

火処　西壁の中央よりやや北側でカマドとみられる痕跡を検出している。ここでは浅い落ち込みと焼土が床面から壁面に広がった状態であったことから判断されたが、他の場所でも焼土が確認されており、必ずしもカマドとは断定できない。なお、規模は0.78×0.63mを測る。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、手捏ね土器、灰釉陶器などが出土している。このうち、４の土師器杯、５の土師器椀、８～11の土師器甕が床面からの出土である。なお、６の土師器杯は所謂「内斜口縁部杯」である。今回の発掘調査では希少な個体であるが、本竪穴建物に共伴するものではなく、埋没過程での混入である。

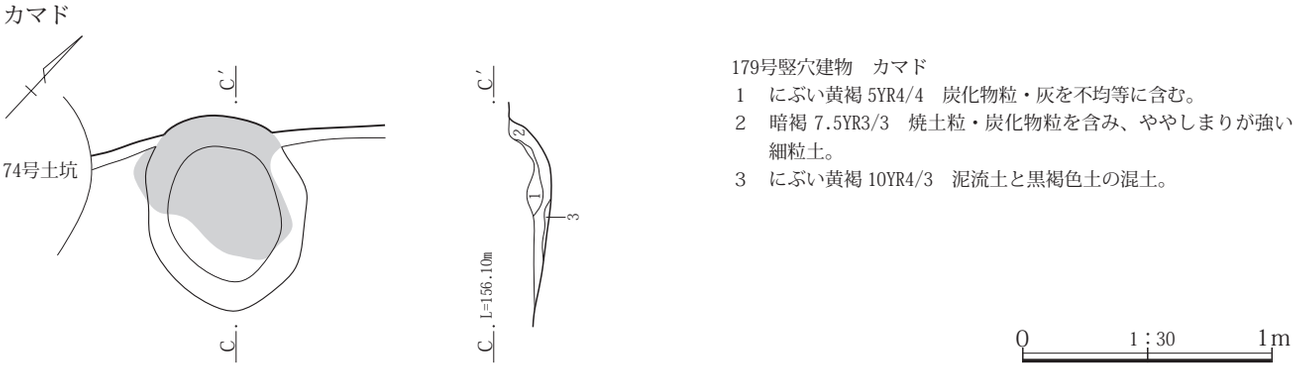
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器甕から６世紀末から７世紀前半に比定できる。

179・180号竪穴建物



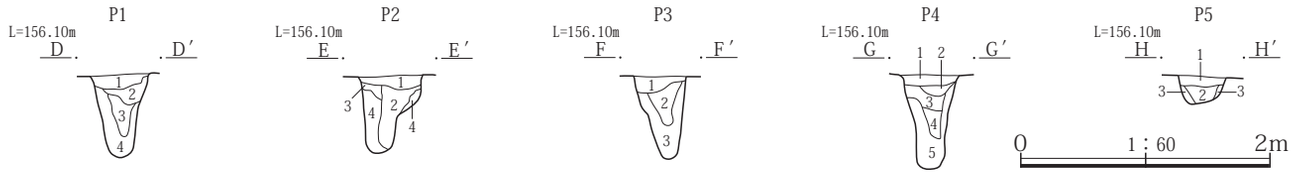
179号竪穴建物
1　黒褐 10YR2/2　黒色灰の混入多い、ややしまりを欠く。焼土ブロック混土、。
2　暗褐 10YR3/3　As-C・泥流土粒を多く焼土粒・炭化物を不均等に含み、しまりが強い。
3　黒褐 10YR3/3　不明瞭な泥流土の混土で若干黄色味をおび、ややしまりがある。
4　暗褐 10YR3/2　灰を全体的に床面直上に炭化物を多く含み、細粒弱粘性土でややサラサラした感触。
5　灰黄褐 10YR4/2　基質土は黒色味おびる細粒土、全体的に黒色味が強い。泥流土を多く含み、しまりが強い細粒土でサラサラした感触。
180号竪穴建物
6　暗褐 10YR3/3　上半では179号竪穴建物２と区別がつかない。下半に泥流土を多く含み、しまりが強い微粘性土。

カマド

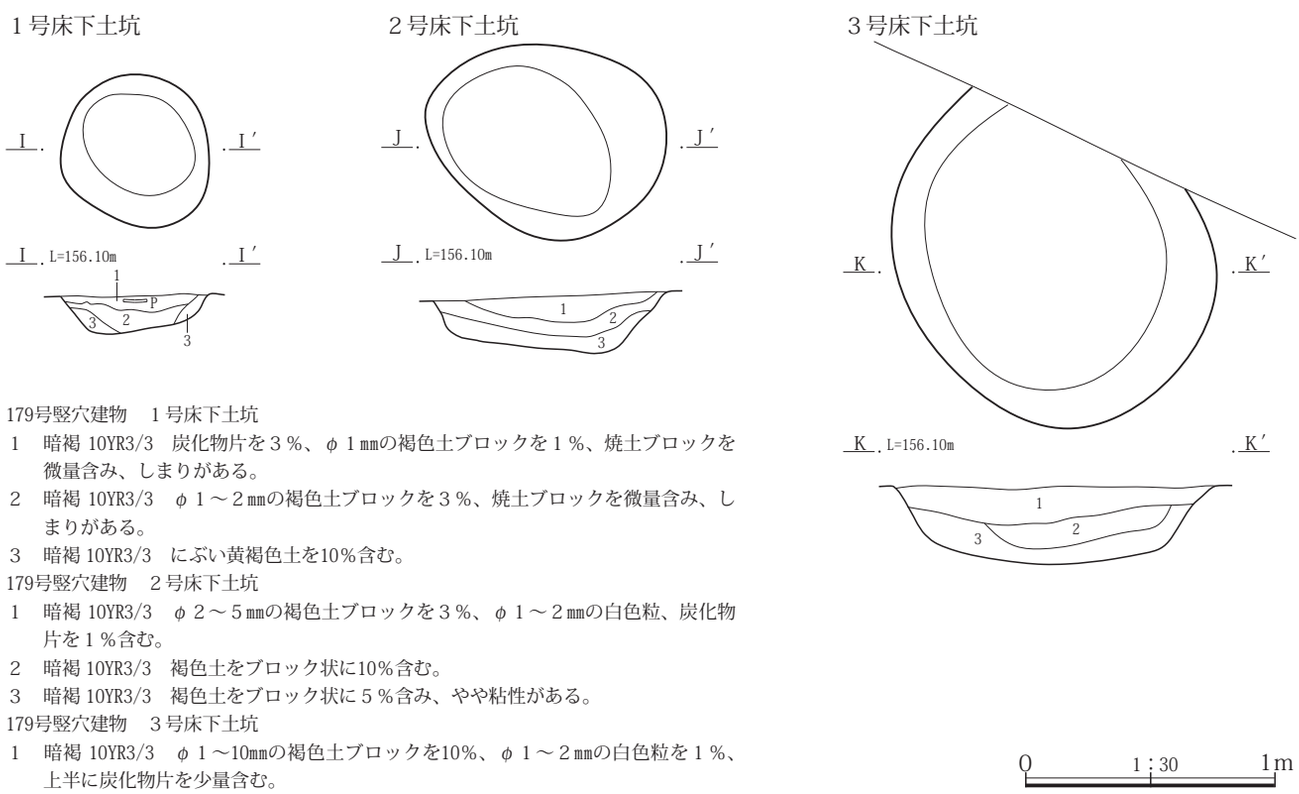


179号竪穴建物　カマド
1　にぶい黄褐 5YR4/4　炭化物粒・灰を不均等に含む。
2　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒・炭化物粒を含み、ややしまりが強い細粒土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土と黒褐色土の混土。

第216図　179・180号竪穴建物遺構図



179号竪穴建物　Ｐ１
1　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土がブロック状に５％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土を30％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％含み、やや柔らかく粘性がある。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土を５％含み、やや粘性がある。
179号竪穴建物　Ｐ２
1　暗褐 10YR3/3　φ1㎜の白色粒、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物片、φ１㎜の焼土ブロックを微量に含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土を斑状に30％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含み、やや粘性がある。
179号竪穴建物　Ｐ３
1　暗褐 10YR3/3　φ２～5㎜の褐色土ブロックを３％、φ１～２㎜の白色粒、炭化物片を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％含み、ややもろい。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土を３％含み、しまりがあり粘性がある。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土を20％含み、しまりがあり粘性がある。
179号竪穴建物　Ｐ４
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロック、炭化物片を２％、焼土ブロックを微量含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土を20％含み、やや柔らかく粘性がある。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土を20％含み、しまりがあり、やや柔らかく粘性がある。
179号竪穴建物　Ｐ５
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを３％、φ１㎜の焼土ブロックを微量含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％含む。



179号竪穴建物　１号床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　炭化物片を３％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％、焼土ブロックを微量含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを３％、焼土ブロックを微量含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土を10％含む。
179号竪穴建物　２号床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを３％、φ１～２㎜の白色粒、炭化物片を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含み、やや粘性がある。
179号竪穴建物　３号床下土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを10％、φ１～２㎜の白色粒を１％、上半に炭化物片を少量含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％、焼土ブロックを微量含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含み、やや粘性がある。

第217図　179号竪穴建物遺構図

180号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37105～37107、Ｙ＝-85060～-85061に位置する。重複関係にある179号竪穴建物によって大部分を欠く。

重複関係　179号竪穴建物、５号竪穴状遺構と重複関係にある。新旧関係は５号竪穴状遺構より本竪穴建物のほうが古い。179号竪穴建物との関係は明確ではないが、本竪穴建物のほうが古いとみられる。

形状　残存する範囲から方形または長方形を呈すると想定される。

規模　南北方向は2.32m、東西方向は残存範囲で1.22mを測る。確認面から床面までの壁高は27～35㎝を測る。

床面積　残存範囲内で1.93㎡を測る。

主軸方位　北方向と仮定するとＮ－３°－Ｗを指す。

埋没状態　残存範囲が狭く、土層断面では暗褐色土だけしか観察されていない。この埋没土も重複関係にある179号竪穴建物との区分が判然としなかったため、埋没状態の判断はできない。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。

出土遺物　遺物の出土は確認されていないが、埋没土上位から１の須恵器杯が出土している。この杯は底部切り離し技法が回転ヘラ起こしによるもので８世紀前代の年代観が与えられる。しかし、重複関係にある179号竪穴建物は６世紀末から７世紀前半に比定できることから齟齬が生じることになる。そのため、この土器の出土位置からは後の混入と判断される。

所見　本竪穴建物の存続期間は、遺物が出土していないため判然としないが、重複関係にある179号竪穴建物の時期である７世紀前半代以前としておく。

181号竪穴建物

位置　１区調査区中央部の東寄り、Ｘ＝37077～37078、Ｙ＝-85047～-85049に位置する。重複関係にある153号竪穴建物、167号竪穴建物によって南側を欠く。

重複関係　153号竪穴建物、167号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は153号竪穴建物、167号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈す。

規模　東西方向は2.28m、南北方向は残存範囲で1.18mを測る。確認面から床面までの壁高は６～28㎝を測る。

床面積　残存範囲内で1.88㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－10°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

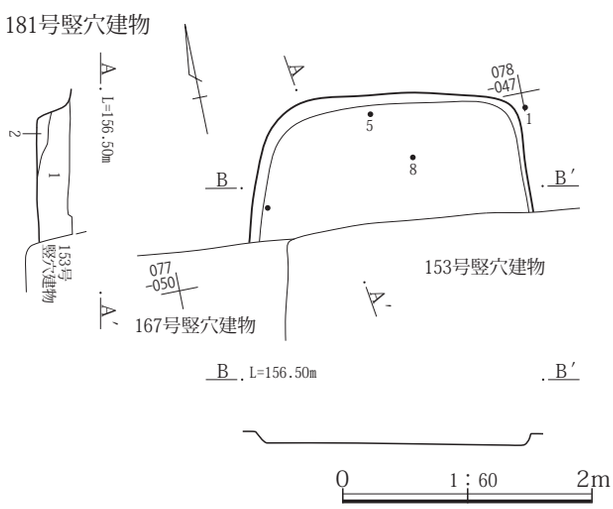
壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった

火処　本竪穴建物の残存範囲では検出されなかった。なお、出土遺物から８世紀代に比定できるが、この時期の竪穴建物の火処としてはカマドが構築されているのが一



181号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒、As-Cを霜降状にやや多く炭化物粒・焼土粒を含み、しまりごく強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土ブロックを不均等に炭化物・焼土粒を含み、しまりが強い粘性土。

第218図　181号竪穴建物遺構図

般的であるが、本竪穴建物は遺構の規模からみても火処が構築されなかった可能性も高い。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。出土した土器は床面または床面に近いものが存在しなかった。最も下位から出土したものは１の須恵器杯蓋である。なお、２の須恵器皿、４・５の須恵器椀はその形態からほぼ同時期の年代観が与えられるが、これらの土器は重複関係にある153号竪穴建物とも同様であることから、153号竪穴建物からの混入の可能性も想定できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に本竪穴建物に共伴するものがみられないため判然としない。出土した遺物も重複関係にある竪穴建物からの混入とみられるものが多いため判断が難しい。そのため、重複関係にある竪穴建物の年代から８世紀前半代に比定したい。

182号竪穴建物

位置　１区調査区中央部南寄り、Ｘ＝37070～37074、Ｙ＝−85044～−85048に位置する。東辺側から南東部を重複関係にある１号溝と７号溝によって欠く。

重複関係　１号溝、７号溝とその位置関係から144号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は１号溝、７号溝より本竪穴建物のほうが古い。144号竪穴建物とは遺構確認時においては不明であったが、出土遺物から本竪穴建物のほうが新しい。

形状　長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向と想定される東西方向は残存範囲で2.90m、南北方向は2.96mを測る。確認面から床面までの壁高は15～55㎝を測る。

床面積　残存範囲内で6.85㎡、推定で9.19㎡を測る。

主軸方位　Ｎ−112°−Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では、壁際から順次土砂が流れ込み、埋没した様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

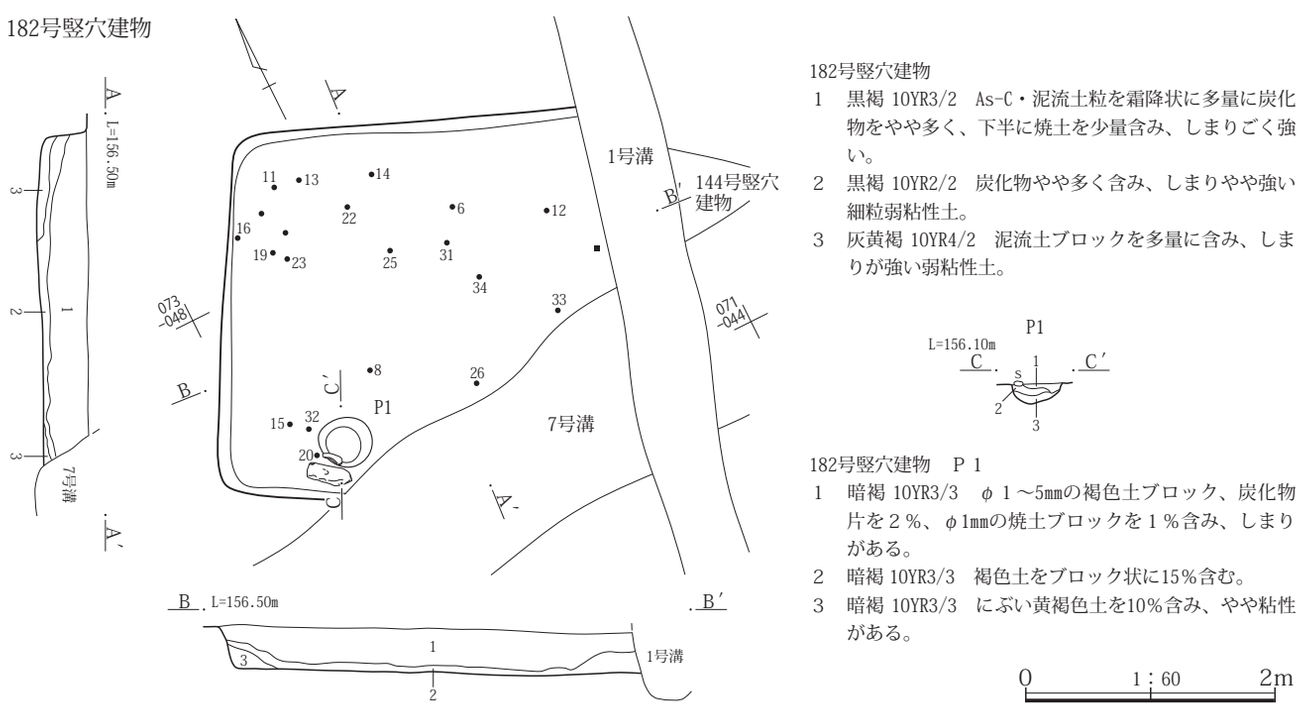
掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　南西部の南壁から0.25m、西壁から0.80mの位置でＰ１を検出している。形状は楕円形を呈し、規模は径0.41×0.39m、深さ0.21mを測る。南際からは長さ17㎝、径７㎝の棒状礫が出土している。また、この棒状礫の南側からは長さ36㎝、幅12㎝、厚さ10㎝の亜角礫も出土している。Ｐ１は位置と平面の規模からみると貯蔵穴の可能性も窺えたが、深さが21㎝と浅いため断定に



第219図　182号竪穴建物遺構図

は至っていない。

火処　残存範囲では検出されなかった。出土遺物からはカマドが構築されていると想定され、７号溝と重複する位置に存在したと想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・盤・長頸壺・横瓶・壺・甕、灰釉陶器椀などが出土している。このうち、23の須恵器椀が床面より出土しているが、他の遺物は全て床面より10㎝以上上位からの出土である。また、須恵器杯・椀の底部切り離し技法に回転ヘラ削りによるものと回転糸切りによるものとの２通りがみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に共伴するとみられる土器が23の須恵器椀だけのため断定できない点もあるが、８世紀第４四半期に比定したい。

183号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37084～37088、Ｙ＝-85054～-85059に位置する。重複関係にある177号竪穴建物によって南西部を欠く。

重複関係　158号竪穴建物、161号竪穴建物、172号竪穴建物、176号竪穴建物、177号竪穴建物、65号土坑、129号ピットと重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが古い。

形状　南北方向が若干に長いが、ほぼ方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は4.17m、南北方向は4.26mを測る。確認面から床面までの壁高は23～37㎝である。

床面積　推定で15.08㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－105°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　西壁のカマド北側0.5mを除く、残存する各壁下から検出されている。規模は幅が12～20㎝、深さ５～10㎝を測る。

柱穴　各角を結ぶ対角線上から２本（Ｐ２・Ｐ３）とやや内側から２本（Ｐ１・Ｐ４）の４本が検出されている。形状と規模は以下のとおりである。（深さは床面から）

Ｐ１、形状：楕円形、規模：径48×42㎝、深さ58㎝

Ｐ２、形状：楕円形、規模：径46×43㎝、深さ69㎝

Ｐ３、形状：楕円形、規模：径43×42㎝、深さ75㎝

Ｐ４、形状：楕円形、規模：径32×29㎝、深さ55㎝

なお、柱穴間距離は柱穴Ｐ１～Ｐ２が1.90m、Ｐ２～Ｐ３が1.75m、Ｐ３～Ｐ４が2.10m、Ｐ４～Ｐ１が1.70mを測る。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　柱穴Ｐ４の南側からピット状の落ち込みＰ５が検出されている。このピットは形状が円形、規模が径49×48㎝、深さ22㎝を測る。内部は埋め戻されたのか水平な堆積が確認され、遺物等の出土はみられなかった。

火処　西壁の中程よりやや南にカマドが構築されている。残存状態は燃焼部左側壁を重複関係にある177号竪穴建物によって欠く。焚口と燃焼部の天井は壊されて、燃焼部天井に補強として使用されていた５と６の土師器甕が火床面に落とされた状態であった。なお、側壁は壁内に構築されていたとみられる袖は取り除かれていたが、補強に使用された土師器甕をかけるための棒状礫は据えられたまま残っていた。規模は全長0.70m、幅0.58m、燃焼部幅0.50mを測る。燃焼部の奥側半分と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部と煙道部の間には10㎝ほどの段が設けられ、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。なお、燃焼部火床は顕著な焼土面が確認される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、棒状礫などが出土している。このうち、１の土師器杯、７・８の土師器甕が床面から、５・６・９の土師器甕、10の手捏ね土器がカマドからの出土である。この他、棒状礫は南東角寄りと柱穴Ｐ３の南の床面から14点と３点がまとまって出土している。この棒状礫は形状と出土状態から菰編み石として使用されたとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器杯や甕から６世紀末から７世紀前半に比定できる。

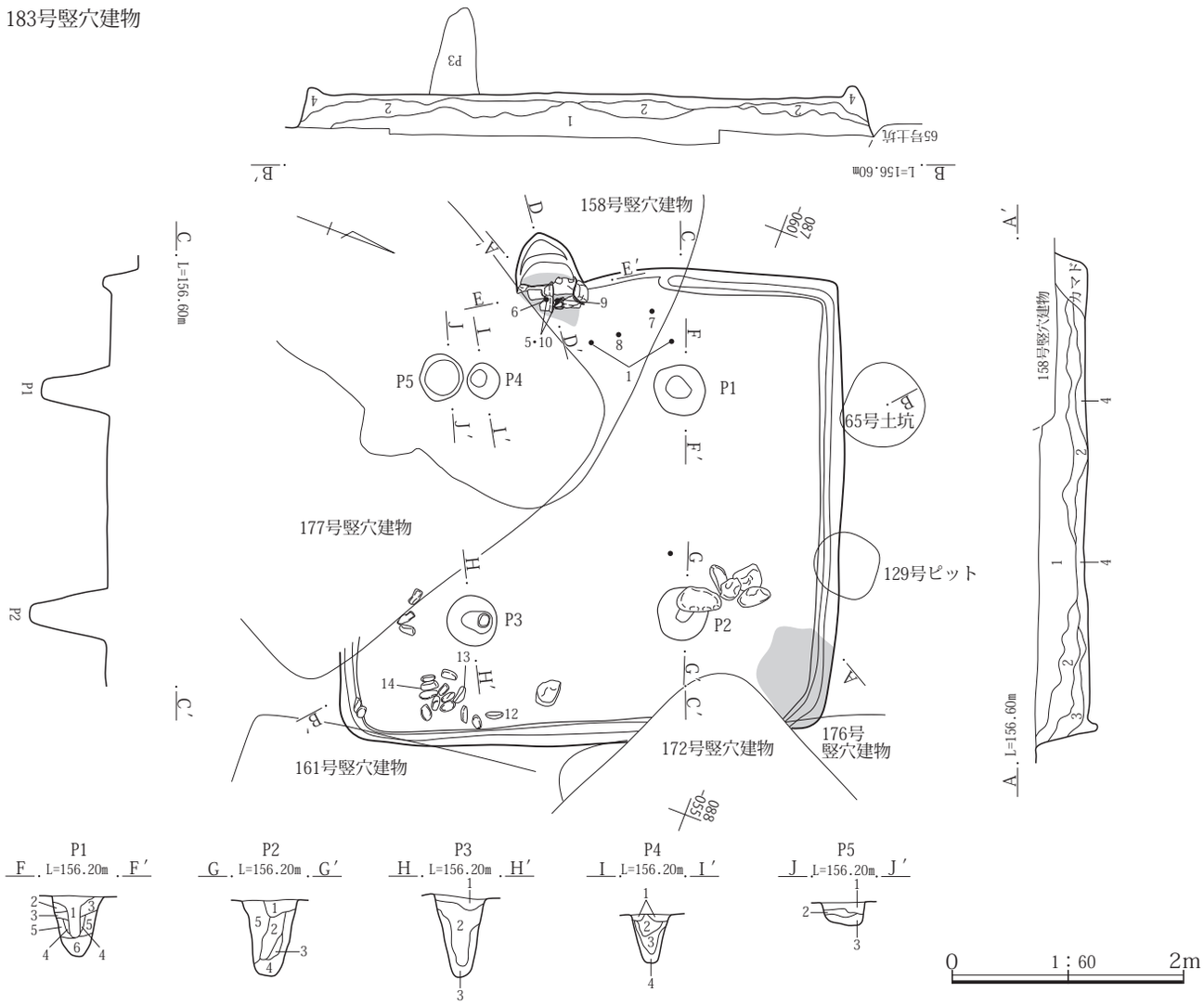
184号竪穴建物

位置　１区調査区東部、Ｘ＝37086～37089、Ｙ＝-85045～-85048に位置する。重複関係にある15号竪穴建物、126号竪穴建物によって北半の多くを欠く。

重複関係　15号竪穴建物、126号竪穴建物、141号ピットと重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が古い。

形状　残存する範囲から方形または長方形を呈すると想定される。

183号竪穴建物



183号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状にやや多く一部で灰のかたまりを薄層状に焼土粒、炭化物粒を不均等に含み、しまりが強い。

2　灰黄褐 10YR4/2　多量の泥流土をブロック状に不均等に含む、細粒弱粘性土。

3　暗褐 7.5YR3/3　不明瞭な焼土を多量に下半に炭化物を多く含み、ややしまりが弱い細粒土。人為的埋め戻し土か。

4　黒褐 10YR2/2　不均等に黒色灰や炭化物を含む、粘性土。

183号竪穴建物　Ｐ１

1　黒褐 10YR2/3　φ１～３㎜の褐色土ブロックを２％、φ１～２㎜の白色粒、炭化物片を１％含み、しまりがある。

2　黒褐 10YR2/3　褐色土をブロック状に10％、φ１～２㎜の白色粒を１％含む。

3　暗褐 10YR3/4　褐色土をブロック状に20％含み、やや柔らかい。

4　暗褐 10YR3/3　褐色土を５％含み、やや粘性がある。

5　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含み、やや粘性がある。

6　にぶい黄褐 10YR4/3　粘性がある。

183号竪穴建物　Ｐ２

1　黒褐 10YR2/3　褐色土をブロック状に５％、φ１㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。

2　暗褐 10YR3/3　褐色土を５％含み、やや粘性がある。

3　暗褐 10YR3/3　しまりがありやや粘性がある。

4　黒褐 10YR2/3　しまりがありやや粘性がある。

5　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％含み、若干柔らかい。

183号竪穴建物　Ｐ３

1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％、φ１～２㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。

2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを20％と砂状土を一部に含み、やや粘性がある。

3　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土を10％含み、やや粘性がある。

183号竪穴建物　Ｐ４

1　黒褐 10YR2/3　褐色土をブロック状に３％、炭化物片を１％含み、しまりがありやや粘性がある。

2　黒褐 10YR2/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを10％含み、しまりがありやや粘性がある。

3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含み、。しまりがありやや粘性がある。

4　灰黄褐 10YR4/2　褐色土がブロック状に10％含み、しまりがありやや粘性がある。

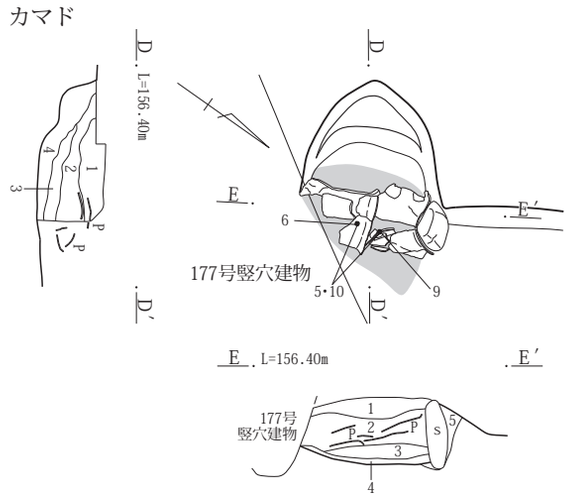
183号竪穴建物　Ｐ５

1　黒褐 10YR2/3　φ１～３㎜の褐色土ブロックを３％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。

2　にぶい黄褐 10YR4/3　しまりがありやや粘性がある。

3　暗褐 10YR3/4　砂状土、やや粘性がある。

第220図　183号竪穴建物遺構図（１）



183号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、焼土粒や下半に不明瞭な泥流土小ブロックを含み、ややしまりが強い微粘性土。
2　褐 7.5YR4/4　泥流土を主体、黒褐色土や焼土小ブロックを含み、しまりが強い粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　焼土・炭化物も少量含み、ややしまりが強い粗粒土でザラザラした感触。
4　暗褐 10YR3/4　不明瞭な泥流土。焼土・灰などを多く含み、ややしまりが弱い。
5　暗褐 10YR3/3　泥流ブロックを含み、ややしまりが強い弱粘性土。

0　1：30　1m

第221図　183号竪穴建物遺構図（２）

規模　南北方向は2.24m、主軸方向の東西方向は残存範囲で2.22mを測る。確認面から床面までの壁高は20～34㎝を測る。

床面積　残存範囲内で2.16㎡を測る。

主軸方位　北方向と仮定するとＮ－173°－Ｗを指す。本遺跡のなかでは数少ない南辺にカマドが構築されている竪穴建物である。

埋没状態　残存範囲が狭く、土層断面の観察が十分できないが、周囲から流れ込んだ様子が窺えることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　南壁のほぼ中央にカマドが構築されている。残存状態は上部をこわされているが、両袖の下部は残存していた。規模は全長0.40m、幅0.76m、燃焼部幅0.23mを測る。カマド前には焼土が広がり、焚口の天井に掛けられていたとみられる礫が出土していた。

出土遺物　遺物は土師器杯・壺・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。出土した遺物のほとんどは埋没土からであるが、６の土師器甕が床面からの出土である。なお、本竪穴建物で図示した遺物には６の土師器甕が６世紀後半、１～５の土師器杯、須恵器杯・椀が８世紀代の年代観が与えられる。３の須恵器椀は底部から体部片であるが、コップ形を呈すると想定できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土している土師器甕から６世紀後半に比定できる。

185号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37081～37084、Ｙ＝-85047～-85050に位置する。重複関係にある157号竪穴建物、170号竪穴建物によって南半を欠くが、微かに南辺の痕跡が170号竪穴建物内に残存していたことから範囲が想定されている。

重複関係　157号竪穴建物、170号竪穴建物、178号竪穴建物、186号竪穴建物、１号掘立柱建物、169号土坑、79号土坑と重複関係にある。新旧関係は186号竪穴建物、１号掘立柱建物より本竪穴建物のほうが新しく、他の重複関係にある遺構よりは古い。なお、出土遺物からみると178号竪穴建物、186号竪穴建物との新旧関係には齟齬が生じる。

形状　東西方向が長い台形を呈す。

規模　主軸方向南北西方向が2.80m、南北方向が3.24mを測る。確認面から床面までの壁高は10㎝前後である。

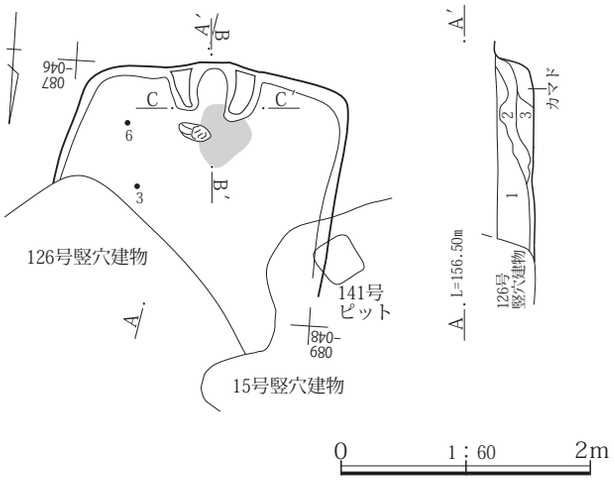
床面積　8.27㎡を測る。

主軸方位　ほぼ北を指す。

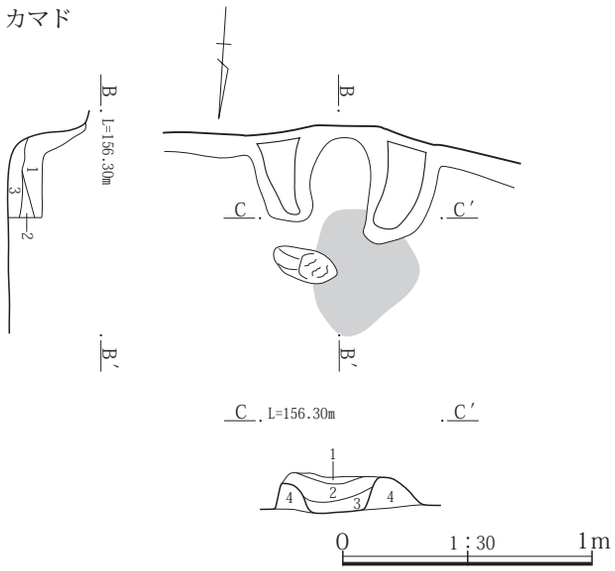
埋没状態　土層断面の観察が短い範囲しかできなかったため不明である。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

184号竪穴建物



カマド



184号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を不均等にやや多く焼土粒・炭化物粒を少量含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な焼土を多く不均等に炭化物、灰を含み、ややしまりが強い微粘性土。
3　黒褐 10YR2/2　黒色灰・炭化物を含み、ややしまりが弱い粗粒粘性土。

184号竪穴建物　カマド
1　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒を含み、ややしまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土の混入、しまりも強い。
3　黒褐 10YR3/2　黒色灰を含み、ややしまりが強い微粘性土でややネットリした感触。
4　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色細粒と泥流土ブロックの混土、しまりが強い。

第222図　184号竪穴建物遺構図

掘り方　貼床などの施設は検出されなかった。竪穴中央よりやや東で床下土坑が検出されている。この床下土坑はやや歪んだ楕円形を呈し、規模は長径0.97m、短径0.67m、深さ0.21mを測る。内部から土器などは出土していない。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　北壁中央より東寄りにカマドが構築されている。残存状態は竪穴内の構築物、壁外の燃焼部から煙道部にかけての天井は失われていた。規模は全長0.75m、幅0.60mを測る。燃焼部と煙道部の間には高さ８㎝ほどの段が設けられていた。土層断面では顕著な焼土層が２面確認されており、燃焼部火床面と崩落した天井部面とみられ、焼土の状態から比較的長期か高い頻度で煮炊きが行われてことが窺える。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甕、灰釉陶器、土製品土錘、鉄製品鏃釘などが出土している。このうち、２の須恵器皿、３の須恵器杯、６の須恵器椀、７の須恵器盤、10の土師器甕が床面からの出土であるが、７の須恵器盤は８世紀代の年代観が与えられることから本竪穴建物に共伴するものとは判断できない。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土している須恵器皿・杯・椀、土師器甕から９世紀第３四半期から第４四半期に比定できる。

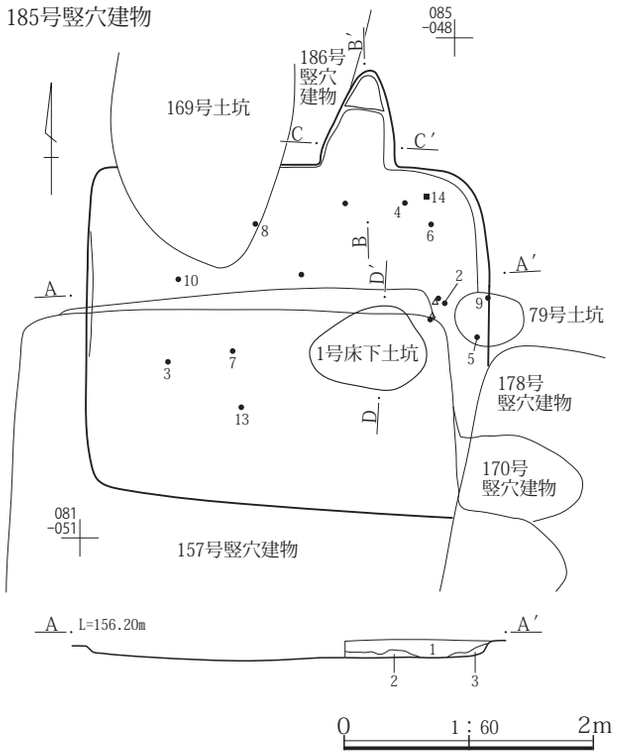
186号竪穴建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37082～37087、Ｙ＝−85048～−85054に位置する。重複関係にある185号竪穴建物、と169号土坑によって東側の大半と161号竪穴建物によって北西部半を欠く。

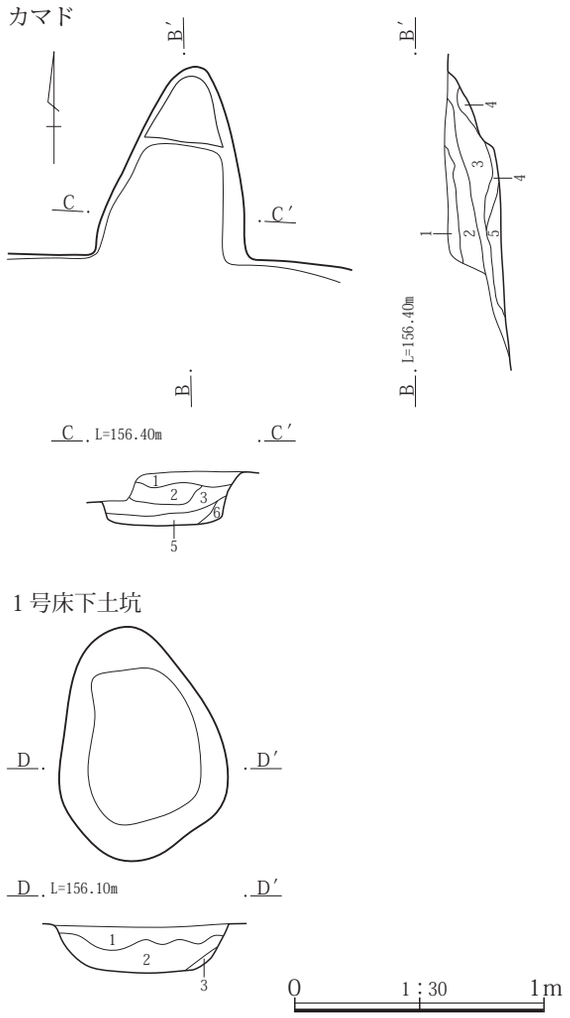
重複関係　157号竪穴建物、161号竪穴建物、170号竪穴建物、178号竪穴建物、185号竪穴建物、１号掘立柱建物、169号土坑、38号土坑、61号土坑、73号土坑、83号土坑などと重複関係にある。新旧関係は１号掘立柱建物より本竪穴建物のほうが新しく、他の重複関係にある遺構よりは古い。なお、出土遺物からみると重複関係にある竪穴建物との新旧関係には齟齬が生じる。

形状　ほぼ方形に近い形状とみられる。

規模　主軸方向の南北西方向が4.87m、南北方向が4.93mを測る。確認面から床面までの壁高は27～30㎝を



185号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状に焼土粒・炭化物粒をやや多く含み、しまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　白色灰・焼土主体、炭化物を含む黒色灰土をラミナ状に薄く堆積、やや細粒弱粘性土。
3　灰褐 7.5YR4/2　大粒焼土粒や灰・不明瞭な泥流土等多量に含み、しまりが強い粗粒土。



185号竪穴建物　カマド
1　暗オリーブ褐 2.5Y3/3　焼土ブロック・泥流土粒を不均等に少量と炭化物を若干含み、しまりやや強いやや細粒の微粘性土。
2　暗褐 7.5YR3/3　焼土ブロックを不均等にやや多く炭化物と灰をやや多く含み、ややしまりが弱くサラサラした感触。
3　にぶい赤褐 5YR4/3　上半に焼土小ブロック、下半に灰と褐色土を含み、ややしまりの弱いボソボソした感触。
4　黒褐 10YR3/2　黒色灰主体、しまりが弱い細粒弱粘性土。
5　にぶい黄褐 5YR5/4　焼土、被熱による赤変。
6　灰黄褐 10YR4/3　地山の灰褐色土粒を不均等に灰を含み、ややしまりが強い細粒土でサラサラした感触。
185号竪穴建物　１号床下土坑
1　暗褐 7.5YR3/3　不揃いの焼土ブロックを含み、やや細粒土。泥流土を少量む。
2　黒褐 7.5YR/3/2　３に焼土ブロック・灰・泥流土ブロックを不均等に含み、ややしまりが強い。
3　黒褐 10YR3/2　泥流土、焼土粒等わずかに含み、しまりが強い細粒粘性土。

第223図　185号竪穴建物遺構図

測る。

床面積　20.90㎡を測る。

主軸方位　N－３°－Eを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際に三角堆積、内部はレンズ状の堆積が確認できるが、土質は不均等なブロックが多いことから断定はできない。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存する南壁下から西壁下にかけて検出されている。規模は幅が15～20㎝、深さ５㎝前後である。

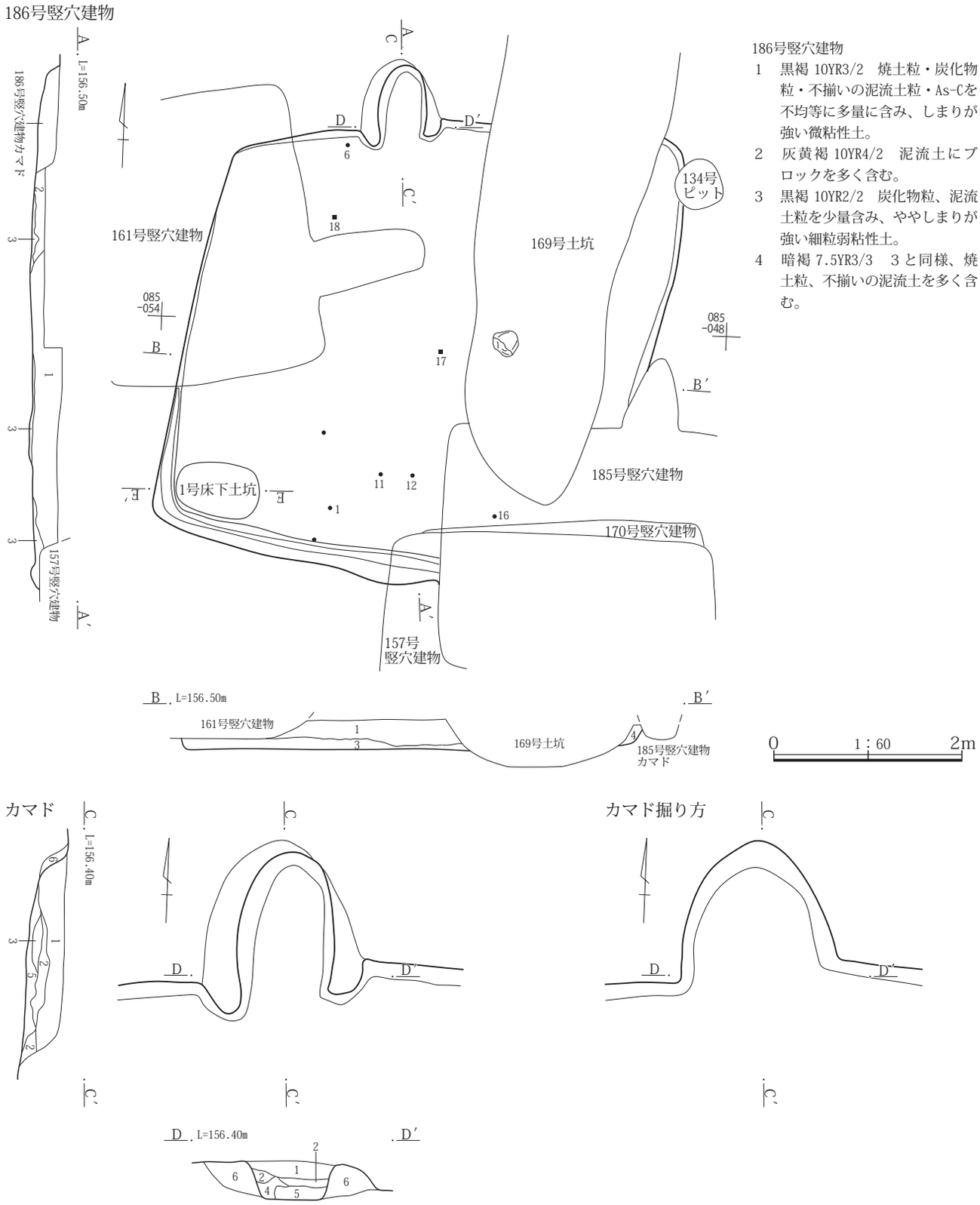
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の南西角寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、燃焼部袖は若干残存していた。規模は全長0.92m、幅1.00m、燃焼部幅0.35mを測る。燃焼部の大半から煙道部は壁外に存在し、

186号竪穴建物



186号竪穴建物

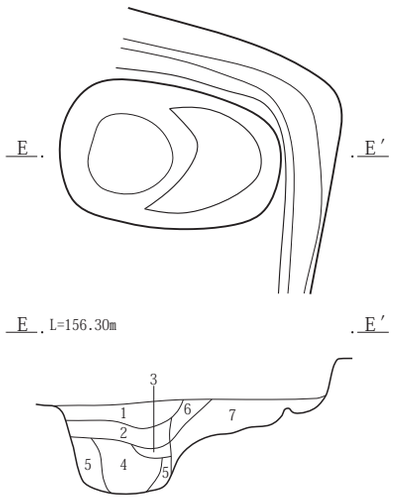
1　黒褐 10YR3/2　焼土粒・炭化物粒・不揃いの泥流土粒・As-Cを不均等に多量に含み、しまりが強い微粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　泥流土にブロックを多く含む。
3　黒褐 10YR2/2　炭化物粒、泥流土粒を少量含み、ややしまりが強い細粒弱粘性土。
4　暗褐 7.5YR3/3　３と同様、焼土粒、不揃いの泥流土を多く含む。

186号竪穴建物　カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒と焼土粒を少量含み、しまりやや強い微粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　白色灰と不均等な焼土ブロックや泥流土ブロックを含み、しまりやや強い細粒土。
3　にぶい赤褐 5YR5/3　焼土、被熱赤変した泥流土。上半ほど赤色味強い。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　不明瞭な泥流土が主体、一部被熱している。
5　暗褐 10YR3/4　不明瞭な泥流土を不均等に灰を少量含み、ややしまりが強い微粘性細粒土。
6　暗褐 10YR3/3～にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いの泥流土を含み、しまりが強い。

第224図　186号竪穴建物遺構図（１）

１号床下土坑



186号竪穴建物　床下土坑
1　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の焼土ブロックを微量含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　やや柔らかい。
4　黒褐 10YR2/3　褐色土を５％含み、やや柔らかく粘性がある。
5　暗褐 10YR3/3　灰黄褐色土を30％含み、やや柔らかく粘性がある。
6　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを５％含む。
7　暗褐 10YR3/3　灰黄褐色土ブロック、褐色土ブロックを５％、炭化物片を一部含む。

0　1：30　1m

第225図　186号竪穴建物遺構図（２）

壁外の燃焼部も壁内と同様に暗褐色土とにぶい黄褐色土を地山に貼り付けて燃焼部側壁としている。なお、煙道は燃焼部との間に段を設けずに燃焼部火床面から45°ほどの傾斜で立ち上がっている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・椀・瓶・甕・羽釜、灰釉陶器椀、鉄製品釘・棒状製品、流動滓などが出土している。このうち、５の須恵器椀が床面から、６の須恵器椀が床面より８㎝上から、11と12の須恵器羽釜がともに床面より18㎝上からの出土である。これらは本竪穴建物に伴うと判断できる。なお、灰釉陶器は８点出土しているが、小片が多く図示できたのは３点であったが、３点とも大原２号窯式期に比定できることから、これらも共伴すると判断できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面及び床面付近から出土した須恵器椀や羽釜から10世紀第１四半期に比定できる。

187号竪穴建物

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37103～37105、Ｙ＝-85052～-85056に位置する。重複関係にある65号竪穴建物によって大部分を欠く。

重複関係　65号竪穴建物、128号竪穴建物、179号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物の方が古い。しかし、出土遺物からみると179号竪穴建物とは齟齬が生じており、本竪穴建物のほうが新しくなる。

形状　残存範囲から隅丸方形または隅丸長方形を呈すると想定される。

規模　残存範囲での南北方向は2.38m、東西2.73mを測る。確認面から床面までの壁高は19～30㎝を測る。

床面積　残存範囲内で2.63㎡を測る。

主軸方位　北方向と仮定するとＮ－15°－Ｅを指す。

埋没状態　残存範囲での土層断面を観察したところ、壁際の三角堆積が観察できることから自然埋没と判断できる。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲の壁下では検出されている。規模は幅15㎝前後、深さ４～７㎝を測る。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

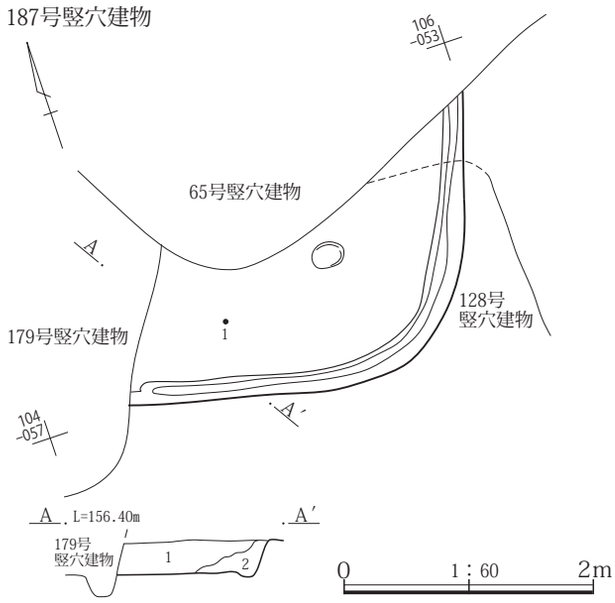
貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土しているが、重複関係にある竪穴建物によって大部分を欠くため出土量は図示１点、未掲載30点とわずかであった。図示した１の須恵器椀は埋没土からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器椀から９世紀第２四半期に比定できる。



187号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　大粒泥流土粒を多くAs-Cを霜降状に焼土を若干含み、ややしまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土をブロック状に含み、しまりが強い微粘性土。

第226図　187号竪穴建物遺構図

188号竪穴建物

位置　２区調査区南東端、Ｘ＝36950～36953、Ｙ＝-84998～-85002に位置する。東辺側と南辺側は調査対象区外に存在する。また、撹乱によって一部を欠く。

重複関係　未調査部分が多く存在するが、他の遺構との重複関係は確認されていない。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　調査範囲では南北方向3.18m、東西方向3.55mを測る。確認面から床面までの壁高は７～18cmを測る。

床面積　残存範囲内で8.89㎡を測る。

主軸方位　南北方向を主軸方向とするとＮ－９°－Ｗを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため判然としない。

床面　凹凸が多く見られ、一部に黒褐色土を充填しているとみられるが、ほとんどは地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲では西壁際で北西角から1.5mほど検出されている。規模は幅10～15cm、深さ８～12cmを測る。

柱穴　調査範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲では検出されなかった。

その他施設　調査範囲では検出されなかった。

火処　調査範囲では検出されなかった。出土遺物からはカマドが構築されている時期であることから、東壁にカマドが構築されていると想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、瓦などが出土している。このうち、２の須恵器杯蓋と４の土師器甕が床面からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器甕から８世紀第４四半期に比定できる。なお、１の土師器杯や４の須恵器椀は２の土師器甕よりやや古い年代観が与えられることから、竪穴建物の構築は８世紀第３四半期に想定される。

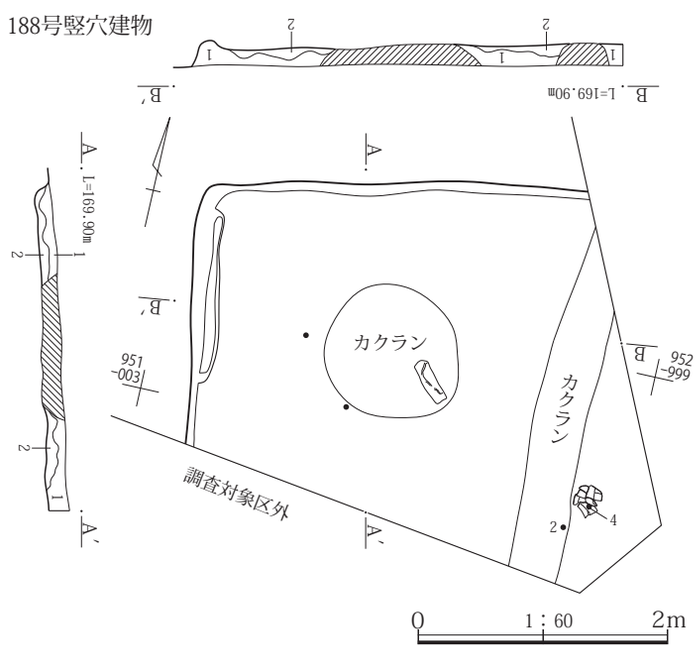
189号竪穴建物

位置　３区調査区北西部、Ｘ＝36934～36940、Ｙ＝-85003～-85009に位置する。西側は調査対象区外に存在する。

重複関係　単独で位置する。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は調査範囲内で3.30m、南北方向は3.96mを測る。確認面から床面までの壁高は12～



188号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　ローム小ブロックを不均等に含み、しまりが弱い細粒土。
2　灰黄褐 10YR4/2　ローム粒・不明瞭なローム土を多く含み、ややしまりが強い。

第227図　188号竪穴建物遺構図

32㎝を測る。

床面積　残存範囲内で6.97㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－92°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際に三角形状に土砂が堆積した後暗褐色土によって短期間に埋没した様子が確認できる。自然埋没によるとみられるが、判然としない。

床面　調査範囲内では若干の凹凸が見られるが、床下土坑部分を除き、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床は検出されなかったが、床下土坑を中央南寄りで検出されている。形状は円形または楕円形を呈すると想定される。規模は径1.10m、深さ0.96mを測る。内部からは２の須恵器杯蓋と11の須恵器鉢が出土している。

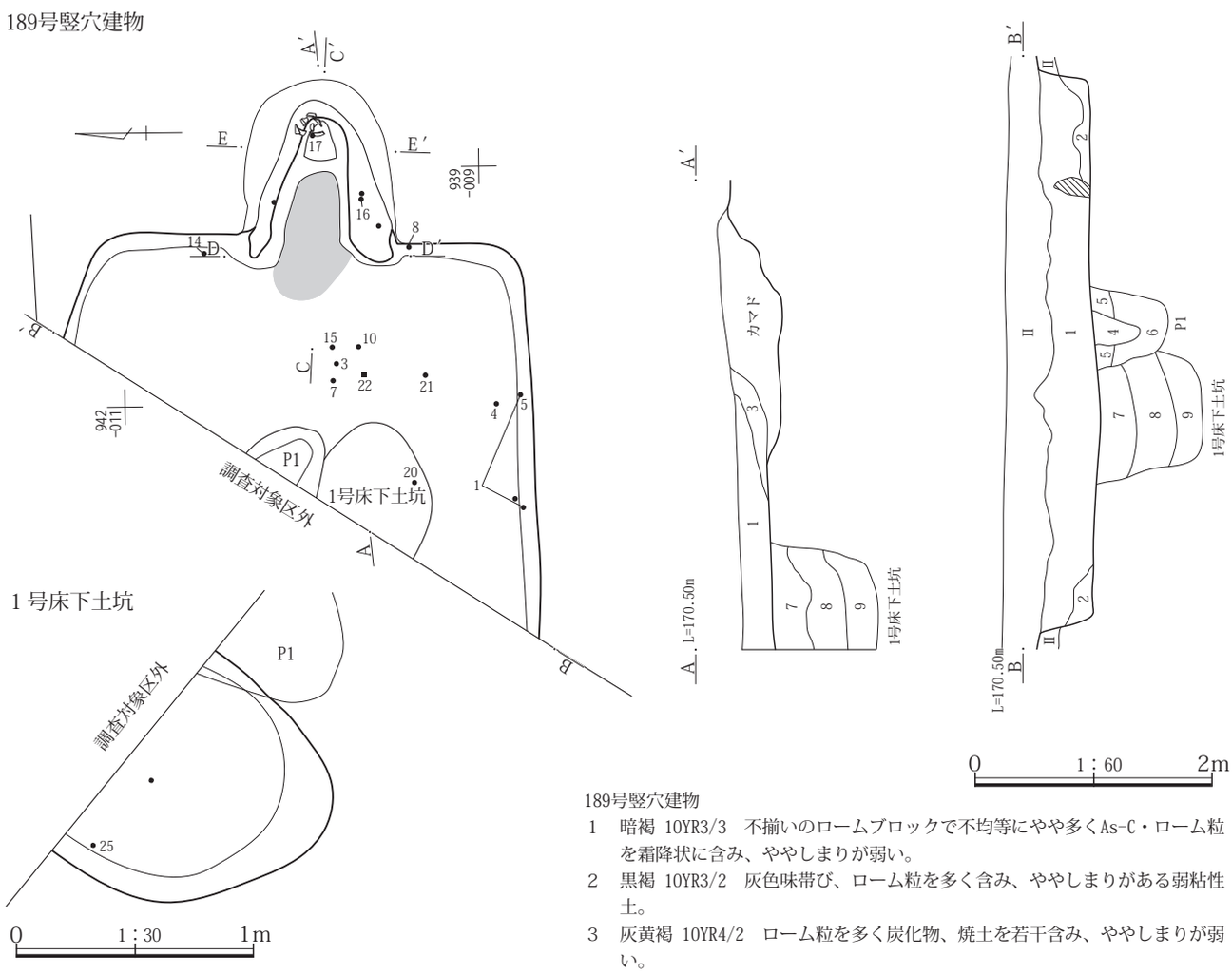
壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では中央でピットを１本検出している。このピットは土層断面では柱痕と見られる状態が確認できることから柱穴と判断している。形状は楕円形を呈し、規模は長軸が調査範囲内で長軸0.50＋αm、短軸0.70m、深さ0.52mを測る。全貌は不明であるが、柱穴の位置から、他に柱穴の存在は窺えないことから竪穴中央に１本を設けた構造と想定される。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口、壁内の両袖、燃焼部から煙道部の天井は失われ



189号竪穴建物床下土坑

7　黒褐 10YR2/3　φ２～10mmのAs-YPブロックを５％含み、上面にやや弱い踏み固めた痕跡。

8　黒褐 10YR2/3　φ２～15mmのAs-YPブロックを10％含む。

9　暗褐 10YR3/3　φ２～20mmのAs-YPブロックを５％含む。

189号竪穴建物

1　暗褐 10YR3/3　不揃いのロームブロックで不均等にやや多くAs-C・ローム粒を霜降状に含み、ややしまりが弱い。

2　黒褐 10YR3/2　灰色味帯び、ローム粒を多く含み、ややしまりがある弱粘性土。

3　灰黄褐 10YR4/2　ローム粒を多く炭化物、焼土を若干含み、ややしまりが弱い。

189号竪穴建物Ｐ１

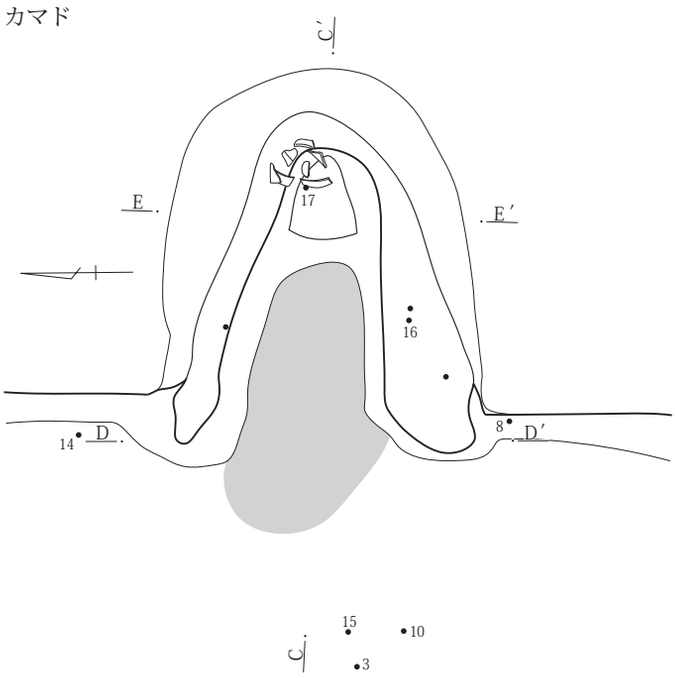
4　黒褐 10YR2/3　柱痕とみられるがしまりやや強い。φ２～30mmのAs-YPブロックを５％含む。

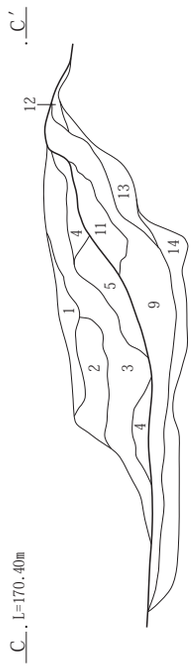
5　黒褐 10YR2/3　φ２～20mmのAs-YPブロックを５％含む。

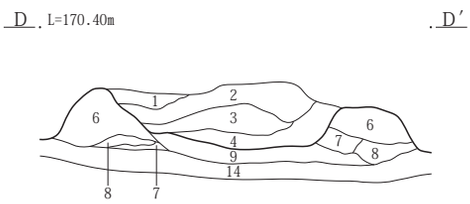
6　暗褐 10YR3/3　φ２～10mmのAs-YPブロックを10％含む。

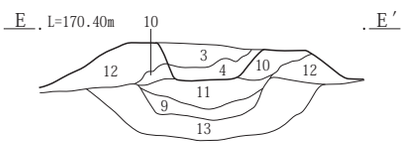
第228図　189号竪穴建物遺構図（１）

カマド





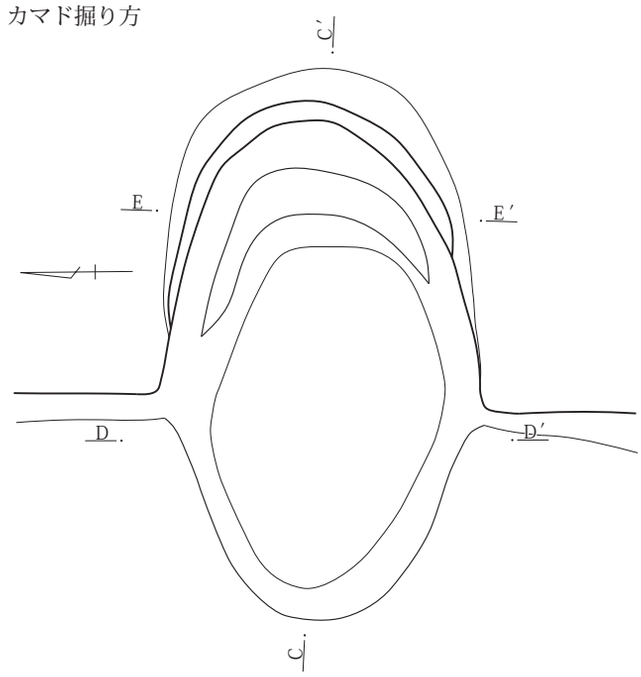




189号竪穴建物　カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-YPとローム土を不均等に含みしまりが弱くサラサラした感触。
2　灰黄褐 10YR4/2　中央に泥流土を多く下半に焼土を多く含み、ややしまりが弱い。
3　黒褐 10YR3/2　灰・炭化物粒を含み、しまりが弱くややサラサラした感触。
4　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土を多く含み、ややしまりが強い。
5　暗褐 10YR3/3　黒色灰を多く焼土を少量含む。
6　黒褐 10YR3/2　ローム粒・As-Cを不均等に少量含む、弱粘性土。
7　にぶい黄褐 10YR4/3　ロームブロックを多量に含み、ややしまりが強い。
8　黒褐 10YR2/2　黒色灰を含み、しまりが弱い非粘性土でフカフカした感触。
9　褐 7.5YR4/3　ローム粒の多く焼土粒も不均等にやや多く含み、しまりが強い粘性土。
10　灰黄褐 10YR4/2　ローム粒とAs-YPを不均等に多く含む、弱粘性土。
11　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土小ブロック主体、しまりが強い。
12　灰黄褐 10YR4/2　ローム粒・ローム小ブロック土を不均等にやや多く焼土を若干含む、微粘性土。
13　灰黄褐 10YR4/2　煙道側の壁構築材とみられるが、地山との区別が不明瞭。
14　褐 7.5YR4/3　ローム土を多く含む、やや不明瞭な床面掘方埋め戻し土。

カマド掘り方



0　1：30　1m

第229図　189号竪穴建物遺構図（２）

た状態であった。規模は全長が1.55m、幅が1.50m、燃焼部幅0.48mを測る。燃焼部奥側半分から煙道部は壁外に存在し、燃焼部火床面と煙道部の間には19㎝の段が設けられていた。掘り方は燃焼部手前に浅い土坑状の掘り方が検出されている。なお、その範囲は壁から0.7mほど中央寄りまで広がっていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・盤・鉢・壺・短頸壺・甕、鉄製品刀子・釘、石製品紡輪などが出土している。このうち、８の須恵器椀、14の須恵器短頸壺蓋、366の鉄製品刀子、367の釘が床面から、17・18の土師器甕がカマドから、２の須恵器杯蓋、11の須恵器鉢､25の石製品紡輪が床下土坑からの出土である。この他、１の須恵器杯蓋、３・４の須恵器杯、７の須恵器椀、10の須恵器盤、15の土師器甕が床面より10㎝前後の高さから出土している。本竪穴建物から出土した須恵器杯・椀は底部切り離し技法や整形がヘラ起こし、またはヘラ削りによるものであることから、20の須恵器椀は後の混入とみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器椀、土師器甕から８世紀代２四半期から第３四半期に比定できる。

190号竪穴建物

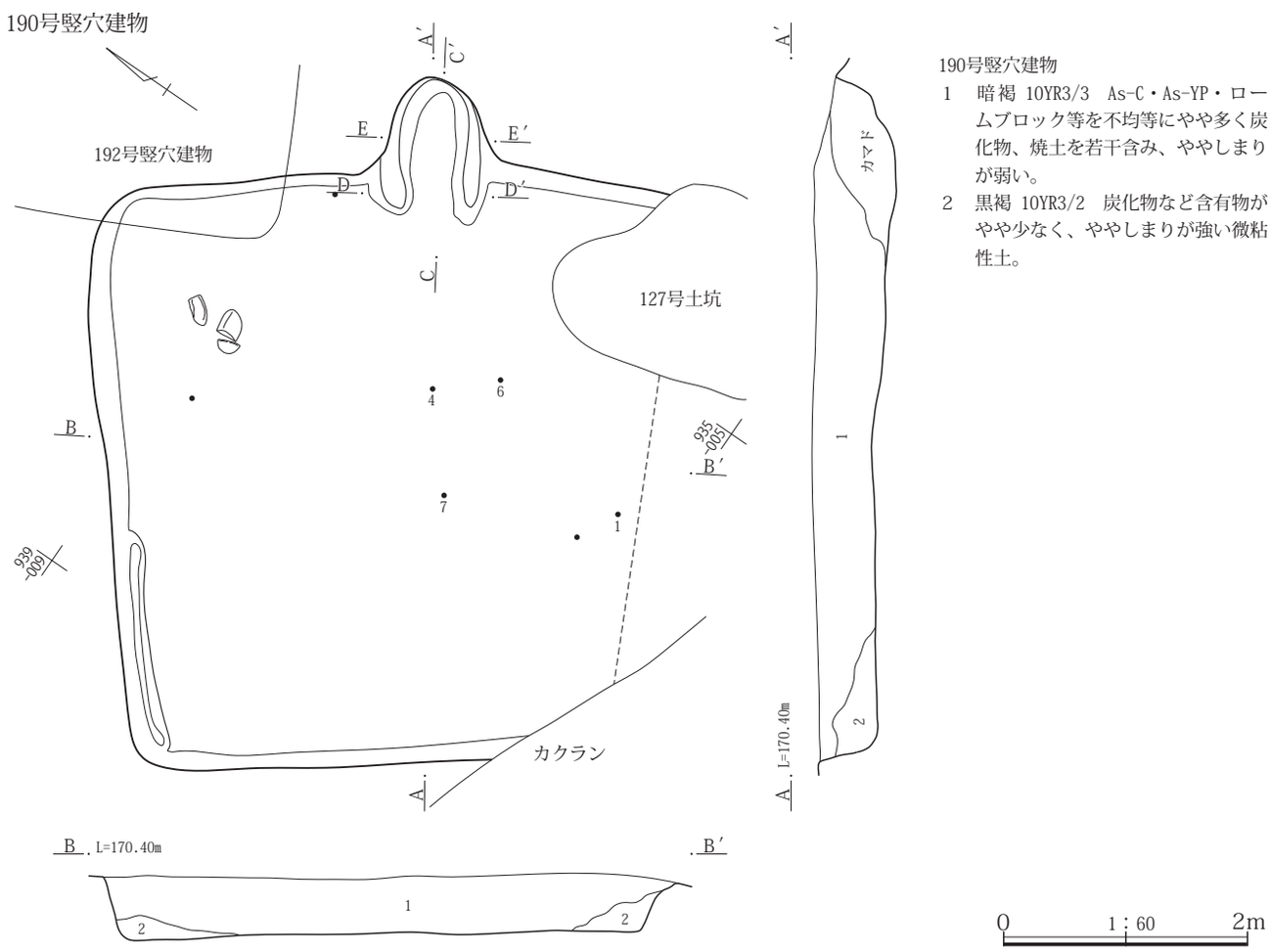
位置　３区調査区北西部、Ｘ＝36934～36940、Ｙ＝-85003～-85009に位置する。南東角を127号土坑、南西角を撹乱によって欠く。また、南辺は遺構確認時では明確に確定できなかったが、土層断面の観察で確定した。そのため不確定な部分がある。

重複関係　192号竪穴建物､127号土坑と重複関係にある。新旧関係は192号竪穴建物、127号土坑より本竪穴建物のほうが古い。

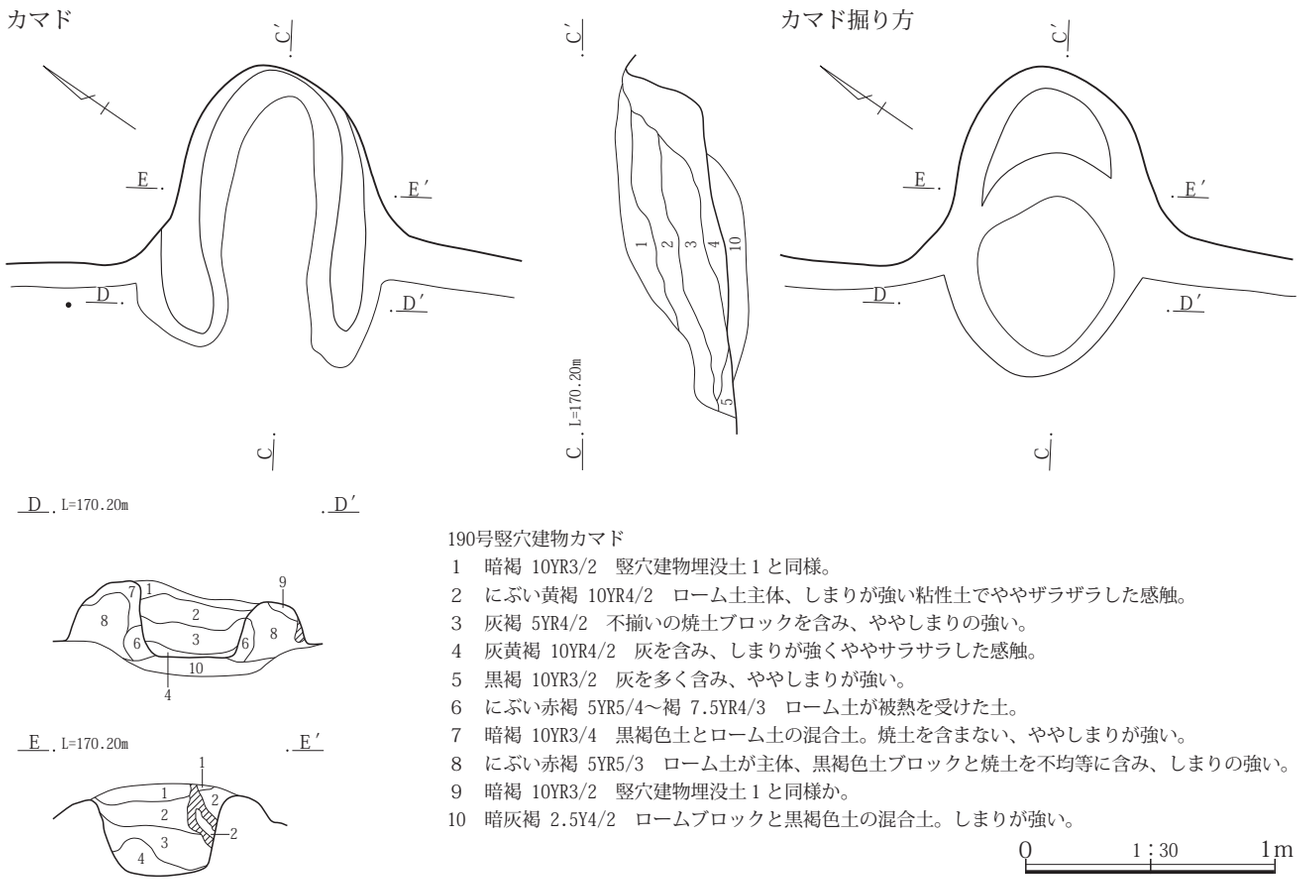
形状　西辺が東辺に比べ0.5mほど短い台形状を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は4.33m、南北方向は4.72mを測る。確認面から床面までの壁高は43～55㎝を測る。

床面積　18.80㎡を測る。



第230図　190号竪穴建物遺構図（１）



190号竪穴建物カマド
1　暗褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土１と同様。
2　にぶい黄褐 10YR4/2　ローム土主体、しまりが強い粘性土でややザラザラした感触。
3　灰褐 5YR4/2　不揃いの焼土ブロックを含み、ややしまりの強い。
4　灰黄褐 10YR4/2　灰を含み、しまりが強くややサラサラした感触。
5　黒褐 10YR3/2　灰を多く含み、ややしまりが強い。
6　にぶい赤褐 5YR5/4～褐 7.5YR4/3　ローム土が被熱を受けた土。
7　暗褐 10YR3/4　黒褐色土とローム土の混合土。焼土を含まない、ややしまりが強い。
8　にぶい赤褐 5YR5/3　ローム土が主体、黒褐色土ブロックと焼土を不均等に含み、しまりの強い。
9　暗褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土１と同様か。
10　暗灰褐 2.5Y4/2　ロームブロックと黒褐色土の混合土。しまりが強い。

0　1：30　1m

第231図　190号竪穴建物遺構図（２）

主軸方位　Ｎ－61°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できるが、その後に堆積した１層暗褐色土は調査時の見解で他の竪穴建物埋没土に比べると違和感があるとされており、自然埋没か人為的埋め戻しかは判断できない。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　北壁の北西角から1.7mほどの間で検出している。規模は幅10㎝前後、深さ２～７㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口が失われていたが、燃焼部から煙道部の天井はカマド２層と３層が該当するとみられ、ローム土と焼土ブロックが混在した状態であることから壊されて燃焼部火床面に崩落したとみられる。なお､両袖は残存している。規模は全長が1.20m、幅が0.98m、燃焼部幅0.35mを測る。燃焼部奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。掘り方は燃焼部部分が浅い土坑状を呈し、煙道部との間には使用面ではみられない、段が設けられていた。

出土遺物　遺物には土師器杯、甕、須恵器杯などが出土している。これらの出土遺物は床面上50㎝前後からの出土で､本竪穴建物が埋没過程で投棄された可能性がある。１～４の土師器杯は６世紀後半から７世紀前半、６・７の土師器甕は７世紀代、５の須恵器杯は合子状杯の杯蓋の可能性も想定されるが、器壁の厚さや周囲から出土した土師器杯や甕の形態から杯身と判断した。８の須恵器杯は確認面からの出土である。この杯の形態は底部から大きく開くため９世紀後半代の様相を呈するが、底部は回転ヘラ削り整形によることから８世紀中葉以前の年代観が想定される。

所見　前記のように出土土器は投棄されたものである可能性が高いことから直接、本竪穴建物の存続年代を示していないが、投棄された土器群は６世紀後半から７世紀前半の年代観が与えられることから、本竪穴建物の存続

時期は６世紀後半代と想定され、竪穴建物廃棄時に土器を残さなかったと想定される。

191号竪穴建物

位置　３区調査区北西部、Ｘ＝36929～36933、Ｙ＝-85006～-85009に位置する。南西部は調査対象区外に存在する。

重複関係　単独で存在する。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は2.86m、南北方向は4.00mを測る。確認面から床面までの壁高は18～26㎝を測る。

床面積　残存範囲内で6.70㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－89°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　調査範囲内では若干の凹凸が見られるが、床下土坑部分を除き、大部分は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っているが、一部は黒褐色土を10㎝ほど充填して床面としている。

掘り方　調査範囲内では貼床は検出されなかったが、床下土坑を北壁寄りで検出されている。形状は楕円形を呈す。規模は径1.45×1.34m、深さ0.90mを測る。内部からは土器などの出土はみられなかった。

壁溝　カマド北側の東壁際とカマド南側の東壁際から南壁際と西壁際のごく一部で検出している。規模は幅10～15㎝、深さ４～８㎝を測る。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていた。両袖も壁からわずかに延びる程度しか残存していなかった。規模は全長が1.12m、幅が1.33m、燃焼部幅0.35mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部左側には構築材に使用されたとみられる角礫が残存していたが、１点だけのためどのような使用状態であったかは不明である。なお、燃焼部火床面から煙道部にかけて焼土が多くみられた。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯身、瓦などが出土している。３の土師器杯が壁溝内、５の須恵器有台杯と６・７の土師器甕は床面から、１の土師器杯と４の須恵器杯蓋はカマドからの出土である。７の土師器甕は床面でもカマド前からの出土であることからカマドに掛けられていたものが竪穴建物廃棄時、カマドを壊したときに床に落とされたものと想定される。なお、５の須恵器有台杯は底部が高台より突出する形態である。

所見　本竪穴建物の存続時期は壁溝、床面、カマドから出土した土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯身から８世紀第１四半期に比定できる。

192号竪穴建物

位置　３区調査区北西端、Ｘ＝36939～36943、Ｙ＝-85002～-85007に位置する。北側は調査対象区外に存在する。

重複関係　190号竪穴建物、196号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は190号竪穴建物、196号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南北方向に長いやや歪んだ四角形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は3.23m、南北方向は調査範囲内で4.16mを測る。確認面から床面までの壁高は25～60㎝を測る。

床面積　調査範囲内で10.26㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－72°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積、中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

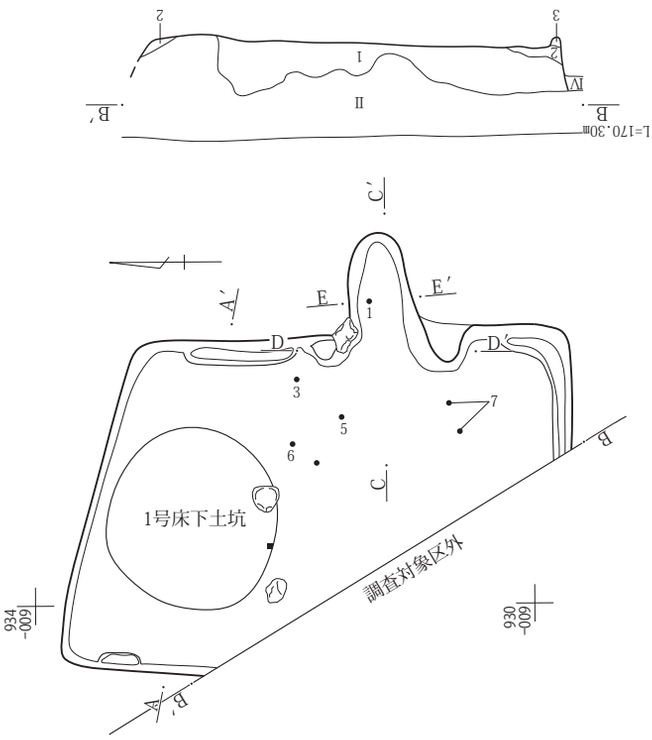
柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

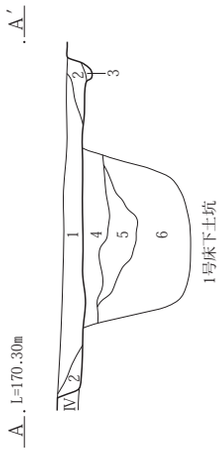
貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、煮沸用に使用されていた甕がほぼ使用時近い位置で残存していた。袖は右袖が比較的良好な状態であるのに対して左袖は壁際が残る程度であった。規模は全長が1.32m、幅が1.12m、燃焼部幅0.34mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部火床面との間には22㎝の段が設け

191号竪穴建物

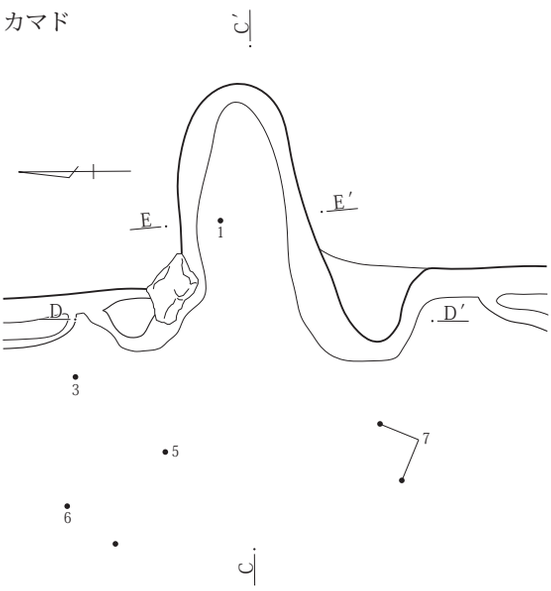


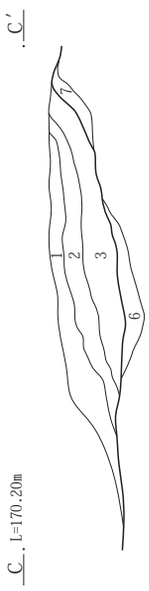


191号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　不揃いのロームブロックが多量に含み、ややしまりが弱い。
2　黒褐 10YR3/2　含有物少なく、ややしまりがある。
3　黒褐 10YR3/2　ローム粒を多く含み、ややしまりが強い。
191号竪穴建物　床下土坑
4　黒褐 10YR2/3　φ２～10mmのAs-YPブロックを５％含む。
5　暗褐 10YR3/3　φ２～10mmのAs-YPブロックを10％含む。
6　褐 10YR4/4　ブロック状のAs-YPを多量に含む。

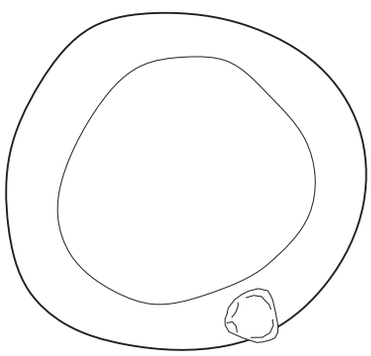
0　1：60　2m

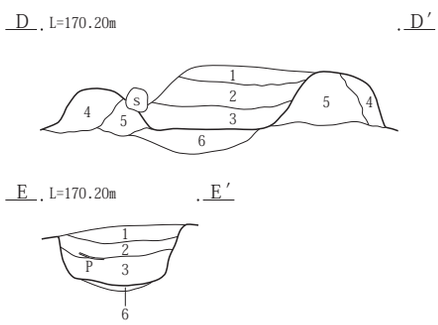
カマド





1号床下土坑



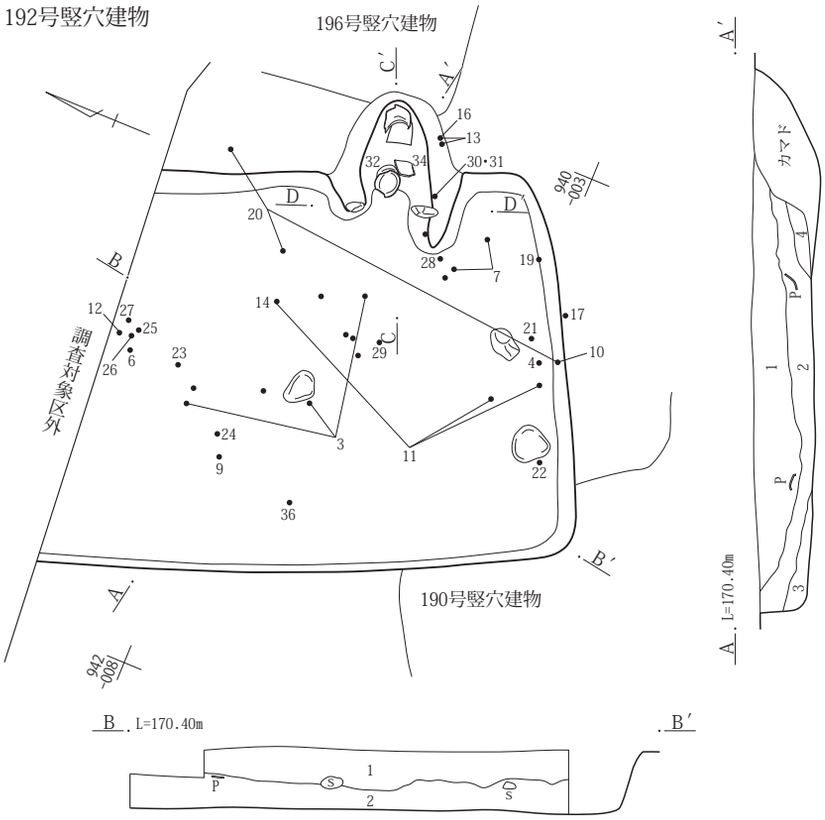


191号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-YP・不均等ローム土が混入、ややしまりが弱い。
2　暗褐 7.5YR3/3　ローム粒、焼土粒を不均等に含み、ややしまりが弱い。サラサラした感触。
3　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土粒を多く下半に灰を含み、ややしまりが弱い。
4　暗褐 10YR3/3　不揃いのロームブロックとAs-C、As-YP等を含み、ややしまりが弱い。
5　暗褐 10YR3/4　小粒のローム土やAs-YP・As-Cを不均等に焼土をやや多く含み、ややしまりが強い非粘性土。
6　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒・ローム粒を不均等にやや多く含み、ややしまりがある。
7　暗褐 10YR3/4　ローム粒、焼土粒をやや多く含み、しまりがある弱粘性土。

0　1：30　1m

第232図　191号竪穴建物遺構図

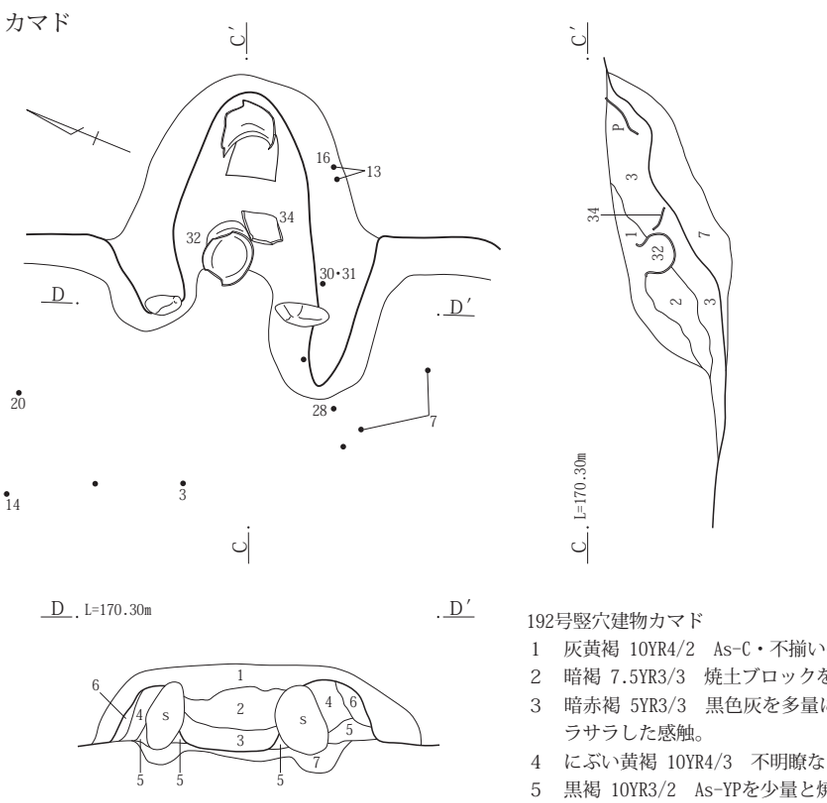
192号竪穴建物



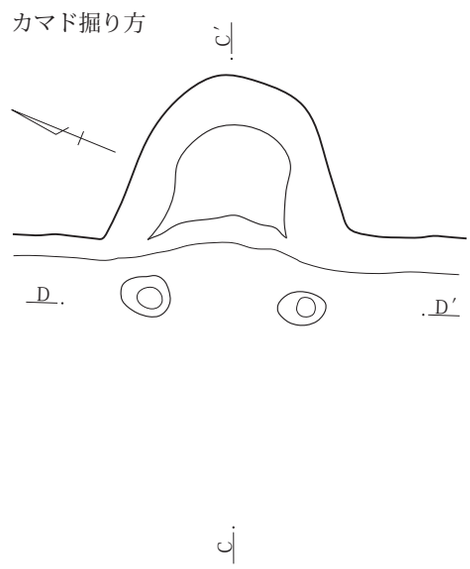
192号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　不明瞭なローム土を不均等にAs-Cを霜降状に含み、しまりが強い非粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　上位に不明瞭なロームブロック、下半に黒色味おびた弱粘性土を多く床面直上で炭化物、焼土を含み、ややしまりが強い。
3　灰黄褐 10YR4/2　ローム小ブロックの混土、弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　３と同様、焼土・灰をやや多く含む。

0　1：60　2m

カマド



カマド掘り方



192号竪穴建物カマド
1　灰黄褐 10YR4/2　As-C・不揃いのローム小ブロック等を多く含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 7.5YR3/3　焼土ブロックを少量含み、ややしまりが強い。
3　暗赤褐 5YR3/3　黒色灰を多量に焼土ブロックを多く含み、しまりが弱い微粘性土でサラサラした感触。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　不明瞭なローム土が基質、As-C・As-YP・焼土粒を含む。
5　黒褐 10YR3/2　As-YPを少量と焼土・As-Cをわずかに含み、しまりの強い細粒土。
6　暗褐 10YR3/3　竪穴建物埋没土２に近い。
7　灰黄褐 10YR4/2　多量の大粒のロームブロックがと不均等に焼土ブロックを含む。

0　1：30　1m

第233図　192号竪穴建物遺構図

られていた。また、煙道部には土師器甕を煙突構築材として使用されていた。両袖内には細長い偏平な円礫が据え付けられた状態で残存していた。また、右袖前には32の土師器甕が出土しており、燃焼部の状態からこの甕はカマドに煮沸用として掛けられていたものと想定される。また、その右横からは34の須恵器甕の胴部片が出土しているが、これは天井の構築材に使用されたとみられる。

出土遺物　遺物には土師器杯・鉢・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・盤・短頸壺・壺・甕、瓦などが多くの土器・土製品が出土している。出土状態は竪穴建物全域、床面から埋没土上位まで広範囲に出土がみられた。このうち、３の土師器鉢、４の須恵器杯蓋、11・17の須恵器杯が床面から、２の土師器杯、28～32の土師器甕、34の須恵器甕がカマドから出土している。この他、多くの須恵器杯・椀は床面上６～36㎝の範囲で出土しているが、その形態は床面から出土した杯・椀と同様であることから本竪穴建物に共伴するものが竪穴建物廃棄時に搬出されずに投棄されたとみられる。

この中で、19の須恵器椀(コップ形)は床面上11㎝より出土したもので、これは平城京から出土した例から陶枡であったとみられる。内容量は机上の計算ではあるが150mlになり、古代の1.8合(１升を810～840mlとする)に相当する値である。また、30・31の土師器甕はカマド右袖からの出土しており、カマド構築材として使用されたものとみられる。33の須恵器甕は胴部内面にアテ具痕が残るが、このアテ具痕は一般的な円形で同心円状や無文のものではなくアテ面は隅丸方形に近い形状で、アテ面には叩き板と同様な平行線が刻まれた状態で18号土坑４にも同様なアテ具痕がみられるが、他の遺跡では例を見ないものである。今後、窯跡から同様なアテ具を使用した甕片が見つかれば、生産地(窯)の特定が可能になると考えられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器甕や須恵器杯・椀等から比定できるが、32の土師器甕は８世紀第４四半期、須恵器杯の大部分は底部のロクロ切り離し技法が回転ヘラ起こしや回転ヘラ削りが施されていることから８世紀第３四半期の年代観が与えられる。こうした点から、本竪穴建物は８世紀第３四半期に構築され、第４四半期には廃棄されたとみられる。

なお、陶枡と想定される19の須恵器椀(コップ形)は一般集落から出土するものではないことから周囲に枡を使用する施設の存在が想定される。

193号竪穴建物

位置　３区調査区北西端、Ｘ＝36926～36929、Ｙ＝-85000～-85003に位置する。

重複関係　15号溝と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　南北方向に長いやや歪んだ四角形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は2.46m、南北方向は調査範囲内で2.95mを測る。確認面から床面までの壁高は21～34㎝を測る。

床面積　5.88㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－88°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積、中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていた。両袖も壁からわずかな長さしか残存していなかった。規模は全長が0.97m、幅が0.77m、燃焼部幅0.20mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に掘り込まれている。両袖内の壁際には長さ25㎝、径20×10㎝の棒状礫が据えられた状態で残存していた。掘り方は燃焼部下が浅い土坑状に掘り込まれていた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、鉄製品鍋などが出土している。出土した土器片は縄文土器片を含め50点が出土していたが、大部分は小片のため図示できなかった。図示できたのは１の須恵器杯だけであった。この須恵器杯は床面からの出土である。なお、鉄製品鍋も床面からの出土であるが、この時期ではこの形態を呈する鉄鍋の類例が存在していないことから、後の混入の

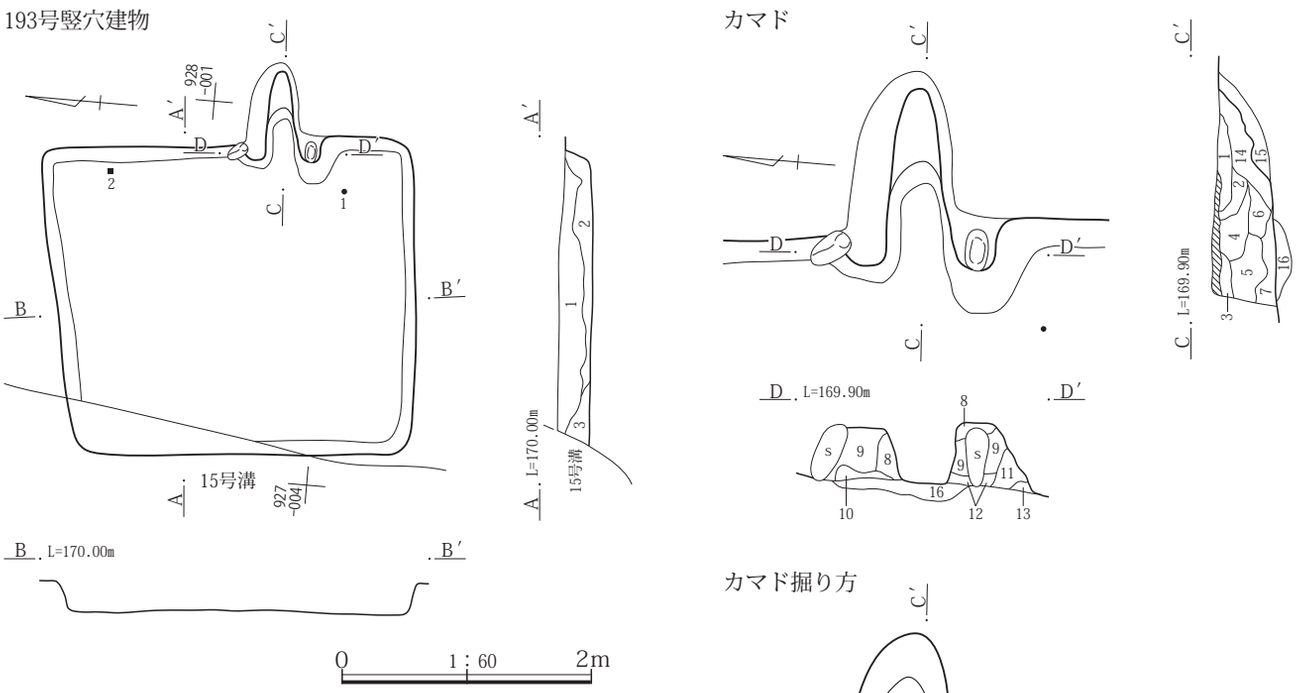
可能性も窺える。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した遺物が少ないため確実性に乏しいが、床面から出土した１の須恵器杯から７世紀後半代に比定できる。なお、未掲載遺物も土師器・須恵器の点数が25点、202ｇとわずかであることから竪穴建物を廃棄時に土器類を残すことなく持ち出したとみられる。

194号竪穴建物

位置　３区調査区南部の西端、Ｘ＝36892～36896、Ｙ＝-84988～-84990に位置する。西側の半分近くは調査対象区外に存在し、重複関係にある28号復旧坑、撹乱によって北東角や数箇所の壁などを欠く。

重複関係　28号復旧坑と重複関係にあり、７号竪穴状遺構と隣接する位置にある。新旧関係は復旧坑より古い。７号竪穴状遺構との関係は撹乱などにより不鮮明である



193号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜のAs-YPブロックを２％、φ１㎜の白色粒・φ２～３㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～15㎜のAs-YPブロックを２％、φ２～10㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや脆い。
3　暗褐 10YR3/4　φ２～５㎜のAs-YPブロックを５％、φ２～３㎜の褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。

193号竪穴建物　カマド
1　灰 5YR4/2　焼土粒・焼土小ブロックを多く含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土と黒褐色土の混土、焼土粒を若干含み、ややしまりがある。
3　黒褐 10YR3/2　ローム粒・As-YPを不均等に炭化物を若干含み、ややしまりがある。
4　黒褐 10YR3/2　３に近似、ローム粒をやや多く含む。
5　灰黄褐 10YR4/2　As-YP・焼土小ブロック混じりのローム土・黒褐色土の混土。ややしまりがある。
6　灰黄褐 10YR4/2　５に近似、焼土の含有量は少ない。
7　黒褐 10YR3/2　下半にローム土を多く焼土、炭化物等ほとんど含まない、ややしまりが弱いフカフカした感触。
8　灰褐 7.5YR4/2　不揃いのロームブロック、焼土小ブロックを不均等にやや多く含み、ややしまりが強い。
9　暗褐 10YR3/4　ローム土と黒褐色土の混土。焼土を若干含み、しまりが強い。
10　暗褐 10YR3/6　７に近似、黒色味強い粘性土と炭化物を含む。
11　褐 10YR4/4　ローム土主体、黒褐色土をブロック状に含み、しまりが強い。
12　黒褐 10YR3/2　As-C混土、ややしまりが弱い。
13　黒褐 10YR3/2　As-YPを多量に含む、非粘性土。
14　にぶい赤褐 5YR4/3　As-Cを霜降状に焼土小ブロックを多量に含み、しまりが強い。
15　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土が基質、黒褐色土を小ブロック状に焼土粒を不均等に少量含む、微粘性土。
16　暗褐 10YR3/4　９に近似、多量の焼土を含む。

第234図　193号竪穴建物遺構図

が、本竪穴建物のほうが古いとみられる。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は調査範囲内で2.20m、南北方向は3.00mを測る。確認面から床面までの壁高は５～22㎝を測る。

床面積　残存範囲内で4.53㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－115°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際を28号復旧坑や撹乱によって欠くため判然としないが、西側から土砂が流れ込んだ様子が窺えることから自然埋没と判断される。

床面　調査範囲内では地山をそのまま踏み固めているが、激しい凹凸が見られる。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の中程よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は確認面から燃焼部火床面までが浅いため、わずかに焼土塊がみられるだけの状態であったが、燃焼部左側には構築材と使用された角礫が残存していた。規模は全長が0.40m、幅が0.65mを測る。カマド自体はすべて壁外に掘り込まれている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀などが出土しているが、出土量は少量のため、図示できた土器は土師器杯と須恵器椀の２点だけであった。なお、未掲載にした遺物も45点しか出土していない。このうち、２の須恵器椀は床面からの出土である。１の土師器杯の内面には底部に螺旋状、体部から口縁部に斜放射状暗文が施されているが、口縁部の開く角度が大きい形態である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した遺物量が少ないため確実性に乏しいが、床面から出土した須恵器椀や埋没土内ではあるが土師器杯から８世紀第２四半期に比定できる。

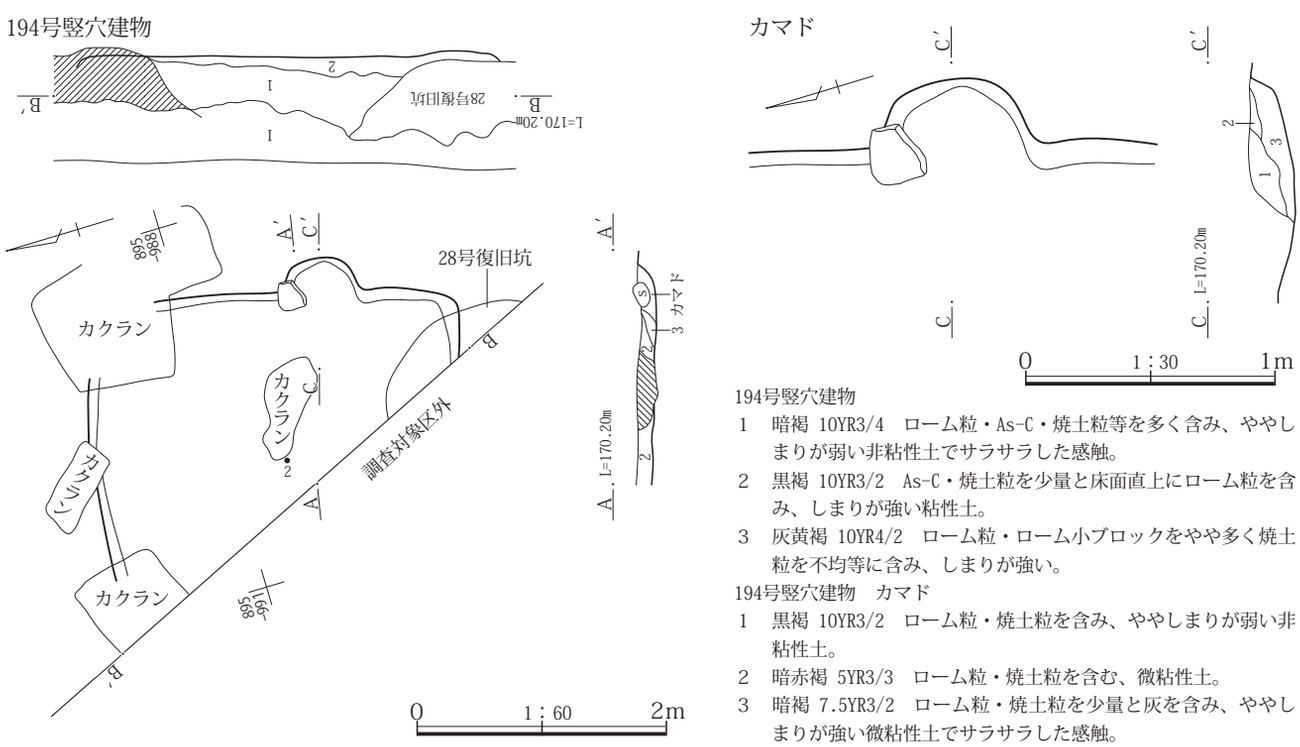
195号竪穴建物

位置　３区調査区北部、Ｘ＝36931～36937、Ｙ＝-84994～-85000に位置する。北壁の東半分と床の一部を下水管埋設による掘削坑によって欠く。

重複関係　226号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが新しい。

形状　東西方向が長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の南北方向は5.12m、東西方向は5.88mを測る。確認面から床面までの壁高は14～29㎝を測る。



194号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/4　ローム粒・As-C・焼土粒等を多く含み、ややしまりが弱い非粘性土でサラサラした感触。
2　黒褐 10YR3/2　As-C・焼土粒を少量と床面直上にローム粒を含み、しまりが強い粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　ローム粒・ローム小ブロックをやや多く焼土粒を不均等に含み、しまりが強い。

194号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　ローム粒・焼土粒を含み、ややしまりが弱い非粘性土。
2　暗赤褐 5YR3/3　ローム粒・焼土粒を含む、微粘性土。
3　暗褐 7.5YR3/2　ローム粒・焼土粒を少量と灰を含み、ややしまりが強い微粘性土でサラサラした感触。

第235図　194号竪穴建物遺構図

床面積　25.04㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－１°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から流れ込んだとみられる２層の黒褐色土が床面の中程で盛り上がった状態で堆積している不自然な堆積が確認できる。この２層の堆積状態については種々の想定が可能であることからここでは埋没状態の判断については保留としたい。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　対角を結んだ線上で４本の柱穴を検出している。壁からは1.0～1.5mほど内側に位置する。各柱穴の形状、規模、柱穴間距離は次のとおりである。

柱穴Ｐ１：楕円形、径0.64×0.54m、深さ0.62m

柱穴Ｐ２：円形、径0.49×0.47m、深さ0.67m

柱穴Ｐ３：楕円形、径0.67×0.56m、深さ0.74m

柱穴Ｐ４：楕円形、径0.56×0.43m、深さ0.65m

柱穴間距離はＰ１～Ｐ２が2.25m、Ｐ２～Ｐ３が2.70m、Ｐ３～Ｐ４が2.60m、Ｐ４～Ｐ１が3.00mを測る。各柱穴ではＰ２を除いて柱痕はみられなかった。Ｐ２では土層断面の観察で柱の抜き取り痕とみられる土層が確認されている。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中程でカマドが構築されている。なお、煙道部は下水管埋設坑によって欠く。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.12m、幅が1.16m、燃焼部幅0.47mを測る。燃焼部火床面はわずかに窪んだ状態であったが、顕著な焼土は確認されていない。掘り方は燃焼部、右袖下に浅い土坑状の掘り込みが確認されたが、左袖は床面と同一面に構築されていた。なお、左袖からは４の土師器甕、右袖からは３の土師器杯がそれぞれ出土している。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯、甕、銭貨などが出土しているが、出土量は比較的少量で図示できた遺物も土師器杯・甕の５点だけであった。このうち、１・２の土師器杯、５の土師器甕は床面から、３の土師器杯と４の土師器甕はカマドからの出土である。なお、５の土師器甕はカマド近くではなく、南東角寄りからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器杯・甕から７世紀第４四半期に比定できる。

226号竪穴建物

位置　３区調査区北部、Ｘ＝36931～36934、Ｙ～−85000に位置する。大部分を重複関係にある195号竪穴建物によって欠き、調査範囲は西壁の南西側の一部であった。

重複関係　195号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　残存範囲がごくわずかなため不明である。

床面積　残存範囲がごくわずかなため計測不能であるが、残存範囲内で0.88㎡を測る。

主軸方位　残存範囲がごくわずかなため不明である。

埋没状態　残存範囲がごくわずかなため不明である。

床面　残存範囲では地山をそのまま平らに掘削しており、明確な床面を造った痕跡はみられなかった。

掘り方　残存範囲内では検出されなかった。

壁溝　残存範囲内では検出されなかった。

柱穴　残存範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲内では検出されなかった。

その他施設　残存範囲内では検出されなかった。

火処　残存範囲内では検出されなかった

出土遺物　遺物の出土はみられなかった。

所見　本竪穴建物の存続期間は出土遺物が皆無のため判断できないが、重複関係にある195号竪穴建物が７世紀第４四半期に比定できることから、それ以前と想定される。

196号竪穴建物

位置　３区調査区北端、Ｘ＝36941～36943、Ｙ＝−84999～−85003に位置する。北側４分の３ほどは調査対象区外に存在する。

重複関係　192号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

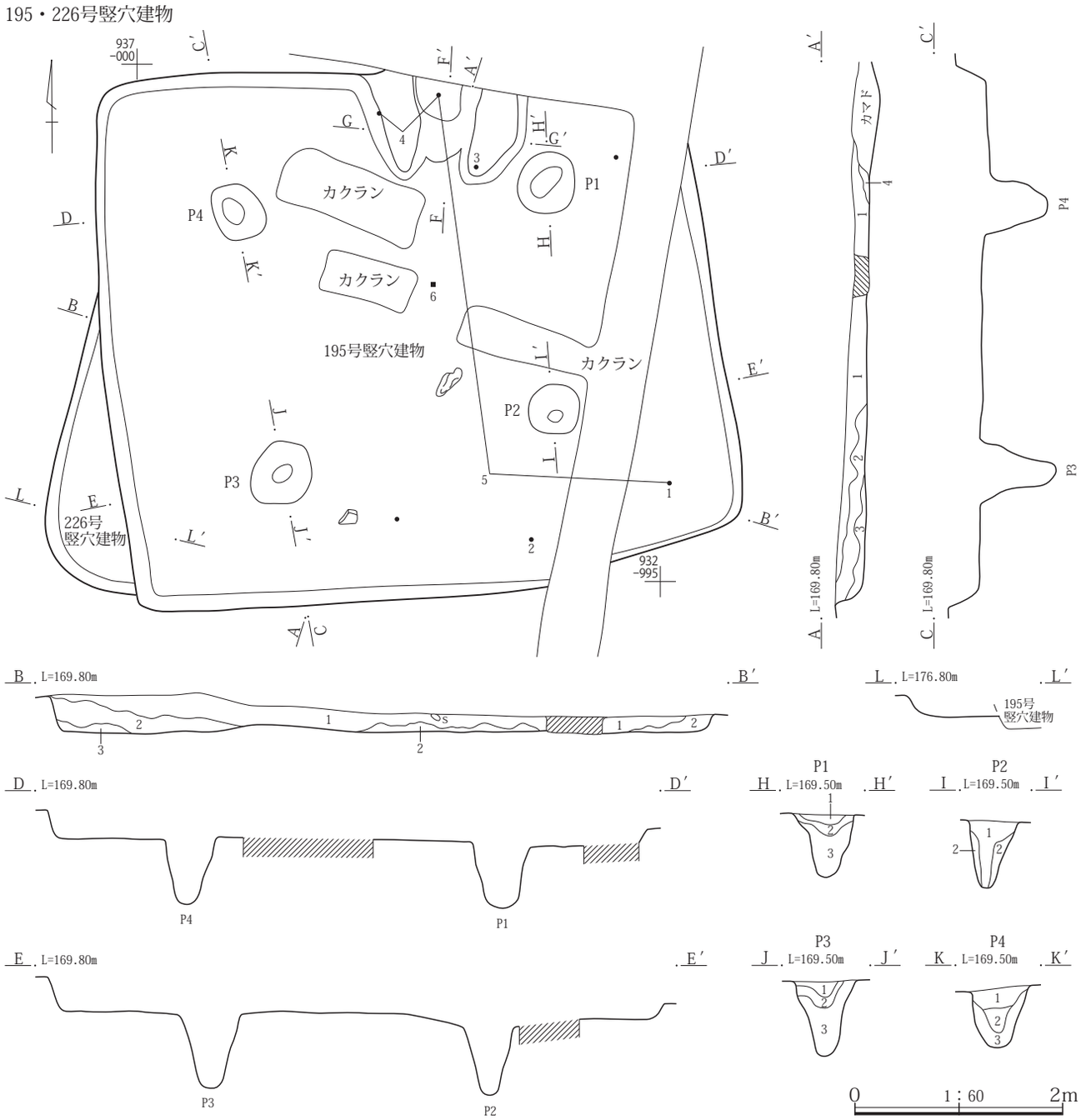
形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　東西方向は3.22m、南北方向は調査範囲内で1.96mを測る。確認面から床面までの壁高は56～100㎝を測る。

床面積　残存範囲内で3.21㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－81°－Ｅを指す。

195・226号竪穴建物



195号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混じりのやや細粒土、しまりがある非粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　1に近い。As-Cの量が多く、AS-YPをやや多く焼土を若干含む。
3　暗褐 10YR3/3　ローム土やAS-YPを不均等に含み、ややしまりが強い弱粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム小ブロックを多く含み、しまりが強い強粘性土。
5　黒褐 10YR3/2　ローム粒･As-Cを少量含み、しまりが弱い非粘性土。

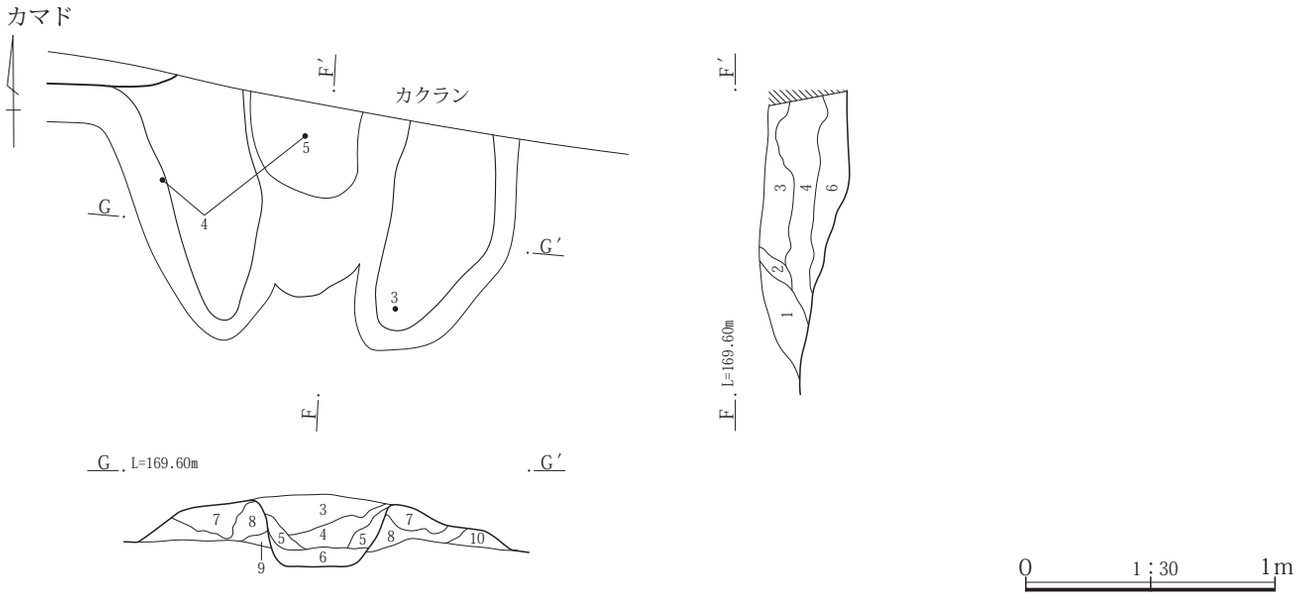
195号竪穴建物　Ｐ１
1　黒褐 10YR2/3　φ1mmの白色粒、As-YPブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックと暗褐色土の混土、As-YPブロックを５％含む。

195号竪穴建物　Ｐ２
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを５％含む。
2　暗褐 10YR3/3　ローム土との混土、As-YPブロックを10％含む。

195号竪穴建物　Ｐ３
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを３％含む。
3　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを５％含む。

195号竪穴建物　Ｐ４
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを３％含み、脆い。
3　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックと暗褐色土の混土。

第236図　195・226号竪穴建物遺構図



195号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土１と同様。焼土を若干含む。
2　にぶい黄褐 10YR4/4　ローム土主体に黒褐色土をブロック状に含み、しまりが強い。
3　暗褐 10YR3/4　不明瞭なローム土と黒褐色土の混土、焼土を少量含み、ややしまりが強い弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　ローム土と黒褐色土の混土、ローム土はかなり不均等で、掛け口相当部分に多く、煙突側では焼土、灰を多く含む。
5　灰黄褐 10YR4/2　ローム土を小ブロック状に含み、しまりが強い。
6　暗褐 10YR3/4　灰混じりの黒褐色土主体、焼土やローム小ブロックを不均等に含み、ややボソボソした感触。
7　暗褐 10YR3/3　黒褐色非粘性土が基質、不揃いのロームブロックやAs-YPを不均等に含む。袖構築材としてはしまりが弱い。
8　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土と黒褐色土の混土、しまりが強い。
9　暗褐 10YR3/4　６に近似するが、灰を含み、しまりが強くサラサラした感触。
10　にぶい黄褐 10YR5/3　ローム土主体、黒褐色土を小ブロック状に含む。

第237図　195号竪穴建物遺構図

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積後黒褐色土で短期間に埋没した様子が確認できる。この黒褐色土内の分層はできなかったが、上位になるとやや淡い色調を呈している。この状態からは自然埋没と判断される。

床面　床下部分を除き、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、西壁寄りで床下土坑を検出している。床下土坑は形状が楕円形を呈し、規模は調査範囲内で長軸が1.20m、短軸1.06m、深さ0.44mを測る。内部からは土器などの出土はみられなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかったが、出土遺物からみるとカマドが構築されている時期の竪穴建物である。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯、石製品砥石・棒状礫などが出土している。出土量は少量のため、図示できた土器は土師器杯・甕の４点、未掲載173点であった。このうち、２の土師器杯が床面上８㎝、４の土師器甕が床面上18㎝からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器から７世紀第３四半期に比定できる。

197号竪穴建物

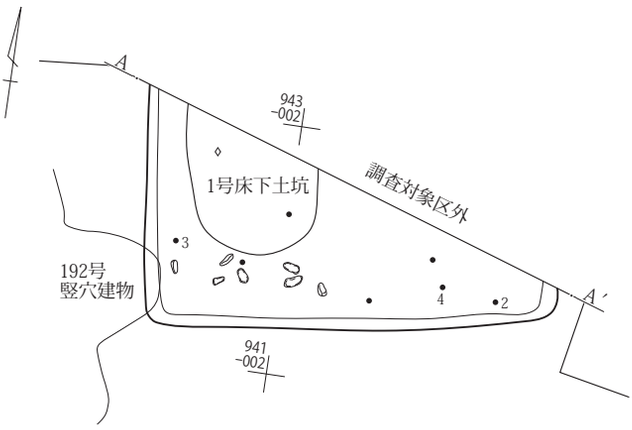
位置　３区調査区北東端、Ｘ＝36938～36941、Ｙ＝-84990～-84993に位置する。西側は調査対象外、北側は撹乱によって欠く。

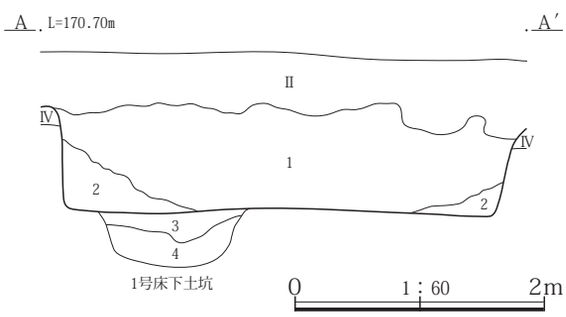
重複関係　224号竪穴建物、15号溝と重複関係にある。新旧関係は15号溝より本竪穴建物のほうが古く、224号竪穴建物より新しい。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

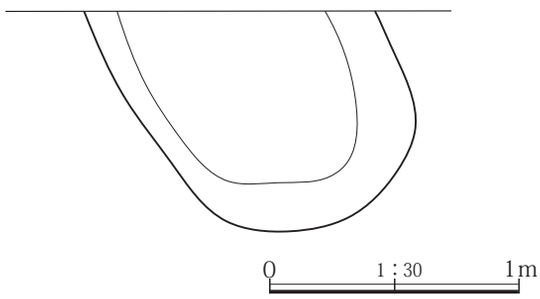
規模　調査範囲内で主軸方向の東西方向が2.02m、南北方向が3.28mを測る。確認面から床面までの壁高は18～26㎝を測る。

196号竪穴建物





１号床下土坑



196号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　基質土はAs-Cを少量含む、黒褐色のやや細粒土。ローム小ブロック、As-YPを霜降状に底面付近で焼土を少量含み、ややしまりが強い非粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　１と同様。As-YP・ロームブロックが少ないが、炭化物、焼土を多く含み、やや黒色味を帯びて見える。
196 号竪穴建物　床下土坑
3　灰黄褐 10YR4/2　As-YPと黒褐色土の混土、ややしまりがある。
4　暗褐 10YR3/4　黒褐色土中に小粒のAs-YPをやや多く含み、ややしまりがある。

第238図　196号竪穴建物遺構図

床面積　残存範囲内で4.80㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－94°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では北側から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　調査範囲内では若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.93m、幅が1.20m、燃焼部幅0.42mを測る。燃焼部の大部分と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部は６・７の土師器甕や２の須恵器杯が出土している付近の火床面から煙道部の壁面の焼土化が顕著であった。こうした状態から甕を掛けていた場所は焚口側ではなく燃焼部の奥寄りであったことが想定される。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・甕などが出土している。このうち、１の須恵器杯蓋、３・４の須恵器杯、６の土師器甕が床面から、２の須恵器杯、６・７の土師器甕がカマドからの出土である。なお、図示した須恵器杯の底部切り離し技法は２が回転糸切り無調整、３～５が回転ヘラ起こしであった。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器甕や須恵器杯をみると３～５の須恵器杯は８世紀第３四半期、７の土師器甕は９世紀第１四半期の年代観が与えられることから、竪穴建物自体の存続時期は８世紀第４四半期から９世紀第１四半期に比定しておく。

224号竪穴建物

位置　３区調査区北東端、Ｘ＝36939～36941、Ｙ＝-84989～-85991に位置する。北側は調査対象外、西側は撹乱、南側は重複関係にある197号によって欠くため、調査できた範囲は東壁のカマド南側のごく狭い範囲であった。

重複関係　197号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　調査範囲がごくわずかであるため明確ではないが、方形または長方形を呈すると想定される。

規模　調査範囲がごくわずかであるため不明である。

床面積　調査範囲がごくわずかであるため計測不能。

主軸方位　カマドの主軸方向はＮ－87°－Ｅを指す。

埋没状態　不明である。

床面　調査範囲内では若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁にカマドが構築されている。調査範囲はカマドの南半分だけであったため全貌は不明である。残存状態は燃焼部の天井は失われていた。規模は全長が0.55mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部火床面との間には14㎝の段が設けられている。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器長頸壺が出土しているが、調査できた範囲がわずかのためか出土量が少なく、図示可能な遺物も３点だけであった。１の土師器杯と３の土師器甕は床面から、２の須恵器長頸壺がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器杯・甕から７世紀前半代に比定できる。

198号竪穴建物

位置　４区調査区北端、Ｘ＝36872～36874、Ｙ＝-84972～-85976に位置する。北側約２分の１は調査対象区外、調査範囲内の中央部は撹乱のため欠く。

重複関係　調査区内では単独で確認した。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

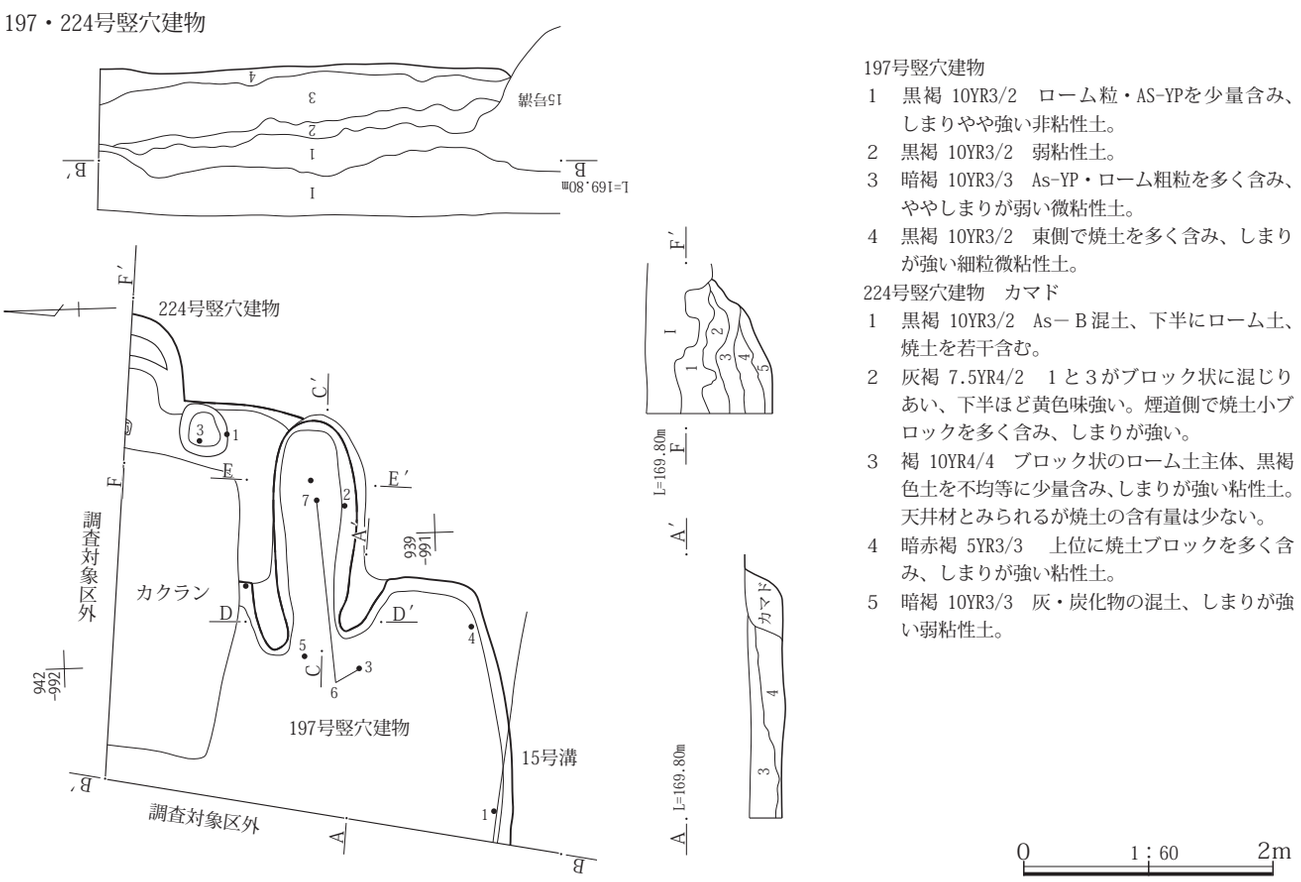
規模　南北方向は調査範囲内で1.67m、東西方向は3.78mを測る。確認面から床面までの壁高は13～24㎝を測る。

床面積　調査対象範囲で4.28㎡を測る。

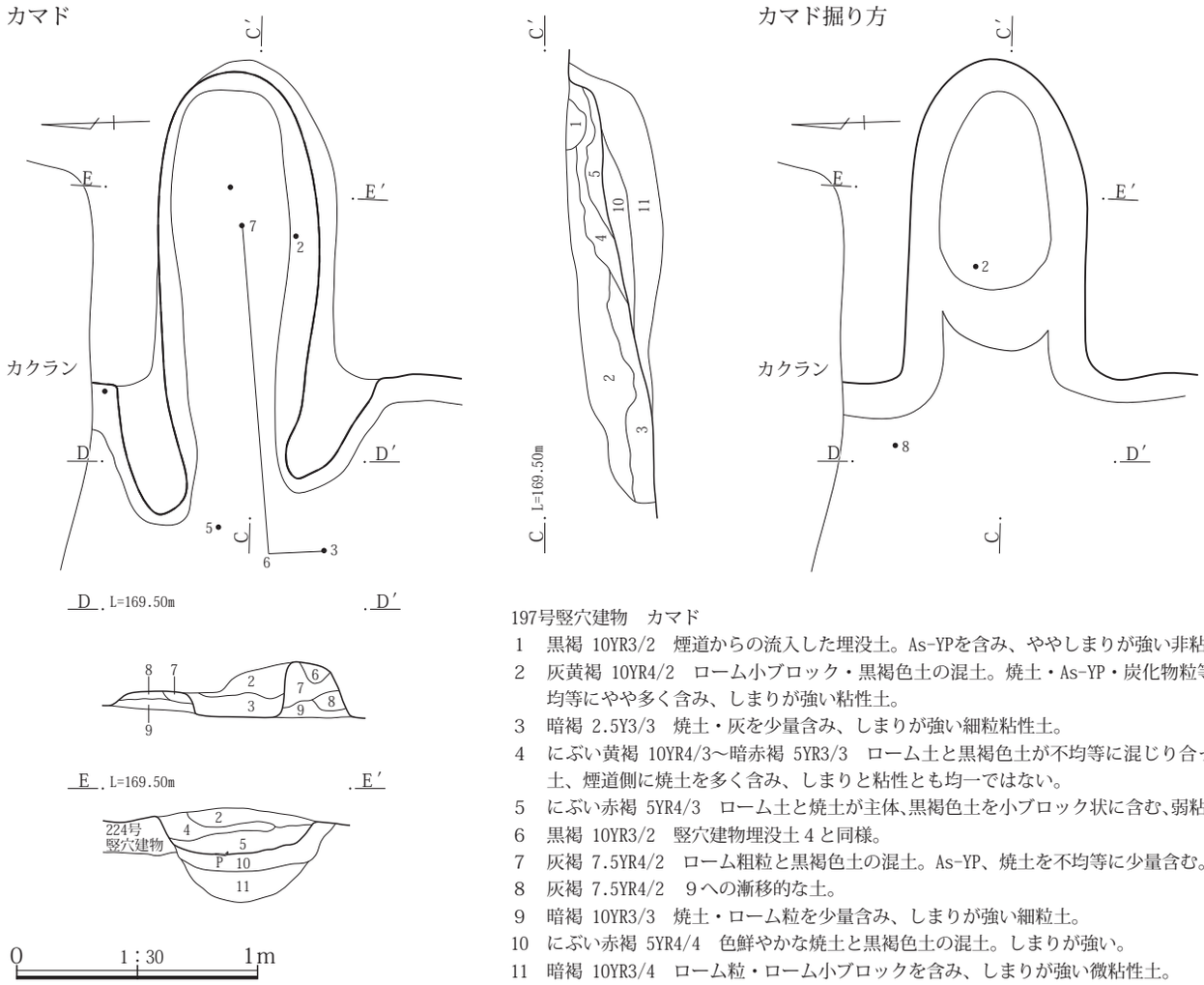
主軸方位　南北方向を主軸方向と想定するとＮ－13°－Ｅを指する。

埋没状態　土層断面の観察が行えた範囲が狭いため明確ではないが、東側で壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

197・224号竪穴建物



第239図　197・224号竪穴建物遺構図

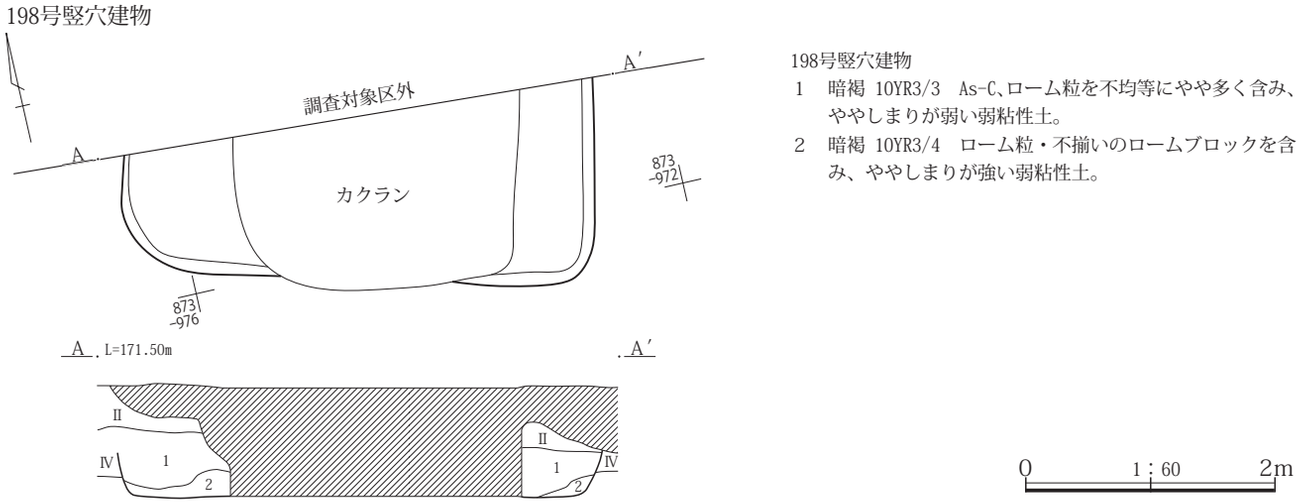


197号竪穴建物　カマド

1　黒褐 10YR3/2　煙道からの流入した埋没土。As-YPを含み、ややしまりが強い非粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　ローム小ブロック・黒褐色土の混土。焼土・As-YP・炭化物粒等を不均等にやや多く含み、しまりが強い粘性土。
3　暗褐 2.5Y3/3　焼土・灰を少量含み、しまりが強い細粒粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/3～暗赤褐 5YR3/3　ローム土と黒褐色土が不均等に混じり合った混土、煙道側に焼土を多く含み、しまりと粘性とも均一ではない。
5　にぶい赤褐 5YR4/3　ローム土と焼土が主体、黒褐色土を小ブロック状に含む、弱粘性土。
6　黒褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土４と同様。
7　灰褐 7.5YR4/2　ローム粗粒と黒褐色土の混土。As-YP、焼土を不均等に少量含む。
8　灰褐 7.5YR4/2　９への漸移的な土。
9　暗褐 10YR3/3　焼土・ローム粒を少量含み、しまりが強い細粒土。
10　にぶい赤褐 5YR4/4　色鮮やかな焼土と黒褐色土の混土。しまりが強い。
11　暗褐 10YR3/4　ローム粒・ローム小ブロックを含み、しまりが強い微粘性土。

第240図　197号竪穴建物遺構図

198号竪穴建物



198号竪穴建物

1　暗褐 10YR3/3　As-C、ローム粒を不均等にやや多く含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/4　ローム粒・不揃いのロームブロックを含み、ややしまりが強い弱粘性土。

第241図　198号竪穴建物遺構図

床面　調査範囲内では地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。出土遺物からカマドが構築されている時期の竪穴建物である。

出土遺物　調査できた範囲が限られていたため出土した遺物もわずかで出土した土器片も２㎝角以下のものだけであったため、図示することはできなかった。出土位置については小片のため記録されていない。なお、出土した土器は土師器・須恵器24点であった。内訳は土師器杯１点、甕９点、須恵器杯７点、杯蓋１点、甕・瓶４点、酸化炎焼成による須恵器椀口縁部１点である。土師器杯は口縁部の形態は内湾（５世紀～６世紀初頭の内湾杯ではなく、７世紀後半に出現する形態）したもの、須恵器杯は口縁部３点、底部４点で、底部はすべて底部ヘラ削りが施されていた。杯蓋はカエリを有する形態であった。

なお、土器の他に１の鉄製品が出土しているが、器種、用途などは不明である。

所見　本竪穴建物の存続時期は出土した土師器杯、須恵器杯蓋の形態や須恵器杯の底部整形状態から７世紀後半に比定できる。

199号竪穴建物

位置　４区調査区北西部、Ｘ＝36867～36871、Ｙ＝-84974～-85978に位置する。東側を重複関係にある213号竪穴建物によって欠く。

重複関係　211号竪穴建物、213号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は211号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しく、213号竪穴建物より古い。

形状　東西方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は残存部分で2.60m、南北方向は3.20mを測る。確認面から床面までの壁高は８～14㎝を測る。

床面積　残存範囲7.00㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－103°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため判然としないが、土層断面の観察では西壁側で三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　213号竪穴建物との重複部分はその埋没土を、西側部分は地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

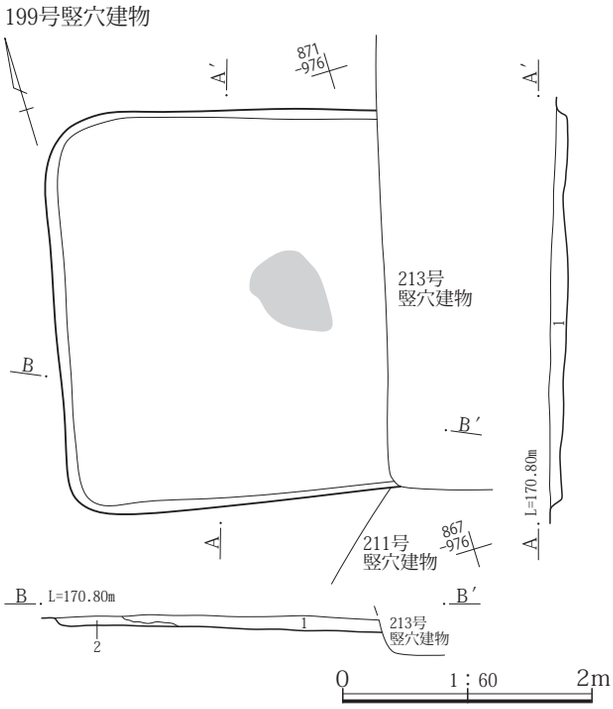
その他施設　検出されなかった。

火処　検出されなかった。中央床面から焼土が検出されているが、炉とは判断できなかった。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋、杯、甕等の小片が76点出土しているが、図示可能な遺物は存在しない。存続時期を明らかにするため、小片の中から有台杯１点を選択して図示した。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器に重複関係にある竪穴建物に伴うと判断できる個体も存在するため明確ではないが、出土した須恵器杯の大部分は底部がヘラ削りによる個体であり、１の須恵器杯から８世紀前半代に比定できる。

199号竪穴建物



199号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/3　As-C・ローム粒・ローム小ブロック混土、ややしまりが強い粗粒非粘性土。

2　灰黄褐 10YR4/2　1に類似、不揃いのロームブロックをやや多く含み、ややしまりが強い。

第242図　199号竪穴建物遺構図

200号竪穴建物

位置　４区調査区北西部、Ｘ＝36863～36868、Ｙ＝−84970～−85973に位置する。南辺の中程を重複関係にある143号土坑によって欠く。

重複関係　211号竪穴建物、213号竪穴建物、143号土坑と重複関係にある。新旧関係は211号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しく、213号竪穴建物、143号土坑より古い。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

規模　南北方向は4.17m、東西方向は3.12mを測る。確認面から床面までの壁高は16～35㎝を測る。

床面積　11.58㎡を測る。

主軸方位　長軸方向の南北方向を主軸方向とするとＮ－５°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

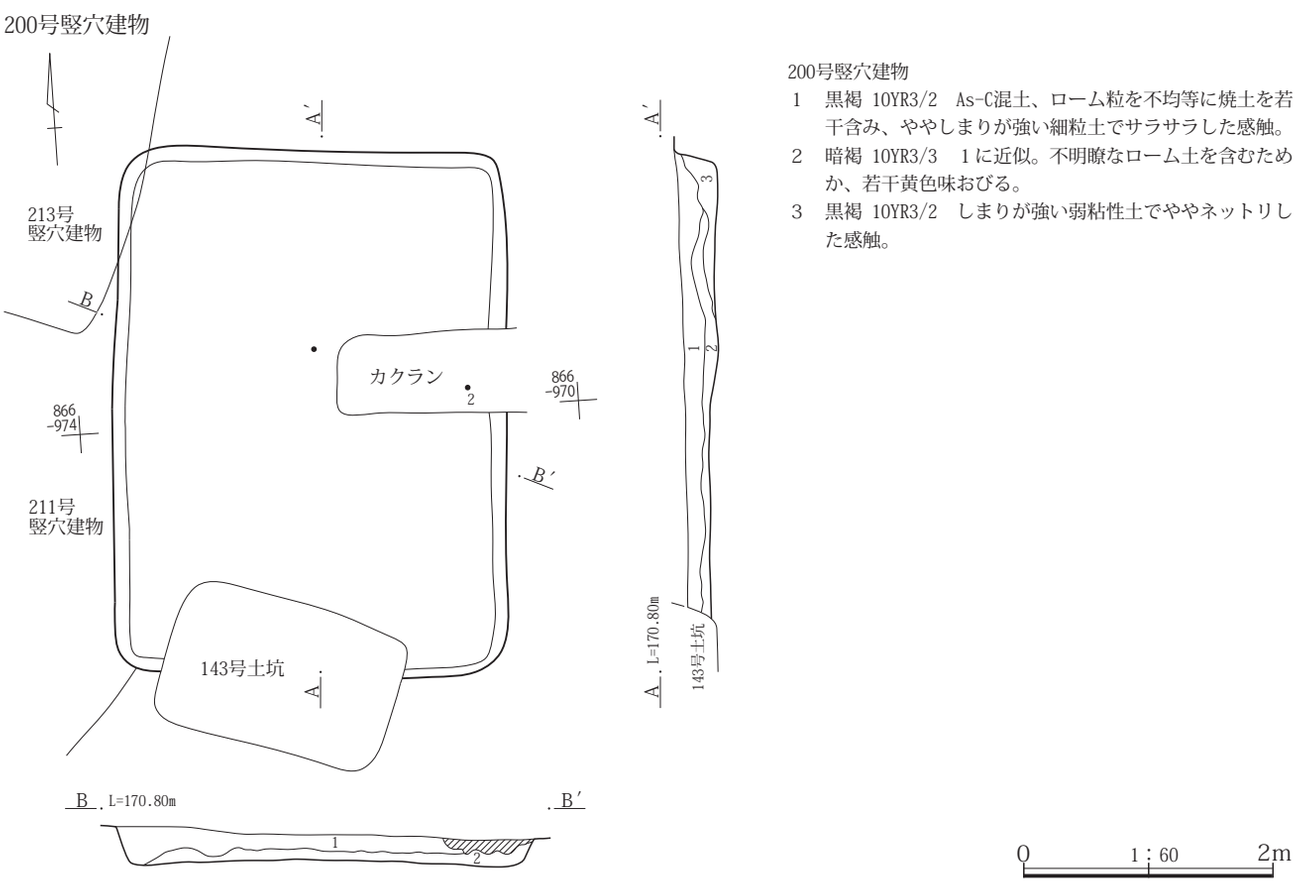
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　検出されなかった。出土遺物からみるとカマドが構築されている時期の竪穴建物であるが、重複関係にある143号土坑や撹乱付近にも焼土などの痕跡がみられなかったことから、当初より構築されていなかったと想定される。

出土遺物　土師器甕、須恵器杯蓋、杯、瓶、甕等の小片260点と銭貨が出土しているが、図示可能な遺物は存在しない。そのため、存続時期の提示のため、土器の中から小片ではあるが２点を選択して図示した。なお、確実に本竪穴建物に伴う遺物は床面から出土した２の須恵器甕だけである。

所見　出土した土器には重複関係にある竪穴建物に伴うと判断できる個体も存在するが、出土した須恵器杯は底部ヘラ削りによる個体が主体であり、杯１の蓋には実測



200号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、ローム粒を不均等に焼土を若干含み、ややしまりが強い細粒土でサラサラした感触。
2　暗褐 10YR3/3　1に近似。不明瞭なローム土を含むためか、若干黄色味おびる。
3　黒褐 10YR3/2　しまりが強い弱粘性土でややネットリした感触。

第243図　200号竪穴建物遺構図

個体が示すようにカエリが設けられていることから、本竪穴建物の存続期間は７世紀末から８世紀初頭に比定できる。

201号竪穴建物

位置　４区調査区南西部、Ｘ＝36833～36836、Ｙ＝-84964～-85968に位置する。

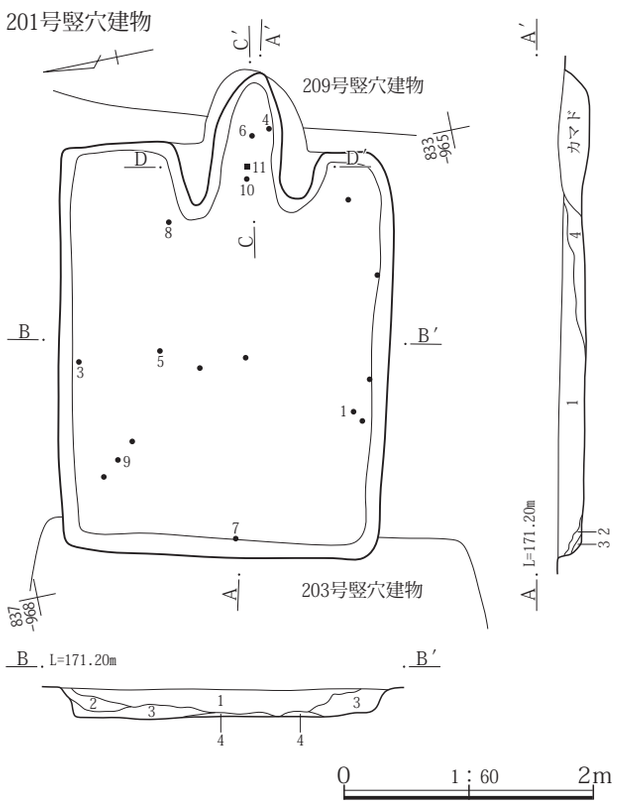
重複関係　203号竪穴建物、209号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は203号竪穴建物、209号竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　東西方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は3.30m、南北方向は2.65mを測る。確認面から床面までの壁高は８～20cmを測る。

床面積　6.81㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－103°－Ｅを指す。

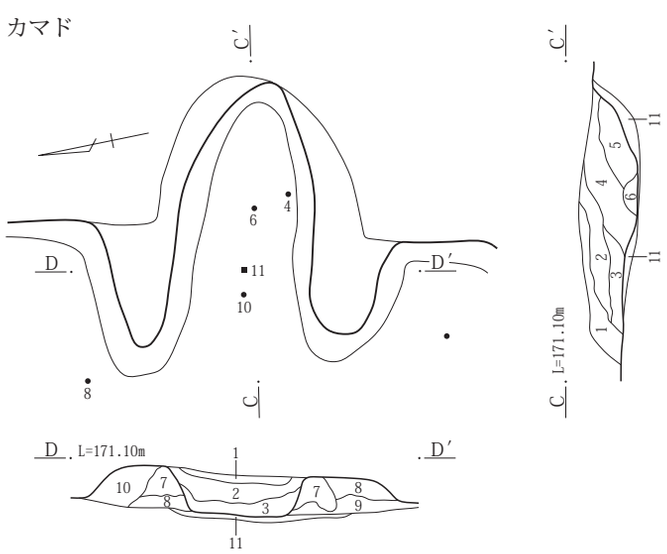


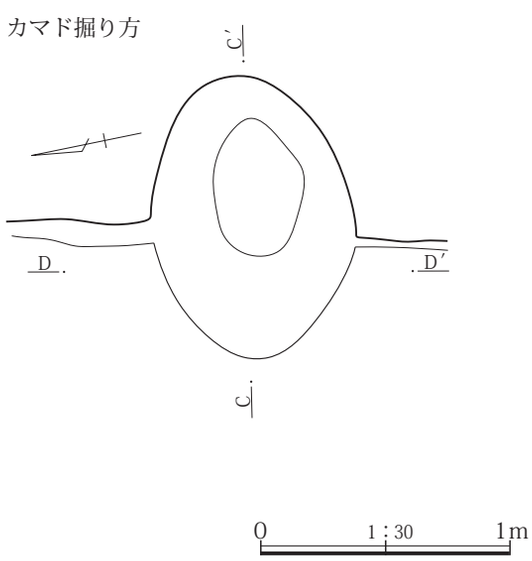
201号竪穴建物

1　暗褐 10YR3/3　As-C混土、不明瞭なロームブロックやAs-YPを不均等に少量含み、ややしまりが弱い非粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土を多量に含む、弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　ロームブロックをやや多く含み、しまりが強い砂質土。
4　暗褐 7.5YR3/3　ローム小ブロック、As-Cを少量と炭化物、焼土を若干含む、微粘性土。

201号竪穴建物　カマド

1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、不揃いのローム土や焼土粒を少量含み、ややしまりが強い微粘性土。
2　暗褐 7.5YR3/3　As-Cを少量と煙道側に焼土を含み、ややしまりが強い粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　黒色灰や炭化物粒を少量含み、ややしまりが強い細粒土。
4　にぶい赤褐 5YR5/4　焼土とローム土の混土。黒色土をブロック状に不均等に含み、しまりが強い弱粘性土。
5　黒褐 10YR3/2　ローム土を多くと焼土を若干含む。煙道からの流入土か。
6　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土が基質、焼土粒を多く含み、しまりが強い粘性土。
7　暗褐 7.5YR3/3　やや大粒の焼土粒を霜降状にローム粒を不均等に含み、ややしまりが強い細粒土。
8　暗褐 7.5YR3/3　７と同様、ローム土を多く含む。
9　暗褐 10YR3/4　黒色味強い粘性土が基質、不明瞭なローム土をブロック状に多量に含む。
10　暗褐 7.5YR3/3　ローム粒を含む、しまりが強い細粒土。
11　赤褐 5YR4/5　燃焼部火床面の焼土化。





第244図　201号竪穴建物遺構図

埋没状態　確認面から床面までが浅いため明確ではないが、土層断面の観察では壁際の三角堆積やレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.22m、幅が1.30m、燃焼部幅0.38mを測る。煙道部は壁外に存在し、天井は崩落した状態であった。また、天井は全体的に激しく焼土化した状態であった。掘り方は燃焼部から煙道部にかけて土坑状に浅く掘り込まれていた。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・皿・杯・盤・甕、鉄器の鎌と刀子などが出土している。このうち、４の須恵器杯と６の須恵器椀、10の土師器台付甕がカマドからの出土である。この他、１・３の須恵器杯、５の須恵器椀、７の須恵器盤、７・８の土師器甕が床面より８～18㎝上からの出土である。５の須恵器椀は床面上10㎝から出土したもので、外面体部には墨書がみられ、「早企」と判読されたが、「早企」の意味・性格については今後の課題としたい。

所見　本竪穴建物の存続期間はカマドや埋没土下位から出土した土師器甕や須恵器杯・椀などから９世紀第３四半期に比定できる。

202号竪穴建物

位置　４区調査区南端、Ｘ＝36830～36832、Ｙ＝-84962～-85966に位置する。南側約1/2は調査対象外のため欠く。

重複関係　209号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが新しい。

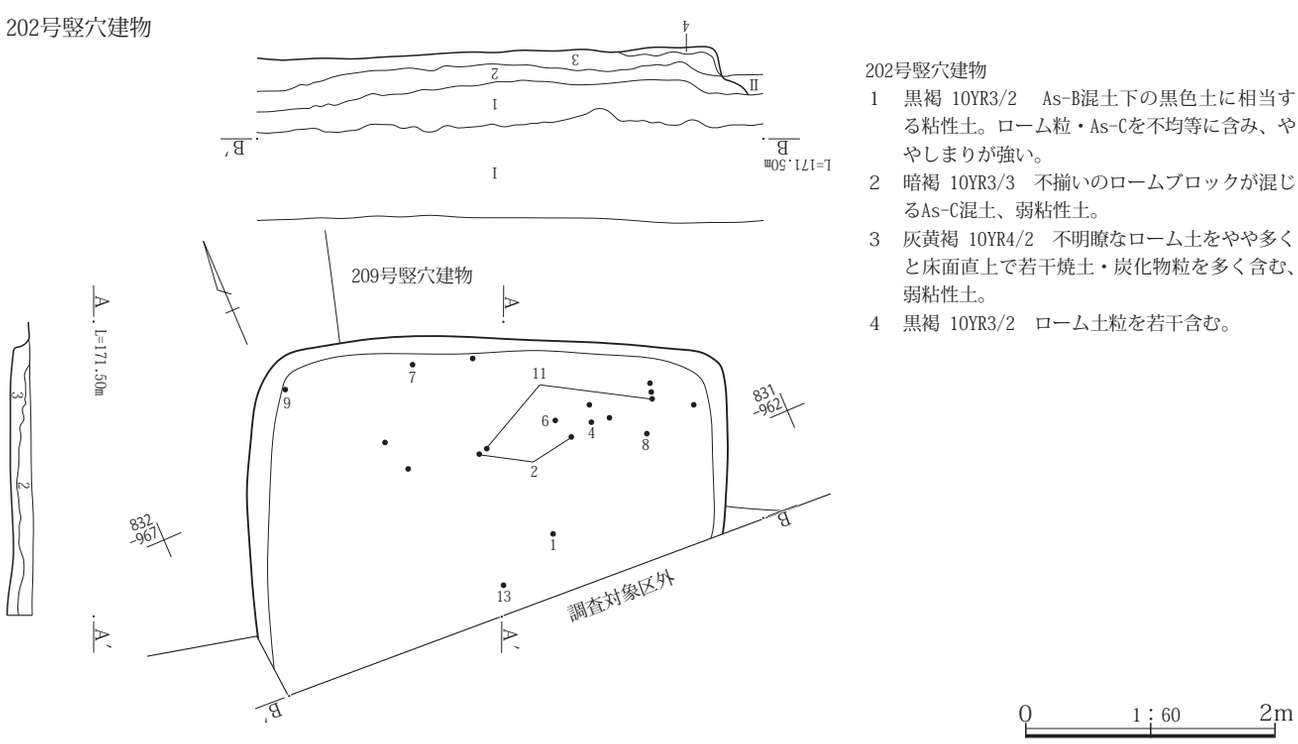
形状　長方形または方形を呈すると想定される。

規模　東西方向は3.32m、南北方向は調査範囲内で2.80mを測る。確認面から床面までの壁高は12～29㎝を測る。

床面積　残存範囲内で7.35㎡を測る。

主軸方位　主軸方向を東西方向と想定するとＮ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。



第245図　202号竪穴建物遺構図

床面　209号竪穴建物と重複する部分は209号竪穴建物の埋没土、その他は地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。出土遺物からはカマドが構築される時期の竪穴建物であることから調査対象外の東側にカマドが構築されていると想定される。

出土遺物　遺物には土師器杯・鉢・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが328点出土しているが、図示できた遺物は須恵器杯を中心とする13点であった。このうち、２の須恵器杯蓋、４・６・８の須恵器杯、11の土師器甕が床面から、７の須恵器杯が床面上６㎝から、３の須恵器杯蓋がカマドからの出土である。なお、13の有台杯は混入したものである。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した土師器甕や須恵器杯から９世紀第１四半期に比定できる。

重複関係にある209号竪穴建物とは比較的近い時期であるためか、床面の状態209号竪穴建物の埋没状態から209号竪穴建物を人為的に埋戻し、再度掘削して、踏み固めて床面とした可能性が窺える。

203号竪穴建物

位置　４区調査区南西端、Ｘ＝36833～36837、Ｙ＝-84967～-85970に位置する。西側の半分以上は調査対象区外のため欠く。

重複関係　201号竪穴建物、133号土坑と重複関係にある。新旧関係は201号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、133号土坑より新しい。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は調査範囲内で2.85m、南北方向は3.23mを測る。確認面から床面までの壁高は31～36㎝を測る。

床面積　残存範囲内で5.42㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－104°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　調査範囲内では若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　南東角寄りで検出されている。形状は楕円形を呈し、規模は径が0.60×0.60m、深さ0.41mを測る。内部からは土器などの出土はみられなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の中程よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.78m、幅が1.23m燃焼部幅0.35mを測る。煙道部は壁内に存在する。燃焼部火床面は若干の焼土が確認されただけであった。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯・甕などが出土している。このうち、６の須恵器高台付杯がカマドから出土している。この他の図示した土器は床面上から20～30㎝や埋没土内からの出土であるが、形態的には６と同時期の年代観が与えられ、本竪穴建物に共伴すると判断できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した須恵器高台付杯から８世紀第２四半期に比定できるが、１・２の土師器杯や４の須恵器杯蓋は８世紀第１四半期の年代観が与えられることから、８世紀第１四半期に構築され、第２四半期まで継続して存続したとみられる。

204号竪穴建物

位置　４区調査区南部、Ｘ＝36840～36844、Ｙ＝-84960～-85964に位置する。

重複関係　205号竪穴建物、212号竪穴建物、100号土坑と重複関係にある。新旧関係は100号土坑より本竪穴建物のほうが古く、205号竪穴建物、212号竪穴建物より新しい。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

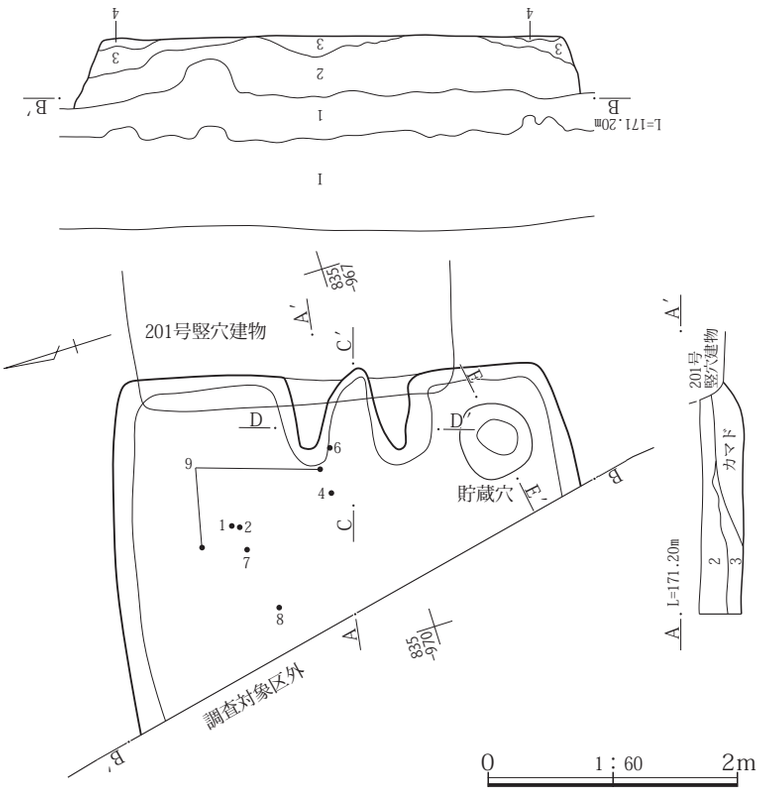
規模　主軸方向の東西方向は3.27m、南北方向は3.66mを測る。確認面から床面までの壁高は25～31㎝を測る。

床面積　9.05㎡を測る。

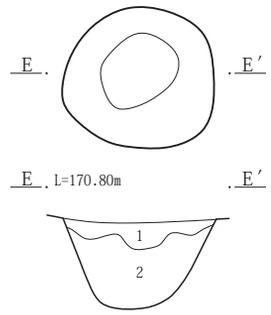
主軸方位　Ｎ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では一部の壁際で三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

203号竪穴建物



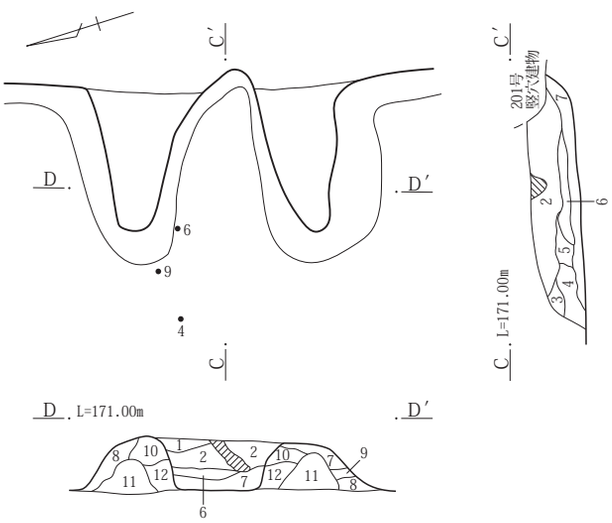
貯蔵穴



203号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、ややフカフカした感触。
2　黒褐 10YR3/2　As-C混土、ローム粒を多くと焼土粒、炭化物粒を不均等に含み、ややしまりが強い。
3　暗褐 10YR3/3　基質土は細粒でやや黄色味おびる、ローム粒を少量と炭化物、焼土を若干含む、弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　ローム小ブロックを若干含み、しまりが強い。

203号竪穴建物　貯蔵穴
1　黒褐 10YR3/2　黒色味強い細粒土を主体、As-YPを少量含む。
2　灰黄褐 10YR4/2　ローム粒の混入多いやや粗粒土。不揃いのロームブロックやAs-YPと壁際に焼土を少量含む。

カマド



203号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土１と同様。
2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土と黒褐色土の混土。焼土粒を少量含み、ややしまりが強い。
3　灰黄褐 10YR4/2　２と４との混土。
4　褐 10YR4/4　径10mm大のローム小ブロック主体、As-YPを含む黒褐色土と焼土粗粒を不均等に含み、ややしまりが強い。
5　暗褐 10YR3/4　ローム粒と黒褐色土の混土。焼土粒、灰を含み、ややしまりが強い。
6　褐 10YR4/4　ローム土主体、上面に非熱赤変部分有り。
7　暗灰黄 2.5Y4/2　４に近似、細粒でしまりやや弱い。
8　黒褐 10YR3/2　焼土を少量含む。
9　黒褐 10YR3/2　８と同様、ローム土をやや多くふくむ。
10　暗褐 10YR3/3　As-YPやや多くとローム土を不均等に含む、弱粘性土。
11　暗褐 10YR3/3　10と同様、含有物少なく、しまりが強い。
12　灰黄褐 10YR5/2　ローム土主体に黒褐色土がブロック状に焼土を多く含み、しまりが強い。

0　1：30　1m

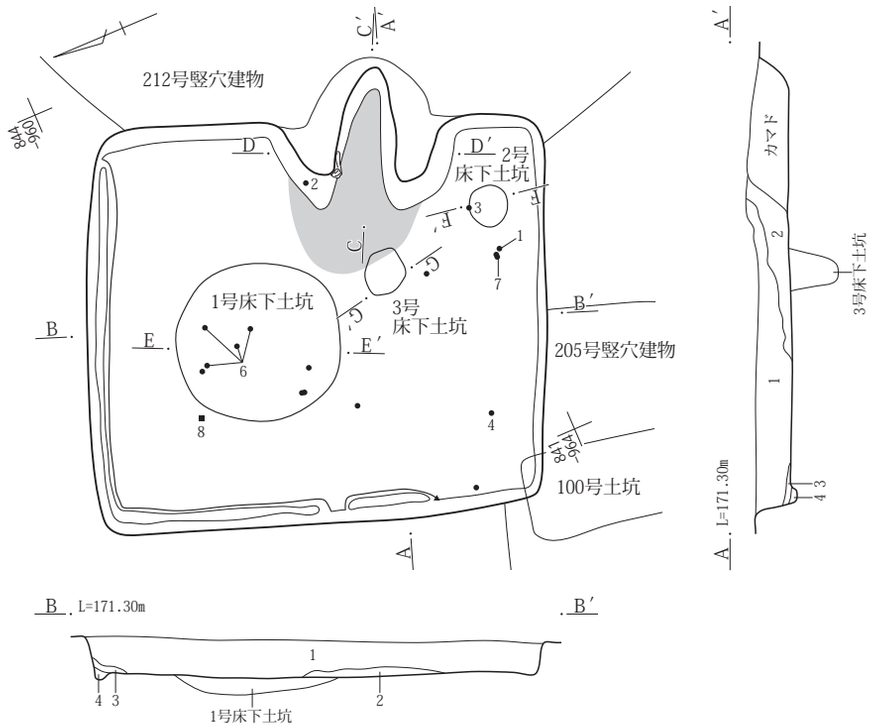
第246図　203号竪穴建物遺構図

床面　212号竪穴建物との重複部分は埋没土、その他の部分は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　中央やや北寄りとカマド前、カマド南で床下土坑を検出している。１号床下土坑は楕円形を呈し、規模は長径1.30m、短径1.26m、深さ0.13mを測る。２号床下土坑は形状が楕円形を呈し、規模は径0.33m×0.30m、深さ0.52mを測る。３号床下土坑は形状が楕円形を呈し、規模は径0.40×0.32m、深さ0.47mを測る。１号床下土坑内部からは５の須恵器鉢が出土している。この鉢は口縁部が内湾して仏事にもちいる鉄鉢状を呈している。

壁溝　北壁から西壁の南西角手前0.7mまでの間の壁下で検出されている。規模は幅が15cm前後、深さ５～10cmを測る。

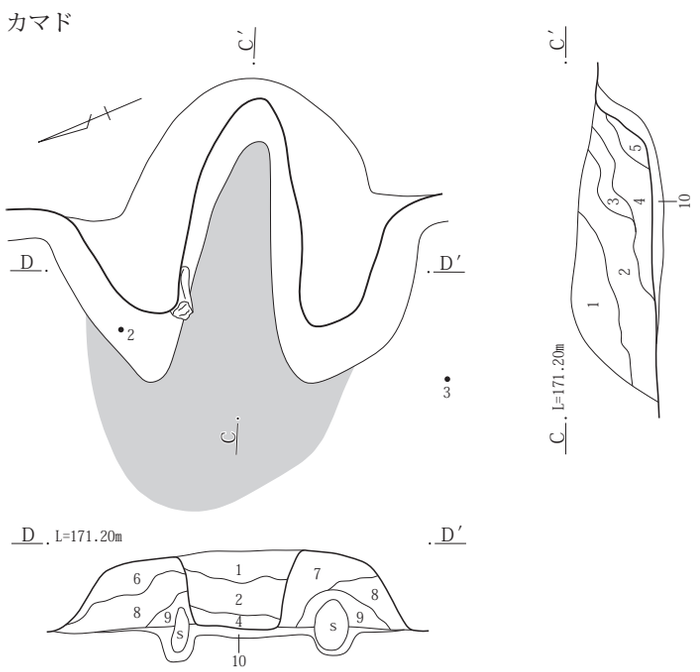
204号竪穴建物



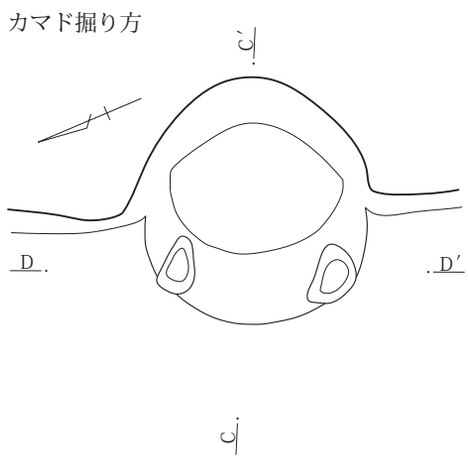
204号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・ローム粒・AS-YPを霜降状にやや多く含む、非粘性土でサラサラした感触。
2　暗褐 10YR3/3　1と同様。不明瞭なローム小ブロックや焼土をやや多く含む。
3　暗褐 10YR3/3　ローム粒をやや多く含み、しまりやや強い細粒微粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　含有物少なく、しまりが強い細粒粘性土。

0　1：60　2m

カマド



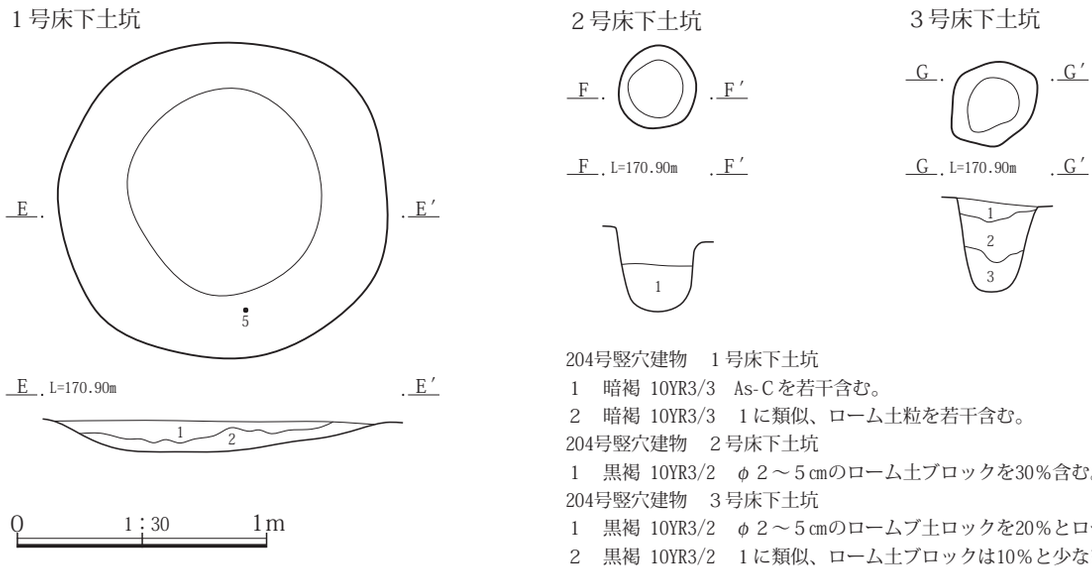
カマド掘り方



0　1：30　1m

204号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　As-YPを含み、ややしまりがある粗粒土。
2　にぶい黄褐 10YR5/3　やや粗粒のローム土が主体、焼土混じりの黒褐色土を不均等なブロックに含む。
3　灰黄褐 10YR4/2　焼土混じりのローム土・黒褐色土の混土、しまりが強い粗粒土。
4　褐灰 7.5YR4/1　焼土・灰を多く含む、弱粘性土でサラサラした感触。
5　黒褐 10YR3/2　焼土・炭化物粒をごくわずかに含む。
6　黒褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土１に近い。As-YPを多く含む。
7　にぶい黄褐 10YR5/3　ローム土主体、As-YP混じりの焼土を不均等に含み、しまりが強い粘性土。
8　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土主体、焼土を不均等に含み、しまりが強い。
9　暗褐 10YR3/4　焼土を不均等にやや多く含み、ややしまりが弱い。
10　黒褐 10YR3/2　焼土ブロック・不明瞭なローム土ブロック・白色粒を少量含む。

第247図　204号竪穴建物遺構図（１）



204号竪穴建物　１号床下土坑
１　暗褐 10YR3/3　As-Cを若干含む。
２　暗褐 10YR3/3　１に類似、ローム土粒を若干含む。
204号竪穴建物　２号床下土坑
１　黒褐 10YR3/2　φ２～５㎝のローム土ブロックを30％含む。
204号竪穴建物　３号床下土坑
１　黒褐 10YR3/2　φ２～５㎝のロームブ土ロックを20％とローム土をシミ状に含む。
２　黒褐 10YR3/2　１に類似、ローム土ブロックは10％と少ない。
３　明黄褐 2.5Y6/6　黒褐色土をシミ状に含む。

第248図　204号竪穴建物遺構図（２）

柱穴　検出されなかったが、２号、３号床下土坑のどちらかが柱穴であった可能性も想定される。

貯蔵穴　検出されなかったが、２号床下土坑が位置的に貯蔵穴であった可能性も想定される。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口が失われていたが、燃焼部の天井は崩落した状態、両袖は残存していた。規模は全長が1.25m、幅が1.45m、燃焼部幅0.28mを測る。燃焼部奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。両袖内部には左側長さ18㎝、径７㎝、右側長さ21㎝、径14㎝の棒状礫が立つように据え付けられていた。掘り方はカマド構築面全体に土坑状の浅い掘り込みがみられた。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・鉢・短頸壺・甕、炉底滓、石製品砥石などが出土している。このうち、３の須恵器杯蓋、４の須恵器杯、６の須恵器短頸壺蓋、石製品砥石が床面から、２の須恵器杯蓋がカマド左袖から、５の須恵器鉢が１号床下土坑から出土している。なお、１の土師器杯は床面上19㎝からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯蓋・杯・鉢から８世紀第１四半期に比定できる。５の床下土坑から出土した土師器鉢は前記のように仏事にもちいる鉄鉢であるが、出土位置が床下土坑であることから、この竪穴建物の居住者が使用したと考えるより構築時の地鎮など祭祀目的に埋納されたものと想定される。

205号竪穴建物

位置　４区調査区南西部、Ｘ＝36833～36842、Ｙ＝-84963～-85967に位置する。北東角から北壁の東側を重複関係にある204号竪穴建物、南東角から南壁の東寄りを101号・102号土坑、西壁寄りの一部を撹乱によって欠く。

重複関係　204号竪穴建物、207号竪穴建物、100号土坑、101号土坑、102号土坑と重複関係にある。新旧関係は204号竪穴建物、100号土坑、101号土坑、102号土坑より本竪穴建物のほうが古く、207号竪穴建物より新しい。

形状　東辺が西辺より0.8mほど短い台形状を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は4.15m、南北方向は最大で3.93mを測る。確認面から床面までの壁高は25～31㎝を測る。

床面積　12.41㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－108°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では南東側から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。なお、カマド前の東西1.0m、南北2.0mの範囲には焼土が密に散布していた。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　東壁のカマド北側から北壁、西壁の中程までの間で検出している。規模は幅が15～20㎝、深さ３～８㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.97m、幅が1.13m、燃焼部幅0.37mを測る。燃焼部の奥側半分から煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部火床面は焼土化が顕著であった。掘り方は燃焼部奥から煙道部にかけて浅い土坑状の窪みが確認されている。

出土遺物　遺物には土師器甕、須恵器皿・耳皿・椀・広口壺、土製品土錘、鉄製品釘、流動滓などが出土している。このうち、１の須恵器皿、７の土師器台付甕が床面から、９の土師器甕がカマドから出土している。この他、３の須恵器椀が床面より17㎝上、８の土師器甕が床面より16㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は８の土師器甕は９世紀第３四半期の年代観が与えられるが、床面やカマドから出土した須恵器皿や土師器甕などから９世紀第４四半期に比定できる。

206号竪穴建物

位置　４区調査区中部西寄り、Ｘ＝36849～36851、Ｙ＝-84966～-85970に位置する。

重複関係　104号土坑、106号土坑、107号土坑、108号土坑、194号ピットと重複関係にある。新旧関係は重複関係のある土坑、ピットより本竪穴建物のほうが古い。

形状　南北方向がわずかに長いが、ほぼ方形を呈す。

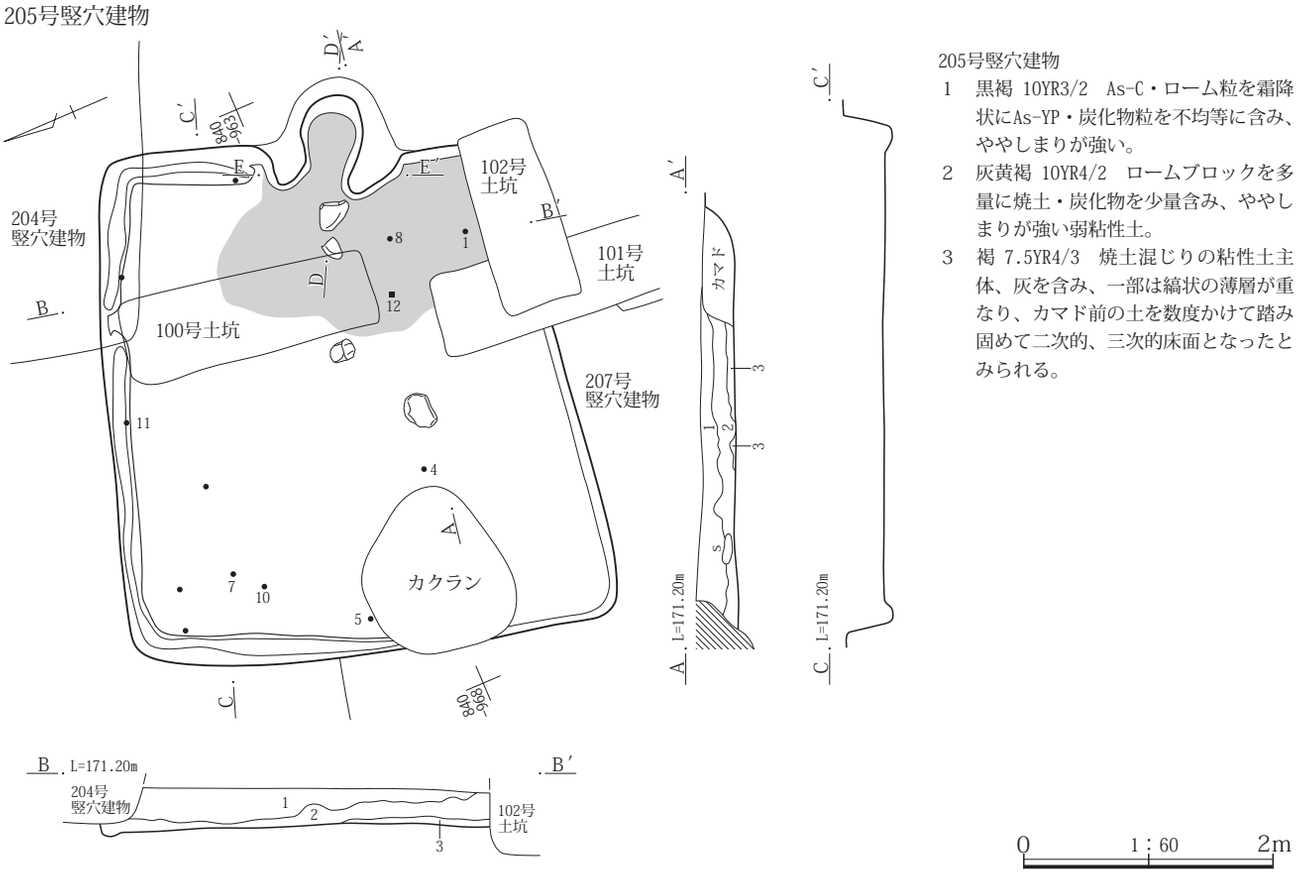
規模　主軸方向の南北方向は2.76m、東西方向は2.60mを測る。確認面から床面までの壁高は27～39㎝を測る。

床面積　5.98㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－44°－Ｅを指す。なお、カマドはＮ－60°－Ｅと壁に対して角度をもって構築されている。

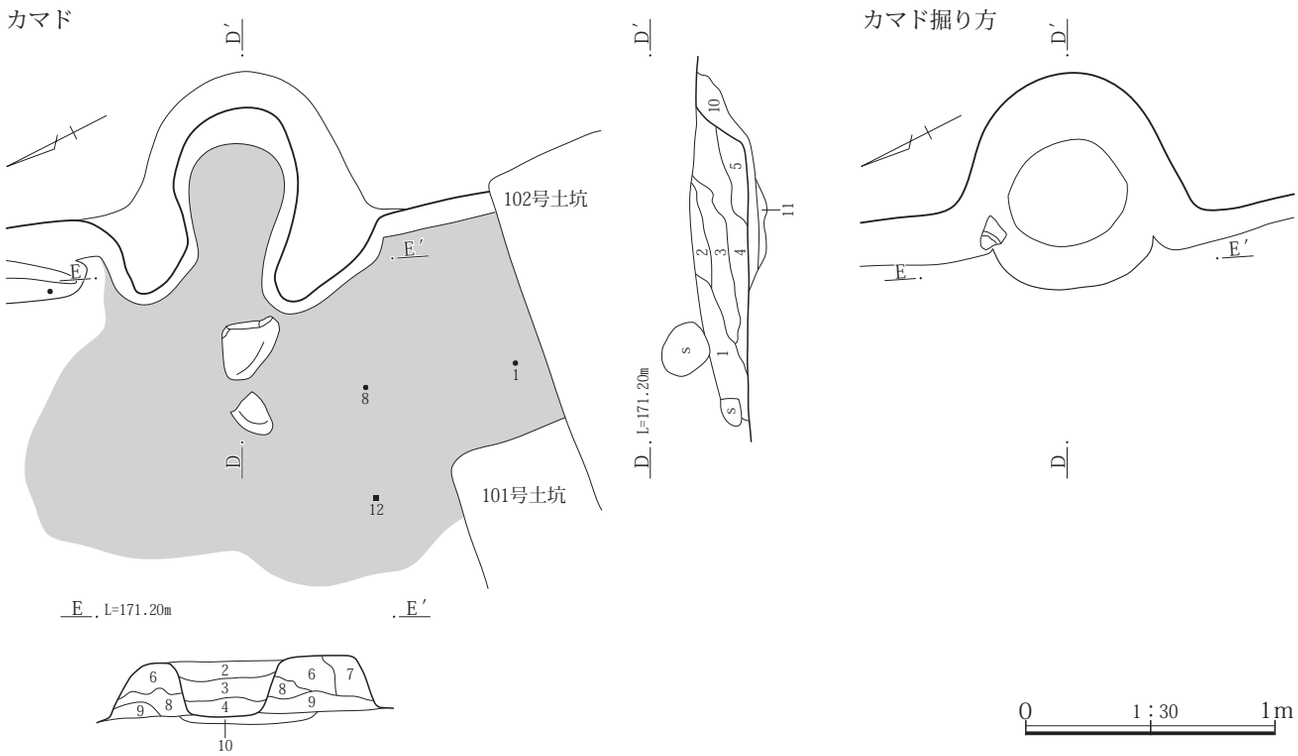
埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

205号竪穴建物



205号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C・ローム粒を霜降状にAs-YP・炭化物粒を不均等に含み、ややしまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　ロームブロックを多量に焼土・炭化物を少量含み、ややしまりが強い弱粘性土。
3　褐 7.5YR4/3　焼土混じりの粘性土主体、灰を含み、一部は縞状の薄層が重なり、カマド前の土を数度かけて踏み固めて二次的、三次的床面となったとみられる。

第249図　205号竪穴建物遺構図（１）



205号竪穴建物　カマド
1　にぶい黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土と黒褐色土の混土。焼土を若干含み、しまりが強い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　不明瞭なローム土を少量と炭化物を若干含む、やや粗粒土でボソボソした感触。
3　暗褐 10YR3/4　２と同様。焼土粒・ローム状ブロック混入やや多く炭化物を若干含む。
4　灰褐 5YR4/2　ローム状土が基質、焼土を多量に灰を含み、ややしまりが強いくややサラサラした感触。
5　灰褐 5YR4/2　黒色土と多量の焼土の混土。灰を多く含み、ややしまりが弱い。
6　暗褐 10YR3/4　黒褐色土とローム粒の混土。焼土を含み、ややしまりが強い非粘性土。
7　暗褐 10YR3/4　６と同様、ローム小ブロックを多く含む。
8　褐 7.5YR4/3　ブロック状のローム粒に黒褐色土・焼土を不均等に少量と炭化物を若干含み、ややしまりが強い弱粘性土。
9　褐 7.5YR4/3　ローム粗粒と暗褐色の弱粘性土の混土、焼土を不均等にやや多く一部で灰を小ブロック状に含み、しまりが強い。
10　暗褐 7.5YR3/3　炭化物をごくわずかに含み、ややしまりが弱いやや砂質土。
11　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土、粗粒のローム土が被熱赤変したもの。

第250図　205号竪穴建物遺構図（２）

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

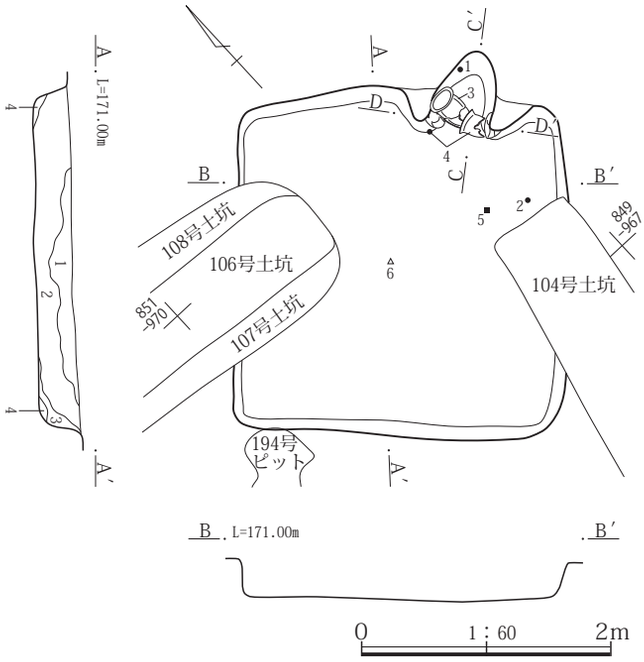
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の南東角寄りにカマドが構築されている。なお、主軸方向はＮ－60°－Ｅと壁に対して直交よりやや東へ角度をもって構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.78m、幅が1.08m、燃焼部幅0.33mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部手前側には袖内に右側長さ32㎝、径15㎝、左側長さ41㎝、径15㎝の棒状礫を立てるように据え付け、この位置に３と４の土師器甕を２個体つなげて渡すようにして構築していた。なお、燃焼部火床面は焼土化が顕著であった。掘り方は燃焼部から煙道部下に浅い土坑状の掘り込みが確認できたが、袖下は棒状礫を据える小穴以外は床面上に構築されていた。

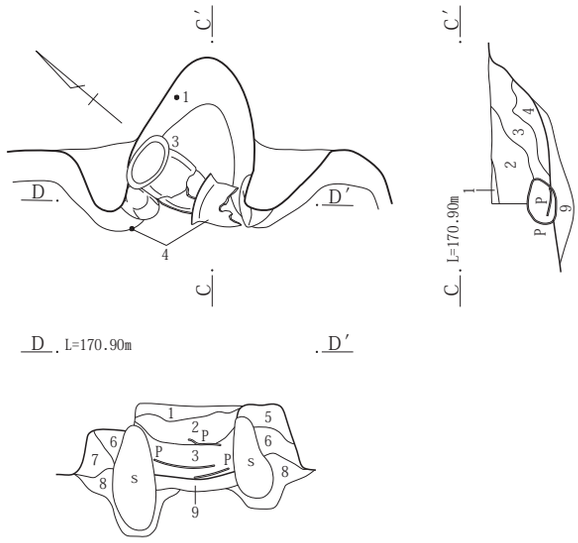
出土遺物　遺物には土師器杯・甕、鉄製品鎌・釘、馬歯などが出土している。このうち、１の土師器杯と３・４の土師器甕がカマドから、５の鉄製品鎌が床面から、２の土師器杯が床面より７㎝上から出土している。馬歯は竪穴建物中央の床面より10～16㎝上位からの出土である。馬歯そのものについては第４章１項に鑑定結果を掲載してある。出土状態から埋没過程での投棄・廃棄とみられるが、竪穴建物の埋没はそれほど長期間かからない

206号竪穴建物

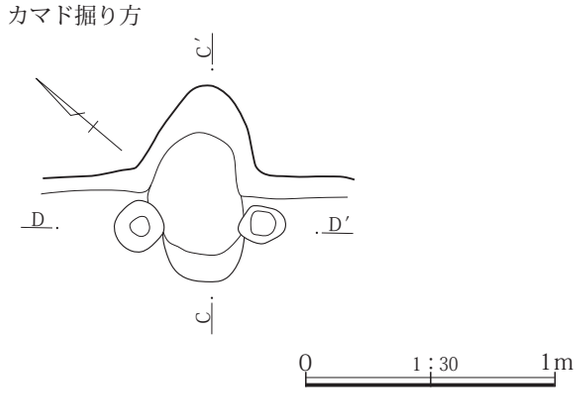


206号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを不均等にやや多くとAS-YP・ローム小ブロックを少量含み、ややしまりが強い非粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/3　As-C・ローム粗粒・As-YPを霜降状に多量含む、微粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　ローム粒を霜降状に含み、しまりやや弱い腐植土質の土。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土を多く含み、ややしまりが弱い弱粘性土。

カマド



カマド掘り方



206号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土１と同様。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPを少量不均等に焼土を少量含み、ややしまりがあるサラサラした感触。
3　暗褐 10YR3/3　しまりが強い細粒土。
4　暗褐 7.5YR3/3　３に近似、焼土・ローム粒をやや多く含み。しまりが強い。
5　黒褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土１と同様。
6　黒褐 10YR3/2　As-C・As-YPを多量に含み、しまりやや強い。
7　灰黄褐 10YR4/2　ローム土と黒褐色土の混土。しまりが強い。
8　黒褐 10YR3/2　黒色味強い非粘性土が基質、As-YP、As-Cを不均等に含み、しまりが強い。
9　暗褐 7.5Y3/3　焼土ブロックを不均等に少量含む。

第251図　206号竪穴建物遺構図

ことは重複関係から想定される。こうしたことから馬歯の廃棄・投棄は本竪穴建物廃棄直後と想定できる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した１の土師器杯や３・４の土師器甕から７世紀前半代に比定できる。

207号竪穴建物

位置　４区調査区南西部、Ｘ＝36837～36841、Ｙ＝-84965～-85970に位置する。北西角を重複関係にある115号土坑、北東部の上部を205号竪穴建物、カマドの煙道部を101号・102号土坑、床面の一部を撹乱によって欠く。

重複関係　205号竪穴建物、101号土坑、102号土坑、115号土坑、224号ピットと重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが古い。

形状　東西方向に長い長方形を呈す。

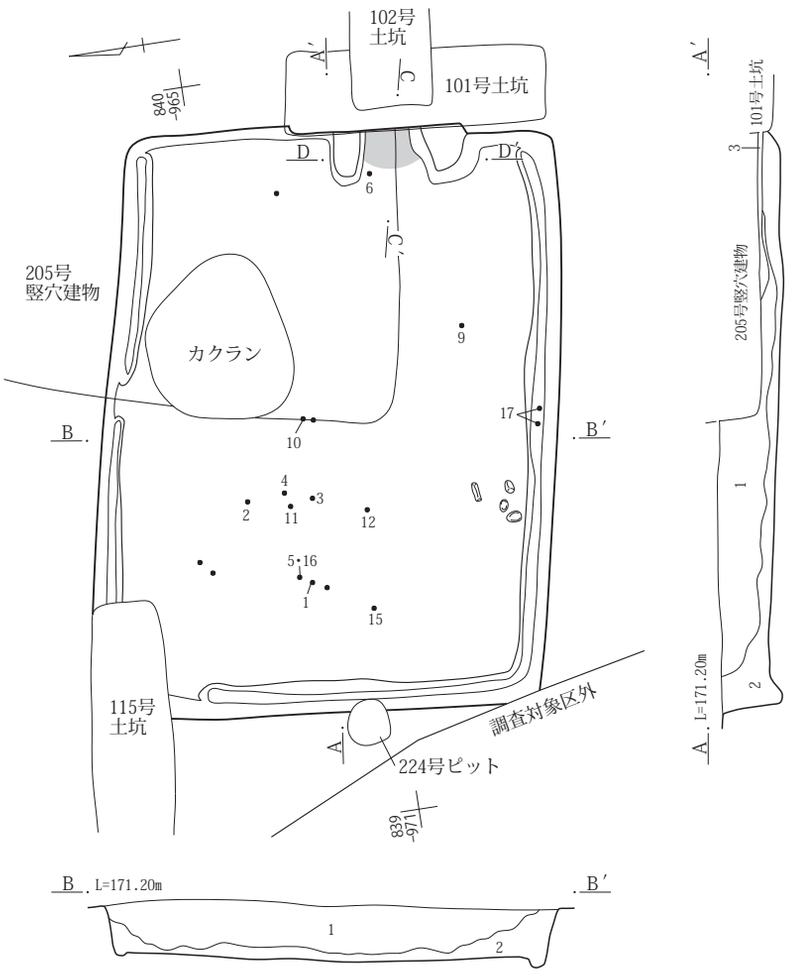
規模　主軸方向の東西方向は4.58m、南北方向は3.52mを測る。確認面から床面までの壁高は38～43cmを測る。

床面積　13.20㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－100°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

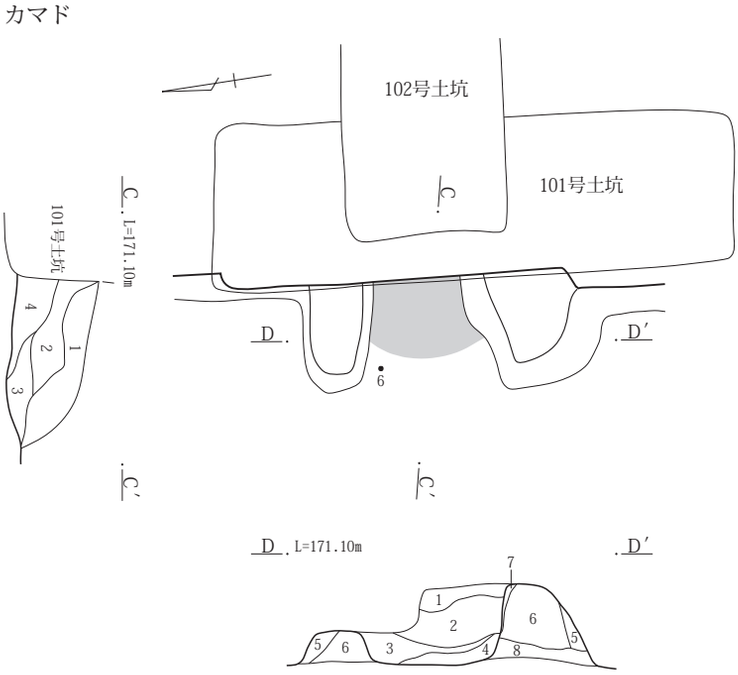
207号竪穴建物



207号竪穴建物
1　暗褐 10Ｒ3/3　ロームブロックを少量とローム粒を多く含み、ややしまりが強い粗粒土。
2　黒褐 10YR3/2　大粒ロームブロックを少量含む、やや細粒の微粘性土。カマド側で焼土を若干と炭化物粒をやや多く含む。
3　暗褐 7.5YR3/3　黒褐色粘性土に焼土ブロックをやや多く含む。

0　1：60　2m

カマド



207号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　不明瞭なローム土と小粒のAS-YPを霜降状に含み、ややしまりが強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/2　ロームブロックと黒褐色土の混土、煙道側で焼土をやや多く含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　大粒のAs-YPと灰を含む、細粒弱粘性でややサラサラした感触。
4　灰褐 7.5YR4/2　不明瞭なローム土主体にブロック状の焼土をやや多くと下半はブロック状の焼土含み、しまりが強い。
5　黒褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土２と同様。
6　暗褐 10YR3/3　不揃いのAs-YPとAs-Cを霜降状に焼土を不均等に含み、ややしまりが弱い粗粒土。
7　暗褐 10YR3/3　６と同様、ロームブロックをやや多く含む。
8　灰黄褐 10YR4/2　ロームブロックと黒褐色土の混土、炭化物、焼土を不均等にやや多く含む。

0　1：30　1m

第252図　207号竪穴建物遺構図

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　北壁、西壁の北西角寄りの0.7mを除く部分と南壁下で検出している。規模は幅が15㎝前後、深さ５～８㎝を測る。

柱穴　検出されている。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は良好な状態で残存していた。規模は全長が残存範囲で0.55m、幅が1.20m、燃焼部幅0.35mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部火床面は焼土化が顕著であった。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯・盤・高盤・瓶・横瓶・摺鉢・甕、鉄製品釘、石製品磨石などが出土している。このうち、９の土師器杯、17の土師器甕が床面から、６の土師器杯がカマドから出土している。この他、１～５の土師器杯、10～12の須恵器杯・盤、15の須恵器横瓶、16の須恵器摺鉢は床面から20～38㎝ほどの高さからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した17の土師器甕、カマドから出土した６の土師器杯から７世紀第４四半期に比定できる。なお、床面上20～40㎝から出土している土師器杯には６と同じ年代観を与えることができる個体もあるが、この位置からは底部が平底に近く、暗文が施された土師器杯も出土しており、８世紀第１四半期の年代観が与えられることから、本竪穴建物の存続期間は７世紀末から８世紀初頭に比定するのが妥当と考える。

208号竪穴建物

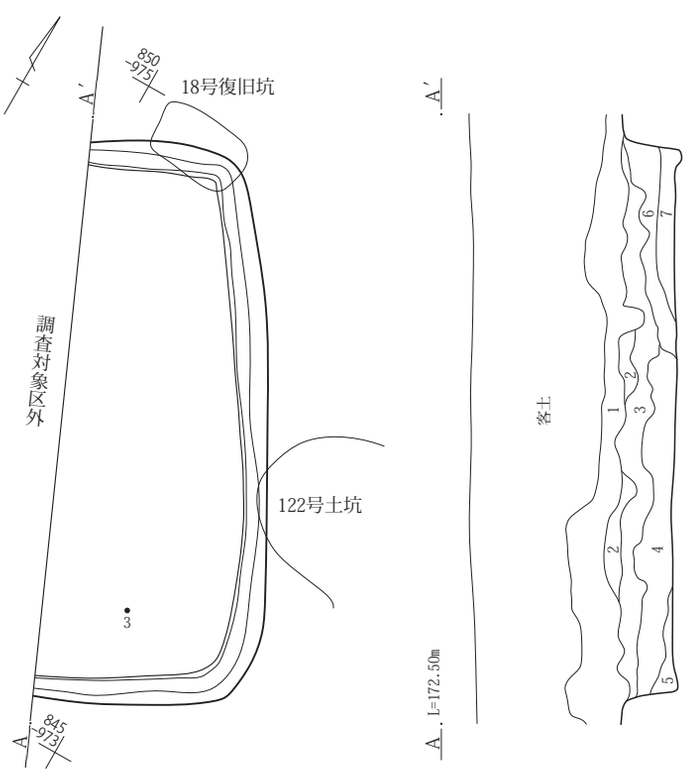
位置　４区調査区中央部西端、Ｘ＝36845～36849、Ｙ＝-84972～-859775に位置する。西側４分の３は調査対象区外に存在する。

重複関係　122号土坑、18号復旧坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　南北方向は4.49m、東西方向は調査範囲内で1.99mを測る。確認面から床面までの壁高は24～38㎝を測る。

208号竪穴建物



208号竪穴建物
1　黒褐 10YR2/2　ややしまりが弱くフカフカした感触。
2　黒褐 10YR2/2　１と同様で不明瞭なローム土やAs-Cをやや多く含み、ややしまり強くなる。
3　黒褐 10YR2/3　１と同様。不明瞭なローム土をブロック状に含み、やや粘性増す。
4　暗褐 10YR3/2　ローム粒・焼土粒・As-C・As-YP等を多く含み、ややしまりが強い弱粘性土。
5　黒褐 10YR2/3　大粒AS-YP、炭化物粒を含み、しまりがある粘性土。
6　暗灰黄 2.5Y4/2　不揃いなロームブロック多く含み、しまりが強い粘性土。
7　暗灰黄 2.5Y4/2　６と近似。

0　1：60　2m

第253図　208号竪穴建物遺構図

床面積　残存範囲内で5.45㎡を測る。

主軸方位　南北方向を主軸方向と想定するとＮ－31°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内ではすべての壁下で検出している。規模は幅が18～23㎝、深さは２～４㎝を測る。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。出土遺物からはカマドが構築されている時期の竪穴建物である。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀、石製品臼玉などが出土しているが、図示可能な遺物は２点だけであった。出土した遺物のほとんどは埋没土内からで床面からの出土など確実に本竪穴建物に共伴するものはみられなかった。

所見　本竪穴建物の存続期間は、確実に共伴する遺物が存在しないため、確実性に欠けるが図示した須恵器杯・椀の２点は９世紀後半の年代観が与えられることから、本竪穴建物も同時期に比定できる。

209号竪穴建物

位置　４区調査区南端、Ｘ＝36830～36837、Ｙ＝−84957～−85965に位置する。南東角が調査対象外に存在し、カマドの右袖側を撹乱によって欠く。

重複関係　202号竪穴建物、210号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は202号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、210号竪穴建物より新しい。

形状　東西方向が長い長方形を呈す。

規模　主軸方向の東西方向は6.62m、南北方向は5.62mを測る。確認面から床面までの壁高は37～54㎝を測る。

床面積　推定で29.99㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では床面に堆積している３層や４層が盛り上がった不自然な状態であることから、人為的な埋め戻しが行われた可能性が想定される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　東壁北東角の南側1.0mから北壁、西壁、南壁の南西角から0.8mまでの間に連続して設けられている。幅は30㎝前後、深さは９～18㎝を測る。

柱穴　柱穴は５本検出されている。柱穴Ｐ４、Ｐ２、Ｐ５は対角線上に位置するが、柱穴Ｐ１とＰ３は対角線上からややずれた位置である。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。

Ｐ１：円形で東側の側面が膨らむ。径0.82×0.78m、深さ0.84m。Ｐ２:楕円形、径0.32×0.25m、深さ0.51m。Ｐ３：楕円形、径0.86×0.71m、深さ0.65m。Ｐ４：楕円形、径0.56×0.44m、深さ0.50m、Ｐ５：楕円形、西側にテラス状の段有、径0.60×0.40m、深さ0.52m。柱穴間距離はＰ１～Ｐ２が3.75m、Ｐ２～Ｐ３が2.40m、Ｐ３～Ｐ４が3.00m、Ｐ４～Ｐ１が2.70mを測る。

各柱穴では柱痕は確認されていないが、床面付近は焼土やロームブロックを含む黒褐色土などによって固められていた。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は焚口が失われていたが、燃焼部から煙道部の天井は崩落した状態で、袖は右側を撹乱によって欠くが左側は残存していた。規模は全長が1.46m、幅は調査範囲内で1.15m、燃焼部幅も調査範囲内で0.65mを測る。燃焼部の奥側半分と煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部中程には支脚に使用されたとみられる長さ30㎝、径10㎝の棒状礫が据えられた状態で残存していた。燃焼部内側の左側に二分割された状態の角礫が残存していたが、据え付けられている痕跡もこの礫の下だけであるため、この角礫がどのような使われ方をしていたかは不明である。なお、燃焼部から煙道部の天井はカマドの土層２とみられ、火床面とともに顕著な焼土化がみられた。

出土遺物　遺物には土師器杯・鉢・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・盤・高盤・短頸壺・提瓶・甕・瓦片・銅製品銙帯鉈尾、鉄製品釘、流動滓など多種に及び、未掲載の土器片だけでも2790点と大量の出土量があった。このうち、３・５の土師器杯、22・23・29・34の須恵器杯、44・46

の須恵器椀、52の高盤、59の土師器甕、63の須恵器甕が床面から、51の須恵器盤、58の土師器甕がカマドからの出土である。この他、図示した土器の多くは床面より10～30㎝の間から出土している。こうした土器も床面から出土した土器と形態的に近いことから、本竪穴建物に共伴する遺物と考えられる。なお、65の銅製鉈尾は壁溝内から出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土器から８世紀第３四半期に比定できるが、18・25・30の須恵器杯のように底部のロクロ切り離し技法が回転糸切り無調整のものが存在する。こうした状況を考慮すると本竪穴建物の存続期間は８世紀第３四半期が中心とする時期であるが、第４四半期まで存続していたとみられる。

210号竪穴建物

位置　４区調査区南端、Ｘ＝36835～36836、Ｙ＝−84958～−85962に位置する。南側４分の３を重複関係にある209号竪穴建物によって欠く。

重複関係　209号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈する。

規模　東西方向は3.67m、南北方向は残存範囲で1.42mを測る。確認面から床面までの壁高は28～47㎝を測る。

床面積　残存範囲内で3.15㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－14°－Ｅを指す。

埋没状態　残存範囲が狭いため判然としない。

床面　残存範囲では地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　残存範囲では検出されなかった。出土遺物からはカマドが構築されている時期の竪穴建物である。

出土遺物　重複関係にある209号竪穴建物によって大部分を欠くため出土した遺物もわずかであった。出土した土器も小片や胴部片などのため図示することができなかった。出土位置についても小片のため記録されていない。なお、出土した土器は土師器25点、須恵器２点、縄文土器１点であった。内訳は土師器甕18点、杯７点、須恵器杯１点、甕１点であった。出土した土師器杯には底部が丸底に近い形態で口縁部がほとんど内湾しないものと口縁部が直線的な形態のもの、須恵器杯は口縁部の小片ではあるが直線的であまり開かない形態のものがみられた。

所見　本竪穴建物の存続時期は重複関係のある209号竪穴建物の存続期間の時期と出土した土器の形態から判断した。土師器杯口縁部や須恵器杯口縁部の形態からは８世紀前半代に比定できる。

211号竪穴建物

位置　４区調査区北西部、Ｘ＝36863～36869、Ｙ＝−84971～−85978に位置する。北側の床面上を重複関係にある竪穴建物によって欠く。

重複関係　199号竪穴建物、200号竪穴建物、213号竪穴建物、143号土坑と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが古い。

形状　南北方向が東西方向に比べてわずかに長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の南北方向は4.87m、東西方向は4.60mを測る。確認面から床面までの壁高は16～28㎝を測る。

床面積　19.56㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－44°－Ｅを指す。

埋没状態　埋没土の上部を重複関係にある竪穴建物によって欠き、下部も灰黄褐色土だけで埋没しているため判然としない。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　南東角から南壁側と東壁側、3.0mほどの壁下で検出されている。規模は幅が10㎝前後、深さ５～10㎝を測る。

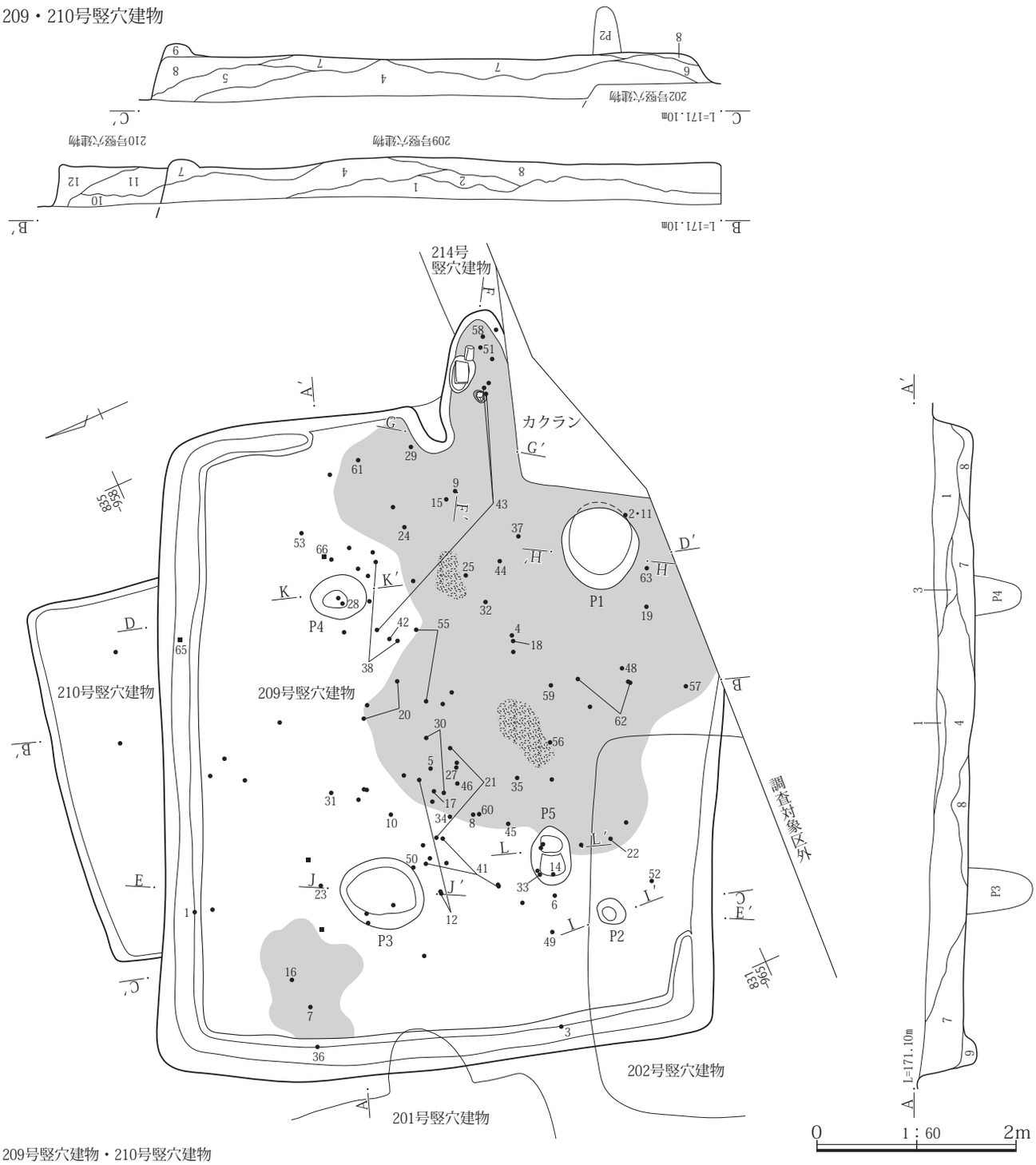
柱穴　対角線上で４本の柱穴を検出している。この他にも柱穴Ｐ４の西、西壁側で補助柱穴の可能性が想定される柱穴Ｐ５が検出されている。各柱穴の形状と規模、柱穴間距離は次のとおりである。

Ｐ１：隅丸方形、径0.42×0.42m、深さ0.58m

Ｐ２：楕円形、径0.50×0.42m、深さ0.51m

Ｐ３：楕円形、径0.61×0.55m、深さ0.39m

209・210号竪穴建物



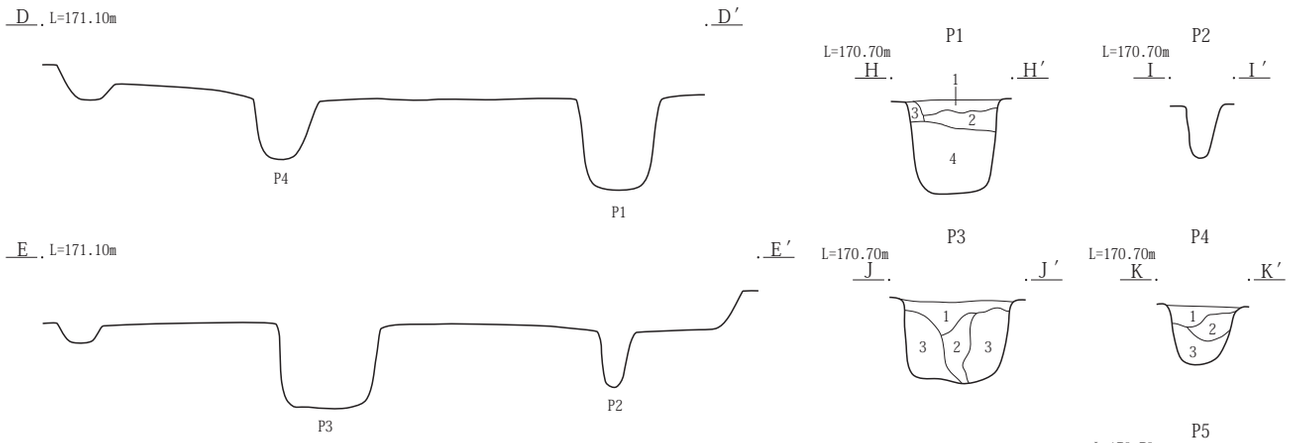
209号竪穴建物・210号竪穴建物

1　灰黄褐 10YR4/2　AS-YPを若干とローム小ブロック、焼土粒等を少量含み、ややしまりが強い細粒土。
2　灰黄褐 10YR4/2　１と同様、ローム粒を多く含む。
3　灰黄褐 10YR4/2　１と同様、焼土、灰褐色粘性土ブロックを含む。
4　黒褐 10YR3/2　AS-YP、炭化物粒、ローム粒を不均等に少量含み、ややしまりが強い粗粒土。
5　黒褐 10YR3/2　４と同様、含有物やや多くなる。
6　黒褐 10YR3/2　４と同様であるが、含有物少ない。
7　暗褐 10YR3/3　不明瞭なローム土ブロックとAS-YPを不均等に含み、しまりが強い。
8　暗褐 10YR3/3　大粒のAS-YP、ロームブロックを多く含み、しまりが強い粘性土。
9　暗褐 10YR3/3　AS-YP・As-Cを霜降状に含む。

210号竪穴建物

10　暗褐 10YR3/3　９と同様、ローム土が混じり、AS-YPもやや多い。焼土散見。
11　暗褐 10YR3/3　９に近似、含有物少ないが、下半に向かってローム粒やや増える。
12　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いのローム土ブロックを多量に含み、ややしまりが強い。

第254図　209・210号竪穴建物遺構図



209号竪穴建物　Ｐ１
１　黒褐 10YR2/3　AS-YPブロック・焼土ブロックを各５％含む。
２　褐 10YR4/4　焼土を30％含む。後の混入か。
３　黒褐 10YR2/3　ローム土10％含む。
４　暗褐 10YR3/3　AS-YPブロックを含む。一度に埋め戻した可能性がみられる。

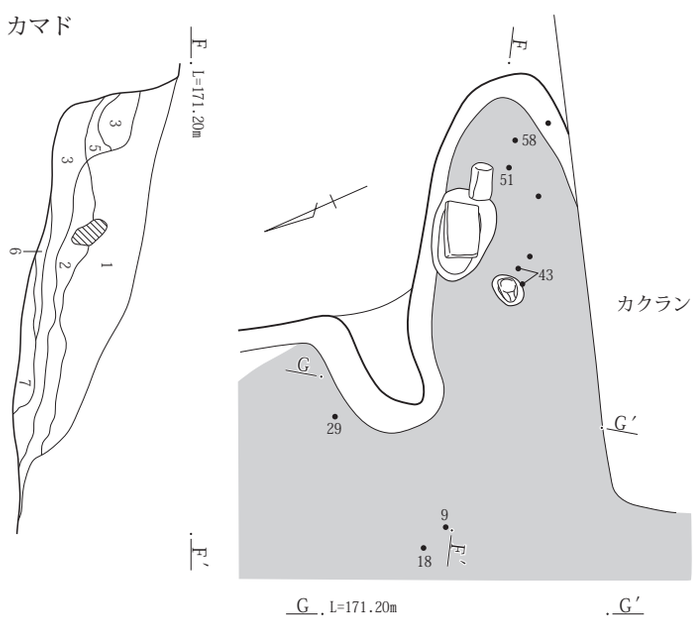
209号竪穴建物　Ｐ３
１　暗褐 10YR3/3　φ２～10mmのAS-YPブロックを３％、炭化片を微量含む。
２　暗褐 10YR3/3　焼土ブロックを１％、下部にロームブロックを含む。
３　暗褐 10YR3/3　AS-YPブロックを多量に、焼土ブロックを１％含む。

209号竪穴建物　Ｐ４
１　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを５％、AS-YPブロックを２％、焼土ブロックを１％、炭化片を微量含む。
２　暗褐 10YR3/3　ロームブロック・AS-YPブロックを10％含む。
３　褐 10YR4/4　焼土ブロックを１％、AS-YPブロックを含む。

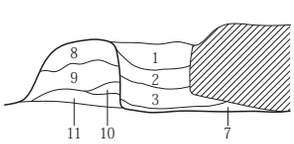
209号竪穴建物　Ｐ５
１　黒褐 10YR2/3　AS-YPブロック３％含む。
２　黒褐 10YR2/3　AS-YPブロックを５％、焼土ブロックを２％含む。
３　暗褐 10YR3/3　褐色土を20％、AS-YPブロックを10％含む。
４　暗褐 10YR3/3　別の掘り込みか。褐色土ブロックを30％、AS-YPブロックを10％含み、やや脆い。

0　1：60　2m

カマド



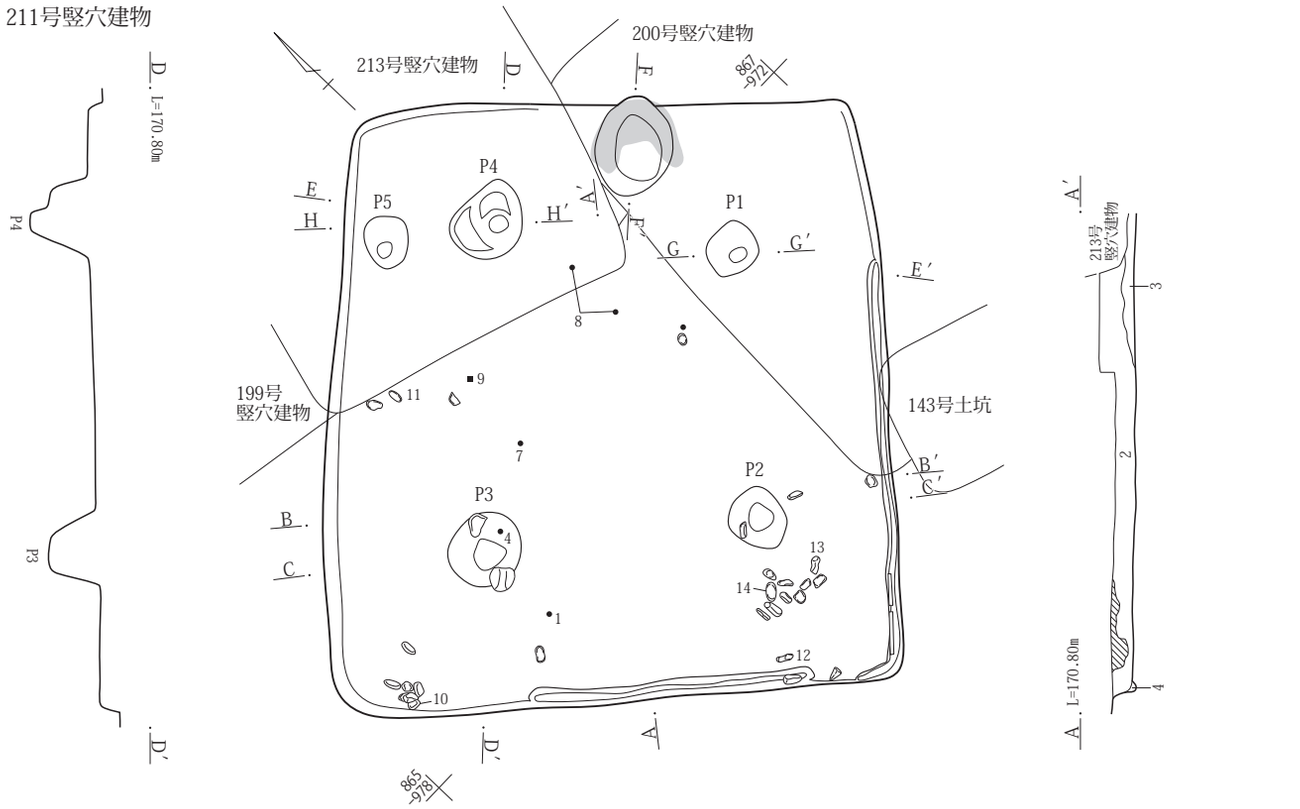
209号竪穴建物　カマド
１　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土主体に黒褐色土が不均等に混土、、ややしまりが強い粘性土。AS-YP少量含み、焼土散見。煙道側でローム土の比率高く、黄色味増す。天井構築材。
２　灰褐 7.5YR4/2　１に近似、AS-YPほとんど含まず。焼土と灰の混入が増える。
３　灰褐 7.5YR4/2　２と同様、焼土さらに多い。
４　灰褐 5YR4/2　焼土の混入多いややしまりが弱い粘性土。基質土はやや砂質ローム土で、灰･炭化物粒も少量混土。
５　灰褐 5YR4/2　４と同様、灰・炭化物粒の混入多い。
６　にぶい赤褐 5YR4/4　焼土。小ブロック状の焼土混じり天井・壁の崩落土とみられる。
７　黒褐 10YR3/2　炭化物粒･灰の混入多い火床直上埋没土。
８　褐 7.5YR4/3　１に近似。焼土粒の混入やや多く、しまりが強い。
９　灰黄褐 10YR4/2　AS-YPを不均等にやや多く含む細粒土。黒褐色土ブロックや焼土を不均等に含み、しまりが強い。
10　にぶい赤褐 5YR4/3～黒褐 10YR3/3　７・焼土・灰混じりの黒色土の混土。しまりが強い。
11　AS-YP層。基本は地山で若干黒色土混土。



0　1：30　1m

第255図　209号竪穴建物遺構図

211号竪穴建物



211号竪穴建物　カマド掘方

1　灰褐 5YR4/2　焼土ブロック、As-YP、黒色土を含み、しまりが強い。

2　暗褐 10YR3/3　黒色味強い細粒土を主体、As-YP、不明瞭なローム小ブロックを不均等に含み、しまりが弱い。

0　1：30　1m

0　1：60　2m

211号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　As-C、ローム粒を霜降状に少量含み、ややしまりが弱い非粘性土でサラサラした感触。

2　灰黄褐 10YR4/2　不揃いのロームブロックをやや多くと炭化物、焼土を若干含み、しまりが強くボソボソした感触。

3　暗褐 10YR3/3　不明瞭なローム土と焼土を少量含み、しまりが強い粘性土。

4　暗褐 10YR3/3　ローム土粒をわずかに含む。

211号竪穴建物　Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５(共通)

1　暗褐 10YR3/2　AS-YP、大粒のローム粒を含む、細粒土。

2　暗褐 10YR3/2　１に近似、大粒ローム粒ほとんど含まない。

3　暗褐 10YR3/4　弱粘性の黒褐色土が基質、As-YPや大粒ロームブロックを不均等にやや多く含み、ややしまりが弱い。

4　暗褐 10YR3/4　３と同様、ローム粒を多く含む。

5　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土が基質、ローム小ブロック、As-YPをやや多く含み、しまりが強い。

6　にぶい黄褐 10YR5/3　AS-YP、ローム大ブロック、黒褐色土の混土、しまりが強い。

7　にぶい黄褐 10YR5/3　６と同様、特にしまりが強い。

第256図　211号竪穴建物遺構図

Ｐ４：楕円形、径0.63×0.55m、深さ0.47m

Ｐ５：楕円形、径0.43×0.35m、深さ0.67m

Ｐ１～Ｐ２は2.15m、Ｐ２～Ｐ３は2.20m、Ｐ３～Ｐ４は2.60m、Ｐ４～Ｐ１は1.95m、Ｐ４～Ｐ５は0.90mを測る。各柱穴とも柱痕は確認されていない。なお、Ｐ３からは４の土師器杯が出土している。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　北壁の中程でカマドの痕跡が検出されている。残存状態は上部を200号竪穴建物によって欠くため、掘り方に近い土坑状の状態であった。規模は全長が0.80m、幅が0.62mであった。土坑状の落ち込みの東半には焼土粒が拡散した状態であった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器壺・甕、鉄製品釘、棒状礫などが出土している。このうち、１の土師器杯と７の須恵器壺、８の土師器壺が床面から、４の土師器杯が柱穴Ｐ３からの出土である。なお、８の土師器壺の破片は重複関係にある200号竪穴建物埋没土内からも出土していた。なお、棒状礫は27点が出土しているが、柱穴Ｐ２の南側床面から10点、南西角寄り床面から６点がまとまって出土している。棒状礫の形状はやや不均等ではあるが、出土状態等から菰編み石として使用されたとみられる。

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器に重複関係にある竪穴建物に伴うと判断できる個体や外部からの混入とみられる個体も存在するが、床面や柱穴Ｐ３から出土した土師器杯や甕から７世紀前半代に比定できる。なお、５の土師器杯のように口縁部が内湾する個体も出土しており、後半代まで存続していた可能性も窺えるが、確証には至らなかった。

212号竪穴建物

位置　４区調査区南部、Ｘ＝36838～36844、Ｙ＝-84957～-85962に位置する。南東角を重複関係にある217号竪穴建物によって欠く。

重複関係　214号竪穴建物、217号竪穴建物、99号土坑と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本竪穴建物のほうが古い。

形状　西辺が東辺に比べやや短い台形状を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は4.62m、南北方向は4.42mを測る。確認面から床面までの壁高は31～41㎝を測る。

床面積　16.82㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－72°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積とレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　床下土坑部分では黒褐色土による貼床が確認された。その他では地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っていた。

掘り方　カマド前と西壁寄りで床下土坑を２基検出している。１号床下土坑は形状が楕円形を呈し、規模は長軸1.56m、短軸1.12m、深さ0.68mを測る。２号床下土坑は形状が楕円形を呈し、規模は長軸1.56m、短軸1.37m、深さ0.78mを測る。内部からは遺物等の出土はみられなかった。

壁溝　残存範囲内では北壁の中程の一部と南壁の東側を除いた壁下で検出している。

柱穴　西壁寄りで２本の柱穴を検出している。壁際からは0.5～0.7mほど位置にある。柱穴Ｐ１は円形、径0.38×0.33m、深さ0.58m。柱穴Ｐ２は円形で、径0.48×0.48m、深さ0.62m、柱穴距離は2.00mを測る。両柱穴とも柱痕は確認されなかった。

貯蔵穴　残存範囲内で検出されなかった。

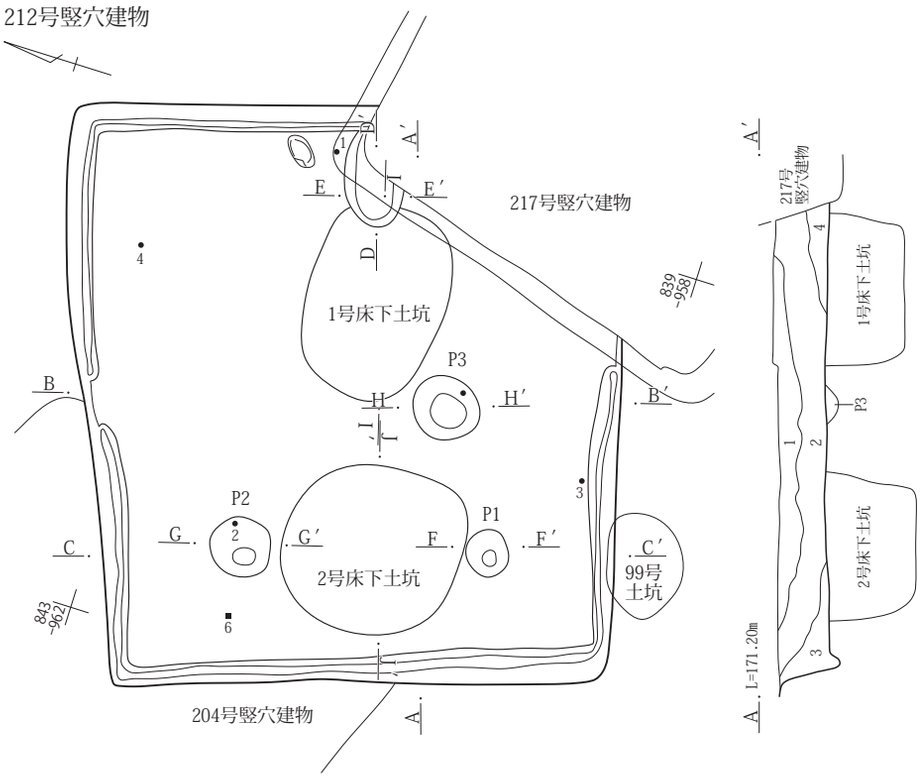
その他施設　中央よりやや南寄りで小規模なピット、Ｐ３を検出している。検出した位置や規模から柱穴とは判断できなかった。形状は楕円形を呈し、規模は径0.56×0.50m、深さ0.27mを測る。

火処　東壁の中程でカマドの痕跡を検出している。上部は重複関係にある217号竪穴建物によって失われている。残存状態は掘り方に近い状態で、若干の焼土などを検出したことによってカマドと判断した。規模は全長が0.78m、幅0.50mである。

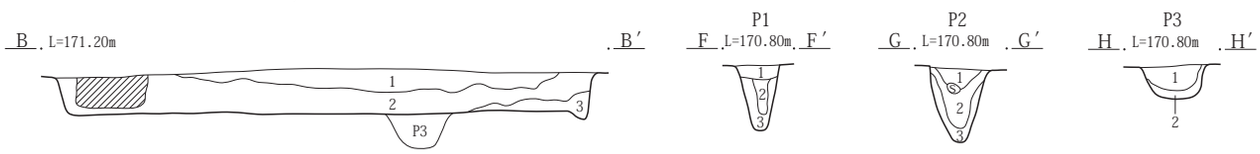
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯杯蓋・杯・椀・甕、鉄製品刀子などが出土している、須恵器は本竪穴建物に確実に伴うか否かは明確ではない。このうち、３の土師器杯、６の鉄製品刀子が床面から、１の土師器杯がカマドからの出土である。

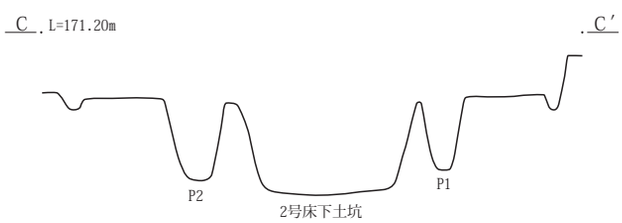
所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器杯から７世紀前半代に比定できる。

212号竪穴建物



212号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを霜降状にAs-YP、ロームブロックを不均等に少量含み、ややしまりが強い非粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なロームブロック、As-YPを多量に含み、ややしまりが強い。含有物は東及び北側からの流れ込みが顕著。
3　暗褐 10YR3/3　As-YPを多く含み、ややしまりが弱い非粘性土。
4　暗褐 10YR3/3　２に近似。ローム土・AS-YPを少しと焼土・炭化物粒を少量含み、ややしまりが強い微粘性土。

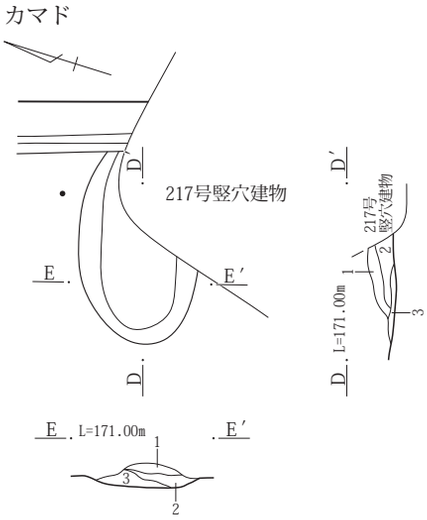




212号竪穴建物　Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３（共通）
1　暗褐 10YR3/2　AS-YP、大粒のローム粒を含む、細粒土。
2　暗褐 10YR3/2　１に近似、大粒ローム粒ほとんど含まない。
3　暗褐 10YR3/4　弱粘性の黒褐色土が基質、As-YPや大粒ロームブロックを不均等にやや多く含み、ややしまりが弱い。

0　1：60　2m

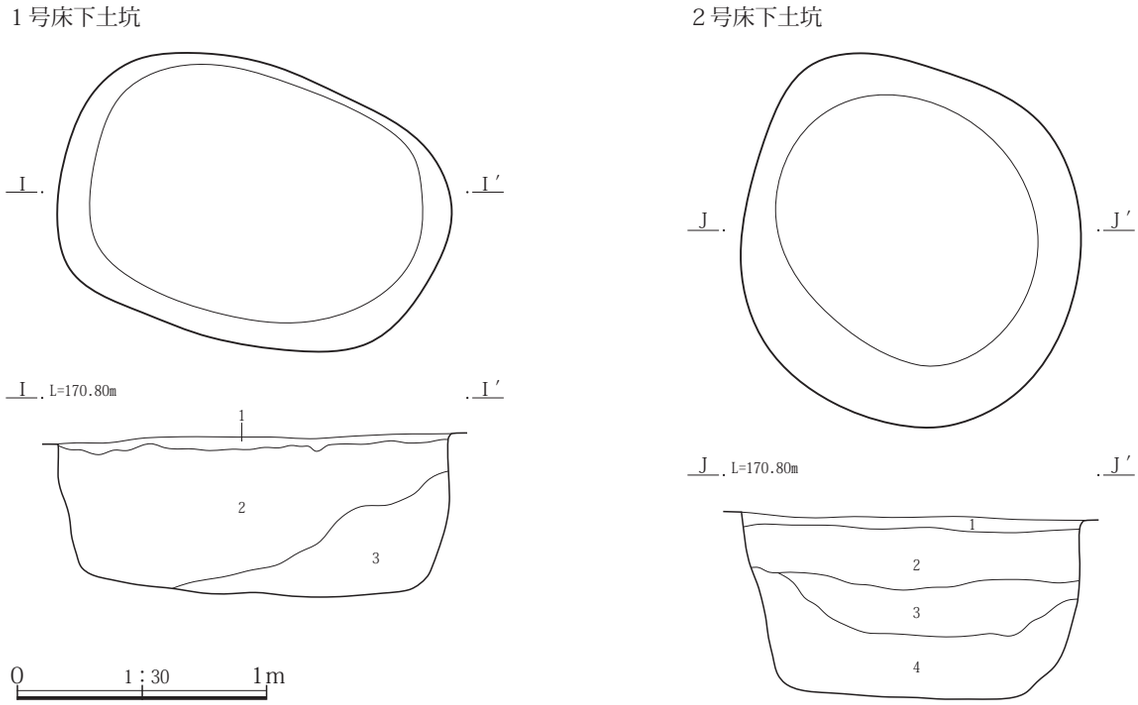
カマド



212号竪穴建物　カマド
1　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土粒主体の細粒土。黒褐色土をブロック状に含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　As-C混土、焼土を若干含み、ややしまりが強い微粘性土。
3　暗褐 10YR3/4　不明瞭なローム土と黒褐色土の混土、焼土粒を含み、しまりが強い弱粘性土。

0　1：30　1m

第257図　212号竪穴建物遺構図（１）



212号竪穴建物　　１号・２号床下土坑
1　黒褐 10YR3/2　AS-YPとローム小ブロックを不均等に少量含み、しまりが強くない弱粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　As-C混じりの黒色土と不明瞭なローム土とブロック状のAs-YPの混土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いのAs-YP主体、黒褐色土を不均等に少量含み、ややしまりが弱いボソボソした感触。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　ロームブロック主体。

第258図　212号竪穴建物遺構図（２）

213号竪穴建物

位置　４区調査区北西部、Ｘ＝36866～36871、Ｙ＝-84972～-85976に位置する。

重複関係　199号竪穴建物、200号竪穴建物、211号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

規模　長軸方向の南北方向は4.02m、東西方向は3.95mを測る。確認面から床面までの壁高は21～30㎝を測る。

床面積　10.75㎡を測る。

主軸方位　長軸方向を主軸方向とするとＮ－15°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積やレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

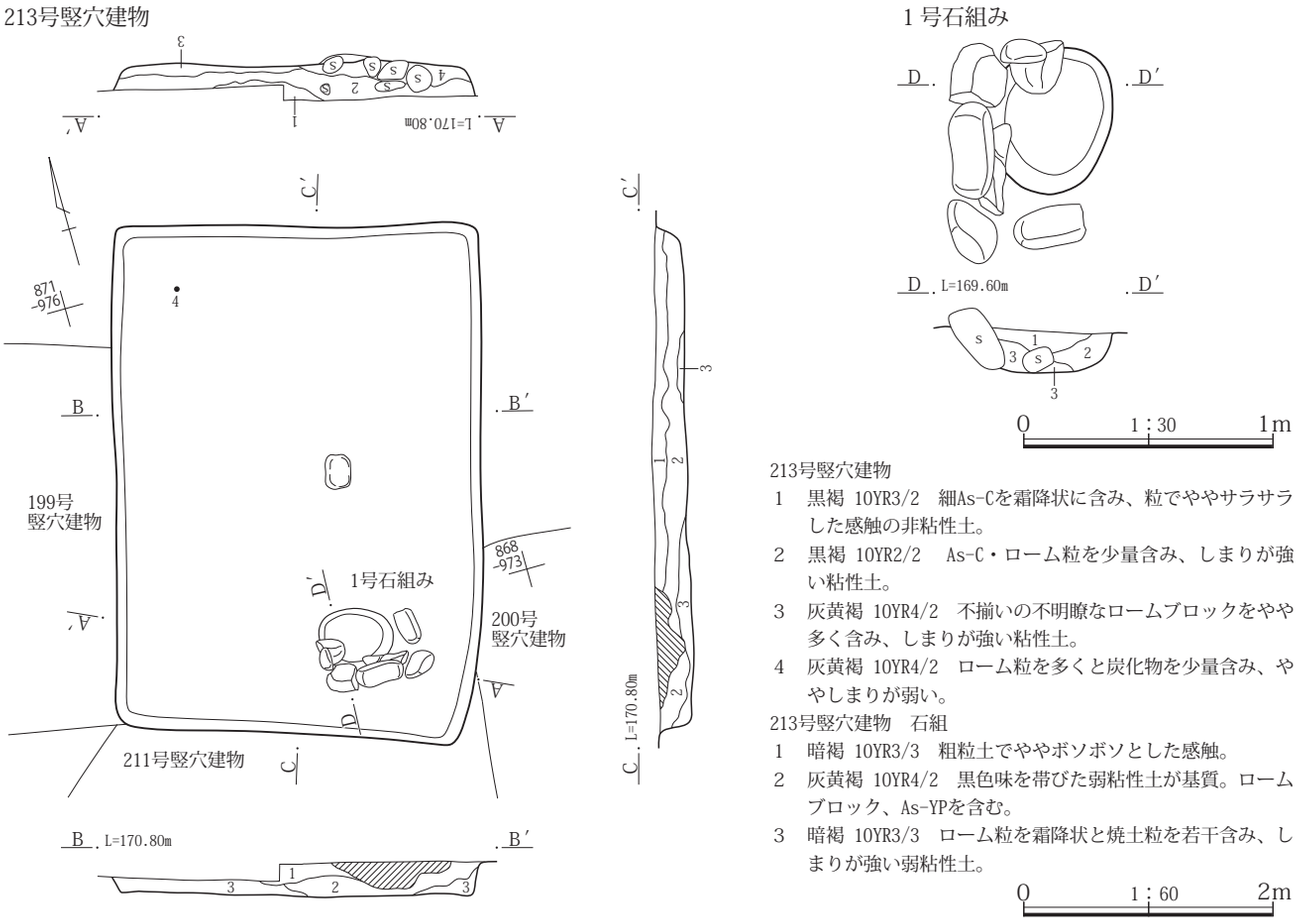
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　南東角寄りで東西方向0.85m、南北方向0.80mほどの範囲を床面より10㎝ほど掘り込み、ここに長さ20～40㎝大の亜角礫をコの字状に２段くみ上げたものが検出されている。当初は竪穴建物とは別な遺構と判断されたが、土層断面で礫の側面に立ち上がりが確認できないことから竪穴建物に伴うものと判断された。なお、内部に焼土が散見していたが底面や礫に焼土化の痕跡がみられないことから火処との判断には至らなかった。

火処　カマド・炉とも検出されなかった。

出土遺物　　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・甕等の小片が出土しているが、その出土量は134点と少ない。そのため、図示可能な遺物は存在しないが、存続時期の提示のため、小片の中から土師器・須恵器４点を選択して図示した。このうち、４の土師器甕は床面からの出土であるが、主体を占める須恵器杯・椀は底部の切り離し技法が回転糸切りであることから211号竪穴建物からの混入とみられる。なお、３の須恵器杯蓋も同様とみられる。



第259図　213号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、出土した土器に重複関係にある竪穴建物に伴うと判断できる個体も存在するが、図示した須恵器椀のように底部回転糸切り無調整の個体や口縁部が比較的直立気味に立ち上がる形態であることから９世紀前半代に比定できる。

214号竪穴建物

位置　４区調査区南端、Ｘ＝36830～36831、Ｙ＝-84955～-85958に位置する。大部分は調査対象区外に存在し、西側を重複関係にある209号竪穴建物や撹乱によって欠く。

重複関係　209号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　調査範囲内では南北方向0.65m、東西方向2.75mを測る。確認面から床面までの壁高は32～42㎝を測る。

床面積　残存範囲内で1.47㎡を測る。

主軸方位　ほぼＮ－90°－Ｅを指すと想定される。

埋没状態　土層断面の観察ではレンズ状の堆積の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　残存範囲内では地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲内では壁下から検出している。規模は幅12㎝前後、深さ４～10㎝を測る。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

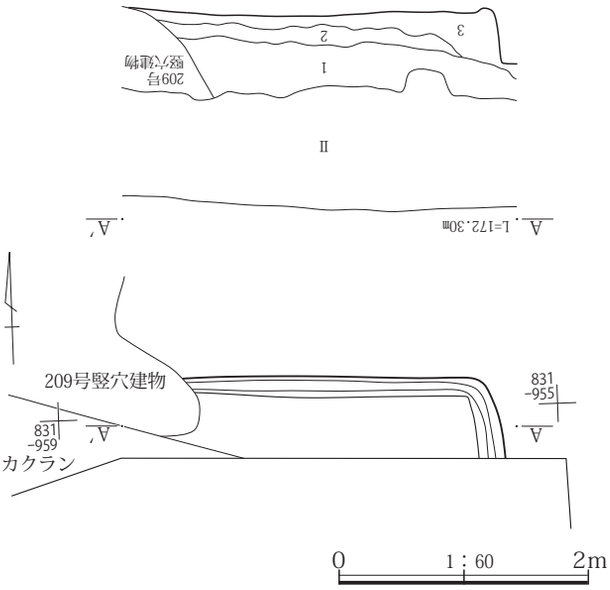
貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。

出土遺物　調査できた範囲が限られていたため出土した遺物もわずかであった。出土した土器片も５㎝角以下のものだけであったため、図示することはできなかった。出土位置においては小片のため記録されていない。なお、出土した土器は土師器16点、須恵器１点、縄文土器２点であった。内訳は土師器甕12点、杯４点、須恵器は杯であった。出土した土器のなかでは形態がわかるものが須恵器杯だけであった。この杯は体部から口縁部がやや丸

214号竪穴建物



214号竪穴建物
1　暗褐 2.5YR3/3　As-B混合土。一部でAs-Bの一次堆積に近いような部分あり。
2　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量と焼土、炭化物粒を若干含む。
3　暗褐 10YR3/3　不明瞭なローム土をやや多く含む。

第260図　214号竪穴建物遺構図

味をもって立ち上がる形態を示していた。その他では土師器杯片は底部とみられる部位で丸味を呈する形態、土師器甕はやや厚みがあり、粗いヘラ削りが施されていることから長胴形態であるとみられる。

所見　本竪穴建物の存続時期は出土した土師器甕・杯の形態から７世紀後半、須恵器杯の形態から８世紀前半代に比定できる。以上のことから、本竪穴建物は７世紀後半から８世紀前半代に比定したい。

215号竪穴建物

位置　４区調査区南東部、Ｘ＝36865～36870、Ｙ＝-84948～-85952に位置する。

重複関係　単独で占地している。

形状　西辺が東辺に比べ0.2mほど短いが、ほぼ南北に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は3.53m、南北方向は4.12mを測る。確認面から床面までの壁高は３～６㎝を測る。

床面積　12.47㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－101°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため埋没状態の判断は困難であった。

床面　床下土坑の部分を除いて地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床は検出されなかったが、カマド前で床下土坑１基を検出している。形状は楕円形を呈し、規模は長径1.38m、短径1.18m、深さ0.28mを測る。内部からは土器などの出土はみられなかった。

壁溝　検出されなかった。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の中程にカマドが構築されている。残存状態は確認面から底面までが浅いため全体的には不良である。焚口と燃焼部の天井は失われていたが、煙道部の天井は崩落した状態であった。両袖は低いが残存していた。規模は全長が1.03m、幅が1.22m、燃焼部幅0.43mを測る。煙道部は壁外に存在し、天井部は前記のように崩落した状態で焼土化が顕著であった。掘り方は燃焼部から煙道部にかけて浅い土坑状の掘り込みが確認された。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、流動滓などが出土している。未掲載の土器は328点あったが、図示できた土器は須恵器杯の３点だけであった。このうち、３の須恵器杯は床面上６㎝からの出土である。この杯は底部だけが残存していたが、外面に「井壬」と墨書されている。ここでの「井」は記号的な意味合いであるとの指摘を受けた。なお、１の須恵器杯は床面から、２の須恵器杯は床上６㎝からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続時期は、１・２の須恵器杯や図示できなかったが出土している土師器甕の形態から８世紀代４四半期から９世紀第１四半期に比定できる。

216号竪穴建物

位置　４区調査区中央部の南東より、Ｘ＝36844～36848、Ｙ＝-84951～-85955に位置する。

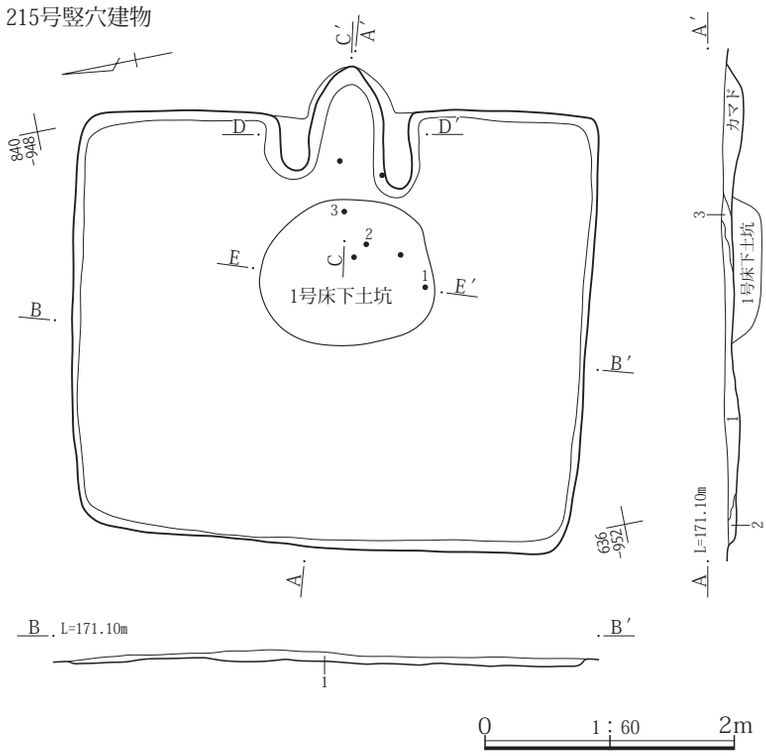
重複関係　160号土坑と重複関係にある。新旧関係は発掘調査段階では明確ではなかったが、160号土坑の埋没土中にAs-Bが混在していることから、本竪穴建物のほうが古いと判断される。

形状　南北方向に長い長方形を呈する。

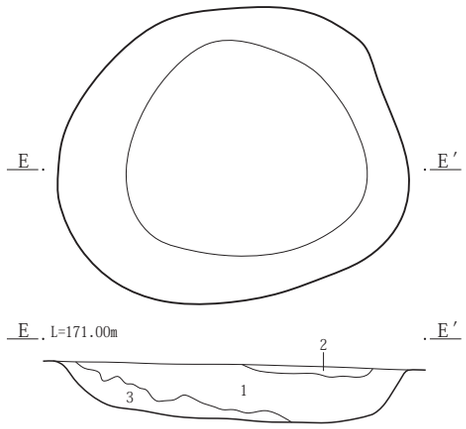
規模　主軸方向の東西方向は3.08m、南北方向は3.60mを測る。確認面から床面までの壁高は43～56㎝を測る。

床面積　7.82㎡を測る。

215号竪穴建物



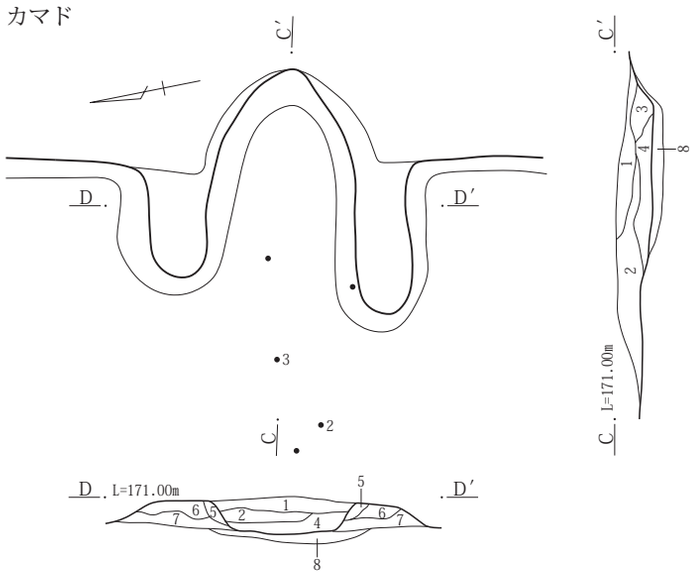
１号床下土坑



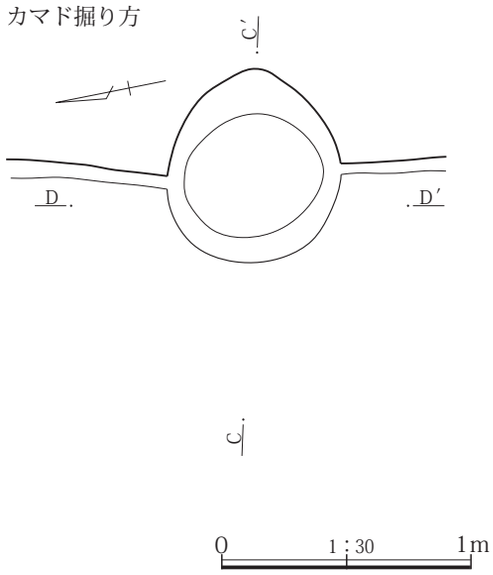
215号竪穴建物　床下土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土。
2　黒褐 10YR3/2　ローム粒を含む。張床の可能性が窺える。
3　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土。

215号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、ローム粒・焼土粒を少量不均等に含み、ややしまりが弱い非粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なロームブロックをやや多く含む、弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　１と同様、As-Cが少なくローム粒やや多くと炭化物粒を含む。

カマド



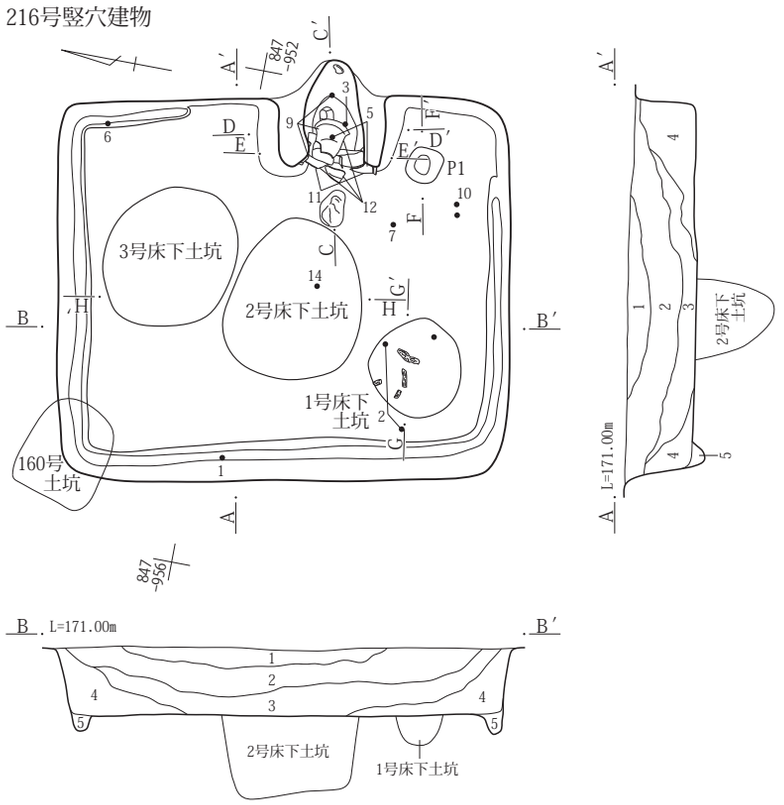
カマド掘り方



215号竪穴建物　カマド
1　にぶい赤褐 5YR4/3　不揃いのロームブロック、焼土ブロック、黒褐色土の混土、しまりが強い粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　As-C、炭化物粒を少量含み、しまりが強いやや粗粒非粘性土。。
3　黒褐 10YR3/2　２と同様、２よりやや焼土多い。
4　暗褐 7.5YR3/3　焼土粒を上位ほど多く含み、しまりやや強い弱粘性土。
5　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土粒主体の細粒土。黒褐色土をブロック状に含み、ややしまりが強い。
6　黒褐 10YR3/2　As-C混土、焼土を若干含み、ややしまりが強い微粘性土。
7　暗褐 10YR3/4　不明瞭なローム土と黒褐色土の混土、しまりが強い弱粘性土。
8　暗褐 10YR3/4　しまりが強い弱粘性土。

第261図　215号竪穴建物遺構図

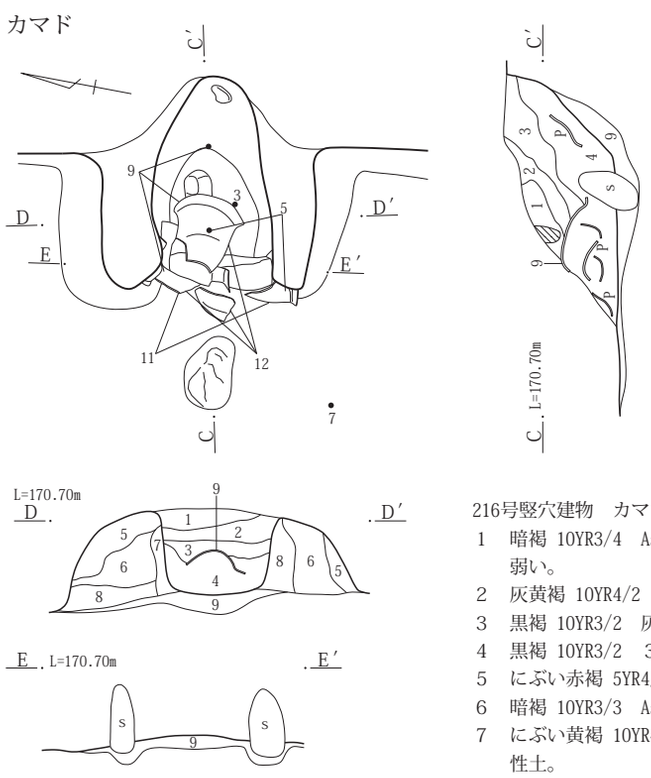
216号竪穴建物



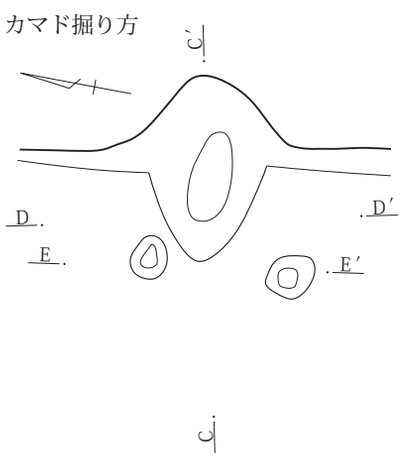
216号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、やや細粒の非粘性土。
2　暗褐 10YR3/4　ローム粒を多くとAs-YPをやや多く、黒色土を小ブロック状に含む、微粘性土。
3　黒褐 10YR2/2～暗褐 10YR3/4　ネットリした感触の黒色土が基質、炭化物を若干と２を大ブロック状に含み、ややしまりが弱い微粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　黒褐色の微粘性土が基質、ローム粒・ローム小ブロックを霜降状に床面直上に炭化物を含み、ややしまりが強い。
5　黒褐 10YR3/2　４に類似、含有物はみられない。
216号竪穴建物Ｐ１
1　暗褐 10YR3/4　ロームブロックを５％含む。
2　暗褐 10YR3/4　大粒のロームブロックを10％含む。
3　黒褐 10YR2/3　ロームブロックを不均等に含む。

0　1：60　2m

カマド



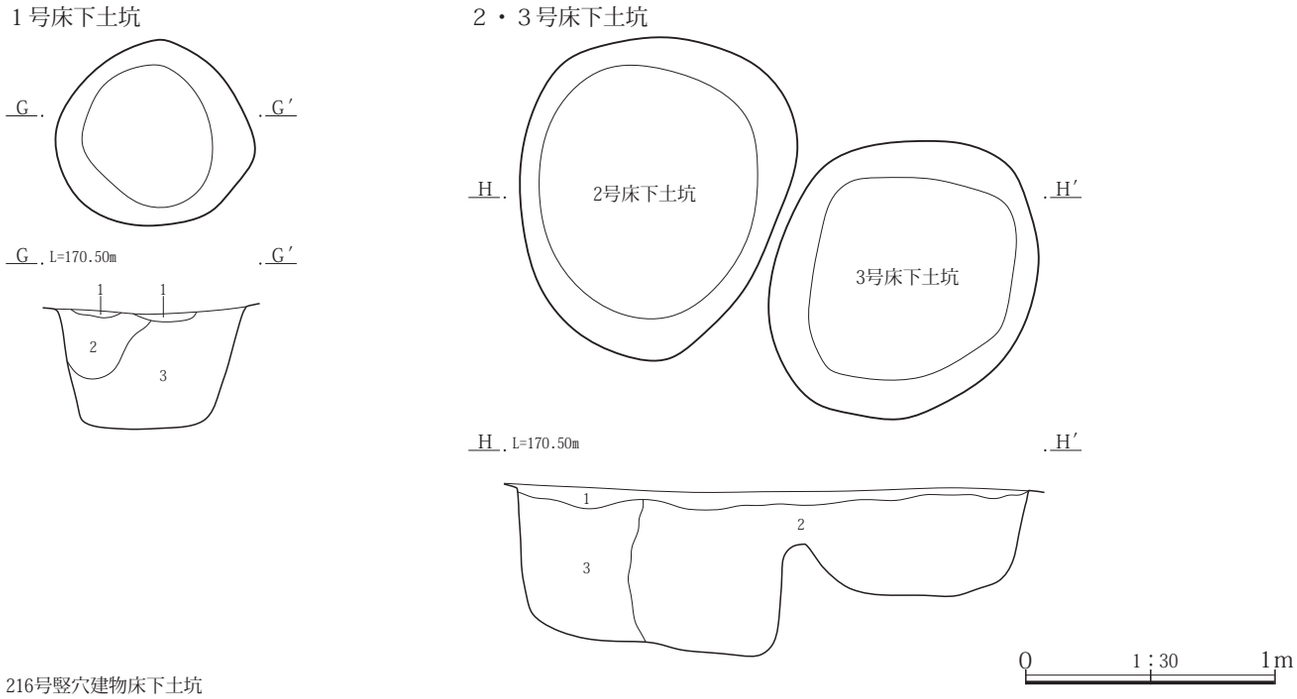
カマド掘り方



216号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/4　As-C混土、ローム粒・ロームブロックを不均等にやや多く含み、ややしまりが弱い。
2　灰黄褐 10YR4/2　ローム粒、焼土粒、炭化物粒をやや多く含み、ややしまりが弱い弱粘性土。
3　黒褐 10YR3/2　灰、炭化物粒を多く含み、ややしまりが強い細粒土。
4　黒褐 10YR3/2　３に類似、灰等少ないが、焼土・ローム土を多く含む。
5　にぶい赤褐 5YR4/4　ローム土が被熱した焼土、ややしまりが強い。
6　暗褐 10YR3/3　As-C混じりの黒褐色土にローム土を不均等に含み、ややしまりが強い。
7　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土と黒褐色土の不均等な混土。焼土を少量含み、しまりが強い粘性土。
8　にぶい赤褐 5YR4/3　焼土の大ブロックと不明瞭なローム土、黒褐色土の混土。しまりが強い。
9　暗褐 10YR3/3　黒褐色非粘性土が基質、不明瞭なローム土、AS-YP等と上半中心に焼土を少量含み、ややしまりが弱い。

0　1：30　1m

第262図　216号竪穴建物遺構図（１）



216号竪穴建物床下土坑
1　黒褐 10YR2/3　張床を構築、薄層状に炭化物を含む。
2　暗褐 10YR3/4　不揃いのロームブロック、As-YPを多量に含み、ややしまりが弱い。人為的埋め戻し土。
3　にぶい黄褐 10YR5/2　ローム土主体、互層状に丁寧に埋め戻されている、人為的埋め戻し土。

第263図　216号竪穴建物遺構図（２）

主軸方位　Ｎ－82°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　床下土坑の上面では黒褐色土に炭化物を混ぜた土で貼床を造っているが、その他の部分は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　南北に列んだ床下土坑３基を検出している。各床下土坑の形状と規模は次のとおりである。１号床下土坑はほぼ円形を呈し、径0.74×0.73m、深さ0.58mを測る。床下土坑２は楕円形を呈し、径1.30m×1.08m、深さ0.69mを測る。床下土坑３は楕円形を呈し、径1.23m×1.05m、深さ0.41mを測る。各床下土坑の内部からは土器などの出土はみられなかった。

壁溝　東壁のカマド北側から北壁、西壁、南壁の南東角手前までの壁下で検出している。規模は幅が18～22㎝、深さが７～15㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　カマドの南側でピット１を検出している。位置からは貯蔵穴の可能性が想定された。規模が小規模のため性格は保留とした。形状は方形に近い円形で、規模は径0.30×0.23m、深さ0.79mを測る。このピットの南、壁との間の床面には10の土師器甕が胴部下半を欠かれたような状態で据え置かれていた。

火処　東壁の中央よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.97m、幅が1.16m、燃焼部幅0.35mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。両袖の手前側には長さ28㎝、径が11㎝と14㎝の棒状礫が立てるように据え付けられていた。そして棒状礫の間には９の土師器甑と11・12の土師器甕が連結された状態で横たわるように出土していた。出土状況から煮沸用に使われたものよりは焚口の上部に構築材として使用されたものとみられる。燃焼部床面には長さ26㎝、径12㎝の棒状礫が10㎝ほど埋め込まれた状態で出土しており、支脚に使用されたものと判断される。なお、燃焼部火床面は比較的焼土化が顕著であった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甑・甕、須恵器盤・壺・甕、鉄製品刀子などが出土している。１・２の土師器杯、10の土師器甕が床面から、７の須恵器盤が床面上６㎝から、３・５の土師器杯、８の須恵器壺、９の土師器甑、11・

12の土師器甕がカマドからの出土である。なお、９の土師器甑と12の土師器甕の一部が床下土坑からも出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した土師器杯や甕などから７世紀前半に比定できる。なお、床面よりやや上位から出土した須恵器盤は８世紀代の年代観が与えられることから、本竪穴建物に共伴するものではなく、混入したとみられる。

217号竪穴建物

位置　４区調査区南部、Ｘ＝36837～36842、Ｙ＝-84953～-85959に位置する。

重複関係　212号竪穴建物、297号ピット、298号ピット、322号ピットと重複関係にある。新旧関係は212号竪穴建物、212号竪穴建物、297号ピットより本竪穴建物のほうが新しく、322号ピットより古い。

形状　東西方向に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は5.07m、南北方向は3.33mを測る。確認面から床面までの壁高は35～50㎝を測る。

床面積　15.15㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－107°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　床下土坑部分を除き、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。床下土坑部分は貼床を構築していないが、最上層にあたる暗褐色土は硬く踏みしめられていた。

掘り方　貼床は確認されなかったが、東壁のカマド北側の壁際と南西角寄りで大型の床下土坑を２基検出している。１号床下土坑は形状が楕円形を呈し、規模は長軸2.30m、短軸1.93m、深さ0.63mを測る。内部からは７の須恵器無台杯、９の須恵器削り出し高台杯、10の須恵器有台杯などが出土している。２号床下土坑は形状が楕円形に近く、規模は長軸1.35m、短軸1.05m、深さ0.17mを測る。内部からは３の土師器杯が出土している。

壁溝　東壁のカマド北側、北壁の一部と南壁の壁下で検出している。規模は幅が15㎝前後、深さ５～７㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.95m、幅が1.40m、燃焼部幅0.50mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部火床面との間に16㎝の段が設けられている。燃焼部部火床面と煙道部側壁は顕著ではないが焼土化が確認されている。掘り方は燃焼部から煙道部にかけて15㎝ほどの深さをもつ土坑状の掘り込みがみられた。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯・椀・短頸壺・壺・甕、鉄製品刀子、石製品磨石などが出土している。５の土師器杯は内面に螺旋状と放射状暗文が丁寧に施され、床面からの出土である。この他では３の土師器杯、７・９・10の須恵器杯が床下土坑からの出土、13の須恵器短頸壺、16の土師器甕がカマドからの出土である。13の須恵器短頸壺は精製された粘土を使用し、やや軟質の白色に焼き上げられている。出土位置も左袖内であることからカマドの祭祀に使用された可能性が窺える。

所見　本竪穴建物の存続期間は床面や床下土坑から出土した土師器杯、須恵器杯から７世紀第４四半期から８世紀第１四半期に比定できる。その中で床面から出土した５の土師器杯や埋没土内から出土した須恵器杯の年代観を重視するのであれば、８世紀代が主体であったとみられる。

218号竪穴建物

位置　４区調査区北東端、Ｘ＝36859～36863、Ｙ＝-84952～-85856に位置する。

重複関係　299号ピット、320号ピットと重複関係にある。新旧関係は299号ピット、320号ピットより本竪穴建物のほうが新しい。

形状　南北に長い長方形を呈する。

規模　主軸方向の東西方向は3.32m、南北方向は3.82mを測る。確認面から床面までの壁高は28～36㎝を測る。

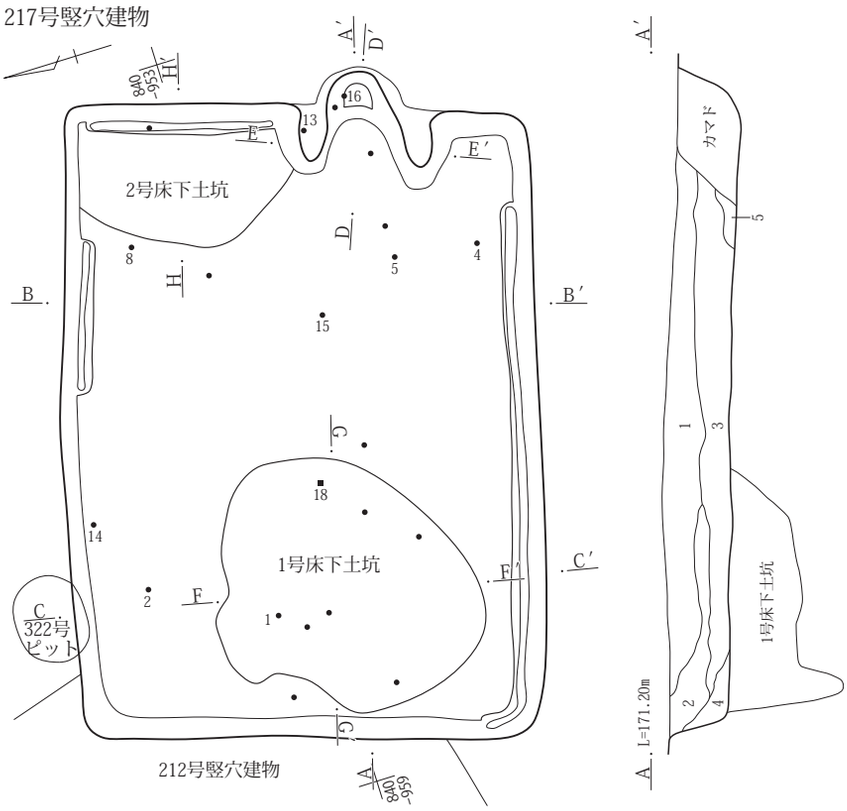
床面積　9.91㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－122°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　床下土坑の上面では黒褐色土にロームブロックを混ぜた土で貼床を造っているが、その他の部分は地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。なお、カマド前から中央部に掛けては周囲より硬く踏みしめられてい

217号竪穴建物



217号竪穴建物

1　黒褐 10YR3/2　小粒のロームブロック、As-YPと焼土、炭化物粒を含み、しまりが強いやや粗粒土。

2　灰黄褐 10YR4/2　ロームブロックを不均等にやや多くと焼土と炭化物を少量含む、微粘性土。

3　黒褐 10YR3/2　やや大粒のロームブロックを多くとAs-YPを少量含む、微粘性細粒土。

4　黒褐 10YR2/2　３と同様、含有物やや少ない。

5　灰黄褐色 10YR4/2　カマド１と同じ。

217号竪穴建物　カマド

1　灰黄褐 10YR4/2　AS-YP・ローム小ブロックを不均等に少量と焼土を若干含み、ややしまりが強い微粘性土。

2　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土と灰褐色弱粘性土の混土。煙道側で焼土少量含む。

3　暗褐 10YR3/3　黒色弱粘性土中にローム土を不均等に焼土を多く含む。

4　にぶい黄褐 10YR4/3　２に近似。焚口側にローム土が多く、煙道側に焼土・炭化物粒を含み、ややしまりが強い。南側最下位は小範囲だが著しく被熱赤変している。

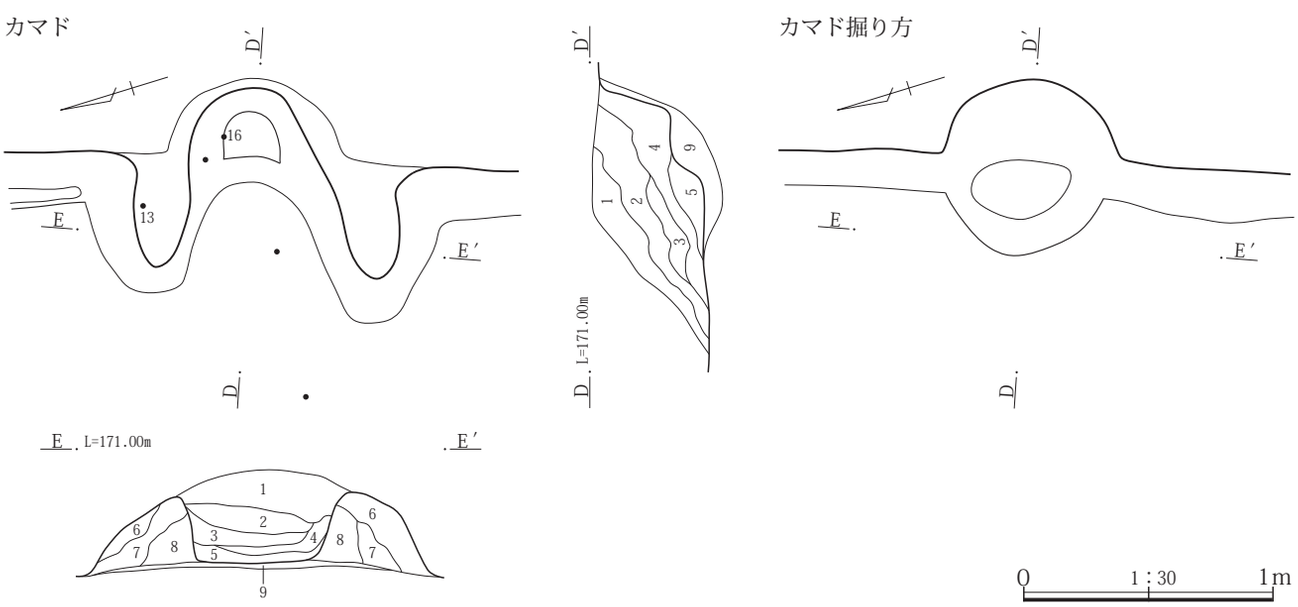
5　暗褐 10YR3/3　黒褐色土、炭化物粒、ローム粒を含み、しまりやや弱い。

6　黒褐 10YR3/2　As-C混じりの非粘性土が基質、ローム小ブロック、As-YPを不均等にやや多く含み、しまりが強い。

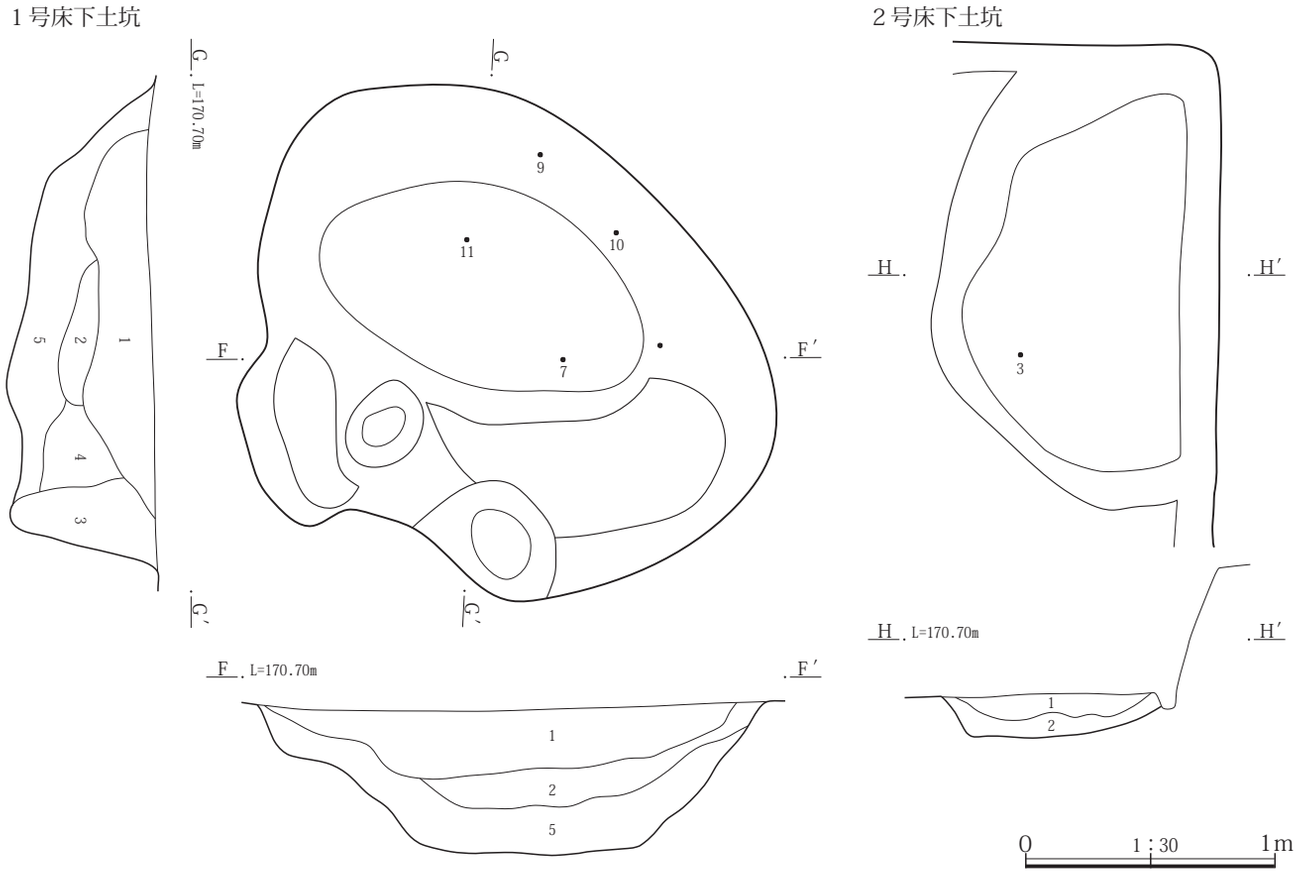
7　灰黄褐 10YR4/2　６と８の中間的な土。下半ほどローム土が多くなる。

8　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いのローム土ブロックが主体、黒褐色土ブロックやAs-YPを不均等に焼土小ブロックをやや多く含む、弱粘性土。

9　にぶい黄褐 10YR4/3　焼土粒を若干含む。



第264図　217号竪穴建物遺構図（１）



217号竪穴建物　１号床下土坑
１　暗褐 10YR3/3　As-YPの混入多いしまりが強い粘性土、ローム小ブロック、As-C、焼土等を少量含む。
２　にぶい黄褐 10YR4/3　黒褐色土混じりのAs-YPが主体、南東側からの人為的埋め戻し土。
３　黒褐 10YR3/2　１に近似、やや大粒のAS-YPを少量含む。
４　暗褐 10YR3/4　基質土は１と同じ。不明瞭なローム土を多く含み、しまりが強い弱粘性土。
５　灰黄褐 10YR4/2　大粒のAs-YPを多く含み、しまりが弱い弱粘性土。
217号竪穴建物　２号床下土坑
１　暗褐 10YR3/3　黒褐色を基質にローム土が一部で互層状に確認でき、しまりが強い。貼床面。
２　灰黄褐 10YR4/2　基質土は黒褐色の弱粘性土、φ10mm以下のロームブロック、As-YPを多量に不均等に含み、しまりがやや強い。人為的埋め戻し土。

第265図　217号竪穴建物遺構図（２）

た。

掘り方　南東部で床下土坑を検出している。形状は楕円形を呈し、規模は長径1.35m、短径1.08m、深さ0.82mを測る。内部からは土器などの出土はみられなかった。

壁溝　東壁のカマドの両側と北西角から北壁側が1.0m、西壁側が1.5mを除いた壁下で検出している。規模は幅が10㎝前後、深さが２～６㎝を測る。

柱穴　検出されなかった。

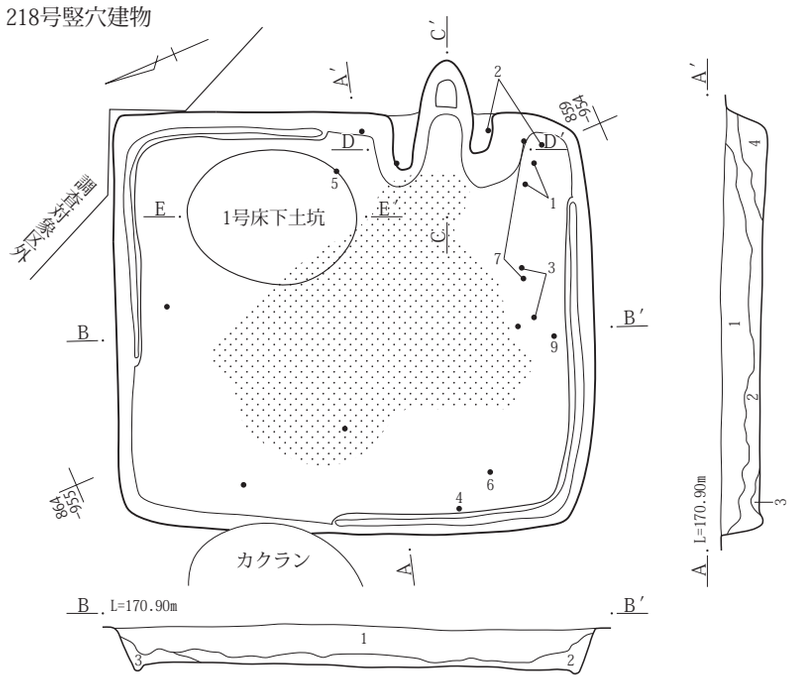
貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が1.02m、幅が1.20m、燃焼部幅0.38mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部火床面との間に８㎝ほどの段が設けられていた。燃焼部火床面はやや焼土化がみられた。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕や須恵器杯蓋・杯・甕、土製品円面硯、銅製品鉈尾などが出土している。このうち２・３の土師器杯と７の土師器壺が床面から、１の土師器杯が床下土坑から、６の須恵器杯が床面より13㎝上から、４の須恵器杯蓋と９の土製品円面硯が南壁よりの床面より６㎝上から出土している。９の円面硯は脚部を欠損するが透孔を設けた圏足硯で、残存状態は硯面の1/4ほどである。硯面は使い込まれた状態である。銅製品鉈尾は裏側に留め金として使用される部分で埋没土からの出土である。

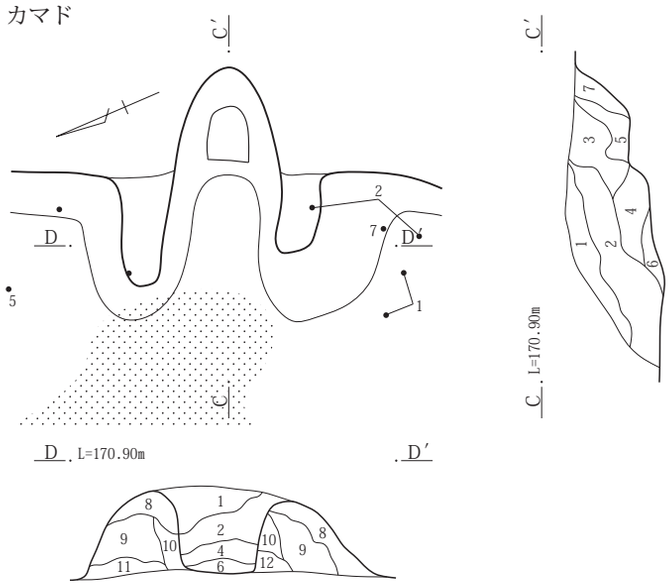
218号竪穴建物



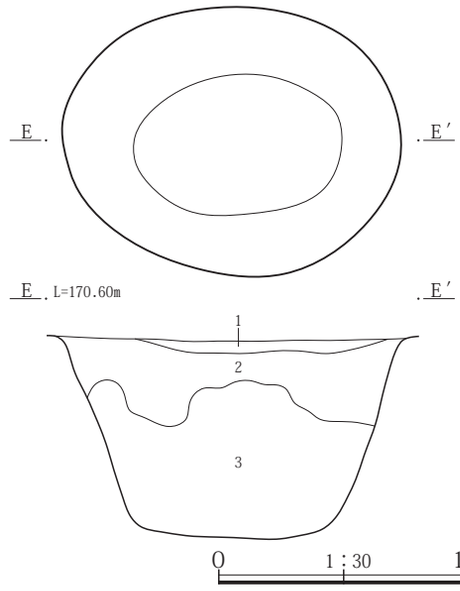
218号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを霜降状に焼土を若干、不揃いのロームブロックをやや多く含み、ややしまりが強い微粘性土。人為的埋め戻し土。
2　黒褐 10YR3/2　1と同様。ローム土の含有量は少ない。
3　灰黄褐 10YR4/2　ローム小ブロックを多く含み、しまりが強い弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　3に近似、焼土、炭化物粒をやや多く含む。

0　1：60　2m

カマド



1号床下土坑



0　1：30　1m

218号竪穴建物　カマド
1　暗褐 10YR3/3　竪穴建物埋没土１と同様。
2　灰黄褐 10YR4/2　黒色土、ロームブロック、AS-YP、焼土を含む。
3　にぶい赤褐 5YR4/3　基質は不明瞭なローム土、被熱によって褐色土化している。
4　暗褐 10YR3/4　焼土・炭化物・灰を少量含み、ややしまりの弱い弱粘性土でサラサラとした感触。
5　暗褐 10YR3/4　４近似。
6　にぶい黄褐 10YR5/2　ローム土、焼土主体、黒褐色土を不均等に含む。
7　灰褐 5YR4/2　３に近い、焼土は少ない。
8　黒褐 10YR3/2　竪穴建物埋没土２と同様。
9　灰黄褐 10YR4/2　ローム土と黒褐色土の混土。
10　暗褐 10YR3/4　黒褐色土が基質、ロームブロック・焼土・灰等を含む。
11　にぶい赤褐 5YR4/3　ロームブロック主体、黒褐色土ブロックを含み、きわめてしまりの強い。
12　にぶい赤褐 5YR4/3　11に類似、焼土の含有量が多い。

218号竪穴建物　床下土坑
1　黒褐 10YR3/2　AS-YPとローム小ブロックを不均等に少量含み、しまりが強くない弱粘性土。
2　灰黄褐 10YR4/2　As-C混じりの黒色土と不明瞭なローム土とブロック状のAs-YPの混土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いのAs-YP主体、黒褐色土を不均等に少量含み、ややしまりが弱いボソボソした感触。人為的埋め戻し土。

第266図　218号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面や床下土坑から出土した土師器杯や甕から７世紀第４四半期から８世紀第１四半期に比定できるが、床面よりやや上位から須恵器杯蓋や底部が高台より突出する杯などの出土から主体となる時期は８世紀第１四半期と想定される。

219号竪穴建物

位置　４区調査区北東端、Ｘ＝36867～36872、Ｙ＝-84955～-85859に位置する。北東側２分の１は調査対象区外に存在する。

重複関係　225号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが新しい。

形状　北西角では西辺に対して北辺はやや開く様子が窺えることから、やや歪んだ四角形または台形状を呈すると想定される。

規模　調査範囲内では南北方向3.82m、東西方向5.05mを測る。確認面から床面までの壁高は16～24㎝を測る。

床面積　残存範囲内で10.45㎡を測る。

主軸方位　東西方向を主軸方向とするとＮ－121°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できるが、南東角側床面に灰黄褐色土が盛り上がった堆積が確認されている。この堆積土中には焼土が混在していることからカマド廃棄時に構築材を投棄したものと想定すると竪穴建物自体の埋没は自然埋没と判断される。

床面　調査範囲内では地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　調査範囲内では検出されなかった。出土遺物からみるとカマドが構築されている時期の竪穴建物である。土層断面Ｂ－Ｂ′の観察から南東角寄りにカマド構築材の投棄されたものが確認されていることから東壁にカマドが構築されていたと想定される。

出土遺物　遺物には土師器甕、須恵器杯蓋、皿、椀、短頸壺、甕などが出土している。このうち、２・３の須恵器皿と４の須恵器椀、９の須恵器甕が床面から、８の土師器甕が床面より14㎝上から、５・６の須恵器椀が床面より11㎝・16㎝上からの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は床面から出土した須恵器椀や土師器甕から９世紀第４四半期に比定できる。また、床面よりやや上位から出土している８の土師器甕はコの字状口縁部を呈しているが、頸部がわずかに内側に傾き、器壁が厚くなっていることから同時期と判断される。

225号竪穴建物

位置　４区調査区北東端、Ｘ＝36866～36869、Ｙ＝-84955～-85859に位置する。北側２分の１は重複関係にある219竪穴建物によって欠く。

重複関係　219号竪穴建物、223号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は219号竪穴建物より本竪穴建物のほうが古く、223号竪穴建物より新しい。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は3.58m、南北方向は残存範囲で1.50mを測る。確認面から床面までの壁高は11～22㎝を測る。

床面積　残存範囲内で3.45㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－122°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　残存範囲では地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

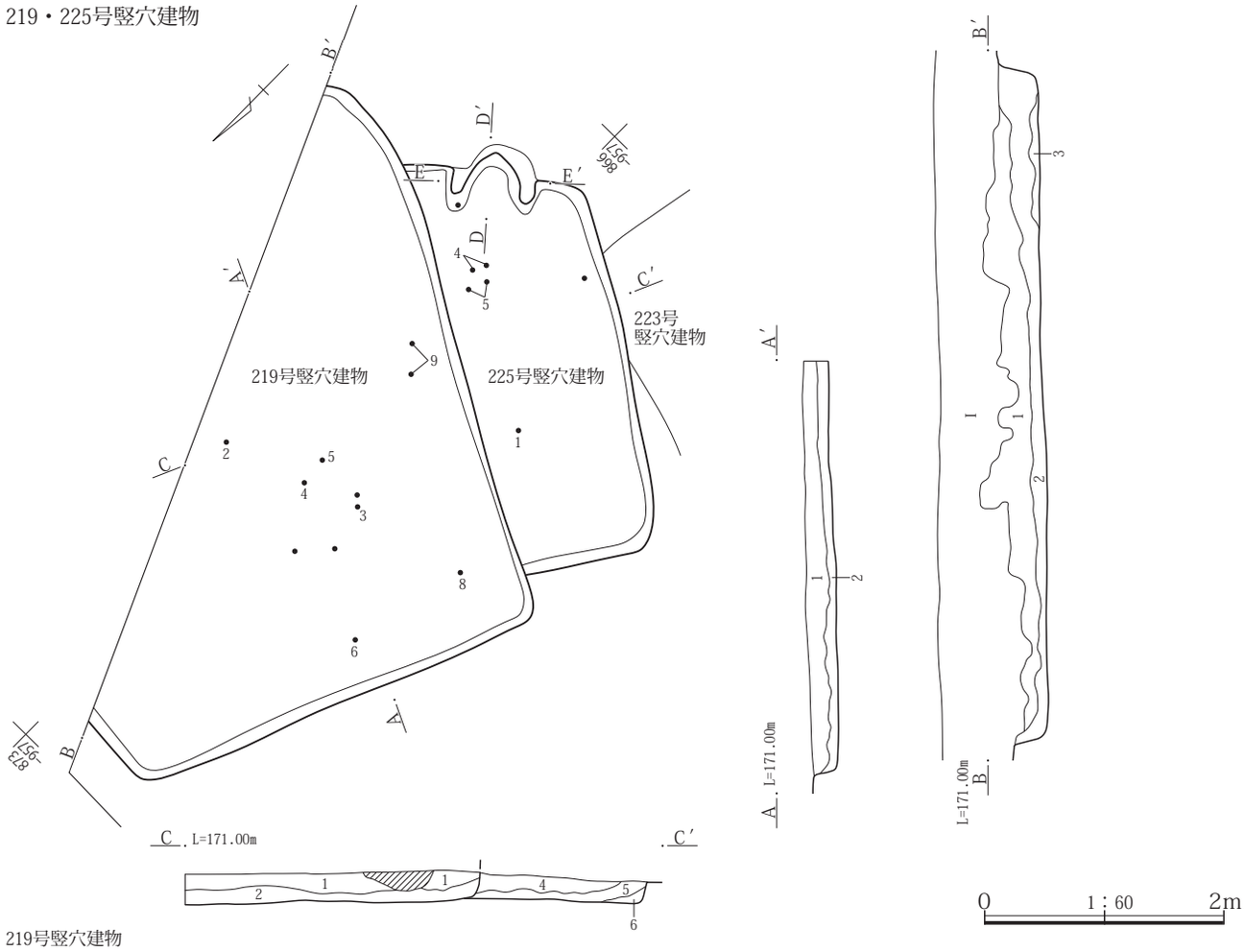
柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

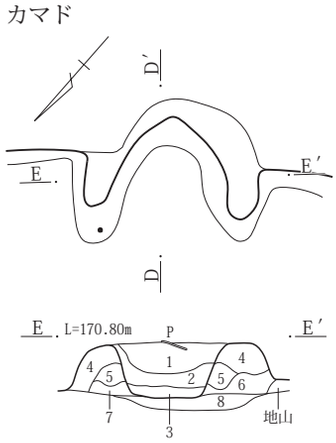
火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は失われていたが、両袖はわずかではあるが残存していた。規模は全長が0.60m、幅0.80m、燃焼部幅0.32mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。なお、もっとも焼土化している面は残存する袖より内側であったことから、焚口や燃

219・225号竪穴建物

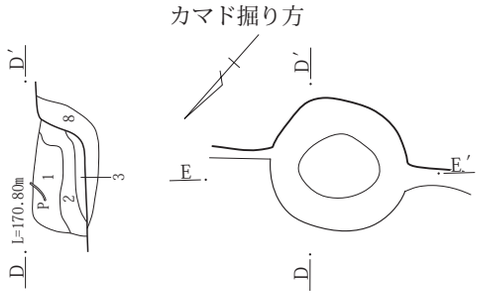


219号竪穴建物
1　暗褐 10YR3/3　As-C混土、ロームブロック、AS-YP、炭化物粒、焼土等を含み、しまりが強い微粘性土。
2　黒褐 10YR3/1　As-Cを少量と細粒土。焼土粒・炭化物粒を不均等に含む。
3　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土と２の混土。ややしまりが強い微粘性土。焼土等の含有量は少ないが、２より多い。
225号竪穴建物
4　暗褐 10YR3/3　As-Cを霜降状にローム粒を不均等に少量、炭化物を若干含み、しまりが強い細粒非粘性土。
5　暗褐 10YR3/3　１に近いがやや黒色味強い。炭化物粒、焼土少量とローム小ブロックを若干含む。
6　黒褐 10YR3/2　含有物はみられない。

カマド



カマド掘り方



225号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、ローム粒・焼土等雑多な含有物を少量含み、ややしまりが強い細粒土。
2　灰黄褐 10YR4/2　ローム土を多くと北側・煙道側で焼土小ブロックを含み、しまりが強い。
3　にぶい赤褐5YR4/3　焼土粒を多くと灰を含み、ややしまりが弱くサラサラした感触。
4　暗褐 10YR3/4　不明瞭なローム土と黒褐色土の混土、上半に焼土を少量含み、ややしまりが強い。
5　暗褐 10YR3/4　４と同様、焼土・炭化物を多く含む。
6　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土主体、ややしまりが弱い。
7　暗褐 10YR3/3　焼土粒を少量含み、しまりが強い細粒土。
8　暗褐 10YR3/3　焼土粒を含み、しまりが強い細粒土。

0　1：30　1m

第267図　219・225号竪穴建物遺構図

焼部はより内側に構築されていたと想定される。掘り方は煙道部下位に浅い土坑状の落ち込みが検出されている。

出土遺物　遺物には土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕、鉄製品釘、流動滓などが出土している。このうち、カマドから３の土師器甕、床面から５の須恵器甕が出土している。この他、埋没土中からではあるが２のロクロ土師器小型甕が出土している。

所見　本竪穴建物の存続期間は、カマドから出土した土師器甕の口縁部から頸部の形状がコの字状を呈していることから９世紀第３四半期に比定できる。

220号竪穴建物

位置　４区調査区北端、Ｘ＝36869～36873、Ｙ＝-84961～-85965に位置する。北辺側は調査対象外、西辺と多くの部分を撹乱によって欠く。

重複関係　調査範囲内では単独で占地する。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　主軸方向の東西方向は西辺を撹乱によって欠くため明確ではないが、4.20～4.30m、南北方向は調査範囲内で3.80mを測る。確認面から床面までの壁高は３～８㎝を測る。

床面積　残存範囲内で12.89㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－91°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため埋没状態については判断ができないが、床面中程に灰黄褐色土の盛り上がった不自然な堆積が確認されている。

床面　調査範囲内では若干の凹凸がみられるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。床面のなかでもカマド周囲から幅2.5～2.0mほどで西に3.0mほどの範囲は特に硬く踏みしめられていた。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁の中程よりやや南寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.95m、幅が1.32m、燃焼部幅0.28mを測る。煙道部は壁外に存在している。燃焼部火床面は焼土化が顕著であった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、流動滓、石製品磨石などが出土している。このうち、１の須恵器杯蓋、２の須恵器杯、５の須恵器高杯、７の須恵器壺、９の土師器甕が床面から、４の須恵器杯、６の土師器鉢、８の土師器甕がカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯や甕から８世紀第３四半期に比定できる。

221号竪穴建物

位置　５区調査区西端、Ｘ＝36815～36817、Ｙ＝-84954～-84956に位置する。大部分が調査対象区外に存在する。

重複関係　調査範囲内では単独で占地していた。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　調査範囲内では南北方向3.0m以上、東西方向2.0m以上を測る。確認面から床面までの壁高は５㎝前後を測る。

床面積　残存範囲内で1.85㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－87°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

床面　調査範囲内では地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　調査範囲内では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　調査範囲内では検出されなかった。

柱穴　調査範囲内では検出されなかった。

貯蔵穴　調査範囲内では検出されなかった。

その他施設　調査範囲内では検出されなかった。

火処　東壁にカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われているが、両袖は残存していた。規模は全長が0.93m、幅が1.10m、燃焼部幅0.38mを測る。煙道部は壁外に存在し、燃焼部火床面との間には７㎝ほどの段が設けられている。燃焼部火床面から煙道部にかけては比較的焼土化が進んでいた。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・杯・甕などが出土している。このうち、１の須恵器杯蓋、２～４の須恵器杯、７の土師器甕、９の須恵器甕が床面から、５の須恵器片口杯、６・８の土師器甕、10の須恵器甕がカマドから出土している。なお、床面から出土している１・２の須恵器杯蓋・杯の一部破片がカマドや竪穴建物外から出土していた。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面やカマドから出土した須恵器杯や土師器甕から９世紀第１四半期に比定できる。

222号竪穴建物

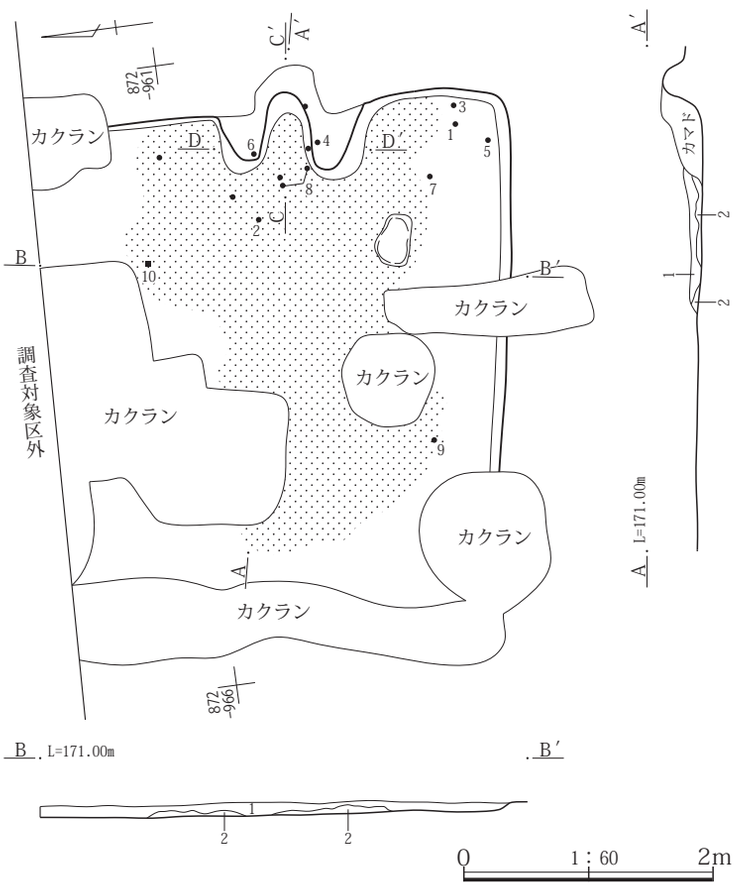
位置　４区調査区北部、Ｘ＝36864～36867、Ｙ＝−84963～−85965に位置する。大部分を撹乱によって欠き、カマドの周囲が残存しているだけであった。

重複関係　７号井戸、167号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　方形または長方形を呈すると想定される。

規模　残存範囲では主軸方向の東西方向が1.30m、南北方向は2.53mを測る。確認面から床面までの壁高は５～

220号竪穴建物



220号竪穴建物

1　暗褐 10YR3/3　As-A、ローム粒、焼土粒を不均等に含み、ややしまりが強い非粘性土。

2　灰褐 7.5YR4/2　ロームブロック、焼土、黒褐色土の混土。しまりが強い。

220号竪穴建物　カマド

1　暗褐 7.5YR3/3　As-C混土、焼土、灰、ローム粒を不均等にやや多く含む。

2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土が主体、細かな焼土粒・炭化物をやや多く含み、しまりが強い。

3　灰黄褐 10YR4/2　２に近似、焚口と煙道側で焼土をやや多く、中央で少し含み、炭化物・灰も不均等に含む。

4　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土、焼土、灰等の混土。一部で薄層状に堆積し、しまり強い。

5　灰黄褐 10YR4/2　ロームブロックと焼土をふくむみ、しまりが強い粘性土。

6　暗褐 7.5YR3/3　灰と焼土、ローム粒を不均等に含む。

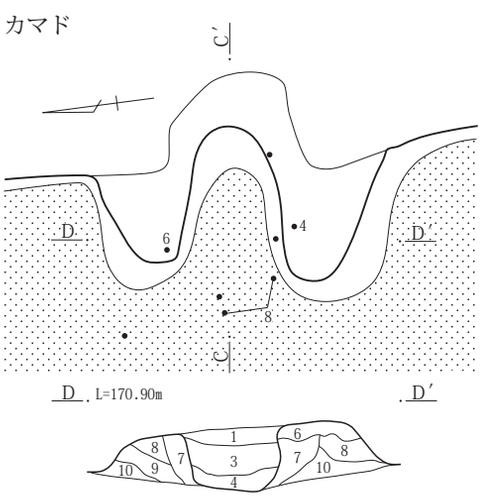
7　暗褐 10YR3/3　ローム粒、As-YP粒をやや多く含み、しまりがある弱粘性土。

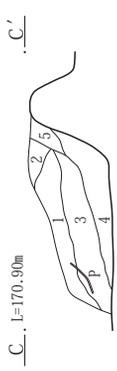
8　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土多くと焼土を若干含み、しまりがある細粒土。

9　暗褐 10YR3/4　ローム粒・ブロックを多く含み、しまりが強い弱粘性土。

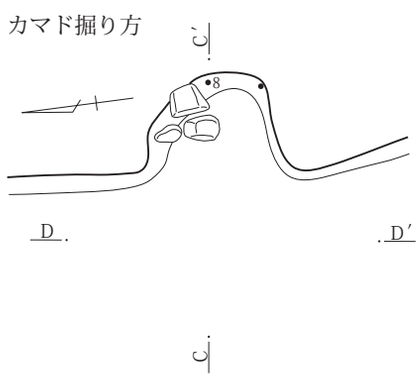
10　暗褐 10YR3/4　ローム粒・ブロックを含み、しまりが強い弱粘性土。

カマド





カマド掘り方



0　1：30　1m

第268図　220号竪穴建物遺構図

210㎝を測る。

床面積　残存範囲内で2.65㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－95°－Ｅを指す。

埋没状態　確認面から床面までが浅いため判断ができない。

床面　残存範囲では地山を踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　残存範囲では貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　残存範囲では検出されなかった。

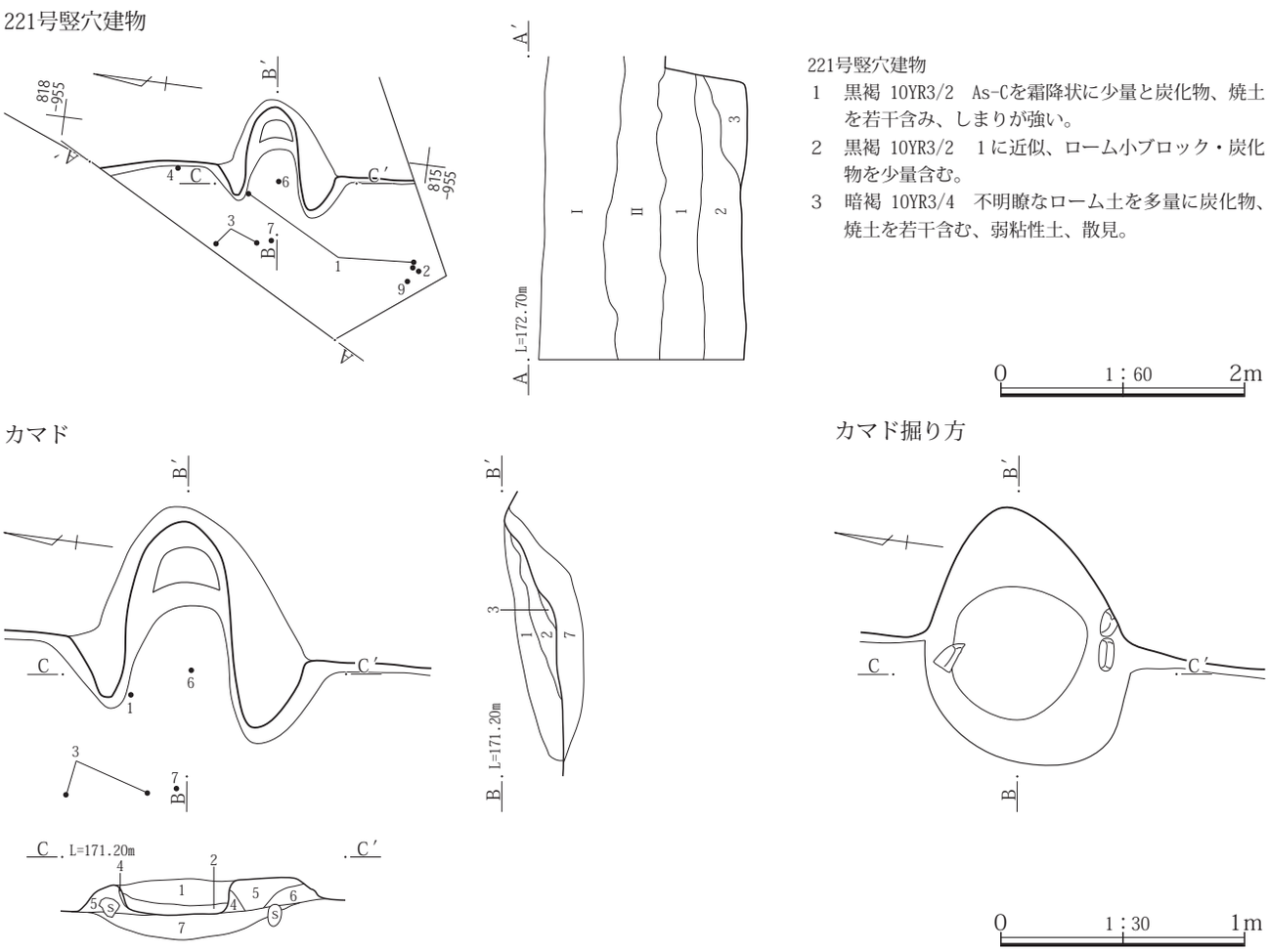
柱穴　残存範囲では検出されなかった。

貯蔵穴　残存範囲では検出されなかった。

その他施設　残存範囲では検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井、竪穴内の両袖は失われていたが、壁外の燃焼部側面や煙道部は残存していた。規模は全長が0.75m、幅が0.90m、燃焼部は幅0.25mを測る。なお、竪穴内の焼土範囲からはカマド全長は1.20～1.40mほどになると想定される。燃焼部奥側半分から煙道部にかけては壁外に存在し、燃焼部火床面や煙道部側面は比較的焼土化していた。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・杯・甕、瓦などが出土しているが、出土量は少なく38点であった。また、これらの土器は小片が、ほとんどで図示できたのは１の土師器甕と２の瓦だけであった。１の土師器甕は床面上８㎝から、瓦は床面からの出土である。



221号竪穴建物　カマド

1　暗褐 10YR3/3　As-C、焼土、ローム粒を霜降状に少量含み、ややしまりが弱い細粒非粘性土。
2　灰褐 7.5YR4/2　ローム小ブロック、焼土を含み、ややしまりが強い微粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　灰、炭化物粒を含み、ややしまりが強い。
4　灰褐 7.5YR4/2　焼土・ローム粒を少量含む、細粒土。
5　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量と焼土を若干含み、ややしまりが強い。
6　暗褐 10YR3/4　不明瞭なローム土主体に黒褐色土を少量含み、しまりが強い弱粘性土。
7　暗褐 10YR3/4　ローム粒・ブロックを含み、しまりが強い弱粘性土。

第269図　221号竪穴建物遺構図

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面ではないが、それに近い位置から出土した土師器甕から９世紀第１四半期に比定できるが､出土遺物が乏しいため確実性に欠ける。

223号竪穴建物

位置　４区調査区北東部、Ｘ＝36863～36867、Ｙ＝-84957～-85960に位置する。南西角を重複関係にある155号土坑によって欠く。

重複関係　225号竪穴建物、153号土坑、155号土坑と重複関係にある。新旧関係は本竪穴建物のほうが古い。

形状　北辺が南辺に比べ0.5mほど短い台形状を呈する。

規模　主軸方向の東西方向が2.50m、南北方向が3.83mを測る。確認面から床面までの壁高は12～30㎝を測る。

床面積　7.59㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－109°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積が確認できるが１層・２層の堆積に不自然なところがみられるため、当初は自然埋没であるが、その後に人為的な埋め戻しが行われた可能性が想定される。

床面　若干の凹凸が見られるが、地山をそのまま踏み固めて平坦面を造っている。

掘り方　貼床や床下土坑などの施設は検出されなかった。

壁溝　検出されなかった。

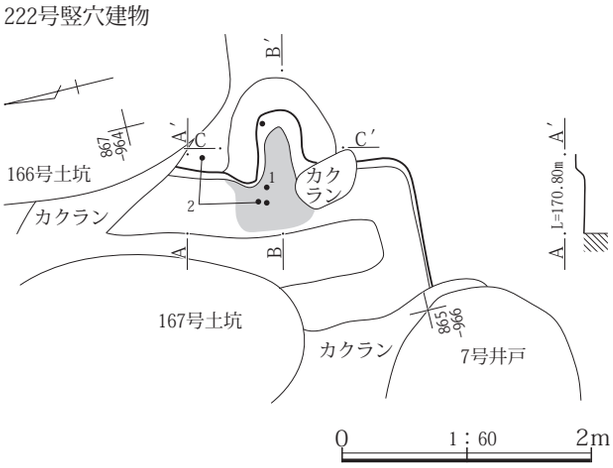
柱穴　検出されなかった。

貯蔵穴　検出されなかった。

その他施設　検出されなかった。

火処　東壁の南東角寄りにカマドが構築されている。残存状態は焚口と燃焼部の天井は失われていたが、両袖は残存していた。規模は全長が0.79m、幅が0.80m、燃焼部幅0.20mを測る。煙道部は壁外に掘り込まれている。燃焼部奥から煙道部にかけてはブロック状の焼土が多くみられた。この状態から竪穴建物廃棄時に煙道部も大きく壊されたことが窺える。

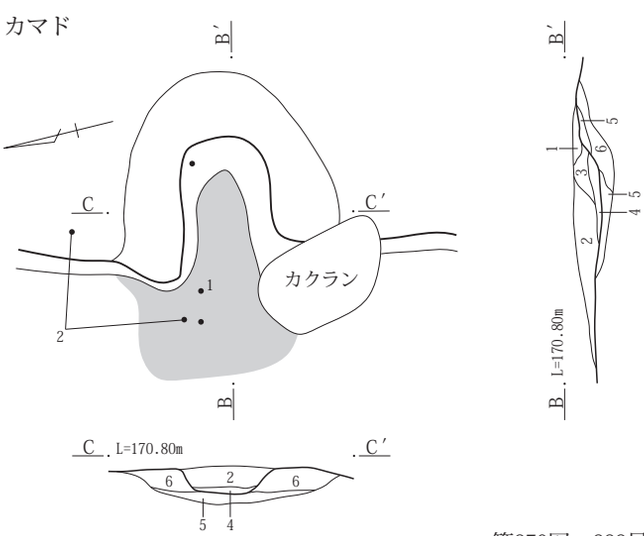
222号竪穴建物



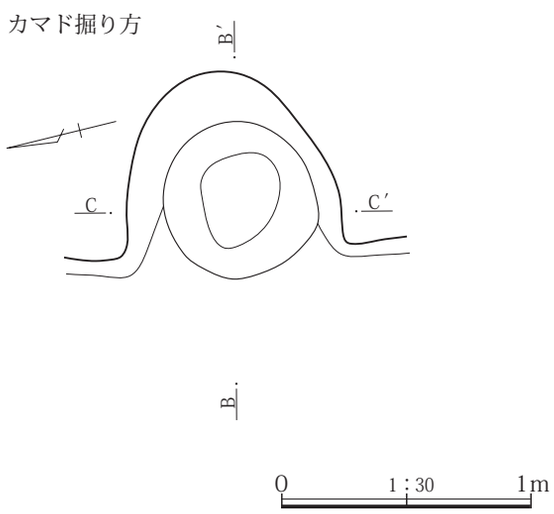
222号竪穴建物　カマド

1　黒褐 7.5YR3/2　黒褐色細粒土が基質、焼土小ブロックを少量含み、ややしまりが強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　As-C混土、焼土を含み、ややしまりが弱い。
3　灰黄褐 10YR4/2　２に近似、大粒焼土ブロックを多く含む。
4　暗褐 10YR3/3　灰と焼土粒・ローム粒を少量含み、ややしまりが弱い細粒土。
5　にぶい赤褐 5YR4/3　ブロック状の焼土主体、ローム状土、黒褐色土を含み、しまりが強い。著しい被熱はない。
6　灰褐 7.5YR4/2　焼土粒、ローム粒を多量に含み、しまりが弱い細粒微粘性土。

カマド



カマド掘り方

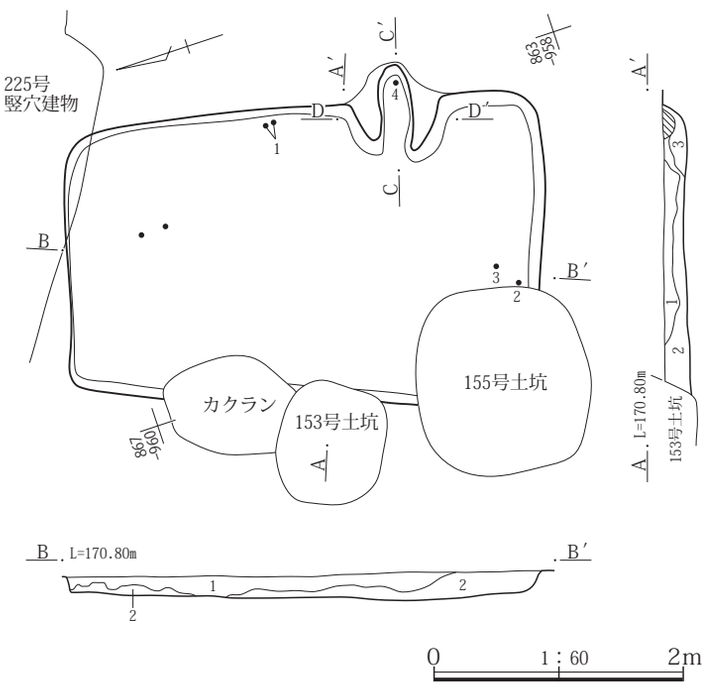


第270図　222号竪穴建物遺構図

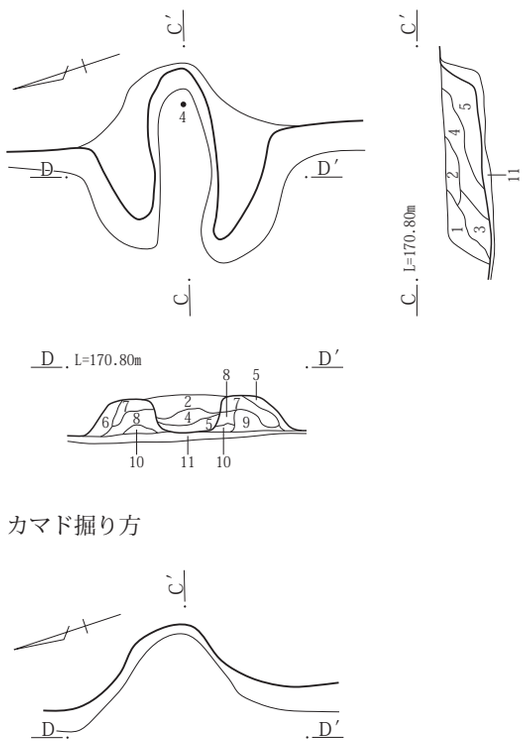
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋、杯・椀・甕などが出土しているが、出土量は多くない。このうち、１～３の須恵器杯は床面から、４の須恵器壺はカマドからの出土である。

所見　本竪穴建物の存続期間は、床面から出土した須恵器杯から比定するが、１の須恵器杯は７世紀後半代、２・３の須恵器杯は８世紀前半代の年代観が与えられることから、１は伝世品とみられる。こうしたことから本竪穴建物は８世紀前半代に比定するのが妥当と考える。

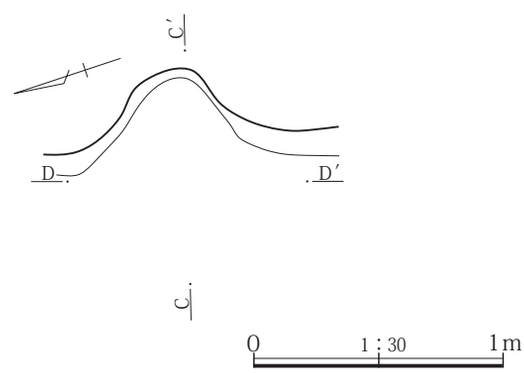
223号竪穴建物



カマド



カマド掘り方



223号竪穴建物
1　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量とローム小ブロック、As-YPを不均等に少量含み、ややしまりが弱い細粒微粘性土。
2　暗褐 10YR3/4　不明瞭なロームブロックを多くと焼土・炭化物粒を若干、北側に大粒ロームブロックを含み、ややしまりがある弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　ロームブロックを多くと炭化物を少量含む、弱粘性土。

223号竪穴建物　カマド
1　黒褐 10YR3/2　As-C、ローム粒、焼土を含む、微粘性細粒土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土主体、黒褐色土を小ブロック状に含み、しまりが強い粘性土。
3　暗褐 10YR3/4　ローム粒を霜降状に炭化物、焼土を少量含む、微粘性土でややサラサラした感触。
4　暗褐 10YR3/4　３に近似、焼土粒をやや多く含む。
5　暗褐 10YR3/3　しまりが強い微粘性土。
6　灰黄褐 10YR4/2　竪穴建物埋没土３と同様。
7　にぶい黄褐 10YR5/2　ブロック状のローム土主体、黒褐色土を少量含み、しまりが強い粘性土。
8　暗褐 7.5YR3/3　焼土・灰・ローム粒を多く含み、しまりがあるやや粗粒土。
9　暗褐 10YR3/3　As-C・ローム粒を少量含み、ややしまりがある粘性土。
10　灰黄褐 10YR4/2　ローム小ブロックと黒褐色土の混土、黒色灰を含み、しまりが強い。
11　暗灰黄 2.5Y5/2　やや不明瞭なロームブロック・焼土粒を少し含む。

第271図　223号竪穴建物遺構図

第２項　掘立柱建物

１号掘立柱建物

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37087～37084、Ｙ＝-85049～-85055に位置する。

柱穴Ｐ６は平面形態が長方形を呈し、他の柱穴と平面形態が異なる。また、柱穴Ｐ２は重複関係にある竪穴建物によって検出されなかった。本来はともに存在せず、梁行１間の可能性も想定されるが、その場合梁行間が4.60mと間隔が開きすぎることになるため、柱穴Ｐ６は本掘立柱建物を構成する柱穴の一つと判断した。

重複関係　157号竪穴建物、161号竪穴建物、168号竪穴建物、170号竪穴建物、185号竪穴建物、186号竪穴建物、169号土坑などと重複関係にある。新旧関係は判然としないが、本掘立柱建物がもっとも古いと想定される。

形状　東西方向に長い長方形を呈する。

規模　梁行２間、桁行２間、梁行(南北方向)4.62m、桁行(東西方向)5.22mを測る。

床面積　柱穴間を結んだ内側で23.73㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－106°－Ｅを指す。

柱穴　各柱穴の形状と規模は第３表のとおりである。深さは重複する遺構の床面や底面からのものもあるため、それぞれの柱穴によって異なり、実際より浅い値となっている。なお、底面の標高は最も低いものがＰ１の155.60m、最も高いものがＰ６の156.03mと40㎝ほどの差がみられるが、四隅では155.60～155.77mと比較的近い値である。

柱穴Ｐ４と柱穴Ｐ５では底面に２箇所の柱痕がみられることから建替または柱の据え替えが行われたと想定される。柱痕は平面断面とも確認できていない。断面の観察では抜き取りが行われたと判断される。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、鉄製品釘、流動滓などが出土している。出土量は300点ほどあったが、図示できた遺物は柱穴Ｐ４、柱穴Ｐ８から出土した３点の土器だけであった。図示した土器の年代観は７世紀後半から８世紀第３四半期と判断できる。また、柱穴Ｐ３から鉄製品釘、流動滓が出土しているが、小片のため図示には至らなかった。

所見　本掘立柱建物の時期は出土した１・２の土師器杯と須恵器杯から８世紀第３四半期に比定できる。今回、調査した範囲では、唯一の掘立柱建物であることから、単なる居住施設や倉庫以外の性格も想定されるが、性格を想定できる遺物などの出土はみられなかった。

第３項　竪穴状遺構

１号竪穴状遺構

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37081～37085、Ｙ＝-85069～-85073に位置する。南東部は調査範囲外のため欠く。

重複関係　他遺構との重複関係は確認されていない。

形状　ほぼ方形を呈する。

規模　南北方向が2.26m、東西方向は2.16mを測る。確認面から底面までは最大で0.52mを測る。

底面面積　残存範囲内で2.57㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－35°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では底面中央に黒褐色土がブロック状に堆積しており、人為的な埋め戻しが行われた可能性が想定される。

底面　南西部に土坑状の掘り込みがみられる。土坑状の掘り込みは壁際に位置し、形状は楕円形を呈し、規模は径1.15×1.05m、周囲の底面から深さ13㎝を測る。

内部の施設　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯などが出土しているが、出土量は図示した須恵器杯・椀の３点、未掲載32点とわずかであった。

所見　本竪穴状遺構の期間は、出土した須恵器杯から９世紀後半代に比定できる。

２号竪穴状遺構

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37114～37116、Ｙ＝-85054～-85056に位置する。埋没土の大半を重複関係ある26号竪穴建物によって欠く。

重複関係　26号竪穴建物、47号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本遺構のほうが古い。

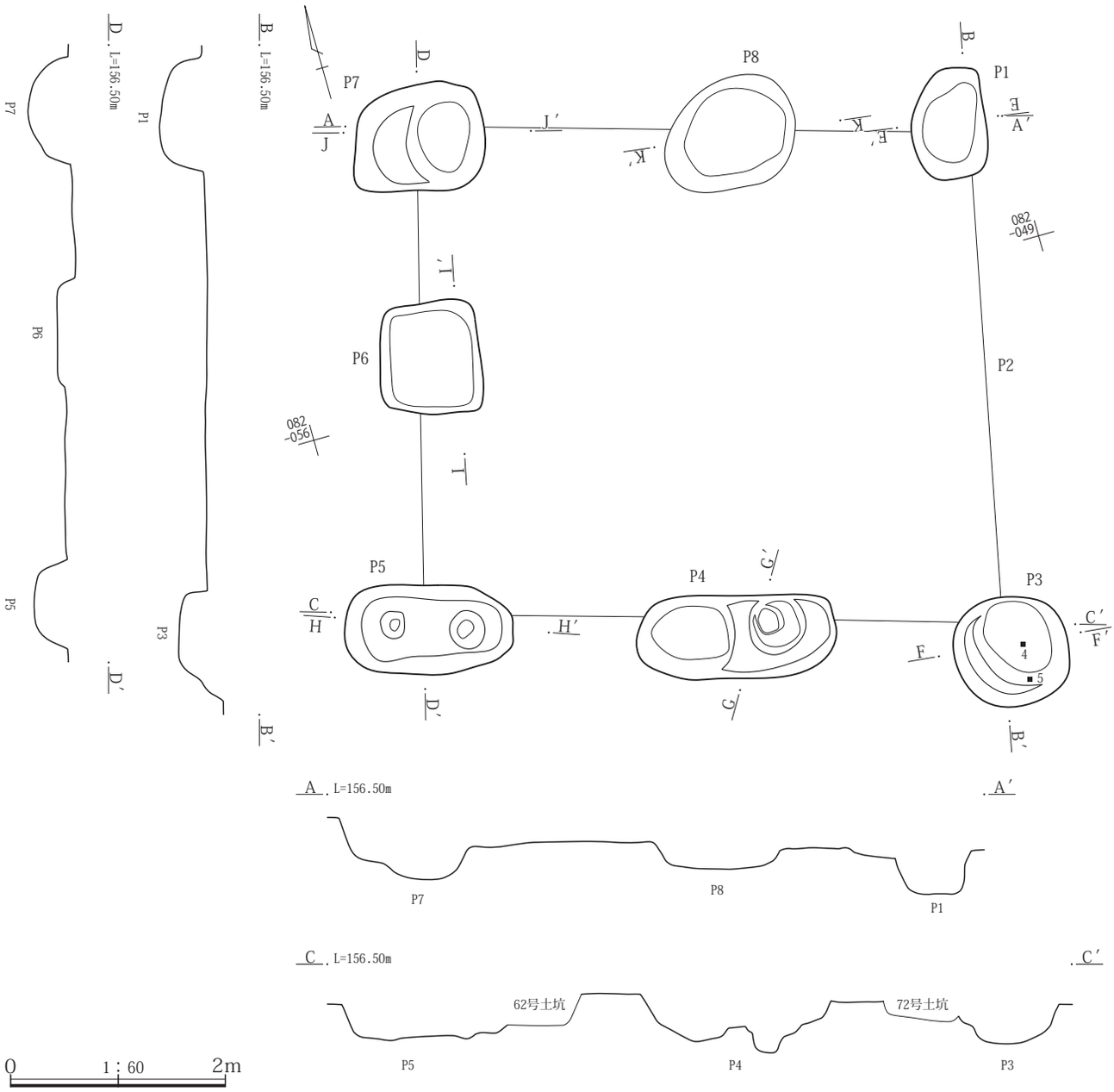
形状　北西角が85°、北東角が100°と歪みがある南北方向に長い四角形を呈する。

規模　南北方向が2.37m、東西方向が1.93mを測る。確認面から底面までの深さは37～40㎝を測る。

底面面積　3.50㎡を測る。

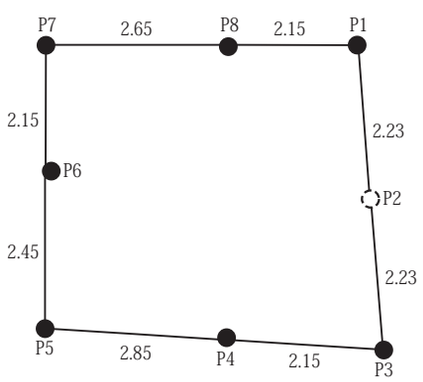
主軸方位　Ｎ－26°－Ｗを指す。

１号掘立柱建物



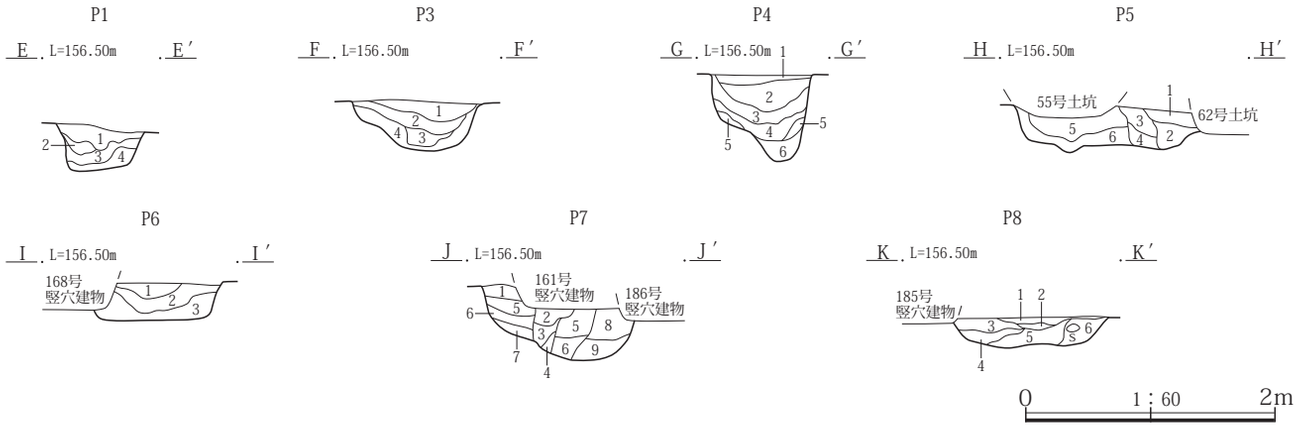
第272図　１号掘立柱建物遺構図（１）

１号掘立柱建物模式図



第３表　１号掘立柱建物柱穴計測表　　単位　m

柱穴No.	形状	長軸	短軸	深さ
Ｐ１	楕円形	1.05	0.70	0.24
Ｐ２	―	―	―	―
Ｐ３	隅丸方形	1.07	1.05	0.40
Ｐ４	楕円形	1.85	0.72	0.64
Ｐ５	楕円形	1.57	0.82	0.38
Ｐ６	長方形	1.08	0.96	0.31
Ｐ７	台形状	1.22	10.30	0.52
Ｐ８	楕円形	1.32	1.03	0.25



１号掘立柱建物

Ｐ１

1　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土粒をやや多く表面に焼土・灰を多く含み、ややしまりが強い。上面竪穴建物の床面とみられる。
2　黒褐 10YR2/2　炭化物や不明瞭な泥流土ブロックを含み、ややしまりがある細粒土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土ブロックが西側から流れ込んだようなややしまりがある細粒粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　泥流土を少量含み、ややしまりがある細粒弱粘性土。

Ｐ３

1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、炭化物片を２％、φ１～２㎜の褐色土ブロック・φ１㎜の焼土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の白色粒・φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％、炭化物片を１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを５％、φ２㎜の白色粒・炭化物片を１％含み、やや粘性がある。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％、炭化物片を１％含み、やや脆く粘性がある。

Ｐ４

1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、炭化物片を２％、φ１～２㎜の褐色土ブロック・φ１㎜の焼土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の白色粒、φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％、炭化物片を１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを５％、φ２㎜の白色粒、炭化物片を１％含み、やや粘性がある。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％、炭化物片を１％含み、やや脆く粘性がある。
5　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に若干含む。
6　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に50％含む。

Ｐ５

1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを３％とφ１㎜の白色粒・炭化物を１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の白色粒を１％とφ１～５㎜の褐色土ブロックを40％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを１％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含み、やや粘性がある。
5　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含む。
6　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に７％含む。

Ｐ６

1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を２％、φ１～５㎜の褐色土ブロックを５％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１～10㎜の褐色土ブロックを10％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含み、しまりがある。

Ｐ７

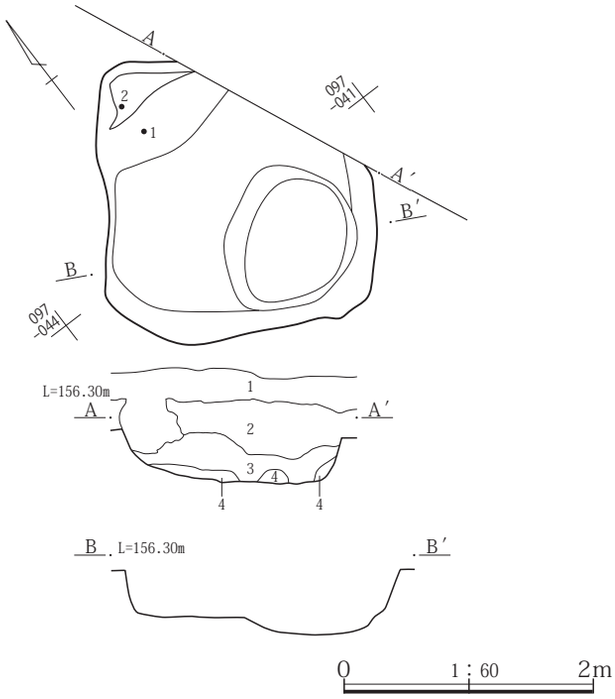
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを３％とφ１㎜の白色粒、炭化物を１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の白色粒を１％とφ１～５㎜の褐色土ブロックを40％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを１％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含み、やや粘性がある。
5　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含む。
6　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％含む。
7　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に50％含む。
8　暗褐 10YR3/3　褐色土を霜降状に含む。
9　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％含む。

Ｐ８

1　黒褐 10YR2/3　炭化物片を帯状に含み、しまりがある。
2　灰黄褐 10YR4/2　褐色土を５％含む、粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　灰黄褐色土を10％、φ２～３㎜の白色粒を２％、焼土ブロックを１％含む。
4　黒褐 10YR2/3　粘性ある灰黄褐色土を10％、φ２㎜の焼土ブロック、白色粒を１％含む。
5　暗褐 10YR3/3　粘質土。灰黄褐色土を30％、褐色土を５％、φ１㎜の白色粒を１％含む。
6　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含む。

第273図　１号掘立柱建物遺構図（２）

１号竪穴状遺構



１号竪穴状遺構
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土。φ５～10㎜の白色粒を２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の白色粒を５％、φ２～３㎜の褐色粒を１％含み、固くしまりあり。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含み、やや粘性あり。
4　黒褐 10YR2/3　粘性あり。

第274図　１号竪穴状遺構遺構図

埋没状態　重複関係にある26号竪穴建物によって埋没土の大半を欠くため不明である。

底面　ほぼ平坦である。

内部の施設　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・壺・甕、須恵器杯などが出土している。出土量は図示３点、未掲載32点とわずかであった。このうち、１の土師器杯と３の土師器壺が底面からの出土であった。

所見　本竪穴状遺構の時期は、底面から出土した土師器杯から７世紀前半に比定できる。

３号竪穴状遺構

位置　１区東南部、Ｘ＝37056～37060、Ｙ＝-85028～-85031に位置する。重複関係にある92号竪穴建物によって西半を欠く。

重複関係　92号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある遺構より本遺構のほうが古い。

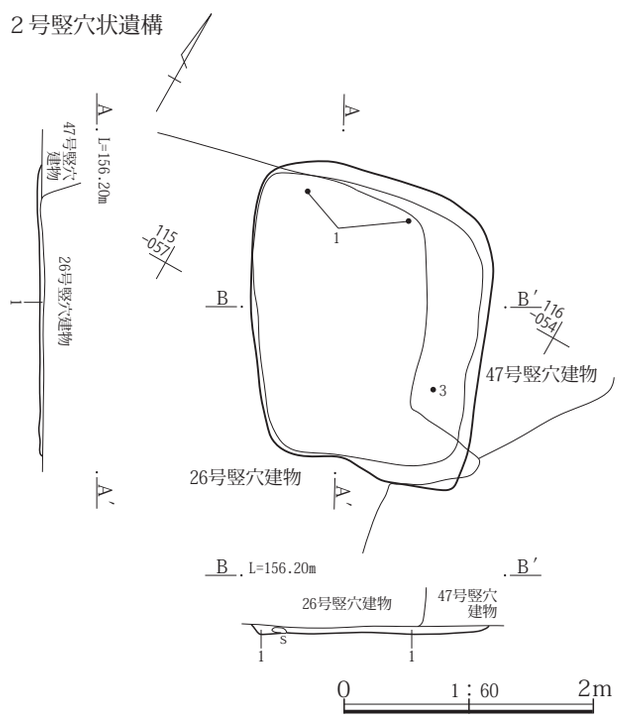
形状　東西方向に長い隅丸長方形を呈する。

規模　東西方向が残存範囲で2.49m、南北方向が2.72mを測る。確認面から底面までの深さは２～10㎝を測る。

底面面積　残存範囲内で4.90㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－129°－Ｗを指す。

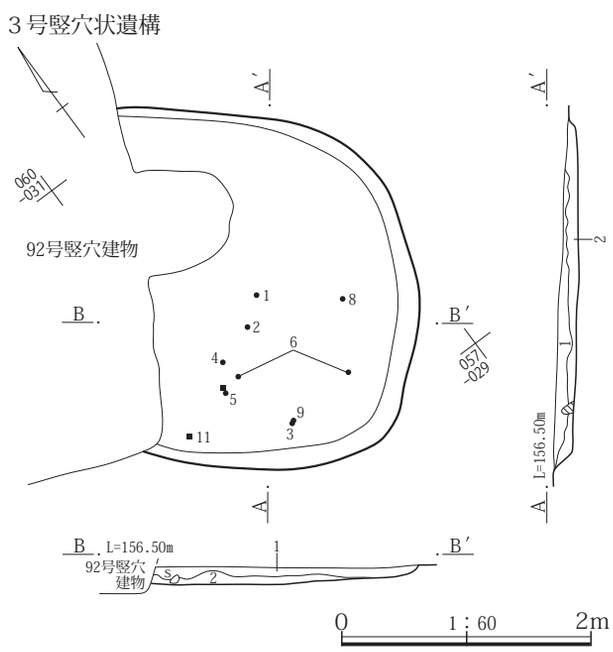
２号竪穴状遺構



２号竪穴状遺構
1　黒褐 10YR3/2　やや大粒のAs-Cを不均等に泥流土粒も霜降状に含み、しまり強い。

第275図　２号竪穴状遺構遺構図

３号竪穴状遺構



３号竪穴状遺構
1　暗褐 10YR3/3　炭化物を上面にやや多く泥流土粒を少量、焼土とAs-Cを若干含み、ややしまりある非粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土が混じるため１よりやや黄色味を帯びる。焼土、炭化物粒を少量含む、微粘性土。

第276図　３号竪穴状遺構遺構図

埋没状態　確認面から底面までが浅いため判然としないが土層断面の観察ではレンズ状の堆積が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦である。

内部の施設　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甑・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・瓶・甕、鉄製品11小刀・12釘などが出土している。その出土範囲は南東部に集中している。出土位置は底面から10㎝前後のものが多く、底面や底面近くからの出土は少ない。

所見　本遺構の時期は、出土した須恵器杯の底部が回転ヘラ削りと回転糸切りが混在しているが、形態的にはほとんど異ならないことから８世紀第３四半期を主体とした時期に比定できる。

４号竪穴状遺構

位置　１区調査区中央部の西寄り、Ｘ＝37081～37085、Ｙ＝−85069～−85073に位置する。

重複関係　149号竪穴建物、156号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本竪穴状遺構のほうが古い。遺構確認や土層断面の観察では竪穴建物より本竪穴状遺構のほうが古いとの見解であるが、出土遺物をみると新旧関係が逆の可能性が窺える。ただし、４号竪穴状遺構の南北側には149号竪穴建物、150号竪穴建物と10世紀代の竪穴建物が存在しており、これらの竪穴建物からの混入の可能性も想定されることから、ここでは調査時の見解を示しておく。

形状　東西にやや細長い台形状を呈すると想定される。

規模　長軸方向の東西北方向は3.12m、南北方向は約2.0mを測る。確認面から床面までの壁高は３～16㎝を測る。

底面面積　推定で7.89㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－57°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では南北方向からは周囲から流れ込んだ様子が確認できるが、東西方向の土層断面では中央で山状に盛り上がった堆積が確認できることから、埋没状態の判断は保留としておく。

底面　ほぼ平坦である。

内部の施設　検出されなかった。

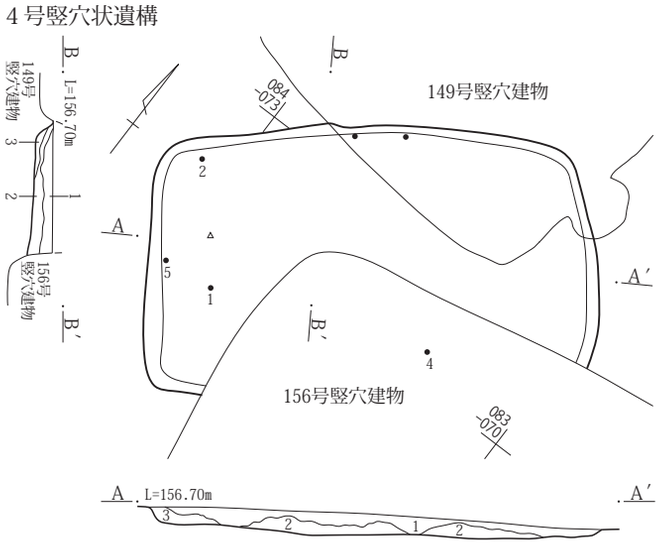
出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。出土量は図示５点、未掲載214点と少量である。このうち、２の須恵器椀が底面から出土である。この須恵器椀は酸化焔焼成よるものであることから１の須恵器椀も同様な時期と判断できる。なお、５の土製品については残存部位が小片のため明確なことは解らないが、三脚を有する鉢や鍋の脚部の可能性が想定できる。

所見　本遺構の時期は、底面から出土した須恵器椀や同様な時期と判断できる須恵器椀から10世紀第３四半期に比定できる。

５号竪穴状遺構

位置　１区調査区北東部、Ｘ＝37105～37107、Ｙ＝−85060～−85063に位置する。

４号竪穴状遺構



４号竪穴状遺構
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土を霜降状に焼土粒、炭化物粒を少量含み、しまり強い。
2　炭化物 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の混土、焼土と炭化物粒をわずかに含み、ややしまり強い弱粘性土。
3　黒褐 10YR2/2　焼土粒、炭化物粒、泥流土粒を若干含む、細粒弱粘性土。

0　1：60　2m

第277図　４号竪穴状遺構遺構図

重複関係　179号竪穴建物、180号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は179号竪穴建物との関係は不明であるが、180号竪穴建物よりは新しい。

形状　東辺が西辺より30～40㎝ほど長い台形状を呈する。

規模　長軸方向が2.10m、短軸方向が1.84mを測り、深さは確認面より12㎝を測る。

底面面積　2.66㎡を測る。

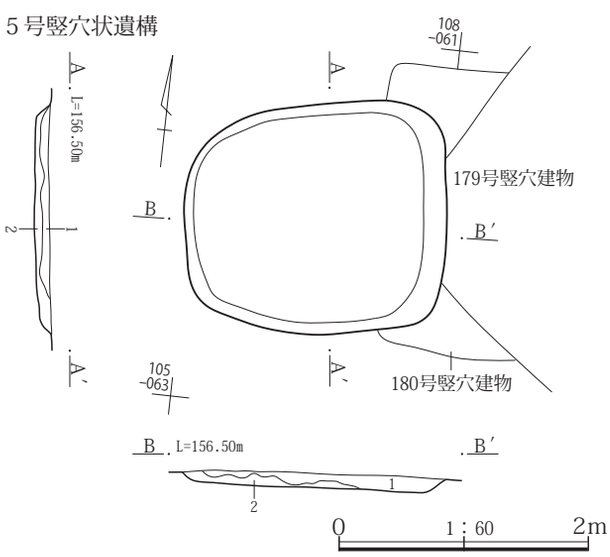
主軸方位　Ｎ－79°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では南西方向から流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦面であるが、南西から北西にかけて緩い傾斜がみられる。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕などが出土している。出土量は図示２点、未掲載67点とわずかである。図示した１の須恵器杯蓋、２の須恵器盤とも埋没土からの出土である。これらの須恵器杯蓋と盤は概ね８世紀後半の年代観が与えられる。

所見　本遺構の時期は、出土した須恵器杯蓋や盤から判断すると前記のように８世紀後半に比定できるが、重複関係にある179号竪穴建物との関係で齟齬が生じることになる。しかし、出土した土器の大部分はこの年代観が妥当であることから、８世紀後半に比定したい。



５号竪穴状遺構
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を霜降状に炭化物、焼土を若干含み、しまりやや強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　灰褐色の泥流土が主体、黄色味の強い泥流土小ブロックや、黒褐色ブロックを少量含む、弱粘性土。

第278図　５号竪穴状遺構遺構図

６号竪穴状遺構

位置　１区調査区中央部、Ｘ＝37086～37083、Ｙ＝-85059～-85062に位置する。

重複関係　154号竪穴建物、158号竪穴建物、169号竪穴建物、173号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は重複関係にある竪穴建物より本遺構のほうが古いとみられるが明確ではない。出土遺物からは本竪穴状遺構の方が新しい様相がみられる。

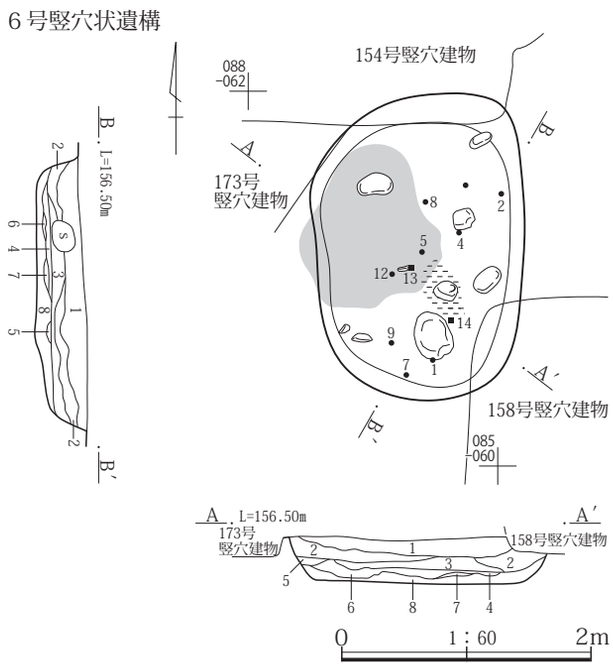
形状　南北に長い楕円形を呈する。

規模　南北方向が2.46m、東西方向が1.70mを測る。確認面から底面までの深さは18～39㎝を測る。

底面面積　2.63㎡を測る。

主軸方位　Ｎ－２°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では中位に位置する３層が平



６号竪穴状遺構
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒、As-Cを霜降状にやや多く炭化物粒、焼土粒を不均等に若干含み、ややしまり強い。
2　黒褐 10YR3/2　炭化物粒や黒色灰を多く含む、細粒粘性土。
3　灰赤 2.5Y4/2～灰褐 7.5YR4/2　炭化物とあまり赤色味のつよくない焼土を多量に含む、粘性土。
4　暗褐 10YR3/4　炭化物を多くAs-C、泥流土粒、焼土粒を若干含み、ややしまり弱い細粒土。
5　黒 10YR2/1～暗褐 7.5YR3/3　炭化物・黒色灰が主体、６がブロック状に含み、、ややしまり弱い。
6　灰褐 5YR4/2　やや不明瞭な焼土が主体、泥流土と灰の薄層を含み、ややしまり弱い弱粘性土。
7　灰褐 5YR4/2　６に近似、泥流土ブロックを多く含む。
8　暗褐 10YR3/4　不明瞭な泥流土ブロックを下位ほど多く含み、ややしまり強い細粒土。

第279図　６号竪穴状遺構遺構図

面中程で盛り上がるような堆積を示しており自然埋没と判断するには不自然であることから人為的に埋め戻しが行われたと判断される。

底面　周囲はわずかに傾斜するが、全体的にはほぼ平坦である。

内部の施設　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・高杯・甕、黒色土器椀、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器耳皿・椀、鉄製品釘、炭化材などが出土している。出土量は図示12点、未掲載664点と多い。このうち、８の灰釉陶器椀が底面から、４の須恵器無台椀、５の須恵器椀、７の灰釉陶器耳皿などが底面より10㎝以内からの出土である。しかし、多くの遺物は底面よりやや上位からの出土であることから、本竪穴状遺構が埋没過程の中で投棄された可能性が窺える。

所見　本遺構の存続時期は、出土した土器の多くが投棄されたものとみられるため判然としない。しかし、底面から出土した灰釉陶器椀や底面近くから出土した須恵器や灰釉陶器は10世紀前半代の年代観が与えられることから、本竪穴状遺構も同様な時期に比定できる。

７号竪穴状遺構

位置　３区南部、Ｘ＝36892～36895、Ｙ＝-84985～-84983に位置する。

重複関係　32号復旧坑と重複関係にある。新旧関係は本遺構のほうが古い。

形状　ほぼ方形を呈する。

規模　南北方向が2.87m、東西方向が2.75mを測る。確認面から底面までの深さはもっとも深いところで66㎝を測る。

底面面積　5.99㎡を測る。

主軸方位　長軸方向の南北方向を主軸方向とするとＮ－５°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では、ロームブロックの混在した黒褐色土とほとんど含まない黒褐色土が大きなブロック状に堆積した状態で確認できることから、人為的に埋め戻しが行われたと判断される。

底面　全体的に激しい起伏がみられる。

内部の施設　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器などが出土している。

所見　壁面は北壁がやや傾斜をもって立ち上がるが、その他は垂直に近い状態である。こうしたことや形状・規模が竪穴建物に近いことから竪穴建物の掘削途中で放棄した可能性も想定される。

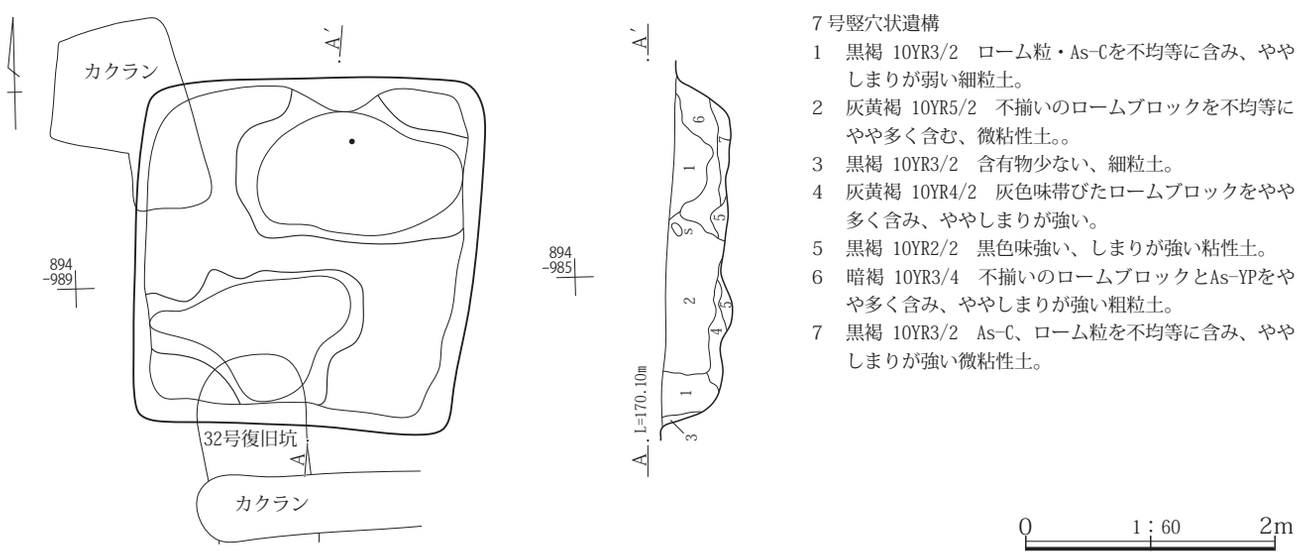
９号竪穴状遺構

位置　４区調査区中央部西寄り、Ｘ＝36853～36855、Ｙ＝-84970～-85973に位置する。重複関係にある137号土坑によって北東角と北東部に一部を欠く。

重複関係　137号土坑と重複関係にある。新旧関係は137号土坑より本遺構のほうが古い。

形状　南西角はほぼ直角であるが、南東角と北西角は丸味を帯びている四角形を呈する。

７号竪穴状遺構



７号竪穴状遺構
1　黒褐 10YR3/2　ローム粒・As-Cを不均等に含み、ややしまりが弱い細粒土。
2　灰黄褐 10YR5/2　不揃いのロームブロックを不均等にやや多く含む、微粘性土。。
3　黒褐 10YR3/2　含有物少ない、細粒土。
4　灰黄褐 10YR4/2　灰色味帯びたロームブロックをやや多く含み、ややしまりが強い。
5　黒褐 10YR2/2　黒色味強い、しまりが強い粘性土。
6　暗褐 10YR3/4　不揃いのロームブロックとAs-YPをやや多く含み、ややしまりが強い粗粒土。
7　黒褐 10YR3/2　As-C、ローム粒を不均等に含み、ややしまりが強い微粘性土。

第280図　７号竪穴状遺構遺構図

規模　南北方向が2.29m、東西方向が1.83mを測る。確認面から底面までの深さは28～34㎝を測る。

底面面積　4.92㎡を測る。

主軸方位　長軸方向の東西方向はＮ－87°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では壁際の三角堆積と中程のレンズ状の堆積が確認されていることから自然埋没と判断される。

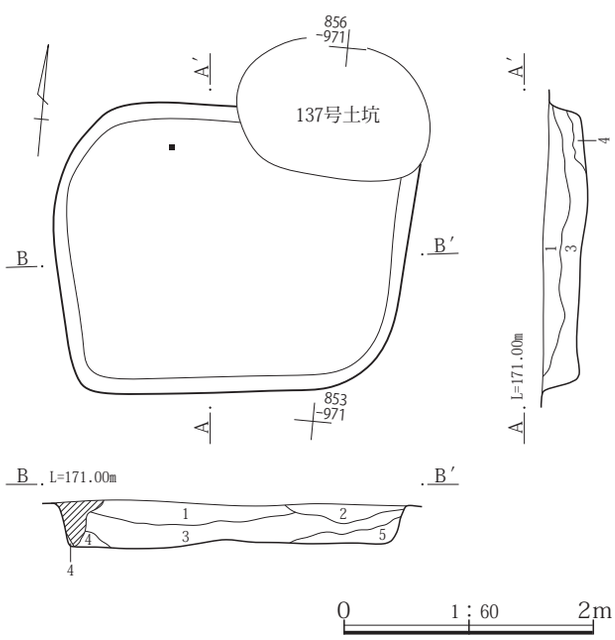
底面　ほぼ平坦である。

内部の施設　検出されなかった。

出土遺物　遺物は土師器杯、須恵器杯・椀・甕などが出土しているが、出土量は24点とわずかで、そのほとんどが小片であった。図示できたのは１の須恵器有台杯の１点だけであった。

所見　本竪穴状遺構の時期は、出土遺物が微量のため明確ではないが、図示した１の須恵器有台杯から８世紀前半代に比定できる。

９号竪穴状遺構



９号竪穴状遺構
1　暗褐 10YR3/4　ローム土をやや多く含むため、黄色味を帯びる、ややしまりがある細粒微粘性土。
2　暗褐 10YR3/4　１と同様、ロームブロックを多く含む。
3　黒褐 10YR3/2　基質土はAs-YPを含む黒褐色土、ローム小ブロックを不均等に含み、ややしまりがある。
4　黒褐 10YR3/2　基質土はAs-YPを含む黒褐色土、ローム小ブロックを含み、しまりがある。
5　黒褐 10YR3/2　基質土はAs-YPを含む黒褐色土、ローム粒を含み、しまりがある。

第281図　９号竪穴状遺構遺構図

第４項　溝

２号溝

位置　１区調査区の西寄り、Ｘ＝37072～37092、Ｙ＝-85072～-85089に位置する。北側は調査対照区外に延びるため全貌は不明である。

重複関係　49号竪穴建物、70号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は竪穴建物より本溝のほうが新しい。

形状　わずかに蛇行するように南東から北西に向けて走向する。断面形状は基本的に逆台形状を呈する。土層断面観察用の畦を設定した箇所では埋没後に掘り込まれて痕跡が確認できたが、この掘削部分の様相は判明できなかった。

規模　調査区内では全長37.4mを測る。確認面での上幅0.58～2.96m、底面幅0.26～2.20mを測る。確認面から底面までの深さは10～43㎝を測る。

底面傾斜　地形と同様に南から北へ傾くが、調査区北端より5.5mほど南に最深部が存在する。南端は標高156.46m、北端156.63mで、比高差0.17mを測る。

主軸方位　Ｎ－45～60°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では東側からはレンズ状の堆積、西側からは不自然な堆積が確認できることから人為的な埋め戻しが行われた可能性が窺える。

底面　大部分は緩やかな弧状を呈しているが、北側では底面に２条の溝状の痕跡がみられる。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

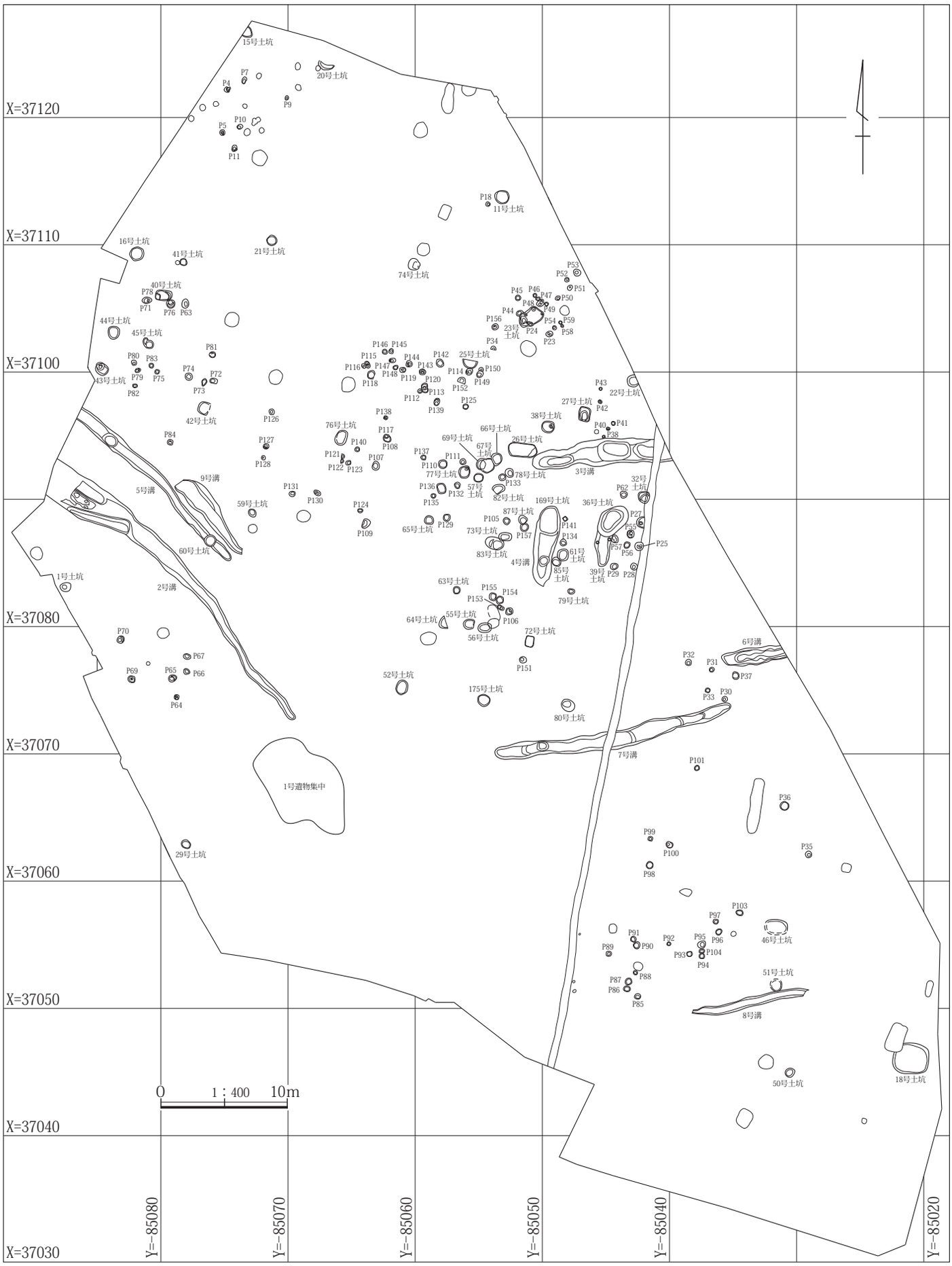
その他施設　南端で焼土が検出されている。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・盤・高盤・壺・甕・羽釜、灰釉陶器皿・椀などが出土している。出土量は1,803点と多いが、図示できた遺物は９点と少ない。そのうち、１・２の須恵器盤・高盤は混入とみられる。

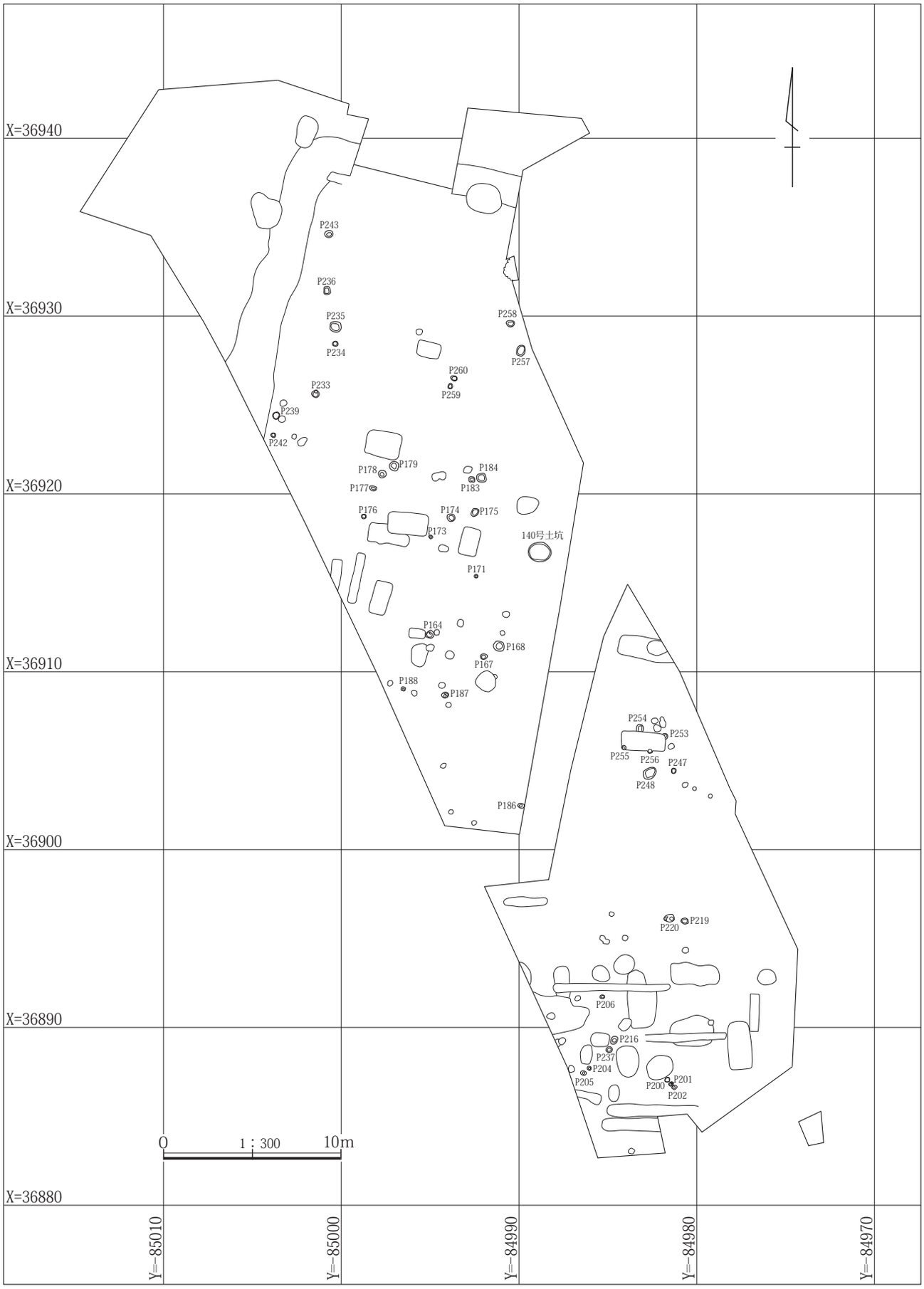
所見　本溝の期間は、出土遺物から８世紀代から10世紀代に比定できるが、８世紀代の須恵器は混入とみられ、出土した灰釉陶器の窯式期が大原２号窯式期から虎渓山１号窯式期であることや９の羽釜の年代観から10世紀代に比定できる。

３号溝

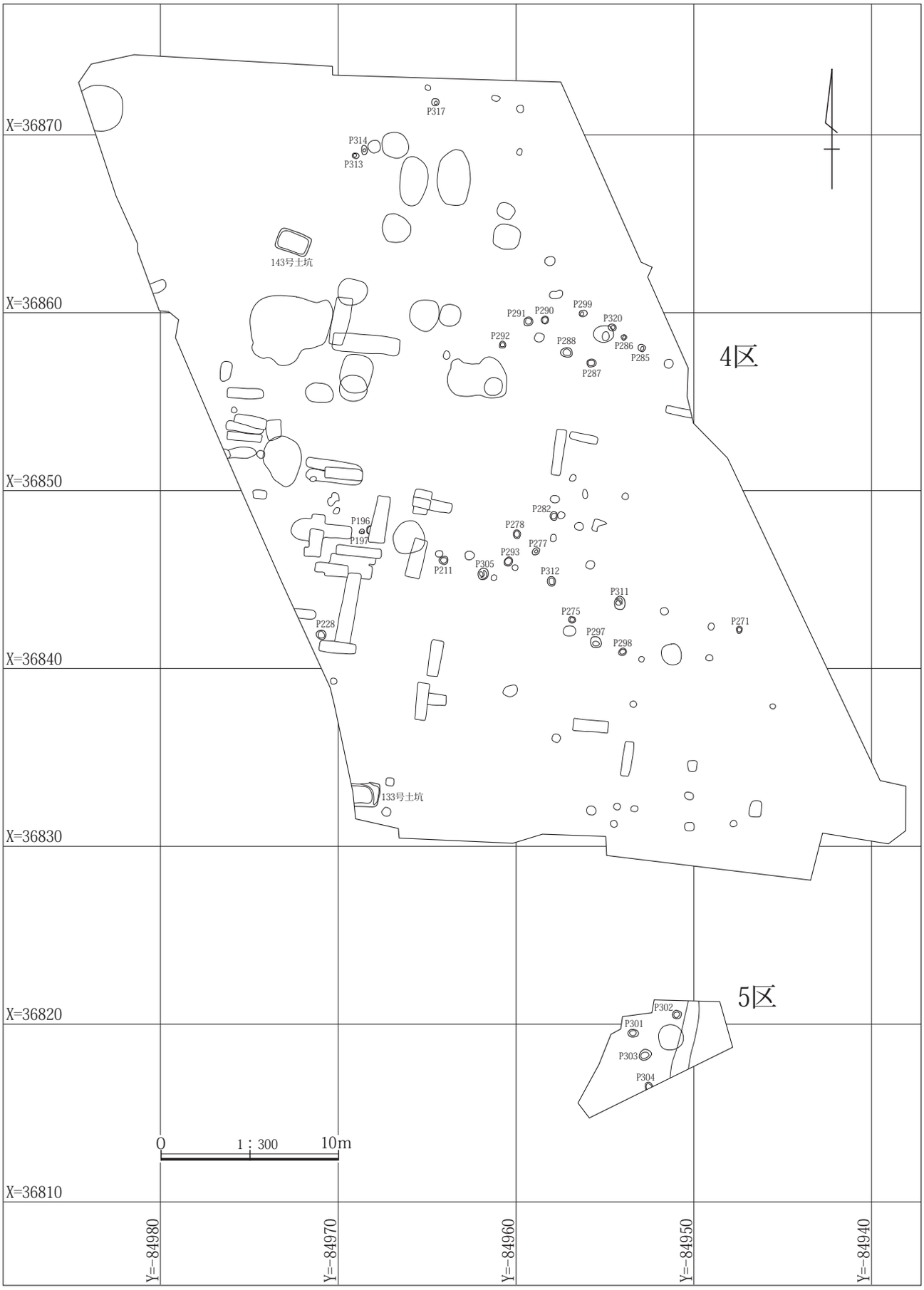
位置　１区調査区中程の東端、Ｘ＝37095～37094、Ｙ＝-85040～-85050に位置する。東側は調査対照区外に延び



第282図　１区　溝・土坑・ピット・遺物集中配置図

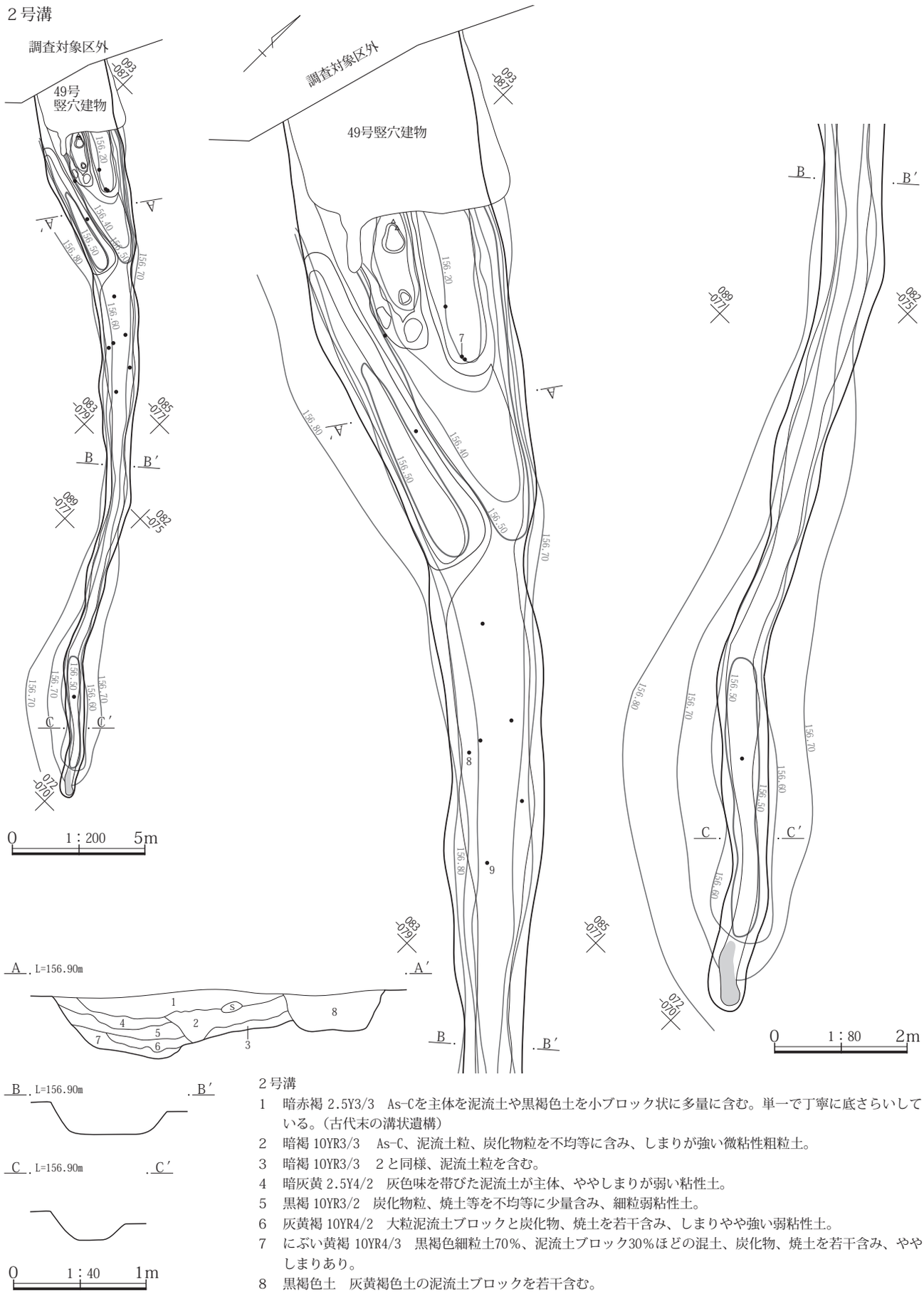


第283図　３区　溝・土坑・ピット配置図



第284図　４・５区　土坑・ピット配置図

２号溝



２号溝

1　暗赤褐 2.5Y3/3　As-Cを主体を泥流土や黒褐色土を小ブロック状に多量に含む。単一で丁寧に底さらいしている。（古代末の溝状遺構）

2　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒、炭化物粒を不均等に含み、しまりが強い微粘性粗粒土。

3　暗褐 10YR3/3　２と同様、泥流土粒を含む。

4　暗灰黄 2.5Y4/2　灰色味を帯びた泥流土が主体、ややしまりが弱い粘性土。

5　黒褐 10YR3/2　炭化物粒、焼土等を不均等に少量含み、細粒弱粘性土。

6　灰黄褐 10YR4/2　大粒泥流土ブロックと炭化物、焼土を若干含み、しまりやや強い弱粘性土。

7　にぶい黄褐 10YR4/3　黒褐色細粒土70％、泥流土ブロック30％ほどの混土、炭化物、焼土を若干含み、ややしまりあり。

8　黒褐色土　灰黄褐色土の泥流土ブロックを若干含む。

第285図　２号溝遺構図

るため全貌は不明である。

重複関係　東側より１号溝、90号竪穴建物、62号竪穴建物、162号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は１号溝より本溝のほうが古いが、他の重複関係にある遺構より新しい。

形状　ほぼ直線的に東西方向に走向する。断面形状は底面が弧状を呈する箱形状を呈する。

規模　調査区内では全長11.1mを測る。確認面での上幅1.78～1.32m、底面幅1.54～0.82mを測る。確認面から底面までの深さは24～58㎝を測る。

底面傾斜　底面に凹凸がみられることから明確ではないが西から東へ傾く。標高は西端が156.69m、東端155.65mで、比高差0.04mを測る。

主軸方位　Ｎ－80～90°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　全長2.5mほどの土坑状の凹凸が確認されている。底面は砂粒などの堆積は確認されていない

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器、炉底滓などが出土している。他に、中程から径50㎝前後の亜角礫が投棄されたとみられる状態が確認できた。出土した土器は多量で、土器だけでも2,911点を数え、出土状態は溝全体に及んでいる。そのなかでも酸化焔焼成による須恵器杯・椀の割合は出土土器の71％、食膳具では80％と高い比率を示し、出土位置も底面付近から確認面まで幅広い位置である。こうしたことから10世紀後半代に周囲で行われた饗宴または祭祀で使用された食膳具を本溝に廃棄したと想定される。

また、出土した酸化焔による須恵器椀にはロクロ回転が左回りによる成形がなされたものがみられた。

所見　本溝の時期は、埋没土の状態や出土した土器から10世紀代に掘削が行われ、11世紀前半代に埋没したと想定される。出土土器の中には９世紀代のものも含まれているが、周囲に同時期の竪穴建物が存在することから掘削時に混入したとみられる。

５号溝

位置　１区調査区の西寄り、Ｘ＝37085～37096、Ｙ＝-85074～-85086に位置する。北側は調査対象区外に延びるため全貌は不明である。

重複関係　46号竪穴建物、83号竪穴建物、60号土坑と重複関係にある。新旧関係は60号土坑より本溝のほうが古いが、46号竪穴建物、83号竪穴建物より新しい。

形状　わずかに蛇行するように南東から北西向けて走向する。断面形状は基本的に逆台形状を呈するが、南寄り部分では半円状を呈している。

規模　調査区内では全長15.6mを測る。確認面での上幅0.68～1.05m、底面幅0.45～0.82mを測る。確認面から底面までの深さは７～21㎝を測る。

底面傾斜　地形と同様に南から北へ傾く。標高は南端が156.59m、北端156.32mで、比高差0.27mを測る。

主軸方位　Ｎ－40～50°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではＡ－Ａ′では短期間に暗褐色土によって埋没した様子が確認できるが、Ｂ－Ｂ′では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できるなど地点によってやや異なった埋没状態であった。

底面　大部分は緩やかな弧状を呈しているが、南端から13mの位置に楕円形で径1.20×0.86m、周囲の底面から10㎝の土坑状の落ち込みが検出されている。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

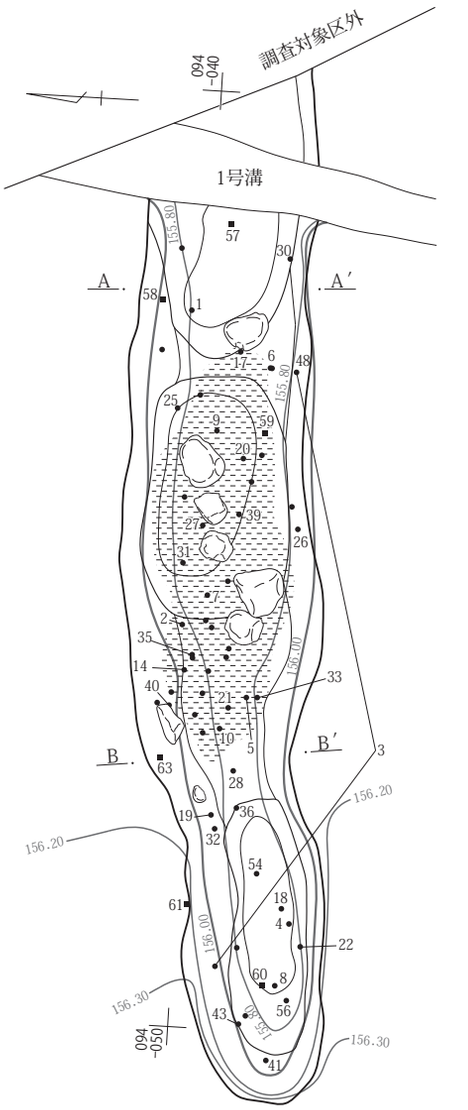
出土遺物　遺物は埋没土内からも多く出土しているが、その中でも土坑状の落ち込みから特に多く出土している。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・高杯・甑・羽釜・甕、灰釉陶器皿・椀、土製品羽口、鉄製品刀子などが出土している。このうち、２・４の須恵器無台椀、６～８の有台椀が底面からの出土である。出土した須恵器椀には酸化焔焼成によるものがほとんどである。なお、灰釉陶器は高台や口縁部の形態、施釉方法から大原２号窯式に比定できる。

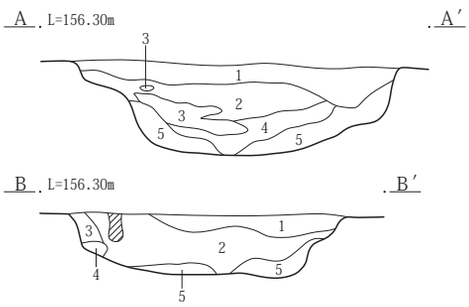
所見　本溝の時期は、出土遺物の年代に開きがあるが、底面から出土した須恵器から10世紀後半代に比定できる。走向は２号溝とほぼ同様であることから２号溝との関係性が問われる。なお、標高の低い方に行くに従い幅が広くなることから降雨などの流れによる影響で幅が広がった可能性が窺え、一定期間埋没しないでそのままの状態であった可能性が高い。

６号溝

位置　１区調査区東端、Ｘ＝37077、Ｙ＝-85030～-85035

３号溝





３号溝

1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の白色粒を２％、φ１～３㎜の褐色粒を２％、炭化物片を１％、φ１～３㎜の赤褐色粒を１％含み、固くしまりあり。

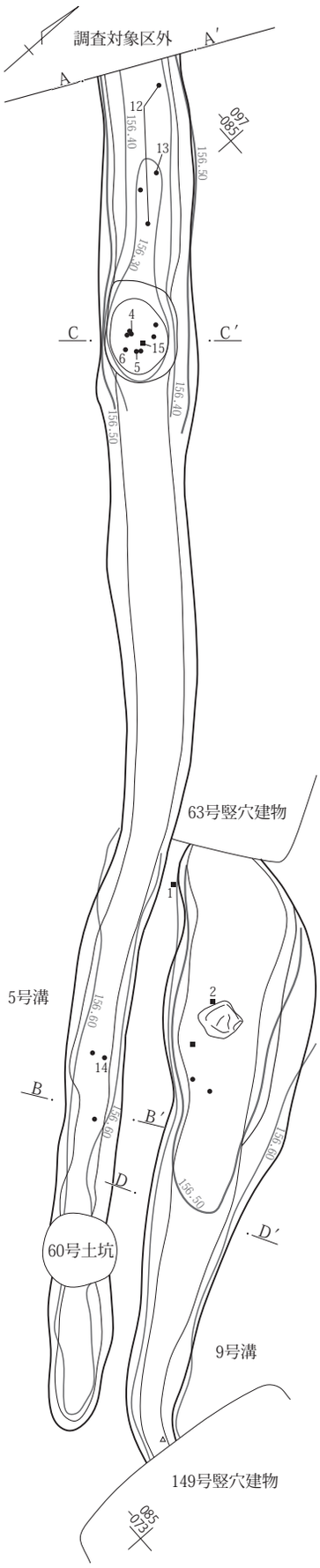
2　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の赤褐色粒を１％、φ２～15㎜の炭化物片を２％含み、しまりあり。

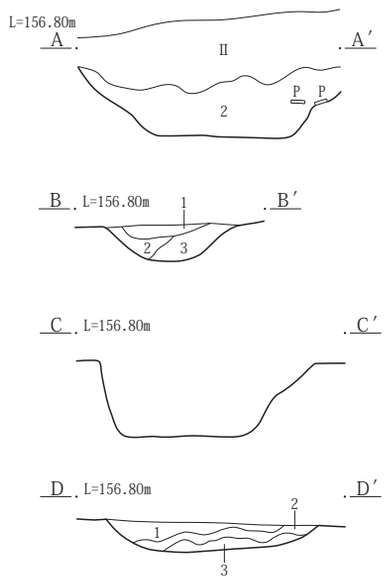
3　黒褐 10YR3/1　炭化物を多量に含み、ややわらかくやや粘性あり。

4　黒褐 10YR3/2　φ２～10㎜の炭化物片を１％、黄褐色土をブロック状に２％含み、ややわらかくやや粘性あり。

5　暗褐 10YR3/4　φ５～30㎜の黄褐色土ブロックを20％含み、粘性あり。

５・９号溝





５号溝

1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりあり。

2　暗褐 10YR3/3　褐色土を２％含む。

3　黒褐 10YR2/3　褐色土を５％含む。

９号溝

1　暗褐 10YR3/3　As-C、泥流土粒を不均等に含み、しまり強い細粒の微粘性土。

2　黒褐 10YR3/2　しまり強い細粒微粘性土。混入物はほとんどみられない。

3　灰黄褐 10YR4/2　２と灰色味を帯びた泥流土の小ブロック状混合土、しまり強い。

0　1：40　1m

0　1：80　2m

第286図　３・５・９号溝遺構図

に位置する。東側は調査対象区外に存在するため全貌は不明である。

重複関係　85号竪穴建物、86号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は85号竪穴建物、86号竪穴建物より本溝のほうが新しい。

形状　ほぼ直線的に東西方向に走向する。断面形状は箱形状に近い形状を呈する。

規模　調査区内では全長4.8mを測る。確認面での上幅1.00～1.30m、底面幅0.25m前後を測る。確認面から底面までの深さは20～24㎝を測る。

底面傾斜　西端から東側に向けて緩やかに傾く。標高は西端が155.96m、東端155.87mで、比高差0.09mを測る。

主軸方位　Ｎ－80°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では南側から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　多少の凹凸がみられる。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、鉄製品棒状製品などが出土しているが、出土量は未掲載109点と少量であった。

所見　出土遺物は幅広い年代の古代の遺物がみられたが、小片のため時期の確定には至らなかった。なお、埋没土にはAs-Bが含まれていないことから古代に比定した。

７号溝

位置　１区調査区中程の南東寄り、Ｘ＝37069～37073、Ｙ＝-85035～-85053に位置する。

重複関係　１号溝、121号竪穴建物、144号竪穴建物、151号竪穴建物、182号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は１号溝より本溝の方が古いが、他の重複関係にある遺構より新しい。

形状　若干の蛇行がみられるがほぼ直線的に東西方向に走向する。断面形状は逆台形状を呈する。

規模　全長19.0mを測る。確認面での上幅0.92～1.42m、底面幅0.50～1.04mを測る。確認面から底面までの深さは17～47㎝を測る。

底面傾斜　底面は両端から段々に中程に向かって深くなる。標高は西端が156.12m、東端156.12m、中程が155.85mで、比高差0.37mを測る。

主軸方位　Ｎ－80～90°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　西端から3.5mの位置に径0.7×0.9m深さ15㎝のピット状の落ち込みが検出されている。その他は段を有するがほぼ平坦面を造る。底面は砂粒などの堆積は確認されていない

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物には土師器杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕・羽釜、灰釉陶器椀などが出土している。これらの遺物をみると重複関係にある竪穴建物から混入したとみられる土器が多く存在する。特に182号竪穴建物から出土した土器と同様の形態を呈しているものが多くみられた。その中で13の須恵器椀は酸化焔焼成によるもので出土している土器の中でも最も新しい年代観を示している。

所見　本溝の存続期間は、重複関係にある竪穴建物から混入した遺物が多く、明確ではないが重複関係にある竪穴建物の存続期間などから10世紀代に比定したい。

８号溝

位置　１区調査区南東部、Ｘ＝37049～37051、Ｙ＝-85029～-85038に位置する。両端は重複関係にある竪穴建物によって欠く。

重複関係　113号竪穴建物、136号竪穴建物、51号土坑と重複関係にある。新旧関係は51号土坑とは接するような位置関係のため不明であるが、113号竪穴建物、136号竪穴建物より本溝のほうが古い。

形状　緩やかな蛇行がみられ、東西方向に走向する。断面形状は箱形状を呈する。

規模　調査区内では全長9.0mを測る。確認面での上幅0.76～0.30m、底面幅0.46～0.15mを測る。確認面から底面までの深さは11～28㎝を測る。

底面傾斜　両端から中程へ向けて緩やかに傾く。標高は西端が156.69m、東端155.65mで、比高差0.04mを測る。

主軸方位　Ｎ－85～90°－Ｅを指す。

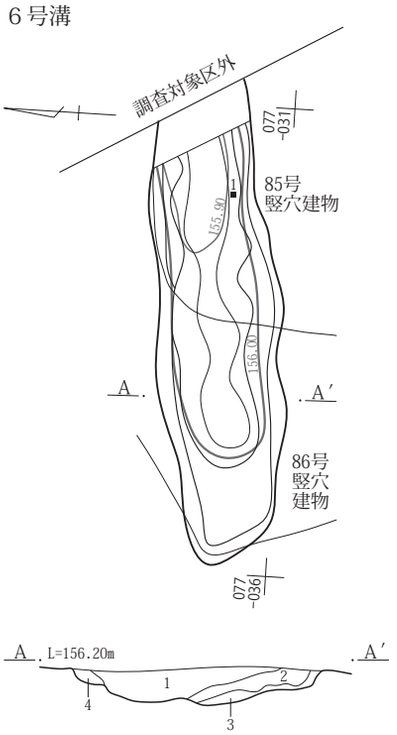
埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦である。底面は砂粒などの堆積は確認されていない

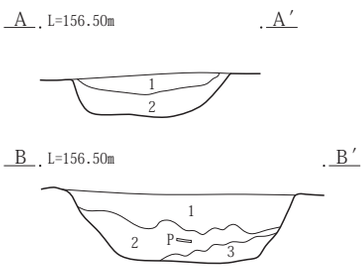
その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀、甕など

６号溝

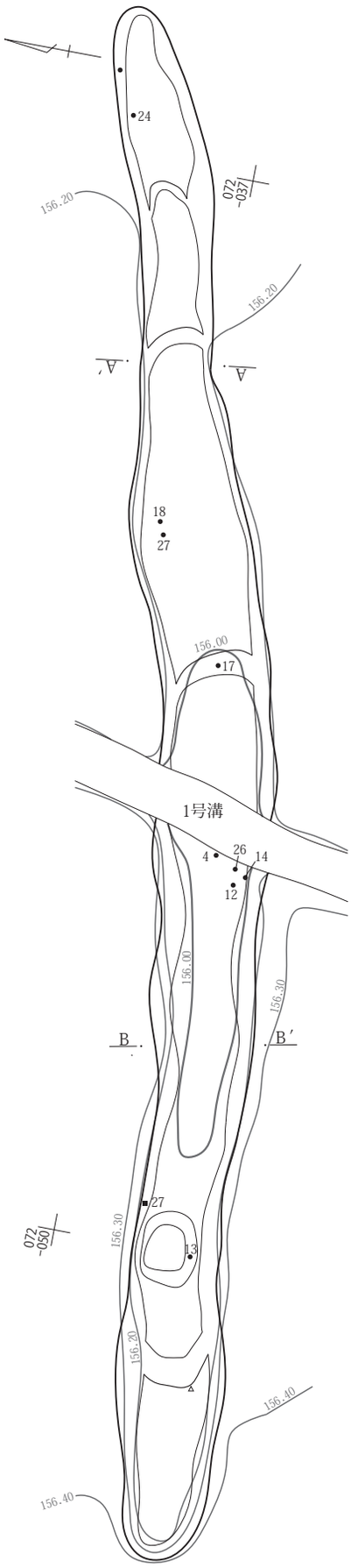


６号溝
1　暗褐色土　黄褐色土ブロックを若干含む。
2　暗褐色土　１に近似、黄褐色土ブロックは１より少ない。
3　暗褐色土　黄褐色土ブロックを多量に含む。
4　暗褐色土ブロックと黄褐色土ブロックの混合土。

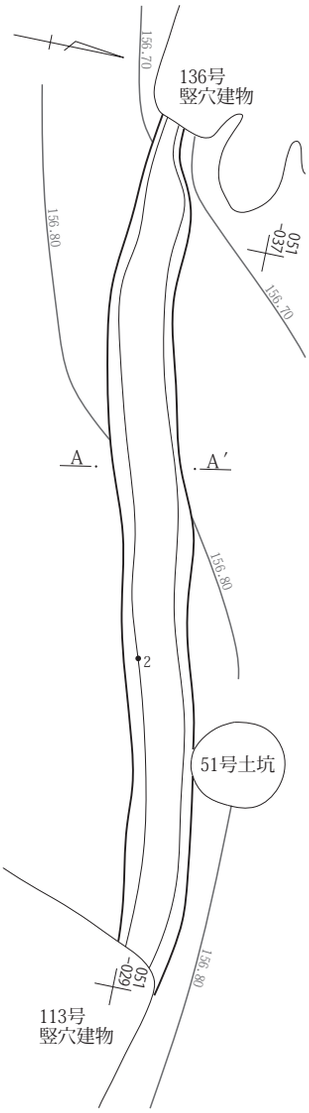


７号溝
A～A′
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％、φ１㎜の白色粒を１％、φ１～３㎜の赤褐色粒を１％含み、固くしまりあり。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％含み、しまりあり。水流の痕跡はみられない。
B～B′
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を不均等に焼土粒、炭化物粒の混入やや多く含み、ややしまり強い。
2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な泥流土ブロックの混入多く、黒色粒、焼土をブロック状に含む、細粒微粘性土。
3　にぶい赤褐 2.5Y4/3　焼土大ブロックを基質とし、黒褐色土を不均等に含み、しまり強い粘性土。掘削残土を踏み固めた様な土。

７号溝



８号溝



８号溝
1　黒褐 10YR3/2　As-Cが多く混入、不揃いの炭化物粒をやや多く含み、しまり強い。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土の混入やや多い、ややしまりが強い微粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　地山泥流土の流れ込みか、微粘性土。
4　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒を少量含み、しまりが強い弱粘性土。水性堆積の痕跡はみられない。

0　1：40　1m
0　1：80　2m

第287図　６～８号溝遺構図

が出土している。出土量は35点とわずかで、図示可能な土器は須恵器杯・椀の各１点ずつであった。１の須恵器杯は埋没土内からの出土、底部が回転ヘラ削りであることから８世紀中頃、２の須恵器椀は底面より15㎝上からの出土、底部が回転糸切り無調整であることから９世紀前半代の年代観が与えられる。

所見　本溝の期間は重複関係にある竪穴建物から８世紀前半代に比定できるが、底面近くより出土した２の須恵器椀は９世紀前半代のものであることから齟齬が生じる結果となっている。なお、113号竪穴建物、136号竪穴建物近くでは溝の幅が狭くなることから、両竪穴建物の壁際で終息する可能性も想定できる。こうしたことから、本溝の存続期間は底面から出土した須恵器椀の年代観から９世紀前半代に比定したい。

９号溝

位置　１区調査区の西寄り、Ｘ＝37085～37096、Ｙ＝−85073～−85078に位置する。その走向は５号溝の南半にに併行する位置でもある。

重複関係　63号竪穴建物、149号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は調査時の所見では63号竪穴建物、149号竪穴建物より本溝のほうが古いが、出土遺物からみると63号竪穴建物よりは新しい。

形状　わずかに蛇行するように南東から北東に向けて走向する。断面形状は基本的に逆台形状を呈する。

規模　残存範囲では全長が7.4mを測る。確認面での上幅1.82～0.52m、底面幅0.96～0.24mを測る。確認面から底面までの深さは11～23㎝を測る。

底面傾斜　地形と同様に南から北へ傾く。標高は南端が156.55m、北端156.42mで、比高差0.13mを測る。

主軸方位　Ｎ－45°－Ｗを指す。

埋没状態　土層断面の観察では東側から土砂が流れ込んだ様子が確認できた。

底面　大部分は緩やかな弧状を呈している。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・甕・羽釜、鉄製品刀子・金具、流動滓などが出土している。土器の出土量は301点と少なくなかったが、小片のため図示できる遺物は存在していなかった。なお、鉄製品刀子と金具とみられる製品は底面からの出土である。

所見　本以降の時期は、出土土器に須恵器羽釜が一定量みられることから10世紀代に比定できる。走向は２号溝・５号溝とほぼ同様であることから２号溝・５号溝との関係性が問われる。標高の低い方に行くに従い幅が広くなることから降雨などの流れによって生じた溝の可能性もみられる。

第５項　土坑

土坑は、１区調査区から５区調査区で173基を調査している。そのうち56基を古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代に比定した。比定の根拠は、出土遺物と埋没土からである。出土遺物は、陶器が混在して出土した土坑については出土状況や埋没土とも検討して比定しているが、おおむね中世以降に比定されている。出土遺物、特に土器が出土していない土坑については、埋没土中にAs-BやAs-Aが混入してないものを古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代に比定した。

土坑の位置、形状、規模、重複遺構については第４表に記載した。これらの土坑のうち、特徴的な埋没状態や出土遺物がみられる土坑について下記に記載した。

18号土坑

埋没状態　確認面から底面までが浅いため不明確であるが、黒褐色土によって埋没している。ブロックなどの混入物がみられないことから自然埋没と判断される。

出土遺物　西側半分から土師器杯・須恵器杯蓋・杯・甕の小片が散乱した状態で出土している。このうち、須恵器杯蓋・杯・甕の４点を図示した。

所見　図示した須恵器杯から９世紀前半に比定できる。

23号土坑

この土坑は不整形と表記したが、歪んだ長方形に近い形状で、南東、北東、北西隅より、南東隅よりに径20～30㎝、底面から深さ５～10㎝の小ピットが伴い、西壁よりは13㎝ほどの落ち込みが存在する。底面はやや凹凸がみられる。これらの落ち込みがどのような性格であるか明確ではない。

埋没状態　確認面から底面までが浅いため明確ではない。

出土遺物　東側からややまとまって須恵器や土師器の破片が出土している。出土位置は大部分が底面よりやや上位である。

所見　図示した土師器甕や須恵器杯・椀から９世紀第３四半期に比定できる。土器は出土状況から投棄された可能性が高い。

26号土坑

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できるが、礫や遺物の出土状況から自然埋没とは断定できない。

出土遺物　遺物は土師器小型甕、須恵器耳皿・無台椀・有台椀、灰釉陶器椀・小瓶、鉄製馬具轡・釘などが出土している。底面から確認面での間は10～20㎝と浅いが、その間に多くの径10～30㎝大の礫や須恵器や灰釉陶器が出土している。礫は中央部から西側に多く、東側はやや少ない。土器は須恵器椀が主体であるが、土師器小型甕や灰釉陶器椀・小瓶など多器種に及んでいる。また、土器の他に東壁寄りから馬具轡が出土している。出土した遺物の位置は底面、底面付近からは１の須恵器耳皿、２の須恵器無台椀、８・11・13・14の須恵器有台椀、15の灰釉陶器小瓶、16の土師器小型甕が出土している。

所見　本土坑の時期は出土した出土遺物の年代観が９世紀第４四半期であることから、同様な時期が比定できる。なお、本土坑の性格については、多くの礫とともに土器や鉄製品が出土しており、その出土状態もほぼ全面であることから墓坑のような埋葬施設は想定できない。また、馬具轡など希少品が含まれていることから祭祀などに使用された可能性も窺える。

35号土坑

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから、自然埋没と判断される。

出土遺物　小片ではあるが、緑釉陶器皿が出土している。

所見　出土した緑釉陶器は東海地方産９世紀後半代に比定できる。

36号土坑

土坑確認面の中央付近で微細な炭化物のまとまりと焼土が確認されている。この炭化物、焼土が本土坑に伴うものかは不明である。なお、39号土坑を含めると形状が西側で検出された169号土坑と類似するが、36号土坑と39号土坑は発掘調査時の遺構検出で差異が認められており、埋没土でも異なるため、別遺構としている。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから、自然埋没と判断される。

出土遺物　底面から上面までの間で土師器甕や須恵器杯・椀の破片が散乱した状態で出土している。図示可能なものは存在していなかった。

所見　図示できる遺物は存在していないが、出土した須恵器杯・椀は還元焔焼成によるもので底部切り離し技法は回転ヘラ削りと回転糸切りが混在する。この他に胴部上位に明瞭な稜をもつ長頸壺、灰釉陶器椀などが出土している。以上から、周囲に存在する10世紀代の竪穴建物構築に伴う掘削で以前の竪穴建物から出土した土器類を投棄したものと想定される。掘削された年代は10世紀代に比定できる。

39号土坑

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから、自然埋没と判断される。

出土遺物　出土した遺物には土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・椀・甕、灰釉陶器椀がみられたが、図示できるものは存在していなかった。

所見　出土した須恵器杯・椀は還元焔焼成によるものであるが、底部切り離し技法は回転ヘラ削りと回転糸切りが混在している。こうした状況から土坑の掘削時期は９世紀代に比定できる。

41号土坑

埋没状態　暗褐色土単一土で埋没している。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器椀・羽釜・甕などが出土しているが、図示した遺物以外は小片であった。図示した１・２の須恵器椀は完形で底面から出土している。

所見　本土坑の期間は、出土した須恵器椀から９世紀第４四半期に比定できる。

45号土坑

41号竪穴建物と重複関係にあるが、新旧関係は明確ではなかったが、出土遺物から本土坑のほうが新しいと判断された。形状は円形部分の西側に半円形が付随するような形態で、西側部分の底面より10㎝ほど高い段状を呈す。

埋没状態　土層断面の観察では水平に近い堆積が確認できたが、自然埋没か人為的な埋め戻しかは判然としなかった。

出土遺物　遺物には図示した１～７の須恵器杯・椀、８の灰釉陶器輪花皿、９・10の須恵器羽釜と未掲載の土師

器杯・甕、須恵器甕・羽釜など21点が出土している。このうち、４の須恵器椀、９の灰釉陶器輪花皿、10の須恵器羽釜は底面からの出土である。出土した須恵器杯・椀の一部と灰釉陶器輪花皿は伏せた状態で出土していた。

所見　出土した灰釉陶器皿は光ヶ丘１号窯式期に比定できるが、須恵器杯・椀は10世紀末から11世紀初頭に比定できる。なお、５の須恵器杯は還元焔焼成によるもので底部を欠損しているため明確ではないが９世紀後半代に比定できる。土器は完形、破片の状態が混在しており、出土状態も正位と伏せた状態が存在することから埋納にかかわる土坑とは判断できなかった。

74号土坑

東側壁際に15～25㎝大の偏平な礫６個体、西側は北側に亜角礫が割れた状態で１個体配置されてた。

埋没状態　土層断面の観察では西側から多く土砂が流れ込んだ様子が確認され、自然埋没であった可能性が高い。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯・羽釜・甕などが出土している。このうち、２の須恵器椀が東側礫列の南端底面からの出土である。１の須恵器椀は底面より12㎝上からの出土である。

所見　本土坑の期間は、出土した土器に９世紀代の須恵器椀がみられるが、底面及び底面近くから出土した１・２の須恵器椀は10世紀第４四半期に比定できる。

76号土坑

埋没状態　土層断面の観察では東西両側より土砂が入り込んだ様子が確認できたが、東側の確認面近くでは径10㎝ほどの礫が置かれた状態で出土していることから人為的な埋め戻しが行われたと判断される。

出土遺物　前記のように礫は確認面近くで出土している。確認面近くや上位から須恵器杯・椀や土師器甕、灰釉陶器椀・瓶が出土している。そうした中で３や４の須恵器杯・椀は底面から、６の土師器甕は底面上より10㎝からの出土である。なお、灰釉陶器は細片のため図示していない。

所見　本土坑の時期は、底面から出土した須恵器杯・椀から10世紀後半代に比定できる。

133号土坑

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が入り込んだ様子が確認できたが、自然埋没か人為的な埋め戻しかは判然としない。

出土遺物　東側の底面より60㎝上から１の須恵器短頸壺、４の石製紡錘車紡輪が出土している。底面付近からは２と３の土師器甕が出土している。こうした状況から須恵器短頸壺と紡錘車紡輪は混入の可能性が高い。

所見　本土坑の時期は本来なら底面付近から出土した土師器甕から２・３から比定するのが妥当であるが、この土師器甕は出土例がないため比定するのが難しい。そのため１の須恵器短頸壺の年代観を援用するなら８世紀前半代に比定できる。

169号土坑

形態は大型の楕円形状の土坑に短い溝状の落ち込みが付随した形状のため、調査段階では溝の名称が付与されていたが、規模から土坑に変更した。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が入り込んだ様子が確認できることから自然埋没の可能性が高い。

出土遺物　遺物は底面から確認面までの間で多くの土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品円面硯の破片、流動滓が出土している。このうち、底面、または底面付近からは３の須恵器杯、６の無台椀が出土している程度で大部分は中位から上位にかけての出土である。

所見　本土坑の時期は主体を占める土器が10世紀代後半代である。このなかには１の須恵器杯蓋、３の須恵器の須恵器杯、19の須恵器小型短頸壺のような８世紀代に比定できるものが存在する。こうしたことから出土した土器は廃棄のために投棄されたものとみられる。

175号土坑

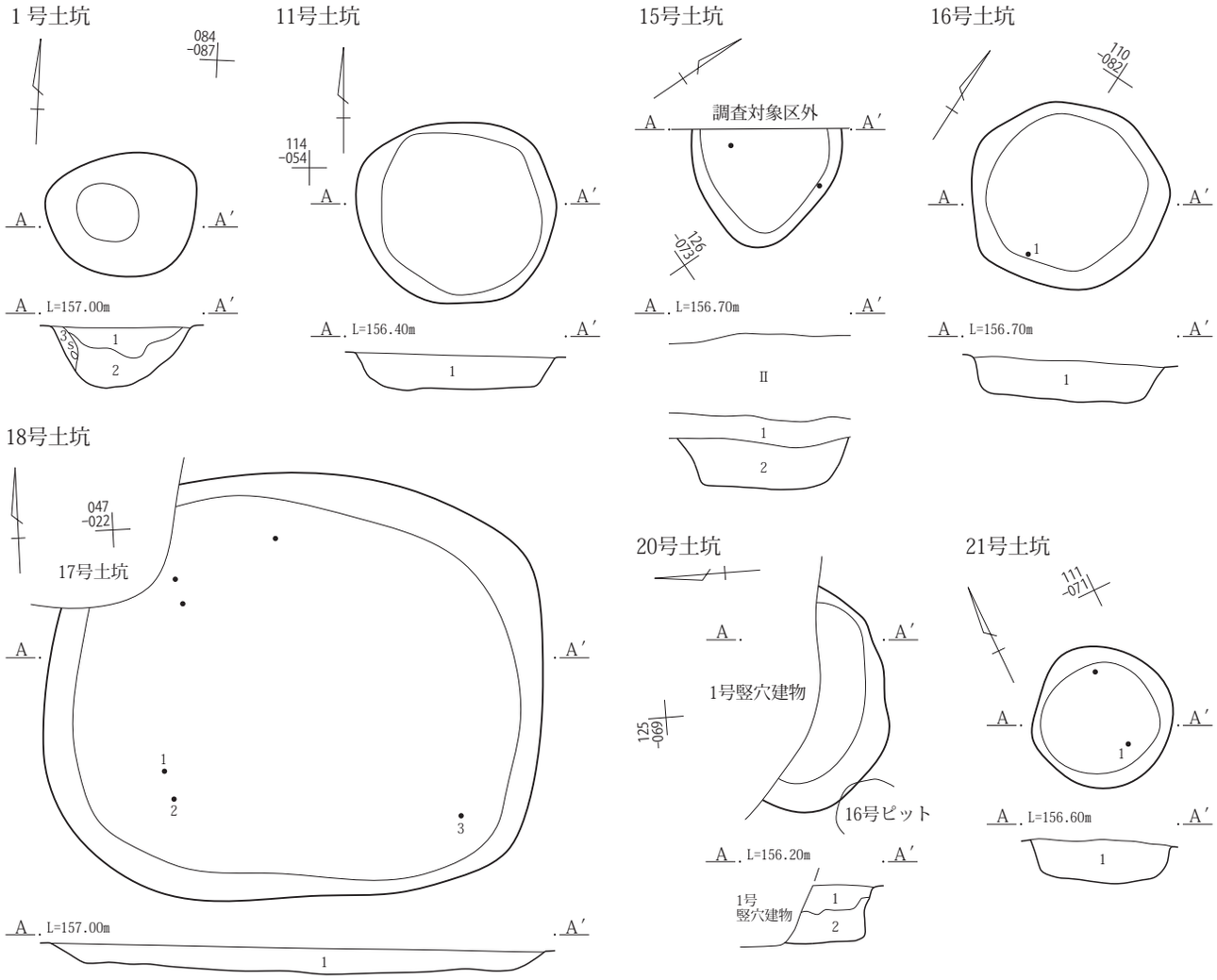
埋没状態　遺構の検出が148号竪穴建物の掘削後であったため、確認面面が148号竪穴建物の床面上で行われた。そのため、底面までの深さが25㎝と浅い。土層断面の観察では炭化物や焼土が含まれ、As-Cが混入した黒褐色土で埋没していた。

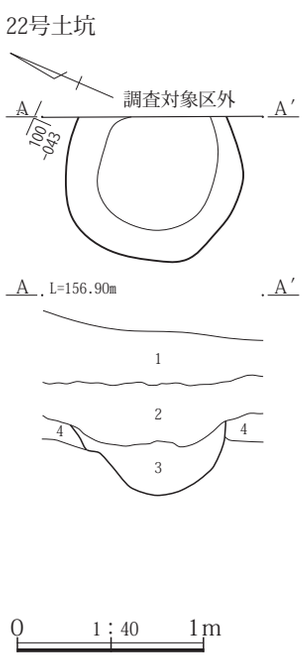
出土遺物　西寄りの中位から１の須恵器無台椀と２の有台椀が出土している。この他に148号竪穴建物に伴うとみられる須恵器や土師器片も出土している。

所見　出土した須恵器椀はともに酸化焔焼成で、２の有台椀は高台が高い形態を示していることから10世紀後半でも第４四半期に比定できる。

第４表　土坑一覧(古墳時代～飛鳥・奈良・平安時代)

区	№	位置	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重　複	時期	備考
1	1	083・-087	円形	0.86	0.70	0.35	N-82°-W	71号竪穴建物	古代	
1	11	113・-053	円形	1.13	1.00	0.21	N-77°-W		古代	
1	15	126・-072	楕円形	(0.68)	0.86	0.28	N-32°-E		古代	
1	16	109・-081	円形	1.14	1.12	0.24	N-65°-E	５号竪穴建物	古代	須恵器椀
1	18	045・-019	楕円形	2.80	2.36	0.10	N-84°-E	17号土坑	９C.前半	
1	20	124・-068	楕円形	1.10	(0.42)	0.32	N-65°-E	１号竪穴建物、16号ピット	古代	
1	21	110・-070	円形	0.84	0.80	0.20	N-11°-E	24号竪穴建物	古代	
1	22	100・-043	円形	0.92	(0.76)	0.41	N-25°-E		古代	
1	23	105・-050	不整形	2.00	1.24	0.15	N-55°-E	24号・44号ピット	９C.Ⅲ	
1	25	100・-055	円形	1.18	(0.66)	0.28	N-80°-E	114号ピット	古代	
1	26	093・-052	隅丸長方形	2.37	1.10	0.26	N-77°-W	59号竪穴建物	９C.Ⅳ	馬具
1	27	096・-047	長方形	1.02	0.92	0.66	N-15°-E	62号竪穴建物	古代	
1	29	063・-077	円形	0.77	0.60	0.28	N-50°-W	74号竪穴建物	古代	
1	32	090・-043	円形	1.00	0.88	0.56	N-37°-W	１号溝	古代	
1	35	105・-049	円形	0.76	0.72	0.23	N-50°-W	95号竪穴建物	９C.Ⅳ	
1	36	087・-044	不整形	2.73	1.85	0.40	N-51°-E	126号竪穴建物、39号土坑	10C.	
1	38	095・-050	楕円形	1.00	0.92	0.30	N-83°-W	59号・129号竪穴建物	古代	
1	39	085・-046	不整形	(2.70)	1.24	0.36	N-３°-W	36号土坑、57号・60号・61号ピット	９C.	
1	40	106・-079	長方形	2.30	0.80	0.27	N-10°-E	78号ピット	古代	
1	41	109・-078	円形	0.60	0.54	0.16	N-50°-W		９C.Ⅳ	
1	42	098・-083	長方形	1.00	0.96	0.23	N-25°-E	55号竪穴建物	古代	
1	43	101・-084	楕円形	1.10	0.90	0.21	N-48°-W	48号・57号竪穴建物	古代	
1	44	103・-083	円形	1.02	0.90	0.29	N-12°-E	41号・137号竪穴建物	古代	
1	45	102・-080	不整形	0.98	0.66	0.23	N-40°-W	41号・137号竪穴建物	10～11C.	
1	46	057・-031	楕円形	1.80	1.20	0.29	N-84°-W	31号竪穴建物	古代	
1	50	045・-030	円形	0.78	0.68	0.14	N-60°-E	143号竪穴建物	古代	
1	51	0.52・-031	円形	1.00	0.90	0.55	N-７°-W	139号竪穴建物	古代～中世	
1	52	075・-060	楕円形	1.16	0.92	0.13	N-14°-E	146号竪穴建物	古代	
1	55	080・-055	円形	0.92	0.86	0.68	N-50°-E	168号竪穴建物、１号掘立柱建物	古代	
1	56	079・-054	楕円形	1.06	1.00	0.32	N-70°-E	１号掘立柱建物、62号・70号土坑	古代	
1	57	091・-055	円形	0.74	0.70	0.29	N-24°-E		古代	
1	59	089・-072	円形	0.70	0.60	0.30	N-35°-W	159号・164号竪穴建物	古代	
1	60	086・-072	円形	0.90	0.90	0.06	N-40°-W	５号溝	古代	
1	61	085・-048	円形	0.98	0.96	0.50	N-20°-E	186号竪穴建物、85号土坑	古代	
1	62	079・-055	円形	(0.90)	(0.84)	0.46	N-30°-W	１号掘立柱建物、56号・70号土坑	古代	
1	63	082・-057	円形	0.60	0.54	0.43	N-38°-W	177号竪穴建物	古代	
1	64	081・-058	円形	1.00	(0.58)	0.33	N-18°-W	168号竪穴建物	古代	
1	65	088・-059	円形	0.75	0.72	0.17	N-40°-W	183号竪穴建物	古代	
1	66	093・-053	円形	1.00	0.90	0.28	N-20°-E	67号土坑	古代	
1	67	092・055	円形	1.08	1.02	0.15	N-25°-E	66号・69号土坑	古代	
1	69	092・055	円形	0.94	0.70	0.58	N-25°-W	67号土坑	古代	
1	72	078・-051	長方形	0.96	0.70	0.27	N-21°-E	157号・170号竪穴建物、１号掘立柱建物	古代	
1	73	087・-0.54	楕円形	1.00	0.65	0.55	N-80°-W	161号・172号・186号竪穴建物、83号土坑	古代	
1	74	109・-060	円形	0.90	0.88	0.55	N-20°-E	12号・179号竪穴建物	10C.Ⅳ	
1	76	095・-065	楕円形	12.20	0.88	0.25	N-22°-E	165号・174号・175号竪穴建物	10C.後半	
1	77	092・-055	円形	1.06	0.96	0.29	N-32°-E		古代	
1	78	092・-053	円形	0.72	0.62	0.42	N-30°-W		古代	
1	79	083・-047	円形	0.56	0.42	0.12	N-78°-W	185号竪穴建物	古代	
1	80	073・-048	楕円形	(1.08)	(0.92)	0.42	N-36°-E	167号竪穴建物	古代	
1	82	090・-053	楕円形		0.94	0.16	N-82°-E	176号竪穴建物	古代	
1	83	086・-054	楕円形	1.46	0.92	0.42	N-78°-W	161号・172号・186号竪穴建物、73号土坑	古代	
1	85	085・-050	円形	(0.76)	(0.68)	0.47	N-20°-W	185号竪穴建物、61号土坑	古代	
1	87	088・-053	円形	0.78	0.64	0.43	N-40°-W	162号竪穴建物・157号ピット	古代	
4	133	832・-968	不整形	(1.60)	1.32	0.42	N-３°-E	203号竪穴建物	８C.前半	
3	140	916・-988	楕円形	1.28	1.12	0.26	N-86°-W		古代か	
4	143	863・-972	長方形	1.88	(1.18)	0.23	N-68°-W	200号・211号竪穴建物	古代か	
1	169	090・-050	不整形	6.37	1.82	0.23	N-５°-E	15号・162号・185号・186号竪穴建物、86号土坑	10C.後半	旧４号溝、遺物多数
1	175	076・052	円形	1.00	0.90	0.25	N-125°-E	148号竪穴建物	10C.Ⅳ	須恵器椀





１号土坑
１　灰黄褐 10YR4/2　As-C、泥流土粗粒、炭化物を多く含み、しまりが強い弱粘性土。
２　黒褐 10YR3/2　含有物少ない、粘性土。
３　にぶい黄褐 10YR4/3　ロームブロック主体、礫を含む粘性土。

11号土坑
１　暗褐 10YR3/4　多くのAs-Bを含む混土、ややしまり欠く砂質土。

15号土坑
Ⅱ　暗褐 10YR3/3　As-B混土
１　灰黄褐 10YR4/2　As-B混土、As-Cを少量含み、ややしまりある弱粘性土。
２　灰黄褐 10YR4/2　As-B混土、暗褐色土にAs-C少量と５㎜大の泥流土ブロックを不均等に、炭化物粒を若干含み、しまりある弱粘性土。

16号土坑
１　暗褐色 10YR3/3　As-B混土と褐色土ブロック混じりの土を含む。

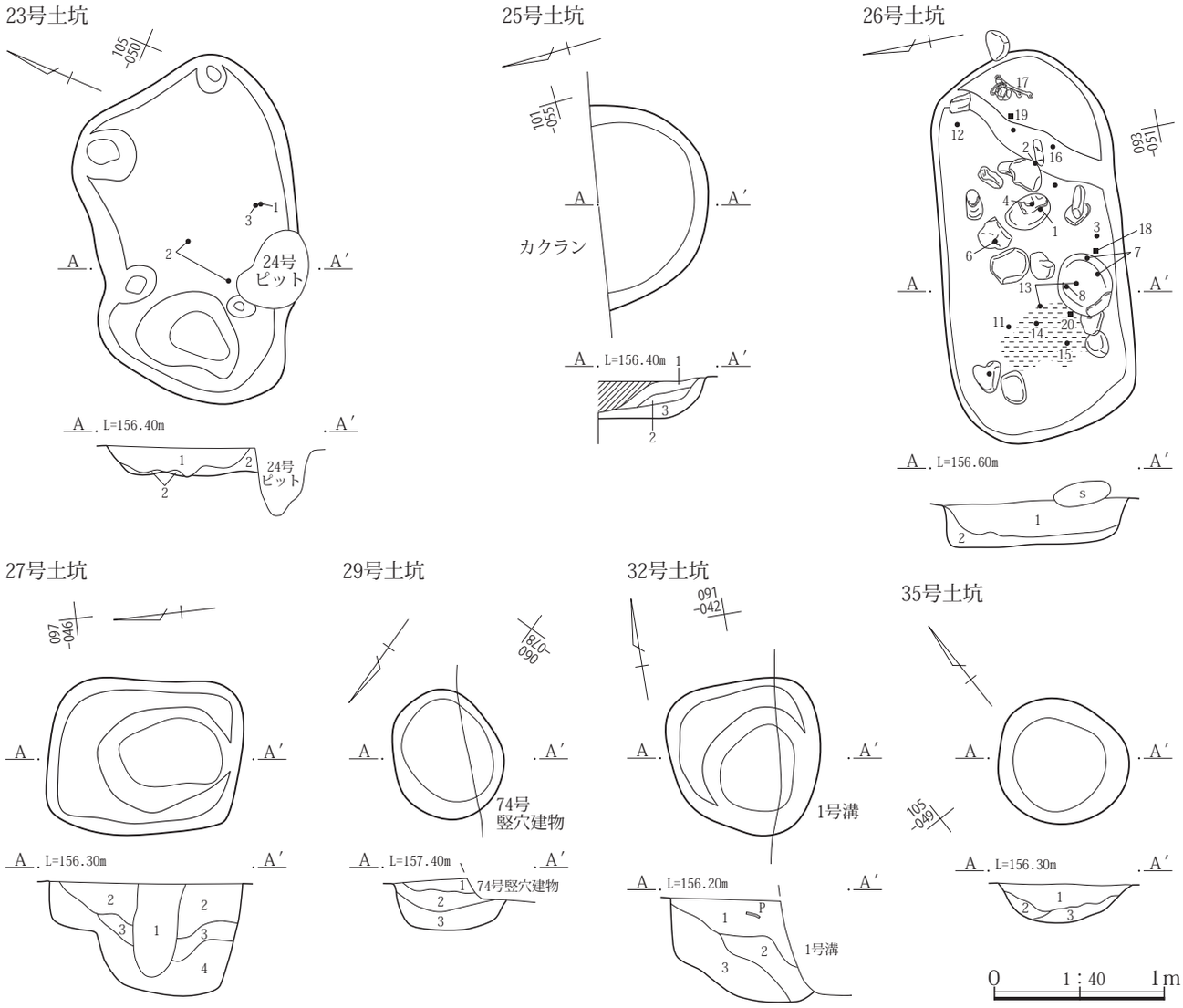
18号土坑
１　黒褐 10YR2/2　φ１～３㎜の炭化物片を１％、φ１～３㎜の褐色土ブロックを１％、φ１～２㎜の焼土ブロックを１％、φ１～２㎜の白色粒を１％含み、しまりがあるやや粘性がある。

20号土坑
１　にぶい黄褐 10YR4/3　As-C混土を少量と泥流土を不均等に含み、しまりが強い弱粘性土。
２　灰黄褐 10YR4/2　泥流を多く含むブロック状の土が不均等に混入し、しまりが強い弱粘性土。人為的埋め戻し土か。

21号土坑
１　黒褐 10YR3/2　Ⅲ層(As-B)直下の黒褐色土。

22号土坑
１　暗褐 10YR3/3　As-B混土。φ１～10㎜の白色粒を５％含む。
２　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜白色粒を３％、φ２～３㎜の褐色粒を１％含み、固くしまりがある。
３　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロック状に20％含み、しまりがある。
４　暗褐 10YR3/4　φ２～５㎜の白色粒を２％、褐色土ブロックを５％含む。

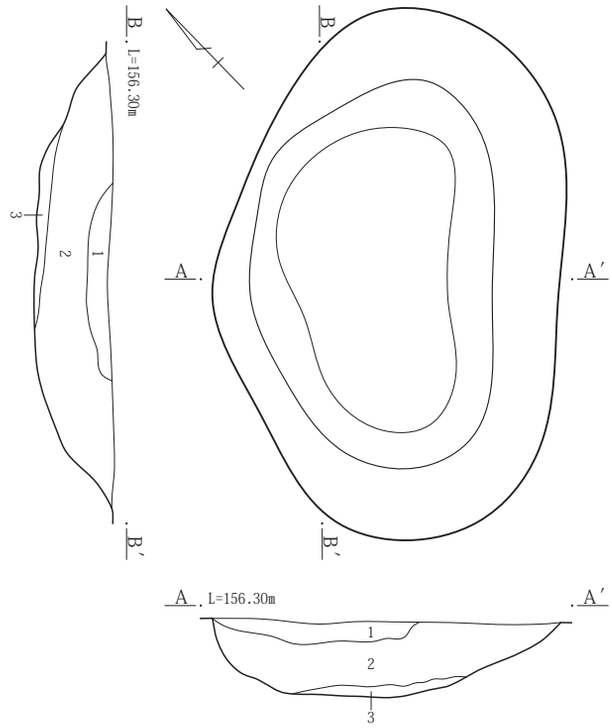
第288図　１・11・15・16・18・20～22号土坑遺構図



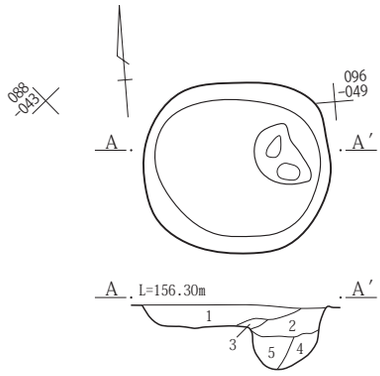
23号土坑
1　黒褐 10YR3/2　泥流土を小ブロック状にわずかに含み、弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土の混入する、１よりややしまりがある弱粘性土。
25号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％含み、固くしまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％、φ１～２㎜の赤褐色土ブロックを１％、炭化物片を２％含み、固くしまりがある。
26号土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-C混じり、炭化物を不均等に含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　As-Cの少ない細粒土。
27号土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-C粒、泥流土粒を少量含む以外、混入物少ない。上半でしまりあるが、下半はしまり弱い。
2　灰黄褐 10YR4/2　黒褐色土中に不揃いの泥流土ブロックを不均等にAs-Cを少量含み、ややしまりが強い。
3　灰黄褐 10YR4/2　２に類似、２よりさらにしまりが強い。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土ブロックを少量含み、ややしまりがある粘性土。
29号土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒をわずかに含み、しまりが強い細粒土。
2　灰褐 7.5YR4/2　上半にやや多く、下半に少量の焼土小ブロックと泥流土小ブロックを全体に少量含み、しまりが強い弱粘性土。
3　灰褐　２に類似、焼土は含まず、他の含有物は２より少ない。
32号土坑
1　黒褐 10YR2/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを２％、炭化物片を１％、φ１～２㎜の焼土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを30％含み、やや柔らかくやや粘性がある。
35号土坑
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％、φ１～５㎜焼土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を20％含む。

第289図　23・25～27・29・32・35号土坑遺構図

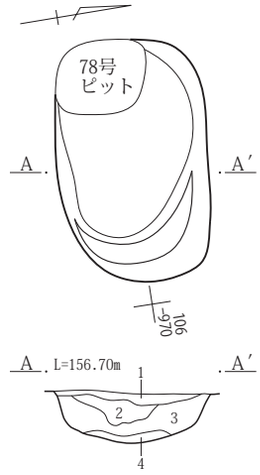
36号土坑



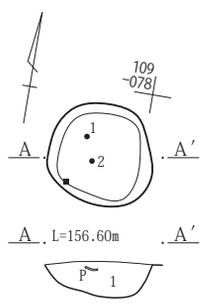
38号土坑



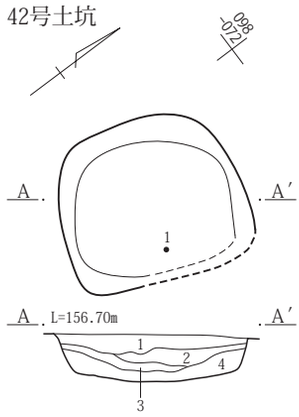
40号土坑



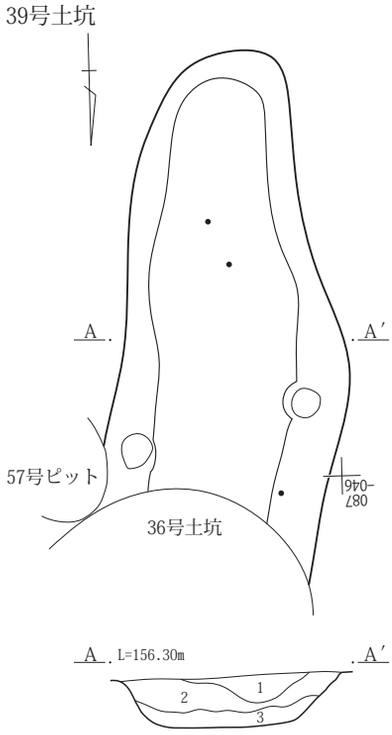
41号土坑



42号土坑



39号土坑



36号土坑
1　暗褐 10YR3/3　粒子やや細かな微粘性土。上半にAs-Cや泥流土粒、下半に焼土や泥流土小ブロックを含む以外、混入物少ない。
2　灰黄褐 10YR4/2　５㎜大の灰色味おびた泥流土小ブロックを多量に含み、ややしまりが強い。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土ブロックを多量に含み、しまりが強い弱粘性土。

38号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを５％、φ１～３㎜の焼土ブロックを１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ15㎜の褐色土ブロックを１％、暗褐色土(10YR3/4)ブロックを10％含み、しまりがある。
3　にぶい黄褐 10YR4/3
4　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを10％、焼土ブロックを１％含む。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を20％、赤褐色土を10％含む。

39号土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-Cの混入多いしまりが強い。泥流土粒を少量含む。
2　黒褐 10YR3/2　As-Cを少量と泥流土を小ブロック状に含む、微粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土ブロックと黒褐色土の混土、ややしまりがある。

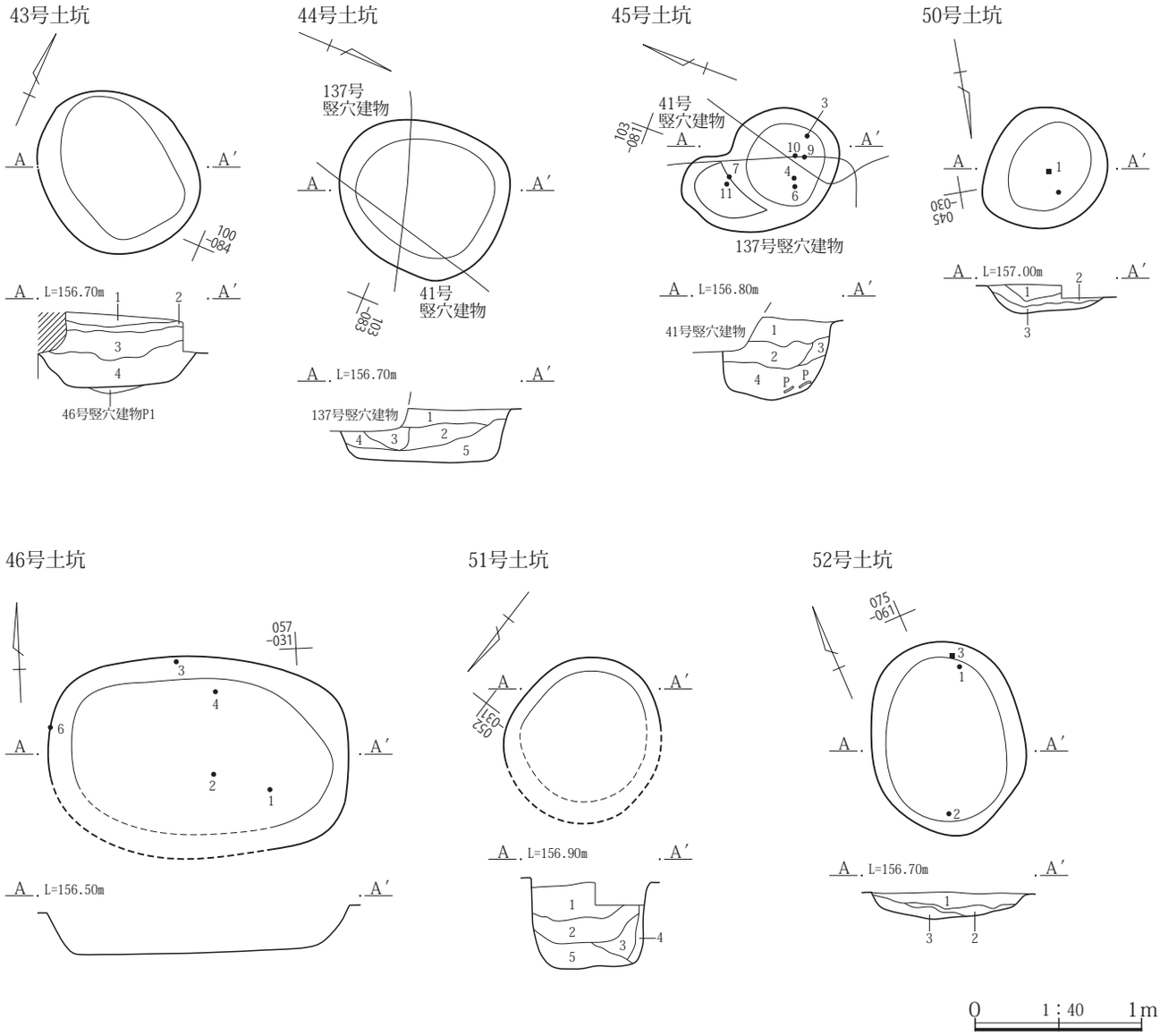
40号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを20％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを３％含む。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを５％含む。

41号土坑
1　暗褐 10YR3/3　固くしまりがある。

42号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の炭化物片を１％、φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を２％、φ１～５㎜の褐色土ブロックを３％、炭化物片を１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　φ１～20㎜の褐色土ブロックを５％含む。

0　1：40　1m

第290図　36・38～42号土坑遺構図



43号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-Cの混入多い非粘性土。不均等に焼土小ブロックを少量含み、しまりが強い。
2　暗赤褐 5YR3/3　焼土小ブロックを多く炭化物、灰を若干含み、しまりが強い微粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/2　泥流土粒、As-C、焼土を含み、しまりが強い。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土粒を不均等に少量含み、ややしまりが弱い弱粘性土。

44号土坑
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを30％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。
5　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを７％含む。

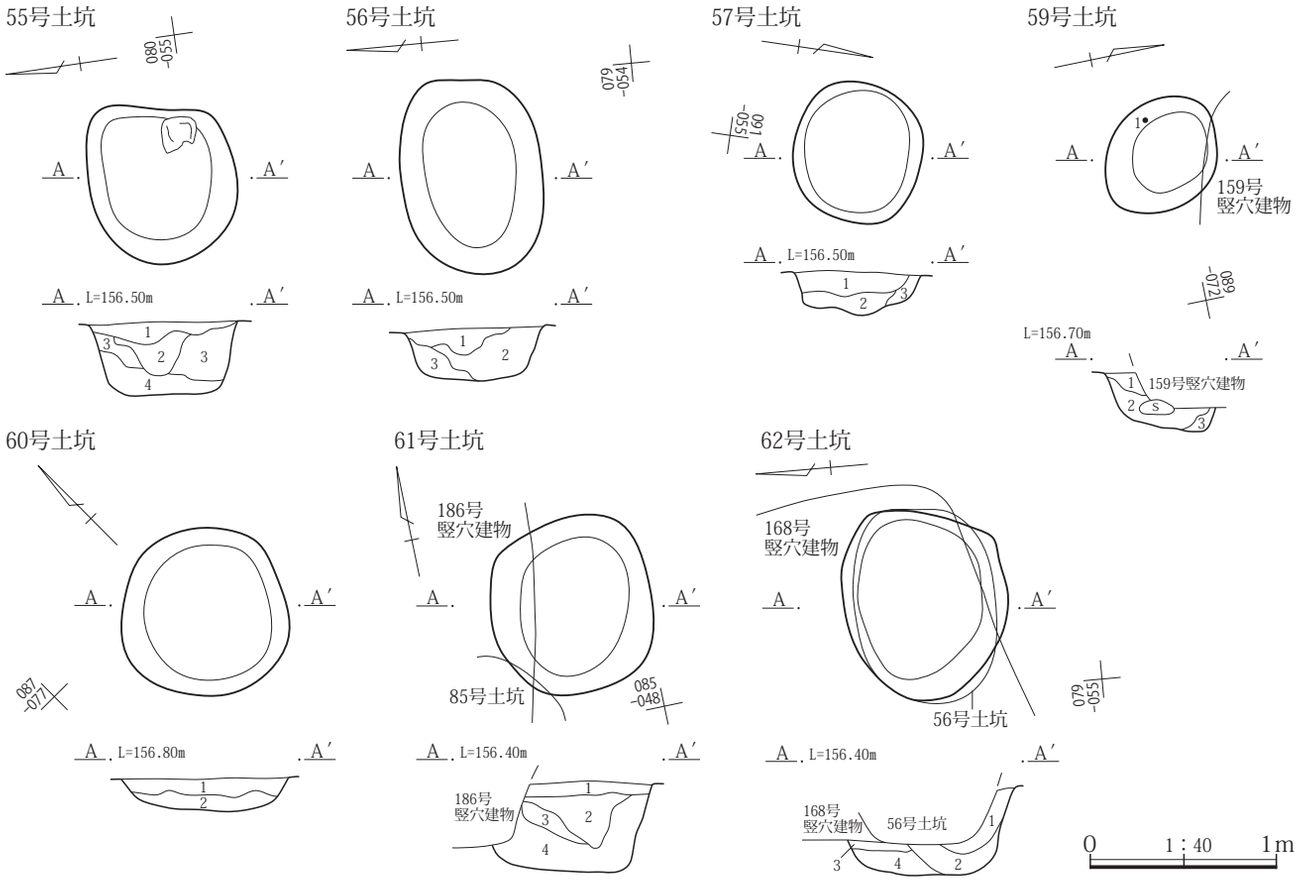
45号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を２％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～10㎜の褐色土ブロックを５％、炭化物片を２％含み、固くしまりがある。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土ブロックを10％含む。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の白色粒を１％含む。

50号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％、φ１～２㎜の焼土ブロックを２％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
3　暗褐 10YR3/4　褐色土を30％含む。

51号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、やや柔らかい。
3　黒褐 10YR2/3　含有物はほとんどみられず、やや粘性がある。
4　黒褐 10YR2/3　３と同様、３よりやや淡い色調を呈し、ローム粒をわずかに含む。
5　黒褐 10YR2/3　φ１～３㎜の焼土ブロックを２％、φ１～10㎜の褐色土ブロックを２％含み、やや粘性がある。

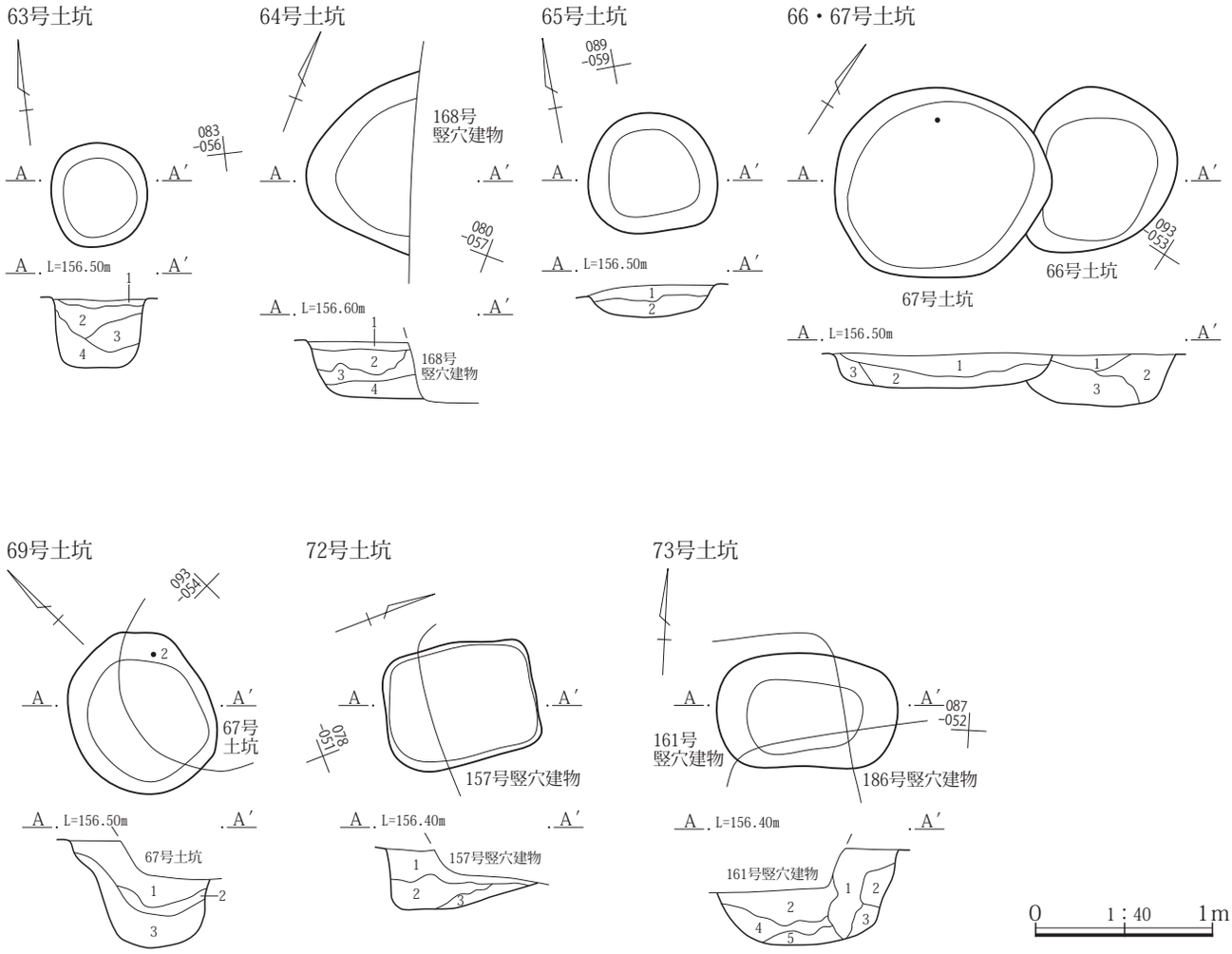
52号土坑
1　暗褐 10YR3/2　As-C、泥流土粒をやや多く炭化物を含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　ややしまりが強い細粒土。
3　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な地山泥流土を主体に、黒褐色細粒土をブロック状に含み、しまりが強い弱粘性土。

第291図　43～46・50～52号土坑遺構図



55号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを不均等にやや多く含み、しまりが強い。泥流土が一部で縞状に埋没しており人為的埋戻し土の可能性。
2　黒褐 10YR3/2　細粒微粘性土。炭化物や灰が少量含み、しまりが強い。
3　暗褐 10YR3/3　泥流土を不均等に一部で縞状に含み、しまりが強いやや細粒土。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土を多く含み、しまりが強いやや細粒土。
56号土坑
1　灰黄褐 10YR4/2　As-Cの混入多い、大粒の泥流土粒を多く含み、しまりが強い。
2　黒褐 10YR3/2　泥流土粒を多く含み、しまりが強い細粒微粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　泥流土と黒褐色土の小ブロック状混土。しまりがごく弱い。
57号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、固くしまりがある。
2　褐 10YR4/4　暗褐色土をブロック状に10％含む。
3　暗褐 10YR3/4　φ１㎜の白色粒１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
59号土坑
1　にぶい黄褐 10YR5/3　ローム土粒・白色粒をわずかに含む。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土粒をわずかに含む。
3　にぶい黄褐 10YR5/4　ローム土ブロックをシミ状に含む。
60号土坑
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１㎜の焼土ブロックを微量に含む。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　φ１～２㎜の白色粒を１％含む。
61号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を２％、φ１～２㎜の焼土ブロックを２％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％、φ１～２㎜の焼土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の白色粒を２％、φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを10％含む。
62号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％含み、やや粘性がある。しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。

第292図　55～57・59～62号土坑遺構図



63号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ５㎜前後の泥流土ブロックを10％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　１に類似、１より泥流土ブロックが少ない。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。

64号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　１に類似、１より含有物が少ない。
3　暗褐 10YR3/3　泥流土ブロックを30％含み、しまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土ブロックを10％含み、しまりがある。

65号土坑
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％含み、やや粘性がある。しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土ブロックを５％含み、しまりがある。

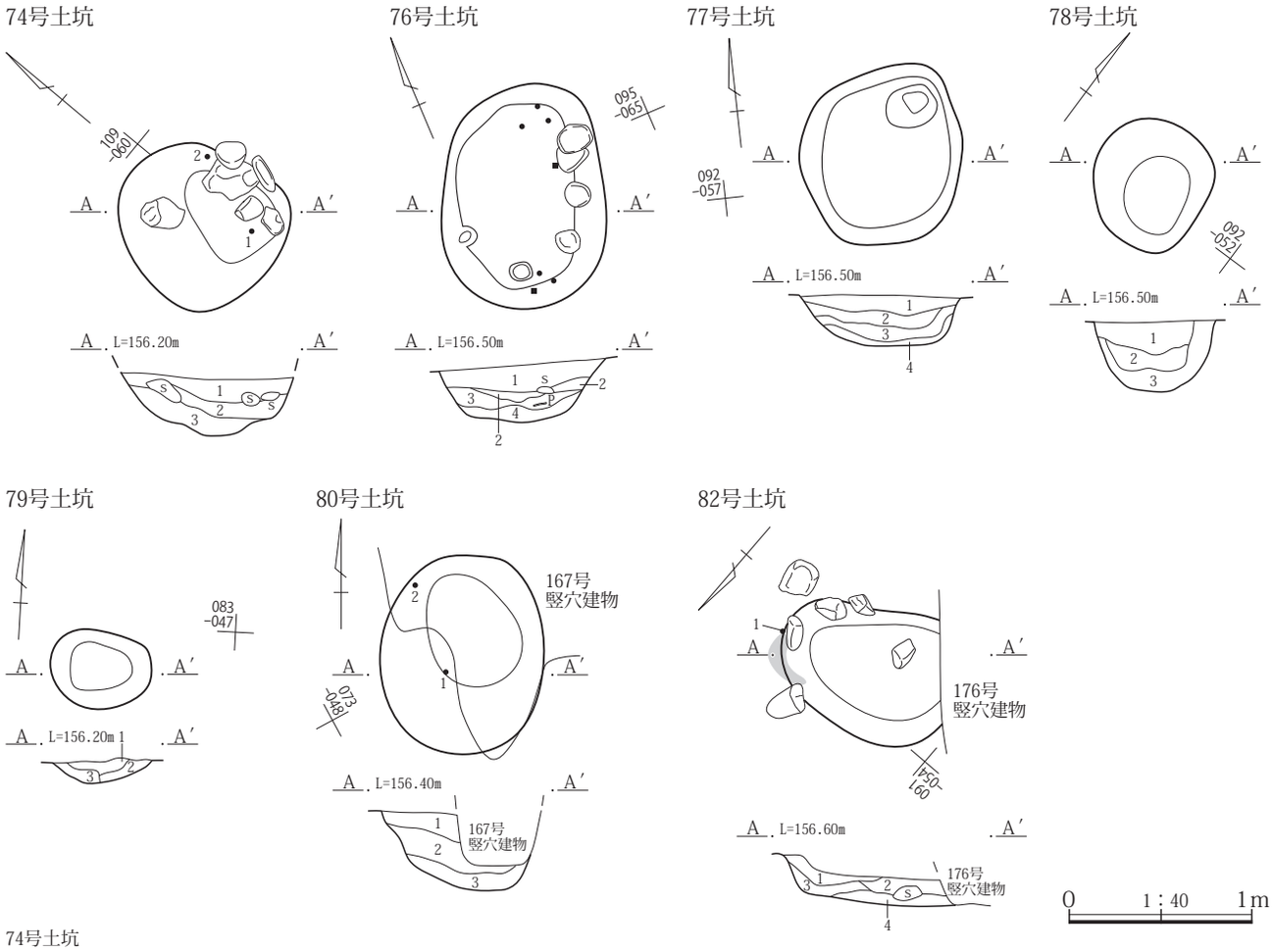
66号土坑・67号土坑
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％含み、やや粘性がある。
2　黒褐 10YR2/3　１に類似、１より褐色土ブロックが少ない。
3　黒褐 10YR2/3　φ５～10㎜の褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。
4　暗褐 10YR3/3　泥流土ブロックを10％含み、しまりがある。
5　暗褐 10YR3/3　４に類似、泥流土ブロックがシミ状に含まれる。
6　暗褐 10YR3/3　泥流土ブロックを30％含み、しまりがある。

69号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の赤褐色土粒を１％、φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含む。

72号土坑
1　暗褐 7.5YR3/3　大粒の泥流土ブロックを不均等に炭化物、焼土を若干含む、ややしまりの強い粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土小ブロックと黒褐色土の混土、ややしまりの弱い粘性土。
3　暗褐 10YR3/4　２に類似、炭化物と焼土粒を含む。

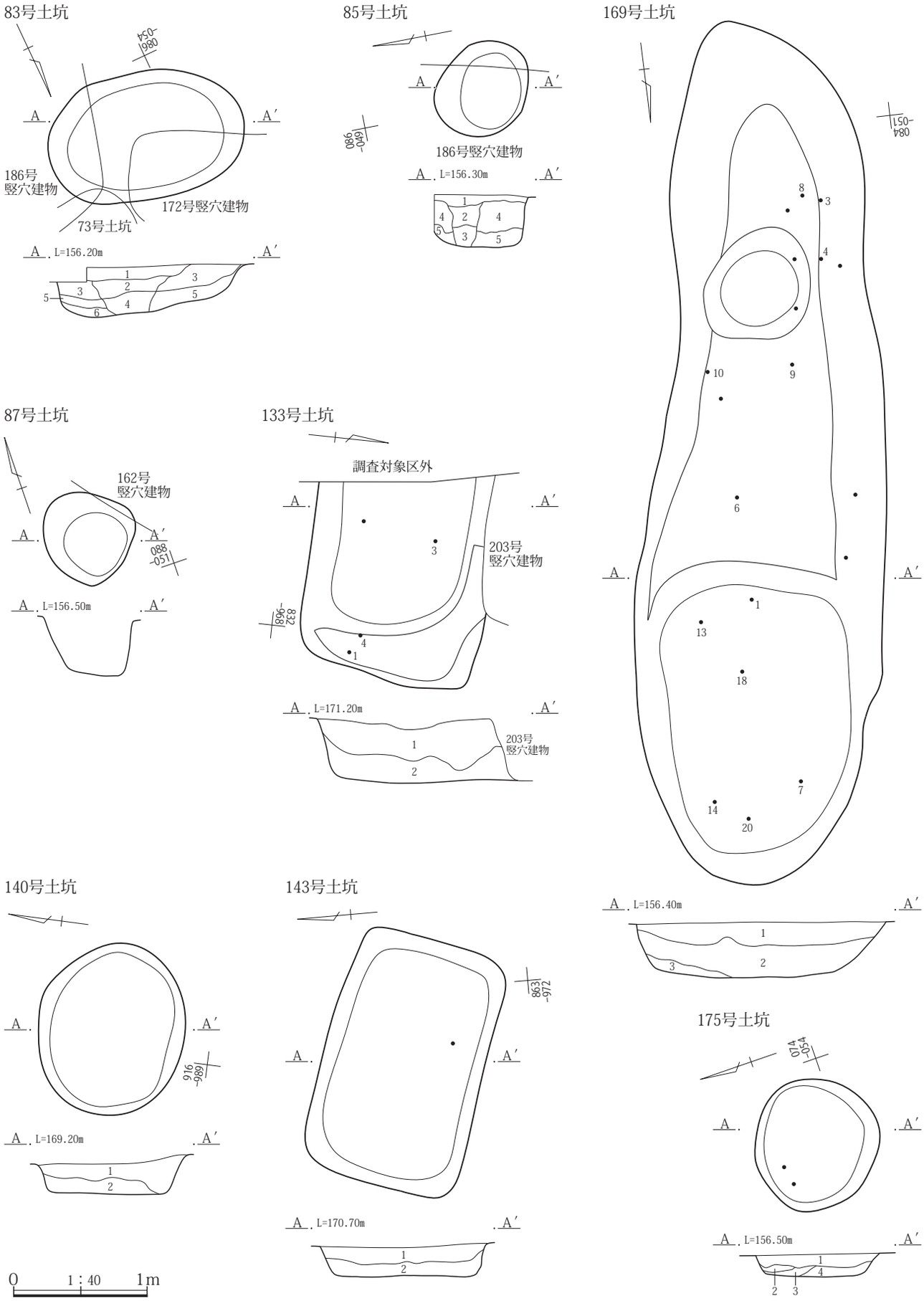
73号土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状にやや多く下半に炭化物を含み、ややしまりが強い。
2　にぶい黄褐10YR4/3　不揃いの泥流土ブロックをやや多く含み、しまりが強い。
3　黒褐 10YR3/2　土質１と同じ。泥流土粒を多く含み、しまりがある。
4　黒褐 10YR2/2　細粒粘性土。不明瞭な泥流土ブロックを含む。
5　にぶい黄褐 10YR4/4　泥流土ブロック主体の黒褐色土が混じる。

第293図　63～67・69・72・73号土坑遺構図



74号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロック・φ１㎜の炭化物片を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の褐色土ブロックを２％、炭化物片を１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを３％、炭化物片を３％含む。
76号土坑
1　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％とφ１～２㎜の白色粒を１％含み、固くしまっている。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物片を１％と焼土ブロックを10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含みやや粘性がある。
77号土坑
1　黒褐 10YR3/2　泥流土ブロックをわずかに含み、ややしまりが強い。
2　黒褐 10YR3/3　１に類似。
3　黒褐 10YR3/2　１に類似。泥流土粒を多く含み、しまりがある。
4　黒褐 10YR2/2　細粒粘性土。不明瞭な泥流土ブロックを含む。
78号土坑
1　にぶい黄褐 10YR5/4　ローム土粒・白色粒・焼土粒をわずかに含む。
2　暗褐 10YR3/2　１に類似、１より濃い色調を呈す。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土粒・泥流土ブロックを多く含む。
79号土坑
1　にぶい褐 7.5YR5/3　不揃いの焼土ブロック(赤色味やや弱い)と黒褐色細粒土の混土。炭化物を少量含み、ややしまりが強い。
2　にぶい黄 7.5YR4/3　黒褐色土主体に１と同じ焼土ブロックを多く含む。
3　暗褐 10YR3/4　焼土粒・炭化物粒を少量含み、ややしまり弱い微粘性土。
80号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒・φ１～２㎜の褐色土ブロック・φ１㎜の焼土ブロック・炭化物片を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％、褐色土ブロックを５％、φ２～３㎜の焼土ブロックを２％、炭化物片を１％含み、やや柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロック・φ２～10㎜の焼土ブロックを３％、炭化物片を１％含み、やや粘性がある。
82号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の焼土ブロック・炭化物片を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～３㎜の焼土ブロックを２％、炭化物片を１％含み、やや柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の焼土ブロックを３％、炭化物片を１％含み、やや粘性がある。
3　暗褐 10YR3/3　２・３に類似、含有物はほとんど含まれず。

第294図　74・76～80・82号土坑遺構図



第295図　83・85・87・133・140・143・169・175号土坑遺構図

83号土坑
１　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを３％、φ１～２㎜の白色粒を２％含み、しまりがある。
２　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に含み、しまりがある。
３　暗褐 10YR3/3　φ２～30㎜の褐色土をブロック状に20％含む。
４　黒褐 10YR2/3　全面的にφ１～２㎜の褐色土ブロックを２％含み、しまりがあり粘性がある。
５　黒褐 10YR2/3　褐色土をブロック状に５％含み、粘性がある。
６　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を20％含み、粘性がある。
85号土坑
１　暗褐 10YR3/3　不揃いな泥流土やパミス、焼土粒を含み、ややしまりが強い。
２　灰黄褐 10YR4/2　上半、下半に泥流土ブロックをやや多く炭化物を若干含む、細粒土。
３　黒褐 10YR3/2　不明瞭な泥流土を不均等に少量含み、ややしまりが強い微粘性細粒土。
４　にぶい黄褐 10YR4/3　黒褐色土と泥流土の多い土を互相状に埋め戻したか。しまりが強い弱粘性土。
５　暗褐 10YR3/3　下位に地山灰褐色粘性土ブロックを多く含み、ややしまりある弱粘性土。
133号土坑
１　黒褐 10YR3/2　As-YPを不均等に含む弱粘性土。
２　灰黄褐 10YR4/2　不揃いのロームブロックを多く含み、ややしまりの強い弱粘性土。
140号土坑
１　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを３％、φ１～２㎜の白色粒を１％、暗褐色土を20％含み、しまりがある。
２　暗褐 10YR3/3　ローム土を30％、As-YPブロックを３％含み、しまりがある。
143号土坑
１　黒褐 10YR2/3　As-Bとの混土、φ１㎜の白色粒を１％、YPブロックを１％含む。
２　暗褐 10YR3/3　φ５～20㎜のロームブロックを５％含み、ややしまりが強い。
169号土坑
１　灰黄褐 10YR4/2　As-C混じりのしまり強い弱粘性土。焼土、泥流土粒、炭化物粒等雑多な混入物をやや多く含む。
２　黒褐 10YR3/2　炭化物を中央底面付近で多く含み、ややしまり欠く粒子細かな粘性土。
３　暗褐 10YR3/3　大粒の泥流土を不均等にやや多く含む、粒子細かな粘性土。
175号土坑
１　黒褐 10YR3/2　土質は竪穴建物埋没土に近い。全体にしまりがある。床面部分に踏み固めの痕跡が確認できる。
２　灰黄褐 10YR4/2　１と２の混土。
３　にぶい黄褐 10YR4/3　粗粒の泥流土を主体、黒色土粒、土器粒などをわずかに含み、ややはり強い。
４　黒褐 10YR2/2　炭化物を含み、ややしまりが弱い細粒弱粘性土でサラサラした感触。

第６項　ピット

ピットは、１区調査区から５区調査区で320基を調査している。そのうち210基を古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代に比定した。比定の根拠は、出土遺物と埋没土からである。遺物が出土したピットはわずかであるため多くは埋没土からの判断である。埋没土については埋没土中にAs-BやAs-Aが混入してないものを古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代に比定した。

遺物を出土したピットは少なく、図示可能な遺物を出土したのは12基だけである。そのうち、代表的なものを下記に記述する。

129号ピット

埋没状態　土層断面の観察では底面から黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積していることが観察できることから人為的な埋め戻しが行われたと想定される。

出土遺物　確認面で25×15×10㎝大の亜角礫と須恵器長頸壺（平城宮土器分類壺Ｇ）、須恵器椀底部片、甕胴部片が出土している。この他に埋没土内から須恵器杯蓋、杯身、土師器杯、甕の小片と灰釉陶器瓶胴部小片が出土している。なお、須恵器杯蓋や土師器杯は重複関係にある183号竪穴建物からの混入とみられる。

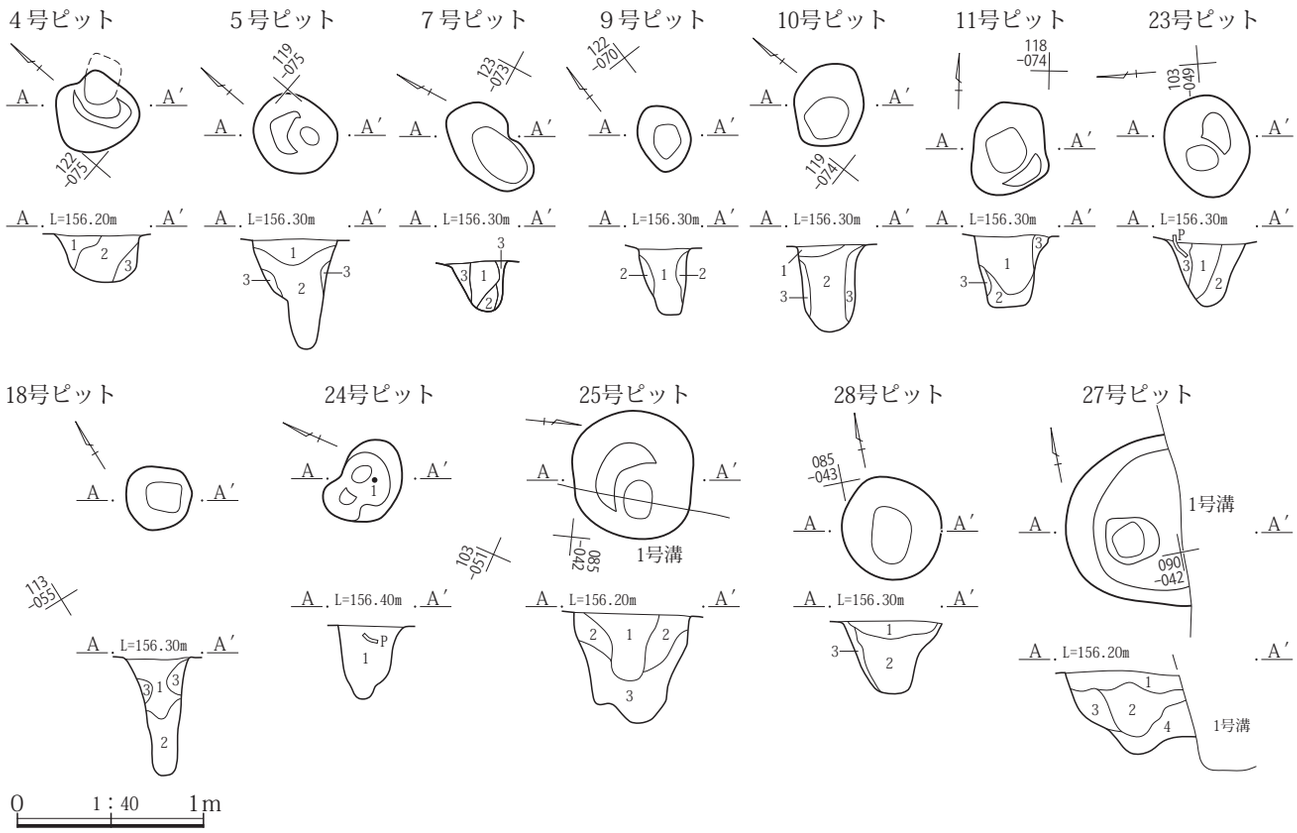
所見　須恵器長頸壺、椀、甕は確認面であるため確実に本ピットに伴うか否か判断できないが、本ピットに伴うならば、須恵器椀は底部が回転糸切りであることや底部と体部の間に明瞭な稜を作ることと須恵器長頸壺の形状から８世紀第４四半期に比定できる。

136号ピット

埋没状態　土層断面の観察では２層に分層が可能でほぼ水平な堆積が確認できることから自然埋没と判断できるが確認面で土器や礫が出土していることや確認面から底面まで15㎝と浅いため断定には至らない。

出土遺物　確認面で１の土師器坩と亜角礫２点が出土している。坩は上半が打ち欠かれた状態で破片が周囲に散乱した状態であった。

所見　出土した１の土師器坩から４世紀代に比定できる。



４号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを５％含む。
3　にぶい黄褐 10YR3/4　柔らかい。

５号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。

７号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/2　褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。
3　灰黄褐 10YR4/2　暗褐色土を10％含み、やや柔らかい。

９号ピット
1　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土ブロックを５％含み、やや柔らかい。

10号ピット
1　暗褐 10YR3/3　灰褐色粘性土を少量含み、しまり強い粘質土。
2　灰黄褐 10YR4/2　灰褐色粘性土小ブロックをやや多く焼土、パミス、微量に含み、ややしまりある粘性土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3 1と褐色粘性土との混土、褐色土は小ブロック状に含み、ややしまりある粘性土。

11号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/2　褐色土ブロックを２％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土ブロックを10％含み、やや柔らかい。

18号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜焼土ブロックを２％、炭化物片を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　やや柔らかい。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　ロームブロックを含む。

23号ピット
1　暗褐 10YR3/2　炭化物片を１％、褐色土ブロックを１％、As-Bを５％含む、柱痕か。
2　暗褐 10YR3/2　褐色土ブロックを10％含み、底部に焼土ブロックを５％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　炭化物片を１％、As-Bを５％含み、やや柔らかい。

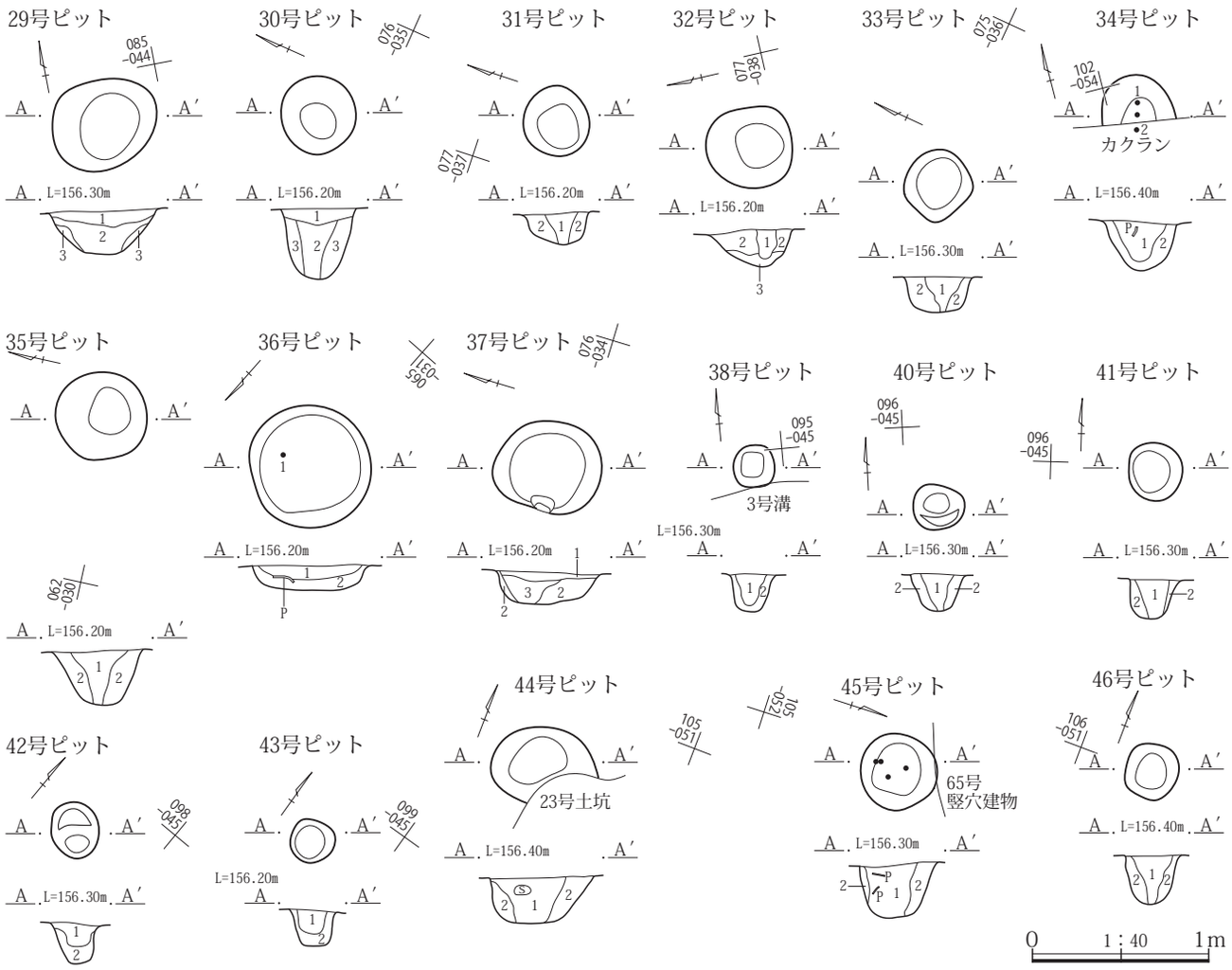
24号ピット
1　黒褐 10YR3/2　As-B混土。

25号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを２％、φ15㎜の焼土をブロック状に炭化物片を２％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～10㎜の褐色土ブロックを５％、φ１㎜の焼土ブロックを１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを30％含み、ややわらかくやや粘性ある。

27号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％、焼土ブロックを１％、φ１～２㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　粘質土をブロック状に20％、褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを20％含む。
4　暗褐 10YR3/4　にぶい黄褐色土ブロックを10％含み、やや粘性がある。

28号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを５％含む。

第296図　４・５・７・９～11・18・23～25・27・28号ピット遺構図



29号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒１％、褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/4　褐色土ブロックを５％含む。

30号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％、φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
3　黒褐 10YR2/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。しまりがある。

31号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％、炭化物片を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。

32号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％、φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを10％含み、しまりがある。
3　黒褐 10YR2/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含み、しまりがあり粘性がある。

33号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％、φ１㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。

34号ピット
1　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを20％含む。

35号ピット
1　暗赤褐 5YR3/2　にぶい黄褐色土を10％、黒褐色土を10％含み、やや粘性がある。
2　にぶい赤褐 5YR4/4　にぶい黄褐色土を10％、黒褐色土を10％含む。粘性がある。

36号ピット
1　黒褐 10YR2/2　φ１～３㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/2　固くしまりがある。

37号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土をブロック状に10％含み、やや柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　しまりがある。

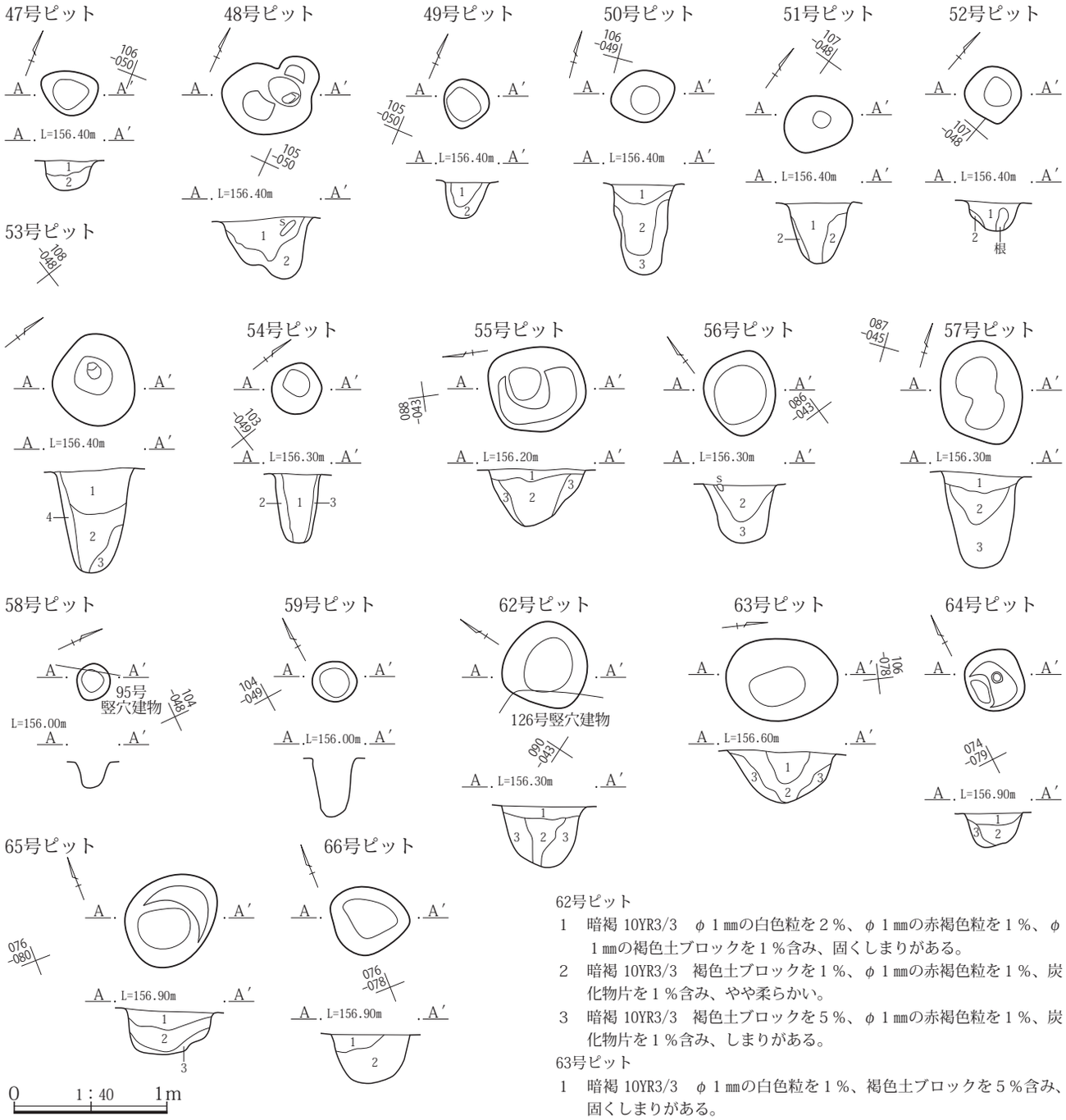
38号・40号～43号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。

44号ピット
1　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを30％含み、しまりがある。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを40％含む。

45号ピット
1　暗褐 10YR3/3　固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。

46号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを７％含む。

第297図　29～38・40～46号ピット遺構図



47号～49号・51号・52号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを７％含む。

50号・54号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを７％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを20％含む。

53号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを７％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを20％含む。
4　暗褐 10YR3/3　３と同様、３より褐色土ブロックを多く含む。

55号・56号・57号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～30㎜の褐色土ブロックを10％含む。

62号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を２％、φ１㎜の赤褐色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを１％、φ１㎜の赤褐色粒を１％、炭化物片を１％含み、やや柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％、φ１㎜の赤褐色粒を１％、炭化物片を１％含み、しまりがある。

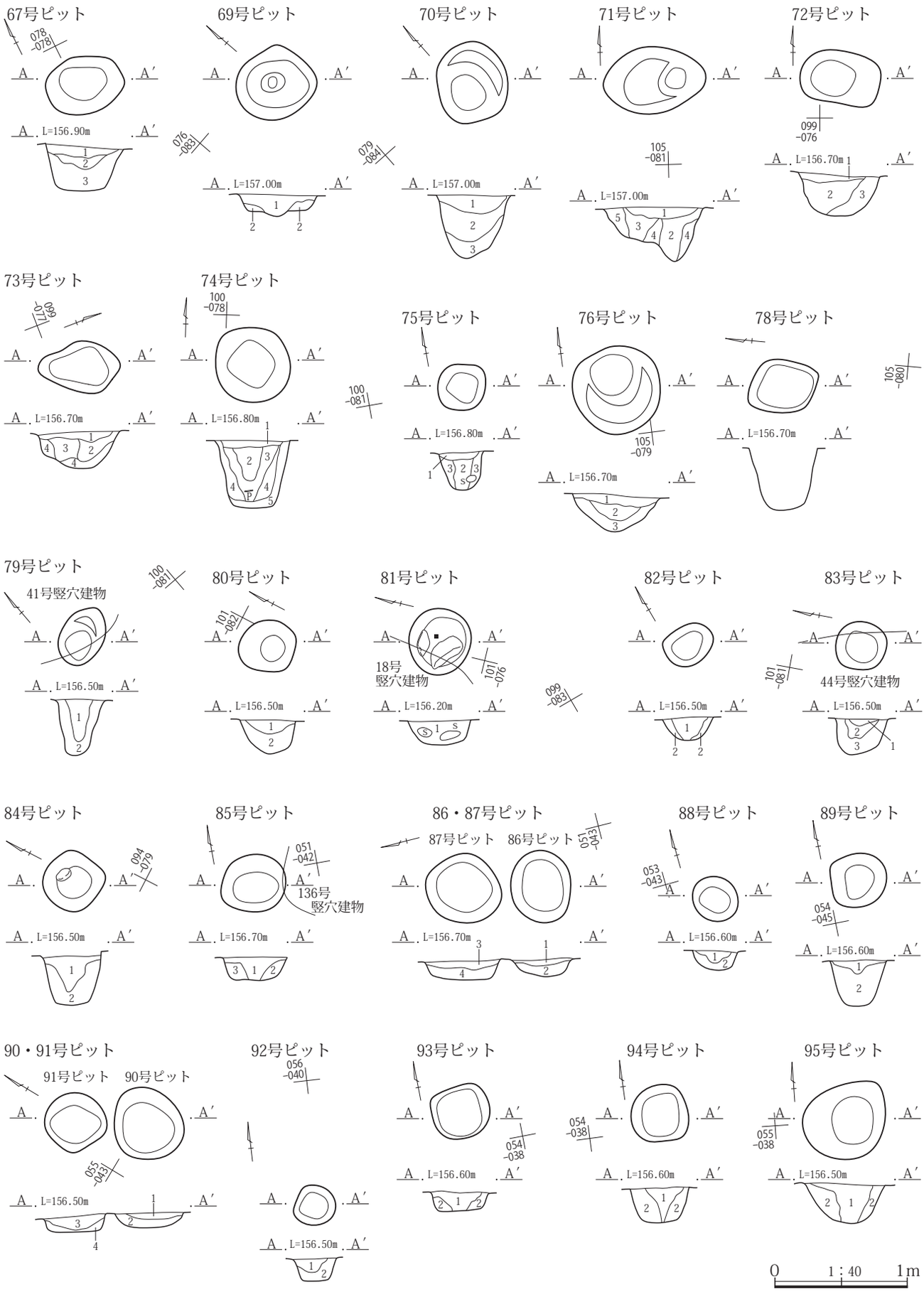
63号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、褐色土ブロックを５％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを７％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを30％含む。

64号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを２％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　やや柔らかくやや粘性がある。

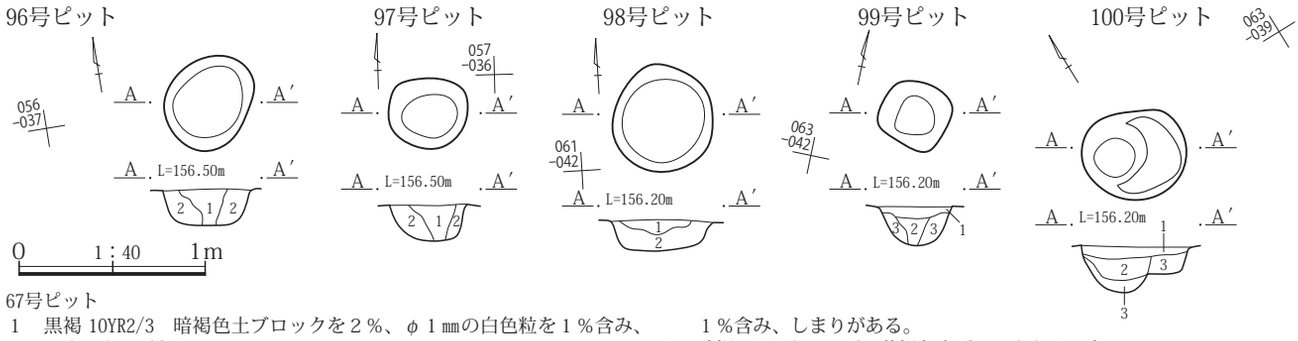
65号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを２％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　やや柔らかくやや粘性がある。

66号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを２％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　しまり、粘性がある。

第298図　47～59・62～66号ピット遺構図



第299図　67・69～76・78～95号ピット遺構図



67号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを２％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
3　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを30％含み、やや粘性がある。

69号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを２％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％含む。

70号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを１％、φ１㎜の白色粒を２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを２％含む。粘性あり。
3　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％含む。粘性あり。

71号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％含み、固くしまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～20㎜の褐色土ブロックを10％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を10％含み、やや脆い。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を10％、褐色土ブロックを10％含む。

72号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～20㎜の褐色土ブロックを２％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを５％含む。

73号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～20㎜の褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。
4　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを10％含む。

74号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを10％含む。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを５％含む。

75号・76号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。

79号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
2　φ１～10㎜褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。

80号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％、炭化物を１％、焼土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％、炭化物を２％、焼土ブロックを１％含み、しまりがある。

81号ピット
1　暗褐 10YR3/3　灰や炭化物を多量に、焼土ブロックを１％含む。

82号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを１％含む。

83号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土ブロックを20％含む。

84号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土ブロックを10％含む。

85号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを10％含み、やや柔らかい。
2　暗褐 10YR3/3
3　黒褐 10YR2/2　暗褐色土ブロックを10％含み、やや粘性がある。

86号・87号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR3/2　粘性がある。
3　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％含む。
4　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の炭化物片を１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％含む。

88号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/4　φ１㎜の炭化物片を１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％含む。

89号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　やや粘性がある。

90号・91号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ２㎜の褐色土ブロックを２％含み、やや粘性がある。
3　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％含む。
4　黒褐 10YR2/3　φ２㎜の褐色土ブロックを２％含み、やや粘性がある。

92号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　やや粘性がある。

93号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、焼土ブロックを１％含み、やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　１に類似、焼土粒を含まない。

94号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の焼土ブロックを２％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。

95号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の焼土ブロックを１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を20％含む粘質土。

96号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の焼土ブロックを１％、φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の焼土ブロックを１％含む。

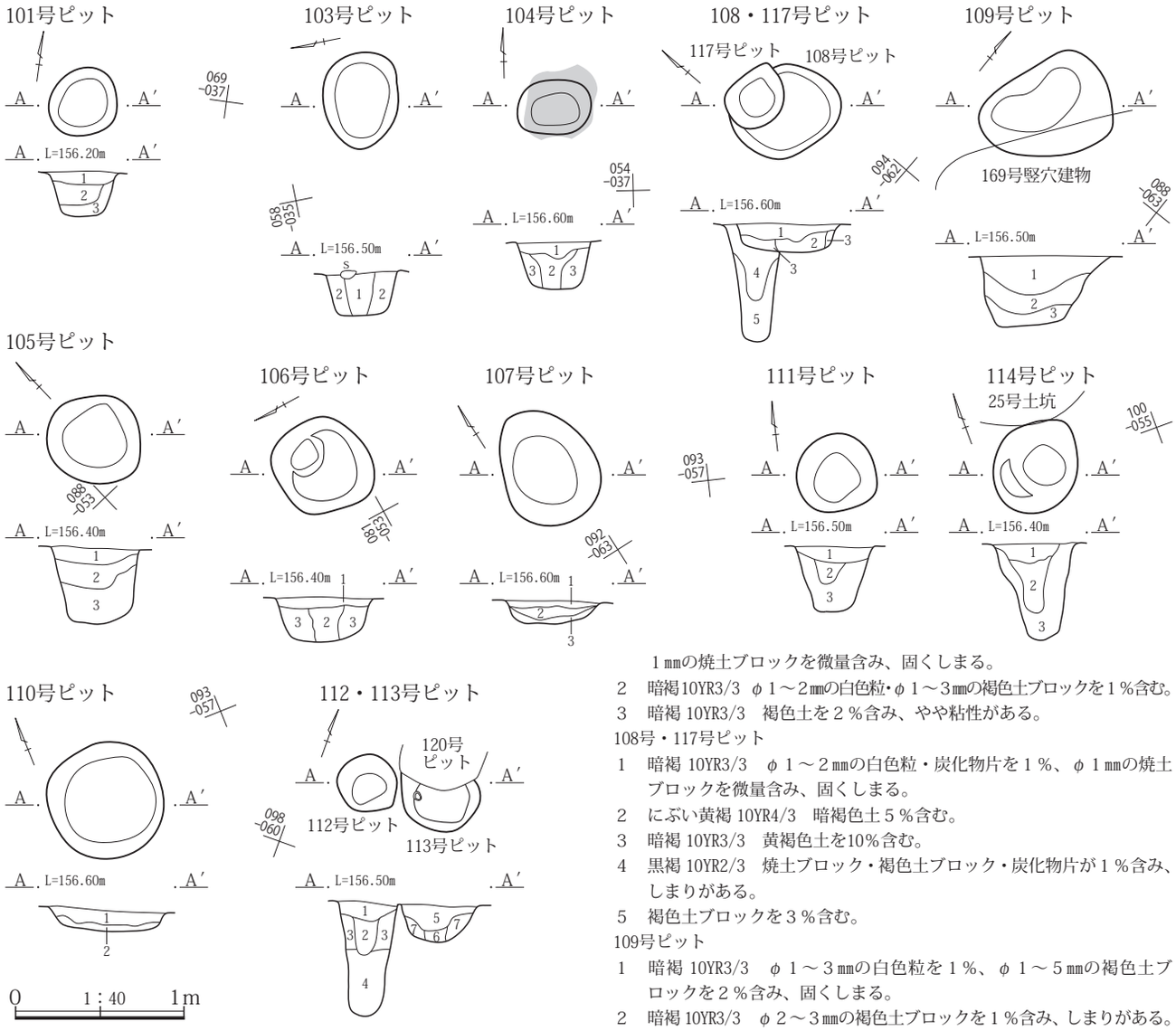
97号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。

98号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　１に類似、１より褐色土ブロックを多く含む。

99号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
3　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含む。

100号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　１に類似。焼土粒を含まない。
3　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを３％含み、やや粘性がある。

第300図　96～100号ピット遺構図



101号ピット
1　黒褐10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の赤褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　１に類似。
3　黒褐 10YR2/3　１・２に類似、褐色土ブロックを含み、粘性がやや強い。

103号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、赤褐色土を30％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。

104号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、赤褐色土を30％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや粘性がある。

105号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を２％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを５％、φ１～２㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを７％含む。

106号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ５～10㎜の褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。

107号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒・φ１～２㎜の炭化片を１％、φ１㎜の焼土ブロックを微量含み、固くしまる。
2　暗褐10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒・φ１～３㎜の褐色土ブロックを１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土を２％含み、やや粘性がある。

108号・117号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒・炭化物片を１％、φ１㎜の焼土ブロックを微量含み、固くしまる。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　黄褐色土を10％含む。
4　黒褐 10YR2/3　焼土ブロック・褐色土ブロック・炭化物片が１％含み、しまりがある。
5　褐色土ブロックを３％含む。

109号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の白色粒を１％、φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　やや粘性がある。φ２～３㎜の褐色土ブロックを５％含む。

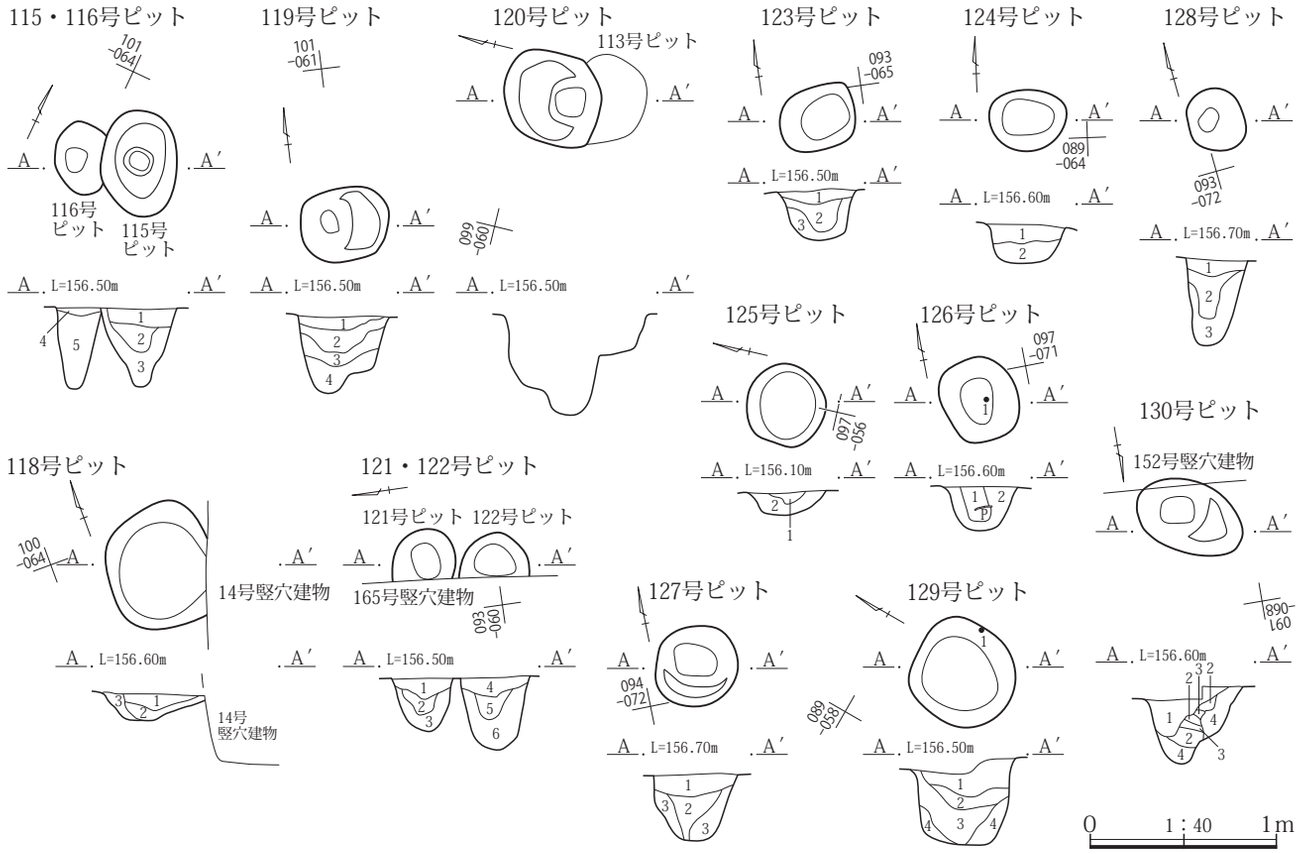
110号ピット
1　暗褐 10YR3/3　炭化物片２％、焼土ブロック１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　黄褐色土30％含む。

111号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒・φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を２％、φ１～３㎜の褐色土ブロックを２％含み、固くしまる。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含む。

112号・113号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土をブロック状に２％含み、しまりがある。
3　黒褐 10YR2/3　褐色土をブロック状に３％ふくむ。
4　黒褐 10YR2/3　しまりがあり粘性がある。
5　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒・φ１㎜の焼土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、しまりがある。
6　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
7　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を５％含む。

114号ピット
1　暗褐 10YR3/3　炭化物片２％、φ２㎜の褐色土ブロック・φ２㎜の焼土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に２％含む。

第301図　101・103～114・117号ピット遺構図



115号・116号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロック、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを３％、φ１㎜の白色粒を１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックが微量含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。
5　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含む。

118号ピット
1　暗褐 10YR3/3　炭化物片を２％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％、焼土ブロックを微量含む。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　１に類似、炭化物を含まない。

119号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の焼土ブロックを１％、φ１㎜の褐色土ブロック・φ１㎜の白色粒を１％、炭化物片を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に２％、φ２～３㎜の焼土ブロックを１％、炭化物片を１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　炭化物片を１％、褐色土をブロック状に１％含み、しまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　しまりがありやや粘性がある。

121号・122号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に15％含む。
4　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を２％、褐色土ブロックを１％含み、固くしまる。
5　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
6　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを５％含む。

123号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の褐色土ブロックを３％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％含む。

124号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒・φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。

125号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを微量含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含む。

126号ピット
1　暗褐 10YR3/3　炭化物片３％、φ１㎜の褐色土ブロック・φ１㎜の焼土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土をブロック状に５％、炭化物片を１％含み、しまりがある。

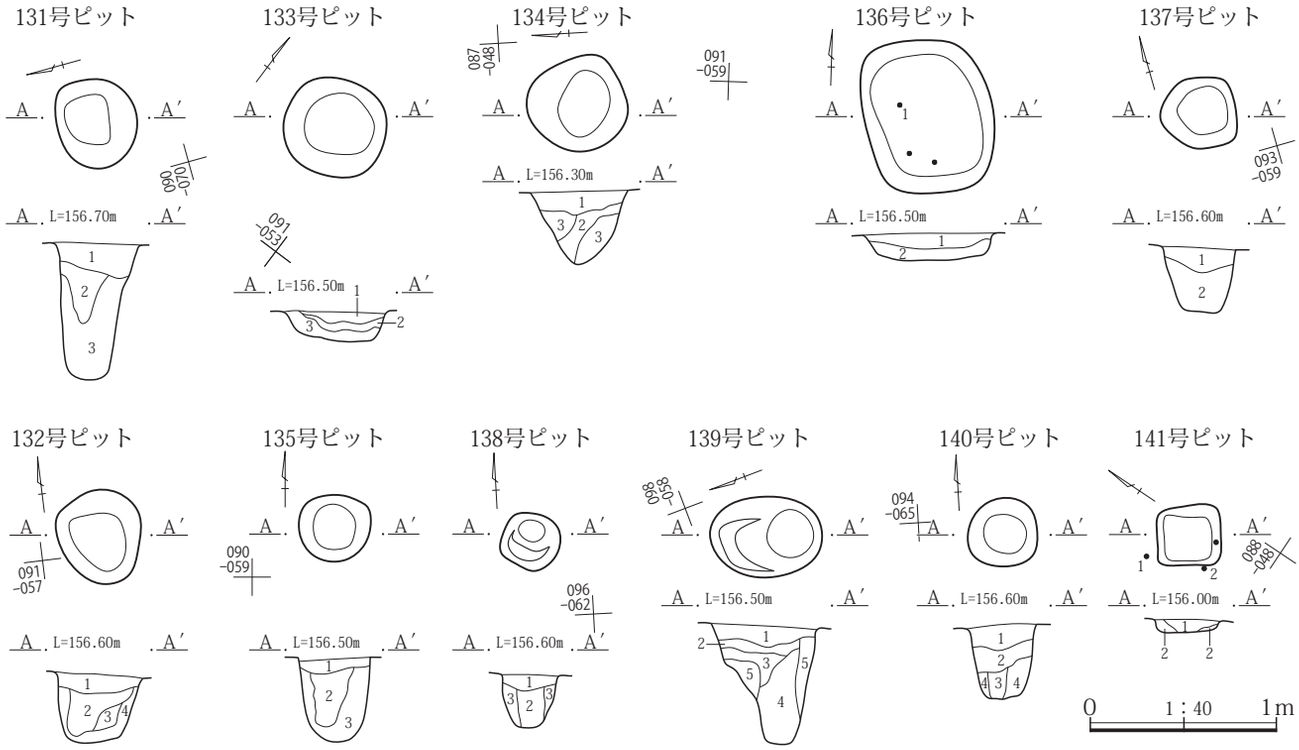
127号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含む。
3　暗褐 10YR3/3　黄褐色土をブロック状に５％含み、やや粘性がある。

128号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20％含む。
3　暗褐 10YR3/3　黄褐色土をブロック状に５％含み、やや粘性がある。

129号ピット
1　黒褐 10YR3/2　As-C・泥流土粒を霜降状に不明瞭な焼土を下半に不均等に含み、ややしまり強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/2　泥流土小ブロックと黒褐色土の混土。しまりやや強い弱粘性土。
3　黒褐 10YR2/2　不均等に泥流土小ブロックを含み、ややしまりがある細粒粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/4　泥流土ブロックを多量に含む。

130号ピット
1　黒褐 10YR3/1　As-C・泥流土粒を少量含み、ややしまり強い微粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　黒褐色土を基質に、不均等に泥流土の混じる、しまり強い。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　泥流土を主体に小ブロック状の黒褐色土を不均等に含み、しまり強い。
4　暗褐 10YR3/3　含有物がほとんどみられない、微粘性土。

第302図　115・116・118～130号ピット遺構図



131号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に20%、φ１～２㎜の白色粒を２％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを３％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に２％含む。

132号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒・φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％、炭化物片を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物片・φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10%含み、しまりがある。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を20%含む。

133号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の焼土ブロック・φ１㎜の褐色土ブロック・炭化物片を１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロック・φ１㎜の焼土ブロック・炭化物片を２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　にぶい黄褐色土を20%含み、やや脆い。

134号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％、φ１～２㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10%、φ１～２㎜の白色粒を１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。しまりがある。

135号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒・φ１㎜の焼土ブロック・φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含む。

136号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒・φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土を20%、φ１㎜の白色粒・φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまる。

137号ピット
1　暗褐 10YR3/3　炭化物片を２％、φ１～２㎜の焼土ブロック・φ１㎜の白色粒・φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％、炭化物片を１％含み、しまりがある。

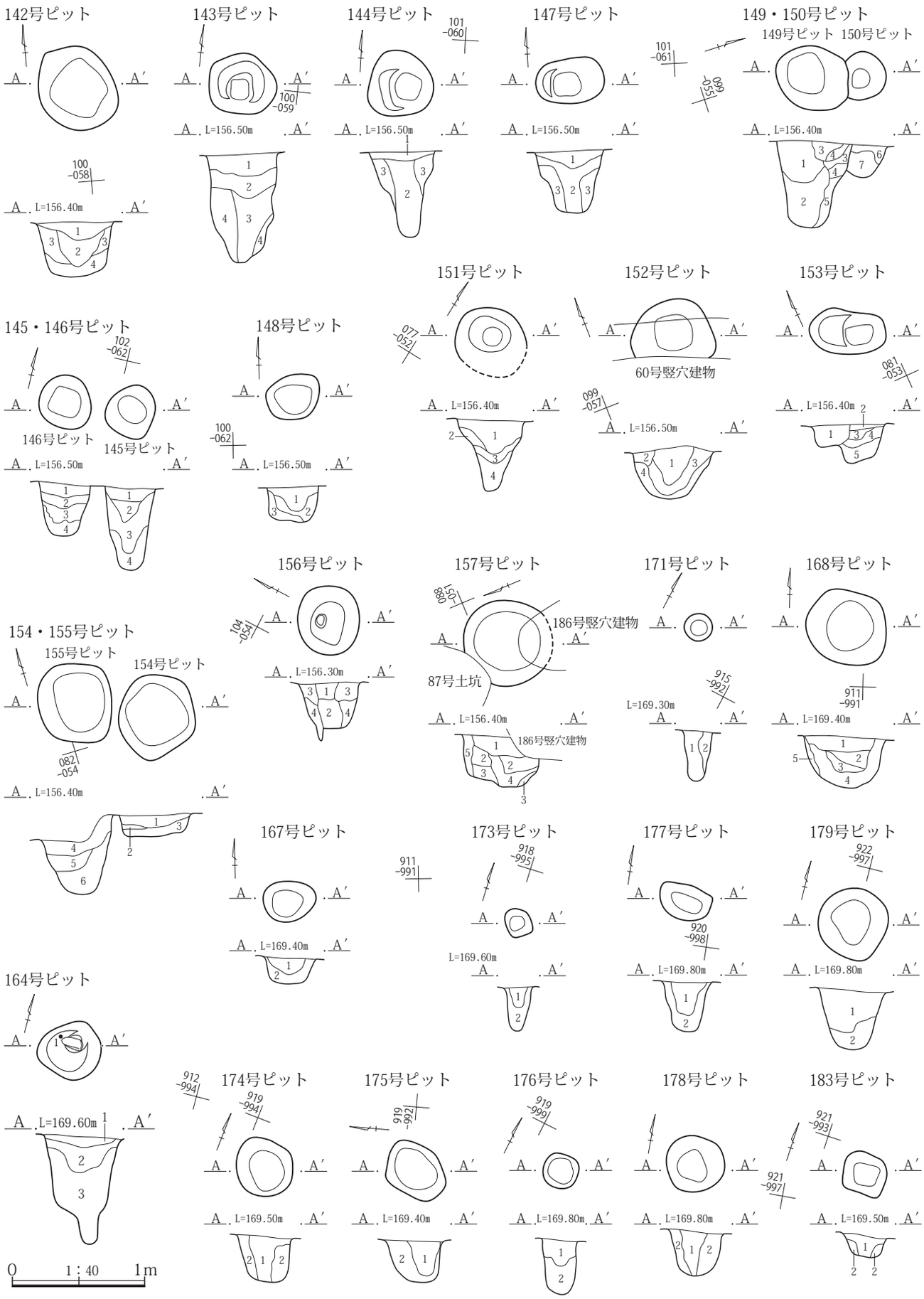
138号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に３％含む。

139号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％、炭化物片を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土を20%含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10%含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含み、やや粘性がある。
5　暗褐 10YR3/3　褐色土を20%含む。

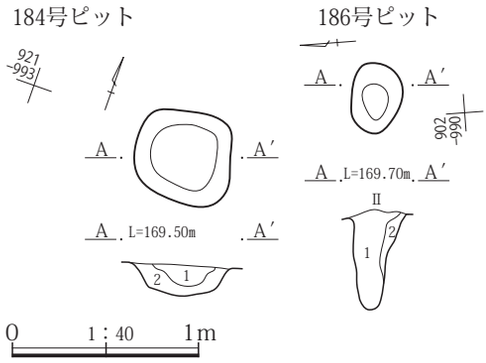
140号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒・φ１㎜の褐色土ブロックを２％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　しまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10%含む。

141号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土を30%含む。
2　褐色土 10YR4/4　暗褐色土を20%含み、やや脆い。

第303図　131～141号ピット遺構図

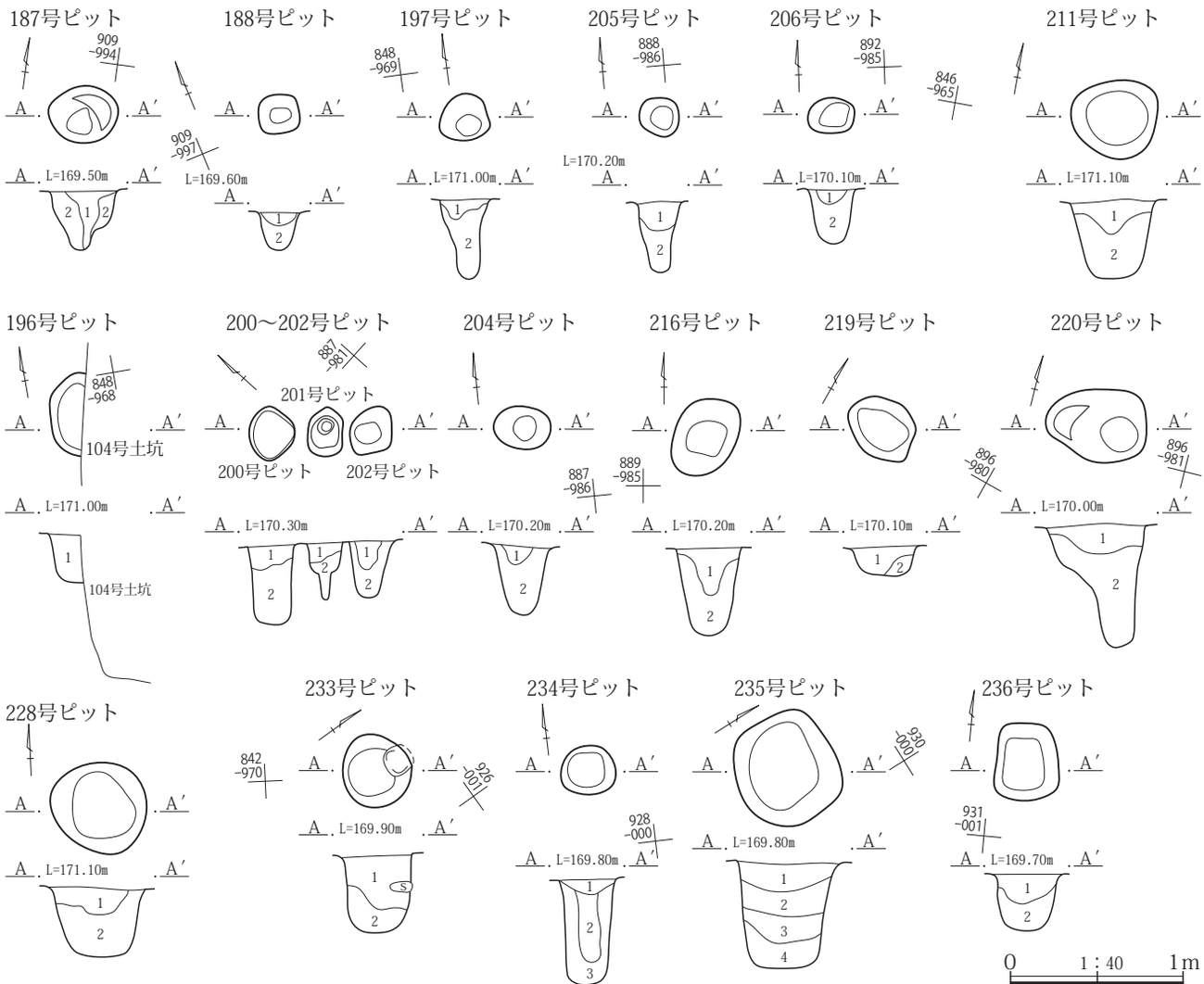


第304図　142～157・164・167・168・171・173～179・183号ピット遺構図



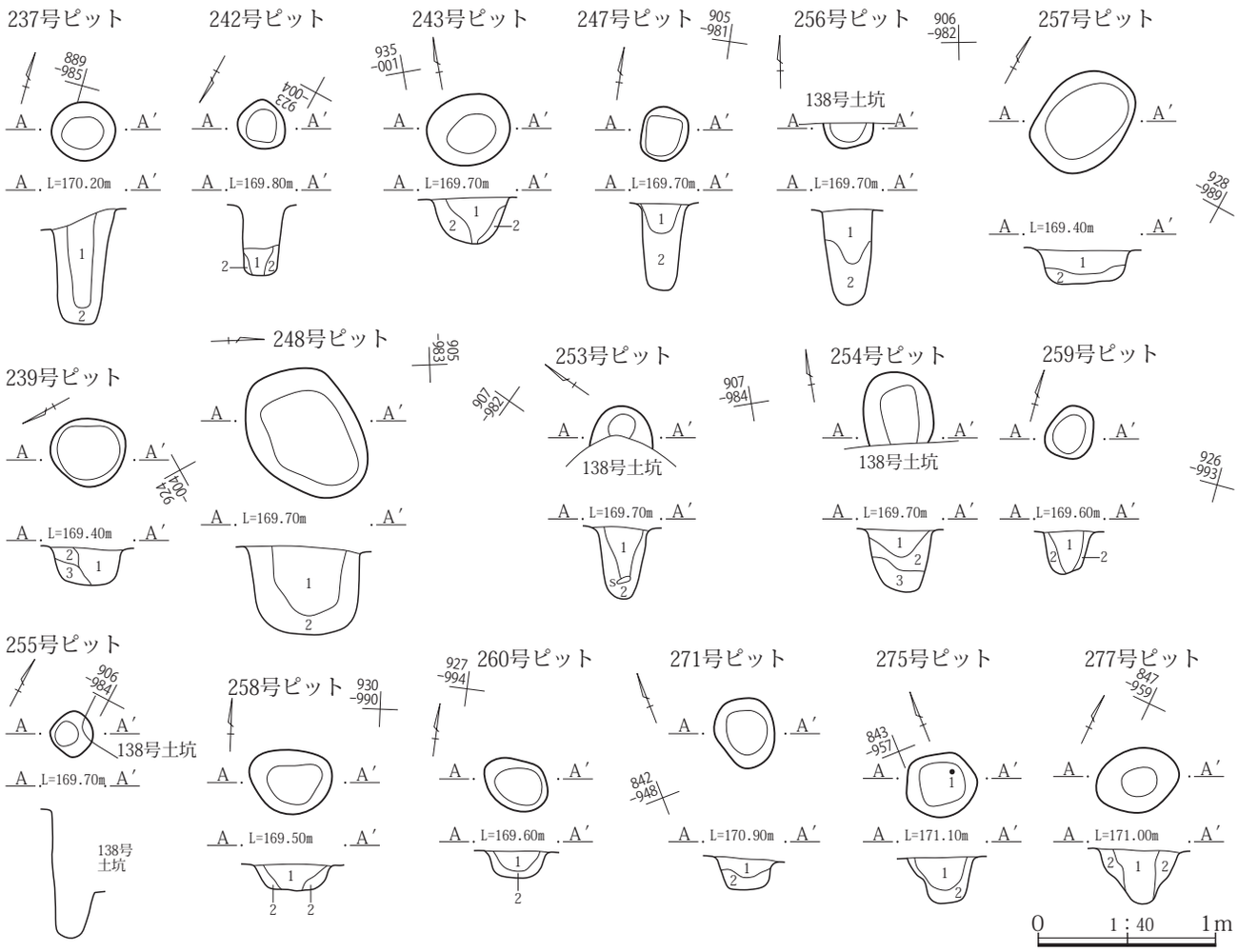
142号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の白色粒・φ１～３㎜の褐色土ブロックを２％、炭化物片を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％、炭化物片を１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒・φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％含み、やや粘性がある。
143号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に15％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土を斑紋状に10％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土を５％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に10％含む。
144号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒・φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に３％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含む。
145号・146号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを２％、φ１㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に５％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土を５％含み、やや柔らかい。
147号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒・φ１㎜の褐色土ブロック・φ１㎜の焼土ブロックを１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土を５％含み、やや柔らかい。
148号ピット
1　暗褐 10YR3/3　不揃いの泥流土ブロックと炭化物片・焼土粒を１％含み、固くしまる。
2　黒褐 10YR2/3　炭化物片・焼土粒を微量含み、しまりがある。
3　灰黄褐　10YR4/2　泥流土を含み、しまりが強い。
4　にぶい黄褐　10YR4/4　泥流土主体、しまりが強い。
5　黒褐 10YR2/3　２に類似。
6　暗褐 10YR3/3　１に類似。
7　暗褐 10YR3/3　炭化物片・焼土粒を多く含む。
149号・150号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％、炭化物片・φ１㎜の白色粒・φ１㎜の焼土ブロックを１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に３％、φ２㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土を20％含み、やや脆い。
151号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを３％、φ１～２㎜の白色粒を２％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土を５％、φ１㎜の白色粒を２％含み、しまりがある。
3　黒褐 10YR2/3　褐色土をブロック状に５％、φ１㎜の白色粒を微量含み、しまりがある。
4　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを微量に含み、しまりがありやや粘性がある。
152号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを５％、φ１㎜の白色粒・φ１㎜の焼土ブロック・炭化物片を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％含み、やや粘性がある。しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を20％含み、やや脆い。
153号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％、φ１～２㎜の白色粒を１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒・φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまる。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％含み、しまりがある。
5　暗褐 10YR3/3　褐色土を５％含み、やや粘性がある。しまりがある。
154号・155号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒・φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を10％、暗褐色土を10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％含む。
4　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを５％、φ１～２㎜の白色粒１％含み、固くしまる。
5　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に１％含み、やや粘性がある。
6　暗褐10YR3/3 褐色土をブロック状に３％含み、やや柔らかくやや粘性がある。
156号ピット
1　暗褐 10YR3/3　焼土ブロック・炭化物・φ１㎜の白色粒を各１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　焼土ブロックを２％含み、やや粘性がある。
3　暗褐10YR3/3 φ１～３㎜の焼土ブロックを３％、φ１㎜の白色粒を１％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土を５％、φ１㎜の焼土粒を１％含む。
157号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを５％、φ１～２㎜の白色粒１％含み、固くしまる。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に１％含み、やや粘性がある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に３％含み、やや柔らかくやや粘性がある。
4　黒褐 10YR2/3
5　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを５％、φ１～２㎜の白色粒１％含む。
164号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含み、ややしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜のAs-YPブロックを５％含む。
167号ピット
1　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
2　暗褐 10YR3/3　含有物を含まない。
168号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを２％含む。
2　黒褐10YR2/3 φ２～５㎜の褐色土ブロックを３％、暗褐色土を５％含む。
3　黒褐 10YR2/3　φ３㎜の褐色土ブロックを１％含む。
4　黒褐 10YR2/3　φ２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
5　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ２～５㎜のAs-YPブロックを２％含む。
171号ピット
1　黒褐 10YR2/3　ややしまる。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土を20％含む。
173号ピット
1　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
174号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや柔らかい。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～３㎜のAs-YPブロックを２％含む。
175号ピット
1　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを２％含む。
176号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土、φ１～５㎜のAs-YPを２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPを20％含む。
177号ピット
1　黒褐 10YR3/2　As-B混土、φ１～５㎜のAs-YPを２％含む。
2　黒褐10YR3/2　φ１～５㎜のAs-YPを３％含む。
178号ピット
1　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜のAs-YPブロックを２％含む。
179号ピット
1　黒褐 10YR2/3　ローム土を５％含み、やや脆い。
2　にぶい黄褐 10YR4/2　１に類似、ロームブロックが多く含む。
183号ピット
1　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　弱粘性土。
184号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　含有物はみられない、弱粘性土。
186号ピット
1　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを多く含む、砂質土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ロームブロック主体、地山の崩落土。

第305図　184・186号ピット遺構図



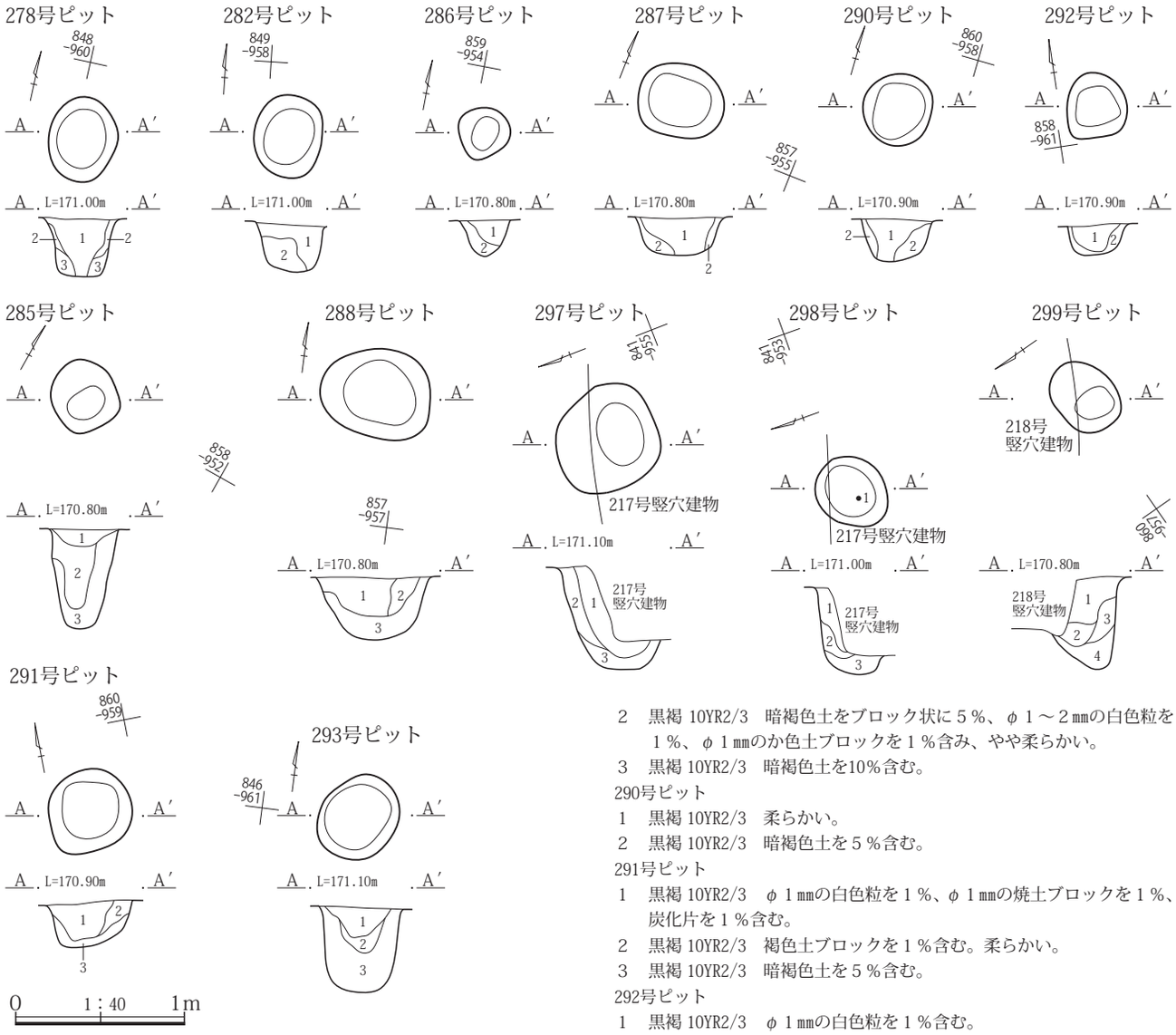
187号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-C混土、砂質土。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを若干含む。
188号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-C混土、ローム土粒を含む、砂質土。
2　黒褐 10YR2/3　ロームブロックを若干含む。
196号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
197号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ２～３㎜のAs-YPブロックを２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　しまりがある。
200号～202号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
204号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを５％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
205号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
206号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを２％含み、やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを不均等に含む。
211号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～５㎜のAs-YPブロックを３％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ２～５㎜のAs-YPブロックを５％含み、しまりがある。
216号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２㎜の暗褐色土ブロックを２％含み、やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
219号ピット
1　暗褐 10YR3/3　ローム土を30％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-Bを含み、脆い。
220号ピット
1　暗褐 10YR3/3　ロームブロック主体。
2　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを斑状に10％含む。
228号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを３％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ２～５㎜の褐色土ブロックを５％含む。
233号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜のAs-YPブロックを２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロック・As-YPブロックを10％含む。
234号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
3　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを３％含み、しまりがある。
235号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ２～５㎜のAs-YPブロックを３％とAs-Bを多く含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ２㎜のAs-YPブロックを２％含む。
3　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含む。
4　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を10％含む。
236号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜のAs-YPブロックを３％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜のAs-YPブロックを５％含む。

第306図　187・188・196・197・200～202・204～206・211・216・219・220・228・233～236号ピット遺構図



237号ピット
1　黒褐 10YR2/3　砂質土。
2　暗褐 10YR3/3　φ２㎜のAs-YPブロックを２％含む。
239号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土、やや柔らかい砂質土。
2　暗褐 10YR3/3　１に類似、ロームブロックを含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを５％含む。
242号ピット
1　暗褐 10YR3/3　不均等なロームブロックを含み、ややしまりが弱い。
2　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを10％含む。
243号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜のAs-YPブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜のAs-YPブロックを２％含む。
247号ピット
1　黒褐 10YR2/3　AYPブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを２％とAs-Bを含む。
248号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～20㎜のロームブロックを全体に５％、As-YPブロックを５％、As-Bが含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを20％含む。
253号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含む。
254号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを５％含む。φ１～２㎜の白色粒を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを１％含む。
3　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを５％含む。
255号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～10㎜のAs-YPブロックを５％含む。
2　褐 10YR4/4　As-YPを含む。
3　黒褐 10YR2/3
256号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを５％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを１％含む。
257号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐色土を５％含む。
258号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％、As-YPブロックを５％含む。
259号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを５％含む。
260号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　白色粒を２％含む。
271号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～３㎜褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
275号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％、φ１㎜の白色粒を１％含む。
277号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　やや脆い。

第307図　237・239・242・243・247・248・253～260・271・275・277号ピット遺構図



278号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜のAs-YPブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　やや脆い。

282号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の褐色土ブロックを２％、φ１㎜の白色粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜のロームブロックを５％含む。

285号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや柔らかい。
3　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％、φ１㎜の白色粒を１％含む。

286号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％含む。

287号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を10％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％。

288号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の白色粒を１％含み、やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土をブロック状に５％、φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１㎜のか色土ブロックを１％含み、やや柔らかい。
3　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を10％含む。

290号ピット
1　黒褐 10YR2/3　柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％含む。

291号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％、炭化片を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを１％含む。柔らかい。
3　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％含む。

292号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　黒褐色土を30％と暗褐色土ブロックを２％含む。

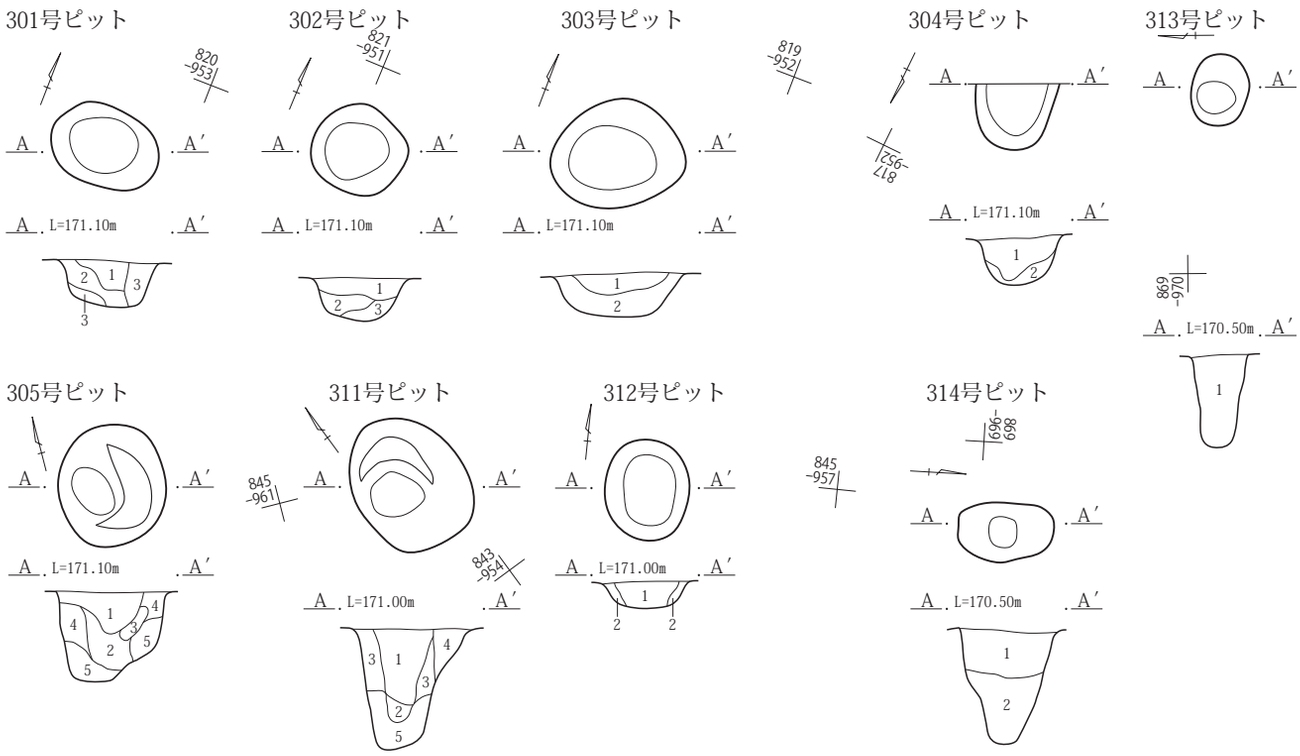
293号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～10㎜の褐色土ブロックを３％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～20㎜の褐色土ブロックを５％含む。

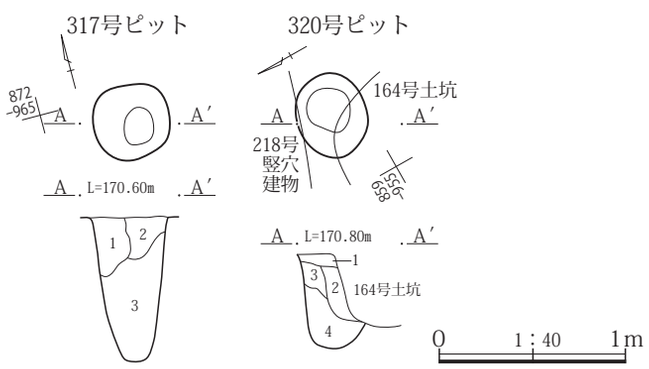
297号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～５㎜のAs-YPブロックを５％、φ１～２㎜の焼土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜のAs-YPブロックを２％、φ１～２㎜の焼土ブロックを１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜のAs-YPブロックを７％含む。

298号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％、φ１～２㎜の焼土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを20％含む。

299号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土、φ１～２㎜の白色粒、黒褐色土粒を各１％含む。
2　黒褐 10YR3/2　φ２～５㎜のAs-YPを３％含む。
3　黒褐 10YR3/2　φ２～５㎜のAs-YPを２％含む。
4　暗褐 10YR3/3　暗褐色土ブロックを20％、As-YP、ロームブロックを２％含む。

第308図　278・282・285～288・290～293・297～299号ピット遺構図





301号ピット
1　黒褐 10YR3/2　As-C混じりのやや細粒土。不均等に不明瞭なローム土を含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-Cを少量と不明瞭なローム土を多く含む、微粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土と黒褐色土の混土、ややしまり強い。

302号ピット
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、やや細粒土でローム粒を含み、ややしまり強い。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム粒と黒褐色土の混土、ややしまり強い弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを不均等に含み、ややしまりの強い弱粘性土。

303号ピット
1　黒褐 10YR2/3　しまりがありやや粘性がある。
2　暗褐 10YR3/3　しまりがあり粘性土あり。

304号ピット
1　黒褐 10YR3/2　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　黒褐色土を10％含み、やや粘性がある。

305号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～５㎜のロームブロックを５％、As-YPを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPと暗褐色土ブロックを含む。
3　暗褐 10YR3/3　As-YP、白色粒を１％含む。
4　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを５％含む。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　As-YPを10％とロームブロックを５％含む。

311号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜のAs-YPを２％と焼土ブロックを微量含む。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土を５％含み、柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の暗褐色土を１％含む。
4　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の暗褐色土を１％含み、しまりが強い。
5　灰黄褐 10YR4/2　褐色土ブロックを５％含む。

312号ピット
1　黒褐 10YR3/2　暗褐色土ブロックを１％と白色粒を１％含む。
2　黒褐 10YR3/2　褐色土を５％含む。

313号ピット
1　暗褐 10YR/3/3　褐色土ブロックとAs-YPブロックを10％含む。

314号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを１％、As-YPブロックを30％含む。
2　暗褐 10YR3/3　ロームブブロックを20％含む。

317号ピット
1　灰黄褐 10YR4/2　φ５～10㎜のロームブロック、As-YPをやや多く焼土・炭化物を不均等に含み、しまり強い微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　As-YPを少量含む以外、混入物少ない、微粘性細粒土。
3　灰黄褐 10YR4/2　１に近いが、しまり弱く。

320号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPを１％含む。
2　灰黄褐 10YR4/2　褐色土ブロックを５％含む。
3　黒褐 10YR2/3　含有物はみられない。
4　暗褐色土10YR3/3　褐色土を含む。

第309図　301～305・311～314・317・320号ピット遺構図

第５表　ピット一覧(古墳時代～飛鳥・奈良・平安時代)

区	№.	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複	時期	備考
1	4	122/-076	不定形	0.44	0.42	0.51	N-30°-W		古代か	
1	5	118/-075	円形	0.45	0.45	0.33	N-40°-W		古代か	
1	7	123/-073	楕円形	0.58	0.36	0.29	N-５°-E		古代	
1	9	121/-070	円形	0.36	0.28	0.37	N-12°-E		古代	
1	10	119/-074	円形	0.44	0.38	0.46	N-55°-E		古代	
1	11	117/-074	不定形	0.50	0.42	0.38	N-10°-W		古代	
1	18	113/-055	方形	0.35	0.32	0.64	N-55°-W	26号竪穴建物	古代	
1	23	103/-050	円形	0.54	0.46	0.39	N-５°-E	98号竪穴建物	古代	須恵器甕
1	24	104/-051	不定形	0.40	0.30	0.28	N-60°-W	23号土坑	古代	須恵器椀(10Ｃ.後半)
1	25	085/-042	円形	0.70	0.68	0.62	N-50°-W		古代	
1	27	088/-043	円形	0.92	(0.62)	0.45	N-５°-E	１号溝	古代	
1	28	085/-043	円形	0.57	0.53	0.39	N-12°-W	１号溝	古代	
1	29	085/-045	円形	0.62	0.56	0.25	N-68°-E		古代	土師器　中位破片
1	30	074/-036	円形	0.44	0.42	0.39	N-80°-E		古代	
1	31	077/-037	円形	0.38	0.36	0.19	N-30°-E		古代	
1	32	077/-038	円形	0.48	0.46	0.22	N-12°-E		古代	
1	33	075/-036	円形	0.42	0.40	0.20	N-78°-E		古代	
1	34	102/-054	円形	0.40	(0.28)	0.69	N-10°-E		古代	須恵器杯・椀(８Ｃ.後半)
1	35	062/-030	円形	0.52	0.48	0.31	N-10°-W	93号竪穴建物	古代	
1	36	066/-030	円形	0.70	0.68	0.13	N-80°-W		古代	須恵器杯(９Ｃ.前半)
1	37	075/-035	円形	0.62	0.52	0.19	N-18°-W	86号竪穴建物	古代	
1	38	095/-045	円形	0.27	0.26	0.20	N-30°-W	３号溝	古代	
1	40	096/-045	円形	0.30	0.28	0.27	N-75°-W		古代	
1	41	096/-045	円形	0.34	0.32	0.22	N-20°-W		古代	
1	42	098/-045	円形	0.32	0.26	0.22	N-44°-E		古代	
1	43	099/-045	円形	0.26	0.25	0.24	N-60°-E		古代	
1	44	105/-053	円形	0.56	(0.40)	0.25	N-52°-E	23号土坑	古代	
1	45	105/-053	円形	0.42	0.42	0.36	N-20°-E	65号竪穴建物	古代	須恵器
1	46	106/-050	円形	0.32	0.30	0.29	N-40°-W		古代	
1	47	106/-050	円形	0.35	0.30	0.17	N-60°-E		古代	
1	48	105/-050	不定形	0.64	0.50	0.42	N-40°-E		古代	土師器
1	49	105/-050	円形	0.32	0.30	0.33	N-10°-W		古代	
1	50	105/-049	円形	0.42	0.34	0.59	N-30°-W		古代	
1	51	107/-048	円形	0.44	0.36	0.45	N-52°-E		古代	
1	52	107/-048	円形	0.38	0.36	0.21	N-50°-W		古代	
1	53	108/-048	円形	0.58	0.54	0.69	N-30°-W		古代	
1	54	103/-049	円形	0.32	0.30	0.47	N-50°-W		古代	
1	55	088/-043	長方形	0.65	0.52	0.38	N-35°-W		古代	
1	56	086/-043	円形	0.56	0.47	0.39	N-50°-E		古代	
1	57	087/-044	楕円形	(0.70)	(0.53)	0.58	N-25°-W	39号土坑	古代	
1	58	103/-049	円形	0.26	0.22	0.18	N-50°-E	95号竪穴建物	古代	
1	59	103/-049	円形	0.28	0.26	0.36	N-62°-E		古代	
1	62	090/-044	円形	0.58	0.56	0.46	N-42°-E	126号竪穴建物	古代	
1	63	106/-078	楕円形	0.72	0.54	0.39	N-３°-W	50号竪穴建物	古代	
1	64	074/-079	方形	0.42	0.36	0.30	N-28°-W		古代	
1	65	076/-080	楕円形	0.66	0.54	0.29	N-65°-E		古代	
1	66	076/-079	円形	0.52	0.44	0.33	N-25°-E		古代	
1	67	077/-078	楕円形	0.60	0.42	0.32	N-65°-W		古代	
1	69	075/-088	円形	0.62	0.56	0.17	N-42°-W		古代	
1	70	079/-084	楕円形	0.60	0.52	0.52	N-35°-E		古代	
1	71	105/-081	楕円形	0.76	0.50	0.27	N-５°-E		古代	
1	72	099/-075	楕円形	0.58	0.50	0.30	N-45°-W		古代	
1	73	099/-076	楕円形	0.62	0.42	0.30	N-15°-E		古代	
1	74	100/-078	円形	0.62	0.58	0.53	N-46°-W		古代	土師器
1	75	100/-080	方形	0.36	0.36	0.26	N-12°-E		古代	土師器
1	76	105/-080	円形	0.66	0.66	0.30	N-10°-E		古代	土師器
1	78	106/-080	円形	0.46	0.40	0.47	N-12°-E	40号土坑	古代	
1	79	100/-081	円形	0.46	0.32	0.44	N-20°-W	41号.44号竪穴建物	古代	
1	80	100/-082	円形	0.45	0.40	0.25	N-40°-W	41号.44号竪穴建物	古代	土師器
1	81	101/-075	円形	0.50	0.48	0.15	N-23°-E	18号.20号竪穴建物	古代	須恵器
1	82	099/-081	円形	0.40	0.30	0.24	N-68°-W	44号竪穴建物.131号竪穴建物	古代	
1	83	100/-081	円形	0.38	0.36	0.28	N-10°-E	44号竪穴建物	古代	
1	84	095/-080	方形	0.42	0.42	0.39	N-15°-E	64号竪穴建物	古代	
1	85	051/-042	円形	0.48	0.42	0.20	N-10°-E	136号竪穴建物	古代	
1	86	052/-043	円形	0.54	0.44	0.16	N-10°-E		古代	
1	87	052/-044	円形	0.56	0.52	0.16	N-16°-E		古代	
1	88	053/-043	円形	0.36	0.32	0.15	N-30°-W		古代	
1	89	054/-045	円形	0.44	0.42	0.34	N-51°-W		古代	

区	№	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複	時期	備考
1	90	055/-043	円形	0.57	0.50	0.13	N-10°-E		古代	
1	91	055/-043	円形	0.48	0.46	0.09	N-30°-W		古代	
1	92	055/-039	円形	0.32	0.30	0.21	N-35°-W		古代	
1	93	054/-038	方形	0.46	0.44	0.15	N-65°-W		古代	
1	94	054/-037	円形	0.46	0.44	0.25	N-40°-E		古代	
1	95	055/-037	円形	0.68	0.58	0.30	N-40°-E		古代	
1	96	056/-037	楕円形	1.04	0.44	0.29	N-35°-E		古代	
1	97	057/-036	円形	0.44	0.40	0.19	N-50°-W		古代	
1	98	061/-042	円形	0.58	0.56	0.16	N-18°-W		古代	
1	99	063/-041	方形	0.40	0.40	0.24	N-68°-E		古代	
1	100	063/-041	円形	0.66	0.42	0.28	N-58°-W		古代	
1	101	069/-037	円形	0.40	0.38	0.28	N-18°-E		古代	
1	103	057/-035	円形	0.58	0.44	0.35	N-65°-W		古代	土師器杯(８Ｃ.前半)
1	104	054/-037	楕円形	0.42	0.30	0.29	N-80°-W		古代	
1	105	088/-053	円形	0.58	0.55	0.46	N-３°-W	172号竪穴建物	古代	土師器杯
1	106	081/-053	円形	0.62	0.58	0.37	N-45°-W		古代	
1	107	092/-063	円形	0.72	0.57	0.18	N-10°-W		古代	
1	108	095/-062	円形	(0.66)	0.56	0.17	N-60°-W	117号ピット	古代	
1	109	088/-065	楕円形	0.78	0.60	0.48	N-32°-E	169号.173号竪穴建物	古代	
1	110	092/-058	円形	0.72	0.72	0.10	N-55°-W		古代	須恵器杯蓋身片
1	111	093/-057	円形	0.48	0.48	0.49	N-23°-E		古代	
1	112	098/-060	円形	0.36	0.34	0.69	N-65°-W		古代	
1	113	098/-059	円形	(0.48)	0.48	0.35	N-75°-E	120号ピット	古代	土師器　上位
1	114	100/-055	円形	0.60	0.50	0.67	N-57°-E	25号土坑	古代	
1	115	100/-064	楕円形	0.56	0.40	0.43	N-27°-W	116号ピット	古代	土師器
1	116	100/-064	円形	0.39	(0.25)	0.45	N-30°-W	115号ピット	古代	土師器
1	117	095/-062	円形	0.42	0.34	0.69	N-70°-E	108号ピット	古代	
1	118	100/-064	円形	0.68	(0.52)	0.14	N-20°-E	14号竪穴建物56竪穴建物	古代	
1	119	100/-060	円形	0.46	0.40	0.40	N-20°-E		古代	
1	120	099/-060	方形	0.54	0.52	0.58	N-４°-E	113号ピット	古代	
1	121	093/-066	円形	(0.38)	(0.28)	0.30	N-38°-W	165号竪穴建物	古代	
1	122	093/-066	円形	(0.37)	(0.24)	0.38	N-５°-E	165号竪穴建物	古代	
1	123	093/-065	円形	0.46	0.40	0.27	N-45°-E		古代	
1	124	089/-065	円形	0.42	0.40	0.21	N-84°-E		古代	
1	125	097/-056	円形	0.44	0.42	0.45	N-40°-E	51号.60号竪穴建物	古代	灰釉陶器椀(10Ｃ.前半)
1	126	097/-071	円形	0.46	0.38	0.26	N-15°-E	53号竪穴建物	古代	須恵器杯(９Ｃ.後半)
1	127	094/-072	円形	0.44	0.44	0.37	N-25°-E		古代	土師器
1	128	093/-072	円形	0.36	0.32	0.48	N-20°-W		古代	
1	129	088/-058	円形	0.58	0.56	0.43	N-60°-E	183号竪穴建物	古代	灰釉陶器瓶(10Ｃ.)
1	130	090/-068	楕円形	0.60	0.37	0.46	N-50°-W	152号.165号竪穴建物	古代	土師器甕上位
1	131	090/-070	円形	0.48	0.47	0.73	N-30°-E		古代	
1	132	091/-057	円形	0.50	0.46	0.39	N-５°-W		古代	土師器片
1	133	092/-053	円形	0.56	0.55	0.19	N-60°-W		古代	
1	134	087/-048	円形	0.54	0.52	0.41	N-15°-E	186号竪穴建物	古代	
1	135	090/-059	円形	0.38	0.38	0.47	N-50°-W		古代	土師器片
1	136	090/-058	長方形	0.82	0.62	0.15	N-15°-W		古代	土師器坩(４Ｃ.)
1	137	093/-059	円形	0.42	0.40	0.32	N-25°-W		古代	
1	138	096/-062	円形	0.32	0.32	0.28	N-15°-W		古代	
1	139	098/-058	楕円形	0.60	0.42	0.63	N-20°-E	60号竪穴建物	古代	
1	140	094/-065	円形	0.40	0.38	0.45	N-65°-E		古代	
1	141	088/-048	方形	0.34	0.32	0.01	N-35°-W	15号.184号竪穴建物	古代	須恵器椀(９Ｃ.前半)、灰釉陶器椀
1	142	100/-058	円形	0.68	0.55	0.44	N-40°-W		古代	
1	143	100/-060	円形	0.52	0.46	0.85	N-５°-E		古代	須恵器皿(９Ｃ.後半)
1	144	101/-060	円形	0.52	0.50	0.64	N-30°-W		古代	
1	145	102/-062	円形	0.40	0.38	0.64	N-22°-W		古代	
1	146	102/-062	円形	0.42	0.38	0.41	N-35°-W		古代	
1	147	101/-061	楕円形	0.50	0.32	0.49	N-77°-W		古代	
1	148	100/-061	円形	0.42	0.38	0.30	N-50°-E		古代	
1	149	100/-054	楕円形	0.58	0.46	0.63	N-43°-E	150号ﾋﾟｯﾄ	古代	
1	150	100/-054	円形	0.46	0.30	0.24	N-30°-E	149号ﾋﾟｯﾄ	古代	
1	151	076/-051	円形	(0.53)	0.52	0.46	N-45°-W	167号竪穴建物	古代	
1	152	100/-056	円形	0.62	(0.40)	0.36	N-30°-E	60号竪穴建物	古代	
1	153	081/-053	楕円形	0.56	0.34	0.38	N-60°-W		古代	
1	154	082/-053	円形	0.64	0.58	0.18	N-15°-E		古代	
1	155	082/-054	円形	0.66	0.62	0.67	N-20°-E		古代	
1	156	104/-054	円形	0.52	0.50	0.35	N-28°-E	128号竪穴建物	古代	
1	157	088/-053	円形	0.67	0.64	0.41	N-45°-E	186号竪穴建物.87号土坑	古代	
3	164	912/-994	円形	0.44	0.43	0.65	N-14°-E		古代	須恵器杯(11Ｃ.)
3	167	910/-991	楕円形	0.40	0.31	0.21	N-22°-E		古代	
3	168	911/-990	円形	0.64	0.56	0.41	N-16°-E		古代	

区	№	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複	時期	備考
3	171	915/-992	円形	0.22	0.22	0.40	N-17°-W		古代	
3	173	917/-994	円形	0.22	0.19	0.34	N-37°-W		古代	
3	174	918/-993	円形	0.46	0.42	0.37	N-43°-W		古代	
3	175	918/-992	楕円形	0.50	0.38	0.33	N-44°-E		古代	
3	176	918/-998	円形	0.28	0.25	0.43	N-23°-E		古代	
3	177	920/-998	楕円形	0.40	0.26	0.42	N-74°-W		古代	
3	178	921/-997	円形	0.42	0.40	0.36	N-17°-W		古代	
3	179	921/-996	円形	0.56	0.50	0.46	N-14°-W		古代	
3	183	920/-992	円形	0.34	0.30	0.20	N-３°-W		古代	
3	184	920/-991	円形	0.52	0.50	0.21	N-15°-W		古代	
3	186	902/-989	楕円形	0.36	0.25	0.47	N-69°-W		古代	
3	187	908/-993	円形	0.38	0.34	0.38	N-47°-E		古代	
3	188	909/-996	円形	0.24	0.23	0.26	N-17°-E		古代	
4	196	848/-968	楕円形	0.48	(0.20)	0.32	N-12°-E	104号土坑	古代	
4	197	848/-969	円形	0.30	0.28	0.51	N-80°-W		古代	
3	200	886/-981	楕円形	0.30	0.27	0.43	N-９°-E		古代	
3	201	886/-981	楕円形	0.29	0.20	0.35	N-60°-E		古代	
3	202	886/-981	楕円形	0.26	0.24	0.35	N-44°-E		古代	
3	204	887/-986	楕円形	0.34	0.23	0.41	N-85°-W		古代	
3	205	888/-986	円形	0.24	0.22	0.41	N-11°-E		古代	
3	206	891/-985	楕円形	0.28	0.20	0.32	N-27°-E		古代	
4	211	845/-964	円形	0.50	0.46	0.45	N-65°-E		古代	
3	216	889/-984	楕円形	0.48	0.36	0.52	N-21°-E		古代	
3	219	895/-980	楕円形	0.40	0.34	0.17	N-19°-W		古代	
3	220	896/-981	楕円形	0.58	0.43	0.44	N-77°-E		古代	
4	228	842/-970	円形	0.56	0.54	0.41	N-77°-W		古代	
3	233	925/-001	円形	0.42	0.40	0.47	N-32°-E		古代	
3	234	928/-000	円形	0.32	0.28	0.63	N-９°-E		古代	
3	235	929/-000	楕円形	0.62	0.58	0.63	N-４°-E		古代	
3	236	931/-000	方形	0.45	0.35	0.32	N-９°-W		古代	
3	237	888/-984	円形	0.36	0.33	0.66	N-８°-W		古代	
3	239	924/-003	楕円形	0.43	0.38	0.20	N-28°-E		古代	
3	242	923/-003	円形	0.28	0.26	0.30	N-27°-W		古代	
3	243	934/-000	楕円形	0.45	0.40	0.25	N-60°-E		古代	
3	247	904/-981	楕円形	0.32	0.24	0.50	N-４°-E		古代	
3	248	904/-992	楕円形	0.80	0.60	0.49	N-48°-E		古代	
3	253	906/-981	円形	(0.35)	(0.16)	0.40	N-59°-E	138号土坑	古代	
3	254	906/-983	楕円形	(0.40)	(0.39)	0.35	N-２°-W	138号土坑	古代	
3	255	905/-984	円形	0.26	―	0.73	N-28-W	138号土坑	古代	
3	256	905/-982	円形	(0.26)	(0.13)	0.53	N-７°-W	138号土坑	古代	
3	257	927/-989	楕円形	0.62	0.47	0.21	N-22°-E		古代	
3	258	929/-990	楕円形	0.46	0.37	0.18	N-68°-W		古代	
3	259	926/-993	楕円形	0.30	0.26	0.26	N-８°-E		古代	
3	260	926/-993	楕円形	0.40	0.28	0.14	N-65°-W		古代	
4	271	842/-947	円形	0.40	0.34	0.21	N-７°-E		古代	
4	275	842/-957	円形	0.40	0.36	0.27	N-80°-E		古代	土師器杯(７Ｃ.後半)
4	277	847/-959	円形	0.44	0.36	0.34	N-65°-E		古代	
4	278	848/-960	円形	0.50	0.40	0.37	N-14°-W		古代	
4	282	849/-958	円形	0.48	0.32	0.32	N-10°-E		古代	
4	285	858/-953	円形	0.42	0.40	0.59	N-50°-E		古代	
4	286	858/-954	円形	0.32	0.30	0.24	N-７°-E		古代	
4	287	857/-955	円形	0.53	0.46	0.23	N-79°-W		古代	
4	288	858/-956	円形	0.66	0.52	0.38	N-85°-W		古代	須恵器
4	290	860/-958	円形	0.42	0.40	0.26	N-15°-E		古代	
4	291	860/-959	円形	0.52	0.50	0.26	N-25°-E		古代	
4	292	858/-961	円形	0.38	0.32	0.20	N-10°-E		古代	
4	293	846/-960	円形	0.50	0.46	0.51	N-63°-E		古代	
4	296	849/-957	円形	0.52	0.42	0.16	N-88°-W		縄文	
4	297	842/-955	円形	0.62	0.60	0.57	N-85°-W	217号竪穴建物	古代	
4	298	841/-955	円形	0.44	0.40	0.51	N-30°-E	217号竪穴建物	古代	須恵器杯蓋(８Ｃ.後半)
4	299	860/-958	円形	0.44	0.34	0.57	N-83°-W		古代	
5	301	819/-953	楕円形	0.60	0.42	0.26	N-87°-W		古代	
5	302	820/-950	円形	0.52	0.50	0.24	N-67°-E		古代	
5	303	818/-952	楕円形	0.70	0.56	0.35	N-40°-E		古代	
5	304	816/-952	楕円形	(0.40)	―	0.12	N-17°-W		古代か	
4	305	846/-962	円形	0.64	0.56	0.48	N-５°-E		古代	
4	311	844/-955	楕円形	0.74	0.60	0.65	N-８°-E		古代	
4	312	845/-957	楕円形	0.54	0.44	0.19	N-７°-W		古代	
4	313	869/-970	楕円形	0.38	0.28	0.48	N-72°-W		古代	
4	314	869/-969	楕円形	0.50	0.32	0.65	N-10°-W		古代	
4	317	872/-964	円形	0.40	0.36	0.78	N-20°-E		古代	
4	320	859/-955	円形	0.44	0.36	0.52	N-67°-W	164号土坑	古代	

第７項　遺物集中

位置　１区西寄り、Ｘ＝37063～37071、Ｙ＝-85065～-85072に位置する。この地点は西から東へ向けてのやや傾斜の急な地点である。

重複　他の遺構との重複は確認されていない。

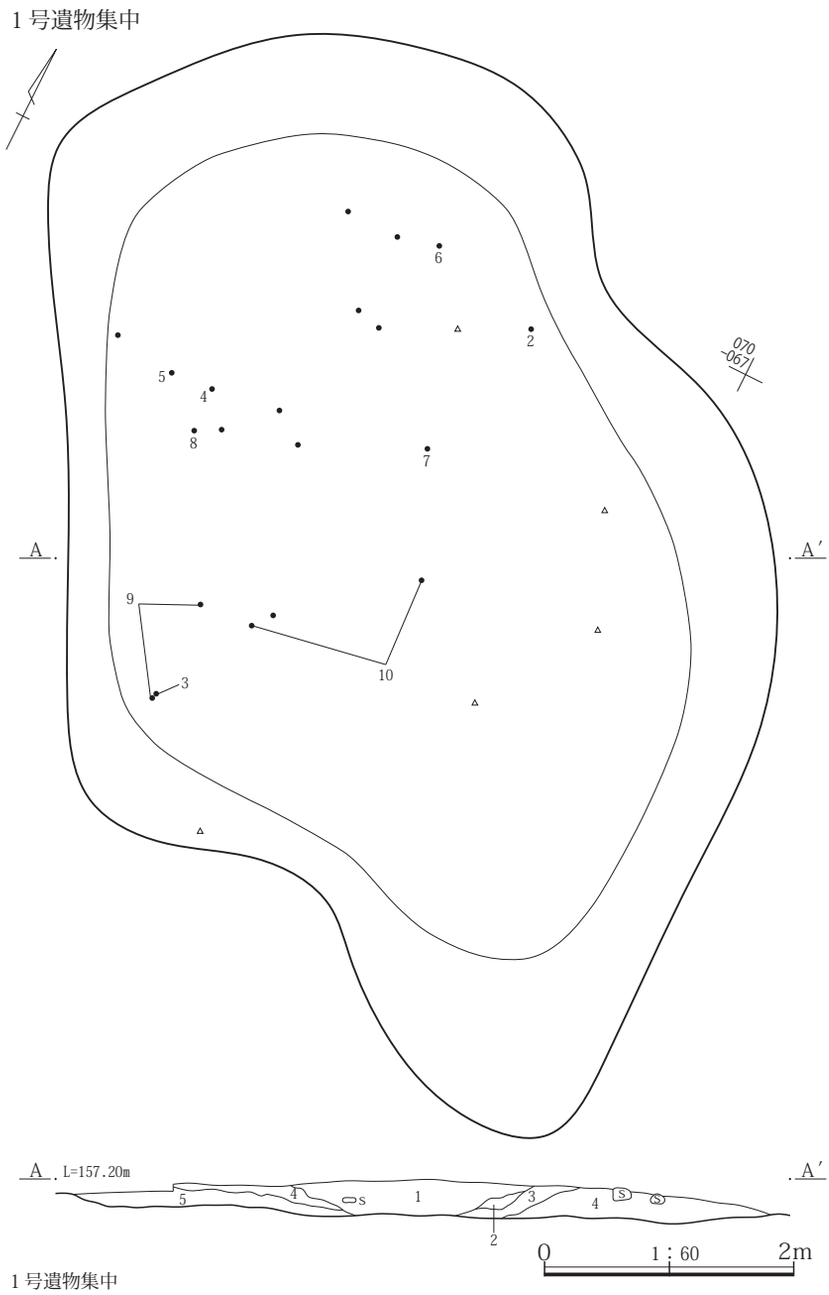
形状　浅い土坑状を呈するが、明確な落ち込みは検出されていない。平面形態は不定形を呈す。

規模　南北方向は9.0m、東西方向は5.80mを測る。

埋没状態　土層断面の観察では東西から土砂が流入した様相が確認できたが、西側の高所からの流入は自然であるのに対し、東側は西側に比べると40㎝ほど低位であることから不自然な堆積である。

出土遺物　遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・椀・壺類・甕・羽釜などが出土しているが、大部分は破片で接合率も低かった。そのため図示できた遺物は須恵器杯蓋、杯、盤、壺、羽釜、甕など10点だけであった。

所見　本遺構は、土器がそれも破片が集中して出土したことから投棄なり廃棄が行われた場所と想定される。その時期は３の須恵器杯が９世紀前半代、７の須恵器羽釜が10世紀前半代の年代観が与えられることから、１世紀近い間、利用されたと想定される。しかし、１世紀に及ぶ長期間にしては出土した土器量は必ずしも多いとは言えない。こうしたことから投棄、廃棄以外の使用方法も検討する必要があると考える。



１号遺物集中
1　黒褐 10YR3/2　As-C混土、焼土粒、土器粒、炭化物粒などをやや多く含み、しまり強い微粘性土。
2　暗灰黄 2.5Y4/2　細砂土が基質、泥流土粒や黒褐色土をブロック状に含む。
3　暗褐 10YR3/3　As-Cを少量と不明瞭な泥流土を含む、細粒土、上半では黄色味が強くなっている。
4　暗褐 10YR3/2　不明瞭な泥流土を多く含む、細粒土。
5　黒褐 10YR3/2　As-Cをわずかに含み、しまり弱い弱粘性土で、ねっとりした感触。この土内から遺物は出土していない。

第310図　１号遺物集中遺構図

第８項　遺構外出土遺物

ここでは緑釉陶器、灰釉陶器と土器の中でも希少例の１区20の須恵器凸帯付四耳壺、１区19の土師器有孔鉢を取り上げた。灰釉陶器では中世以降に比定できる149号土坑から出土している４区１の灰釉陶器浄瓶が注目される。

県内での浄瓶出土例は少なく、６遺跡12点が出土しているだけである。出土した遺跡は渋川市八木原元宿南遺跡から奈良三彩、伊勢崎市十三宝塚遺跡の原始灰釉陶器の口縁部や注入口、高台の破片など６点、前橋市荒砥上川久保遺跡、中之沢室沢遺跡、高崎市上野国分僧寺・尼寺中間地域から灰釉陶器の破片各１点、前橋市富田漆原遺跡と太田市大道東遺跡から須恵器の破片各１点だけである。

第６節　中世以降

中世以降の遺構としては溝、井戸、復旧坑、土坑、ピット、畑、集石などの遺構を掲載した。この他、２区Ａ地点で礎石建物、Ｂ・Ｃ地点でAs-A層の上面を覆うようにローム土と泥流土の混合土層を検出している。礎石建物は出土遺物などから近代の建物跡であることがわかり全体図に提示するに留めた。As-A層の上面を挟んだローム土と泥流土の混合土層は調査対象範囲東側の壁面や北側の掘削途中の断面で確認した。その範囲は２区17号溝の北側Ｘ＝36980～36987、Ｙ＝-85015～-85024の範囲に広がるとみられるが、範囲中央では検出されておらず、明確な範囲や性格を判断することはできなかった。

性格についてはAs-A層を厚く覆うように堆積していることやローム土と泥流土を混ぜ合わせていることからAs-A降下後に復旧のため覆った整地土と想定される。この範囲からは多くの近世陶磁器が出土している。

なお、これらの遺物については遺構外遺物として一部を掲載した。

第１項　溝

１号溝

位置　１区調査区中程を南北に横断するように、Ｘ＝37045～37095、Ｙ＝-85040～-85044に位置する。北側及び南側は調査対照区外に延びるため全貌は不明である。

重複関係　南から35号竪穴建物、34号竪穴建物、144号竪穴建物、７号溝、182号竪穴建物、120号竪穴建物、171号竪穴建物、114号竪穴建物、155号竪穴建物、28号ピット、25号ピット、27号ピット、32号土坑、３号溝と重複関係にある。新旧関係は25号ピットより本溝のほうが古いが、他の重複関係にある遺構よりは新しい。

形状　ほぼ直線的に南北方向に走向する。断面形状は逆台形状を呈する。

規模　調査区内では全長51ｍを測る。確認面での上幅0.50～0.80m、底面幅0.20～0.40mを測る。確認面から底面までの深さは15～67㎝を測る。

底面傾斜　地形と同様に南から北へ傾く。標高は南端が156.95m、北端155.60mで、比高差1.35mを測る。

主軸方位　Ｎ－８～10°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲からAs-Bを含んだ土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦に掘り込まれている。底面は砂粒などの堆積は確認されていないが、水が流れていなかったとは断言できない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しているが、陶磁器などの出土はみられなかった。

所見　埋没土の状態から中世に比定できる。

10号溝

位置　２区調査区中程、Ｘ＝36986～36981、Ｙ＝-85027～-85028に位置する。

重複関係　単独で存在する。

形状　ほぼ直線的である。走向は南北方向である。断面形状は逆台形状を呈する。

規模　全長4.88mを測る。確認面での上幅1.02～0.64m、底面幅0.48～0.26mを測る。確認面から底面までの深さは10～35㎝を測る。

底面傾斜　南から北へ向けて緩やかに傾く。標高は南端が165.66m、北端165.10mで、比高差0.56mを測る。

主軸方位　Ｎ－15°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦である。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物には土師器、須恵器がごく少量出土している他に、国産系施釉陶器の小片が３片出土している。この破片は小片のため図示することはできなかった。

所見　埋没土の状態から中世に比定できる。

11号溝

位置　２区調査区中程、Ｘ＝36970～36976、Ｙ＝-85013～-85024に位置する。東側は調査対象区外に延びるため全貌は不明である。

重複関係　１号井戸、12号溝と重複関係にある。新旧関係は１号井戸、12号溝とも明確ではないが、12号溝との堆積状態を比べると本溝のほうが古いと想定される。

形状　西側から東側に侵食されたように広がる形状で、途中から底面が深く侵食されたような状態である。断面

形状はＶ字状を呈する。

規模　調査区内では全長11.2mを測る。確認面での上幅2.64～0.65m、底面幅0.1m前後を測る。確認面から底面までの深さは12～98㎝を測る。

底面傾斜　西から東へ向けて緩やかに傾く。標高は西端が166.70m、東端166.46mで、比高差0.24mを測る。

主軸方位　Ｎ－110°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではAs-Aが南側から流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦である。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物の出土はみられなかった。

所見　底面に砂粒などの堆積は確認されていないが、形状から短期間の降雨などによって浸食されたものと想定される。溝の掘削時期は埋没土にAs-Aが堆積していることから天明３(1783)年の浅間山噴火前に比定できる。

12号溝

位置　２区調査区中程、Ｘ＝36974～36978、Ｙ＝-85014～-85016に位置する。北側は調査対象区外に延びるため全貌は不明である。

重複関係　１号井戸、11号溝と重複関係にある。新旧関係は１号井戸、11号溝とも明確ではないが、11号溝との堆積状態を比べると本溝のほうが新しいと想定される。

形状　ほぼ直線的である。断面形状はＶ字状を呈する。

規模　調査区内では全長4.2mを測る。確認面での上幅1.20～0.60m、底面幅0.10～0.16mを測る。確認面から底面までの深さは41～55㎝を測る。

底面傾斜　南から北へ向けて緩やかに傾く。標高は南端が166.29m、北端166.25mで、比高差0.04mを測る。

主軸方位　Ｎ－35°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではAs-Aが南側から流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦である。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物の出土はみられなかった。

所見　底面に砂粒などの堆積は確認されていないが、形状から短期間の降雨などによって浸食されたものと想定される。溝の掘削時期は埋没土にAs-Aが堆積していることから天明３(1783)年の浅間山噴火前に比定できる。

13号溝

位置　２区調査区の南Ｄ地点の東寄り、14号溝と平行する位置関係である。グリッドはＸ＝36953～36958、Ｙ＝-85002～-85004に位置する。北側は調査対象区外に延びるため全貌は不明である。

重複関係　単独で存在する。

形状　ほぼ直線的である。断面形状は逆台形状を呈する。

規模　調査区内では全長5.7mを測る。確認面での上幅0.93～0.82m、底面幅0.76～0.48mを測る。確認面から底面までの深さは16～54㎝を測る。

底面傾斜　南から北へ向けて緩やかに傾く。標高は南端が169.58m、北端169.12mで、比高差0.46mを測る。

主軸方位　Ｎ－20°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦である。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物の出土はみられなかった。

所見　溝の掘削時期は埋没土にAs-Aが堆積していることから天明３(1783)年の浅間山噴火前に比定できる。

14号溝

位置　２区調査区の南Ｄ地点の東寄り、Ｘ＝36950～36957、Ｙ＝-85001～-85004に位置する。北側及び南側は調査対象区外に延びるため全貌は不明である。

重複関係　単独で存在する。

形状　ほぼ直線的である。断面形状は逆台形状を呈する。

規模　調査区内では全長7.1mを測る。確認面での上幅0.73～0.97m、底面幅0.67～0.26mを測る。確認面から底面までの深さは13～54㎝を測る。

底面傾斜　南から北へ向けて緩やかに傾く。標高は南端が169.47m、北端169.67mで、比高差0.20mを測る。

主軸方位　Ｎ－20°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦である。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物は須恵器杯片が１片出土してるだけで、

陶磁器などの出土はみられなかった。

所見　溝の掘削時期は埋没土にAs-Aが混在している土砂が堆積していることから天明３(1783)年の浅間山噴火以後の可能性が高い。

15号溝

位置　３区調査区の北寄り、Ｘ＝36939、Ｙ＝-85001でほぼ直角に曲がる区画溝状を呈する。北辺の溝はＸ＝36936～36939、Ｙ＝-84989～-85002、西辺の溝はＸ＝36923～36939、Ｙ＝-85000～-85007に位置する。東側及び南側は調査対象区外に延びるため全貌は不明である。なお、南側は確認面での幅が1.5～２倍に広がり、土層断面でも複数の遺構が重複する状態が観察できる。しかし、土層断面Ａ－Ａ′の５または７のどちらが本溝に該当するか判断できない。

重複関係　193号竪穴建物。197号竪穴建物、５号井戸、121号土坑、127号土坑と重複関係にある。この他、南端の調査区境で溝状遺構とも重複関係にある。新旧関係は193号竪穴建物、197号竪穴建物より本溝のほうが新しいが、５号井戸、121号土坑、127号土坑より古い。

形状　Ｌ字状に配置され、北辺、西辺の溝ともほぼ直線的である。断面形状は逆台形状を呈する。

規模　調査区内では全長26.0m、北辺11.5m、西辺14.5mを測る。確認面での上幅1.72～2.38m、底面幅0.74～1.25mを測る。確認面から底面までの深さは36～103㎝を測る。

底面傾斜　南から北へ、東から西へ向けて緩やかに傾き、調査範囲内では屈曲部が最も深い。標高は南端が169.23m、屈曲部168.53m、東端168.74mで、比高差0.20mを測る。

主軸方位　北辺がＮ－100°－Ｅ、西辺がＮ－15°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面Ｂ－Ｂ′の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。Ａ－Ａ′では複数の落ち込みが確認されている。土層５または７が本溝と判断されるが、どちらが該当するかは判断できない。なお、１～４は溝埋没後の新たな掘削によるものとみられる。

底面　ほぼ平坦であるが、屈曲部の南側では土坑状の凹凸が存在する。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物は土師器・須恵器が出土している他に、図示した瀬戸陶器のすり鉢が出土している。

所見　溝の状態から区画溝と想定されるが、南辺を構成する溝が想定される４区では同様の溝は検出されていない。また、柵などの区画施設も検出されていないため範囲や性格については不明である。時期については、埋没土内にAs-Aが含まれていないことから中世に比定できる。

16号溝

位置　５区調査区中程、Ｘ＝36817～36821、Ｙ＝-84949～-86821に位置する。南北とも調査対象区外に延びるため全貌は不明である。

重複関係　54号土坑と重複関係にある。新旧関係は54号土坑より本溝のほうが新しい。

形状　ほぼ直線的である。走向は南北方向である。断面形状は逆台形状を呈する。

規模　調査区内では全長4.1mを測る。確認面での上幅0.94～0.64m、底面幅0.84～0.38mを測る。確認面から底面までの深さは18～19㎝を測る。

底面傾斜　南から北へ向けて緩やかに傾く。標高は南端が170.70m、北端170.64mで、比高差0.04mを測る。

主軸方位　Ｎ－５°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察では上部を撹乱によって欠くため明確ではないが、西側から土砂が流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

底面　ほぼ平坦である。底面は砂粒などの堆積は確認されていない。

その他施設　検出されていない。

出土遺物　遺物の出土はみられなかった。

所見　埋没土の状態から中世に比定できる。

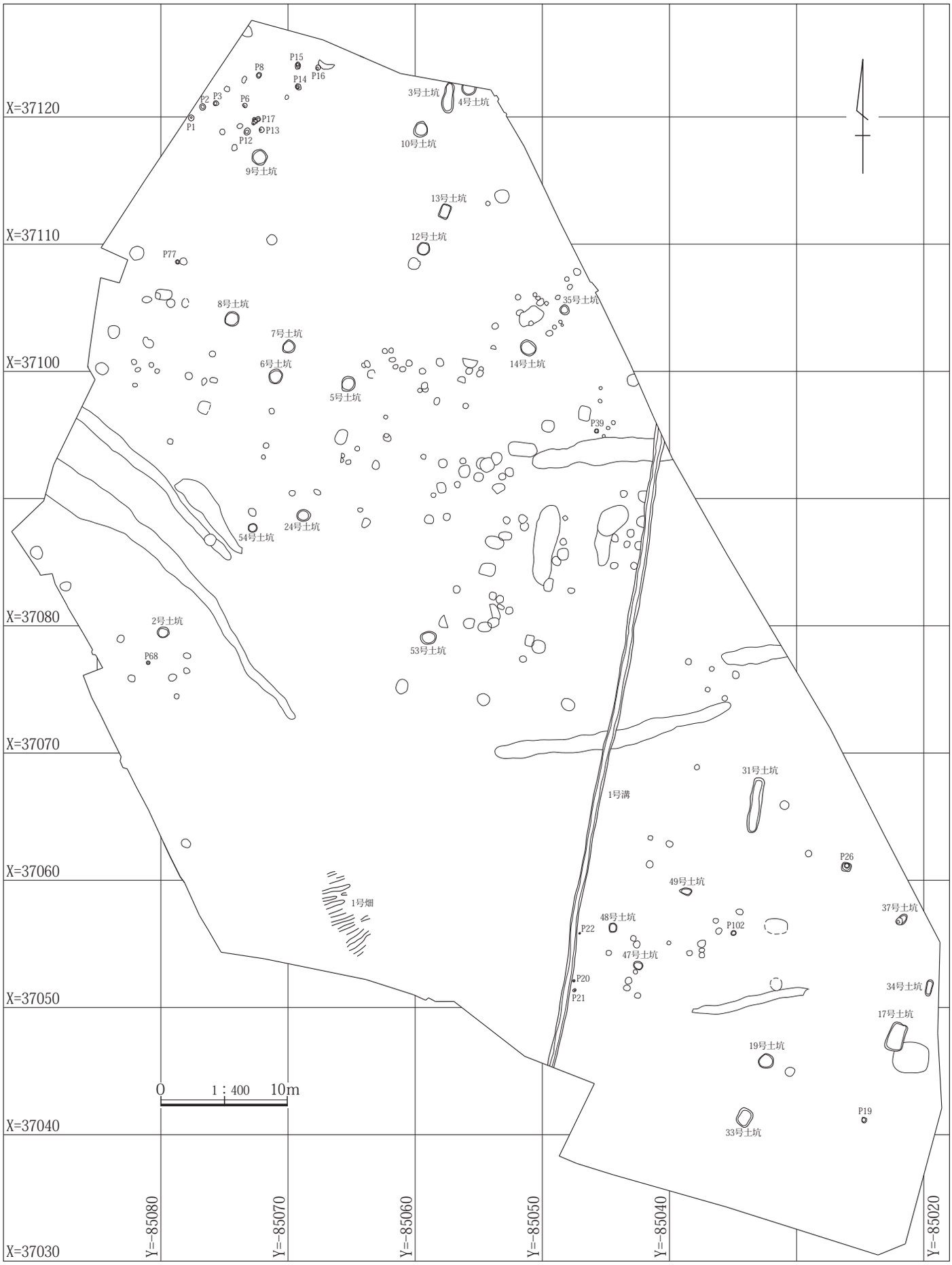
17号溝

位置　２区調査区中程、Ｘ＝36977～36979、Ｙ＝-85014～-85025に位置する。東側は調査対象区外に延びるため全貌は不明である。

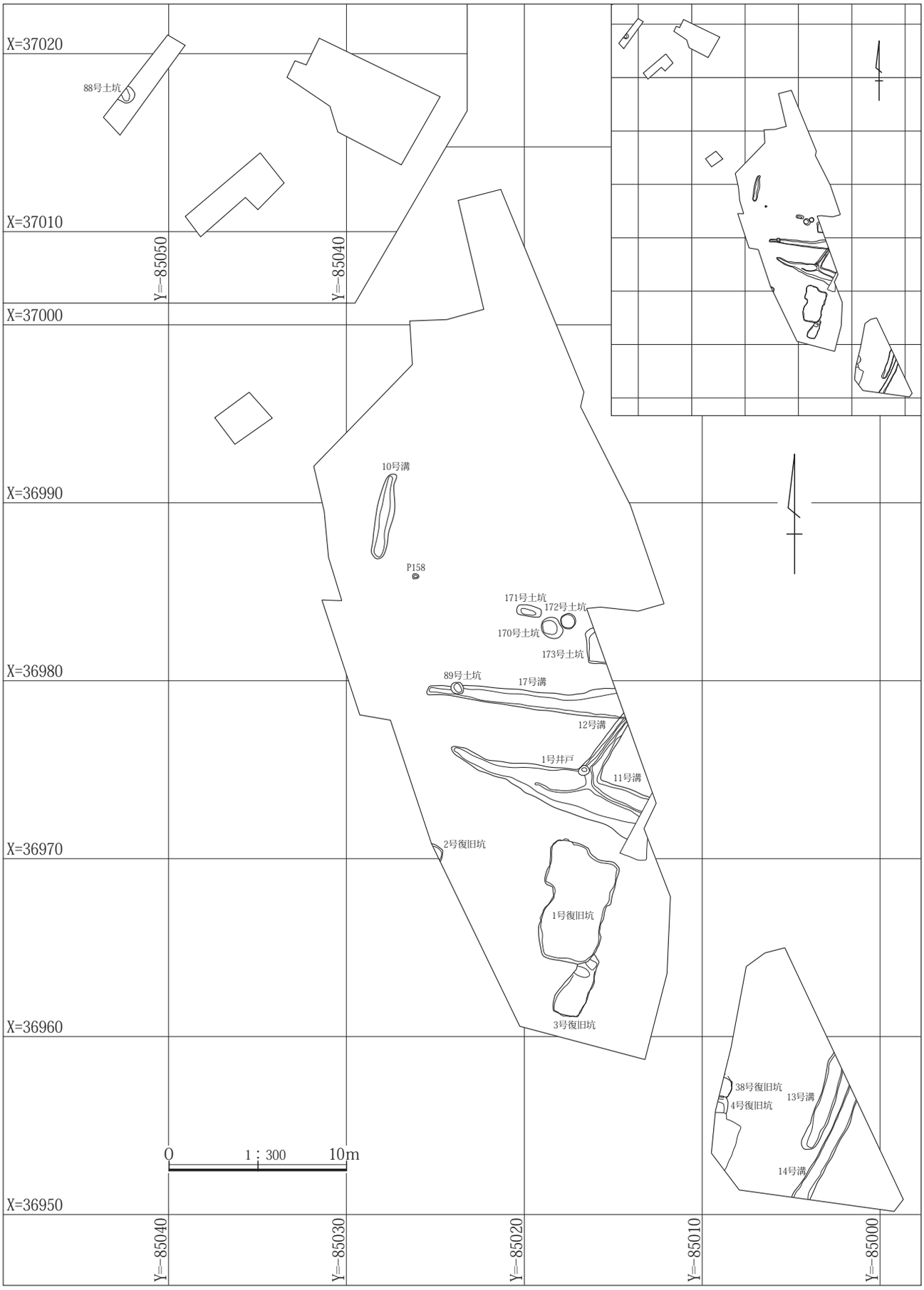
重複関係　89号土坑と重複関係にある。新旧関係は溝本溝のほうが古い。

形状　ほぼ直線的である。断面形状は逆台形状を呈し、北側がやや緩やかな傾斜である。

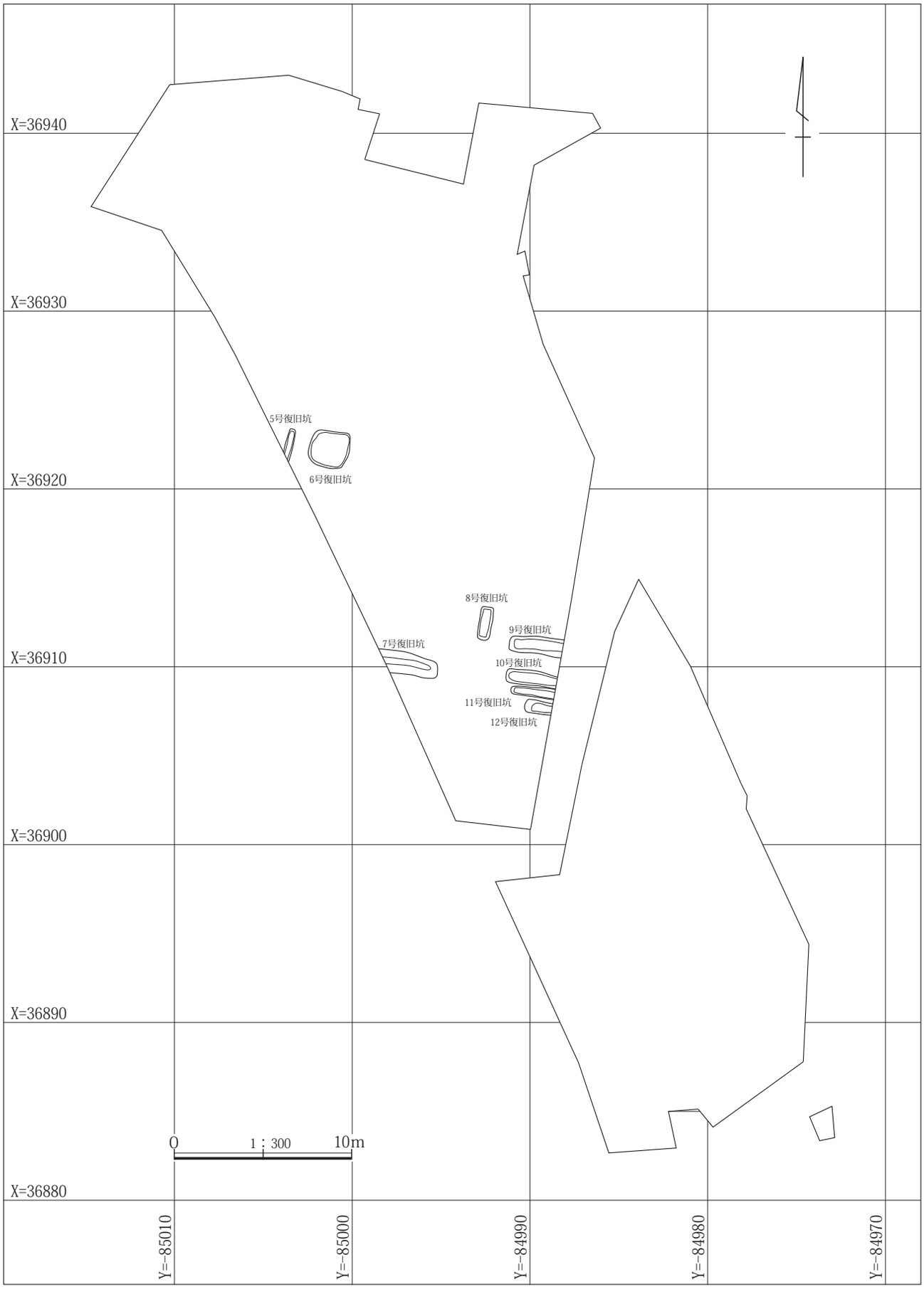
規模　調査区内では全長11.5mを測る。確認面での上幅



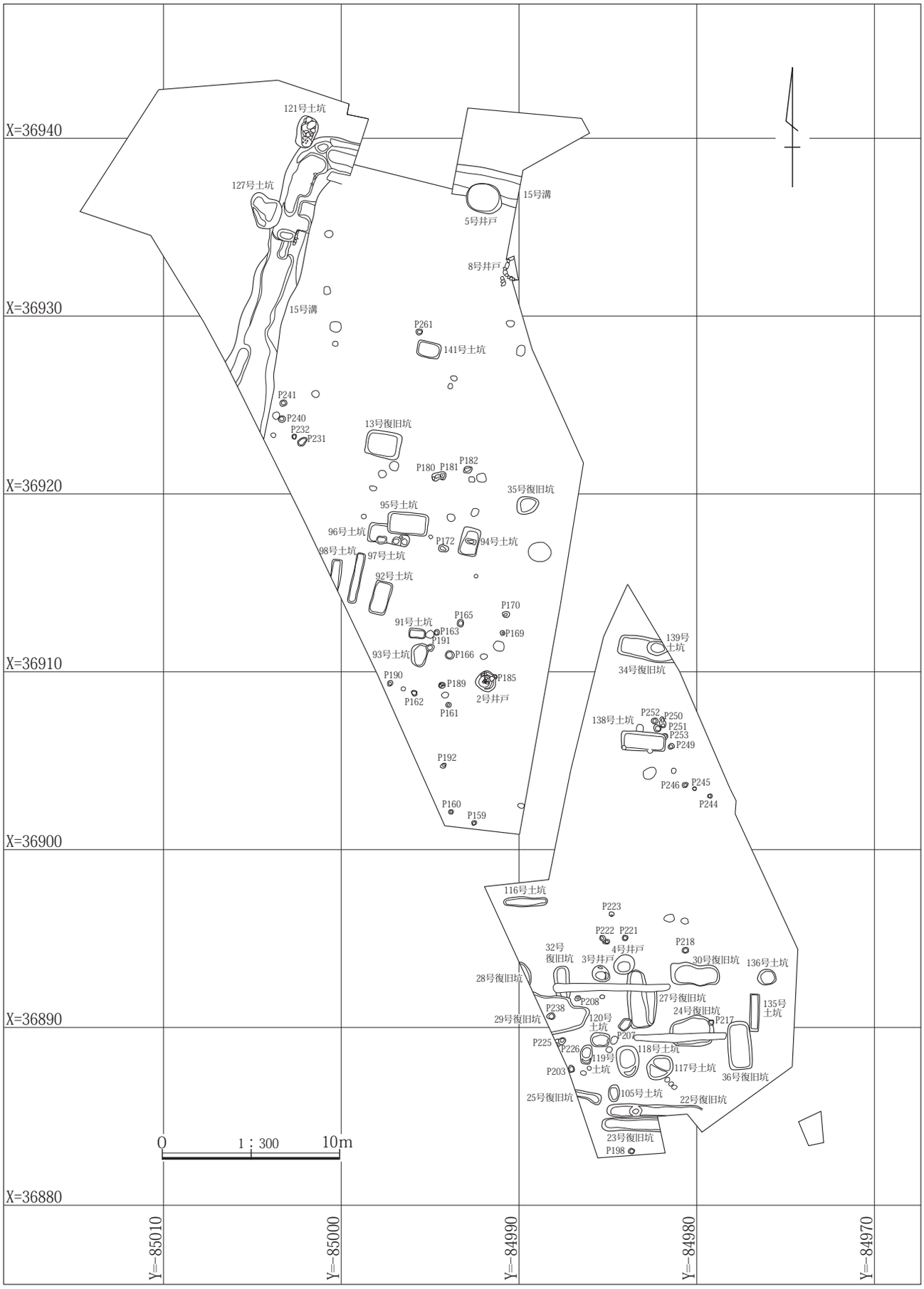
第311図　１区　溝・土坑・ピット配置図



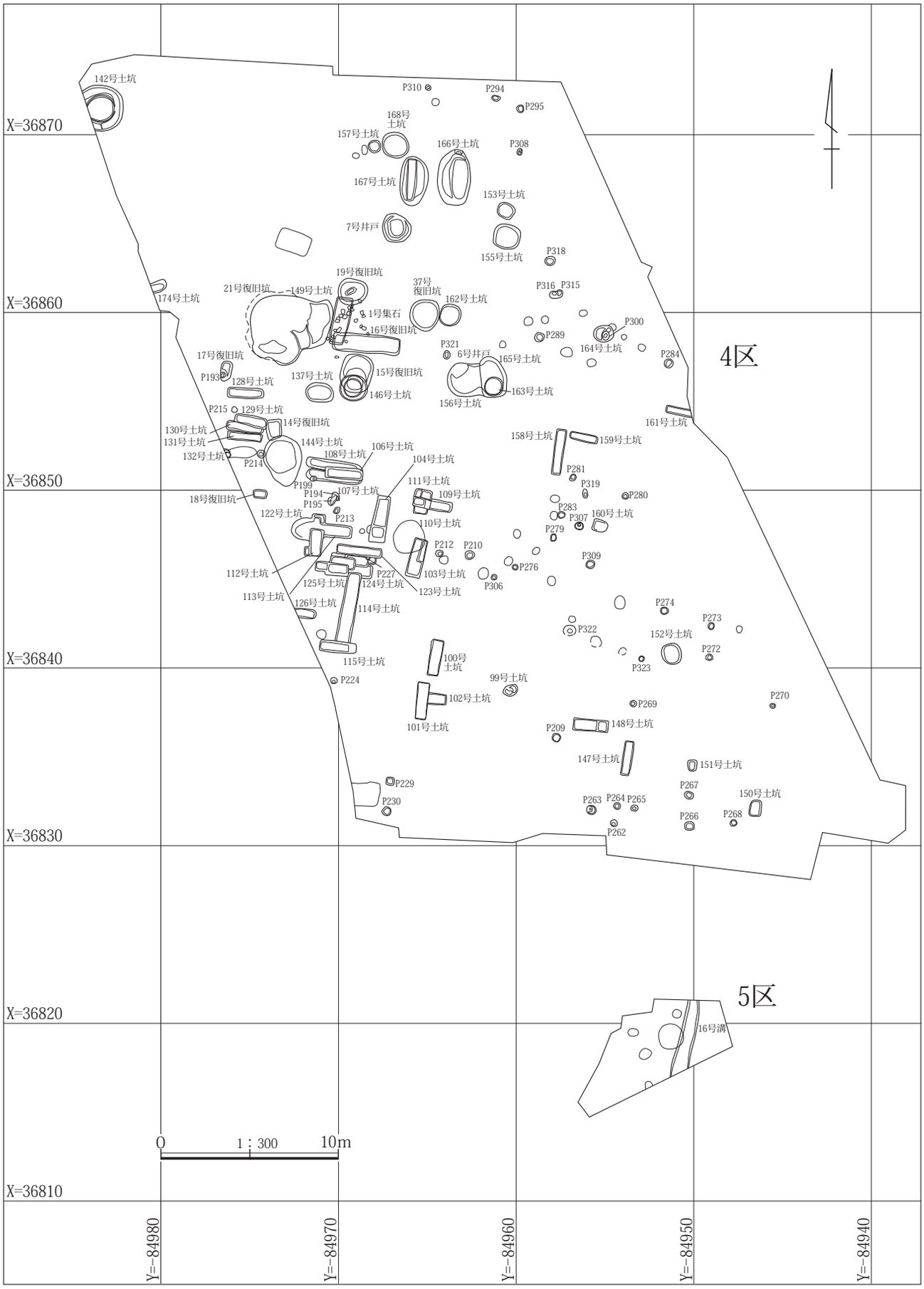
第312図　２区　溝・井戸・土坑・ピット配置図



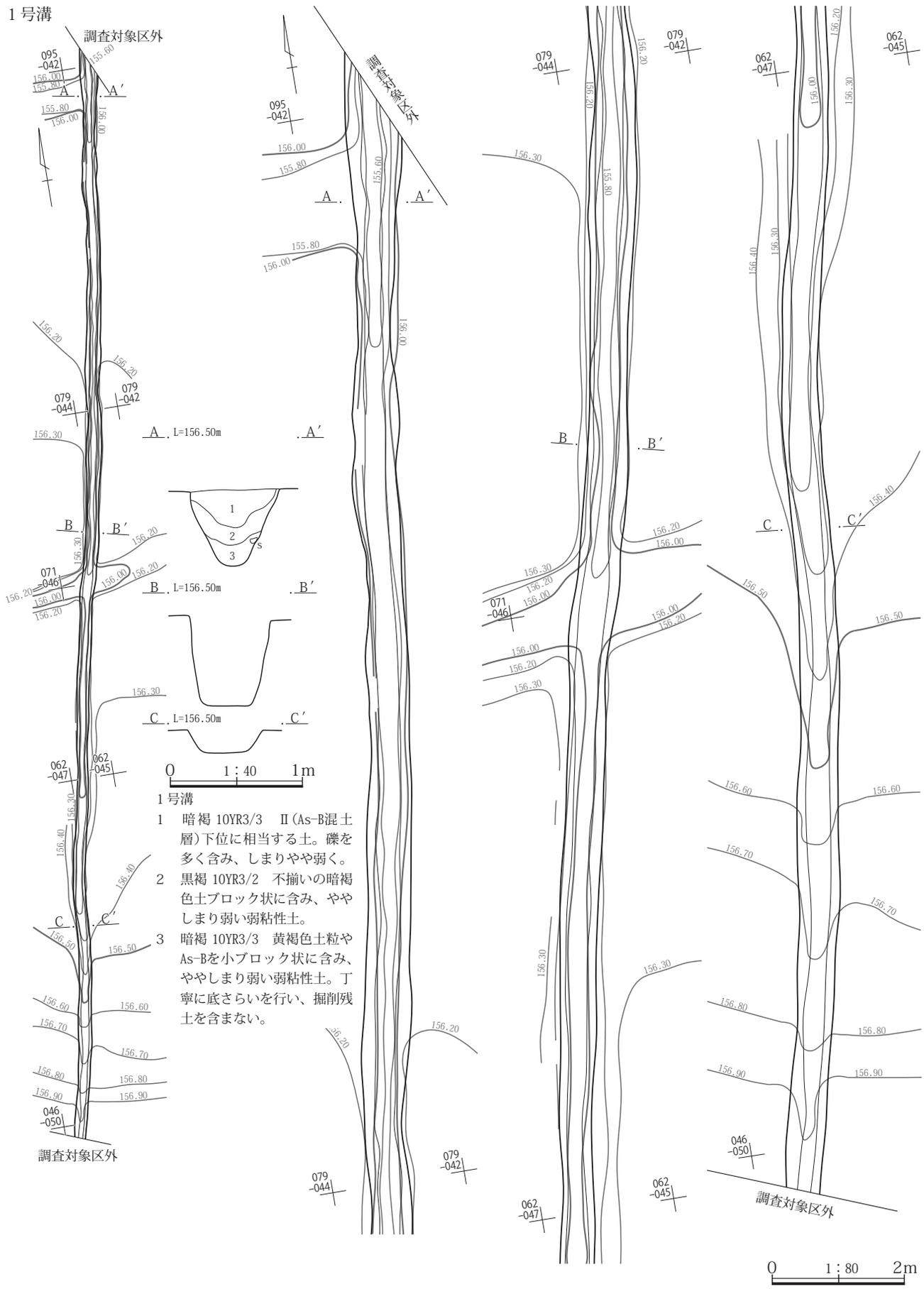
第313図　３区１面　復旧坑配置図



第314図　３区２面　溝・井戸・復旧坑・土坑・ピット配置図

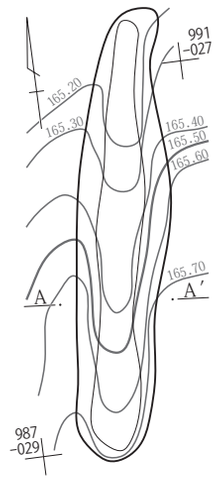


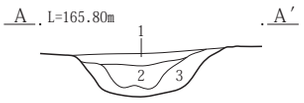
第315図　４・５区　溝・井戸・復旧坑・土坑・ピット・集石配置図



第316図　１号溝遺構図

10号溝





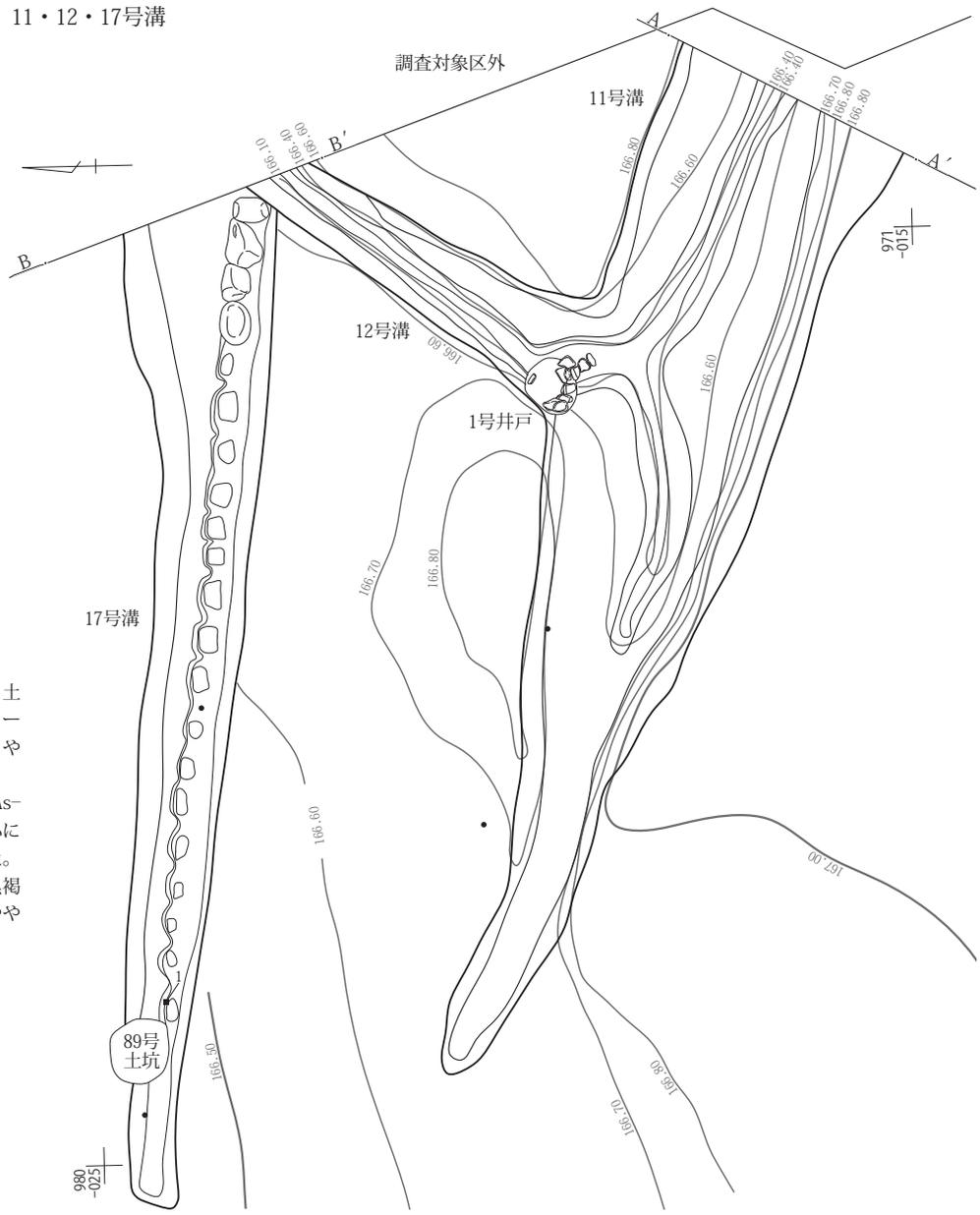
10号溝

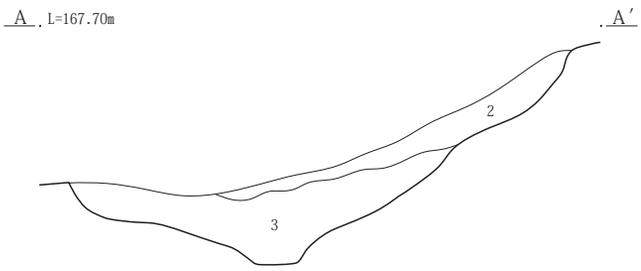
1　暗褐 10YR3/3　黒褐色の粗粒土(As-B混と思われる)不揃いのロームブロック・ローム粒混じり、ややしまり強い。

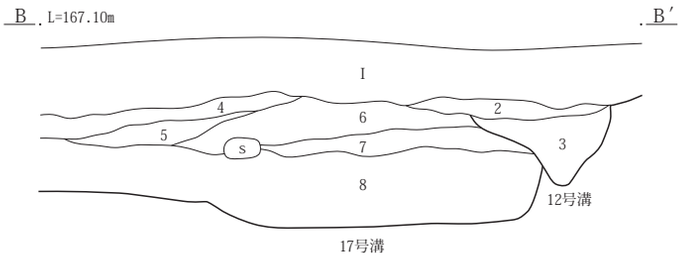
2　黒褐 10YR3/3　黒褐色粗粒土(As-B混入か)、ローム土を下半中心に含み、ややしまり弱い非粘性土。

3　灰黄褐 10YR4/2　ローム土と黒褐色土のブロックとの混合土、ややしまりあり。

11・12・17号溝







11号溝

1　黒褐 10YR2/3　ロームをブロック状に20%、As-Aを多量に含む。

2　黒褐 10YR2/3　As-A混合土。

12号溝、17号溝

1　ローム土。不揃いのロームブロック主体の客土。As-A降下以降の整地作業痕か。

2　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なロームブロックを10%含み、しまりある弱粘性土。

3　暗褐 10YR3/3　土質２と同じ。φ１～５㎜の白色粒を１%、不明瞭なロームブロックを５%含む。

4　As-A　一部の底面付近に火山灰が見られ、一次堆積の様子が残る部分あり。

5　ローム土による人為的埋め戻し土、１と同様な整地作業痕か。

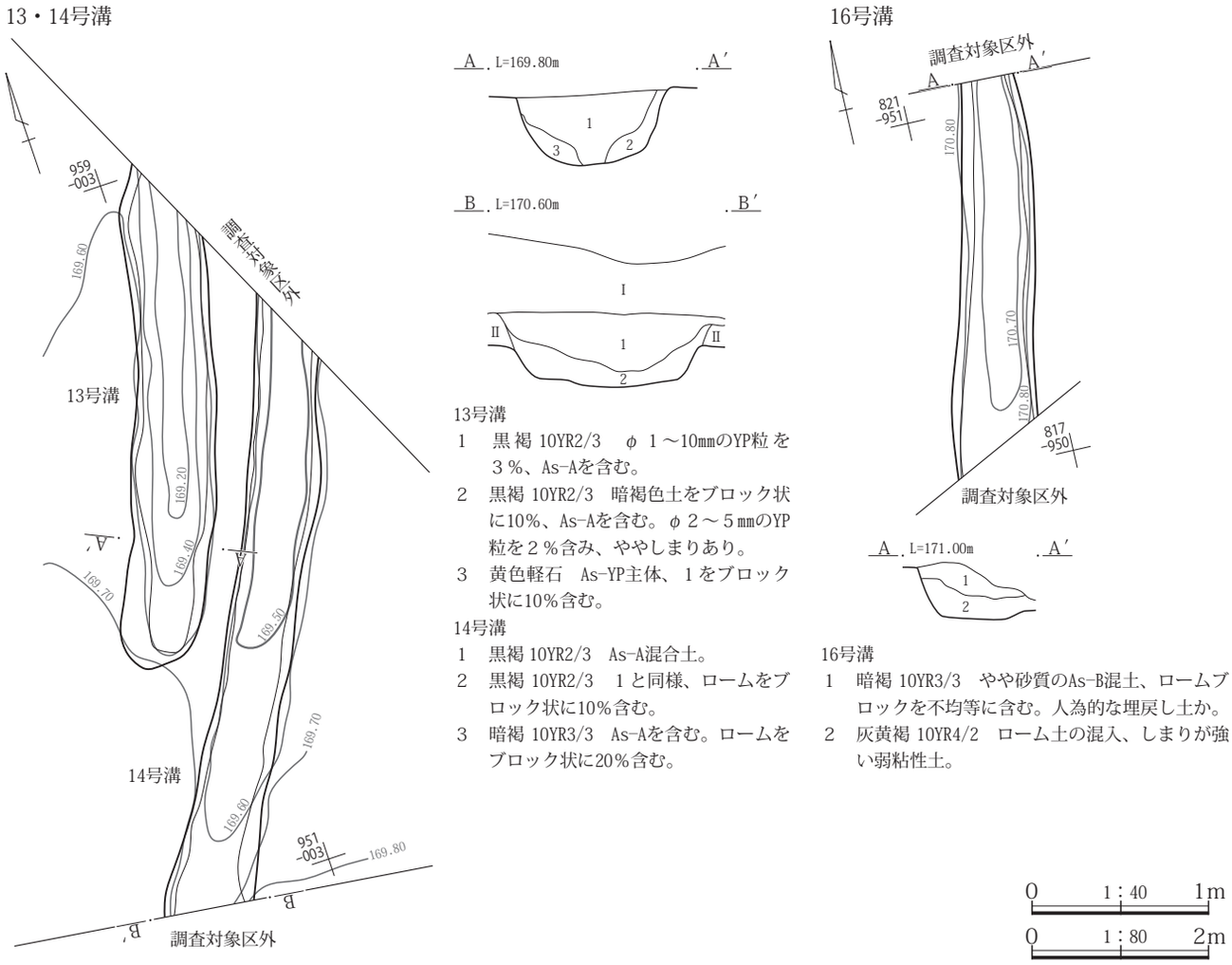
6　暗褐 10YR3/3　基質土は黒色味強い細粒土、不明瞭なロームブロック、不揃いなロームブロック10%含む。

8　褐灰 10YR4/1　ロームブロックを不均等に含み、しまり強い粘性土。最下位にAs-Aと思われるパミスやや多く含むが、中位には含まない。

0　1：40　1m

0　1：80　2m

第317図　10～12・17号溝遺構図



13号溝
1　黒褐 10YR2/3　φ１～10㎜のYP粒を３％、As-Aを含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土をブロック状に10％、As-Aを含む。φ２～５㎜のYP粒を２％含み、ややしまりあり。
3　黄色軽石　As-YP主体、１をブロック状に10％含む。

14号溝
1　黒褐 10YR2/3　As-A混合土。
2　黒褐 10YR2/3　１と同様、ロームをブロック状に10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　As-Aを含む。ロームをブロック状に20％含む。

16号溝
1　暗褐 10YR3/3　やや砂質のAs-B混土、ロームブロックを不均等に含む。人為的な埋戻し土か。
2　灰黄褐 10YR4/2　ローム土の混入、しまりが強い弱粘性土。

第318図　13・14・16号溝遺構図

0.53～1.64m、底面幅0.22～1.24mを測る。確認面から底面までの深さは23～50㎝を測る。

底面傾斜　若干の高低差はあるが、ほぼ平坦である、標高は西端が166.01m、東端166.04mであるが、底面の最も高い箇所では166.11mを測る。

主軸方位　Ｎ－89°－Ｅを指す。

埋没状態　土層断面の観察ではAs-Aが南側から流れ込んだ様子が確認できることから自然埋没と判断される。

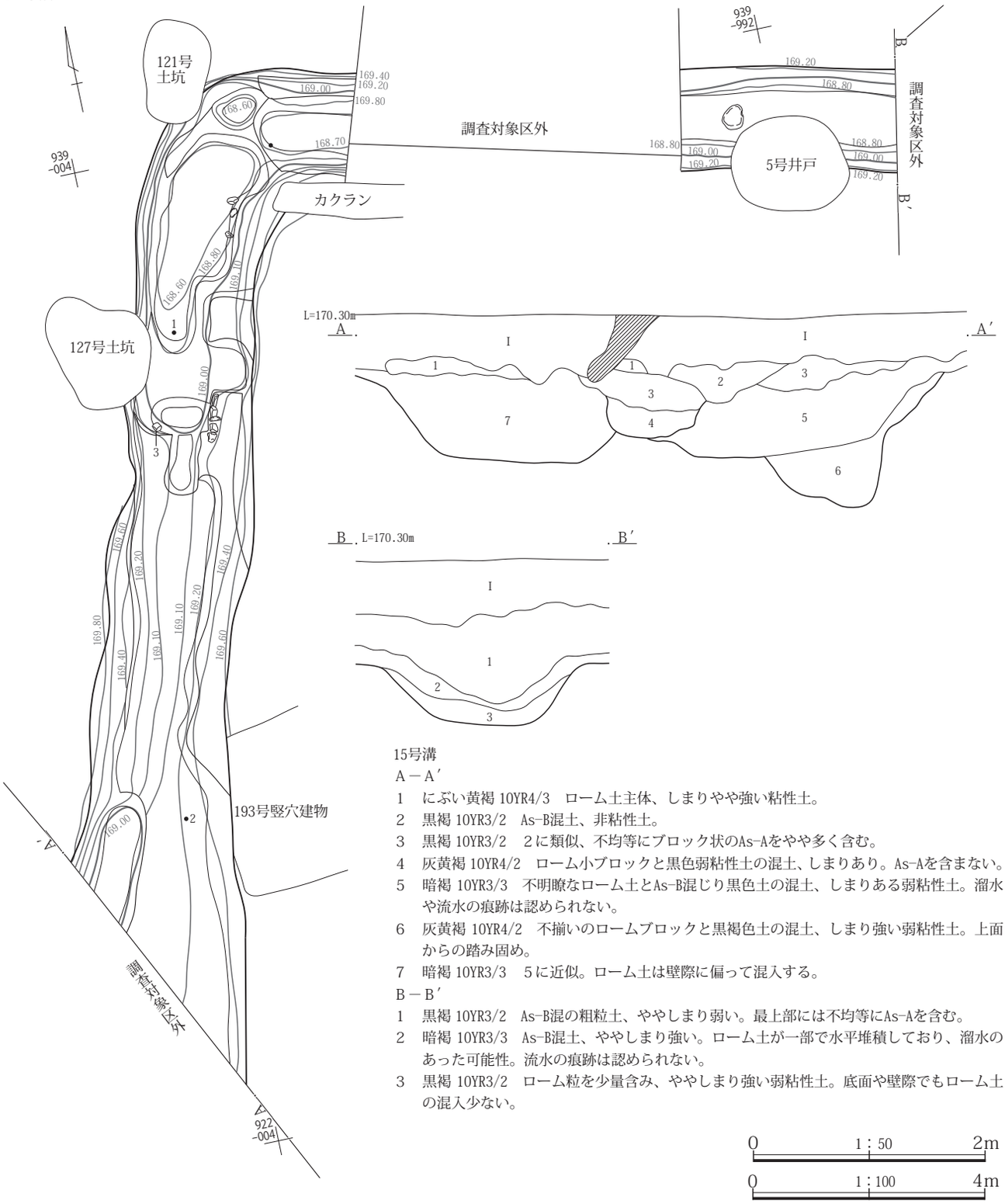
底面　ほぼ平坦である。東端では径40㎝前後の礫が据えられた状態で検出されている。この礫の西側では径10～30㎝の小規模な落ち込みが連続的に検出されており、この落ち込みに東端と同様に礫が据えられていた可能性が窺える。

その他施設　西は字に径20～40㎝大の礫がまとまって出土しているが、本溝との関係性は窺えたが、明確な位置づけには至っていない。

出土遺物　遺物は国産磁器、国産施釉陶器、在地系土器の小片が出土している。また、南側から多くの礫が投棄された状態で出土している。

所見　本溝の掘削時期は、As-Aで埋没していることから天明３(1783)年の浅間山噴火前に比定できる。

15号溝



15号溝

Ａ－Ａ′

1　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土主体、しまりやや強い粘性土。

2　黒褐 10YR3/2　As-B混土、非粘性土。

3　黒褐 10YR3/2　２に類似、不均等にブロック状のAs-Aをやや多く含む。

4　灰黄褐 10YR4/2　ローム小ブロックと黒色弱粘性土の混土、しまりあり。As-Aを含まない。

5　暗褐 10YR3/3　不明瞭なローム土とAs-B混じり黒色土の混土、しまりある弱粘性土。溜水や流水の痕跡は認められない。

6　灰黄褐 10YR4/2　不揃いのロームブロックと黒褐色土の混土、しまり強い弱粘性土。上面からの踏み固め。

7　暗褐 10YR3/3　５に近似。ローム土は壁際に偏って混入する。

Ｂ－Ｂ′

1　黒褐 10YR3/2　As-B混の粗粒土、ややしまり弱い。最上部には不均等にAs-Aを含む。

2　暗褐 10YR3/3　As-B混土、ややしまり強い。ローム土が一部で水平堆積しており、溜水のあった可能性。流水の痕跡は認められない。

3　黒褐 10YR3/2　ローム粒を少量含み、ややしまり強い弱粘性土。底面や壁際でもローム土の混入少ない。

0　1：50　2m

0　1：100　4m

第319図　15号溝遺構図

第２項　井戸

井戸は２区調査区から４区調査区で８基を検出されている。それぞれ、埋没土等から中世から近世に比定できる。

位置、形状、規模、重複関係については第６表に示した。

１号井戸

11号溝と12号溝の交差する箇所に位置し、上部構造は溝を調査中に検出されたため不明である。一見、石組で構築されているかとみられたが、北側では礫が存在しないため素掘りまま使用されていたとみられる。

礫は大小様々で南側から投棄されたとみられる。

埋没状態　土層断面の観察ではAs-Aを多量に含む暗褐色土で短期間に埋没している。

出土遺物　礫の他に国産施釉陶磁器の小片が１点出土している。

所見　重複関係にある12号溝との新旧関係は不明確であるが、埋没土のAs-Aの状態や礫の出土状態から、溝が存在しているときに掘削された可能性が窺える。廃棄時期は天明３年以後、As-Aの流れ込みによって機能が失われたことによるとみられる。

２号井戸

素掘りのまま使用されていたとみられ、石組などの構造物は確認できなかった。

埋没状態　土層断面の観察では細粒からなる黒褐色土によって短期間に埋没している。埋没状況から周囲の土砂で埋め戻されたのではなく、運び込まれた土砂で埋め戻されたとみられる。

出土遺物　上半から拳大から人頭大の礫が出土しているほか、土師器、須恵器等の破片が46点ほど出土している。

所見　出土遺物は土師器や須恵器であるが、埋没土の状態から中世以降に比定できる。

３号井戸

４号井戸と隣接して位置する。素掘りまま使用されていたとみられ、石組などの構造物は確認できなかった。また、確認面から底面までの深さも1.25mと浅いため井戸と断定するには躊躇もあるが、底面付近の壁面にややアグリ状態がみられることから井戸と判断した。

埋没状態　土層断面の観察では下半にロームブロックが含まれた暗褐色土、上位はAs-Aが含まれた黒褐色土で埋め戻されたと判断されている。

出土遺物　土師器や須恵器の破片が出土している。

所見　上位の埋め戻し土にAs-Aが含まれていることから、廃棄された時期は天明３年以後と想定される。なお、掘削時期は底部にAs-Aの堆積が確認されていないことから天明３年以前に想定される。

４号井戸

３号井戸と隣接して位置する。素掘りのまま使用されていたとみられ、石組などの構造物は確認できなかった。また、確認面から底面までの深さも1.0mと浅いため井戸と断定するには躊躇もあるが、形態や埋没状態が３号井戸に類似していることから井戸と判断した。

埋没状態　土層断面の観察では底面から３分の２ほど暗褐色土や灰黄褐色土によって埋め戻しが行われたと判断されている。

出土遺物　遺物の出土はみられなかった。

所見　埋没土にAs-Aが含まれていないことから天明３(1783)年以前に廃棄されたとみられる。

５号井戸

素掘りまま使用されていたとみられ、石組などの構造物は確認できなかった。なお、底面までの掘削は安全の確保が担保できないため検出を実施していない。

埋没状態　土層断面の観察ではAs-Aに黒色土の混じる暗灰黄土によって短期間に埋没していることから人為的に埋め戻されたと判断される。なお、上位はほとんどAs-Aからなる土砂によって埋没している。

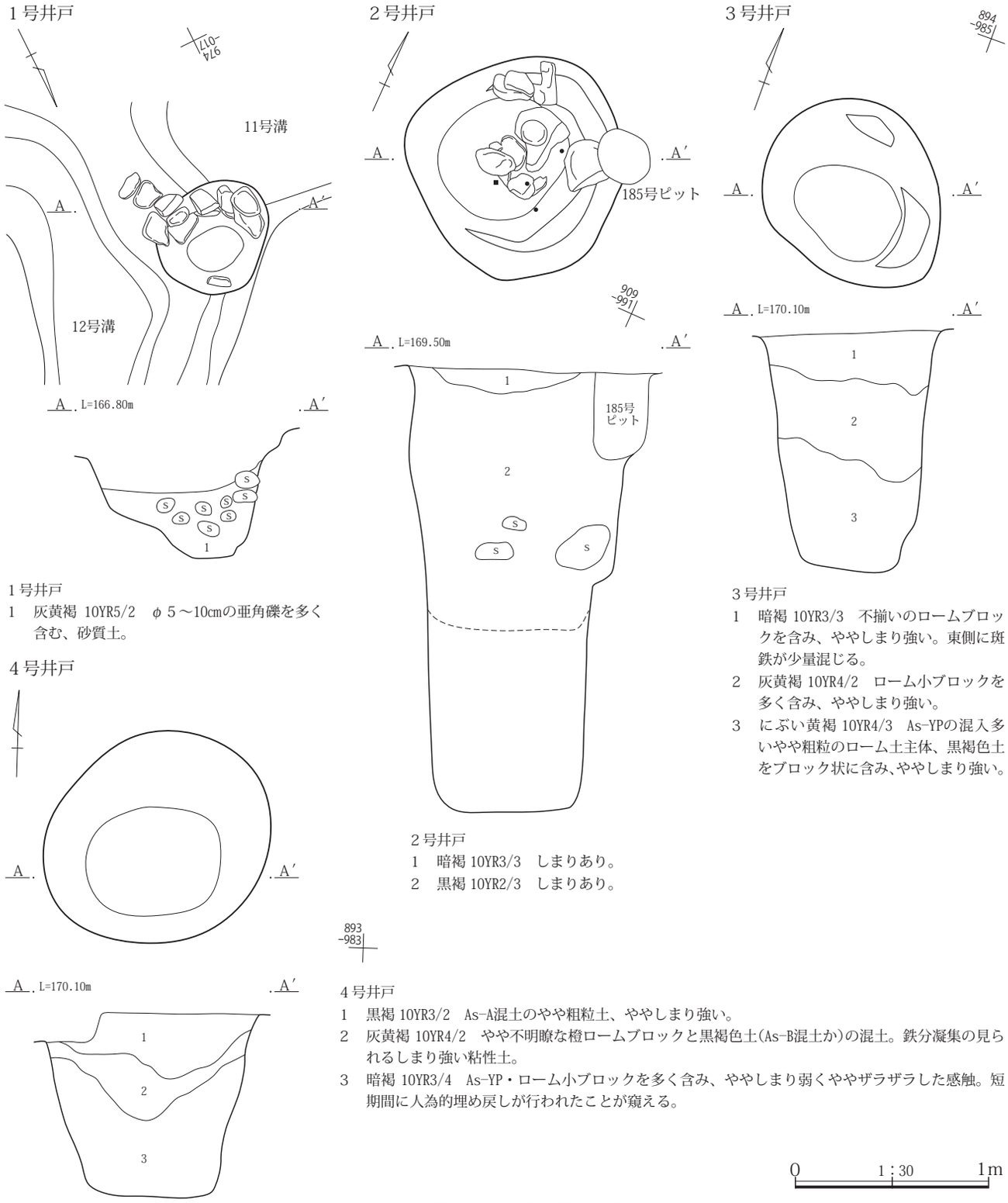
遺物　肥前磁器、瀬戸陶器、在地系土器などが多数出土している。

所見　埋没土の状態から天明３年の浅間山噴火によって堆積したAs-Aの処分を兼ねて埋め戻されたと想定される。

６号井戸

本遺跡のなかでは平面形態が矩形を呈するただ１基の井戸である。しかし素掘りのまま使用されていたとみられ、石組などの構造物は確認できなかった。なお、底面までの掘削と壁面の一部は安全の確保が担保できないため検出を実施していない。

埋没状態　土層断面の観察ではAs-Bを含む黒褐色土で短期間に埋没していることから当時の表土を集めて埋め戻されたと判断される。



第320図　１～４号井戸遺構図

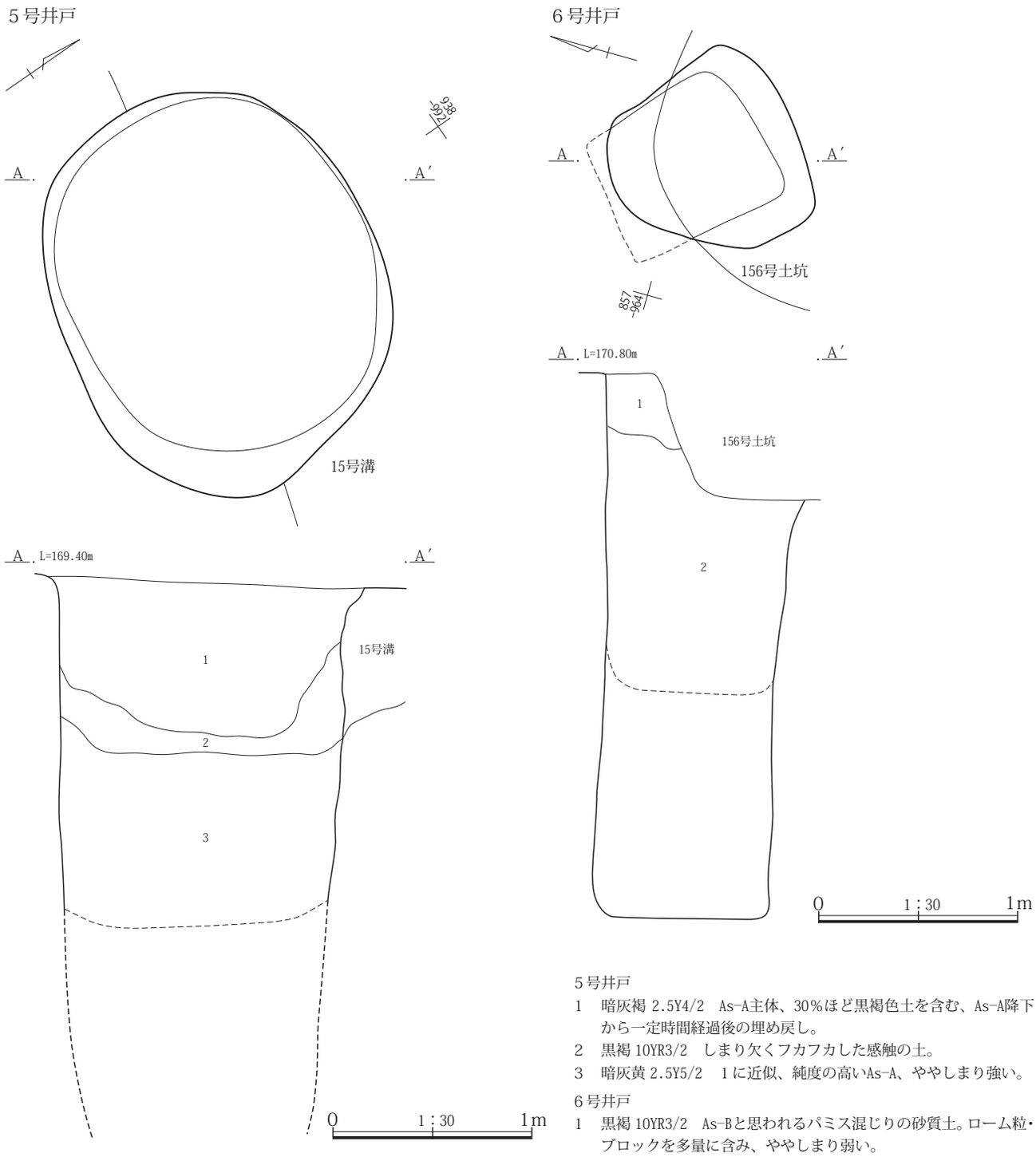
出土遺物　上半に人頭大の礫が出土している。これらの礫は埋め戻しの際に投棄されたものとみられる。

所見　上位にAs-Aを多く含む土砂で埋没していることや埋没土注にAs-Aが含まれていないことから中世から近世前半に比定できる。

７号井戸

素掘りのまま使用されていたとみられ、石組などの構造物は確認できなかった。

埋没状態　土層断面の観察ではロームブロックが多く含まれるにぶい黄褐色土で埋没している。こうした状態か



５号井戸
1　暗灰褐 2.5Y4/2　As-A主体、30％ほど黒褐色土を含む、As-A降下から一定時間経過後の埋め戻し。
2　黒褐 10YR3/2　しまり欠くフカフカした感触の土。
3　暗灰黄 2.5Y5/2　1に近似、純度の高いAs-A、ややしまり強い。

６号井戸
1　黒褐 10YR3/2　As-Bと思われるパミス混じりの砂質土。ローム粒・ブロックを多量に含み、ややしまり弱い。
2　黒褐 10YR3/2　1に類似、不明瞭なローム土を含む。
3　にぶい黄褐 10YR5/3　As-YP下のローム土主体、含有物少ない。人為的な埋戻し土。

第321図　５・６号井戸遺構図

ら、周囲に掘削土砂が残されていたか、新たに土坑等を掘削して埋め戻したと判断される。

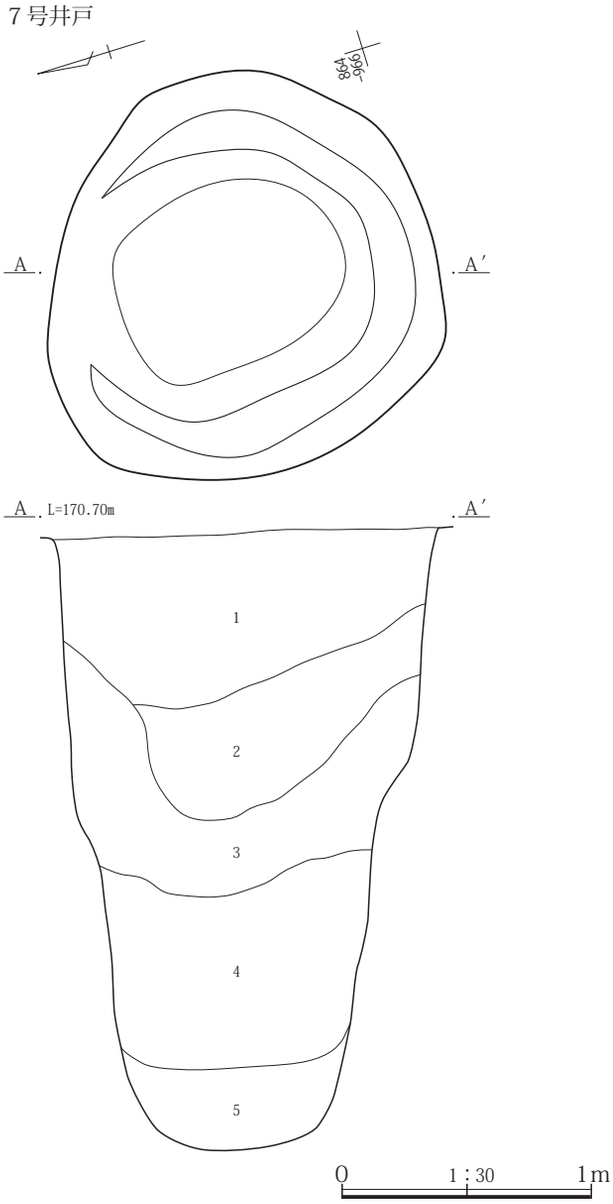
出土遺物　底面付近に人頭大の礫が投棄されていた。

所見　埋没土中ではAs-Bは確認されたが、As-Aは確認されなかったことから中世から近世前半に比定できる。

８号井戸

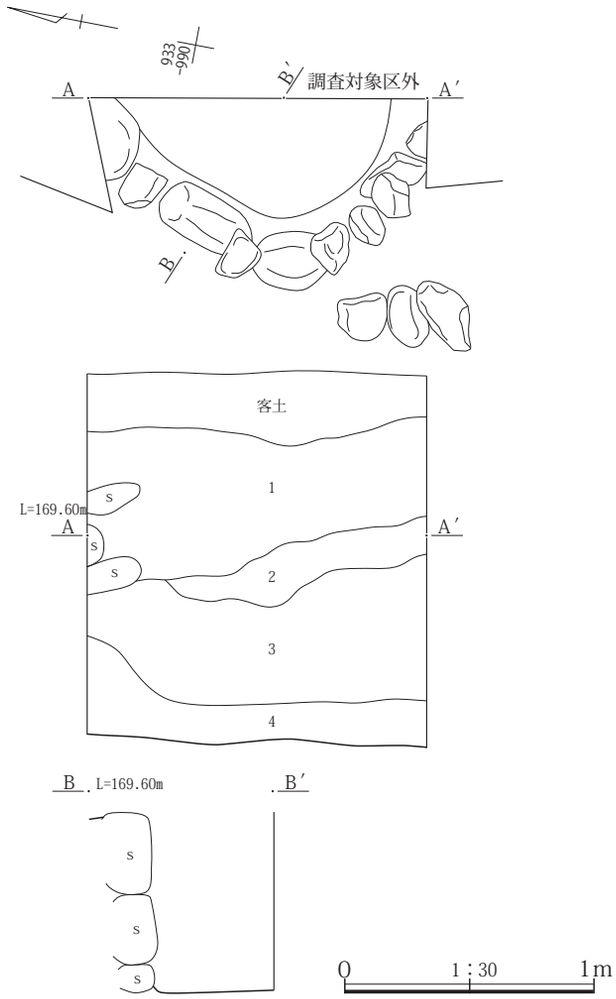
本遺跡で検出さえた井戸では唯一の石組構造によるものである。大部分は調査対象区外に存在するため詳細は不明であるが、平面形態は方形に近いとみられる。礫は下方ほど径の小さいものが使われていた。本井戸も安全

７号井戸



７号井戸
1　黒褐 10YR3/2　As-Bと思われるパミス混じりの砂質土。壁際でローム粒を含むが、全体には含有物少なく、ややしまり弱い。
2　黒褐 10YR3/2　1に類似、不明瞭なローム土を含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3～暗褐 10YR3/3　斜めに滑り落ちたようなAs-YPと不明瞭なローム土の混土。
4　にぶい黄褐 10YR5/3　As-YP下のローム土主体、含有物少ない。人為的な埋戻し土。
5　にぶい黄褐 10YR5/3　4に類似、ロームブロックを含む。

８号井戸



８号井戸
1　暗褐 10YR3/4　As-Aを霜降状に多量に含み、ややしまりが強い砂質の非粘性土。
2　暗オリーブ褐 2.5Y3/3　基質土は１と同じ。褐灰色の粘性土ブロックを多量に含む、粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　基質土は１より黒色味強い、As-Aを不均等に多量に含む、非粘性土でボソボソした感触。
4　黄色軽石　As-YPの崩落土、黒色土が混じる。地山土に黒色土がしみ込んだ土か、崩れたAs-YP壁を踏み固めたか判別できない。

第322図　７・８号井戸遺構図

上のため底面までの掘削、石組の解体は実施していない。

埋没状態　土層断面の観察では上位はAs-Aを含む暗褐色土で埋没している。下位はAs-YPの崩落土と黒褐色土の混じり合った土砂で埋没している。こうした状況から下半の壁面が崩落した後に埋め戻しが行われたと判断される。

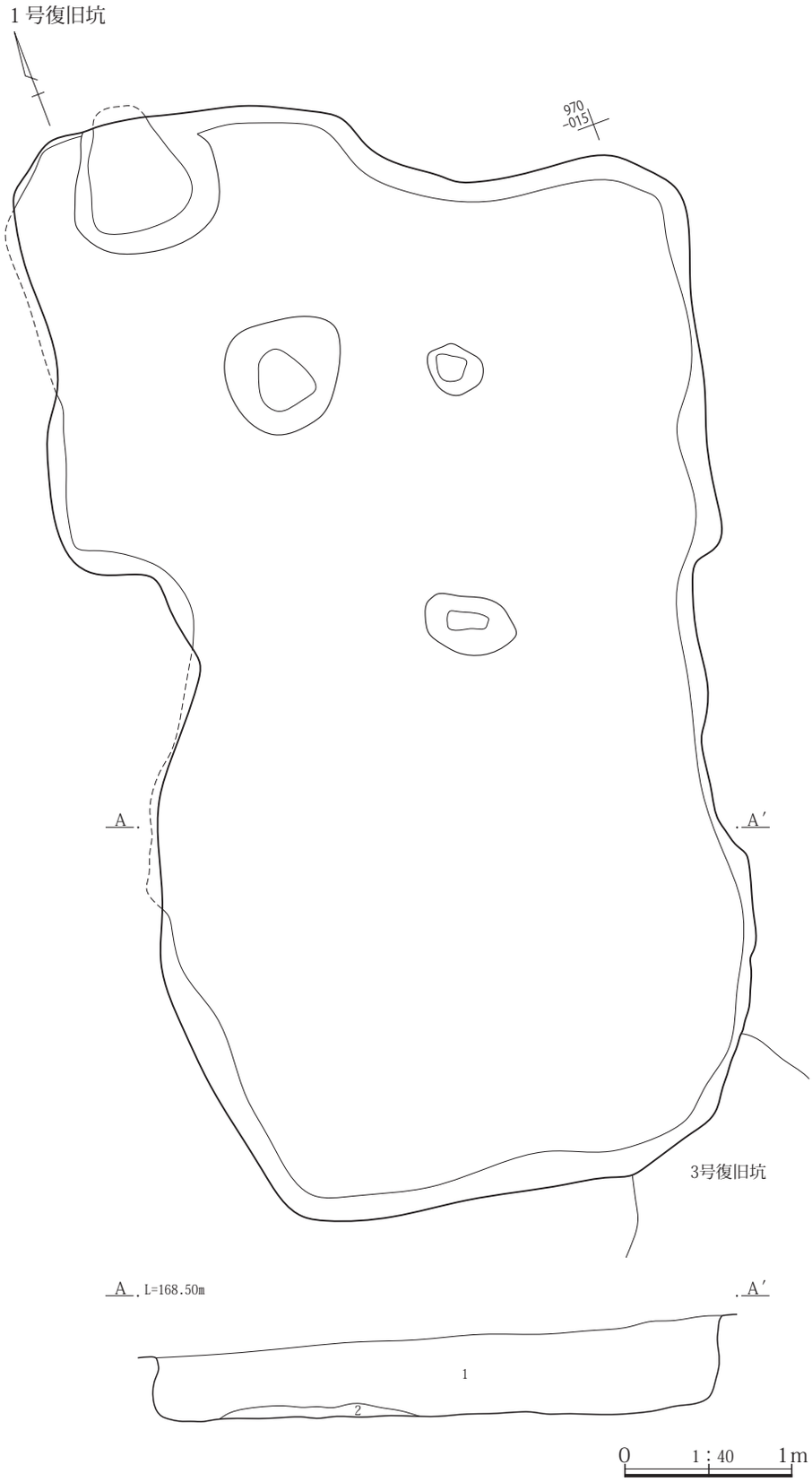
出土遺物　遺物は土師器・須恵器が若干出土しているが、陶磁器などの出土はみられなかった。

所見　埋没土上位はAs-Aを含む土砂で埋め戻されたことから天明３年直前に廃棄されて途中まで埋め戻されたときに噴火が起きたと判断される。

第３項　復旧坑

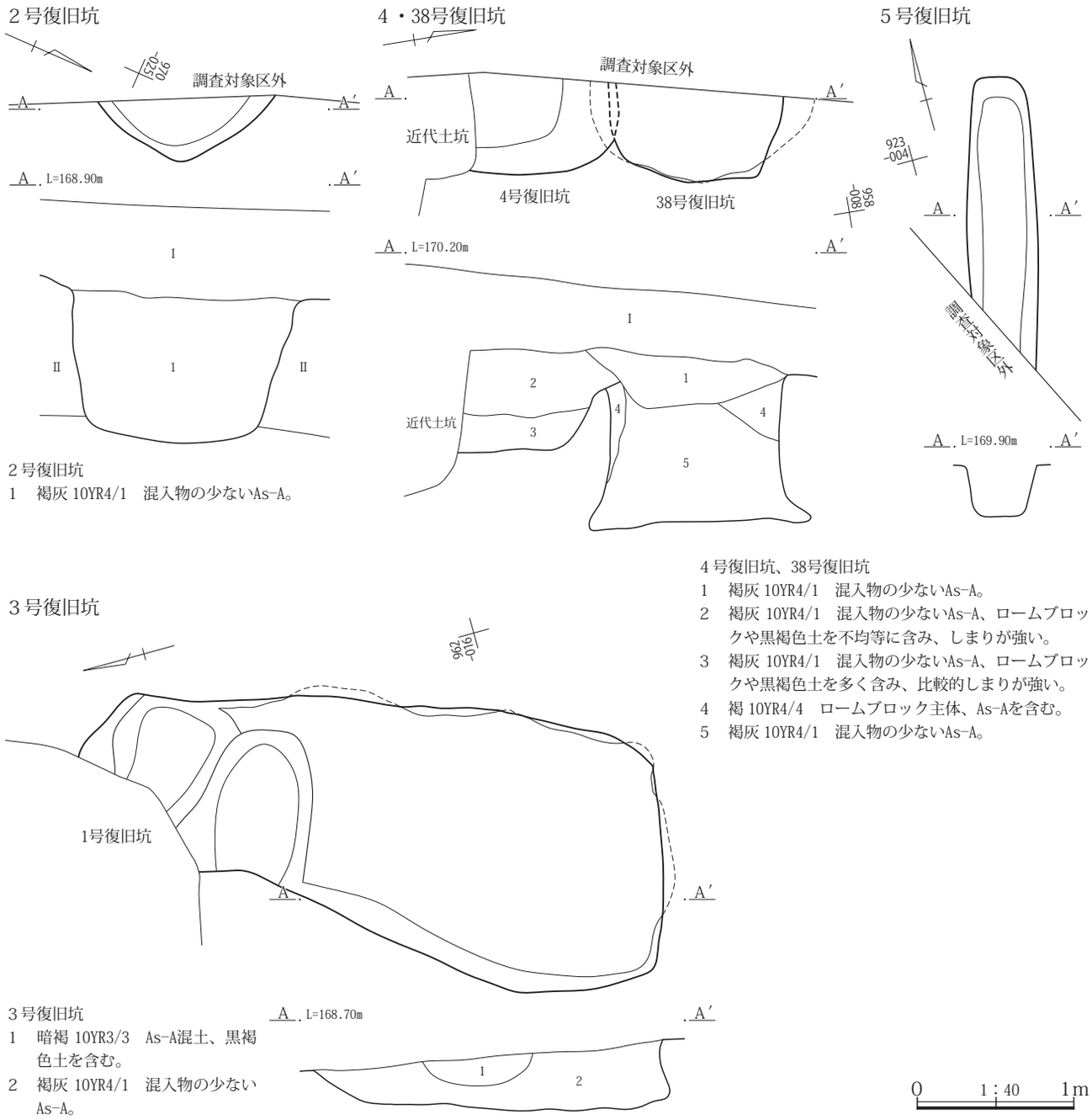
復旧坑は、２区から５区調査区で34基を検出している。なお、復旧坑と土坑の違いは復旧坑がAs-A降下後にAs-A除去のために掘削されたものである。土坑の中にも１区・２区調査区の４号土坑や170号・173号土坑のようにAs-Aを多く含む土坑が検出されているが、これらの土坑は形状が円形または楕円形等を呈し、底面が復旧坑のような粗い掘削痕が残った状態ではなく平坦に掘削され、底面とAs-A堆積の間に他の土砂の堆積が観察できる。このような遺構はAs-A降下前に掘削されていることから土坑と判断している。

本遺跡では玉村町や前橋市で調査されているような畑のサク状に隣接する間隔で溝状の細長い掘削坑にAs-Aを埋め込みその上に掘削した土砂で覆う形態とは異なる。形状は大型の不定形や一般的な規模の長方形、やや細長いの土坑状の掘り込みにAs-Aを埋め込む形態である。この形状の相違は玉村町や前橋市で検出されている復旧坑が耕作地の対応であるのに対して本遺跡は集落に降下・堆積したAs-Aを除去・廃棄するためであったことによると想定される。



1号復旧坑
1　暗褐 10YR3/3　比較的純度の高いAs-A混土、ロームの小ブロックを含む。南側は黒褐色土の割合が多くなり、短期間に廃棄されたものとみられる。
2　暗褐 10YR3/3　黒色粘性土が主体、ロームブロックを含み、しまりが強い。掘削時の残土を踏み固めたのか、As-Aが混じる。

第323図　１号復旧坑遺構図



２号復旧坑
1　褐灰 10YR4/1　混入物の少ないAs-A。

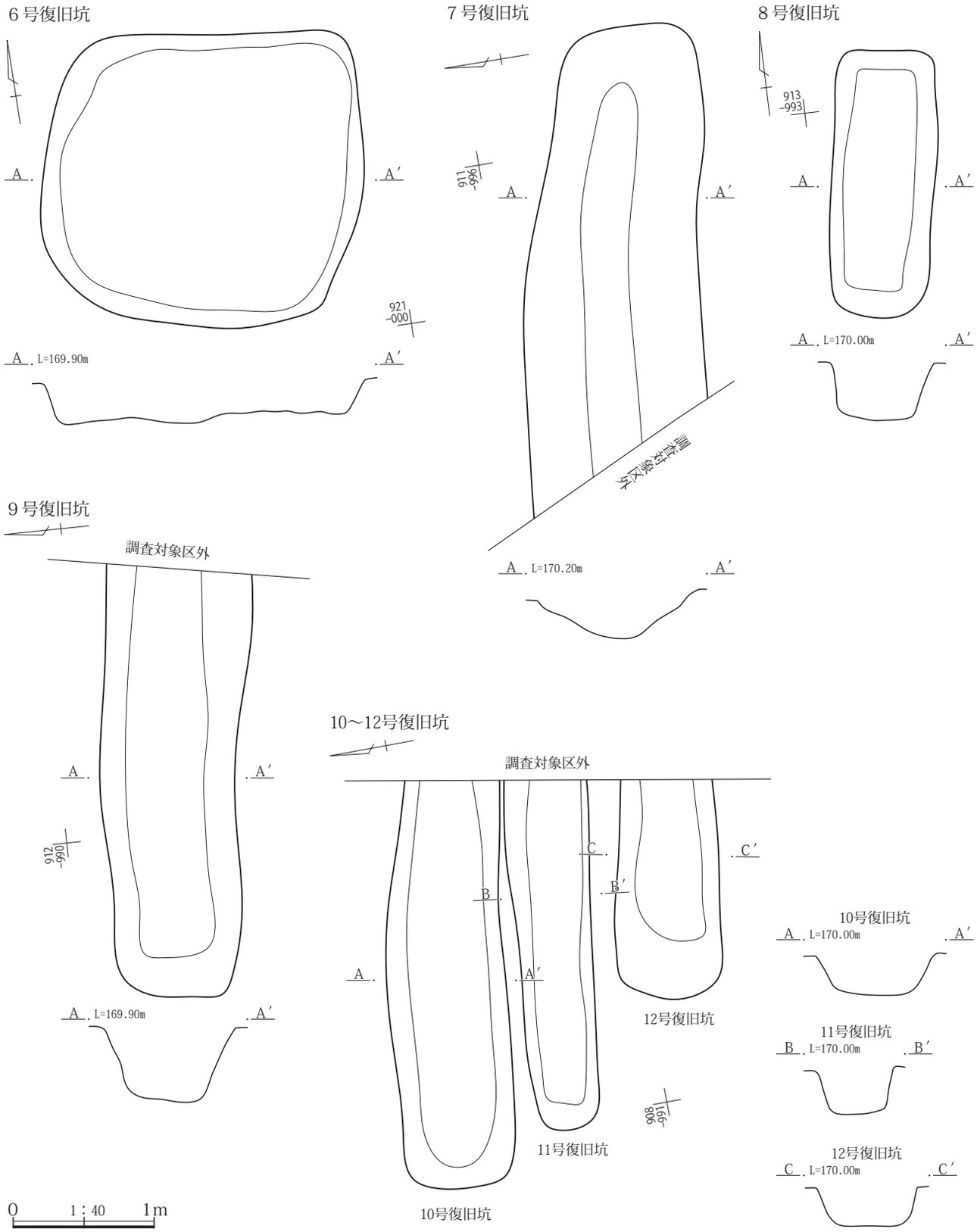
４号復旧坑、38号復旧坑
1　褐灰 10YR4/1　混入物の少ないAs-A。
2　褐灰 10YR4/1　混入物の少ないAs-A、ロームブロックや黒褐色土を不均等に含み、しまりが強い。
3　褐灰 10YR4/1　混入物の少ないAs-A、ロームブロックや黒褐色土を多く含み、比較的しまりが強い。
4　褐 10YR4/4　ロームブロック主体、As-Aを含む。
5　褐灰 10YR4/1　混入物の少ないAs-A。

３号復旧坑
1　暗褐 10YR3/3　As-A混土、黒褐色土を含む。
2　褐灰 10YR4/1　混入物の少ないAs-A。

第324図　２～５・38号復旧坑遺構図

復旧坑の多くはAs-Aだけを埋め込んでいるが、１号復旧坑や３号復旧坑のような規模の大きなものではAs-A下の表土も一緒に掻き集めて埋め込んでいるためAs-Aの含有率が50～60％となっているものも存在する。

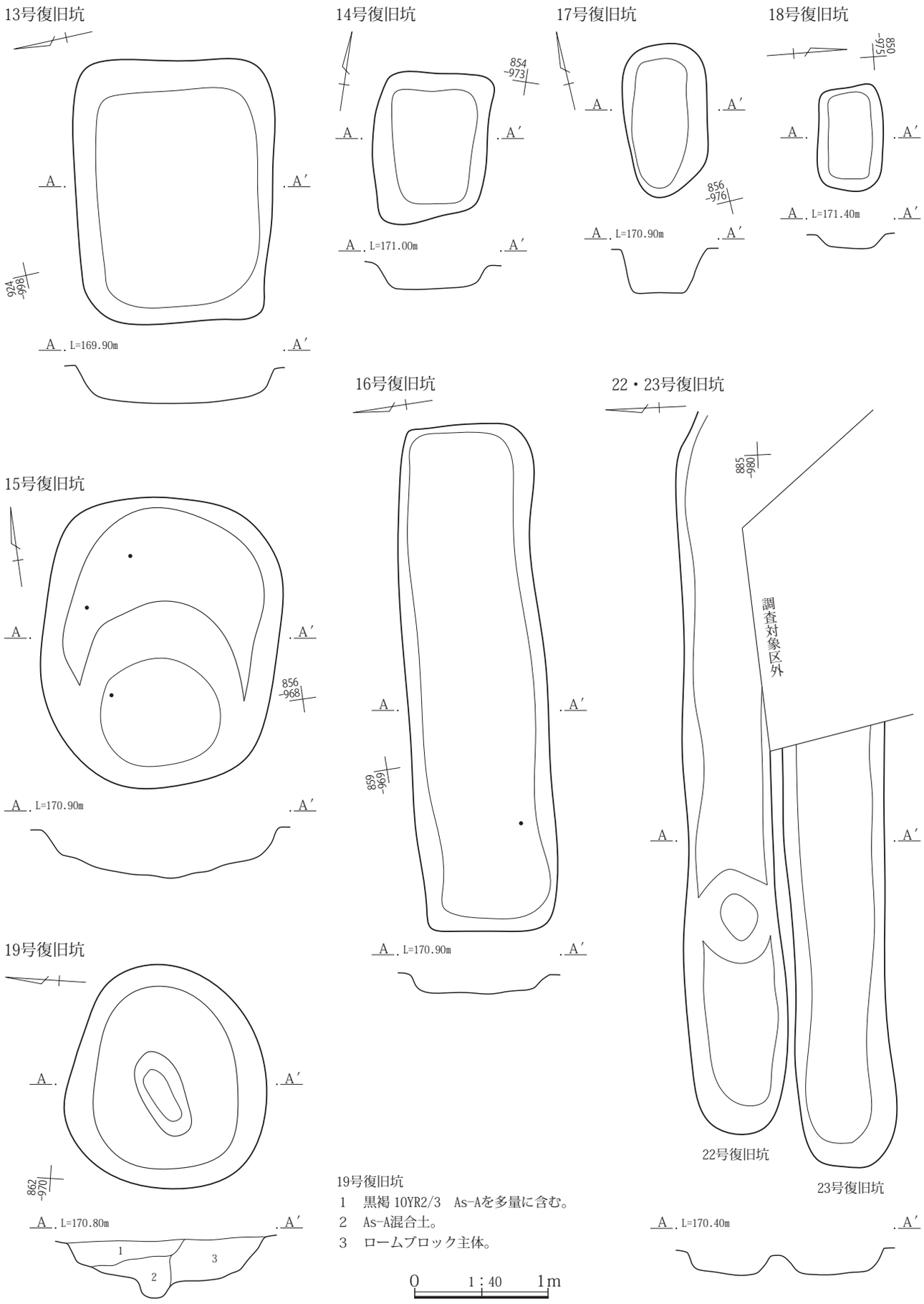
なお、第６表に示した深さは確認面からの深さのため復旧坑としては浅い状態を示しているが、３区では、当時の地表面は確認面より80cm以上上位であったことが調査範囲境の断面からわかっている。こうした点は、平面の状態からはAs-Aの除去が一部だけであったとみられがちであるが、実際は集落内の空き地に深い掘削坑を設けてそこに大量のAs-Aを除去していたことがわかる。こうしたことは28号復旧坑、29号復旧坑が顕著で、確認面では間隔の空いた別々の復旧坑であるが、断面では28号復旧坑が掻き集めたAs-Aで満たされた後に29号復旧坑が新たに掘削されたことが確認されており、28号復旧坑だけでは除去できないため新たな掘削坑である29号復旧坑が掘削されたと想定される。また、21号復旧坑ではAs-Aを掻き集める前に不要になった多量の礫や焼けた枝を投棄



第325図　６～12号復旧坑遺構図

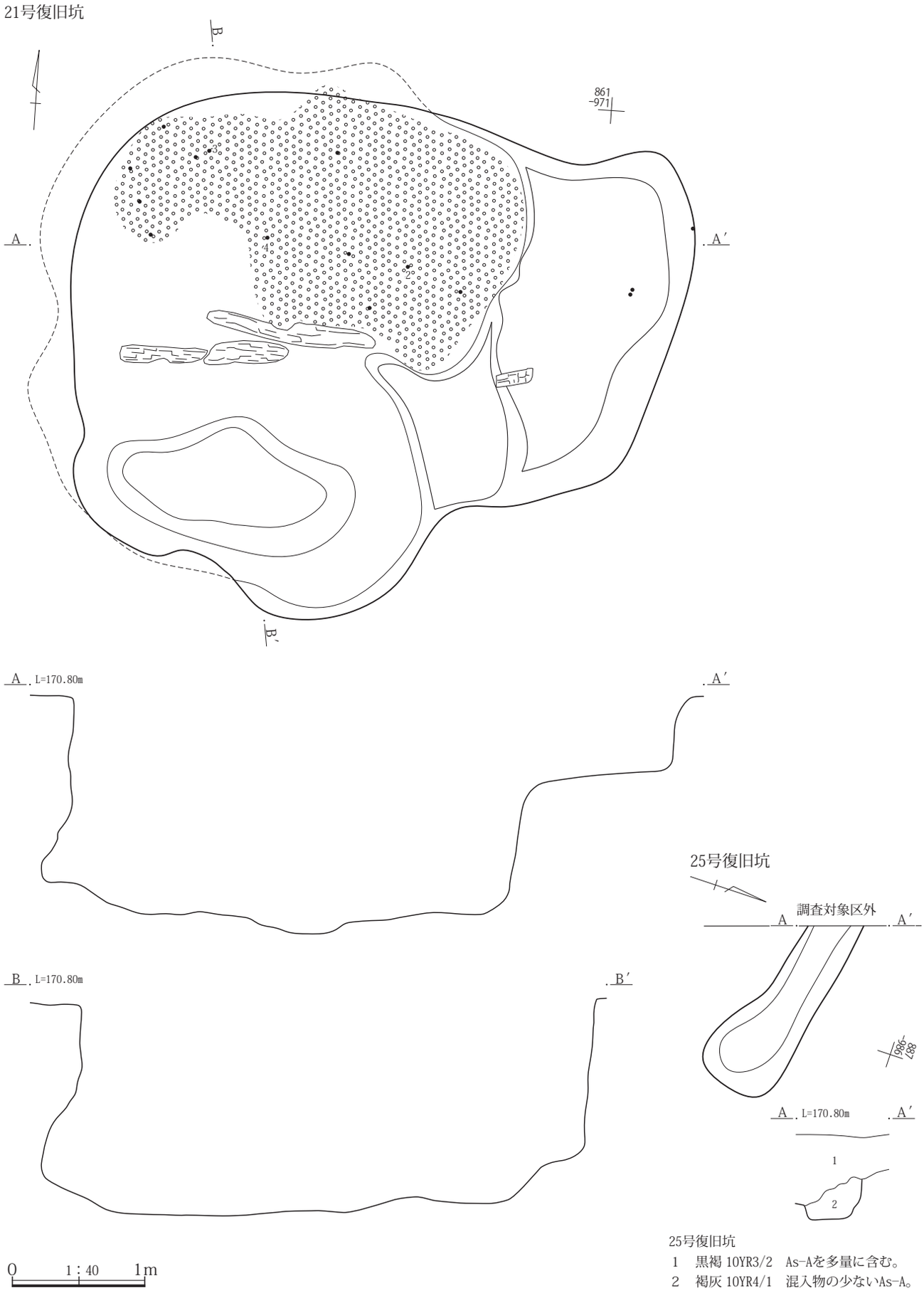
している。そして一部の復旧坑では除去したAs-A上面が硬くしまっており、その上を長期に往来していたことが窺えた。

遺物は一部から国産磁器や陶器などが出土しているが、基本的に廃棄されたもののため図示できるものはなかった。



第326図　13～19・22・23号復旧坑遺構図

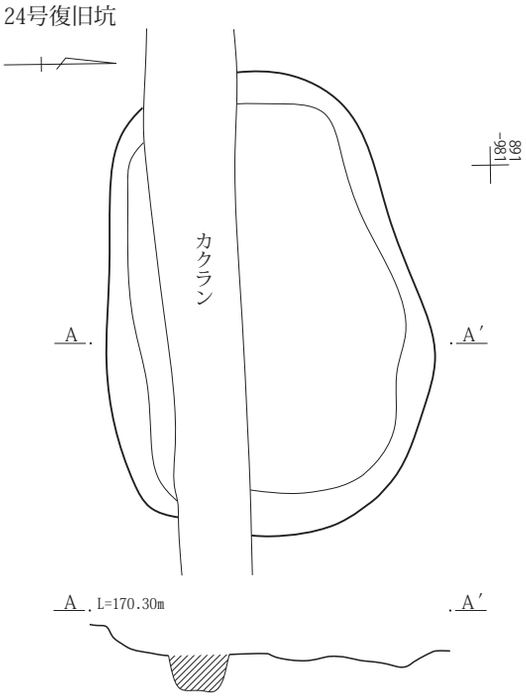
21号復旧坑



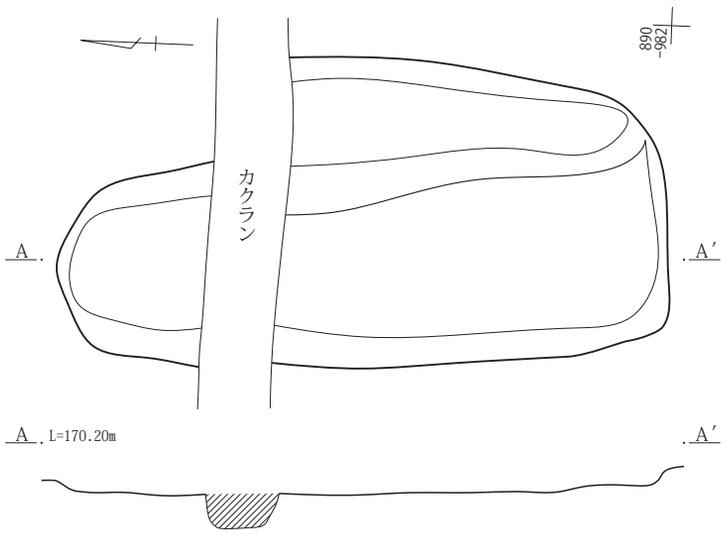
25号復旧坑
1　黒褐 10YR3/2　As-Aを多量に含む。
2　褐灰 10YR4/1　混入物の少ないAs-A。

第327図　21・25号復旧坑遺構図

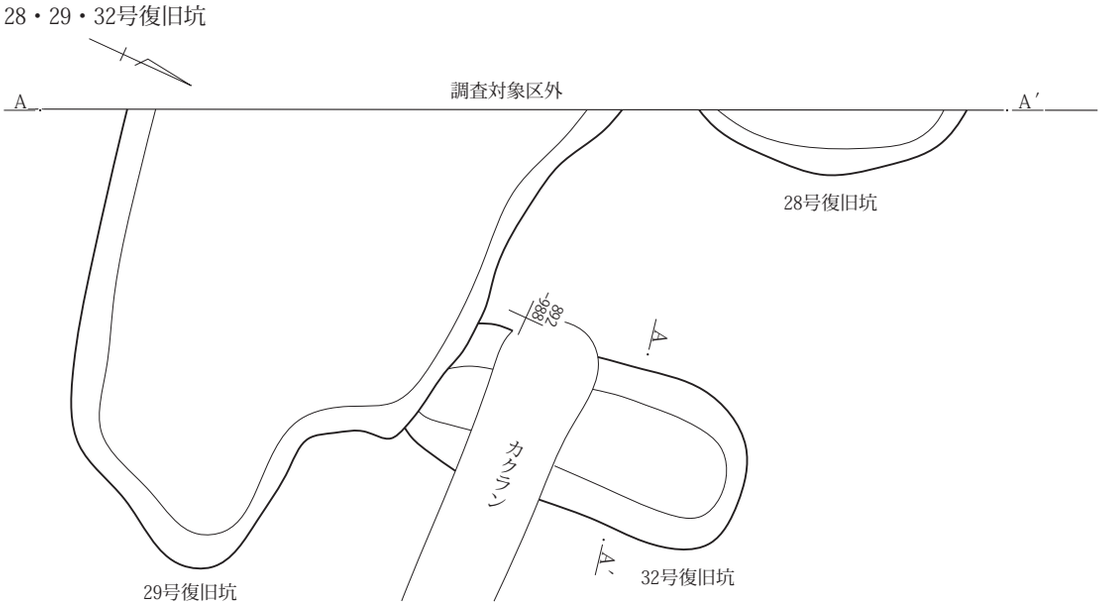
24号復旧坑

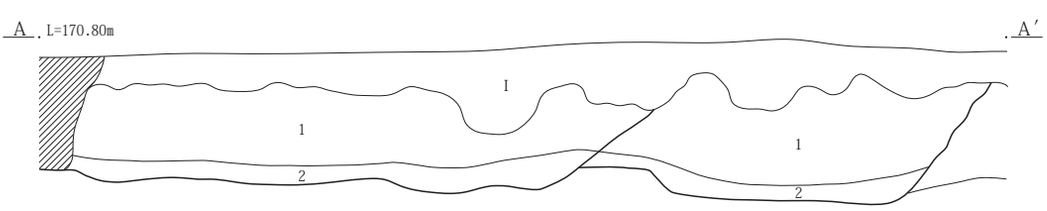


27号復旧坑

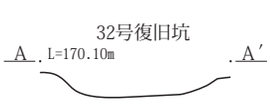


28・29・32号復旧坑





32号復旧坑

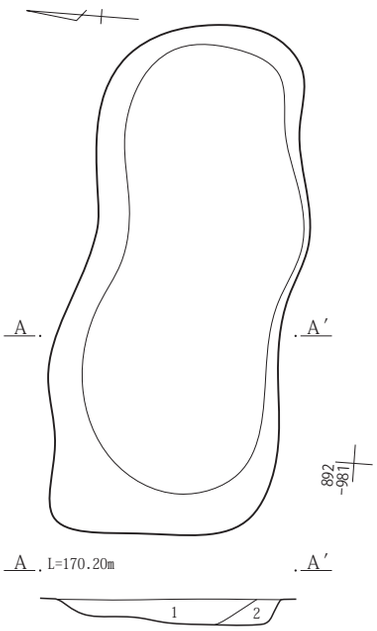


28号復旧坑、29号復旧坑
1　黒褐 10YR3/2　As-Aを多量に含む。
2　褐灰 10YR4/1　混入物の少ないAs-A、底面付近に黒色土を多く含む。

0　1：40　1m

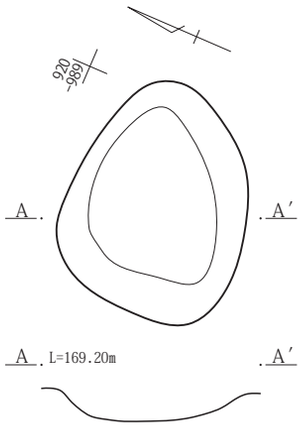
第328図　24・27～29・32号復旧坑遺構図

30号復旧坑

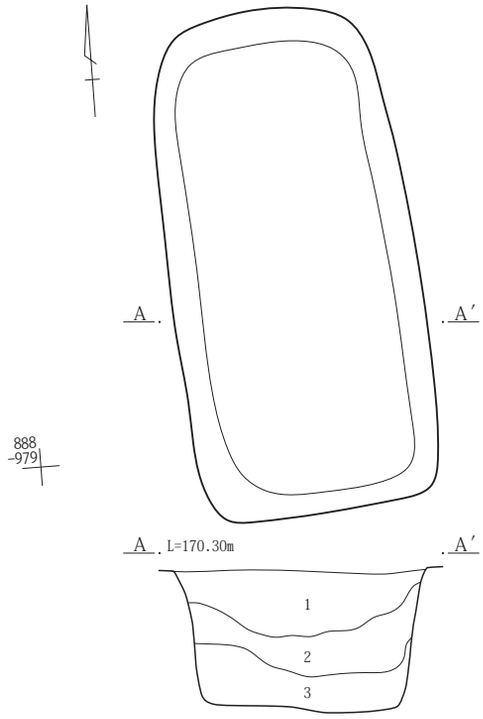


30号復旧坑
1　As-A主体、焼土と暗褐色土を多量に含む。
2　混入物の少ないAs-A。

35号復旧坑

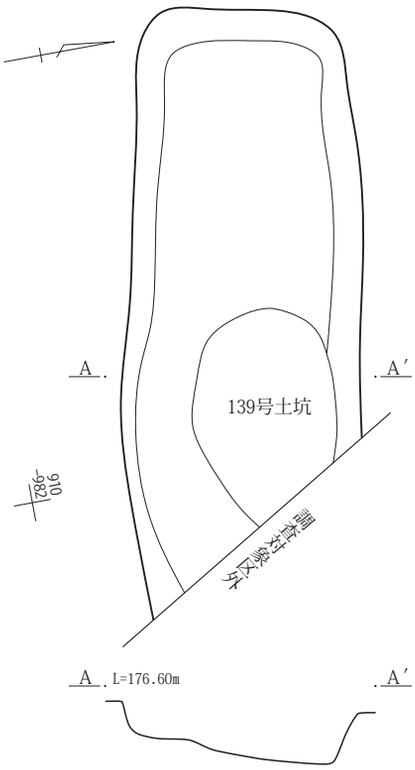


36号復旧坑

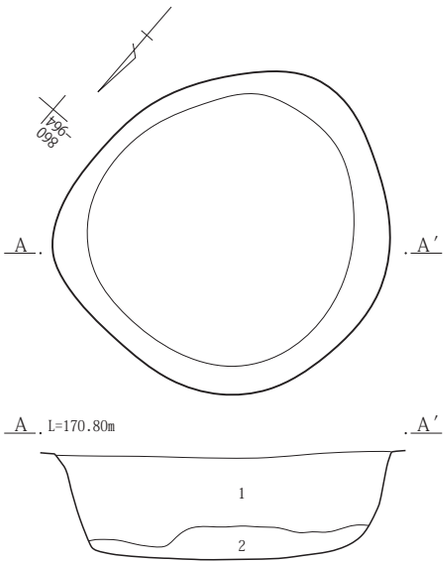


36号復旧坑
1　As-A混合土。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを10％含む。As-AかAs-Bか不明だが混土。
3　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを５％含む。
4　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを20％含む。As-AかAs-Bか不明だが混土。

34号復旧坑



37号復旧坑



37号復旧坑
1　As-Aと黒褐色土が交互に縞状に堆積。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～２mmの褐色土ブロックを１％と不明の軽石を多く含み、ややしまりが強い微粘性土。

0　1：40　1m

第329図　30・34～37号復旧坑遺構図

第６表　井戸一覧(中世以降)

区	№.	位置	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複	時期	備考
2	1	974・-016	円形	0.60	0.56	0.67	N-46°-W	11号溝・12号溝	近世	礫が投棄されている。
3	2	909・-991	楕円形	1.11	1.08	2.30	N-37°-W	185号ピット	中世	礫が投棄されている。
3	3	122・055	円形	1.00	0.87	1.23	N-73°-W	単独	近世	
3	4	100・-065	円形	1.14	1.09	0.93	N-87°-E	27号復旧坑	近世	
3	5	100・-070	楕円形	2.00	1.62	3.0+	N-75°-W	15号溝	近世	
4	6	101・-069	矩形	0.93	0.92	2.75	N-40°-W	156号土坑	中～近世	
4	7	105・-075	楕円形	1.56	1.57	2.47	N-44°-W	単独	中～近世	
3	8	116・-071	矩形	1.3+	1.0+	0.7+	N-22°-E	単独	近世	壁面石積み。

第７表　復旧坑一覧

区	№.	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複	時期	備考
2	1	964・-015	不整形	6.68	2.96	0.77	N-10°-E	３号復旧坑	近世	底面にピットあり
2	2	970・-124	不整形	(0.72)		0.13	N-20°-E		近世	
2	3	961・-016	不整形	3.78	1.10	0.48	N-23°-E	１号復旧坑	近世	
2	4	955・-008	楕円形		(0.72)	0.72	N-9°-E	→90号土坑、 ←38号復旧坑	近世	90号土坑は近代
3	5	921・-104	長方形	(1.62)	0.45	0.32	N-16°-E		近世	
3	6	921・-000	方形	2.26	2.07	0.26	N-82°-W		近世	
3	7	909・-995	長方形	(3.14)	1.24	0.35	N-76°-W		近世	
3	8	911・-992	長方形	1.89	0.75	0.39	N-10°-E		近世	
3	9	910・-998	長方形	3.03	0.95	0.55	N-83°-W		近世	
3	10	908・-988	長方形	(2.88)	0.84	0.30	N-83°-W		近世	
3	11	908・-988	長方形	(2.47)	0.59	0.35	N-83°-W		近世	
3	12	907・-988	長方形	(1.55)	0.75	0.28	N-81°-W		近世	
3	13	922・-997	方形	1.98	1.47	0.26	N-76°-W		近世	
4	14	853/-973	長方形	1.14	0.84	0.18	N-10°-E	129号・144号土坑	近世	
4	15	857/-970	楕円形	2.20	1.74	0.38	N-20°-E	146号土坑、1号集石	近世	
4	16	859/-970	長方形	3.80	1.06	0.16	N-82°-W	149号土坑、1号集石	近世	
4	17	856/-976	楕円形	1.14	0.64	0.49	N-10°-E	193号Ｐ	近世	
4	18	850/-975	長方形	0.78	0.50	0.09	N-85°-W	208号竪穴建物	近世	
4	19	862/-970	円形	1.70	1.64	0.42	N-75°-W	149号土坑、1号集石	近世	
4	21	860/-970	不整形	4.54	39.80	1.41	N-85°-W	１号集石	近世	
3	22	885・-979	長方形	(5.4)	0.75	0.35	N-88°-W		近世	底面にピット状の 掘り込み
3	23	884・-982	長方形	(3.25)	0.74	0.22	N-88°-W		近世	
3	24	889・-979	長方形	2.47	1.75	0.09	N-85°-E	217号ピット	近世	
3	25	885・-985	長方形	(1.45)	0.60	0.25	N-74°-W		近世	
3	26	欠番							近世	
3	27	890・-982	不整形	3.28	1.65	0.18	N-6°-W	207号ピット	近世	底面に段あり
3	28	892・-989	楕円形	(1.43)	(0.35)	0.15	N-25°-W	194号竪穴建物、29号復旧坑	近世	
3	29	889・-986	不整形	(2.8)	(2.18)	0.10	N-86°-W	28号・32号復旧坑・238号Ｐ	近世	
3	30	892・-978	不整形	2.72	1.23	0.10	N-89°-E		近世	
3	31	欠番							近世	
3	32	891・-987	長方形	(1.72)	0.85	0.11	N-7°-W	7号竪穴建物・29号復旧坑	近世	
3	33	欠番							近世	
3	34	910・-981	長方形	(2.82)	12.60	0.31	N-77°-W	139号土坑	近世	
3	35	919・-989	円形	1.25	0.94	0.20	N-78°-E		近世	
3	36	887・-977	長方形	2.70	1.33	0.78	N-4°-E		近世	
4	37	861/-964	円形	1.74	1.70	0.57	N-18°-W		近世	
2	38	956・-008	方形	(1.44)	(0.58)	0.97	N-9°-E		近世	

第４項　土坑

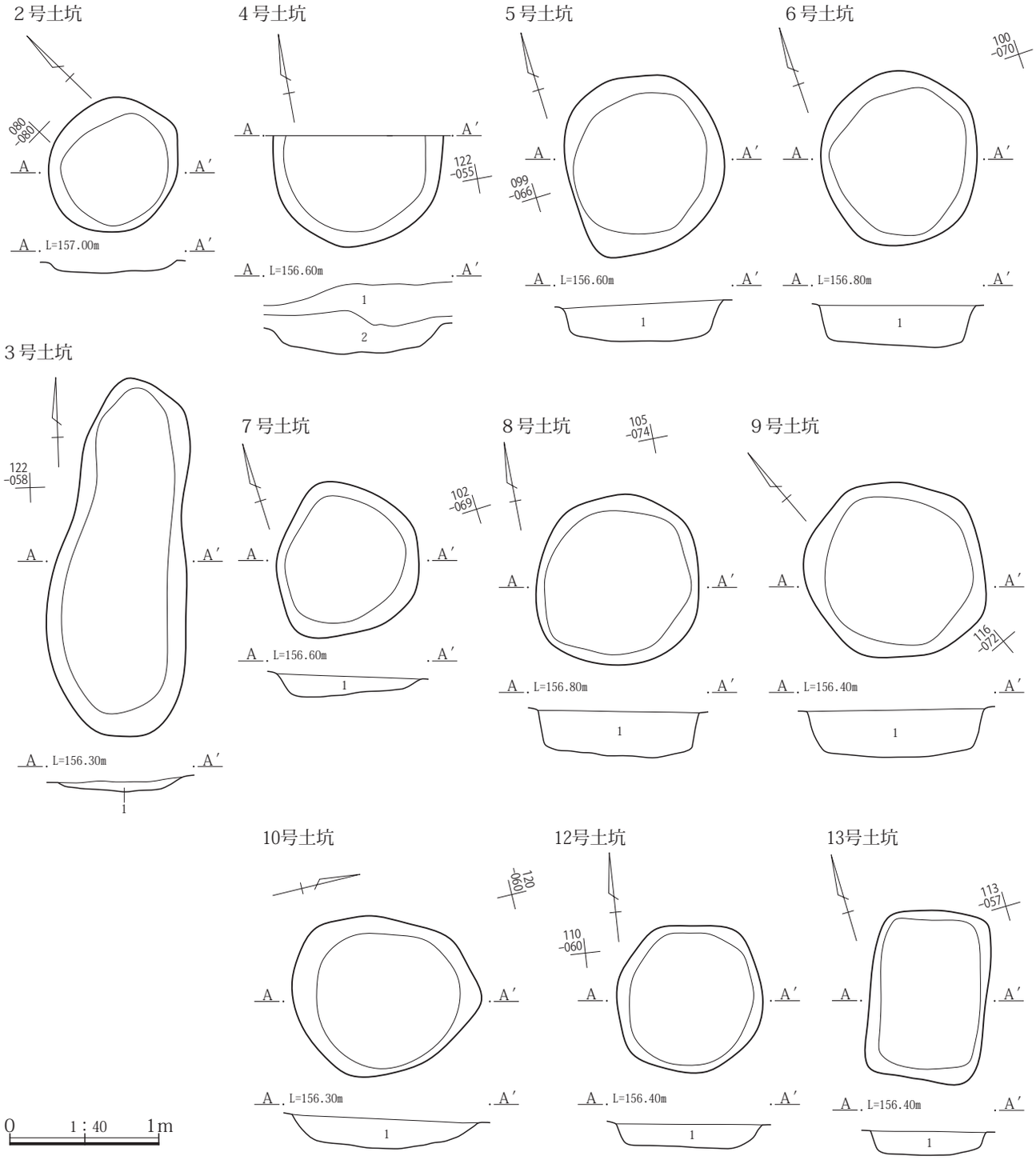
中世以降に比定できる。土坑は104基が調査されている。このうち、90号土坑は天明３年の復旧坑より後に掘削、埋め戻しが行われた土坑のため割愛した。中世以降に比定した根拠としては陶磁器などの出土があることが一義的である。しかし、遺物が出土している土坑は16基しか存在しない。そのため埋没土による判断が大きい。埋没土ではAs-BやAs-Aが混入しているものを比定した。なお、第８表で近世とした土坑はAs-Aが埋没土中に含まれているものである。中世とした土坑はAs-Bの混ざり合った土で埋没しているものである。そのため、厳密には天仁元年から天明３年以前に埋没したもので古代末から近世前半までに比定できる土坑である。

土坑には形態によって円形、長い楕円形、短い楕円形、隅丸長方形、細長い長方形、短い長方形、不整形に細分

第８表　土坑一覧(中世以降)

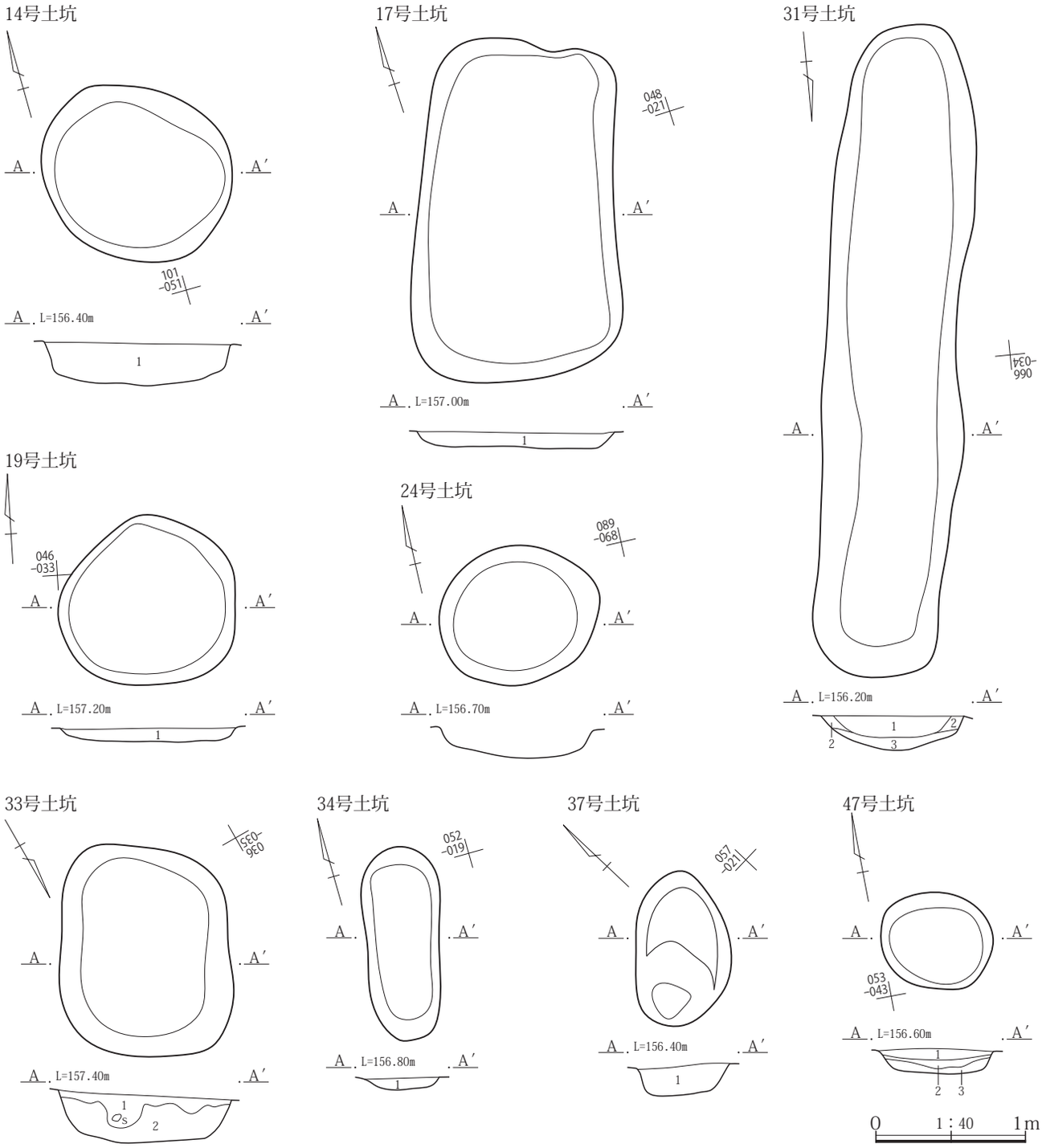
区	№.	位置	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複	時期	備考
1	2	080・-080	円形	9.40	0.88	0.06	N-28°-E	75号竪穴建物	中世	
1	3	120・-057	楕円形Ｌ	2.40	0.93	0.11	N-３°-E	3号・75号竪穴建物	中世	
1	4	122・055	円形	1.14	(0.74)	0.22	N-77°-W	３号竪穴建物	中世	1・2は調査対象区外
1	5	100・-065	円形	1.20	1.06	0.27	N-14°-E	56号・174号竪穴建物	中世	
1	6	100・-070	円形	1.14	1.00	0.29	N-12°-E	54号竪穴建物	中世	
1	7	101・-069	円形	1.04	0.96	0.13	N-10°-E	54号・68号竪穴建物	中世	
1	8	105・-075	円形	1.14	1.10	0.30	N-8°-E	18号・20号・30号・48号竪穴建物	中世	
1	9	116・-071	円形	1.12	1.09	0.30	N-11°-E	16号竪穴建物	中世	
1	10	120・-060	楕円形	1.26	1.06	0.24	N-14°-E	10号・17号竪穴建物	中世	
1	12	110・-060	円形	0.98	0.96	0.18	N-10°-E	12号・179号竪穴建物	中世	
1	13	112・-057	長方形	1.13	0.78	0.17	N-20°-E	26号・38号・42号竪穴建物	中世	
1	14	101・-050	楕円形Ｌ	1.28	1.16	0.30	N-40°-E	66号・98号・99号・100号・116号竪穴建物	中世	
1	17	046・-022	長方形	2.26	1.36	0.11	N-18°-E	18号土坑	中世	
1	19	045・-033	円形	1.20	1.14	0.10	N-85°-E	143号竪穴建物	中世	
1	24	089・-070	円形	1.08	0.96	0.21	N-10°-E	152号竪穴建物	中世	
1	31	064・-033	長方形Ｌ	4.34	0.94	0.20	N-10°-E		中世	
1	33	036・-035	長方形	1.54	1.24	0.30	N-3°-W	108号・143号竪穴建物	中世	
1	34	051・-020	楕円形	1.28	0.52	0.10	N-15°-E	94号・112号竪穴建物	中世	
1	37	057・-022	楕円形	1.04	0.63	0.22	N-50°-E	111号・115号竪穴建物	中世	
1	47	053・-042	円形	0.76	0.62	0.15	N-34°-W		中世	
1	48	056・-045	楕円形	0.74	0.62	0.22	N-15°-E	31号竪穴建物	中世	
1	49	059・-038	不整形	0.96	0.56	0.15	N-82°-W		中世	
1	53	077・-058	円形	1.24	1.00	0.11	N-83°-E		中世	
1	54	087・-073	円形	0.72	0.72	0.19	N-35°-E	149号竪穴建物	中世	
2	88	017・-052	楕円形？	(0.93)		0.66	N-54°-W		中世	
2	89	979・-023	円形	6.76	0.65	0.47	N-42°-W	17号溝(旧屋敷)	中世	
2	90	652・-008	不整形	(2.60)		1.07	N-59°-W		近代	
3	91	612・-995	方形	0.92	0.54	0.16	N-84°-W		中世	
3	92	913・-997	長方形	1.88	0.98	0.64	N-15°-E		中世	
3	93	910・-995	不整形	1.32	0.90	0.32	N-9°-E		中世	
3	94	916・-992	長方形	1.58	1.03	0.84	N-14°-E		中世	
3	95	917・-996	長方形	2.26	1.25	0.25	N-85°-W	96号土坑	中世	
3	96	917・-995	長方形？	2.37	1.06	0.49	N-81°-W	95号土坑	中世	
3	97	913・-998	長方形	2.86	0.50	0.54	N-14°-E		中世	
3	98	914・-000	長方形	(1.40)	0.58	0.34	N-7°-E		中世	
4	99	838・-960	楕円形	0.84	0.60	0.61	N-74°-E	212号竪穴建物	中世か	
4	100	840・-964	長方形	2.02	0.68	0.36	N-10°-E	205号竪穴建物	中世	
4	101	837・-965	長方形	2.10	0.68	0.39	N-５°-E	205号・207号竪穴建物、102号土坑	中世	
4	102	839・-965	長方形	1.48	0.64	0.50	N-80°-W	205号竪穴建物、101号土坑	中世	
4	103	845・-965	長方形Ｌ	2.20	0.84	0.32	N-15°-E	134号土坑	中世	
4	104	847・-967	長方形Ｌ	2.64	0.88	0.81	N-10°-E	206号竪穴建物、196号ピット	中世	
3	105	886・-984	楕円形	0.94	0.62	0.28	N-7°-E		中世	
4	106	851・-971	長方形Ｌ	2.12	0.64	0.62	N-86°-W	206号竪穴建物、107・108号土坑	中世	
4	107	851・-992	長方形Ｌ	3.12	0.60	0.30	N-80°-W	206号竪穴建物、106号土坑	中世	
4	108	852・-972	長方形Ｌ	3.18	0.60	0.24	N-80°-W	206号竪穴建物、107号土坑	中世	

区	№.	位置	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複	時期	備考
4	109	850・-965	長方形Ｌ	1.22	0.60	0.24	N-75°-W	110号・111号土坑	近世	
4	110	849・-966	長方形	1.38	1.00	0.35	N-12°-E	109号・111号土坑	中世	
4	111	849・-966	長方形Ｌ	0.98	0.50	0.36	N-75°-W	110土坑	中世	
4	112	847・-972	長方形Ｌ	1.54	0.95	0.32	N-6°-E	113号・122号土坑	中世	
4	113	848・-969	長方形Ｌ	(1.66)	0.74	0.31	N-85°-W	112号・122号土坑	中世	
4	114	842・-969	長方形Ｌ	(3.96)	0.84	0.40	N-12°-W	115号・124号・125号土坑	近世	
4	115	842・-971	長方形Ｌ	2.06	0.66	0.47	N-10°-E	207号竪穴建物、114号土坑	不明	
3	116	896・-988	長方形Ｌ	2.47	0.45	0.11	N-89°-E		中世	確認面に礫が配列
3	117	887・-981	楕円形	1.6	1.25	0.63	N-44°-E		中世	
3	118	887・-983	楕円形	1.77	1.23	0.90	N-9°-W		近世	
3	119	888・-986	長方形	1.08	0.60	0.39	N-8°-E		近世か	
3	120	889・-985	長方形	1.05	0.75	0.28	N-88°-W		中世以降	
3	121	939・-001	方形	1.75	1.00	0.67	N-19°-E	15号溝	中世？	凹石
4	122	847・-971	不整形	(1.74)	(1.56)	0.25	N-97°-W	208号竪穴建物、112号・113号土坑	不明	
4	123	847・-968	長方形Ｌ	2.56	0.54	0.40	N-83°-W	124号土坑、227号ピット	中世以降	
4	124	845・-968	長方形Ｌ	2.42	1.22	0.18	N-83°-W	114号・123号・125号土坑、227号ピット	中世以降	
4	125	845・-971	長方形Ｌ	1.18	0.72	0.53	N-83°-W	124号・114号土坑	中世	
4	126	843・-971	長方形	(1.16)	0.54	0.16	N-80°-W		近世	
3	127	935・-003	不整形	2.12	1.60	0.98	N-34°-W	190号竪穴建物、15号溝	中世以降	
4	128	855・-975	長方形	2.05	0.58	0.31	N-85°-W		中世以降	
4	129	854・-976	長方形Ｌ	1.83	0.62	0.19	N-78°-W	130号土坑、14号復旧坑	中世以降	
4	130	853・-974	長方形Ｌ	2.12	0.52	0.11	N-80°-W	129号土坑	不明	
4	131	853・-974	長方形Ｌ	1.94	0.46	0.15	N-83°-W		不明	
4	132	852・-974	不整形	1.72	0.66	0.09	N-85°-E		不明	
3	135	889・-976	長方形	2.09	0.53	0.47	N-1°-E		不明	形状から判断
3	136	892・-975	楕円形	1.02	0.86	0.52	N-70°-E		近世	
4	137	855・-970	楕円形	1.56	1.06	0.23	N-83°-W	9 号竪穴状遺構	中世以降	
3	138	905・-981	長方形	2.49	1.04	0.56	N-85°-W	253号・254号・255号・256号ピット	中世	
3	139	910・-982	長方形	(3.28)	1.38	0.66	N-78°-W		中世	内部に楕円形の落ち込み
3	141	927・-994	長方形	1.34	0.90	0.28	N-78°-W		中世	
4	142	970・-983	円形	2.64	(2.02)	1.07	N-75°-E		近世	―
4	144	850・-973	不整形	2.84	2.14	0.19	N-5°-E	14号復旧坑、214号ピット	中世	人為的な埋め戻し
4	146	855・-970	長方形	1.56	1.44	0.83	N-12°-E	15号復旧坑	近世	
4	147	835・-953	長方形	1.94	0.56	0.56	N-10°-E		中世以降	
4	148	836・-955	長方形	1.98	0.68	0.34	N-80°-W		中世以降	
4	149	858・-970	長方形	2.66	0.98	0.36	N-15°-E	16号・19号復旧坑、1号集石	中世以降	灰釉陶器浄瓶
4	150	832・-946	長方形	0.94	0.68	0.21	N-5°-E		不明	
4	151	835・-950	長方形	0.62	0.54	0.20	N-10°-E		不明	
4	152	740・-951	円形	1.18	1.10	0.34	N-5°-W	215号竪穴建物	不明	
4	153	865・-960	隅丸長方形	1.00	0.84	0.26	N-58°-W	223号竪穴建物	不明	
4	155	865・-960	円形	1.50	1.32	0.63	N-73°-W	223号竪穴建物	不明	釘２点
4	156	856・-964	不整形	1.84	1.78	0.71	N-85°-W	6号井戸、165号土坑	中世以降	人為的な埋め戻し
4	157	870・-968	円形	0.74	0.72	0.19	N-20°-E		中世以降	多孔石
4	158	853・-958	長方形Ｌ	2.58	0.58	0.19	N-10°-E		中世	
4	159	853・-955	長方形Ｌ	1.60	0.46	0.08	N-78°-W		中世	
4	160	848・-957	方形	0.68	(0.62)	0.39	N-20°-E	216号竪穴建物	中世	
4	161	855・-951	長方形Ｌ	(1.45)	0.42	0.08	N-78°-W		中世	
4	162	859・-963	円形	1.22	1.18	0.17	N-2°-E		不明	
4	163	856・-962	円形	1.02	1.00	0.55	N-5°-E	165号土坑	近世	底面に桶底板の痕跡
4	164	859・-956	円形	1.10	1.06	0.51	N-70°-W	300ピット、320ピット	中世	
4	165	855・-961	隅丸長方形	2.32	(1.50)	0.38	N-8°-W	156号・163号土坑	中世	
4	166	866・-964	大型楕円形	3.14	1.88	1.14	N-3°-W		中世	内部に石積み施設
4	167	866・-965	大型楕円形	2.76	1.56	0.42	N-4°-E	222号竪穴建物	中世	
4	168	870・-966	円形	1.54	1.46	0.56	N-70°-W		中世	
2	170	987・-017	不整形	1.26	1.08	0.55	N-33°-W		近世	
2	171	983・-019	隅丸長方形	1.38	0.60	0.39	N-82°-W		近世	
2	172	932・-017	円形	0.86	0.84	0.47	N-5°-E		近世	墓坑、底面に桶底板
2	173	980・-015	四角形	1.98	(0.90)	0.45	N-3°-W		近世	
4	174	862・-980	楕円形	(0.86)	0.60	0.08	N-68°-E		中世	



２号土
埋没土　暗褐 10YR3/3　As-B混土。
３号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土。
４号土坑
1　にぶい黄褐 10YR4/3　As-B混土。
2　暗褐 10YR3/3　As-B混土。
５号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土の中に褐色土をブロック状に３％含む。
６号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土の中に褐色土をブロック状に２％含む。
７号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土の中に褐色土をブロック状に１％含む。
８号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土の中に褐色土をブロック状に１％含む。
９号土坑
1　暗褐 10YR3/3　多くのAs-Bを含む混土、ややしまり欠く砂質土。
10号土坑
1　暗褐 10YR3/3　多くのAs-Bを含む混土、ややしまり欠く砂質土。
12号土坑
1　暗褐 10YR3/3　多くのAs-Bを含む混土、ややしまり欠く砂質土。
13号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土の中に褐色土をブロック状に１％含む。

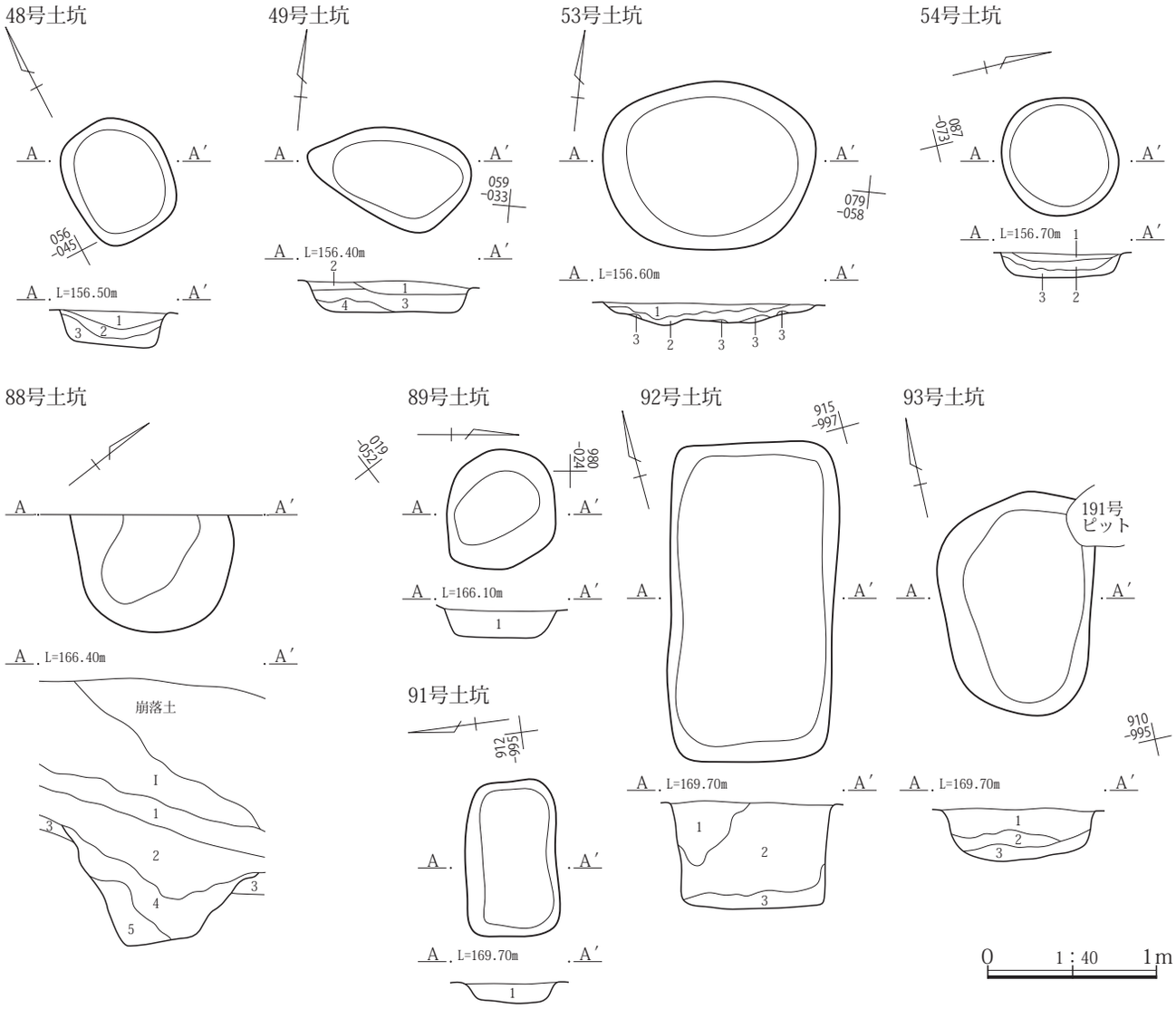
第330図　２～10・12・13号土坑遺構図



14号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土、粘土ブロックを５％含む。
17号土坑
1　暗褐 10YR3/3 As-B混土。
19号土坑
1　黒褐 10YR2/2　As-B混土。
24号土坑
埋没土　暗褐 10YR3/3　As-B混土。
31号土坑
1　灰黄褐 10YR4/2　As-B主体、ややしまり弱い。
2　黒褐 10YR3/1　混入物少ない粘性土。壁の崩落土か。
3　褐 10YR4/4　粗粒の泥流土を基質とする地山に近い。黒色土がブロック状に混入する。

33号土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-Cの混入やや多い、しまりが強い砂質土。
2　暗褐 10YR3/3　泥流土粒、As-Cが少量混じる微粘性土。
34号土坑
1　灰黄褐 10YR4/2　As-B混土。
37号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土。
47号土坑
1　暗褐 10YR3/3　焼土ブロックを少量含み、固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
3　黒褐 10YR2/3　やや粘性がある。

第331図　14･17・19・24・31・33・34・37・47号土坑遺構図



48号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％含む。
3　黒褐 10YR2/3　やや粘性がある。

49号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　炭化物を帯状に10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の焼土ブロックを１％、φ１㎜の炭化物片を１％含む。
4　黒褐 10YR2/3　粘性強い。

53号土坑
1　黒褐 10YR3/2　泥流土粒、As-Cをやや多く焼土、炭化物粒を不均等に含み、しまりがごく強い微粘性土。
2　黒褐 10YR2/2　薄層状の地山泥流土を不均等に含み、しまりがごく強い細粒微粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭な地山泥流土を主体に、２をブロック状に不均等に含み、しまりごく強い。

54号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の褐色土ブロックを１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや粘性がある。

88号土坑
1　As-Aの２次堆積。
2　黒褐 10YR3/2　As-Bの混合土。混入物は少なく、しまりが強い非粘性土。
3　褐 10YR4/4　斑状に黒色味を帯びている。
4　黒褐 10YR3/2　As-Bや不明瞭なローム土粒を少量含み、ややしまりが強い。
5　黒褐 10YR3/2　微細な白色パミスを多く含み、しまりの強い弱粘性土。

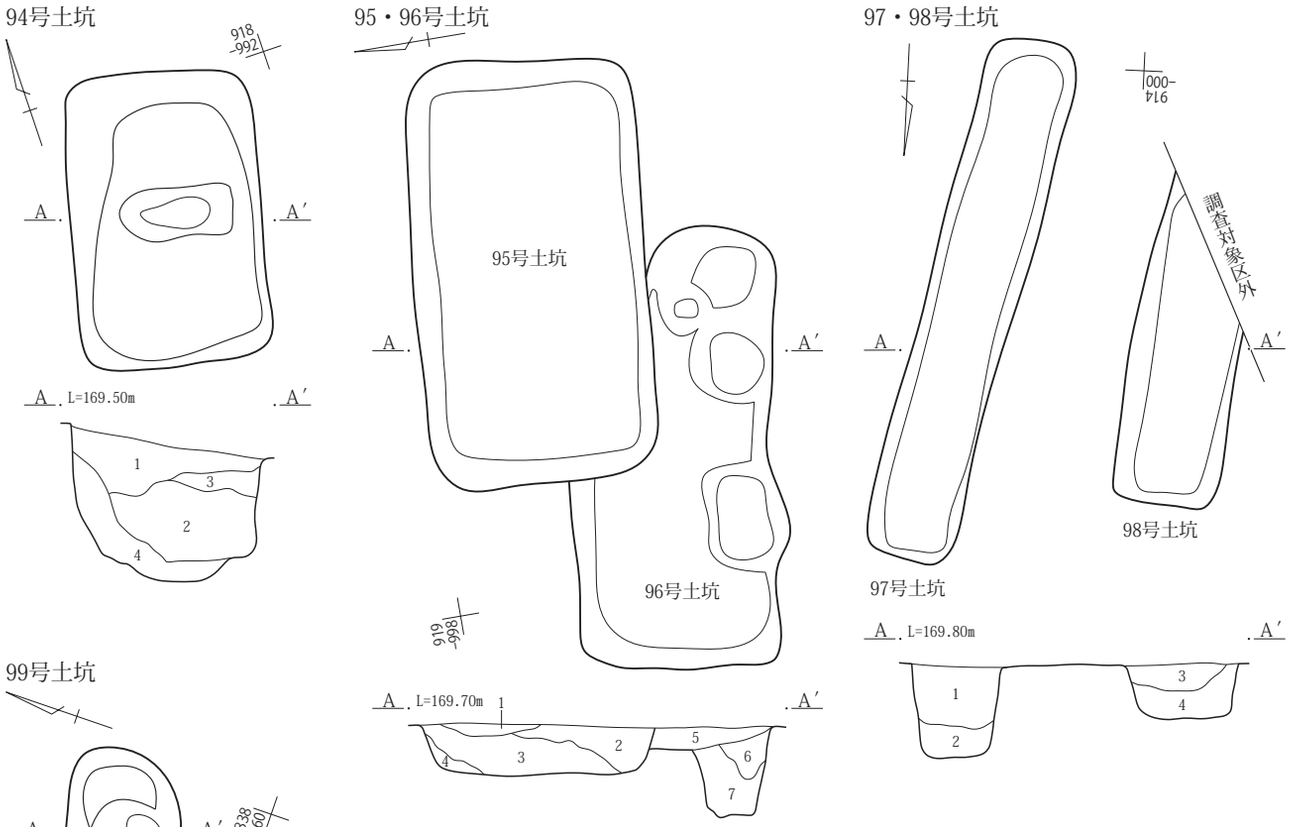
89号土坑
1　黒褐 10YR2/3　As-Aの混土、ロームをブロック状に５％含む。

91号土坑
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土。

92号土坑
1　暗赤褐 5YR3/3　土質は２と同じだが、焼土を多く含む。
2　灰黄褐 10YR4/2　最大20㎜前後のAs-YPを多量にロームブロックが下半ほど多く含み、ややしまり弱い。
3　黒褐 10YR2/2　混入物少ない、耕作土のようなやや細粒土、弱粘性土。底面は丁寧に底さらいしている。

93号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-C・ロームブロックを不均等に含み、ややしまり弱い微粘性土。As-Aも混じるようだが不明瞭。
2　黒褐 10YR3/2　基質土は黒色味強い、ローム粒・As-Cを霜降状に含み、ややしまり弱い。
3　明黄褐 2.5YR7/6　As-YPの崩落土、黒褐色土を含む。

第332図　48・49・53・54・88・89・91～93号土坑遺構図



94号土坑
1　暗褐 10YR3/3　基質土は黒色味強い。ローム大ブロック･YPを不均等にやや多く含み､ややしまり弱い微粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/4　As-YP・As-YP下のローム土が主体、ややしまりがある弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　１との混土で、やや黒色味を増す。
4　黒褐 10YR3/2　黒色味強い腐植土質の土を基質とする、褐色味強いブロック状の土が混じり、ややしまりが強い。

95号土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-B、As-C、ローム小ブロックを不均等に含み、ややしまり弱い。
2　黒褐 10YR3/2　１と同様、混入物やや少なくなる。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色味強いロームブロックをやや多く含む、微粘性土。As-YPの混入もやや多い。
4　黒褐 10YR3/2　As-B混含み、やや腐植土質の土。

96号土坑
5　暗褐 10YR3/3　不明瞭なローム土、As-YPを不均等に含み、微粘性土。
6　暗褐 10YR3/3　４と同様、混入物少ない。
7　暗褐 10YR3/3　不明瞭なローム土を多くAs-YPを若干含み、ややしまりが強い弱粘性土。

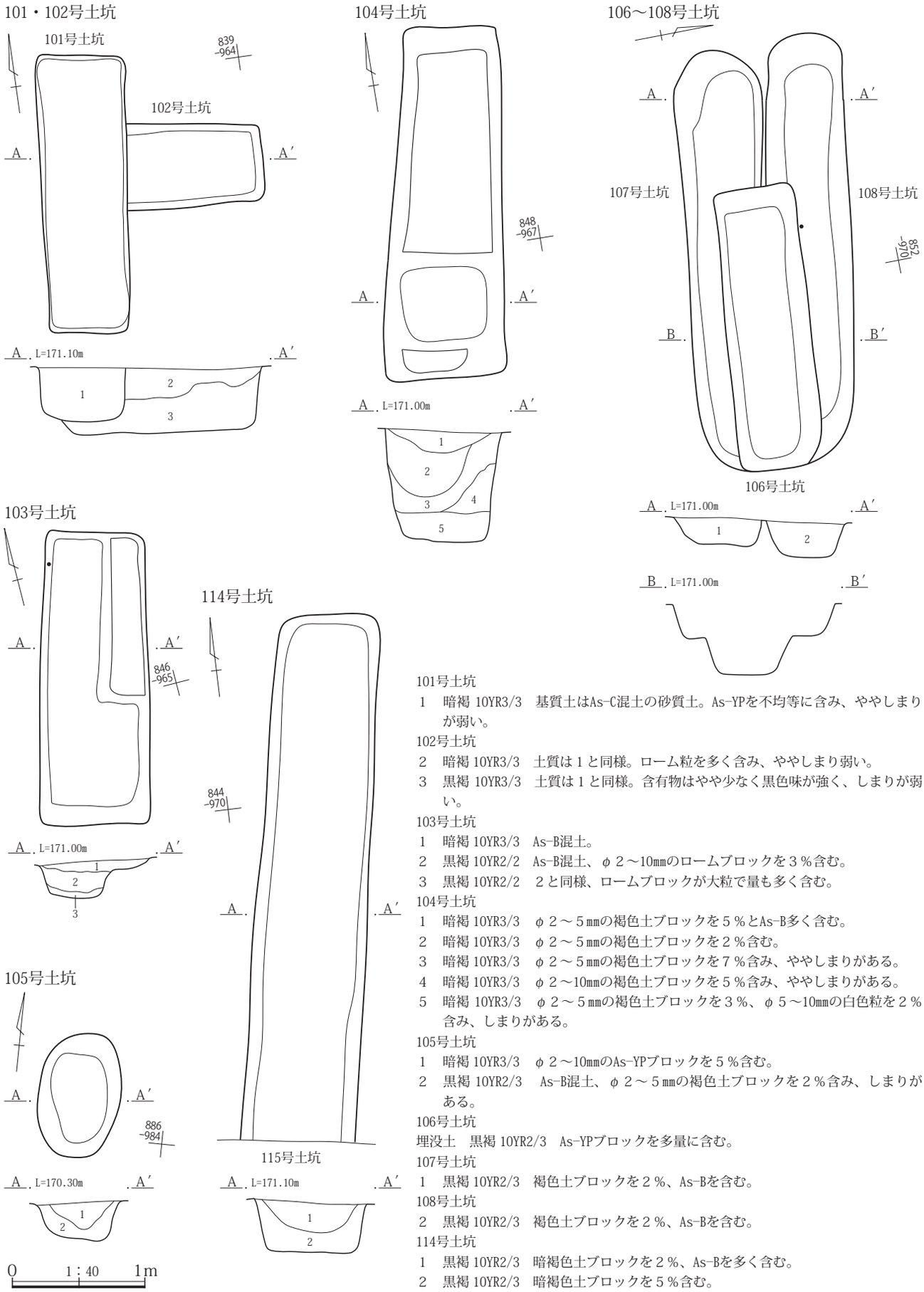
97号土坑
1　暗褐 10YR3/3　ローム小ブロック、As-B、YPを霜降状に含み、ややしまりある微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　やや腐植土質の黒色味おびる土を基質とし、下位を中心にロームブロックを含む、微粘性土。

98号土坑
3　暗褐 10YR3/3　As-Bを含み、ややしまり弱い微粘性土。基質土はやや灰色味帯びる。
4　灰黄褐 10YR4/2　As-B、As-YP、ローム小ブロックを不均等にやや多く含み、ややしまりが強い微粘性土。

99号土坑
1　黒褐 10YR3/2　軽石やローム土粒を不均等に含む、砂質土。
2　黒褐 10YR3/2　１に近似、As-YPが混じるローム土粒を含む。
3　暗褐 10YR3/3　大粒のロームブロックを大量に含み、ややしまりの弱い弱粘性。

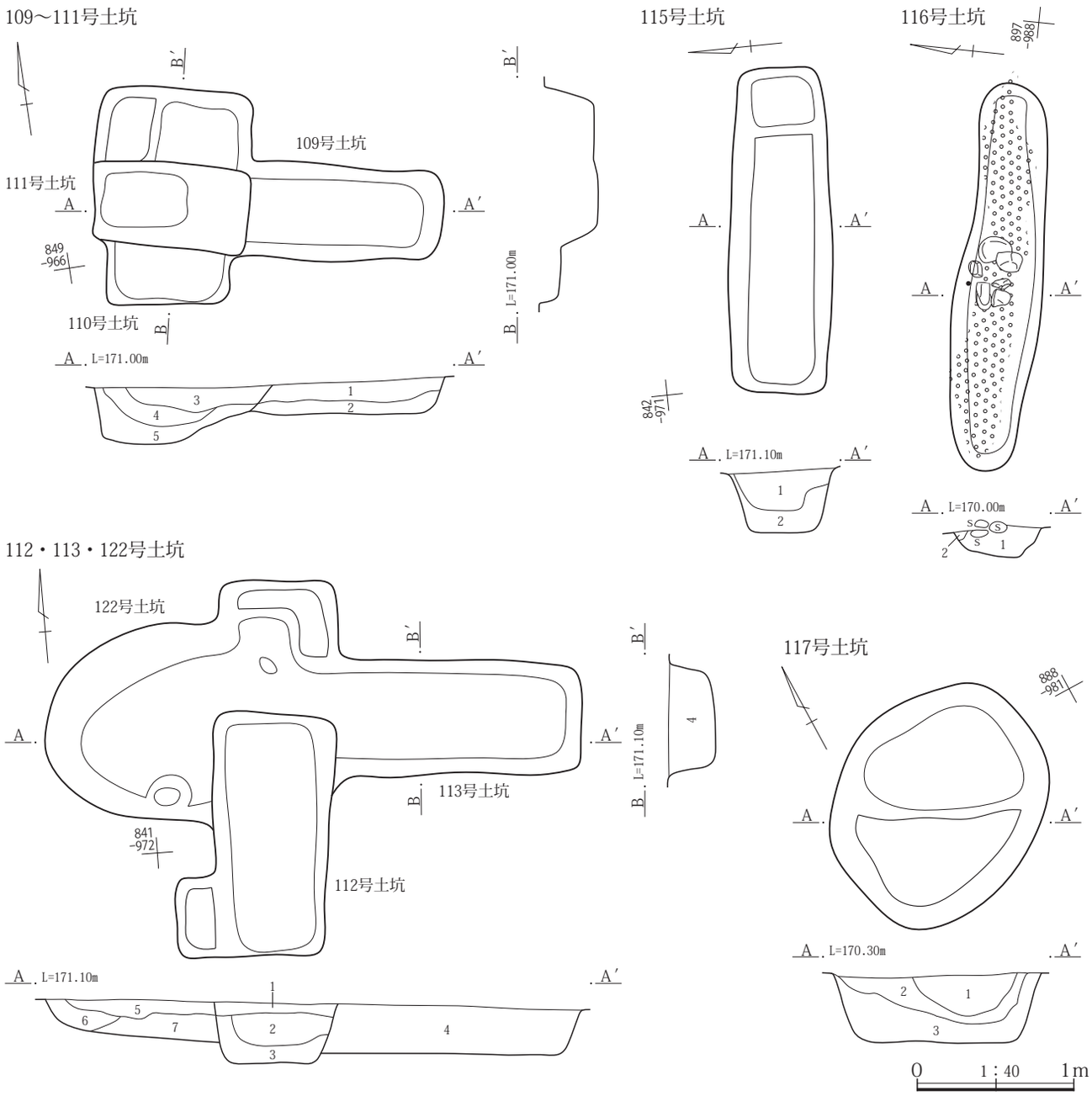
100号土坑
埋没土　暗褐 10YR3/3　As-B混土。

第333図　94～100号土坑遺構図



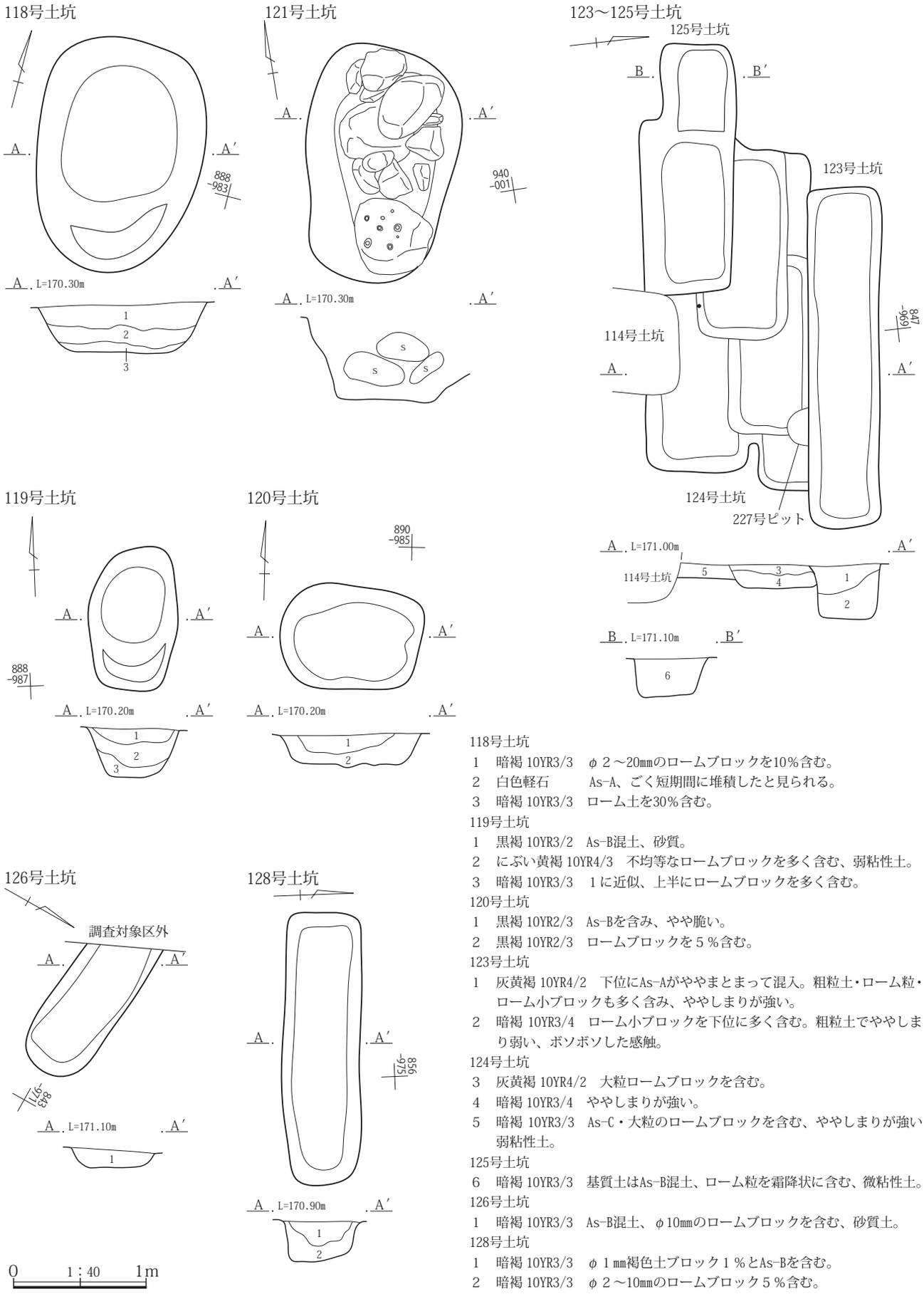
101号土坑
1　暗褐 10YR3/3　基質土はAs-C混土の砂質土。As-YPを不均等に含み、ややしまりが弱い。
102号土坑
2　暗褐 10YR3/3　土質は１と同様。ローム粒を多く含み、ややしまり弱い。
3　黒褐 10YR3/3　土質は１と同様。含有物はやや少なく黒色味が強く、しまりが弱い。
103号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土。
2　黒褐 10YR2/2　As-B混土、φ２～10mmのロームブロックを３％含む。
3　黒褐 10YR2/2　２と同様、ロームブロックが大粒で量も多く含む。
104号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ２～５mmの褐色土ブロックを５％とAs-B多く含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～５mmの褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～５mmの褐色土ブロックを７％含み、ややしまりがある。
4　暗褐 10YR3/3　φ２～10mmの褐色土ブロックを５％含み、ややしまりがある。
5　暗褐 10YR3/3　φ２～５mmの褐色土ブロックを３％、φ５～10mmの白色粒を２％含み、しまりがある。
105号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ２～10mmのAs-YPブロックを５％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-B混土、φ２～５mmの褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
106号土坑
埋没土　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを多量に含む。
107号土坑
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％、As-Bを含む。
108号土坑
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％、As-Bを含む。
114号土坑
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを２％、As-Bを多く含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％含む。

第334図　101～108・114号土坑遺構図



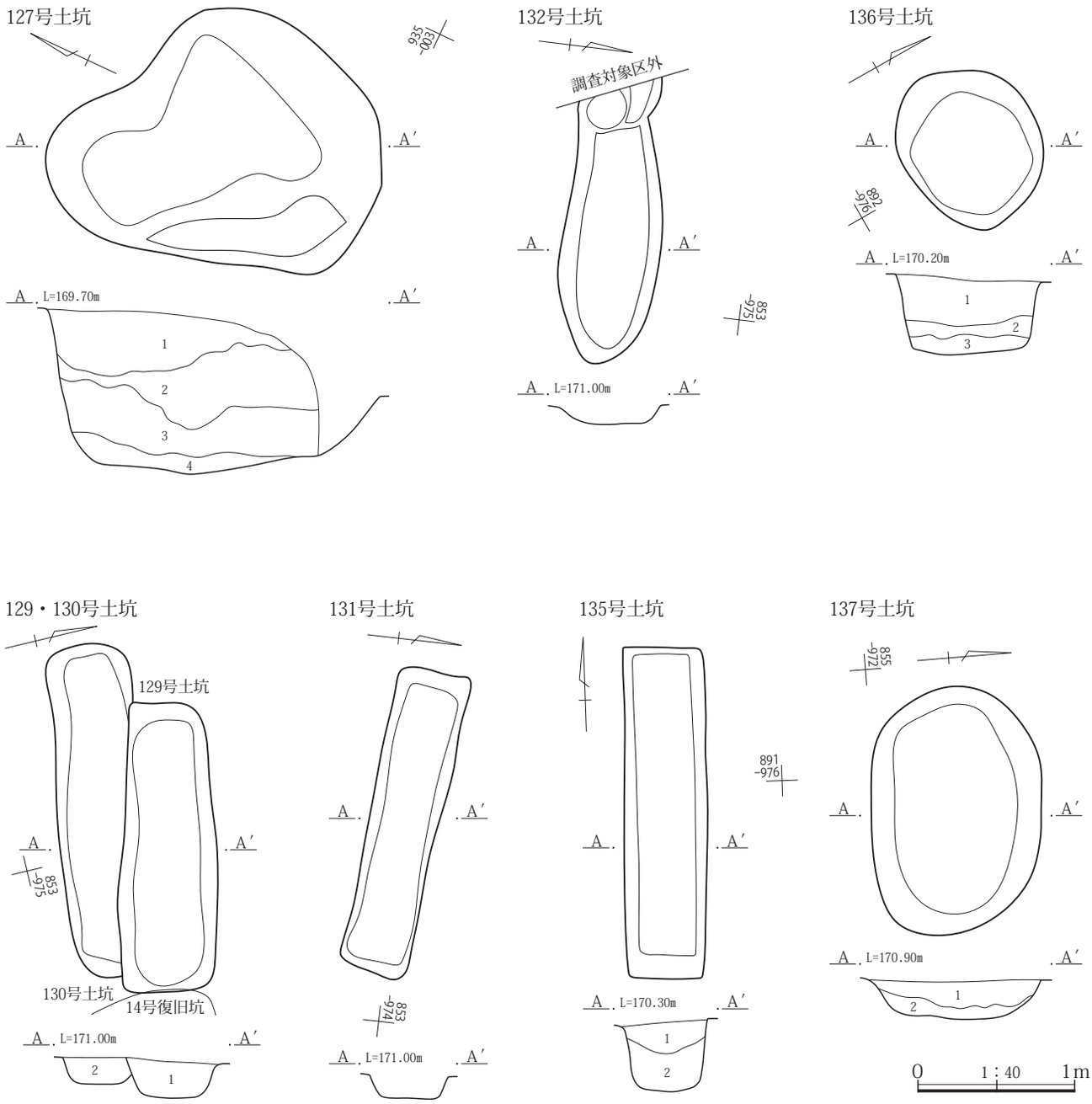
109号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-Bを微量と褐色土をブロック状に３％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　As-Bを少量含み、ややしまりがある。
111号土坑
3　黒褐 10YR2/3　As-Bを多く含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土をブロック状に２％含む。
5　暗褐 10YR3/3　As-Bを少量含み、ややしまりがある。
112号土坑
1　黒褐 10YR2/3　φ30mmのロームブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ２～30mmのロームブロックを５％、As-Bを含む。
3　黒褐 10YR3/2　混入物少ない、ややしまりが強い細粒微粘性土。
113号土坑
4　暗褐 10YR3/3　φ２～40mmのロームブロックを10％含む。
122号土坑
5　暗褐 10YR3/3　上半にAs-Bを多く含む。下半にはAs-YPブロックを多く含む。
6　にぶい黄褐 10YR4/3　黄色味弱い不明瞭なローム土、As-C混じりの黒褐色土のブロック状混土、ややしまりが強い。
7　灰黄褐 10YR4/2　基質土は７同じ。砂質土、As-YPを含み、ややザラザラした感触。
115号土坑
1　暗褐 10YR3/3　ローム粒・As-C・As-Bを含み、ややしまりが弱くサラサラした感触。
2　灰黄褐 10YR4/2　基質土は黒色味帯びた腐植土質の土、不揃いのロームブロックやAs-YPを多量に含み、ややしまりが強い。
116土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-B混土と思われる。ローム粒・ロームブロックをやや多く含み、ややしまり弱い。
2　暗褐 10YR3/3　混入物少ない砂質土、ややしまりある微粘性土。
117号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～30mmのロームブロックを10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを10％、黒色土を部分的に含む。

第335図　109～113・115～117・122号土坑遺構図



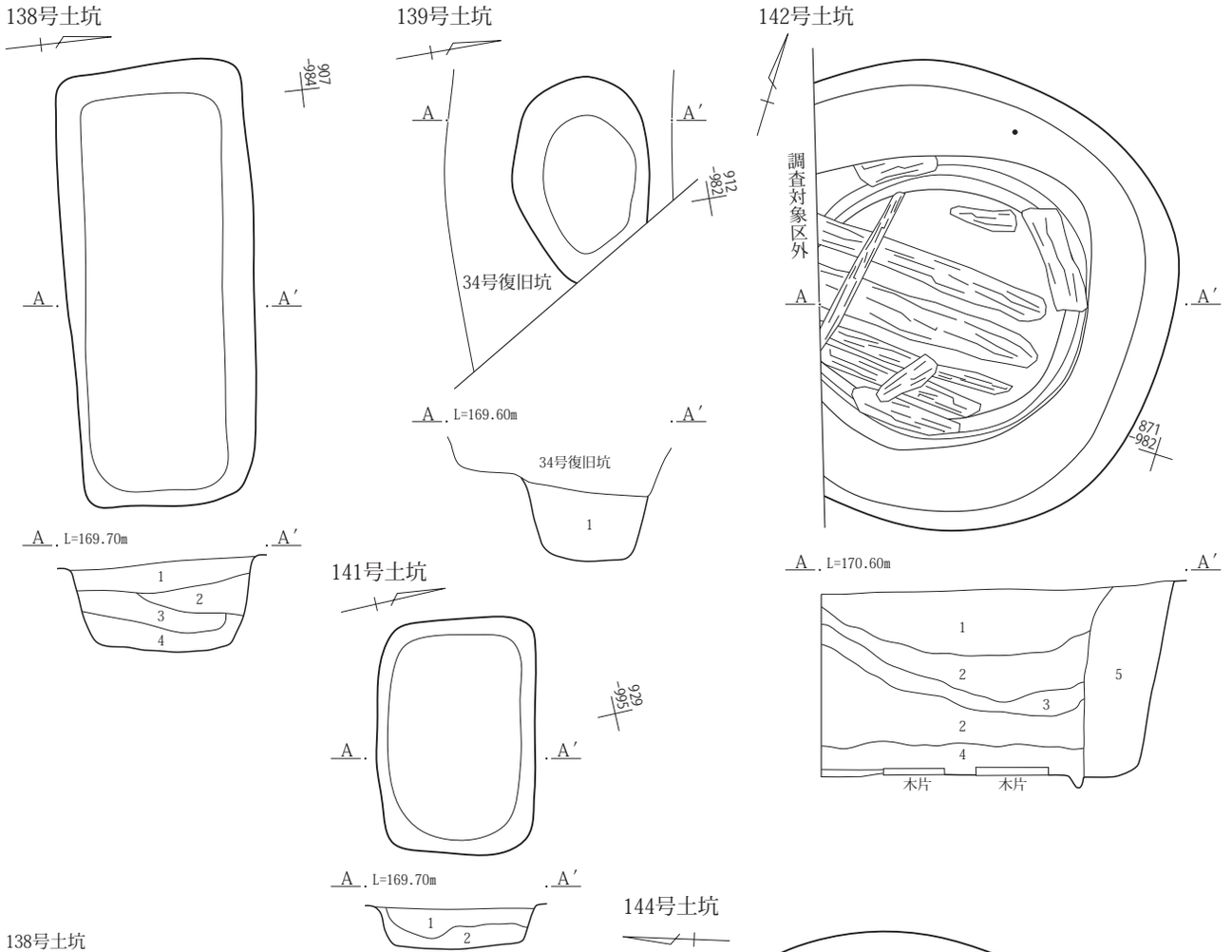
118号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ２～20㎜のロームブロックを10％含む。
2　白色軽石　　As-A、ごく短期間に堆積したと見られる。
3　暗褐 10YR3/3　ローム土を30％含む。
119号土坑
1　黒褐 10YR3/2　As-B混土、砂質。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　不均等なロームブロックを多く含む、弱粘性土。
3　暗褐 10YR3/3　１に近似、上半にロームブロックを多く含む。
120号土坑
1　黒褐 10YR2/3　As-Bを含み、やや脆い。
2　黒褐 10YR2/3　ロームブロックを５％含む。
123号土坑
1　灰黄褐 10YR4/2　下位にAs-Aがややまとまって混入。粗粒土・ローム粒・ローム小ブロックも多く含み、ややしまりが強い。
2　暗褐 10YR3/4　ローム小ブロックを下位に多く含む。粗粒土でややしまり弱い、ボソボソした感触。
124号土坑
3　灰黄褐 10YR4/2　大粒ロームブロックを含む。
4　暗褐 10YR3/4　ややしまりが強い。
5　暗褐 10YR3/3　As-C・大粒のロームブロックを含む、ややしまりが強い弱粘性土。
125号土坑
6　暗褐 10YR3/3　基質土はAs-B混土、ローム粒を霜降状に含む、微粘性土。
126号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土、φ10㎜のロームブロックを含む、砂質土。
128号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜褐色土ブロック１％とAs-Bを含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜のロームブロック５％含む。

第336図　118～121・123～126・128号土坑遺構図

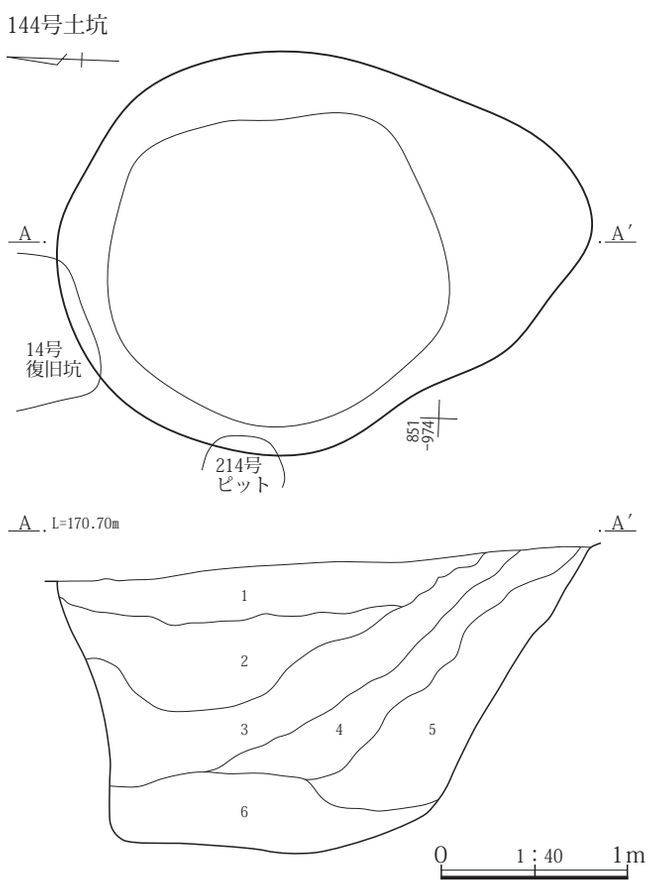


127号土坑
1　暗褐 10YR3/3　比較的密度の高いAs-B混土。ややしまり欠きサラサラした感触。
2　黒褐 10YR3/2　As-A混土、他の混入物は少ない、ややサラサラした感触。
3　灰黄褐 10YR4/2　ロームブロックと黒色粘性土ブロックの混土。不均等にAs-YPを含み、ややしまりが強い弱粘性土。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　As-YP、ローム小ブロックを主体も黒褐色土が混じる、ややしまり弱い。
129号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜のロームブロック３％、１～５㎜白色粒１％、As-Bを含む。
130号土坑
2　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを２％、As-Bを含む。
131号土坑
埋没土　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを２％、As-Bを含む。
132号土坑
埋没土　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜白色粒１％、As-Bを含む。
135号土坑
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜のYPブロックを２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜のYPブロックを５％、ローム土を10％含む。
136号土坑
1　密度の高いAs-A、埋め戻し土。
2　暗褐 10YR3/4　灰を薄層状に含み、しまり弱い弱粘性細粒土。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　基質土は黒褐色細粒土、As-YPを多量に含み、ややしまりが強い。
137号土坑
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％、φ１～２㎜の白色粒を１％、YPブロックを１％、As-Bを含む。
2　黒褐 10YR3/2　φ５～10㎜のロームブロックを５％含む。

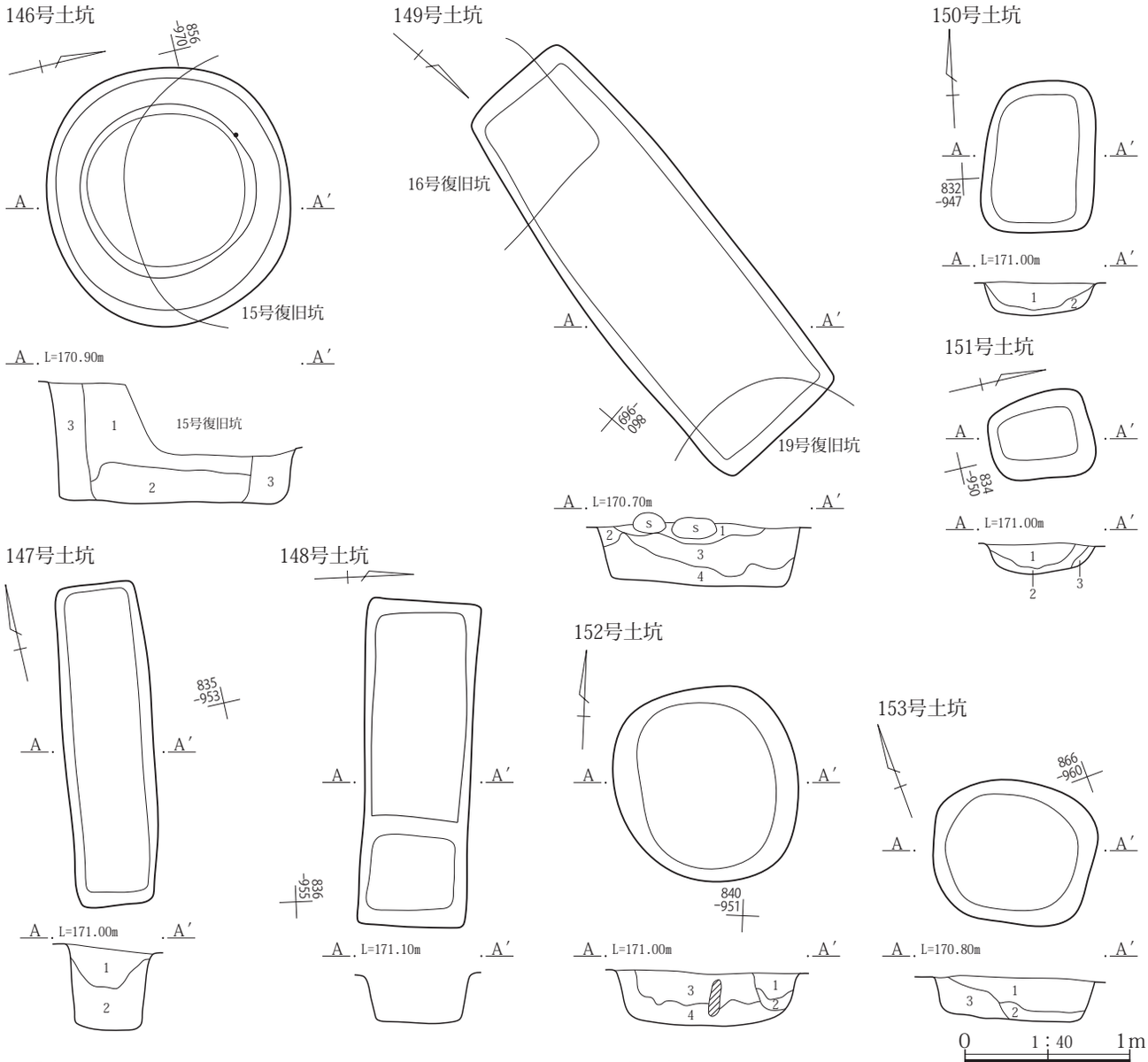
第337図　127・129～132・135～137号土坑遺構図



138号土坑
1　暗褐 10YR3/3
2　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを１％含み、ややしまる。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～10mmのYPブロックを２％含む。
4　暗褐 10YR3/3　φ２～15mmのYPブロックを５％含む。
139号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを含む。
141号土坑
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土。暗褐色土を10％、YPブロックを２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPブロック５％、ローム土を全体に含む。
142号土坑
1　灰黄褐 10YR4/2　As-A混じり、炭化物粒、As-YPなどを多く含み、ややしまり弱いの非粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　下半ほどローム粒を多く含み、ややしまり弱い微粘性土ややフカフカした感触。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いのロームブロックを多く含む。
4　黒褐 10YR3/2　基質土は黒色味がやや強い。As-Aを含み、しまりやや強い。
5　暗褐 10YR3/3　ローム粒、As-Bをやや多く含み、しまりが強い。
144号土坑
1　黒褐 10YR2/2　As-Cを霜降状に含む、細粒微粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　基質土は１と３の漸移層的な土。上半にロームブロックをやや多く含む。
3　暗褐 10YR3/3　ローム粒を少量と中央上半で灰色味おびた粘性土ブロックをやや多く含む、やや砂質土。
4　灰黄褐 10YR4/2　基質土はAs-B混土とみられる砂質土、不揃いのロームブロックを多く含み、ややしまり弱い。
5　暗褐 10YR3/3　砂質土で４に近い。ローム土を微量含む。
6　灰黄褐 10YR4/2　ややしまり弱い弱粘性土を基質に、不揃いのロームブロックを多量に含む。



第338図　138・139・141・142・144号土坑遺構図



146号土坑
1　黒褐 10YR3/2　上半にAs-Aがブロック状に混入。それ以外にAs-Aは混じらない。不明瞭なローム小ブロックを含み。ややしまりが強い非粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム小ブロックを霜降状に多量含み、しまりごく強い。踏み固め整地面。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　２に類似、ややしまりが弱い。

147号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを20％、As-Bを含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを２％、As-Bを含む。

148号土坑
埋没土　暗褐 10YR3/3　φ１～20mmのロームブロックを全体に10％とAs-Bを多量に含む。

149号土坑
1　黒褐 10YR3/2　混入物少ない細粒土。ややしまり弱い非粘性土。
2　褐 10YR4/4　しまりが強い。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　As-YP混じりのローム土と黒褐色土の混土。ややしまりが強い弱粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　ローム土を多量に含み、ややしまり弱い。

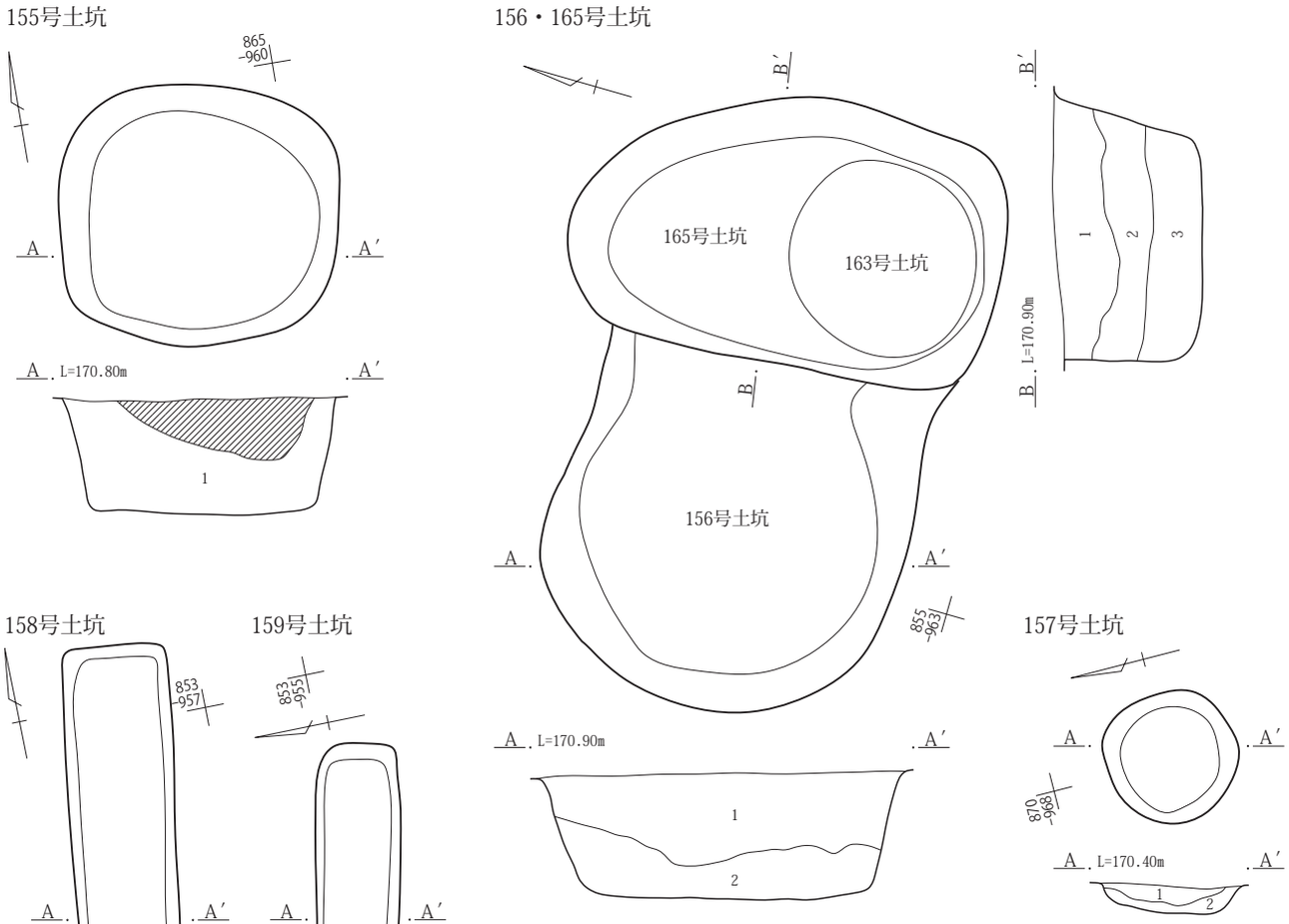
150号土坑
1　黒褐 10YR2/3　φ１mmの白色粒を１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　しまりがある。

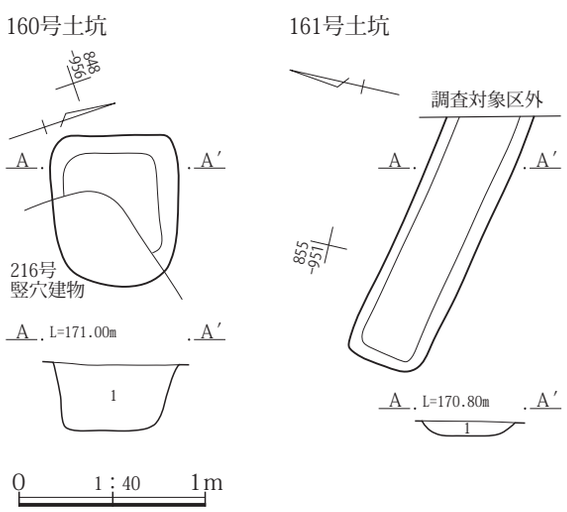
151号土坑
1　黒褐 10YR2/3　φ１mmの白色粒を１％、φ１mmの褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　φ10mmのロームブロックを１％含み、しまりがある。
3　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なロームブロックを含み、しまりが弱い粘性土。

152号土坑
1　暗褐 10YR3/3　As-C・ローム粒を霜降状と焼土、炭化物粒を若干含み、ややしまりが強い微粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　土質は１と同様、しまり強く、
3　黒褐 10YR3/2　As-C、ローム粒を若干含む、細粒微粘性土。
4　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なロームブロックを不均等に含み、ややしまりの弱い弱粘性土。

153号土坑
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を20％、φ１～５mmの褐色土ブロックを２％、φ１～２mmの白色粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土を10％、φ２～10mmの褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　As-Bを多量に含む。

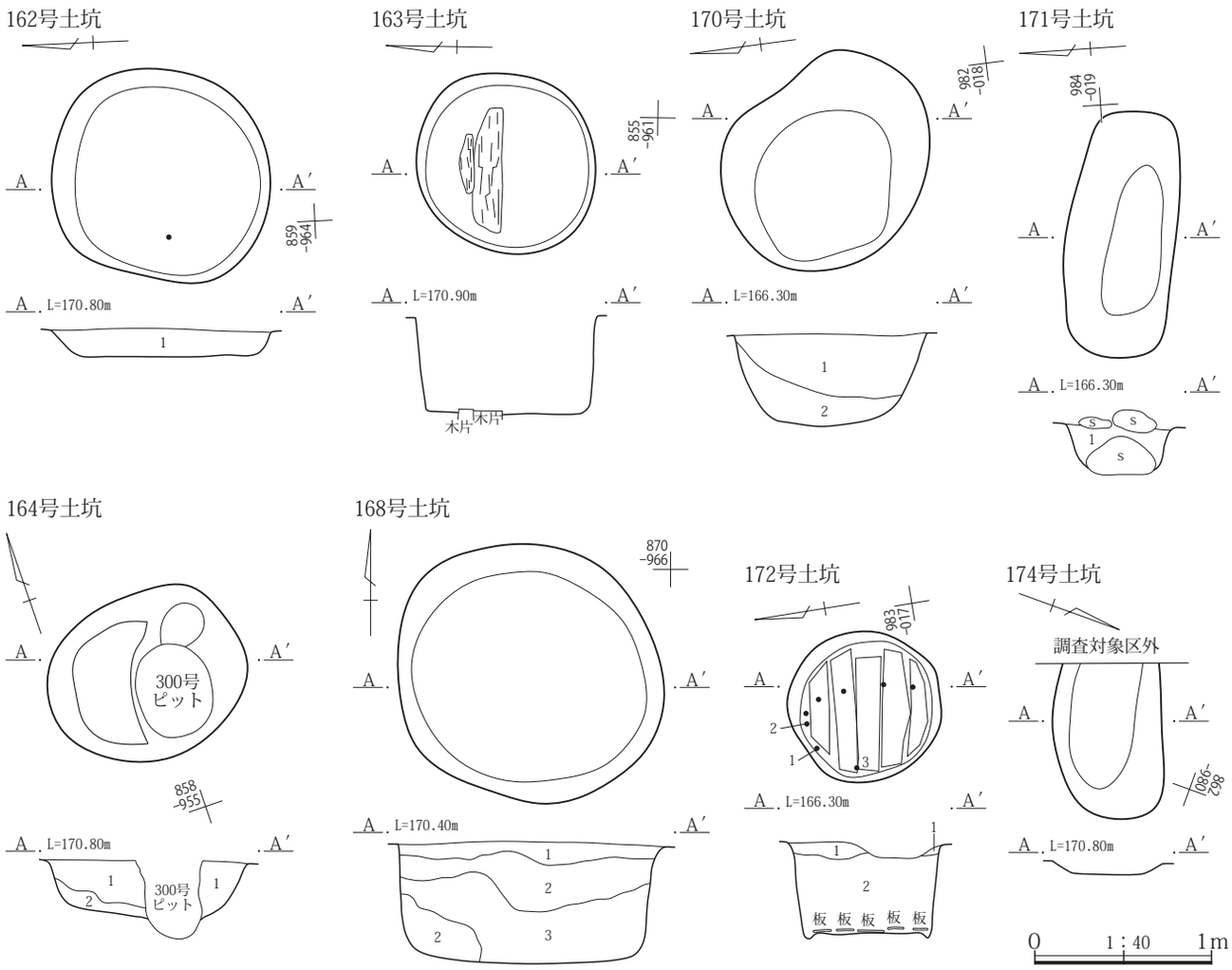
第339図　146～153号土坑遺構図





155号土坑
1　灰黄褐 10YR4/2　As-B混土を基質土とする。不揃いのロームブロックを多量に含み、ややしまりが強い。
156号土坑
1　灰黄褐 10YR4/2　不揃いのロームブロック、As-YPを多く含むAs-B混土。上位には粗粒のAs-Aが少量含み、ややしまり弱い。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム小ブロックと１の混合土。
157号土坑
1　黒褐 10YR2/3　部分的に褐色土ブロック、焼土、微細な炭化物を含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを含む。
158号土坑
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土。φ１㎜の白色粒、褐色土ブロックを１％含む。
159号土坑
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土。φ１㎜の白色粒、褐色土ブロックを１％含む。
160号土坑
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土。φ３㎜と粒径の大きなものが含まれている。
161号土坑
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を10％含む。
165号土坑
1　暗褐 10YR3/3　基質土はAs-A混土、不揃いのロームブロックを少量と焼土を若干含み、ややしまり弱い。
2　灰黄褐 10YR4/2　大粒のロームブロックを上位に多くAs-YPを不均等に含み、下半は黒色味が強くなり、しまりが強い弱粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土と黒褐色土の混土、大粒のAs-YPを多く含み、しまりが強い。

第340図　155～161・165号土坑遺構図



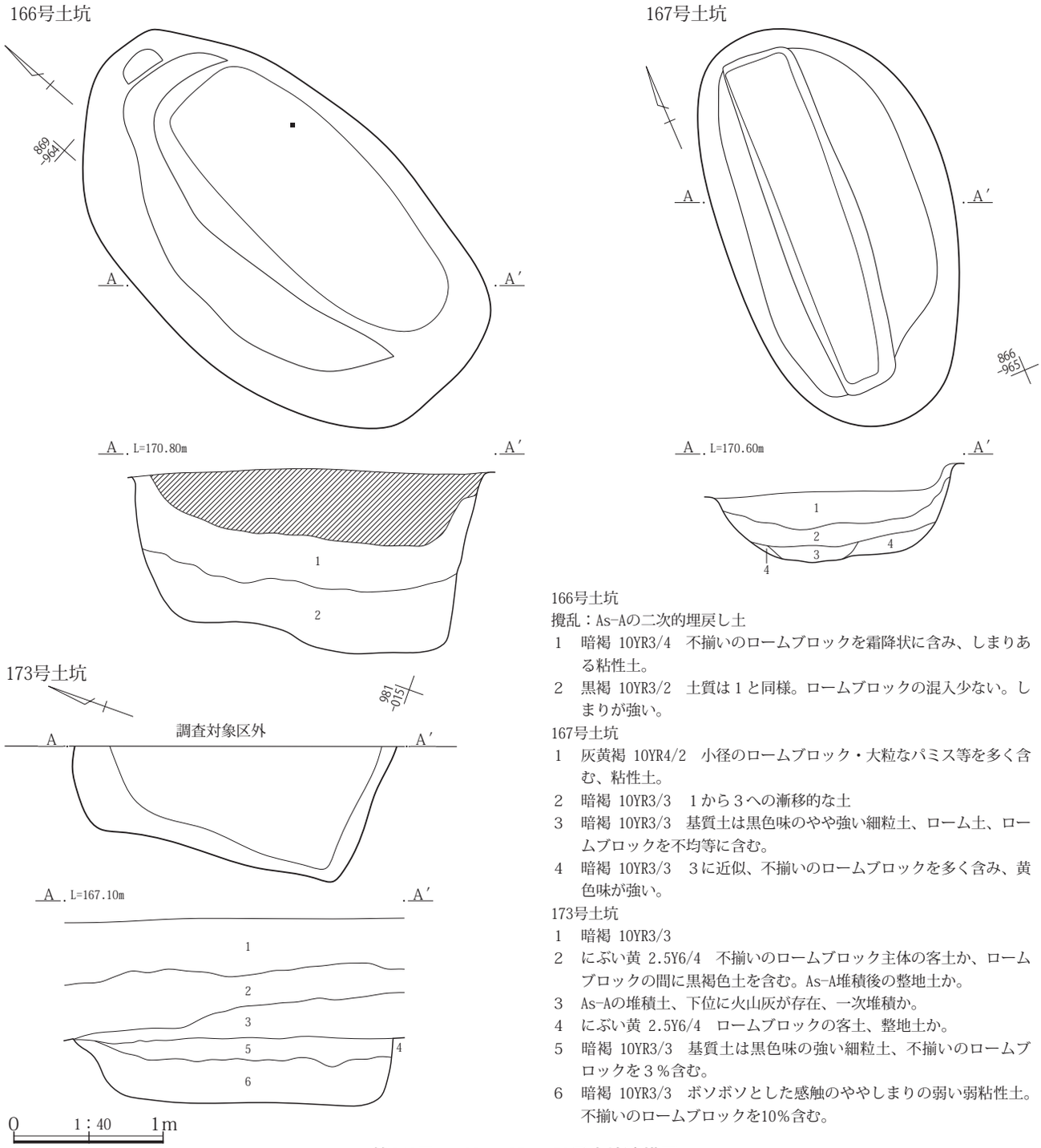
162号土坑
1　暗褐 10YR3/3　YPブロック・ロームブロックを含む。
164号土坑
1　暗褐 10YR3/3　不明瞭なローム土の多く含み、弱粘性土。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　不明瞭なローム土と暗褐色土の混土。
168号土坑
1　暗褐 10YR3/3　不明瞭な小ロームブロック、As-Bを含み、ややしまりの弱い弱粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを不均等に含み、ややしまりの弱い弱粘性土。人為的な埋め戻し土か。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム土主体、黒色土がブロック状に混入した粘性土。人為的埋め戻し土。
170号土坑
1　混入物の少ないAs-Aの２次堆積、降下直後の埋め戻しか。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いにローム土と黒褐色土が混合、ややしまりが強い。
171号土坑
1　As-Aの２次堆積、ローム土が多い弱粘性土が混入。
172号土坑
1　オリーブ褐 2.5Y4/3　ローム土とAs-Aの混土、縞状に堆積し、しまりが強い。
2　混入物をほとんど含まないAs-A。底板下は黒色粘性土。

第341図　162～164・168・170～172・174号土坑遺構図

できる。このうち、円形の土坑では底面に桶の底板が残るか、痕跡が確認できる142号、146号、163号、172号土坑が近世の墓坑と想定される。146号土坑では底面に桶底板は残存していないが、痕跡が残り、埋没土にも桶の箍の痕跡が残存していた。しかし、これらの土坑からは人骨等は出土していないことや172号土坑では上半をＡ－Ａ′の二次堆積層で埋没していることなど墓坑と判断するには難しいことなどから、他の用途も想定される。細長い長方形土坑は農耕に伴うものと想定される。この他、多くの土坑については性格等は不明である。こうしたなかで性格についての想定は難しいが、特徴的なものとして以下のものが挙げられる。

116号土坑

溝状に細い形状で、確認面に礫が列ぶように配置されている。これらの礫は土坑の全長2.4mほどの長さの中に１～２個体を直線的に配している。礫は39個が使用さ



166号土坑
撹乱：As-Aの二次的埋戻し土
1　暗褐 10YR3/4　不揃いのロームブロックを霜降状に含み、しまりある粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　土質は１と同様。ロームブロックの混入少ない。しまりが強い。

167号土坑
1　灰黄褐 10YR4/2　小径のロームブロック・大粒なパミス等を多く含む、粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　１から３への漸移的な土
3　暗褐 10YR3/3　基質土は黒色味のやや強い細粒土、ローム土、ロームブロックを不均等に含む。
4　暗褐 10YR3/3　３に近似、不揃いのロームブロックを多く含み、黄色味が強い。

173号土坑
1　暗褐 10YR3/3
2　にぶい黄 2.5Y6/4　不揃いのロームブロック主体の客土か、ロームブロックの間に黒褐色土を含む。As-A堆積後の整地土か。
3　As-Aの堆積土、下位に火山灰が存在、一次堆積か。
4　にぶい黄 2.5Y6/4　ロームブロックの客土、整地土か。
5　暗褐 10YR3/3　基質土は黒色味の強い細粒土、不揃いのロームブロックを３％含む。
6　暗褐 10YR3/3　ボソボソとした感触のややしまりの弱い弱粘性土。不揃いのロームブロックを10％含む。

第342図　166・167・173号土坑遺構図

れ、大きさは10～20㎝の亜角礫が主体である。なお、礫の中には１個体の凹石が出土していた。

166号土坑

径が3.14×1.88m、深さ1.14mを測る大型の楕円形を呈する。内部にコの字状に礫を３段ほど積み上げた施設が設けられているが、南側の上部は撹乱によって失われている。遺物等の出土がみられないため性格などについては不明であるが室などの貯蔵施設の可能性が窺える。

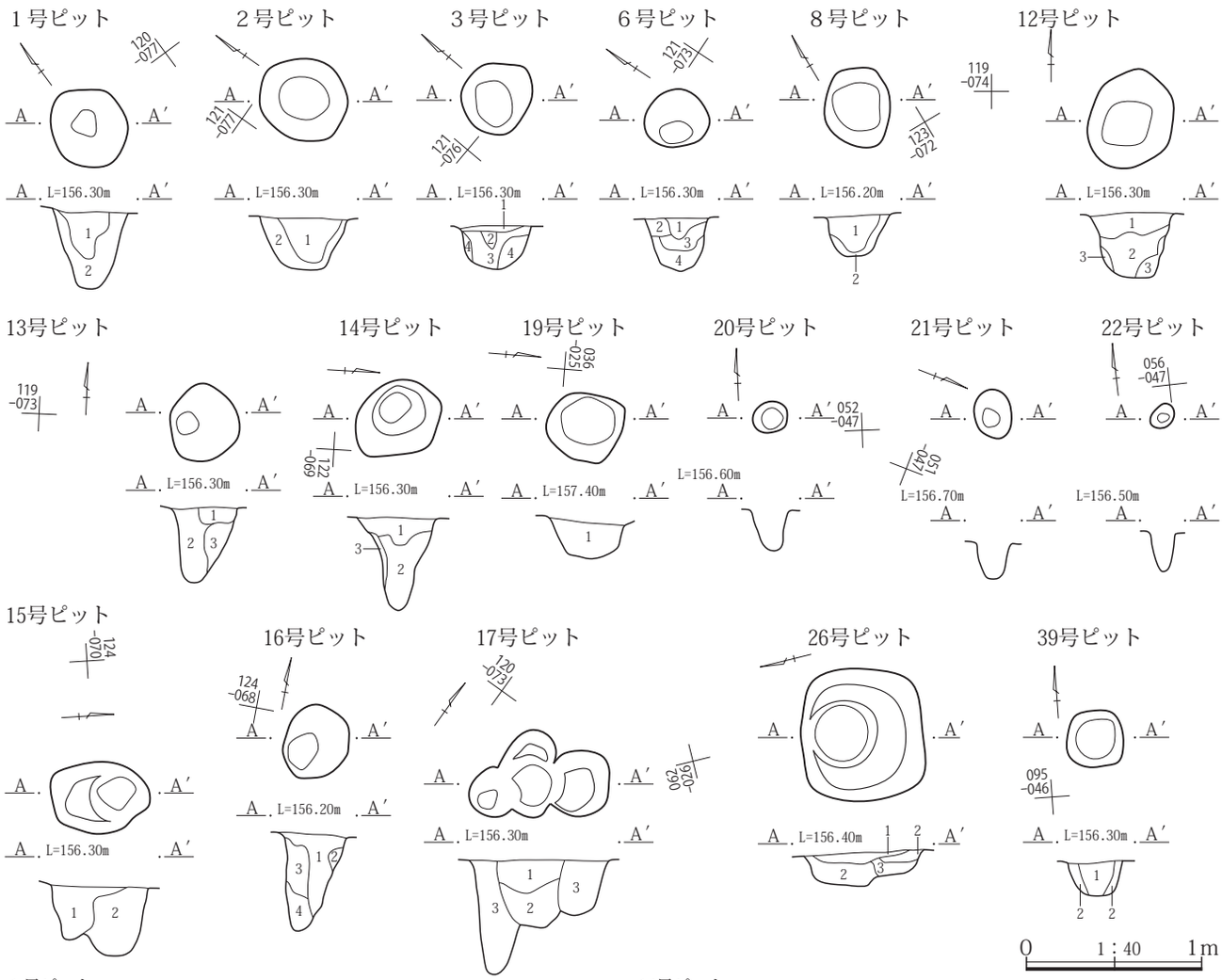
第５項　ピット

中世以降に比定できる。ピットは108基である。比定の根拠は古墳時代～平安時代のピットと同様に埋没土によるものである。なお、中世のピットと判断した埋没土は土坑と同様である。また、ほとんどのピットでは出土遺物が皆無のため詳細については明確ではない。なお、108号ピットからは石製品石臼(下臼)が出土している。

第９表　ピット一覧(中世以降)

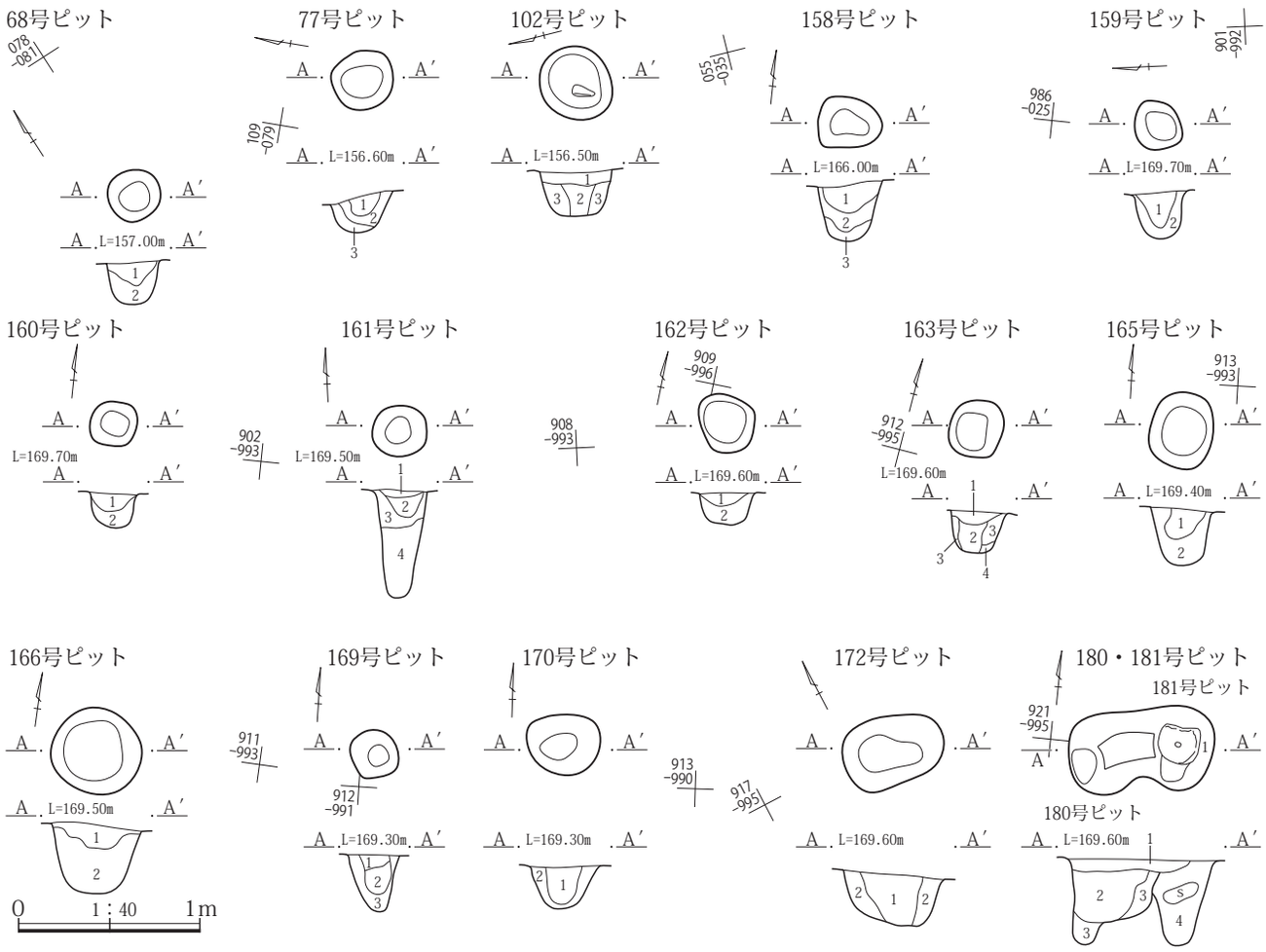
区	№	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複	時期	備考
1	1	119/-077	円形	0.42	0.42	0.44	N-30°-E		中世	
1	2	120/-076	円形	0.50	0.46	0.32	N-34°-W		中世	
1	3	121/-075	円形	0.42	0.38	0.26	N-15°-E		中世	
1	6	121/-073	円形	0.38	0.32	0.31	N-34°-W		中世	
1	8	123/-074	円形	0.48	0.40	0.27	N-２°-E		中世	
1	12	119/-074	楕円形	0.60	0.48	0.38	N-15°-E		中世	
1	13	119/-073	円形	0.45	0.40	0.42	N-10°-W		中世	
1	14	121/-069	楕円形	0.52	0.40	0.55	N-24°-E		中世	
1	15	124/-070	不定形	0.56	0.42	0.42	N-３°-E		中世	
1	16	124/-068	円形	0.42	0.38	0.59	N-15°-W	20号土坑	中世	
1	17	120/-073	不定形	0.80	0.50	0.75	N-32°-E		中世	
1	19	041/-025	円形	0.46	0.42	0.24	N-30°-W	32号竪穴建物	？	
1	20	052/-047	円形	0.21	0.20	0.25	N-76°-W		近世	
1	21	051/-047	円形	0.27	0.20	0.23	N-50°-E		近世	
1	22	056/-047	円形	0.14	0.10	0.21	N-30°-E		？	
1	26	061/-025	方形	0.74	0.70	0.17	N-73°-W		中世	
1	39	095/-046	円形	0.36	0.32	0.23	N-43°-W		中世	
1	68	077/-080	円形	0.28	0.28	0.20	N-28°-W		中世	
1	77	109/-079	円形	0.32	0.32	0.18	N-10°-W	７号竪穴建物	？	
1	102	056/-036	円形	0.42	0.36	0.26	N-45°-E		中世以降	
2	158	985/-025	円形	0.36	0.28	0.36	N-84°-E		中世	
3	159	901/-992	円形	0.26	0.24	0.26	N-３°-W		中世	
3	160	902/-993	円形	0.25	0.24	0.17	N-９°-E		中世	
3	161	908/-993	円形	0.30	0.28	0.58	N-16°-E		中世	
3	162	908/-995	円形	0.33	0.29	0.18	N-15°-W		中世	
3	163	912/-994	円形	0.31	0.30	0.20	N-５°-W		中世	
3	165	912/-993	円形	0.42	0.35	0.35	N-13°-E		中世	
3	166	910/-993	円形	0.40	0.38	0.38	N-14°-W		中世	
3	169	912/-990	円形	0.26	0.24	0.33	N-24°-W		中世	
3	170	913/-990	円形	0.40	0.33	0.24	N-12°-W		中世	
3	172	916/-994	楕円形	0.57	0.38	0.31	N-72°-W		中世	
3	180	920/-994	不定形	(0.43)	-	0.46	N-19°-W	181号ピット	中世	
3	181	920/-994	不定形	(0.46)	-	0.45	N-９°-E	180号ピット	中世	石臼
3	182	921/-992	楕円形	0.52	0.40	0.30	N-68°-E		中世	
3	185	909/-991	円形	(0.28)	(0.14)	0.38	(N-74°-E)	２号井戸	中近世	
3	189	909/-994	円形	0.38	0.36	0.46	N-38°-W		中世	
3	190	909/-997	楕円形	0.35	0.28	0.38	N-24°-E		中世	
3	191	911/-994	円形	0.42	0.38	0.23	N-28°-E	93号土坑	中世	
3	192	904/-994	楕円形	0.36	0.24	0.38	N-20°-E		中世	
4	193	856/-976	円形	0.32	0.26	0.77	N-５°-W	17号復旧坑	近世	
3	198	882/-983	楕円形	0.35	0.32	0.28	N-34°-E		中世	
4	199	850/-971	円形	0.34	0.28	0.40	N-５°-W	107号土坑	不明	
3	203	887/-986	楕円形	0.40	0.35	0.36	N-18°-W		中世	
3	207	889/-983	楕円形	0.80	0.54	0.20	N-42°-E	27号復旧坑	中世	
3	208	891/-986	楕円形	0.35	0.30	0.24	N-４°-W		中世	
4	209	836/-967	円形	0.50	0.48	0.19	N-20°-W		中世	
4	210	846/-963	円形	0.54	0.48	0.27	N-88°-W		中世	
4	212	846/-964	円形	0.42	0.38	0.23	N-70°-E		中世	
4	213	848/-970	楕円形	0.32	0.30	0.30	N-48°-E		中世	
4	214	852/-975	円形	0.44	0.44	0.29	N-２°-W	144号土坑	中世	
4	215	854/-976	円形	0.34	0.32	0.37	N-８°-W		中世	
3	217	890/-979	方形	0.38	0.28	0.62	N-０°	24号復旧坑	中世	
3	218	894/-980	円形	0.35	0.32	0.44	N-５°-W		不明	
3	221	894/-983	円形	0.32	0.30	0.32	N-19°-E		中世	
3	222	894/-985	不定形	0.63	0.22	0.43	N-51°-W		中世	
3	223	896/-984	円形	0.25	0.25	0.78	N-23°-E		中世	
4	224	839/-970	円形	0.38	0.35	0.41	N-48°-W	207号竪穴建物	中世	
3	225	888/-987	不明	(0.32)	ー	0.51	ー	226号ピット	中世	
3	226	889/-987	楕円形	0.32	0.32	0.61	N-10°-E	225号ピット	不明	
4	227	846/-968	円形	0.28	(0.16)	0.27	N-85°-W	(123号.124号)土坑	中世	
4	229	834/-967	方形	0.46	0.45	0.16	N-80°-W		中世	
4	230	832/-967	円形	0.52	0.50	0.40	N-15°-W		中世	

区	№	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複	時期	備考
3	231	922/-002	楕円形	0.60	0.34	0.55	N-51°-E		中世か	
3	232	923/-002	円形	0.28	―	0.17	N-11°-W		中世か	
3	238	890/-988	楕円形	0.46	0.39	0.26	N-35°-W	29号復旧坑	中世	
3	240	924/-003	円形	0.38	0.38	0.20	N-13°-W		中世	
3	241	925/-003	円形	0.40	0.35	0.21	N-５°-W		中世	
3	244	903/-979	円形	0.28	0.22	0.61	N-16°-E		中世	
3	245	903/-980	円形	0.22	0.20	0.57	N-21°-E		中世	
3	246	903/-980	楕円形	0.35	0.28	0.41	N-４°-E		中世	
3	249	905/-981	楕円形	0.36	0.28	0.41	N-53°-E		中世	
3	250	907/-981	不定形	0.62	0.20	0.49	N-10°-W		中世	
3	251	906/-982	楕円形	0.44	0.38	0.63	N-35°-W		中世	
3	252	907/-982	円形	0.35	0.32	0.54	N-17°-W		中世	
3	261	929/-995	円形	0.37	0.36	0.21	N-45°-E		不明	
4	262	831/-954	円形	0.40	0.38	0.32	N-10°-E		中世	
4	263	832/-955	円形	0.54	0.50	0.64	N-20°-E		中世	
4	264	832/-954	円形	0.38	0.36	0.16	N-13°-E		中世	
4	265	832/-953	円形	0.42	0.40	0.33	N-12°-E		中世	
4	266	831/-961	方形	0.54	0.48	0.19	N-85°-W		中世	
4	267	833/-961	円形	0.52	0.40	0.21	N-72°-W		中世	
4	268	831/-948	円形	0.40	0.38	0.31	N-80°-E		中世	
4	269	838/-953	円形	0.38	0.34	0.39	N-77°-W		中世	
4	270	838/-945	円形	0.32	0.28	0.24	N-77°-W		中世	
4	272	841/-949	円形	0.40	0.34	0.22	N-82°-W		中世	
4	273	842/-949	円形	0.40	0.34	0.14	N-12°-E		中世	
4	274	843/-952	円形	0.46	0.42	0.15	N-81°-W		中世	
4	276	846/-960	円形	0.34	0.32	0.47	N-60°-W		中世	
4	279	847/-958	楕円形	0.40	0.32	0.52	N-９°-E		中世	
4	280	850/-964	円形	0.38	0.36	0.41	N-70°-E		中世	
4	281	851/-957	円形	0.38	0.32	0.37	N-15°-E		中世	
4	283	849/-957	円形	0.42	0.40	0.56	N-62°-W		中世	
4	284	857/-951	円形	0.52	0.50	0.43	N-48°-E		中世	
4	289	859/-959	円形	0.56	0.52	0.29	N-50°-E		中世	
4	294	872/-960	円形	0.46	0.32	0.39	N-80°-W		中世	
4	295	872/-960	円形	0.44	0.38	0.27	N-３°-W		中世	
4	300	858/-955	円形	0.50	0.43	0.51	N-10°-E	164号土坑	中世	
4	306	845/-961	円形	0.32	0.30	0.32	N-75°-W		中世	
4	307	848/-956	円形	0.50	0.44	0.51	N-76°-W		中世	
4	308	869/-960	楕円形	0.38	0.29	0.29	N-15°-E		中世	
4	309	846/-955	円形	0.50	0.48	0.32	N-80°-E		中世	
4	310	873/-965	円形	0.44	0.28	0.51	N-50°-W		中世	
4	315	861/-967	不定形	0.76	0.42	0.48	N-80°-E		中世	
4	318	863/-959	円形	0.70	0.50	0.22	N-70°-E		中世	
4	319	850/-967	楕円形	0.50	0.28	0.47	N-10°-W		中世	
4	321	858/-964	楕円形	0.46	0.36	0.20	N-10°-E		中世	
4	322	843/-957	円形	0.70	0.68	0.63	N-80°-W	217号竪穴建物	中世	
4	323	840/-953	円形	0.30	0.28	0.40	N-20°-E		中世	



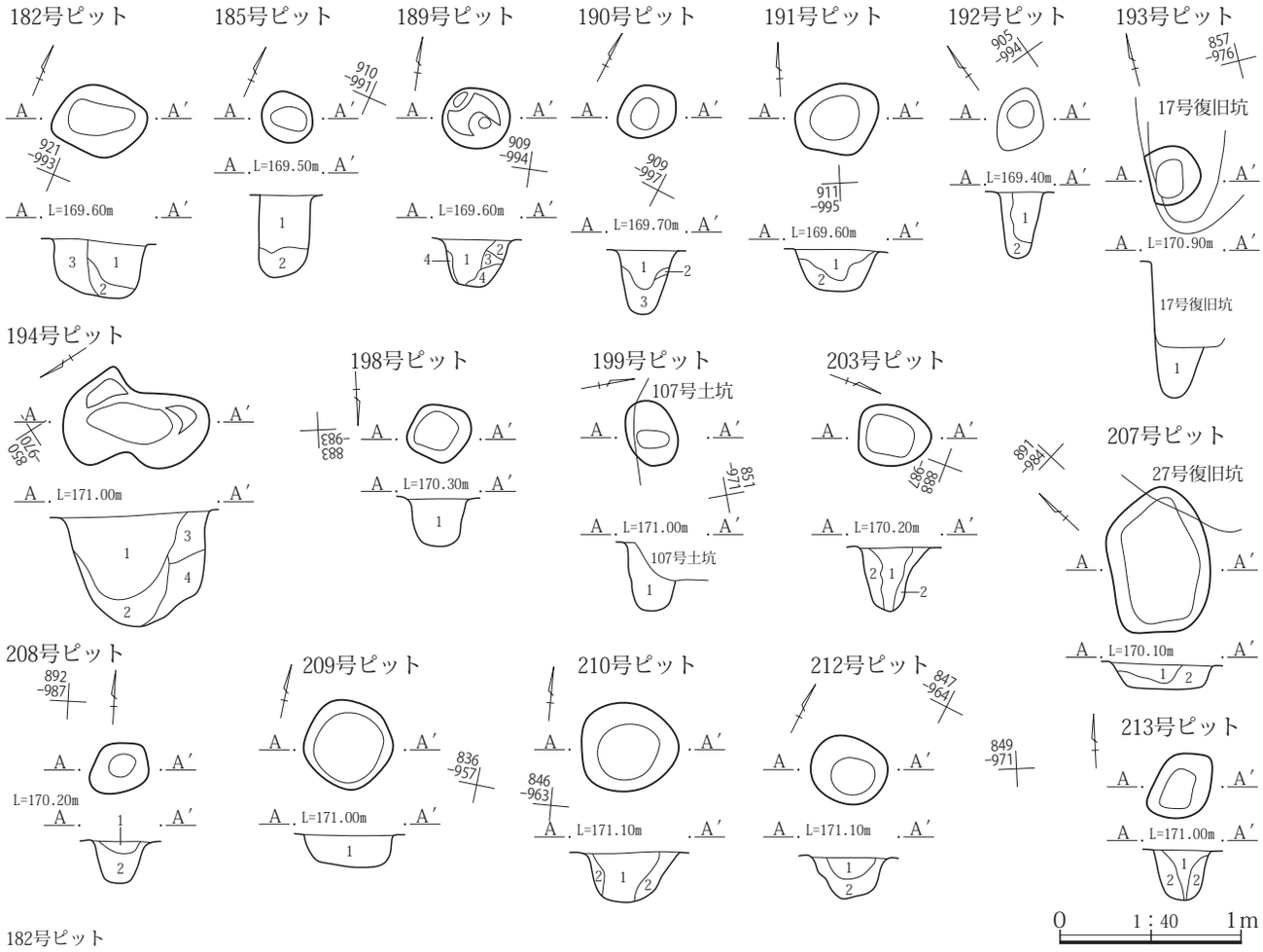
１号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを５％含み、やや柔らかい。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを10％含み、やや柔らかい。
２号ピット
1　黒褐 10YR2/3　固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/2　褐色土ブロックを５％含み、やや柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを10％含み、やや柔らかい。
３号ピット
1　黒褐 10YR2/3　固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
3　黒褐 10YR2/2　やや柔らかい。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。
６号ピット
1　黒褐 10YR2/3　固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。
3　黒褐 10YR2/2　しまりがある。
4　にぶい黄褐 10YR4/3　暗褐色土を40％含み、やや柔らかい。
８号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土ブロックを５％含む。
12号ピット
1　黒褐 10YR2/3　固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/2　１に類似。
3　灰黄褐 10YR4/2　やや柔らかい。
13号ピット
1　黒褐 10YR2/3　固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/2　しまりがある。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　灰黄褐色土(10YR4/2)を10％含み、やや柔らかい。
14号ピット
1　黒褐 10YR2/3　固くしまりがある。
2　黒褐 10YR2/2　褐色土ブロックを５％含む。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　やや柔らかい。
15号ピット
1　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
2　灰黄褐 10YR4/2　褐色土ブロックを５％含む。
16号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　やや柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。
4　暗褐 10YR3/3　やや粘性がある。やや柔らかい。
17号ピット
1　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
2　黒褐 10YR2/2　褐色土ブロックを５％含み、やや粘性がある。
3　灰黄褐 10YR4/2　暗褐色土を40％含む。
19号～22号ピット
1　黒褐 10YR3/2　As-B混土。
26号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを30％、黒褐色土70％ほどのAs-B混土。しまりやや強い。
2　黒褐 10YR3/2　As-Cを10％と黒褐色土90％ほどからなるAs-B混土。
3　暗褐 7.5YR3/3　As-Cを10％と黒褐色土と赤色味を帯びた泥流土の混土。ややしまり弱い。
39号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-Bが混じり、φ１～２㎜の褐色粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。

第343図　１～３・６・８・12～17・19～22・26・39号ピット遺構図



68号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-Bを多く含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％含み、しまりがある。
77号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１～５㎜の褐色土ブロックを２％含み、固くしまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
3　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを10％含む。
102号ピット
1　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の赤褐色土ブロックを１％含む。
3　黒褐 10YR2/3　１・２に類似。
158号ピット
1　黒褐 10YR3/2　As-B混土とみられる粗粒非粘性土。ローム粒を少量不均等に含み、ややしまり弱い。
2　黒褐 10YR3/2　１と同様。
3　にぶい黄褐 10YR4/3　不揃いのローム土をブロック中に１が混じり、ややしまり強い。
159号ピット
1　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　黒褐色土10％含み、しまりがある。
160号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土。
2　暗褐 10YR3/3　しまりがある。
161号ピット
1　黒褐 10YR2/3　ロームブロックをわずかに含み、しまりの強い細粒土。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　黒褐色土を40％含む。
4　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
162号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ１㎜のか色土ブロックを１％含む。
163号ピット
1　暗褐 10YR3/3　ややしまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　黒褐色土を20％含む。
165号ピット
1　黒褐 10YR2/3　柔らかい。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜のAs-YPブロックを２％含む。
166号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜のAs-YPブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ２㎜のAs-YPブロックを１％含み、柔らかい。
169号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-Bを含み、ややしまりのある細粒土。
2　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～３㎜のAs-YPブロックを３％含む。
170号ピット
1　黒褐 10YR2/3　しまりのある細粒粘性土。
2　暗褐 10YR3/3　黒褐色土を３％含む。
172号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを２％含み、ややしまる。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜の褐色土ブロックを５％含み、ややしまる。
180号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土。
2　黒褐 10YR2/3　φ２～５㎜のAs-YPブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ２～３㎜のAs-YPブロックを５％含む。
181号ピット
4　黒褐 10YR2/3　As-B混土。

第344図　68・77・102・158～163・165・166・169・170・172・180・181号ピット遺構図



182号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-Bを含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　１に類似、しまりがある。
3　暗褐 10YR4/3　下位ほどロームブロックを多く含み、しまりがある弱粘性土。

185号ピット
1　暗褐 10YR3/3　しまりがある。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ロームブロック主体、しまりが強い、地山の崩落土。

189号ピット
1　黒褐 10YR3/2　ローム粒・As-Bを若干含み、ややしまり弱い非粘性土でフカフカした感触。
2　黒褐 10YR3/2　１に類似、ローム状の土が混じり、やや黄色味おびる。
3　暗褐 10YR3/4　ローム状土の混入少なく、ややしまりのある微粘性土。
4　灰黄褐 10YR3/4　As-YPまじりのローム土を不均等に含み、ややしまり強い。

190号ピット
1　暗褐 10YR3/4　不揃いのローム土を不均等に含み、ややしまり強い弱粘性土。
2　黒褐 10YR3/2　As-YP散見する以外混入物少ない、ややしまり強い細粒土。
3　暗褐 10YR3/3　ローム状土の混入多く、黄色味おびる弱粘性土。底面付近はAs-YP、ロームブロックを多く含む。

191号ピット
1　黒褐 10YR3/2　As-B・ローム粒を少量含み、ややしまり弱いフカフカした感触。
2　暗褐 10YR3/4　ローム状土の混入やや多い、As-YPを不均等に含み、ややしまり強い弱粘性土。

192号ピット
1　黒褐 10YR3/2　ややしまり弱い腐食土質の土、As-Bを含む。
2　灰黄褐 10YR4/2　１とローム土の混土、ややしまり弱い。

193号ピット
1　As-Aにより埋没。

194号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土、ロームブロックを含み、しまりが弱い砂質土。
2　暗褐 10YR3/3　１に類似、大粒のロームブロックを多く含無。
3　黒褐 10YR2/3　As-Cが混じる。ややしまりのある砂質土。
4　暗褐 10YR3/3　１に類似、ロームブロックを含み、ややしまりが弱い。

198号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土。

199号ピット
1　黒褐 10YR2/3　ロームブロックを含む。

203号ピット
1　黒褐 10YR2/3　やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。

207号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-B混土、ロームブロックを５％を含む。
2　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを斑状に10％含む。

208号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。

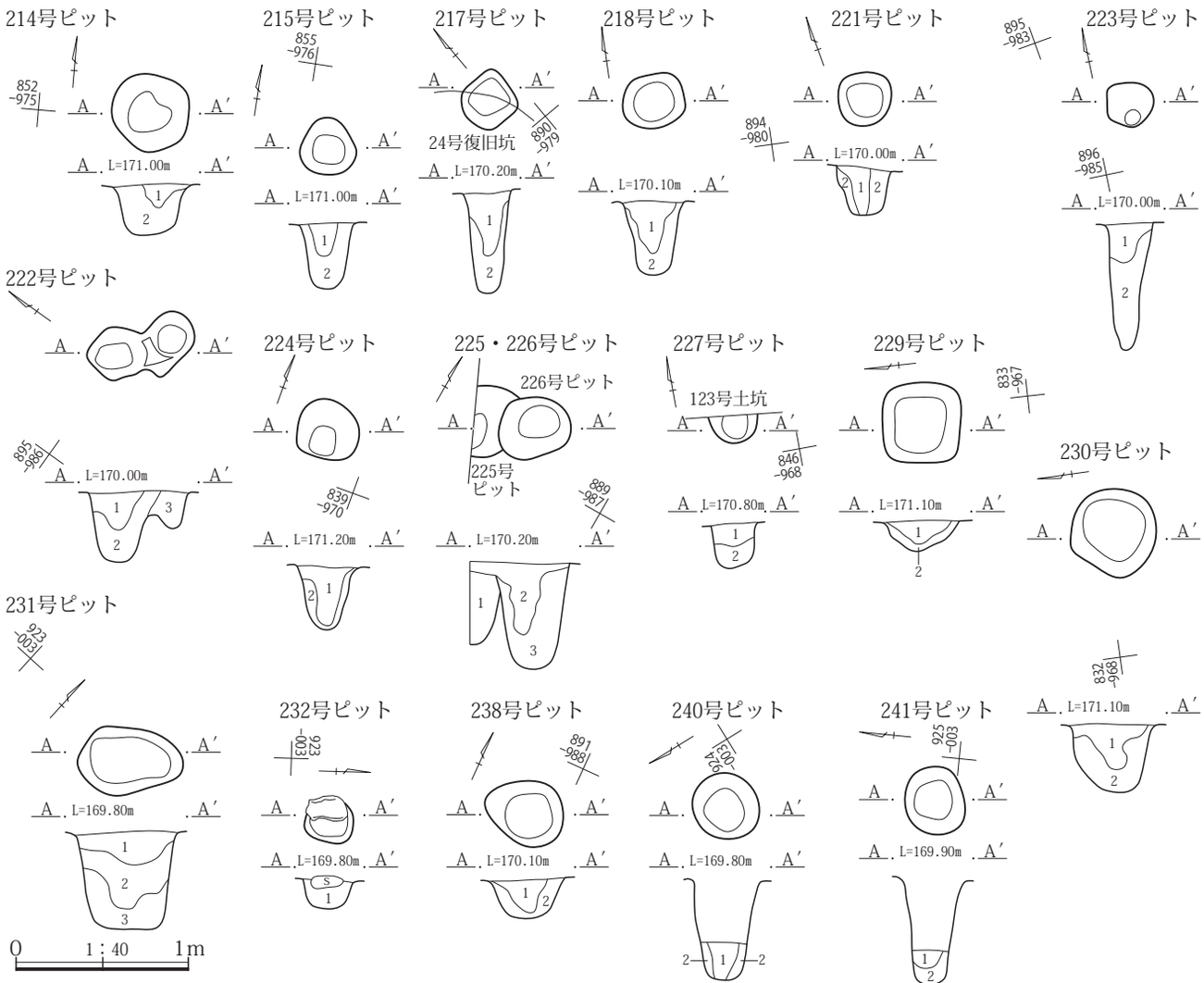
209号ピット
1　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを５％含む。

210号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％、φ２㎜の褐色土ブロックを２％含む。

212号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ２㎜の褐色土ブロックを１％含む。

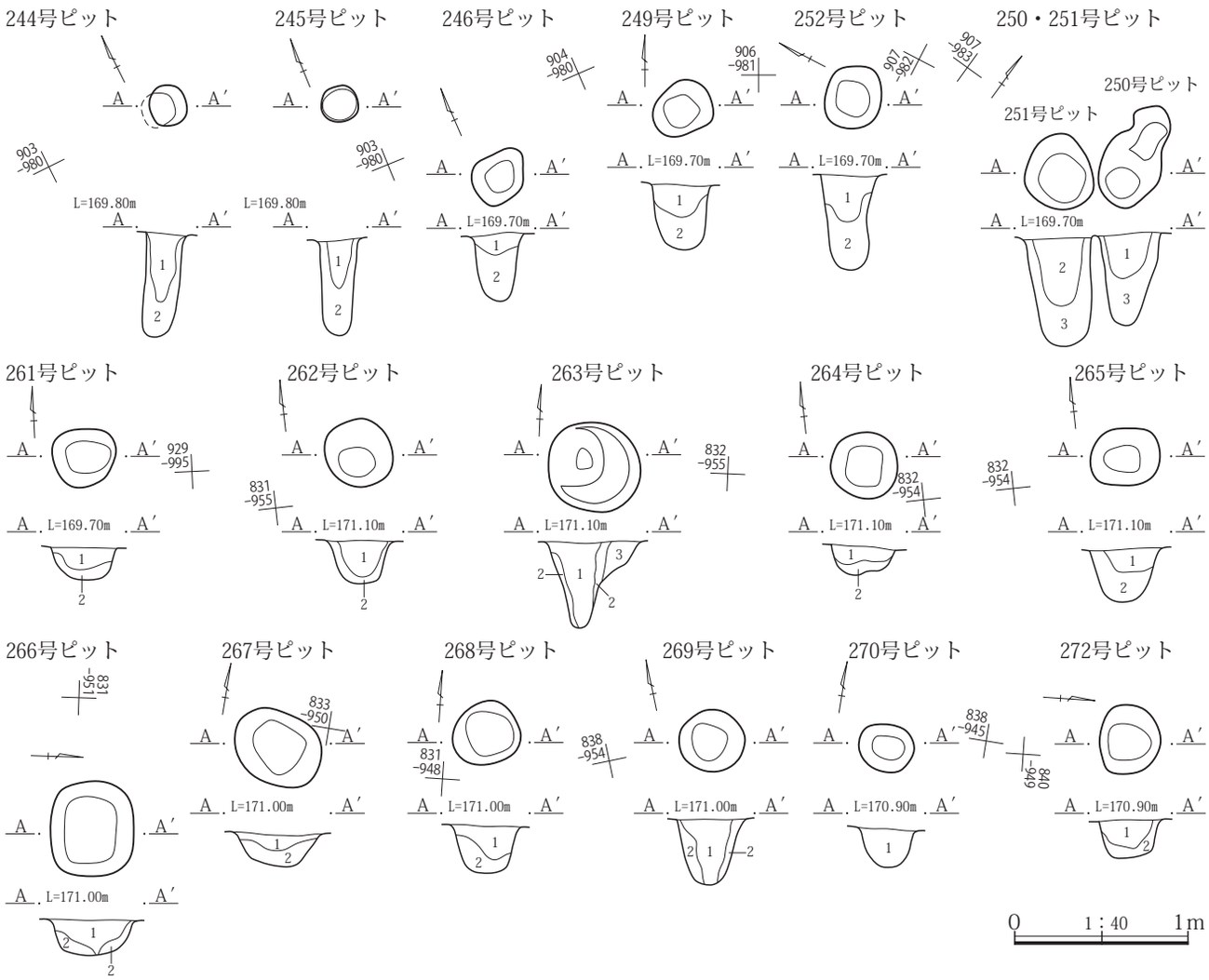
213号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２㎜のAs-YPブロックを２％含む。柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3

第345図　182・185・189～194・198・199・203・207～210・212・213号ピット遺構図



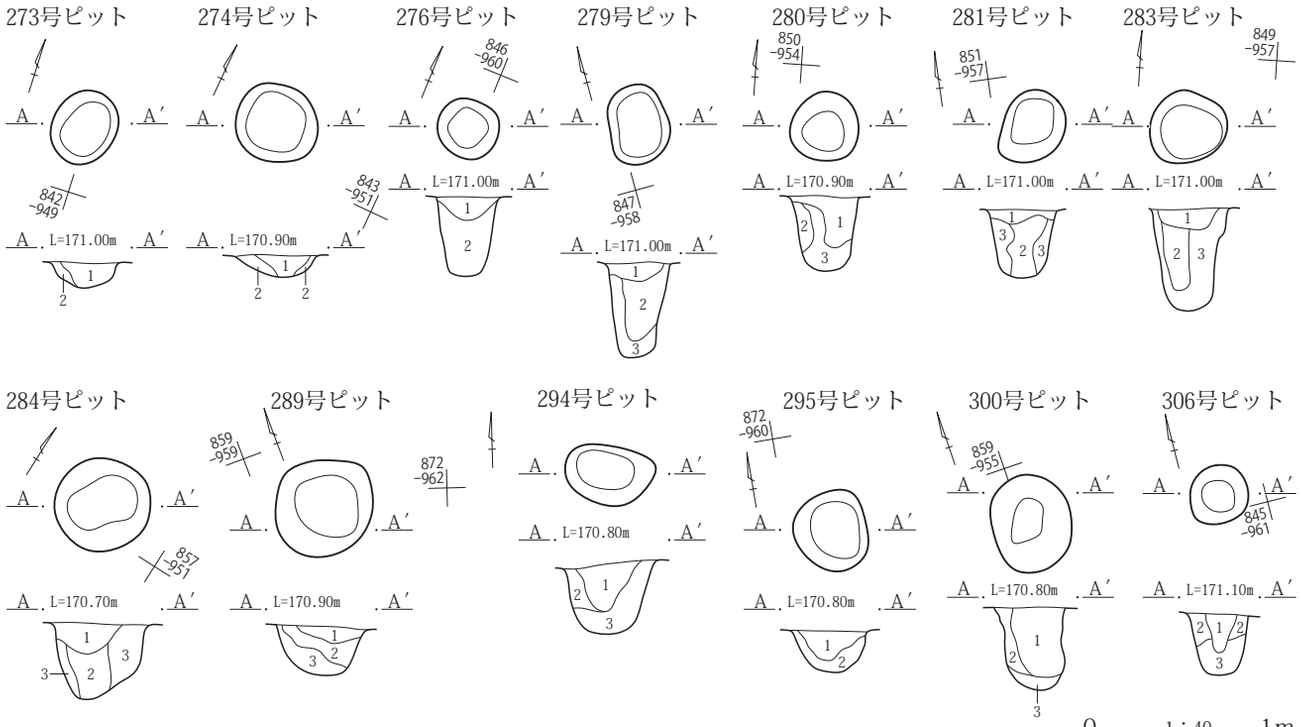
214号ピット
1　黒褐 10YR2/3　柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
215号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜のAs-YPブロックを２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを５％含み、しまりがある。
217号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～５㎜のAs-YPブロックを２％含み、やや脆い。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
218号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２㎜の暗褐色土ブロックを２％含み、やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
221号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-B含み、脆い。
2　黒褐 10YR2/3　ローム粒を含む、微粘性土。
222号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～10㎜のAs-YPブロックを５％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ２～３㎜のAs-YPブロックを１％含む。
3　黒褐 10YR2/3　１と同様、As-YP、ロームブロックを10％含む。
223号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２～20㎜のロームブロック10％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-B混土、しまりが弱い。
224号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ２㎜の褐色土ブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある。
225号・226号ピット
1　暗褐 10YR3/3　ローム土の混入やや多い。若干強い。
2　黒褐 10YR3/2　ローム小ブロックを少量含み、ややしまり弱い腐食質土。
3　暗褐 10YR3/3　ローム土の混入やや多い。しまりは若干強い。
227号ピット
1　黒褐 10YR2/2　As-B混土、ややしまり弱い腐植土質でサラサラした感触。
2　にぶい黄褐 10YR4/3　ローム粒・As-YPと１の混土、ややしまり弱い。
229号ピット
1　黒褐 10YR2/3　ロームブロックを５％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　ローム土を10％含み、しまりがある。
230号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-Bを多く含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％、褐色土ブロックを３％含む。
231号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜のAs-YPブロックを２％含む。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～10㎜のAs-YPブロックを５％含む
3　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを30％、褐色土を10％含む。
232号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを２％含む。
238号ピット
1　黒褐 10YR2/3　脆い土質。
2　暗褐 10YR3/3　φ２㎜の褐色土ブロックを２％含む。
240号ピット
1　暗褐 10YR3/3　やや柔らかい。
2　暗褐 10YR3/3　φ２～３㎜の褐色土ブロックを２％含む。
241号ピット
1　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを含む、砂質土。
2　暗褐 10YR3/3　ロームブロックを10％含む。

第346図　214・215・217・218・221～227・229～232・238・240・241号ピット遺構図



244号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロック１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロック２％含み、やや柔らかい。
245号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロック１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロック２％含み、やや柔らかい。
246号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-B混土、As-YPブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを１％含む。
249号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを３％含む。
250号・251号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを１％含む。
3　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを１％含む。
252号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを２％含む。
2　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを１％含む。
261号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPブロックを２％、φ１㎜の白色粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　As-YPブロックを２％含む。
262号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　褐 10YR4/4　暗褐色土を10％含む。
263号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　褐 10YR4/4　暗褐色土を10％含む。
3　褐 10YR4/4　２に類似、ローム土を含む。
264号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　褐 10YR4/4　暗褐色土を10％含む。
265号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　褐 10YR4/4　暗褐色土を10％含む。
266号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を10％含み、しまりがある。
267号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％含み、やや柔らかい。
268号ピット
1　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の白色粒を５％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含む。
269号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％含み、しまりがある。
270号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％、ロームブロックを２％、φ１㎜の白色粒を１％含み、しまりがある。
272号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　しまりがある弱粘性土。

第347図　244～246・249～252・261～270・272号ピット遺構図



273号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　しまりがある。

274号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　しまりがある。

276号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜のAs-YPブロックを１％含み、しまりがある。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜のAs-YPブロックを２％含み、しまりがある。

279号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の白色粒を１％、φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、しまりがある。
2　暗褐 10YR3/3　φ１～10㎜のAs-YPを10％含む。
3　暗褐 10YR3/3　やや脆い。

280号ピット
1　暗褐 10YR3/3　ローム粒・As-Cを霜降状に少量とAs-YPを含み、ややしまり強い細粒土。
2　暗褐 10YR3/3　１に類似、ローム粒多くなる。
3　黒褐 10YR3/2　細粒の微粘性土。As-Cを不均等に含み、ややしまりがある。

281号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-Cを少量とローム粒を若干含み、しまりやや強い細粒土。
2　黒褐 10YR3/2　下半にローム小ブロックやAs-YPを含み、ややしまり強い細粒微粘性土。
3　灰黄褐 10YR4/2　ローム粒・不明瞭なローム土を不均等に含み、ややしまり強い弱粘性土。

283号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～20㎜の褐色土ブロックを２％含み、やや柔らかい。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～５㎜の褐色土ブロックを１％含む。

284号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の白色粒を１％、φ１㎜の焼土ブロックを１％、φ１㎜の褐色土ブロックを１％、炭化片を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや柔らかい。
3　黒褐 10YR2/3　φ１㎜の褐色土ブロックを１％含む。

289号ピット
1　暗褐 10YR3/3　As-B。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土をブロック状に５％含む。
3　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％、ロームブロックを２％含む。

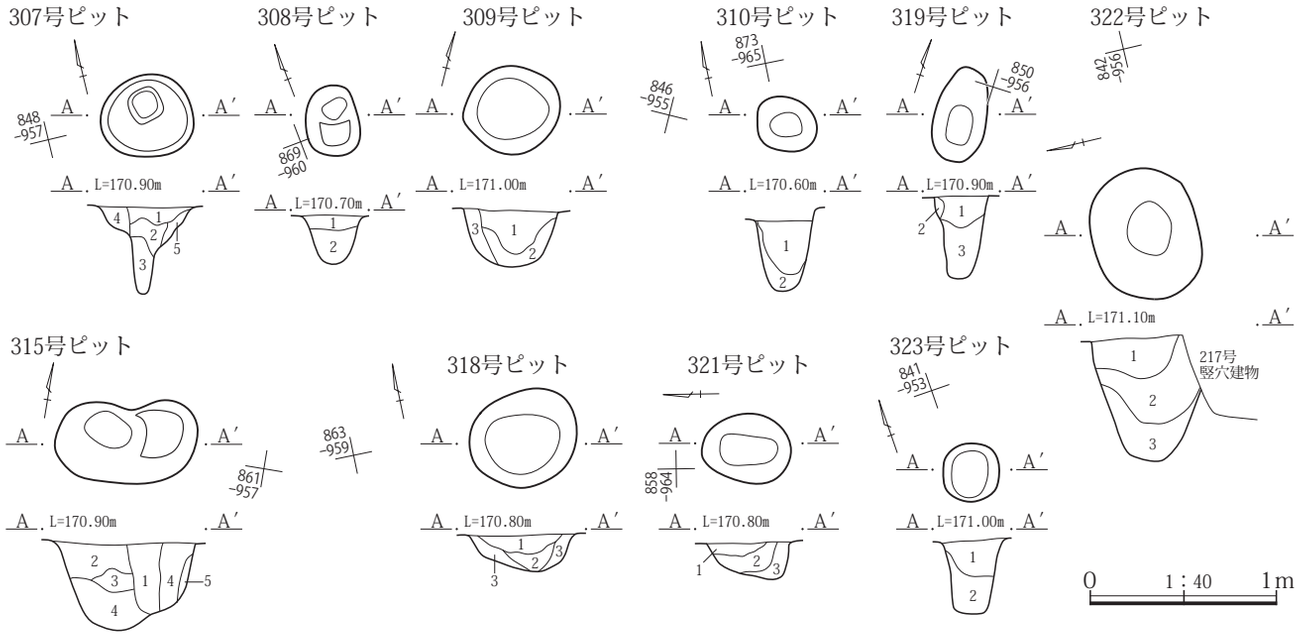
294号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを１％含み、やや柔らかい。
2　黒褐 10YR2/3　φ２㎜の焼土ブロック１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～２㎜の褐色土ブロックを５％、φ２㎜の焼土ブロックを１％含む。

295号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜褐色土ブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　暗褐色土を５％、褐色土ブロックを２％含み、しまりがある。

300号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％とAs-YP、白色粒を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　１に類似。
3　黒褐 10YR2/3　暗褐色土ブロックを５％と白色粒を１％含む。

306号ピット
1　黒褐 10YR3/2　ロームブロックを１％含む。
2　黒褐 10YR3/2　As-YP、白色粒を１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　As-YPを２％含む。

第348図　273・274・276・279～281・283・284・289・294・295・300・306号ピット遺構図



307号ピット
1　黒褐 10YR2/3　φ１㎜のAs-YPを１％含む。
2　暗褐 10yr3/3　ロームブロックを３％含む。
3　黒褐 10YR2/3　φ１～２㎜のAs-YPを１％含み、柔らかい。
4　黒褐 10YR2/3　含有物はみられない。
5　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土を５％含む。

308号ピット
1　黒褐 10YR3/2　暗褐色土ブロックを10％含む。
2　黒褐 10YR3/2　脆い。

309号ピット
1　黒褐 10YR3/2　暗褐色土粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　褐色土ブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　含有物はみられない。

310号ピット
1　黒褐 10YR3/2　暗褐色土ブロックを10％とAs-YPを１％含む。
2　黒褐 10YR3/2　ロームブロックを１％含み、脆い。

315号ピット
1　黒褐 10YR2/3　白色粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　黒色土ブロックを２％含む。
3　暗褐 10YR3/3　φ１～３㎜の褐色土と白色粒を１％含む。
4　暗褐 10YR3/3　褐色土を１％含み、しまりが弱い。
5　暗褐 10YR3/3　褐色土を１％含む。

318号ピット
1　黒褐 10YR3/2　As-B混土、炭化物、焼土を若干含み、粗粒土でややザラザラした感触。
2　暗褐 10YR3/4　土質１に近い。ローム粒を多く含み、しまり弱い。
3　灰黄褐 10YR4/2　不明瞭なローム土と黒褐色土のブロック状の混土、しまりやや強い。

319号ピット
1　黒褐 10YR2/3　As-YPを１％含む。
2　灰黄褐 10YR4/2　褐色土ブロックを30％含む。
3　黒褐 10YR2/3　褐色土ブロックを５％含む。

321号ピット
1　褐 10YR4/4　ロームブロックを含む。
2　暗褐 10YR3/4　ロームブロックを５％含む。
3　暗褐 10YR3/3　２に類似。

322号ピット
1　暗褐 10YR3/3　褐色土粒を１％含む。
2　暗褐 10YR3/3　１に類似、As-YPを１％含む。
3　暗褐 10YR3/3　１に類似、褐色土粒を５％とAs-YPを１％含む。

323号ピット
1　黒褐 10YR2/3　暗褐色土粒を１％含む。
2　黒褐 10YR2/3　１に類似、暗褐色土粒を５％含む。

第349図　307～310・315・318・319・321～323号ピット遺構図

第６項　畑

東西方向に走向する細い溝状の遺構が南北に連続していることから畑のサク跡と判断された。

位置　１区調査区西南寄り、Ｘ＝37054～37060、Ｙ＝-85063～-85067に位置する。畑は区画の東側一部が残存しているとみられる。

重複関係　141号竪穴建物と重複関係にある。新旧関係は本遺構のほうが新しい。

区画　全体の区画は不明であるが、東側に５～６㎝ほどの高低差をもつ段が存在することから、東端はこの段の手前と想定される。

規模　残存する規模は幅40㎝前後、長さ1.3～2.3m、深さ２～６㎝を測る。

埋没状態　土層断面の観察ではAs-Bを含む暗褐色土で埋没している。

出土遺物　遺物は出土していない。

所見　検出した畑は区画の一部で、サクの感覚から数次にわたる耕作が行われたとみられる。埋没土の状態から中世に比定できる。

第７項　集石

16号復旧坑底面や149号土坑確認面から径20㎝前後の礫がまとまって検出され、その礫の範囲内で内耳鍋が散乱した状態で出土した。出土状況は人為的な配列や設置した様子を見いだすことはできなかった。

位置　４区調査区中央よりやや北西寄り、Ｘ＝36857～36860、Ｙ＝-84968～-85971に位置する。

重複関係　16号復旧坑、21号復旧坑、149号土坑と重複関係にある。新旧関係は149号土坑より本遺構のほうが新しいが、16号復旧坑、21号復旧坑より古い。

規模　礫の出土範囲は南北3.5m、東西2.7mである。

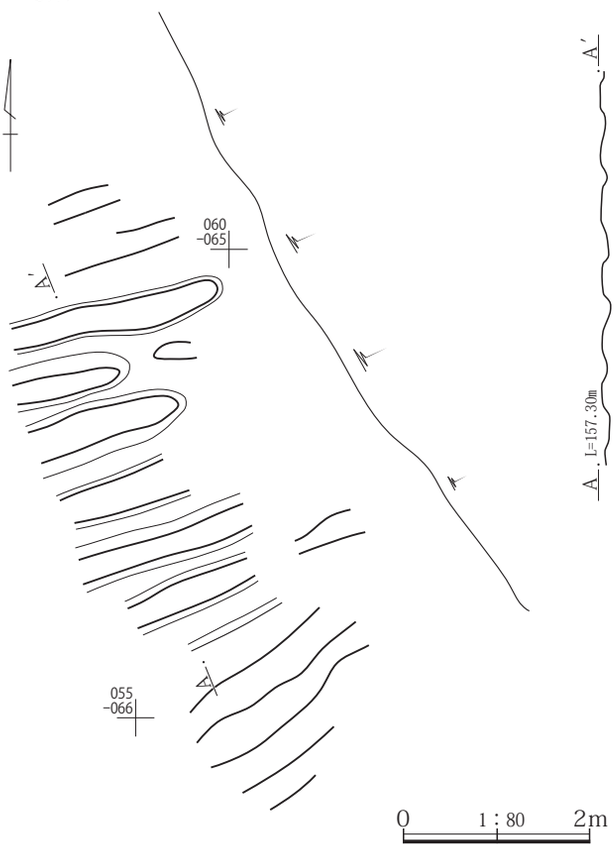
出土遺物　遺物は礫の間から１の内耳鍋片が４点出土している。出土した破片は接合することはなかった。形態や胎土から同一個体とみられる。

所見　前記のように礫の出土状態に人為的な配列や設置が見られなかったことから、この場に廃棄されたものと判断される。

第８項　遺構外出土遺物

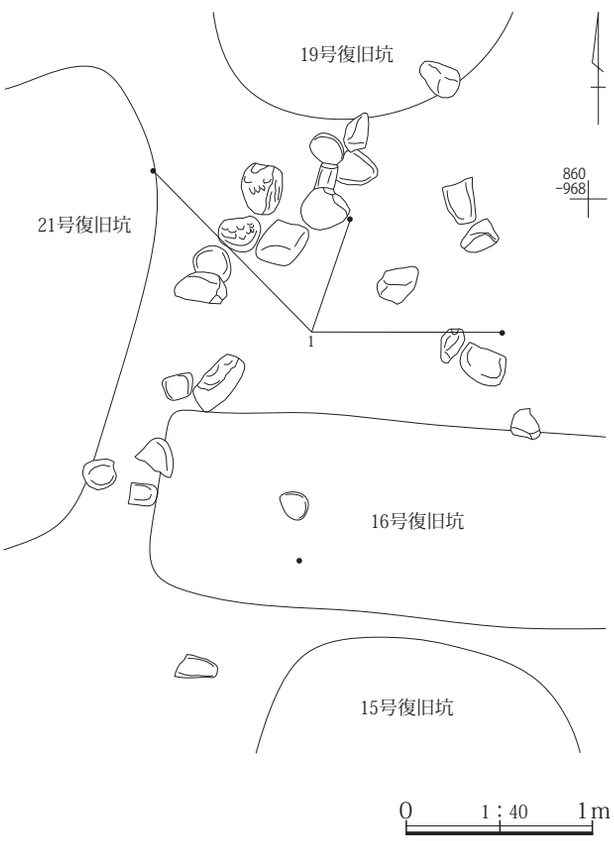
遺構外からの出土遺物は２区～４区調査区の竪穴建物や表土から出土したものを掲載した。その大部分は18世紀以降の国産陶磁器であるが、中には在地産の陶器がみられた。

１号畑



第350図　１号畑遺構図

１号集石



第351図　１号集石遺構図

第４章　科学的分析

第１節　米山遺跡から出土したウマの歯について

澤田純明・佐伯史子（新潟医療福祉大学）

はじめに

米山遺跡の2018年の発掘調査において、206号竪穴建物跡からウマの上顎左前・後臼歯６点が出土した。これらは発掘調査担当者によって周囲の土ごと取り上げられ、新潟医療福祉大学に搬入された。搬入後にクリーニングを実施したものの、保存状態は劣悪であり、周囲の土を全て除去すると崩壊すると考えられたため、歯の形状を破壊しない程度でクリーニングを止め、実見可能な各臼歯の頬側面のみを観察した。以下に所見を報告する。

残存部位

上顎左の第２～４前臼歯および第１～３後臼歯の歯冠が残存する。全ての歯が歯列を保った状態で出土しており（写真）、もともと臼歯が植立した上顎骨が埋存していたものが、土中の続成作用により骨質が消失した結果、骨に比べて保存に優れる歯のみが残存したと推測された。下顎の歯は出土していないが、もとより上顎のみだったのか、当初は伴っていた下顎が歯ともども消失したのかは、判然としない。

形態的な特徴と年齢推定

上記の理由により咬合面を土中から掘り出せず、咬耗の状態は観察できなかったが、歯冠の形成状況ならびに歯の配列様相から、萌出は完了していたものと推測された。保存状態が悪いため正確な計測は不可能であったものの、大凡の推測値として、上顎第１後臼歯の歯冠高は約50㎜とみなされた。

Levine（1982）によれば、ウマの臼歯の萌出年齢は、第２・３前臼歯で2.5～3.5歳、第４前臼歯で３～５歳、第１後臼歯で0.5～１歳、第２後臼歯で1.3～２歳、第３後臼歯で2.5～５歳とされる。また、ウマの臼歯の歯冠高は年齢と相関することが知られており（西中川ほか2015）、本資料の上顎第１後臼歯の値を日本古代馬の既報データと比較したところ、６歳前後の同歯種の歯冠高（四条遺跡出土No.042（４～６歳）：54.5 ㎜、長原遺跡出土番号なし（６歳）：50 ㎜、山崎（2016）による）に近かった。したがって、出土ウマの年齢は、萌出状況から３～５歳以上、歯冠高からは６歳程度と推定された。

なお、歯冠表面の剥落が著しく、エナメル質減形成などのストレスマーカーや病変の有無は検討できなかった。

まとめ

米山遺跡の206号竪穴建物跡から、ウマの上顎左第２～４前臼歯および第１～３後臼歯が出土した。出土状況から、もともと臼歯の植立した上顎骨が埋存していたものが、土中で骨質が消失して臼歯のみが残存したと推測された。出土ウマの年齢は、歯の萌出状況から３～５歳以上、歯冠高からは６歳程度と推定された。

文献
Levine　M.A.（1982）The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horse teeth. In：Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites. BAR 109, pp. 223-250.
西中川駿・幸村真由美・吉野文彦・塗木千穂子・松元光春（2015）ウマの臼歯の計測値から体高および年齢の推定法. 動物考古学 32：１－９.
山崎健（2016）藤原宮跡から出土した動物遺存体. 藤原宮跡出土馬の研究 奈良文化財研究所研究報告17, 奈良文化財研究所, pp. １-26.

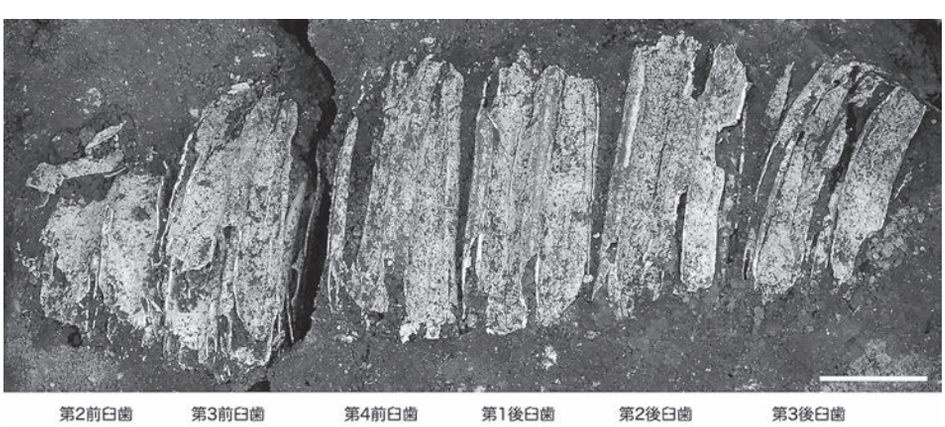


写真. 出土ウマ臼歯の頬側面（スケール・バー：２㎝）

第５章　調査の成果

第１節　遺物について

第１項　出土した施釉陶器について

はじめに

今回の米山遺跡の整理作業のなかで土器の接合をはじめると多くの灰釉陶器が目にとまった。また、灰釉陶器の生産年代と同時期の竪穴建物も多く存在していることから、施釉陶器の出土傾向について検討をおこなうこととした。

検討を行うのにあたって施釉陶器については、可能な限り図示を試みた。その結果、緑釉陶器については出土量が49点とそれほど多くないことから、小片であっても全点を図示して掲載した。灰釉陶器は、1,000点を超える点数が出土していることから、口縁部や底部の微細な破片や体部の小片については図の掲載を取りやめた。しかし、図示していない破片についても観察を行い、器種や可能な限りの窯式期の判別を行い一覧表に提示した。なお、灰釉陶器では同一個体の可能性がある破片についても接合しない場合は１点として数えてある。

出土した施釉陶器について

出土した施釉陶器は図示できなかった未掲載のものも含めて1,179点[注1]である。内訳は緑釉陶器49点、灰釉陶器が1,130点である。そのうち、図示したものは灰釉陶器178点である。図示していない未掲載の灰釉陶器については第10表に可能な限り器種と窯式期を判断して掲載した。

灰釉陶器の器種は椀、小椀、深椀、輪花椀、稜椀、皿、段皿、折縁皿、耳皿、小瓶、平瓶、長頸壺、短頸壺がある。この他、原始灰釉陶器から初期の灰釉陶器とみられる段階の浄瓶、浄瓶または水瓶とみられる胴部片もある。なお、小破片のため器種の判断ができなかった器種不明の個体も若干みられるが、これらも上記の器種に該当するとみられる。

大まかな器種の比率は椀・皿などの供膳具が84％、小瓶や長頸壺などの貯蔵具が16％である。貯蔵具は全体的に小型の製品が多くみられたが、その中にあって165号竪穴建物から出土した43(第528図)の短頸壺は底部から胴部上位の破片ではあるが底径15.4㎝、残存高21.0㎝を測る大型品である。

供膳具では圧倒的に椀・皿が多く、この他では小椀、深椀、輪花椀、稜椀、段皿、折縁皿、耳皿が出土している。これらの器種は実測個体では11点とわずかな点数しかなく、未掲載のものの中でも稜椀１点、輪花椀４点とわずかな点数であった。

緑釉陶器は、49点が出土しているが、残存状態は不良で88号竪穴建物から出土している９(第465図)の輪花皿が口縁部を２分の１ほど欠くが、底部まで残存する唯一の個体である。この他は４分の１以下または口縁部や体部、底部位などの小破片である。

緑釉陶器の器種は椀37点、皿10点、輪花皿１点、瓶１点である。

施釉陶器を出土している遺構は竪穴建物、竪穴状遺構、土坑、溝など多く見られるが、その大部分は未掲載のものを含めても10点未満で一遺構からの出土量した量はあまり多くない。そうした中でも54号竪穴建物からは緑釉陶器７点、灰釉陶器図示・未掲載を併せて59点、66号竪穴建物からは灰釉陶器図示・未掲載併せて58点が出土している。

施釉陶器の生産地・時期

今回、灰釉陶器で掲載できなかったものについても全点の観察を行ったが、小片のため窯式期の判別ができないものが多く存在した。口縁部や底部など時期の判断が可能の部位を見ると口縁部の外反が弱く、高台が明瞭な稜をもたない三日月形を呈するものが多くみられ、胎土・色調も緻密で灰白色のものが多いことから東濃地方で生産された大原２号窯式期の製品が大部分を占めるとみられる。この概観した様相については図示した灰釉陶器からも裏付けることができる。

灰釉陶器の生産地では猿投山西南麓古窯跡群とみられる製品は、31号竪穴建物24の椀、４世紀代の32号竪穴建物から出土した22・23の瓶(原始灰釉陶器)、96号竪穴建

物８の椀または皿、117号竪穴建物５の長頸瓶（原始灰釉陶器）、157号竪穴建物18の椀、中世以降の遺構である145号土坑から出土した浄瓶（原始灰釉陶器か）、１区遺構外出土14の皿の９点だけであった。この他、残りは東濃地方の製品である。

生産の時期は猿投山西南麓古窯跡群[注2]の製品が原始灰釉と呼称される折戸10号窯式期から本格的な灰釉陶器としての黒笹14号窯式期、黒笹90号窯式期である。東濃地方の製品は光ヶ丘１号窯式期～丸石２号窯式期まで出土しているが、時期の判断ができない77点と10世紀代と判断した469点を除くと光ヶ丘１号窯式期が82点、大原２号窯式期が456点、虎渓山１号窯式期が30点、丸石２号窯式期が２点である。また、この結果は当然なことではあるが竪穴建物の棟数推移に近い状態である。

特出される灰釉陶器

灰釉陶器の多くは検出された竪穴建物の存続時期による棟数と同様に10世紀前半代の大原２号窯式期に比定されるものが圧倒的に多くみられた。その中にあって、古墳時代前期の32号竪穴建物に混入していた22・23、117号竪穴建物から出土した長頸瓶とみられる（第76図３）と中世の149号土坑に混入していた浄瓶（取り上げは遺構外出土遺物第593図４区１）は８世紀後半代、猿投山西南麓古窯跡群の須恵器・灰釉陶器の編年[注3]における折戸10号窯式期に比定される原始灰釉と呼称される製品である。なお、原始灰釉を出土した117号竪穴建物は８世紀後半に比定でき、原始灰釉陶器の出土位置も床面からで、117号竪穴建物に共伴すると判断できる。

この原始灰釉と呼称される製品は県内に搬入された量は少なく、今までの出土量もわずかである。

原始灰釉については筆者らによって前橋市中之沢室沢遺跡[注4]から出土したものについての検討を行う中で記載してあるように中之沢室沢遺跡から出土した小型長頸壺や浄瓶、短頸壺蓋の他に、県内からの出土例は高崎市矢田遺跡から小型長頸壺、前橋市時沢紺屋谷戸遺跡から短頸壺蓋、伊勢崎市十三宝塚遺跡から浄瓶や水瓶などとわずかな出土例しか見られない。

米山遺跡から出土した原始灰釉陶器は前述のように117号竪穴建物からの出土は共伴するものであるが、32号竪穴建物や149号土坑からの出土は混入したものである。

この原始灰釉陶器の用途については平城京でも浄瓶や水瓶、長頸壺とともにミニチュアの横瓶や長頸壺が興福寺一乗院宸殿下層下土坑からまとまって出土しており、原始灰釉陶器自体が仏具として発注されたことが知られている。県内でも十三宝塚遺跡[注5]から出土したものは遺跡の性格や浄瓶や水瓶などの器種から仏具として用いられているものと考えられる。また、中之沢室沢遺跡では竪穴建物からの出土であるが伝世品であることや遺跡内から浄瓶や仏鉢の出土がみられることなどから僧侶の居住を指摘し、原始灰釉も仏具として使用されていたことを指摘した。米山遺跡の場合、瓦や須恵器鉄鉢状鉢、火舎とみられる有鍔台付鉢など仏教関連の遺物も少なからず出土しており、周辺に寺院の存在が窺える。

緑釉陶器について

緑釉陶器については前記のように残存率が悪くほとんど小破片の状態で出土している。出土点数は49点あるが、この点数は接合関係がみられない個体をすべて１点として数えているためである。10号竪穴建物12と13の口縁部片と底部片のように胎土や釉調などから同一個体とみられたが接合しないために別個体として図示したものも存在することから、実際の個体数は若干少ないとみられる。なお、49点のうち、平安京近郊産とみられる製品は４点、近江産とみられる製品が２点で残り43点は東海地方産とみられる。

平安京近郊産[注6]の製品では９世紀前半から９世紀後半までの段階のものが確認されている。その中でも９世紀前半代は３点と多く、９世紀後半代は１点である。近江産と判断した根拠は高台に段を有するものである。

東海地方産は胎土等から判断したがほとんどが小破片のため時期などの判断が難しく時期不明としたものが36点存在した。時期の比定が可能なものでは、９世紀前半代が３点、９世紀後半が７点、残りが10世紀代と判断した。

出土状況をみると多くは竪穴建物から出土しているが、その出土量は多くても54号竪穴建物の７点でほとんどは１～３点である。また、その分布はすべて１区調査区からで２区～５区調査区から皆無であった。この出土状況は２区～５区調査区の竪穴建物の存続時期が７世紀から９世紀にかけてであるが、９世紀代の竪穴建物が11棟ではあるが、緑釉陶器の生産が始まった９世紀前半代が８棟と多いことに起因するとみられる。

他の遺跡との比較

今回の米山遺跡からは前記のように多くの施釉陶器が

出土している。この数量は第11表に示したように周辺遺跡だけでなく県内の発掘調査の事例でも多い数量を示している。

しかし、他遺跡との比較するにあたっては遺跡によって条件が異なり、単純に比較しても「多い・少ない」の比較にしかならないため高橋照彦氏が提示した100㎡当たりの出土点数による比較[注7]を田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡と同様に試みてみた。筆者は今までにいくつかの発掘調査された遺跡で施釉陶器の観察及び分析を実施している。こうした遺跡と施釉陶器を多く出土している遺跡を取り上げて作成したものが第11表である。

この表から、灰釉陶器の比率は上野国府域の元総社寺田遺跡、下東西・清水上遺跡、田口下田尻・田口上田尻遺跡、福島曲戸遺跡に近い値であることがわかる。

緑釉陶器は数量的に近い下東西・清水上遺跡と近く、比率では田口下田尻・田口上田尻遺跡や下東西・清水上遺跡と近い値が示された。

緑釉陶器では田口下田尻・上田尻遺跡で195点を出土し、100㎡当たりの値0.63、天神遺跡で178点、100㎡当たりの値6.54、清里陣馬遺跡で168点、100㎡当たりの値4.1を示しており、これらは多く出土している遺跡であるが、出土量と100㎡当たりの値は必ずしも一致しない。また、武蔵国北部に位置する埼玉県中堀遺跡や北島遺跡では328点と434点と大量に出土している遺跡が存在する。中堀遺跡は多くの掘立柱建物が検出され勅旨田・親王賜田の管理施設とされ、北島遺跡は溝で区画された内部に四面庇をもつ大型の掘立柱建物をはじめ区画溝外ではあるが同時期に三面庇をもつ大型の掘立柱建物が検出され富豪層の居宅とされている。しかし、両遺跡の100㎡当たりの値は中堀遺跡が1.2点、北島遺跡が4.34点の値を示している。

米山遺跡では出土点数は47点と多くないものの100㎡当たりの値は0.5点を示し、決して少ない値ではないことがわかる。

こうした施釉陶器を多く出土し、100㎡当たりの比率も高い遺跡については国府域では国司館[注8]が想定されることや中堀遺跡のような公的施設、北島遺跡、清里陣馬遺跡、三ツ寺大下Ⅳ遺跡、福島曲戸遺跡、日輪寺観音前遺跡のように富豪層の居宅ないしは居宅が存在したとみられる遺跡である。

まとめ

今回、米山遺跡から出土した施釉陶器について検討した結果、施釉陶器は一般的な集落より数量、比率の面で多いことが示された。こうした背景には近隣に郡衙及び関連施設が存在した可能性が高いことが要因として想定できる。

さらに、遺跡地の南側には東山道駅路が通っており、古代上野国では施釉陶器の搬入に海路や河川を利用しての経路より、陸路である東山道駅路を利用して信濃を経由した流通の方が盛んであった可能性が想定できる[注9]。米山遺跡の所在する古代碓氷郡は上野国でも最も西に位置することから国府へ納入される施釉陶器以外の秀品をいち早く入手できた可能性も窺える。こうしたことが、165号竪穴建物の大型短頸壺出土に結びついたとみられる。また、郡司層や配下の官人によって「非日常の供膳具」[注10]として導入されたものが竪穴建物の庶民に再配分された結果、米山遺跡の竪穴建物から多く出土したと想定される。

注

注１　灰釉陶器、緑釉陶器の未掲載を含んだ合計点数、白磁は含まない。

注２　猿投山古窯跡群産の灰釉陶器の編年については城ケ谷和広2015「編年論」『愛知県史　別編　古代猿投系　窯業１』を参照した。

注３　注２と同じ

注４　神谷佳明・桜岡正信・梅澤克典2016「中之沢室沢遺跡群出土の眼脂灰釉陶器について」『群馬文化』第327号による。

注５　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『史跡十三宝塚遺跡』による。

注６　京都近郊産の緑釉陶器の編年についは高橋照彦2003「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究会第７回シンポジウム　古代の土器研究　平安時代の緑釉陶器―生産地の様相を中心に―』古代の土器研究会を参照した。

注７　高橋照彦氏は官衙における施釉陶器を検討する際に種々の差異が存在することから各遺跡の出土比較を同格にするために100㎡当たりの出土量で比較している。高橋照彦2015「都と地方の土器」『第18回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器１―宮都・官衙と土器―』独立行政法人　奈良文化財研究所

注８　前橋市天神遺跡からは掘立柱建物などは検出されていないが、第１表に示した豊富な施釉陶器の他に白磁や青磁、銅鋺や鉈尾等の金属製品が出土している。こうした遺物の出土状況は下野国府における推定国司館に近い。こうしたことから天神遺跡の近接地に国司館が存在していたことが窺える。なお、下野国府の国司館については次の文献を参照した。高橋照彦2001「地方官衙出土の平安時代の緑釉陶器」『月刊考古学ジャーナル』No.475ニューサイエンス社

注９　東海道諸国の相模や上総では東海産の須恵器や灰釉陶器の搬入に海路が想定されている。古代上野国での施釉陶器の出土量をみると東毛より西毛のほうが多くみられることから、上野国では信濃経由の陸路が想定できる。

古代上野国内での施釉陶器の出土量をみると分析には至っていないが、東毛地域よりの西毛地域のほうが多いとみられる。これは上野国への施釉陶器搬入に河川による運搬が盛んではなかったことを示しているとみられる。

注10　施釉陶器が非日常のものであることは筆者らによって指摘している。綿貫邦男・神谷佳明・桜岡正信1992「群馬における施釉陶器の様相について（１）」『研究紀要』９(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

引用・参考文献
古代の土器研究会1994『古代の土器研究―律令的土器様式の東・西３施釉陶器―』
東海土器研究会2015『第３回東海土器研究会　灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』
愛知県史編さん委員会2015『愛知県史　別編窯業１　古代　猿投系』愛知県
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1981『清里陣馬遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1996『元総社寺田遺跡Ⅲ』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『下東西清水上遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『下芝五反田遺跡―奈良・平安時代以降編―』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『波志江中野面遺跡(１)』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『波志江西屋敷遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2003『稲荷台道東遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『下原遺跡Ⅱ』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『楡木Ⅱ遺跡(１)』
前橋市教育委員会2012『山王廃寺―平成22年度調査報告―』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡』
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『新屋敷遺跡・上西根遺跡・関遺跡(１)』
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『十日市遺跡・住遺跡・千代開南遺跡・千代開北遺跡』
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『関根細ケ沢遺跡』
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『日輪寺観音前遺跡』
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『田口下田尻遺跡』
高崎市教育委員会2001『保渡田徳昌寺遺跡・三ツ寺大下Ⅳ遺跡』
前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団1987『天神遺跡』、1989『天神Ⅱ遺跡』
前橋市教育委員会2008『天神Ⅲ遺跡』
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団1997『中堀遺跡』
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002『北島遺跡Ⅴ』
拙稿　2017「田口下田尻遺跡出土の施釉陶器について」『田口下田尻遺跡』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第10表　米山遺跡出土施釉陶器集計表

遺構名称	遺構の時期	図示												未掲載														
		緑釉陶器	灰釉陶器	灰釉点数	窯式期									点数	器種	部位					窯式期							
					以前	K14	K90	光ケ丘1	大原2	虎渓山1	丸石2	10C.代	不明			口縁部	体・胴部	底部	他	計	以前	K14	K90	光ケ丘1	大原2	虎渓山1	丸石2	10C.代	不明
１号竪穴建物	９世紀第４四半期													18	椀・皿	7	8	0		15				1				14	
															瓶		3			3									3
２号竪穴建物	10世紀第１四半期		椀２	2					2					10	皿	2		1		3				1	2				
															椀	5	2	0		7				1				6	
３号竪穴建物	９世紀第３四半期		椀１	1				1						0															
４号竪穴建物	９世紀第２四半期													4	椀	1	2			3				1				2	
															瓶		1			1								1	
５号竪穴建物	６世紀末～７世紀前半													3	椀	1	1			2								2	
															瓶		1			1								1	
６号竪穴建物	10世紀第２～３四半期		皿１	1					1					17	皿	6	0	1		7					7				
															椀	5	4			9				1	4			4	
															瓶		1			1								1	
７号竪穴建物	10世紀第２～３四半期	椀３(東海９C.代)	椀１	1					1					3	皿	1				1								1	
															椀		2			2								2	
８号竪穴建物	４世紀代													0															
９号竪穴建物	６世紀後半													0															
10号竪穴建物	９世紀第３四半期	皿２(京都洛北)	椀１	1				1						0															
11号竪穴建物	６世紀末～７世紀前半													1	瓶		1			1									1
12号竪穴建物	10世紀第３四半期		椀２	2					1	1				5	皿	1				1								1	
															椀	3	1			4								4	
13号竪穴建物	９世紀第４四半期		皿１、椀１	2				2						10	椀	5	4			9				1				8	
															瓶		1			1								1	
14号竪穴建物	７世紀代３～４四半期													1	皿	1				1					1				
15号竪穴建物	10世紀第１四半期	椀１(東海９C.)	椀３	3					3					12	椀	8	2	1		11					9			2	
															瓶		1			1								1	
16号竪穴建物	６世紀前半	椀２(東海10C.)												0															
17号竪穴建物	６世紀後半													0															
18号竪穴建物	10世紀第１～２四半期		皿１、椀３	4					4					33	皿	2	2	1		5				1	2			2	
															椀	16	10	2		28					12			7	9
19号竪穴建物	10世紀前半		段皿１,椀１、椀１	3				1	2					6	皿	1				1					1				
															椀	3		2		5				1	4				
20号竪穴建物	８世紀第３四半期													0															
21号竪穴建物	８世紀第１四半期													0															
22号竪穴建物	９世紀第４四半期		皿１	1					1					7	皿	1	1	2		4				1				1	2
															椀		2			2									2
															長頸壺		1			1	1								
23号竪穴建物	８世紀後半													0															
24号竪穴建物	４世紀後半													0															
25号竪穴建物	９世紀第４四半期		椀１、長頸瓶１	2				1					1	16	皿	3	2			5					5				
															椀	6	2		1	9				1	7	1			
															瓶	1	1			2								2	

遺構名称	遺構の時期	図示											未掲載														
		緑釉陶器	灰釉陶器	灰釉点数	窯式期								点数	器種	部位					窯式期							
					以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明		口縁部	体・胴部	底部	他	計	以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明
26号竪穴建物	９世紀第１位四半期	椀１	皿１	1					1					0														
27号竪穴建物	９世紀第４四半期～10世紀第２四半期	皿１	椀３	3					3					13	椀	6	7			13					6			7	
28号竪穴建物	３世紀後半													1	椀		1			1								1	
29号竪穴建物	７世紀第３四半期		椀１	1					1					1	椀	1				1				1					
30号竪穴建物	９世紀第４四半期		椀１、小瓶１	2					1				1	6	皿	1		1		2							1	1	
															椀		4			4				1				3	
31号竪穴建物	９世紀第３四半期		椀１	1			1							4	皿	1				1					1				
															椀	2				2								2	
															瓶		1			1								1	
32号竪穴建物	４世紀前半		瓶２	2	2									0															
33号竪穴建物	10世紀第３四半期	椀１												1	椀	1				1								1	
34号竪穴建物	６世紀後半													0															
35号竪穴建物	６世紀末～７世紀初頭													0															
36号竪穴建物	４世紀代													0															
38号竪穴建物	４世紀末～５世紀初頭													0															
39号竪穴建物	７世紀第２～３四半期													4	椀	2				2								2	
															瓶		2			2								2	
40号竪穴建物	10世紀第１四半期	皿１	椀１、瓶１	2				1					1	4	椀	1	1			2					1			1	
															瓶		2			2								2	
41号竪穴建物	10世紀第３四半期	椀３	皿２、椀１	3					3					15	椀	6	8	1		15					2			13	
42号竪穴建物	６世紀前半		椀１	1					1					4	椀	3				3					3				
															輪花椀	1				1					1				
43号竪穴建物	９世紀第３四半期													6	椀	1	3			4					1			2	1
															小瓶	2				2					2				
44号竪穴建物	４世紀代													0															
45号竪穴建物	10世紀第２～３四半期	椀１	皿１、輪花皿１	2					2					12	椀・皿	5	6			11								11	
															瓶		1			1								1	
46号竪穴建物	６世紀後半													2	椀・皿	1	1			2								2	
47号竪穴建物	７世紀前半													0															
48号竪穴建物	７世紀第４四半期		椀１	1					1					0															
49号竪穴建物	10世紀前半	椀３（東海10C.・近江・不明）												0	大型瓶		1			1									1
50号竪穴建物	４世紀代													0															
51号竪穴建物	10世紀第３四半期	椀１	皿１、椀２	3					3					10	椀	5	2			7					5			2	
															瓶	1	2			3								1	2
52号竪穴建物	７世紀前半													1	平瓶		1			1									1
53号竪穴建物	10世紀第３四半期	椀１（東海９C.）	皿１	1					1					4	椀	2	2			4				1	1			2	
54号竪穴建物	10世紀第２四半期	椀６・瓶１（東海９C.・東海10C.）	皿２、輪花皿１、椀２、深椀１	6				1	4	1				53	皿	12		3		15					15				
															椀	18	17	3		38					21			17	
55号竪穴建物	７世紀第３四半期		皿１	1					1					1	瓶		1			1									1
56号竪穴建物	10世紀第１四半期		皿１	1					1					0															
57号竪穴建物	９世紀第４四半期													0															
58号竪穴建物	７世紀第４四半期		椀１	1					1					0															
59号竪穴建物	９世紀後半													0															
60号竪穴建物	７世紀第３～４四半期													2	大型瓶		2			2									2
61号竪穴建物	７世紀末～８世紀初頭	椀２（東海９C.・東海10C.）												0															
62号竪穴建物	６世紀後半													0															
63号竪穴建物	７世紀前半													3	椀	1	2			3								3	
64号竪穴建物	４世紀後半～５世紀初													0															
65号竪穴建物	７世紀第４四半期～８世紀第１四半期													2	皿	1				1					1				
															椀	1				1					1				
66号竪穴建物	９世紀第４四半期～10世紀初頭		段皿１、椀１、小瓶１、長頸瓶７	10				4					6	48	皿	5				5					5				
															椀	7	3	2		12					8	1		3	
															椀・皿		7	3		10								10	
															瓶	6	14	1		21								21	
67号竪穴建物	９世紀第４四半期													1	瓶		1			1									1
68号竪穴建物	６世紀後半													0															
69号竪穴建物	６世紀代													0															

遺構名称	遺構の時期	図示												未掲載														
		緑釉陶器	灰釉陶器	灰釉点数	窯式期									点数	器種	部位					窯式期							
					以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明			口縁部	体・胴部	底部	他	計	以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明
70号竪穴建物	７世紀前半													0															
71号竪穴建物	10世紀第２四半期													4	皿	2				2					2				
															椀			1		1					1				
															椀・皿		1			1								1	
72号竪穴建物	９世紀第３四半期													1	椀	1				1								1	
73号竪穴建物	10世紀第２四半期													6	椀	2	1			3						1		2	
															瓶		3			3								3	
74号竪穴建物	10世紀第１四半期		椀１	1					1					6	椀・皿	2	4			6								6	
75号竪穴建物	10世紀第１四半期													1	輪花椀	1				1								1	
76号竪穴建物	９世紀前半													0															
77号竪穴建物	８世紀第４四半期													1	椀	1				1				1					
78号竪穴建物	９世紀第３～４四半期													0															
79号竪穴建物	９世紀第４四半期													1	椀	1				1					1				
80号竪穴建物	８世紀前半													0															
81号竪穴建物	８世紀第３四半期													0															
82号竪穴建物	９世紀第４四半期		椀１	1					1					0															
83号竪穴建物	８世紀前半		皿１、椀４	5					3	1		1		0															
84号竪穴建物	８世紀第３～４四半期													0															
85号竪穴建物	10世紀第１四半期	皿１（東海９Ｃ.）	椀１	1					1					3	椀		1	2		3					1	1		1	
86号竪穴建物	８世紀前半													0															
87号竪穴建物	７世紀第４四半期													0															
88号竪穴建物	10世紀第１四半期	輪花椀１（近江）	椀１	1					1					2	椀	1	1			2					1			1	
89号竪穴建物	９世紀第３四半期													0															
90号竪穴建物	９世紀第４四半期													2	椀	1	1			2								2	
91号竪穴建物	９世紀第３四半期													0															
92号竪穴建物	８世紀第３～４四半期													0															
93号竪穴建物	８世紀前半													0															
94号竪穴建物	９世紀第３四半期													1	椀	1				1				1					
95号竪穴建物	６世紀後半～７世紀初													0															
96号竪穴建物	９世紀第４四半期～10世紀第１四半期		椀ｏｒ皿１、椀１、瓶１	3		1		1				1		1	椀	1				1					1				
97号竪穴建物	９世紀前半													0															
98号竪穴建物	９世紀後半													1	長頸壺			1		1					1				
99号竪穴建物	９世紀後半		椀２	2				1	1					2	椀・皿	1				1								1	
															瓶		1			1								1	
100号竪穴建物	９世紀後半													0															
101号竪穴建物	９世紀前半													0															
102号竪穴建物	４世紀代													0															
103号竪穴建物	９世紀第４四半期													0															
104号竪穴建物	９世紀第３四半期													0															
105号竪穴建物	９世紀前半													0															
106号竪穴建物	９世紀前半													0															
107号竪穴建物	４世紀前半													0															
108号竪穴建物	９世紀第３四半期		皿２	2				2						3	椀	1		1	1	3					2			1	
109号竪穴建物	８世紀末～９世紀第１四半期													0															
110号竪穴建物	８世紀第３四半期～９世紀初頭													0															
111号竪穴建物	９世紀第３四半期		椀２	2				2						5	椀			1		1					1				
															小瓶		1			1								1	
															瓶		2			2								2	
															不明		1			1								1	
112号竪穴建物	８世紀末～９世紀初頭													1	椀・皿		1			1									1
113号竪穴建物	８世紀第３四半期		長頸瓶１	1									1	0															
114号竪穴建物	９世紀第４四半期													5	椀	3	1			4					4				
															稜椀か	1				1									1
115号竪穴建物	８世紀後半													0															
116号竪穴建物	９世紀第３四半期	椀１（東海９Ｃ.）												0															
117号竪穴建物	８世紀後半		長頸瓶１	1	1									0															
118号竪穴建物	９世紀第１四半期													0															
119号竪穴建物	９世紀前半													0															
120号竪穴建物	８世紀第２～３四半期													1	椀		1			1								1	

遺構名称	遺構の時期	図示											未掲載														
		緑釉陶器	灰釉陶器	灰釉点数	窯式期								点数	器種	部位					窯式期							
					以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明		口縁部	体・胴部	底部	他	計	以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明
121号竪穴建物	８世紀代												0														
122号竪穴建物	４世紀前半												0														
123号竪穴建物	10世紀第１四半期												0														
124号竪穴建物	８世紀前半												0														
125号竪穴建物	９世紀前半		椀１	1				1					0														
126号竪穴建物	９世紀第２四半期												1	椀			1		1						1		
127号竪穴建物	８世紀前半												0														
128号竪穴建物	８世紀第４四半期												0														
129号竪穴建物	６世紀後半												0														
130号竪穴建物	９世紀前半												0														
131号竪穴建物	10世紀第３四半期		皿１	1					1				0														
132号竪穴建物	10世紀第３四半期												0														
133号竪穴建物	７世紀第３四半期～８世紀初頭												0														
134号竪穴建物	４世紀前半												0														
135号竪穴建物	９世紀代												0														
136号竪穴建物	８世紀第２四半期												0														
137号竪穴建物	４世紀代												1	椀		1			1								1	
138号竪穴建物	７世紀後半												0														
139号竪穴建物	８世紀第３四半期												0														
140号竪穴建物	６世紀後半												0														
141号竪穴建物	８世紀前半												0														
142号竪穴建物	10世紀第２四半期												1	椀	1				1					1				
143号竪穴建物	９世紀第２～３四半期	椀１（京都洛西）											1	椀	1				1					1				
144号竪穴建物	４世紀前半												2	皿	1				1					1				
														椀			1		1					1				
146号竪穴建物	10世紀前半		椀１	1		1							1	椀	1				1					1				
147号竪穴建物	９世紀後半												0														
148号竪穴建物	７世紀第４四半期												6	皿	2		1		3					3				
														椀	2	1			3					2			1	
149号竪穴建物	10世紀第３四半期												4	椀	1	1			2				1					1
														長頸壺				1	1									1
														瓶		1			1									1
150号竪穴建物	10世紀第３四半期												0														
151号竪穴建物	10世紀前半		椀２	2					2				0														
152号竪穴建物	３世紀後半												0														
153号竪穴建物	９世紀第３四半期	椀１（東海９C.）	椀２	2				2					6	椀	4	2			6					4			2	
154号竪穴建物	９世紀第４四半期												6	椀		1	2		3				1					2
														瓶		2	1		3					1				2
155号竪穴建物	６世紀後半												1	椀	1				1					1				
156号竪穴建物	４世紀後半												1	瓶		1			1									1
157号竪穴建物	９世紀第４四半期		皿２、椀４、瓶１	7			1	3	2			1	18	椀	8	5	3		16				3	8			5	
														瓶		2			2									2
158号竪穴建物	９世紀第３四半期												2	椀			1		1					1				
														瓶		1			1								1	
159号竪穴建物	10世紀前半		椀２	2					2				6	椀	2	1	1	1	5				4				1	
														瓶	1				1								1	
160号竪穴建物	９世紀第３四半期以前												0														
161号竪穴建物	10世紀第１四半期		椀２	2					2				1	椀・皿		1			1								1	
162号竪穴建物	８世紀前半												0														
163号竪穴建物	８世紀後半		皿１	1					1				9	皿	1				1					1				
														椀	1	5	2		8					3			5	
164号竪穴建物	９世紀前葉～中葉												0														
165号竪穴建物	10世紀第２四半期～第３四半期		耳皿１、折縁皿１、椀４、長頸瓶１、短頸壺１	8				3	2	2		1	33	皿	1				1					1				
														椀	12	7	1		20					12			8	
														小瓶			1		1								1	
														瓶		9		2	11								11	
166号竪穴建物	９世紀第２四半期												1	瓶		1			1								1	
167号竪穴建物	８世紀第３四半期		長頸瓶	1					1				1	椀			1		1					1				
168号竪穴建物	８世紀前半												0														
169号竪穴建物	８世紀代												0														
170号竪穴建物	９世紀第４四半期		皿１	1				1					2	椀		2			2								2	

遺構名称	遺構の時期	図示											未掲載														
		緑釉陶器	灰釉陶器	灰釉点数	窯式期								点数	器種	部位					窯式期							
					以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎渓山1	丸石2	10C.代	不明		口縁部	体・胴部	底部	他	計	以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎渓山1	丸石2	10C.代	不明
171号竪穴建物	８世紀第２四半期												5	椀	1	1	1		3					2			1	
														輪花椀	1				1					1				
														瓶		1			1								1	
172号竪穴建物	７世紀後半												3	椀		2			2								2	
														瓶		1			1								1	
173号竪穴建物	９世紀後半												0															
174号竪穴建物	10世紀第３四半期	椀１	皿２、耳皿１、椀７	10				2	4	4			33	皿	1				1				1					
														椀	15	10	4		29				2	18			9	
														輪花椀	1				1					1				
														瓶		2			2								2	
175号竪穴建物	10世紀第３四半期		皿１、椀３	4					3	1			8	椀	6	2			8				1	6			1	
176号竪穴建物	７世紀後半												0															
177号竪穴建物	８世紀第１四半期		椀１	1					1				0															
178号竪穴建物	７世紀第３～４四半期												0															
179号竪穴建物	６世紀末～７世紀前半												1	椀・皿			1		1						1			
180号竪穴建物	７世紀前半以前												0						0									
181号竪穴建物	８世紀前半	椀１（東海）											1	椀			1		1					1				
182号竪穴建物	８世紀第４四半期	東海	椀１	1								1	0															
183号竪穴建物	６世紀末～７世紀初頭												0															
184号竪穴建物	６世紀後半												0															
185号竪穴建物	９世紀第３～４四半期												3	椀	1				1				1					
														長頸壺	1				1									1
186号竪穴建物	10世紀第１四半期		皿１、椀２	3					3				5	椀	3	2			5					3			2	
187号竪穴建物	９世紀第２四半期												0															
188号竪穴建物	８世紀第３四半期												0															
189号竪穴建物	８世紀第２～３四半期												0															
190号竪穴建物	６世紀末～７世紀前半												0															
191号竪穴建物	８世紀第１四半期												0															
192号竪穴建物	８世紀第３～４四半期												0															
193号竪穴建物	７世紀後半												0															
194号竪穴建物	８世紀第２四半期												0															
195号竪穴建物	７世紀第４四半期												0															
196号竪穴建物	７世紀第３四半期												0															
197号竪穴建物	８世紀第４四半期～９世紀第１四半期												0															
198号竪穴建物	７世紀後半												0															
199号竪穴建物	８世紀前半												0															
200号竪穴建物	７世紀末～８世紀初												0															
201号竪穴建物	９世紀第３四半期												0															
202号竪穴建物	９世紀第１四半期												0															
203号竪穴建物	８世紀第２～３四半期												0															
204号竪穴建物	８世紀第１四半期												0															
205号竪穴建物	９世紀第４四半期												0															
206号竪穴建物	７世紀前半												0															
207号竪穴建物	７世紀末～８世紀初												0															
208号竪穴建物	９世紀後半												0															
209号竪穴建物	８世紀第３～４四半期												0															
210号竪穴建物	８世紀前半												0															
211号竪穴建物	７世紀前半												0															
212号竪穴建物	７世紀前半												0															
213号竪穴建物	９世紀前半												0															
214号竪穴建物	７世紀後半～８世紀前半												0															
215号竪穴建物	８世紀第４四半期～９世紀第１四半期												0															
216号竪穴建物	７世紀前半												0															
217号竪穴建物	８世紀第１四半期												0															
218号竪穴建物	８世紀第１四半期												0															
219号竪穴建物	９世紀第４四半期												1	平瓶		1			1									1
220号竪穴建物	８世紀第３四半期												0															
221号竪穴建物	９世紀第１四半期												0															
222号竪穴建物	９世紀第１四半期												0															
223号竪穴建物	８世紀前半												0															
224号竪穴建物	７世紀前半												0															

遺構名称	遺構の時期	図示											未掲載														
		緑釉陶器	灰釉陶器	灰釉点数	窯式期								点数	器種	部位					窯式期							
					以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明		口縁部	体・胴部	底部	他	計	以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明
225号竪穴建物	９世紀第３四半期												0														
226号竪穴建物	７世紀第３四半期以前												0														
１号竪穴状遺構	９世紀後半												0						0								
２号竪穴状遺構	７世紀前半												0						0								
３号竪穴状遺構	８世紀第３四半期												0						0								
４号竪穴状遺構	10世紀第３四半期												5	椀		2	1		3								3
														瓶				2	2								2
５号竪穴状遺構	８世紀後半												0						0								
６号竪穴状遺構	10世紀前半		耳皿１、椀１、深椀１	3					1	2			6	椀	2				2				1	1			
														瓶			1	3	4								4
７号竪穴状遺構													1	椀	1				1				1				
９号竪穴状遺構	８世紀前半												8	皿	1				1							1	
														椀	3	1	1		5				1	3		1	
														瓶	1	1			2								2
10号竪穴状遺構													0						0								
遺構外（１号溝）	中世以降		皿１、椀２	3				1	2																		
２号溝	10世紀		椀４	4					1	3			16	皿	2				2					2			
														椀	1	8	1		10					2		8	
														瓶	1	3			4							4	
３号溝	10世紀後半	椀１	皿１、椀７、小椀１、稜椀１	10				1	9				18	椀	8	8			16				1	7		8	
														瓶		2			2							2	
５号溝	10世紀後半		段皿１，椀２	3					3				2	椀	1	1			2				1	1			
６号溝													0						0								
７号溝	10世紀		椀２	2					2				13	椀	7	1	3		11				2	7	1	1	
														瓶		2			2							2	
８号溝	９世紀前半												0						0								
９号溝	10世紀												0						0								
10号溝	中世以降												0						0								
12号土坑													1	皿	1				1					1			
16号土坑													1	椀	1				1							1	
21号土坑		皿１（東海）											2	椀	2				2							2	
26号土坑			小瓶１	1								1	1	瓶			1		1							1	
32号土坑			長頸瓶１	1				1																			
35号土坑		皿１																									
36号土坑													2	皿	1				1					1			
														椀		1			1					1			
39号土坑													1	椀		1			1					1			
42号土坑													1	椀		1			1							1	
45号土坑			輪花皿１	1				1					0														
46号土坑			椀１	1					1				0														
76号土坑													2	椀・皿		2			2							2	
142号土坑													1	椀・皿			1		1								1
156号土坑													1	瓶				1	1								1
169号土坑			皿２、椀７、瓶１	10				3	5		1		1	20	皿	1				1					1			
															椀	10	3	2	1	16					13			3	
															瓶		3			3									3
125号ピット													1	椀・皿	1				1								1	
129号ピット													1	瓶		1			1								1	
141号ピット			椀１	1						1																	
遺構外（149号ピット）	中世以降		浄瓶１	1	1																						
78竪穴周辺													1	瓶		1			1							1	
150竪穴周辺													1	皿	1				1					1			
30竪穴周辺													1	椀・皿		1			1							1	
181竪穴周辺													1	不明		1			1								1
030-020			椀１	1		1							2	皿	1				1							1	
														椀		1			1							1	
040-050		椀１											0														
050-020													1	皿	1				1					1			
060-020													8	椀	3	3			6					3			3
														瓶	2				2							2	

遺構名称	遺構の時期	図示												未掲載															
					窯式期											部位					窯式期								
		緑釉陶器	灰釉陶器	灰釉点数	以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明	点数	器種	口縁部	体・胴部	底部	他	計	以前	K14	K90	光ヶ丘1	大原2	虎溪山1	丸石2	10C.代	不明
060-040														1	瓶		1			1								1	
060-070														1	椀		1			1								1	
070-020														1	椀			1		1				1					
070-030														1	椀			1		1					1				
070-040														15	Ⅲ	1	1	1		3					2			1	
															椀	2		4		6					4			2	
															椀・Ⅲ		4	1		5					1			2	2
															瓶	1				1								1	
070-060			椀２、瓶１	3					2				1	3	椀	1	1			2				1				1	
															瓶		1			1								1	
070-070														34	椀	16	5	2		23					12			11	
															椀・Ⅲ				2	2						1		1	
															瓶		9			9								9	
070-080														11	Ⅲ	1				1					1				
															椀	1		2		3					3				
															椀・Ⅲ				2	2				1				1	
															瓶	1	4			5								5	
080-030														4	椀	1				1								1	
															瓶		3			3								3	
080-050														8	椀	6				6					5			1	
															椀・Ⅲ		2			2								2	
090-040		椀１（東海）												8	Ⅲ	1				1								1	
															椀	1	3	3		7					4			3	
090-050		椀１（東海）												22	Ⅲ	4	4	3	3	14				1	2			11	
															椀	1	3	3		7					4			3	
															瓶		1			1								1	
090-070														2	Ⅲ			1		1					1				
															椀	1				1					1				
090-080														14	椀	5	3	5		13					10			3	
															瓶		1			1								1	
100-040		Ⅲ１、椀１（不明・東海）												41	Ⅲ	2				2								2	
															椀	10		6		16				1	7			8	
															椀・Ⅲ		9	1		10					1			9	
															瓶	2	11			13								13	
100-050		Ⅲ２（東海・京都洛北）												33	Ⅲ	1				1					1				
															椀	12	2	4		18					9	1		8	
															椀・Ⅲ		11			11								11	
															瓶	1	2			3									3
100-060			椀１	1					1					9	椀	4	5			9				1	1			7	
100-070														8	椀	1	1	3		5					3	1		1	
															椀・Ⅲ		3			3								3	
100-080														9	Ⅲ			1		1					1				
															椀	1	1	3		5				1	2	1		1	
															瓶		3			3								3	
110-040														5	椀	3	2			5					3			2	
110-050		椀１（東海９C.）												14	Ⅲ	2		1		3					3				
															椀	5	4	2		11					5			6	
110－060														8	Ⅲ	1				1								1	
															椀	4	3			7					4			3	
110-080														2	椀	1	1			2				1				1	
120-060														1	Ⅲ	1				1						1			
１区遺構外		Ⅲ３、椀６	Ⅲ２、椀６、手付瓶１	9		1		1	6			1		22	Ⅲ	2				2								2	
															椀	6	2	7		15				1	7	1		6	
															椀・Ⅲ	2	2			4								4	
															瓶		1			1								1	
３区遺構外			Ⅲ１	1					1																				
４区遺構外															瓶		1			1								1	

第11表　遺跡ごとの施釉陶器比較

遺跡名	所在地	性　　格	時代	調査面積㎡	緑釉陶器		灰釉陶器	
					出土点数	100㎡あたりの出土点数	出土点数	100㎡あたりの出土点数
米山遺跡	安中市安中	郡家周辺の集落	古墳時代～平安時代	9,577	49	0.5	1,130	11.8
松井田工業団地遺跡	安中市松井田町人見	集落	古墳時代～平安時代	92,960	1	0.000	47	0.001
仁田遺跡	安中市松井田町入山	集落	縄文時代・平安時代	約600	―	―	95	15.8
元総社寺田遺跡	前橋市元総社町	国府域の祭祀	古墳時代～平安時代	4,550	11	0.24	547	12.0
天神遺跡（Ⅱ・Ⅲを含む）	前橋市元総社町	国府域の祭祀、集落	古墳時代～平安時代	2,722	178	6.54	1,965	72.2
稲荷塚道東遺跡	前橋市総社町	国府周縁の集落	平安時代	6,500	0	0	223	3.4
山王廃寺	前橋市総社町	寺院	飛鳥時代創建	1,431	36	2.5		
田口下田尻遺跡遺跡、田口上田尻・下田尻遺跡	前橋市田口町	集落	古墳時代、飛鳥～平安時代	31,115	195	0.63	3,288	10.6
関根細ケ沢遺跡	前橋市関根町	集落	平安時代	9,303	20	0.215	109	1.2
日輪寺観音前遺跡	前橋市日輪寺町	集落	平安時代	9,207	7	0.076	568	6.2
下東西・清水上遺跡	前橋市青梨子町	集落・富豪層の居宅	飛鳥～平安時代	8,225	51	0.6	1,162	14.1
石原東遺跡	渋川市石原	集落・富豪層の居宅、鉄生産	飛鳥～平安時代	4,970	5	0.101	546	11.0
清里・陣馬遺跡	吉岡町陣馬	空間地開発の拠点集落	平安時代	4,130	168	4.1	1,234	29.9
十日市遺跡	吉岡町南下	空閑地開発の集落	平安時代	13,170	0	0	36	0.003
三ツ寺大下Ⅳ遺跡	高崎市三ツ寺	拠点集落（区画施設の内部）	平安時代	3,700	116	3.1	82	2.2
下芝五反田遺跡	高崎市下芝町	空閑地開発の集落	平安時代	9,050	24	0.27	5,436	60.1
関遺跡・上西根遺跡	伊勢崎市本関町他	集落	古墳時代～平安時代	5,669	0	0	16	0.003
波志江中野面遺跡	伊勢崎市波志江町	空閑地開発の集落	平安時代	20,954	4	0.000	24	0.001
波志江西屋敷遺跡	伊勢崎市波志江町	空閑地開発の集落	平安時代	18,215	0	0	25	0.001
福島曲戸遺跡	玉村町福島	集落、富豪層の居宅	平安時代	11,399	117	1.03	2,011	17.6
下原遺跡	長野原町林	山間地開発の集落・交通路の祭祀	平安時代	15,495	0	0	144	0.9
楡木Ⅱ遺跡	長野原町林	山間地開発の集落	平安時代	13,000	0	0	183	1.4

斜数字は報告書に掲載されている個体のみ、未掲載分を含まない。

第２項　凸帯付四耳壺・有鍔台付鉢（火舎）

1　凸帯付四耳壺

米山遺跡からは、出土例の少ない凸帯付四耳壺が31号竪穴建物、159号竪穴建物、遺構外から各１個体、計３個体が出土している。

凸帯付四耳壺の出土例は、2001年に刊行した『舞台遺跡（１）』で綿貫邦男が指摘[注1]して以降、徐々に出土例が増加している須恵器の器種である。さらに2019年に刊行された『冷水牛池遺跡』で大塚昌彦は出土を契機に集成を掲載し、「県内で13遺跡16点が出土しており、焼成や製作技法、年代の検討を行っている。[注2]」さらに近年では吾妻地域からの出土がみられることから、これを加えて、その傾向について検討を行うこととした。

研究略史

凸帯付四耳壺については、以前より長野県内から多く出土例がみられたことで研究が進んでいる。長野県で最初に報告したのは、1968年『信濃考古』25号に桐原健が「松本市中山蟹堀出土の四耳壺」[注3]として執筆したことによるとされている。その後、類例が増加したことで笹山浩によって集成、分類、編成や製作年代、生産をめぐる動向について究明[注4]している。さらに松本平を中心とした

中央道関連の発掘調査成果をもとに小平和夫によって発掘成果をもとにした土器編年を考察する中で凸帯付四耳壺を「須恵器甕Ｄ」に分類し、耳や凸帯の形態からその変遷を示している。笹山・小平の研究では凸帯付四耳壺は概ね９世紀を前後する時期に出現し、10世紀前半代まで存在するとされている[注5]。さらに山田真一によって凸帯に瘤状の耳が貼付される器形の祖型は、８世紀前半代の美濃須衛古窯跡群の岐阜市老洞古窯跡や各務原市稲田山古窯跡に認めることができると指摘し、８世紀中頃から後半に信濃で独自の器形に発展したとされている[注6]。

こうしたなかで笹山が行った分類では、Ａ、Ｂ、Ｃの３形態に分類している。Ａは短頸壺形に胴部上位に耳が貼付され、凸帯は耳より下位に貼付されている。なお、この形態は出土例がわずかなようである。Ｂは広口壺状の形態で胴部上位の肩に若干離して２条も凸帯が貼付され、その凸帯にかかるように耳を貼付されている。ＣはＢと同様に広口壺状の形態の胴部上位の肩に凸帯を貼付し、耳は凸帯にかけるように貼付されている形態で、凸帯付四耳壺の中では最も多くみられる形態である。

小平は耳に開けられた孔には貫通するもの、途中までのもの、孔が無いものがみられ、凸帯も四角形、台形、三角形のものがみられるとしている。

県内の出土例

群馬県内でも最近の発掘成果を含めると第12表のように米山遺跡の他、22遺跡26例の出土がみられる。

このうち、笹山Ａ分類の系譜と考えられる短頸壺に凸帯が貼付された形態が６例みられる。この、Ａ分類に該当する個体では、耳が貼付されているのは福島曲戸遺跡Ａ区496だけである。残りの５個体は耳については不明か、貼付されていないものである。さらに耳が貼付されていないものの中には世良田諏訪下遺跡、石原東遺跡、黒熊中西遺跡、月夜野古窯跡群深沢Ｂ支群のような凸帯に小孔を穿孔したものも存在する。これらの個体が凸帯付四耳壺の系譜なのかは断言できない。

最も多くみられるＣ分類では、全体の形態がわかるものは少ないが、米山遺跡31号竪穴建物30、159号竪穴建物６,福島曲戸Ａ区497、小八木志志貝戸５区48溝32、横壁中村遺跡10区８号竪穴建物33などが口縁部から胴部、底部まで残存しており、その状態から広口壺形態の器形の胴部上位に凸帯を貼付している。

なお、凸帯の貼付位置は胴部中位から上位にかけての稜に近い形状の肩をつくり、胴部最大径もその前後になるものではその肩に相当する部位である。胴部中位から上位にかけて比較的緩やかに変化するものは胴部最大径が比較的中位になるため、胴部上位に相当する部位に凸帯を貼付している。

胴部の整形は概ね叩き締めによる成形が行われ、叩き締めの痕跡がナデ消されているものといないものとがみられる。また、凸帯より下位は叩き締め、上位はロクロ整形によるものがみられる。

凸帯の形態は大部分が断面三角形であるが、福島曲戸遺跡の２例、川福遺跡３号竪穴建物、人見中の條遺跡包含層出土の２例が矩形を呈する。

耳は米山遺跡をはじめ13例で耳部分が残存する。その中で、唯一石川原遺跡出土の個体に貫通する孔がみられる。

出土の傾向

出土遺跡をみると主に県内でも西の古代碓氷郡や吾妻郡にやや多くみられるが群を抜いて多いわけではない。

出土している遺構は、竪穴建物が圧倒的に多く、包含層や遺構外が続く、その中で、月夜野古窯跡深沢Ｂ支群では灰原ではあるが、笹山Ａ分類の凸帯付短頸壺が出土しており県内での生産が裏付けられている。

凸帯付四耳壺が出土している遺構の年代は９世紀後半から10世紀前半にかけてで、長野県での出土例より半世紀ほど遅れて出現し、終焉は同様である。こうしたことから県内での凸帯付四耳壺は信濃の影響を受けたものと考えられる。また、小平が初期の段階に設定している耳の孔が貫通している石川原遺跡６区87号竪穴建物は共伴する土器から９世紀第３四半期に比定されており、県内での出現期にあたる。なお、胎土などから在地産とみられるものも存在することから、長野県域で生産された製品が持ち込まれ、在地でそれを基に生産された可能性は高い。

凸帯付四耳壺の用途

凸帯付四耳壺は、その形態から貯蔵用具であることがわかる。しかし、凸帯や耳が貼付されていない「広口壺」と呼称されている個体も存在することからその用途は特別なことであったと想定するのは容易である。しかし、出土遺構の多くが竪穴建物であることから、用途につい

ての類推は難しいのが現状である。

そうした中において長野県千曲市屋代遺跡群地之目遺跡では、仁和４(888)年５月８日(新暦６月20日)に起きた信濃川の洪水で埋没した水田の畦に沿って灰釉陶器突帯付短頸壺、小瓶、皿、椀、輪花椀、小椀、土師器杯・椀、須恵器凸帯付四耳壺がまとまって出土し、この場で祭祀が行われたことが想定されている。祭祀の状況については報告書では詳細が記載されていない。その後、地之目遺跡の５号畦から出土した灰釉陶器長頸壺や皿、椀などとともに千曲市有形文化財「屋代遺跡群水田遺構出土農耕祭祀遺物群」として指定されている。この指定の審議に際して市議会に提出された調書[注7]によると農耕祭祀についての想定がなされ、凸帯付四耳壺についても「壺に付けられた凸帯は稲魂を閉じ込める縄の象徴と考えられ、水口祭などでまかれる稲籾の一部でつくられた焼米を入れる容器」と想定されている。

農耕祭祀については県内でも古墳時代の畠に土器が集積され、土器の中に石製模造品が入れられている事例[注8]がみられることから、祭祀が執りおこなわれていたことは明確である。水田の祭祀は可能性が指摘されている事例[注9]もみつかっているが、屋代遺跡群のように田植え直前や収穫後の時期に災害に遭うことがなければ祭祀に使用された土器は片づけられて残らないと考えられるため、祭祀の実態については不明である。

凸帯付四耳壺のような特殊な土器については、屋代遺跡群で指摘されているように祭祀に用いられた可能性が高いと考えられるが、民俗事例と発掘調査での事例を結びつけるにはまだ事例も少なく課題も多くある。

また、群馬県内では、こうした出土例も少ないことから、祭祀もより限定されたものであった可能性が想定できる。

凸帯付四耳壺については、出土例が少ないこともあり課題も多くみられる。こうしたことから今後の出土例を注視していきたい。

注

注１　綿貫邦男によって舞台遺跡Ｅ２-205号住居跡(竪穴建物)から凸帯付四耳壺が出土しており、この類例と分布として報告している。

注２　大塚昌彦は2019に刊行した『冷水牛池遺跡』報告書のまとめで三浦京子による集成をもとに凸帯付四耳壺について分析をおこなっている。

注３　『信濃考古』25号は入手が難しかったため、『長野県考古学会誌』51号から引用した。

注４　笹山浩1985「凸帯付四耳壺考」『長野県考古学会誌』51号長野県考古学会より

注５　小平和夫は1990に刊行した「第３章遺構・遺物の考察、第５節　古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４―松本市内その１―総論編』(財)長野県埋蔵文化財センターで凸帯付四耳壺については須恵器甕Ｄとして耳及び凸帯の分類を行い、整形技法や出現、衰退について論じている。

注６　山田真一は1999年に行われた窯跡研究会第２回シンポジウムで「信濃における須恵器生産の展開と窯構造」について発表する中で信濃独自の器形として凸帯付四耳壺を取り上げ、その祖型が美濃須衛に求められることを指摘した。

注７　平成29年３月29日に「屋代遺跡群水田遺構出土農耕祭祀遺物群」の千曲市指定有形文化財の指定について市議会での審議調書として笹山浩氏が作成している。

注８　高崎市箕郷町の下芝五反田遺跡(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『下芝五反田遺跡―古墳時代編―』)のHr-FA下の畠の一角では土器の集積とともに石製模造品が出土し、祭祀が執りおこなわれていたことが知られている。

注９　前橋市二之宮谷地遺跡(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1944『二之宮谷地遺跡』)では台地周縁に水田が検出されている。この水田耕作土からは古墳時代後期から平安時代にかけての土器が多く出土している。これらの土器の大部分は破損などによる投棄されたものとみられているが、その中に須恵器甕(報告書第287図43・44)がAs-B層下水田跡耕作土から２個が並べて置かれた状態で出土しており、水田耕作の祭祀に伴うものと推定されている。

引用・参考文献

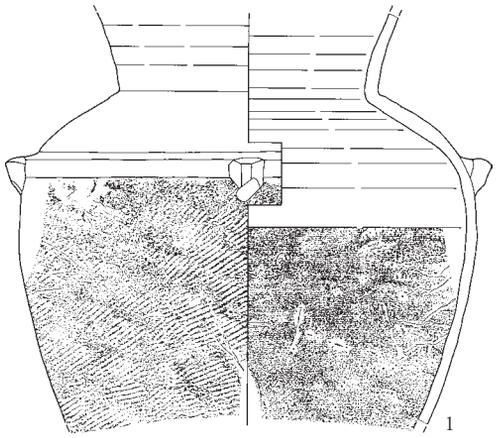
笹山　浩1986「凸帯付四耳壺考」『長野県考古学会誌』51号長野県考古学会
出月洋文1994「平安時代須恵器の流通の一様相―山梨における「凸帯付四耳壺」を中心に―」『山梨考古学論集Ⅲ　山梨県考古学協会一五周年記念論集』山梨県考古学協会
小平和夫1990「第３章遺構・遺物の考察、第５節　古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４―松本市内その１―総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター
山田真一1999「信濃における須恵器生産の展開と窯構造」『窯跡研究会第２回シンポジウム須恵器窯の技術と系譜―豊科、信濃、そして日本列島―発表要旨集』窯跡研究会
尾島町教育委員会1998『世良田諏訪下遺跡』
株式会社　測研2019『冷水牛池遺跡』高崎市教育委員会
群馬県教育委員会1999『前橋城遺跡Ⅱ』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『下佐野遺跡　Ⅱ地区(２)』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『黒熊中西遺跡(１)』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『中里見遺跡群　中里見中川遺跡・中里見根岸遺跡・中里見原遺跡・上里見井ノ下遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『福島曲戸遺跡　上福島遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『小八木志志貝戸遺跡４　２区縄文時代・４～６区縄文時代～平安時代編』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2005『石原東遺跡Ｄ区・諏訪ノ木Ⅴ遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『田口上田尻遺跡　田口下田尻遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2014『横壁中村遺跡(14)』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2016『月夜野古窯跡群深沢Ｂ支群』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『上原Ⅲ遺跡(２)　久々戸遺跡(３)』
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2020『四戸遺跡』
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2020『石川原遺跡(２)』
玉村町教育委員会2009『福島稲荷木遺跡(第１～３次調査)　福島稲荷木Ⅱ遺跡　福島稲荷木Ⅲ遺跡』
千曲市教育委員会2012『屋代遺跡群地之目遺跡２・古道遺跡２』
松井田町教育委員会1990『松井田工業団地遺跡』
松井田町教育委員会2001『人見中の條・人見中の條２遺跡・人見大王寺遺跡・人見正寺田遺跡』
吉井町教育委員会1986『川福遺跡』

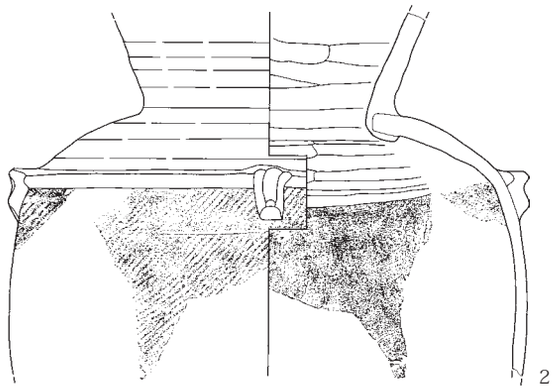
第12表　県内出土の凸帯付四耳壺・凸帯付壺

No.	出土遺跡	遺跡の性格	出土遺構	挿図	形　態	凸帯	外面整形	計測値			
	所在地		遺構の年代	番号	部　位	耳※	内面成形	焼成			
1	米山遺跡 安中市安中	官衙周辺集落	31号竪穴建物	402	広口壺状	三角	ロクロ整形、凸帯下平行叩き痕	頸	13.8	胴	24.4
			９Ｃ.第３四半期	30	口縁部～胴部中位	C	同心円状アテ具痕	還元焔			
2			159号竪穴建物	523	広口壺状	三角	ロクロ整形、凸帯下平行叩き痕	頸	13.4	胴	27.4
			10Ｃ.前半代	6	口縁部～胴部上半	C	同心円状アテ具痕	還元焔			
3			遺構外	593	広口壺状	三角	降灰厚く付着				
				１区 20	胴部片	―		還元焔			
4	舞台遺跡 伊勢崎市三和町	集落・須恵器生産	Ｅ２-205号竪穴建物	203	広口壺状か	？	ロクロ整形	胴	28.0		
			９Ｃ.	1	胴部片	―		還元焔			
5	福島曲戸遺跡 玉村町福島	集落・豪族居宅	Ａ区	166	短頸壺状	矩形	ロクロ整形、胴部回転ヘラ削り	底	17.0	高	35.0
				496	口縁部、胴部、底部	C		軟質、淡青灰色			
6			Ａ区	166	広口壺状	矩形	ロクロ整形	口	30.0		
				497	口縁部、胴部	C		還元焔			
7	福島稲荷木遺跡 玉村町福島	集落	８号竪穴建物	11	広口壺状か	矩形	平行叩き痕				
			９Ｃ.第３四半期	4	胴部片	C		還元焔			
8	田口上田尻・田口下田尻遺跡 前橋市田口町	集落	72号竪穴建物	341	広口壺状か	三角	ロクロ整形、格子目状叩き痕	胴	26.7		
			９Ｃ.後半	1	胴部片	C		還元焔			
9	前橋城 前橋市大手町	集落、駅家	５次24号井戸	272	広口壺状か	三角	平行叩き痕				
			中世	3	胴部片	―		還元焔			
10	冷水牛池遺跡 高崎市冷水町	集落	７号土坑	22	広口壺状か	三角	格子目状叩き				
			８Ｃ.後半～９Ｃ.	13	胴部小片	―	アテ具痕	還元焔			
11			谷	22	広口壺状か	―	格子目状叩き				
				14	胴部小片	―	アテ具痕	還元焔			
12			遺構外	22	広口壺状か	―	格子目状叩き				
				15	胴部小片	―	アテ具痕	還元焔			
13	小八木志志貝戸遺跡 高崎市小八木町	集落・居宅	５区48溝	102	広口壺状	三角	ロクロ整形、格子目状叩き痕	口	20.0	底	11.6
			９Ｃ.後半	32	口縁部・胴部・底部片	C		還元焔		高推	30.2
14	中里見原遺跡 高崎市榛名町	寺院・関連集落	11号竪穴建物	174	広口壺状か	三角	斜格子状叩き	胴	27.2		
			９Ｃ.第３四半期	243	胴部片	C	同心円状アテ具痕	還元焔			
15	川福遺跡 高崎市吉井町	須恵器製作工人集落	土器集中	36ｐ	広口壺状か	三角	平行叩き	底部	20.0	胴	31.2
			８Ｃ.～10Ｃ.	Ｂ-31	底部～胴部	―		還元焔			
16			３号竪穴建物	14ｐ	広口壺状か	矩形	平行叩き痕	凸帯	30.5		
			９Ｃ.後半か	342	胴部片	C	無文アテ具	還元焔			
17	人見中の條遺跡 安中市松井田町	集落	包含層	81	広口壺状か	矩形	平行叩き痕	胴	29.0		
			８Ｃ,～９Ｃ.	42	胴部片	―		還元焔			
18			包含層	81	広口壺状か	矩形					
			８Ｃ,～９Ｃ.	43	凸帯、耳片小片	C		還元焔			
19	人見中の條２遺跡 安中市松井田町		20号竪穴建物	90	広口壺状か	三角	平行叩き痕	胴	24.0		
			９Ｃ.第４四半期	6	胴部片	―	ナデ	還元焔			
20	松井田工業団地遺跡 安中市松井田町	集落	Ｅ-98号竪穴建物	299	広口壺状か	三角	平行叩き	胴	27.0		
			10Ｃ.第１四半期	4	胴部上半	―	アテ具痕	還元焔			
21	四戸遺跡 東吾妻町三島	集落	３区16号竪穴建物	413	広口壺状か	三角	平行叩き				
			10Ｃ.第２四半期	6	胴部小片	―	ナデ	還元焔			
22	上原Ⅲ遺跡 長野原町林	集落	１号竪穴建物	9	広口壺状か	矩形	叩き→ナデ	凸帯	30.0		
			10Ｃ.前半代	11	胴部上位片	―	無文アテ具→ナデ				
23	横壁中村遺跡 長野原町横壁	集落	10区８号竪穴建物	67	広口壺状か	三角	ロクロ整形、凸帯下叩き痕	口	42.8	底	26.0
			９Ｃ．４～10Ｃ，1	33	口縁部～底部	―	同心円状アテ具痕	還元焔		高	33.0
24	石川原遺跡 長野原町川原湯	集落	87号竪穴建物	325	広口壺状か	三角	叩き締め、叩き痕→ナデ消し	胴	25.0		
			９Ｃ.第３四半期	53	胴部上位	A	アテ具痕	還元焔			
25	世良田諏訪下遺跡 太田市世良田町	館(居宅)	館跡	373	有孔鍔付壺	矩形	ロクロ整形、波状文	胴残	28.0		
			９Ｃ.末～10Ｃ.初	43	胴部上位	―		還元焔			
26	石原東遺跡 渋川市石原	集落・居宅か	Ｄ１包含層	30	有孔鍔付短頸壺状	矩形	ロクロ整形				
			８Ｃ.～10Ｃ.	213	胴部上位小片、凸帯に小孔	―		還元焔			
27	下佐野遺跡Ⅱ地区 高崎市下佐野町	集落	５区10号竪穴建物	292	凸帯付壺、頸部、短い口縁部	三角	ロクロ整形、ナデ	口	21.6	胴	36.0
			10Ｃ.初頭	428	口縁部～胴部	―	縦ナデ	酸化焔		高	38.0
28	黒熊中西遺跡 高崎市吉井町	寺院・関連集落	２号基壇建物	57	有孔鍔付短頸壺	三角	ロクロ整形	口	13.5	胴	31.6
			９Ｃ.～10Ｃ.	22	口縁部～胴部、凸帯に小孔	―		還元焔			
29	月夜野古窯跡群深沢Ｂ支群 みなかみ町月夜野	須恵器生産	５号窯灰原	28	有孔鍔付短頸壺	三角	ロクロ整形、ヘラナデ	口	15.0	胴	34.4
			９Ｃ．３～10Ｃ．1	129	口縁部～胴部、凸帯に小孔	―	ヘラナデ	還元焔			

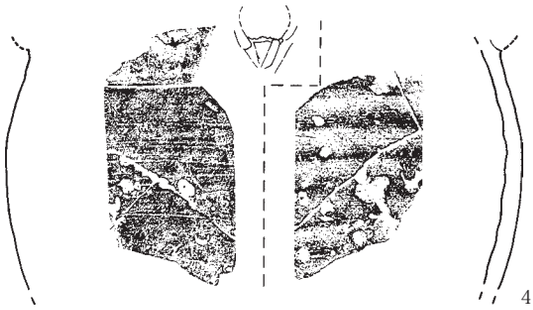
※耳凡例　A:上下に貫通する孔、B:途中までの穿孔(該当無)、C:孔が無いもの

米山遺跡

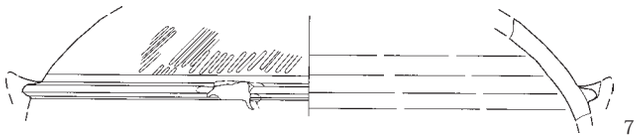




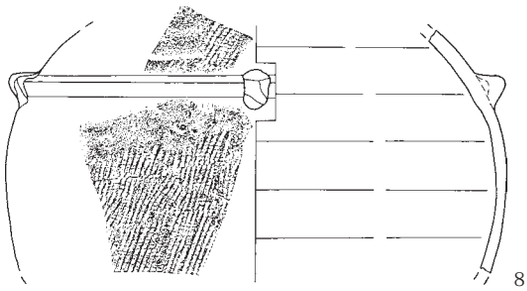
舞台遺跡



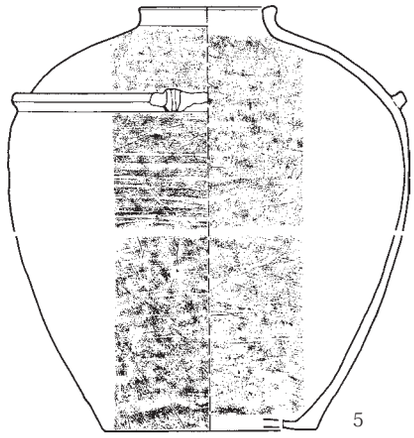
福島稲荷木遺跡

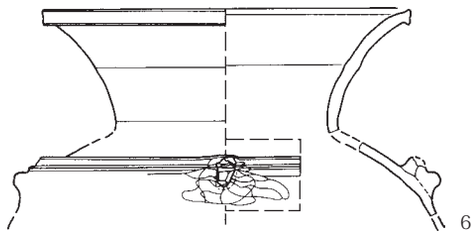


田口上田尻・下田尻遺跡

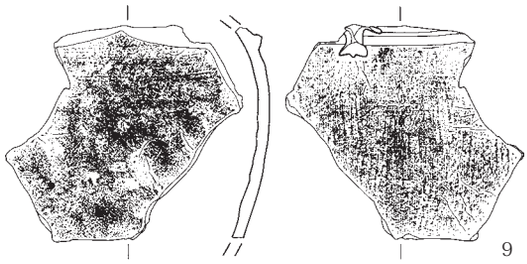


福島曲戸遺跡

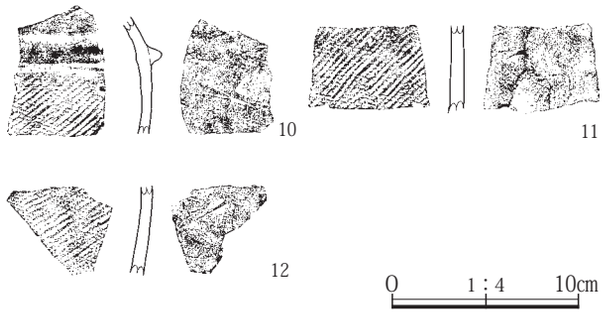




前橋城遺跡

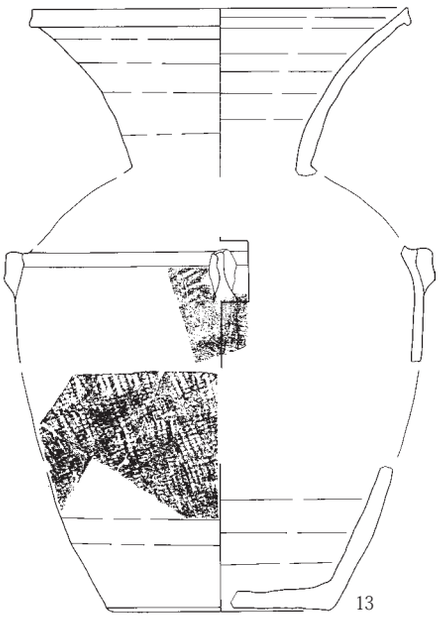


冷水井泄遺跡

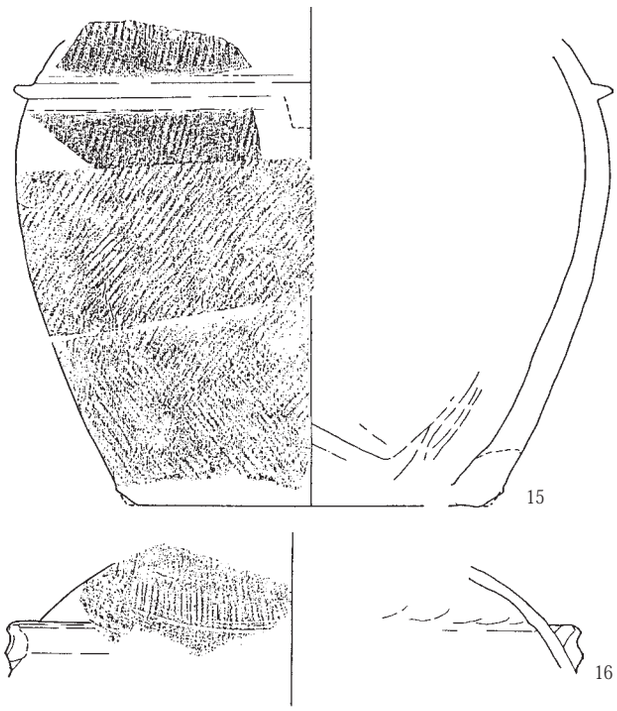


第352図　県内出土の凸帯付四耳壺集成（１）

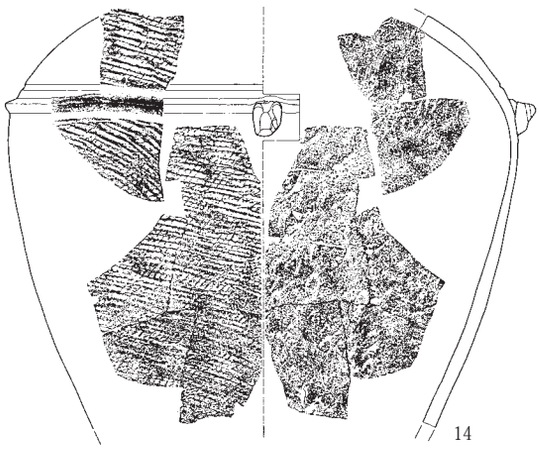
小八木志々貝戸遺跡



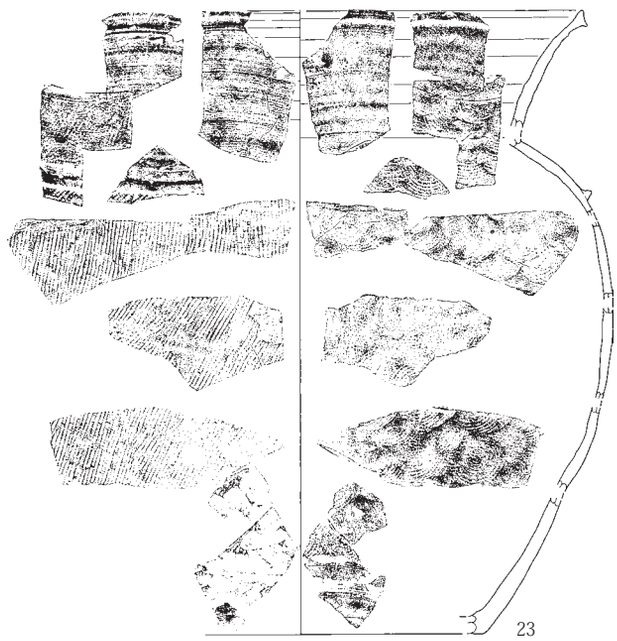
川福遺跡



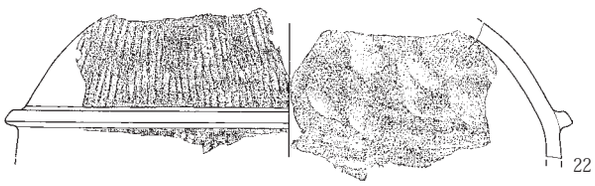
中里見原遺跡



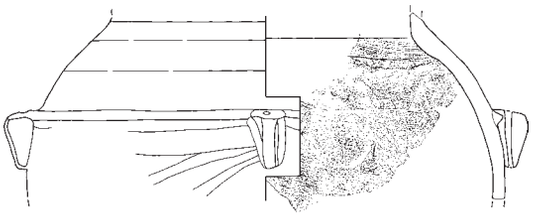
横壁中村遺跡



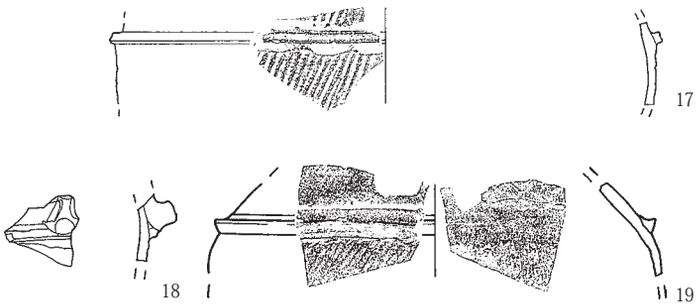
上原Ⅲ遺跡



石川原遺跡



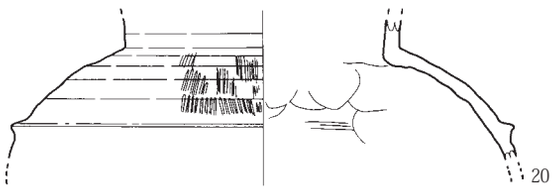
人見中の條遺跡



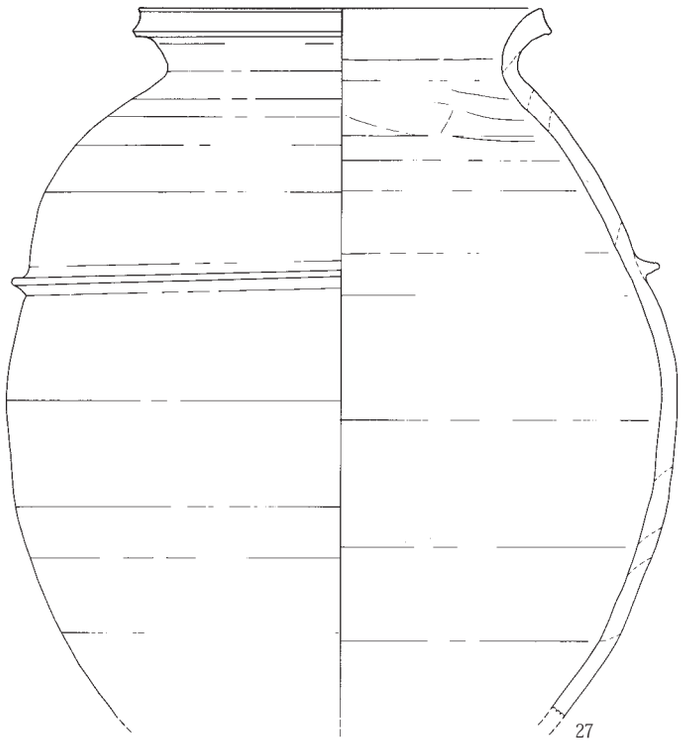
0　1：4　10cm

第353図　県内出土の凸帯付四耳壺集成（２）

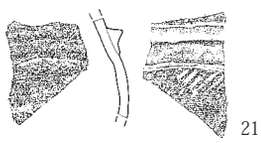
松井田工業団地遺跡



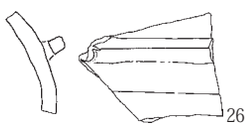
下佐野遺跡　Ⅱ地区



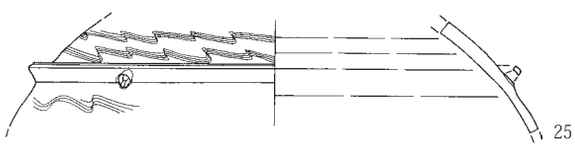
四戸遺跡



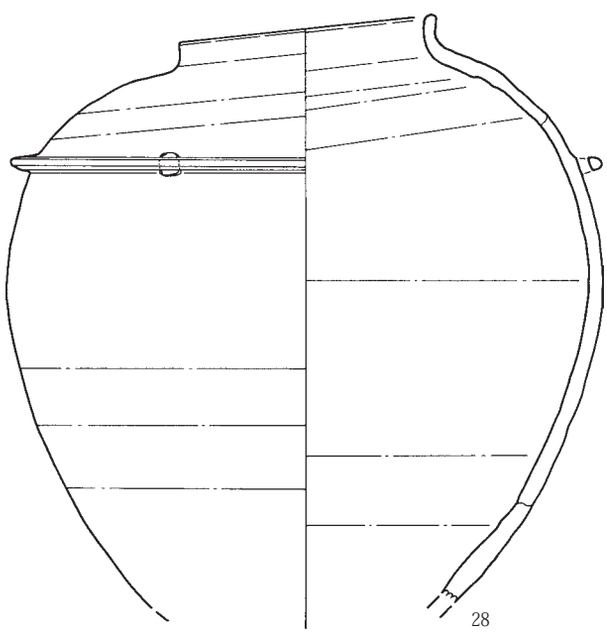
石原東遺跡



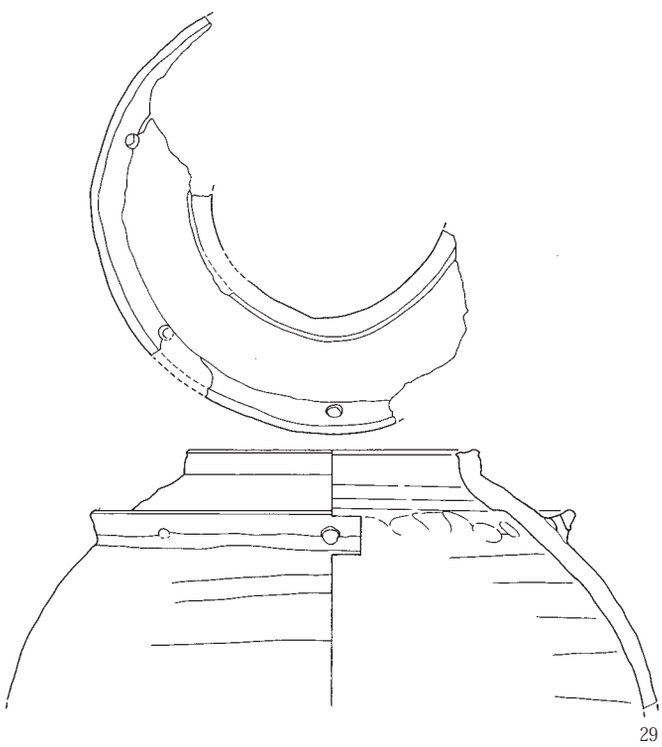
世良田諏訪下遺跡



黒熊中西遺跡



月夜野古窯跡群深沢Ｂ支群



0　1：4　10cm

第354図　県内出土の凸帯付四耳壺集成（３）

２　有鍔台付鉢(火舎)

本遺跡の10世紀第２～第３四半期に比定できる165号竪穴建物から出土している有鍔台付鉢(火舎)も類例の少ない遺物の一つである。そして今回この有鍔台付鉢を「火舎」と判断したが、その根拠を示すことにした。また、火舎が竪穴建物から出土した背景について出土例から検討することとした。

有鍔台付鉢は玉村町福島曲戸遺跡[注1]や前橋市元総社蒼海遺跡群[注2]からも出土しており、希少な遺物であることから報告のなかで集成を行っている。これによると前記の２遺跡の他には高崎市田端遺跡、みなかみ町月夜野古窯跡群深沢Ｂ支群、渋川市石原東遺跡で出土が確認されている。これらの有鍔台付鉢は形態から器種名称が付けられているが、その用途等については検討されていない。

有鍔台付鉢の出土例

高崎市田端遺跡は、高崎市阿久津町・木部町に所在する集落遺跡で、７世紀後半から８世紀前半には隣接地に寺院の存在が想定されている。有鍔台付鉢はＢ区３号住居跡(竪穴建物)下土坑と称される井戸から脚部下半と鉢部の体部から口縁部の2/3ほどが欠損した個体(掲載No.22)が出土している。この個体は口径36.5㎝、鉢部底径21.4㎝を測る。そして口縁部下と底部に断面三角形の凸帯が貼付され、底部中央に３㎝前後の間隔で小孔が４箇所に穿孔されている。また、脚部は二つ一組一対になるように方形の窓状の切り込みが施され、その上位には２本の線刻による波状文が施されている。この波状文は重なるように施文されている。また、二次被熱や煤の痕跡が認められている。この鉢の年代観については重複関係にある３号住居跡が10世紀前半代に比定され、鉢と同じ層位からは９世紀後半代の土師器甕が出土していることから９世紀後半代と想定できる。

玉村町福島曲戸遺跡は、玉村町福島に所在する集落遺跡で８世紀から10世紀にかけての竪穴建物、掘立柱建物が検出され、多くの緑釉陶器や灰釉陶器が出土していることから、９世紀から10世紀にかけての富豪層居宅の存在が窺える。有鍔台付鉢[注3](無鍔３点も含む)は竪穴建物や掘立柱建物が検出されたＡ区の掘立柱建物や溝、包含層から12点が出土している。そのうち、９点には底部に凸帯が貼付され、さらに５点には内面の底部周縁に穿孔がみられる。また、２点は口縁部から脚部まで残存する個体であるが、底部に凸帯や内面の穿孔はみられない。福島曲戸遺跡では台部の波状文や線刻による装飾が施された個体は確認されていない。なお、出土した遺構は共伴する遺物から11号掘立柱建物が10世紀前半代、45号溝が９世紀後半から10世紀初頭、54号溝が10世紀前後の年代が想定できる。なお、第355図では破片の掲載は省略した。

元総社蒼海遺跡群(103)は、前橋市元総社町に所在する上野国府西側に展開する工房などを含む国府関連の集落遺跡である。有鍔台付鉢はＨ－６号竪穴建物から出土している。Ｈ－６号竪穴建物は共伴する土器から９世紀末から10世紀前半代に比定できる。有鍔台付鉢は、竪穴建物北東部の床面からの出土である。残存は台部上半から底部、体部の下半にかけてである。台部と底部の接合部には凸帯が巡る。さらに台部には田端遺跡のものと同様に方形の切り込みがみられ、上位には線刻による装飾が施されている。

月夜野古窯跡群深沢Ｂ支群は、みなかみ町月夜野に所在する古代の須恵器生産に伴う窯跡である。窯跡は出土している須恵器から９世紀後半から10世紀初頭に比定されている。有鍔台付鉢は２号窯跡から出土しており、台部から底部が残存している。そして底部周縁には凸帯が貼付され、台部には１条の波状文が２段施されている。この他、鉢身口縁部とみられる個体も出土している。

石原東遺跡は渋川市石原に所在する。発掘調査では竪穴建物12棟が検出されている他は土坑が１基だけであるが、集落の東側斜面には大量の遺物が出土した包含層が存在している。この包含層からは、大量の須恵器杯・椀の他に500点を超す施釉陶器や鉄生産関連の遺物が出土している。こうしたことから鉄生産に関わった富豪層の居宅の存在が想定されている。

ここでは底部から体部、脚部の上位の破片が出土しており、「有孔鍔付鉢」と呼称されている。他の遺跡から出土した個体と同様に鉢部に台部を貼付し、その後に断面三角形の鍔を貼付したことが確認できる。そして底部中程には穿孔が１箇所確認できることから田端遺跡出土の個体と同様な穿孔が施されているとみられる。

以上のように、米山遺跡を含めて18例の有鍔台付鉢の出土例がある。これらの個体は比較的高い台部を有し、

平底、体部から口縁部は直線的に開く形態である。大きく分類すると底部周縁の凸帯の有無、台部に窓状の切り込みが施されているもの、底部に穿孔の有無によって分類が可能である。

有鍔台付鉢と火舎

こうした平底で、体部から大きく開く体部・口縁部をもち、底部に台や脚を有する鉢の例をみると、前橋市鳥羽遺跡遺跡Ⅰ52号竪穴建物59、東京都府中市武蔵国府M28－SI ４号竪穴建物５、茨城県石岡市茨城廃寺３次調査SD0304(SD0401)27、神奈川県平塚市高林寺遺跡SI08竪穴建物118(SD14溝)、SD13溝417の火舎があげられる。これらのうち、鳥羽遺跡、武蔵国府、茨城廃寺の個体には獣脚が貼付され、高林寺遺跡の２点はともに長方形の粘土板を脚として３方に貼付している。

鳥羽遺跡は上野国府の西に位置し、元総社蒼海遺跡群とは隣接する。調査では神社や大規模な鍛冶工房などが検出され、工房や祭祀遺構を含む国府関連の集落と想定されている。出土遺構はⅠ52号竪穴建物で、共伴する遺物から10世紀前半代に比定されている。この個体は鉢部上半を欠くが底径20㎝、高さ６㎝の獣脚が鉢部底部に貼付されている。また、内面には自然吸炭が認められている。

武蔵国府関連遺跡は東京都府中市に所在する国府関連遺跡として調査が行われている。火舎が出土したのはM28SI ４号竪穴建物とされている、詳細については報告書の入手ができなかったため不明[注4]である。口径26㎝、底径20㎝、器高12.5㎝、鉢部の高さ５㎝を測り、底部から体部にかかるように獣脚が貼付されている。

茨城廃寺は茨城県石岡市に所在する７世紀末に創建され、10世紀後半に廃絶した寺院である。出土遺物に「茨木寺」の墨書がみられることから遺跡名もこの名称が与えられている。火舎を出土した遺構はSD304号・401号溝で８世紀後半に掘削され、９世紀前半には遺物が一括投棄されて廃絶したとみられる。ここから出土した火舎は、口縁部は口径36㎝、底径26㎝、器高15㎝、身の高さ6.5㎝を測り、３足の獣脚が貼付されている。口縁部が水平に近い状態で外反している。この形態は、奈良三彩の火舎と同様な形態を示すことから８世紀代に制作された可能性が窺える。

神奈川県平塚市高林寺遺跡は相模国府政庁の西に位置し、掘立柱建物や竪穴建物が検出され、「政所」や「曹司」等の墨書土器が出土している。火舎を出土した遺構の詳細は不明であるが、SI08号竪穴建物は出土遺物から９世紀代、SD13号溝は９世紀後半から10世紀前半代に比定できる。SI08号竪穴建物118の火舎は口径35㎝、底径21㎝、器高15㎝、鉢部の高さ9.5㎝を測り、幅７㎝、長さ８㎝の粘土板をハの字状に開くように鉢身底部端の３方に貼付されている。SD13号溝417の火舎は口径36㎝、底径19㎝、器高15.5㎝、鉢部の高さ10㎝を測り、幅６㎝、長さ７㎝の粘土板をSI08号竪穴建物118と同様に貼付している。高林寺遺跡の２点はともに平面形態が楕円形を呈しているとされている。

これらの個体はそれぞれの地域や年代によって多少の相違がみられるが、低い器高で台部または脚部と鉢部の高さが同様である。そして被熱痕や煤の付着痕から「火舎」として考えられている。

この他、火舎の出土例は黒熊中西遺跡１号テラスが挙げられる。黒熊中西遺跡は高崎市吉井町に所在し、丘陵の斜面に基壇建物を配置した寺院で、10世紀前半に創建され、11世紀代に廃絶したとされている。１号テラスには７号建物や相輪跡とみられる特殊遺構や竪穴建物が検出されている。７号建物は出土遺物から10世紀後半代に比定できる。火舎は小片ではあるが、鉢部の口縁部から底部までが残存しており、口縁部は花弁状の凹凸があり、口縁部から体部に短い棒状の凸帯が貼付される装飾が施されている。また、底部には脚部が貼付された痕跡が残る。

出土の背景

火舎は日本考古学事典によると「口縁部が大きく外反した盤形の体部(灰盤)を３本ないし５本の獣脚で支えた暖房具。中国唐代に起源し、奈良正倉院の金銅製獣脚を備えた白石(大理石)火舎(中倉)・金銅火舎(中倉)が有名である。８～10世紀には奈良三彩・須恵器・灰釉陶器に同型品がある。大型品は実用だが、奈良三彩のなかにはミニチュアもある。以下略」とされている。米山遺跡をはじめとする有鍔台付鉢は当初、田端遺跡や元総社蒼海遺跡群(103)のように台部に切り込みを入れ、高林寺遺跡のような脚部を表現していたが、その後台部を全周させるようになったと想定できる。これは有鍔台付鉢の年代観が９世紀後半から10世紀代と下ることによる簡素化

によるものと考えられる。

火舎を出土した遺跡は、黒熊中西遺跡や田端遺跡、茨城廃寺などの寺院、寺院に隣接する集落。元総社蒼海遺跡群や鳥羽遺跡、武蔵国府関連遺跡、高林寺遺跡などの官衙関連集落、福島曲戸遺跡、石原東遺跡の富豪層居宅、月夜野古窯跡群の生産地などに限定されており、庶民生活では使用されるものではなかったことがわかり、その所有も限られた階層であると考えられる。こうしたことから、米山遺跡165号竪穴建物からの出土は、遺跡が郡衙関連集落[注5]と想定できることやこの竪穴建物に居住していた人物が庶民ではなく官人であったことが想像できる。また、出土した165号竪穴建物は10世紀第２～３四半期に比定できることから、生産からこの竪穴建物に持ち込まれるまでには時間的な経過があった可能性がある。なお、米山遺跡からは今回検討した有鍔台付鉢の火舎の他に、169号土坑からは「類似した火舎」で検討した獣脚付火舎の獣脚が出土していることを付記しておく。

注

注１　原　雅信・石川雅俊2002「６．調査のまとめｃ．古代の遺物についてウ．有孔鍔付鉢」『福島曲戸遺跡　上福島遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

注２　高橋実果2016「第４章まとめ第２節Ｈ－６出土有鍔台付鉢について」『元総社蒼海遺跡群(103)』前橋市教育委員会

注３　報告書では「有孔鍔付鉢」と呼称している。鍔が貼付されていない形態は「台付き鉢」と呼称している。

注４　考古学から古代を考える会2000『古代仏教遺物集成・関東―考古学の新たなる開拓をめざして―』の東京都４、獣脚を参考にした。

注５　米山遺跡の南東側には、安中市教育委員会等が2001年に発掘調査をした植松・地尻遺跡がある。発掘調査では７世紀後半代の区画施設とそれに伴う掘立柱建物群、古墳時代後期の竪穴建物等が確認され、出土遺物に「評」と刻書された須恵器杯蓋が出土しており、古代碓氷評家の存在が想定されている（安中市埋蔵文化財発掘調査団編2005『植松・地尻遺跡―店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』）。

参考引用文献

巽淳一郎2002「火舎」『日本国古学事典』三省堂
考古学から古代を考える会2000『古代仏教系遺物集成・関東』
愛知県陶磁資料館1998『日本の三彩と緑釉―天平に咲いた華―』
石岡市教育委員会2018『茨城廃寺跡』
高林寺遺跡発掘調査団1985『四之宮高林寺Ⅱ』平塚市教育委員会
平塚市遺跡調査会1988『諏訪前Ｂ・高林寺』平塚市遺跡調査会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『鳥羽遺跡Ｇ・Ｈ・Ⅰ区』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『田端遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『黒熊中西遺跡（１）』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『福島曲戸遺跡　上福島遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2005『石原遺跡Ｄ区・諏訪ノ木Ⅴ遺跡』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2016『月夜野古窯跡群深沢Ｂ支群』
歴史考房まほら2016『元総社蒼海遺跡群(103)』前橋市教育委員会

第２節　古墳時代～飛鳥・奈良・平安時代の集落変遷

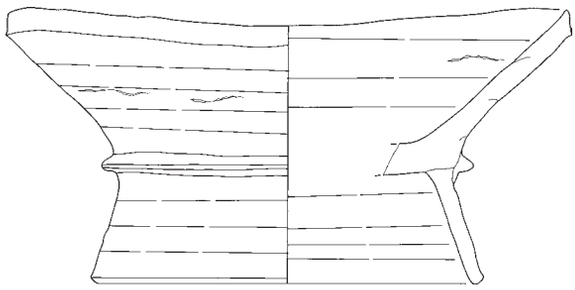
米山遺跡では、224棟の竪穴建物と１棟の掘立柱建物、８基の竪穴状遺構、58基の土坑など古墳時代～飛鳥・奈良・平安時代の遺構を多く検出し、竪穴建物を主体とした集落遺跡であることが判明した。検出した竪穴建物の存続年代については、概要で記載したように編集者が過去に実施してきた土器編年や変遷の成果を援用した。そのため、出土している土師器甕のうち共伴する土器から９世紀後半から10世紀前半に該当するとみられるものに今まで例をみない胴部が縦方向のヘラ削りによる整形やロクロ成形後頸部下をナデのみの整形、その下の胴部をヘラ削り整形によるものについて十分な検討を行うことができなかったなどの不備がある。

集落における竪穴建物の推移は第13表に示したものを第357図～362図に提示した。米山遺跡では古墳時代前期前葉に調査対象地内で竪穴建物が２棟構築され、集落が構成されている。その後、小規模な集落が１世紀半ほど継続的に営まれている。その分布は各時期の棟数が少ないのと出土遺物がほとんどないため細分ができないなど不明確な点があるが、４世紀前半には１区調査区（以後、調査区を省略）の南側に134号竪穴建物と144号竪穴建物、32号竪穴建物、107号竪穴建物、122号竪穴建物の２グループが構成される。４世紀後半では24号竪穴建物、64号竪穴建物、156号竪穴建物で１グループが構成されるとみられる。ただし、４世紀代では半世紀ごとの細分ができない竪穴建物が６棟あり、これがどの時期に属するかによって様相が異なるとみられる。古墳時代中期５世紀代には１世紀ほどの間一時的であるが、集落が営まれていない。

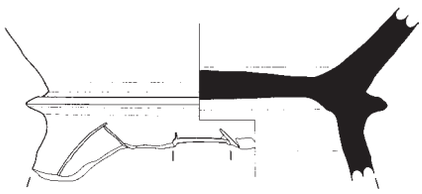
その後、１世紀ほどの間隔をあけて古墳時代後期、６世紀になると再び前期と同様に小規模な集落が営まれる。この時期は前半、後半を通して１区の北寄りにまとまる傾向が見られる。この時期は規模のある竪穴建物は一定の間隔をもって構築されており、黒井峯遺跡や西組遺跡でみられる大型の竪穴建物と平地建物と園地などを生け垣で囲んだ屋敷的様相が米山遺跡でも窺える。

６世紀後半以降は７世紀、８世紀と竪穴建物の棟数をやや増加させながら安定的に営まれている。７世紀前半は１区の北側にまとまるとともに台地上の３区や４区に

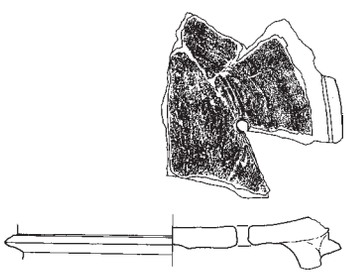
米山遺跡



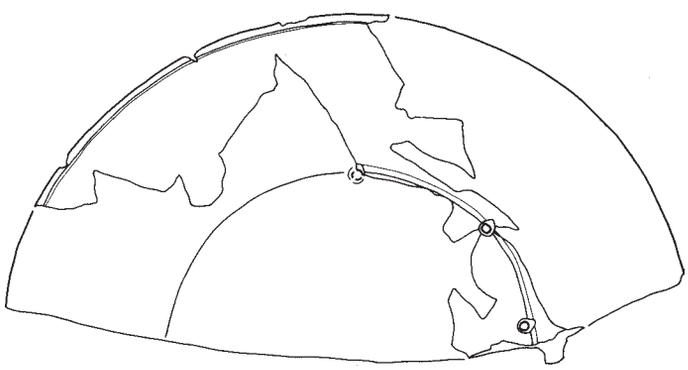
元総社蒼海遺跡(103)

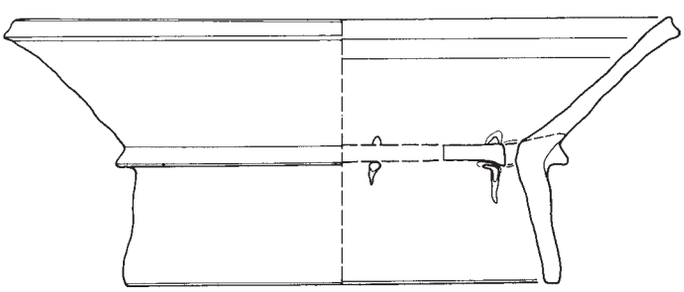


石原東遺跡

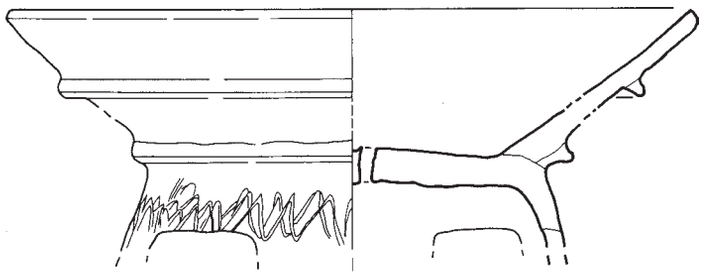


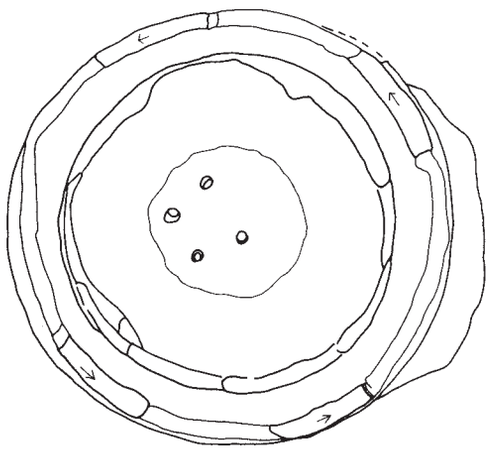
福島曲戸遺跡

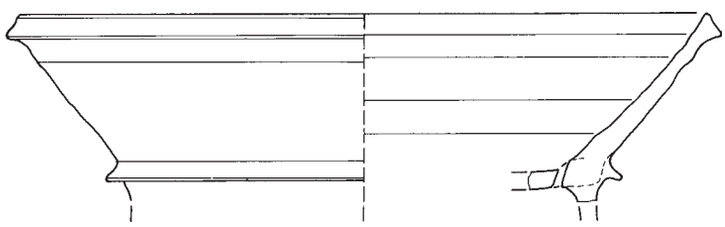


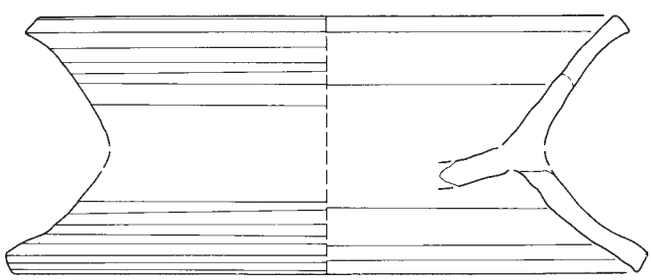


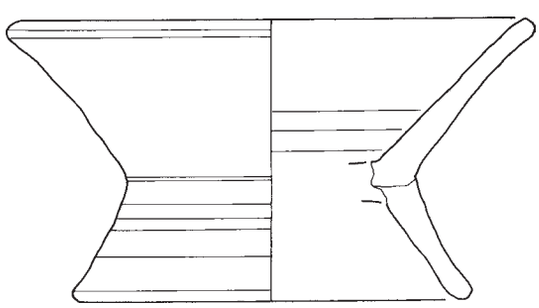
田端遺跡







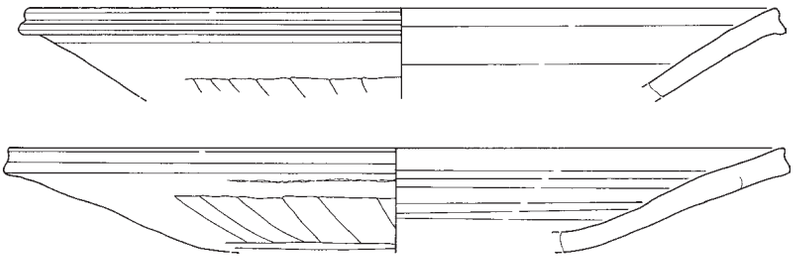


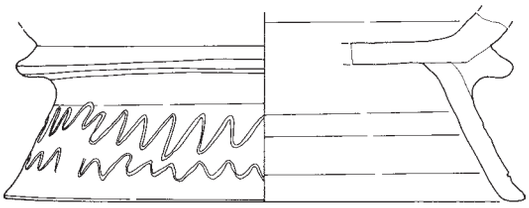


0　1：4　10cm

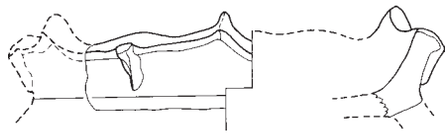
第355図　県内出土の有鍔台付鉢(火舎)

月夜野古窯跡群深沢Ｂ支群

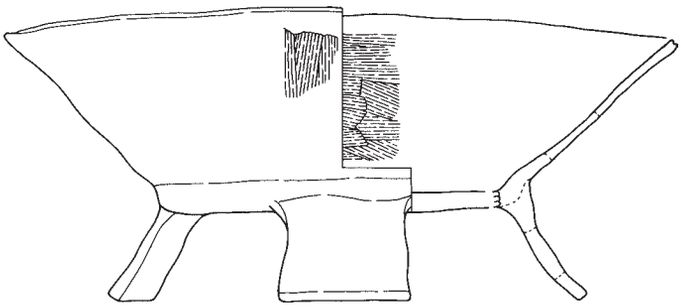


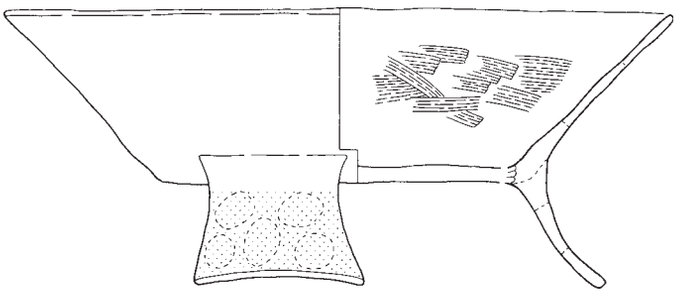


黒熊中西遺跡

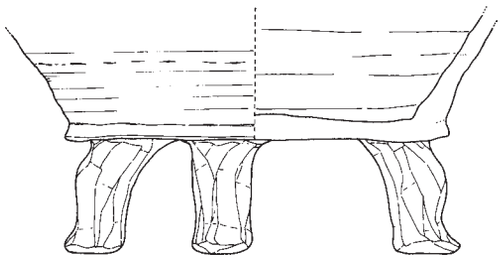


高林寺遺跡

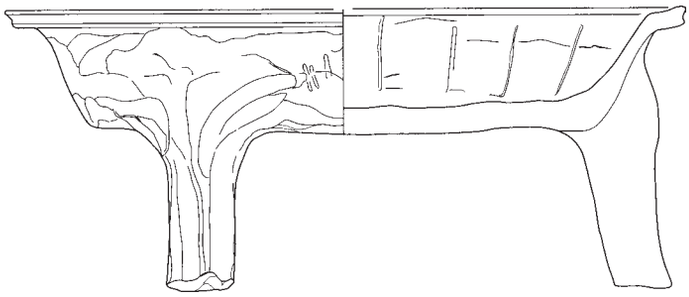




鳥羽遺跡



茨城廃寺



0　1：4　10cm

第356図　県内出土の有鍔台付鉢(火舎)と火舎

も竪穴建物が構築されるが、台地下に比べると閑散とした状態である。後半では１区の北側だけでなく、中ほどから南寄りにも構築されるようになる。

８世紀は１区では今までの北寄りから、中程、南寄りと１区の中でもやや標高の高い西寄りに竪穴建物が構築されている。そして３区や４区でも竪穴建物が増加する。竪穴建物の分布をみると前半、後半とも数棟がまとまって分布する様相がみられる。この数棟のまとまりが郷戸を構成していた可能性も想定できるのではないだろうか。

平安時代になると９世紀前半は、さらに竪穴建物が増加し、９世紀後半には倍近くまで増加する。前半は１区では調査区の東側と南側にまとまりがみられる。後半は１区では全体的に竪穴建物が展開するが、台地上では南側に偏よりがみられた。

10世紀前半は、減少に転じ、台地上では確認できず、１区だけにみられた。その分布は北側に偏り、後半にはさらに減少するとともに北西部に集中する傾向がみられる。そして、10世紀末には、調査区内で竪穴建物が構築されていない。

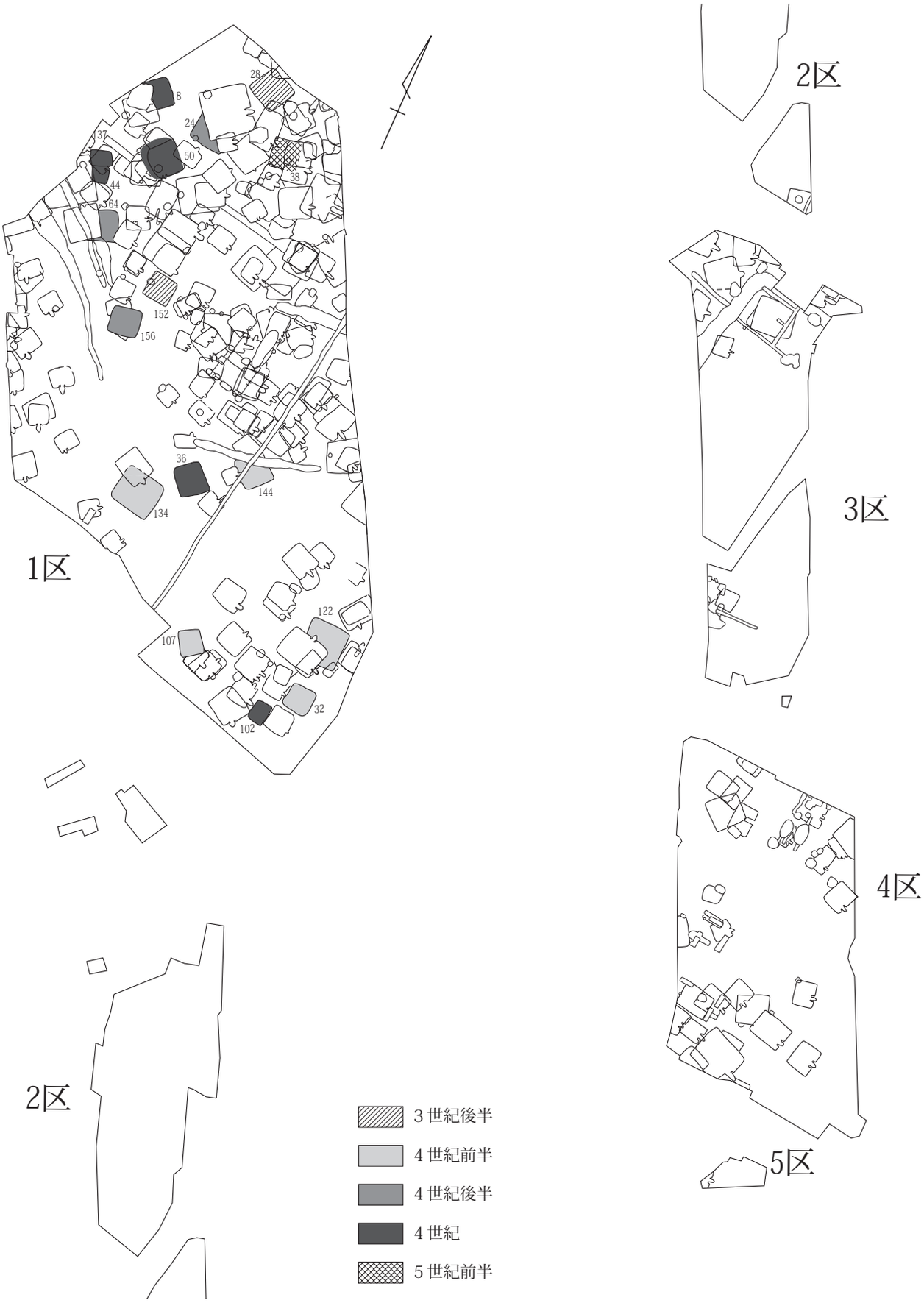
こうした、集落の変遷、６世紀以降の様相は、周辺の植松・地尻遺跡などと同様であるとみられる。古代碓氷郡の集落については発掘調査に偏りがあるため明確ではないが、古墳時代中期から後期初頭にかけては、西南西3.0㎞に存在する簗瀬二子塚の周辺に展開していたと想定できる。その後、６世紀後半から７世紀には米山遺跡が存在する上位河岸段丘に移ったとみられる。この背景には、植松・地尻遺跡に評衙または評衙相当施設が想定されていることから、この地域の豪族が古代碓氷郡での覇権を掌握したことによって集落の主体が移ったとことが想定できる。そして７世紀後半以後は郡衙の周辺集落として郡衙機能を補完していたとみられる。

なお、米山遺跡では、平安時代前期９世紀前半の竪穴建物棟数は、８世紀後半より増加している。こうした様相は県内の東毛から中毛地域の集落遺跡とは異なる傾向である。東毛から中毛地域では、弘仁９(818)年の地震による影響でほとんどの集落が減少していることがわかっている。これに対して米山遺跡では、竪穴建物の棟数が増加していることから、弘仁９年地震による被害は少ないか、ほとんど無かったとみられる。

第13表　竪穴建物時期別一覧

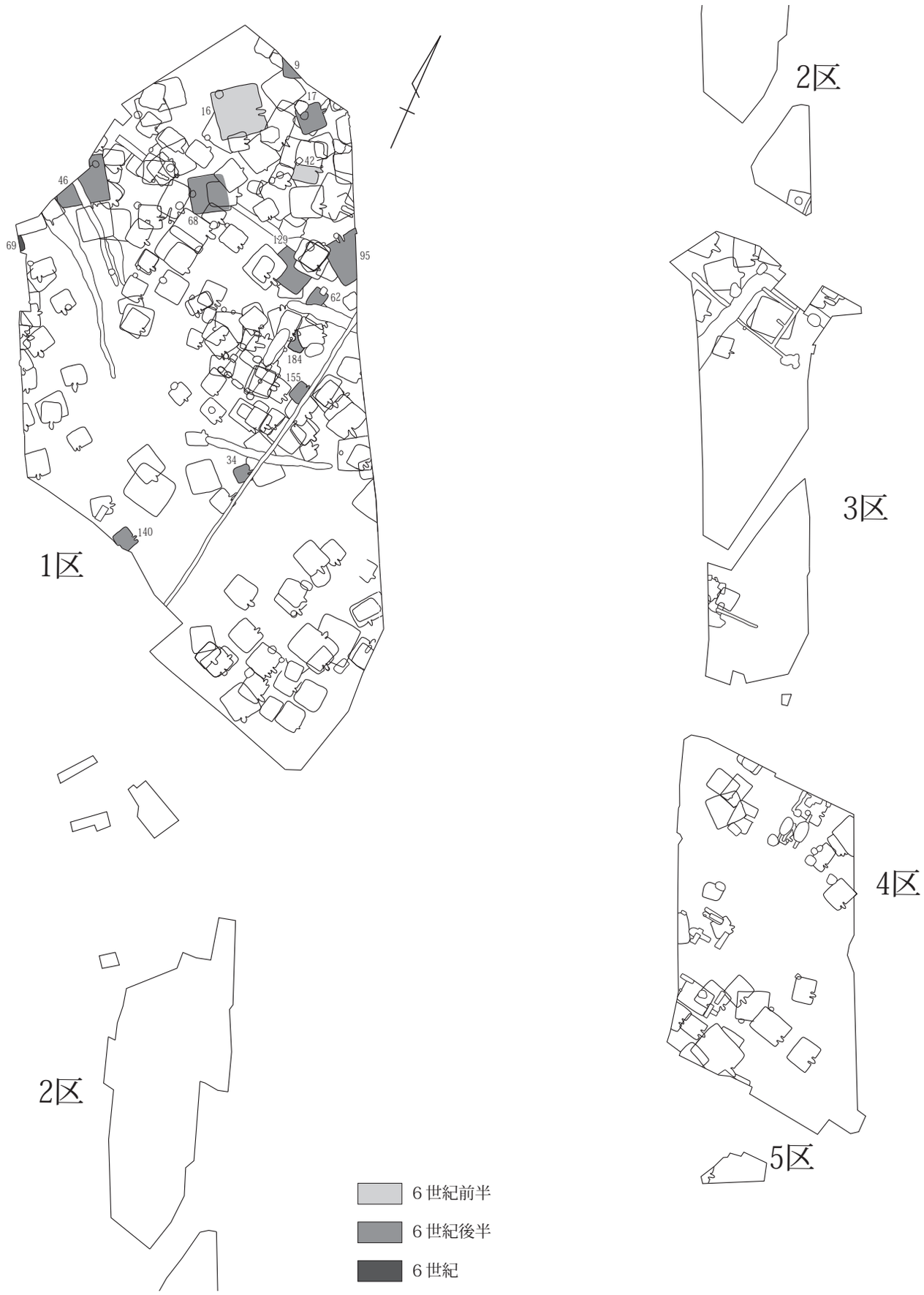
時　期	１区調査区	棟数	２～５区調査区	棟数	合計棟数
３世紀後半	28、152、	2			2
４世紀前半	32、107、122、134、144、	5			5
４世紀後半	24、64、156、	3			3
４世紀代	８、36、44、50、102、137、	6			6
５世紀前半	38、	1			1
５世紀後半					
５世紀代					
６世紀前半	16、42、	2			2
６世紀後半	９、17、34、46、62、68、95、129、140、155、184、	11			11
６世紀代	69	1			1
７世紀前半	５、11、35、39、47、52、63、70、176、179、180、183、	12	190、206、211、212、216、224、226	7	19
７世紀後半	14、29、48、55、58、60、61、65、87、133、138、148、172、178	14	193、195、196、198、	4	18
７世紀代					
８世紀前半	21、80、83、86、93、120、124、127、136、141、162、168、171、177、181、	15	191、194、199、200、204、207、210、214、217、218、223	11	26
８世紀後半	20、23、77、81、84、92、110、113、115、117、128、139、163、167、182、	15	188、189、192、203、209、220、	6	21
８世紀代	121、169	2			2
９世紀前半	４、10、26、76、97、101、105、106、109、112、118、119、125、126、130、143、160、164、166、187	20	197、202、213、215、221、222	6	26
９世紀後半	１、13、22、25、27、30、31、43、57、59、66、67、72、78、79、82、89、90、91、94、96、98、99、100、103、104、108、111、114、116、135、147、153、154、157、158、170、173、185	39	201、205、208、219、225	5	44
９世紀代					
10世紀前半	２、15、18、19、40、45、49、54、56、71、73、74、75、85、88、123、142、146、151、159、161、165、186	23			23
10世紀後半	３、６、７、12、33、41、51、53、131、132、149、150、174、175、	14			14
10世紀代					
合計		185		39	224

３世紀後半～４世紀～５世紀前半



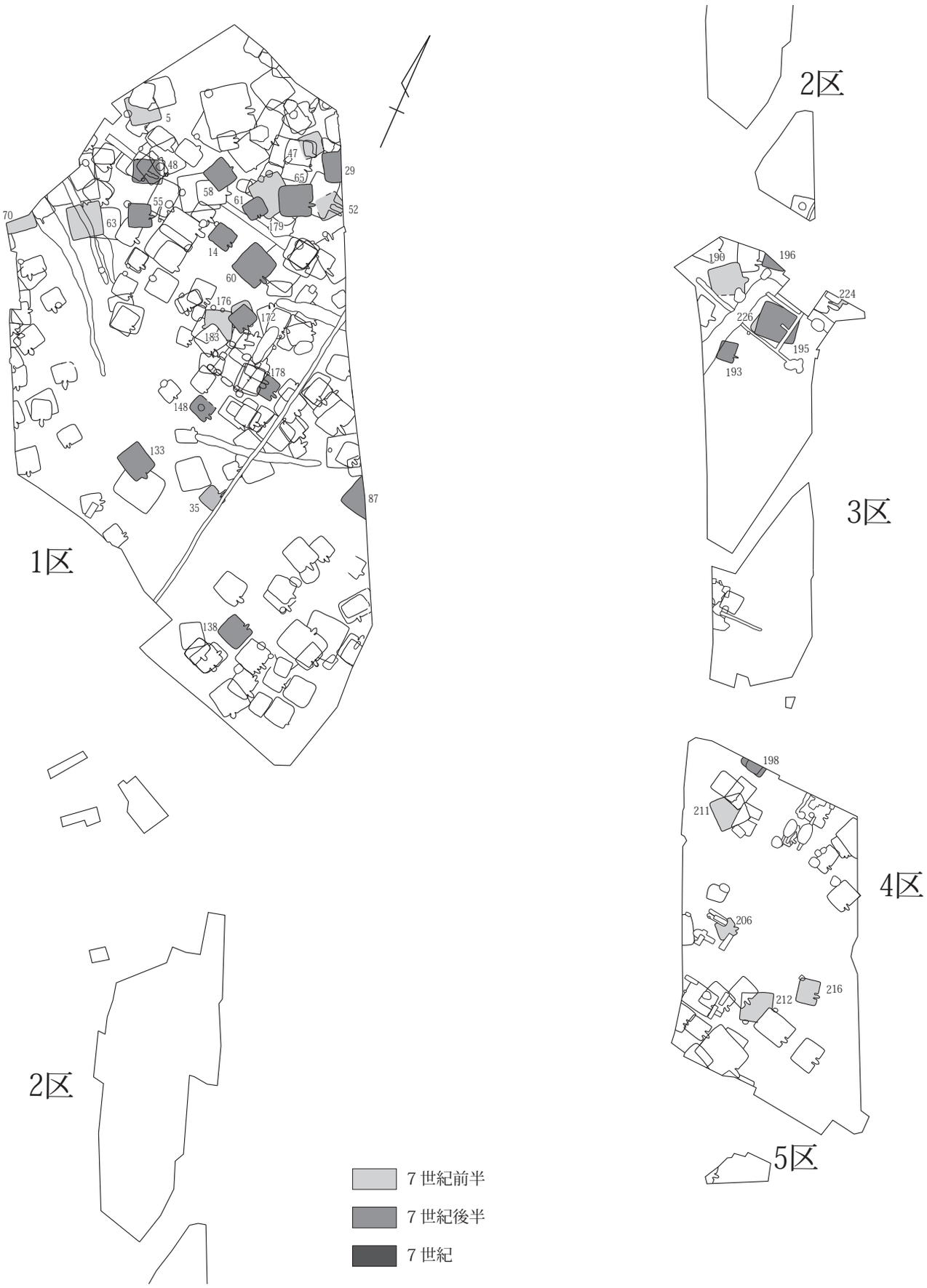
第357図　集落（竪穴建物）変遷図（１）

６世紀



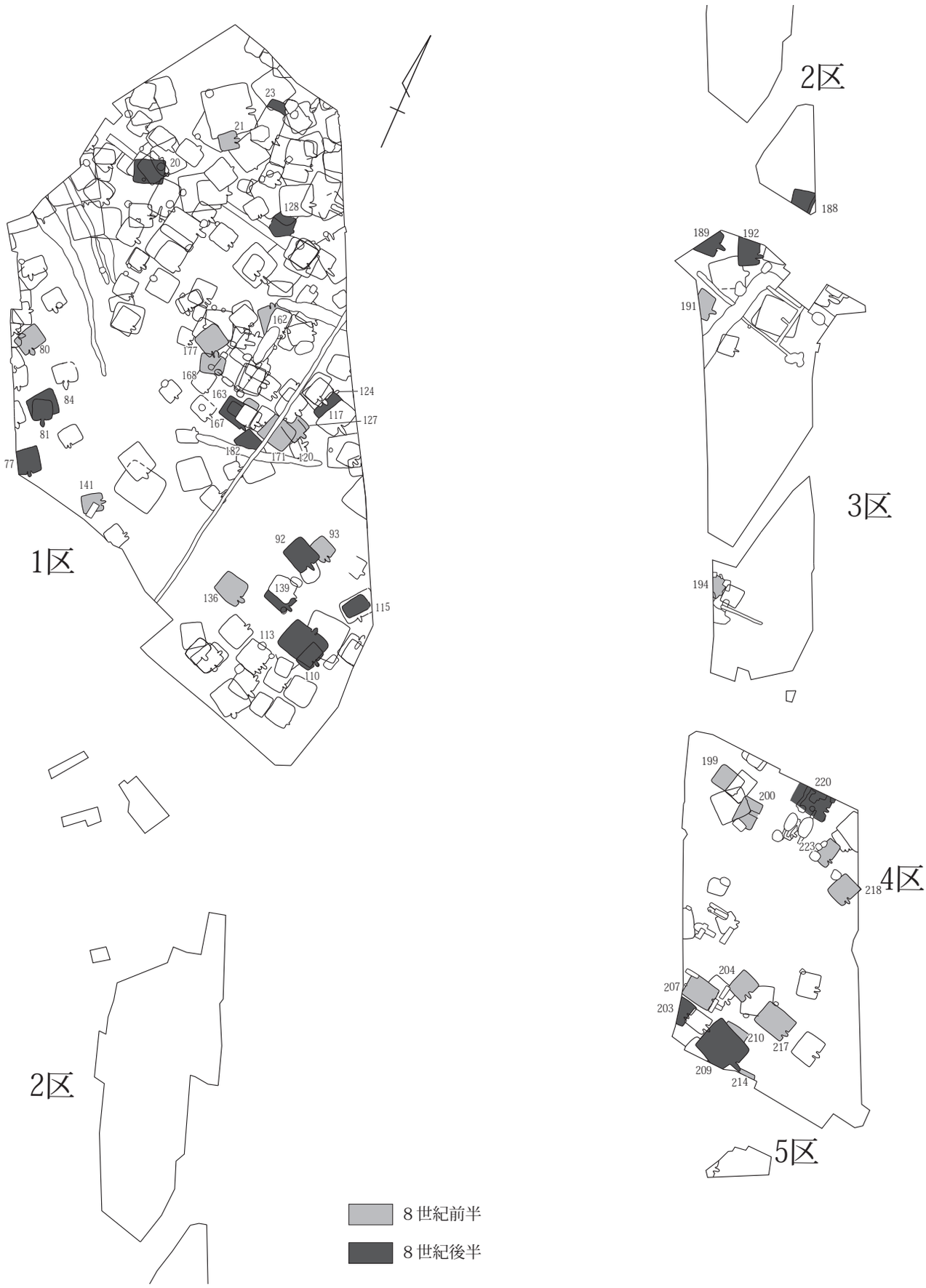
第358図　集落（竪穴建物）変遷図（２）

７世紀



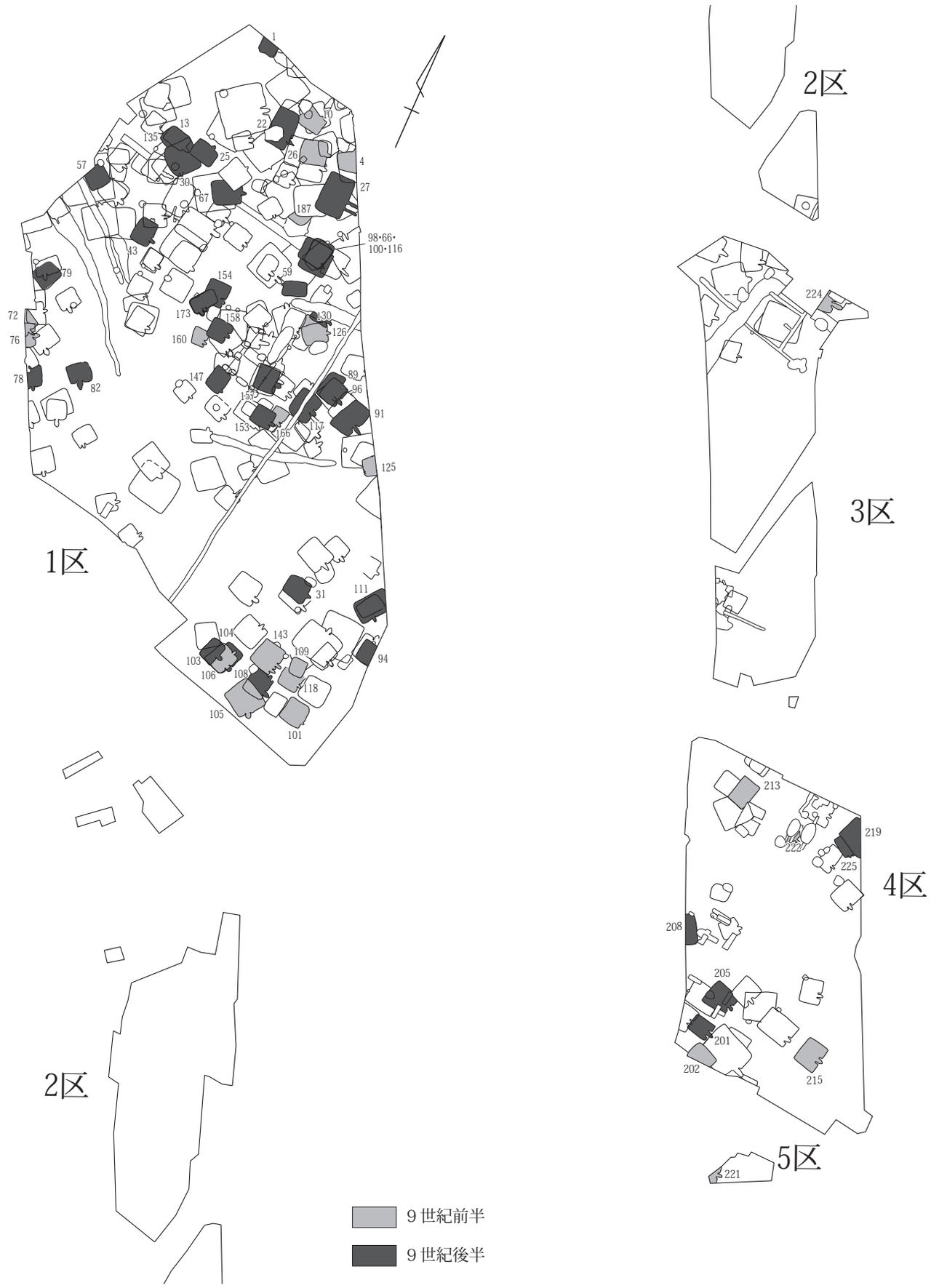
第359図　集落（竪穴建物）変遷図（３）

８世紀



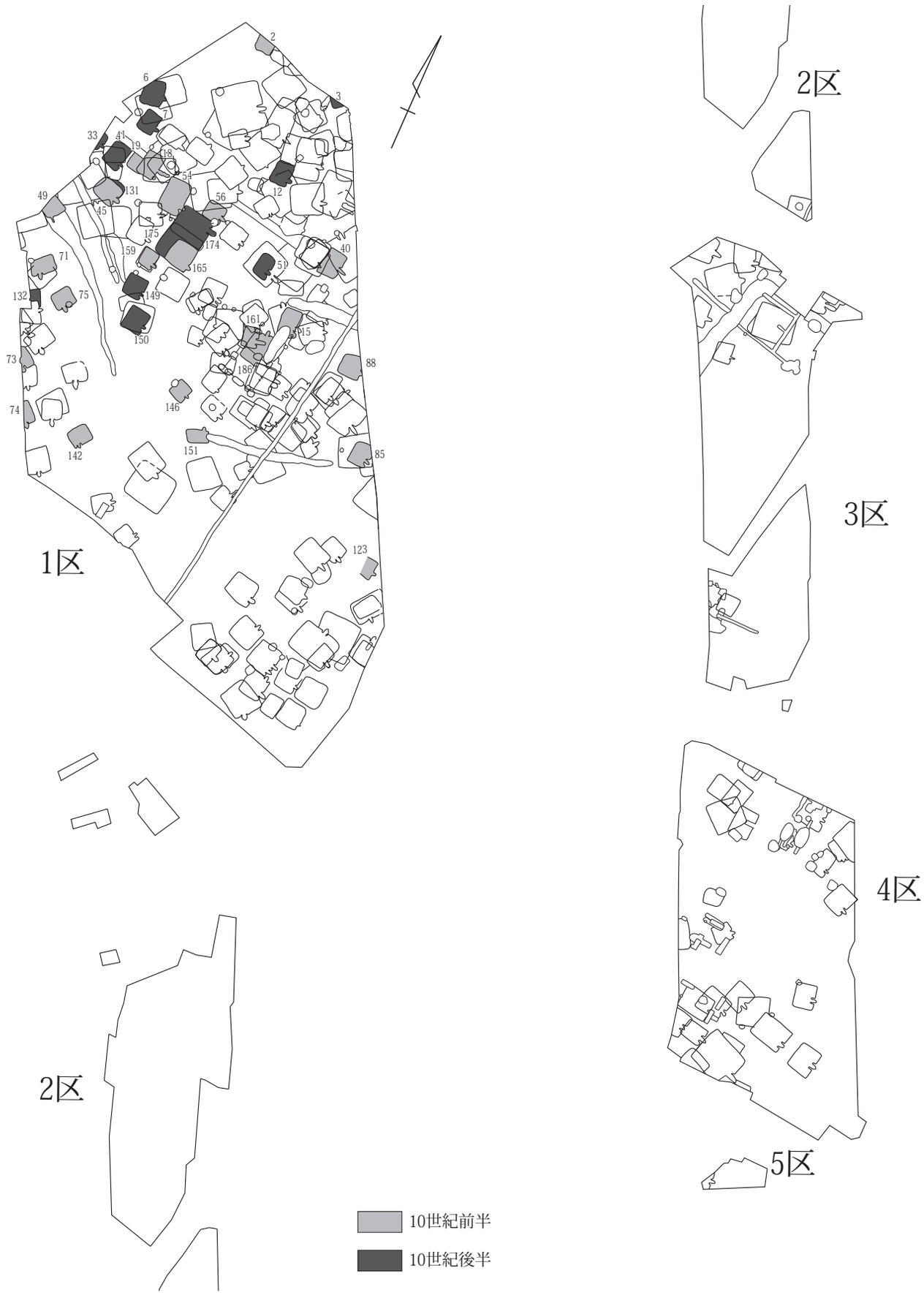
第360図　集落（竪穴建物）変遷図（４）

９世紀



第361図　集落（竪穴建物）変遷図（５）

10 世紀



第362図　集落（竪穴建物）変遷図（６）

第３節　まとめ

米山遺跡では、縄文時代中期の土坑、弥生時代後期の土坑、古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代の竪穴建物を中心とする集落、中近世の土坑など多くの遺構が検出され、土師器、須恵器、施釉陶器を中心とする多量の遺物が出土した。

遺構については前節で分析したように６世紀後半から10世紀後半にかけて継続的に集落が営まれていた。出土した遺物はこの集落に伴うものが圧倒的に多かった。

この集落は、遺構からみるとやや密集した竪穴建物からなる一般的な集落ととらえられるが、遺物には特徴的な要素が多くみることができる。第１節「遺物について」では施釉陶器、凸帯付四耳壺、有鍔台付鉢(火舎)に限定してしまったが、ここでは前述以外の他にも出土している特徴的な遺物から総体的に取り上げ、遺跡の性格について言及したい。

米山遺跡は、周辺遺跡の植松・地尻遺跡等の発掘調査成果から古代碓氷評衙や郡衙に隣接していた集落であることが判断できる。官衙周辺集落を裏付ける遺物としては、111号竪穴建物、218号竪穴建物、169号土坑から出土した円面硯、52号竪穴建物から出土した風字硯、209号竪穴建物、218号竪穴建物から出土した銅製鉈尾や鉈尾裏金、122号竪穴建物や遺構外から出土した石製巡方、184号竪穴建物、192号竪穴建物から出土したコップ形の須恵器椀は計量具としての機能を持たせているものが上げられる。こうした遺物は官衙での文房具や官人の装身具、官衙での税の徴収や出挙に欠かせないものである。

また、周辺遺跡からは存在が確認されたいないが、近隣に寺院が存在していたことを示す遺物も多く出土している。その代表的なものに瓦がある。出土した瓦は、平瓦や丸瓦の小片で軒先瓦が含まれていないことから詳細は不明である。そうした中、中世に比定される土坑からの出土ではあるが灰釉陶器浄瓶や４世紀代の32号竪穴建物と８世紀後半の117号竪穴建物から出土した原始灰釉陶器の瓶、177号竪穴建物、204号竪穴建物から出土した鉄鉢状の須恵器鉢、165号竪穴建物、169号土坑から出土した有鍔台付鉢(火舎)などの遺物から７世紀末から９世紀代にかけての寺院が存在していたことが窺えた。

また、米山遺跡の特徴として７世紀後半以降の竪穴建物において供膳具における須恵器の占める比率が非常に大きいことが上げられる。県内の集落遺跡では７世紀後半から８世紀にかけての竪穴建物から出土する供膳具形態である杯・椀などの土器の比率は土師器が大部分で９世紀代まで下ると供膳具は須恵器によって占められるのが一般的であり、７世紀後半の竪穴建物では供膳具に須恵器が存在しない例が多々ある。例えば、前橋市下東西遺跡では７世紀末から８世紀第１四半期の豪族居宅から大量の供膳具が出土し、饗宴が催されたとみられ、そこで使用されていた供膳具が周囲を区画する溝に廃棄されている。この豪族居宅に伴う供膳具形態の土器をみると図示されている個体が429点あるなかで供膳具は82％を占めているが、須恵器供膳具は24.5％であり、未掲載とした破片での比率でも13.6％の値が示されいる。下東西遺跡の例は、豪族居宅であり当時としては高級食器である須恵器を入手しやすいことから、７世紀後半から８世紀前半の遺跡のなかでも須恵器の比率が多いと言える。

これに対して米山遺跡では、７世紀後半に比定できる29号竪穴建物では土師器、須恵器の供膳具を16点図示したが、その内訳は土師器杯５点、須恵器杯７点、高盤４点と須恵器が58％を占めている。同時期の65号竪穴建物でも供膳具は土師器、須恵器を12点図示したが、その内訳は土師器杯３点、須恵器杯蓋２点、杯３点、有台杯３点、盤１点と須恵器が75％を占めている。133号竪穴建物では供膳具は土師器、須恵器を17点図示したが、その内訳は土師器杯４点、須恵器杯蓋５点、杯４点、高杯２点、高盤２点と須恵器が76％を占めている。178号竪穴建物でも図示した供膳具は土師器杯１点、須恵器杯蓋２点、盤２点、高盤２点とも須恵器が８割以上になる。この他、同じ時期の遺構では、未掲載とした遺物でも近い傾向が見られる。また、器種別に記載したように須恵器杯蓋の存在と盤、高盤などの大型供膳具の存在が特徴的と言える。特に盤や高盤などの大型供膳具は饗宴に使用される器種とみられ、官衙や豪族の居宅から出土する器種である。

米山遺跡の竪穴建物から出土した供膳具は、すべてが残存していたわけではないが、供膳具形態を想定するととても庶民や下級官人の供膳具形態とはみられない。直接の比較が当てはまるかは問題があるが、平城京における庶民の供膳具形態は飯椀、副菜の杯、羹杯、塩杯など

の３品から４品によって構成されたことが復元されている。そして都城に勤務していた下級官人に宮中で提供されていた食事においても２品から３品ほど多い程度とされていることから、供膳具が豊富であったことが窺える。

宮中での供膳具形態については貴族については文献によって復元されているが、下級官人については出土した土器から復元が行われている。例えば、宮中の門を守衛していた衛門府の門部・衛士に関連する建物SB7802から出土した土器の分析では衛士一人について片椀＝土師器杯ＡⅠ、椀＝須恵器杯ＢⅠ、塩杯＝杯ＢⅢ、片杯＝土師器皿ＡⅡ、片盤＝土師器皿ＡⅡ土師器皿ＡⅠによって構成され、数人ごとに高盤が提供されたとしている。これは平城宮前期の様相であり、美濃などから須恵器が調として貢納されている段階であっても下級官人の食器には土師器が６割近くを占めている状態がわかる。

関東地方の武蔵国豊島郡衙に比定されている東京都御殿前遺跡や榛沢郡衙に比定されている埼玉県熊野遺跡などの評段階での官衙における供膳具の様相をみると土師器と須恵器の比率は土師器が６割以上を占めていることがわかる。

供膳具の中で特徴的な高盤は、延喜式に「陶高盤　大盤各十口　参議三位巳上盛菓子料」、「陶高盤　大盤各十口盛小斎三位巳上菓子料」とあり、祭料や解斎、饗宴などに用意され、菓子や果物を盛り付けたことが知られている。さらに平城宮SB7802でみられるように出土比率が少ないことから共用での配膳が想定されている。

編者が以前県内の状況を調査したときは、高盤・高杯の竪穴建物からの出土は単体での出土が圧倒的に多く、複数出土している例でも２点で、出土例はわずかであった。こうした状態から29号竪穴建物での高盤が４点出土したことは、供膳具の器種構成の面からも特異な例と言える。

須恵器が占める比率は年代が下るとさらに大きくなり、８世紀後半では土師器の供膳具はさらに少なくなり、竪穴建物によってはすべて供膳具が須恵器によって構成されている例も存在した。

こうした背景には７世紀から操業された秋間古窯跡群の存在が大きいと考えられる。７世紀以降、地方での須恵器生産が盛んになり、古墳時代のようなごく限られた階層だけへの須恵器供給から官衙を中心とした供給に変化していることが知られている。しかし、一般庶民まで須恵器が行き渡っていなかったことは多くの集落遺跡の発掘調査で確認できる。こうした須恵器供給の状況のなかで、米山遺跡での竪穴建物から多くの須恵器が出土したことは米山遺跡が単に評衙・郡衙の隣接集落と言うだけでないとみられる。７世紀以降の須恵器生産の状況をみると生産の主導は評衙・郡衙が行っており、供給先も評衙・郡衙での饗宴や官人への食事提供への食器としての目的である。また、秋間古窯跡群の須恵器の分布をみると碓氷郡一郡だけでなく、片岡郡や群馬郡、吾妻郡などが対象であったとみられることから、評衙・郡衙周辺に生産された須恵器の集積地の存在が想定され、ここから周辺への供給が行われたとみられる。

須恵器生産に関連する遺物としては、15号竪穴建物から出土した胴部小片ではあるが須恵器甕に「今其」と刻書されたものがある。15号竪穴建物は共伴する土器から10世紀第１四半期に比定できるが、刻書された須恵器甕は埋没段階での混入とみられる。米山遺跡では10号竪穴建物、16号竪穴建物、22号竪穴建物から「爲」、「凡」、「物」などの文字が刻書されている須恵器が出土している。これらの須恵器はそれぞれの竪穴建物の時期とは異なるとみられ、刻書されている須恵器の特徴から７世紀後半から８世紀前半代に想定できる。また、植松・地尻遺跡から出土している「評」の刻書も７世紀後半代の須恵器杯蓋であることから「今其」と刻書された須恵器甕も同様な時期と想定できる。「今其」については「今来」に通じ、４世紀から５世紀の渡来系の手工業者を示すものとされている。今回、米山遺跡から出土した「今其」刻書が４世紀から５世紀の手工業生産技術を携えた渡来系氏族の系譜を示しているとは想定できないが、須恵器生産などの手工業技術を携えた工人が「今其」を名乗っていた可能性は十分想定できるとのことである。こうした刻書からも米山遺跡は秋間古窯跡群の生産や流通に関与した遺跡であったと判断できる。

米山遺跡の発掘調査では、その成果や周辺遺跡の成果から古代碓氷郡における評衙・郡衙に隣接する集落様相の一端を解明することができた。古代碓氷郡では、郡衙の存在などまだ解明されてない点も多くあるが、米山遺跡の調査成果などが蓄積され、郡衙とその周辺、郡全体の様相についてのさらなる解明が望まれる。

なお、頁の都合で引用・参考文献は割合しました。

出土遺物の修正・追加

• 報告書印刷後、別々に掲載していた遺物の接合や完形に近い土器、第５章での資料漏れが確認できたのでここに修正・追加した。

①　221号竪穴建物出土遺物の修正

遺物の収納作業を進めていく中で221号竪穴建物出土遺物の３須恵器杯(第574図)と５(第574図)の須恵器片口杯口縁部片が接合し、同一個体であることが判明した。そのため、この土器は３須恵器片口杯とし、５を欠番とすることにした。図は修正が必要なためこの追加紙面に掲載することとした。

なお、遺物の観察は下記のとおりである。

種類　須恵器、器種　片口杯、出土位置　カマド・床面、残存率　ほぼ完形

計測値　口径：11.8～12.7㎝、底径:7.3㎝、器高　3.8㎝

胎土　細砂粒、焼成　還元焔、色調　灰

成整形の特徴　ロクロ整形、回転は右回り。底部は回転糸切り無調整。口縁部の１カ所を外に押し出して片口を作っている。

本文(第１分冊325頁)出土遺物の項は下記のように変更する。

出土遺物　遺物は土師器甕、須恵器杯蓋・杯・甕などが出土している。このうち、１の須恵器杯蓋、２・４の須恵器杯、７の土師器甕、９の須恵器甕が床面から、６・８の土師器甕、10の須恵器甕がカマドから出土している。３の須恵器片口杯は注ぎ口部分がカマド、杯の大部分は床面からの出土である。なお、２の須恵器杯蓋も大部分が床面からの出土であるが、一部破片がカマドや竪穴建物外から出土していた。

第 601 図　221号竪穴建物(修正)遺物図

②　111号竪穴建物に灰釉陶器椀を追加

111号竪穴建物35

種類　灰釉陶器、器種　椀、出土位置　埋没土・115号竪穴建物埋没土、残存率　口縁部～体部片

計測値　口径：13.7㎝

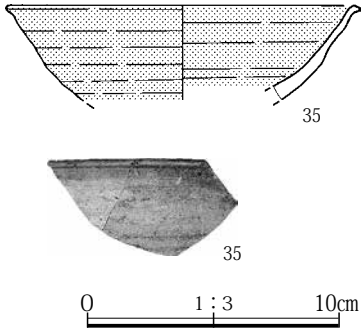
胎土　緻密、焼成　還元焔、色調　灰白

成整形の特徴　ロクロ整形、回転右回り。施釉方法は刷毛塗りか、釉垂れのため不鮮明。口唇部は外反。

窯式期　光ヶ丘１号窯式期

本文(第１分冊182頁)出土遺物の項に追記する。

35の灰釉陶器椀は、111号竪穴建物と115号竪穴建物から出土した破片が接合している。115号竪穴建物は111号竪穴建物内に全体が収まる形で検出されている竪穴建物で、111号竪穴建物より古く、８世紀後半代に比定できる。このため、115号竪穴建物埋没土から出土した破片は111号竪穴建物の床面に近い位置からの出土とみられる。なお、111号竪穴建物は出土した土師器甕から９世紀第３四半期に比定できる。こうしたことから、この灰釉陶器椀は111号竪穴建物に共伴するものである。



第 602 図　111 号竪穴建物(追加)遺物図

③遺構外出土遺物　１区24

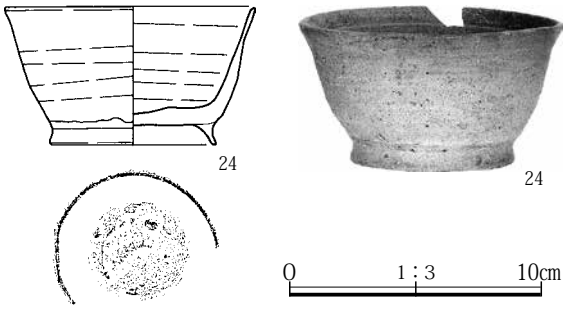
種類　須恵器　器種　椀　出土位置　070－040グリッド、

残存率　ほぼ完形(口唇部を僅かに欠損)

計測値　口径：9.8㎝、底径6.4㎝、高台径　6.4㎝、器高：5.4㎝

胎土　細砂粒、焼成　還元焔、色調　灰

成整形の特徴　ロクロ整形､回転は右回り。底部回転ヘラ削りか、高台は貼付。



第 603 図　遺構外出土(追加)遺物図

④ 「第５章第１節第２項　凸帯付四耳壺・有鍔台付鉢(火舎)　１　凸帯付四耳壺」の事例追加

凸帯付四耳壺については、米山遺跡を含めて29例を取り上げたが、前橋市推定上野国府、高崎市吉井町黒熊八幡遺跡から出土している個体が漏れていたので、ここに追加する。

前橋市推定上野国府域(30)では、長期にわたり、確認調査が実施されている。平成29年度では掘立柱建物群がみつかっている元総社小学校遺跡の西方に54トレンチを設定し、発掘している。ここの調査では９～10世紀の竪穴建物８棟、掘立柱建物１棟、溝、道路跡を検出している。凸帯付四耳壺は遺構外からの出土である。４点の破片が出土しているが、胎土等から同一個体と判断されている。出土した破片は胴部上位、中位片で凸帯、耳部片１ヶ所も残存している。胴部最大径は31.4cmを測る。最大径のやや上位に断面三角形の凸帯が貼付され、瘤状の耳も貼付されている。胴部の整形は外面に平行叩きが残るが、内面のアテ具痕はナデ消されている。

(引用文献　前橋市教育委員会2019『推定上野国府　平成29年度発掘調査報告書』、凸帯付四耳壺はFig.34,54-64で掲載。)

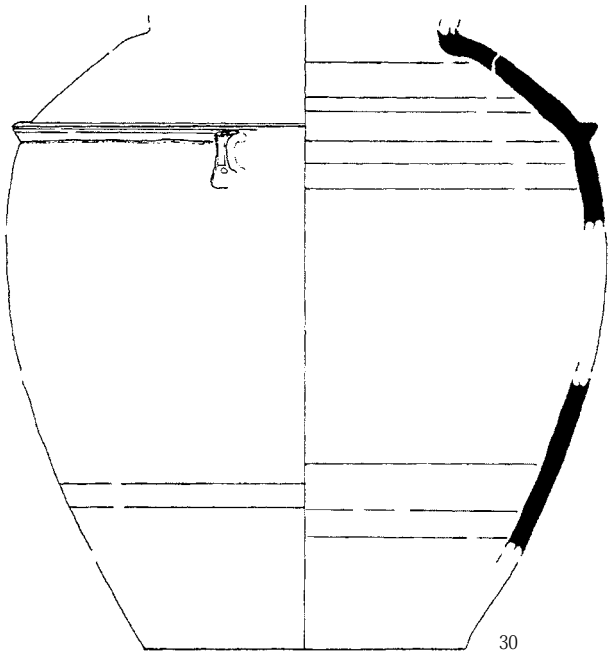
黒熊八幡遺跡（31）は、平安時代の寺院跡が検出された黒熊中西遺跡の東側に位置する集落遺跡である。円面硯や風字硯が出土しており、寺院に関連する集落と想定できる。

凸帯付四耳壺は、114号竪穴建物から出土している。共伴する遺物には須恵器皿・杯・椀、土師器甕がみられる。竪穴建物の存続時期は、土師器甕の口縁部から頸部が「コの字」状を呈していることから９世紀第３四半期に比定できる。凸帯付四耳壺は床面からの出土であることから竪穴建物と同時期のものと判断できる。残存状態は胴部上半片であるが、全体の形状は広口壺状と想定できる。胴部の径は35.2cmを測る。破片下位に断面三角形の凸帯が貼付され、耳は１カ所のみの残存である。耳の形状は縦長の瘤状のものが貼付され、上下に貫通する小孔が開けられている。成整形は外面に平行叩き痕が残るが、内面のアテ具痕はナデ消されている。

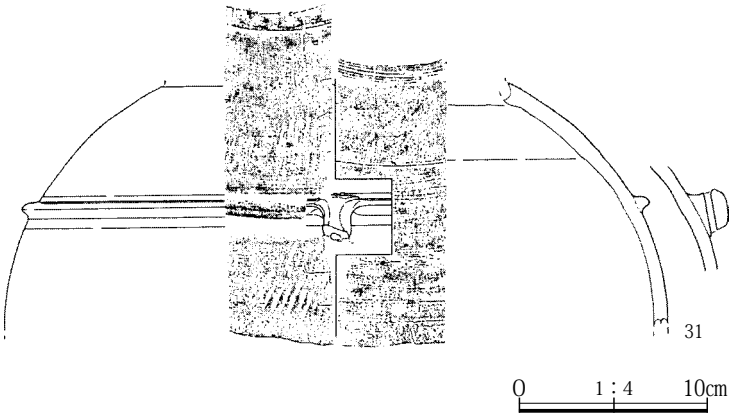
本文中では、耳が貫通する穿孔がみられるものは、石川原遺跡出土のものが唯一の例としたが、２例あることになる。なお、黒熊八幡遺跡から出土したものも９世紀第３四半期に比定されることから、県内での凸帯付四耳壺の出現期にあたる。

(引用文献　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996『黒熊八幡遺跡』、凸帯付四耳壺は第 248 図 88 で掲載。)

推定上野国府



黒熊八幡遺跡



第 604 図　県内出土の凸帯付四耳壺集成(追加)

訂正

第３分冊　804 頁　78 号竪穴建物33 として掲載した「鉄滓- 流動滓」は81 号竪穴出土遺物に訂正。掲載№及び写真図版番号は変更なし。

805 頁　93号竪穴建物を96号竪穴建物に訂正。

主 要 遺 構 索 引

米山遺跡

遺構名称	本文	遺構図	遺物図	観察表			遺構写真	遺物写真	遺構名称	本文	遺構図	遺物図	観察表			遺構写真	遺物写真
	頁	挿図番号	挿図番号	土器	鉄器	石器	PL. NO.	PL.NO.		頁	挿図番号	挿図番号	土器	鉄器	石器	PL.NO.	PL.NO.
	第１分冊		第２分冊	第３分冊			第４分冊			第１分冊		第２分冊	第３分冊			第４分冊	
１号竪穴建物	35	17	368	699			5	210	61号竪穴建物	119	88	439・440	728			62	251
２号竪穴建物	36	18	368・369	699			5	210	62号竪穴建物	120	89	441	729			64	
３号竪穴建物	37	19	369	699		813	6	210	63号竪穴建物	121	90	441・442	729	804	814	64	253
４号竪穴建物	38	20	369・370	700		813	6	210	64号竪穴建物	121	92	442	729		815	66	253
５号竪穴建物	39	21	370	700			7	211	65号竪穴建物	123	93	443・444	729	804		67	254
６号竪穴建物	40	22	371・372	700	801		8	211	66号竪穴建物	126	95	445～448	730	804	815	69	256
７号竪穴建物	42	23	372～374	701	801		9	212	67号竪穴建物	128	96	448	731		815	69	257
８号竪穴建物	43	24	374・375	702			10	213	68号竪穴建物	128	97	448	731			71	257
９号竪穴建物	44	25	375	702		813	10	213	69号竪穴建物	131	98					72	
10号竪穴建物	45	26	375・376	702			11	213	70号竪穴建物	131	99	448	731			72	
11号竪穴建物	46	27	377	703	801		12	214	71号竪穴建物	133	100	448・449	731	804		73	257
12号竪穴建物	47	28	377・378	703	801		12	215	72号竪穴建物	134	101	449	732			74	258
13号竪穴建物	47	29	378～380	703	801		13	215	73号竪穴建物	135	102	450	732			75	
14号竪穴建物	50	30	381	703	801		14	217	74号竪穴建物	136	103	451	732	804		76	258
15号竪穴建物	50	31	381・382	704	801	813	15	217	75号竪穴建物	137	104	451・452	733			77	258
16号竪穴建物	53	32	383・384	705			17	218	76号竪穴建物	138	105	452	733			78	259
17号竪穴建物	53	34	384・385	706			19	219	77号竪穴建物	140	106	452～454	733	804		79	259
18号竪穴建物	56	35	385・386	706	801		20	220	78号竪穴建物	140	107	454～456	734	804		80	260
19号竪穴建物	58	35	386	706	801		21	220	79号竪穴建物	143	108	456	735		815	81	261
20号竪穴建物	59	37	386	707	801		21	221	80号竪穴建物	143	109	456・457	735		815	81	261
21号竪穴建物	60	38	387～389	707		813	22	221	81号竪穴建物	145	110	457～459	735	805		82	261
22号竪穴建物	62	39	389・390	708	801	813	23	223	82号竪穴建物	146	111	460	736			83	263
23号竪穴建物	64	41	390	708			25	223	83号竪穴建物	147	112	460・461	736	805		84	263
24号竪穴建物	65	42	390	708			25		84号竪穴建物	148	113	461	737			85	263
25号竪穴建物	66	43	391～394	708	802	813	26	223	85号竪穴建物	149	114	462・463	737	805		85	263
26号竪穴建物	68	44	394～396	710	802	814	27	226	86号竪穴建物	149	115	463・464	738			86	264
27号竪穴建物	69	45	396	711	802		28	226	87号竪穴建物	151	116	464・465	738			86	264
28号竪穴建物	71	47	397・398	711		814	29	227	88号竪穴建物	152	117	465・466	739			87	265
29号竪穴建物	73	49	398～400	711			32	228	89号竪穴建物	153	118	466	739	805		87	265
30号竪穴建物	75	50	400	712	802		32	229	90号竪穴建物	154	119	466	739			88	265
31号竪穴建物	75	51	401～404	713	802		34	229	91号竪穴建物	155	120	466・467	739	805		89	265
32号竪穴建物	79	53	406・407	714	802		35	231	92号竪穴建物	156	122	468・469	740	805		91	266
33号竪穴建物	80	54	407・408	715			36	232	93号竪穴建物	158	124	469	741	805		92	
34号竪穴建物	81	55	408	716		814	37	233	94号竪穴建物	161	125	469	741			93	
35号竪穴建物	81	56	409	716			37	233	95号竪穴建物	161	126	470・471	741			93	267
36号竪穴建物	82	57	409	716			38	233	96号竪穴建物	164	128	471・472	741			96	268
37号竪穴建物	欠番								97号竪穴建物	166	128	473	742	805	815	97	269
38号竪穴建物	85	59	410	717		814	40	234	98号竪穴建物	166	129	473	742	805		97	269
39号竪穴建物	86	60	410・411	717		814	41	234	99号竪穴建物	167	130	474	742	805		97	269
40号竪穴建物	88	61	411・412	717	802		42	235	100号竪穴建物	168	131	474	742			98	270
41号竪穴建物	90	63	412・413	718	803		44	235	101号竪穴建物	168	132	475	743			98	270
42号竪穴建物	91	64	413	718			45	236	102号竪穴建物	170	133					99	
43号竪穴建物	93	65	414～416	719	803	814	46	236	103号竪穴建物	170	134	475・476	743			99	270
44号竪穴建物	95	67	416	720			48	238	104号竪穴建物	171	135	476・477	744	805		100	271
45号竪穴建物	96	68	417・418	720	803		48	238	105号竪穴建物	173	136	477	744			101	271
46号竪穴建物	96	69	418・419	720		814	50	239	106号竪穴建物	173	137	478	744			102	271
47号竪穴建物	99	71	419	721			51	240	107号竪穴建物	175	138	478	745	806		103	271
48号竪穴建物	100	72	420	721			52		108号竪穴建物	176	139	478～481	745			103	271
49号竪穴建物	102	73	420	721	803		52	240	109号竪穴建物	178	141	481・482	746	806		105	273
50号竪穴建物	103	74	420	721			53		110号竪穴建物	179	142	482・483	747			105	273
51号竪穴建物	103	75	421	721	803		54	240	111号竪穴建物	181	143	483～486	747			106	274
52号竪穴建物	105	76	422	722			54	241	112号竪穴建物	182	144	486	748	806		107	276
53号竪穴建物	106	77	422	722			55	241	113号竪穴建物	183	145	486～488	749	806		107	276
54号竪穴建物	107	78	422～425	723	803		55	241	114号竪穴建物	185	147	489～492	750	806		108	277
55号竪穴建物	110	80	426～430	724			57	242	115号竪穴建物	186	149	492	751			110	279
56号竪穴建物	111	82	431	725			58	246	116号竪穴建物	188	150	493	751	806		110	279
57号竪穴建物	112	83	431	725			59	246	117号竪穴建物	189	151	493	752	806		110	279
58号竪穴建物	114	84	432～434	726		814	59	246	118号竪穴建物	190	152	494	752			111	280
59号竪穴建物	114	85	435	726			60		119号竪穴建物	190	153	494	752			111	280
60号竪穴建物	116	86	435～439	727	803		61	249	120号竪穴建物	192	154	494・495	752			112	280

米山遺跡

遺構名称	本文	遺構図	遺物図	観察表			遺構写真	遺物写真	遺構名称	本文	遺構図	遺物図	観察表			遺構写真	遺物写真
	頁	挿図番号	挿図番号	土器	鉄器	石器	PL. NO.	PL.NO.		頁	挿図番号	挿図番号	土器	鉄器	石器	PL.NO.	PL.NO.
	第１分冊		第２分冊	第３分冊			第４分冊			第１分冊		第２分冊	第３分冊			第４分冊	
121号竪穴建物	194	155	496・497	753	806		112	281	181号竪穴建物	267	218	543・544	775				305
122号竪穴建物	195	156	497	753	806	815	113	281	182号竪穴建物	268	219	544・545	775			151	305
123号竪穴建物	195	157	497・498	754			113	282	183号竪穴建物	269	220	546・547	776		815	152	306
124号竪穴建物	197	158	498	754			113		184号竪穴建物	269	222	547	776			153	306
125号竪穴建物	198	159	498	754			114	282	185号竪穴建物	271	223	547・548	777	808		154	307
126号竪穴建物	198	160	498・499	754			114	282	186号竪穴建物	272	224	548・549	777	808		155	307
127号竪穴建物	192	154		753				281	187号竪穴建物	275	226	549	777				307
128号竪穴建物	200	161	499	754			115		188号竪穴建物	276	227	549・550	778			156	308
129号竪穴建物	201	162	499・500	755			115	282	189号竪穴建物	276	228	550・551	778	808	815	156	308
130号竪穴建物	201	163	500	755					190号竪穴建物	279	230	551・552	778		816	157	308
131号竪穴建物	203	164	500	755			116	283	191号竪穴建物	281	232	552	779			158	309
132号竪穴建物	204	165	500	755			116	283	192号竪穴建物	281	233	552～555	779			159	309
133号竪穴建物	204	166	501～503	755			116	283	193号竪穴建物	284	234	555	780	808		160	311
134号竪穴建物	207	168	504	756	806		117	284	194号竪穴建物	285	235	556	780			160	
135号竪穴建物	207	170	504	757			119		195号竪穴建物	286	236	556	780	808		160	311
136号竪穴建物	209	171	504～506	757			119	285	196号竪穴建物	287	238	556・557	780		816	162	312
137号竪穴建物	211	172	506	758					197号竪穴建物	289	239	557	780			163	312
138号竪穴建物	212	173	506	758			120	286	198号竪穴建物	291	241	558		808		164	312
139号竪穴建物	77	51	404・405	714	802		34	230	199号竪穴建物	293	242	558	781			164	
140号竪穴建物	213	174	506・507	758			121	286	200号竪穴建物	294	243	558	781	808		164	312
141号竪穴建物	213	175	507	758			122	287	201号竪穴建物	295	244	558	781	808		164	312
142号竪穴建物	215	176	508	759			122	287	202号竪穴建物	296	245	559	781			165	312
143号竪穴建物	217	177	508～510	759	807		123	287	203号竪穴建物	297	246	559・560	782			166	312
144号竪穴建物	219	179	510・511	760		815	125	288	204号竪穴建物	297	247	560	782	808	816	167	313
145号竪穴建物	欠番								205号竪穴建物	300	249	560・561	782	808	816	168	313
146号竪穴建物	220	180	511	760	807		126	289	206号竪穴建物	301	251	561	782	809		168	313
147号竪穴建物	221	181	511	760			126	289	207号竪穴建物	303	252	562	783	809	816	169	314
148号竪穴建物	222	182	512	760			127	289	208号竪穴建物	305	253	562	783		816	170	314
149号竪穴建物	223	183	512	761			127	289	209号竪穴建物	306	254	563～566	783	809		170	314
150号竪穴建物	224	184	513	761			128	289	210号竪穴建物	307	254					171	
151号竪穴建物	225	185	513	761			129	289	211号竪穴建物	307	256	566・567	785	809	816	172	316
152号竪穴建物	226	186	513～515	761			129	289	212号竪穴建物	311	257	567	785	809		173	317
153号竪穴建物	228	187	515・516	762	807		131	291	213号竪穴建物	313	259	568	785			175	
154号竪穴建物	229	188	516～519	763	807		131	292	214号竪穴建物	314	260					175	
155号竪穴建物	231	189	519	764			133	293	215号竪穴建物	315	261	568	785	809		175	317
156号竪穴建物	231	190	520	764			133	293	216号竪穴建物	315	262	568・569	786		816	176	318
157号竪穴建物	234	191	520～522	764	807		134	294	217号竪穴建物	319	264	569・570	786	809		178	319
158号竪穴建物	235	193	522	765			135	294	218号竪穴建物	319	266	570・571	786	809		179	319
159号竪穴建物	236	194	523	765			136		219号竪穴建物	323	267	571・572	787			180	320
160号竪穴建物	238	195					136		220号竪穴建物	325	268	573・574	787	809	816	181	320
161号竪穴建物	239	196	524	766			137	294	221号竪穴建物	325	269	574	788			181	321
162号竪穴建物	239	197	524	766			138	295	222号竪穴建物	326	270	575	788			182	
163号竪穴建物	241	198	525	766			138	295	223号竪穴建物	328	271	575	788			182	321
164号竪穴建物	242	199					139		224号竪穴建物	290	239	557	781			163	
165号竪穴建物	243	200	525～529	766	807		139	295	225号竪穴建物	323	267	572	787			180	320
166号竪穴建物	245	201	529・530	768			140	298	226号竪穴建物	287	236					162	
167号竪穴建物	245	202	530・531	768	807		141	298	１号掘立柱建物	330	272	575	788	809		183	322
168号竪穴建物	247	203	531	769			141		１号竪穴状遺構	330	274	575	788			184	322
169号竪穴建物	249	204	532	769			142		２号竪穴状遺構	330	275	576	788			184	322
170号竪穴建物	249	205	532・533	770			142	299	３号竪穴状遺構	333	276	576	788	809		184	322
171号竪穴建物	252	206	533・534	770	807		143	299	４号竪穴状遺構	334	277	576	789			184	
172号竪穴建物	254	208	534・535	771			143	300	５号竪穴状遺構	334	278	577	789			185	
173号竪穴建物	255	209	535	771			144		６号竪穴状遺構	335	279	577	789	809	816	185	322
174号竪穴建物	256	210	536・537	771	808		145	300	７号竪穴状遺構	336	280					185	
175号竪穴建物	257	212	538	772	808		146	302	８号竪穴状遺構	欠番							
176号竪穴建物	254	208	535	771			144	300	９号竪穴状遺構	336	281	577	789			185	
177号竪穴建物	260	213	539・540	773		815	147	302	１号溝	377	316					196	
178号竪穴建物	262	214	540～542	774			148	303	２号溝	337	285	578	789			186	
179号竪穴建物	263	216	543	774			149	304	３号溝	337	286	578～581	790	809		186	322
180号竪穴建物	267	216	543	775			151		４号溝	欠番							

遺構名称	本文	遺構図	遺物図	観察表			遺構写真	遺物写真	遺構名称	本文	遺構図	遺物図	観察表			遺構写真	遺物写真
	頁	挿図番号	挿図番号	土器	鉄器	石器	PL. NO.	PL.NO.		頁	挿図番号	挿図番号	土器	鉄器	石器	PL.NO.	PL.NO.
	第１分冊		第２分冊	第３分冊			第４分冊			第１分冊		第２分冊	第３分冊			第４分冊	
５号溝	342	286	581･582	791	810		187	324	１号土坑	401～	288					188	
６号溝	342	287	582		810		187	324	２号土坑		330						
７号溝	344	287	582･583	792	810		187	324	３号土坑		330						
８号溝	344	287	584	792			187		４号土坑		330						
９号溝	346	286	584		810		187	325	５号土坑		330						
10号溝	377	317							６号土坑		330					202	
11号溝	377	317	594		811		196	328	７号土坑		330						
12号溝	378	317					196		８号土坑		330						
13号溝	378	318					196		９号土坑		330						
14号溝	378	318					196		10号土坑		330						
15号溝	379	319	594	798		816	197	328	11号土坑		288					188	
16号溝	379	318					197		12号土坑		330						
17号溝	379	317	594		811		197	328	13号土坑		330						
１号井戸	389	320					198		14号土坑		331						
２号井戸	389	320					198		15号土坑		288					188	
３号井戸	389	320					198		16号土坑		288	584	793			188	
４号井戸	389	320							17号土坑		331						
５号井戸	389	321	594･595	798		816	198	329	18号土坑	346	288	584	793			188	
６号井戸	389	321	596			816	199	330	19号土坑		331						
７号井戸	390	322	596	798		817	199	330	20号土坑		288						
８号井戸	391	322	596	799	811		199	330	21号土坑		288	584	793			188	325
１号復旧坑	393～	323	597		811		200	331	22号土坑		288					188	
２号復旧坑		324					200		23号土坑	346	289	584	793			188	
３号復旧坑		324					200		24号土坑		331					202	
４号復旧坑		324					200		25号土坑		289						
５号復旧坑		324					200		26号土坑	347	289	585･586	793	810		188	325
６号復旧坑		325					200		27号土坑		289					189	
７号復旧坑		325							28号土坑	欠番							
８号復旧坑		325					200		29号土坑		289	586	793			189	
９号復旧坑		325					200		30号土坑	30	12	367	698			4	209
10号復旧坑		325					200		31号土坑		331						
11号復旧坑		325					200		32号土坑		289	586	793			189	
12号復旧坑		325					200		33号土坑		331					202	
13号復旧坑		326							34号土坑		331						
14号復旧坑		326					200		35号土坑	347	289	586	793				326
15号復旧坑		326	597			817	200	331	36号土坑	347	290					189	
16号復旧坑		326					201		37号土坑		331					202	
17号復旧坑		326					201		38号土坑		290						
18号復旧坑		326							39号土坑	347	290					189	
19号復旧坑		326							40号土坑		290					189	
20号復旧坑	欠番								41号土坑	347	290	586	794			189	326
21号復旧坑		327	597			817	199	331	42号土坑		290	586	794			189	
22号復旧坑		326					201		43号土坑		291					189	
23号復旧坑		326					201		44号土坑		291					190	
24号復旧坑		328					201		45号土坑	347	291	587	794			190	326
25号復旧坑		327					201		46号土坑		291	587	794				
26号復旧坑	欠番								47号土坑		331						
27号復旧坑		328					201		48号土坑		332					202	
28号復旧坑		328					201		49号土坑		332						
29号復旧坑		328					201		50号土坑		291	587		810		190	326
30号復旧坑		329					201		51号土坑		291					190	
31号復旧坑	欠番								52号土坑		291	588	794	810		190	326
32号復旧坑		328							53号土坑		332						
33号復旧坑	欠番								54号土坑		332						
34号復旧坑		329							55号土坑		292					190	
35号復旧坑		329					202		56号土坑		292	588	794			190	
36号復旧坑		329					202		57号土坑		292					190	
37号復旧坑		329					202		58号土坑	欠番							
38号復旧坑		324							59号土坑		292	588	794			190	326
									60号土坑		292					190	

米山遺跡

遺構名称	本文	遺構図	遺物図	観察表			遺構写真	遺物写真	遺構名称	本文	遺構図	遺物図	観察表			遺構写真	遺物写真
	頁	挿図番号	挿図番号	土器	鉄器	石器	PL. NO.	PL.NO.		頁	挿図番号	挿図番号	土器	鉄器	石器	PL.NO.	PL.NO.
	第１分冊		第２分冊	第３分冊			第４分冊			第１分冊		第２分冊	第３分冊			第４分冊	
61号土坑		292					190		121号土坑		336					203	
62号土坑		292					191		122号土坑		335						
63号土坑		293	588	794					123号土坑		336						
64号土坑		293							124号土坑		336						
65号土坑		293					191		125号土坑		336						
66号土坑		293					191		126号土坑		336						
67号土坑		293					191		127号土坑		337					203	
68号土坑	欠番								128号土坑		336						
69号土坑		293	588	794			191		129号土坑		337						
70号土坑	30	12	367	698			4	209	130号土坑		337						
71号土坑	欠番								131号土坑		337						
72号土坑		293					191		132号土坑		337						
73号土坑		293					191		133号土坑	348	295	589	795		816	192	326
74号土坑	348	294	588	794			191	326	134号土坑	27	10	363・364	697			4	206
75号土坑	30	12	367	698			4	209	135号土坑		337						
76号土坑	348	294	589	795	810		191	326	136号土坑		337						
77号土坑		294					191		137号土坑		337	598		811			332
78号土坑		294					191		138号土坑		338						
79号土坑		294					192		139号土坑		338						
80号土坑		294	589	795			192	326	140号土坑		295	598	799			192	332
81号土坑	欠番								141号土坑		338						
82号土坑		294	589	795			192		142号土坑		338	598		811		204	332
83号土坑		295					192		143号土坑		295	589	795			193	
84号土坑	欠番								144号土坑		338	598		811	817	204	332
85号土坑		295					192		145号土坑	欠番							
86号土坑	欠番								146号土坑		339	598		811		204	332
87号土坑		295					192		147号土坑		339						
88号土坑		332							148号土坑		339						
89号土坑		332					203		149号土坑		339					204	
90号土坑									150号土坑		339						
91号土坑		332							151号土坑		339						
92号土坑		332					203		152号土坑		339						
93号土坑		332							153号土坑		339						
94号土坑		333					203		154号土坑	27	10	364	697			4	207
95号土坑		333					203		155号土坑		340	598		811			332
96号土坑		333					203		156号土坑		340	598		811			332
97号土坑		333	598			817		332	157号土坑		340					204	
98号土坑		333							158号土坑		340						
99号土坑		333							159号土坑		340						
100号土坑		333							160号土坑		340						
101号土坑		334							161号土坑		340						
102号土坑		334							162号土坑		341						
103号土坑		334							163号土坑		341	598		812		204	332
104号土坑		334	598		811			332	164号土坑		341						
105号土坑		334							165号土坑		340					204	
106号土坑		334							166号土坑	415	342	598		812		204	332
107号土坑		334							167号土坑		342	598		812		205	333
108号土坑		334							168号土坑		341					205	
109号土坑		335							169号土坑	348	295	590	795	810		193	326
110号土坑		335							170号土坑		341					205	
111号土坑		335							171号土坑		341					205	
112号土坑		335							172号土坑		341	598	799			205	333
113号土坑		335							173号土坑		342					205	
114号土坑		334							174号土坑		341						
115号土坑		335							175号土坑	348	295	590	796			193	327
116号土坑	414	335					203										
117号土坑		335															
118号土坑		336	598		811			332									
119号土坑		336															
120号土坑		336					203										

報　告　書　抄　録

書名ふりがな	こめやまいせき
書　　名	米山遺跡
副　書　名	社会資本総合整備(活力・重点・補正)(一)下里見安中線(西毛広域幹線道路安中工区)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	685
編著者名	神谷佳明
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2021/3/24
作成法人ＩＤ	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-２
遺跡名ふりがな	こめやまいせき
遺　跡　名	米山遺跡
所在地ふりがな	あんなかしあんなかおおあざこめやま
遺跡所在地	安中市安中大字米山
市町村コード	10211
遺跡番号	0334
北緯(世界測地系)	361947
東経(世界測地系)	1385312
調査期間	20180401-20190331
調査面積	9,577
調査原因	道路建設
種　　別	集落
主な時代	縄文/弥生/古墳/飛鳥/奈良/平安/中・近世
遺跡概要	縄文-土坑２＋ピット１＋埋甕１-土器＋石器／弥生-土坑３-土器／古墳-竪穴建物42-土器＋金属器＋石製品／飛鳥・奈良・平安-竪穴建182＋掘立柱建物１＋竪穴状遺構８＋溝９＋土坑58＋ピット210-土器＋陶器＋金属器＋石製品／中・近世-溝８＋井戸８＋復旧坑35＋土坑104＋ピット108＋畑１-土器＋陶磁器＋銭貨＋金属器＋石製品
特記事項	古代碓氷評衙・郡衙に隣接する集落、飛鳥・奈良時代の竪穴建物では須恵器の比率が高く、郡内の生産地である秋間古窯跡群の集積地であった可能性が窺える。その他、出土遺物に瓦や灰釉陶器浄瓶、火舎、鉄鉢状の須恵器鉢が出土していることから周囲に寺院が存在する可能性が指摘された。
要　　約	九十九川右岸河岸段丘に立地する竪穴建物を中心とする古墳時代前期、古墳時代後期から平安時代にかけての集落遺跡。出土遺物の中では須恵器や施釉陶器が注目される。須恵器は飛鳥から奈良時代では竪穴建物のなかの供膳具の割合が高く、その中でも盤や高盤が多く出土していること、平安時代では凸帯付四耳壺や有鍔台付鉢(火舎)が出土していることがが注目された。灰釉陶器は量的にも多いが、浄瓶や原始灰釉陶器や大型短頸壺などの出土が注目された。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第685集

米　山　遺　跡　－本文編－

社会資本総合整備（活力・重点・補正）（一）下里見安中線
（西毛広域幹線道路安中工区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和３(2021)年３月９日　印刷
令和３(2021)年３月24日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／上武印刷株式会社

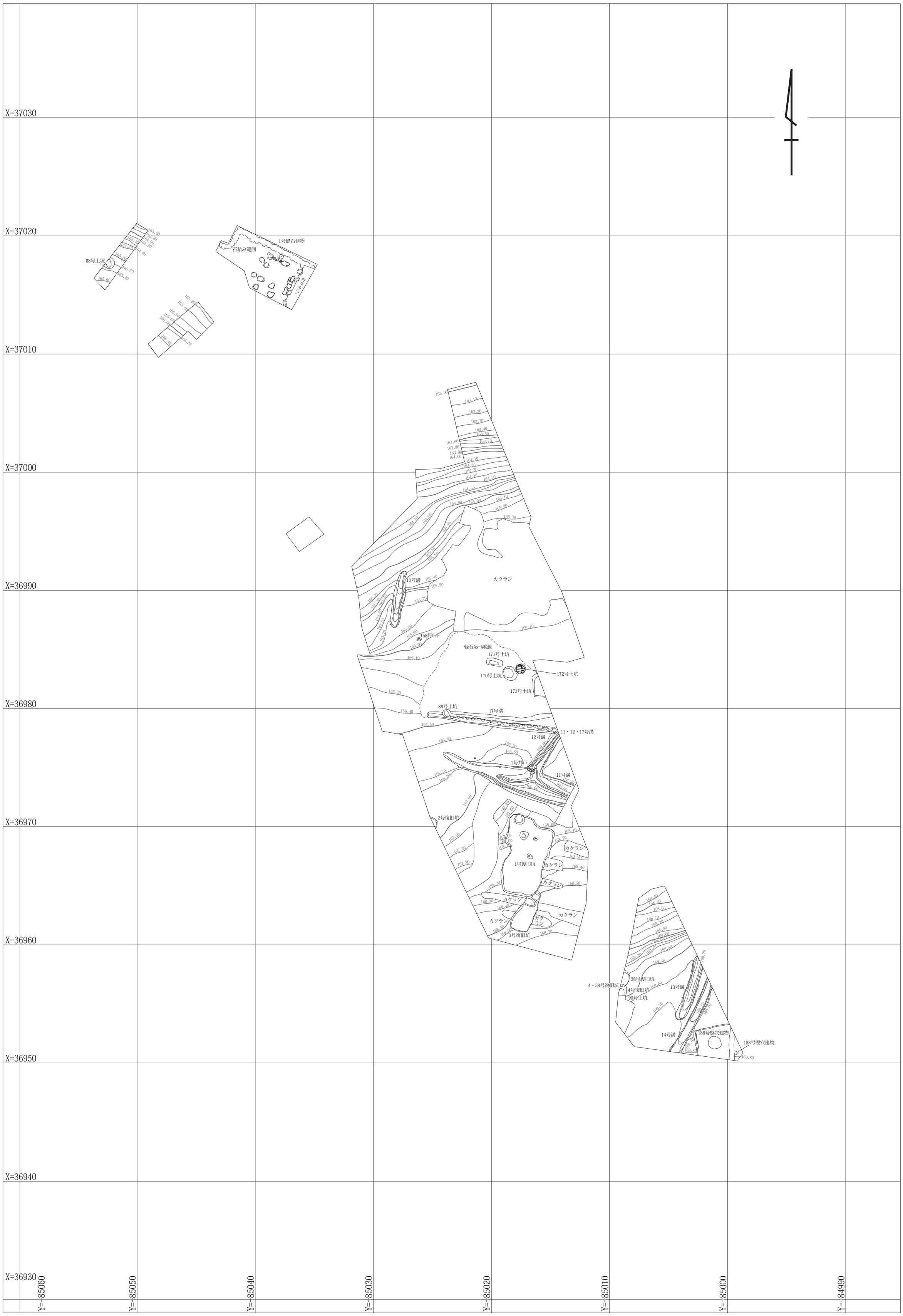
第1分冊 二〇二一

付図 1

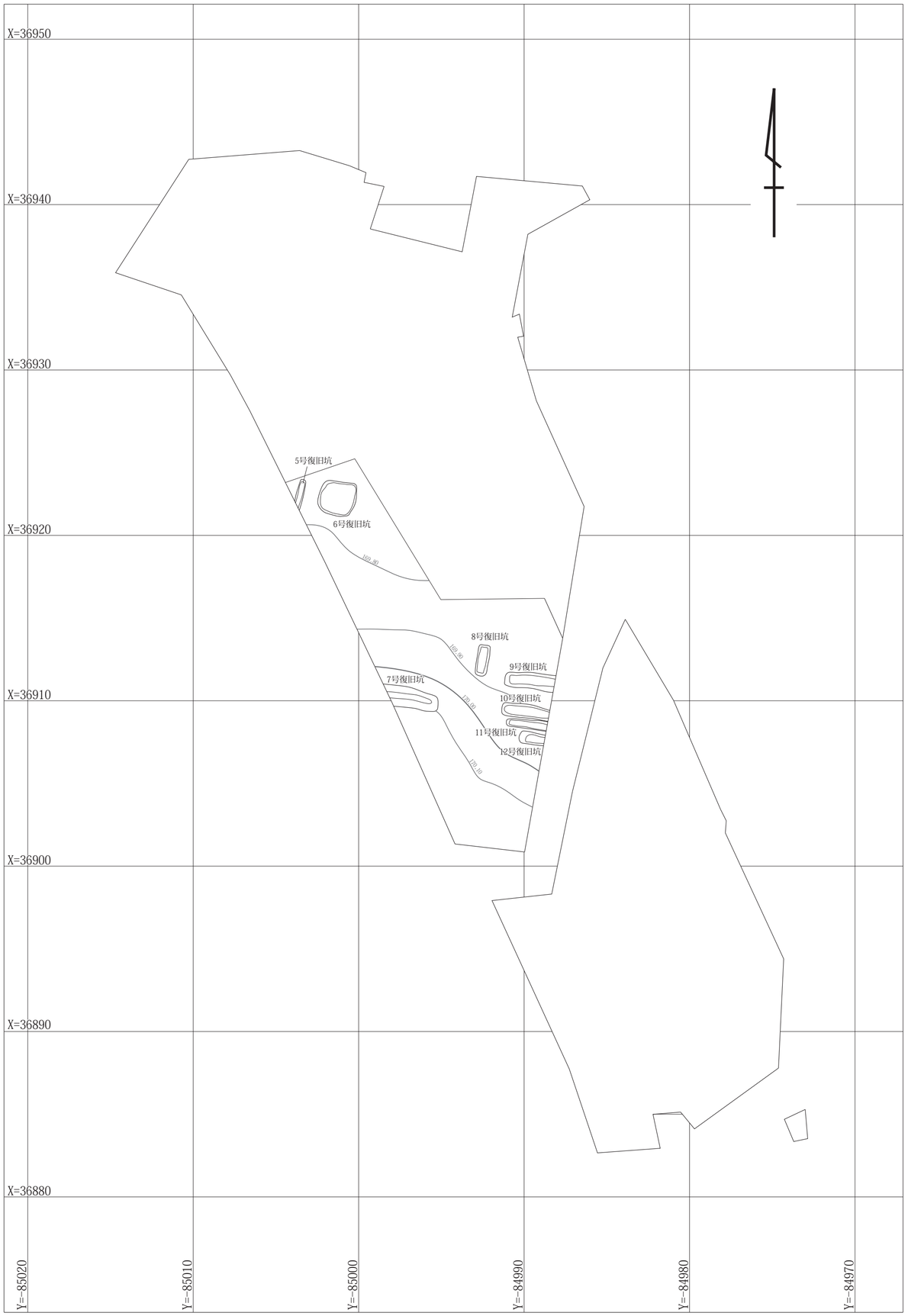
米山遺跡　1区　全体図　S=1:200

付図 2

米山遺跡　２区　全体図　S =1：200



付図 3　　米山遺跡　３区１面　全体図　S＝1：200



３区２面　全体図　S＝1：200

付図 4　　米山遺跡　4・5区　全体図　S=1:200